

ジョジョの奇妙な冒険
——5人目のDIOの息子

GIORGIO

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二人の父から相反する技術と体質を受け継いだ少年。

一人の男と出会ったとき、百年以上にも続く運命の歯車が再び動き始める。

その瞳に映るのは希望か、絶望か。

これはジョナサンとDIOの息子である彼が受け継いだ力で愛する人達を守るために悪に『立ち向かう』物語。

この物語は『もしプッチが倒されていたら』というifの物語です。

スタンドは少し適当になってしまいかもしれません。

目次

オリキャラプロフィールまとめ	
1	
JOJO'S BIZARRE SA	
GA	8
——ネタ&作者の気まぐれ——	
チーズの歌	20
夢見た未来	24
秩序の外の誕生日(Happy Birthday in Order)	30
承一郎とカズ、サウナにて	34
GA	
——『覚悟』した者は美しい——	
盗聴してるとき、たまに変なものを聴いてしまう	78
ロードローラーをOVA版でタンクローリーに変える必要があったのか？	88
ダンのはたして敵の前に立つ必要があ	
息子——	
別世界に来たのに既に知ってる事が多	
い	58
本城凜さんのコラボ!!? Another Story——転生者VS DIOの	
Gの襲撃! 一条邸の決戦! ——	50

るのか？

93

光の速さってマジでチート

101

承一郎のもう一つの世界その①

114

承一郎のもう一つの世界その②

127

承一郎のもう一つの世界その③

145

結成！クリスタル・クルセイダーズ！

154

トリプルコラボ！世間は意外と狭い

171

変身するのは良いが真似る気がない

181

承太郎さんでオカマ道が炸裂したら絶

対動画撮る

193

4つの手紙と1つの矢尻

200

誇り高きギャンブラーその①

208

誇り高きギャンブラーその②

215

前世持ちの奴って若返ったら前世にな

るってマジ？

228

血を越えた兄弟の絆

243

最近の車って性能がすごい

259

ズイー・ズイーはメタ過ぎる

269

公式メタ？そのふざけた幻想を（ry

277

三代目ジヨジョの復活	288	ようこそマザーベースへ	417
ミッション名つて結構重要	304	毒蛇（ヴァイパー）の始まりの場所（グ	421
G・D・st突入	321	ラウンド・ゼロ）へ	432
同じ手を何回もやるとか頭沸いている	332	『残虐性を持たない無人機』と『砂漠の	449
のか？	344	嵐』その①	457
完全なる出来レース	354	『残虐性を持たない無人機』と『砂漠の	469
世界を越えた姉弟の共闘	370	嵐』その②	478
プライド オブ ジョジョ	384	野生の掟（Rules of Nature）	489
レクイエムとの邂逅	401	いきなり戦車部隊フルトンして悪い？	497
『さよなら』は言わない	417	フランスの冷たい突風（ミストラル）	504
本城凛さんとの第2弾!!? Another	421		
r Story—目覚める殺人剣—	432		
一条承一郎！比企ヶ谷八幡と再会する	449		

戦えなかつた者からのささやかな償い

497

敵には道化になつてもらおうか

509

クズにはそれ相応の罰を

521

傭兵の引退

531

季節風（モンsoon）

554

因縁の決着その①

565

因縁の決着その②

601

It Has To Be This

Way（最後にはこうなると決まつて

いる）その①

630

It Has To Be This

Way（最後にはこうなると決まつて

いる）その②

復活の千葉村へ

集まる同じ声（中の人）という名の混沌

（カオス）達

復活する戦友

三重スパイ（トリプルクロス）

700

交錯する世界

異常なまでの恐怖症八幡

お酒はダメ、絶対

封印される記憶

656

673

680

686

705

718

728

739

	世界を越えた女子会アルス編	—	751	
	世界を越えた女子会ボーダー編		764	
	世界を越えた女子会幻想郷編	—	777	
	世界を越えた女子会駒王編	—	787	
796	世界を越えた女子会ニセコイ編			
	格ゲー『未来への遺産』をやってみよう			
	格ゲー『未来への遺産』をやってみよう			
	その①	—	803	
	格ゲー『未来への遺産』をやってみよう			
	その②	—	822	
	格ゲー『未来への遺産』を見学しようそ			
926	プレイ動画を見てみよう！その⑥			
917	プレイ動画を見てみよう！その⑤			
903	プレイ動画を見てみよう！その④			
891	プレイ動画を見てみよう！その③			
875	プレイ動画を見てみよう！その②			
857	プレイ動画を見てみよう！その①			
	の①	—		

	プレイ動画を見てみよう！その⑦	の②	999
938	プレイ動画を見てみよう！その⑧	格ゲー『未来への遺産』を見学しようそ	
	プレイ動画を見てみよう！その⑧	の③	1018
945	プレイ動画を見てみよう！その⑨	格ゲー『未来への遺産』を見学しようそ	
	プレイ動画を見てみよう！その⑨	の④	1031
955	プレイ動画を見てみよう！その⑩	格ゲー『未来への遺産』を見学しようそ	
	プレイ動画を見てみよう！その⑩	の⑤	1042
966	プレイ動画を見てみよう！その⑪	格ゲー『未来への遺産』を見学しようそ	
	プレイ動画を見てみよう！その⑪	の⑥	1053
977	プレイ動画を見てみよう！その⑫	第0章—Vが目覚める—	
	プレイ動画を見てみよう！その⑫	クリスタルの謎その①	1066
988	プレイ動画を見てみよう！その⑬	クリスタルの謎その②	1070
	プレイ動画を見てみよう！その⑬	クリスタルの謎その③	1076
	格ゲー『未来への遺産』を見学しようそ		

憎悪が目覚める (V h a s c o m

e t o)

憎悪 (The Venom) |

絆 (ダイヤモンド)を抱いて |

第1章 | 動き出す運命の歯車 |

プロローグ | 冒険の終わり |

第1話 | 冒険の始まり |

第2話 | 出会い |

第3話 | 矢に貫かれて |

第4話 | 目覚め |

第5話 | ニセモノの恋人が転校生!?!? |

第6話 | 質問責めを乗り切れ! | 1131

1134

第7話 | 空条承太郎! 一条承一郎に会

うその① | 1140

第8話 | 空条承太郎! 一条承一郎に会

うその② | 1145

第9話 | 学校でも恋人の演技をせよ!

その① | 1150

第10話 | 学校でも恋人の演技をせよ

!その② | 1156

第11話 | 美少女が作る料理はだいた

いダークマター | 1161

第12話 | 一条家での勉強会 |

第13話 | 暗闇の中での災難 | 1172

1167

第14話	水の上を走っている時点で	
すでに人外	——	1177
第15話	そんなキャラクターしてな	
い	——	1184
第16話	小咲の告白!!?	
第17話	借りを返す	
1200		1193
第2章—目覚める能力—		
第18話	ヒットマンがやって来る	
その①	——	1206
第19話	ヒットマンがやって来る	
その②	——	1213
第20話	ヒットマンがやって来る	
その③	——	1220

第21話	ヒットマンがやって来る	
その④	——	1226
第22話	ヒットマンがやって来る	
その⑤	——	1234
第23話	対極のダークマター	
1240		
第24話	兄さんはギャングスター	
その①	——	1249
第25話	兄さんはギャングスター	
その②	——	1256
第26話	承一郎の秘密	
第27話	林間学校に行こう	
1269		1263
第28話	ババ抜きという名の変顔大	

第29話 ブラッディ・シャドウ

1275

1284

第30話 肝試しの怖いところは暗い

ことだけ

1294

第31話 暗闇の中で

1304

第32話 ドラゴンアッシュ その①

1313

第33話 ドラゴンアッシュ その②

1322

第34話 千棘の誕生日プレゼントを

入手せよ!

1330

第35話 千棘の誕生日パーティー

1338

第36話 二つの鍵^{!!}?

1346

第37話 たまに先生は写真ミスると

きがある

1354

第38話 10年前の写真

1365

第39話 相合傘

1373

第40話 許嫁が来る

1382

第41話 許嫁とのデート

1395

第42話 バクハツ

1406

第43話 マリー

1416

第44話 一条承一郎!警視総監に会

う

1426

第3章 | 奇妙な夏 B i z a r r e

S

	第45話	アルバイト	1437
	第46話	台風の夜	1450
	第47話	ようこそ杜王町へ	その①
	第48話	ようこそ杜王町へ	その②
	第49話	父の正体と罪	1467
	第50話	杜王町観光	1480
	第51話	振り返ってはいけない小道	1490
1506	第52話	ジョセフと徐倫来日	1498
	第53話	11人の男達	その①
	第54話	11人の男達	その②
	第55話	11人の男達	その③
	第56話	嘘発見器って性能がすごい	1529
	第57話	子犬はとても癒される	1537
	第58話	毒蛇(ヴァイパー)と山猫	1550
	第59話	毒蛇(ヴァイパー)と和平	1560
	(オセロット)の会話		

(カズ)の会話

第58話 縁日

15711564

第59話 浴衣に下着を付けないのは

その②

1645

よくある間違い

第60話 海辺での想い その①

1581

その③

第66話 毒蛇は静かに獲物を狩る

1653

1593 第61話 海辺での想い その②

第67話 毒蛇は静かに獲物を狩る

1660

その④

1604 第68話 波乱の文化祭 その①

第68話 波乱の文化祭 その①

第4章―女心はよく分からない―

第62話 演劇の配役

第69話 波乱の文化祭 その②

第63話 拳よりピンタの方が痛い

1678 第70話 瞳に写る君の姿

1684

1627 第64話 毒蛇は静かに獲物を狩る

第71話 彼女のスリーサイズを知る

	には死の覚悟が必要なり！	1692		第78話	新しき牙	1768
	第72話	占いはたまに信じたい時がある	1707	第79話	学校の前で銃撃戦とか狂つて	1779
	第73話	死の瞬間を切り取る芸術家	1719	第80話	私を止めるな (Don't Stop Me Now)	1792
	第74話	ステファアノのオブスキュラ	1733	第81話	黒虎(ブラックタイガー)の真価	1804
	その①			第82話	橘家での勉強会	1815
	第75話	ステファアノのオブスキュラ	1742	第5章	波乱しかない冬休み	
	その②			第83話	千棘の母は超コワイ!?!?	
	第76話	ステファアノのオブスキュラ	1753	1829		
	その③			第84話	母と似た女性	1841
	第77話	罰を与える者(パニツシャー)	1763	第85話	似た者親子	1856

第86話 聖なる日(クリスマス)の神

(DIO)の子に救いはもたらされるか?

その①

1871

第87話 聖なる日(クリスマス)の神

(DIO)の子に救いはもたらされるか?

その②

1880

第88話 新たな抑止力と恐るべき悪

ガキ

1887

第89話 お酒は大人になってから

1901

第90話 因縁はいつも突然にその①

1915

第91話 因縁はいつも突然にその②

第92話 因縁はいつも突然にその③

1928

第93話 因縁はいつも突然にその④

1942

第94話 甘すぎるバレンタインその①

1957

第95話 甘すぎるバレンタインその②

1974

第96話 甘過ぎるバレンタインその③

2002

オリキヤラプロフィールまとめ

一条承一郎

本作の主人公。D I Oの息子。兄弟の中で末っ子。最後の頃にはD I Oの肉体がかなり馴染んでいたので波紋使いと吸血鬼の能力を受け継いだ。波紋使いの能力を持つ。

母子家庭だったが、幼い頃に理那が亡くなり知り合いであった集英組の組長一条一征の養子になる。

近接格闘術や剣術、ナイフ投げなど、あらゆる戦闘術に精通してあり、経営学な

ども学んでいる（じやないと組織の経営なんて出来ない）。

普段は温厚な性格ではあるものの、組や仲間を貶されたり傷付けられるとすぐにキレる（そこは親戚の仗助に似ている）。

小咲を好きなのだが、『小咲が自分を好きなわけがない』と思い込んでいるし、『自分にはその資格はない』とも思っている。

中学一年の頃に一征の仕事を手伝っていた時、罠にかかり仲間を失った。その後中学三年の時までP M C組織『水晶の牙』を組織、活動していた。

母が実は殺されたというのを知り、母の死の真相と母を殺した犯人を探っている。

座右の銘は『正しいと信じる、その思いこそが未来を創る』。
スタンドは『水晶の骨』クリスタル・ボーン。骨を自在に生成して、操る能力。

ジョニー・ジョースター

本作の主人公である承一郎のもう一つの人格。母が亡くなった頃に精神の安定と相反する能力による肉体の崩壊を防ぐために出来た人格。吸血鬼の肉体と能力を持つ。

承一郎と比べて態度は冷たいが、承一郎と同じくらい仲間思い。承一郎との二重思考ダブルシンクによる冷静な判断力を発揮する。

承一郎と記憶と経験を共有しており、母を殺した犯人へ抱く憎悪は承一郎以上。

好きな相手はいるようなのだが、自分は『人格だけの存在』フアレントなので恋など不可能だと思っている。

座右の銘は『死を懇願した時勝敗は決まる』。

コードネームは『The 憎Venom』、またの名を『Viper』毒。

中学の頃に活躍した当時は『VIBOSS』勝利のボスと称され伝説の傭兵として名を馳せた。スタンドは『血の影』ブラッディ・シャドウ。異空間を作り出し、それを利用して空間と空間を繋ぐ能力。

マクドナル・ミラー（別名カズヒラ）和平

承一郎の傭兵時代の仲間。傭兵部隊の副司令をしていた。部隊の中では『ミラー』と呼ばれていた。

日本人の母とアメリカ人の父を持つ日系三世。金髪でいつもサンングラスをかけている。

承一郎との最初の出会いは戦場でお互い敵同士だったが、敵の兵士ですら尊敬の念を抱かせる承一郎のカリスマに惹かれて部隊に入った。

承一郎のツテで屋台『バーガー・ミラーズ』を経営している。行列が出来る程の名店。スタンドは『TOKYO通信』。元ネタは soul, d out の『TOKYO通信』に『情報の海を渡る』事が出来る能力である。まさ

オセロツト山猫（本名アダムスカ）

承一郎の傭兵時代の仲間。元はCIAに所属していて、傭兵部隊の教官をしていた。
シングル・アクション・アーミー
 S A Aを好んで使い、6発以内に敵を倒す事から『リボルバー・オセロツト』と呼ばれて恐れられている。戦闘中のリロードに興奮を覚える癖がある。

CIAに所属していた時は承一郎の母親の部下で、『彼女無しでは今の自分はいない』というほど大恩がある。

承一郎のツテで『BARオセロツト』を経営している。知る人ぞ知る名店。たまに
征も行くらしい。

スタンドは『愛国者達の銃』。ガンズ・オブ・ザ・パトリオット SAAと理那の突撃銃。パトリオットの弾に込められ
たスタンド。実弾としての破壊力と、当たった物の制御を奪う事が可能（例えばヘリの
制御を奪って墜落させる事が出来る）。能力は指を差すだけでも発動可能。

EVA

承一郎の傭兵部隊の仲間。

元々は白蛇の手先だったが、承一郎に敗れ、仲間にも勧誘された。

金髪の白人女性で、発砲時の跳ね上がりを利用して水平になぎ撃つ『馬賊撃ち』を得
意としている。また、バイクの運転に関しても非常に高い技術を有している。つい
でに豊胸疑惑あり。

スタンドは『失樂園の戦士』。パラダイス・ロスト・アーミー

一条理沙

承一郎の義母。承一郎の母親である理那と千棘、小咲、万里花の母親達とは同級生。
ニセコイ原作では名前は出なかつたので本作は名前を出してオリキャラとして登場。

理那

承一郎の母親。承一郎が幼い頃に死亡。事故だと思われていたが、何者かに殺された事が判明。

理沙や千棘、小咲、万里花の母親達とは同級生。

どのような経緯かは不明だが、CIAに所属していた時に承一郎を身籠る。その後組織を辞めて承一郎と本海苔町で暮らしていた。

スタンドは『喜び』^{ザ・ジョイ}。能力は『精神と記憶への干渉』。オセロット曰く『近接戦闘で勝てる相手は見た事がない』らしい。

ザ・ペイン

CIAに所属していた時は理那の部下だった。組織を辞めた後、傭兵として雇われていた時に承一郎にスカウトされた。

現在は養蜂家兼蜂の駆除（という名の蜂収集）をしている。
スタンドは『痛み』^{ザ・ペイン}。蜂を自由に操る能力。

ザ・ファイアー

元^{ロシアの特殊部隊}スパツナス出身。組織を辞めた後、傭兵として雇われていた時に承一郎にスカウトされた。

スタンドは『^{ザ・ファイアー}恐怖』。周りの景色に溶け込む能力。

ジ・エンド

CIAに所属していた時は理那の部下だった。組織を辞めた後、傭兵として雇われていた時に承一郎にスカウトされた。

スタンドは『^{ジ・エンド}終わり』。ぶっちゃけ『^{エンペラー}皇帝』のモシン・ナガン版。弾丸に当たると対象の生命エネルギーを吸い取る能力がある。

ザ・フューリー

CIAに所属していた時は理那の部下だった。組織を辞めた後、傭兵として雇われていた時に承一郎にスカウトされた。

現在は集英組のメカニック担当。

スタンドは『^{ザ・フューリー}怒り』。

ザ・ソロー

ソ連の諜報員だったが、時代の変化によりソ連が崩壊した時に組織を辞め、各国を彷徨っていた時に承一郎にスカウトされた。

スタンドは『悲^ザしみ^{ソロ}』。生者の心を読み、死者との会話による情報収集のほか、降霊によつて死者の能力を獲得できる。

犬塚信乃

父が集英組の構成員の一人で父子家庭だったが、抗争で死亡。その後集英組に引き取られて承一郎と出会い、承一郎と親友になった。

第0章では承一郎と共にある任務へ赴くが……？

スタンドは『村雨』。正確には信乃自身のスタンドではなく、信乃の家系に代々受け継がれたものらしい。能力は水が迸る事が出来る能力。勢いよく迸らせる事によつて遠くの敵に水圧カッターで攻撃出来る。

名前の由来は『南総里見八犬伝』の村雨の剣士、犬塚信乃より。

JOJO'S BIZARRE SAGA

紀元前・

約12万年前

カーズ、エシデイシ誕生。

約4万8000年前

石の矢の元となる隕石がグリーンランドに衝突する。

約1万2000年前

カーズとエシデイシが地底に住む一族をほぼ全員殺害、地底から出る。

紀元前3000年

カーズら、初めて人間の歴史に姿を現す。

紀元前2000年

波紋法誕生。

紀元前1000年

カーズらによって波紋一族がほぼ滅亡する。

紀元前62年

カーズらが眠りにつく。その後カーズらによつて滅ぼされた波紋法を復興しようとした修行者達が『地獄昇柱』^{ヘルクライム・ピラー}を建てる。

12世紀—15世紀

南米アステカで太陽の民が文明を築く。その中には、石仮面を崇める部族がいた。

19世紀・

1827年

ダリオ・ブランドー誕生。

1838年

ウイル・A・ツエペリ（後のツエペリ男爵）誕生。

1852年

二つ杜トンネルが開通する。

1858年

ツエペリの父、石仮面をかぶつた影響で吸血鬼になる。その後、光を浴びて死亡する。

1860年

ツエペリ、波紋法の修行を始める。

1863年

ツエペリ、老師トンペティから『死の運命』の予言を聞く。

10月16日 ロバート・E・O・スピードワゴン誕生。

1867年

ディオ・ブランドー誕生。(ファントムブラッド)

1868年

4月4日 ジョナサン・ジョースター誕生。

ジョージ一家が馬車の事故に遭い、夫人が死亡。ジョージとジョナサンはダリオ・ブランドーに発見され一命をとりとめる。

1869年

エリナ・ペンドルトン誕生。

1880年

ダリオ・ブランドーが病死(ディオによる毒殺)。その後ディオはジョースター家の養子になる。

1882年

エリナがイギリスを離れ、英領インドで看護師となる。

1888年

ロンドンで切り裂きジャックの事件が発生する(歴史上の未解決事件)。

11月 ジョースター邸炎上事件。当主暗殺計画に失敗した養子が抵抗し、当主

ジョージ卿、養子ディオ、警官隊などが全員死亡し、跡取りのジョナサンとスピードワゴンのみが火事から生還。実際にはディオが石仮面を被った影響で吸血鬼になっており、ジョナサンに撃破されるも生き延びていた。

11月29日 ジョナサン、ツエペリから波紋の基礎を習得する。

12月 リサリサ（エリザベス・ジョースター）誕生。

12月1日 ウインドナイツ・ロットで73人が行方不明となる。陰ではジョナサンとディオが再び対決して、ジョナサンが死闘を制す。

1889年

2月2日 ジョナサンとエリナ結婚。

2月7日 ジョナサン、エリナを守るためディオの首を抱いたまま死亡する。

ディオ、船が沈没する直前にジョナサンの遺体の首から下を奪い、棺桶型シエルターに逃れて海底に沈む。

エリナ、幼いリサリサと共に救出される。

■。

12月 ジョージⅡジョースターⅠⅠ世誕生。

20世紀・

1910年

ロバート・E・O・スピードワゴンが『スピードワゴン財団』（SPW財団）を設立。
1914年

ジョージ・ジョースター・II世とリサリサ結婚。

1918年

第一次世界大戦終結を受け、米中露の三大国の権力者による秘密組織『賢者達』結成。

5月13日 シーザー・アントニオ・ツェペリ誕生。

1920年

9月27日 ジョセフ・ジョースター誕生。

その直後、ジョージ・I世がイギリス空軍将校となっていたゾンビの生き残りに殺される。リサリサはその仇を討ち失踪、ストレイツオの元へ。

1933年（ジョセフ13歳の時）

ジョセフ、スピードワゴンを狙ったハイジャック事件に巻き込まれる。スピードワゴンがジョセフの波紋能力を知った最初、またジョセフの墜落初体験。

1934年（シーザー16歳の時）

シーザー、ローマで父・マリオと再会、この直後マリオはカーズ達の罠のために命を落とし、シーザーは彼の遺志をついで戦いに身を投じる。

1938年

1952年

ロバート・E・O・スピードワゴン死去。享年89。

1966年

吉良吉影誕生。

1967年

イタリヤの女子刑務所で父親不明の子供が産まれる（ディアボロ）。

1970年、空条承太郎誕生。

米首脳、『賢者の遺産』を奪取。『賢者達』は『愛国者達』と改名。

1972年6月5日

エンリコ・プッチとウエス・ブルーマリンが同じ病院で誕生。エンリコは双子で弟ドメニコは死産であったが、実は取り換えられておりウエスこそがドメニコであった。

1974年

米軍、西側からのアイデアを盗作し、極秘に核搭載二足歩行戦車暗号名『メタルギア』

の開発を始める。

1979年

岸辺露伴誕生。

1980年代

杜王町がS市のベッドタウンとして急速に発展。

1983年

D I Oが財宝探索者達によつて深海から引き上げられる。

8月13日 杜王町で杉本家殺人事件が発生。殺人鬼吉良吉影の最初の犯行。岸辺露伴はその場に居合わせたのが難を逃れる。

東方仗助誕生。

1984年

3月28日 広瀬康一誕生。

ジヨセフ、モハメド・アヴドウルと知り合う。

1985年

4月16日 ジョルノ・ジヨバアーナ誕生。

1986年頃

サルディニア島の村で大発火が発生し、ディアボロが表向きは死亡したこととなり、姿を消す。同時期、ディアボロがエジプトで矢を発掘して、エンヤ婆とD I Oの手に渡る。『パツシヨーンネ』が台頭してヨーロッパの犯罪件数が激増。

1986年

ジヨセフ、スタンド能力が突然発現する。

『愛国者達』、■■■■■■■■。

1987年

DIO、エンリコ・プッチと出会う。

承太郎がスタンド能力を発現、当初その能力を「悪霊にとりつかれた」と解釈し自ら警察に拘置されるがジョセフの説得を受け出所。

承太郎、ジョセフらDIOと戦うためエジプトへ向かう。(スターダストクルセイダース)

この頃、東方仗助もスタンド能力を発現、それに伴う発熱で病院に向かう途中、リゼントヘアの少年に命を救われている。

空条承太郎がDIOを倒す。ディオ・ブランドーが完全に死亡。

『愛国者達』、■■■■■■■■。

1992年

空条徐倫誕生。

1995年

岸边露伴、漫画家デビュー。週刊少年ジャンプで『ピンクダークの少年』を連載開始。

1997年

『■■■■■■■■』計画発動。

■■■■■■■■一条承一郎、■■■■■■■■

■■■■■■■■■■ 誕生。

理那、承一郎 ■■■ 『愛国者達』から奪取に成功。 ■■■■■■■■■■

■■■■■■■■■■。後に天駒高原で密かに暮らす。

1999年

2月 岸辺露伴が杜王町へ移住。

4月 承太郎が杜王町を訪れ東方仗助と出会う。

杜王町でスタンド使いによる事件が頻発、仗助と承太郎はその鍵を握る『弓と矢』の行方を追う。(ダイヤモンドは砕けない)

ソルベとジェラートがボスの正体を探ろうとしてボスの逆鱗に触れてしまい処刑される。(黄金の風)

21世紀・

2001年

ジヨルノ・ジヨバアーナ、ギャング組織『パツシヨーネ』の内部抗争に終止符を打つため身を投じる。(黄金の風)

2002年(承一郎が5歳の時)

理那、承一郎を守る為に『愛国者達』と戦い死亡。その後承一郎は一条一征の養子になる。

オーシャン)

一条承一郎、一時組織を解散する。

2012年

3月21日(新月の前日) 承太郎と徐倫がプッチを倒す。エンリコ・プッチ死亡。

4月 一条承一郎、小野寺小咲、宮本るり、舞子集凡矢理高校に入学。

桐崎千棘、凡矢理高校に転入。

承一郎、スタンド能力を覚醒させる『矢』を小咲を庇う為に射られる。その際小咲も『矢』に触れる。

ヤクザ『秀英組』組長一条一征、ギャング『ビーハイブ』ボスアーデルト・桐崎・ウオグナー両名、承一郎と千棘にニセの恋人になる事を命じる。

5月 鶴誠士郎、凡矢理高校に転入。承一郎と決闘をするも敗北。

6月 橘万里花、凡矢理高校に転入。

—ネタ&作者の気まぐれ—

チーズの歌

とある放課後の学校——

集「なあジョジョ、今……歌思いついた………考えたのよ。作詞作曲舞子集だぜ。聴きたいか？歌ってやってもいいけどよ」

学校の屋上で、集が言ってきた。

承一郎「ずいぶん……君……暇そうじゃあないか………」

勉強や色々な事で忙しい学校生活に呑気な男である。

集「聴きたいのかよ？聴きたくねーのか？どうなんだ？オレは二度と歌わねーからな」

こう言われると、気になってしまるのが人の性というべきなのだろう。

承一郎「……じゃあ聴きたい」

集「そうか、いいだろう。タイトルは『チーズの歌』だ。オホン、ン。歌うぜ」
すごいもったいぶる集。

ヒット間違いないかも！」

集「マジすか!!? マジそう思う? 実はひそかにオレもそう思うのよ、だろオ〜〜!!
? 譜面にできる?」

承一郎「:よし、やってみよう！」

集「YEAH!^{エイ}」

ピシガシググッ!と承一郎と集はハンドシグナルを交わす。

集「レラレラレラレラ」

承一郎「ゾラゾラゾラゾラ、バンド組む?」

集「いいな、それ！」

その後、承一郎と集で演奏した『チーズの歌』というタイトルで投稿された動画はあつという間に急上昇ランキングのトップにランクインした。

コメント欄には、『レラレラが耳にこびりついて離れない!』や、『スゴククセになる!』など、大好評だった。

『チーズの歌』

作詞作曲：舞子集

演奏：一条承一郎

歌詞

ピザ・モツツアレラ♪ ピザ・モツツアレラ ♪

レラレラレラレラ

レラレラレラレラ

レラレラレラレラ

ピザ・モツツアレラ♪ ピザ・モツツアレラ ♪

ゴルゴン・ゾーラ♪ ゴルゴン・ゾーラ ♪

ゾラゾラゾラゾラ

ゾラゾラゾラゾラ

ゾラゾラゾラゾラ

ゴルゴン・ゾーラ♪ ゴルゴン・ゾーラ ♪

夢見た未来

承一郎「…ん？」

朝、承一郎は目覚めた。だがそこにはいるはずのない人物がいた。

理那「おはよう承一郎、遅刻するわよ」

承一郎「え…」

亡くなったハズの母、理那がいたのだ。

理那「ほら、朝ご飯できたわよ？早く食べて学校に行かなきゃね」

承一郎「母…さん…」

理那「どうしたの？まるで死んだ人に会ったような顔して」

承一郎「…ううん、何でもない。ちよつと…夢を見ていたみたい…」

承一郎は溢れそうな涙を堪える。あれは悪い夢だったのだと、母は死んでいなかったのだと安堵した。

理那「へえ…どんな？」

承一郎「フフ…秘密」

理那「そう言われると余計に気になるの」

そうして、二人は食卓へと向かった。

承一郎「母さん、行ってきます」

生きていた、母さんは死んでいなかった。その思いが承一郎の心を高揚させた。

理那「行ってらっしゃい、承一郎」

もう言われる事がなかったであろう言葉を受け、承一郎は学校へ向かった。

小咲「おはよう一条君」

承一郎「ああ、おはよう小野寺君」

小咲「ねえ、今日一条君のお母さんのお誕生日でしょ？私も行ってもいい？」

そう、今日は理那の誕生日なのだ。

承一郎「もちろんだよ！母さんも絶対喜ぶさ！」

集「なあ承一郎、オレもいい？」

承一郎「ああ！当たり前だろう？宮本さんもどう？」

るり「そうね…そうさせてもらおうわ」

承一郎「それじゃあ、また後で」

放課後、承一郎は小咲に別れの挨拶をした。

小咲「うん、またね一条君」

承一郎が理那の誕生会の用意をしていると、ピンポン！と家のチャイムが鳴った。そこには、オセロツト、エヴァ、ザ・ペイン、ジ・エンド、ザ・フューリーと見知った顔ぶれがいた。

承一郎「こんにちは皆さん、今日はよくお越しになりました」
オセロツト「お久しぶりです、ザ・ボスの息子^ア」

理那の部下であるオセロツトが代表して挨拶する。

承一郎「今母さんは留守なのであの計画、実行に移しましょう」
一同「了解！」

承一郎「さあ小野寺君達、入った入った」

三人「お邪魔しまーす」

承一郎「母さんが来たら始めるから、ゆっくりしていてね」

理那「ただいま、承一郎いる？ごめんね、買い物で時間が…」

理那は買い物袋を持って家に帰った。キッチンに買い物袋を置いて、ダイニングの明かりをつけた瞬間、

承一郎「母さん！」

一同「「お誕生日おめでとう!!?!」」

パアン！パパン！パアン！と一斉にクラッカーの音が鳴る。

理那「どうしたのこれ？」

承一郎「驚いた？オセロットさん達と一緒に準備を進めてたんだ！」

オセロット「ボス、秘密にしていますみません。私もボスが驚くのを見たくて……」

エヴァ「ボスの驚くなんてあまりないからね、承一郎がサプライズを提案した時から着々と準備をしていたのよ？」

理那「皆……」

小咲「あつすみません、これ私達からのプレゼントです……」

小咲は皆を代表して理那の好きな花、オオアマナの花束をプレゼントとして渡した。

理那「……フツツ……ありがとう、承一郎の彼女さん」ボソツ

小咲「えっ?!?／／／」

承一郎「どうしたの？」

小咲「いいいい、いや、何でもないよ一条君！」

承一郎「…?」

二人の微笑ましいやりとり、二人以外が温かい目で見る。

承一郎「…さてと、お母さん! 誕生日ケーキのロウソクを吹き消して!」

承一郎は誕生日ケーキを理那の前に出した。理那は一気にケーキのロウソクの火を吹き消す。

皆からお祝いの拍手が送られた。

承一郎「さあ、席について母さん! 僕が作ったんだ、皆で食べようよ!」

理那「そうね、それじゃあ…」

全員「いただきます!!?」

—————

承一郎「はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…」ガバアツ!

承一郎は布団から飛び起きた。

承一郎「はあ…はあ…今のは…夢…だったのか…」

承一郎はヨロヨロと洗面台に向かい、顔を洗う。

まるで早く忘れてしまおうとしているように。母はもう、『いつてらっしゃい』と言っ

て承一郎を見送らず、『ただいま』と言って帰らない事を知っているから。

承一郎「母さん……ううっ……ううっ……」

啜り泣きながら、洗面台の鏡を見る。映っていたのは、白い角が生えた一人の鬼。角がキリキリと伸びて、額から血が流れる。

承一郎「……奴らに、僕達から『奪った』ものを返してもらおうッ！そのために僕は、復讐の鬼になるッ！」

ガシヤアアン!!?

承一郎は洗面台の鏡を叩き割る。その先のはるかかなたにいる敵を見据えながら。復讐の炎は、未だ消えず。

<|| to be continued ||>

n
O
u
t
o
f
O
r
d
e
r
)
B
i
r
t
h
d
a
y
i

ある日、司令部プラットフォーム——

バラバラバラ……

ローター音を立てながら、あるへりがプラットフォームのへりポートへゆつくりと降下した。

ピークオド「着きました、今日もお疲れ様でしたボス」

承一郎「ああ、ありがとう」ガラツ!

その搭乗者、一条承一郎はへりのドアを開けて足をへりポートにつけた。

最近はまだマザーベースに戻る日がなく、今日はようやく任務の合間ミツシヨウに休める日が来たのだ。

ドンツ! ドンツ!

承一郎「ツ!!?」スチャツ!

突然の音に反応してハンドガンを構えた。しかしおかしい、いつもなら巡回しているスタッフ達がない。こんな大きな音が聞こえていないなんて事もないはずだ。

すでに襲撃を受けている？ それにしては静かすぎる。一体なんだ…？
ドンツ！ドンツ！

音の方角を見ると、そこには鮮やかな色合いの火花が舞っていた。

承一郎「これは…」

そうだ、これは…昔、夏によく親父と一緒に見た——

承一郎「花火…なんでここで…？」

そしてどこからか先程とは違った音楽が聞こえて来た。

『 Happy Birthday 真の英雄♪

Happy Birthday 敬礼だ♪

Happy Birthday おめでどう♪

Happy Birthday to you♪ 『

音楽と共に隠れていたスタッフ達が姿を現して歌いながらケーキを運んできた。

スタッフ達「おめでどうございませす、ボス！」

カズ「ボス、おめでどう！」

承一郎「これは、一体…」

エヴァ「あなたが任務に行つてる間に密かに用意しておいたのよ」

カズ「花火はあんたの親父さんに手配してもらつてな。ウチのGMP、かなり減つち

まったから覚悟しとけよ？」

承一郎「ああ、ありがとう……ホントお前達、いいセンスだよ」

オセロツト「オレからの祝いの品だ、ボス」スツ……

そう言つてオセロツトが出したのはキューバ産の葉巻だ。

スタツフ「おお……」「さすが……」「渋い……」

承一郎「ありがとう、オセロツト。ライターは……いや、火はあつたな」

葉巻のヘッドを骨の手刀で吸い口を水平に切り落とし、ライターを出そうとするが、

承一郎は近くにあつたケーキのロウソクの火で点けようとするが、

カズ「ダメだぞ、ボス」

カズが葉巻を取る。

承一郎「じゃあ改めて……フーツ！」

承一郎は一気にロウソクの火を全て吹き消した。

スタツフ「ヒューー！」「おめでどうございます！」

スタツフ達が楽しそうに祝つてくれる。

カズ「それじゃあ皆！中でドンチャン騒ぐぞオーツ!!？」

スタツフ「「おおーッ!!？」」

承一郎「ははっ……それじゃあ、行くか！」

ここは天国アウター・ヘブンの外側、神に見放され、天国から追放された者達が地獄ヘルに作り上げた樂園、秩序アウト・オブ・オーダーの外。

どこの国家に付属せず、思想、イデオロギー、人種、言語。あらゆる隔たりを超えた戦士達が唯一、生の充足を得られる理想郷ユートピア。

たとえその一寸先が地獄だとしても、それでも彼等は進み続ける。

それが戦う事でしか自分を表現出来ない者達が出来る、世界への抗いだから。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

を洗いながらカズに話しかけた。

承一郎「……出来たんだってね」

カズ「ん？」

承一郎「例の部屋だよ」

カズ「ああ、サウナか」

承一郎「君らしくないね」

カズ「うん？」

承一郎「贅沢なんじゃあないのかい？このマザーベースにサウナなんて」

カズ「ボス、開発を許可したのはあんただ」

承一郎「ミッション中に気が変わった。GMP資金金がかかり過ぎるんじゃあないかって

ね」

キュツ！と承一郎はシャワーの蛇口を閉めて今度は頭を洗う。

カズ「話しただろ？海水を吸い上げて、濾過する電気代を考えたら風呂より経済的だ。フィンランド出身の兵士もいるし、士気も上がる。石鹼、使うか？」ヒュツ！

カズは石鹼を投げて渡すが、

ピシッ！

承一郎は叩き落とした。

承一郎「断る」

カズ「スタッフの評判もいいぞ？」

承一郎「そういえばオセロツトも『いいセンスだ』とか言ってたな…」

カズ「赤くなるまで石を焼くんだ。で、水をかけて蒸気を出す。本格的なフィンランドサウナだ、20人は入れる。…ジョジョ」

キュツ！シャワー！

また蛇口をひねり、シャワーを浴びる。

承一郎「カズ、ここでケガ人が出たって？」

カズ「うん？ほんの打ち身程度だ」

承一郎「尾骶骨骨折、診療所に一ヶ月。誰だった？」

尾骶骨、人間が爬虫類から進化した時の名残り、いわば尻尾の部分の骨だ。ここを骨折すると座るだけで激痛が走り、歩く事すらままならない。

カズ「アルマジロ」

承一郎「その時君もいたんだって？」

カズ「あ、ああ…急に、転んだんだ。…石鹼かな？」

承一郎「転んだ、あのアルマジロが。人一倍慎重で、戦車より重心が低い彼が？」

そういう承一郎もCCCによる投げを断念して首を締めて気絶させてからフルトン

回収せざるを得なかった程の兵士だ。そんな兵士が転ぶとなると、よつぼどの事があつたのだろう。

カズ「あまりの振動で、マザーベース中のウミネコが飛び立ったそうだ」

承一郎「へえ」

カズ「のぼせたのかなあ、サウナで」

承一郎「ほお、サウナで」

カズ「ボス「カズ」ボス？」

承一郎「君……何か、言いたい事あるかい？」

カズ「ああ……そうだなジョジョ。サウナ入る？」

承一郎「…案内してもらおうか」

サウナ室——

ジュウウウウウウウウツ……！！

サウナ室は焼き石にかけられた水の蒸気で蒸し返し、温度も100度をキープしていた。もはや息をするのも苦しいレベルだ。

カズ「フウ……見ろ、この蒸気」

承一郎「君、内腿にも傷があるね」

カズ「どこを見ているんだ？」

承一郎「君の全てだ。そう、そのタオルで隠しているところ以外はね」
※これは素です。

ジュウウウウウウウウウツ……！！

承一郎「カズ、それで……」

カズ「どうだサウナ、中々だろう？」

承一郎「ああ、日照りの熱帯雨林が涼しく思えてくる。で、カズ……」

カズ「これなーんだ？」ガサツ

カズがおもむろに取り出したのは何かの枝の手元を束ねたものだった。

承一郎「なんだい、その葉っぱは」

カズ「ビヒタだ、白樺の枝を束ねた……」

承一郎「ビヒタ……」

カズ「本場はこいつで体を叩くんだ。ビヒタでビンタ（ボソツ）血液循環を促して……」

代謝

承一郎「へえ……やってみてくれ」

カズ「いいけど？……ふっ！」ペシッ！

カズがビヒタで承一郎の背中を叩いた。

承一郎「貸してくれ」

カズ「どうぞ」

承一郎「…ふんツ!!？」ビシィツ!

承一郎もカズの背中を叩いた。

承一郎「へえ、こりやいいね」

カズ「力強いな、ジヨジヨ」

承一郎「で、カズ」

カズ「はい？」

承一郎「後ろを見せてみる」

カズ「えっ、後ろ？」

承一郎「立って後ろを向いてみる」

カズ「な……なんだ、なんだジヨジヨ」

承一郎「タオルを取れ」

カズ「あ、ああ……」シャル…

ペチペチ……

※何度も言うがこれは素

カズ「ジヨジヨ、どこを触ってる」

承一郎「尻にも傷があるな……爪で引っ搔かれたような」

カズ「もう、いいか？」

承一郎「いや、もう少し見せろ。…前向け」

カズ「えっ……」

承一郎「前を向け」

※何度も言うがこれは（ry

カズ「ジョジョ……」

承一郎「カズ。君、モテるな」

カズ「……まあ」

ペチペチ……

カズ「ジョジョ、どこ触ってる」

承一郎「カズ、座れ。……ふんっ!!？」ピシィッ！

承一郎はカズをビヒタで叩いた後に座った。

承一郎「君、覚えているかい？」

カズ「何が？」

承一郎「会って間もない頃だ。君、僕に女の数を聞いたね？」

カズ「ん？」

承一郎「モノにした女の数、だったか？」

カズ「あ、ああ……」

承一郎「あれから二年だ。君、何人になったんだい？」

カズ「うーん……（パシパシと手を叩く）これくらいかな」

承一郎「そんなにか!!？」

カズ「いやあ……ええつと……」

承一郎「どうやったらこの二年で増えるんだ、この生活で！」ピシィッ!

承一郎はさらに叩く。ちよつと力が強くなっているのは勘違いではないだろう。

承一郎「カズ、僕はここの連中の惚れた腫れたに首を突っ込むつもりはない。個人の自由、自己責任だ」

カズ「さすがボス……」

承一郎「だが自分の、それぞれのスタッフの、責務や精神に悪影響がないのが大前提。分かるね？」

カズ「あ、熱くなってきたから俺はそろそろ……」

承一郎「カズ！君、ここの副司令なら、わきまえたらどうだい？」

カズ「何だよ……」

承一郎「昨日ガゼルから相談があつた。ミッシヨンから戻つてすぐにだ。折り入つて

話したい事があるってね。彼女は、ここで働くのが惜しい程の美人だよな？」

カズ「そうだな……」

承一郎「君達デキてるんだって？」

カズ「そう言ってたか？」

承一郎「ところがガゼルは、君がスワンと一緒にいるのを見ちまったらしい。スワンもここにいるのは勿体ないような子だよな……」

カズ「ああ……二人でいる事くらい……」

承一郎「入ったのか？」

カズ「えっ？」

承一郎「スワンとこのシャワー室に、二人きりで入ったのか」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

カズ「ええつと……」

承一郎「ふうんツ!!？」バシインツ!

承一郎の思いつき振りかぶった一撃がカズに直撃する!

カズ「いった!!?!」

承一郎「どうなんだい? そう聞いたぞ、石鹼プレイをしたとな。ふうんツ!!？」バシインツ!

そう言つてまた叩く！なんだか頭の角が妙に伸びているのは気のせいか？

カズ「セツケンツテッター！！？」

承一郎「言え！」

カズ「悪かった……つい」

承一郎「つい！！？それをアルマジロが見た、スワンはアルマジロのガールフレンドなんだつて？」バシインツ！

カズ「うぐっ！！？」

承一郎「そりやあ驚くよなあ、重戦車並みの安定感を誇る、あのアルマジロがツ！！？」バシインツ！

カズ「ぎやふっ！！？」

承一郎「ひつくり返るくらいになツ！！？」バシインツ！

カズ「ぐああっ……ああ……」

承一郎「マザーベース中のウミネコが、飛び立つわツ！！？」バシインツ！
ニヤアニヤア！ニヤアニヤア！ニヤアニヤア！

カズ「ぐああっ！！？」

承一郎「ビヒタアツ！！？」

ガシャーーーーーz

ンツ！！？

カズ「ウボアツ……!!?」

まるで雷が落ちたような音でビヒタがカズを容赦なく叩かれた。もう杖を束ねたやつで出している音ではない。

承一郎「① F U ☆ T A ☆ M A ☆ T A ② 共有施設の乱用、③ 挙句スタッフの負傷！君何やつてるん

だ!!?」

カズ「ジョ、ジョジョ……」

承一郎「僕に、こんな説教を、させるな!!?」ベキイツ！

ついに承一郎の鉄拳T E ☆ K E ☆ N ☆ S E ☆ I ☆ S A ☆ I制裁が下された！副司令え…。

カズ「ぶわあつ……!!?」

ガシヤアアアンツ！

その威力たるや、大の大人を吹き飛ばすほどだった。

カズ「…今のはグーだ」

承一郎「それだけじゃあないだろう。君、ドルフィン、ピューマ、コットンマウス、エレファント、一体何人に手を出した!!? 潰す気か!!?」

すでにカズの被害に遭われた女兵士は数知れず。こいつの罪状は…クロだ！すべてツ！↑悪に堕ちたカズのセリフ丸パクリ（詳しくはメタルギアソリッドV参照）

ガラガラ……

カズ「やりやがったな、このお!!?」ベキイツ!

承一郎「ぐつ……! 貴様!」ベキイツ!

承一郎「根性、叩き出せ!!?」ベキイ、バキイツ!

カズ「ぶつ! べらつ! がつ……」ダツ!

承一郎「行かせるかツ!」

バアンツ!!? バシヤアツ!!?

スタツフ達「うわあつ!!?」「ミ、ミラー副司令!!?」「ボ、ボスも!!?」

スタツフ達もいきなり司令、副司令がサウナ室から飛び出して風呂で殴り合いを始め
て驚いている。

承一郎「このツ、スケベグラサン野郎ツ、握り潰すぞツ!」ベキイ、バキイ、ベキイツ

!

カズは殴られながらも逃走を試みるが、

承一郎「待てツ!」ビシュツ!

承一郎は手元にあった石鹼をカズの足元に投げつける!

カズ「あ、ああ~~~~~~~~ツ!!?」ガシヤアアアンツ!

石鹼に滑り、カズは派手にスツ転ぶ。石鹼プレイをした奴が……これを因果応報とい
う。

カズ「ボス、落ち着け。動物には本能ってやつが…」

承一郎「ここは秩序ある人間社会だ。ハアツ！」

カズ「カバー！」ズギユンツ！」

カズは『TOKYO通信』を発動させ、シャワーを手動から自動に設定し直し、承一郎にシャワーを浴びせた！

シャーーーッ！！？

承一郎「何ッ！！？」

カズ「ムーブ！」ダツ！」

承一郎「待て、このツ……スネークキック！！？」

カズ「タコスツ！！？」

風呂場の出口へ向かうカズに承一郎はライダーキックをかました！さすが承一郎ッ！オレ達には出来ない事を、(素で)平然とやってのけるッ！そこに痺れぬ憧れぬウ！

それでも外へ脱出したカズに、承一郎は後ろから首を絞めた。

カズ「待て…首が…」

承一郎「火照った体に…気持ちいいだろう…海風が…」

カズ「あつたかくて…あつくて…背中になんか当たってるしイ…」

※現在二人は全裸です。

承一郎「ああん？」ミシッ！

カズ「イグ、イグイグイグウ……!!？」

カズよ、そのセリフはアウトだ。腐女子を呼ぶぞッ！

承一郎「カズ、真剣に考えろ。女か、僕達か……！」

カズ「両方……」

そう言い、承一郎の拘束から脱出する。ダメだ、この男、反省などしていないッ！

承一郎「待あてえッ！」

承一郎「お前……少しは……懲りろッ！」ベキイ、バキイ、ベキイッ！

カズ「オレが……モテて……何が悪いッ！」バギイ、ベキイ、バキイッ！

お互い拳を叩き込む。いやカズよ、論点そこじゃあねえ。

承一郎・カズ「うおおおおおおおおおッ!!？」

ベキイッ！

お互いのクロスカウンターが顔面にヒットした。

カズ「が……うおおっ……」

承一郎「ハア……ハア……いいパンチだ。だけど僕には効かない」

カズ「さすがだなボス……」カチャ！

承一郎「お前……何も持った？」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド

承一郎「フルトン回収装置：ハッ、それをどうするつもりだ」

カズ「全裸で空の旅はどうだ、ボスウ？」

フルトン回収装置を取り付けようとするカズの手を承一郎は、

承一郎「フッ！」

掌底で弾き飛ばした！

カズ「あー……ッ!?」

承一郎「ハッ！」ドスッ！

そこから腹にパンチを叩き込み、カズは倒れた。

承一郎「全員に謝れ」

カズ「ああ……」

承一郎「少しは慎め」

カズ「ああ……」

承一郎「サウナ掃除一年」

カズ「……ああ……」

承一郎「……よし！」

いやよしじゃあねえって。二人共全裸だぞ。

承一郎「君達、何を見てる」

スタツフ達「あ、ボス……」「いや、その……」

承一郎は騒ぎを聞きつけて来たスタツフ達を一瞥し、

承一郎「……持ち場に戻れ」

命令を下した。

Gの襲撃! 一条邸の決戦!

某夏の日、一条邸——

一応知っていると思うけど、僕の家である一条邸はかなり広い。ウチでは多くのヤクザが住んでいて、皆が父さんを慕っている。

今からッ!これからのこの屋敷(の野郎共)は消滅するッ!

千棘「承一郎、なんかお菓子あったりする?あたしお腹空いちやったわ」

承一郎「君っていつもそればっかのような「なんか言った?」イイエナンデモ」

今日は千棘さんや小野寺君などいつものメンバーで勉強会だ。

小咲「アハハ:そういうえば最近暑くなってきたね」

万里花「そうですね、私の家は冷房を一日中つけないと体が持ちそうにありませんもの」

るり「私は扇風機をよく使っているわね」

集「オレも扇風機かな」

鶴「私は特には。この程度の暑さ、訓練の時に比べたらどうって事ありません」

承一郎「僕もそんなには暑く感じたりしないかな。ウチは結構吹き抜けの構造があつて風通しがいいからね」

ちなみにひどく暑い時は気化冷凍法の応用で少しだけ体の体液を蒸発、その吸熱反応で体温を下げています。熱帯雨林での任務中に非常に役立つ能力だった。

承一郎「まあ確かにそろそろ出したお菓子がなくなりそうだな…竜、悪いが台所からお菓子取ってきてくれるかい？」

竜「へい、坊っちゃん！了解しやした！」

竜は即座に台所へと急行する。言っちゃ悪いが、他にやる事はないのだろうか？

竜「ギニヤアアアアー……」
ツ!!?」

しかし、台所から突如竜の悲鳴が聞こえてきた！

承一郎「ツ……！」

千棘「えっ、何……？」

承一郎「…僕が見てこよう」スツ

僕は急いで立ち上がり、さっき竜が向かった台所に素早く向かう。

承一郎（波紋探知では竜ともう一つ反応があるがかなり小さい…虫型のスタンドか？）

バン！とドアを開いてみるとそこには腰を若干抜かした竜がいた。

承一郎「竜!何があつた!スタンド攻撃か!?!?」

竜「ぼ、坊っちゃん!あ、アイツです!現れやした!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承一郎「アイツ…?何を言ってるんだ?」

竜「アイツですぜ!チクショウ、突然出てきやがつた…!」

カサ…

カサカサ…

承一郎「ま…まさか…」

竜「そうですぜ…あれは…」

—— G^ゴですぜエエー…ツ!!?」

カサ…カサカサ…

や、野郎…隅に…しかも、台所でだと…!?!?

承一郎「緊急事態宣言発令だッ！急いでゴキ〇エツト持ってきやがれエエーッ
！」

G、それは人類の敵。某火星で突然変異する漫画では「じよう」とか言いあつという間に人間の首をもぎ取る筋肉モリモリモリマツチョマンの変態へと変貌する。まあそれはフィクションだが、問題はその生命力と繁殖力にある。そのしぶとさと増殖性で日本ではとても忌み嫌われており、病害・食害を引き起こす。

しかし外国では食用・薬用として使われている地域も多く、東アジアでは油揚げが一般的らしい。僕は食べたくない。

竜「坊っちゃん、スタンドで潰さないんですかい!?？」

承一郎「却下だ、潰れたら卵が撒き散るだろ！それに、スタンドでやると感触も伝わるんだよ！」

承太郎「どうした、承一郎！」

ジオルノ「承一郎、何が!?？」

承一郎「人類の敵ですよ！」

組員「坊っちゃん！アー〇でいいっすか!?？」

承一郎「あそこだ、発射しろオオーッ！」

シューッ！

カサカサカサ!

僕の指示で発射されたゴキジェット○はGには命中せず、

ブーーーーー!

羽音を立てながら飛行した!

組員「ギャー!来たーーーーッ!」

承一郎『ブラッディ・シャドウ』ツ!!?」

ジョニイのスタンドを借りGを付かず離れずのジェットの射程範囲の位置を留めようとするが、

ブーーーーー!

承一郎「なっ、なんだこの不規則な軌道変化はッ……!」

門のように構えた空間を避けるように飛んで回避した。ヤバイ、Gが廊下へ……!

承太郎『『スタープラチナ・ザ・ワールド』!」

ドオオオオoooooooooooo

ンツ!!?

世界が色を失いモノクロへと変わり、承太郎以外の全ての動きが停止する。

承太郎「やれやれ、悪いが少し借りるぜ」

承太郎は組員が持っていた○キジェットを持ち、Gに向かって発射しようとするが、ガキッ……!

承一郎「何ッ……！レバーを引けない……これでは発射出来ない……！」

そう、承太郎は今まで停止した時の中で『スタープラチナ』の拳以外の物を使った回数あまり少ない。あるとしても木を高速で擦って火を起こす、銃を投げた程度である。

故に彼は停止した時のルールを知らない。

この作品とは違う本史の世界オリジナル(と言える?)のDioは停止した時で銃の引き金を引こうとした時、引き金が動かなかった。それをDioは弾丸に撃鉄の代わりに衝撃を与えて銃に装填、動き出した瞬間に弾丸を撃ち出すという事をしていた。

止まった時の世界では物は動かしたり投げたりする事は可能だが、何かのアクションを起こして使う物はそれが動かず使用不可になるのだ。

承太郎はそれを経験した事がなく、だからこの5秒を無駄に消費してしまった。

ドオオオオー……zz

ンツ!!?

組員「あれっ?どうしてあつしの手からゴキジェットが消えたんですかい……?」

承太郎「……しまった」

……承太郎さんがゴキ○エツトを持っている事から承太郎さんが時を止めたのだろ
う。しかし、何も変わっていない?

承一郎「承太郎さんッ!何をやっているんですか!無敵の『スタープラチナ』でなん

とかして下さいよオオーーッ!

承太郎「まだ時を止めたばかりだ、また停止可能になるのはあと少し時間がかかる」
そうこうしている間にGは玄関に向かっている!ここでケリをつけなければツ!」

ガラガラッ!

徐倫「ハァーイ、承一郎と父さんいる?久しぶりに来たわよ〜」

なんと玄関には徐倫さんが扉を開けて姿を現した!

承一郎「なっ…?!?」

承太郎「徐倫ッ…!」

ジヨルノ「徐倫さん!」

徐倫「へ…?…?どういう状況…?」

ブーーーーー!

こ、このままではGが徐倫さんにツ!

承一郎「ま、マズイ!徐倫さん!」

徐倫「…なるほどね…『ストーン・フリー』ッ!」

ストーン・フリー
S F 『オラアッ!』

ゴシヤアッ!

向かってくるGをなんと徐倫さんは『ストーン・フリー』で叩き潰したのだ。

承一郎「……え？」

徐倫「こつちに来ていきなりゴキブリが飛んでくるなんて…ホント、やれやれだわ」

承一郎「……え？」

徐倫「あつ、そう言えば千棘ちゃん達いる？久しぶりに彼女達と話したいし」

……後で話を聞いたのだが、彼女は冤罪で監獄にいた間、なんと潰れたGを（スタン
ド能力のせいでもあったが）食べた事があるらしい。しかもホットドッグとセットで。

……タフだなあ〜。

千棘「あつ、承一郎。さっきの悲鳴、あれ結局何だったの？」

承一郎「…ああ、何でもなかったよ。あと…」

徐倫「あら、千棘ちゃんに小咲ちゃん、皆いるじゃあないの！」

小咲「徐倫さん！いつ日本に？」

徐倫「今日着いたばつかりよ！さ、今日は一緒に楽しみましょう！」

承一郎「……やれやれだぜ」

< || t o b e c o n t i n u e d ||

本城凜さんとのコラボ!!? Another Story

—転生者VS DIOの息子—

別世界に来たのに既に知ってる事が多い

僕が別の世界に飛ばされたのは突然の事だった。

いきなり知らない金髪カールロン毛男に

? 「どジャアアア~~~~ん」

とか言われて僕は国旗(多分アメリカの)を被せられた。

承一郎「うわっ! なっ! 何をするんだア~~~~ツ! ……つてえ…?」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド

僕が国旗を取ったら、僕がいた。

承一郎(?) 「えっ…?」

と次の瞬間、

? 「どジャアアア~~~~ん」バサア

また金髪カールロン毛の男が今度は目の前の僕を国旗を被せた。

承一郎? 「うわっ!!?」

男が国旗を取ったら、今度は僕じやあない僕が消えていた。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド

承一郎 「なっ…!!?」

? 「: Dirty deeds done dirt cheap」

男は今度は自分の体を国旗に被せた。

承一郎 「:消えた…」

調べてみると、なんだか男のらしい手紙があつた。

『拝啓、一条承一郎様

初めまして、承一郎君。私の名はフアニー・ヴァレンタイン、アメリカ合衆国の大統領だ。

いきなりの無札を詫びよう。君は今私のスタンダード『Dirty deeds done dirt cheap』の能力で並行世界（いわゆるパラレルワールド）に飛ばされたのだ。

ちなみに一つの世界に別世界の同じものが出会うと一つになって死んでしまうから

この世界の君を君が元いた世界に飛ばしたのだ。

ここまでしたのは君に頼みがあつての事だ。

プッチ神父、と言つたら分かるだろうか。我が合衆国の神父で、『天国に行く方法』を
実行しようとしている男なのだが、君にはある任務に就いて欲しい。

神父の邪魔をする者達を妨害して欲しい。再起不能程度にしてくれればいいが、最悪
殺害してくれ。

また、プッチ神父の望む『天国』とやらがどんなものか、調べて知らせたい。それが
我が合衆国になにかしらの害をもたらすものだのなら、神父を抹殺して欲しい。こつち
の方が最優先事項だ。

以上の任務を遂行することが出来たら君を元の世界へ返す事を保証しよう。

本作戦は『ステアウェイ・トウ・ヘブン作戦』と名付けられたもので極秘任務だ。く
れぐれも神父には悟られないようにしてくれたい。

本作戦での私の無線の周波数は140.85だ。何か分かつたら無線で連絡して欲
しい。では、幸運を祈る。

親愛なるヴァレンタインより』

承一郎（…案外別世界に来たのに随分と知ってるワードが出て来たな…。しかも過去の別世界とは…）

JOJO（だが、これでやるしかないって事は理解したぜ）

元いた世界に返らなければならぬ。なにより、また彼女達に会いたい。

そう思い、僕は無線の周波数を合わせると、連絡CALした。

ヴァレンタイン『…承一郎君、やってくれるかね？』

承一郎「…これより、『ステアウェイ・トウ・ヘブン作戦』を開始する」

そう言い、僕は空間を繋げた。

アメリカ、SPW本社前——

SPW本社ビルの前に止めたベンツに、黒いコートを着た僕は時代遅れのカウボーイの男と、一人の女子と一緒に乗っていた。ひどくシニールな図になっている。

絢斗「良いな？ 奴等がターゲットだ。子供の男の子を除いては、全員始末しても構わない」

神父の手下である彼女、綾瀬絢斗は億泰さんとミスタさんを見て言う。

ホル・ホース「良いぜえセニョール。奴等には貸しがあるからよお、お嬢ちゃん達を殺さなくちゃあなんねえのは心苦しいが、まあ、出来るだけ苦しめないように殺してや

るやい」

かつて父に^{D.I.O}仕えていた男、ホル・ホースはその飄々とした態度は昔と変わらず、脳天に傷を残してそう言う。全く面白い男だ。

承一郎「え？でもあの人はミスタさんと億泰さん……」

絢斗「彼等は君が知っている彼等ではない。彼等は世界の人々が平和に天国へ導かれる神父の計画を滅茶苦茶にしようとしているんだ。それに、あの少年は君の父、D I Oの魂が転生した存在。君は彼が^{D.I.O}どんな存在だったかは知っているだろう？」

『D I O』……その男がどんな存在かなんて僕自身が最も良く知っている。転生なんて『スタンド』という存在がある時点で特に驚かない。

だが D I Oの転生者なんてどーでもいい。転生してあのクズがまた世界征服なんてやろうとしているならすぐにジョースター家が生かしておくわけがないし、ジョースター家と行動を共にするわけがない。

転生はしたんだろう。魂の繋がりと**いうべき直感がそう告げる**。だが、八幡とかいう少年の精神力が強いようだ。

魂が3つ同居している存在。^{二重人格}僕達よりも魂が宿っている存在（まあ僕達は途中から魂が分かれたのだが）。興味深いと思うが、今は任務に集中しなければならぬ。

大統領には調べた事がある程度連絡していた。『時の無限の加速』による『世界のー

巡』。だがその能力を手にした者がどうなるかは分からない。記憶の中のDIOのノートにも書かれてなかった。

大統領は『もう少し探りを入れてくれ。プッチ本人がどうなるのかが分かったら君の今後の任務方針を改めて決めよう』と言っていた。

絢斗「安心しろよ承一郎。君は世界の為に英雄となり、世界を救うんだ。何の問題がある？安心しろ…君は白の中にいるんだ…そして君は英雄として、元の世界に帰れば良いんだ…」

何が英雄としてだ。彼女もプッチと同じくらい自分の行いを全て正しい事だと信じて疑わない『ドス黒い悪』だ。

彼女を見ていると、昔父に仕えていたヴァニラ・アイスという男を思い出す。

不死身の身体でもないのに自分の首をはねるような盲信的な男。彼女はあの男に似ている。

承一郎「……わかりました。やります」

実際のところ、殺すまでするつもりはない。負傷による再起不能程度がちようどいい。大統領の任務内容でもそんな事を言われていたし、彼女達にバレない程度に加減をしておく。

承一郎『『ブラッディ・シャドウ』。行け、『スカルズ』達』

スタンド、ブラッディ・シャドウの空間から、クリスタル・ボーンの骨で覆われて太陽を克服した屍生人部隊、『スカルズ』が五体現れる。

僕とホル・ホースはミスタさん達が移動したイタリアレストランの外にいた。

ホル・ホース「頼りにしてるぜえ、スカルズさん達よお」

スカル兵達「……………」

ホル・ホースの言葉に答えず、スカル兵達は素早い動きでレストランの壁に張り付き、合図を待つ。

承一郎「ホル・ホースさん。そろそろです、お願いします」

僕が空間を繋ぎ、合図を送る。

ホル・ホース「アイ！アイ！サー！」メギヤン!!?

ホル・ホースの手から彼の銃のスタンド、『皇帝』エンペラーが現れ、レストランに向かって発砲した。

ミスタ「チツ！あのカウボーイかぶれのオツサンよお、俺に銃撃戦を挑んでくるなんてよお、ちと頭がおかしいんじゃないやあねえのかあ？」

伏せて銃撃を避けたミスタさんは愛用のリボルバーを抜き、ホル・ホースに向けて発砲した。

ミスタ「行け、ピストルズ！」

No. 1「チクショー！飯のジャマシヤガツテ！ブチマケテヤル！脳ミソブチマケテヤル！」

昼食の時間を邪魔されて不機嫌なのか、すごく口が悪くなって襲いかかるが、ホル・ホースはそれを躲す。

ホル・ホース「おっと危ねえ。資料にあつた銃弾を曲げるスタンドかよ。付いてきなあ、マファイアの兄ちゃんよお、どっちが世界一の拳銃のスタンド使いか決めようぜえ？そっちのトツポイ兄ちゃんは別の奴が遊んでくれるぜえ？」

さすがホル・ホース。挑発行為をして二人を分断させる事をしたようだ。

ミスタ「上等じゃあねえかよお！時代遅れのカウボーイのオツサンよお！億泰、他のがいるみてえだから、そっちはよお、オメーに任せっからよお！」

ミスタさんはガラスを蹴破り、店から飛び出した。

拳銃のスタンド使い同士の戦い、見てみたいと思うが、僕にもやる事があるので、店から続いて出てきた億泰さんを迎え撃つ。

スカル兵「WRYYYYYYYY！」ドカツ！

力を抑えさせたスカル兵の攻撃。

男性1「うわあああ！何だあれはああ！」

男性2 「ハロウィンじゃあないのにコスプレ!?？」
男性3 「いや、あれは本物だあ！」
他の無関係の人間達が騒ぎ出すが、関係ない。
こうして、僕達とミスタさん達の戦闘が始まった。

<
|| t o b e c o n t i n u e d ||

『覚悟』 した者は美しい

ホル・ホース「チビっ子スタンドのパス遊びは終わりかあい？カモオン、ミスターくうん」

時代遅れのカウボーイ、ホル・ホースはミスタさんを廃ビルに誘い込んで撃ち合いを始めた。

やはり拳銃（のスタンド）使い同士の戦いは実に素晴らしいものだ。相手の弾丸を避け、撃つ。それだけが西部劇のような白熱した勝負だ。

と、弾丸がホル・ホースに当たりそうになるが、

承一郎「『ブラッディ・シャドウ！』」

空間を作り出して弾丸の軌道をずらす。

ホル・ホース「すまねえな、恩に着るぜ」

JOJO「集中してくれ。ミスタさんはスタンドを得る前からとてつもない銃の才能と集中力があつたらしい。それに俺はスカルズ兵達を操作するのに手一杯だ。二つの戦況を同時に扱うのは難しい」

ホル・ホース「分かつてるぜ」

J O J O 「今りロード中だ。肩を狙えるぞ」

俺が空間を撃いでミスタさんの状況を教える。

ホル・ホース「了解！」ダアン！

ホル・ホースの銃弾はミスタさんの肩に命中した。俺の指示があるとはいえさすがホル・ホース。見事な腕前だ。

ホル・ホース「おやおやおやあ？リロードが必要つてのはやつぱり不便でしょうがねえなあ？それに引き換え、俺のエンペラーは違う。俺のエンペラーは銃も弾丸もスタンドだ。分かるかなあ？ミスミスくうん？おや、以前にも今のパツシヨーネにいるポルナレフにポルポルクんと呼んでやった記憶があるぜえ」

ホル・ホースがミスタさんの前に立つ。あのバカ、お前のスタンドは中距離からの暗殺に向いているスタンドだろう。みすみす相手の前に立つか？

だが俺はスカル兵達の操作でそれどころではない。

ホル・ホース「ミスミスくうんか、良いねえその響き。兄ちゃんのトロクセエリロードのミスが弾丸を受ける原因なんだからなあ。そもそも、銃を相棒に選んだのも、ミスだったんじゃないかねえのかあ？日本じゃあ、失敗したつて言うのをmissつたつて言うじゃあねえの。兄ちゃんの名前、日本にちなんでミスタつて名前に変えちまつたらどうだ？お似合いだぜえ？ポルポルクんそっくりなミスタくうん？」

あのバカ、何調子に乗っているんだ。『相手が勝ち誇ったとき、そいつはすでに敗北している』、ジョセフ・ジョースターさんの言葉だ。戦いの年季によつてその言葉に納得せざるを得ない。全くその通りだ。

ホル・ホース「ほれカモオン、ミスツタくん？」

ミスタさんは確かに昔のポルナレフさんと似ているが、実は違う。表情や口調とは裏腹に、いつも冷静な人だ。

それをホル・ホースは知らない。ミスタさんが芯が強い人物だということを知らない。ホル・ホース「ほらよっ！ミスツタくん！頭に血が昇つて突っ込んで来るかと思つたが、どおやらそれ以前に怖気付いちまったようだなあ？トドメだ！」ダダダン!!?

ホル・ホースが弾丸を撃つが、ミスタさんはなんと弾丸を避けた。恐らく、ホル・ホースのあらゆる動きを読み、自分はホル・ホースだったら、というものを考えてその圧倒的な集中力で近距離からの弾丸を躲したのだろう。

逆にミスタさんは弾丸をホル・ホースの左肩、脇腹、右耳に命中させた。

ホル・ホースは見誤つてしまったのだ。グイード・ミスタという男の真の強さを。

ホル・ホース「イテエ！テメエ！ミスツタあ！」

ホル・ホースは逆上し、冷静さを失つてしまった。これでは勝てる勝負も勝てなくなつてしまう。ホル・ホースが弾丸を発射する。だが、

№. 1 「モラッタ！パアス！」

№. 2 ～ 7 「パスパスパアス！」

ピストルズの№. 1 ～ 7の6人(№. 4はいない)のうちの№. 1が蹴り上げ、他のピストルズ達でパス回しをする。

ホル・ホース 「な、何い！」

ミスタ 「さっきの俺の攻撃はよう！テメエの体を削るだけが目的じゃあ無かったんだぜえ！ピストルズを近寄らせるのが本命だったんだぜえ！そのクソツタレの汚ねえ銃に潜ませるためになあ！」

さすがミスタさんというべきか、近距離から確実に倒す為にピストルズを近づけさせる伏線として銃弾を放ったのか。素晴らしい冷静さだ。

ミスタ 「テメエは銃も弾丸もスタンドである事を自慢してたみてえだがよう！テメエのスタンドにはこんな使い道はねえよなあ！自分の弾丸でよう！脳天ぶちまけちまえよなあ！」

ピストルズの連携でホル・ホースの脳天に弾丸が当たりそうになるが、俺はスカル兵の一体をホル・ホースの前に滑り込ませ、弾丸を庇うように操作する。

頭の骨で作り出したヘルメットが碎け散るが、まあ良しとしよう。

ホル・ホース 「助かったぜえ、ボーイ。それじゃあ、ここは一旦引かせてもらうぜえ。

あばよっ！ミスツタくん？俺の耳の借りは必ず返してやるから、覚悟しておくんだなあ！」

ホル・ホースは覚悟の真の意味を理解していないようだ。覚悟を重んじるパツシヨ―ネにその言葉を言ってしまう。

ミスタ「とりあえず、この脳天に銃弾を受けても死なねえコイツから始末しねえとなあ」

ミスタさんは銃を構えるが、俺はスカル兵を素早く弾道から外すと、ミスタさんを殴る。

ミスタ「ぐわあ！はええ！つええ！何だコイツはよお！」

ミスタさんはガラスをぶち破り、外に吹っ飛ばしてしまった。加減はしてあるのだが、かなりのパワーであるのは確かなのだからしょうがないのだが。

スカル兵「WRYYYYYYYY！」

スカル兵はミスタさんを追ってビルから出てきたが、ヘルメットを失ったスカル兵は太陽の光で灰になって消えてしまった。

ミスタ「助かったのか？むき出しの部分に太陽を浴びせれば、何とか倒せるようだがよう」

ホル・ホースを追わせないように別のスカル兵を差し向ける。

スカル兵「WRYYYYYYYY！」

ミスタ「マジかよ！何体いるんだよお！こいつはよお！」

ミスタさんはホル・ホースを追う事を断念したようだ。

ホル・ホースがミスタさんを相手にしてる間、俺はスカル兵達を操作して億泰さんに襲いかからせていた。

億泰さんはスカル兵達を相手に3体も倒した。さすがは殺人鬼を相手に戦ったスタンド使いといったところだろう。

一体目はザ・ハンドの能力で削り取り、二、三体目は攻撃を当て、骨の鎧を剥がして太陽の光で消滅してしまった。

男性「う、うわあああ！」

間髪入れずに攻撃を仕掛けようとした新たなスカル兵の進路方向に一般市民が腰を抜かしてしまっていた。

やってしまった、と思い、すぐさま進路方向を変えさせようとしていると、

億泰「もうウダウダ考えるのはやめだ！こっちに來い！」ガオオン!!？

俺は驚いた。ザ・ハンドの能力で空間を削り取り、スカル兵を億泰さん自身の方に引き寄せたのだから。

そのままスカル兵は億泰に嘯み付いた。

億泰「がああああ！」

ミスタ「億泰！バカ野郎、自分を犠牲にしやがったな！」ダアン！

丁度他のスカル兵から逃げてきたミスタさんがスカル兵の鎧を銃弾で剥がし、太陽の光で消滅させる。

億泰「俺は馬鹿だからよお！その人を助けるにはよお、こうするしか思い付かなくてよお！」

ミスタ「覚悟とは自分を犠牲にする事じゃあねえんだよ！それが分かってんのか億泰う！」

億泰「分からねえよ！けどよお、バカな俺にだって、曲げちゃあならねえ事はあるんだよお！」

かなりの負傷をしているはずなのに痛みを堪えて、叫ぶ。

億泰「俺達が戦いで負けて結果的に死んじまうのは仕方がねえ！そんな覚悟をもつて戦ってるんだからよお！けど、何にも知らねえ奴らが戦いに巻き込まれて俺の目の前でやられるくらいなら、俺は自分がどうなろうと身を差し出してやるぜ！それが俺の覚悟だ！文句あつかコラア！」

これほどの覚悟。気高く、力強いその精神。やはりこの世界でも、億泰さん達は変わ

らない『黄金の精神』を持っている。

億泰「テメエらが無関係な奴等を平気で巻き込むつうならよお！このオトコ虹村億泰がよお、いくらでも防いでやるぜえ！ドンドン来やがれゴラア！」

見事な覚悟だ。『覚悟』した者は美しい——父の言葉だが、まさにその通りだと思う。誇り高い覚悟は、何よりも美しいし、尊敬すべきものだ。

億泰「な、何だあ？」

だから、俺はスカルズ達を退がらせた。彼の『覚悟』に敬意を払って。

ミスタ「オメエの魂の叫びが、あの骨ゾンビどもの親玉に届いたんじゃあねえのか？だとしたら、オメエの信念の勝ちつて奴だ。もう良い歳こいて青臭くて見てらんねえがよ」

ミスタさんが億泰さんの肩を担ぐ。

ミスタ「青クセエがよお、俺はああいうのはキレーじゃあねえんだぜ？いい覚悟を見せて貰ったぜえ、億泰」

全くその通りだ。実に見事な覚悟だった。

だが、水を差す者が一人。

ホル・ホース「感動だねえ、じゃあその曲げちゃあならねえ信念つてヤツを見せてもらおうかねえ」

さっきのホル・ホースだ。彼はさつき億泰さんが助けた男の両足を撃ち抜き、そして頭に銃口を向けて立っていた。

ホル・ホース「チツ！あのクソガキ、ほだされやがったか？でもよお、これで俺の分け前は上がったぜえ。チエックメイトだお二人さん。ここで何もしなけりやあ、オメエ達に死んでもらうが、この男は助けてやるよ」

……堕ちたな。堕ちてはいけなところまで。そう思った俺はブラッディ・シャドウの空間からスカル兵達を出した。

スカル兵（JO）「……『覚悟』した者は美しい……だが、あんたは堕ちてしまったようだな。堕ちてはいけなところまで。残念だよ、ホル・ホース」

俺はスカル兵を操り俺の声で奴に話しかける。そして、億泰さん達に向けて言う。

スカル兵（JO）「済まない、お二人さん。俺は一般人を巻き込むつもりはなかったんだが……俺のミスだ。申し訳ない。その誇り高き覚悟に敬意を払う」

俺はスカル兵でホル・ホースの腕を捻り上げ、他のスカル兵達に男性を俺の空間に入らせた。

ミスタ「どうやらよお、テメエは仲間に見捨てられたらしいなあ。かつて俺の仲間が言っていた事だけだよお、下衆に成り下がったヤツつてのはよお、何をやってもしくじるらしいぜ？」

ミスタさんはリボルバーを構える。

ミスタ「あばよ下衆野郎。最後に今は亡くなってしまったよお、その仲間の代わりに俺がテメエに言つてやるぜ

アリアリアリアリアリアリ!

ミスタさんはホル・ホースに弾丸をひたすら叩き込む。

ミスタ「アリーヴ^さエデル^{よな}チ^だ」

こと切れたホル・ホースに、さよならの言葉を言った。

絢斗「何故、屍生人を消した? 何故、ホル・ホースを裏切った?」

空間の中で男性の体を治療し、解放した俺に絢斗はそう言った。

一応、妨害は成功した。これなら大統領も満足するだろう。だが、まだ妨害は続くの
だろう。

J O J O 「∴『覚悟』した者は美しい∴。俺は、彼等の覚悟に敬意を払っただけだ」
飄々とした態度で俺は言った。

絢斗「次はないぞ？ 一条承一郎」

J O J O 「分かった分かった、あんたが大将だ。好きにしな。やれやれだ」

ホル・ホース『皇帝』、死亡、再起不能

< || t o b e c o n t i n u e d ||

盗聴してるとき、たまに変なものを聴いてしまう

ニュージャージー州のはずれ——

95号のストリート沿いにある、ニュージャージー州のはずれに路駐しているトレラー。

そこに俺と彼女、絢斗はシートを倒していた。

彼女曰く、ニューヨークからフロリダまでの最短の道だから、奴等は明日この道を必ず使おうらしい。

俺は先程読み終わった『バオー来訪者』を頭に被って、耳にイヤホンを付けてデヴィッド・ボウイの『^{The}Man Who Sold ^{the}World』を聴いていた。

『Oh no, not me I never lost control
You, re face to face with the man who
sold the world……ガガッ』

だが、急に音が変わる。どうやらスカルズ兵達が億泰さんに襲いかかった時に服につけた盗聴器が作動したようだ。

億泰『ああ！ジヨルノ！もつとやさしく！そこはダメ！ダメ！ダメッ！ああ！やさし

くしてやさしく！服を脱がせないでツ！感じる！うあああダメ！もうダメくくツ！』
：便所の鼠がゲロ吐きそうなものを聴いてしまった……。すごく不快な気分になるが、一応盗聴を続ける。

ジョルノ『ダメです。自分の命を軽んじた罰です。今日現れた敵が、あなたの叫びに何の心も感じない人間だった

ら、どうするつもりだったんです？ミスタがいなかったら？護衛のあなたが逆に護衛対象に助けられるってどういうつもりですか？どちらかと言えば友達同士で旅しているようなものですが、これは一応は仕事ですよ？仕事舐めてます？もしもこんな失態が続くようならば……あなたはここにおいて行く。つまりクビですよ』

どうやらジョルノ兄さんが体罰まがいの事をやっているようだ。治療と称して。おお怖い。

億泰『分かった！悪かったから仗助と代わってくれえ！痛くて耐えられねえんだよお！』

仗助『ここまでジョルノにいじられてるんじやあよ、俺は却って手をつけねえ方が良
いんじやあねえの？オメエにも良い薬になると思うしよ』

まあ、負傷を負わせた俺が言うのもなんだが、確かに無茶なことをしたと思う。だが、誇り高い『覚悟』があつたのは素晴らしかった。

八幡『今回、現れたのは概略は屍生人だと思う』

俺の二人の父の魂が転生した少年、比企ヶ谷八幡がそう言う。さすが吸血鬼の魂が転生した少年といったところか。

小町『屍生人？ジョージを殺した奴だよな？じゃあ吸血鬼が絡んでること？陽乃さんの肉の芽の事もあるし』

八幡少年の妹、小町が言った。そういえばエリザベス・ジョースター（リサリサ）の転生者か。

まあ確かにジョージ・ジョースターを殺したのはあのクズが作り出した屍生人の一人だったな…。

八幡『それが何とも言えねーんだ。ただ、敵の親玉が本気じゃあ無かったのが気になる』

さすがに気付かれたか。まあ仕方がない事だ。屍生人達を作り出した本人が転生した少年だ。バレてもしょうがない。

八幡『屍生人は屍生人を作る。ディオとジョナサンの戦いの時、ディオは村を一つ丸々屍生人に変えているんだ。鼠算式に増やしまくってな。けど、今回は二人を襲ってくるだけで何も無かったのがな…』

そう、俺のスカル兵達は普通の屍生人とは違って俺の思いのままに操作が可能なの

だ。骨を覆っているのはただの太陽光への防御策だけではなく、俺がスカル兵達を操る為のコントローラーの役割を兼ねているのだ。

それに、本来なら骨のプロテクターもあんな強度ではない。骨の密度と硬度を操る事によって、近距離パワー型で思い切り殴ってもヒビが入る程度なのだ。

八幡『敵が本気だったら今頃ニューヨークはゴーストタウンだ。囃まれたハズの億泰さんが屍生人化していないのも気になるしな。もし、敵が本気だったら今頃は億泰さんは…』

億泰『…ゴクリ…どうなるんだよ…気になるじゃんかよ』

八幡『その場で屍生人になって太陽の光で灰になってただけですよ。太陽から身を守る術が無くて。つまり、そんなくらい今日の億泰さんがやった事ってのは立派でしたが危なかったんですよ。言っておきますが、これは脅しでも何でもありません。純然とした事実です』

多分億泰さんはガタガタ震えているんだろうなと考えた。あのガタイで。フフ…面白…。プツ…。

いろは『でもハチ君。屍生人は最後は億泰さん達を助けてくれたんですよね？味方ではないんですか？』

八幡少年の幼馴染、一色いろはが言う。エリナ・ペンドルトン…いや、エリナ・ジョー

スターの転生者。

花京院典明さん…あのクズによって殺された青年の親族…なんだかやり切れないものがある。

八幡『だったら、ここまで億泰さんをボコねーよ。例え仲間同士でも、美学に反すれば見捨てる…なんてのはアニメとかでよくある話じゃね?』

八幡『ましてや、俺達みたいに強い絆で結ばれている仲間同士ならともかく、ただの利害一致だけの仲間同士ならば価値観の違いとかで案外敵味方なんてあつさりひっくり返るまである』

静『ハッチ…顔が真つ赤ですよ? 恥ずかしいのなら言わなければ良かったのに…』

相当恥ずかしかったようだ。俺だったらあんな台詞言ったら絶対悶え転がること間違いなしだ。

八幡『俺の結論として、現段階ではいきなり現れたり消えたりする、骨のプロテクターの中身が太陽の光を浴びると灰になる、屍生人の特徴をもったゾンビの敵が現れた。判ってるのはこれだけだな。屍生人の親玉の美学をホル・ホースが冒したから見限られただけなのか、何かプッチ一味とは別に俺たちを攻撃する目的があるのか、それとも単純にゲーム感覚で俺達を舐めきっていたぶっただけか…』

いや、あまりゲーム感覚でやってられない。骨の強度などは確かに弱めているが、ス

俺はイヤホンを片方だけ外して、漫画を取った。

絢斗の手の平にのつている4本足のクモみたいなものを見て、嫌悪感を覚える。

『肉の芽』：吸血鬼D I Oの細胞から作り出されたもので、人間の脳に打ち込み、相手に『カリスマ』を感じさせて人を操るものだ。吸血による屍生人化とは違い、理性や知性を残したまま下僕に出来る。

しかし、脳や精神に負担をかけてしまう事になり、スタンドパワーが落ちるという欠点がある代物だ。

しかも、肉の芽はやがて寄生対象の脳を食い尽くされて死んでしまう。

J O J O 「俺なら完全にぶっ潰すことは出来るが、良いのか？」

絢斗「ターゲットのガキまで殺してしまつてどうする？我々の使命はあのD I O様の生まれ変わりとかたわ言をぬかす、比企ヶ谷八幡を生きて捕らえる事だ。殺すのは有象無象のジョースターだ。分かったか？このド畜生が」

J O J O 「いいだろう、アンタに従おう。だが、肉の芽は俺も作れるが、わざわざ貴重なそつちを使うのか？」

俺はそう言って髪の毛を変化させて肉の芽を作り出す。

肉の芽だが、無害なダミー。こつちを使えば、死ぬ事はないが妨害は可能だ。

絢斗「貴様のは使わん。貴様は信用できん。どうしてもと言うのなら、貴様にこの肉

の芽を使つてからだ」

JOJO「ならいい。そんな物つけるぐらいなら頭に弾丸ブチ込まれる方がマシだ。それだけやれば、後はゆっくりして良いんだな？」

絢斗「ああ、それだけで良い。後は寝ている」

JOJO「いいだろう。後は寝かせて貰うぞ。俺自身はな」

俺はまた漫画を頭に被つた。

JOJO「しかし、そんな綺麗な見た目に反して、アンタには美学というのがないな？ DIOって奴は美学は一級品だと聞くが、部下だったとかいうアンタのやり方はとても醜い」

言いたい事を言つて、外していたイヤホンを付け直し、また八幡達の盗聴を再開した。絢斗「ふん、自分の方がDIO様を理解しているとでも言いたげだな。どこまでも生意気な」

JOJO「……………」

理解したくもない。あの吐き気を催すようなクズの事なんて、記憶を持っているが、理解しようと思つた事すらない。

俺は自分で作つた肉の芽を、空間の中に入れた。

ジヨルノ『ところで仗助さん。車の方の手配は?』

仗助『手配はできているぜ。ただよう…』

陽乃『ただ?どうしたの?』

仗助『借りたのがこれなんだわ…』

静『こ、これって…』

ミスタ『マイクロバスウ? たった9人でか?』

仗助『ああ…10人用くらいの頑丈なミニバンかキャンピングカーで良いって言ったんだがな…経費の無駄だし、最悪敵の攻撃とかでスクラップになるから…』

小町『うわあ…しかもただのマイクロバスじゃあなくてレジャー用の、カラオケやら冷蔵庫やら色々な機能がついてるほとんどキャンピングカーみたいじゃん…今回の旅では無駄だよねえ』

仗助『たまあにSPWのジョースター優遇主義ってついていけなくなるんだよな。速度と強度の実利優先でいきたかったのによお』

静『あー…これ知ってます…パパが八幡とかジヨルノさんとかがアメリカに遊びに来たとき、みんなでドライブするんだとか言ってるオーダーメイドしようとしてたやつです…。ホントに作っていたとは思っていませんでした』

仗助『…この一件が終わったらよお、ニューヨーク本部の車両班と整備班と総務部には菓子折でも持って一家総出で謝りに行かないと不義理かね?』

八幡『だな』

仗助『他人事の顔してるけどよ、オメエはもうジョースターの一員扱いだからな?』

八幡『え? いつの間に? 聞いてないんだけど』

静『え? 今さらですか?』

J O J O 「フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!?!」
 ↓本日2回目の究極生命体風の笑い

絢斗「うるさいぞ!!?!」

ロードローラーをOVA版でタンクローリーに変える必要があったのか？

J O J O 「じゃあ、後は頼むぞ、ステイリー編入・ダン」

俺はそう言つて、肉の芽をダンに渡す。

ダン「承知しました、承一郎様」

J O J O 「様をつける必要はない。俺が彼等をバスから出させたら、誰かに『恋人ラバース』を忍び込ませろ。出来れば回復出来る奴等が良い。自分を治せない仗助さんとかな」

ダン「分かりました」

かつてD I O に仕えていた男、ステイリー・ダンはそう言つて移動した。

ダンのスタンド、『恋人』は、確かにパワーはないが暗殺に向いているスタンドだ。最弱かどうか言い難い能力だ。

承太郎さん曰く『正真正銘の史上最底な男』であるステイリー・ダンは確か怒りのオラオララツシュにより全身骨折で再起不能になったように覚えていたが、どうやら完治したらしい。

そこで、盗聴器がまた作動した。

ジオルノ『オーダーメイドの特製マイクロバスにしては地味ですね?』

仗助『昨日の段階で急遽、塗装して貰ったんだよ。ジヨースターマーク入りやらジジイ好みの派手なイラスト入りのマイクロバスなんてものに乗っていたら、敵に狙ってくれと言っているようなものだけ。外装だけでも目立たない、どこにでもある物にしておかねえと危なくって仕方がねえよ』

成る程、彼等は車に塗装を施したようだ。

ジオルノ『八幡、君は魂の惹かれ合いとかに理解があるか?』

八幡『……お前は感じているのか?ジオルノ』

ジオルノ『ついこの間から……』

八幡『何となくだがわかる。近くにおいて、俺達を見ている……仗助はわからないみたいだが、確実にいると確信できる。突然現れた一つも含めて』

ジオルノ『僕と君が惹かれあっている相手はやはりD I Oの……』

八幡『多分……な』

やはり、といったところか。気付いている。八幡少年とジオルノ兄さんはこの世界に
来た俺の存在に気付いている。

まあジヨースターの血統は特別な肉体の波長で繋がっているからしょうがないのだ
が。

盗聴して調べたところ、八幡少年はマイクロバスの助手席に、運転はミスタさんがするらしい。

絢斗「おい、クソガキ。もうじき奴等の車が通るぞ、準備は良いのか？」

J O J O「静かにしてくれ。タイミングを図っているんだ。一般の車両には被害を与えるわけにはいかないからな」

絢斗「ふん、優しいことだな。天国が発動すれば、今の世の被害など、関係なくなるというのに」

J O J O「俺はアンタみたいに関係ない人間を巻き込むようなサイコパスじゃあないんでね」

それに、俺にも美学とは言えないが、曲げてはならない信念はある。

一般人を巻き込むなんて論外だ。

J O J O「今だな」

俺はそう言つて重機ごと空間の中に入った。

僕はデラウェアアメモリアルブリッジの上から重機をマイクロバスに落とす。

八幡「げっ！」

八幡少年は気付いたみたいだが、このまま重機を落とす。その重機の名前は……、承一郎「ロードローラーだ!!？」

敢えて僕はあの決戦の時の台詞を言う。

八幡「ザ・ジエムストーン！止まれ時よ！」

いきなりの襲撃に驚いた八幡少年は、スタンドを出した。

次の瞬間、ロードローラーが凹んだ。どうやら、八幡少年が時を止めてロードローラーにラツシユを叩き込んだようだ。

この凹み具合からして、どうやら5秒以上は時を止められるようだ。厄介だ。

ロードローラーはマイクロボスの後部の四分の一をぶっ潰した。しかし誰もいない後部へ押し退けたようだ。

八幡「脱出しろ！爆発するぞ！」

八幡少年はそう叫んだ。どうやらロードローラーが落下した衝撃で橋から落ちてしまったようだ。

僕も橋から飛び降りる。

八幡少年と目が合う。

どこか僕と似ている少年。死んだ魚のような目をしているものの、瞳の奥に映った力強さが、普通の少年とは違うと物語っていた。

僕は無意識に笑みを浮かべていた。

J O J O がいつのまにか入れ替わっていた。どうやら、比企谷八幡という少年に何か思うところがあるようだ。

俺の父、記憶の中でしか見た事がない人。その転生者の顔を、見たくなったのだ。

そして、このドサクサに紛れて仗助さんの耳からダンのスタンド、『恋人』が入り込んだのを確認すると、俺はブラッディ・シャドウの空間の中に入った。

ダンをはたして敵の前に立つ必要があるのか？

俺は空間の中から出ると、絢斗の前に立った。

絢斗「随分荒っぽい足止めだったな。まさかロードローラーを落とすとは思わなかった」

J O J O 「ここで彼の力を見ておきたかったからな。それに、せっかくロードローラーがあったんだ。一度くらいはやってみたかったんだよ。タンクローラーでも良かったが、やはりあれはロードローラーだからこそ燃えるんだよな」

絢斗「そんなもの、どちらでも良い。むしろ燃えるのはタンクローラーの方が燃えるだろう。爆発が早まって他のジョースター共が始末出来て良かったのではないのか？」

J O J O 「あの時はたまたまあいつが外に出たから一人だけ投げ出されてしまっただけで、あの段階じゃあ、この結果は分からないだろう？それに、ロマンって物があるだろうが」

まあ、任務にロマンもマカロンもないと思うが。たまたまあったから使っただけだ。

J O J O 「じゃあ、『俺は』もう寝るぜ。精々頑張れよ」

俺は昨夜のように漫画を頭に被せて、盗聴器（実は防水機能付き）を作動させ、空間

を繋いで彼等を見ていた。

八幡達波紋使い達は波紋を使って水の上に着水、そのまま立ち上がった。

仗助さん達波紋使いではない人達はプカプカと浮かんでいるのだが…、

陽乃『ガバゲボ…だ、誰か…ガボツ！助けて！私は泳げるけど…アツプアツプ…川だけは…ブハツ！川だけは前世のトラウマで…ブクブク…』

茅ヶ崎陽乃、といったか。タロットカードの起源、エジプト八栄神であるアヌビス神の転生者。

どうやら前世のトラウマ（川の底で錆びて死んでしまった事）で、川だけ泳げないようだ。妙なカナヅチだ。

確かあれはイギーが足にぶつかってきてコントロールを失って川に落ちてしまったような…。なんだか、強いのに可哀想な奴だ。

アツプアツプなんて、漫画やアニメでしか見たことがない。お前はいつから某悪魔の実を食べたゴム人間になった？

静『パウツ！』ドズツ！

静さんが陽乃を引っ張り上げ、横隔膜に小指を突っ込む。あれはすごく痛い。

陽乃『かはっ！』

静『そのまま肺の中の空気を全て吐き出しきって下さい』

その後、波紋使い達は仗助さん達を運んだ（お姫様抱っこしたり引きずったり）。比企谷兄妹の波紋はかなり強いらしい。さすがは前世が波紋使いなだけある。

対岸まで走った（比喻ではなく文字通り）八幡少年達はすこし皆の息が整うまで待っていた。

八幡『あつちやあ…向こうはえらい騒ぎになつてるなあ』

小町『テレビ局のへりまで出てるよ？あれじゃあ、バスをクレイジー・ダイヤモンドで直しに行つて再利用するなんて出来ないよね？』

八幡『まったくだ。ホントにどう責任取つてくれるんだ？あれはあれで我が社やジョースター家の財産なんだが？ついでに荷物やらも潰れたし』

小町『この責任、納得の行く説明を聞かせてくれるんだよね？そのオジサン』

二人は、そこに待機していたステイリー・ダンに厳しい目付きを向けた。

ダン『な、何をいきなり！俺は近くでケバブ屋の屋台を営んでいる親父だぞ！何か騒ぎになっているから見にきただけだ！言いがかりは止してくれ！』

俺でも白々しいと思つてしまう。エンヤ婆を始末しに行つた時の演技力はどこに行つたのやら。

そういえば何でダンは敵の前に出るのだろうか？射程距離がとても長いのだから遠

くから相手が死ぬのを待てば良いのに。

八幡『ジョルノ！そいつを殴れ！死なない程度に！吹っ飛ぶくらい！それ以外の奴は走る準備だ！ジョースター家の伝統を使うぞ！』

八幡少年はどうやら気付いたみたいだ。

ジョルノ兄さんのゴールド・エクスペリエンスがダンを殴り飛ばす。

バギイ！

ダン『ゲブツ！』

仗助『うおわっ！』

ダンを殴り飛ばすと、仗助さんも同じ体勢で吹っ飛んだ。

陽乃『こいつは『恋人』の暗示のスタンド使い、ステイリー・ダン！ミクロのサイズしかないスタンドで誰かの脳に入り込み、自分が受けたダメージを取り付いた相手にはね返す能力！こいつが自殺とかなしたら仗助が死ぬわ！』

八幡『ヤツパリ！全員手を出すな！何人かは監視の為に残れ！』

やはり、父の転生者。すぐさまダンと気付いて、作戦を考えている。

ダン『その通りだ。バレていたみたいだな。どうせなら女の子全員と今、俺を殴った兄ちゃんを希望するぜ』

ダン…お前…ロリコンだったのか…。

いや、しょうがないのは分かっている。八幡一行は精神年齢的には高いが、体は小学生くらいだからな…。

だが、その発言はアウトだろう……。

八幡『ちつ！行くぞ！ジョースター家奥義！』

八幡少年はスタンド——ザ・ジエムストーンというらしい——で億泰さんとミスタさんを掴み、仗助さんと領き合つて…、

八幡・仗助『逃げるんだよオオオ！』

億泰・ミスタ『うわああああ！また運ばれるのかよオオオオオオオ！』
クルツと踵を返し、一目散に逃げた。何か考えがあるのだろうか。

ダン『さて、金髪兄ちゃんには人間梯子にでもなつてもらうかな？女の子達はコンパクトオオみたいにもてなしてもらおうか？』

場に残つたジョルノ兄さん、いろは、小町、陽乃にそう言うダン。

ん？そういうえば静さんの姿が見えない。どうやら透明になつて仗助さん達に着いて行つたのか。

八幡少年達は住宅地の陰まで逃げ込んだ。

八幡『よし、ここまで来たのならとりあえずラバーズをどうにかしよう。ハーミット

アメジスト』

八幡少年はもう一つのスタンド——ハーミットアメジストというらしい——を出した。

億泰『おい八幡。今回はザ・ジエムストーンじゃあ…』

八幡『黙れ！億泰！』

億泰『あ？』

八幡『どうやら何らかの方法で誰かに見られてる。俺とジョルノしか気づいていないみたいだが、どうやらディオの息子の誰かがそういう能力の持ち主なんだろう。スタンド使いが肉親の縁で感覚的に通じるアレだ』

八幡『どうも嫌な視線をさつきから感じているんだよ。盗聴もされているかもな。だから俺達の能力に関わる事は一切口にするな！これは絶対に守らないと命に関わるぞ！』

素晴らしい。すぐに俺のスタンドの性質を見抜いて、対策を練っている。

八幡少年は水ポチャで壊れたiPadを取り出した。

八幡『仗助。これを直してくれ』

仗助『ああ』

八幡少年は仗助にiPadを直してもらい、電源を入れ、ビデオ撮影モードにした。

それに茨のようなハーミットアメジストを繋げる。

すると iPad に気持ち悪い映像：恐らく仗助さんの脳内の映像が浮かぶ。

八幡『これは仗助の脳幹の中だな：厄介な：肉の芽まで栽培されてやがる。波紋使いのスタンドが中に入るしかないが：小さくなって行けるか？ジョジョ』

ここで静さんが姿を現した。

静『ええ。行けます』

仗助『待てよ。俺の頭の中の話だ。俺のクレイジー・ダイヤモンドも行くぜ！大事な妹だけを危険に晒すなんて出来るか』

静さんのスタンド——この世界だとアクトンクリスタルというらしい——と仗助さんのクレイジー・ダイヤモンドは小さくなって仗助さんの脳内に侵入した。

八幡『映像とナビゲートは iPad で伝える。もしかしたらあの屍生人が現れる可能性があるが、俺達三人はそれぞれの役目で手が一杯だ。ミスタさんと億泰さんは無防備な俺達の護衛をお願いします！』

億泰『またこいつとコンビかよ』

ミスタ『それはこっちのセリフだオソマツ！』

そう言いながら億泰さん達はそれぞれスタンドを出して間に仗助さん達を挟んで背中合わせに立つ。

仗助『行くぜジヨジヨ！待ってろよラバーズ！テメエは完璧にこの俺達…』

静『仗助、静のジヨースター兄妹を敵に回してしまったようですね！』

ジヨースター兄妹は、仗助さんの脳内の中にいるラバーズに向かって宣言した。

光の速さってマジでチート

俺は八幡少年が持っているiPadを肩越しに見ている億泰さんとミスタさんの影から見ていた。

多分八幡少年には気付かれていると思うが、どーだっがいい。

アクトンクリスタルとクレイジー・ダイヤモンドは血管の中に入っていった。血管はアクトンクリスタルの波紋カッターで穴を開けて入った。

仗助『うげえ…痛くねえけど自分の血管を傷つけられるのは気分がワリイ…』

静『後でイーハに治して貰うから我慢して下さい』

イーハというのはいろはの事だろう。それよりもなんだか目が血走っている。どうやらこの世界の静さんはブラコンのヤンデレか？ゾツとするな。

仗助『ジョジョ？おいジョジョ！？どうした？目が血走ってるぞ！？』

八幡『あゝ…ダメだこりや…ありや見えてねえよ、ジョジョの一番触れちゃあいけない部分に触れたな…』

仗助『どういうことだ？』

八幡『髪型をバカにされた時のお前にとつくりだつて話をしてるんだよ。ジョジョにとつてのお前は、お前にとつての頭と同じつて事だ』

仗助『わかるような…わからねえような…』

八幡『ああそう！そりゃあ悪かつたな鈍感ラブコメ主人公！ほら、そろそろ脳幹に着くぞ！』

ところ変わつて兄さん達に戻る。

人間椅子にされ、四つん這いのジョルノ兄さんの上にステイリー・ダンは座つていた。

ダンはいろはや小町を横に侍らせ、上機嫌に陽乃に淹れさせたコーヒーを飲んでいった。

ダン『実に気分が良いなあジョルノ・ジョバーナ。いや、DIO様の息子。それとも、汐華初流乃と呼ぶべきかな？』

ジョルノ『よく僕の本名を知っていたね？戸籍も何も既に無くなつていて、その名前は忘れ去られていたはずなのに。そして既に捨てた名前なのに』

ダン『テメエ、イスが何を口を利いているんだ？』

ダンは兄さんの髪を掴んで引つ張る。

さつきから子供じみた嫌がらせをしているし、いろはや小町、陽乃にもベタベタ触っている。

やはり…ロリコンだったのか…。

良く見ると、兄さんが石をインコに変えている。どうやらやられた事を覚えさせているようだ。

またところ変わって仗助さんの脳内の方へ。

八幡少年の iPad に写っていたのは、仗助さんの脳幹で仗助さんの脳細胞や肉の芽を使って分身を作っている恋人だった。

恋人『マアギイイイ！』

アクトンクリスタル

A C 『兄さん！同調させるよ！』

クレイジー・ダイヤモンド

C D 『お、おう』

A C 『波紋！コオオオオ！』

静さんは仗助さんと波紋を同調させ、恋人の分身達にラッシュを叩き込む。

C D 『ドララララララ！』ドコドコドコオ！

A C 『怒ララララララ！』ドコドコドコオ！

ラッシュを叩き込まれた分身達は次々と消えていった。

ん？何故か文字が変わっているような…。

恋人『マアギイイ！なんだコイツら！手に負えねえ！』

AC『あなたの戦い方は承太郎おじさまの資料で既に拝見しています。ジョースターを相手に同じ戦法で、同じ仕掛けで挑む：それは無策で挑むも同じ事を意味します』
そう言つて分身に必要な細胞を煙にする。これでは分身を作り出せない。

AC『やはりあなたは東方仗助の頭に居座る『恋人』にふさわしくはありません。何故なら、あなたは我が家訓にそぐわなすぎる』

静さんのスタンドはそう言つて分身と肉の芽を次々と煙に変える。

AC『1つ！ジョースター家に二度同じ手を仕掛ける事、すなわちそれは既に凡策！同じ手にかかる者、すなわちその者は愚者と思え！

1つ！作戦上逃げる事はあつても戦いそのものからは決して逃げるな！

1つ！キチツと死んで地獄に行くクズには、しつかり地獄の穴へ背中を押しやるべし！

1つ！相手が勝ち誇つた時、そいつは既に敗北している！確実にとどめを刺してから勝ち誇れ！

1つ！相手の1つ上を行っているとと思うな！自分の全てをやぶられた上でも、更に相手の1つ上を行くつもりで頭を使え！

あなたはジョースター家に二度同じ手を仕掛けた愚者であり、まだ勝っていないのに勝ち誇り、キチツと地獄の穴に背中を押すべき下衆！こんな外道に、私達ジョースターが：弱さを知り、それすらも強さに変え、常に相手の1つ上を行くように頭を使ったジョセフ・ジョースターの弟子達が負ける道理はありません！ドラルララララ！ドラー！』ドコドコドコオ！

静さんのスタンドは恋人本体と肉の芽に波紋を流し込み、肉の芽を消滅させる。劣勢を悟った恋人は慌てて逃げる。

CD 『俺の出番がなかった』

AC 『いえ、これからですよ兄さん。出てきなさい！屍生人とやら！』

そろそろ頃合いだなと思つた俺はスカル兵達を空間から出した。

スカル兵達がミクロサイズにまで出来るんだなと自分に關心した。スカル兵達は既に元々の強度のプロテクターを身に纏っていた。

AC 『兄さん。本当の戦いはここからです』

CD 『おうよ！ドラルララララ！』ドコドコドコオ！

スカル兵にCDのラッシュが叩き込まれる。だが浅いヒビが入る程度。

だが、ACが動く。

AC 『別に直接波紋を流さなくても、波紋を流す方法ならある！ドラー！』

A Cの攻撃が当たる。あの動き…恐らく中国拳法の技。剛拳の対極である柔拳、相手の内側から破壊の力を流す方法。そこに波紋を加えると…、

スカル兵『G a a a a a a a !』

スカル兵は灰になった。

C D『考えたなジョジョ！ならば俺はこうだ！ドラーア！』

C Dも同じく中国拳法を使い、

C D『静の波紋を同調させて…ドラーラララララ！』

静さんの波紋がクレイジー・ダイヤモンドに伝わって、スカル兵に流れる。

A C『これが二人初めての共同作業でした♪』

C D『氣い抜くな静！手強いのは確かなんだからよ！』

そしてところ変わって八幡少年達に。

八幡『お出ましか。表にも…な。お約束通り現れてくれて嬉しいぜ。屍生人ども』

俺は表の八幡少年達にも三体のスカル兵達を差し向けた。

八幡『頼むぜ！億泰、ミスタ！俺達は手が出せねえ！』

ミスタ『了解だ。行くぜ億泰！』

億泰『おうよ！』

ミスタさんが銃弾を撃ち、曲射でスカル兵の頭に当てるが、本来の強度のプロテクターにはヒビが入る程度に留まっている。

スカル兵『WRYYYYYYYY!』

億泰『削り取れば硬さなんて関係ねえんだよ! あっちこっちに出しすぎて動きが緩慢だぜ! こつちに来い!』ガオオン!

億泰『近づいて来たところをもういつちよ!』ガオオン!

ザ・ハンドの手がスカル兵の足を捉え、片足が剥き出しになった。

八幡『ハーミットアメジスト&波紋!』

八幡少年がiPadに伸ばしているのとは別のハーミットアメジストを出し、波紋を流してスカル兵を倒した。

ミスタ『一回でダメならよお、同じところに何発でも叩き込めば良いんだよなあ!』ダダダダダン!

ミスタさんはピストルズを使って何発も同じ箇所弾丸を叩き込み、広がったヒビに太陽の光が差し込み、スカル兵が灰になった。

億泰『やるなミスタ!』

ミスタ『オメエもな! 億泰!』

そして今度は兄さん達の方へ。

ダン『こ、これは…』

ダンはジョルノ兄さんのゴールド・エクスペリエンスが石から生み出した木のつるで磔にされていた。

ジョルノ『ギヤングを甘く見ましたね。僕は承太郎さんほど我慢強くもなければ、当時の彼のように裏を知らない訳ではないんですよ。『痛み』なんて与えなくても、あなたをこうして身動きできなくさせる方法なんていくらでもあります。それにあなた、覚悟はないですよね？ここで自分の舌を噛みきり、自分の命ごと、せめて仗助さんを道連れにしようとする覚悟はないですよね？』

覚悟がない、スタンドが使えるだけのクズ。まあ確かにその通りだ。

いろは『ハチ君から恋人が逃げたって連絡が来たよ！』

ジョルノ『みなさん。体中の穴という穴を塞いで下さい。特に耳は』

そのジョルノ兄さんは耳を触った後、スマホを操作している。

ダンが恋人を操作して兄さんの耳に入ろうとするが、よく見ると兄さんの耳がない。

兄さんはまんまと引つかかった恋人をゴールド・エクスペリエンスで摘む。

ジョルノ『僕の特技なのさ』

そういうえばジョルノ兄さん、組の宴会とかの一発芸でやってたような…。

ジオルノ『さて、このまま何もしなければ、再起不能にはなってもらうが、何もしないで約束しよう』

ダン『ひ、ひいいいい！何もしない！何もしないから勘弁してくれ！』
本当に覚悟がない男だ。

しようがなく、俺はスカル兵達を差し向けた。その数20。

いろは『ゾンビたちっ!!? エメラルドストライク!』

エメラルドの弾丸がスカル兵達に飛んでくるが、プロテクターの強度によって弾き返された。

いろは『かたっ!』

陽乃『どいて!いろはちゃん!』

陽乃のスタンド、アヌビス神の刀が一閃し、スカル兵が崩れ落ちる。

陽乃『私のアヌビス神はこんなにやく以外、斬れるわよ?』

何かジオルノ兄さんの心の声を読んだらしい。エスパーか何かか?

いろは『また来た!』

俺は更にスカル兵達を差し向ける。

ダン『形成逆転だな。このまま降参して恋人を解放すれば、比企谷八幡は連れて行くが、お前達は助けてやるぜ?』

何を勝ち誇っているんだ！貴様は静・ジョースターの言葉を忘れたのか？

小町『小町達が降参して、お兄ちゃんを差し出せば、ほんとに小町達の命は…助けてくれるの？』

ん…？もしかして…？

ダン『ああ、比企谷八幡以外は助けてやるさ『だが断る！』なに！』

うん…、まあ…言うと思った…。

小町『小町の友達の人に、こんな言葉を言っていた人がいるんだよね。『最も好きな事の1つは、自分で強いと思ってるやつにNOと断ってやる事だ』って。小町も思う。あなたにも、この屍生人の親玉にも、小町は言うよ！この比企谷小町が好きな事の1つは、自分が強いと思っている人にNOと断ってやる事だよ！』

俺も一度言っていた事だしな…。だが、俺は彼女を尊敬する。

小町『あんまり使いたく無かったけど、もうやるしかないよね？小町も覚悟を決めるよ。一般人を巻き込みたくは無いつて言ってたけど、ごめん。あれは嘘になるかも。もしかしたら一般人をやっちゃうかもね』

陽乃『え？なにになに？奥の手でもあるの？そんなのあるなら早くやってよ！』

そんな事を言っている陽乃以外、全員顔が青ざめている。そんなに恐ろしいのか？

小町『みんな！』

小町は腕を上に向け、人差し指を上に掲げた。

その瞬間、兄さんは陽乃を抱えて、いろはと一緒に逃げる。

いろは『逃げるんですよオオオ！』

いろは…それでも君は前世はエリナ・ジョースター？いや、それほど小町の技が危険らしい。どうやらあの慌てようだと、敵味方問わない無差別攻撃みたいだ。

陽乃『なに?!? マジで何なの?!? 何で脇目もふらずに逃げてんの?!?』

ジョルノ『うるさいな！君は知らないからそんな事を言えるんだ！急いでるんだ！とにかく絶対に今は逃げさせてもらおうからね！』

恋人をしつかりと摘み、兄さん達は逃げる。

次の瞬間、

…：…シユウウウウウウ…：…という音を立てて、スカル兵達の体に穴が開いて、その周りに熱が溶けていた。

ダン『ギヤアアアアア！』

刹那…音もなく…一瞬という時間を何分割りにした時間の表現ですら生温いようなあつという間に周りの景色は一変していた。

地面は穿たれ、土が焦げていて、河原の形が変わってしまったている。

スカル兵達は全滅していた。あのプロテクターを貫通する程の威力に、驚きを隠せな

せてもらう。アンタとは一緒はもうこりこりだ」

そろそろ頃合いだろう。もういい加減に長い間空気だった大統領に連絡出来るかも
な。

絢斗「後悔するぞ？ 一条承一郎」

俺はブラッディ・シヤドウの空間の中に入った。

承一郎のもう一つの世界その①

俺は八幡一行のバス（実はあのジョセフさんの趣味丸出しのバスは二つあったのだ。しかも今度は偽装なし）を監視していた。

俺は絢斗と訣別し、単独で監視している時に大統領に連絡した。

ヴァレンタイン『どうしたのかね？承一郎君』

J O J O 「大統領、俺はプッチ達と訣別した。今度は八幡少年の真意を探ろうと思う」
ヴァレンタイン『ふむ…、なら直接接触を試みるっていうのはどうだ？』

J O J O 「は…？マジで？」

ヴァレンタイン『マジだ。既にホテルウィラードコンチネンタルに彼等予約しているという情報入手したから真下の部屋に宿を取ってあるぞ』

J O J O 「なっ……」

手際良すぎるだろ。しかもあのホテルは官僚クラスが使用するホテルだぞ。

承一郎（当日予約出来るSPW財団と大統領の財力と権力すごいな…）

全くだ。

ヴァレンタイン『それに、テレビ局のへりに偽装したへりが迎えに来る事になってい

る。ちなみに職員は事情は知らないぞ。ただ命令されているだけだ」

J O J O 「まあ、行かなきゃ損だな。アンタの案に乗ってみるよ」
こうして、俺はホテルウィラードコンチネンタルに泊まる事にした。

9時、ホテルウィラードコンチネンタル——

俺は八幡一行の予約している部屋の真下の部屋で盗聴器を作動した。

いろは『何もなければ今ごろはマイアミで八君とビーチで楽しく遊んでたんだろ
うなあ……』

八幡『いやそれ無理だから。多分、良くて情報集めしているだけだと思うから』

八幡一行はそんな事を言っている。まあ、さっきのロードローラーでバスを潰した事
によって足止めは出来たみたいだ。

八幡（いや、俺だっているはと遊びたいけどね。

君とキヤツキヤツウフフしたいけどね。

昨日の夕方辺りだったら新婚旅行のあの客船のデッキで見た夕日をバックにビーチ
でまったりイチャイチャしたかったけどね。……あ、これ八幡的にはポイント高い』

小町『声に出てなければホントにそうだと思うけど、小町的にはポイント低いよゴミ
いちゃん。お兄ちゃんがいろはお姉ちゃんの事が好きすぎるのは良くわかるけど、時と

よ。ソイツがスタンド使いとは別の、何か得体の知れない才能を持った人らしい』

仗助『俺もこの数年はその男とは連絡を取ってなかったんだけどよ、康一は定期的に連絡を取っていたらしくて、事情を知って今は応援と一緒にこつちに向かつてくれるらしい。早ければ明日、ワシントンDCに到着するみてえだぜ』

八幡『確かに、俺達の中に潜入とかが得意なのはいいからな。ジヨジヨくらいしか来てくれるのは康一さん？』

仗助『バツカ。今康一がこつちに來たら汐華や雪ノ下はどうすんだよ。オメエの本当の目的を忘れんな。こつちに來んのは露伴と間田だよ。どっちもあんな会いたくねえんだけどよ。後は未起隆か。他の杜王町組も別動隊として、その従姉さんと動くらしいぜ』

成る程、ならば今夜に接触を試みよう。あの露伴先生が來たら、接触が難しくなる。それに、あの極秘作戦の内容が露見したら大変だ。

八幡『俺は嫌いじゃあ無いんだけどな』

小町『お兄ちゃん、そういう人達とは気が合うもんね』

いろは『露伴先生はヒネた者同士で妙に馬が合っていましたし、ヘブンズドアで前世とか子供の頃のネタを提供したら氣に入られたんでしたつけ。私は先生の漫画が苦手と言ったらボロクソに言われました。ハチ君はあの漫画が好きみたいですけど』

承一郎（うん…、まあ…しようがないな。これは）

仗助『…つたく。取り敢えずそういうことだ。向こうに着いた時にやるはずだったことは、先行偵察組と藤崎忍の従姉がやってくれるみたいだから、おかげで余裕も出来た。明日はそいつらを迎えに行くことも含めてワシントンに滞在だ。みんなもそれで良いな？』

やはり、今夜中に接触するしかなさそうだ。

八幡『取り敢えず寝るわ。今日は色々あったし』

ジョルノ『まだ外は明るいだろ？もう寝るのか？』

八幡『バツカジョルノ！寝れる時に寝とかねえと後々しんどいぞ？もう9時だろ？』
ん？9時？今八幡少年は9時と言ったのか？外が明るい晴天の9時？

一同『……………』

八幡『なあ。今、何時？』

いろは『……………「午後の」……………9時』

一同『……………』

一同（俺含む）『スタンド攻撃受けてるじゃあねえか！』

このスタンドは確か『太陽』、なんて無茶苦茶な攻撃をするんだ！

八幡『あのチキンスタンド使い！これは『サン』じゃねえか！なんてことしやがる！

JOJO（ナンバーも確認した。アタリだな）

まさか、集合場所に敵スタンドの本体がいるとは八幡一行も思わなかつただろう。灯台元暗しとは良く言ったものだ。

ファッツ「俺は後はゆっくり奴等がくたばるのを待つだけだな。案外チョロいぜ」

承一郎「いや、あなたはもう終わりだよ」

ファッツ「えっ？ブギヤツ!!？」メシヤアツ！

僕のクリスタル・ボーンの拳が、アラビア・ファッツの顔面に吸い込まれるようにめり込んだ。そのままファッツは倒れてしまった。案外あつけないな。

『太陽』のスタンドも解除されて、辺りには夜空が輝いていた。綺麗な夜だ。八幡少年との邂逅に、これほどふさわしいものはない。

キング・クリムゾン!!？

一時間後——

かなり長く待つ事になったので、ティータイム（紅茶はアールグレイ）を過ごしていたら、八幡一行がやって来た。

僕はティーカップを空間の中に入れた。

承一郎「遅かったね。ちゃんと会うのは初めてかな。僕の名前は一条承一郎、よろしく頼むよ」

僕が自己紹介したら、八幡少年達は一斉にスタンドを発現させた。

八幡「白々しいんだよ。昨日からコソコソ俺達を嗅ぎ回ったり、色々邪魔してくれちやつて何してくれてんの？ 新車のストーカー？ 覗きが趣味なの？ スタンド能力越しだから罪にはならないけど、その趣味はまずいよ？ 将来ろくな大人にならないよ？」

まあ、確かに正論だな。でも一応任務なんだけどね。

承一郎「フフツ！ 僕より年下の君に言われるなんて、これは一本取られたな」

陽乃「覗きの慰謝料は請求するわね。私たちの体は安くはないわよ？」

何か勘違いされているな。ちよつと疑われているな。

承一郎「そつちの方向での覗き見はしてないんだけどね。僕にも大切な人がいるんだ。節度は守るよ」

僕はそう弁明をする。俺はダンのようなロリコンではない。

静「あと、バスと我々の私物の弁償代もです。特にあのバスはジョースター家の先代が家族の為にオーダーメイドした特別品ですから安くは無いですよ？」

そういうばアレ、確かに高そうだったな。大統領なら、払えると思うが…。

承一郎「参つたな…経費で下りるかな」

僕はそう言つて頭をポリポリとかく。

仗助「それで、どういふつもりなんだ？ ソイツはお前の仲間なんじゃあないか？」

まあ確かに八幡一行にはそれが疑問に思っているだろう。

承一郎「仲間ではないかな？ちよつと目的があつて行動を共にしていたに過ぎないんだ。もう関係ないけどね」

僕はフツと笑つてファッツの車をコツコツと叩く。

承一郎「でも、仮に仲間であつたとしても、彼を止めていたよ。行動を共にしていたとき、この車の事を覚えていて良かった。もし覚えていなかったら、今ごろは手遅れになつていたかも知れない。あまりにも自然すぎて、完全に周囲と溶け込んでいたからね。彼の能力をこんなところで使われていたら、世界が滅茶苦茶になつてしまう。世界レベルで無関係の人が巻き込まれてしまうからね。彼等にはそんなことは関係ないみたいだけど、僕はそういうのは嫌いなんだ」

僕は八幡一行を一人一人をゆっくりと見て言う。

承一郎「僕は思うんだ。彼等と共に行動を共にし、行動を見てきたけど、彼らを後ろで操っているものは大義名分で動いているけど、彼等は違う。彼等は私利私欲や私怨で動いて無関係の人間を巻き込んでいる。彼等こそ36の極罪をもっている」

そう言いながら、僕はJ O J Oと替わる。

J O J O「まあ、大義名分で動いている奴も、所詮は吐き気をもよおす悪だということに気付いちやいないが。さて、ここには同じく吐き気をもよおす悪であつた魂がある

よな？悪と、誇り高い黄金の魂、二つの魂が融合した奴が」

俺は父：いや、比企谷八幡を見て言う。

J O J O 「お前のベースがジヨナサンか、D I O かはどうでもいい。1度は天国を指したD I O が、何故天国を止めようとしているのか、お前の目的は何か、天国とは何なのか：答えてもらうぞ、比企谷八幡。それが例え」

俺はスタンド、ブラッディ・シャドウを発現させる。

J O J O 「この場にいる八人全員を痛めつける事になってもな！」
さて、始めよう。悪役を演じるこの舞台を。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

承一郎のもう一つの世界その②

最初に動いたのは億泰さんだった。

億泰「生意気言ってるじゃあねえぞこのダボがツ！テメエは、この虹村億泰が倒してやるぜ！」

そう言ってる億泰さんはスタンド『ザ・ハンド』の右手を大きく振りかぶる。

億泰「こつちに…来いッ!!？」ガオオン！

『ザ・ハンド』の右手が弧を描くようにひつかいたのを見た瞬間、俺は骨で生成したナイフを3本投げる。

ただでさえスピードが出ているナイフに、空間がピッタリ閉じた時の元通りになる力が働き、ナイフのスピードがさらに加速した。

億泰「うおおッ!!？」バシバシッ！

だが、そのナイフを億泰さんは弾き返す。

JOJO「ふむ…やはり近距離パワー型はナイフを悠々弾き返せるか…」

仗助「大丈夫か、億泰！」

億泰「ああ、大丈夫だぜ。だがコイツ、俺のスタンドの特性を理解しているぜ。じゃ

なかったら、ナイフを加速させるなんて考え思いつかないぜ！」

J O J O 「ならば……この数はどうかな？」 ビシユツ!!？」

今度の本数は8本。

そして俺の本命は別にある。

億泰 「『ザ・ハンド』」 ガオオン!!？ガオオン!!？

右手が全てのナイフを削り取る。

億泰 「ケツ、そんなナイフ何本投げても無駄だ……ガハツ!!？」 ドズツドスツ！

仗助 「お、億泰ツ！」

俺はナイフ4本を空間を繋いで億泰さんの後ろから投げていたのだ。四肢に深々と

突き刺さる。

J O J O 「ハツ！」 ドズツ！

俺は億泰さんの腹に正拳突きを叩き込んだ。

億泰 「カハツ……！」 ドサツ

億泰さんが崩れ落ちる。

ミスタ 「野郎ツ！ 行け、ピストルズ！」 ダンダアン！

続けてミスタさんが俺に発泡した。

J O J O 「無駄だぞ無駄アツ！」

俺は弾丸を叩き落とそうとするが、

No. 1と3「イイイーーーーッ！ハアアアアーーーーッ!!?」

No. 1と3が弾丸を加速させる。

JOJO「ぐっ!!?」バス！バス！

ミスタ「ベネ^{良し}！着弾したぜ！」

だが、俺にはハジキの弾なんて効かない。

JOJO「少しミスったな…。ピストルズは非力だが精密性がすごいからな…」ピキ
ピキ…

俺が纏っている骨の鎧にヒビが入る程度だ。しかもすぐに修復される。

ミスタ「やつぱり、アイツあの骨屍生人達の親玉だぜ！自分自身に骨のプロテクターをつけてやがるッ！」

八幡「俺と同じような奴か。スタンドを二つ持っているのか？」

ジオルノ「しかもプロテクターをつけていたのか分からないほど精密に作られていま
すね…」

JOJO「さて、じゃあ俺も銃を使うか…」スチャ

俺も銃を構えた。

ミスタ「ヘッ！拳銃使いのオレ様に銃で戦うなんて良い度胸じゃあねえか！」

J O J O 「戦う？ 違うな、これは…」

俺の銃の前に空間が現れた。

J O J O 「一方的な暴力だ」ダンダンダアン!!?

俺は空間をミスタさんの両手、両足に繋げて撃ち込んだ。

ミスタ「ぐああつ!!？」

J O J O 「セイツ！」ビスッ！

俺は今度はミスタさんの背後から手刀を叩き込んだ。

ミスタ「ぐっ…」ドサッ

ミスタも崩れ落ちた。

J O J O 「…さて、次はあなただ。ジヨルノ」

ジヨルノ「君は、弟なのか？ そんな気は薄々感じていたけど」

J O J O 「まあ、兄弟の中で一番歳が下だからな」

そんな事を言いながら、俺と兄さんが睨み合う。まず最初に動いたのは兄さんだ。

ジヨルノ「無駄無駄無駄無駄無駄無駄アッ！」ドババババツ!!?

兄さんのラツシユが炸裂する。

J O J O 「フン、無駄無駄無駄無駄無駄無駄アッ！」ドババババツ!!?

俺もラツシユを炸裂させ、お互いの拳がぶつかり合う。

JOJO「ハッ！」ガシッ！

ジョルノ「なっ!!？」

だが、俺はラッシュしている間に兄さんに突っ込み、懐に入り、胸倉を掴む。いきなりの事に驚いた兄さんは対処が遅れる。

JOJO「セイヤツ!!？」ブウン！

俺は兄さんをCCCで背負い投げをして、兄さんを地面に叩きつける。

ジョルノ「ぐはっ！」ドスウツ！

俺は飛び退き、ナイフを飛ばす。

ジョルノ「無駄無駄無駄無駄無駄アツ!!？」バシバシッ！

兄さんはそれを弾き返して、逆にナイフに生命を与え、大型のスズメバチに変えた。さらに兄さんは地面からつるを伸ばして、拘束させようとする。

俺は跳びながら骨で長刀を作り、地面に刺して足場にして、それを踏み台にして兄さんへ飛ぶ。

ジョルノ（空中では身動きが取れないハズ…！）

そこへスズメバチの大群が襲いかかる。

だが俺は空間を繋いで兄さんの背後に移動するが、

ジョルノ（君が背後に移動するのは読んでいた！）

背後につるが伸びて襲いかかる。

J O J O 「リススキニハーデン・セイバー!!？」スパパパーン!

俺は腕に刃を生成してつるを切り裂く。

J O J O 「セイバーオフ！」ビシュツ!

ジョルノ「ぐはっ…！」ブシュツ!

刃が一閃して、兄さんの腕を切断し、頸動脈を切り裂いた。これぐらいじゃあないと、兄さんはすぐ自分の傷を治してしまう。

J O J O 「ハアツ！」バキイ!

ジョルノ「グフツ…」バタツ

ジョルノ兄さんは倒れた。かなり疲れるな…。

仗助「ジョルノ！」

仗助さんは怒って俺に向かって来る。

仗助「や、野郎ツ！そのキレーな顔ギャグ漫画みたいに変えてやるぜ！」

J O J O 「やってみろツ！この俺に対してツ！」

俺と仗助さんは、同時に動く。

仗助「ドバラバララッ！」ドババババツ!

J O J O 「オラオラオラッ！」ドババババツ!

俺はクリスタル・ボーンで仗助さんのラツシュを迎撃する。

一瞬お互いに距離を置くと、

仗助「『クレイジー・ダイヤモンド』！ドラアッ！」

仗助さんは近くの石などを、投げる。

JOJO「『クリスタル・ボーン』！オラアッ！」

俺は自分の骨でナイフを生成して投げた。

お互いに少しづつ傷を負うが、関係ない。

仗助「ドラアッ！」ビシュッ！

仗助さんがナイフを抜いて流れた自分の血を水圧カッターのように飛ばす。

JOJO「オラアッ！」パアン！

俺は水圧カッターを弾く。少し肩が裂けたが、問題ない。

仗助「くらいやがれ、ドラアッ！」

そしてまた近くの石を投げる。

俺は避けながらナイフで迎撃する。

仗助「ドララララララッ！」ドババババッ！

JOJO「オラオラオラッ！」ドババババッ！

またもラツシュを炸裂させる。だが、いきなり俺の背中に激痛が走った。

J O J O 「ぐっ…!!?」

仗助「ドラアッ！」バキイッ!

俺は吹っ飛ばされてしまう。

J O J O 「ぐっ…治す能力で、俺に付着した血へ自動追尾しやがったのか」

仗助「気付くのが遅いぜ! ドラララララッ!」ドバババッ!

正面から仗助さんのラツシュ、背後には自動追尾弾が次々襲いかかる。だが俺は、

J O J O 「このまま、走り抜けるッ!」ダッ

逆に仗助さんのラツシュへ自ら突っ込んで行つた。

仗助「なっ!!?」

ラツシュは止まらず、俺に当たろうとするが、

J O J O 『ブラッディ・シヤドウ!』

俺は空間を繋いで仗助さんの背後にまわり、CCCで身動きを取れなくする。

仗助「ぐっ…離せ!」

J O J O 「アンタが食らうんだ、仗助さん。アンタ自身が自動追尾弾を!」

俺が推測するに、仗助さんのスタンド『クレイジー・ダイヤモンド』は治す範囲は本人の自由。かなり応用力が高いスタンドだ。

だが、その能力は治しきるまで止まらないハズだ。どこまで離れていても、治すなん

て出来るのは多分そのおかげだ。

仗助「ぐあっ！」ドスウツ！

仗助さんの体に何発か自動追尾弾が体に命中した。さらに俺は仗助さんを締め上げて、ダウンさせた。

そこで、俺の体に見えない何かが命中した。これは…

J O J O 「静・ジョースター！」

俺は動こうとするが、

J O J O 「何イツ!!？」ガクンツ

俺は足を何か―多分透明にしたワイヤーだろう―に引っかかってしまい、バランスを崩してしまった。

静「ドラアツ！」バシイ！

そこで静さん本人の攻撃を食らってしまった。

J O J O 「うぐっ！」

体が少しだけ溶けてしまった。どうやら強力な波紋が込められているようだ。

静「お兄さんを傷付けるなんて許しません！」

これは、かなりのブラコンだなと苦笑しつつ、俺は空間から水が一杯入ったグラスを取り出した。

を苦しめた能力。

J O J O 「ほう…：なら、俺も得物を使うか」

そう言つて俺は首を捻る。すると、

ズリュ、と肩から脊髓がせり出してきた。

俺はその脊髓を掴み、一気に取り出す。せり出してきた跡は何もなかったように元通りになつていた。

脊髓がパキパキと音を立てながら2本の刀のような形状に変化した。

陽乃「へえ、面白いじゃない？比企谷君と似てるのは見た目だけじゃないんだ」

結構こういうのに耐性があるのに意外だなと思つた。

J O J O 「面白いだろう？俺は二重人格でね、スタンドが二つあるんだ。空間を繋ぐスタンド『ブラッディ・シャドウ』と、骨を自由に生成して操るスタンド『クリスタル・ボーン』。兄さんが生命を操るのなら、俺は死を操る。対極の存在なんだ。さて、行くぞツッ！」バツ！

俺は思い切り踏み込んで、右水平斬りを放つ。陽乃はそれを前屈みになり躲し、左から斬り上げる。俺はそれをもう一つの刀で弾く。

更に刀と刀の斬り合いが続く。お互い相手の攻撃を捌きながら、隙を突こうとするがそれを互いが捌く。

J O J O (ここまでやれるのは竜か親父ぐらいだったな…)
久しぶりの刀での斬り合いに火が着いた。

J O J O 「まだまだ踊ってくれよな、アヌビス神！」
斬撃がだんだんと加速されていく。

俺は叩けば叩くほど成長するタイプ。陽乃のだんだん強く、速くなる剣戟でさらに成長を続けていた。

だが、それは突然終わりを告げる。

俺の両刀を使った右斜めの斬り上げを陽乃は躲す。

陽乃「貰った！」

背後に陽乃の垂直斬りが当たりそうになるが、

ズリユ！と俺の体から肋骨が刃になって陽乃の刀を掴むような飛び出す。

陽乃「なっ…!!？」

さらに全身から骨が飛び出し、俺が回転するの事によって、陽乃の体が斬られながら吹き飛んだ。

陽乃「キヤアアアア！」

小町「お兄ちゃん！」バツ

小町は腕を上へ上げ、人差し指を上に掲げる。あの技か。

八幡「突然すぎるだろ！ハーミットアメジスト！」

八幡少年のハーミットアメジストが全員を必死に俺と小町から引き離す。

次の瞬間、小町のスタンドの攻撃によって周囲が穴だらけになったが、俺は無傷だった。

小町「そ、そんな!?？」

J O J O 「無駄だ比企谷小町、いやエリザベス・ジョースター！お前の技、多分レーザーなんだろうな。ダンとの戦い、見せてもらったぞ」

そう言いながら、俺は黒い空間を見せる。

J O J O 「お前のスタンドが一秒間に地球を7周半周る光なら、俺はその光をも引きずり込むブラックホールだ。方向さえ分かれば、レーザーを空間で吸収するのは訳ない」バリバリ！

俺の片目が裂ける。

J O J O 「くらえ、貴様の師ストレイツォが貴様の息子、ジョセフ・ジョースターに使った技を！『スベースリバー・ステインギアアイズ空裂眼刺驚』!!?？」

圧縮された体液は俺の眼から飛び出し、空間を繋いで、小町の脇腹を貫通した。

小町「お、お兄ちゃん…」

小町は膝をついた後、ゆっくりと力尽きた。

八幡はゆつくりと、確実に俺との間合いを詰めていった。

J O J O 「さて、最後は八幡、お前だ」

八幡 「…小町がやられるのは意外だったが、許さねえぞ、テメエ！」

八幡少年は一気に間合いを詰めてきた。

八幡 「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アツ！」ドババババツ！

J O J O 「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アツ！」ドババババツ！

お互いのラッシュが炸裂する。拳と拳がぶつかり合う。

八幡 「くっ、パワーもスピードも俺のザ・ジェムストーンと同レベルとは…！」

J O J O 「フン、このまま殴り抜けてくれるツ！」

八幡 「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アツ！」ドババババツ！

J O J O 「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アツ！」ドババババツ！

八幡 「ザ・ジェムストーン！時よ止まれ！」

俺は時が止まる前にブラッディ・シャドウの空間の中に入って攻撃を防ぐ。

ドオオオー————ン!!?

世界から色が失われ、モノクロになつて八幡以外のあらゆるものの動きが停止した。

八幡 「くっ、時が止まる前に空間の中に逃げたのか！」

世界に色が戻り、時が動き出した。

したらしい。

J O J O 「フン！くらうがいい！『スベースリパー・ステインギーアイズ空裂眼刺驚』！」ドツゴオ！

八幡「バカめ！自分の技にはまる間抜けがどこにいる！」バツ
 と言つて八幡少年は横に跳んで回避した後、

八幡「無駄無駄無駄無駄無駄無駄アツ！」ドババババツ！
 一足跳びでラツシユを炸裂させる。

俺は刀で迎撃しようとするが、刀が当たる瞬間、ザ・ジエムストーンが突然茨のスタ
 ンド、ハーミットアメジストに分解して俺の体を雁字搦めにした。

J O J O 「何ッ？？」

八幡「食らえ！アメジストパール・オーバードライブ紫水晶の波紋疾走！」バチバチイ！

八幡少年の手から弾ける波紋が流れた。なら、

J O J O 「食らえ、サンライトイエロー・オーバードライブ山吹色の波紋疾走！」

俺は八幡少年のプラスの波紋の対であるマイナスの波紋疾走を食らわせた。

八幡「食らえ、ザ・ジエムストーン！」

八幡少年の波紋が若干強く、俺が痺れていたところに、八幡少年片腕のハーミットア
 メジストがザ・ジエムストーンに変化した。

J O J O 「なっ？？」

八幡「WRYYYYYY！無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アツ！」ドバババツ！

JOJO「ぐああつ！」

俺は吹っ飛ばされる。骨の鎧を身に纏っていたが、八秒間の圧倒的なラツシュによってもはや剥がれきっている。

俺はクリスタル・ポーンですぐさま折れた骨を治す。

八幡「クソツ、もう一度だ！」

八幡少年のハーミットアメジストが俺に襲いかかるが、俺はブラッディ・シャドウで掴む。

JOJO「俺もジョースターだ。ジョースターの家訓になかったか？ジョースターに同じ手を仕掛けることは既にそれは凡策だと。その手は既に俺にとっては凡策なんだよ」

俺はブラッディ・シャドウの空間へ八幡少年を引きずり込み、その空間から俺の前へ移動させて、掴んだ。

八幡「なっ!?？」

JOJO「WRYYYYYY！食らえ、『気化冷凍法』！」

ピッキイイーーーーズ

ン！

俺は気化冷凍法で八幡少年の頭から下を凍らせて、氷像へと変えた。

J O J O 「どうする？このままダイアーさんみたいに、全身粉々に砕かれないか？」

八幡「俺の…負けだ」

八幡少年は敗北を宣言した。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

承一郎のもう一つの世界その③

八幡「俺の…負けだ」

首から下が氷漬けになった八幡少年が敗北を宣言した。

俺はスタンドを引っ込めた。一応骨の鎧を纏っているの、何か仕掛けてきても問題ないだろう。

一瞬、ハーミットアメジストをこっさり地面に這わせて背後にジェムストーンを出して金的をくらわそうとしているんじゃないかと思っただが、そんな様子はなかったの、そこまで下衆じゃあないんだなと感心した。

J O J O 「潔く負けを認めたか。ならば勝者の権利として聞かせてもらおう。ザ・ワールドの能力を得た本人はその先の運命を操れるのか？」

俺が今知りたい事はそれだった。

これさえ分かれば、後は大統領に報告して事が終わる。

元の世界に戻る。彼女達に会える。

そう思いながらも聞くと、

八幡「フツ……」

J O J O 「? 何がおかしい?」

俺は八幡を警戒した。

八幡「相手が勝ち誇った時、既にそいつは敗北している…か」

J O J O 「そうだ。静・ジョースターがデラウエアで言っていただろう? ジョースター家の家訓を。八幡少年、君はジョースター家の家訓を破ったのさ。相手が勝ち誇った時、既にそいつは敗北している。確実にとどめを刺してから勝ち…『シユウウ…?』」

…何が起きたんだ? 何故、僕は倒れているんだ?

ガオン! ガオン!

承一郎「?!?!」

何故気絶したハズの億泰さんが起き上がっているんだ?!?

八幡「相手が勝ち誇った時、既にそいつは敗北している。確実にとどめを刺してから勝ち誇れ。やっぱり罫を見破れなかったな」

承一郎「ま、まさか! これは…!」

俺の両手は削り取られ、両足は溶かされていた。

八幡「お疲れな、『いろは』」

いろは「ハチ君! 今すぐ治療するから待ってて!」

静さんの透明化が解除され、エリナ・ジョースターの転生者、一色いろはが現れた。俺はやつというろはの事を思い出したが、何故波紋の生命探知機が反応しなかったのだろうか。

まさか…、俺が八幡の波紋を逆の性質の波紋で相殺したように、波紋探知機を逆の波紋で打ち消して分からなくさせていたのか。

八幡「いろは、頼む。完全に舐めてたわ。気化冷凍法とか忘れてた」
いろはが泣きながら八幡に治療を施すが、あまり効果はない。

仗助「任せとけよ八幡。クレイジーダイヤモンド！」

まさか…、分かってるから余計に怖い。

クレイジーダイヤモンド「ドラララララララ！」バリンバリンバリンバリン！

グロ注意！グロ注意！嘘だろう？？？体を粉々に砕くか普通？？？しかも躊躇いも無くやるなんてすごいな…。

能力で八幡の体は元に戻って氷が取り除かれていた。

承一郎「そうか、いろは。君の事を忘れていたよ」

いろは「気安く名前を呼ばないで下さい」

これは僕のミスだった。全員のトドメを刺さず、注意を怠っていた。これからは油断しないように反省した。

八幡「俺の大事な本物を舐めるなよ？ 確かにいろはは攻撃面では俺達に一歩譲るが、侮られるヤツじゃあないんだよ。集団戦で敵に回ったら、真っ先に倒すべき存在だぞ？ いろはは」

確かにその通りだった。さて、どうするべきか。奥の手はまだあるが…やるべきだろうか。

静「戦いが始まる前からイーハを私が隠していましたからね。自分の相手が何人いるか、それを忘れていた。それがあなたの最初のミス」

そうか、最初に『8人』と言っていた時点で僕は既に彼等の策に引つかかってしまったんだ。

それに、盗聴している時から八幡少年がボロクソ言われている時にいつも真っ先にからかってくる彼女が、僕を挑発している時に黙っているわけがないじゃあないか。

ジオルノ「本当だよ。お陰で、危なかったところだけど助かった。すぐにいろはがエメラルドヒーリングをしてくれなければ、命に関わる所だったよ」

億泰「手足にナイフをしこたま刺してくれたからよお、逆に手足を削ってやったぜ。足は小町が蒸発させちゃったから、そっちはやり返せねえけどな。こうなつちまったら仗助でもいろはでも治せねえぜ。オメエの兄貴以外は治せねえかもなあ」

気絶をしていたみんなが次々と起きてくる。厄介だった故に気付いていたが、まさか

こんな作戦があつたのか。

小町「ぴよっ♪」

承一郎「っ！」

小町は気絶していた振りをして倒れていた体勢のまま跳び上がった。あんな跳び方、ツエペリさんでも不可能なはずだけど…。

小町「サンシャインルビーのアレを防げたのは見事だったよ？あんな避けかたをするなんて、あなたは将来大物になるかもね？でもね、あの一発は確認の為」

ん？何の確認だ？

小町「勝手にあのサインがルビーレーザーの発射の予備動作として防御に移った感じだったけどね？」

承一郎「違ったのかい？」

アレはダンの戦いで見たが、違ったのだろうか？

小町「あのサインは別にルビーレーザーを射つために必要な予備動作でも何でもないから」

な、何だと…!!?

サンシャインルビーは腕を組んだまま、肩のエイジヤの赤石から解りやすく見えるように、赤いレーザーを上空に照射し続けた。

これは…まさか…！あの技は、ノーモーションで発射が可能なのか…？だとしたらホントのチートだな。

あの人差し指を掲げる動作は、周りの仲間を警告する為だったのか…。

承一郎「そうか…僕は聖女と仲間の絆に敗れたのか…」

父、DIOはエリナ、ホリィさん達聖女が原因で敗北したと言ってもいい。今回は、僕が聖女に敗北したのだ。

終わつたのかと思つたのか、八幡はスタンドを引つ込めた。

承一郎「次にお前は『俺は負けを認めても、俺達が負けたとは言つてない』…と言う」
八幡「俺は負けても、俺達が負けたとは言つてない！…はっ！」

スタンドを引つ込めたのは八幡だけだ。やれやれ、油断大敵と言つたのは君だろう。

承一郎『やり返していい？』

小町『はあ、まったくお兄ちゃんは。死なない程度でOKです』

承一郎『了解』

小町「はい、お兄ちゃんがまた負けました。今日はお説教ね？散々一条さんに油断大敵みたいに偉そうにしておいて、自分が油断してんじやん。一条さんが良い人でよかつたね！でなければお兄ちゃんは死んでたか、拐われてたから」

承一郎「アイコンタクトに気付いてくれてありがとう。確かに一度は、やられたよ。

君の性格の悪さにね」

僕はブラッディ・シヤドウで八幡少年の首から下を空間の中に入れて、首だけの状態にした。これが僕の奥の手だ。

承一郎「性格の悪さには性格の悪さで返してもらったよ。他のみんなは油断してなかったみたいだね」

周りを見ると、全員の視線が痛い。気付いていなかった八幡少年に呆れているのだ。僕の手足が再生したのにも気付いていないようだし。

ジョルノ「言っておくけど、僕は直していない。君はまだ油断があったみたいだね」
兄さんが無表情で見ている。本気で怒っている時の兄さんだ。

いろは「はあ…また承太郎に鍛え直してもらった方が良いですよ？余りにも情けないです」

いろはがかなり冷たい目で八幡少年を見ている。

静「その前にパパに鍛え直して貰って下さい」

静さんも（ry

億泰「安心しろ。俺も仲間だ。俺も追い詰めておきながらやられた事があつからよう」

億泰さんは逆に同情する。優しいが逆に辛そうだ。

仗助「うちのバカが失礼したな。こいつに聞きたいことがあるならば、好きだけ聞いてくれ」

仗助さんはもはや他人を見る目だ。

小町「陽乃さんの戦いを見ていたら、再生能力を持っていたことを見抜けたはずだよ。最後の最後に勝ち誇って。ジョセフや承太郎の前に小町がみっちり波紋の修行で一から鍛え直してあげる」

承一郎「あ、それ興味あるな。波紋の本場の修行を見せて貰って良い？」

小町「どうぞどうぞ♪むしろこのゴミいちゃんを破門にするんで」

承一郎「安心して良いよ。首から下は空間の中で繋がっているから。妹さんからお許しが出たら、出してあげるよ」

僕はニツコリと笑う。なにかと意気投合している僕達。

仗助「とりあえず、オメエに害意がねえのはわかった。あつたなら八幡は拐われていたからな。話ならホテルでしょう。案内するぜ？このバカは尋問でも拷問でも、反省するまで好きにしてくれ」

承一郎「あ、はい。ところでどうします？あの『二人』」

僕は茅ヶ崎さんとミスタを指して言った。ちよつと本気でやっちゃったからな、あの

結成!クリスタル・クルセイダース!

ホテルウイラードコンチネンタル——

あのあと、僕は八幡一行と八幡達の部屋に戻った。

ミスタさんと茅ヶ崎はベッドに寝かせてある。

アラビア・ファッツはSPW財団の職員に連れていかれた。その後はどうなるかはわからない。スタンド使いの犯罪者矯正施設があるらしいから、そこに連れていかれたのだろう。

矯正しきれなかったら…と八幡少年が聞いたら、

ジョルノ「子供は知らなくても良いことがたくさんあるよね？」

と兄さんが言った。笑顔がすごく怖い。

ちなみに、かつて億泰さんのお兄さんを殺害した音石明は矯正完了し終え、社会復帰をしている。今ではウルトラスーパーギタリストとして世界に名を轟かせている。元いた世界と変わらないようだ。

ホテルに戻っている僕達はどうと…。

ミスタさんと茅ヶ崎さんは寢室（男女別）で寝かせている。

茅ヶ崎さんは本気の気絶だったし、ミスタさんは二日間の疲労で眠っている。残りの者達（僕を除く）はまずは反省会だ。

主に八幡少年の…。

ジョルノ「まったく呆れました。あそこまで作戦が上手く行っていたのにも関わらず、最後の最後に油断して全員の努力を無駄にするなんて。僕は君を軽蔑する」

ジョルノ兄さんは僕のブラッディ・シャドウによって首から下が分離された状態の八幡少年に言う。そこまで言うとは、やはり兄さんは厳しい。

億泰「まあまあジョルノ。仕方がねえんじやあねえの？八幡だって頑張ったんだしよお、大目に見てやってても良いと思うぜ？」

億泰さん、ヤンキーがそのまま大人になった人だけど、優しいな…。

いろは「ハチ君が頑張ったのは認めますけど…もし一条先輩が本当の敵だったとしたら、こんな程度じゃあ済んでいなかっただからですから、やっぱり少しは反省した方が良いですよ？」

いろはは八幡少年の切り離されてる体をコチヨコチヨくすぐっている。ツンツンウリウリもしているな。

仗助「まったく…これに懲りて反省しろ！」

静「それでも初代ジョジョですか！」

その時、小町が僕に耳打ちをしてきた。内容は合図をしたら仗助と静も生首にするよ
うにという指示だった。

小町「皆さん。今回、承一郎さんとの勝負でダメダメだった人にお仕置が必要だと
は思いませんか？」

仗助「賛成だ。気を引き締めろ！」

静「私も賛成です！」

これから自分かああなるなんて思いもせず、自分で了承してしまった。

小町「ウンウン♪そうですか、そうですね♪では承一郎さん、お願いします♪」

小町は一条さんにウィンクした。俺はアイ！アイ！サー！と心の中で答えて能力を
使った。

仗助&静「え……………」

ごろんと二人の首が転がった。体は八幡少年の隣に転がされている。

ジョルノ「あなた達の覚悟に尊敬します。東方仗助、静・ジョースター」

欧米人が親しい人間に対し、敢えてフルネームで相手を呼ぶとき。それは本気でこれ
から怒る事を意味する。かなり怒っているな…。

小町「ダメダメだった本人が了承しましたもんね？お仕置きOKですよね？」

いろは「え？どうして二人も？」

仗助&静「「そうだそうだ！納得いく説明をしろ！」

二人が抗議する。やっぱりあれの事か…。

小町「仗助お兄ちゃんは致命傷を負っていたジオルノお兄ちゃんを放置したまま戦い始めるし、ジヨジョお姉ちゃんに頭に血が昇ってせつかく引つ掛かっていたワイヤーの罫を有効利用出来なかった上に、気配を遮断するのを忘れるし、これでもダメダメじゃなかったと言えるのかな？ダメダメの孫達？」

ああ、やっぱりその事か。あれは下手したら八幡少年以上のミスだ。

ジオルノ「イタリアでの戦いの時、ミスタはそうなつて生首になった敵のまぶたに釣り針を刺して吊つて、虫メガネで太陽の光を黒目に当てる拷問をしました」

そういえばそんな事聞いた事があるな…。

え？まさか、それをやるの？

ジオルノ「安心して下さい。そこまで家族にやるほど僕もデーモネ^鬼ではありません。代わりにこれを使います」

兄さんはサッカーボールネットを大きくしたような物に戦犯達の首を入れ、ネットをハンガーフックに掛ける。

そして、どこで仕入れたのかわさびのチューブを取り出した。

さすがギャング、やる事が鬼だ。

「ジョルノ「家族を失明させるつもりはありませんが、このくらいはします。僕は優しいですから、この程度で許してあげますよ」

それは嘘だな。自分で自分を優しいとか言う奴に優しい奴がいた試しはない。

「ジョルノ「言っておきますが、これはあなた達の為を思っただけです。それならね? 理解して下さいね?」

「それもお前さんの為を思っただけ……とか言っている奴に相手を思っただけじゃない。僕は試さない。」

それは大抵が自分の憂さ晴らしの言い訳に使う前置詞だ。兄さんはわざわざそれをそれぞれのまぶたに塗りたくる。

兄さんが口の中にわざわざ突っ込む。

その上から口に強力ガムテープを貼っている。鼻の下にも塗りたくる。

しかも何か額に書かれてる (idiot all itaryア語でバカ)。

さすがはパッショーネのボス! 俺達に出来ない事を平然とやってのけるツ! そこに痺れる憧れるウ!

小町「それでは億泰さん、お姉ちゃん。お仕置きお願いします」

さらに億泰さんというはが追い打ちを仕掛ける。

戦犯達「ウム……………」

二人が3人の体をコチヨコチヨくすぐり始める。

ガムテープで叫べないから変な声が出ている。

せめてガムテープだけでも舌で湿らせて剥がそうとするが…、

八幡「フムー……!!!」

さすが兄さん、ガムテープにまでわさび塗ったくついていたのだ。

ジョルノ「そう言えば、その時に仲間達でこんな躍りを踊ってましたね」

ズツダンズツズツダン！ズツダンズツズツダン！

ズツダンズツズツダン！グイングイン！

バツ！バツ！バツ！バツ！

小気味よいリズムが流れだし、最初は兄さんだけが妙なダンスを踊る。次に小町が加わり、最後に僕が加わる。

そういえば、J O J O がなんか八幡少年の前世達と何かやっている。

J O J O 『何人女を孕ませてるんだ！テメエのせいで俺は妙な呪いにかかっているんだぞこのクズが！体を引き裂いて、臓器を床に順番に並べてやるぞ！KU^ッAA^ア！』

ジョナサン『そうだJ O J O！思い切りやってくれ！僕もかなり怒っているんだ！』
ジオナサンがD I Oの体を抑えている。

D I O 『や、やめろJ O J O！あれは天国へ行く為の…』

J O J O 『だからだこのカス! 血イ晒せこの野郎!』
D I O 『や、やめ: G A H H H H H H H H H H H H H H!』

八幡少年達戦犯達は達は結構長い時間、悲鳴なき悲鳴をあげ続けるのだった。

もうじき日付が変わる時に戦犯達はやっと解放された。

承一郎「さ、災難だったね。見ているこつちまで痛かったよ」

八幡「そのわりには楽しそうでしたね? 一条さん」

承一郎「その場のノリに合わせないといけないような気がして…」

J O J O (結構ノリノリだったけどな)

八幡「それで: 知りたかったのは、ザ・ワールドの能力を得た本人はその先の運命を操れるのか? でしたっけ?」

承一郎「ああ、僕はそれが知りたいんだ」

八幡「それを知って、一体何をするつもりなんですか? 返答次第では答えませんよ? 拐われて、時の加速を実行されては敵いませんからね」

「多分僕の事はある程度は信用できるとは思いますが、それとこれとは話は別なのだろう。」

承一郎「参つたな……どこまで話して良いものか……では質問を変えて良いかな？ 君達は何んの為に「天国」を止める？ DIOの目的は何だったのかは話せるのか？」

仗助とジョルノに目を向けると、二人は少し考え、互いに頷くと、八幡少年頷く。

問題ない……と言うことなのだろうか。

八幡「ディオが恐れたもの、人に仇なす柱の一族の存在と……の消滅。そしてそれらをも操り、……の消滅……それがディオの目的だった。時を加速してその2つが無くなれば、ディオの理想とする安心できる好き勝手ができる世界が出来ますから」

そんな奴がいるのかと、僕は衝撃を受けた。少なくとも僕の世界には、そんな奴等はいなかったと思うが。

承一郎「そんな存在が……。けど、柱の一族はジョセフさんが……」

仗助「ジジイ達が倒したというカースとかという柱の一族が最後なら確かにそうだろうがよう、DIOが調べた結果だと、カースだって柱の一族の中では若輩者だったらしいぜ？ 滅ぼされたという波紋の一族だって、こうやって生き残っているんだしよお」

ジョルノ「父が不安がついていたのが取り越し苦労なら、それならそれで構わないが、その片鱗が日本にあるんだ。それも、汐華に関係する可能性が出てきた……」

汐華つて、確かジョルノ兄さんが日本国籍だった時の名前だったような……。

承一郎「汐華つて……それは……でも、『天国』がそれを消せるというなら、何故君は『天

国』を阻止しようとしている?」

ジョルノ兄さんがこれ以上追求するなという目だったので僕は話題を変えた。

八幡「確かにそれが一番楽で確実な方法ですが、時を加速させるというのはそんなに都合の良いものではないんですよ。結果的に宇宙を一度滅ぼすのと変わらないですから」

八幡「前世のディオが始めたことですが、今の俺はいろはや小町、ジョースター家の人達やその関係者が大切なんです。やつらと戦う運命を背負っても、天国にある先の、似たようなレプリカはいらない。本物と呼べる今を俺は守りたい。自分勝手だとは思いますが、それが俺の願いであり、覚悟なんです」

彼は僕の目を見て話す。その瞳からは、嘘偽りが無い事が感じられた。

承一郎「成る程、君のそれで、プツチが何を目的で運命を操作しようとしているんだい?」

八幡「覚悟するものは美しい。プツチはそれに感銘を受けていました。奴が目指す先は世界中の人々が自分の運命を知り、覚悟を持った世界を作ることだと思えます。俺がディオだったときは、それが美しい世界だと思いましたが、そんな先がわかった世界なんて……」

仗助「何が運命かなんて、わかってる世界なんて面白くねえしな」

ジヨルノ「自ら覚悟を決めるのと、他人から決めさせられる覚悟は違う。八幡ではないけれど、そんな覚悟はレプリカだ。暗闇の荒野に進むべき道筋を切り開くのは、自ら決めた本物の覚悟だけなんだ」

静「勇氣も同じ。定められた運命を進むだけの人生に勇氣なんて生まれえない。運命に立ち向かう恐怖を乗り越えてこそ、初めて生まれるものが勇氣」

億泰「俺には難しいことは分からねえけどよお、仗助と出会うまでの、兄貴の言っていることだけに従っているときは楽だったけど、今のように楽しくはなかつたんだよなあ。やっぱり良くも悪くも自分の決めた事の結果の方が納得できるつつうか、そういう事なんだよなあ？」

全員がそれぞれの想いを告げる。

承一郎「：君にも、守りたいものがあるんだね」

八幡「守りたいもの：：と言うよりは、共に歩みたいものですかね」

今度は仗助さんが質問してくる。

仗助「それで、承一郎。お前は一体何者なんだ？俺達の邪魔をしてきてはいたけどよ、ブッチ達とは目的が違うみてえだ。ここらで腹を割って話してくれなければ、俺達はお前をどうして良いか判断しかねる。こちらが腹を割ってお前の質問に対して包み隠さずに答えたんだ。特に、この捻れ者が珍しくな。差し障りのない程度には、お前の素性

を含めて話しちゃあくれないか?」

言外にここで話さないようならば二度と信用しない。仗助さんはそう言っていた。ならば、僕も話さなければならぬ。

承一郎「…少し良いかい? 依頼主クライアントに許可を得る」

八幡「依頼主?」

承一郎「そう、僕がこの世界に来たのはその依頼主のスタンド能力によって来たんだ」

八幡「スタンド能力?!?」

承一郎「ちよつと待っててくれ…連絡する」^{CALL}

僕は大統領に無線で連絡する。

ヴァレンタイン『どうした? 承一郎君』

承一郎「こちら一条、八幡一行と接触しました。こちらの素性を知りたいと言うんです…どうします?」

一応、八幡少年の答えは無線を通して聴いているだろうから、明確な指示を出すだろう。

ヴァレンタイン『ふむ…よし、私が出よう』

承一郎「…え? 今? マジですか?」

ヴァレンタイン『マジだ。私も少しSPW財団と協定を結びたいと思っていてな、私

が直々に出よう』

承一郎「…分かりました、それでは」

僕は無線を切った。

八幡「…それで、どうなった？」

承一郎「…なんか、自分が直々に出向くらしいよ」

八幡「は？出向く？」

承一郎「そうなんだ。実は僕の依頼主はかなりVIPな人でね、僕がこのホテルに泊まれたのも、彼のおかげなんだ」

八幡「…で？その依頼主の名前は？」

ヴァレンタイン「アメリカ合衆国大統領、ファニー・ヴァレンタインだ」

一同「P??」

大統領、ヴァレンタインはカーテンの裏側から姿を現した。

承一郎「…やれやれ、そのいきなり出て来るの、やめてもらえませんか？」

八幡「お、おい一条、もしかしてこの金髪ロン毛が…」

金髪ロン毛とは酷い言われようだな。

承一郎「そう、彼が僕をこの世界に連れて来た依頼主、ファニー・ヴァレンタイン。スタンド使いだ」

ヴァレンタイン「よろしく頼むよ、皆」

億泰「はっはー!」

億泰さん、あなたは水戸〇門に出てくる悪役か。

八幡「は、はあ…」

八幡少年もかなり混乱しているな。無理もないが。

承 一 郎 「大 統 領 の ス タ ン ド、
『dirty deed done dirt cheap』の能力はいわゆるパラ
レルワールドを往き来出来る能力なんだ。」

ジヨルノ「成る程、だから承一郎の存在が最近感じられるようになったのか」

ヴァレンタイン「…さて、私が承一郎君をこっちの世界に呼んだのはプッチ神父の『天
国に行く方法』の模索とそれが我が祖国に害があるかの調査させる為だ」

承一郎「僕はそれで四肢が消し飛ばされたりんだけどね…」

ヴァレンタイン「まあ気にするな。君は治るだろう」

承一郎「痛いものは痛いんだけど…」

ヴァレンタイン「まあそれはさておき、彼は信用して良い。非公式だが、政府からの
許可を得ている。それでなんだが、君達にも任務に参加して欲しいんだが」

八幡「俺達ですか?」

ヴァレンティン「その通りだ。目的も同じだし、私公認なら、支援も取れるしな。ちようどSPW財団と協定を結びたいと思っただけだ」

仗助「わかりました。目的も同じですし、SPW財団としても大統領閣下とのご縁が出来るのであればこれほど心強い物はありません。慎んで閣下との協定をお受け致します。申し遅れました。私はジョウスケ・ヒガシカタ。SPW財団及びジョースター不動産日本支部の代表の役を預かっております。プライベート故にこのような髪型で分かり辛かったかとは思いますが、以後、よろしく申し上げます」

じよ…仗助さんが自分の髪型の話を自ら触れている…だと…!??

ヴァレンティン「ん？確かにどこかで見た顔だとは思っていたが、ジョウスケ代表だったか。今は日本支部の代表だが、いずれは財団の次期会長とも聞いている。いや、ジョウスケ代表。私が勝手にこちらに赴いたのだ。むしろ非礼を詫げるのはこちらだ。楽にしてもらって構わないよ。こちらも協定を受け入れてもらって感謝する」

仗助「はい。寛大なお言葉に感謝の言葉もありません」

ふ…二人とも大人の対応だ…。

ヴァレンティン「さて、この作戦名は『ステアウェイ・トウ・ヘブン』と名付けられたものだが、こうしてチームの名前も決めておきたい。何か良い案はあるかい？」

承一郎「作戦名にかなりこだわりますね…」

ヴァレンタイン「気分が上がるだろう気分が」

八幡「…じゃあ、クリスタル・クルセイダース水晶っていうのはどうですか？」

承一郎「成る程、僕と静さんのスタンドの名前に水晶が入っているからかい？」

静「良いですねそれ！気に入りました！」

YEAH！ピシガシググツツ！と僕と静さんはハンドシグナルを交わす。

ヴァレンタイン「ふむ、よし！それでは指令を言い渡す！任務内容はプッチ神父の『天国へ行く方法』の阻止と、その手下達の殲滅だ！諸君、幸運を祈る！どジャアアア〜
〜〜ン」バサツ

こうして大統領は言いたい事だけ言つて国旗に包まれて消えた。なんなんだあの人は。

八幡「…嵐のような人だな、お前の依頼主」

承一郎「全くだね。それじゃあ改めて自己紹介をするよ。僕は一条承一郎、職業は学生兼傭兵のヤクザの養子さ。よろしく頼むよ、八幡君」

八幡「こちらこそよろしく頼む、承一郎」

僕は固い握手を交わし、結束を強めた。

おまけ

小町「ところで承一郎さん？」

承一郎「何だい？小町ちゃん」

小町「本場の波紋の修行に興味あると仰ってましたよね？」

承一郎「ああ、言ったけど……」

小町「今からやりましょうか？いえ、やって下さい」

承一郎「いや、今からじゃあ遅すぎだと思っただけ」

小町「だって、承一郎さんは任務とは言え、小町達を覗き見していたじゃあないですか？これで何もないのはちよつと不公平過ぎません？これの事もあるし」

小町は億泰さんをごそごそと漁り、小さなチツプみたいな物を取り出した。スカルズが億泰さんに仕込んだ盗聴器だ。

僕の顔に脂汗がダラダラと流れる。

小町「別にやりたくなければ良いですけど、その代わりお兄ちゃん達がジヨルノお兄ちゃんからやられていた罰ゲームを受けるか……」

小町はサンシャイン・ルビーを自分に重ねて出現させ、指先の赤石を僕に向け……

小町「承一郎さんがどこまでやって生きて耐えられるか試すのも良いですよ♪」
僕は顔を真っ青にして大汗をかいている。

小町「さあ、どれにします？」

承一郎「しゅ、修行で」

小町「そうですか♪それではこのマスクをどうぞ♪」

小町はガスマスクのような物を出した。

小町「エア・サブリーナ島名物、波紋強化マスクです♪それもこれは開発中の中級者用♪初級者用は波紋の呼吸ならば100%通しますが、これは30%オフにします♪これを付けてホワイトハウスを端から端まで10往復してください。あとゴミいちゃんもと
 ジョジョお姉ちゃんも」

ジョルノ「仗助さんにはそれが終わるまで、わさびを続行ですね」

ヴァレンタイン（無線）『良いよ。ただ、警備には連絡しないから、見つかったら本気で射つてくると思うから気を付けてくれ。健闘を祈る』

大統領オオオオオツ!

翌朝、アメリカの首都で若い男女の悲鳴と銃声が鳴り響いていたというニュースが世界中の新聞の一面を飾ったとか飾らなかったとか…

< || to be continued ||

トリプルコラボ！世間は意外と狭い

クリスタル・クルセイダーズ結成から一晩が経ち、翌朝7時。

僕達はバスに乗ってダラス国際空港まで藤崎忍さんや露伴先生達を迎えに来ていた。予定じゃあさつき到着した便に乗ってきているはずだ。

億泰「お、仗助、あれ露伴じゃあねえか？」

億泰さんが露伴先生を見つける。

僕は露伴先生のファンだけど、あのグイグイくるところかちよつと苦手だ。

未起隆さんと間田さんは杜王町に来た時に一回顔を合わせたぐらいだが向こうの世界では面識はある。

スージーさんが亡くなって以来（この世界では）、仗助さんのお袋さんもお祖父さんのお墓を東京へと移し、移住してからは杜王町へはあまり帰っていないので会うこともないらしい。

仗助「みんな、長旅お疲れ様。よく助けに来てくれたぜ。ありがとうな」

露伴「東方仗助。僕は君を助けに来たわけじゃあない。康一君に頼まれたから来ただけだ。後は八幡君にはまだまだ協力してもらわなくちゃあならない。ここで死なれて

は困るんだよ」

仗助さんと露伴先生は仲が悪い。どうやら昔に一悶着あったらしい。

助けに来てくれたのは感謝するけど相容れないものはどうしても相容れないようだ。

八幡「露伴先生、いくらでも漫画のネタなら捻出しますよ!なんなら今回の旅の記録も含めてまであります!」

露伴「本当かい?君は実に話の分かる男だ!やはり君とは波長が合うようだね。今度杜王町に来ることがあるならば、僕の家に来るかい?」

八幡「もちろんですよ!露伴先生!」

：八幡少年は露伴先生の漫画のファンだ。それも、露伴先生の本性を知った上でのファンだ。おなじ捻れ者同士で気も合うらしい。あの康一さんですら苦手意識をもっているのに…。

間田「やあ比企谷くん。久しぶりだね」

八幡「間田さん。今回は本当に有難うございます」

間田「僕と君の仲じゃあないか。ところで、急な旅だったんだろ?プリキュアの予約とか忘れていたんじゃないのかい?」

八幡「いけねっ!忘れていました!」

間田「やつぱりね。無事にこの旅が終わったなら、僕が予約していた奴をダビングし

て送るよ」

八幡「本当っすか！マジで助かりました！レンタル出るまで無理かなあとか思っちやっただんですけど、待たなくて済みそうです！」

間田「良いよ良いよ。君は数少ない理解者だからね。こんな事で良いなら、いくらでも協力するよ」

：プリキュアはマジで論外だと思う。

未起隆「仗助さん、億泰さん、八幡さん、こんにちは。今日はお迎えありがとうございます。私の力がお役に立てるように頑張ります」

仗助「ありがとうな、未起隆」

自称宇宙人の未起隆さんは杜王町の鉄塔男こと鋼田一さんと一緒に暮らしている。彼のスタンド能力（本人は否定）は人や物に変身する能力だ。

そして変身能力を持つ人はもう一人いるらしい。

忍「仗助、億泰。久しぶりね。あちしの事はおぼえてるかしら？」
億泰「おう！覚えてるぜ！何年も連絡しなくて悪かったなあ」

仗助「忍、よく来てくれたな」

忍「本当は最初は断るつもりだったのよ。でも妻が『行ってあげて、忍ちゃん。私なら大丈夫。きっと無事に帰って来てくれると信じてるから…』って言われちゃってね。

それにしても、そっちこそすごいじゃない？世界のSPWの次期社長とも言われているなんて。ニュースや新聞でもよく仗助の事が出ているわ。それにしても、関東にいるのなら、たまにはあちしの店にも来てくれたって良いじゃない。東京と千葉じゃ、すぐよ」

この人は藤崎忍。

口調が女の子よりも女の子っぽいのはオカマだからだそうだ。

そのことを出会った当時、周囲に隠していたらしい。

仗助「今回はよく来てくれた。助かったぜ、忍」

忍「水くさいこと言いっこナツスイングよ仗助。友情ってヤツア・付き合った時間とは関係ナツスイングなんだから。命を賭けて家族を迎えに行くダチの危機を見捨てて明日食うメシがウメエ訳が無いわ。それに、今となつては承太郎さんも、あんたのお母さんやホリイさんもあちしにとつてはダチよ。あちしが来るには十分な理由なのよ」

承一郎「そりや危険な目にや遭いたくねえけど、ここで何もしなかつたら男じゃあない。理由はそれだけで十分ってやつか。漢だな、藤崎さん」

忍「ノンノン、あちしはオカマよ。でもね、男の道をそれるとも、女の道をそれるとも、踏み外せぬは人の道、散らば諸友、真の空に、咲かせてみせよう オカマ道。これがあちしの信念よ楽ちゃん」

承一郎「楽？」

忍「あら？千棘ちゃんや小咲ちゃん、万里花ちゃんと一緒にうちの店に来た楽ちゃんじゃないの？」

僕はダラダラと大汗をかいてしまう。

J O J O（こ、こつちにも彼女達はいたのか！おまけにこつちの世界の俺は藤崎さんと面識があるのか！）

仗助「他人のそら似じゃあ無いのか？それとも、他人に化ける能力のスタンド使いがいるのかもな、忍みたいに」

他にもそこにいる未起隆さんや、スタンドが化ける間田さんのサーフィスみたいなのもいるしな。

そういえばプッチ側にも変身能力を持つ奴等がいたような…。それに気付いたらしく、陽乃も僕のように脂汗を流している。

承一郎「そ、そうですよ、藤崎さん」

忍「そうかしら？商売柄、一度来店されたお客様は忘れないように心掛けているのよ。特に楽ちゃん達は目立っていたから、そうだと思っただけと、おかしいわねえ」

あの呪い紛いのハーレムがこつちの世界の僕…楽にもあるのなら、それは目立つだろうなと僕は苦笑した。

承一郎「初めまして、藤崎さん。僕は一条承一郎。その楽さんという方は遠い親戚か

も知れませんか? 名字も同じですし」

親戚というより、別世界の本人だけどねと心の中で付け加える。

忍「そう? おかしいわねえ: あら、そっちのお嬢ちゃん達も前に来店して下さった子達よね? 特に男の子のその特徴的目はよく覚えてるわ。あと、その目が笑ってない笑顔の女の子も」

忍さんは八幡達を見て言う。

八幡「お久しぶりです。比企谷八幡です」

小町「妹の小町です」

いろは「幼なじみでハチ君の婚約者(仮)の一色いろはです」

陽乃「茅ヶ崎陽乃です」

忍「そう。じゃあ、改めて自己紹介するわ。あちしは藤崎忍。仗助と億泰とはダチよ。もつとも、ジョースター家の人達の大半はあちしにとつてダチになるわ。ジョセフのジイとは一度絶交しかけたけど。それにしても、幼なじみで婚約者ねえ。あちしも妻とは幼なじみだったのよ。従兄弟も幼なじみと結婚したわね」

世の中狭いものだ。ジョースター家の人達は康一さんが繋いだ仲らしく、八幡や陽乃らは店の評判を聞いて一度は忍と会ったことがあるらしい。

こつちの僕: いや、楽とも忍は会ったことがあると言うことだ。

本当に初対面なのはミスタさんと静さんくらいか？

…というか、ジョースターさんは何をしたんだ？

ジョルノ「忍さん、彼はグイード・ミスタ。僕の部下であり、友人です」

ミスタ「会えるのを楽しみにしてたぜ？ シノブ。俺はSPWイタリア支部で副支部長補佐をしているミスタだ」

静「静・ジョースターです。ジョセフ・ジョースターの娘で、仗助兄さんの妹です」

忍「ミスタさんと静ちゃんね、よろしくお願いするわね。静ちゃんの事は空条ホリイさんから聞いていたから、いつか会えればと思っていたのよ。会えて嬉しいわ。昔の詩織ちゃん…ええと、あちしの従兄弟なんだけど、詩織ちゃんにそっくりで親近感がわくわね。すごくカワイイ」

へえ、静さんの事は聞いていたのか。

静「ところで、藤崎さん。父は何をしたんですか？」

忍「それが、あちしの友達に古式さんという古式不動産の令嬢がいるんだけど、あのおじいさん、古式不動産の株を買い占めようとして騒ぎになって大変だったのよ。あの時は伊集院家も出てきて大変だったわ。伊集院家と古式家は家ぐるみの付き合ってたから。あちしもその件では間に立って大変だったわ」

そういえば一時期伊集院家と古式不動産が合同でSPWとジョースター不動産に抗

露伴「東方仗助。しばらく席を外す。詳しいことは後で話すから、待っていてもらって良いか？」

仗助「ん？まあ、そりや構わねえが、どうした？」

忍「まあ、大した事じゃ無いわよ。すぐに戻ってくるから心配しないで良いわ。行くわよ露伴先生」

そう言つて5人は去つていった。何をやっているんだ？

僕は仲間達と合流した後、マイクロバスに乗り込んだ。

ミスタ「俺はホテルで寝てるぜ。まだ疲れが抜けてねえんだよ」

億泰「俺もそうするぜ。あんなすげえホテルでまったりできる機会なんてそうそうねえからよお」

忍「あちし達も長旅で疲れているから、ホテルでゆっくりするわ」

陽乃「私達はショッピングに行くてくるわね。買い出しは頼んだわよ？」

いろは「たまには女子会も良いですねえ。マチちゃんもジョジョ先輩も一緒に行きませんか？」

仗助「つたくう。気楽で良いぜ。ジョルノ、八幡、承一郎。俺達はメリーランド州支部でミニバンの借用と買い出しに行くぜ。銀行にも行つておきたい」

承一郎「ミニバンの借用？マイクロバスじゃあ無いんですか？」

「ジョルノ、ミスタがいないですから、大型車両の運転手がいらないんだ。それに、買い出しにマイクロを使っていたのでは、小回りが利かなすぎて不便だからね」
僕達は各々の予定を言いながら去っていった。

変身するのは良いが真似る気がない

僕はアクトンクリスタルで透明になっっている間田さんと一緒に仗助さん、ジヨルノ兄さん、八幡少年達三人に変身した皆を待っていた。

仗助「待たせたな承一郎、借りてきたぜ。裏の駐車場に置いてあるらしいから、それに乗って買い出しに行くぞ」

仗助さんは間田さんのスタンド、『サーフェイス』^{上っ}が化けている。

ジヨルノ「旧式ですか。どんな車なんですかね？」

ジヨルノ兄さんは未起隆さんが自分のスタンド（本人は否定）、『アース・ウインド・ア
ンド・ファイヤー』で化けている。

話し方も似ているし、多分大丈夫だと思うけど…。

仗助「旧式なんだから、オンボロなんだろう。なあ、承一郎」

承一郎「仗助さん、失礼ですよ？それとジヨルノさんも、もう少し自然にしてください」

ジヨルノ「自然とはどういうことですか？私はこれでも自然ですよ？」

八幡「その段階で自然じゃないわ…ねえよ」

八幡少年は忍さんが能力で化けている。ちよつと口調が出てしまいうらしい。

僕は頭に手を当てるで頭痛に耐える。

承一郎「まあ、行きましよう。その前にコーヒーシヨップでコーヒーを飲みませんか？喉が乾きましたので」

僕はちよつと棒読みでそう言った。この人達は本人だとちよつとした自己暗示を某山猫風にかける（らりるれるろ！らりるれるろ！）。

八幡「コーヒーと言ったらアメリカンだよな？」

仗助「は？お前はアメリカに来てからMAXコーヒーが無いなんて言ってるって嘆いていたじゃあねえか？本当にどうしたんだ？そうツスよね？間田さん」

仗助さん！間田さんに話しかけるんじゃないッ！しかもいつも間田さんには敬語は使わないでしようが！

ジョルノ「MAXコーヒーが欲しいんですか？どういったコーヒーなんですか？」

八幡「いや『いらぬわ』。あれ、あち：俺は苦手なんだよ」

未起隆さん、今聞く事じゃあないでしょう！あと忍さん、発音がおかしいし一人称が俺になっていないですよ？

仗助「オメエ、MAXコーヒー好物だったのに何言ってるんだよ。『人生は苦いんだか

ら、コーヒーくらいは甘いくらいが丁度いい』が格言のように言っていただろうが」

承一郎「本当に大丈夫なんだろうか：不安しかない」

僕が思わず本音を漏らしてしまった。

とりあえず僕達はコーヒーショップに向かった。

コーヒーショップ——

店員（変身済みオインゴ）「来たぜ、ラバーソウル」

店員（変身済みラバーソウル）「まったく、準備は出来てるぜ。この田ゴ作。何を注文しなくても即座に対応できる。でも、無駄に終わるんだよなあ」

丸聞こえだ。吸血鬼の聴力を舐めないでほしい。究極生命体程ではないが、聴力には自信はある。

ラバーソウルということは、もう一人の店員はオインゴだな。

八幡「アメリカンを頼むわ」

砂糖たっぷりのカフェオレだつて言つたでしよう忍さん！

仗助「俺はレギュラー。砂糖とミルクも頼むぜ」

それは昔の仗助さんの趣味ですよ！ほとんど本人だという情報は嘘なのか？！？

これじゃあ良い大人がお子様みたいじゃあないかッ！

「ジョルノ「では僕も」

「仗助「オメエ、いつもはエスプレッソじゃあねえか？珍しいな」

「ジョルノ「私の舌ではどちらも大して変わりませんので」

「承一郎「た、たまには兄さんもエスプレッソ以外のコーヒーを飲みたいんじゃないかな？」

「イタリア人のコーヒーの好みはエスプレッソだつて言ったじゃあないか！仗助さんも突つ込まないで！」

「あ、民族的な知識は無いみたいだ、助かった…無知で。」

「承一郎「僕もレギュラーを」

「僕は飲めないのはわかってるので適当に頼んだ。」

「何か良からぬ事を考えてそうだな、この二人。」

「はあ…これじゃあ某警視庁のピルイーターみたいにラムネをかじる事になりそうだ。」

「オインゴ「どうぞ、レギュラー3にアメリカンです」

「オインゴ達はコーヒーを出す、女性陣のメンバーが入店してきた。」

「いろは「ハチ君？お茶なら一緒に向こうのカフェで飲もうって約束してましたよねえ？約束破って男子会なんてやっていたら、またマチちゃんからゴミいちちゃんと言われ

「ちやいますよ？」

「ゴミいちゃんとは……偽者だとしても酷い言い様だ。」

八幡「いやなに？ ゴミいちゃんって酷くない？」

忍さんの素が出ているが、八幡少年もそういう事をいうので違和感がないな。

小町「まあ、今回はしようがないよお姉ちゃん。承一郎さんが加わって、新しくお兄ちゃんが出来たみたいなものだし」

棒読みとは酷い……まあ偽者だから仕方がないかもしれないが……。

静「でも兄さん？ 私達との約束も守って下さい。承一郎さんと親睦を深めたいのは私達も同じなのですから。ハッチもジョルノ兄さんもずるいですよ？」

逆に静さんは抜群の演技力で会話をしている。全員このくらい上手ければなあ……。

いろは「ほらほら、ハチ君行くよ？」

八幡「ちよつとお、お金払っちゃったのよ？」

素が全開でしょ忍さん！

仗助「わかった。悪かったよ。一口くらい飲ませてくれても良いだろうがよお。つたく、グレートにタイミングが悪いぜ。行くぞ、ジョルノ、承一郎」

承一郎「わかりました。いくぞ？ 『八幡』」

僕は『八幡』というワードを強調して言った。

八幡「ああ、わかったよ。行くから怒るなよ、いろはちゃん」

いろは「ハチ君、いろはちゃんなんて何年振りですか？ハッ！もしかして口説いてましたか？嬉しいですけど…」

静「イーハイハ、ここは往来ですよ（この人はハッチじゃあないから）」

静さんが小声でいろはに注意する。

昼間からこの会話で砂糖を吐きそうだ。マジでコーヒーが飲みたいが、しようがない。

J O J O（まんまブーメランドぞ、それ。お前も同じようなものだからな）

いろは「あ、ごめんね（ごめんごめん。ハチ君ってジョースター家との一件以来、ちゃん付けで呼ばなくなつたから、懐かしくてつい）」

静「忍さんも気を付けて下さい。ハッチはイーハとマーチのことは呼び捨て、私のことはジョジョって呼んでいますから」

八幡「たまには懐かしい呼び方も良いかなつて思ったんだよ。いきなり過ぎたわ。悪い（ごめんなさいね。気が抜けていたわ。今度から気を付けるから）」

承一郎「それじゃあ、行こう。コーヒーが勿体ないから、店員さんが飲んで下さい（ホントに気を付けて下さい。露伴先生や八幡に怒られますよ？）」

僕は小声で八幡少年に注意をする。

八幡「わかつてるよ。あつ！」

八幡少年に化けた忍さんは立ち上がる時に手をカップに引つ掛け、落とすが、次の瞬間には時間差もなく落下したカップを空中でキャッチしていた。

その手からは一瞬だが、スタンドの手が出ていた。ザ・ジエムストーンで時を止めたな！

女性陣&承一郎「気を付けなよ！八幡！（無闇に時間を止めるなあ！スタンドも極力使うなあ！）」

八幡「悪い、不注意だった（便利だからつい使っちゃうわ）」

それにしても、スタンドまで使えるとは……すごい能力だ。

承一郎「（滅多に時間を止めないで下さいね。昔承太郎さんとトラブルあったみたいですから）」

ジョルノ「行きましょう。約束の店に行くんですよね？」

兄さんに化けた未起隆さんは我関せずで出て行った。

仗助「おい、ジョルノ。相変わらずマイペースなやつだな」

ナイススルー！サーフィス！

仗助さんに化けたサーフィス人形や八幡少年に化けた忍さんも後に続いた。

承一郎「お騒がせして申し訳ありません。これでお願ひします！お釣りは結構です」

僕は数枚のドル札を置いて去っていった。

一時間後、マクドナルド・ワシントンD・C・店——

僕達は仗助さん達が借りた車に乗る為に車が止まっていた場所に向かった。

…ボロいっていうのマジだったのか…。

仗助「あれ？ミスタと億泰じゃあないか。なにしてんだこんな所で」

承一郎「お昼時から少し前ですから食事じゃあ無いですか？」

仗助「それは見てわかるけどよお。ミスタは非常時以外はほぼイタリアンじゃねえか。何で今日に限ってバーガーなんだよ？」

承一郎「たまには気分転換もしたかったんですよ。きつと」

…この人達、マジで疲れるな…。

ミスタ(オインゴ)「そ、そうなんだよ。たまにはバーガーも悪くないよなって億泰と話していてな」

億泰(ラバーソウル)「そうなんですよね。先輩」

仗助「先輩？それにどうしたんだ？億泰。ミスタに敬…あいたつ！」

僕は仗助さんを小突いた。

承一郎「(余計な事しか言わないんだつたら必要以上に喋らないで下さい。相手がヤケを起こしたらどうするんですか?)」

億泰「あ、オメエらも昼はバーガーか？」

ジョルノ「ええ。これが本場の『ハンバーガー』ですか。興味深いですね」

承一郎「え、ええ。だからここに来たんですよ。本場のハンバーガーが食べたくて『ハンバーガー』なんて言ってるのは日本だけです！大抵の国では『バーガー』なんですよ！あなたは今、イタリア人なんですからね！未起隆さん！」

ジョルノ（未起隆）「バーガーですね？わかりました」

もう嫌になる！この人達ホントいやだ！本人で良いじゃあないですかッ！変身するのは良いけど真似る気ないでしょ！

承一郎「お二人も一緒にいかがですか？どうせならみんなで食べた方が楽しそうですし」

いくら嘆いていてもしょうがないので、僕から話しかける。

仗助「しつかしよう。ここじゃあ味気ねえよなあ。昨日の公園とかで食べば良くねえか？明るいし。変に暗いと間田みたいに暗い性格になっちまうぜ」

反対側に本物の仗助が見えた間田が、サーフィスに殴らせた事によつて、いきなり仗助さんが自分の頭を想いっきり殴っていたように見えた。

ミスタ「そうだな。一緒に食おうぜ」

八幡「決まりだな。早く行こうぜ」

僕は車にオインゴとラバーソウル達を乗せて走り始めた。運転は仗助さんだ。

ミスタ「俺が運転してもよかったんだぜ？この田ゴ作」

お前も真似る気ないのかラバーソウル！

仗助「何だよ？口が悪いな」

ミスタ「いやあよ、何でうちらが一番後ろのシートなのかと思ったんだよ」

真ん中のシートは二人しか座っていない。実は透明化した間田さんが座っているからだ。

承一郎「たまには良いじゃないですか？特にミスタさんなんて昨日はダウンしちゃった訳ですし」

ボインゴは…後ろの車で付いてきている。あの少年が免許を取るなんて成長したなと感心する。

もうすぐ正午の爆発の時間だ。降りなければとオインゴとラバーソウルが焦っている。

億泰「な、なあ！ちよつとトイレへ行かせてくれないか？実はさつきから我慢している」

ミスタ「お、俺もだ！ちよつと下ろしてくれ！」

オインゴとラバーソウルは騒ぐが…、

仗助「あ？もうじき着くんだから我慢しろよ。今路駐したら迷惑だろうが」
仗助さんが迷惑とか考えなさそうで常識的な事を言つて止める。

ガチャツ！

しかもご丁寧にドアロックまでしたのだ。爆発まであと30秒もない。

八幡「正午まであと10秒ね。もういいんじゃない？」

八幡少年に化けた忍さんはザ・ジエムストーンでドアをぶち壊して簡単には開かないようにした。

僕等は二人を振り替へつてニコニコしている。

オインゴとラバーソウルが訳がわからず固まっている。

俺がブラツディ・シャドウで間田さんを空間の中に入れた瞬間、

チユドーン！

俺と間田さんを除いた全員を巻き込んで爆弾は爆発した。

ボインゴ「お兄ちゃん！」

ボインゴは車を停めて爆発した車に駆け寄つた。

元々ボロボロだった車もつとボロボロになって大破している。

車の煙が晴れると、中には黒焦げのオインゴとラバーソウルさんが変身を解けて白目を剥いていた。どうやら生きてはいるらしい。

ジョルノ（忍）「あんたの体、凄いわねえ。あの爆発でも痛くも痒くもないわ」
忍さんは、最初未起隆さんに化けた後に八幡少年に化けたのだ。だから爆発で平気なのだ。

ジョルノ（未起隆）「気に入ってもらえて光栄です。ところで、あなたはだれですか？」
ジョルノ（本人）「どうみても刺客ですよ」

兄さんと仗助さんもやって来た。全て予定通りだ。

俺は空間から間田さんを抱えて出てポインゴを見据えた。

承太郎さんでオカマ道が炸裂したら絶対動画撮る

正午のワシントンDCの路上で俺達を乗せた車が爆発した。

いや、正確には仗助さんに化けた間田さんのスタンドのサーフィス、姿を消していた間田さん、ジオルノさんに化けていた未起隆さん、俺、そして八幡少年に化けていた忍さん、億泰さんとミスタさんに化けた敵のスタンド使い二人だ。

ボインゴ「何で？トト神の予言通りに行動したのに！」

30近い根暗そうな男、ボインゴが嘆いている。

まあ、漫画の通りに行動していれば、絶対に漫画の通りになるだろう。本当に能力で出た予言ならば。

今、ボインゴの周りには元の姿に戻った皆と、露伴先生、そして俺達10人のクリスタル・クルセイダーズの皆が取り囲んでいる。

一人を14人で取り囲むというのも酷いとは思いますが、元々はむこうがこちらを騙し討ちしようとしていたのだから、どちらもどちらかと思うが。

一体何があったのか？それは少し時間が遡る…。

バイツァ・ダスト！
負けて死ぬ

仗助「お前ら、何をしていたんだ？」

仗助さんが聞きます。

陽乃「詳しくはバスの中で話すわ」

小町達はバスに乗り込み、中で話し合う。

陽乃や露伴先生達がしていたのは、以下の事だった。

俺達と忍さんが変身出来る能力の話をしていた時に、九荣神の一人にそんな能力を持つた奴——無論オインゴだ——と予知の力を持つ弟——ボインゴの事だ——の事を思い出して、周りを見ていたら、ボインゴがいたらしい。

しかも、ラバーソウルもいたらしい。兄のオインゴと弟のボインゴはセットでいるとして、ボインゴの漫画による予知をどうにかする為、陽乃は露伴先生と変身出来る人達でボインゴの漫画に偽の予知を描き込んだのだ。

予知の内容はミニバンの中で八幡少年、俺、仗助さん、ジョルノ兄さん、ミスタさん、億泰さんが爆弾で重傷を負うというものだった。

陽乃「……という内容を露伴先生はトト神に書き込んだの」

陽乃は撮影した写真を見せて詳細を教えてくださいました。

八幡「つまり、仗助、ジョルノ、俺、承一郎が囷となつて奴等を引き付ければ、後は

勝手に自爆してくれる。そういう解釈で良いんですか？露伴先生」

露伴「そうだ。そして直前で君のジエムストーンで時を止めてみんなを連れて脱出する。これなら問題ないはずだと思うが、どうだろう」

八幡「うん…自分だけならともかく、四人全員を脱出させるとなると…」

確かに八幡少年一人だとキツイかもしれない。8秒という時間だと、自分だけが脱出するので手が一杯だと思う。

JOJO「ならば俺がブラッディシャドウでみんなを脱出させれば問題ないと思う」

八幡「承一郎…じゃない、一条か。それなら安心だ」

俺のブラッディ・シャドウでなら可能だ。

ちなみに一条とは俺のことだ。

静さんと被るので一条と呼ばれることになったのだ。俺は不服だが、それは仕方がない。

まあ、その時は一悶着あったが、小町とサンシャインルビーが重なって指先を向けると、俺は黙るしかなかった。

こういうった撃ち方だとルビークレーザーは外れないらしいし、いくら空間が強力でも空間を出す速さは光程速くはない。

忍「待って。みんなはここまで戦い通しよね？ここはあちし達変身組が身代わりにな

るわ」

仗助「おい！忍！」

忍「大丈夫よ仗助」

忍さんは右手で自分の頬を触ると未起隆さんに変身していた。そして未起隆さんの変身能力で八幡少年に変身した。

忍「この支倉さんの体なら、爆弾ごときではびくともしないのよ」

未起隆「ならば僕がジョルノさんに変身します」

ジョルノ兄さんに変身する未起隆さん。

間田「じゃあ、僕のサーフィスは仗助に変身するね。ただ、サーフィスは爆弾に耐えられるけど、僕自身は耐えられないよ？それにサーフィスは数十メートルくらいの射程しかないから、僕自身が近くにいないと駄目だ」

JOJO「ならば俺も一緒に行こう。どのみち変身組が一人足りないんだ。誰か一人は本人でないと駄目だから、俺が一緒に行こう」

仗助「すまんな忍、未起隆、間田、承一郎：俺達も近くにいるから」

忍「固いこといいっこ無しよ」

方針は決まったし、後は実行に移すだけだ。

まずは仗助さんがメリーランド支部に連絡をいれ、事情を含めて話す。その上で車の

注文をする。

仗助「ミニバンを一台頼む。今すぐ廃車にするくらいボツロボロの車で良い。請求は日本支部へ。あと、多分敵の襲撃で廃車になると思うから、手続きも頼む」

そして、作戦が始まり、現在に至る。

ボインゴ「何でトト神の予言は絶対なのに！」

忍「何が絶対よ！そんな能力にあぐらをかいているからあんた自身は大したことない大人になっちゃったのよ！」

忍さんは元の姿に戻り、ボインゴに詰め寄る。かなりのお怒りモードだ。

露伴「フアンを騙すようで悪いが、これは僕が細工をさせてもらった」

露伴先生はトト神をみせると、露伴先生が細工をした場所の下には本当の予言が出現していたが、もう既に時は遅し。

露伴先生のヘブンズ・ドアのお陰で疑問に思わないようにボインゴ自身が間違いに気付いていない。

ボインゴ「そんな！ずるいじゃあないか！」

JOOJO「ずるい？俺達がやっているのは戦争だ。戦争にずるいも汚いもあるか」

俺は色んな仕事をやってきたが、騙し合いなんて日常茶飯事だった。逆に情報が合っ

忍さんは承太郎のようなことを言っ、て、変身を解いた。

ちなみに俺は動画を撮っていた。こんな事を承太郎さんがしていたら、誰だってそーする。俺もそーする。

忍「どうだった？ 仗助。あちし達は役にたったかしら？」

仗助「途中、ヒヤヒヤしたけどな」

オインゴ『クヌム神』、再起不能

ラバーソウル『黄の節制』^{イエローテンパラス}再起不能

ボインゴ『トト神』再起不能

SPWの病院に搬送後、矯正施設入り

< || to be continued ||

4つの手紙と1つの矢尻

夜、ホテルウイラードコンチネンタル――

そこで僕たちは増援組と話していた。

仗助「え？オメエ達は俺達と同行する訳じゃあなかつたのか？」

露伴「ああ、僕たちは君達がフロリダについた後にするはずだった偵察やら調査をや
るための増援だったんだ。ここにいるのは、それ以外の別の頼まれ事を康一くんから受
けてここに来た。正確には忍くんが受け、その護衛をしていたんだ」

露伴先生が代表して答える。康一さんからの依頼？ いったい……

忍「あちしが受けている以来は届け物よ。正確には康一からの依頼ではないわ。イタ
リアからの届け物よ」

忍さんは携帯型の丈夫そうな金庫を取り出し、その中身を取り出した。

ジヨルノ「こ、これは……」

ミスタ「ポルナレフさんに預けていた……」

仗助「グレート！何でこれを送ってきたんだ！」

それはジヨルノ兄さんがポルナレフさんに預けていたスタンド能力を生み出す矢の

矢尻だった。

忍「これは康一から預かって来た手紙よ。ジヨルノちゃん。あなた宛にね」

兄さん宛の手紙？兄さんは何通かの手紙を受け取った。

差出人は。パツシヨ―ネナンバー2のポルナレフさん、イタリアのモデル兼女優の兄さんの大切な女性のトリツシユさん、ジヨ―スターさん、康一さんからのそれぞれの手紙だった。

兄さんは一つ一つを開けて朗読をする。まずは康一さんからの手紙だ。

康一『皆さん、康一です。そちらの状況はニューヨーク本部より聞き及んでおります。大変な状況と聞いていますのに、直接救援に向かえないことに歯がゆく感じております。皆さんは無事ですか？全員揃って再びお会い出来る事を祈っております。この手紙が皆さんの元に届いているということは忍くん達と無事に合流出来たということですね？一緒にポルナレフさん達やジヨ―スターさんからの手紙を同封します。皆さんの健闘を遠くの日本から応援しております。広瀬康一』

仗助「オメエが歯がゆく感じる必要は無いつてのによ。相変わらず、色々と気配りが出来るグレートな男だぜ？康一はよ」

億泰「直接来てくれなくても、応援を呼んでくれたのがどれだけ助けになったかわからねえ…今日なんて露伴達がいなければ危なかった…本当に助かったぜ、康一」

親友からの激励に涙する二人。露伴先生達も照れ臭く感じているようだ。

次にポルナレフさんからの手紙を開ける。

ポルナレフ『ジョルノ、ミスタ。そしてジョースター一行のみんな。本来ならばこれは私の手から直接君に届けるべき物だ。我が親友、承太郎の為に駆けつける事が出来ないのがこんなにも悔しいこととは思わなかった。なのでせめてもの私からの支援物資としてこの矢を君に託す。あのディアボロよりも危険な存在だったDIO。その狂信者たちのやることにコレが必要な時が来るかも知れない。使用する時は君の判断に任せる。決して暴走させることがないと私は信じている。承太郎と徐倫を頼む。そして必ず生きて二人とも私達の元へ帰って来て欲しい。親愛なる我がジョジョへJ・P・ポルナレフ』

ミスタ「ポルナレフさん：安心してくれよ。我らがジョジョは必ず連れて帰りますよ。二人揃って……」

ジョルノ「この矢を、絶対に間違った方向へ使わないことを誓います。ありがとう、ポルナレフさん」

兄さんとミスタはこの矢を託してくれたポルナレフさんから確かな覚悟と信頼を受け取ったようだ。

次はトリツシュユさんからの手紙だ。

「ジョルノ」!!!

多分、かなり!朗読するのが恥ずかしいんだらうな。朗読しようものなら、特に年頃の子達が沢山いるこの場で、何を言われるかわかったものじゃあないってくらいに。

こんなところも、こつちの兄さんと同じだなと僕はニヤニヤしていた。

次はジョセフ・ジョースターさんからの手紙だ。

兄さんは少し躊躇った後、ジョースターさんからの手紙を開けた。

ジョセフ『仗助、ジョルノ、ジョジョ、そして新たな家族の八幡、いろは、小町達よ。報告は聞いておる。どうやら、25年近く前のワシらが情けをかけていたもの達が再び現れたようじゃな。甘かったワシらの後始末を任せる形となってしまうて申し訳なく思う。じゃが、お前達ならば、無事に乗り越えてくれるとワシは願っておる。そしてジョルノよ。ポルナレフから預けられたそれを、お主なら正しい時に正しく使ってくれると信じておる。じゃから、ワシの可愛い子達や孫達をくれぐれも頼む。そしてお主も無事にワシらの元へと帰って来て欲しい。ワシらにとつて、お前もワシらの大切な家族じゃ。決して無理はせぬようにな。頼んだぞ。ジョセフ・ジョースター』

ジョルノ「ジョースターさん……」

至つて普通の手紙だった。家族を案じ、激励を込めた手紙。

小町宛にもう一枚の封筒が同封されている。

ミスタ「どうした？ ジョルノ。もう一つの封筒を見て固まっちゃまって。なんか小町宛っぽいじゃあないか？」

ミスタさんが兄さんから手紙を奪った

小町「小町に？ ジョセフから？ どうせまたろくでもない事をして小町にお説教されることでもしたんでしょ？ ジョセフはホントに昔から……」

小町は挟まれていたもう一枚に目を通す。

小町「っ！」

じゆうっ！

見ると小町が持っていた使い捨てのプラスチックのフォークを波紋の力で溶かして握り潰した。

小町「……………」

小町は熱で火傷するのも構わず、ただの石油製品の固まりと化したそれを握ったまま、険しい目付きで手紙を凝視し、そして手紙を握り潰して灰皿に置き、ライターで火を付けて燃やしてしまった。

八幡「小町！」

小町「……………」

仗助「クレイジーダイヤモンド！」

仗助さんは小町の火傷を治療した。だが、いつもならお礼を欠かさない小町なのに、今は様子がおかしい。いったいジョースターさんの手紙には何が書かれていたのだろうか？

八幡「小町！おい、どうした！」

小町「え？ゴメン。どうしたの？お兄ちゃん」

静「もう！どうしたの？……は私達の台詞ですよ！どうしちやったんですか!? マーチらしくもないです！」

小町「……気にしないで静。何でもないので。私とジョジョだけが今は知っていれば良い内容だから」

小町の一人称が『私』となり、ジョースターさんを『ジョジョ』と呼び、静をフアー・ストネームで呼ぶ。

明らかに異常だ。一体ジョースターさんの手紙には何が書かれており、彼女は何を知っているのだろうか？

いろは「マチちゃん？」

小町「………ほんつと、ジョセフはろくでもない事ばかり！帰ったらお説教しなくちゃね」

いろはの呼び掛けにかなりの間を開け、小町は何事も無かったようにいつもの態度に

戻った。

しかし、絶対に何かある。今は僕達にも言えない、小町だけが知る何かがある。微妙な雰囲気最後まで引きずったまま、その日は解散となった。

翌朝、ダラス空港――

忍「じゃあ、仗助。一足先にフロリダへ向かってるわ。でも、なるべく早く来て頂戴ね？あちし達はあくまでもサポートなんだから」

届け物を終わらせた忍さんと露伴先生達は当初の予定通り、藤崎沙織さんが待つ先行組と合流すべく、ダラス空港へとやってきていた。

僕達はその身送りだ。

たった一日だけだったけど、彼らのお陰で厄介な敵を三人も倒すことが出来た。彼らには感謝してもしきれない。

忍「そうそう、八幡ちゃん？」

八幡「??」

忍「(小町ちゃんをよく見てあげて。あの子は何か重要な事を一人で抱え込もうとしているわ。兄である八幡ちゃんがよく見てあげて。そうじゃないと……)」

忍さんは小声で八幡少年に話しかける。僕には少し聞こえたのだが、本来部外者の僕

が口を出す必要はないと判断して、何も言わなかった。

忍「大切な物を失うことになるかも知れないわ。あちしがただの高校時代の同級生を失ったときでも味わった悲しみとは比べ物にならないくらいによ」

忍さんは少し厳しめの目付きで八幡少年を見た。

八幡「ええ、わかっています。小町には気を配っておきます。俺が前世で喪った者達のようにならないように」

< || t o b e c o n t i n u e d ||

誇り高きギャンブラーその①

ダラス空港で露伴先生達を見送り、バスへと戻った僕達は、再びミスタの運転で州間高速95号線へもどり、フロリダへと向けて出発した。

なお、露伴先生との見送りでは仗助さんと露伴先生との仲はまた一つ、溝を作った。

あのボインゴのトト神の絵を真似た写真を見たときに、仗助さんが「酷い絵」と言ったのを聞いた露伴先生が突っかかってきた。

露伴『君達を助ける為に僕がプライドを捨ててまで、あのセンスの無い絵を描いたというのに、東方仗助。君は僕をどこまでバカにすれば気が済む?』

仗助『いやいや、そんな気は全くねえって!あのトト神とかいう漫画の絵が酷いって言ってるんだよ!』

露伴『そんなことを言いながら、君は僕をバカにする。そういう男だよ。君は』
とりつく島の無いとはこういうこと。

仗助さんの言い分をまったく聞かないで露伴先生は去って行ってしまった。

一度こじれ、十何年も経った今でも修復されない仗助さんと露伴先生の仲は、多分ずっとこじれたままなのだろう。

高速道路を走って数時間。バスはメリーランド州からバージニア州リッチモンドへと差し掛かった。

ミスタ「悪い、もうじき昼時なんだが、この辺りで一旦高速を降りていいか？」

仗助「またか？どうも出発からお前の昼時を狙われるパターンって多いんだよなあ。ピストルズを説得することは出来ねえのか？」

すみません、それ僕のせいなんです。スカルズ兵達を強襲させちゃったから…。

ミスタ「そうは言ってもよお。リッチモンドを過ぎればピーターバーグとかまで行かないといけないだろ？そうなるとピストルズも拗ねるんだよ」

ピストルズ「ソクナコトニナツタラ脳汁ブチマケテヤルゾ！チクショー！」

ピストルズがうるさくて仕方がないからリッチモンドで降りることにしたわけだが…、

正直、あまりリッチモンドには寄りたくなかった。ここにはダウンタウンがある。

昔ほどでは無いが、バージニア州のダウンタウンは治安が悪いことで有名だった。今でも決して良いとは言えない。

まあ、そういうったスラムやダウンタウンはどこにだつてあるものだが。

仗助「とりあえず、インターの近くで済ませるぞ。あまり時間を掛けてはいられないからな」

バスはリッツモンドで降りて近くのレストランで食事を取ることになった。

ミスタ「チキン料理店？イタリアンじゃあねえのか？」

ジョルノ「ミスタ。あなたの都合で急いでいるところを昼食にする事になったので

す。贅沢は控えて下さい」

億泰「ハイウェイからすぐの所にレストランがあっただけでもラッキーだよな」

ミスタ「わかったよ。そこで食べれば良いんだろ？」

ミスタさんはやつと渋々そこで食べることにした。

最初は文句を言っていたミスタさんも、食べ始めたら文句を言わなくなった。

やはり、スピード重視なのはわかっているのだろう。

早めに食べ終わった億泰さんはピンボールで遊んでおり、隣の台の男と楽しそうに盛り上がっている。

隣の台の男「では、あなたはこの私との勝負に魂を賭けますか？」

億泰「魂って根性とかそういうものか？いいぜ、俺の根性を見せてやるよ」

隣の台の男「グッド、では、オープン・ザ・ゲーム」

八幡「あつ！バカ億泰！」

億泰がピンボールを始めたところで食べ終えた八幡が叫び声をあげる。

ヤバイ、あの台詞は……！

億泰「ああっ！負けた負けた！やっぱりよう、興味本意でやったゲームじゃ長持ちしねえ……よ……な……」

男——ダニエル・J・ダービーからスタンド、『オシリス神』が出現し、億泰の魂を掴みあげる。

仗助「億泰！」

陽乃「無駄よ！種や仕掛けはどうあれ、あのスタンドにゲームで負けた事を認めてしまったが最後、負けた者の魂は捉えられ、コインにされてしまう！もしも直接攻撃してしまつて殺してしまつたら、億泰はもう2度と元には戻らない！」

八幡「ちっ！気付くのが遅かつた！やっぱりお前だったのか。オシリス神のダニエル・J・ダービー！」

父が初めて出会つた『魂を掴む事が出来る』スタンド使い。

遊んでいる億泰に賭けをそうと感付かせずに持ちかけてスタンド攻撃するたあ中々やる奴だ。

このギャンブラーにゲームで勝たなければ億泰が助かる道はない。なのに……

ジョルノ「ああ、敵の攻撃にやられてしまつたんですね？油断しているからです」

ミスタ「気の毒だけでしょう。もう時間がねえから、俺達は見捨てるぜ」

ジョルノ兄さんとミスタさんはやられた億泰を放つて店から出ていった。

特にミスタさんはあなたが原因だろう！

今度は仗助さんがダービーの前に立つ。

仗助「今度はチンチロチンで勝負だ！」

チンチロチンとはどんぶりにサイコロを振り、出た目の役で勝負を決めるゲームだ。

ダービー「良いでしょう。その勝負に魂を賭けますか？」

仗助「良いぜ、賭けてやるよ！」

まずは仗助さんが親だ。サイコロを3つ振る。

出た目は「3、3、5」の微妙な数字だ。最後の5が3なら3のアラシで無条件の勝ちだったのだが。

ダービー「次は私ですね」

ダービーが振ると「4、5、6」のシゴロ。2倍役で負けだ。

ダービー「いきなりすみませんね。次は私が親です」

ダービーが振る。「1、2、4」の約なし。

最後の4が3ならヒフミで無条件の2倍勝ちだったのに。

次は仗助さんだ。「2、2、4」の約なし。1の差で俺の勝ち。

だが、さっきのシゴロ分だけ仗助さんの負けだ。

次は仗助さんの親だ。「2、5、6」だ。微妙に1つだけ外れる。

次のダービー。「3、3、3」のアラシ。三倍負けだ。

こんな感じで微妙な勝ちを交えながらもジワジワと役を食らって追い込まれる仗助さん。

イフミとかダービーが時々やるが、ここぞというタイミングでアラシとかシゴロとかの大役を食らう。

この段階になって仗助さんも何かおかしいと思い始めたようだ。

仗助「テムエ：何かをやってやがるな？このダイスがイカサマダイスとかじゃあないよなあ！」

ダービー「なら、何故私の方もイフミとかの負け役を出しているのですか？」

仗助「疑われない為の手法なんかじゃあねえのか？」

ダービー「ふむ。では、私をボデイチェックでもしてみますか？」

そう言われてボデイチェックを試みるが、場にあるダイス以外のダイスが見当たらない。

仗助「でてこねえ！」

ダービー「そんな物に私が頼るとでも思っていたのですか？私クラスのギャンブラーともなればダイスの目を自分の思うようにすることなど可能なですよ？サイコロの

ギャンブルを挑んだ段階であなたは最初から負けていたんですよ」

やはりか。ダービーは承太郎さんに敗れる前までは負け知らず、無敗のギャンブラーだったのだ。

熟練のディーラーがルーレットで好きな色を出せるのと同じように、ダービーもそのような事が可能なだろう。

仗助さんはの心の中で敗北を認めてしまい、ダービーのスタンドによつて魂を抜き出され、コインにされてしまった。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

誇り高きギャンブラーその②

仗助「ちく…しよ…う…」

静「兄さん！」

億泰さんが続いて仗助さんまでコインに変えられてしまい、静さんは取り乱した。

この場において、機転も度胸も演技力も頼りになる静さんの唯一の欠点。

それは仗助さんの事になると周りが見えなく成ってしまうこと。

とそんな時に、僕の耳に何か聞こえてきた。

ジョルノ『ミスタ、大丈夫ですか？』

ミスタ『ああ、俺のピストルズならイカサマなんてちよろいもんだぜ』

成る程、そういう事か。確かにピストルズは弾丸をパス回しが出来る程のスピードな

ら、イカサマなんて簡単に出来るだろう。

後は、どうピストルズをダービーに近づけるかだ。

八幡少年は論外だ。万が一を考えると簡単に出る訳にはいかない。

敵の狙いは八幡少年の魂とスタンドだからだ。

ここで八幡少年が負けたりして魂をコインに変えられてしまつては元も子もない。

どうやらいろはも無理なようだ。

勝負事には向いていない性格なのかもしれない。

いろはと僕の目が合う。ここでアイコンタクト。

いろは『承一郎先輩、お願いできますか?』

承一郎『わかった。でも、僕よりも適任は…』

僕はJ O J Oに入れ替わった。

J O J O『こういうのはむしろ俺の方が適任だ。承一郎でも構わないのだがな』

いろは『お願いしますね?』

俺なら力押しだけで無く、機転もきいて、手先も器用だ。

ダービー相手にも、引けを取らないだろう。

J O J O『兄さん、ミスタさん』

俺はブラッディ・シャドウの空間を繋いで二人に話しかける。

ジョルノ『承一郎、君は話を聞いていたのかい?』

J O J O『耳が良いからな。それより、ピストルズのイカサマ、俺がダービーに近づ

けよう』

ミスタ『出来るのか?』

J O J O『可能だ。勝負を上手く持ち込めばな』

ジヨルノ『それじゃあ、頼むよ』

JOJO『承った』

俺は空間をしまい、ダービーの前に立つ。

JOJO「今度は俺が相手になろう」

ダービー「裏切り者のあなたですか。勝負内容はどうしますか？」

JOJO「ポーカーだ。結構得意な方だな」

ダービー「正気ですか？私はトランプの賭け事……とりわけポーカーは得意中の得意なのですよ？……と、以前なら言っていたでしょう。ですが、20年前の承太郎との勝負の時にはその驕りが敗北の原因でした。ですから私は得意なポーカーでも全力であなたに挑みます」

承一郎「良い心掛けた。20年前の復讐者共が八幡誘拐の任務を担っているようだが、どうも間抜けばかりで同じ手段が通用すると思っている奴ばかりだ。少しでも頭を使った奴等と言えば『太陽』のアラビア・ファツクくらいじゃあないか？運がなかっただけで、上手くいっていれば八幡達はやられていた可能性が高かったんだからな」

ダービー「20年前の復讐者達……ですか。確かにそうでしょうね。私もその内の一人になりますか……。私も20年前の敗北以来、どんな勝負に勝っても満たされる事はありませんでしたから。あなた方に勝つことで、初めて私は満たされる。そう思い、私は神

父やあのシスターの誘いに乗ったわけです」

ダービーは未開封のトランプを取りだし、テーブルに置いて未使用のトランプであることを示した。

ダービー「20年。今この時の為に私は技を磨き、この場にいる。承太郎との敗北で身を崩してきた私は病魔に冒され、もう残り命も僅かだ。私は今この時の為に残り人生を賭けている！さあ、一条承一郎！あなたはこの私を相手に、魂を賭ける覚悟がありますか！もう後がない、ここで命を尽き果てる覚悟がある私に対して、覚悟があるのですか！」

ものすごい気迫と覚悟だ。

これまで八幡一行を邪魔してきた人達とは一味も二味も違う。

JOJO「覚悟する者は美しい…か。あんたの覚悟、確かに受け取った。ならばチップを使った通常ルールなどいらぬ。たったワンゲーム…互いのイカサマを使った勝負でケリをつけよう。ノールックでノーチェンジ。それがあんたとの覚悟を受け止めるに相応しいゲームだ。その勝負に俺と承一郎、俺達二人の魂を賭けよう！」

八幡「俺もここで承一郎に魂を賭ける。ここまでの覚悟を出されたら、後ろで見ていただけだなんて俺には出来ない。承一郎が負けたら俺達の負け、あんたらプッチの勝利だ」

俺はダービーの覚悟を受け止め、勝負に出る。そして、八幡少年も……
イカサマ同士の勝負なんて、普通ではあり得ない。

だが、この勝負はそれでこそ相応しい。何故かそう思えてしまえるから不思議だ。

ダービー「良いでしょう。ここまで堂々とイカサマ宣言されれば逆に清々しい。この勝負、あなたのイカサマを私が見破れるか否か……という訳ですね。わかりました。私の命を賭けた勝つても負けても最後の勝負、受けましょう。オープン・ザ・ゲーム！」

俺は会話の中で空間をダービーの腕の近くに広げ、ピストルズをダービーの腕の近くに張り付かせる。

ダービーはカードを配り始めた。

流れるような手つきでカードを配る。普通ならイカサマが行われているなんて思わない。

しかし、俺は見破ることに成功した。

JOJO「古い手では有るが、確実な手段、セカンドデールだな」

小町「セカンドデール？」

小町が頭の上に疑問符を浮かべる。

八幡「通常、カードを配るとき、一番上のカードを配る物だが、セカンドデールは配っている途中で素早く二枚目のカードを相手に配り、自分の手元に置きたい上のカー

ドを持ってくるイカサマだ。こんな高度なレベルの物を見るのは初めてだがな」

八幡少年はセカンドデイルと言うものを知らない皆に説明をした。

ダービー「グッド！よく見破りました。卑怯とは言いませぬかね？」

J O J O「そもそもこの勝負はイカサマを使うことが前提の勝負だろ？むしろ使わなくてどうするんだ？」

八幡「一条はあんたの覚悟を尊重して勝負を受けた。むしろ使わない方が怒るまである」

普通ならイカサマはバレた段階で負けだが、この勝負はむしろ使わない方が失礼だ。

J O J O「さあ、俺の方のイカサマは見破られたか？その上で封殺できたか？」

ピストルズは仕事を充分果たしてくれた。後は、ダービーがイカサマを見破ったかどうかだ。

ダービー「……………」

ダービーは黙った。

いろは「皆さんは見破れました？」

小町「……………多分、自信は無いけど」

陽乃「私は見破れなかったかな？悔しいけど」

静「私も見破れませんでした」

八幡「使った。俺には見えた」

ダービー「ブラフを使うのも1つのイカサマですから、それもありませんね。20年前も私は承太郎にブラフで敗れました」

確かに20年前、ダービーは承太郎さんに仲間の魂、終いには自分の母の魂をレイズさせたブラフに敗北した。

JOJO「俺がイカサマを使ったか使わなかったか、確かめる方法は簡単だ。カードをめくれば良いんだからな。もしも俺のイカサマがブラフならば、コールした段階であんなの勝ちだ。俺のイカサマはブラフ。それがあなたのコールで良いのか？」

ダービー「私のセカンドデイルのままならば、あなたの手元にあるのはダイヤとクラブのAのワンペア。一方私の手元にはスペードのロイヤルストレートフラッシュです」

JOJO「さて、本当に『ブラフ』がコールで良いのか？それとも、何かのイカサマを使用したかを当てるか？」

ダービーは汗をかきながら黙った。ダービーは見破れなかったようだ。

ダービー「参りました。『ブラフ』でコールするしか無さそうですね。私にはわかりませんでした」

JOJO「その潔さ、あんたはかつて承太郎さんと戦った時よりも確実に強くなって

いる。俺はあなたの覚悟を尊敬する」

ダービー「最後ですから開き直っているだけですよ。それでは、そちらからお願い出来ますか？」

J O J O 「ああ」

俺は1枚ずつめくっていく。

ハートの4、ダイヤの2、スペードの4、ハートのA、クラブのA。

ダービー「やれやれ。本当にイカサマを使われていたようですね。ワンペアだったはずがツーペアになっているではありませんか。それでは私の方の確認をしましょう」

ダービーも俺と同じように1枚ずつめくっていく。

スペードの10、スペードのJ、スペードのQ、スペードのK…。

ダービー「ここまでではロイヤルストレートフラッシュの手札ですね。仕込んだのがあとすればこの最後の1枚…ですか」

J O J O 「あなたの言うとおり、ブラフならスペードのAだ。さあ、見てみるが良い」
ダービーは最後の1枚をめくった。

中はスペードの9…。

ロイヤルストレートフラッシュではないが、スペードのストレートフラッシュでダービーの勝ちだ。

J O J O 「チツ：最後の最後で運に負けたか。俺達の負けだな」

八幡「どこまでもギャンブルの神に愛された男だ。まさかこんな結果に終わるとはな」

俺達の魂が抜かれ、コインにされてしまった。

ダービー「本来ならば、ここで私はこのコインを持ち帰り、任務を達成。私は満足して逝けば良いのでしょうか：」

ダービーさんは指をパチンと鳴らした。

すると、コインは八幡少年、仗助さん、億泰さん、そして俺達の魂となって体に帰っていききました。

仗助「あれ？俺は：：」

億泰「助かった：：のか」

八幡「だかなぜ？」

ダービー「確かにポーカーとしてのゲームでは私の勝ちでした。ですが、この勝負はポーカーとしてのゲームではなく、私とあなたのイカサマを見破るゲームでした。私は一条承一郎。あなたのイカサマを見破る事は出来ませんでした。ただ運に助けられただけです。こんな勝ち方で勝負に勝ったなどと言ってしまったのは、私のギャンブラーとしての誇りに傷が付いてしまう：：誇りを傷付けてしまってまで勝ちを誇るくらいなら、

誇りを持った敗北を私は望む。ただそれだけです…最期に聞かせて欲しい。一条承一郎。あなたのイカサマとはなんだったのですか？」

J O J O 「あなたの手を見てください」

私達とダービーさんは彼の手を見ました。

N o . 6 「オレタチノ事ヲワスレテモラツチャコマルゼ」

彼の腕にはミスタさんのスタンドが張り付いていた。

J O J O 「セカンドデイルをやったとき、ピストルズが一枚目と二枚目のカードも細工していたのさ。だから、俺の手元には三枚目のハートの4が、あんたの手元には二枚目のスペードの9がカードが行っていた。まさか二枚目のカードがスペードの9で、ストレートフラッシュが完成するとは思わなかったがな」

ミスタ「あの場面で俺達の企みに気付き、信用してくれるとはやるな、一条」

出ていっていたはずのミスタさんが再度入店してきました。

J O J O 「耳が良いので、ピストルズに取り付くように指示を出していたのに気づいてました。ピストルズならば、ノールックでカードを配るダービーさんの一瞬の隙を突いてくれると信じてました。弾丸をパス回しできるならば、セカンドデイルの隙を突いてくれると」

ダービー「仲間の絆にやられた…ということですか…」

JOJO「万全のあなたならば、カードがずらされていた事に気付かれていたのかも
しれない。病魔で指先の感覚が鈍っていなければ、感覚の鋭いあなたには通用する手
はありませんでした。本当にあなたは誇り高い強敵でした」

ダービー「最高の勝負だった。これで思い残すことはない。負けて清々しいと思えた
のは最期のこの今だけだった。一条承一郎、そしてジョースター達よ…感謝する」

ダービーからの死の気配が強くなる。

だが、聖女は敵であるこの男にも情けをかける。

いろは「ナイチンゲール・エメラルド！エメラルドヒーリング」

ダービーの血の気が失せた身体が、生気を取り戻した。

ダービー「私を蝕んでいた病が…何をしたんです？」

いろは「私のエメラルドヒーリングは病気とかの能力にも効果がある治療能力です。
勝手に失礼ですが、あなたの病気を治療させて頂きました。後は栄養を蓄え、ゆっくり
休養すれば、あなたは助かると思います」

ダービー「何故、私を治療したのです？私はあなた方の敵ですよ？」

そう、彼は俺達の敵だ。だが…、

いろは「あなたの誇り高いギャンプルへの精神に、何故か敬意を払いたくなりました。
ただ、それだけです」

これが聖女。父の記憶で見た慈愛の女神像そのものに思えた。

ダービー「…完敗だ。私は君達の絆と誇り高い精神に心から敗北を認めよう」

ダービーはカードを片付け、そのカードを自らのポケットにしまった。

ダービー「このカードは君達の誇り高い精神に敬意を表し、私の今後の誇りとして宝にする。もう私はスタンドでチップをコレクションにすることもない。ただのギャンブラーとして、渡り歩こう。そして、一色いろは。君には大きな借りが出来た。もし君が窮地に困ることがあれば、私は私の出来る範囲で、君の助けになると誓おう、私の魂を賭けて」

ダービーは荷物を持って立ち上がった。

ダービー「また会いましょう。誇り高きジョースター達よ。私が言える事ではないが、いつかまた、ただの純粋な勝負を楽しみたいものだ。君達の旅が無事に終わることを願っている。さらばだ」

ダービーは、そういつて晴れ晴れとした表情で去っていった。

誇り高きギャンブラーに幸があらんことを…。

こうして波乱に満ちた昼食は終わりを告げ、俺達はフロリダへの旅を続ける事になった。

ダニエル・J・ダービー『オシリス神』

自らの誇りを貫き、敗北を認め、旅に出る。

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

前世持ちの奴って若返ったら前世になるってマジ？

昨日は色々大変だった。

小町が気分転換に外に出た後、八幡少年が嫌な予感がすると行って走って行ったのだ。

このただならぬ雰囲気全員が小町と八幡少年を探しに町へと搜索に出た。

八幡少年の嫌な予感的中していて、小町は敵の刺客、ミドラーに襲われていた。

しかも、いつもとは明らかに違う小町は敵の攻撃によってあわやの事態に陥っていたらしい。

間一髪のところまで小町を救出した八幡少年。

その後の事は私も見ていた。ミドラーの事情も。

仗助『血の繋がらない子供の為に、命を張った尊敬できる人を見捨てるほど、うちの家系は鬼じゃあ無いっすよ。それに、うちの家系ってそういうのが多いんっすよね。例えばそのエリザベス・ジョースターさん：俺から見たら祖母なんっすけど、元々は孤児だったのを曾祖母が引き取って面倒を見たらしいですし、『俺の妹もそうっす』。だからわかるんすよ。ミドラーさんの覚悟が本物かどうか。だから俺達はあなたを保護す

るって決めたつスよ。グレートつスよミドラーさんの覚悟』

仗助さんの言葉は、俺に突き刺さった。

俺はジョースターの人間だが、母を幼い頃に失った身だ。

あの時父^一さんや集英組の皆と出会わなかったら、俺は多分自分が何者かも分からずに、のたれ死んでいたのだろう。

そう考えるとゾツとする。

だが、ジョースター家の人間ではない静さんの方が、そういう引け目を感じているんだろう。

朝、ホテル内——

ホテルの小会議室を借りきって小町は全員を集めた。

小町「みんな。心配をおかけしてごめんなさい。実はジョセフからの手紙の事ですつと悩んでいた事があって：それで考え事をしていたんです」

いろは「マチちゃん。それは解っているの。でも、私たちが知りたいのはその内容。何でマチちゃんがあればほど取り乱したのか、ジョセフさんの手紙には一体何が書かれていたのか。それが知りたいの」

いろはは珍しく素で小町に話しかける。

小町は頷いて封筒を取り出す。

小町「うん。それをこれから皆さんにお話ししようと思つてこの小会議室を借りました。これがジョセフおじいちゃんか書いた手紙。仗助お兄ちゃんが後で気になったから、灰から元に戻しておいてくれました。内容についてはプライベートを考慮して見なかつたみたいだけど」

そう言つて小町はプロジェクターを起動させて、その内容を壁に写し出す。

内容についてはメキシコ支部の機密に関わる事件と柱の一族のことだった。

石仮面を創り出した闇の一族の生き残り。ジョセフさんが最初に戦つた柱の男。

小町「これが、おじいちゃんからの手紙の内容です。そして承一郎さんに確認したいことがあります」

小町は真剣な目で僕を見る。

承一郎「なんだい？」

小町「OCC（オペレーション・クリスタル・クルセイダーズの略）が発動する以前、承一郎さんはあちらがわにも潜入していたとおっしゃってましたが、間違いありませんか？」

承一郎「ああ、間違いない。どちらの事も知っていなければ、対等の判断なんて出来ないからね。君達の邪魔をしていたのは申し訳なかつたけど」

小町「それは過ぎた事ですから、もう構いません。問題はこの写真の人物に見覚えがないかを確認して欲しいのです」

小町はプロジェクトをジョースターさんの手紙から同封されていた写真に替えた。そこに写っているのは美人だが、どこか狂気に満たされている瞳が特徴の女性の写真だった。

僕には見覚えのある顔だった。

承一郎「こ、こいつは…綾瀬絢斗！僕が接触していたときには既にサンタナを奪っていたのか!!？」

僕は驚きを隠せなかった。

八幡「考え得る限りの最悪の事態だな…」

承一郎「あの女が何を考えているのかは分からないけど、サンタナの件も含めて警戒をしないとイケないな」

あのサイコパスな女の考えなんて、正直理解したくもないが…。

仗助「とりあえず、考えていたよりも状況は深刻化したとみていい。目的地のフロリダまではあと半分だ。敵の抵抗もより激しくなると考えて良いだろうぜ。各人はそのつもりで行動してくれ。以上、解散」

仗助さんが締めて、ミーティングは終わった。そしてそれぞれが出発の準備に取りか

かった。

朝のミーティングが終わった後、僕は兄さんと一緒に皆の所へ向かっていた。

承一郎「兄さん、兄さんの母は、どういう人だったんですか？」

ジョルノ「どうしたんだい？急に」

承一郎「いや、僕の母さんは僕が小さい頃に死んだしまっていて…。オオアマナの花が好きだったのは覚えているんですけど…」

ジョルノ「オオアマナ…花言葉は『純潔』、『潔白』か…。素晴らしい人だったんだね」

承一郎「兄さんの母はどうだったんです？」

ジョルノ「…母とは呼べない人だったよ」

承一郎「…え？」

ジョルノ「美しい女性だったが、幼い僕を置いて夜の街に出かけるような口くでもない母親だったよ」

承一郎「…すみません、嫌な事思い出させて」

ジョルノ「いや、大丈夫だよ。僕がギャングに憧れたのは、そんな経験をしていたからだしね」

承一郎「へえ…、今度教えて下さいよ」

ジョルノ「いいよ、機会があったらね」

そんな感じで皆の所に向かうと、いろはと陽乃が睨み合い、億泰さんとミスタさんが遠巻きに楽しみ、小町はいやらしい笑みを浮かべていた。

アレツシー「ハアハア……」

変なオツサンがこつちに走って来てるが……

億泰「おい、オツサン？ どうかしたのか？」

オツサン「つーいえ、何か向こうの方で一昔前の日本の不良？ みたいな方と、カチューシャを付けたお嬢ちゃんが騒いでおりまして、ただならぬ雰囲気慌てて逃げてきたんですよ！」

多分静さんと仗助さんなのだろう。朝っぱらから何をやっているのやら。

だが、僕の視線はこのオツサンの影だった。どんどん大きくなって、皆を覆ってしまっている。

しまった！ このスタンド能力は……！

承一郎「皆さん逃げて！ こいつは……」

アレツシー「もう遅いんだよ！」

僕が叫んだが、既に遅く、影を重ねてしまった全員が姿を変えた。

一瞬だけ影を交えたミスタと億泰さんは高校生くらいにまで若返っただけで済んだが、ガッツリ影を交えた学生組は僕と一緒にいた兄さんを除いては、そこに姿が無かつ

た。

アレツシー「偉いねえ。気付いた奴は上手く避けたのにねえ。さて、D I O 様の生まれ変わりだけを拐って、逃げますかねえ」

アレツシーは僕たちに銃口を向けて笑っていた。既に八幡少年がやられたか…。さて、どうやって助けるか…。

??? 「ほう…誰が誰を拐うだも？ 貴様も偉くなったものだなあ？ アレツシーよ…」
いや、何か変な声が聞こえる。

胎児レベルにまで若返らせられたであろう八幡の方へと目を向けると…、

D I O 「よもや再びこの姿になる日が来ようとは夢にも思わなかったぞ？ アレツシー…」

アレツシー「デイ、デイ、D I O 様っ！」

僕の目の前には八幡の前世であり、僕と兄さんの父の姿があった！

前世持ちって若返ったら前世になるのか!? ? 知らなかった…。

D I O (ふはははははは！ やつとこの時が来たかつ！ このD I O が復活する日が三度訪れたのだ！ ふん、この能力も変わらない。ザ・ジエムストーンでは無いのが少々残念ではあるが、まあいい。ハーミットパールと共に訓練すれば、いずれは進化するだろう！ 不死身！ 不老不死！ スタンドパワー！ このD I O は復活したことで、さらなる

フューチャーを手に来るのだ！さあ、人間共よ、支配してやるぞ！」

???「ねえディオ。八幡の癖が出ているから。究極生物的な変な笑いから全部声に出てるから。エリザベスがマフラー構えて波紋のエネルギー出しているから控えようね？」

そしてそこには、D I O だけではなくジョナサン・ジョースターまで復活していた。

ジョナサン「やあディオ。現世では久し振りだね？新婚旅行以来かな？」

ジョナサンが波紋をバチバチやりながら（しかもハーミットパールを出して）構えていた。額には青筋を浮かべてニツコリと。

リサリサ「なるほど。兄のアホは貴方の影響でしたか。それならば貴方を消せば、ゴミいちゃんはゴミいちゃんでは無くなるのですか？」

リサリサはマフラーを構える。

もしかして…サンシャインルビーはまだ使えるのかな？

エリナ「試してみますか？ディオ」

前世の姿になった聖女、エリナ・ジョースターがD I O に向かって言う。

リサリサ「……………」

エリザベスがD I O に向かって指先を向ける。

D I O 「いや済まなかった。久々にこの姿になって、少しハイテンションになってしまった。歌でも一つ歌いたくなってしまいうらいには」

D I Oはダラダラとみっともない汗をかいている。

これが俺の父だと思うとちよつと…。完全にカリスマ（笑）になっているじゃあないか…。

アレツシー「あわ、あわわわわ」

ジョナサン「そうだ。運命共同体のディオよりも、今はこっちの方をどうにかしないとね」

ジョナサンは腰を抜かしているアレツシーの胸ぐらを掴んで宙吊りにした。

エリナ「この事態は予想外でしたが、良い方向に収まって良かったです」

承一郎「父さん達は記憶があるのですか？」

D I O「本来なら、若返らせられた者達は、その年齢の頃まで記憶を無くすのだが、転生前の者には例外らしい我々が八幡達の中で眠っていた時の記憶もしっかり残っているぞ。なあ、J O J O？」

ロビーの方角『ふええええええええん！』

その時、向こう側から泣き声が聞こえた。この声は静さんの声！

D I O「貴様あ！静・ジョースターに何をしたあ！」

ジョナサン「ディオじゃあない…こんな親バカはディオじゃあない」

同意見です。

アレツシー「今だ！」

アレツシーが逃げた。

D I O 「貧弱貧弱う！逃げてても無駄無駄無駄無駄あ！W R Y Y Y Y Y Y Y Y ! このD I O からそのヨタヨタ足で逃げられると思つていいのかあ！この間抜けがあ！」

D I O がアレツシーを追おうとして走り出すと…。

ジョルノ「父さん！気を付けて！今は昼間ですよ！」

D I O 「だにいいい！」

急ブレーキをかけてキキイツ！と止まると、足に太陽の光が当たる。

シユウウウウ…

あ、足が灰になった。

こいつ、バカ丸出しだな。

アレツシー「D I O 様が間抜けになったおかげで助かった。こんな間抜けの下で働いていたんじゃないやあ20年前も失敗したのも領けるつてものだ。あばよっ！」

確かにその通りだと僕は頷く。

リサリサ「D I O 。貴方の迂闊さには驚かされます。よくぞこの緊急時に間抜けになれると感心します」

承一郎「はあ…クリスタル・ボーン！」

僕はスタンドで作った骨のプロテクターをD I Oに覆わせる。

承一郎「貴方を助けるのは不本意ですが、今は仕方ありません。これである程度は太陽を克服できるはずですよ」

D I O「おのれこのD I Oが情けをかけられるなど……このD I Oが、このD I Oがああああ！だが、太陽さえ克服してしまえばこのD I Oに弱点はないいいいい！」

一同「良いから早く足を再生させて追うんだよ！このスカタン！」

D I O「……………はい」

アヌビス神『待つてくれえええ！私も連れてつてくれええええ！』

承一郎「あんたも刀に戻っていたのか、アヌビス」

今回、キャラ崩壊ヤバすぎるだろ。

まあそんな事は置いといて、父がアホをやっている間に奴に逃げられてしまった。

さて、どこから追うか……兄さんと探していると……

アレッシー「もらった！」

僕と兄さんも一瞬だけ影に捕まれた。

承一郎「しまった！」

初流乃「やられた！」

僕の体が小学生くらいにまで若返ってしまう。隣の兄さんは髪が黒になった。

アレツシー「お前達はじわじわやらせてもらうぜ！俺って偉いねえ」

初流乃「くっ！ゴールドエクスペリエンス！」

承一郎「ブラッディ・シヤドウ！」

しゅん……

しまった！僕のスタンドは矢に射抜かれてから発現したんだった。

初流乃「君も小さな頃は使えなかつたんだね？」

承一郎「はい。多分、あなたは僕の兄さん……ですよね？」

初流乃「ああ」

アヌビス『間抜けめ。この俺の本体になれ。そうすればスタンドがみえるだろう』

承一郎「兄さんが使つて下さい。僕なら波紋がありますから、スタンドが無くても戦

えます」

アレツシー「おや？お前はアヌビス神か？裏切つたのか」

アヌビス『違うな。今も俺はD I O様の下僕だ。裏切りは貴様の方よ、セト神』

アレツシー「あんなアホに今でも忠誠を誓うなんざ、偉いねえ」

初流乃「勝ち誇るな！」

スパアアン！と兄さんとアヌビスの攻撃がアレツシーのサングラスを切断した。

承一郎「山吹色の波紋疾走」
サンライタイエロー・オーバードライブ！

バコオオオオン！と僕の波紋の拳がオツサンを横殴りに殴り飛ばす！

アレッシー「うぎやあああ！」

アレッシーとか言うオツサンは再び逃げ始める。

方向はロビーの方だ！

D I O 「遅くなった！追うぞ！ジヨルノ・ジョバーナ」

初流乃「いえ、今の僕は汐華初流乃しおばなはるのです」

ジヨナサン「そんなことはどうでも良いから、追うよ！仗助達が危ない！」

そうだった。そのジョースケという人も元の僕には大切な人だった。

僕たちは二人の父達を追ってロビーの方へと走った。

そこでシヨツキングな物を見てしまった…。

静「お兄ちゃん、離して！もう、ちつちやくなくなっちゃった静なんていらないでしょ！

血のつながってない役立たずの静なんかいらないでしょ?!もう静の事なんて放って置いて先に行つてよ！うわああああああああん！」

静さんの体が幼少期までに小さくなって、泣いていた。

静さんは悩んでいたのだ。ジョースター家ではないというコンプレックスをこれほ

どまでに抱えていたのだ。

静「もう静は戦えないよお！ぐすつ！ハモンの戦士としてもスタンド使いとしても、

こんなちつちやな静じゃあ何にもできないよお！ううっ…もう、放つておいてよおお兄ちゃん！こんなミジメな静を見ないでよお！うわああああああん！」

仗助さんの目から、

DIO「仗助！」

ジヨナサン「仗助！」

リサリサ「仗助！」

エリナ『仗助っ！』

初流乃（刀持ち）「お兄さんー！」『仗助！』

億泰「仗助！」

ミスタ「おい、そこのおっさん！」

承一郎「お兄さん！」

クリスタル・クルセイダーズの皆が仗助さんと呼ぶ。

仗助さんはより強く、恐らくは透明になっている静さんの体を抱き締めた。

仗助「バカ野郎……静…」

ポタツ…ポタツ…と、

静「おにい…ちゃん？…泣いている…の？」

とうとう、仗助さんの目からあふれでた涙が…

頬を伝って床に落ちていた…。

血を越えた兄弟の絆

静「お兄ちゃん、離して！もう、ちっちゃくなっちゃった静なんていらないでしょ！血のつながってない役立たずの静なんかいらないでしょ?!もう静の事なんて放つておいて先に行つてよ！うわああああああん！」

長年抱いていた、ジョースター家の人間ではないという悩みが幼くなつた事で溢れ出した静さん。

静「もう静は戦えないよお！ぐすっ！ハモンの戦士としてもスタンド使いとしても、こんなちっちゃな静じゃあ何にもできないよお！ううっ…もう、放つておいてよおお兄ちゃん！こんなミジメな静を見ないでよお！うわああああああん！」

仗助「バカ野郎…：静…」

ポタツ…ポタツ…と

静「おにい…：ちゃん?…泣いている…：の?」

仗助さんは涙を流していた。

仗助「当たり前だ静！最愛の妹が…俺の一番大事なお前が血の繋がりになんか傷付いていて、悲しくないわけがないだろう！」

あれ？兄さんが録音している？

仗助「神がいるなら教えてくれよ！何で俺の一番大事なこいつが、ここまで傷付かなきやいけねえんだ！一体静が何を悪いことをしたあ！」

静「お兄ちゃん？」

仗助「ふざけるなよ！リサリサばあちゃんといい、静といい、何で苦しんで、努力して、それでも報われないなんてあつてたまるかよお！こんなに頑張ってるこいつが何で今も苦しまなきやなんないんだよ！」

静「お兄ちゃん…泣かないで…静が悪かったから…」

仗助「お前は悪くねえよ！もつと泣いて良いんだよ！ワガママを言えよ！もつと俺に甘えろよ！お前が望むなら何だつてしてやるよ！一日中抱き付いて欲しいならそうしてやる！髪型だつてお前が望むなら毎日だつてオールバックにしてやる！SPW財団の次期社長の座だつて、お前が欲しいならくれてやる！」

あの仗助さんが髪型の事をどうでもいいと言うなんて、僕にはとても驚きだった。それほどまでに、静さんの事が大切なのだ。

静「お兄ちゃんが…頭の事を…？」

仗助「ああつ！お前がいなくなる事に比べたら、こんな髪型なんかどうでもいい！お前がそばにいてくれるなら、いくらでもそんな物を捨ててやる！わかるか？静？」

静「お兄ちゃん…」

仗助「なあ、血の繋がりなんか俺達にはどうでも良いんだ！いや、俺達じゃあない！俺にとつてどうでも良い！例え家事なんかしてくれなくても、家に帰った時にお前がお帰りと迎えてくれるだけでどれだけ嬉しいかわかるか？」

仗助「毎朝、会社に向かう前、どんなに忙しくても必ず髪を整えてくれるお前との時間がどれだけ俺の癒しになっているかわかるか？」

仗助「それにな…」

仗助さんは静さんが落としたカチューシャを拾ってその頭に付ける。

仗助「これを宝物と言いながら、毎日嬉しそうに鏡に向かって付けているお前を見るのが、どれだけ嬉しいかわかるか？」

静「お兄…ちゃん…」

静さんがキョトンとした表情で仗助さんを見上げる。もう透明にもなっていない。

仗助「だからよお静！置いていけなんて言うんじやあない！もうお前がいけない生活なんて俺には耐えられねえよ！ちっちゃくなつたお前がいらぬ？波紋の戦士でもスタンド使いでもないお前が必要ない？ふざけるなよ静！そんなもんがお前の価値じゃあない！お前は俺の側にいるだけでこんなにも役に立ってるんだ！血の繋がりなんて俺には関係ない！だから、二度と…二度とそんな悲しいことを言うな！」

静「お兄ちゃん…お兄ちゃん！うわあああああん！」

静さんは仗助さんを抱き返してより一層、大きな声で泣き始めた。

だが、これは悲しみの涙なんかじゃあない。仗助さんの心が通じて、安心して流している涙だ。

静「お兄ちゃん！お兄ちゃん！ごめんなさい！静はずうつとお兄ちゃんと一緒にいたい！パパ達と一緒にいたい！ホリイお姉ちゃんや、承太郎おじさん、ジヨルノお兄ちゃん、ジヨリーンお姉ちゃん、コマチやイロハ、ハチマンとも！一緒にいたい！いつまでも一緒にいたいよお！ううっ…うわあああああん！うわあああああああん！」

仗助「そうだよ！それで良いんだ！お前が苦しむ事なんて何もねえんだよ！ぐっ…：うおおおお！」

仗助さん達兄妹は心の底から涙を流し、抱き合っていた。

そして、静さんは泣き疲れて眠ってしまった。

リサリサ「仗助。良く静の心を救ってくれたわ。この子はもう大丈夫でしょう」

エリザベスが仗助さんに近寄って来た。

仗助「貴方は？」

リサリサ「比企谷小町の前世、エリザベス・ジヨースター。この子の気持ちが一番良

くわかる者です」

エリナ「私はエリナ・ジョースター。一色いろはの前世です。この姿では初めてですね？ 仗助。誇り高い私の子孫」

仗助「ひいおばあちゃん、そしておばあちゃん…静を…俺の最愛の子を頼みます」

仗助さんは泣き疲れて眠る静さんをエリザベスに預けた。静を頼むのに、これほど適任の人はいないだろう。

エリナ&リサリサ「待ちなさい。仗助」

仗助「止めねえツスよね？ おばあちゃん達」

リサリサ「止めないわ。止める必要もない！ 我々は勝たなくてはならない！ 引き分けはない！ 新しいジョースター家の家訓よ！ 覚えておきなさい！」

エリナ「これも新たな家訓です！ 個人の主義や主張は勝手！ 許せないのは私どもの家族や友人を公然と侮辱したこと！ 他のお客に迷惑をかけずにきちつとやつつけないさい！」

エリナ&リサリサ「行きなさい！ 仗助！ あなたがジョースターの宝を傷付けたあの不屈き者に、地獄へ行くべきくずにつ！ 地獄の穴へ背中押してやるのです！ ジョースター家の者として！」

仗助「少し違うツスよ、おばあちゃん達。確かに奴は地獄へ行くべきくず！ けど、こ

のおれが背中を押して叩き落とすのは地獄の穴なんかじゃあねえっス！そんな生易しい地獄なんかじゃあ、俺の怒りが収まらねえっス！叩き落としてやるっスよ…本当の地獄ってヤツに、あのクズ野郎をよお！」

仗助さんは一歩ずつ、確実に歩を進める。

仗助「待たせたっスねえ。八幡の前世のおじいちゃん達。アイツは俺なりの地獄へとキツチリ叩き落としてやるっス：アイツは俺にやらせて貰えねえっスかね？」

ジヨナサン「勿論だ、仗助！君の傷つけられた誇りが癒されるまで、あいつを殴るのをやめるな！」

D I O 「ふん、このD I Oが援護に回るんだ！完全なるとどめを………奴に刺せ！」

仗助さん達は奴に向かって走り出した。

アレツシー「うわああああ！来たああ！」

アレツシーは逃げ出した。全く覚悟のない奴だ。

奴はロビーを駆け抜け、外のいなか町に出た。

D I O 「この間抜けがあ！ちよいとでもこのD I Oから逃れられるとも思っていたのかあ！^{ザ・ワールド}世界！時よ止まれえ！」

D I Oの姿が仗助さんの前から消える！

気が付いたときには奴の進路上から何かが落ちてきた！

D I O 「無駄無駄無駄あ！タンクローリーだあ！」

ドガシヤアアアン！

流石はD I O。たかだか道を塞ぐ為だけにタンクローリーを落として一面を火の海に変えた！

そこに痺れぬ憧れぬウ！

アレツシー「うぎやああ！じゃあこつちだあ！」

ジヨナサン「見苦しいぞ！ハーミットパール！」

ジヨナサンはハーミットパールをアレツシーに巻き付け、引き寄せる！

そして腹部を殴って少し浮かせると…、

ジヨナサン「コオオオオ！太陽のエネルギーを食らえ！」

ふるえるぞハート！燃え尽きるほどヒート!!おとおおつ、刻むぞ血液のビート！

サンライトイエロー！オーバードライブ
山吹き色の波紋疾走!!」

ドカドカドカドカドカ！

アレツシーはジヨナサンの元祖オラオララッシュで殴り飛ばされ、仗助さんの方に飛んでくる。

アレツシー「ウグググ：ならばせめてお前だけでも！このリーゼント豚野郎！」

アレツシーは影で仗助さんを若返らせながら、斧を降り下ろして来た。

仗助「ドラァ！」

仗助さんは全盛期のクレイジー・ダイヤモンドで奴の斧を叩き折り、刃を奴の後方へと飛ばして柄を奪う。

アレツシー「うわあああ！」

アレツシーは泣きながら銃弾を乱射してくる。

仗助「無駄だぜ！このクズ野郎がよお！」

クレイジー・ダイヤモンドで全て受け止め、そして弾丸を逆に向けて奴に手足に向けて撃ち込む。

仗助「テメエの涙なんざに、何の心も動かされねえ！テメエが泣かした静の涙の重みに比べりゃ！テメエの涙なんざ水素と地球1つ分くらいには重みが違いすぎる！」

アレツシー「何故だ！何で冷静さを失わねえんだ！髪をけなされれば、逆上してくるというのは嘘の情報か！」

仗助「クツクツクツク……」

アレツシー「な、何がおかしい！」

仗助「フフフ…フハハハハハハハ！」

人間、度が過ぎてグレートに頭に来れば、逆に笑ってしまうというのは本当だったらしい。

そこまで、仗助さんはブチギレているようだ。

アレツシー「偉くないねえ！もう一度セト神を…」

ミドラー「見苦しいんだよ！」

何故か昨日助けたミドラーさんが、地面から岩を作ってアレツシーを曳き飛ばした。

アレツシー「うぎやあああああ！」

再びアレツシーが仗助さんの前に落ちてくる。

ミドラーさんの女ハイブリエステス教皇が戻った。

アレツシー「くそう！ミドラー！」

アレツシーがミドラーさんに向けて銃を構える！だが…

ブンブンブン…ザシュツ！

アレツシーの銃を持つ手が切断された。

さつきへし折った斧を直すことで、仗助さんの自動追尾弾は完成していたらしい。

仗助「さつきは逆上してだのなんだの言ってくれたなあ？おい、けどなあ…俺はよお、テメエに対してはよう…髪を貶される以上によお、既にぶちギレてんだよお！わかつてねえみてえだがよお！」

仗助さんは奴の足を直した斧で切断する！

アレツシー「ひ、ひいいい！もうだめだあ！D I O様！降参です！許して下さい！」

る。

アレツシーは顔だけを残して岩と一体化する。

アレツシー「ひぎやああああああ！俺の体が！岩と一緒に：動けねえ、どうなつてやがるんだ！」

仗助「死ぬことも出来ない、生き地獄つて奴の穴に背中を押ししてやったぜ。死ねばDIOのように転生できつかも知れねえけどよお、オメエには必要ねえよなあ？反省しやがれ！永遠になあ！さて、次でもう二度と喋る事が出来ねえようにしてやるぜ！次にテーマは、『やめてーそれだけはー』：：という」

アレツシー「やめて！それだけは！：：はっ！」

仗助「永遠にただ見ている事しか出来ない生き地獄に落ちやがれ！ドラルラルラルラララ！ドラルア！」

残った頭を岩の中へと押し込み、今度こそアレツシーは永遠に沈黙した。

仗助「財団に連絡でも入れてくれ。次のロケットにでも積み込んで、宇宙に捨ててこいつてよお」

アレツシーに若返らせられた仲間達が次々と元に戻る。

仗助「ありがとうっす。おじいちゃん達」

DIO「ふん。ジョジョよ、貴様との共演、悪くなかったぞ」

「ジョナサン「僕もだ、ディオ。仗助…君にジョースター家の未来を託す。僕達は八幡の
中で見ているよ…さようなら」

「DIO「東方仗助。次に静を泣かせることがあれば、このDIOが再び現れ、今度は
私が貴様を裁く！それを忘れるな！さらばだ！」

「ジョナサンとDIOは光りながら体が合わさり、そして八幡の姿へと戻る。

「静「お兄ちゃん！」

元の姿に戻った静さんは目を覚まして仗助さんに抱き付き、そして…

「チュッ！」

仗助さんの唇にキスをしてきた。

「静「お兄ちゃんのプロポーズ、静はお受けします！…式はいつ？指輪も作らなきゃ！あ、
結婚できる歳になったら入籍だね？どっちの籍？東方静？仗助・ジョースター？ウフ
フフ♪楽しみだね♪」

静さんは仗助さんにスリスリと体を猫のように擦り付ける。

「エリナ「あらあら。これでもう、逃げられませんか？仗助」

「リサリサ「静への言葉は、完全にプロポーズの言葉でしたからね。じたばたするよう
なら…」

「エリザベスは人差し指を向けて…

リサリサ「コレ：ですからね？」

静「おばあちゃん達、ありがとう！静はもう大丈夫だよ！」

エリナ「二人の結婚式、楽しみにしていますね？いろはとして」

リサリサ「良かったわね。末永く幸せに。小町として見ているからね？」

二人もそれぞれいろはと小町に戻る。

ピッ！

兄さんがボイスレコーダーを起動させる。

仗助『お前は悪くねえよ！もつと泣いて良いんだよ！ワガママを言えよ！もつと俺に甘えろよ！お前が望むなら何だつてしてやるよ！一日中抱き付いて欲しいならそうしてやる！髪型だつてお前が望むなら毎日だつてオールバックにしてやる！SPW財団の次期社長の座だつて、お前が欲しいならくれてやる！』

仗助『ああつ！お前がいなくなる事に比べたら、こんな髪型なんかどうでもいい！お前がそばにいてくれるなら、いくらでもそんな物を捨ててやる！』

仗助『だからよお静！置いていけなんて言うんじやあない！もうお前がいな生活なんて俺には耐えられねえよ！』

静『静はずうつとお兄ちゃんと一緒にいたい！』『いつまでも一緒にいたいよお！う

うっ……うわあああああん！うわああああああああああああん！」

仗助『そうだよ！それで良いんだ！お前が苦しむ事なんて何もねえんだよ！ぐっ……うおおおお！』

仗助『ひいおばあちゃん、そしておばあちゃん……静を……俺の最愛の子を頼みます』

ジョルノ「素晴らしく感動的だったので録音させて頂きました。素晴らしいプロポーズでしたよ？仗助さん」

これはこれは……完全にプロポーズになっている……。そして兄さんの編集の仕方に痺れる憧れるウ！

仗助さん、婚約したのか……？義理とはいえ、妹と？しかも中学生と？

ポンッ♪

八幡「ようこそ、千葉の兄妹の世界へ」

仗助「Oh my god！」

仗助さんの叫びがロッキーマウンツの町に響いた。

アレツシー『セト神』

岩と一体化して再起不能。

ケネディ宇宙センターから宇宙に上げられ、地球の衛星軌道を漂う事となった。

死にたいと思っても死ねないので、アレッシーは考えるのを止めた。

東方仗助と静・ジョースター、長年の周囲の外堀埋めとジオルノのプロポーズ（と受け止められる）の音声記録によって事実上、婚約が成立。

東方仗助、シスコン&ロリコンとして、その趣味の人間からは現人神として崇められ、後に「ジョースケ」が世界共通の単語として登録されることになった。

仗助「グレートじゃあねえっす！」

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

おまけ♪

J O J O 「で、覚えていたからなんだって？」

D I O 「いや、その…」

J O J O 「あの間抜け振りで活躍した気か？」

D I O 「わ、私的には…」

J O J O 「活躍どころか戦犯手前じゃあねえか！死にさらせボケエ！」

D I O 「このD I Oが、このD I Oがああああ！」

ジ
ヨ
ナ
サ
ン
「
や
れ
や
れ
…
」

最近の車って性能がすごい

八幡「サバンナで待ち伏せ：ですか？」

ミドラー「ええ、ここで私とアレツシーが敗れたばあい、予備としてサウスカロライナ州とジョージア州の境であるサバンナで待ち伏せすることになっています」

承一郎「綾瀬絢斗とサンタナを除けば残るは『運命』と『悪魔』と『アトウム神』の三人でしたよね？」

陽乃「あれ、『審判』は？『審判』のカメオも生きていたはずだけど」

承一郎「カメオは人間として再起不能になっていたらしい。敵が減ってくれるなら、喜ばしいことじゃあないかな？」

承一郎「あのスタンド能力を知っていても、それでも願ってしまうよ、彼女達に会いたいって…」ブツブツ…

僕はついブツブツと呟いてしまう。

元々は元の世界に帰りたくてやっている事なのだが、最近敵が息つく暇もなく襲ってくるから、結構疲れるのだ。

早く小野寺君に会いたい。あの笑顔を見るだけで癒される。

ん？なにやら八幡がカメオを密かに始末したのかもかもしれないというような目を僕に向けている。失礼するな。

いろは「どういうスタンドだったんです？」

承一郎「アラジンと魔法のランプって知ってるか？」

小町「まあ、有名ですから知ってますけど」

アラビアンナイト自体は知らなくても、アラジンと魔法のランプは童話や絵本などで有名だから知らない人の方が少ないだろう。

承一郎『『審判』のスタンドはその魔法のランプで願いを土の偽物で叶えるという物さ。大抵の人間の願いは真偽を確かめるために大金を求めらる』

実際にポルナレフさんがそれで引っ掛かってしまったらしい。

承一郎「そして信用した人間は、恋人を求めたり、死んだ人間を甦らせて欲しいと求める。その結果、土で出来た偽物に攻撃されるっていう酷いスタンドさ」

ジョルノ「知らなければ僕も昔の仲間を甦らせて欲しいと願ったかもしれないね。ブチャラチイ、ナランチャ、アバッキオの三人とか」

ジョルノ兄さんが遠い目をしてボソリと言った。

死んでしまったかつての仲間を思い出しているのだろう。

しかし、タネを知っているからわかるが、今思い出しても酷いスタンドである。

もし襲われたら、僕と八幡少年、茅ヶ崎がいなければ引つ掛かっていたかも知れない。ミドラー「彼をやったのはパッションネって聞いたわ。20年前の闘いの後にケシ畑で儲けたそうだけど、麻薬売買のマーケットをヨーロッパにまで拡大させようとして、足掛かりにイタリアを選んだのが失敗の原因と聞いたわ」

ジオルノ「ああ、確かに中東の麻薬屋の進出を阻止したという報告がウチの麻薬対策部署からあがっていたような気がする。そうか、フーゴがやっていたのか」

フーゴさんか…。あの人のスタンドはすごく恐ろしいんだよね…。
ところで…

J O J O 「で、八幡？誰が密かに暗殺しただつて？」

俺はドス黒スマイルで八幡少年を見た。

八幡「あれ？口に出していた？」

これは思っていたな。

J O J O 「口には出していなくとも、目線で察しがつくわ！血い晒したろうか？このガキ！」

八幡少年はしばらく俺から逃げ惑った。まあ、最終的には捕まって説教受けたけど。

説教したのは俺ではなく、僕だったから良かったものの、J O J O は軽く一時間は地獄のC Q C 訓練をやるからな…。

もつとも、怒ってはいたけどね。

ちなみに、アレツシーとの鬨いの時にミドラーが支援に来たのは偶々で、本来はこの事を伝え忘れたので教えに来たのが本当の理由だった。

僕は貴重な情報をくれたミドラーに礼金を渡して別れを告げ、新しく調達した車に乗り換えて移動を再開した。

ミドラーからもたらされた情報により、十中八九、サバンナで待ち伏せしているスタンド使いによつて車両が壊されるだろうと予測しての事だった。

大切なマイクロをこれ以上破壊されたら堪らないしね。

新しい車両は頑丈さが売りのミニバン二台だった。

片方はミスタさんがドライバー（毎度すみません）の兄さん、茅ヶ崎さん、小町、億泰さん。

もう一台が仗助をドライバーに僕、八幡少年、いろは、静の乗車編成だった。

ちなみに出発するまで、僕はあることにはふれなかった。後方の後継に。

静「うふふ♪お兄ちゃん、我慢しなくても良いって言っていたもんね♪」

仗助「いや、確かに言っただけどよお……」

静さんが仗助さんにユーカリにしがみつくコアラのようにガツチリと抱き付いて離れなかった。

静「一日中抱き付いてくれるってのは嘘だったの？お兄ちゃん？」

仗助「今はそれどころじゃあ無いだろ！承太郎さんを助けに行くんだろが！」

静「…ゴミいちゃん」

仗助「ぐふうっ！」

あ、初めて小町以外からその言葉を聞いた。

何故止めないのかって？あんな激甘な空間に割り込む勇氣はない。

J O J O（イライライライライライラ…）

俺は超絶壮絶ダイナミックにイラついているけどな。

車内——

仗助「なあ、承一郎。お前は車の運転って」

承一郎「いえ、16ですのぞ」

仗助「そうか…」

丈夫さに定評がある日本のミニバン、ハイエース（外国車バージョン）を運転しながら、仗助さんは僕に訪ねる。

上手く交代しながら運転出来ればと考えていたようだが、世の中上手くはいかない。もつとも、は何回か無免をやった事はあるけど。

八幡「なあ」

助手席の八幡少年が話しかけてくる。

八幡「来ると思う？ サバンナで」

八幡少年が言っているのは敵の襲撃の事だ。

仗助「ミドラーが裏切るとは思ってもいらないだろうから、おそらく来るだろうな」

仗助さんは町のなかを走る高速道路を運転しながら返答する。

もうじき昼時。このCCにとっては鬼門とも言える時間帯。

予定ならそろそろサウスカロライナを抜け、ジョージア州の北端の町、サバンナだ。

サバンナと言われてイメージするのは荒野や草原の湿地地帯で、野生動物が豊富な場

所…と思われるだろうが、実は違う。

サバンナ気候、または草原地帯を意味するアフリカのサバンナと、地名のサバンナと勘違いをされやすいが、ジョージア州のサバンナとはアメリカの南北戦争に深く関わる歴史的な「都市」として有名な場所である。

八幡「で、誰が来ると思う？ ダービーさんの弟か、死神か…それとも」

承一郎「アレ…とか？」

そう、先程からイカツイ外装のトラックが並走して来ており、徐々に右に幅寄せをし

うん。多分アレだろうとは思っていた。

仗助「つたくう！案の定かよ！」

承一郎「合わせろ八幡！」

八幡「わかつてる！」

僕の方で僕達二人は相手のトラックの屋根へと登り、上からスタンドラッシュを叩き込む！

ブラッディ・シャドウ「無駄無駄無駄アツ！」

ザ・ジエムストーン「無駄無駄無駄アツ！」

二人がかりの無駄無駄ラッシュだったが、「ホワイール・オブ・フォーチュン運命の車輪」というスタンドはただのボロ車をラッセル車並のパワーに変えるスタンドだ。

僕達のダブルラッシュではトラックに取り付いた「運命の車輪」の装甲を破れず、トラックはハイエースを潰しにかかる。

八幡「頼む！承一郎！」

承一郎「わかつてる！」

いろは「キヤアアア！ハチ君！」

八幡「いろは！」

承一郎「!!？」

僕が仗助さんと静さんをブラッディ・シャドウで車外に放り投げ、空間でサバンナ川に着水させたが、いろはだけは間に合わずに橋下に落ちるハイエースごと落下をしてみよう。

八幡「ザ・ジエムストーン！時よ止まれ！」

八幡少年は時を止め、いろはを助ける為にサバンナ橋からダイブし、いろはを救出して抱き止めた。

八幡「ハーミットアメジスト！」

爪先からサバンナ橋にハーミットアメジストを引っかけ、紐なしバンジーから普通のバンジーに変える。

そのまま落下の衝撃を殺してからアスファルトに着地する。

八幡「仗助とは車の走行距離分は離れてしまったな」

いろは「ハチ君！ありがとう！怖かった！」

いろはが八幡少年に抱き付く。

承一郎「イチヤイチャは後でにしてくれないかな？敵はまだ倒して無いんだからさ」
イライラ

いろは「ねえ、ハチ君。最近のトラックってさ、水上を走るのかな？」
いろはが訳のわからないことを言う。

八幡「水陸両用車と言うのは聞いたことがあるが、水陸両用トラックは聞いたことがないな」

承一郎「最近の水陸両用観光バスがあるらしいよ？山中湖とか」
それがどうしたんだろう？

いろは「さっきのトラックが水上を走ってるんですけど…」

そういえば「運命の車輪」で強化された車ってゲッ〇ー
2のように地中に潜れたな。

それに比べたら水上を走るトラックなんてむしろ常識の範疇に見えるから不思議だ。

承一郎「ならば、ブラッディ・シャドウ！」

僕はトラックの助手席に転移する。外がダメなら内側からってやつだ。

承一郎「無駄アツ！何ツ!?!？」

しかし、これも意外なやりかたで防がれる。

僕が移動した先の助手席と、「運命の車輪」のスタンド使い、ズイー・ズイーの間に外壁と同質の壁が生じ、僕の攻撃を防いだ。と、同時に助手席の側の床と天井が僕を挟まんと狭くなる！

承一郎「チッ！」

僕は舌打ちをして空間を使って脱出する。

八幡「大丈夫か？承一郎」

承一郎「承太郎さん達が複数で苦戦しただけあって手強いぞ」
マジで案外強敵だな。承太郎さんはどうやって倒したんだ？
僕と八幡少年は存外の強敵に戦慄した。

ズイー・ズイーはメタ過ぎる

僕と八幡少年というはの三人は危機的状況に陥っていた。

水上を走るトラックに猛スピードで迫られているからである。

ズイー・ズイー「死ねええ！ ジョースター！」

ただ水上を走るトラックが来るだけだったらそれほど恐く無いのだが、なんかバンパーがクワガタみたいなハサミ型の刃が付いてるし、ラジエーターとかエンジン部分とから銃口みたいなのが飛び出ていて何か射ってきてるし。

僕のプロテクターのお陰で痛くないけど。

承一郎「あまり多用したくは無いんだけどね」

僕は八幡達を掴んで空間をつなげ、反対側の河原へと跳んだ。

承一郎「行くぞ、八幡」

八幡「了解だ。援護を頼んだよ？ いろは」

いろは「了解です。ハチ君」

僕と八幡少年は波紋の呼吸をして水上を走った。

八幡「そういえば、何気にタツグを組むのは初めてだな。俺達」

承一郎「そうだね。頼りにさせてもらおうよ。八幡」

二人で運命の車輪を殴るが効果はない。

波紋の戦士二人分の攻撃力をモノともしないなんて、かなりの装甲だ。

八幡・承一郎「メタルシルバー・オートドライブ!銀色の波紋疾走!」

八幡少年も考えていることは一緒だったらしい。

金属に波紋を通すこの攻撃ならば通用するはずだと思っただが、

ズイー「バカめ! そんな攻撃が通用するか! 対落雷用処置の為に絶縁体が仕込んであるんだよ!」

運命の車輪は銀色の波紋疾走をモノともせず僕達二人をはね飛ばした。

いろは「エメラルドストライク!」

カンカンカンカン!

いろはがエメラルドストライクで援護をしてくれるがザ・ジエムストーンやブラッディ・シヤドウでのパワーでもどうにも出来なかつた運命の車輪では、エメラルドストライクでは威力不足でどうにもならない。

それでも構わずいろははエメラルドストライクで援護をし続けてくれた。

ズイー「ちっ! 威力はなくても雨粒のように断続的にやられると鬱陶しいぜ!」
なるほど、これがいろはの狙いか。

それに、ストライクで援護しつつ、時折ヒーリングで治療してくれる。遠距離回復ってマジでチートだな。

ズイー「カンカンカンカン鬱陶しい攻撃だな！あの女のガキから始末するか」
運命の車輪はいろはに狙いを定めて車を走らせた。

僕「させるか！八幡、いろはを守れ！」

僕は空間を繋いで八幡少年をいろはの側に飛ばした。

僕は女性陣には甘いところがあるが、とりわけいろはには激甘だ。

エリナに対しては尊敬に近い感情を持っているし、しかも小野寺君の妹の春ちゃんといろはの声がそっくりなんだよな。

その為か、こうしていろはがピンチになると、こうして過剰に反応してしまう。

八幡「ナイスだ承一郎！お前にも千葉の兄の素質があるぞ！シスコンは千葉の兄の鑑だ！だがいろははやらん！」

別にそんな事は考えてはないけどねと苦笑した。

八幡少年はいろはを抱き寄せながら、「パウッ！」と鉄橋の鉄骨に飛び移る。

八幡「この高さなら追ってはこれな……うそん」

ガリガリ！

奴の車は橋げたを垂直に登って八幡達を追ってくる。

承一郎「どういう物理法則だ！」

僕は奴に食らいついて攻撃をしかける。

しかし、奴はびくともせず僕を無視して追ってくる。

八幡「くそっ！もう一回川に降りれば！」

承一郎「ダメだ八幡！」

僕の警告も少し遅く、飛び降りた八幡達を狙って奴の銃口から射たれる何か八幡達を穿つ。

八幡「いろは」「がはっ……！」

骨のプロテクターを破れるのはルビィレーザーくらいしかないのに、なんて攻撃力だ

……！

ドボン！

八幡というはは水中に落下した。

一瞬意識をもっていかれたようだが、回復をして浮上する。

僕は一人で奴のトラックの進行を止めて、八幡達が回復するまで耐えていた。

弾く波紋で何とか押さえているが、トラックの真つ正面に立っただけは……

ズイー「バカめ！」

トラックの銃口から次々と弾が発射され、更には例のクワガタみたいな刃が僕に迫る

ズイー「勝った！まずは5人目のD I Oの息子！完！」メメタア！

どこからか蛙が潰れる音が聞こえるのは幻聴か？

八幡「嘘だろ？なんて…呆気ない…」

やれやれ、これで一応役割は終わったか。

八幡「やろう！ズイー・ズイー！」

ズイー「はっ！D I O様の転生とも聞くが、所詮はガキはガキ！貴様を動けなくして
拗うもよし、プツチが言うにはD I O様の骨で最悪D I O様の魂を甦らせる事は可能だ
から殺しても構わないらしいなあ！」

そこにとうとう気付いたか。かなり遅いような…。

だが、八幡の命を盾にという作戦ももう使えない。

ズイー「殺しても良いのならば、もう遠慮なんかする必要もないよなあ！クソガキ
があ！」

運命の車輪は僕にやったように、再び突進してくる！

しかも、僕がやられた以上、援護も期待できない！

八幡「いろは！」

八幡少年はいろはを再び抱き抱えて水中に潜った。

水上は走れても水中は走れないと考えたようだ。

八幡少年は潜水の要領で潜っていく。

途中、いろはに口移しで空気を送り、潜って反対側に逃れようとするが：

ズイー「バカめ！水上を走れるように出来なくすれば良いだけだ！」

八幡「!!」

八幡少年はいろはを弾く波紋で突き飛ばして八幡少年から遠ざけた。

いろは「ハチ君！」

八幡『ザ・ジエムストーン！』

ジエムストーン『無駄無駄無駄無駄無駄無駄！』

ズイー「もう遅い！脱出不可能よ！」

八幡『くそっ！息が…たった一呼吸で良い！空気を！』

ここでの八幡少年の選択肢

1、ブラフォード戦みたいに川底から石をどかして空気を吸い込む。

2、突然逆転の秘策を思い付くか承一郎が復活して助けに来る！

3、逆転不可能！現実是非情である！

ここで1を選択したようだ。

八幡少年はラツシユでトラックの沈没を遅らせながらも川底にたどり着き、大きめの

石を退ける。

……が、CCCすらも空気は出てこなかった。

八幡『ですよー』

流れがない湖とかならともかく、流れが激しい川の、しかもほとんど海に近い流域の川底の石の下に空気が残っているわけが無い。ハイこれテストに出ますよ（笑）

八幡『チツ：詰んだ：か』

八幡少年はとうとう酸欠になり、スタンドが消えてトラックに押し潰されてしまった。

ズウウウウウウウン：

いろは『ハチくーん！』

ズイー「また勝った！これで第6部外伝、完！ついでに『やはり俺の奇妙な転生は間違っている。』も完！」

メメタア！

公式メタ？そのふざけた幻想を（ry

ズイー「勝った！第6部外伝も完！ついでに『やはり俺の奇妙な転生は間違っている』も完！」

歴代ジョジョの中でも唯一の公式メタフィクションが為された回の敵、ズイー・ズイーが宣言した。

バカかあいつは？20年前も同じ事をやって敗北したのを忘れたのか？
相手が勝ち誇った時、そいつは既に敗北している。

JOJO「ほう？ならば、この一条承一郎の代わりを誰が務めるんだ？まさかてめーのわけねーよな？こっちはまだ公式に春とか出ていないし、スタンドバトルもまだ二回しかやってないんだぞ？主人公がここでないなくなつてどうするんだ？本編ではまだ俺も戦っていないしな！」メメタア！

八幡「そっちは良いだろ？ウチなんてバトルがメインだから、まともなラブコメはやってないし、何よりまだ本編始まつて無いんだぞ？本編始まる前に物語終了つてなに？斬新すぎね？主人公交代にしても普通は本編始まつてからだよね？」メメタア！

ズイー「な、なに！」

僕と八幡少年は水中から浮かび上がってくる。

ズイー「な、何でお前らが！確かに倒したはずだぞ？」

八幡「ならここににいる俺らは何なんだろうな？」

J O J O「幽霊かなにかだろ？」

八幡「ならば恨みはらさしておくべきかあ！つかあ？」

僕と八幡少年は再び水上を走って運命の車輪に挑みかかる。

何度も何度も挑んではやられ、そして水中から浮上してくる。

無線LANで繋がっているモニターを見ながら、サバンナ橋の上で僕達は戦いを見ていた。

そう、最初から僕達は下で戦っていなかった。

奴が橋の下に現れた段階で僕達は上に転移していた。

八幡「スカルズの操作も結構難しいなあ」

承一郎「初めてにしては上出来だと思っよ？」

いろは「承一郎先輩は例の覗き能力で直接視線でスカルズを見れますけど、私達は承一郎先輩が仕掛けた監視カメラ越しで操作しているんですから難しいですよ！」

八幡「お前は遠距離操作型のスタンドだから多少は慣れているだろうけど、俺は遠距

離操作じゃあないから感覚がつかめねえんだよ！大体、ナイチンゲール・エメラルドを出してればスタンド目線で見れるだろ！」

そう。下で戦っているのは精巧に作られた僕達そっくりのプロテクターを着けたスカルズ達だ。

傷を付けられる都度、ダメージを受けて沈んだ振りをして新しいスカルズに交換して戦わせていた。

まあ、その操作がVR画面で操作している感覚の僕とは違い、八幡少年といろははカメラ越しで闘いを見ながら操作しなくてはならないので、言うなれば3D格闘ゲームの第三者目線でVR操作をしているようなものだ。

スタンド操作に慣れてなければ何も出来ない。

ちなみに、スタンドもナイチンゲール・エメラルドを除いてはスカルズ達のダミーだ。八幡少年がこういった戦いの時、時を止めない訳がない。僕も同様。やろうと思えば出来た。

だが、何事も万全を期すのが一番いい。

相手を消耗させるだけ消耗させ、徒勞に終わらせればいいだけだ。

承一郎「まったく、よくここまで性格の悪い作戦を思い付くよ」

八幡「誉めるな。照れるぞ」

承一郎「いや、誉めてないから。まったく、君という男は参謀や軍師に相応しい男だ
とつくづく思う。敵や味方の能力や特性を瞬時に掌握してここまでの作戦は普通は思
い付かない。スカルズ兵達をこういう使い方するなんて生み出している僕が考え付か
なかつたよ。それに、あれを取り付かせる事もね」

まあ、こつちもあつちもGIGGIO 本城 瀬そろそろ本編に入れと突つつかれてるからしょうがないけ
どね。メメター!

ズイー『どうなっている! 何で何度も何度もコイツらはよみがえってくるんだ!』

八幡(スカルズ)『お前にはわからんだろうな。俺の本物を守りたい、この熱い気持ち
が』

いろは「うん。ハチ君のキャラじゃあないですね」

いろは(スカルズ)『ハチ君: / /』

八幡「お前は相変わらずあざといな」

八幡少年がそういうというはハコフグのように頬を膨らませる。

いろは「あざとって何ですかあ! これだって素ですよ!」

八幡「嘘つけ。まだ早口で振られる時の方が素のお前を感じるまである」

いろは「素の私を感じるって何ですか? ハッ! 何ですか? いつもお前を見てるよつ
て口説いてるんですか? すいません確かにドキッとしましたけど今朝の仗助さんと

ジョジョセンパイの一幕のような感動的なプロポーズをして欲しいので婚約指輪を持つてきてくれから出直してもらわないと無理です。ごめんなさい」

八幡「俺達もある意味で周囲に外堀を埋められている関係だったよね？何で振られるのん？もう血迷って魔王マテマテさんに走っちゃおうよ？」

いろは「は？そんな事したらハチ君殺して私も死にますよ？」

八幡「その冷たい声で本気を感じるから止める下さい」

JOJO（スカルズ）『お前ら、戦闘中だつてこと忘れちゃあいねえよなあ？』

JOJO「これは俺の本音だな。何ならスカルズと交代で現場に行くか？遊ぶ余裕があるみたいだしな」

八幡・いろは（スカルズ含む）『すいませんでしたあ！』

女性「連絡が来たわよ？もうスツカラカンだつて。ガス欠にしてしまえば完璧よ」

八幡「ありがとうございます。藤崎さん。助かりました」

沙織「いやねえ。忍ちゃんと被るから沙織つて呼んでよ。八幡君♪」

八幡「いえ、あなたは魔王より強化外骨格がすごすぎるんで、遠慮しときます」

沙織「八幡君つて面白いわねえ♪今回の依頼を受けて正解だったわ。この世界もまだ捨てたものではないわね。：本当は二大女王に脅されたからなんだけどね」ボソツ
何か聞きたくない情報を聞いた気もするが、聞かなかつた事にして仕上げにかかると

しよう。

J O J O 「オペレーション・スカルズ・ファイナルフェイズに移行するぞ」

八幡「頼んだ。一条」

J O J O 「ブラツディ・シャドウ!スカルズ達よ!」

俺は大量の俺達の偽物を作り出し、戦場に送った。

俺達は例の監視カメラ(沙織さん作)でコーヒーを飲みながら見ている。ちなみに八幡少年のコーヒーは自作の練乳入りMAXコーヒー味だ。

J O J O 「本当にいい性格してるな:コイツ」

俺は汗を流しながら八幡少年をジト目で見る。

まあ、相手は半分は成人を迎えていない集団によつてたかつて拐うだの殺すだのしてくる連中だ。

中には茅ヶ崎やダービーやミドラーのように誇りを持って挑んでくる人もいたが、大半はコイツのように奇襲をかけて俺達を見下して、やりたい放題やってくる連中。

そんな奴等の流儀に従う理由なんてない。

俺や承一郎にしてもその辺りは考えは同じだが、八幡少年の場合はやり方が更に斜め上、または下に走っている事にドン引きしている。

八幡「そんなことより見てみるよ。思惑通りになっているじゃあないか」

ズイー・ズイーは大量に出現した俺達に銃口から大量の弾を発射している。

近距離離パワー型のスタンドでやっとヒビが入るくらいのスカルズのプロテクターを破壊する威力はあの弾にはない。

奴の狙いは他にある。

あれはトラックの燃料である軽油だ。

軽油をぶっかけて引火させて、スカルズ達をまとめて燃やす算段なのだろう。

承太郎さんに対してやったように。

ズイー「この中にどれか本物があるんだろ！まとめて燃えてしまえ！」

奴は再びバッテリーからのコードを伸ばしてスカルズに引火させる。

八幡達（スカルズ）『マアギイイイイイ！』

J O J O 達（スカルズ）『お前らはラバースか！ぐわあああ！』

俺は断末魔の悲鳴をあげながらもツツコミは忘れない。

向こうでも八幡少年みたいなネタに走る奴がいるからな…。

J O J O 「無駄無駄無駄！」

俺は更に追加で俺達のプロテクターを纏ったスカルズ軍団を出現させる。

どうせすぐにやられるのだから、その造りは雑になっているが。

それを繰り返しているウチに思惑通り、奴のトラックはガス欠になり、プスンプスン

とエンジンが停止した。

ガス欠になった位置は川原の上。

さすがに沈んでいつてはくれなかったか。だが、問題はない。

これでこちらの完全な勝ちだ!

ズイー「バカめ!こんなこともあろうかと、予備の燃料ならいくらでもある!」

おそらくトラックの荷台には大量のドラム缶が積んでおり、中には軽油がたくさんあるのだろう。

だが、燃料が沢山あろうがなからうが、もう奴は完全に終わっている。

俺を一度でも中に入れた段階でな!

ズイー「さあ!いつまで持つかな!イグニッション!」

しくん……

ズイー「あ、あれ?」

イグ^点ニツシ^火ョン出来ればいいな!

それをやるだけのバッテリーが残っていればな!

レッチリ「バカめ!オメエの車のバッテリーは全てこの俺が頂いちゃったんだよ!一度でもエンジンが切れれば、お前は終わりなんだよ!」

ドカドカドカ!

レッド・ホット・チリペッパーがズイー・ズイーを殴り飛ばして車外に追放する。

そう、藤崎沙織さんと共に俺達を迎えにフロリダから来ていたのは承太郎さんの父親、空条貞夫さんの音楽の盟友にあたる音石明さんだった。

チリペッパーは俺が運命の車輪に侵入した際に同行し、奴のバッテリーに侵入。トラククのバッテリーを食いつくして貰った。

後は何らかの方法でエンジンさえ止めてしまえば奴は運命の車輪を再起動させることは不可能となる。

エンジンを始動させるのが一番バッテリーを食うのだから、一定量のバッテリーを奪えば「車」というルールに縛られている奴のスタンドは何も出来なくなってしまうのだ！

スカルズ軍団をしつこく仕掛けたのは時間稼ぎ。

奴は俺達を倒すのに夢中でバッテリー残量に気付いていなかった。

まあ、そうさせるのが目的でわざわざ苦戦を装っていたのだが：スカルズが。

そして、俺達も無防備になった奴の前に姿を現す。

JOJO「さて、コイツを地獄に叩き落とすのは誰が相応しい？」

八幡「やつぱり俺でしょ？ 作戦を考えたのは俺なんだから」

いろは「ちよつと待って下さい？ 私もずっとスタンドを出しっぱなしで危険な位置に

いましたよ? エメラルドストライクやエメラルドヒーリングはスカルズには出来ませ
んし」

J O J O 「待て。一番頑張ったのは俺とスカルズだったぞ? それを忘れてもらっちゃ
あ困る」

音石 「それを言ったら俺がいなけりや成り立たなかつた作戦なんだから、俺にだつて
権利はあるんじゃないか?」

沙織 「だつたらみんな頑張つたつてことでみんなで殺らない? 私もそのスカルズ? が
水上で動けるように反重力魔法を大量に使つたんだし」

「そういうえば藤崎さんは異世界でそういうのを習得したとか忍さんが言つてましたな。

八幡 「それも…」

J O J O 「そうだな」

いろは 「それではみんなで仲良く…」

音石 「このクズ野郎にトドメを…」

沙織 「刺してしましましょう♪ 私も承太郎さんに倣つていくよお♪」

一同 「サーの」

ジェムストーン 「無駄無駄無駄無駄無駄無駄!」

クリスタル・ボーン 「オラオラオラオラオラオラ!」

ナイチンゲール「無理無理無理無理無理！」

レッツチリ「ウルトラア！スーパー！ギタリストオ！」

沙織「ボラボラボラボラボラボラ！（素手）」

ドゴドゴドゴドゴドゴドゴドゴドゴドゴドゴ！

ズイー「うぎやあああああああああ！」

ドツボオオオオオオオオオオオ！

ブクブク：

ズイー・ズイーはサバンナ川の中程まで飛ばされ、流れて行った。

運が良ければ船に拾われるだろうが、二度とまともな生活は出来ないだろう。

沙織「ボラーレ・ヴイーア！」
ブツ 飛ん じ ま い な

ズイー・ズイー『運命の車輪』再起不能 生死不明
ホウイール・オブ・フォーチュン

<||To be continued||

三代目ジョジョの復活

サバンナ川の川原、そこでズイー・ズイーを倒した僕と八幡少年というはの三人は、藤崎沙織さんと音石さんと共に迎えが来るのを待っていた。

迎えが来るまでに確認しておかなければならないことがある。

八幡「それで。音石さん達はどうしてフロリダからこちらに？」

本来なら、音石さん達は承太郎さんと徐倫さん救出の為にG D s t 刑務所の内部の偵察を実施しているはずだった。

音石「偵察ならほぼ終えてある。というより、必要なくなったのだ」

音石さんはギターをウインウインならしながら言った。

沙織「必要な情報が揃いつつあったときに、刑務所の方にも動きがあったのよ。その話はマイアミでするわ。そろそろ迎えが到着するはずだから、待っててくれる？」

迎え？

そう思ったとき、上空からバルバル…とヘリの音が響いて来た。

上を見るとアメリカ軍のヘリが降下してくる。

大統領の支援か。^{バックアップ}ヘリまで用意するとは…。

さすが大統領ッ！僕達に出来ない事を平然とやってのけるッ！そこに痺れる憧れるウ！

沙織「あれが迎えよ。今は事情を聞かないでくれるかな？あなた達がそうであるように、これも秘密事項にあたる事になったから」

僕達は音石さんを除いてへりに乗り込む。

あれ？音石さんは？

音石「俺が協力出来るのはここまでだ。虹村億泰は俺を許していない。いくら謝罪を重ねても、俺が虹村京兆を殺してしまった罪は一生消えることはない罪なんだ。いつか億泰が俺を認め、許してくれる日が来るまでは、俺は姿を現さない。それが俺の誓いだ。君達の勝利を祈っている。必ず貞夫さんの息子、承太郎さんと共に元気な姿で帰ってきてくれ。クルセイダーズ……」

そう言つて音石さんは去つていった。

俺はこの世界の音石さんの事はよく知らない。

虹村京兆さんの件や承太郎さんを狙つた過去から、許してくれるまでは極力関わらないと決めているらしい。

今回手伝つてくれた理由も、承太郎さんの父、空条貞夫さんとの友情としてもさることながら、罪滅ぼしの一環として協力してくれたらしい。

道を誤ってしまった罪が、いつかは許されることを僕は願う。

正直に言えば、彼のスタンドの力の用途は万能なので、いてくれた方が心強いのだが……。

僕達を乗せたヘリは、離陸を開始した。音石さんは見送りながら「chase」を弾いてくれた。

彼なりのエールなのだろう。

彼の崩れ去った日常に安らぎが来ることがあらんことを……。僕は心の中で願い、彼にサムズアップが見えるなくなるまで返した。

フロリダ州議会会議場——

僕達はフロリダ州庁に運ばれた。

そこには先に到着していたジョルノ達と露伴達先行組と仗助さん達が待っていた。州議会の会議場なんて、場違いな場所に……。

ここまで来るともはや極秘任務とかでは無くなっているよな。

あの人も随分と無理を押し通したものだ。

仗助さんが何やら得体の知れない恐怖を感じていると……

八幡「わかつてくれたか……その悪寒の恐怖……」

八幡少年、いろは、僕は藤崎沙織さんと共に会議室に入った。

億泰「八幡！良かったぜ！無事だったんだな！」

ミスタ「心配したんだぞ！」

小町「お兄ちゃん！良かったよ！」

陽乃「ひやつはろー！よく無事に来てくれたよ！お姉さんは嬉しいぞ☆」

小町と陽乃、億泰、ミスタが八幡達に抱きついた。

八幡「やめろ！小町は大歓迎だが、その他は『キマシタワー』がまた襲ってくる！魔王茅ヶ崎さんはいろはからの視線が痛いし、その他は『キマシタワー』がまた襲ってくる！いろははどこからその刃物を用意した！あ、露伴先生達も来ないで！あなた達の気持ちは嬉しいですが、BLは間に合っていますから止めて下さい！」

いろんな方面から愛されてるなあ。

僕もウンウン頷きながら

承一郎「八幡少年も俺と同じ：いや、下手をしたら俺以上の呪いに蝕まれているんだな。こんなところでも僕達は似ている：はっ！何だこの悪寒は！『ジョジョハチキマシタワー！』って何だ！ジョジョシユウ大歓迎!?違う！俺はそっちの趣味はない！やめろ赤い眼鏡の少女！これが八幡少年がたまに言っている受け入れてはならない恐怖か!?!これは覚悟したくない強烈な呪いだ！」

J O J O 「おい!? 承一郎! 現実逃避で入れ替わるな! この恐怖はさすがの俺も勘弁だ! やめろ花京院! 俺はD I Oとは関係ない! 俺まで呪うな! 戻れ承一郎!」

承一郎も俺も受信してしまったが:これは強烈だ:。

赤い眼鏡の少女か:これは調べてみる必要があるな。

忍「なによこの地獄絵図」

ヴァレンタイン「どジャアあくん!.....:どジャアあくん!」

大統領が国旗と共に現れたと思つたら、この光景にドン引きして再び国旗と共に消え去った。

おいコラツ! 俺達を集めておきながら、出るタイミングを間違えたと悟り、無かつたことにして逃げるんじやあないぞ!

結局、この地獄絵図はしばらく続いた。一度お払いに行つた方がいいな:。

キング・クリムゾン!!?

ヴァレンタイン「どジャアあくん!」

さつき僕達を見捨てて逃げた大統領が何事も無かつたかのように国旗と共に現れた。

ヴァレンタイン「む? どうした? 皆の衆」

仗助「大統領:一言だけ無礼講、良いっスか?」

仗助さんが代表して大統領に声をかける。仗助さんをはじめとして、全員が同じ気持

ちらしい。

ヴァレンタイン「仗助代表か？構わない。言ってみたまえ」

仗助さんは皆に目配せして意思の疎通を図る。

仗助「では…」

一同「無かつたことにしてやり直しても遅いから！さつき現れたのはバツチリ見ているから！見捨てて逃げたの確認してるから！」

ヴァレンタイン「む？先ほどの件か？いや何。楽しそうで何よりと思つてな。私がそこにいて良いかどうかの基準だが…あるいは場にふさわしいかどうかの基準だが…『空気』だとか『雰囲気』だとか『出番待ち』だとか『キャラじゃあない』だとかそんなんじゃない。『吉』であるかどうかだ。自分にとって場が…『吉』であるかどうかなのだ」

ツツコミたい！もの凄くツツコミたい！

ワケのわからんことを言つて煙に巻こうとしてるんじゃない！つてツツコミたい！

ヴァレンタイン「ハチマンⅡヒキガヤ。ナプキンを取れる者は万人から尊敬される者でなくてはならない。一手見誤つた物が敗北すると言うことだ。お互い、一手見誤つた事を無かつた事にする。それもナプキンを取れるもののマナーという物ではないのかね？」

暴論をかざしたよ！いと也容易く行われるえげつない行為（D4C）はあんたの能力じゃあなくて、その立場と精神じゃあないのか？！

まあ、ここで嘯み付いても良いこと無いから黙って頷くけど。

ヴァレンタイン「それでは本題に入るが…その前に入ってきたまえ」
会議室のドアが開かれ、二人の人物が入ってきた。

その人物とは…

承太郎「やれやれ…やつと本題に入ったか」

徐倫「ホントにやれやれって感じだわ。もつと感動的な再会になると思っていたのに」

僕達が救助に向かっていた承太郎さんと徐倫さんだった。

仗助「承太郎さん！徐倫！助けられていたツスカ！」

承太郎「沙織、忍、露伴、間田、未起隆、音石達のお陰でな。もちろん、そこに至るまでの徐倫の頑張りや、その仲間達のお陰でもある。もちろん、大統領閣下のお力添えにもだいぶ助けられた。助けられなかった者も何人もいるがな」

徐倫「ウエザー…F・F…」

億泰「音石が…アイツが助けてくれるなんてよお…」

承太郎「そして…仗助、ジョルノ、静、八幡、小町、いろは、ミスタ、億泰。お前達

が綾瀬絢斗の刺客を引き付けてくれたお陰で、スムーズに閣下や沙織達が作戦を遂行する事が出来た」

そして承太郎さんは仗助さんの肩をポンつと叩いた。

承太郎「特に仗助。お前はよくやってくれた。クリスタル・クルセイダーズのリーダーとして、ここまでの辛い道のりをよく犠牲も出さずに頑張ってくれた。本当に頼りになる男だ。俺はお前を誇りに思う」

仗助「勿体ない言葉ツス。承太郎さん」

仗助さんの目からうつつすらと涙が浮かぶ。

戦いにおける活躍は少なかったが、仗助さんはここまで本当によくやってくれた。

旅がスムーズに行われていたのも、仗助さんがあちこち掛け合って乗り物やホテル等の手配に奔走してくれてくれたお陰だ。

承太郎「ジョルノ。君も副リーダーとして良くやってくれた。思えば君とは最初は敵とまではいえないが、良くない関係だったのに、こうして助けに来てくれたことに感謝する」

ジョルノ「止めて下さい。承太郎さん。全ては家族の為です。今やジョースター家は大切な仲間であり、家族です。八幡達も大切な弟や妹。それを助けに来るのは当然の事です」

承太郎「そうだったな。君はそういう男だった。ただありがとう。それだけしか感謝の気持ちを実現す言葉がない」

承太郎さんはジョルノ兄さんの肩を叩いた。

承太郎「静。その様子から、やっと本当の家族になってくれたみたいだな。俺はお前を本当に救ってやれなかった：徐倫の事といい、俺は本当に家族失格だ。本当に済まなかった。そして、こうして俺達と共に家族として立つてくれることに心から感謝する」

徐倫「静。あなたも私達と同じ、今代のジョジョだわ。本当にありがとう。私達を助けに来てくれて。そして、本当の家族になってくれて」

静「おじさん。そしてお姉ちゃん。謝らないで。そして今までごめんなさい。静がパパやお兄ちゃん達の愛を理解できてなかったから、勝手に悩んでいただけなの。これからはいっぱい甘えるから、覚悟していてね♪お兄ちゃんも結婚してくれるみたいだし」

徐倫「小さい頃からの夢が叶ったのね。祝福するわ、静」

承太郎「ついにこの時が来たんだな、仗助。静が欲しければ、この俺を倒せ。アナスイ共々、相手をしてやろう」

：承太郎の親バカって：静さんにも適用されたっけ？

仗助「ちよっ！それは確定ツスカ承太郎さん！それに未だにジョジョは娘扱いツスカ!?その様子だと徐倫との仲は修復されたんツスよね？」

承太郎「それとこれとは話は別だ。徐倫と静、二人のジョジョは俺の大切な娘だ！例えお前であつても娘を奪うやつは俺が許さん！良いな！決闘だ、仗助！」

仗助「マジかよ……」

仗助さんはガックシと肩を落とした。

静さんが「ドンマイ、あなた♪」と肩を叩くが、承太郎さんの火に油を注いでいるから止めてあげて欲しい。

承太郎「それはともかく……八幡。危険を承知でよく来てくれた。狙われていると知りながら、こうして来てくれるとは……お前がDIOの転生だと、時々忘れてしまうことがある」

八幡「今さらだな承太郎。俺はもう、とつくにジョースターの一員だ。前世とかそう言うのは、もう関係ない。俺はお前の弟子であり、家族であり、ライバルだ。それに、ディオも今や立派な仲間だ。そうだろ？ディオ」

承太郎「いろは、小町……二人のおばあちゃん」

いろは「おばあちゃんは止めて。承太郎さん。今はあなたの娘よりも年下だよ？それに、ハチ君と同じです」

小町「家族であり、師匠。例え波紋の素質がなくても承太郎は小町の弟子の孫。助けに来るには十分な理由なんだよ。承太郎おじさん」

承太郎「そうだったな。不甲斐ない俺だが、家族に俺は恵まれた……」

承太郎さんは俺達の頭を撫でようとして、止めた。

代わりに固い握手をする。

娘のような扱いよりも、戦友として感謝の気持ちを捧げたようだ。

承太郎「億泰。今は家庭があるのに、立場を捨ててよく来てくれた」

億泰「よして下さいよ承太郎さん。承太郎さんは俺や親父の恩人なんツスから、恩を返すのは当然の事ツスよ！それに、承太郎さんは俺にとつても兄貴分なんスよ？当然の事じゃあねえツスカ！」

承太郎「そうか。良い弟分を持たたことに誇りを持つとう。それと、音石の事だが……」

億泰「……正直、今でも兄貴の事は許せねえツス……。だけどアイツはちゃんと施設での更正を真面目にやって、社会復帰を果たして……。アイツからの金は受け取らねえって突っぱねているのに、アイツは稼ぎのほとんどを俺や親父に仕送りしてるんス。こうして今回は助けてくれたみてえですし、聞けば今日は八幡を助けてくれたと聞いたツス。無事に帰れたら、一度腹あ割って話し合っても良いんじゃないかと思うツス」

承太郎「それが良い。奴は奴なりに過去の罪に苦しんでいる。許すか許さないかは億泰の問題だから口は出さないが、一度話し合いの機会は持つべきだろう。成長したな、億泰」

億泰「マジでよして下さい。承太郎さん。俺だつて良い年なんスから」

承太郎さんと億泰さんは互いにフツと笑つた。

承太郎「ミスタ…」

ミスタ「やめてくれよ、承太郎さん。俺はジョルノの部下としてここにいますよ。部下がボスの身の安全に全力を尽くすのは部下として当然なんじやあないツスカあ？ 他の奴に声をかけてやつて下さいよ」

ピストルズ「ミスタ、テレテル」

ミスタ「うっせえぞ、ピストルズ！」

ミスタさんは顔を赤くしてそっぽを向いた。大統領も含めて生暖かい目が向けられる。

承太郎「そして：雪ノ下陽乃。いや、茅ヶ崎陽乃。君の事情は全て聞いている。20年前は済まなかつたな。アヌビス神」

陽乃「いえ。あの時はお互いに立場があつたからよ。あの時はどちらが生きて、どちらかが死ぬしかなかつた。それは今も変わらないわ。状況があの時を作つた。それは今も変わらない。たまたま今回は味方に回つただけよ」

承太郎「それでも、君はこうして仗助達と共に俺と徐倫を助けてくれた。事情があつたとはいえ、その事実は変わらない。特にワシントンでは君の活躍が大きかつたと忍か

ら聞いた。君の機転がなければ、誰かが犠牲になっていたかも知れない。俺達ジョースター家は君を尊敬し、家を挙げて君に協力すると約束する。我々と目的は同じようだしな」

陽乃「私こそ、感謝します。空条承太郎。そして私からも20年前は済みませんでした。私は新たなDIO様：比企谷八幡君やあなた達ジョースター家と共に歩んでいくと誓います。雪ノ下の呪いを：お願いします」

承太郎「承知した。よろしく頼む。茅ヶ崎陽乃」

承太郎さんと陽乃は固く握手した。敵か味方かあやふやだった陽乃さんは：今、こうして新たな仲間として僕達の味方となった。

承太郎「さて：君が、はるばる平行世界から俺達を助けに来てくれた別の世界の家族、一条承一郎君だね？今回の事は本来なら君は関係の無かった事だ。それなのに仗助達の力になり、我々を助けてくれた。君には感謝の気持ちをいくつ述べても足りない」

承太郎さんは僕を見てそう言ってくれた。

承一郎「僕は任務でやっていただけですよ、承太郎さん。それに、僕は早く帰って、八幡の言う本物に会いたいです。僕の世界のあなたやジョルノ兄さんも含めて。それに：」

承一郎は目を閉じて一息つく。

承一郎「僕の世界とは違うが、この世界にも僕や僕の本物があるようなんです。だったら、守りたいんですよ。この世界の僕の本物も。例え会うことは叶わなくても、この世界の僕『一条楽』の本物を。そうだろうか？ JOJO」

例え会えなくても、守ると誓った人達がいる。それだけでも充分な理由になる。

承太郎「君にも、ジジイの言う黄金の精神が輝いているのだな。君が帰った後でも、一条楽君の日常を気にかけると約束しよう」

承一郎「ありがとうございます。それならば全てが終わった後、僕も安心してこの世界から去ることができそうですが、良いのですか？」

確かに僕にとつては願っても無いことだろうが、戸惑っている。

承太郎「当然だ。例え世界が違おうとも、君は俺達にとつては既に家族であり、大切な恩人だ。この世界の一条楽君がジョースター家と関係なからうと、君への恩義が消えるわけじゃあない。我々が直接関わる事はないだろうが、我々ジョースター家とSPWは君への感謝を忘れる事が無いように尽力すると約束する。それが現ジョースター当主としての決定だ」

承一郎「ありがとうございます。承太郎さん」

僕は深々と承太郎さんに頭を下げた。

承太郎「君やジョルノのように、君の兄弟達が全て黄金の精神に宿っていれば良かった

たのだが」

承一郎「やはり、僕の世界のように、他の兄達は…」

承太郎「残念だが…」

承一郎「それは仕方のないことです。僕の世界の事では既に終わった後の事。実は黙っていました。僕の世界はここよりも数年後の平行世界です」

僕はこの事実を告げる。

承一郎「もつとも、この世界は八幡のように父が転生していませんでしたから、僕が知る未来と大分変わってしまっていて、今後はどうなるかは僕にもわかりません。僕が全てを知ったのは、僕の世界のあなたがこの事件を解決した後、あなたに出会ってから聞いたことです。それに、今回僕たちの前に現れた刺客達がこの事件に関わっていません。綾瀬なんて存在も…」

だから僕も奴等の対処が後手に回る事もあったのだ。

承太郎「わかった。君からの情報に感謝する」

承太郎さんは僕とも握手を交わし、その場を締めた。

ヴァレンタイン「もう良いかな？ ジョウタロウ、クウジヨウ」

承太郎「貴重な時間をありがとうございます。大統領閣下。それと、閣下にも私から感謝の意を…」

ヴァレンタイン「それは必要ない。私が君達に力を貸したのは、ひとえに我が国にとつて『吉』となるからだ。大統領たるもの、個人の感情で動く訳じゃあない。プツチ神父の計画は、ただ一人の『吉』であり、その他の国民にとつては『凶』だ。吉と凶は等しくなくてはならない。我が国にとつての『凶』は、取り除く。それがナプキンを取れるものの義務と権利であると私は考える」

承太郎「そうですか。わかりました」

ヴァレンタイン「それでは始めよう。クリスタル・クルセイダーズの諸君。私が行つた事とこれからの作戦を決定する大事な会議を」

そうだ。決めよう。

僕達の「石作りの海」の行く末を…

ストーン・オーシャン

< || t o b e c o n t i n u e d ||

ミッション名って結構重要

フロリダに到着した僕達は州の議会会議室に集められ、全ての戦力がここに集まった。

これだけの戦力がよく集まったものだ。

徐倫「まずはあたしからの情報ね。プッチは目的の36の極罪の魂を手に入れようとして色んなスタンド使いを使って懲罰房であたしに仕掛けて来たわ。でも、骨はレッド・ホット・チリペッパーが奪っていったし、あたしを殺そうとしていたスタンド使い達は懲罰房で侵入してきた忍さんや露伴先生、間田さんが倒してくれたわ。その過程で父さんの記憶を奪い返してくれた友達はやられてしまったけど……F・F……」

承太郎「……そのF・Fと呼ばれる彼女のお陰でテキサスで眠っていた俺が復活できた。ちなみに音石が手にした骨は奴が砕いて太陽に晒した。これで八幡が死んだとしても奴が天国に到達することは不可能になった。もつとも、八幡の骨が奪われてしまえば同じことだから、完全に天国を阻止できたわけでは無いがな」

DI O『やりたくてもできん。所詮、今の私はお前の中で眠る残留意識みたいなものだ。やるつもりもなくなつたがな。例え14の言葉を魂に刻まれた所でお前がお前

あれば問題はない』

J O J O 『仮に可能だったところで、やろうとしたら俺が血をぶちまけてやる』

J O J O も会話に参加する。ていいうか発想がグロい。

ジヨナサン 『僕も見張っておくよ。もつとも、ノースカロライナでの行動を見る限りじゃ、いつの間にかD I O も承太郎のいう黄金の精神が宿っていたみたいだけど』

八幡 「OK。今デイオに確認したけど、36の極罪を集める気も力もまったくないみたいだ。14の言葉を刻まれても大丈夫らしい。後は俺が体を切断されなければ問題は無い。続けてくれ」

八幡少年は話の続きを促す。

沙織 「一方で自棄を起こしたブッチは自分の弟であるウエザーの記憶を蘇らせ、フロリダの街を混乱に落とそうとしていたの。もう天国なんてほぼ不可能になったから、ジョースターを殺すことだけしか頭になかったのね。だけど、ここでも誤算が生じたわ。記憶を取り戻したウエザーは死にたがっていたから…八幡ちゃんに送る刺客一人を巻き込んで私の魔法で殺してくれと言って…」

徐倫 「何としても止めたかった…だけど、沙織さんを攻撃しようとして…」

沙織 「結局、やるしか無かった…ごめんね。徐倫ちゃん」

陽乃 「それで、巻き込まれた刺客は？」

間田「マニツシユ。死神の暗示を持つスタンド使いさ。可哀想な人だったよ。宗教的な問題で、彼の故郷は八重歯の子は不吉とかいう事で迫害された人生だったらしい。今ではそんな事は無くなったけど、彼の子供時代はそんな身体的特徴を前時代的な宗教観念で迫害される事も少なくなかったんだ」

マニツシユ：確か夢の中で襲いかかるスタンド使いだったな……。D I Oが倒された時はまだ赤ん坊だったな。

沙織「生まれてくる場所や時代が違っていれば、あの人は今頃世界に名を刻む天才児になっていたかも知れないわね。迫害された青春を送ってきた彼は、もう歪みに歪みきっていて手遅れだった。彼はプッチの身代わりとなってウエザーによってマニツシユは死亡したわ」

徐倫「ウエザー……。私を守る為に……。もう一度あなたの声を聞きたかった……」

徐倫さんは顔を反らして涙を流した。

ヴァレンタイン「後は私だな。クリスタル・クルセイダース別動隊から報告を聞いた私は、州立グリーン・ドルフィン・ストリート重警備刑務所（G・D・s t 刑務所）：俗名『水族館』を閉鎖する決定を下した。受刑者や勤務員は既に別の刑務所に移管してある」

露伴「なお、プッチの息のかかった者の炙り出しについては僕のスタンドが役に立つ

た。一人一人の情報を閲覧してね。これで一つまた、創作意欲が沸いてきたよ」

八幡（さすがは露伴先生！どんな情報をも見逃さず、それを漫画にしたいというぶれない漫画への熱意！そこに痺れる！憧れる！）

オイ、また声が出ているぞ。

露伴「君だけだよ八幡君！真に僕を理解してくれる波長の合った人間は！」

小町「また声に出たよ、お兄ちゃん。将来お兄ちゃんが小説家や漫画家、映画監督になる未来が無くて良かったよ。絶対に露伴先生の影響受けるから」

八幡・露伴「その道があったかー！」

ジョースター家及びSPW財団関係者「今さら逃がさないからな？」

八幡「……………はい」

…これはひどい…。職業選択の自由はどこへ消えたんだ？まあ僕も同じようなものだけど。

ヴァレンタイン「ヒキガヤ。諦めたまえ。それと諸君、続けても構わないかね？」

承太郎「申し訳ありません、閣下」

ヴァレンタイン「クリスタル・クルセイダーズの天国を阻止するという本来の目的は半ばなされた。しかし、天国ステアウェイ・トゥ・ヘブンへの階段を企むテロリストを野放しにするわけにもいかない。そこで…最後の最後まで諸君に任せるのは心苦しいが、エンリコ・プッチ及び綾

瀬紬斗の暗殺を頼むことになるが……」

承太郎「閣下の最後の依頼を受けるか否かは……仗助と八幡、徐倫そして承一郎君。お前達が決める」

え？ ジョースター家当主の承太郎さんが決めるんじゃないんですか？

承太郎「今回、俺は何もしていない。仲間達と共にプッチ達を追い込んだのは徐倫。ここまでクリスタル・クルセイダーズを引っ張って来たのは仗助。そして大統領閣下と最初からここまですべて共にこの作戦を遂行してきたのは承一郎君。更にここが重要なのだが……全ては八幡を巡る戦いがこの戦いの根幹にあった。全てを決着を付けるのが俺達か……それとも国に任せるか……それらを決定する権利と義務がお前達にはある」

粹じゃあないですか承太郎さん。さすがは三代目ジョジョだ。

徐倫「やってやるわ。まやかしの為に世界を一巡なんかさせ、その為にF・Fやウエザーを殺し、他にも関係の無かった受刑者や勤務員が多く犠牲になった。あんな奴を野放しにするわけにはいかない。それに、ここで引き下がるようじゃあ、あたしは二度とジョジョを名乗る資格はない。大義名分なんかいらぬ。あたしの気が収まらないからやるの」

仗助「それでこそ、ジョジョだぜ徐倫。俺だって行くツスよ、承太郎さん。例え止められてもなあ。家族や仲間がここまですべて虚仮にされて、黙っているなんて、そんなのは

ジョジョと呼ばれた俺達が許さねえツス！一つ、戦術上逃げることはあつても、戦いそのものからは決して逃げるな！ジョースター家の家訓じゃあないツスカ！」

承一郎「：僕はこの世界の人間じゃあない。依頼主クライアントによつてこの世界に連れて来られた人間だ。でも、この世界にも彼女達がいるんだ。守ると決めた人達がいるんだ！例え僕には関係なくても」

そこで僕はJ O J Oと入れ替わる。

J O J O「俺は既に地獄に堕ちた鬼だ。『天国』なんかに未練はない。だがな…、彼女達を守る為なら、俺は既に堕ちた地獄の更に下に堕ちてやる」

例え世界が違つても守り抜く。それが僕とJ O J Oの誓いだ。

八幡「全てはジョナサンとディオのやったことが百年近くも続く因縁の始まり。ならば二人の後始末は彼らの魂と記憶を持つ俺が付けるのがこれまで犠牲になつた者達への唯一の償いだ。そこから逃げたら今後の俺の人生は何を為しても偽物だ。『やはり俺の青春はまちがっている。』そんな人生なんて本物じゃあない。当然、俺も行く」

決定を求められた僕達はそれぞれの胸の内を語る。

承太郎「よく言つた。当然、俺も行く」

仗助「皆はどうする？ここから先は強制じゃあない。行きたくない奴は行かなくて良

い」

仗助さんがクルセイダーズのリーダーとして皆の意思を聞く。

ジョルノ「今回、まだ敵の中には僕の弟もいる。彼らの為にも、僕は行く。例えば、始末することになっても」

静「一つ、地獄に落ちるべきクズは、キツチリ地獄への穴へ背中を押ししてやるべし！ 静も行かせてもらおうよ！」

いろは「一つ、主義や主張は個人の勝手。許せないのは人様の家族や友人を公然と侮辱する者、他の者には迷惑をかけず、キツチリ殺るべし！ 私も行きます！」

小町「一つ、我々は勝たなくてはならない。引き分けはない！ ここで逃げては勝ちはない！ 小町も行きます！」

億泰「俺は頭が悪いからよお、小難しい事はわかんねえけどよお、ここで逃げたら男が廃るよなあ。勝って胸を張って杜王町に帰ってえ。男、虹村億泰。当然行かせてもらうぜえ」

ミスタ「昔もこんなことがあったよなあジョルノ。ブチャラティがディアボロを裏切る時に。あん時は次の幹部とか金だとか打算で動いたけどな。今は違うぜ。アバッキオやナランチャのように俺が落ち着ける場所はお前達の傍だ。あいつらが生きてこの場にいたら、絶対にお前達と共に行く。俺の心は今でもブチャラティチームだぜ？ ジョルノ」

陽乃「今回、私達が戦ってきたのは皆あの時のDIO様の部下達だった。あまり仲間意識とかは無かったけれども、それでもあれはあれで1つの絆だった。こんなことがなければ生き残った者達は静かに暮らすことが出来たのかも知れない。直接手にかけてしまった私が言うのも今さらだけど、それでも彼らを巻き込んだ人達は許せない。弔い合戦なんて、私の柄じゃあないけれど、私も行かせてもらおうわ」

CCの正規メンバーは決まった。

忍「ダチを見捨てて明日の食う飯がうめえかよ。男の道は外れるとも男の道をそれるとも、女の道をそれるとも、踏み外せぬは人の道、散らば諸友、真の空に、咲かせてみせよう。オカマ道ウエイ。あちしのこの信念は歳を重ねても変わらないわ。あちしも行かせてもらおうわよ！ジョジョ達」

沙織「本当はね、毎週楽しみにしている食堂の常連さん達もここに来たがっていたの。忍ちゃんの友達にも規格外の戦いの天才や、スタンド使いの人も。その人達の気持ちを受けて、私はここに居るの。だから、その人達の分も私は行って戦うわ」

露伴「リアリティーだ。ここまで来たのに、最後まで居合わせなくては、全てのリアリティーが失われる。僕の書く漫画に、リアリティーのない物はいらぬ。僕も行く」

間田「僕は杜王町が大変な時には怖じ気づいて何も出来なかった。今度は逃げない。同じような人が一人、頑張つて今も任務で頑張つてるんだ。僕も行く」

未起隆「仗助さん。前にも言いましたよね。僕でもやれるんだぞって、あなたに言いたい：と。それは今でも変わりません。行かせて下さい」

ヴァレンタイン「決まったようだな。それでは現在のGDstについて説明しよう。今のGDstは奴等の要塞だ。奴等は息を潜ませて隠れ棲んでいる。内部にはエンリコ・プッチ、綾瀬絢斗、DIOの息子と思わしきウンガロ、リキエル、ヴェルサスの三人、そしてケニーGとテレンス・T・ダービーがいることが先行偵察に出ているユウヤ・フンガミとアキラ・オトイシによって判明している。後は、承一郎君のように潜入している者もね。君達は明日、要塞化されているGDstに突入してもらいたい」とうとう明日か：明日、全ての決着を付ける。

そこには恐らくサンタナもいるだろう。とりあえず、メンバーの確認だ。

クリスタル・クルセイダーズ正規メンバー

四代目ジョジョことSPW財団日本支部長兼クリスタル・クルセイダーズのリーダー

東方仗助

スタンド名：グレイシー・ダイヤモンド

五代目ジョジョことイタリア支部支部長兼ヨーロッパ最大のギャング団パッショ

ネのボスにてクリスタル・クルセイダーズのサブリーダー

ジヨルノ・ジヨバーナ（本名・汐華初流乃）

スタンド名：ゴールド・エクスペリエンス

七代目ジヨジョ候補こと日本支部長補佐（非公式）兼波紋の戦士の総武中学一年生
静・ジョースター

スタンド名：アクトン・クリスタル

イタリア支部支部長補佐兼パツシヨーネ親衛隊長

グイード・ミスタ

スタンド名：セツクス・ピストルズ

初代ジヨジョのジヨナサン・ジョースターとディオ・ブランドーの魂が融合して転生した日本支部関東支部長（非公式）、兼波紋の戦士で総武中学一年生

比企谷八幡。

スタンド名：ザ・ジエムストーン

生
エリナ・ジョースターの転生で日本支部関東支部千葉課長（非公式）の総武小学六年

一色いろは

スタンド名：ナイチンゲール・エメラルド

エリザベス・ジョースターの転生で元波紋の一族の当主、日本支部関東支部補佐（非公式）兼波紋の戦士の総武小学五年生

比企谷小町

スタンド名：サンシャイン・ルビー

日本支部長護衛、会社員（現在はSPW日本支部に出張扱い）

虹村億泰

スタンド名：ザ・バンド

元DIOの部下アヌビス神の転生で元汐華家の刺客の総武高校一年生

茅ヶ崎陽乃（本名・雪ノ下陽乃）

スタンド名：アヌビス神

もう一人の七代目ジョジョで、平行世界の秀英組次期組長（本人は否定）兼謎の傭兵
DIOの息子 凡矢理高校生

一条承一郎（もう1つの人格・JOJO）

スタンド名：クリスタル・ボーン&ブラッディ・シャドウ

次にクリスタル・クルセイダーズ別動隊

東京ひびきの市のカフェ Sunny lightのオーナー兼店長

兼クルセイダーズ別動隊リーダー

藤崎忍

スタンドなし 特殊能力・能力を含めた変身

異世界の傭兵で魔法戦士、藤崎忍の従姉で別動隊副リーダー

藤崎沙織

スタンドなし 謎の天才 異世界の魔法

漫画家（現在は休載中）で日本支部の専属イラストレーター
岸辺露伴

スタンド名：ヘブンズ・ドアー

杜王町の会社員（現在はSPW日本支部に出張扱い）

間田敏和

スタンド名：サーフィス

杜王町の無職（経歴不明）の自称宇宙人

支倉未起隆

スタンド名?：アース・ウインド・アンド・ファイヤー

（任務中の為不在）

世界的ウルトラ・スーパー・ギタリスト

音石明

スタンド名：レッド・ホット・チリペッパー

(任務中の為不在)

杜王町、SPW財団運送業下請け会社、噴上運輸社長

噴上祐也

スタンド名：ハイウェイ・スター

(任務中の為不在)

潜入中の為、公表されず

正規メンバー入り？

三代目ジョジョことジョースター家当主のアメリカ海洋学者

空条承太郎

スタンド名：スター・プラチナ

6代目ジョジョにて今代のジョジョ

空条徐倫

スタンド名：ストーン・フリー

(治療中の為、今夜合流)

G D s t 囚人

エルメエス・コステロ

スタンド名：キツス

(治療中の為、今夜合流)

G D s t 囚人

ナルシソ・アナスイ

スタンド名：ダイバー・ダウン

後方支援 (壮行会会食担当及び戦闘食作成)

杜王町イタリアレストランオーナー

トニオ・トラサルデー

スタンド名：パール・ジャム

総指揮

アメリカ合衆国大統領

フアニー・ヴァレンタイン

スタンド名：D i r t y D e e d s D o n e D i r t C h e a p

後方支援（壮行会会食担当及び戦闘食作成支援）

主婦

広瀬由花子

スタンド名：ラブ・デラックス

以上が僕達の最後の戦いのメンバーだ。

ヴァレンタイン「さて、いよいよオペレーション・クリスタル・クルセイダーズも大詰めとなった。ここで恒例のファイナルミッション名を決めようじゃあないか」

承一郎「好きですね？大統領。クリスタル・クルセイダーズじゃあダメなんですか？」
ヴァレンタイン「今までこのメンバーでやってきたのだ。チーム名は変わらないが？あくまでもこの最終ミッションの名前だよ。やはり気分は大切だからな。さて、これを決めるに相応しきは……」

大統領が八幡少年を見る。他のメンバーも……

八幡「お、俺？」

承一郎「さつきも言っていたじゃあないか。全ては君の前世が始まりだつて。そして、全てがザ・ワールドを巡る戦いだつたつて。ならば、相応しきは君だよ八幡。クリ

スタル・クルセイダーズだって君が考えた名前なんだしね」

八幡「わかりました。ならばファイナルミッション名は……」

八幡少年は少し考えた後、顔を上げた。

八幡「Endless^終 the^な world^世界：エンドレス・ザ・ワールド……はどうで

すか？ ザ・ワールドを巡った戦いの締めくくりとして、そして世界は終わらないという願掛け。それらを込めて見ました」

ヴァレンタイン「ふむ。エンドレス・ザ・ワールド……か。悪くない。それでは翌朝よりオペレーション・クリスタル・クルセイダーズのファイナルミッション、エンドレス・ザ・ワールドを開始する！ 健闘を祈る！ どジャアア〜ン」

大統領はアメリカ国旗に包まれて姿を消した。

本当に神出鬼没だなと苦笑する。

だが、短いが長かったこの戦いの最終決戦が始まる。

待つてろよプッチとサンタナ！ 僕達はお前らにとって脅威の来訪者となるだろう！

↑ To be continued

G. D. s t 突入

ホテルマイアミグランドビーチ——

マイアミ海岸のホテルの中でも、最低四万円はかかる宿泊費のホテル。

大統領はその中でもキングスイートルーム六人部屋を四部屋も押さえていた。

仗助「SPWも大概だが、あの大統領もやるのが大概だな」

ジヨルノ「もう驚きませんよ。あの人の企画外さは」

承一郎「なんか小ホールまで借りているらしいですね。何をやるつもりなんでしょう」

まあ、会議はないだろうけど。

会議だったなら昼の州議会会議室で既にやっているのだから。

由花子「みんなの壮行会よ。久しぶりね、静ちゃん、いろはちゃん、小町ちゃん」

この世界では千葉支部の営業係長に転属予定の東京支部所属、営業課の広瀬康一さんの奥さん、広瀬由花子さんがやって来た。

旧姓、山岸由花子さんだ。

由花子「比企谷君？相変わらずいろはちゃんを大事にしている？」

八幡「は、はい。いろは一筋です（最近怖いけど）」

由花子「そう。もし、いろはちゃんを裏切つていようものなら……」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

由花子「あんたを拐つてでも一筋の愛を貫く素晴らしさを延々と説く必要があるんじゃないかと思つていたけど、安心したわ」

あれ？良く考えるところはと静さんに似ているような？……というか由佳子さんに二人が影響されたのかな？

八幡「あの、今回俺のデイトの転生かどうかが原因の誘拐未遂の事件なんで、拐うとかは洒落にならないんで止めて欲しいんですけど……広瀬さん」

由花子「そう？まあ、良いわ。支度が忙しいから、また後で」

いろは「あれ？康穂ちゃんは？」

康穂とは広瀬夫妻の娘さんで、小町とは同学年でらしい。

由花子「康穂はうちの旦那が見てくれているわ。もう小学校高学年なんだし、少し離れるくらいじゃあ大丈夫よ。学校だつてあるんだし。それに、比企谷君がいるのに連れてこれないでしょ？」

後で事情を聞いたのだが、互いがスタンド使いである者同士で夫婦になった広瀬夫妻の娘である康穂は当然、生まれつきのスタンド使いらしい（能力は知らないが）。

生まれついでとのスタンド使いの幼少期はいくつかにわかれる。

康穂の場合は静さんと同じパターンで、同年代で周りにスタンド使いがいなかったパターンだ。

あまりに不憫だと思つた康一さんが、ある日八幡達のところに康穂を連れてきた。そこからはあつという間だつたらしい。

康穂は八幡達になついた。いや、八幡少年になついた。なつきすぎたのだ。

結果、八幡少年を巡るいろはと康穂の戦争が勃発。

いろはと康穂はそれぞれは仲が良いが、そこに八幡少年が混じると話は別のようだ。

康穂も良い子らしいのだが、親が元祖ヤンデレの由花子さん。

既にいろはとの関係は決定していたようで（『やはり俺の奇妙な転生は間違っている』第1章、「夕焼けのエンゲージ」参照）、青筋を立てた由花子さんに拉致られて監禁されたようだ。まる1日も。

それ以来、完全にこの人が苦手になつたようだ。ちなみに康穂はまだ諦めていないそうだ。

そんな事情から、康一さんは千葉に転動しても、基本は東京から出勤するらしい。

八幡少年と康穂を日常的に会わせるのはまずい……と。

こっちはヤンデレなんていなくて良かったなど心から思う。もしいたら冷や汗だら

ダラものだ。

夜、小ホール——

そこでは決戦の壮行会として立食式のパーティーが開催されていた。

「そんなんするくらいなら早く休ませろ！」と八幡少年が言ったら、由花子さんに「理由は別にあるのよ」と言われた。

ミスタ「お、パーティーの料理はイタリアンか！それも本格的な！」

億泰「え、この臭い……ま、まさか！トラサルデーの！」

億泰さんが大声を張り上げた。

トニオ「さすがは億泰さん。常連の億泰さんなら、私の料理を臭いでかき分けてくれると信じていました」

億泰「トニオさん！」

厨房からシェフのトニオ・トラサルデーさんが現れた。

億泰「トニオさん！俺はめっちゃ嬉しいですよ！決戦前の景気付けにこれ以上の料理はないですよ！あれ、でも店は？」

トニオ「ここにいる杜王町の方々は私の大事な友人。かつては杜王町の危機を救ってくれた方々です。そして、今度は世界を救う戦いをしているというじゃありませんか

！ならばこんな形でも力を貸したい！そう思つて馳せ参じました」

今は英語で喋っているからか、トニオさんは普通に喋っているように感じる。

普段は似非外国人のような片言の日本語だから、逆に違和感がある。

八幡「おおつ！トニオさんのイタリアンかあ！これは粋な計らいだ！」

陽乃「あれ？比企谷君はイタリアンと言えば千葉のオアシス、サイゼリアじゃあないの？」

八幡「ファミレスとしてはそうっすよ。でも、あくまでもファミレスとしてはです。本格イタリアンならトラサルデーは格別です！」

陽乃「そんなに美味しいの？千葉愛を豪語する比企谷君がサイゼリア以上と脱帽するくらい？」

確かにトラサルデーの料理は他のファミレスとは次元が違う美味さだからね。

八幡「陽乃さん。確かにトニオさんのイタリアンは味だつて絶品です。でも、それだけじゃあない！トニオさんの料理は内側から治療を施す一種の内効薬みたいなものなんですよ」

トニオ「今日は全品最低は一口ずつ召し上がって下さい。一人一人に対応はできないのが残念ですが、それで悪いところは全て治る筈です。あとは安眠促進効果や自己治療向上効果のお料理も用意してあります。皆さん、是非とも御賞味ください」

そう言つてトニオさんは厨房へともどつていった。

僕達クリスタル・クルセイダーズは全員、少なからず負傷し、疲労を溜め込んでいたので、トニオさんの料理は非常に助けられる。

仗助さんやジョルノ兄さんにはない内効的な治療、一番近いのはいろいろの治療だが、トニオさんのパール・ジャムはそれを極めた能力だ。

徐倫「プッチとの最後の戦いの前に最終的な体のメンテナンスとしては最高のバックアップね。アメリカ式、イタリア式、フランス式、イギリス式、日本のグツジョブ、最高よ！」

ヴァレンタイン「ぬ？みんな歯が抜けたり、腹が裂けたりしはじめたぞ？敵のスタンダード攻撃か？」

まあ、初めて見る人は焦るよね。この中では大統領くらいなのかな？

承一郎「大統領、あれは体の悪い部分が体外に出ているんですよ。そのあと、治療が始まるんです」

僕が大統領に説明する。

そう、症状が出始めた人は料理に対応した部分に悪いものを持つていたから。

それがどんどん治療されていく。

ヴァレンタイン「ふむ。CC関係のスタンド使いと聞いたから応援を要請したが、こ

れはすごい。医療関係の食堂に勤務した方が世間の為ではないのかね？」

ああ、やっぱりそこに行き着いたか。でも、それをSPW財団がやらない理由は2つある。

仗助「おれも、それは一度考えた事があるんですが、それだと意味がないんですよ。将来的には。トニオさんありきでのその治療は、今という時にはプラスですが、将来的にはマイナスなんですよ。誰にでも出来る医療を向上させる方が、プラスなんです」

仗助さんが言った理由が一つ目。

スタンド能力ありきの治療では医療の発展には意味がない。

八幡「それに、やはりトニオさんは料理人なんですよ。食べて欲しいから。食べてもらった人に健康でいてもらいたいから。そんな気持ちがあの手スタンド能力として出たものだと思います。だから、あの人の場合は好きなどころで好きな料理を作るのが一番いいと思います」

スタンド能力は精神の力。

好きな杜王町で好きな料理をするのがあの人には一番良いのだろう。

???「スツゲエ！傷が完璧に治った！そしてこの料理で完璧に体調が整った！」
見るとドレッドヘアーの女の人が騒いでいた。

その隣には青髪ロン毛の男の人がキョロキョロしながら料理を食べている。あれは

：

徐倫「エルメエス！アナスイ！」

刑務所の中で徐倫さんに協力した仲間、エルメエス・コストロさんとナルシソ・アナスイさんだ。

徐倫「紹介するわ。G・D・s t水族館の仲間、女の方がエルメエス、男がアナスイよ」

エルメエス「あたしがエルメエス。ここにいる大半がスタンド使いつて聞いているぜ。よろしくな」

アナスイ「アナスイだ。ここにいるのは徐倫の為だ。それ以上でもそれ以下でもない」

エルメエスさんは姉御というか兄貴というか…。

アナスイさんは微妙に由花子さんに似た狂気を感じるのは気のせいではないと思う。

ジョルノ「エルメエスというのは雰囲気を変えたブチャラティって気がするし、アナスイというのは服装を変えればまんまアバッキオだな」

パツシヨーネのメンバーに似たような存在がいたらしい。

徐倫「そう言えば、あたしの死んでしまった仲間のF・Fというのにミスタさんは似てたよ。誰かに似ていたとは思ってたんだよね。会わせたかったな…」

アナスイ「ウエザーにもだ。あの死にたがりが……もう少し待ってれば、こんない出会いがあったのに。あのバカ野郎」

二人は涙を流していた。

承太郎「花京院、アヴドウル、イギー……」

仗助「重チー、玲美さん……」

億泰「兄貴……」

由花子「彩さん……」

ジオルノ「ブチャラテイ、アバツキオ、ナランチャ……」

小町「シーザー、ストレイツオ様」

承一郎「……」

各々が失った者達へ、哀悼の意を表している。

八幡「ジョージ父さん、ツエペリさん……」

仗助「もし、失われていなかったら、その人達はここにいたかも知れないよな。でも、その人たちがいたからこそ、今がある……そうとも思える」

忍「でも、あちし達の中から、それを出すわけにはいかないわ。それがたとえ覚悟の上でも」

承一郎「絶対に生きてここに戻ろう。一人たりともキャンセルを出すんじゃない

ぞ」

八幡「ああ、絶対に……」

仗助「お前ら！」

仗助さんは全員に聞こえるように声を上げる！

仗助「明日は一人たりとも欠けずにここに戻ってくるんだ！潜入しているやつらも含めてな！それがクリスタル・クルセイダーズの最終ミッションだ！いいな！」

わああああああああああ！

心身ともに最高のコンディションを持って、僕達は翌日に臨んだ。

そして、夜が上げて翌朝：

今回の事件の始まりであり、最終決戦の地となつた閉鎖されたG. D. s t 重警備刑務所、別名水族館につながる直進道路。

米軍が取り囲むこの場所の装甲車に僕達が乗り込む。

大統領がヘリから降り立ち、全員に檄を飛ばす。

ヴァレンタイン「諸君！オペレーション・クリスタル・クルセイダーズ最後の戦いだ！これは世界の存亡を賭けた戦いである！作戦の成否が、世界の命運を左右すると言つて間違いがない！諸君の健闘を祈る！仗助代表！」

仗助「ラストミッション！エンドレス・ザ・ワールド！始動！行くぜ、テメエら！」

仗助さんの号令で外壁に向けて突入の為の援護ミサイルが発射される。

そして、僕達に乗せた装甲車が突入を開始した！

とうとう、僕達の最終決戦が：

幕を開いた！

< || t o b e c o n t i n u e d ||

同じ手を何回もやるとか頭沸いているのか？

ミサイルの援護により、刑務所の外壁は完全に破壊され、入口の第2隔壁へと突入した僕達。

億泰「こんなもん！削つちまえば問題はねえんだよ！」ガオオン！

億泰さんはザ・ハンドで最初の入り口を破壊した。他にも障害となる場所は全て億泰さんが破壊する。

いくつか隔壁を突破すると：

承太郎「ここは来たことがある。徐倫と面会をしにやって来た場所だ」

ピノキオ「そして君達が命を失う場所でもあるのさ！」

そこには絵本から飛び出たようなピノキオがテーブルに鎮座していた。

露伴「ふん！酷い絵だ。コレが世界に認可されているピノキオだと？尊敬にも値しない。ここは僕がやろう」

アナスイ「俺も残ろう。何でかわからないが、こいつは俺と戦う宿命がある。そう何となくわかるんだ」

醜い作画は許さない露伴先生、平行世界でこいつと戦っていたと直感したのか、アナ

スイが前に出る。

音石「ここまで来て、君も仲間はずれと言うのはあるまい？と言われて、恥を承知で来させてもらった。俺もここでこいつの相手をさせてもらうぜ」

突入した扉から、音石さんが加わる。

億泰「音石！」

音石「閉鎖された扉や隔壁を一番スムーズに突破できるのはお前だ虹村億泰。目的に急ぐには、お前が一番必要なんだよ。行け！」

億泰「音石：コレが終わったらテメエには話がある。だから：ゼツテエ死ぬんじやあねえぞ！」

億泰さんは独房の方の扉を削って先行して突入した！

アナスイ「承太郎さん。俺はまともな人生は送れない。だから、形だけで良いんです。ただ一言言ってくれば良いんです。結婚を認めると……」

承太郎「……生きてマイアミに戻ってこい。そこで俺との決闘に勝ったら認めてやる」

アナスイ「承太郎さん！」

徐倫「死ぬんじやあないわよ、アナスイ！」

承太郎さんと徐倫さんも億泰さんの後を追う。

仗助「露伴！喧嘩相手がいなくなるのは寂しいからよ、ゼツテエ死ぬなよ！」

露伴「君に言われるまでもない。東方仗助」

八幡「露伴先生！ピンクダークの少年はもう先生だけの作品では無いのですから、死なないで下さいね！」

露伴「一番のファンを悲しませる訳がないだろう！君こそ死なないでくれたまえよ八幡くん！もはやピンクダークの少年は君の作品でもあるんだ！お互いに頑張ろう」

仗助「この扱いの差は」

日頃の人間関係の差なのだろう。

僕達は露伴先生、音石さん、アナスイさんにおいて先へと急いだ。

ピノキオ「君は漫画家の露伴だったよね。君の作品のキャラクターが世界から消えるかもしれないよ？」

露伴「鼻が延びたな。嘘だと言うことだ。僕の漫画は英訳されていない。すなわち、君はキャラクターを具体化させるスタンド使いの手下というわけか。同じ作家として言わせてもらえばかなり不愉快だね。君の本体の能力は」

アナスイ「徐倫の為此で素早く始末する」

音石「漫画や絵本のキャラよりも、俺は音楽一筋だからなあ、キャラクターの一つや二つはどうなるうと知ったことじゃあない」

岸部露伴&音石明&アナスイ対ウンガ口戦、開始！

女子鑑——

徐倫「懐かしい場所ね。いい思い出は何もないけど。それに何かロツズつての？変な未確認生物がフヨフヨういているし、明らかにスタンドこうげきだよね？これ」

これは知らないタイプのスタンドだな。

多分だが、スタンド自体ではなく、スタンドで呼び出された生物つてところだろう。

エルメエス「この訳のわからないスタンド攻撃はあたしがやるよ。ここにはそれなりに思入れがあつてね。こんな風にされれば少しは頭に来るのよ」

間田「なら、僕も。さつきは露伴先生が残つたから。僕も戦わせてもらおうよ。本体が出てくれば僕にも勝ち目が出てくるし」

二人がロツズ達から一行をかばうように前に出る。

エルメエス「根暗で引きこもりっぽいオツサンのクセに根性見せるじやあないか」

間田「僕だつて大切なものがあるさ。気の合う仲間がね。ここで根性見せなきや、僕は一生後悔する」

噴上「だつたら、僕の力も役に立つかもね」

仗助「噴上祐也！」

噴上「みんな！うかつにロツズに触るな。体温を下げる類いの病気の臭いがする」
???「体温が下げられるだけと思って侮らないで！場所によつては即死するから！」

エルメエス「エンポリオ！」

エンポリオ「徐倫！エルメエス！空条承太郎さん！」

噴上「この子を探して助ける為に遅れた。だが、間に合つたようだな。ここは俺たちに任せて、君達は先に向かつてくれ」

仗助「噴上：…わざわざこんなところにまで来て：」

噴上「俺の女達や子供達を守る為に俺はここに来た。それにウエザーの代わりに全てを見届ける義務がある！」

沙織「彼はマニツシュとの戦いでも協力してくれたわ。彼がデス13の臭いとマニツシュの臭いをかぎ分けられたからこそ、マニツシュを追い詰める事が出来た」

忍「だけど、最後の最後に詰めに誤り、ウエザーが：」

仗助「そうか：…けどよ、噴上祐也、オメエまで死ぬんじやあねえぞ！そんなことしたつて、俺はオメエの墓参りなんかしねえからな！」

噴上「仗助！当然だ！お前こそくたばるなよ！懲罰房に綾瀬絢斗、その奥にある中央管制棟にプッチがいる！中央広場には別のDIOの子供がいるから気を付けろよ！」

匂いで居場所を特定したのだろう。噴上さんはこれ以上の無い情報をくれた。

仗助さんと億泰さんは先へと急ぐ。

エンポリオ「エルメエス：」

エルメエス「心配すんなエンポリオ。必ず追いつくから、先に徐倫と一緒に行っていろ」

エンポリオ「：うん」

エルメエス「徐倫、エンポリオを頼んだぜ」

徐倫「わかったわ、エルメエス。あんたも死なないで」

承太郎「行くぞ。徐倫」

徐倫さんと承太郎さんも仗助さん達の後を追う。

八幡「間田さん。また熱いトークを交わしましょう！」

間田「もちろんだ。君と胸を張ってアニメトークをするために僕はここまで来たんだ！」

八幡「それでこそっす！先に行ってますよ！」

俺達は噴上さん、間田さん、エルメエスさんを残して収監棟を走り抜けた。

噴上祐也&間田敏和&エルメエス・コストロ対リキエル戦、開始！

中央広場——

懲罰房への入り口には大きく、そして深々とした穴が空いていた。

どう考えてもスタンド能力だ。

承一郎「中にいる奴はまたしても僕の兄さんみたいだけど…」

感覚で分かる。兄さんの一人はこの穴の中だ。

八幡「ここを通過しなければ綾瀬とかいう所にたどりつけんのだろ？ だったら誰かが行くべきじゃね？」

???「どきな」

まごつく僕達の間をロープつきの矢が通過し、懲罰房への扉を貫通し、ロープ橋を作った。

誰が矢を射ったのか確認すると、そこにいたのは…

ミドラー「借りを返しに来たよ。社長」

子供達と共に安全な場所へ保護されたはずのミドラーだった。

仗助「ミドラーさん！ なんでここに！」

ミドラー「言葉通りさ。借りを返りに来たのさ。助けてくれたクリスタル・クルセイダーズへの恩返しと、子供を人質にして利用してくれた奴等への仕返し…二重の意味でねえ！ そこで空いている穴へはあたしが行くよ！ あんたらは先に行きな！」

未起隆「ならば私も行きましょう」

ミスタ「お前だけじゃあ不安だ。俺も行こう」

ジョルノ「ミスタ。言っておきますが、彼らは…」

ミスタ「わかっているぜ、ジョルノ。本来ならお前がけりを着けたいことくらいは。だけど、お前はジョースターとして、先に行くべきだ。代わりに俺が、ここでお前と戦う」

ジョルノ「わかりました。あなたに僕の意志を託します。ですが、必ず戻って来て下さい。あなたのないパツシヨーンネはつまりませんから」

ミスタ「ああ、行ってくるぜ！」

ミスタさんが銃に弾を装填して準備を整える。

ミドラー「ついてきな、パツシヨーンネの」

承太郎「ミドラー…」

ミドラー「承太郎、昔はあんたを恨んだけど、今はそれほど憎んじやあいないよ。お互い必死だっただけさ。謝らんじやあないよ」

承太郎「ありがとう。ミドラー」

ミドラーは承太郎さんの礼に対して頷くと、ハイプリエステスを別の矢に変えて穴に撃ち込み、別のロープ橋を作った。

未起隆「では、まずは私が行きます。連絡はLINE等で送りますので、対応を願

い致します」

ミスタ「わかったぜ。異変があつたら俺が弾丸を打ち込んでやる」
未起隆「行って下さい！ 仗助さん、八幡さん！」

未起隆さんはそう言つてロープ橋を伝つて穴へ入つて行つた。

仗助「俺達は先に進むぜ！ 億泰！」

億泰「おうよ！ みんなの思いを無駄にはしねえぜ！」

僕達も自分達の目的を果たすために先へと進む。

ミドラー&支倉未起隆&グイード・ミスタ対ヴェルサス戦、開始！

懲罰房——

そこに足を踏み入れた瞬間に異変が起きた。

落とし穴が二つ作動し、片方は僕、八幡少年、忍さんが。

もう片方にいろは、小町、静さん、陽乃、沙織さんが引つ掛かつた。

仗助「しまった！ 八幡！」

八幡「しまった！ 承太郎、仗助、ジヨルノ、徐倫、億泰さんは先に進んでくれ！ 俺達の事は気にするな！」

噴上さんの情報ではここで奴とアレがあるらしい。

プツチ以上に僕達には重要な撃破ターゲットだ。
あつちはジョースターの血統で何とかしてもらおう。

懲罰房下層（八幡側）——

何だかハワイアンな雰囲気の小島に僕達三人と、反対側にダービー兄弟とアフロヘアの男がいた。

テレンス「お待ちしておりましたよ？新たなD I O様」

ダニエル「待っていました。承一郎さん」

兄ダービーはあの時のカードを取り出してニヤリと笑った。

アトウム神のテレンスからは死角になる位置から。

なるほど、ダービーさんが…。

テレンス「さて、私の自己紹介は必要ないかと思えます。ここであなた方にはゲームをしていただく。ゲームは好きな物を選んでよろしいですよ？」

八幡「なあ、二個質問良いか？」

テレンス「何でしょう？」

八幡「何故俺達がここでお前らを相手に戦わねばならん？その二人は？」

テレンス「ありますよ？ここから出たいですよね？出たければ私と勝負することで

す」

本当に20年前の復讐者どもはバカなのか？もう種も仕掛けもわかってる方法で二度も来るか？

テレンス「兄の事はご存じですよね？ジョージア州で会っていますでしょうから。あなた方に負けておめおめ逃げ帰って来て、今や私の部下に成り下がりましたが。もう一人はここが閉鎖になる直前に小さな犯罪でこの水族館の囚人になった小林玉美さんです」

玉美「小林玉美と申します。初めまして、CCの皆さん。私はあのお方に賛同して彼らと共に行動しています。ゲームのジャッジメントして、この場に居合わせています。このゲームではスタンド能力を使えば私のスタンド、『錠前』ザ・ロックによって心が重くなる仕組みになりますのでご了承下さい。『錠前』は本来、罪悪感を感じれば発動し、心が重くなる能力ですが、こういうゲームのルールですと罪悪感の有無に関わらず、ルール違反をすれば『錠前』は発動します」

なるほど、そう言うことか。とりあえずは様子見してみるか。

八幡「ゲームは麻雀。承一郎、頼めるか？」

テレンス「待て、ここに雀卓は…」

ダニエル「ありますよ。ギャンブラーならどんなゲームに対応出来るよう、常に持ち

歩くのが常識ですから」

ダービーはテキパキと雀卓と牌、点棒を並べる。

承一郎「いや、僕よりも忍さんにお願いでいいですか？」

忍「あらあ、ここであちしを頼ってくれるなんて粋じゃない。わかったわ」
忍さんはジョセフに変身して雀卓に座る。

うわっ！ 転生と偽物も含めればここに全てのジョジョが揃っちゃったよ…。

ジョセフ（忍）「じゃあ、始めるわよ？」

テレンス「え、ちよっ…」

ダニエル「オープン・ザ・ゲーム！」

さあ、始めよう。

間抜けな道化の最期を飾るゲームを。

< || to be continued ||

完全なる出来レース

八幡少年、忍さんが変身するジョセフ、ダービー兄弟の麻雀対決が始まった。

こんなところで足止め食らっている場合じゃあない。

東場一局、テレンス親 白を切る

ジョセフ（忍）「ロン！大三元（白はく・撥はつ・中ちゆん）が三つずつ揃う役満」
テレンス「なっ！」

いきなりか。いきなり役満（最高点数の事。麻雀ではいくつも手がある。これ以上はいくらが重なっていても点数は上がらない）とは。

まあ、全員積み込みやってるんだらうけど。

八幡少年も国士無双（マンズ、ピンズ、ソーズの各1と9、東トン・南ナン・西シャー・北ペー白撥中が1つずつで、どれか1つが二つある手。これも役満）テンパってたし（テンパイしているの略。ビンゴで言うところのリーチ）。

よく大三元の残りカスが全て揃っていたな（麻雀では各牌は4つずつ。忍の所に「白撥中」が3つずつあったので残り1つずつは八幡が持っていた）…。

テレンス「そうか、ジョセフといったら二十年前にいかさまで私に勝った男…。貴様、

いかさましてるな！」

アトウム神『YES！YES！YES！YES！』

あ、コイツバカだ。

スタンドなしって言ったのにスタンド使いやがった。

テレンス「ぐおおおおお！」

奴の胸に『錠前』が掛かる。

テレンス「ぐう！だが、いかさまを使っているのはわかったぞ！貴様の負けだ！」

ジョセフ（忍）「だからどうしたのよ」

テレンス「は？」

ダニエル「この勝負はイカサマとか普通にアリの勝負ではないのか？テレンス」

八幡「早く次の局に移るぞ。東の2局、忍さんが親だ」

ジョセフ（忍）「何であんたはその年で麻雀知っているのよ」

八幡「接待でやることがあるので」

…まあ大体ジョセフさんに仕込まれてたんだろうな…。

…僕も同じようなものだから…。↑ヤクザの跡取り

ジョセフ（忍）「八幡ちゃん。あちしを睨まないで。あちしは忍よし・の・ぶ」

ダイスの目は6。左隣の八幡少年の山だ。

よし、この山は大体積み込んである。

八幡少年だけが役が揃っている。2の三色（ピンス、ソーズ、マンズが同じ数字で構成されているメンツ）3暗刻あんこう（鳴かずに同じ牌が3つ揃っているメンツを「暗刻」と呼ぶ）。

忍さん、八幡少年の番で四暗刻すーあんこうの頭（同じ牌が最低二つないと麻雀は上がれない。それを頭と呼ぶ）待ち、ダービー兄が捨てて、テレンスが「中」を切る。

八幡「ロン！4暗刻単機待ち！役満！」

テレンス「なんだとお！」

まあ、そうなるように積み込んだらうけどね。

次の局で八幡少年の親。ダービー兄の山からスタート。

ダービー兄が「地和チーホー」（既にテンパイの状態ですスタート。最初のツモで上がるの役満）でツモ。

親の八幡少年が一番払いがでかいじゃあないか。

東風最後の局。役満を二度も振り込み、さらにダービー兄の役満で既にハコテン（持ち点がゼロ以下になること。略してハコるといふ）のテレンツは涙目だ。

ダービー「オープン・ザ・ゲーム」

まさか「天和テンポー（地和の親バージョン。最初の14枚で既に上がっている役満。

内容は何でも良い」とかやらないよな？

ダービー兄は、ティーチャー（麻雀のサイコロ）の目を自由に出せるのは仗助とのチンチロリンで証明されてるから、自分の山に目を出してやりかねない。

あ、ダービー弟の山の手を出した。

あれ？この配牌、普通だ。テレンスの奴、積み込みが出来ないな？

この局は八幡少年が鳴きありのソーズの清一（チンイツ。マンズ、ソーズ、ピンズの内、どれか一種類のみでやる手。役満ではなく、鳴くと点が下がるが、決まれば大抵は満貫（8000点）。

こんな感じで半チャン終了（麻雀は東場が四局、南場が四局の2巡をして半ゲーム）。テレンスは何度もハコテンしている。まあ、あの後も字一色ツイーソー（字牌のみの役満）、緑一色リユイーソー（撥と赤を含まないソーズのみで決める役満）、国士無双に再び四暗刻と、普通ならあり得ない役満のオンパレードなんて喰らい続けたら、普通はそうなる。ちなみにトップはダービー兄だ。

八幡少年やジョセフさんに変身した忍さんがテレンス一人へ狙い打ちしているのに対してダービー兄がツモ上がり役満をやればそうもなるか。

J O J O 「これ以上は見えても無駄だな。俺は先に行くぞ」

俺はそう言って、壁らしき場所を殴って先に進む。

J O J O 「コオオオオ……」

俺は波紋の呼吸を練りながら走り抜けていく。

J O J O 「そこだアツ！」ズバアアン!!?」

俺は骨の剣を生成して、近くの地面を斬りつけた。

ケニーG 「うっぎやあーッ！」

斬り裂いた地面から幻覚を作るスタンド、『テイナー・サックス』のケニーGが出て来た。

J O J O 「フン、波紋の生命探知機を甘く見るなよ。前は柱で今度は地面か。まあ、少しは進歩はしたんじゃないか？」

ケニーG 『テイナー・サックス』

戦いもせずに再起不能!

俺は空間を繋いで八幡少年達の方を見る。

八幡 「さすがですね、ダニエルさん。勝負事に容赦がないですね」

ダニエル 「筋書きは決まっていますから、後は私達三人の純粋なギャンブルですよ。それにしても比企谷くんもなかなか、その年で大した腕です。磨き続ければ将来は立派なギャンブラーになれますよ」

八幡「そのジジイのオリジナルに仕込まれましたから。二十年前、あなたに負けたのが相当悔しかったらしいですよ？あのジジイ」

JOJO「フハハハハハ！相変わらず性格の悪い師弟だ！」

よし、幻覚が解けて普通の薄暗い独房に戻った。

それじゃあ、こつちも急ぐか。

テレンス「な、兄よ！お前もグルだったのか！」

『YES！YES！YES！』

テレンス「ぐわああああああ！」

『錠前』が更に大きくなる。スタンド使うなって言うルールを忘れたのか？

ダニエル「アホですか？テレンス。まあ、今さらバレても問題無いので白状しますが、私も『クリスタル・クルセイダーズ』なのですよ。負けておめおめと戻ったふりしてあなた達の情報を流す任務を帯びてね。ギャンブルに限らず、勝負の世界では良くあることです。味方が敵とグルになるなんて…ね。仮に彼等の仲間ではなくても、スタンド能力に胡座をかいているだけで、勝負の腕を一切磨かなかつたあなたに味方する愚は犯しませんでしたよ」

ダニエルからオシリス神が出現する。

ダニエル「負けを認めたな？愚弟よ。オシリス神が出たと言うことは、お前の精神が

負けを認めた証拠だ」

ダニエルがスタンドを出しても『錠前』がかからない。

テレンス「何故だ！玉美、何故兄にお前のスタンドが発動しない！ま、まさか…」

玉美「当たり前だろうが、俺は康一さんの舎弟だぜ？俺もクリスタル・クルセイダーズだ。審判がグルって言うのも、勝負の世界では良くあるじゃあねえか」

テレンス「ふざけるな！こんなのは無効だ！インチキだろうが！兄よ、助けてくれ！俺達は兄弟だろ！弟を見捨てるのか！」

魂を引き出されながら、テレンスはダニエルに懇願する。

ダニエル「助けるか助けないか、あなたのスタンドで見れば良いではありませんか？」

『NO！NO！NO！』

テレンス「に、兄さん！」

ダニエル「こういう時だけ兄扱いですか。私としてはとつくの昔に兄弟の縁など切っているんですけどね。私にとってはあなたよりも、私の命を救ってくれた一色いろはさんのいるこのクリスタル・クルセイダーズの方々がよほど信頼できる。さあ、大人しくチップになりなさい。テレンス・T・ダービー」

テレンス「うわあああああ！」

ドオオオオオオン！

テレンスの魂はオシリス神によってチップに変えられた。
ダニエルさんはチップを拾い上げる。

ダニエル「…あなた方は友や家族の為にこんな危険な旅に迷いなく出る一方で、私達のように血の繋がりをもあつさり捨て去ってしまう家族もいる。この違いは何なのでしようね？」

無表情なダニエルだが、その背中には哀愁が漂っていた。

ダニエル「そのまま朽ちていく弟を見るのは忍びない…八幡君。お願いする」

八幡「良いのか？」

テレンス『な、何をする！』

八幡「その状態でも喋れるのか。さて、喋れるのならクイズだ。俺はどちらの拳で殴ると思う？」

テレンス『ひ、左ですか？』

『NOO!NOO!NOO!』

テレンス『一思いに右？』

『NOO!NOO!NOO!…:NOO!』

テレンス『りよ、両方？』

『YES!YES!YES!』

更に一方その頃：

次のステージで苦戦する女性陣達と対峙する綾瀬絢斗と、ケニーGを倒した俺が到着した別の独房。

絢斗「やつと来たか、クソガキ」

J O J O 「どちらもポロポロじゃあないか。どうやったらこんな酷い状態になるんだ？」

独房は円の形をした穴が所々に空いていた。

いろはや小町、陽乃も一部が欠損の傷を負っている。

J O J O 「なるほど。この能力は『クリーム』か。サイコパス加減が奴に似ているとは思ってはいしたが、まさか本人の転生だったとはな…」

俺は憤怒の表情を浮かべ、絢斗を睨む。

J O J O 「アヴドウルさんとイギーの仇を取らせてもらうぞ！綾瀬絢斗…いや、ヴァニラ・アイス！」

俺は絢斗を睨み付け、宣言した。

< || to be continued ||

世界を越えた姉弟の共闘

俺は小町の所までジャンプした。

JOJO「良く頑張った小町。後は任せろ」

小町「一条さん。小町にもやらせて。小町の大事なお姉ちゃん達をやられて、黙っていられるほど小町は大人しくない！それに、コイツなんだね？二十年前にジョセフおじいちゃんや承太郎おじさんの仲間を殺したのは…絶対に許さない！」

JOJO「そうか。だが、その足で無理はするなよ？小町」

小町「うん！一緒にやろう！一条さん！もう一人のエリザベスの弟！そして、もう一人の小町のお兄ちゃん！」

俺達二人は波紋の呼吸を整えて、構えをとった。

静「マーチ…」

小町「下がっていて、ジョジョお姉ちゃん。万が一の時には、誰か一人は無傷の人がいて欲しい。ここは小町に任せて」

…静さん以外全員が『クリーム』の能力で削り取られたようだな。

しかも、吸血鬼…！だが、無敵の能力には欠点があるらしい。

おそらく、波紋が『クリーム』の突進に有効みたいだ。波紋使いの二人は他の皆より被害が少ないから、多分そうなのだろう。

静「それなら、一条さんだって…」

J O J O「悪いな。こいつの先約は俺だ。お前は受けたダメージの回復に務めろ。今はジョルノ兄さんもいないんだからな。それに、聖女達を守るのは、俺たち以外にはお前しかいない。守備も立派な戦いだ」

俺が言うように、俺と小町が攻めに出る以上、波紋を扱えるのは静さんだけだ。

今、いろはや沙織さん、陽乃さんを守るのは静さんしかない。

小町「行くよ。一条お兄ちゃん。万が一、不利だと思つたら、撤退してね。最悪、小町一人で何とかするから」

小町がそう言うので、俺はじろりと小町を睨む。

J O J O「ジョルノ兄さんじゃあないけれど、覚悟の意味を履き違えるなよ？
義姉ねえさんさん」

クリスタル・クルセイダースの中では最年少の小町を『姉』と呼ぶのは違和感があるので、少し言にくい。

J O J O「義姉さんは最悪、ここで刺し違えてでも無傷で俺達を先に進ませたいと思っっているようだが、そんな覚悟は俺達ジョースター家が望むものじゃあない。覚悟と

は暗闇の荒野の中で、一つの道筋を示すこと。ジョルノ兄さんが書き加えたジョースターの家訓じゃあないか？」

そう、『犠牲』は『覚悟』とは違う。

J O J O 「刺し違える覚悟をするくらいなら、ジョースターのジジイが言う『逃げるんだよおおお！』をやる覚悟を持つべきだ。そっちの方がよっぽど覚悟が必要だぞ？」

俺はニヤリと笑う。

小町が笑った。そうだ、人間笑うのが一番だ。

小町「そうだね、一条お兄ちゃん。これで最後じゃあなくて、こっちに永住しない？ 歓迎するよ？」

J O J O 「魅力的な誘いだが、やはり俺は俺の世界で生きていきたい。こっちの俺にも悪いしな」

俺は、あの世界が好きだ。彼女達と過ごす日常が、好きだ。だから、この世界の彼女達も守り抜く。

小町「それもそだね。じゃあ、早くあのゴミ女を始末して、ハッピーエンドにしなきゃ」

J O J O 「そうだな。合わせて行くぞ、義姉さん」
構えを取りながら、俺達は綾瀬絢斗を睨む。

絢斗「余裕じゃあないか、クソガキ共。貴様らごときに勝てる私だと思うのか？」

J O J O「バカか？ 貴様ら二十年前の復讐者供は？ そんな驕りきった考えだから、バカの一つ覚えみたいに同じ手ばかり使ってきて、勝てたかも知れない戦いですら落として無駄に戦力を失っていたんだよ」

小町「マライア、ステイリー・ダンはわざわざ姿を見せる必要なかったしね。あれで頭を使われていたら、本当に危なかったよ」

J O J O「まともに頭を使ってきたのはアラビア・ファッツとポインゴくらいか。運が無かったただけでな」

少なくとも、この女はバカの類いの存在だ。もうクリームは絶対無敵の能力では無くなった。

絢斗「クソガキがあ！」

バカの一つ覚えのように球体へ変化しようと絢斗はクリームの体を口の中に仕舞おうとするが…、

J O J O「間抜けが！ 俺の能力を忘れたのか！」

俺がそれをやる前に絢斗の背後に空間を繋げて移動し、ブラッディ・シャドウでクリームにキックを入れた！そして小町の方へとクリームが飛んでくる！

小町「ナイスだよ！ 一条お兄ちゃん！ もう一回いくよ！ 小町版『山吹色の波紋疾走』、

『太陽光の赤の波紋疾走』！』
サンシャインレッド・オーバードライブ

S・R 「ゴミゴミゴミゴミゴミゴミゴミゴミゴミゴミ！ゴミイ！」

吸血鬼にとっては猛毒ともいえる波紋のラッシュ！

スタンド越しだからどこまで効果があるかわからないけれど、サンシャイン・ルビーは波紋が無くてパワーは一級品の近距離パワー型のスタンドだ。

無傷ですむはずがないと思う。

絢斗「うぎやあああああ！」

ぶつ飛ぶ絢斗。だけど、ここで俺達も油断があつた。効果があつただろうと…。

だが、ぶつ飛びながら、絢斗はクリームを異次元の球体になる。そして俺に突っ込んで来た！

J O J O 「波紋が間に合わん！」

ガオオンツ！！？

俺は右半身を消し飛ばされた。

そのまま俺を吹っ飛ばし、小町に迫ってくる！

小町「サンシャイン・ルビー！弾く波紋を！」

小町はサンシャイン・ルビーで両腕に弾く波紋を纏い、クロスガードをする！

でも、向こうも必死なのか、今度の突進は弾かれずにジリジリと押し込まれてくる！

ドギヤアアアアン!

とうとう、サンシャイン・ルビーの両腕が切断され、小町の両腕もスタンドのダメージ本体のダメージのルールに従って切断されてしまった。

小町「うああああああああああああ!」

切断された両腕はそのまま空間に飲み込まれ、消滅されてしまう。

そして、空間はそのままサンシャイン・ルビーに迫る。

八幡「小町いいいいいいいい!」

兄である八幡少年の声が響く。

俺は急いで体を修復させる。間に合わない手足の部分はクリスタル・ボーンの骨で義手と義足で間に合わせた!

J O J O 「義姉をこんなところで失ってたまるかよ!」

空間をすぐに繋いで小町をお姫様だっこしながら回避する!

ドゴオオオオオオン!

クリームはそのまま床を突き抜けて地下へと降りて行った。

絢斗「おのれええええええ! せめて比企谷小町だけでも道連れにしたかったんだがなあああああ! もう私はおしまいだああああああ!」

絢斗の断末魔が響く。

良かった…間に合った…！

八幡「小町…小町い！」

八幡少年は小町の所に急いで駆け寄った。

八幡「一条！ありがとう！小町を救ってくれてありがとう！死ぬな小町！お前がいなくなったら俺は…」

八幡少年は俺から小町を受け取り、両腕で抱き締めて泣いた。

俺は急いで血液が入った瓶で骨で補った部分を修復して、辺りを見回す。

この部屋の惨状が、綾瀬絢斗との戦いの凄惨さを物語っている。

見ればいろはや陽乃、沙織さんもどこかしら体の欠損があつたが、一番酷かったのは小町だ。

両腕と右足の指が無くなってしまっている。

わずか十歳の女の子が、ここまで戦い抜いてくれた。

小町「ごめんね、お兄ちゃん…。やられちゃったよ…。頑張ったんだけどね…小町はここまでみたい…」

小町の体から何かが出始める。

見れば両腕から酷い出血だ！間違はなく致命傷！

忍「ダメよ小町ちゃん！死んじやダメ！」

忍さんが仗助さんに変身してクレイジー・ダイヤモンドで治そうとしてくれようとするが、距離があつて間に合わない！

八幡「バカ野郎！お前はよくやつてくれたよ！そんなになるまで…よく…だから死ぬな小町！逝くんじやあない！俺達は全員で帰るんだろ！小町い！」

小町「おにい…ちや…」

いろは「マチちゃん！エメラルドヒーリング！」

いろはがエメラルドヒーリングの弾を飛ばして小町を治してくれた。

だけど、異空間に飲まれた両腕はジオルノ兄さんでなければ治せない。だけど、出血は治まった。

下手をしなくても致命傷だったから、いろはがいてくれて助かった…。

ほとんど小町から魂が抜け出しかけていた。どっちだ！小町は生きているのか！

八幡「ありがとう…いろは！小町、戻ってこい！死ぬんじやあない！」

いろは「当たり前だよハチくん！マチちゃん！戻ってきて！」

静「マーチ！マーチい！死ぬんじや嫌だよ！私達は大事な幼なじみじゃない！誰か一人が抜けても嫌だよ！」

JOJO「戻ってこい！義姉さん！」

承一郎「逝くな！義姉さん！あとは義姉さんの気力だ！」

ジヨナサン『小町い!』

DIO『小町、死ぬんじゃあない!』

全員が小町に呼び掛ける。

小町「……………大丈夫だよ。お兄ちゃん達」

小町が目を開けて、涙を流した。

小町「夢を見たんだ。スージーおばあちゃんが…スージーQが立っていて、『まだ早いですよ、リサリサ様。シーザーやスピードワゴンさんに会わずにこちらに来るつもりですか?』って言われたから、小町も『お兄ちゃんの所に帰る』って言ったら、『では、早くお戻り下さい。全てのジョジョに、あなたはまだ必要な方です。さあ、リサリサ様…エリザベス・ジョースターの転生の比企谷小町様。みんな待ってますよ』…て、怒られちゃった…。本当に悲しい夢だったよ…あれが本当にスージーQだったのか、小町には分からないけど…」

杜王町での最後の戦いの時に、億泰さんの身にも同じ事が起こったらしい。

八幡「小町…小町い!」

小町「お兄ちゃん…うう…うええええん!」

いろは・静「マチちゃん（マーチ）!良かった…良かったよおおお!」

悲しい夢なんかじゃあない!素敵な夢じゃあないか!スージーさん…。

あなたは本当に……死んでまでも小町に……リサリサさんに尽くしてくるなんて……
ありがとう……本当にありがとう！

忍「良かったわ……本当に。だけど八幡ちゃん、まだ終わってはいないわよ」

J O J O「そうだ八幡。まだ、俺達の戦いは終わっていない」

静「マーチを……イーハを……陽乃先輩や沙織さんをこんな目に遭わせた奴らを……このまま楽には死なせない」

八幡「そうだな。小町、いろは……ここで俺達の勝利を祈っていてくれ。俺達が……このジョジョと呼ばれた俺達がやる！」

小町「最後の戦いに参加できないのは残念だけど、無事に帰って来てね……お兄ちゃん……初代ジョジョ」

いろは「ハチくん……みんな……死んじや駄目だよ？」

忍「行くわよ！クリスタル・クルセイダース、最後の戦いよ！」

八幡・J O J O・静「おお！」

俺達は綾瀬絢斗が通った地下への穴へと飛び込んだ。

綾瀬……同じ吸血鬼として、俺が貴様を絶望の淵へブチ込んでやる！

一方その頃……、女子受刑者房——

間田さんのサーフィスがリキエルに化け、正面に立ったりリキエル本人の行動を操る。噴上さんによって匂いを辿られ発見され、エルメエスさんのキツスのシールによって2つになったサーフィスが2体のリキエルに化け、そして操られたリキエルは、自らのスタンドで呼び出されたロツズの体温を下げる能力を自らの脳幹に受けてしまい、もはや死亡が確定された。

リキエル「俺は…アポロー号なんだ…」

そう言つて事切れるリキエル。

間田「ハア…ハア…俺でも、やれたんだ…」

エルメエス「良く頑張ったな！間田」

噴上「お前はここでのスターだ！間田！」

間田「君達のお陰さ。君達がいって助けてくれたから、勇氣を持つことが出来たんだ。これで、八幡と胸を張つてアニメ談義をすることが出来る」

恐怖を乗り越え、ジョースター家が掲げる勇氣をものにした間田敏和さんが仲間と共に勝利し、本物となった瞬間だった。

リキエル『スカイ・ハイ』

死亡

懲罰隔離房、死刑囚収監——

俺達が地下へ飛び降りると、岩の上に絢斗が血だらけで待ち構えていた。

あいつはあいつで既に小町によって致命傷をもらっていたんだな。

絢斗「くつくつくつ…DIO様の転生か…こんな姿で会うことになるとはな。私はもう、終わりだ…だが、ただでは終わらん。もう、こんな世界などどうでも良い…貴様ら人類など、滅びてしまえ！」

絢斗は自分の首を切断し、下の岩に血をボタボタと垂らす。

いや、この岩は…

J O J O 「しまった！奴の下にあるのはサンタナだ！血をサンタナに吸わせるな！」

忍「させないわよ！」

忍さんが駆け寄って絢斗の体に一瞬だけ触るが、絢斗の体はサンタナに飲み込まれてしまった！

静「危ない！忍さん！パパに化けて波紋の呼吸をしながら逃げて！吸収されちゃう！」

忍「つと！危なかったわ！」

忍さんはとつさに距離を取り、吸収される前に難を逃れる事が出来た。

八幡「ちつ…最悪の事態だ」

俺達の目の前でサンタナは石化が解かれ、人の形を成した。

サンタナ「……………」

目覚めたサンタナは俺達を確認すると、左手を胸の前でグーにし、指を天に向け…

サンタナ「ハッピー、ウレピー、ヨロピクねー♪」

と何度も指を天にかざして言ってきた。真顔で。

一同「……………はっ？」

いきなりの事に固まる一同。

サンタナ「む？ハッピー、ウレピー、ヨロピクねー♪」

固まる一同に首を捻り、もう一度やってくる。

ふざけている訳では無さそうだが…何がしたいんだ？コイツ。

サンタナ「ハッピー、ウレピー、ヨロピクねー♪これはこの時代の挨拶では無いのか

？眠りにつく前、ジョジョと呼ばれた人間がやっていたことだが？」

70年前のジョジョと言えば…、ジョセフさんの時代…。

あの人なんて事言ってたんだ!?!?

いなくなっても悪い意味でD I O並に影響力って一体…。

サンタナ「フム…まあ、あれから時が更に進んだようであるし、下等生物の人間に挨拶

は不要だったな。さて、ここには食糧がたくさんあるようだ」

見ると回りには食糧の配給が途切れ、ぐったりしている死刑囚達がいた。

大統領が刑務所を破棄した際に、どうせ死刑になるのだからと見捨てられた存在達。

これはこれで、いとも容易く行われるえげつない行為だな…。

彼等を見渡すサンタナは、クリームを発現させる。

綾瀬絢斗を吸収したとき、彼女のスタンド能力まで吸収して自分の物にしたのか！

サンタナ「ふむ、少し試すか」

サンタナは暗黒空間を纏うと、死刑囚の独房を破壊。中にいた死刑囚を食糧として体内に吸収した。

その行為を次の独房、更に次の独房へと続け、一回りしてきたときには全ての死刑囚を飲み込んでしまった。

酷い。いくら死刑囚だったとはいえ、こんな最期とは酷すぎる。

サンタナ「これがスタンド能力か…便利な物だな。特にモードを持たなかった私だが、これはモード代わりに使える…」

独り言を終えたサンタナは俺達を見据えた。

サンタナ「お前達もスタンド使いのようだが、お前達を吸収すれば、新たな能力が手に入るのだろうか？」

こいつ、スタンド能力に魅入られたのか！俺達のスタンド能力に目をつけて！

サンタナ「特にお前。お前は他の者のスタンドよりも特殊な物らしいな。お前を吸収すれば、私の理想とする天国が出来上がるのか？」

サンタナは八幡少年を見る。

ザ・ジエムストーン：いや、ザ・ワールドに目を付けたのか！

サンタナ「試してみるか：お前を吸収し、次の新月が訪れる前に」

サンタナはゆつくりと、八幡少年に近付いて来た。

ザ・ワールドを巡る、もう一つの最終決戦が今、火蓋を落とされた…。

綾瀬絢斗（前世 ヴァニラアイス）『クリーム』

サンタナに吸収され、記憶とスタンドを奪われ、死亡

比企谷小町『サンシャイン・ルビー』

重傷の為、再起不能

一色いろは『ナイチンゲール・エメラルド』

重傷の為、再起不能

茅ヶ崎陽乃（本名・雪ノ下陽乃）『アヌビス神』

重傷の為、再起^リ不能^イ_ア

藤崎沙織（スタンドなし）
重傷の為、再起^リ不能^イ_ア

< || t o b e c o n t i n u e d ||

プライド オブ ジョジョ

中庭の広場の大穴——

ヴェルサス「飛行機は落下した！俺の勝ちだ！ジョースターの仲間共！」

ピストルズ『イーヤッハー！』

ドストドス！

ミスタさんの射った弾がヴェルサスの腹部を貫く！

ヴェルサス「グフツ…何故だ…何故奴等は生きている…墜落した飛行機の生存者の座席は埋められたままだったのに…」

ミスタ「助かったぜ、ミドラー。お前のスタンドで飲み込んでくれていたからこそ、無事だった座席の下に潜り込むことが出来た。お前が来てくれなかったと思うとゾツとしてしまう」

未起隆「ありがとうございます。ミドラーさん」

ミスタ「そういうお前だって、パソコンに変身してデータをあの座席を見つけてくれなければ、そもそもこんな作戦は思い付かなかつたんだ。お前だってやれるんだぞって言うのを、仗助の奴に伝えておくれ！未起隆」

未起隆「ありがとうございます。ミスタさん」

ミスタ「さて：：ジョルノの弟。可哀想だが、お前を始末する」

ヴェルサス「そんな：：俺の糞みたいな人生は、俺の能力で何とかなるんじゃないやあ無かつたのか：：」

ミスタ「何かのせいにして、ひねて育ちまっただんならよお、お前の一番上の兄や末っ子のように黄金の精神が宿らなくて当然だったんだよ：：あばよ」

パンパンパン！

ミスタさんの銃弾が、ヴェルサスの命を終わらせた。

ヴェルサスのスタンド能力が解け、中庭の穴は元々掘られていたであろう浅い穴に戻っていた。

ミスタ「アリーデヴェルチ：：ヴェルサス。お前の人生はこの穴のように浅いものだったんだよ。次は深い人生に生まれ変われよ。その能力で開けた穴のように：：」

ドナテロ・ヴェルサス『アンダー・ワールド』

死亡

死刑囚収監——

J O J O 「柱の一族なら、波紋が有効だよな！」

俺は近付いてくるサンタナに、先制の波紋のキックを入れる。
ぬるん…

しかし、キックはサンタナをすり抜け、そのまま素通りしてしまった。

サンタナ「リップス・ブレード露骨な肋骨」

JOJO「なにつ！ぐおっ！」

サンタナはかつて俺が陽乃相手にやったように肋骨を体外に放出して刃化させ、回転しながら斬り付けた！

俺は自分の技と同質の技を喰らい、ふっ飛ばされた。

再生能力がある俺だから致命傷とはならず済んだが、通常ならばこれで終わっていた。

野郎…柱の一族の中でも最弱で、他の柱の一族に比べたら赤ん坊のように弱いという情報は嘘だったのか？

サンタナ「ふむ。ジョジョに比べたら強い力を感じたが、所詮は鬱陶しい原始人の攻撃。しかし、面白いぞ、人間。人間でありながら、再生するとは。お前の能力は吸収して調べてみる必要があるな」

JOJO「ちっ！」

俺は自らの骨を取り出して刀を作り、そこに銀色の波紋を纏わせて攻撃する。

サントナ「クリーム」
ガオオオオン！

サントナはそれを受けずにクリームの口で受け止める！

俺の刀は異空間に飲み込まれ、刃先が消滅してしまふ。

そして、クリームだけが口の中に入り、異空間ボールとなつて一条に降り下ろされる

！

JOJO「そんな使い方をしてくるなんて！」

危うく頭から喰われかかった俺はブラツデイ・シャドウで八幡少年達の側まで転移した。

JOJO「あの野郎、思いもよらない攻撃方法でやってきやがった……」

サントナ「この能力の元々の持ち主は自分を中に入れて突進するしか能がなかったらしいな。自分が亜空間に飲み込まれないのであるのならば、こうやって亜空間を外に放出し、攻撃すれば良い。自分を安全な位置に留めて置こうなどと、甘いことを考えているから、無駄な動きや隙をさらけ出す結果となる」

何て逆転の発想を思い付く奴なんだ！

静「次は静だよ！」

静さんは弾く波紋を展開させ、サントナに挑む。

静さんの波紋は八幡少年達には及ばないが、それでも俺よりは波紋の力が強い。

独学で修業をしてきた俺と、小町による効果的な修業を積んできた八幡少年達との差だ。

静さんはクリームの攻撃を弾きながら、生身の拳で波紋を叩き込む。『山吹色の波紋疾走』だ！

静「ドララララララララ！」

サンタナ「ぐう！」

静さんレベルの波紋ならば多少は効くようだが、それでも撃破には至らない。

マジかよ。資料には修業を終わらせた若き日のジョセフさんならば、ワムウやエシデイシには効いたと載っていたのに……ジョセフさんの誇張か？

いや、ジョセフさんはこと戦いにおいてはそういう誇張はしなかった。

ましてやコイツの事は後々の世代に託す為に、柱の一族に関する資料は誇張なしのレポートを作った筈だ。

太陽を直接浴びても灰にならずに石化しただけだったという話だし、コイツは太陽や波紋に対する何らかの耐性があるのかも知れない。

静「くっ！」

静さんはいくらやっても多少のダメージを与えるだけで、決定打に欠け、殴り疲れた

静さんがたまらず一時撤退をする。

サンタナ「青ざめたな：実は恐怖してしまつたろ？なあ！」

サンタナは静さんの恐怖してしまつた表情に得意な顔を作る。

忍「次はあちしょ！」

忍さんが右手で頬を触ると変身をする。変身したのは：

八幡「あ、綾瀬絢斗お！」

綾瀬忍「クリームよ！」

女に変身したことにより、そのオカマ口調に全く違和感がない！

というか、本人より女らしくて魅力的って地味にイヤな皮肉だな！オイっ！

綾瀬忍「喰らいなさい！自らの力を！」

絢斗になった忍さんがクリームの口に入り、異空間ボールとなつて突進する！

ガオオオオン！ガオオオオオン！ガオオオオオン！ガオオオオオン！

すごい！異空間ボールがぶつかりあつて、互いを弾き飛ばしあつている！

たまに自分と相手の距離を測りながら、忍さんがサンタナ目掛けて何度も突進を繰り返す！

返す！

クリームの体外にいるサンタナが、クリームの激突を繰り返す度にクリームに引つ張

られ、縦横無尽に壁に激突を繰り返す！

サンタナ「ぐうううう！これは中々効くぞ！人間よ！」

八幡「良いぞ忍さん！このまま奴をシエイクするんだ！」

綾瀬忍「そうしたいのは山々なんだけど、ダメね」

八幡「はい？」

綾瀬忍「流石に人外に変身し続けるには色々と負担が大きいだよ。特にこの女は石仮面とかでD I Oみたいに吸血鬼になっちゃったのよね？精神への汚染が大きすぎるのよ」

そう言つて忍さんは元の姿に戻つてしまう。

そうか、吸血鬼は人間を食糧として見てしまうような精神構造に変わつてしまふから、肉体的にはともかく、本能へのダメージがかいんだ（俺は半分人間の部分があるから大丈夫なのだが）。

八幡「ザ・ジエムストーン！時よ止まれ！」

次の瞬間、サンタナが吹っ飛んだ。どうやら時を止めてその間に波紋の拳を叩き込んだみたいだ。

サンタナ「ぬう！下等生物共めえ！だが、この俺は容易くはやられぬう！憎き肉片！」

サンタナはいきなり爆散し、肉片を俺達に肉片を付着させる！

八幡「ザ・ジエムストーン！」

次の瞬間、八幡少年は忍さんを庇うように仁王立ちをしていた。

何かはわからないが、ハーミットアメジストを体に巻き、波紋を流してガードを固める。

ビチビチビチビチ！

シユウウウウ：

波紋が流れている部分に命中した物は煙となつて消えるが、直接体に命中した部分からは、徐々に体力を奪われてしまう。

ハーミットアメジストでまだガードが厚かつた八幡でこれなんだ！他のメンツは：

静「くううううう！何これ：痛いとかじゃなくて、単純に力が抜ける…」

JOJO「痛みとかなら再生出来るが、なんだこれは…」

骨のプロテクターを付けているのに肉体に食い込んでくるなんて…。

体力に直接干渉するとか、マジでヤバイ…。こんな攻撃があるなんて…。

忍「みんな！待っててちょうだい！」

忍さんは右手で再び変身を開始する。

いろは（忍）「八幡ちゃんは嫌がるでしょうけど、我慢してちょうだい！」

忍さんはいろはに変身してナイチンゲール・エメラルドを出現させ、エメラルドヒー

リングで俺達を回復してくれた。

八幡「嫌がるなんてとんでも無いですよ！忍さん！ナイスアシストです！」

いろは（忍）「ありがとう！この戦いだけは出し惜しみはなしでいくわ！今度はこれよ！」

忍さんが今度は小町に変身する！

小町（忍）「みんな！」

サンシャイン・ルビーで右手をかざしてアレのサインを出す！

JOJO「静！」

静「ありがとう！」

俺が静さんの手を繋ぎ、瞬間移動をして小町の背後に回ってルビーレーザーの射程外に逃がす！

小町（忍）「食らいなさい！ルビーレーザー！」

シューウウウウ…

小町の禁断の最強必殺技がサンタナを貫く！

正確にサンタナだけを貫いている！小町より精密に扱えているぞ！

小町（忍）「伊達に巨大ロボットにまで変身した訳じゃ無いわ！この手の技は経験済みなのよ！」

何だそのハチャメチャな経験は！

小町（忍）「あの娘の不幸は練習すら満足に出来ない事。出来ることならあちしの能力を貸して練習させてあげたいくらいよ。でも、波紋の呼吸つてのは難しいわね。流石にあちしでも一発が限度だわ！次はこれよ！」

忍さんは陽乃に変身した！

陽乃（忍）「うりやりやりやりやりや！」

スパスパスパスパ！

陽乃さんのハイスペックな身体能力を使い、アヌビス神でサンタナを切り裂く！

たまらずサンタナが異空間ボールを忍さんに叩きつける！それを億泰さんに変身して、ザ・ハンドの右腕でキャッチする！

そうか、同じ亜空間同士がぶつかり合うならば、こうやってガードすることが出来るのか！

伊達にこの人も修羅場を渡り歩いていた訳じゃあないな！

変身して能力を使えるだけがこの人の強みじゃあない！

この人は冷静に臨機応変な判断が出来るからこそ別動隊のリーダーを務め上げる事が出来たんだ！

億泰（忍）「感傷的になるわけでは無いけれど…」

次にジョルノに変身してG・Eで殴る！

ジョルノ（忍）「この場に来ることが出来なかったみんなの代わりにあちしはいる……」
感覚が暴走したのかサンタナはふらふら覚束なくなる。

ミスタ（忍）「それぞれの出来ることをするために……」

感覚が暴走している者に、叩き込まれる6発のマグナムリボルバーは、殴られるよりもはるかに痛いだろう。

仗助（忍）「先に行かせてくれたみんなの分まで……」

発射し終えた葉莖を殴ることにより、直った銃弾は戻ってきて再び6発の弾がサンタナを貫く！

仗助本人だっと思って思い付かない方法の正真正銘の自動追尾弾だ！

承一郎（忍）「あちしの体を使ってみんなの能力であちしは戦うわ！」

承一郎に変身して山吹色の波紋疾走をドカドカ殴る！

その時に応じてこの場にはいないC・C正規メンバーの攻撃を最適な手段でぶち込んでいく忍さん！

粋な人だ……本当に。

忍「ハア……ハア……」

これだけの猛攻を繰り返したんだ。

流石の忍さんも息が絶え絶えだ。

でも、十分だ：ここまでやってくれたのだから、頼りきりなのはジョジョと呼ばれる俺達の沽券に関わる！

八幡「行くぞ！忍さんの頑張りに応えよう！俺達ジョジョの意地を見せるんだ！」

静「うん！分かつてるよハッチ！」

JOJO「承一郎まで出されたんだ！ここで俺が頑張らなければ本物の承一郎に怒られてしまう！」

俺達三人の波紋の戦士の本体の山吹色の波紋疾走と、それぞれのスタンドのラツシユの猛攻！

初めてスタンドを使ったサントナは、既に操作をする余裕もなく、されるがままにボコボコにされて行く！

チクチク：チクチクと積み重ねられていくダメージ…。

サントナ「WRYYYYYYYY…」

サントナは持てる最後の力を振り絞って逃れようとする。

ジョセフ（忍）「逃がさないわ！ハーミット・パール！&太陽のエネルギー、波紋！」

サントナ「ジョジョオオオ！」

ジョセフ（忍）「せめてもの手向けよ！サントナ！70年前にアンタを倒した男の力

で、送ってあげるわ！ 『紫水晶の波紋疾走』
アメジスト・パープル・オーバードライブ

八幡 「仕上げだ！」

承一郎 「おう！」

静 「うん！」

八幡 「プライド オブ ジョジョ！喰らえ！サンタナ！」

承一郎 「サン……」

静 「ライト……」

ジョセフ（忍） 「イエロー……」

八幡 「オーバー……」

全員 「『ドライブウウー……』」

四方から取り囲んだ初代、2代目、二人の7代目のジョジョによる、生身の波紋の元祖オラオララッシュが止まる事なくぶちこまれて行く！

サンタナ 「ジョ……ジョオ……」

思えば可哀想な奴だ……。

赤ん坊の時にカーズのエゴによって他の同族が滅ぼされ、何もわからない内に最弱の同族として見下され、ナチスのエゴで無理矢理起こされてその日の内に再び眠らされ、そして綾瀬絢斗とプッチのエゴによって再び起こされて俺達によって最期を迎える……

お前の人生は喜怒哀楽、それらの総てが欠落した空っぽの人生だった…。
人類の天敵であった以上は、こうして倒すしかなかったが、それだけは素直に同情するよ…。

せめて安らかに眠れ…。

さよならだ…サンタナ…。

西の最後の柱の一族、サンタナ『クリーム』

死亡

< || t o b e c o n t i n u e d ||

レクイエムとの邂逅

懲罰房の上の階に戻った僕達。

そこでは意識を取り戻した女性陣達が待っていた。

ジヨルノ（忍）「ちよつと待つててね。すぐに体の部品を作るから」

忍さんはジヨルノ兄さんに変身して、女性陣達の欠損した体のパーツを作り始めた。

パーツはすぐに造られ、失った血液も補充。

全ての体勢は整った。

整ったのだが…、

八幡「悪いが、俺はここで待つている」

承一郎「八幡？」

忍「ここまで来て、どうし……いえ、そうね。万が一を考えたら、そうなるのよね」

プツチのスタンド、ホワイト・スネイクは特殊だ。

アイツのスタンドは記憶と能力を奪える。

ザ・ジエムストーンと名を変えているが、アレは元がザ・ワールドだ。

奪われてしまえばここまでの苦勞が水の泡だ。

八幡「俺の手で決着を着けたところだが、それを考えるとな……俺のやることはザ・ワールドを奪われぬことだ。最後を見届けられなくて残念だが、後は頼む」

自分の手で決着をつけたのだろう。悔しさを顔に滲ませている。

八幡「行けよ、承一郎。お前はわざわざ異世界に連れてこられてまで力を貸してくれていたんだ。お前には資格がある」

承一郎「そうか：任せてくれ。八幡。お前の代わりに僕がプツチを止めてくる」

僕は走って承太郎さん達の方へ向かった。

兄さん達はまとまっていた。奴の能力に警戒してなのだろう。

承一郎「兄さん！」

僕は兄さん達と合流した。

ジヨルノ「もう1つの目的は終わらせて来たんだね？承一郎」

承一郎「ええ。綾瀬絢斗とサンタナは始末しました。女性陣は静さんを除いて危なかったですが。特に小町義姉さんと陽乃さんは死にかけましたし」

仗助「何い！小町が!？」

承太郎「無事なのか！」

徐倫「助かったのよね!?!みんな！」

エンポリオ「これ以上の犠牲は嫌だよ!?!」

ジョルノ「どっちなんだ! 承一郎! 小町と陽乃は僕にとつても妹みたいなものなんだ! 無事じゃあなかったら、僕達はゆるさないぞ!」

兄さん達は戦いの最中だと言うのに僕に詰め寄った。

承一郎「落ち着いて下さい! 戦闘中ですよ! 死に『かけた』と言ったじゃあないですか! ちゃんと生きてますよ! 忍さんが兄さんに変身して陽乃の両足と、小町の欠損した両腕と右足を血液と一緒に僕達を作って治療をした後に、いろはが痛みを消してくれたから、今は八幡達と一緒に僕達を待ってくれています! だから皆さん、離して下さい! 流石の僕も揺さぶられてはプロテクターとか関係なくダメージ受けますから!」

僕が必死に説明したので、兄さん達は僕を離した。

承一郎「ハア、ハア…この世界の兄さん達は家族愛が強すぎて、たまに付いていけない!」

仗助「その八幡達はどうした? 何でここにいない?」

承一郎「ホワイト・スネイクのスタンドをディスクにする能力を警戒してです。本人も内心は悔しがってしまいましたけどね。僕だけを行かせてくれました。僕には資格があるって。他のみんなは送り出してくれました!」

承太郎「そうか…ならば共に行こう。これが最後だ!」

徐倫「!!? 父さん！」

承太郎さんに向けてプッチがナイフを投げてくる。

億泰「よっと」

それを億泰さんがザ・ハンドで軌道をそらし、そして代わりに自分に向かったナイフを再び消した。

僕も対処しようとしたが、同じく気付いていた億泰さんに場を譲った。

億泰「最後に、俺にも見せ場を作ってくれてありがとよ、承一郎」

承一郎「同じ仲間ですから。ここまで一緒にやってきた仲じやあないですか」

億泰「粹じやあねえか、承一郎。仁義つてのがわかっているな。ヤクザの跡取りつてことらしいけど、良い組長になれるぜ、オメエはよ」

ジヨルノ「僕の弟ですから」

僕はつい苦笑いをする。

こういうところは、やっぱり兄さんだ。

億泰「粹には粹で返さねえとな。俺もここでリタイアするぜ。もつとも、危なくなつたら乱入するけどな」

億泰さんはエンポリオ少年を連れて建物の屋根へと上がり、見物体勢に入る。

プッチ「おのれ、最下層の人間ごときがあ！」

承一郎「億泰さんを下に見るな。プツチ。億泰さんは自分が頭が悪いとか自嘲しているけど、一番大切な事はわかってる。反対にお前はどうか？学があり、人を導く神父でありながら、お前はやってはならないことを平然とやってきた外道。お前なんか黄金の精神を持つ億泰さんを：いや、億泰さんだけじゃあない。このクリスタル・クルセイダーズのみんなやこの世界にはいない秀英組やビーバイブ：凡矢理高校の友達を下に見ることなんて許さない……。絶対に！」

僕はプツチに向かって怒りを露わにする。

承一郎「みんな、僕と同じ考えみたいだな。周りの屋根をしろ、プツチ」

わあああああああああ！

音石「承太郎さん！頑張れ！貞夫さんに元気な姿をみせるんだ！」

ミドラー「承太郎！負けるんじゃないよ！」

陽乃「承太郎！頑張るのよ！」

ダニエル「承太郎、あなたとの再戦ははたされていない！必ず勝つのです！」

承太郎「ミドラー：アヌビス神：ダービー：それにスターダスト・クルセイダーズのみんな。お前達に応援されるとはな……」

かつてはスターダスト・クルセイダーズの敵であった者達が、彼らの代わりに応援する！背後に金髪のだりル髪と重なったアヴドウルさん、赤い眼鏡（この人を見ると寒気

がするのは何故だ?)の少女と重なった花京院さん、ミニチュアダックスフンドと重なったイギー、ジョースターさん(今の姿はこの頃の姿なんだよな)、昔の姿のポルナレフさんの幻影が見える。

露伴「東方仗助!今だけは応援してやろう!」

間田「仗助!君は八幡君の兄貴分だ!負けるんじゃないぞ!」

未起隆「仗助さん!私だつてやれました!次はあなたの番です!」

玉美「東方仗助!康一さんの舎弟が応援するぜ!」

由花子「仗助!必ず勝ちなさい!」

トニオ「やつて下さい!仗助さん!」

噴上「約束は果たしたぞ!東方仗助!次はお前だ!」

億泰「わざわざ場を譲つたんだ!負けたりしたら承知しねえからなあ!仗助!」

静「お兄ちゃん!勝つて婚約発表だよ!頑張つて!」

仗助「静、億泰、露伴、間田、未起隆、玉美、噴上祐也、トニオさん、由花子…それに重チーに玲美さん、猫草まで…」

静さんを始めとした杜王町のみんなが仗助さんを応援する。

それに、ふわふわな雰囲気の子と重なった杜王町の守り神の杉本玲美さん、比企谷家の飼ひ猫のカマクラと重なった今は枯れてしまった猫草、頭がごっごっした少年、

康一さん、そして若返る前のジョースターさんの幻影も見える。

ミスタ「ジョルノ！我らがジョジョ！必ず勝てよ！覚悟の見せる時だ！」

ジョルノ「ミスタ。それにブチャラテイ、ナランチャ、アバッキオ、フーゴ、トリツシユ、ポルナレフさん、ココ・ジャンボも……」

ミスタさんが兄さんを応援する。

生きている人の中ではミスタさん一人だが、黒髪ロングの少女と重なったブチャラテイさんを始めとしたかつてのブチャラテイチーム全員の幻影が揃っていた。

エルメエス「やつちまえ！徐倫！」

アナスイ「F・Fとウエザーの仇を取れ！」

エンポリオ「勝って！徐倫お姉ちゃん！」

徐倫「エルメエス、アナスイ、エンポリオ……それにF・F、ウエザー……来てくれたんだ」

エルメエスさん、アナスイさん、エンポリオ少年が徐倫さんを応援する。その背後にはおかつぱの少女と角の生えた帽子の大男がいた。彼等がF・Fとウエザーなのだろう。

いろは「承一郎さん！頑張ってください！」

小町「承一郎お兄ちゃん！頑張れ！」

忍「頑張るのよ！承一郎ちゃん！」

沙織「頑張れ！承一郎ちゃん！最後の戦いよ！」

ヴァレンタイン「行け！一条君！」

承一郎「いろは、小町、忍さん、沙織さん。それに平行世界を越えてまで来てくれたんだね。父さん、母さん、小野寺、千棘、万里花、春、集、宮本さん、竜、鶯、クロード。そして五十年前の波紋の戦士達、それに……」

エリナ義母さんと重なったいろは、リサリサ義姉さんと重なった小町、忍さん、沙織さん、大統領が直々に僕を応援してくれる。

その後ろには僕の家族や、大事にしている仲間達、そして太った体の男子と重なったシュトロハイムさん、女なのか男なのかよく分からない人と重なったスピードワゴンさん、水色のポニーテールの少女と重なったツエペリさん、同じく水色の髪の少年と重なったシーザーさんなど、色々な幻影が僕を応援しに世界や時代を越えて集まっていた。

そして幻影の中には……

承太郎・仗助・ジオルノ・徐倫・承一郎「八幡……」

死んではないが、事情からここに応援をしにくることも出来なかったジョナサン、父さん（DIO）の幻影と重なった八幡の幻影があった。

プツチ「D I O…あなたまで私を裏切るのですか…」

幻影達は一様に頷くと、それぞれの体の場所へ…そして天へ…時空の穴へと消えて行く…。

プツチ「D I O!どこへ行かれるのですか!私と共に天国を目指すのではないのですか!D I O!待ってくれ!友よ!私を導いてくれ!」

プツチは嘆きながら八幡とジョナサンの幻影と共に消えて行くD I Oの幻影に手を伸ばして叫ぶ。

承一郎「もう、お前は終わりだ、プツチ。一人寂しく、看とる者も、迎える者もない世界へと消えて行け。兄さん、今こそポルナレフさんから預かったアレを使う時です!この男に与える結末は、最悪であるのが相応しい!」

プツチはややくそになって数本のナイフを僕に投げる。

僕の腕に刺さるナイフ。

だが、その腕は骨のプロテクターで守られている。ダメージはない。

僕はそのナイフとクリスタル・ボーンの力で自分の骨から作った大量のナイフを取り出し、構える。

承一郎「無駄無駄無駄無駄ア!」

ジョルノ「無駄無駄無駄無駄ア!」

僕が投げたナイフにジヨルノ兄さんの力を加える。

ナイフは鳶やピラニアに変わり、プツチに突き刺さったり噛みついたりした。

その間にジヨルノ兄さんはゴールド・エクスペリエンスにポルナレフさんから託された矢を突き立てる。

ジヨルノ「うおおおおおおお！」

ゴールド・エクスペリエンスに変質が起こり始める！

あれが、ゴールド・エクスペリエンス・レクイエムか！

プツチ「あれだ！アレを…」

仗助「ドラララララ！」

仗助さんがプツチを承太郎さんと徐倫さんのいる方向に殴り飛ばす！

徐倫「ストーン・フリー！」

徐倫さんのストーン・フリーが糸となり、プツチをサナギのようにぐるぐる巻きにする！

徐倫「この位置？」

承太郎「そうだ…その位置が1番…」

承太郎&徐倫「拳を叩き込みやすい角度！」

SP&SF「オラオラオラオラオラ！」

空条親子のダブルオラオララツシユがプツチを僕の方へと飛ばす！

プツチはジョルノ兄さんの前を通り過ぎ、僕のクリスタル・ボーンの前に飛ばされてきた。

承一郎「終りだ…プツチ…」

CB「オラオラオラオラオラオラオラアッ！」

プツチの体はあらゆる箇所にも拳の跡を残しながら飛んで行った。

プツチ「ごふ…終わりなのは…貴様らの方だ…私はこれで…天国へと…到達する…」
プツチの手にはディスクが握られていた。

あのディスクは…ゴールド・エクスペリエンス・レクイエムのディスクだ！

さっきのジョルノ兄さんの前を通過したあの一瞬でやったのか！

プツチ「この能力が何なのかはわからないが、スタンドの能力のその先にこそ、真実の到達に…天国への扉があるに違いない！私の勝ちだ！ジョースター！」

プツチはゴールド・エクスペリエンス・レクイエムのディスクを頭に差す。だが…、
承一郎「お前のぶちまいている天国論だが、僕達にはそうは思わない」

J O J O「俺達は既に到達していた。お前には永遠と到達しうる事の出来ない天国に」

承太郎「生き残るのは…」

仗助「この世の真実だけだ……」

ジョルノ「真実から出た真の行動は……」

徐倫「決して滅びたりはしないわ……」

J O J O「おまえの行動が真実から出たものなのか、それともうわつ面だけの邪悪から出たものなのか？それはこれからわかる」

承一郎「お前は果たして、滅びられずにはいられるかな？プツチ」

例え切り札を奪われたとしても、取り乱さない。

そんな事をしても無駄なんだ。だが、言っても無駄だろう。

プツチに差し込まれたはずのディスクはプツチごとジョルノ兄さんの方へと戻り、

ディスクは兄さんの頭の中に、プツチは足元に落ちる。

陽乃「ディスクは取られていない」

静「矢は永遠にジョルノ兄さんの物だよ」

小町「プツチ、お前が求める天国なんて……」

いろは「その先にある平穏なんて、決して訪れない！絶対に！」

プツチ「何故だ……確かにディスクは奪ったはずだ！そのスタンドは確かに私の物になったはずなんだ！」

プツチが叫ぶ。

その瞬間、世界が黒で塗り潰され、その世界の中でレクイエムだけが動いていた。何故僕は知覚できるんだ!? 兄さんは知覚していないようだし…。

プツチも知覚しているらしい。

ゴールド・エクスペリエンス・レクイエム（以下GER）『お前は…』

プツチ「!?？」

承一郎「!?？これは…レクイエムの能力!?？」

一体、どうなっているんだ…？

GER『どこへも…向かうことはない…特に…真実に到達することは…決して』

プツチ「な、何だこいつは…」

承一郎「世界が止まっているように見える…なぜ僕には見えるんだ？」

父の記憶で見た止まった世界とは似て非なる現象…。これが、『スタンドを超えたスタンド』の真の能力なのか…!??

GER『実際に起こる真実に到達することは！私の前に立つものはどんな能力を持つと絶対に行くことはない！—それがゴールド・エクスペリエンス・レクイエム』

プツチ「私は…どうなるんだ…」

GER『私のこの能力は、本体であるジョルノ・ジョバーナも知ることとは決していない』

レクイエムに少し触れることが出来るだけだ。だが、いずれはその領域に踏み込む運命に到達することもあるかも知れない』

承一郎「真実：レクイエムや天国を超えた領域に…」

…僕には到達出来るのだろうか…。

GER『その時、再び私に会うことがあるかも知れないな。お前と会うのが私なのか、お前の世界の私なのか、その時の私がゴールド・エクスペリエンスなのかはわからないが…さて、もうお別れのようだ。さらばだ、一条承一郎、J O J O、比企谷八幡。次に会えることを願う』

承一郎「待ってくれ！もつと話を聞かせてくれ！レクイエム！」

だが、世界は黒一色からだんだんと色が着き始め、僕の意識はゼロに戻される。

プッチが吹き飛ばされ、海に落ちる。

レクイエムが何かをして、プッチがラッシュを食らったようだが、僕には何が起きたのかわからなかった。

承一郎「思い出せない…何が起きたのか…重要な何かを見て、知ったはずなのに…僕は何が起きたのか思い出せない！結果だけはわかるのに！J O J O！思い出せるか!!
？」

J O J O (分からない……だが、レクイエムは全てのスタンドを超える能力を持っているという事だけは言える。『時間』や『空間』をぶつちぎりで超越した『世界』の理を捻じ曲げる程の能力だというのは、理解したぜ……)

仗助「ジョルノ！大丈夫か！」

承太郎「奴はどうなった！生きているのか！」

ジョルノ「わかりません。多分、生きてはいますが、もう終わりました。終わりの無いのが終わり……それがゴールド・エクスペリエンス・レクイエムなのです」

このスッキリとしない終わり方。

僕達はゴールド・エクスペリエンス・レクイエムをみる。

レクイエムはただじつと立っているだけで、何もしない。

語らない。

兄さんはスタンドを仕舞う。

矢はカラン……と乾いた音で地面に落ちる。

それを拾いあげ、兄さんはそれを仕舞う。

いつかまた、レクイエムを使うその時まで、これはポルナレフさんに預けるのだろう。

仗助「終わったぜ、みんな！オペレーション・クリスタル・クルセイダーズはたった

今、終わったんだ！俺達の勝ちだあ！」

わあああああああああ！

大歓声が刑務所跡に響く。

だけど、僕の気持ちは晴れない。

僕、そして建物から出てきた八幡からは大量の脂汗が出ていた…。

彼も、僕と同じものを感じたのだろうか…。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

『さよなら』は言わない

八幡「承一郎……」

承一郎「八幡……今は……終わったことを喜ぼう……みんなを無駄に不安にさせる必要はない……わかることがあるのなら、いずれわかる日が来る……出来れば、理解出来ない事が幸せんことがある。それがレクイエム……僕は何故かそう思う……」

僕は汗をぬぐいながらそう言う。

八幡「ああ……俺も同じ気持ちだ。ジョルノが言った終わりの無いのが終わりに……それがどんな恐ろしいのか……世の中理解出来ない方が幸せなことはいっぱいあるが、レクイエムに比べたら生易しい……出来れば二度と関わりたくない……」

徐倫「終わったわ……あたしの力で終わらせる事は出来なかつたけど」

エルメエス「ああ……ウエザー、F・F……」

承太郎「奴は色んな者から借りていたので。返つてこなかつた物もたくさんあつたが……今度こそ終わったぜ。アヴドウル、花京院、イギー、ポルナレフ、ついでにジジイ……」

徐倫さん、エルメエスさん、承太郎さんが海を見ながら黄昏ていた。

今は黙つておこう。上手く説明できそうもないしね。

こうして、僕達のストーン・オーシャンは終わった。

そしてホテルで祝勝会が行われた。

そこでも色々あつたが、それは別の機会で語ろう。

ただ、一つだけ笑い話では済まないことがあつた。

特に僕と八幡少年にとっては……。

八幡・承一郎「平行世界を自由に行き来できる権利だつて……?」

ヴァレンティン「そうだ。今回、クリスタル・クルセイダーズのメンバーは世界を救つた。本来なら世界を挙げての榮譽賞を授与するべきところの英雄的働きだ。だが、この任務は非公式故に、表立っての褒賞を与える事は出来ない。ならば、私個人で出来ることを君達に贈ることを考えた。私しか出来ないことと言つたならば、やはりこれだろう?」

やめてくれ!絶対に嫌な予感しかしい!

それどころか絶対に体よく他の平行世界からの救援要員としてのフラグにしか見えねえ!

というか、褒美という名の首輪つけだろ!

間違いなくそうだ!

特に僕と八幡少年をじっくりと見るのはやめてくれ!

絶対に他の平行世界の大統領が要請しているな!?!?

ヴァレンタイン「ああ、特に一条君と比企谷君」

大統領は僕たちだけに聞こえるように言った。

ヴァレンタイン「私の観察眼を甘く見てもらつては困るよ? 君達二人はレクイエムの何かを感じる事が出来たと私は見ている。レクイエムの影響が現れた時、本体のジョルノ代表ですら少し首を捻る程度だったのに、君達二人は異常だった。スタンド使いが他のスタンド使いと惹かれ合うように、君達二人はレクイエムと惹かれ合う運命にあるかも知れない」

気付いていたのか…:大統領。

もしかしたら別の平行世界に何か心当たりがあるのかも知れない。

ヴァレンタイン「首輪を付けるとかそういうのについては否定はしない」

否定してくれ!

ヴァレンタイン「だが、君達二人のように、それらに惹かれ合う運命にある者がいるかも知れない。そしてそれが必ずしも君達のような黄金の精神を持つものとは限らない。いつかレクイエムを悪用するものが現れた時、それを止めるのは君達ではないかね?」

言っていることは理解できる。

あのレクイエムの力は絶大過ぎる。

もし、あれが悪用されたら…それを考えるとゾツとする。

ヴァレンタイン「良いかね、二人とも。これは褒美であると同時に、新たな依頼でもある。レクイエム、またはそれに類似した力を解明し、制御する術を身につけて欲しい。もちろん、拒否権はある」

く…上手く言いくるめられている気がする。

だが、確かに出来る事ならば二度と関わりたくはないが、大統領が言っていることもあながち突拍子の無いことじゃあない。

それを笑い飛ばすには、スタンドや転生、柱の一族、平行世界、天国、世界の加速、レクイエム…それらすべてが奇妙で不思議な事だが、体験し、知ってしまった…。

大統領のこの提案はもしかしたら渡りに船なのか？

ヴァレンタイン「比企谷君、君はこの依頼を切に受けて欲しいと願う。君が終わらせべきはあと二つあるのだろうか？もしかしたらレクイエムが必要になるかも知れない。その時、レクイエムを制御する事が肝要ではないのかね？」

僕に話したDIOが天国を目指した理由となった奴等の事か。

ヴァレンタイン「そして一条君。君が知らないだけで、比企谷君が知る人類の破滅的存在が君の世界にはいないと言い切れる自信はあるのかね？」

承一郎「!?？」

そう来たか、大統領……。だが……

承一郎「……こつちの世界での父の記憶では、そういう情報はなかったし、ウチは世界中のネットワークがあるけど、そんな情報は未だに引つかからないです」

ヴァレンタイン「そうか。まあ、ゆっくり考え、結論を出して欲しい。もちろん、これは褒賞でもある。ただの物見遊山目的の平行世界旅行でも構わない」

大統領は僕達へのヒソヒソ話を止め、クリスタル・クルセイダーズみんなに聞こえる声で話始めた。

ヴァレンタイン「警告しましょう。私以外の私をむやみやたらに信用してはならない。私の中には残念ながら、かのDIOやプッチのような存在がいるやも知れない。今回の事で、他の私達は君達に目を付けた。これは私の責任でもあるのだが。だからお詫びに君達クリスタル・クルセイダーズにはこれを渡そう」

大統領は人数分の時計とゴーグルとパッドを出した。

ヴァレンタイン「私と特務機関が共同開発した物だ。これの機能は3つ。私といつでもどこでも連絡が可能となる通信機能だ。どこでも……とは平行世界も含めてだ。一条君は君の世界の私だな」

八幡「それは万が一、大統領の言う信用出来ない大統領に突然拉致られた場合のSO

S 発信装置も兼ねている…と言うことですか？」

ヴァレンタイン 「理解が早くて助かる」

承一郎 「今回みたいなケースですね？」

僕はジト目で大統領を見る。

ヴァレンタイン 「次に、平行世界の自分と触れ合うと、消滅するルールがあるが、それを防ぐ機能だ」

なにそれ、怖い。

ヴァレンタイン 「最後の機能は平行世界に行っている間はいくら向こうに滞在していても、こちらの世界には出発した時間と帰って来た時間が同じになる機能だ。もちろん、本人への時間にも影響はない」

なんだそのチート機能は。

ヴァレンタイン 「この時計は君達のスタンドに付ける仕様となっている。人型ではない場合、自分の腕に付けて貰っても構わない。そして、ゴーグルとパッドは綾瀬絢斗との戦いで藤崎沙織さんが使用していた物だ」

沙織 「試作品は完成したから、後は量産だけよ。ちなみにこの時計もそうだよ？人型スタンド以外やパール・ジャムみたいなビジョンに關係ないタイプのスタンド用のも今は開発する予定だから、期待していてね♪」

本当に謎の天才だな。…とまあ、こんな事くらいか。特筆することは。

そして現在：オランダ国際空港（特別発着所兼待合室）

とうとう、僕達の別れの時がやって来た。

承一郎「とうとう、お別れの時だな、クリスタル・クルセイダーズのみんな。僕の事、忘れないでくれよ特に正規チームのみんな」

JOJO「俺の事が嫌いじゃあなければな。マヌケ面共」

C・C正規メンバーはガシツと僕に抱きつき、涙を流した。

仗助「忘れたくても忘れるキャラはしてないぜ、オメエはな！元気でな！」

ジオルノ「もう少し君とはゆっくり語り合いたかった。約束も果たせなかったしね。そっちの僕にもよろしく」

億泰「寂しくなるなあ。玲美さんがいなくなった時みてえだよ」

ミスタ「持ってけよ。俺のマグナムの予備だ。お前との友情の証に貰っておいてくれ」

静「さようなら、もう一人の七代目のジョジョ！そっちの静とも仲良くね！そっちの静を見たら、静の事を思い出してね！ううう…うわああああああん！」

陽乃「あなたとはもう一度、剣で立ち会いたかったわ。また会う日があれば…ね」

いろは「やつと馴染んできたのに、寂しいですが、これが今生のお別れになるのが、一番いいのですよね？お元気で先輩」

小町「承一郎お兄ちゃん、一条お兄ちゃん、小町の命を助けてくれてありがとう。本当にもう一人のお兄ちゃんというようで、楽しかったよ……うう、うわああああああん！承一郎お兄ちゃん！一条お兄ちゃん！」

八幡「楽しかった。辛いこともたくさんあったが、それ以上に楽しかった。もし、そつちに俺がいたら、よろしくな。承一郎、そして……最後までから呼ぶぜ、J O J O」

J O J O「八幡……止めてくれよ。柄にもなく泣けてくる」
そう言つて八幡達は僕から離れた。

ヴァレンタイン「もういいのかね？」

八幡「あ、あと二つあった」

八幡は俺に近寄り、俺の耳元で小声で話した。

八幡「もし、お前の世界で何かあったとき、遠慮なく俺を呼べ。俺は今回の感謝は忘れない。いつかお前がピンチに陥った時、今度は俺がお前を助ける……いや、助けさせてくれ」

承一郎「八幡……」

八幡「それと、レクイエムの件がハッキリしたら、お互いその時は顔を合わせよう。お

互いの為にな」

承一郎「…ああ、そうしよう」

八幡「じゃあな。異世界の………息子」

承一郎「『さよなら』は言わないよ。また会おう、異世界の父さん」

J O J O「また会おう、黄金の精神を持つ者達よ」

八幡少年は僕から離れ、そして……僕は国旗に包まれ、消えていった。

side 比企谷八幡（ニセコイ世界・総武高校二年）

今日も学校が終わり、俺は千葉駅で人を待っていた。

一色「せんばあい！お待たせしましたあ！」

八幡「ああ、待ったぞ、たぐさん待った。まあ、他のメンツがまだ揃ってないから、良
いけどな」

一色「そこは今来たところって言うのが普通なんじゃ無いんですか？」

八幡「ただの後輩相手に何でそんな気を遣ってやらねばならん。それにお前の場合は
絶対に付け上がる」

一色「もう先輩酷いですよお！幼なじみで婚約者じゃ無いんですかあ！」

八幡「はあ？俺とお前が出会ったのは生徒会選挙の一件であつて、つい最近。婚約者どころか赤の他人。ただの先輩と後輩。わかつたか？いろは」

一色「はあ？ハチくんだつて私のこといろはとか馴れ馴れしいじゃないですか！あれ？ハチくん？」

八幡「どうしたんだろうな、俺達。最近見た夢と関係があるのかもな？それで今日は俺の夢に登場する人を全員呼んだんだ」

一色「そうなんですか？奇遇ですね？私も最近変な夢を良く見るんですよ。あれ？雪乃先輩や結衣先輩は呼んでないんですか？」

八幡「あいつらは関係ない。もう一人の雪ノ下なら来るけれどな」

雪ノ下陽乃「それつてお姉さんの事かな？ひつきがつかうん♪」

八幡「急に出てこないで下さい。陽乃さん」

陽乃「へえ？私の事を陽乃なんて下の名前を呼ぶなんて珍しいね？比企谷君？」

やば…何故か思わずそう言っちゃった。

八幡「すみません。茅ヶ崎さん」

陽乃「誰よ？茅ヶ崎。でも何故か違和感ないんだよねえ…なんでだろ」

一色「汐華さん？」

陽乃「だから誰よ！」

小町「あ、お兄ちゃあん！」

小町が息を切らせて走ってきた。

八幡「小町、大丈夫か？」

小町「生ゴミいちゃん。たかだか高2の小僧に劳れるほどやわな人生は送ってないよ」

八幡「いや、それならお前は中3の小娘だからね？それに生ゴミいちゃんって酷すぎね？」

小町「うーん…何でそんな事言っちゃったんだろ…」

何かがおかしい。だけどこの一週間、変な夢を見ていた。

俺が変な幽霊を操って戦ったり、小町や雪ノ下さんが死にかけたり…それに一色といチャイチャイしたり。

一色「先輩。これで全員ですか？」

八幡「あ？ああ。じゃあ、ララポにでも行ってカフェで話をするか。最近変な夢を…………っ！」

歩き始めようとした時、何だか妙に気になる集団が通りすぎた。

リーゼント頭のアラサー、ソフトモヒカンのアラサー、金髪の前髪ロール、変な帽子を被ったチンピラ、サングラスを頭にかけて女の子、そして…目と雰囲気を除いては俺

に似ている同世代の男……。どこかで……そして夢に出てきた集団。何か見たことのない女の子達もいたが、彼女たちよりもその6人が気になって仕方がなかった。

彼らを……俺は知っている。特に……俺と同じ年の……

同世代の男はもの悲しい目を俺に向け、一瞬立ち止まったが、そのまま去っていった。それを見たら、俺達は……何故か涙を流していた……

八幡「東京の Sunny light にするか。何かそこが良いような気がする」
side 東方仗助（ニセコイ）

この一週間はとても奇妙なだった。

いきなり承一郎が消えて、その一週間後にいきなり戻ってきた。

しかもこの一週間、奇妙な夢を見るようになった。知らない奴等と一緒に戦うという、ホントに奇妙な夢だった。

どうやらジオルも同じようだ。

承一郎が戻ってきて早々、千葉に行きたいと言い出したので、皆で行ったのだが、そこで四人の男女を見かけた。

どこかで会ったのか……？俺は確かにこの男女達を知っている……でもどこだっけ……？

承一郎はその四人の内一人の男子を見て、一瞬立ち止まったが、すぐにまた歩き出した。

承一郎は最後にもう一度だけ、比企谷八幡を見て呟いたのを、俺は見なかったことにした。

承一郎「また会おう…もう一人の父さん、そして…八幡」

side 一条楽（俺ガイル世界 凡矢理高2年）

本海苔駅——

今日も学校が終わり、俺は人を待っていた。

小咲「お待たせ一条君！待った？」

楽「いや、全然。他の皆も待っているから大丈夫だ」

千棘「バカもやし！来てあげたわ！」

万里花「楽様——」だきつ

万里花は俺にいきなり抱きついてくる。

鶯「一条楽！貴様という奴は！」ジャキツ！

楽「ちよつとタンマ！俺のせいじゃないだろ！！？」

春「はあ、ホントに先輩は困った人ですね」

楽「あれ？春ちゃんも来てくれたのか？」

春「お姉ちゃんに言われてしぶしぶ来たんですよ」

集「で、今日はどうしたんだ楽？皆を呼び出して」

るり「今日何かあったのかしら？」

楽「そうなんだ、最近奇妙な夢を見るんだ」

そう、俺が変な幽霊みたいなのを操って戦ったり、知らない人達と仲間になったり。

集「奇妙な夢？」

楽「ああ。まあ立ち話もなんだしどこかのカフェで詳しい話を……！」

歩き始めようとした時、何だか妙に気になる集団が通りすぎた。

リーゼント頭のアラサー、ソフトモヒカンのアラサー、金髪の前髪ロール、変な帽子を被ったチンピラ、黒髪ストレートの白いカチューシャの中学生の女の子、変な帽子を被ったチンピラ、黒髪ストレートの白いカチューシャの中学生の女の子、あま色のセミロングの女の子、活発そうでアホ毛が特徴の女の子、髪の毛の先端だけを赤く染めているセミロングの黒髪の女の子、そして：目と雰囲気を除いては俺に似ている同世代の男……。どこかで：そして夢に出てきた集団。

彼らを：俺は知っている。特に：俺と同年の……。

同世代の男はもの悲しい目を俺に向け、一瞬立ち止まったが、そのまま去っていった。それを見たら、俺は：何故か涙を流していた……。

千棘「ちよつと、何泣いてんのよ」

楽「：いや：なんでもない。：東京のSunny lightにするか。何かそこが
良いような気がする」

俺は涙を拭いながら言った。

side 比企谷八幡

こちらの世界の承一郎、楽を一目見ようと集まった元クルセイダーズ正規メンバー。
ちよつびり聞こえてくる話の内容を聞く限り、あ的一条楽だとも夢という形でこの一
週間の戦いを体感していたようだ。

俺は一瞬だけとまり、楽を見た後、再び歩き出す。

いろは「話しかけなくて良かったの？ハチくん？」

八幡「ああ、アイツは俺達を知っている彼じゃあない。話しかけたところで迷惑だろ
う。俺達は俺達なりに、アイツとの約束を果たせば良い。承太郎がアイツと交わした約
束をな。さて、千葉に帰る前に忍さんの所に顔を出して行こう。今回のお礼もあるし
な」

俺はもう一度だけ一条楽を見て呟いた。

八幡「じゃあな、異世界の：俺の息子。一条承一郎：そしてJ O J O」

「ジョジョの奇妙な冒険―5人目のDIOの息子―
Another Story―転生者VS DIOの息子―」完

本城凜さんとの第2弾!!? Another Story

—目覚める殺人剣—

一条承一郎!比企ヶ谷八幡と再会する

承一郎「…もう少し諜報班に調べさせて、その後に戦闘班を派遣してくれ。情報が少ないと任務の失敗に繋がる」

僕はカズやオセロツトからマザーベースの経営状況を確認して、スタッフ達や任務の内容など、あらゆる事案をさばいていく。

オセロツト『了解だ、ボス』

承一郎「それと…何?寿司を食べたい!??なんだこのマザーベースのスタッフ達の要望は!??エヴァだろ絶対!前一度奢ってやったらこれか…GM^資P^金が足りないから無理だと言ってくれ!」

この前エヴァが寿司を食べてみたいとごねたので奢ったらこの始末だ。

カズ『ボス、エヴァだけじゃあない。他のスタッフ達も食べたいという要望があったんだ』

承一郎「なんでそうなるんだ…!」

カズ『いやあく、前大きな任務が成功した祝いにオレが皆に奢った事があつたなあ』

…』

承一郎「カズウツツ!」

オセロツト『ボス』

承一郎「今度は何だい?」

オセロツト『…俺も寿司が食べたい』

承一郎『オセロツト、お前もか!』

僕はつい指でこめかみの辺りを押さえてしまう。

承太郎「承一郎…大変そうだな」

ジヨルノ「そうですね、僕の組織と同じくらい…いやそれ以上の組織ですからね…。

大変だと思いますよ?」

兄さん達、見ているだけだから分からないけど、ウチは

Private Military Company、つまりは傭兵達を束ねる必

要があるからギャング組織よりも面倒なんだ。

GMFが赤字になるとすぐにケンカし始めるし、それを止める羽目になる。毎回ナイ

フを自ら突き刺すこつちの身になってほしい。↑!?

しかもいつもダイヤモンドの原石を色んな所に隠すし……スタッフ全員に一人ずつ尋問するの大変なんですよ！

承一郎「何？水鉄砲の開発？カズ！研究開発班に真面目にやってくれと言ってくれ！ウチには水鉄砲を作る余裕はないって！どうせなら消音器付きサプレッサーの銃の方が……」

その時だった。

突然現れた肉体の波長に気づいたのは。

承一郎・承太郎・ジヨルノ「!!?!」

カズ『……どうした、ボス？』

承一郎「いや……何でもない。しょうがない、寿司は考えるが水鉄砲は論外だ。GMPを無駄に使うなよ」

僕はカズとの連絡を切る。

承一郎「……行きましょう。何か胸騒ぎがする」

承太郎「ああ」

僕はジヨルノ兄さんと承太郎さんを伴って外へ出た。

外には、人のミイラのような……左足があった。

だが僕はこれは……いや、この左足の前の人物を知っている。

ジヨルノ「これは……この感覚は……父の……」

承太郎「間違いなくD I Oの気配…だが、何かが違うとわかる」

承一郎「これは…この感覚は…まさか八幡……。嫌な予感はこれだったのか!何で八幡はこんな姿になってこの世界にいるんだ!」

僕は八幡の左足を拾う。

ジオルノ「よせ承一郎!迂闊に触るんじゃあない!」

八幡の左足は僕の体に吸収される。

ジヨニイ『八幡の記憶が入ってくる……お前は……こんなことになるか知りながら……レクイエムをやってしまったのか……』

僕は頭を押さえて座り込む。

承太郎「承一郎!どうした!大丈夫か!」

承一郎「大丈夫です。兄さん…承太郎さん。あの遺体は比企谷八幡…僕が大統領に連れ去られた世界にいた父とジヨナサン・ジヨースターが融合して転生した男の…レクイエムを発動した慣れの果てです…何で僕を呼ばなかったんだ…八幡……」

そのまま僕は意識を失った。

それと共に八幡の意識も闇に沈んで行く。僕に呼び掛けるこの世界の承太郎さんとジオルノ兄さんの声を精神の内側で聞きながら…。

ようこそマザーベースへ

精神世界——

僕とジョニー、そして八幡は僕達の精神世界の中で向き合っていた。

承一郎「……まさか、そんな事になっているとは……」

ジョニー「……なんで、オレ達を呼ばなかったんだ？八幡」

八幡「……お前らに迷惑がかかると思ってたんだ。前は無理矢理あつちの世界に連れて来られたし、それに……俺の運命は決まっていたからな」

ジョニー「……」グイッ！

ジョニーはそう言った八幡の胸倉を掴む。

承一郎「おいジョニー……！」

ジョニー「ふざけるなよ、八幡。これはあの時小町義姉さんに言った事だが……覚悟の意味を履き違えるな！」

八幡「ぐっ……！」

承一郎「おいジョニー……！八幡が苦しがつてるだろう……！」

ジョニー「……」フン。オレ達はお前には勝ったが、お前達には負けた。その意味をよ

く考えるんだな」

そう言つてジョニイは八幡から手を離れた。

承一郎「八幡：僕も悲しかったよ。わずか数日の旅だったけど、僕達も水晶十字軍クリスタル・クルセイダースの仲間だろう？少しは頼つてくれ、共にあの死闘を乗り越えた仲間なんだから……」

八幡「……すまない」

そうして、僕は目覚めた。

—————

承一郎「ここは……僕の部ぼぐおおつ!?？」

僕が起きた瞬間、強烈な右ストレートが顔面に直撃する！

千棘「このバカもやし！心配したじゃあないのツ！」

承一郎「心配している人の態度と行動じゃあないでせうが……」

千棘「うるさい！」

小咲「一条君……大丈夫？」

承一郎「あ、ああ、大丈夫だよ。……千棘さんに殴られた分を除けば」ボソツ

万里花「承一郎様！ご無事でなによりです！」ギユツ！

鶴「貴様！お嬢という人がありながら！」ジャキツ！

承一郎「君には常識というものは無いのか！？？」

ジョルノ「承一郎、大丈夫かい？」

ジョルノ兄さんが僕が起きたのに気づいてやって来た。

承一郎「兄さん。すみません、急に倒れちゃって」

ジョルノ「いいんだ、それより承一郎……」

承太郎「お前が倒れる前に言った事……あれは何なんだ？」

承一郎「それは……」

キング・クリムゾン!!?

承一郎「……という事です」

承太郎「……なるほど、この前急になくなったのはそれが理由か」

ジョルノ「並行世界を行き来する事が出来るなんてね……」

承一郎「はい、感想欄でもしよつちゆうちよつかいしてくるし……一番酷かったのは露

伴先生と静さんによる浮気偽装か……」メメタア！

千棘「ああ、なんかいつもとは違うなど思ってたけど、並行世界の方の静・ジョース

ターだったのね？」

もうメタイのは気にするな！↑by作者

それが一番メタイと（ry

小咲「あの時はごめんね、一条君」

承一郎「う、うん」

余談だけど、あの時僕は彼女達を怒らせないようにしようと誓った。

承太郎「…で承一郎、お前の体に入り込んだあの左足は…」

承一郎「はい、並行世界で共に戦ったジョナサン・ジョースターとDIOの転生者、比企ヶ谷八幡という少年の魂の一部です。多分これで分かります」ズギユン！

僕はスタンドを発現させる。

千棘「あれ？これって…」

小咲「一条君の『ブラッディ・シヤドウ』に似てるけど、色が違うね」

承太郎「これは…『世界』！」

承一郎「あれ？おかしいな…『原石』は確か水色…『隠者の紫水晶』！」

次に僕は『ザ・ジエムストーン』から『ハーミット・アメジスト』を出そうと思ったけど、

承一郎「あれ？『ザ・ワールド』が消えて…」

手から『ハーミット・アメジスト』が出たが、そのかわり『ザ・ワールド』が消えてしまっていた。

ジョニイ（スタンドが二つに分かれているのか？）

承一郎「うくん…八幡のスタンドは一つになったスタンドじゃあなかったのかな…？」

そんな話をしていると

承一郎・承太郎・ジョルノ「!!?!」

また、ここにいる三人とは別の肉体の波長が感じ取られた。

千棘「?…どうしたのよ、急に黙っちゃって」

ジョルノ「これは…」

承一郎「この肉体の波長…まさか、八幡の世界から誰かが来たのか…？」

僕はすぐに空間を繋げる。場所は波長が感じ取れた場所だ。

千棘「ちよ、ちよつと承一郎?!？」

承一郎「ごめん、ちよつと野暮用があるんだ！」

僕はそう言つて空間の中に入り、波長が導く場所へ飛ぶ。

僕が空間で着いた先には、ジョルノ兄さんとトリツシユさん、ミスタさん、そして陽乃さんと妹の雪乃さん。確か八幡の記憶では留美ちゃん——あのブチャラテイさんの転生者だったハズ——がいた。

承一郎「やはりあなた達ですか。久し振りですね。八幡の世界のジヨルノ兄さん、ミスタさん、陽乃、雪乃。そっちの子は初めてましてかな？」

雪乃「お久し振りです。一条承一郎さん」

承一郎「うん。久し振り。エンジェル・ダストの雪乃さん。静さんのイタズラに付き合わされて以来だね。あの時は大変だったよ」

いやあ、あの時はすごい焦ってしまった。何か悪い事したかな？ っって凹んでしまつて… 概念を凍らせるとはまた面倒な能力だ。

そんな事を考えていると、僕の携帯が鳴る。

カズ『ボス、今CIAカンパニーの方からある非公式の依頼があつた』

承一郎「…CIAだと…？」

怒りが強くなる。母を殺したであろう組織。それがその殺した女の息子に依頼を寄越すとは。

いつの間にか僕の額には白い角が生えていた。それに気づき、少し深呼吸をすると角は元に戻っていった。

承一郎「…一旦マザーそっベースちに戻る。話はその後にしよう。何人か客人を招待するか、もてなす準備をしておいてくれ」

カズ『分かった、それじゃあ後でな』

承一郎「…さて、兄さん達、ここでは話しづらいので場所を変えましょう。僕達の基地に招待しますよ?」

「マザーベース」
 ジョルノ「…基地…?」

承一郎「前に自己紹介したじやあないですか。学生兼傭兵だって。僕の暗号名は『毒蛇』、裏の世界では結構有名ですよ?」

僕は空間を繋ぐ。行先はマザーベース、僕達『クリスタル・フアンク』の拠点となる海上プラントだ。

承一郎「今まではヘリで向かっていたけど、この能力があると一瞬で行けるんです。兄さん達、おそらく戦いが終わったすぐ後にこの世界にやって来たでしょう?」

僕は皆の状態を波紋で探知、こっちの世界へ来る前の状況を把握した。

承一郎「スタンドは精神エネルギーが生み出す力ある像。休息を取らないと悪影響ですよ。ウチだとこの世界の兄さん達がいって面倒ですし、どうします?」

「集英組」
 ジョルノ「…そうだね。ならお言葉に甘えようか」

承一郎「分かりました。ではこの空間の中へ。あつという間に着きますよ」

ジョルノ兄さん、トリツシユさん、ミスタさん、留美ちゃん、陽乃さん、雪乃さん、最後に僕とDDの順番で空間の中へ入っていく。

次に全員が感じたのは、海風だった。

ジオルノ「こ……これは……ッ！」

トリツシユ「こ……こんなのって……！」

ミスタ「で……デツケエ……ッ！」

留美「これは……パツシヨーンと同じ……いや、それ以上の規模だ……！」

陽乃「す……すごい……」

雪乃「……なんて大きいの……」

さらに全員が見たもの、それは海上に浮かぶ建物の群れ。その光景に圧倒されている。

承一郎「ようこそ……僕達のマザーベース……『クリスタル・ファング水晶の牙』へ！」

僕はそう皆に言った。

スタッフ達「「お帰りなさい、ボス！」」

承一郎「ああ、ありがとう」

スタッフ達の挨拶と敬礼に答えながら、僕と兄さん達は歩いていく。目的地はマザーベースの司令部、カズやオセロットのいる場所だ。

ジオルノ「驚いた……これほどの組織を作っていたなんて……」

承一郎「スタッフ達は実を言うと僕が戦場から優秀だと思った人間をフルトン回収し

て集めているんです。後は説得してウチで雇う。たまに志願兵も来て今は10000人はいますよ？」

ミスタ「せ、10000人!?？」

承一郎「そうです。ではどうぞ」ガチャ!

僕はドアを開けて皆を通す。

カズ「ボス! 待っていたぞ! ん? そいつらが客人か? 綺麗なお嬢さん達がいるじゃないか!」

承一郎「カズ、手は出さないように。兄さんの奥さんとその親戚の人達なんだ」

オセロット「ボス、後で寿司:よろしく頼むぞ」

中ではカズとオセロット、そして司令部のスタッフ達が『I love DD』と描かれたマグカップでコーヒーを飲んでいた。

承一郎「ああ、しようがない。スタッフ達のモチベーションを上げるためと考えればマシか:。カズ、さっきの話詳しく頼む」

カズ「了解だボス」

カズ「最近南米の方で麻薬組織が勢力を拡大していてな、その組織を潰してくれというのが依頼だ」

カズが僕に依頼の要旨説明を説明する。オセロットは連れて来たDDと遊んでいる。

承一郎「自分達の兵士達にやらせればいいじゃあないか。なぜ僕達に？」

カズ「最近、その組織をあるPMCのサイボーグ兵士が守っているんだ」

承一郎「サイボーグだって？ウチにも何人かいるが…」

カズ「全員がサイボーグなんだ。PMCの名前は『デスペラード・エンフォースマン』」

『紛争への介入だけでなく麻薬の取引、人身売買などにも手を染めているらしい』

承一郎「文字通りの無法者というわけか…」

カズ「だがおかしいんだ」

承一郎「おかしい？」

カズ「ああ、大量のサイボーグを雇ったり高価な最新装備を持つなど、単なる無法者とは思えない豊富な資金を有しているんだ」

承一郎「なるほど、何か裏があるというわけか…」

カズ「そうだ。それとボス、そのPMCの幹部メンバーの一人にあの男がいるらしい」

承一郎「!!？」

承一郎はその言葉に驚いた。

承一郎「…そうか、ついに見つけたのか」

カズ「ああ、サムエル・ホドリゲス…またの名を『ジエットストリーム・サム』。かつ

てあんたの左腕を斬り落とした男だ」

< || t o b e c o n t i n u e d ||

毒蛇（ヴァイパー）の始まりの場所（グラウンド・ゼロ）へ

夜、マザーベース——

カズ「お前ら！今日は寿司だ！どんどん食べよ！」

カズの言葉と共に一斉に我先にとスタツフ達が寿司を食べ始める。

スタツフ達「あつ！お前、俺の取ったな！」「早い者勝ちだろ！」「あーっ！俺の大トロがあつ！」「はっ、腹があつ！」

承一郎「……すみませんね、今日はスタツフ達に寿司を食わせる約束をしていて。皆さんのは別にありますからどうぞ」

僕は空間を使って食堂（という名の戦場）から寿司を持ってくる。

陽乃「あ、ありがとう……」

雪乃「あの中に入っていく勇氣はないわ……」

ジョニイ「まあ、手の焼ける連中だがオレの事を慕ってくれている。物心ついた時から本当の親がいなかったオレにとってこいつらは家族みたいなものだ」

オレは承一郎と入れ替わって電子タバコを吸う。本当はキューバ産の葉巻が吸いた

いんだがしょうがない。

ジョルノ「タバコを吸うと体に悪いよ、ジョニー」

ジョニー「電子タバコだ、問題ない。それに吸血鬼に健康もクソもないと思うが？」

ジョルノ「それもそうだね」

その時だった。

『汚れ無き光が闇夜を貫いて　この瞬間が永遠だと　今　命が叫んでる　ほら　こころの奥にいつも君が映るよ　守るべき真実をただ　抱いてゆくんだ　く♪』

急に着メロの曲が鳴り、

ジョニー「…ん？」

オレはスマホを見ると、どうやら千棘かららしい。

ジョニー「…千棘からか。嫌な予感がするな…承一郎、パスだ」

承一郎「えっ!!? 急に替わられても…。はあ…もしも『バカもやし』くくくくくッ

!!?!』

僕が通話ボタンを押した瞬間、スピーカーモードでもないのにとんでもない音量がマザーベース中に響いた。

千棘『ちよつとあんた! 今日には急に倒れて起きたと思っただけ急になくなってどういうつもり!!? 明日はデートの予定があるでしょうが!!?』

あまりの音量に辺りがシューーンと静かになる。

承一郎「…千棘さん、いきなり大声で叫ばないでくれ。鼓膜が破れそうだよ、まったく…」

千棘『それはこつちのセリフよ！まったく…どれだけ心配したと思ってるのよ…』ボソッ

承一郎「ん？何か言った？」

千棘『何も言っていないわよ！…それで？一応言い訳を聞いておくわ』

承一郎「ちよつとね…仕事の依頼が来ちやつてね。数日学校休むかも」

千棘『…ふーん…頑張りなさいよ』

承一郎「ああ、もちろんだ。それじゃあね」

僕は電話を切った。

承一郎「…なんだい皆、その顔は」

僕が周りを見ると皆ニヤニヤとしていた。

ジヨルノ「承一郎…青春してるな」

トリツシュ「ホントね、彼女さん向こうの世界で見たけど、いいカップルじゃあないの？」

カズ「ボスウ、ニセの恋人って聞いたが随分と仲が良いらしいなあ？」

カズよ、お前はいつから近所のゴシップ好きおばさんになったんだ。

承一郎「なんだいカズ、ちよつとムカつくなその顔。別に千棘さんは友人だよ」

カズ「寿司じゃあなくて…赤飯の方が良かったかな？ボスウ！」

承一郎「…コオオオオ…」

カズ「待つてくれボス俺が悪かったから波紋疾走はやめてくれ、頼むこの通り！」

僕が波紋の呼吸を練るとカズは見事な土下座を披露した。

承一郎「許して欲しい？」

カズ「許して下さい！」

大人の威厳はどこに言った。

カズ「とつくのとうに風となって消えたんだ」

承一郎「サラツと心を読むんじやあない…。そうだね、許してあげてもいいかな？」

カズ「本当か？なら「だが断る」ええっ!!？」

承一郎「仙道波紋波紋疾走オーバードライブッ！」バチイッ！

カズ「ひでぶっ!!？」

笑いが広がった。

オセロツト「…ボス、ここにいたのか」

夜のマザーベース、司令部のプラットホームで夜風に当たっていた。

承一郎「オセロットか。寿司は堪能出来たかい？」

オセロット「ええ、おかげさまで」

承一郎「それは良かった」

オセロット「任務…受けたんですね。…やはり信乃の事もありますか？」

承一郎「…そうだね、それが大半かな。サムエル・ホドリゲス…彼との決着は着けな

いと…」

オセロット「ソレを持って行くんですか？珍しい…あまり使わなかったでしょう？」

承一郎「彼との決着を着けるならコレは必要さ」

僕は持っていた刀を鞘から抜いて言った。その刀からは青白い輝きを放っていた。

承一郎「この高周波ブレード『村雨』は…」

僕は月明かりの下でそう言った。

翌日、マザーベース——

承一郎「…さてと、とりあえず皆さんの目的は僕の体に入った八幡の魂…でいいんで

すよね？」

ジヨルノ「ああ、そうなんだ」

承一郎「なら僕から八幡の魂を引き抜けるかもしれませんか？」

ミスタ「何？本当かよ承一郎？」

承一郎「ええ、ザ・ソロー、入ってくれ」

ドアから眼鏡をかけた長身の男が入ってきた。

ザ・ソロー「ボス、お呼びで？」

承一郎「ああ、僕の体に入った八幡の魂を引き抜いてくれないか？」

ザ・ソロー「お安い御用です」

ザ・ソローがそう言うと、彼の体からオーラのようなものを帯びる。あれはスタンドエネルギーによって現れるオーラだ。

ザ・ソロー「『^{ザ・ソロー}悲しみ』！」

ザ・ソローは僕の体を掴む。

承一郎「それじゃあよろしく」

ザ・ソロー「分かりました：ハッ！」ズズズ：

八幡『おおつ：承一郎の体から：俺が：』

僕の体から、八幡の魂がうつすらと浮かび上がり、体の半分が露わになった。しかし

：

承一郎「痛アツ!!??うおおおつ!!?」ズズズ：

八幡の魂と一緒に、なぜか僕とジョニイの魂まで飛び出てしまった。

ジョニイ『ソロー！魂の引き抜きを止めるッ！俺達まで抜けてしまうッ！』

ザ・ソロー「り、了解！」

ザ・ソローは魂を僕の体に戻した。

承一郎「はあ…はあ…今のは…一体…」

ザ・ソロー「分かりません。しかしボスの体に入り込んだ聖なる遺体がボスの体と一体化してしまったからではないでしょうか？今までにない現象ですが…」

承一郎「…骨折り損の…くたびれもうけてわけか…骨だけに…」

陽乃「承一郎、大丈夫？」

承一郎「大丈夫です…。ソローの能力は見ての通り『魂への干渉』が出来るんです。それによって魂を掴む事が可能なんです」

ハッキリ言ってしまうと、彼の能力は『アトム神』の上位互換の能力だ。魂を掴み、嘘を見抜き、さらには死んだ人間の魂を降霊出来る。

ザ・ソロー「すみませんボス、私が不甲斐ないばかりに」

承一郎「いいんだソロー、これは例外中の例外だ。どうしようもない事なんだよ。ありがとう、元の配置に戻ってくれ」

ザ・ソロー「了解！」

ソローはドアから外に出て行った。

オセロツト「：でボス、どうするつもりだ？ どうせなら今回の任務の協力をしてもらうってのはどうだ？」

承一郎「うーん、どうするか：皆さんはそれでいいですか？」

ジヨルノ「大丈夫だよ。君には前に助けてもらったからね、これくらい手伝わせてくれ」

ミスタ「そうだぜ。最初は敵同士だったがお前も『アーシス』の母体となった『水晶十字軍』の仲間なんだぜ？」

陽乃「それにあなたともう一回勝負をしたいしね」

承一郎「：そうですね、それではよろしくお願いします。改めて自己紹介を。集英組次期組長兼このマザーベース、『水晶の牙』クリスタル・フアング総司令官の一条承一郎です」

僕は改めて自己紹介した。

承一郎「今回の任務はとある麻薬組織の壊滅です。けれどそれを遂行するには問題点があります」

ミスタ「とうとう？」

承一郎「その麻薬組織を警護しているPMC、『デスペラード・エンフォーースメント』

です。このPMCの特徴はサイボーグ兵です」

陽乃「サイボーグ？強化外骨格とか？」

承一郎「ええ、それもあります。がほぼ全身がサイボーグ化されています。紛争への介入だけでなく麻薬の取引、人身売買などにも手を染めているまさに無法者。しかし奇妙な点があるんです」

ジョルノ「奇妙な点？」

承一郎「はい、資金が豊富すぎるんですよ。ただの無法者の集まりじゃあない。何か裏があります」

オセロット「ボス、依頼人クライアントの身元が判明した。個人の説明は省くが、この依頼人軍のハト派らしい」

カズ「それとボス、最近軍のタカ派がその麻薬組織とPMCに癒着の疑いがある」

承一郎「なるほど、タカ派との癒着の証拠を隠蔽するためにPMCが警護しているのか」

オセロット「そうだな。だがそうなるとタカ派の連中は下手な真似は出来ないハズだ。今回はサイボーグ兵だけだと思ってくれ」

ミスタ「承一郎よお、サイボーグ兵ってどんだけ強いんだ？」

承一郎「そうですね、波紋の戦士と屍生人ゾンビを足して二で割ったような感じです。」

主な武器は高周波ブレード、これです」スラアッ！

僕が高周波ブレード『村雨』を鞘から抜く。

雪乃「これが……」

八幡『材木座が喜びそうだな』

承一郎「一振りですら鉄もバターのようには切断出来る業物です。高周波ブレードの斬れ味はそのベースになっている刀によりますね」

陽乃「あれ？じゃああの時はなんで使わなかったの？」

承一郎「あの時は突然あつちの世界に連れて来られたので持つてきてなかったんですよ。だから『クリスタル・ボーン』の骨で造った物で戦ってたんです」

陽乃「へえ……」

承一郎「とにかく、今日は現地のポリビアに到着、作戦を練り、その後麻薬カルテルのボスを始末。後はウチのスタッフ達に任せるといふ形でいいですか？」

ミスタ「ああ、俺達は全然問題ないぜ」

ジョルノ「それでジョニイ、これからどうするんだい？」

ジョニイ「まずは麻薬組織と敵対している反乱軍とコンタクトを取る。中学の三年間は世界中の汚れ仕事ウエットワークに介入していたからな。政府にも反乱軍にもコネがある」

バラバラバラ……！とローター音を出しながらピークオドが降りてくる。

承一郎「今回はちよつと人数が多いので少し機体を変えます。いつものピークオドよりも大きめのやつで行きましょう」

機体は代わってもピークオドという名は役割の通称だ。だから名は変わらない。

僕達（+DD）は順番に乗り込んで行く。

承一郎「よしピークオド、飛ばしてくれ」

ピークオド「了解、上昇開始！」

DD「ワン！」

DDは操縦席の隣席に行儀よく座る。

承一郎「すみませんね、ちよつと散らかしてて」

僕はいつも任務時に使っていた荷物をどかして全員が座れる場所をつくる。荷物はミサイルや狙撃銃などといった武器がほとんどだ。

承一郎「いつもは僕とDDだけなので広いんですけどね」

トリツシュ「ねえ承一郎、このへりって探知されたり迎撃されたりしないの？」

承一郎「問題ありません。カズの『ガンス・オブ・ザ・パトリオット TOKYO通信』は探知機の情報の上書き、オセ

ロットの『愛国者達の銃』は迎撃ミサイルなどの制御権を奪う事が出来るんです。だからそんな事はありませんし、マザーベースの場所がバレる事はないんです」

雪乃「…すごいスタンド能力ね」

承一郎「ええ、オセロツトとか敵の戦闘ヘリを何機撃墜したか…さて、そろそろ行き
ますよ」パチン！

僕が指を鳴らすと、ピークオドの前に空間が作り出され、その中を進む。そして、空
間を繋いでポリビアの空中へ。

ポリビア、『毒蛇』の始まりの場所。信乃や仲間達を喪った場所。

留美「…すごい能力だね。八幡は『時を止める』事が出来るけど…」

承一郎「八幡の前世、DIOは『世界を支配する』能力だけど、ジョニイの能力は『世
界を創り出す』能力なんです。空間の中は一つの世界として成り立っていますから」

ピークオド「こちらピークオド、まもなくL^{ランディングゾーン} Z 到着」

承一郎「こちら『毒蛇』^{ヴァイパー}了解、そろそろ着きますよ」

ジョニイ「パック・カタリ、久しぶりだな」

パック「やあ友よ、君も元気そうだ」

ジョニイ「皆紹介しよう、こちらは四年前ポリビアの麻薬カルテルを潰した時に協力
してくれた反乱軍のリーダー、パック・カタリだ」

パック「君達が『毒蛇』の言っていたお仲間か？私はこの反乱軍のリーダーをやっ
ているパック・カタリだ。前は世話になったな、『毒蛇』…いや、『勝利のボス』^{VICTBOSS}か？」

承一郎「パック、その呼び名はやめてくれ。普通にジヨジヨでいい」

ミスタ『VICBOSS』?」

パック「ああ、四年前急に現れて私達に革命の協力をしてくれたんだ。その時に広まった『毒蛇』のVと勝利のVをかけた呼び名さ。戦争の犬と呼ぶ奴らもいるが、私達にとって彼は英雄みたいなものだ」

承一郎「やめてくれ、パック。革命だろうがなんだろうが、銃を一度取れば…暴力に訴えれば皆地獄に落ちる。…僕がやった事はただの人殺しさ。僕は英雄なんかじゃない。これまでも、これからも」

パック「…すまない、私も少し無遠慮だった」

承一郎「いや、大丈夫だ。パック、今回も君達の力を借りる事になる。よろしく頼むよ」

パック「分かった、他の同志達にも伝えておこう。友よ、私達はあと少しでカルテルのボスを倒せたのだが、そのあと少しのところまでPMCのサイボーグ達に阻まれてしまったのだ」

承一郎「すごいな…幹部メンバーは全滅、残るはボスただ一人…だからPMCを雇ったのか」

パック「そうだ、私達も止めを刺そうとして奴らに手痛い反撃を食らった。生き残っ

た同志達は、『狼』と『巨人』がいたと言っている」

承一郎『『狼』と『巨人』か…分かった、あとで調べよう。すまないけど今日はここで滞在しても?』

パツク「もちろんだ、四年前の恩もある。君達を無下にはしないさ」

キング・クリムゾン!!?…とやりたいが今回はフアントム・シガー!!?

ガチャガチャ。カチカチ、シャカシャカ。シュー…カチカチ、キュツキュツ。

夜のセーフハウス、作戦計画を練った結果、決行は明日の早朝に行われる事になった。ジオルノ兄さん達は疲れもあつて眠ろうとしていたのだけれど、ミスタさんが床に座つて金属音を立てて何かをしていた。

僕は外に出て葉巻を吸っていた。やっぱり葉巻はキューバ産が一番だ。

雪乃「ミスタさん?」

僕は葉巻を吸っていると、中にいる雪乃さん達の声が聞こえてきた。

ミスタ「あ?ああ、わりい。起こしちゃったか?」

雪乃「それは良いのですけれど、何をなさってるんですか?」

ミスタ「ああ、銃の整備さ。商売道具だからな。毎日の手入れは欠かせねえんだ。こここのところ酷使してるしよ」

雪乃「そうなんですか。こんな暗闇の中ですか?」

ミスタ「もう二十年も毎日分解して整備している銃なんだぜ？目を瞑っていたって整備はできるさ」

そう言いながらミスタさんは手際よく銃を整備している。ブラシを使い、ウエスで拭き取り、油を塗る。

ミスタ「ん？」

ミスタさんが何かに気が付いてしげしげと部品を点検する。どうやらバネのようだ。

雪乃「どうしたんですか？」

ミスタ「……いや、引き金のバネがとうとうダメになっちゃったらしい。あんま交換とかしたくねえんだけどよお。まあ、こりゃ仕方ねえや」

ミスタさんがバツクから何かを取り出す。

雪乃「それは？」

ミスタ「分解してある予備の銃さ。これのバネで応急処置をする」

予備の銃があるのならそっちを使えば良いのではないのか？と思う人間もいるだろうが、実は違う。

ミスタ「予備の銃は不慮の事故とかで銃を無くしたり、急な破損とかですぐに直せない場合用に持っているだけさ」

雪乃「同じ銃に見えますけど……」

ミスタ「同じ会社の同じ型式の銃だけ。だけど、違う銃だ」
確かにそうだ。いつもと違う物を使うと、戦場では支障をきたす時がある。

ミスタ「学生のお前なら、ペンで例えた方が分かりやすいかもな。全く同じシャーペンでも普段使っているシャーペンと、別のシャーペンでは使い心地が違うって場合があるか？」

ミスタさんは組み立てながら答える。

実に分かりやすい例えだ。同じシャーペンでも指の馴染み方が違うから、違和感があるものだ。

雪乃「分かりやすいです。指の馴染み方が違って字がおかしくなった気がしますもの」

ミスタ「銃も同じだけ。いや、ペン以上に馴染みって言うのが如実に出るんだよ。全く同じ照準をしても銃ごとにクセがあるからな」

カチツ！パチン！カチツ！パチン！

喋りながらミスタさんは空射ちを始める。

ミスタ「……引き金が重くなりすぎてるな。イヤなタイミングでバネがいかれちゃいやがった。出来れば馴染むまで試射したかったんだがよお」

雪乃「そんなに違うんですか？」

ミスタ「引き金の重さはバカに出来ねえんだぜ？かかる力が違うってことは馴染んだタイミングで撃てねえし、何より手に余計な力はいっちまう。バネの一本にしても照準に狂いが出るもんなんだよ。特に毎日使っている物だとその違和感は大きいんだぜ？それを体に染み込ませる為に試射をするんだ」

承一郎「なら前にもらった銃の部品ならどうですか？」

外で葉巻を吸い終わった僕は中に戻って言った。

ミスタ「あれは俺の感覚からだと四年も手にしていない銃だ。当時のクセと今のクセじゃあまるで違う。それだったら予備銃の方がまだ今の銃に近い。ち……何発か試射したいぜ」

そして、夜が明けていく。

『残虐性を持たない無人機』と『砂漠の嵐』その①

承一郎「皆、配置に着きましたか？」

ジョルノ『ああ、バツチリだよ承一郎』

承一郎「分かりました、それでは行きます。ムーブ！」

麻薬組織のボスの始末、その任務には四人組フォーメンセル二小隊で行われる事になった。

メンバーは承一郎（&ジョニイ&八幡）、陽乃、雪乃、DDとジョルノ、ミスタ、トリツシユ、留美に分かれた。

DD「ワン！」

DDは自慢の嗅覚で敵がどこにいるのかを索敵して承一郎に教えてくれる。

承一郎「ありがとうございますDD。この先2時の方向に三人います」

八幡『この犬、前感想欄で俺にスタンナイフで攻撃してきたような…』メメタア！
そんな事は知らない。というよりそれは運対で消された。↑メメタア！

雪乃「すごい…」

承一郎「DDはただのマスコットじゃあないって事ですよ。嗅覚で敵や捕虜を索敵して僕に教えてくれるんです。オセロットが訓練したんです」

陽乃「山猫^{オセロット}が犬の世話をねえ…?」

承一郎「さて、二人は周囲の警戒を。僕が片付けます」

承一郎は物陰から物陰へ気配を周りと同化^{シンクロ}させてゆっくりと男達に近づく。そして、

承一郎「連続ッ！Cッ！Qッ！Cッ！」

男達「ナチヨス！」

男達はあつけなく承一郎の連続CQCによって倒される。

承一郎「よし、終わりました」

陽乃「早いわね、さすがだわ」

承一郎「よし、行きましょう」

承一郎が先行して建物の中を進む。

今回の作戦はパツク達反乱軍がボスの元へ陽動として動いている間に、二方向からの挟み撃ちの形になる。どちらかが戦闘になったとしても、反対側の方がその隙を突いて始末する。そういう作戦だ。

? 『待っていたぞ、毒蛇^{ヴァイパー}』

突然、機械音がかかった声が聞こえた。

雪乃「何かしら…?」

承一郎「皆、下がって」シユカアン!

承一郎は『村雨』を抜いて構える。

承一郎「誰だ」

建物の前の曲がり角の先からした声に警戒するが、

ガガガガガアッ!!?

突然承一郎の横の壁の後ろ側から大型高周波チェーンソーが飛び出る！

承一郎「なっ!!?」

そのまま迫ってくるチェーンソーを承一郎は仰け反って躲す。某ライトニングボールのような顎擦りはないッ！

チェーンソーが壁から床、そして反対側の壁を通った瞬間、

承一郎「ッ!!?」ガクッ

建物が前に傾く。

承一郎（：いや、これは僕のいる部分だけチェーンソーで切断されたのかッ！）

後ろを振り返ると、瓦礫が承一郎に迫る！

承一郎「ぐっ！」

承一郎は真下の地面に空中で態勢を整えて着地、上から落ちてくる瓦礫を叩き斬る。

承一郎「ハアッ！」ズバァン！

一際大きい瓦礫を切断する。しかし、

ギユイイイインツ!!?

その瓦礫の上に乗っていた、四足獣形状の機械が高周波チェーンソーを承一郎に向ける!

承一郎「うおおおおおおおッ!」ギイイイイン!!?

承一郎はチェーンソーを水圧カタールを帯びた『村雨』で受け止める。

四足獣兵器は右前足の爪を承一郎にくり出す、承一郎は間髪を回さず、ボディに蹴りで吹っ飛ばす。

両者お互いに態勢を整えて、距離を取る。

陽乃「承一郎!大丈夫?」

承一郎「なんとか大丈夫です。…一体君は?」

LQ—84i『LQ—84i、対話 I インターフェイス F 搭載型無人機だ』

雪乃「対話 I インターフェイス F?」

LQ—84i『自律型の無人機には高度な人工知能が搭載されている。学習と対話 I により人との会話も可能になった』

LQ—84iは雪乃の疑問に対してそう説明した。律儀なAIだ。

LQ—84i『思考形態は異なるが、俺にも知性がある』

承一郎「知性だって?それじゃあ聞くけど、君は何のためにここにいる」

そう尋ねた瞬間、LQ—84iが尾の先にあるマニピレーターから高温を帯びたナイフを高速で飛ばす！

承一郎「オラアッ！」バシバシッ！パシッ！

承一郎の『クリスタル・ボーン』がその内の二本を後ろの二人と一匹を当たらないように弾き飛ばし、承一郎は残りの一本を掴む。

八幡『速いな…そしてそれを防ぐ承一郎も…』

壁に突き刺さった二本のナイフは、ジユワアッ…！と音を立てて周囲を焦がす。

LQ—84i『お前達を殺すためだ』

承一郎「ご立派な知性だ。命令には疑問も抱かないのか？」

承一郎は掴んだナイフを放り投げる。

LQ—84i『何を思おうと俺に命令を拒む権利はない。逆らえば俺の意識は消去される。不本意だが、選択の予知はない』

LQ—84iはチェーンソーを地面に突き刺しながら答えた。

承一郎（不本意だが…？こいつ…『残虐性』がないのか…？）

無人機というのは意識がないので淡々と任務をこなす『残虐性』がある事が特徴だが、この無人機は違う。知性があるゆえに意識が有している。

知性と意識があるゆえに『理性』を持っている。だから『残虐性』がないのだ。

陽乃&雪乃対LQ―84i（対話IF搭載型）、戦闘開始ッ！

DDをジヨルノ達に向かわせた承一郎は気配をシンクロさせながら素早く移動する。そして開けた場所に出た。

承一郎「ここは…」

ズウウウン…ツ！！？

急に地面が揺れる。

承一郎「むっ…!!?」

突如、大型兵器が空中に飛び出し、持っている巨大な斧を振り上げ、承一郎へ向ける

！

承一郎「何ッ!!?」

承一郎は『村雨』で受け止めるが、

承一郎（クソッ、なんてデカさだこの斧ッ！）

あまりの大きさにパワー負けをしてしまい、承一郎は吹っ飛ばされてしまう。

承一郎「ぐおっ！」

大型兵器は自身と斧のブースターによって加速、承一郎に迫る！

承一郎は跳躍して、横薙ぎの一振りを躲した。

承一郎「何者だ？」スタツ

よく見てみるとこの大型兵器、中に人がいる。というよりは、その人を覆う形のボディなのだ。

カムシン「俺はカムシン、砂漠の嵐だ」

承一郎はこの顔に見覚えがあった。確か資料で見た『ケイニス、オブ・デイス・トラクションデスペラード社』の幹部達、『破滅を呼ぶ風』に次ぐ実力者だったハズ。

承一郎「なるほど、麻薬組織のボスの護衛か…」

ならば、こちら側は陽動として十分な活躍は出来ている。後はジョルノ達に任せれば問題ないハズだ。

カムシン「俺達は自由と資本主義を世界に広める義務があるからな」

承一郎「自由だって？それは伝統あるコーヒー農園をコカ農園に変えて、麻薬作りを強制させる事を言うのか？お前はただ自由と資本主義を広めるといふ表向きの任務に酔っているだけだ」

カムシン「ドッグ・オブ・ウオーフン、戦争の犬風情に俺達の大義は分らんか…」

承一郎「お前達がそれを言うのか？デスペラード無法者風情が」

カムシン「仕方ない、この国の自由のために…死ね!!？」

承一郎（&ジョニイ&八幡）対カムシン、戦闘開始ッ！

『残虐性を持たない無人機』と『砂漠の嵐』その②

陽乃「うりやうりやうりやうりやあ！」

陽乃は『アヌビス神』を振るうが、LQ—84iは独自の思考形態から基づく『知性』でそれを避ける。

LQ—84iはマニピュレーターからナイフを数本飛ばす。

陽乃はアヌビス神でナイフを叩き落とすが、数が多すぎる。何本か陽乃に突き刺さりそうになるが、

雪乃「フリージング・ビーム！」

雪乃の『エンジェル・ダスト』が放つフリージング・ビームが残りのナイフを迎撃する。

LQ—84i『厄介だな、その刀：サムの刀と同じタイプのスタンドか』

陽乃「同じタイプ：？どういう事よ？」

LQ—84i『お前達は気がつかなかったのか？さつきの『毒蛇』の持っていた高周波ブレード：あれもスタンドだぞ』

雪乃「…つまり、本体のいないスタンド能力が宿った刀…？」

LQ—84i 『そういう事だろうな、まあ俺には関係のない事だがな』

雪乃「そう…説明ありがとう、子犬さん」

いつの間にか、LQ—84iの脚には氷が張り付いていた。

LQ—84i 『こ…これは…』

雪乃「さつきまであなたが話していた途中からよ。あなた、スタンドは知っているらしいけど、スタンドは見えないよね。私の氷は簡単には逃れられないわ」

LQ—84i 『そうか…なら溶かすのはどうだ？』ダダダッ！

LQ—84iは高温を帯びたナイフを凍った脚元に突き立てる！

ジュワアツ…！という音と共に周囲の氷が溶けていく。

雪乃「熱で氷を溶かすなんて…すごい考えね」

陽乃「これが『知性』を持った力というわけかしら？」

LQ—84i 『そうとも言える。それと、俺には痛みを感じる事がないからかまもな。痛みというものを感じてみたいものだ』

カムシン「くらえッ！」

承一郎「くらえといつてくらうアホがどこにいるッ！」

承一郎はフェイントを入れてカムシンの攻撃を避けながら攻撃する。

承一郎（ヤツの動きは大振りで単純だ！上手く回り込めば攻撃のチャンスはある！）

承一郎がカムシンの大型ボデイの後ろに回り込んで『村雨』で斬ろうとするが、

カムシン「大回転！」

承一郎「何ッ!?？」

カムシンの大型ボデイが大斧を一回転させた！

承一郎は『ブラッディ・シャドウ』で大斧を回避する。

承一郎「クソッ、なんて無茶苦茶な奴なんだ！あれじゃあ強化外骨格じゃあなくて大

型兵器だ！」

カムシン「ハッハッハー！ツツ！どうした犬め、口ほどにもないぞ！」

承一郎「その減らず口、黙らせてやるッ！」

承一郎はカムシンに突っ込む。

カムシン「喰らいやがれ！」

カムシンが纏う大型強化外骨格がその手に持った斧をジャンプしながら承一郎に振

り下ろす！

承一郎「くっつ！」

承一郎は『村雨』でガードするが、あまりのデカさとパワーでガードした後に後ろに

飛ばされてしまう。

斧はそのまま地面に突き刺さり、地面が隆起する。

承一郎はすぐに隆起した岩に隠れる。

カムシン「どこにいった！出てこい！」

八幡『なんだ？あいつももしかして俺達の場所が分からないのか？』

承一郎（あいつ、もしかしてあのバカデカいボディだけしか強化していないのか？赤

外線センサーを搭載していない？）

カムシン「ちよこまかと生意気な犬め！」

ジョニイ（自分でやって何を言ってるんだ？）

カムシンの斧が周りの岩を砕いているが、承一郎はその間にカムシンの後ろに回り込む。

承一郎は跳躍、カムシンのボディの上に乗る。

カムシン「んっ!!？」

承一郎「お前が下で、僕が上だ！」

承一郎は上から『村雨』をボディの中にいるカムシンに突き刺す。

カムシン「ぐあああああああああつ!!？」

承一郎は飛び退きざまにカムシンのボディに水圧カッターを叩き込む。

カムシン「ぐおっ！」

承一郎「迸れ、『村雨』ッ！」

『村雨』の水圧カッターがボディに襲いかかるが、カムシンはそれに耐えながら向かってくる。

カムシン「フルパワー！」

カムシンは刃先がチェーンソーのようになっていて大型斧を振り下ろす。承一郎は『村雨』で受け止める！

承一郎「ぐううっ……！うおおおおっ！！？」

承一郎は『村雨』の水圧カッターを一瞬だけ勢いよく逆らせて斧をはじき返し、カムシンのボディを転倒させる。

承一郎「はあああああっ！！？」

スパアアン……ッ！！？

承一郎は『村雨』で斧を持つ右腕の部分を切断する！

カムシン「ちよこまかと生意気な犬め！」

カムシンの左手が承一郎を捕らえようとするが、

承一郎「セイッ！」

承一郎は『村雨』本体を左手に当たるのと同時に水圧カッターを発動させ、二段斬りで左手の指の部分を切断！（↑刀版二重の極み？）そして、

承一郎「WRYYYYYYYYYYYYYYY!!?」

スパアアアン…ツ!!?

左腕を切断した!

カムシン「この俺が…負ける事など…」

カムシンは動揺するが、承一郎はそれを無視してカムシンの腹に『村雨』を突き刺す

!

カムシン「ぐああああああああああ!!?」

『村雨』の水圧カッターがカムシンの腹を吹き飛ばし、カムシンを纏っていたボディから引き離す!

承一郎はカムシンを空中に放り投げる。

カムシン「やめろオツ!」

承一郎「斬ツ!」

承一郎は『村雨』の水圧カッターで射程距離を伸ばし、カムシンを滅多斬りにする!

承一郎「奪ツ!」ガシィツ!

承一郎は跳躍、バラバラになったカムシンの心臓部分を右手で掴み着地し、グシャアツ!と心臓を握り潰す!

カムシン『なんてこった…』

バラバラになったカムシンの体がボトボトツ！と地面に落ちる。

カムシン『この俺が、野良犬ごときに…』

カムシンの声が無線機越しに聞こえる。サイボーグ兵はボディが破壊されても脳が破壊されない限りは保護機構により一定時間は生存可能なのだ。

生と死の境界が曖昧な兵士達。僕と似てるな、と承一郎は思った。

承一郎「あんたが咬ませ犬だったな」

カムシン『上手い事…言いやがって…』

プルルルル！と別に無線が鳴る。

ジヨルノ『承一郎、任務達成だ』

承一郎「さすが兄さん、僕の方は刺客が来たけど撃退に成功、陽乃さん達と合流して

ランディングゾーン

L Zに移動します」

ジヨルノ『了解、L Zで待ってるよ』

承一郎「了解、『毒蛇』アウト」

カムシン『犬め…この国の自由より…自らの自由を取るか…？』

承一郎「自由は押し付けるものではない。勝ち取るものだ」

カムシン『クソ…虱たかりの…犬畜生が…』

ボンツ！ポオン！とバラバラだった体が爆発する。

カムシン達の雇い主、『デスペラード社』に所属するサイボーグ兵達は、ボディは大破すると機密保持のために自爆する。

承知の上で契約して戦っているサイボーグ兵達だが、悲哀を感じるものがある。

承一郎「さて、そろそろ陽乃さん達と合流しないと…」

LQ—84i『なぜだ？なぜ先ほどより力が強いのだ…？』

LQ—84iは自分のチエーンソーのパワーとスピードにだんだんと追いつき、それ以上になる陽乃に違和感を覚えた。

陽乃「教えてあげるわ、私のスタンド『アヌビス神』は闘えば闘うほど相手の動きを記憶して強くなつていくスタンドなのよ」

LQ—84i『何ッ…?!?!』

陽乃「それより、私だけ相手にしてていいの？」

LQ—84i『ハッ!』

雪乃「うりやうりやうりやうりやうりやあ!」

雪乃の『エンジェル・ダスト』のラッシュが炸裂し、LQ—84iは氷漬けの状態になつてしまった。

LQ—84i『ぐっ！お前、遠距離型ではないのか…?!?!』

雪乃「私のスタンド『エンジェル・ダスト』はどちらかと言うと近距離型よ。さつき
のフリージング・ビームから判断したんでしようけど、甘かったわね」

LQ—84i『くっ！』

LQ—84iは尻尾のマニピュレーターからナイフを取り出そうとするが、

陽乃「させないわ！」スパアン！

陽乃がマニピュレーターを切断する。

LQ—84i『や、やめろ…！くううん…』

陽乃「うりやりやりやりやりやりやりやりやあ！」

陽乃の『アヌビス神』がLQ—84iの体を何度も滅多斬りにする！

LQ—84iの体はバラバラになり、地面に落ちた。

LQ—84i『戦闘継続…不可能…』

無線が鳴った。相手はどうやら陽乃がさつき斬ったLQ—84iのようだ。

LQ—84i『奴らは…この国の自由のために…戦うと…。だが…俺に自由は、な

かった…。自由とは…何だ…？』

陽乃「AIまで自由を要求するの…？」

二人はLQ—84iに違和感を覚えた。さつきまでの戦闘も自分が望んで行ったものではなかったらしいし、自由を求めていた。

そんな事を考えていると、承一郎がやって来た。

承一郎「よかった、二人共無事ですか？」

陽乃「ええ、大丈夫よ」

雪乃「それにしてもこの世界：ちよつと技術が進み過ぎじゃあないの？」

承一郎「確かにそうかもしれない：この世界だと多分それが異変なのかもしれませんがね。とりあえずジオルノ兄さん達がボスの始末を成功したのでLZに移動しましょう！」

雪乃「ええ！」

陽乃「承一郎、その前にちよつといい？」

承一郎「なんですか？」

陽乃「この子：連れて帰ってもいい？」

陽乃が指差した先には、バラバラになったLQ—84iがいた。

承一郎「確か：LQ—84i：でしたっけ？」

陽乃「ええ：この子、ただの人工知能じゃあない。本当の『知性』に近い気がするの。それにこの子には自由はなかった：解放したいのよ」

承一郎「：分かりました。ようこそ、天国アウター・ヘブンの外側へ」ズギン！

LQ—84iは承一郎の『ブラッディ・シャドウ』の空間に消えた。その行き先は兵

士達の楽園、自由を勝ち取れる場所だ。

承一郎「急ぎましょう、パック達が車を用意しています。それでLZに！」

パック「ジョジョ、急げ！間も無く残党共がこっちに来る！」

承一郎「分かったパック、急いで乗って下さい！」

承一郎達を乗せた車は川沿いに進む。

パック「ありがとうジョジョ、これでポリビアの農家達はコカの葉を作らずに済む！

革命は成功だ！」

承一郎「それはよかったな、パック！LZまで頼む、僕達が離脱した後は『水晶の牙』のスタッフ達がサポートと後始末を行うよ」

パック「ありがとう友よ、あんたはやはりVICBOSSだ！」

承一郎「：VICBOSSか……」

人を殺して得た呼び名、いや、もう称号と言つてもいいくらいだ。

人殺しが正当化される理由はない。正当化される時代もない。承一郎は自分の功績を残そうとしているんじゃない。

一時は思つてしまった。母を、親友を殺したこの世界に復讐してやろうと。しかし今はそう思う事はない。

たくさんの人と出会い、語り、恋をして……。自分には守るべきものが出来た。

だから、守り抜く。自分の手が届く範囲でいい。偽善者と呼ばれても、人殺しと呼ばれても。

大切な人を守るためなら、堕ちてやろうと。神を殺し、悪魔に魂を売り渡しても。

ふと物思いにふけっていた承一郎だったが、突然聞こえてきた地響きに意識を現実に戻した。

承一郎「パック！なんだいこれは!?!？」

パック「分からない、だがこれは…川の方からだッ！」

パックが言った瞬間、突然巨大な黒い塊が水中から飛び出した。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

野生の掟 (Rules of Nature)

巨大な赤黒い塊は水中から飛び出し、近くの車を数台踏み潰しながら着地した。

承一郎達の乗った車も、その中の一台だった。

承一郎「危ないッ！『世界』^{ザ・ワールド}!!？」

ドオオオオoooooooooooooo——ん!!？

承一郎は初めて八幡の『ザ・ワールド』を使い時を止めた！

承一郎「くっ…！停止時間が三秒だけとは…！だが皆を車から脱出させるには十分！」

承一郎は陽乃達を車から脱出させ、少し離れた場所に移動する。

承一郎「時は動き出す…」

時が動き出し、巨体がバキバキイ！という音を立てながら車を踏み潰す。

陽乃「…ハッ！承一郎、まさか時を…!!？」

承一郎「はい、三秒だけですけどね…八幡は八秒だったのに…」

パツク「ジョジョ、これは…？」

承一郎「パツク、君は早く他の反乱軍達と避難をッ…！」

パック「…済まない、この礼は必ずする！」

パックはそう言って避難した。

その巨大な赤黒い塊はさつき戦ったカムシンのボディの数倍を大きく、見上げるほどだった。

だが、承一郎はこの巨体を知っていた。

承一郎「クソツ、これは：『RAY』ッ！」

陽乃「知ってるの、承一郎？」

承一郎「ええ、こつちの世界で開発された二足歩行兵器ツ…！しかもコレはAI無人操縦型だ！」

アメリカの海兵隊マリーンズが開発した、大型無人機。現在ではその応用として『月光』やサイボーグ技術が発展した。

この二足歩行無人機の特徴は、人工筋肉だ。最近ではカーボンナノチューブ筋繊維によつて兵器とは思えないような人間に近い動きを再現出来るようになってる。

雪乃「ウソでしょ…この大ききさつて…」

承一郎「二人は先にLランディングゾーン Zで退避を！」

陽乃「承一郎は？」

承一郎「…僕が斬る！」スラアッ！

承一郎は『村雨』を抜き、水圧カッターを帯びさせる。

陽乃「さすがにこの大きさは無理よ！私もやるわ！」

承一郎「陽乃さん、なら聞きますがあなたの能力は対人向きの能力だ。こんな大型兵器に対応出来ますか？」

陽乃「っ……！」

承一郎「僕が思うに、あなたの能力で上がるパワーは最高でも人間が発揮出来るパワー限界まで。そんなあなたが挑んでも、挽き肉ミンチが出来上がるだけですよ」

陽乃「でも……！」

承一郎「少しは信用して下さい。伊達に『不可能を可能にする男』と呼ばれてませんよ」

陽乃「…分かったわ、無理はしないでね」

承一郎「死なない体を持つ男に言うセリフじゃありませんよ。…それに、彼女達を残して逝くわけにはいかない！」

無人操縦型兵器RAYが咆哮を上げる。その咆哮は実は機体の金属部分が摩擦で軋む音が重なり合って咆哮のように聞こえるのだ。

ジョニイ「フン、海RAの王者AYごときが。生物界吸の頂点血にケンカを売るとどうなるか、教えてやろうっ！」

BGM『Rules of Nature』

ダダダダダッ!!?とRAYの両腕部の機銃が発射される!

ジョニー「フツ!」キーン!キーン!

ジョニーはRAYに向かって走りながら機銃から発射された弾丸を叩き落とす。

接近してくるジョニーに対して、RAYは頭部の口腔部を開く。次の攻撃は恐らく水圧カッターだろうと予想したジョニーだったが、それは外れだった。

キュイイイイン…ツ!!?

ジョニー「こ、これはツ…!!?」

RAYの口腔部が赤く光り、承一郎に向けられた。

ドグオオオー————ン!!?

RAYの口腔部から巨大なプラズマ砲が放たれ、周囲の建物を吹き飛ばす!

ジョニーは一瞬早くRAYが向けた頭部から横っ飛びで回避してどうにかなった。

八幡「クソツ、なんて威力だ!」

カズ『大丈夫か、ボス!どうやらそのRAY、水圧カッターがプラズマ砲に改修されているぞ!』

ジョニー「プラズマ砲とはロマンがあるな!良いセンスだ!」

オセロツト『そんな事を言ってる場合か!まずは奴の脚を止めてくれ!』

「ジョニー「了解、くらえ膝治療ッ！」

ジョニーは『村雨』の水圧カッターで膝を徹底的に斬る。RAYはそれをやめさせようとしてミサイルを発射するが、『村雨』の水圧カッターで迎撃する。

ジョニー「今だ、支援攻撃開始！」

カズ『了解！』

そこから数秒後にドンッ！ドオン！RAYの体に次々と爆撃が襲う！

RAYの機体が軋み、咆哮のような音が鳴る。

ジョニーは圧倒的な速度で走り、RAYへ接近。

RAYはミサイルをジョニーに発射、地面に突き刺さる。

地面に突き刺さったミサイルが時間差で爆発する！ジョニーは爆発を回避、RAYの脚元へ向かう。

RAYは片腕を振り下ろす。その腕には、ブレードが装着させている！

オセロツト『ボス！ブレードを受け止めろ！』

ジョニー「無茶を言うな！」

ジョニーは『村雨』で巨大なブレードを受け止める！

ジョニー「ぐっ…！ハアッ！」

ジョニーはRAYのブレードを弾き返す！

ジョニイは『村雨』の水圧カッターで切断、腕の機銃を切断する！

RAYはジョニイを捕らえようと頭部で攻撃するが、ジョニイは『村雨』で受け止め、頭部の装甲を逆に斬り崩す！

RAYは後方に跳躍、そして、ミサイルの雨を降らした！

ジョニイ「この野郎、テメエからケンカふっかけといて逃げるんじやあねえッ！」

ジョニイは空間を使って跳び、信管を切り裂きながらRAYのミサイルからミサイルへ飛び変える。ミサイルや榴弾は安全管理上、信管が無ければ爆発しない！ジョニイはそれを知っていたのだ！

八幡『なんて度胸だ……。信管を切り裂けば爆発しないと知っていても、そんな手段に出るなんて……。やっぱりただ者じゃあないな』

承一郎『前は戦車部隊を全部フルトンで回収した事もあったからね。問題ないよ』

ジョニイはそのままRAYに接近、装甲を斬り崩して、

ジョニイ「無駄アッ！」

スパアアアンツ……!!?

もう片方の腕も切断した！

さすがに無人機も力尽きたのか、RAYが倒れる。ジョニイは『村雨』を鞘に納める。しかし、RAYの一度消えた眼光は再び光り、ジョニイを口腔部で捕らえる！

「ジョニー「何ッ!?」」

八幡『野郎、まだ動けるのかよ!?』

ジョニー「野郎、食らってくだばりやがれッ!」ドスウッ!

ジョニーはRAYの頭部に『村雨』を突き刺す!水圧カッターがRAYの頭部を内側から崩壊させていく。

RAYは堪らずジョニーを近くの時計塔へ投げて叩きつける!ジョニーが叩きつけられた時計塔は、上部が崩壊する。

ジョニー「ぐはっ!」

承一郎『大丈夫かいジョニー!?』

ジョニー「ああ、お前の骨の鎧でどうにか無事だ」ピキピキ…

時計塔が崩れ落ち、瓦礫が落ちてくる。

ジョニー「まずは…あのRAYを両断してやるッ!」

ジョニーは時計塔の下で待ち構えるRAYに向かって疾走する。

RAYはミサイルとプラズマ砲で迎撃するが、ジョニーは崩れ落ちる時計塔の瓦礫で回避する。

ジョニーはRAYの頭部に飛び乗り、『村雨』を掴む!

ジョニー「信乃、力を貸してくれ!全開だ!迸れ『村雨』エッ!!?」

水圧カッターの勢いがより強力になり、RAYの頭部からボディの一番下まで一気に貫く！

そのままジョニーは『村雨』をRAYに突き刺したまま尾の部分まで走り抜ける！
ジョニーは着地し、『村雨』を鞘に納める。

次の瞬間、RAYの機体はずれ、真つ二つに分かれた。

ジョニー「…やれやれ、任務^{ミッション}クリアだ！」

こうして、波乱のミッションは終了した。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

いきなり戦車部隊フルトンして悪い？

ジヨルノ「おはようございます、カズヒラさん」

カズ「ああおはよう、俺の事はカズでいいのに」

ジヨルノ「一応承一郎が世話になってますから。…それより承一郎は？」

カズ「ボスカ？ボスはな…アフリカだ」

ジヨルノ「…え？」

カズ「『…え？』って言われてもな…今戦車部隊を全機フルトン回収してるんだ…反政

府ゲリラの支援バックアップで…」

承一郎はアフリカの大地を母、理那の愛馬アンダルシアンに乗って戦車と並走していた。
た。

承一郎「フルトンパーアンチイッ！」ベシッ！

承一郎は並行している戦車に向かってフルトン回収装置を叩きつけ、起動させる。

バシユッ！という音と共にバルーンが戦車を持ち上げ、空高く飛んでいった。

承一郎「…よし！」

八幡『いや「…よし！」じゃあねえだろ！』

承一郎「え？何で？」

八幡『何でって…お前話が始まってからの第一声が「フルトンパーンチッ！」だぞ？色々やバいだろ?!?』メメタア！

承一郎「そんな事君に言われる筋合いはないよ！ちよくちよく感想欄に殴り込みを仕掛ける君には！」メメタア！

承一郎は急にアンダルシアンから降りてRPG（ゲームのジャンルではない）を構えて正面に撃った。RPGは『ブラッディ・シャドウ』の空間に吸い込まれていった。

オセロツト『ボス伏せろ、敵の戦闘ヘリだ…』

ヒユウウウ…!!?ドゴオオオンツ…!!?

オセロツトが言う間もなく戦闘ヘリは墜落した。『ブラッディ・シャドウ』の空間から出現したRPGが命中したようだ。

オセロツト『…言う必要はなかったようだな』

承一郎「カズ、さっきのヘリの分も報酬が発生するか？」

カズ『ああ、ゲリラ達にとっては脅威、報酬は弾むぞボス！』

承一郎「了解、とりあえず帰投する。ピークオドをLZへ」

カズ『了解！』

こんな感じで反政府ゲリラの支援は戦車部隊を全機フルトン回収する結果に終わった。

承一郎「…ふう、疲れた」

オセロツト「ボス、お疲れ様。まったく、我らがボスは本当に魅せてくれるな」

カズ「本当だ。戦車部隊を全機フルトン回収で我が部隊へ、しかもヘリを即座に撃墜させるなんてな。ボス、あんた最高だ！あんたなんなんだ！」

承一郎「おいおいカズ、そんなに褒めても何も出ないぞ。それより、皆が起きたんだ。そろそろ次の任務の要旨説明を」

カズ「よしきた！」

カズ「…さて、次の任務はテロリストに占拠されたアブハジアの首都、スフミの奪還だ。テロリストは大統領と多くの官僚を殺害し軍事政権の樹立を宣言している」

カズ「国民は高官がブレインバックされて混乱に陥り、敵のサイボーグ達により潰走…生き残った政府の代表は俺達に事態の解決を依頼した」

承一郎「了解、この国とはまだ関係を持っていなかったからね。いい機会だ」

マザーベースの抑止力は実に様々だ。『情報』と『制御』を操るカズとオセロツトによ

る拠点の場所を調べなくさせたりする事もだが、報復も抑止力の一つとなっている。

信乃の刀、『村雨』が生み出す濃霧から襲いかかる髑髏部隊スカルズも抑止力となっているが、それだけではない。

各国との依頼した際にカズや諜報班がその国の表には出せないような情インテリジェンス報などを握り、それを保険としておくのだ。

オセロット「テロの首謀者アンドレイ・ドルザエフはこつちの世界で2010年のロシア地下鉄爆破事件、昨年のグルジア連続テロにも関与し国際指名手配を受けている」
オセロット「そして、彼に武力を提供しているのがデスペラード社だ」

カズ「詳しい情報を端末に送るぞ」

承一郎が持った端末をカズの持ったコードに差し込む。

ロードが完了し、情報が空中に投影された。これが空中投影式の情報端末iDROIDだ。承一郎がマザーベースに不在の時はこれ一つでマザーベースの方針などを決めてる。

八幡『この世界って結構技術進んでるな…サイボーグとか高周波ブレードとか…』

承一郎『今度データ渡しておこうか？そつちの世界でも作れるものはあると思うよ』

承一郎「…さて、それじゃあ出発しましょう。今回の任務は僕とあと一人か二人…誰か来ます？」

ジョルノ「今回は全員で行かないのかい？」

承一郎「前回は反乱軍もいたので隠れるもクソもありませんでしたが、今回は国際問題が絡んでくるデリケートな任務です。最悪の場合、スフミにある石油精製プラントを巻き込んだ自爆をもやりかねません」

ミスタ「なるほど、そのために潜入スニーキングする事が必須つてわけか」

承一郎「そうですね。：というわけで、誰が行きます？」

雪乃「私が行つてもいいかしら？」

意外な事に、雪乃が手を挙げた。

雪乃「私の能力、あなたの能力に似ているつて兄さんから聞いているの。前回は見る機会がなかったけど、今回はあなたの能力の使い方参考になるものが見られるかもしれないから」

承一郎「なるほど、他にいますか？」

ミスタ「じゃあ俺も行くぜ。最悪の場合プラントごと自爆するかもしれないんだろ？それなら俺の『ピストルズ』が役に立つハズだ」

承一郎「分かりました、それでは行きましょう」

アブハジア、スフミ――

承一郎達はピークオドでスフミの海岸沿いに着地した。

承一郎「潜入成功、これからドルザエフを見つめます。iDROIDを」
ブオン！という音を立て、地形が空中に投影される。

承一郎「こちら毒蛇、周囲に敵はいない。ルートの確認をもう一度しよう」

カズ『了解、作戦前に伝えた通り、敵の本拠地は海岸沿いの石油精製プラントだ。衛星写真でドルザエフの姿も確認されている。デスペラード社の指揮官、ミストラルも同じ場所にいるようだ』

承一郎「プラントへの侵攻ルートとしては市街地から橋を渡り旧市街地を抜け、プラントの奥手へ回り込む…」

ミスタ「了解、じゃあ敵には出来るだけバレないように移動するか、暗殺すればいいんだな？」

承一郎「はい、その通りです。ではこれを」

承一郎は雪乃とミスタに一つずつダイヤモンドを渡した。

雪乃「このダイヤモンドは？」

承一郎「死んだ仲間達の遺灰から僕の能力で創ったダイヤモンドです」

雪乃・ミスタ「!!？」

承一郎「僕の能力が込められているので、ヤバい時に二人の役に立ってくれます。さ

て、行きましょう」

承一郎がパチン！と指を鳴らすと、ダイヤモンドがピキピキと二人の体を覆っていき。

ミスタ「なるほど、前の骨のプロテクターってこのダイヤモンドを使ったものだったのか」

承一郎「そうです、それでは…ムーブ！」

キング・クリムゾン!!？

市街地をある程度進んだ所に着き、石油精製プラントが見えてきた。

承一郎「あそこが石油精製プラントです。恐らくあの辺りにドルザエフがいると思われます」

そう言いながら承一郎は双眼鏡を取り出してスタンド越しにプラントを見る。

承一郎「…かなりの数のサイボーグ達がいますね。ドルザエフは…いました。…ん？あの女は…」

承一郎はプラントにドルザエフを見つけたが、その隣にいた高身長的女も見つけた。顔はこちらに背を向けていて分からない。

突然、ドルザエフが女に向けて銃を向けるが、その後銃をしまい去って行った。

承一郎はドルザエフに双眼鏡を向けようとするが、女が振り返ってプラントの柵に肘

をついてこちらを向いた。

承一郎「…？」

女はいきなりこつちに投げキッスをしてきた。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

承一郎（この女、気付いているツ…?!?!）

承一郎はすぐさま『村雨』を引き抜き戦闘態勢に入る。二人も異変に気付き戦闘態勢に入る。

雪乃・ミスタ「…ツ!!?!？」

カズ『ボス、どうしたんだ？』

承一郎はプラントの女を確認しようとするが、姿がない。どうやら移動したようだ。

承一郎「…心配ない、狙撃は回避した。このままプラントに向かいます」

承一郎は崖を飛び乗る。途中から崖を纏った骨が創り出した鉤爪でガリガリガリ！と減速しながら降りた。雪乃とミスタもそれに続く。

雪乃「なるほど…こんな使い方も出来るのね」

承一郎「ええ、後は周りの景色と色を同化させたり足に刃を作って下に刺して足場を安定させたりと色々使い方はありますよ」

ミスタ「そういえば承一郎、お前の技術とかって…」

承一郎「はい、戦場で身につけました。あの頃は…ひたすら力を求めていた時期でしたね」

ミスタ「そうか…」

承一郎「…さて、それじゃあここからは二手に別れましょう。早くしないと僕達の侵入が気付かれるかもしれない」

雪乃「分かった、じゃあ私はミスタさんと一緒に行くわ。近距離戦のカバーをするわ」
承一郎「分かりました、気を付けて」

キング・クリムゾン!!?

二人と別れて数時間後、日が沈み闇が支配する。

承一郎は気配を周囲と同調シンクロさせてサイボーグ達の巡回をすり抜けてプラントの屋上へ向かう。

しかし、そこにいたのはさつき承一郎達に気付いた女だった。

< || to be continued ||

フランスの冷たい突風（ミストラル）

？「待つていたわ、毒蛇ヴァイパー」

プラントの屋上、そこで待つていたのは承一郎に投げキッスをしてきた女だった。

承一郎「…ドルザエフはどこだ？」

承一郎はあえて言われたのを無視して質問する。

？「つれないわね。レディより男を選ぶの？」

承一郎「デスペラードの指揮官、ミストラルだな？」

ミストラル「あら、あなたほどの男に知ってもらえるなんて光栄ね。その通り、私は

ミストラル。フランスに吹く冷たい突風……」

ミストラルを象徴するかのような冷たい風が吹いた。

ミストラル「あなたの事は聞いているわ。四年前にあらゆる内戦に突如現れて傭兵達を圧倒的なカリスマで纏め上げた傭兵の王。そして『堕ちた英雄』ザ・ボスの息子……」

承一郎「母を侮辱するな。それだけは許さない」

承一郎の中では侮辱というものは一番の禁句タブーだ。よりによって母である理那の事は絶対に。

ミストラル「私はアルジェリア生まれよ、フランス人の血も半分入ってる」

承一郎「ほう？」

ミストラル「アルジェリアでは90年代に内戦が起こった。どう？似てないかしら私達」

承一郎「あんなになにが…」

ミストラル「私は、家族も何もかも失った」

承一郎「……」

ミストラル「ぶち殺してやったわ…犯人をね。それで気付いたの、私にも人殺しの才能があるって事にね」

承一郎はミストラルを自分と重ね合わせていた。母を、親友を殺した黒幕を殺したら、復讐を果たしたら、その後何が残るのだろうか。

承一郎は守るべき人達と出会えたから今こうしてここに立っているが、何も残らなかったら…彼女のように復讐の矛先を世界に向けていたかもしれない。

彼女ミストラルは、承一郎の未来の可能性の一つかもしれないと、そう思ってしまった。

ミストラル「この仕事PMCは天職だった。イラクでもアフガンでも大勢殺した」

承一郎「自慢げに話す事か？」

ミストラル「ただの事実よ。…でもね、退屈だったの」

ミストラルはコートを脱いで、サイボーグのボディをあらわにする。

承一郎は別に興味はないがカズが『すごい巨乳だな!』と無線から騒いでいる。カズよ、少しは自重しろ。

ミストラル「私の前で敵は自動的に死んでいく。身の危険と感じた事もない。それに、私には目的もなかった」

ミストラルの後ろのパイプから丸い胴体に三本の腕が生えたような無人兵器、仔月光の群れが現れた。

ミストラル「ただ仕事として敵を殺すだけ。使命に殉じている敵が羨ましいくらい。そんな時あの人に出会った」

仔月光の一機が後ろから襲いかかってくるが、承一郎は振り向かず仔月光を『村雨』で斬る。

承一郎「…誰の事だ？」

ミストラル「あなたの知らない人。彼が理想をくれた…理想というものは心地よいものね」

ミストラルが斬られた仔月光を撫でる。

ミストラル「…あなたは？理想はあるの？」

承一郎の理想、それはとつくに決まっていた。彼女達に出会い、あの日常を守りたいと思った。そして：

承一郎「僕は…弱者を守る」

ミストラルは仔月光の三本の腕の内二本を両手で持った。

ミストラル「下らない」

そして、もう一本を足で踏み付けて腕を引きちぎった。

ミストラル「理想ね」

仔月光が取られた腕の箇所からスパークをあげる。

承一郎「…そのために敵に容赦はしない。あんたみたいな女でもな」

ミストラル「…ふーん」

ミストラルは仔月光の丸い胴体を踏み付け、砕いた。

ミストラル「失望したわ、毒蛇」

承一郎「そいつは光栄だ」

ミストラル「仕方ないわね、我が理想のために死んでもらう！」

ミストラルが仔月光の腕を繋ぎ合わせ、一つにする。

仔月光達がミストラルの体にまとわりつき、自分のアームを引き抜き、ミストラルの

背中にマウントしていく。

そして、ミストラルは千手観音や女郎蜘蛛のようにアームが何本も付いていた。

承一郎は『村雨』を抜刀した構える。

ミストラルが太腿のナイフをアームに持たせると、アームが次々と他のアームへ渡していき、ミストラルが持つ仔月光の腕を繋ぎ合わせたポールウエポン、エトランゼが掴んだ。

ミストラル「おいで、坊や！」

BGM『A Stronger I Remain』

ミストラルのエトランゼが承一郎へ迫るが、承一郎はそれを凌ぐ。途端に仔月光達が襲いかかるが、承一郎が次々に斬っていく。

承一郎「シッ！」

承一郎は横に回り込み、ミストラルを斬ろうとするが、

ガシッ！と背中にマウントされたアームが白刃取りをする！

承一郎「なっ…!!？」

ミストラル「すごいでしょ？こんな事も出来るのよ？」

他のミストラルのアームが承一郎に掌底を叩き込む。

承一郎「ぐっ！ハアッ！」

承一郎は掌底をくらいながらも水圧カッターで白刃取りをしていたアームを斬って距離を取る。

ミストラル「ハアツ！」

ミストラルのエトランゼを承一郎が防ぐ。そしてそのままギリギリと膠着する。突如、ミストラルのエトランゼがグニョン！と曲がった。

承一郎「いつ?!？」

ミストラル「フンツ！」

突然の事でバランスを崩した承一郎をミストラルがエトランゼで攻撃するツ！

承一郎「ぐあっ！」

エトランゼはそのまま承一郎の足を掴む！

そう、ミストラルのエトランゼは仔月光の人工筋肉アームが複数連結した武器。つまり、さっきのような柔軟な動きも可能なのだ！

ミストラルは承一郎を掴んだエトランゼを振り回す！

承一郎「くっ……！このっ……！」

承一郎は振り回しているエトランゼを切断する。パイプに向かって突っ込む承一郎だが、パイプを掴んでそのまま一回転、

承一郎「スネークキークツ！」

遠心力を使ってライダーキックをお見舞いする！この掛け声を素でやってのけるのが承一郎である！

ミストラル「ぐあっ！」

ミストラルはキックの威力で吹っ飛ばされる。承一郎はそれを追う。

ミストラルはパイプにしがみつき、承一郎は着地した。

ミストラル「気持ちよくなってきたわ！」

ミストラルはパイプから柱に飛び乗り、側にいた仔月光のアームを引き抜いて斬られたエトランゼに連結させる！

承一郎「なるほど、仔月光がいれば破壊されても換えがきくって事か！」

ミストラル「その通り、私からのプレゼントよ！」

ミストラルは全てのアームが引き抜かれた仔月光達を爆弾として承一郎へ飛ばす。

承一郎は一機ずつ切断していく。

ところが、前に集中していた承一郎の背後から、仔月光達が襲いかかる。

承一郎「何ッ!?」

仔月光達は承一郎の体にしがみつき、電撃を浴びせる！

承一郎「ぐあっ！」

承一郎の体に黒い仔月光達が覆い被さり、一斉に電撃を浴びせる。しかし、

承一郎「闇を破る雷光ツ！」

承一郎の体が光を放ち、仔月光達に電撃を放った。

八幡『すごいな！なんなんだ？』

ジョニイ『体細胞から発生される生体電気を直列にして放出、放電する技だ。吸血鬼の細胞は人間よりも強力だからな。前に承一郎が「吸血鬼の技でオリジナルの技を作りたい」って言ってるよ。最高電圧は60000ボルトだ』

ミストラル「へえ、面白い技を使うのね」

ミストラルの背中にマウントされたアームがムチのように承一郎の足元に伸び、収縮する事によってミストラルが承一郎に迫る！

承一郎はミストラルの一撃をどうにか防ぎ、距離を取るが、ミストラルのエトランゼがしなり、一気に伸びた。

承一郎『ブラッディ・シャドウ ツ！』

承一郎は『ブラッディ・シャドウ』で背後に避けて回り込み、ナイフを投げるが、ミストラルのアームが掴み、逆に投げ返す！

承一郎はそれを弾く。

承一郎「あんたのスタンド能力、ダブルシンク二重思考よりもさらに上、マルチプルシンク多重思考といったところ

か！」

ミストラル「あら、私のスタンド能力が分かったの？それがどうしたの？」

ミストラルのアームが一齐にナイフを構え、投げる。承一郎はそれを避けるが、その先を読んでいたようにミストラルはナイフをアームで投げながら迫る！

ミストラル「こつちよ！」

ミストラルのアームが一気に伸びてパイプを掴み収縮、パイプに突撃する。ミストラルはパイプから降りていく。

承一郎も壊れたパイプからパイプへ飛び乗り、プラント内部へ降りる。

ミストラル「ここに終わりにしてあげるわ！」

仔月光達を従えたミストラルのエトランゼが地面に潜り、承一郎に迫る！

承一郎は回避、仔月光達を斬りながらミストラルへ攻撃する。アームはまた白刃取りを行うとするが、剣速が加速する。

ミストラル「なっ!?？」

承一郎はミストラルのアームを『村雨』の水圧カッターで切断する。

ミストラル「これで…終わりよ！」

ミストラルがエトランゼを振りかぶる。承一郎はそれを防ぐ。

『村雨』を滑るようにミストラルへ鏢迫り合いで寄せて、弾きながら柄の部分を顔面にお見舞いする。

ミストラル「くっ……なめるなガキめ！」

ミストラルはエトランゼで承一郎を刺そうとするが、承一郎は目の前のタンクを足で登るように一回転して回避、エトランゼはタンクに突き刺さる。

承一郎「ハアッ！」

承一郎はエトランゼの上に乗る、そのタンクを『村雨』で斬り裂く。そのタンクには液体窒素が入っていたようで、エトランゼを抜こうとしているミストラルを氷漬けにした。

承一郎「斬ッ!!？」

承一郎は氷漬けになって身動きの取れないミストラルを滅多斬りにする。

最後の一撃によって、ミストラルの体は粉々に粉碎した。

戦えなかつた者からのささやかな償い

ドルザエフ『どうした、ミストラル?!? バイタルサインが消えかけている!』
 ミストラルのバラバラになった破片の中から声が聞こえる。無線機からドルザエフが話しかけているようだ。

ミストラル『負けたわ…これが…殉死というものね…』

ドルザエフ『なんだと?!?』

ミストラル『悪くないわ…理想のために死ぬのは…』

ドルザエフ『待て、死ぬな!』

ミストラル『ごめんなさい…あいつを倒せなくて…』

ドルザエフ『謝って済むか!俺はどうなる?!?』

ミストラル『でも…私には分かる…。あなたが…負けるはずは、無い…』

ミストラルはドルザエフではない、誰かに言っているのだ。おそらくミストラルが言っていた『あなたの知らない人』なのだろう。

ドルザエフ『何を言っている?!?』

ミストラル『*Je t'aime de mon coeur* 心から愛してる…』

ここにいない誰かに愛の言葉を囁いて、ミストラルはこの世から永久退場した。

ドルザエフ『ジユ、ジユチーム？ミストラル：お前…』

まずはこの勘違い野郎をどうにかするかと承一郎は無線機を取った。

承一郎「あんたの事じゃあないと思うぞ、多分」

承一郎は無線機を取ってドルザエフに言った。

ドルザエフ『貴様！よくも彼女を！血に飢えた殺人鬼め！』

承一郎「どの口がそれを言う？あんたの負けだ、投降しろ」

ドルザエフ『ハツハツハツハツハハ、頭を使えよ！』

ドルザエフはムカつく笑い方で承一郎をバカにする。

承一郎「なんだと？」

ドルザエフ『ハツハツハツハハ：誰が投降などするか！まだ最後の手段がある』

承一郎「…まさか!?？」

承一郎はプラントの方へ向かう。

ドルザエフ『このプラントはロシアの金で作られたアブハジアへの手綱、こいつを

ぶつ飛ばせばどうなる？』

承一郎が見たプラントには、ドルザエフが立っていた。

ドルザエフ「我が理想のために！ППОШАНТЕさらば！」

だ」

ミスタ「お前はミストラルが倒されたらプラントを道連れに自爆する事は予想されていた。俺達はそれの阻止を、承一郎はミストラルの排除を担当していたんだぜ」

ミストラルがドルザエフにこつちが三人だって言っていないかは賭けだったが、上手く事が進んだ。

雪乃「私は爆発物を冷却出来るからそれも担当していたのよ。適材適所ってやつかしら？」

承一郎「とりあえず、これで任務は完了です。ドルザエフは後で国際刑事警察機構ICPOに引き渡して一件落着ですね。カズ、ピークオドをLZへ」

カズ『了解！』

マザーベース——

承一郎「お疲れ様でした、今日は休んで下さい。明日も次の任務がありますので」

陽乃「じゃあ雪乃ちゃん、早速お風呂行こうよ！サウナもあるって！」

トリツシユ「そうね、留美ちゃんもお風呂に入りましょ？」

承一郎「ああ、なら分らない事があつたらエヴァに聞いて下さい。多分彼女も今は風呂に入っていると思うので」

ジヨルノ「…それにしても、風呂やサウナまであるなんてね」

ミスタ「まるで宿泊施設だな。よくこれだけの組織を創ったもんだぜ」

承一郎「ここは元々廃棄されていた海洋プラントだったんですけど、プラントの所有国の任務の報酬として貰った物を改修したんです」

？『ほう、興味深い話だな』

急に機械音かかった声が入りこえてきた。

承一郎「やあ、どうだいウルフ？新しいボデイの調子は？」

麻薬組織のボス暗殺時に陽乃に破壊、承一郎に回収されたLQ—84iのAI部分は、クリスタル・フアングの研究開発班によつて新しいボデイが与えられていた。

ブレードウルフ（以下ウルフ）『悪くない。さすがはVICBOSSの部隊、デスペラード社に勝るとも劣らない技術力だ』

ウルフは司令部プラットフォームの上部から跳躍、ガシャン！という音を立てて着地する。

承一郎「そうか、ウチは無人機の開発は進んでないけどそれは良かった。遠隔での操作や意識の消去は不可能にしてあるよ」

ウルフ『この俺に新しいボデイだけではなく自由まで与えてくれて感謝する』

承一郎「僕に解放してくれと頼んだのは陽乃さんだ。僕は頼まれてやっただけさ。礼

なら後で陽乃さんに」

ウルフ『了解した』

承一郎「それに、自由は押し付けるものでも与えられるものでもない。勝ち取るものさ：ようこそ、天国アウター・ヘブンの外側へ」

ウルフはプラットフォームを歩いていった。

ジヨルノ「：驚いた、いいのかい？あのまま放っておいて」

承一郎「大丈夫ですよ、彼には知性がある。この海で囲まれた基地で下手な真似はしないと思います。僕は彼はそんな事をしないと信頼しています。それに…浪ウルフドッグ犬の世話
は山猫オセロットの担当です。：まあDDと同じく子供達のマスコットになるのは目に見えてるけど…」

ウルフ『毒蛇！助けてくれ！』

噂をすれば影というか…ウルフは子供達に色々といじられているのは…気のせいかな？隣でDDもほっぺぐにぐにされてたり肉球もふもふされている…。

子供達「あ！ぼすだー！」「ぼすー！おすしおいしかったー！」

内心自分もやりたいと思うのを堪えながら承一郎は無邪気な子供達に手を振る。

子供達全員が少年兵や戦争孤児だ。親を殺され、勉強にまともに受けられない環境の子供達をここでは保護、生きるための知識などを教えている。

承一郎「そういえばそつちの世界は大変な戦いがあつたみたいですね……すみません、戦いがあつたのを気付かずに……。僕も戦っていたら八幡も今のようにならずに済んだと思うと……」

ジョルノ「……承一郎、多くの戦場を渡り歩いた君なら分かるだろう？ そんなもしもIFなんて考えたつて無駄だという事を」

承一郎「はい……ですが、悔しいんです……。仲間達が戦っているのにも気付かず過ごしていた事が……」ギユツ！

悔しさと共に承一郎の拳に力が入り、皮を突き破り血が出ていた。

承一郎「……すみません、少し夜風に当たつていきます」

コツコツという音を立てながらプラットフォームを歩く。

承一郎『……八幡、後で君に体を貸そう』

八幡『いいのか？ 承一郎』

承一郎『僕は君を助けられなかった。だから、それくらいさせてくれ。言つておくが、僕の体だから一線は超えるなよ？』

八幡『……ありがとう』

承一郎「決戦の場に立たなかった僕からの……せめてもの償いさ」

承一郎はそう言いながら葉巻を啜えて火を点けた。

く八幡 side)

よお、何気にこつち側で初めて俺視点になった八幡だ。↑メメタア!

承一郎『君っていつもメタいよね?』

気にするな。いつもの事だ。さて、久しぶり皆と話したいしな。

俺は早速あいつらの所へ向かう。海風が心地いい。

承一郎『ついでにサービスだ。持ってけ泥棒』

歩きながら承一郎の体を骨が覆う。覆われた姿は…

八幡「俺の…姿に」

そう、魂が碎ける前の姿になった。手鏡を見ると、懐かしの我が腐り目が。あれ?それほど懐かしくないはずだよな?なんか二日くらいしか経過してないはずなのにもう2、3ヶ月は経っているような…。↑メメタア!

承一郎『さあ、行って来い八幡。一回皆と話して、覚悟を決めろ』

八幡「おいおい。勘違いしてるようだが、覚悟を決めた先があれだったんだ。お前でも、あの状況はどうしようもない…ああする以外は方法がなかった。犠牲になったわけじゃあない。全滅よりかはましな結果を取っただけだ。ついでに言えば覚悟を決めるのはお前だこのボケナス!」

承一郎『へ?』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

俺は四年前に自己紹介したときに承一郎が傭兵と言ったときに一兵士だと思っていた。そしたならば総司令と来たものだ。大した奴だと思った……が、とんでも無かった! 何で総司令が一兵士の戦いをやってんの!?

承一郎『いや、どうも後ろでふんぞり返ってるのはちよつと……』

八幡「アホか! 今はこの作戦に全力を注いでいるならなおさら全般指揮に力を入れろよ! リアルタイムで情報を加味して戦術練れよ! ふんぞり返ってるだけだと思ってるんじゃない! むしろ一番責任重いわ! なに責任から逃げてんの! ? そりゃ一兵士としては大した戦果だが、司令官としては最低だわ! 」

ほんと、そこ。指揮官が歩兵をやるとかありえんから。

承一郎『ぐう! 』

八幡「まあ、お前なりに一生懸命だったんだろうが、お前はここの司令官だ。立場に見合った仕事をしろよ? 」

実際は他にも色々あるんだが……。生きていたから目を瞑ろう……。瞑ってる領域が広すぎるがなあ!

八幡「…明日はジョルノに指揮を執らせる。そう言うのは一番慣れてるからな」

厳しいことを指摘した反省だ。俺も怒られてくるか。

陽乃「八幡くん……！」

陽乃さんは涙をこぼしながら俺に抱きついてくる。そして顔を近づけるが、俺は制する。

八幡「待つてくれ、陽乃さん。この体は承一郎のなんだ。外見は骨の鎧の応用らしい。だからキスはアウトだ」

それに、俺の一番はいろはだ。元に戻ったときはまずはいろはとだ……。

陽乃「ホントに……ホントに八幡くんなのね……？」

ポロポロと涙が溢れる陽乃さんの頭を撫でる。おいおい。魔王はるのんはどこへ行ったんだよ。

けど……助けられてありがとう……。それしか感謝の言葉が浮かばない。

ミスタ「承一郎のやつ、ホントに粋な奴だな。さすがジヨルノの弟だ」

ジヨルノ「そうだね。世界は違えど、彼は僕の弟だよ。だけど八幡……彼は……」

八幡「ああ。わかってる。明日の総指揮はお前に任せるように進言した」

ジヨルノ「僕がやるのは普通の用兵だよ。それにスタンドの力を加味させたものだけど良いのかい？」

八幡「まあな。とんでもないものを飼っているわ……。だから闘争本能を抑えられずに

あんな戦術をやつてるんだろ？明日は…俺がやる」

そう言われている承一郎とジョニイは精神世界で眠っている。お前の本物に囲まれている幸せな夢でも見ていれば良い。

そして…承一郎達が嫌な思いをしたんだ。俺も約束を果たさなければフェアじゃない。

八幡「ジョルノ…陽乃さん…皆…済まなかった」

これだけは言っておかなければならない。だが、ジョルノは首を振る。

ジョルノ「それは僕たちだけに言うことじゃあない。君は知らないだろうけど、君の魂の欠片が飛んでいった先々では戦いが起こっているようだ。その言葉は本体に戻った君が全員に対して言う言葉だろう。もちろん、彼と彼の本物に対してもね」

それは了解だが、あの予言には先があった…だと？

ジョルノ「君が飛んでいった5つの世界にはそれぞれ異変が発生する。そこでは僕たちの力が必要となるらしい。こんな戦いはどこでも始まっているんだ。ゲリラの真似事をする事になるとは思わなかったけどね」

八幡「しよっちゆうだろ。芥子畑に対して正規軍の振りをしてゲリラを仕掛けるのは。無意味に用兵術や一般戦術が身に付いたわ。それに5つの世界でもドンパチねえ…。ここはマジでドンパチ始めるし」

だからこの世界にはジヨルノや陽乃さん達しかいないのか。

異変……ねえ。承一郎の闇とその原因……。

だったら、その闇は俺がある程度持とう。さて、明日は俺がドンパチだ。鋭気を養うか。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

敵には道化になつてもらおうか

二日後のある日。

承一郎「三ヶ所同時攻撃？それも全て陽動？」

今回の任務はデスペラード社の研究所制圧だ。なんでもその研究所、廃棄物の不法投棄に人身売買、挙句の果てに人体実験を行っているらしく、依頼を受けたのだが……

ジョルノ「そうだよ。施設に近い駐屯地を同時に攻撃する」

そう、今日はジョルノ兄さんが指揮を執る事になったのだ。

承一郎「何でまた……それに兵力は……」

ジョルノ「それなら初日に進軍させてある。十分な仮眠を取らせていつでも動かせる準備は出来ている」

ジョルノ兄さんは司令所の地図に歩兵部隊の配置、砲撃部隊の配置、対メタルギア部隊の駒を置く。

ジョルノ「ついでにいうなら目的の施設も含めて工作部隊が通信機能から地雷撤去、逆に地雷の設置も終え、潜伏の伏兵も配備済みだよ」

承一郎「地雷って……」

ジヨルノ「対戦車地雷だよ」

僕はほつと胸を撫で下ろすが…

ミスタ「人の重さで反応するけどな」

承一郎「なっ！」

ジヨルノ「何を驚いているんだい？人の重さで反応する対戦車地雷だよ。まあ、それで反応してしまったのならその人はよっぽど重かったって事だよ」

そういえばウチに戦車よりも重心が低い大男、アルマジロがいたな…じゃあなくて！八幡『後でドーザーでも走らせて戦車が通過したような偽装を施せば問題ない。そんな戦場なんてどこにでもある。安心しろ、殺さない威力で仕掛けてあるから』

それを聞いて安心した。

陽乃「殺せば敵兵を減らす数は1人。だけど、負傷させればその人を下からさせる為に人員を割かなければならないの。1人を殺すよりも1人を負傷させて二人から三人を下からせた方が効率が良いからだよ？承一郎君？」

承一郎「な、な、な……」

オセロツト「基本戦術ですね。むしろ当たり前の戦術です」

シブいね、オセロツト！僕ももつと年をとつたらオセロツトみたいなハードボイルドがいいな…じゃあなくて！

「ジョルノ「救護所や非戦闘要員も始末してかまいません。僕らにとつては等しくどうでも良いので」

承一郎「でもジュネーブ条約では…」

ジョルノ「ジュネーブ条約からは反していますよ。最初からね。これは最初から戦争ではない。戦争が始まっていない。ただの非合法武装集団同士の小競り合い。まあ、他の国際法には引つ掛かるかも知れませんが知ったことではありませんよ。全ての罪は全部あちらに被つて貰えばいいんですから。砲兵部隊の準備状況は？」

オセロツト「気象、測量、試射、弾道計算。準備よし」

ジョルノ「同時攻撃開始。着色煙幕弾、化学兵器弾、生物兵器弾、ナノマシンウィルス弾を使用して攻撃支援射撃開始。その間、各部隊は偽装を維持しつつ、迂回をして攻撃準備線戦まで前進開始」

確かにBWC生物兵器禁止条約やCCWC化学兵器禁止条約は『多国間』だから明確な『国』を持たない僕達には無意味

だし、あくまでも『小競り合い』だから例外にもなるのだろう。けどさ…

カズ『砲兵部隊、攻撃開始』

観測部隊から送られてくる敵の被害状況。かなりの敵の戦力を削ることに成功している。

敵は相当パニックに陥っているが、砲兵部隊は敢えて暴露されているので迎撃部隊を

出してくる。

本命の目標からも三ヶ所同時に横腹を突くように迎撃部隊を出してきた。

ジョルノ「砲兵部隊、撃ち方やめ。本陣地に陣地変換。遊撃部隊は砲兵部隊の陣地変換の支援のため、敵増援部隊の足止めを実施。各部隊は敵の駐屯地の制圧部隊と迎撃部隊殲滅に別れて攻撃開始。本陣地に展開している砲撃部隊は歩兵部隊の突撃準備線に入りし次第突撃支援射撃を開始」

観測部隊や通信部隊と連携して順調に敵を破壊していく。

承一郎「手際が良い」

ジョルノ「本来はこれを君がやるべき事なんだ。一兵士の行動で満足している場合じゃあない。そんなのは司令官として下の下だ。戦闘行動だけじゃあない。兵站、通信手段、救護所や野戦病院の確保や維持。作戦が失敗した時の退路の確保や輸送手段。それらを運用する資金運用を考慮した戦術を考えるのが君の役割だ。特に補給線の確保は部隊の生命線とも言える」

前線の維持以上に補給線の維持が重要だ。そこを的確に突いたジョルノ兄さんの采配は素晴らしい。

ジョルノ「敵の戦闘部隊は見事に踊らせました。手薄になった本命に特殊部隊は突入開始！」

承一郎「分かりました。行け、髑髏部隊スカルズッ！」

瞬間、どこからともなく髑髏部隊が現れ、頭を垂れる。それぞれ高周波ブレードと銃が装備されている。

髑髏部隊は僕が創る空間の中に一齐に飛び込む。

承一郎「髑髏部隊はあまり離れると制御が難しいので行ってきます。コブラ部隊！ついて来てくれ！」

次に現れたのは亡き母、理那が率いていたコブラ部隊だ。今はファイアールとソローが加わった事で更に強力な部隊となった。

ちなみにクリスタル・フアングで最年長であるジ・エンド（明らかにDIOより長生き）は今は車椅子に座って眠死んでっている。彼曰く『残りの余命を戦闘時に使う』らしい。

余談だが目がすっごく開く。もう少しで取れるんじゃないかってくらいに。今回は狙撃の必要がないのでおじいちゃんはお留守番だ。

承一郎「それと陽乃さんと留美ちゃんもお願いします」
陽乃「OK！行きましょ、留美ちゃん！」

留美「ええ、分かったわ」

承一郎「オセロツト！愛国者パトリオットを！」

オセロツト「はい！」

オセロットから渡された母の形見である突撃銃パトリオットを左手に取る。圧倒的火力の弾幕で敵を殲滅するのに特化した銃だ。

空間の中に入り、たどり着いた場所は下水道の中。その正面に扉があった。諜報班が独自に調査によって判明した。

iDROIDの有線を扉の配線に繋いでカズの『TOKYO通信』が侵入し、扉のシステムを掌握する。

承一郎「カウント！3、2、1、GO！」

僕の声と同時に扉が開き、僕達は突入した！サイボーグ達はナノマシンウイルスによつて疲弊していて髑髏部隊とコブラ部隊に制圧される。

だが、月光が一機跳躍してきた。

陽乃「大型機械兵……へ口へ口になってないのがいたんだ。今度はお姉さんが倒すかな？」

承一郎「陽乃。前にも言ったがおまえの能力では」

陽乃さんの『アヌビス神』、転生前なら操る人間の限界を振り切つて攻撃しただろうが転生した後は本体はあくまでも陽乃さんだ。

故に陽乃さんの今の『アヌビス神』では大型無人機には太刀打ちは出来ない。

陽乃「承一郎君。君、四年前のままだと思つてるのかな？」

ハズなのだが、

陽乃「うりゃあ！」

陽乃さんは袈裟斬りに斬り付け、返す刀で逆袈裟に斬る。

承一郎「ふざけてるのか？ 一切傷が」

ドオオオオオオオオン！

月光は傷すら入っていない状態で倒れた。

承一郎「なん……だと……？！」

陽乃「承一郎くん。やり直しをしてみる？ あの時のやり直し。はっ！」

僕は『村雨』で私の『アヌビス神』を受け止めようとするが、

スパン！

陽乃さんの『アヌビス神』が村雨を透過し、その首をはね、更に縦一文字に僕を切り

裂く！

……骨のプロテクターだけを。

陽乃「私の勝ち。私達はスベックだけなら君にかなわない。能力も君のに比べたら大したことは無いかも知れない。だけど、やり方一つでこうなるの」

僕は息を飲む。

陽乃「私が本気なら、骨のプロテクターと君の体が逆になってた。骨のプロテクター

の中で君は生首になり、体は開きになってた。アヌビスのもう一つの能力、忘れてない？」

承一郎「透過……能力……」

思い出した。『アヌビス神』の使い手を操り、戦えば戦うほど強くなる学習能力とはもう一つの能力。当時のポルナレフさんを圧倒した能力。

陽乃「部分透過……」。斬りたい所を斬り、他は透過させる……私の前には防御力なんて意味をなさない。回避以外の防御に意味はない。これさえ手に入れば、こんなのはただのガラクタなんだよ？」

陽乃さんは僕にあるものを見せる。

承一郎「これは……設計図？」

陽乃「そうだよ？最初にこれらの構造を知れば、大体どこに重要機器やパーツがあるかが解る。車なんかもそうだけど、細かな違いとかあっても構造はメーカーが同じなら似たようなものでしょ？だから最初の透過で大体の位置を把握して、二回目の斬撃で自爆機能の爆弾のダミーの線を全部斬ったのよ。それでボム。簡単簡単♪」

次に再び大型機械兵が出てくるが、陽乃さんは相手の頭の上に乗る……

陽乃「ここに生体ユニットの脳がある」

ストン………透過させて脳だけを突き刺し、まるでコーヒーのミルクや砂糖を混ぜ

るようにぐるぐる回す。

陽乃「脳をやられて生きるなんて吸血鬼や究極生命体くらいなもの。簡単簡単♪」

陽乃さんは自爆する敵の大型機械兵からジャンプして着地する。

陽乃「1勝1敗ね。昔の私を倒したからって、今でも弱いだなんて思わないで。別には強くなつてはいないわよ？せいぜい波紋の練度が君と同じくらいになつたくらい。後は工夫だけ」

承一郎「……まさかあつさり負けるなんてな」

陽乃「不意打ちだったからね。対策を練られればなんて事はないわよ？でも、これが本気だつたら……たればはないわ……。今、君は一度死んだの」

陽乃さんは更に先へと進んだ。

留美「陽乃を甘く見ない方がいいわ。私は知らないけど、あなたと別れた四年間の間に彼女達は更に強くなつたらしいわ」

承一郎「……やれやれ、一本取られましたね。でも、僕はまだ全力を出していませんでしたよ。そつちの世界での四年前は」

留美「！危ないわ！」

僕の後ろから月光が襲いかかってくるが、

承一郎「凍れ、『村雨』ツ！」

ピイツキイローローズ

ンッ!

『村雨』で斬つた箇所が氷漬けになる。そこをパトリオットを左手に持ち、

承一郎「アリーヴエデルチ」

ダダダダダッ!とパトリオットの弾丸が吐き出され、月光は粉碎された。

ライフル弾の火力とマシンピストルの取り回しの良さの両立を基本コンセプトにしたこの銃は、バレルを短く、ストックを切り落としハンドガンサイズに縮小されている。

その構造から反動がとんでもないものになり、吸血鬼のパワーでやつと片手で取り扱える物品だ。その代わり百連装サドル型ドラムマガジンが使われていて弾数が多いが、並の人間には到底扱えない。

オセロツトでさえ両手で使うこの暴れ馬を片手で取り扱えた母というのは人間を止めていると思う。

留美「:すごい銃ね、反動がとても大きそう」

承一郎「とんでもないじゃじゃ馬ですよ」

気を取り直し、僕達は先へと進む。

ザ・ペイン「行け、蜂達ッ!」

ザ・ペインの蜂の群れが先のルートを索敵を行う。彼は蜂達と視覚なども共有出来るという利点がある。

ザ・ペイン「ボス、この先部屋があります」

承一郎「分かった」

ザ・ペインの言った通り部屋があつた。僕達はカバーし合いながら部屋に入る。

承一郎「……ここは？」

クリアリングをして改めて部屋を見ると、たくさん何かの水で満たされた巨大なガラス管の中に入っていた。

一つの何かのバイザーのようなものが上に上がり、現れたのは……

承一郎「これはッ……!?？」
目玉だつた。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ギョロツ！効果音が出そうなほど他の管の中に入っている何か、いや脳も一斉に反応して僕達に視線を集める。

陽乃「うっ……!?？」

承一郎「これは……サイボーグの脳ユニット……！」

諜報班の調べでは、ここ最近ファイア達によつて子供達が拉致されているという情報はあつたが、まさか……！

ジヨニイ「奴ら、子供達の脳を抜き取っていたのか……！」

頭痛がして頭を抑える。白い角がメリメリと頭から突き出て血が流れる。

陽乃「承一郎君……？」

承一郎「……なんでもありません。それより、これが子供達から抜き取られた物だとしても、まだ抜き取られていない子供達もいるはず。それとデスペラード社の狙いを探らなければ……」

ザ・ファイアー「ならばサーバールームを探しましょう。そこから副司令の『T O K Y O通信』で……」

承一郎「そうだね、じゃあサーバールームを探そう。ザ・ペイン！」

ザ・ペイン「了解です、ボス！」

僕はザ・ペインが索敵を行う間、葉巻を吸って溢れんばかりの怒りを抑えていた。

クズにはそれ相応の罰を

僕はサイボーグ達を倒しつつ研究所のサーバールームに到着した。

i D R O I Dの有線をサーバーに接続して『T O K Y O通信』が再び侵入、情報を集める。

カズ『ボス、お目当ての動画が見つかったぞ。警備サイボーグの視覚ログから例の男が写っていた』

承一郎「再生してくれ」

カズ『ああ』

i D R O I Dがデータを投影していく。

—————

自分が見ている視界が動いている、歩いているのだろう。扉の前に立っているサイボーグと i D チェックをして警備を入れ替わった。

大男『…早く製品を送るんだ。V R 訓練はもう始まっている』

次に視界に移ったのはスーツを着た男とコート着た大男、そして白衣を着た男だ。

スーツの男は顔が見えない位置に立っている。

研究員『「シアーズプログラム」ですか?』

大男『ああ、リベリアでの少年兵訓練を仮想化^Vした。VRといっても脳に直接情報を送っているわけだから彼らにとって現実と変わらない』

『シアーズプログラム』:二代前のアメリカ大統領、ジョージ・シアーズが残した負の遺産というやつだ。彼はそれが露見して暗殺されたらしい。

研究員『素晴らしい技術ですな』

大男『追従は不要だ。それより早く出荷しないとここも危ない。我々の計画を嗅ぎつけた奴がいる』

完全に僕達のことだな、それ。

研究員『ですが、製品の数が揃っていません。生身の脳というのは一つ一つ異なります。それを私がこの手で取り出して一つ一つパッケージングするのですよ、フツツ:』
こいつら、絵に描いたようなクズだな。ヘドが出る。こいつらは子供たちを商品として扱ってやるツ:…!

スーツの男『なるほど、話は分かった』

今までしゃべっていなかったスーツの男が喋る。

研究員『お分かりいただけましたか』

研究員はスーツの男の前に立つ。

スーツの男『ああ、出荷が無理なら素材は処分しよう』

研究員『え…？ですがあれだけの素材を集めるにもそれなりの時間が…』

スーツの男『フッフッフッフッフ…中南米にどれだけのストリートチルドレンがいると思っている？また集めればいい。各国政府も喜ぶだろう。犠牲なくして改革はない。全てはより良い社会を創るためだ』

こいつは…プッチと同じ奴だ。自分を『悪』だと気づいていない…もつともドス黒い『悪』だ。こういう奴らは罪悪感というものはない。精神がねじ曲がったサイコパス野郎だ。

研究員『…分かりました、ですが素材の調達にかかった費用は…』

スーツの男『それは保証しよう。経理部から連絡させよう』

研究員『ありがとうございます。確認が取れ次第、素材は処分いたします』

スーツの男『要件は済んだな？そろそろ行くぞ』

司会の向きが変わる。どうやらこの視覚ログのサイボーグが正面に向き直ったらしい。

スーツの男『我が国のためには、「テコムセ作戦」の方も進めんと…』

研究員『本日はご足労ありがとうございます』

承一郎「見たかカズ？あの太男、資料で見た…」

カズ『無法者の首領だ。通称サンダウナー、カルフォルニアの熱風…』

今さらながらデスペラード社の幹部ってなんでこうも厨二臭い名前なんだろう？会社の名前も…いや、ウチも同じような感じだから突っ込んだら負けか。

承一郎「子供達が…」

カズ『間に合うか？』

承一郎「分からない。だがこれは昨日の記録だ。もしかしたら経理部の連絡とやらがまだなのかもしれない」

カズ『そうかもな…それにしても奴ら、VR訓練はすでに始まっていると…』

承一郎「さっきの脳とは別に、すでに奴らの手元に送られた脳がある…ところで、あのスーツの男は？」

カズ『調べてみよう。見覚えがある気がする』

承一郎「分かった、僕は子供達を探す！」

陽乃「じゃあ、これからやる事は決まったわね」

承一郎「はい、まずは敵を制圧しながら子供達が囚われている部屋を探します。運ば

れた脳は無理ですけど、ここにある脳は保護の流れでいきましよう」

ザ・フューリー「なら、ここは手分けした方がよろしいかと。この研究所はかなり広いですし、我々は自ら言うのはなんですが一騎当千の猛者と言いますか。サイボーグや無人機に遅れは取らないと思います」

承一郎「僕もそれに賛成だ。制圧もそうだけどこれは時間との勝負、子供達が殺されてしまう前に終わらせないと意味がない。僕は髑髏部隊と、陽乃さんと留美ちゃんはコブラ部隊と一緒に制圧しましょう」

陽乃「それじゃあ承一郎君、気をつけて」

承一郎「そちらこそ気をつけて。コブラ部隊、よろしく頼む」

キング・クリムゾン!!?

陽乃さん達と別れて数十分後、カズから連絡が入った。

カズ『ボス、あの男が誰か分かった！ステイヴン・アームストロング、コロラドの上院議員だ。時期大統領候補の一人でもある。二年前にはあるPMCとの癒着が大陪審に調査されたが…』

承一郎「ワールド・マーシャル社か？現在業界最大手の…」

カズ『ああ、サイボーグ兵士に最も力を入れている企業でもある。つまり、デスペラーズ社のバックは…』

承一郎「保安官マーシャルと無法者が手を組んだ訳か。全く、いいセンスだ」

カズ『だが、どうする？ ワールド・マーシャルがバックとなると、話は簡単じゃあない。アームストロングの件も含め、奴らはアメリカの経済界に深く入り込んでいる。大手メディアは奴らの醜聞スキャンダルを報道しない』

承一郎「このまま奴らの好きにさせておくのか？ この研究所ラボを潰したところで、いずれまた同じ事を始めるぞ？ あいつの言っていた『テクムセ作戦』とやらも気にかかる。奴ら、何を企んでいる？ こんな事までしてサイボーグを増やすには何か理由があるはずだ」

テクムセの由来はおそらく大統領に降りかかっていたという『テクムセの呪い』からだろう。何か嫌な予感がする。

カズ『だが奴らと戦争を始めるわけにはいかないだろう。一応は法治国家だぞ、アメリカは』

承一郎「どうだろうな？ デトロイトに続いてデンバーも警察を民営化している。委託先は…」

カズ『地元の大企業、ワールド・マーシャルだ。分かっているさ。とはいえ、全ては法的なプロセスを経ている』

承一郎「…とにかく、今はここに囚われている子供達を助け出そう。話はそれからだ」

カズ『ああ、頼むぞ』

いくらか進んだ先にある装置がある部屋に到着した。少し冷えているな。

オセロツト『人工血液充填型の臓器クライオ・プリザーバー保全装置だな。予備冷却が始まっているようだ』

承一郎『どういう事なんだい？』

オセロツト『この装置には冷却した人工血液が充填されている。抽出した臓器を入れておくと冷却により代謝を低下しつつ人工血液で酸素を補給する。ここに入れておけば腕だろうと脳だろうと数時間は維持出来る』

承一郎『その予備冷却が始まっているという事は？』

オセロツト『おそらく奴ら、脳は諦めて他の臓器だけでも売り捌くつもりかもしれない』

承一郎『なんて奴らだ』

オセロツト『急いだ方がいい』

承一郎『ああ、分かっている』

ようやくたどり着いた。僕は子供達が囚われた部屋を発見する。子供達と僕を隔てるガラスはあるが、おそらく防弾ガラスだろう。『村雨』なら余裕で切断可能だ。

だが急に警報が鳴り、子供達がいる部屋へ何かが流れ込む。

承一郎『なんだ？』

研究員「そこまでだ」

後ろを振り返ると、視覚ログで見た胸クソ悪いあの研究員が少年に銃を向けている。

少年「た、助けて……！」

研究員「クロロホルムを知ってるか？有機溶剤だが麻酔にも使える。ただ一つ欠陥があつてな。吸い過ぎると死んじまうんだ」

子供達を見ると、咳き込んで苦しんでいる。僕は『村雨』を引き抜こうとするが、

研究員「ガラスを割るか？そのときにはこいつの頭は吹っ飛ぶ……」

仕方なく僕は『村雨』を鞘に納める。

研究員「投降しろ。それともお前は命を数で秤にかけるのか？」

こいつ、とんでもないクソ野郎だな。ヘドが出る。どうするか？『世界』を使つてもいいけど今は奴の動きを止める『仕込み』に能力を使っている。

少年「助けて……助けてくれ……！」

研究員「フン、言ってるだろう。早く「早く皆を助けてくれ！」何ッ!?？」

少年「俺の命なんて……どうせクソだぜ……。こういうクズを道連れに出来るなら……本望だ……！」

研究員「黙れ……！」

……驚いた、なんとという『勇氣』だろうか。この少年には誇り高い意志がある。

承一郎「…少年、君の名を聞こう」

ジョージ「俺は…ジョージだ」

ジョージか…僕の異母兄弟、D I Oが生み出した屍生人ゾンビに殺された男の名。数奇な運命を感じるな。

承一郎「ジョージ…いい名だ。君の決意、しかと受け取った」

僕は『村雨』を引き抜いて研究員の方へゆつくりと歩み寄る。

研究員「や、やめろ…！バカな真似はよせ…！」

承一郎「だが、それは『覚悟』ではない。『覚悟』とは犠牲の心ではない」

研究員「なっ？！？体が…！」

研究員の体は指一本も動かさせない。『仕込み』の時間は十分だった。『隠者の紫ハーミット・パープル』が奴の体を雁字搦めにするのにはな！

承一郎「『覚悟』とは…？暗闇の荒野に…？進むべき道を切り開く事だッ！」

僕はジョージをこつち側へ引き寄せ、『村雨』でガラスの壁を破壊した。

承一郎「…さて、あんたに対する慈悲の気持ちは全くない。可哀想とも思わない」

八幡『待て承一郎、俺がやつてもいいか？』

承一郎『…いいよ、殺さない程度にならね。後で尋問するからね』

ザ・ジェムストーン（以下GS）『了解。さて、腐れ外道処理の時間だぜ！無駄無駄無

傭兵の引退

アナウンサー『……と意味不明な供述をしており、警察では詳しい動機などを調べています』

TVアナウンサーがニュースを読み上げるのを聞きながら、僕は車を走らせていた。行く先はデンバー、ワールド・マーシャル本社だ。後部座席にはウルフが座っている。

アナウンサー『パキスタンのサラーム大統領を訪問予定のヴァレンティン大統領は今朝、アンドリユーズ空軍基地を出発しました。この訪問はパキスタンの一部における反米世論の盛り上がりに対し、両国の友好関係をアピール……』

電話があり、僕はハンドルの通話のボタンを押す。アレを出してきた以上、装備品である通信機を持ち出すのは窃盗だ。だから今は軍用の通信機はもっていない。

ジョージ『ニンジャのアニキ!』

僕をニンジャのアニキと慕う少年、ジョージが通信相手だった。なぜそう呼ぶのかという、研究所で研究員の動きを何もせず止め、ボコボコにしたのを見たかららしい。まあスタンドが見えないからそう思えるのだろう。後は格好からか。

承一郎「ジョージか。体の方は大丈夫かい？」

ジョージ『快調だぜ！他の皆も元気にしてるよ』

承一郎「そうか、それは良かった」

ジョージ『それより、あいつらの本拠地に行くのか？俺も連れてってくれ』

承一郎「カズの奴…素人が来ても足手まといだ。それに、人殺しにはなりたくないだろう？」

まあ、自分が足手まとというのは十分に理解したから人の事は言えないんだけどね。

ジョージ『でも…』

承一郎『よく狙え。お前はこれから一人の人間を殺すのだ』…君にはその覚悟はないだろう？」

ジョージ『そうだけど…』

承一郎「そうだ、君が正しい。僕のようにはなるな」

ジョージ『わかったよ…』

そう言つてジョージは電話を切った。

…あの時、僕は彼を助けた。でも、『ジョージごと研究員を斬ってしまおう』とも考えてしまった。

僕は小野寺君と出会つて戦場を離れようと考えた。でもまだ戦い続けている。角も

ヘシ折ったはずなのにまた生えている。

：僕はまだ、あの戦場を求めているのか？屍の山が築かれた、あの血生臭い場所を求めているのか…？

承一郎「…何が『僕のようにはなるな』だ」

八幡『そうだな。才能が無いのに傭兵になるなんて自殺志願者としか言いようがない。よく今まで生きていたわ』

承一郎「厳しいね。自分ではあるつもりでいたんだけど」

八幡『味方の邪魔しかしていないように見えたがな。代われ。ブラッディ・シャドウ』
ダアンツ！

八幡「警察官が高速走行中に自殺とは世も末だな」

八幡がブラッディ・シャドウで警官の銃口と警官の頭を繋げてザクロにする。コントロールを失ったパトカーは他のパトカーを巻き込んで爆発。炎上した。

カズ『ジョジョ！辞表を見たぞ！どういふつもりだ？』

承一郎「…悪いなカズ、僕は単独でやらせてもらおうよ」

カズ『お前、まさか奴らの所へ？』

承一郎「ああ、だが組織の総司令官が同業他社に殴り込むわけにもいかないだろう？それに、八幡に指摘されたよ。僕に傭兵の才能は無いって。司令官としても、一兵士と

しても」

カズ『八幡……喋りやがったのか』

八幡「ああ。見てられなくてな。誰かが言つてやるべきだろ？」

カズ『それはそうだが……』

承一郎「カズ……お前の優しさはわかったが……ハッキリ言つて欲しかった。言わぬ優しさより言う優しさが……」

カズ『すまねえ。ボス。いや、承一郎……あんたに……兵士の才能はねえ……カリスマはあつても、才能は無かつたんだ……』

承一郎「……ハッキリ言つてくれてありがとう。これで僕も個人として遠慮なく動く。今までありがとう。クリスタル・フアング。すでに相当数の脳髓がアメリカに持ち込まれている。放っておけない」

そうだ、放っておけない。子供達のこれからの未来を奪わせはしない。

カズ『脳の摘出をしたのは国境の向こう側だ。奴らの行為は合法的な治療扱いになる』

承一郎「合法なら正義だとも？」

八幡「正義だな」

時折八幡が僕の体をジャックして返答する。

承一郎『なっ……………』

八幡「哲学になるが、なにが正義で何が悪かなど人それぞれだ。そんな集団としての正義のすりあわせが法律だ。悪法であろうと法律が定めた範囲なら正義なのだろうな。ま、この国でも違法と言うからには悪なのだろうが」

承一郎「話は後だ」

八幡はハンドルをそのままに……

八幡「ブラッツデイ・ワールド」

正面にバリケードが見えた。八幡は空間を繋いだまま時を止め、バリケードと敵の車両、警官隊を追ってくるパトカーの上方に飛ばす。

八幡「テメエらが張ったバリケードが障害となつて道を塞いでいろ。何人死のうが知ったことか」

承一郎『だがサイボーグ警察官があゝの程度で』

八幡「自壊する。自然の摂理を甘く見んな。人型兵器が戦場のアドバンテージをとれるなんてのは空想化学の弊害だ。実際には意味がない。現状の兵器や機材で充分に代用が可能な物を……しかもそれよりも脆いものを高い金で買う方が間抜けだろう。貸費効果的に考えたら1機買うのに掛かる費用で重機や戦車を何台も買った方が遥かに効率的だ。こんなもの考えた奴はマジでバカとしか言いようがない」

グシャア!

サイボーグ達は数メートルの高さから落下した衝撃を受け止められずに潰れていく。

八幡「な? 次にお前は『ナノマシンで再生するぞ!』という」

承一郎『ナノマシンで再生するぞ!……はっ!』

八幡「前述した通り、あんなガラクタにそんな高いシステムを使うくらいだったらもつと別の物に使うさ。偉いおバカさんはそれがわからない。お前がこんなガラクタに一々苦戦している理由が正直わからない」

承一郎『……』

下半身がボロボロになり、残ったサイボーグ警察官が用意したものは……

八幡「オイオイ、この街中で撃とうとするのか?」

そう、RPGである。PMC次第だとサイボーグには恐怖などの感情はナノマシンによつて抑制されているが、いくらなんでもおかしいだろう。

警察官「撃て」

警官隊「!」

バックブラストによつて上半身が吹き飛んだ生身の警官隊。RPGは車に衝突したと見せかけて。

八幡「ブラッディ・シャドウ。自分の射撃を自分で食らえ。ポンコツ」

ドグオオオオンツ……!!??
と爆発を起こす。

RPGの弾を相手の背後に飛ばして自分で食らって頂いた訳だ。さっきのパトカーに対してやったように。

突撃バカ僕が刀一本で敵の陣地に踏み込んだ時、実は八幡がフォローしていなかったら僕は蜂の巣になっていたらしい。

無駄金食高級サイボーグを単独で運用するバカな組織はいない。まあ、こんなものを使っている段階でバカな組織なのだが。

要はサイボーグ兵のような物を運用するとき、周囲にはそれを運用する部隊も近くにいるのが普通だ。

そこで八幡は気配を探って見たわけだが……いるわいるわぞろぞろと陣地を構築して地面に穴を掘って巧妙に偽装して。

そこで役にたったのがブラッディ・シャドウとハーミット・パールだ。名付けてハーミット・ブラッディルビーって奴だ。僕を狙っていた小銃の弾を射った本人に食らって死んでもらっていた。

あの時思わずさすがだ……と言ったのはブラッディ・シャドウの能力に対してだ。僕は自分の事と勘違いしていたが、実際は空間を繋げる能力に対して敬意を払っていただ

けに過ぎない。

小銃の弾を骨のプロテクターでガードすることはできない。小銃には連発機能がある。他方向から連発で射たれた拳銃以上の威力の弾丸は、骨のプロテクターなど難なく撃ち抜く。

八幡が対処していなければ僕は間違いなく死んでいた。更に言えば僕のミスはそれだけではないようだ。

あんな場面で刀一本で突撃したならば、味方が射撃をすることが出来ない。活躍しているように見えて実は僕やジョニーは味方の邪魔をしていた。司令官としてだけでなく、傭兵としての才能がない……と評価した理由はそこにある。

アイデンティティーだった傭兵としての誇りを八幡がバツキリ折つたのは内心辛かったが、逆に感謝もしていた。八幡は僕を想ってくれて言ってくれたんだ。

八幡は車から降りて天国の外側に格納する。感謝するさ、お気に入りの車がお釈迦にならずに済んだんだからな。

ウルフ『この先を探索してくる』

ウルフはビルに飛び移り、先へ進んで行った。しかし、なぜ警察官が八幡を襲う？僕達は何もやらかしてないぞ？

警察官「州法によって未登録の戦闘用サイボーグは市内に立ち入り出来ない」

なるほど、情報を流されてサイボーグ扱いにして処理される手筈だったと。

八幡「それで？ どうするつもりだ？ ポンコツが数台揃ったところで何ができる？」

警察官「コロラド州刑法修正18条により、侵入者を殺害する」

サイボーグ警察官達は持っていた警棒を展開する。対サイボーグ用に電流が流れるタイプだ。

八幡『見ている、承一郎』

承一郎『何をするつもりだ！ 八幡！』

八幡『何でお前が、ザ・ジエムスーンを使えなかつたかわかるか？』

承一郎『あれはお前独自のスタンドだからじゃあないのか？』

八幡『やつぱりその勘違いか。だったらお前がハーミット・アメジストやザ・ワールドを個別に扱える説明ができねえだろ？ ザ・ジエムスーンは俺が2つ同時にスタンドを出して融合させていたから出来る荒業なんだよ。2つ同時に扱い、合体させていたんだ。出来るはずなんだよ。最初から2つ精神があるお前らならば。今から見せてやるよ！』

ジョニー『ザ・ジエムスーンの能力の使い方だと！』

八幡「例えば……これだ！ ハーミット・アメジストとブラッディ・シャドウを融合！ ブラッディ・アメジスト！」

ハーミット・アメジストとを影で伝わせ、ゼロ距離で巻き付ける。そして…

八幡「アメジスト・パープル・オーバードライブ！」

バリバリバリバリ！

八幡「ついでにラツシユも受けとれ！」

ゼロ距離から繰り出されるブラツデイ・アメジストの無駄無駄ラツシユ。

八幡「次はこれだ！ザ・ワールドとクリスタル・ボーンでクリスタル・ワールド！時よ止まれ！」

ドオオオオオoooooooooz

ンツ!!？

僕達では先にクリスタル・ボーンで武器を作ってからザ・ワールドで時を止めなければならなかった。ブラツデイ・シャドウでも同じ。時を止めている間ではブラツデイ・シャドウは使えない。だが、こうすれば時を止めながらそれぞれの特性を同時に扱える。

八幡は波紋の力を全開にし、サイボーグの周りに骨から作り出したナイフをばら蒔く。

ジヨニイ『エグい…』

八幡「ゼロ。そして時は動き出す」

ザシユザシユザシユザシユ！

サイボーグ「ぎやあああああ！」

八幡「さて：何度も地獄を見てきた俺の攻撃から、お前らは滅びずにはいられるかな？ 見てろ一条ブラザーズ。お前らのスタンドのえぐさの本質を。クリスタル・シャドウ
！」

ジョニー『俺達のスタンドで何を：』

八幡「久々に吸血鬼の力を使うぞ？」

スカルズを大量に発生させ、そして特攻させる。

八幡「露骨な肋骨：ブラッディ・シャドウのスカルズを生み出す力と空間をつなぐ力でその場になくてもクリスタル・ボーンで骨を自在に変質させて切り裂く」

サイボーグ「があああああ！」

八幡「ブラッディ・ボーン：こいつはエグいぞ？ 自分の骨で：心臓を貫かれて：死ぬ
！」

ブラッディ・シャドウの能力で敵の内部に空間を繋げ、クリスタル・ボーンの能力でサイボーグの骨を変質させて相手の心臓を貫く。

八幡「あれ？ 一例を見せるだけで敵が全滅した。いやあ、相変わらずエグい能力だなあ。お前らの能力。まあ、こつそり戦場で使っていたけどな」

承一郎『エグいのは：』

ジョニイ『お前の発想と性格だ！』

八幡「解せぬ」

だが八幡のおかげで敵は一掃出来た。このまま先に向かわせてもらおう。

ウルフ『道路がバリケードで封鎖されているようだ。建物の中から進もう、ついてきてくれ』

八幡「その前にだ」

八幡は奴等の通信機を奪う。そして適当に路駐してあった車を移動させ、その中にRPGで完全に破壊したサイボーグ兵に僕の服の予備を着せて適当にポロポロにする。そして車に放り込んだ後に、距離をとつてもう一発あつたRPGを発射。

ドゴオオオオオオオン！

八幡「カズ。偽の情報を流せ。一条承一郎はこの場で警察官の砲撃で死んだ……とな」
そこで一旦僕に体を返してくれた。ここで別れを告げろと機会を与えてくれたのだ。

カズ『状況はどうだ？』

承一郎「敵の包囲網が厚い。これから奴らの本社までは徒歩だ」

カズ『本当に……行くのか？』

承一郎「……僕はもう、うんざりなんだよ。組織の力によって正しい事が捻じ曲げられるのも、虐げられた弱者達を見てみぬふりするのよ」

カズ『ジョジョ…』

承一郎「僕が連中から脳を取り返してやる。サイボーグになるのは避けられないが、殺人機械にはさせない」

カズ『…一人で脳をどうするつもりだ？』

承一郎「伝手を辿って上手くやるさ」

主に華さんを頼ると思うが。あれは鬼畜だった。モットーが『タイム・イズ・ノット・マネー』だからなあ…。あの人の秘書はもうこりこりだが、見返りとしてやらされるだろうなあ…。

カズ『だが…』

承一郎「これはあくまで僕個人の戦いだ。口出しは無用だ」

カズ『…桐崎嬢達はどうするんだ？被害が及ぶかもしれないぞ？』

承一郎「橘警視總監に警備を頼むさ。それに集英組とビーハイブにもね。それにここで見つめぬふりをしたら、僕は彼女達に顔向け出来ない」

カズ『そこまで言うならこれ以上言わないが…だが、デンバーじゃあ奴らが法律と
言っている。くれぐれも気をつけろよ』

承一郎「ああ、わかってる」

カズ『そいつはそうと、無線の暗号レベルを上げてくれないか？』

承一郎「カズ、君……」

カズ『ボス、俺達はボスがあんただからこの組織にいるんだ。あんたと同じ、天国アウター・ヘブンの外側を夢見た人間なんだ。前に言っただろう、「あんたが行く所なら天国ヘブンでも地獄ヘルでもとことん付き合ってやるぜ」ってさ。クリスタル・フアングはあんたを慕って集まった組織だ。部外者になったと言つても、ここはお前の為の組織だ。これで完全なお別れなんて寂しすぎるぜ』

天国の外側：国家、イデオロギー、そして時代の流れによつて兵士達が翻弄される事のない、理想の楽園。そして、D I Oの考えた『天国』を否定する世界を創るという意味を持つ。

カズ『それに俺も奴らのやり方には我慢ならなかつたんだ。見せてやれ。華々しくただの個人、一条承一郎の戦いを』

承一郎「……ありがとう、カズ」

キング・クリムゾン!!?

先に進め、店の広告デジタルサイネージが多く並ぶ場所に差し掛かった時、広告の映像が一斉に変わった。その映像とは……

サム『よう承一郎、こんな所まで討ち入りか？ 研究所ラボだけじゃあ暴れ足りなかつたか？』

承一郎「ジエットストリーム・サム……」

実に四年ぶりといったところか。信乃の水を操る『村雨』と相対する炎を操る『ムラサマ』を持つ男。

サム『研究所での活躍は聞いたぞ。毒蛇ヴァイパーの本性を取り戻したか？』

それは主に八幡がやった事だ。僕のやった事じゃあない。

サム『それにしても、たった一人で業界最大手を敵を回そうとは大したヒーローだ。だがこんな事をして何になる？ ブラジルやコロンビアのガキ共がお前にどんな関係がある？ 考えてもみろ。南米で子供ガキが売られようが、アフリカで何万人死のうが先進国の奴らは見ぬフリだ。誰も構いはしない』

サム『残念だがそれが人間の本性つてもんだ。連中の興味は金儲けとセツ〇ス、あとはセレブのゴシップがせいぜい……自由と資本主義の結果だ』

僕はそれらの言葉を無視してそのまま噴水の広場まで進む。噴水に投影されていたワインの立体映像が急にサムに変わる。

サム『……無視は困るな。お前は何のためにこんな事をしている？ たった一本の剣で世界を変える気か？』

それはさつき、八幡が言ってくれたさ。だけど、僕は自分の信じる道を歩んでいきたいんだ。それは絶対に譲れない。

承一郎「…僕の剣は活人剣だ。弱者を守る剣だ」

サム『…弱者か。ならばお前はなぜサイボーグ達を斬る？確かに現行のサイボーグに子供の脳は使われていない。だが知っているはずだ、彼らの経歴を』

承一郎「大人は…自己責任だろう」

サム『まあ、そりやそうだ』

ブオン！と音を立てて立体映像のサムが消える。そして建物のガラスに投影される。

サム『自分で契約したんだし、自分の責任だろうな。確かにあいつらは自分で判断したんだろう。戦場で手足を失い出来る仕事もなく、サイボーグ手術を受けさせてくれるPMCと契約する事を』

投影されたサムはガラスの中をスタスタと歩いて他の建物のガラスに投影される。

サム『あるいは内戦で国土も荒れ果て喰う物にも困り…異国の地でサイボーグになる事を。そして彼らは痛みも抑制され、ナノマシンで恐怖すら消され命令のままに命を落とす。それが自己責任と言うんだな？』

一際大きな広告板に映ったサムがそう問いかける。

サム『ならば見せてやるよ承一郎』

承一郎「なんだと…？」

サム『戦場には不適切としてナノマシンが封じ込めた感情…それを聞かせてやる』

承一郎「どうする気だ!!?」

サムは僕を人差し指を口元に当てて制する。そして手を耳に当たる。

サイボーグ1「いたぞ!」

後ろの方から二人のサイボーグがやって来た。しまった、サムが足止めしている間にこっちの位置をつかんだのか!

サイボーグ2「殺れ!」

ガシャツ!とサイボーグの警棒が展開され、火花が生じる。

サイボーグ1『勝てるのか?』

サイボーグ2「どうした?」『こいつは仲間を何人も…殺した…』

このサイボーグ達、言っている事が矛盾しているツ!!?いや違う、後の弱気な言葉はこのサイボーグ達の口から出たものではない。

サイボーグ2『来るな…!死にたくない!死にたくない!』

これが、封じ込められた感情なのか!!??

サイボーグ1「いくぞ!」『俺には家族が…』

その言葉が承一郎の剣を鈍らせる。警棒を弾くだけに留まり、そのまま鏢迫り合いになる。

サイボーグ1『なんで俺がこんな…』「その程度か?」

サム『よく聴くんだ』

サイボーグ2「死ね……!」『いつまで……こんな生活が……!』

間髪入れずもう一人のサイボーグが襲いかかるがそれを避け、距離を取る。

サイボーグ2『妻も子供も殺されて……まだ戦うしかないのか?』「弱いぜ、こいつ」

二人のサイボーグによる連撃を捌き、両方の警棒を防ぐ。

サイボーグ1『自動車爆弾^Dが脚を吹っ飛ばして……他の仕事はもう……』

承一郎「やめろ!」

警棒二本を弾き、襲いかかる警棒を防ぐ。

サイボーグ2『こんな契約するんじやあなかつた……』

気をとられてもう一人の警棒が僕の腹部に当たる。電流を流した警棒が僅かだけど腹を焼く。

そしてもう一人の警棒が僕の顔面に直撃し、吹っ飛ばされる。骨の鎧でそんなにダメージはないが……

サム『どうした承一郎?』

ゲホゲホと咳き込む。口元を拭い、すぐに構え直す。

サイボーグ1『金が貯まったら、母さんをアメリカへ連れてきたい……』

サイボーグ2「そろそろとどめだ」『早くこんな生活から抜け出さないと……』

承一郎「やめるんだ！」

八幡『代われ。承一郎』ボケナス

承一郎『なに！』

コオオオオ……と波紋の力で体を治癒する。

ウルフ『承一郎、大丈夫か？』

ウルフは息を整えた八幡に近づく。

八幡「ちっ！あまちゃんめ……」

承一郎「奴らは自らの判断で契約した……ウルフとは違う」

八幡は僕が斬ったサイボーグ達だった残骸を一瞥する。

ウルフ『人は皆、違う』

承一郎「……いい指摘だ、プロトタイプ。AIは皆同じってわけかい？君の兄弟も？君

も人類の進化を促す気かい？」

ウルフ『……すまなかつた。お前への礼を忘れたわけではない』

承一郎「いや……君の意見も間違つてはいないさ」

ウルフ『承一郎……AIも学習により変化する。人に限らず、あらゆる知性は独自性を

持つ。俺はこのとおり一匹狼だ。ローンウルフ人類がどうなろうと興味はない』

承一郎「だといいいんだが」

ウルフ『…それにしてもサムは奴、いつもと少し様子が違った』

承一郎「知っているのかい？」

ウルフ『知っている。だが俺の知っているあいつはこんな手を使う男じゃあない…』
確かに、四年前剣を交えた時の彼とは違った。彼は姑息な手は使わず、自分の剣と力だけで戦う、まさに戦闘狂だったはずだ。

承一郎「買っているようだね？」

ウルフ『買いかぶりだったか？まあいい、行こう。この先のデータを渡す』

ウルフから渡されたデータをiDROIDで受け取る。

ウルフ『忘れるなよ、子供達の事を』

ウルフはそう言って先へと進んだ。

ウルフ『承一郎、お前は今精神的に動揺している。作戦を中止するつもりはないだろうがしばらくは戦いを避けて進め』

サム『苦戦しているようだな。今さらサイボーグを斬るのをためらうのか？お前は一般多生の活人剣を是としたのではないのか？』

八幡「……………」

サム『無視か……………毒蛇』

八幡は少しずつ、時を止めて、瓦礫の埃で体を周囲に溶け込ませ、偽装をする。建物

を使って少しずつ隠れながら進む。

対赤外線処理が施された市街地戦闘用の戦闘服。体に纏った周囲との偽装も併せて隠れながら、そして細かい動きで匍匐する。

サム『動きが違う……まるで本物の兵士のような動きだ。貴様……承一郎ではないな？』

八幡「……………」

一々返事をする意味などない。この挑発は八幡の位置を特定するために……音源で特定するためにやっている行為。八幡がこそこそと動いているのもそれを避ける為だ。それに……

八幡「スカルズ……行け」

僕を模したスカルズを囿として出す。

サイボーグ3「いたぞぞ!」「いやだ!死にたくない!」

八幡「ブラッディ・ボーン」

ブラッディ・ボーンの遠隔操作で足を切り裂き、無力化する。

サム『何をした……それに躊躇いがない。貴様は本当に承一郎ではないな?』

八幡(スカルズ)「僕は一条承一郎さ。もつとも、お前の指摘も外れでは無いがな。どんな理由であれ、お前らと契約をしたんだ。そのつもりがあらうと無かろうと、覚悟が

あったと見なす。後悔して無理矢理戦わされていようが知ったことじゃない」

サム『ならばこの数ならどうだ？』

大量のサイボーグが現れる。

?? 『使うわよ？比企谷君』

八幡「許可する。やれ。雪ノ下」

雪乃『了解。フリージング・ビーム！』

別の瓦礫の方向から発射されたフリージング・ビームがサイボーグ達に命中する。そして躍り出るチーム黄金の風。

雪乃「あなた達から『強制力』を凍結させた」

ジオルノ「逃げるも戦うも自由。だけど、戦うからには僕達は容赦はしない」

ミスタ「銃のならばはよお。もう終わらせてあるからよお」

留美「ジオルノチームに容赦は無い。この場に留まるならば覚悟があるとみなす」

トリツシュ「死にたい奴からかかって来ると良いわ。ここまで来たらいつもの私達よ」

陽乃「慣れない軍人行動でフラストレーションがたまっていたんだよねえ。さあ、覚悟はできている？」

チーム黄金の風「俺達は出来ている！」

八幡「俺も出来ている！待ってたぞ！俺の家族達！」

八幡もジョルノ達と合流する。さあ、ここからが俺達の戦いだ。どう出る？サム。

サム『パツシヨーネだど!?何故ジョルノ・ジヨバーナがここにいる!』

ジョルノ「彼の中には……承一郎の中には僕の家族の魂がある。それに承一郎も僕の家族だからね。危なっかしくて見ていられない家族を助けるのに、理由があるかい？」

八幡「それに、邪悪の化身の俺が言うのもなんだが、腐れ外道を許せねえのは俺も一緒だ。敢えて名乗ろう。俺は比企谷八幡。承一郎に入り込んだ邪悪の化身だ。いくぞジョルノ！」

八幡とジョルノが並び立ち、指を天高く掲げる。

八幡・ジョルノ「アーシス！スクランブル！」

↑To be continued

季節風（モンスーン）

いつの間にか空に雲が覆われ小雨が降り始めた頃、僕達はワールド・マーシャル本社へたどり着いた。

承一郎「兄さん達は先に行って下さい」

ジョルノ「君はどうするんだい？」

承一郎「僕は少しサイボーグ達を足止めします。大丈夫、後から追いますよ」

ジョルノ「…わかった、行こう」

ミスタ「それじゃあ承一郎、また後でな！」

陽乃「承一郎君、気をつけて！」

雨が降る中、チーム黄金の風はビルの中に入っていた。

承一郎「…待ってくれるとは律儀な奴だな。出て来い」

？「ほお…私の事を気づいていたか」

ビルのはるか上層の上に立つサイボーグはそう言葉を返す。

モンスーン「私の名はモンスーン、『ウインズ・オブ・デストラクション破滅を呼ぶ風』と呼ばれた一人…」

承一郎「…御大層な通り名だな、デスベラード無法者風情が」

モンズーンはいきなりビルから飛び降りる。モンズーンのボデイはバラバラになり、足から順番に地面に着いてバラバラとなったボデイがくつついた。

モンズーン「ここまで来るとは思わなかったな。…それにしても、何がお前をそこまで突き動かすのだ？」

承一郎「…あなたの事は知ってるよ。インドネシア出身でかつてのクメール・ルージュの大虐殺の生存者」

モンズーン「そうだ。プノンペンのキリングフィールドで、私はこの世界が人類という種が腐りきっていることを知った。…お前もそうだろう、毒蛇？お前も母であるザ・ボスを、親友である信乃を殺され、そう思った事はあつたのではないか？」

確かにそうだ。僕が才能がない傭兵の道を進んだのも自分では抑えきれない世界への憎悪があつたからだ。国に僕以外の全てを捧げた母が殺されるような規範を造つた、この世界を。

承一郎「…ああ、そうだと。僕だってそう思つた事はあつたさ。世界を壊したいと何度も思つたさ。でも、僕には護りたいものができたんだ」

雨に打たれ、二人の男が対峙する。

承一郎「僕は全てが偽りさ。この体も、この声も、この命も、存在すらも。ありとあらゆるものが偽りでできている。それは変えられようもない事実さ。でも、だからこそ

「承一郎「この胸に抱く想いは、本物であって欲しいと願うんだ。そして、僕は自分が正しいと思う道を歩んでいきたい！」

メリ：メリ：と少しずつ角が生えてゆく。それは憎悪。今まで燻っていた憎悪に手綱を取り、飼い慣らす。それが、力となる。

承一郎「確かに僕にとつて子供達は関係ない。正義か悪かなんてどーだっていい。ただ僕は正しいと思った事をやる。ただそれだけだ」

モンスーン「：ならば、やるべき事は決まった。全ては自然の成り行きだ」
モンスーンは二本の釵状スタンド、戦術釵ディスプレイを構えて言う。

承一郎「そうだな。後は刃を交えるのみ」

僕は『村雨』を引き抜く。信乃：僕に、信じた道を歩める力を授けてくれ。

それに応えるように、『村雨』が青白く輝く。

承一郎「：いざ、参る！」

BGM『The Stains of Time』

モンスーンの顔で唯一見えた口元が戦闘時のバイザーで見えなくなつた。

それが合図になつた。

僕とモンズーンはお互いに走り出し、刃をぶつけ合う。

モンズーンは一旦距離を取り、何かを投げた。それからはなにか鱗粉状の物がばら撒かれた。

モンズーン「赤燐だ、赤外線でも見透せまい！」

モンズーンが目視出来ない赤燐の中からデイストピアを向けるが、

ギイイイイン……!!?

モンズーン「何ッ!?？」

僕はデイストピアを防ぐ。

承一郎「伊達に波紋の継承者というわけではない！」

僕は波紋の探知でモンズーンが動く事によって動く空気の流れて感じて防いだのだ。

承一郎「フンッ！」

僕は剣圧で赤燐を吹き飛ばす。そしてモンズーンの体に刃を向けるが、

承一郎「何ッ!?？」

刃がスカアッ!とバラバラに分かれたモンズーンの体をすり抜けた。

モンズーン「フフッ、剣圧で赤燐を吹き飛ばすとは、さすが毒蛇といったところか」

承一郎「あんた、体のほとんどをサイボーグにしているのか！」

モンズーン「その通りだ!くらえ！」

モンスーンの体が上下に分離して下半身だけが走り出してくる！

下半身が右回し蹴りをくりだす。僕は『村雨』で迎撃しようとするが、右足の部分だけがさらに分離する！

承一郎「ぐっ！」

蹴りをくらいながらも僕はその勢いを利用してモンスーンの上半身の方に接近する。

モンスーン「何ッ!?？」

承一郎「シッ！」

僕の『村雨』がモンスーンの分裂する前のボディを斬る。舞うのは白い人口血液ホワイト・ブラッド。

モンスーン「フフツ、さすがだな！」

モンスーンは近くの建物の屋上へ乗り、

モンスーン「殺戮のユートピアへようこそ！」

モンスーンのデイストピアのスタンド能力が発動、近くの戦車や戦闘ヘリが宙に浮かぶ。

モンスーン「マグネットパワー！」

モンスーンの周りを舞っていた戦車や戦闘ヘリが承一郎に迫る！

どうやらモンスーンのスタンド能力は『メタリカ』のように血の中の鉄分から武器を

作るといふような精密さはない代わりに強力な磁力を操れるようだ。

承一郎「WRYYYYYYYYYYッ!!？」

僕は卓越した剣さばきで飛来する戦車や戦闘へりを切断していく。

それらを切断している間にモンスーンは僕に迫り、流れるような二本のデイストピアの連撃を繰り出す。

連撃によって『村雨』は上に弾かれてしまうが、そのまま一回転して地面に突き刺し、それを軸にした蹴りがモンスーンに迫るがバク転して回避する。

モンスーン「素晴らしい！想像以上の強さッ！」

承一郎「そうか、なら死ねッ！」

鎌状の水圧カッターを飛ばしながら接近する。モンスーンを体をバラバラにして回避し、そのまま僕に某バラバラの実を食った王下七武海のように迫る！

僕はそれを横に跳ぶ事で回避する。そして『村雨』の水圧カッターがモンスーンの頭に迫る！

モンスーンは頭部をズラして攻撃を回避する。

このままでは奴を倒せない。少しギアを上げるか！

承一郎「リミッター、解除ッ！」

脳が、高熱を発する。世界が、スローモーションになる。

人体が普段出している力は本来の力の一部であり、全力を出すことはできないようになっていいる。筋肉が持つ力をすべて使った場合、人体そのものがもたないからだ。これを防ぐために脳がリミッターとして働いている。

それを自分で強制的に外す。アドレナリンの分泌量を増やし血液の循環が早まって身体能力が格段に上がり、世界がよりクリアに見える。

今まで捉えきれなかった分裂するモンスーンのボディに斬撃が吸い込まれるように入り、白い血飛沫を散らす。

モンスーン「くっ！」

モンスーンは二本の腕を切り離しデイストピアで迎撃するが、僕はそれを弾きながらモンスーンへ迫る！

承一郎「おおオツ！」

速くツ！

承一郎「おおおオツ！」

上手くツ！

承一郎「うおおおオオーオーツ！！？」

より強くツ！！？

今出せる最高出力でデイストピアの猛攻を凌ぎきり、モンスーンの懐に入りながら、

『村雨』を鞘に納め、

承一郎「：ハアアツ！」

一瞬の溜めから繰り出した居合斬りがモンスーンのボディを斬り刻む！

モンスーン「くっ……！」

モンスーンは斬撃を食らいながらもビルの上部に張り付く。

モンスーン「電磁力もまた自然の摂理だ！」

モンスーンは戦車をいくつもくつつけたものを浮かばせる！

モンスーン「ローレンツ力だ！」

戦車の塊が縦に回転しながら僕に迫る！僕は『村雨』に吸血鬼の筋力を加えたパワーで弾き返し、

承一郎「迸れ、『村雨』ッ！」

戦車の塊を水圧カッターでバターののように切断していく。

モンスーンは今度は先の鋭い石柱を浮かべる。

モンスーン「土に還れ、弱き者よ！」

石柱にドリルのような回転がかかる。

モンスーン「さあどうする、毒蛇^{ヴァイパー}！」

僕は迫り来る石柱を跳んで回避、地面に突き刺さった石柱の上に乗りモンスーンに迫

モンズーン・『なるほど……、私の、負けか……』

承一郎「残念だったな。お前の模倣^{ミム}子はここで途絶える。全て自然の成り行きだ」
殺意や憎悪の連鎖というミームに取り込まれ、自らも殺戮のミームを振りまくバケモノと化した男。もう、悪夢から覚める時がきたのだ。

モンズーン・『いや……、虐殺のミームは……、お前に……。お前が虐殺を……。続けてくれる……。それが、自然の……。成り行き……。土に還る……。時が来た……。風が吹き、雨が……。降る……。強い者が……。弱者を、殺す……。これで……。良かったのだ……。』

そう言い残し、頭部が爆裂する。

承一郎「ぐうっ……!!？」

途端、激しい頭痛が走るッ!

脳はさっきの通り人体がもたないから安全装置^{セーフティ}がある。人間は普段は潜在能力本来の全能力の20〜30%しか発揮出来ない。

僕が行うセーフティの解除は最高80%まで解放出来る。さっきは45%といったところだ。80%まで解放すると全身がボロボロになる。筋肉120%解放出来る戸愚呂弟^{トド}つてマジで半端ない。

八幡『大丈夫か?』

承一郎「…ああ、問題ない。早く兄さん達に追いつかないとな」
雨に打たれながら、僕はワールド・マーシヤル本社のビルへ歩き出した。

因縁の決着その①

八幡「うおおおおオオーオーオーツ!!？」

八幡は今、ビルを文字通り垂直に走っている。

ミサイルの雨あられがビルの壁面を爆撃する中を走り抜ける。しこたまミサイル食らっても耐えるビルの耐久力え…。

どうしてこうなった…？

バイツァ・ダスト！

モンズーンを倒した後、僕はワールド・マーシャル本社のビルに入った。

サンダウナー『：モンズーンを殺したか、やるじゃあないか。お目当ての脳はサーバルームで訓練中だ。せいぜい頑張るんだな、毒蛇』

僕はサンダウナーの声を無視して先に進む。

このビルは一般社員のオフィスや一般の来客とのミーティングスペースなどの低層エリア、高度な軍事機密や技術研究の高層エリアに分かれています。

カズが『TOKYO通信』でハッキング出来たのは低層エリアのエレベーターのみ。高層エリアへのエレベーターは幹部達のIDが必要らしいのだがすでに退去されてい

た。

ジヨルノ兄さん達は留美さんの『ステイツキー・フィンガーズ』で天井にジツパーを付けていったのだろう。もう高層エリアのかなり上のフロアへと進んだらしい。

僕の能力は目視した範囲にしか瞬時に転移出来ない。仕方がないので高層エリアへのゲートの扉をロックしている3つの電気供給源を破壊し、上へ昇っていった。

だが先に待ち伏せされていたサイボーグや飛行型小型無人機によってビルの外から攻撃を仕掛けていった。僕はそれらの攻撃を無視して瓦礫の山を飛び乗り上階へ進んで行った。

だがこの方法ではジヨルノ兄さん達と合流するのが遅くなってしまう。

八幡『代われ承一郎！』

そこで八幡は僕の体をジャックして飛行型無人機が破壊したビルの壁から次から次へと飛び降りざまに『村雨』を突き刺していき、最後の一体の爆発を利用してビルの上層の窓にくっつく波紋で張り付いた。

八幡「このままじゃあ時間の無駄だ！もう駆け登るぞ！」

承一郎『止まるなよ、落ちたら盛大にアスファルトの染みになるぞ！』

八幡「分かってるッ！」

そんな訳でGE☆N☆ZA☆I…。

八幡「うおおおおオoooooooooooooooo!!?」

一際大きな爆発でビルの壁が崩壊する。やっと耐久力が終わったか!

八幡は瓦礫の隙間をすり抜けながらビルの内部に突入する。危なかった、下手したら潰れたトマトみたいになってたところだった…。

承一郎『いつもの事だけど、君の意外性には驚かされるよ』

八幡「こんなのは日常茶飯事だ」

八幡達の日常ってこんなアクロバティックなのか!?

カズ『ずいぶんと上まで来たようだな、あと少しだ。奴らの最新の警備データを分析した。その先にVIP用の屋内庭園があるようだ。まずはそこに向かってくれ』

承一郎「屋内庭園だって?ずいぶんと優雅な話だね」

カズ『日本の古い庭園を再現したもののようだ。どうやらワールド・マーシャルの幹部に日本好きがいるらしいな』

承一郎「それで、その庭園をどうすればいい?盆栽の剪定でもすればいいのか?」

カズ『いや、その庭園を抜ければ貨物用のエレベーターにたどり着けるはずだ。低層階の制御ユニットからたどってどうにか貨物エレベーターもコントロールを奪えた。サーバールームの場所も分かった。貨物エレベーターでたどり着ける』

承一郎「さすがだカズ」

カズ『礼なんていい。俺達にはこうする事しか出来ないんだからな。それじゃあ庭園を向かってくれ、ボス』

扉を開けると、そこは桜の花びらが舞っていた。日本の昔の都のような街並みがあった。

場違いな景色を見る暇もなく、こんな場所にもサイボーグ達は待ち構えていた。

僕は『村雨』を抜いて水を帯びさせる。そして、水圧カッターに電流が走る！

承一郎「轟け、『村雨』ッ！」

一振りでも周りの敵に水圧カッターが襲いかかり、

バリバリバリイッ！

そして電流が流れて敵を黒焦げにする。ブレイク・ダーク・サンダー 闇破る雷光で雷を帯びたのだ。

だがサイボーグ達は次から次へと恐怖をナノマシンで消されて距離を詰めてくる。

雪乃「一条君、しゃがんで！」

その時、急に後ろから声が聞こえた。僕はそれに従いしゃがむと、前方の敵が凍り付いた。

ミスタ「いけ、『ピストルズ』！」

ピストルズ『『イイイイ……ッ！ハアアア……ッ!!?』』

ピストルズの声と共に弾丸が氷漬けにされたサイボーグの脳を一発ずつ撃ち抜いていく。

承一郎「皆さん！」

ジョルノ「相変わらず八幡はとんでもない事を考えるね」

承一郎「子供達の脳があるVR訓練室はあと少しです！」

ミスタ「おし、じゃあこのまま突っ切るか！」

八幡『承一郎、代われ！』

八幡は『ブラッディ・シャドウ』の空間からあるものを取り出した。

承一郎『小銃と短刀？刀ではなく？』

八幡「違う。短刀ではなく銃剣だ。古代の戦争でも戦場のアドバンテージを取っていたのは剣ではなく槍なんだ。銃剣は槍の戦い方が出来る。汎用性だけを見れば小銃は刀以上の武器だ。まあ、見てろ」

数体のサイボーグ兵が突進してくる。

タタン！タタン！タタン！

連発で2発ずつの単連射撃する八幡。小銃の連発の使い方は2発か3発までが命中と威力を両立できる限界点だ。

何発か命中し、数体のサイボーグの足が止まる。唯一命中しなかった奴が剣を降り下

ろしてくる。

それを八幡は銃身に装着していた銃剣の刃先で捌き、そのまま……

ドズッ！

銃剣格闘、縦打撃で相手の溝尾に床尾をめり込ませる。

サイボーグ「ぐはっ！」

八幡「小銃は弾を射つだけが使い道ではない。そして剣より優れているのはこうやって硬い床尾が槍の石突きのように刃以外でもダメージを与えられる事だ。銃を置くだけの部分とでも思っていたのか？ 最小限の動きで防御と攻撃が出来るんだよ！」

そのままアツパーのように床尾を振り上げる八幡。そして流れるように振り上げた床尾で直打撃で顔を殴る。

八幡「やあ！とおあ！」

2回ほど足の動きと腰の入れ込みで直打撃を与えた後に斬撃。銃剣には刀のような切れ味は無いが、高周波が加えられているこの銃剣ならば話は別だ。

首チヨンパ……。本来なら銃剣の斬撃は敵の頸動脈を斬る為の斬り方。首チヨンパ出来たと言うことは本来の使い方としても有効だったのだろう。

八幡「無駄！」

首チヨンパした胴体を蹴り倒し……

パン！パン！

頭と胴体に一発ずつ射撃。機能停止。

承一郎『小銃にそんな使い方があったのか…』

八幡「言つたろ。万能武器だつて。グリップ以外にも持ち手があるのはこういう使い方をする為だ。刺すだけが銃剣の使い方じゃあない。やあ！」

次は遅れて来たサイボーグの突きを上にも捌いて刺突。人間の心臓にあたるそこに銃剣を突き刺し、そのまま銃把からグリップに持ち替え、引き金を引く。

サイボーグ「ぐほ……………」

ばたつ…………

承一郎『槍のように刺し、そのまま射撃…………』

八幡「まだまだ！」

次は相手が剣道の小手のように小さく斬撃を放ってくる。それも捌くがそのまま相手が突つ込んで来るので体勢的に床尾も刃先も射撃も出来ない。ならば…………

八幡「正面打撃！」

サイボーグ「ぶっ！」

一歩後ろに下がって差し出すように銃の下部を前に出す。すると、弾倉が相手の顔面に命中し、更に八幡は一歩踏み込んで床尾を相手の溝尾に打ち込む。

横打撃。踏み込む位置によっては相手の顔面や肩に打ち込む攻撃だ。そして前蹴りで引き剥がして首チョンパ。射撃。

承一郎『遠距離では射撃、中距離では刺突、近距離では打撃……これが銃剣格闘……』八幡「お前が得意とするCQCを始めとした軍隊格闘技。その中でも一番の技術はこの銃剣による格闘だと俺は考えている。徒手空拳にも、専門武術にもない小銃の使い道が、軍隊格闘技には込められている」

サイボーグ「なめるなあ！」

ギイン！

サイボーグの斬撃も弾倉とグリップの間で受け止める。剣と小銃のつばぜり合い。

この場合、つばの一点で力を入れていく剣と、銃身と銃把の二点で力を支えている小銃……どちらが安定しているかは考えるまでもない。そして、銃剣の利点は更に別にある。

ドズツ！

俺は銃身から銃剣を外し、短剣のようにサイボーグの腹に突き刺す。更に、腰に差し込んでいる銃剣の鞘にサイボーグの剣先を当てる。

バキイ！

銃剣の鞘には缶切りのような窪みがある。それは相手の銃剣の刃先を折るための器

具になるように出来ている。

八幡「銃剣格闘を舐めたな。近代近接武器にはこういう使い方もあるんだよ！」

再び銃身に銃剣を装着する俺。そのまま斬撃を繰り出す。

サイボーグ「甘いのはお前だ！毒蛇！」

剣先が折れても斬撃を防ぐ道具にはなる。……が、甘かったみたいだ。

パン！

銃口から上がる硝煙……八幡は引き金には触れていない。ならば何故、八幡の小銃から煙が出ているのか……。

八幡「セーフティを解除してある小銃の射線には気を着けないとな。勢い付いた小銃の動きに衝撃を与えるとな？撃鉄が落ちる物もあるんだよ」

それを狙っていたらしいんだけどね。

サイボーグ「……がはっ！」

八幡「終わりだ」

刺突攻撃をした後に、セーフティを連発にして鉛弾を食らわせる。

八幡「カッコ悪いから注目はされないが、銃剣格闘は軍隊格闘技。離れば銃、中距離では槍や剣、近距離では鈍器や短剣になる。距離を選ばねえ強さが小銃にあるんだよ。Do you understand？」

なるほど、勉強になるな。僕も少し勉強するか。本城さんからもすごいディスプレイられたからね。↑メメタア！

キング・クリムゾン!!？

ジョルノ兄さん達が加わった事によって怒涛のペースで僕達は上階へ進めた。ジョルノ兄さん達の能力で無人機&サイボーグブレイカーなんだよなあ…。

承一郎「それにしても、サンダウナーはどこにいる？ サーバールームか？ 僕達を殺したいのならさっさと出てくればいい。勝つ自信がないのか？」

カズ『一応は警備の指揮を執っているはずだが、奴にとってはこれも半ば遊びなのかもしれないな。いろいろともっともらしい事を言っているがあの男がビジネスのためだけにこんな事をしよといえるとは思えないな』

承一郎「だろうね。ワールド・マーシャルの連中はビジネスのつもりなんだろうがあの男は違う…」

扉が開かれた瞬間、黒い槍が雪乃さんに襲いかかるが、

承一郎「…骨の鎧はいらなかったようだね」

雪乃「ええ、私にもこれくらいなら出来るわ」

雪乃は体を氷を鎧のように纏って防衛していた。兄さんが話していた『ホワイト・アルバム』みたいだ。

それよりも問題は攻撃を仕掛けてきたサイボーグだ。あれは僕が粉々に砕いたはずの……

承一郎「バカな！ミストラル……!?」

カズ『いや、おそらく義スベアボディ体だ。中身はAIだろう』

すると、天井からは二本の釵が飛来してくる。それを『村雨』で弾き飛ばし天井を見上げると、天井に逆さにち立っているモンスーンの姿が。あれもAIか！

ジヨルノ「面倒だね。承一郎、君は先にサーバーームへ向かってくれ」

承一郎「兄さん……」

ジヨルノ「大丈夫、サイボーグに……ましてやAIなんか僕達が負けるわけないだろう？」

トリツシュ「ここは私達に任せて」

承一郎「……すみません」

僕は二体の義体の間を走り出す。二体は攻撃を繰り返すが、それを『ブラッディ・シャドウ』の空間移動で回避する。そしてそのまま先へ突っ込む。

ジヨルノ「さて……」

陽乃「このウルフ以下のAIをさっさと倒して、子供達を助けましょう」

チーム黄金の風対義体（AI搭載型）二体、戦闘開始ッ！

ついにサーバールームに到着した。薄暗く、いくつもの柱で構成された部屋の中心に、サンダウナーはいた。

サンダウナー「彼らはVR訓練中だ。邪魔をするな。彼らの訓練にはリベリアでの少年兵育成プログラムが応用されている。：知つてのとおり、リベリアのあのプログラムは非常に優れていた。だが今の時代、先進国主導であのような訓練を行うのは困難だ。だから我々は脳に信号を送り、訓練を仮想体験してもらう事にした。夢を見ているようなものさ。その夢の中で無抵抗な捕虜や市民を殺してもらう。訓練が終わり次第、彼らはサイボーグの義体ボデーに組み込まれて出荷される」

サンダウナー「なぜこんな事が必要かわかるか？」

承一郎「鬼畜が：！子供なら洗脳しやすいつてわけか？」

サンダウナー「それも間違いではない。だがそもそもなぜサイボーグが必要となったのか：戦争の原動力は残虐行為だ。残虐行為が復讐を呼びさらなる残虐行為を呼ぶ。教えてやる。真の答えは人間が無人機より残虐だからだ。我々は子供が持つ人間本来の残虐性を引き出しているに過ぎん」

承一郎「ご立派な企業理念だな」

サンダウナー「まだわからないようだな、毒蛇」

サンダウナーが近くの柱に近づくと、柱から何かがせり出てきた。あれは……子供達の脳か！

サンダウナー「脳なんていくらでも買える。この脳に義体ボデイを与えて解放すれば終わりか？ 無駄な事だ」

周りの柱からも脳が大量に出てくる！こいつら、こんなにかくさんの脳を集めていたのか！

サンダウナー「需要がある限り、何度でも同じ事が繰り返される。戦争を欲する者がいる限り、戦争屋は消えん」

承一郎「欲する者……」

サンダウナー「なぜ太古から戦乱が絶えん？ 秘密結社か何かの陰謀だとも？ 否！ 戦争は人間の本質だ。そしてまた、3時間後に大きな需要が生じる。あの911が我々の黄金時代をもたらしたようにな」

911：アメリカ同時多発テロ事件の事か！ 4機の旅客機を超高層ビルに突っ込ませたあの大事件……まさか、あの規模の事件をまた……!!？

承一郎「……何をする気だ？」

サンダウナー「ついて来い」

サンダウナーを追って出た先にはまだ雨が降り続けている屋上だった。

サンダウナー「どうだ毒蛇？ここなら商品に気兼ねせずに遊べるだろう？」

承一郎「3時間後に何をする気だ？」

サンダウナー「手遅れだ。現行機の巡航速度はマツハ2・0も出ない。そもそもお前達はここから生きて帰る事もない」

マツハ2・0だと…?!?そこまで距離のある場所で行うという意味か…!

そう考えていると、屋上の周りにヘリが3機飛んできた。ヘリのライトがサンダウナーの背中を照らす。サンダウナーの背中にマウントしてあつた6枚の赤い盾がガシャン！と展開される。

サンダウナー「だがすぐには殺さん。人間の本质において俺はお前以上に純粹だ」

サンダウナーは盾から二本の大型高周波マチェーテを引き抜く。

戦闘BGM『Red Sun』

サンダウナー「お前の残虐性を見せてみる」

八幡「じゃあお言葉に甘えさせてもらうぞ！『クリスタル・ワールド』ツ！時よ止まれッ！」

ドオオオオoooooooooz

ン!!??

八幡は時を止め、骨のナイフを生成しながらサンダウナーに投げまくる！

八幡「時は動き出す」

世界の時が動き出し、ナイフの雨あられが殺到する。サンダウナーは六枚の盾を構える。ナイフが盾に触れた瞬間：

ドグオオオオンツ！

盾から爆発が生じ、その爆風によってナイフをまとめて吹き飛ばした！

承一郎『衝撃に反応して爆発が生じる盾のスタンドか：厄介だな』

八幡「なら内側からだ！『ブラッディ・アメジスト』！」

輝く紫色の茨が影を伝い、サンダウナーをグルグル巻きにして拘束する！

八幡「そしてくらえ、アメジストパール・オーバードライヴ紫水晶色の波紋疾走！」

続けて波紋疾走を流し込むが、

サンダウナー「フン、なんだこのみみっちい拘束は！」ブチィッ！

サンダウナーは茨の拘束を引き千切る。奴のボディ、サイボーグの中でかなりのパワーを発揮する部類か！

僕はサンダウナーに接近しながらナイフを投げる。サンダウナーはマチェエーテでナイフを弾きながら横薙ぎの一閃は放つ。

僕はそれを前屈みになって回避、そのままサンダウナーに斬りかかるが盾によって阻まれる。僕は空間移動で背後に回るも、残りの盾が背後に回りシールドバッシュを繰り返す。

出すのをバク転しながら回避する。

承一郎「カズ！あの装甲のどこを斬れば爆発反応を起こさないか解析出来るか!?!?」
カズ『ああ、急いで解析する！少し待ってくれ！』

陽乃「ごめんなさい、遅くなったわ！」

その時、下の階に続く所から陽乃さんが来た。

承一郎「陽乃さん！他の皆は？」

陽乃「サーバルームで子供達の脳を保護しているわ！」

承一郎「了解、奴のスタンドは爆発反応する盾です！今奴のスタンドに対応出来るのは……」

陽乃「私の出番ってわけね！任せて！」

陽乃さんはサンダウナーへ走り出す。

サンダウナー「小娘が！泣き喚け！」

サンダウナーの振り下ろす大型マチェーテを陽乃さんは右に回避、サンダウナーは盾を構えるも、

陽乃「泣き喚くのはあなたよ！うりやうりやうりやうりやうりやあ！」

陽乃さんの『アヌビス神』はその装甲をすり抜けてサンダウナーのボディを斬り刻む

！

サンダウナー「バカな!?」

カズ『ボス、解析終わったぞ!』

承一郎「了解!陽乃さん、援護します!」

陽乃「わかったわ!」

僕と陽乃さんは同時に走り出す。サンダウナーは盾を構えるが、

カズ『ボス、下の盾の繋ぎ目だ!』

承一郎「フツ……!」

『村雨』が斬るべき隙間に入り込み、防御をこじ開ける!そして、僕を踏み台にして陽乃さんが!

陽乃「うりやうりやうりやうりやうりやあ!」

陽乃さんが盾の繋ぎ目ごとサンダウナーを斬り裂き、白い血が舞う。

承一郎「くらえ、『ブラッディ・ボーン』ッ!ズリユツ!

僕の背中からせり出した6本の骨の刃が影を伝ってサンダウナーの盾のアームを全て切断する!

サンダウナー「ぐうっ……!なめるなあ……!」

防御が削げたサンダウナーはアタッチメントを使ってマチエーテ二本をくっ付ける。

あの形は……まさか!

盾が削げた分スピードが上がったサンダウナーはマチエーテを陽乃さんに横薙ぎ払いをするが、陽乃さんは余裕でそれを『アヌビス神』で受け止める。

陽乃「こんなの、貧弱ね「陽乃さん、危ないッ！」えっ？」

僕は陽乃さん突き飛ばしマチエーテの範囲から逃す。けど僕が逆に……ズパアアアン……ッ!!?

一瞬で僕の体が上下に別れてしまった。

陽乃「承一郎君！」

承一郎「がああああああ!!?ぐおおおおお!!?」

だが僕は斬られた瞬間に空間移動で下と一緒に離脱、急いで上下を接続して修復する!

承一郎「クソツ、やはりその形状……人斬り鋏か！」

サンダウナー「気づくのが遅いな、毒蛇！」

陽乃「大丈夫、承一郎君!!?」

承一郎「ええ、大丈夫です……八幡、時間稼ぎはこれで充分か!!?」

八幡「すまないな承一郎、お前が体張ってくれたお陰で時間は充分稼げたぜ！」

八幡の体からは骨の芯にしてその回りが輝く紫色の茨が巻き付いたものがサンダウナーの身体中を覆っている。

八幡『『クリスタル・アメジスト』：承一郎考案のより強固に敵を拘束する茨だ！しかもさらに：』

ドスツ、ドスツ！と骨の刃がそこからサンダウナーを貫く！

承一郎『全身を覆いつつ貫くアイアン・メイデンのようなものになっているッ！』

サンダウナー「ぐうっ……！」

八幡「陽乃さん、今だ！」

陽乃「了解、ハアツ！」

スパアアアン……ッ！と振り下ろしの一閃がサンダウナーに直撃した。

サンダウナー「マズった……斬られちまった……」

陽乃さんの一撃をくらったサンダウナーはよめろいてビルから落ちた。

承一郎「やったか……？」

八幡『それはフラグと言うんだぜ？』

確かにそのとおりのようだ。下からヘリのローター音が聞こえてくる。ビルの下からヘリが上昇してきた。ヘリにはサンダウナーがしがみついている。

サンダウナー「遊びは終わりだ。そろそろ息の根を止めてやる！」

ヘリからミサイルが発射される。

承一郎「こっちも遊びは十分だ。時間がないからね」

だが『ブラッディ・シヤドウ』の空間移動でヘリの正面にミサイルを移動した。そのまま滞空しているのなら座標をすぐ固定出来る。

サンダウナー「バカな!?」

ミサイルはヘリに直撃、爆発でサンダウナーがこっちに吹っ飛ばされる。

承一郎「バカはあんただ！無駄無駄無駄無駄無駄無駄アツ！」

僕がサンダウナーのボディを斬り刻む！バラバラになったサンダウナーのボディが屋上のヘリポートに落下する。

サンダウナー『さすがだ…毒蛇』

承一郎「待て！3時間後にどうなる？」

サンダウナー『あの男は…「テコムセ作戦」を実行する…』

承一郎「アームストロングか」

サンダウナー『…少し喋り過ぎた。サムに話がある…』

サム『斬られたようだな』

サンダウナー『毒蛇…いや、承一郎はずいぶんと強くなったようだ…。これがお前の…望みだったのか…?』

何…? 一体、どういう事だ…?

サンダウナー『計画は…知られたも同然だ…あとは…お前の、好きにしろ…』

サンダウンナーは力尽き、通信は終わった。代わりにオセロットから通信が届いた。オセロット『こちらオセロット、今ピークオドに乗ってそっちに向かっています。あと数分で到着する予定です』

承一郎「わかった」

カズ『ボス、さっきのサンダウンナーの話だが…』

承一郎「奴ら、何を企んでいる？911に匹敵すると…しかもタイムリミットは3時間後だ。マツハ2では間に合わないと言っていた」

カズ『だがマツハ2といえば3時間で4500マイルは飛べる』

承一郎「となると、911のような米国内のテロじゃあない」

カズ『だが911に匹敵するほどにPMCの需要を上げる事件なんてどこでも出来る事じゃあないぞ。小国でクーデターや内戦を起こした程度じゃあPMCの需要はあまり変わらない』

承一郎「アメリカ主導で大きな戦争を起こすつもりか？…奴ら、まさか！」

カズ『どうした？』

承一郎「大統領だ。大統領はパキスタンに向かっている。パキスタンで大統領の身に何かあれば…」

カズ『それなら確かに対テロ戦争再燃の口実になるかもしれない…』

承一郎「軍に連絡は？こっちから大統領に直接連絡しても通信が遮断されているッ！」

オセロツト『私は米軍出身ですが、今はそう安易に出来ません。あなたの母、ザ・ボスを殺した者がこちらの居場所を気取られる可能性がある』

カズ『そもそも確証がない。第一、ワールド・マーシャル社といえば軍の身内も同然だ』

承一郎「だが、このまま見過ごすわけには…」

カズ『…悔しいが、俺達には何も出来ない。仮に最新鋭の戦闘機を借りたとしても間に合わない』

エヴァ『…ちよつといいかしら？』

承一郎「エヴァか？」

エヴァ『『パキスタンに行くのに戦闘機は必要ない気もするけど。商業軌道輸送サービスの開始以降、民間企業の宇宙住環機が次々と第一宇宙速度を達成しているわ』』

カズ『第一宇宙速度といえは…』

エヴァ『一気圧での概算だとマツハ23、時速でいえは17650マイル…』

カズ『パキスタンまで30分もかからないぞ！』

承一郎「よし！『彼女』に連絡してくれ！」

へり——ピークオドに子供達の脳を収納して保護してピークオドの中に乗り込む。

ピークオド「貨物室^{カゴ}は準備完了です」

承一郎「よし、離陸してくれ」

ピークオド「了解！」

ローター音と共にピークオドが離陸する。目的地は彼女の施設だ。

オセロツト「…昔ば宇宙旅行なんて準備に何日もかかりましたが、なんだか感慨深いものですね」

承一郎「彼女の施設では軌道に乗らないなら準備はすぐに出来るらしい。最近じゃあ毎日のように大気圏内の試験飛行を行ってると話だ」

僕の母、理那は地球を、世界を見たらしい。僕もそんな光景を見られるのだろうか。

キング・クリムゾン!!?

ピークオドが、宇宙港に到着した。

? 「こつちよ」

声のする方を見ると、まだ十代前半の銀髪の少女が立っていた。

彼女の名前はサニー。僕がまだ傭兵をやっていた頃に紛争地帯から拾ってきた子供達の一人だ。

学校に通っていた時期もあつたがあまりにも知能が高すぎるために周囲と反りが合わずに一年ほどで退学するという程の天才であり、今では航空技術開発研究所の『ソリス』社内でかなりの権限を持っている。

サニー「久しぶりね、ボス」

承一郎「ああ、元気だったか」

サニー「あら？その可愛い子は？」

サニーはウルフを見て聞く。

承一郎「迷える子羊だ」

僕は答えた。サニーはウルフの前にしゃがみ込み、右手を差し出した。

サニー「お手」

ウルフは少し躊躇い、最終的にサニーの右手に前脚を乗せた。僕も手を差し出してみるが、ウルフはそれを無視する。

サニー「あちらの方達は？」

承一郎「…並行世界の家族とその仲間さ」

サニー「…また大変な事になったみたいね」

サニーはなんでこんなに面倒ごとを抱えられるのかといった様子で肩をすくめる。

承一郎「すまないな、急に」

サニー「気にしないで、こっち」

僕は装備を整えた後、ジオルノ兄さん達と共にサニーに着いて行く。

承一郎「どこにあるんだい？」

サニー「すぐよ」

承一郎「これを君が…」

サニー「ええ、ラムジェットと液体窒素サイクルエンジン^Eを組み合わせた再使用型宇宙住環境機^Vよ」

サニー「時間がないんでしょう？乗って」

承一郎「わかった。ありがとう、サニー」

サニーはこちらを振り向き、笑顔を見せた。

サニー「どういたしまして！でも、おかしいわね…スタッフ達が一人もいないなんて…」

一同「=？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

RLVの近くをよく見ると、そこには一人の男と一匹の狼がいた。

男——ジェットストリーム・サムが狼——ブレードウルフの頭に手を乗せていた。

八幡『野郎、車かバイクをフルスピードで飛ばしてここまで来たっていうのか!??』
あり得ない話ではない。ここはコロラド州の中、車で2時間で行ける場所だ。こっちは地上からの迎撃を避けるために少し時間をかけてしまったし、全速力で飛ばせば時間を短縮出来る。

だが奴は明らかに僕達がこの場所に来ると予想してここまで追って来たんだ!

ウルフはこちらにやって来る。

ウルフ『承一郎』

承一郎「彼と話したのか」

ウルフは『ああ。だが奴はあまり本心を語らない』

サム「こいつは奇遇だな」

承一郎「戯言はよせ。だが行儀良く待てたようだな。そいつは褒めてやる」

サムの周りには血の跡はない。ただ僕達を待っていたようだ。

サム「フフ：無益な殺生は好まん」

承一郎「それはそうだろうな。で、次の戦争でどれだけ殺す?」

サム「そいつは無益じゃあない」

承一郎「金が儲かれば確かに有益だろうな。お前達には」

サム「金の話じゃあないんだ、承一郎。理想の問題なんだ」

承一郎「理想だと……？」

サム「だが何が正しかったのか決めるのは俺達じゃあない、歴史だ。俺達は剣士だ。戦うだけだ。そうだろ承一郎？」

サニー「承一郎……」

承一郎「サニー……君は下がってくれ」

サニーは頷き、後ろに下がる。僕は顔を向けてR L Vから離れた場所へ歩く。サムもそれに続く。

承一郎「僕の生き方は僕が決める。誰かの決めた正しさなどに興味はない。お前をこの親友信乃の刀で倒し、僕は先に進むだけだ」

サム「ほう？ハハツ……そいつは面白い。フハハツ、いいぞ承一郎」

ウルフ『やるのか、二人とも？』

承一郎「手出しは無用だ」

サム「まあ見てな」

シユカアアン！

僕とサムは同時に刀を引き抜き構える。

片や強者との死闘を望む殺人剣、片や同じ殺人剣でありながらも、自分の信じた道を

守るために殺人剣が昇華された真の活人剣。

承一郎「決着だ」

サム「オーケー、いざ参る！」

二人の男の、死闘が始まる。

BGM『The Only Thing I Know For Real』

同時に僕とサムは大地を蹴り、刀をぶつけ合う。凄まじい剣圧がぶつかり合い、火花を散らす。

八幡『おい承一郎、骨の鎧はいいのか？』

お互いに距離を置いて同じ方向に駆け出す僕へ八幡が問いかける。

承一郎『彼の刀「ムラサマ」は鎧ごと焼き斬ってしまう。なら鎧を纏わずに出来るだけ速く、出来るだけ能力を使う事による隙を見せずに倒すのがBEST!』

ジョニイ『あいつはマフィアをあの一本のみで殲滅させた奴だ。能力による小細工は無駄だ』

再び二人の刀がぶつかり合う。先に先手を取ったのはサムだった。繰り出される『ムラサマ』の攻撃は赤く光り、僕へ殺到する。対する僕も青白く光る『村雨』で防ぎつつ

も反撃を行うが、サムもそれを防ぐ。

赤い閃光と青い閃光の線が走り、剣がぶつかり合う。サムの刀『ムラサマ』が防御しきれなかった僕の胸を切り裂く。

承一郎「ぐっ……！」

僕は後ろに飛びながら空中でバランスを取り着地、すぐにサムに攻撃する。サムは強力な突きを繰り出す、僕はそれを弾き、そこから『村雨』でサムの手から『ムラサマ』を弾き飛ばす！

ヒュンヒュン……ドスツ！と『ムラサマ』が地面に突き刺さる。

サム「もつと楽しませてくれ、承一郎」

素手だろうと関係ない。僕は『村雨』で斬りかかるが、サムは軽快なフットワークでそれを躲し僕に右ストレートを叩き込む！

僕はそれを鞘で受け止めるも、あまりの衝撃に防御の構えが解けて仰け反ってしまった。サムはそこに左回し蹴りを放つ！くらって吹っ飛ばされるも地面に背をつけた瞬間に後転して起き上がる。そして、

承一郎「リミッター制御、解除ッ！」

脳が白熱しながらも、体がさらに加速する。『村雨』の剣速が速くなり、サムに迫る！

サム「ハアッ！」

サムはそれを両手で挟み込み、火花が散る。真剣白刃取りか！だが『村雨』は『防ぐ』ではなく『躲す』のが正しい方法だ！

承一郎「迸れ、『村雨』ッ！」

白刃取りをした『村雨』から水圧カッターが発生する！水圧カッターはサムを切り裂き、僕はそのままサムへ『村雨』本体を振り下ろす！

飛び散るのは白……いや赤い鮮血だ。サムのスーツの表面は対ブレード皮膚膜だけで、あとはパワーアシストスーツを着込んでいる程度なのか？

この全身サイボーグが当たり前の時代に、負傷した右腕から右胸あたりだけまでを剣速を上げる為に高出力の人工筋肉で強化、更にプロテクターで覆っているだけなのか！

サム「ぐっ……！少しは出来るようだ」

サムは地面に突き刺さった『ムラサマ』を引き抜いて構え直す。

僕は間髪入れずに平突きを放つも防がれ、サムは逆に蹴りを放ちながら『ムラサマ』の連撃を浴びせてくる。

そしてその度に大きくなる水と炎が衝突し、二つの剣圧がぶつかり合う事で衝撃波が生じる！

サムは間合いを取り、一気に飛び込みながらの振り下ろしを繰り返す！僕はそれに対して『村雨』を水平に構える。『ムラサマ』が僕の脳天に入ろうとする一歩手前に

承一郎「行け、『村雨』ッ！」

刀の切っ先から水が勢い良く迸り、ジェット噴射の如き勢いで僕の体をスライドさせ、サムの振り下ろしを回避する。モンズーンと戦った時に閃いた技の応用だ！

サム「何ッ!?!」

承一郎「セイツッ！」

水の噴射の勢いを利用した形でそのままサムの腹を『村雨』で横に薙ぎ払う。またしても舞うのは赤き血。

サム「くっ……！セイツッ！」

サムは間合いを取り、そこから圧倒的な勢いで突進しながらの一撃を叩き込む。僕は防ぐも、サムは間髪入れずにもう一度繰り出す！

僕はそれを『村雨』の水圧噴射によってノーモーションでフライボードのように跳躍、サムの横一閃を躲す。

そしてそのまま軌道調整をしてサムに水圧噴射で加速した『村雨』を振るうが、サム「フッ！」

サムの剣圧によつて吹き飛ばされてしまう。そしてサムは『ムラサマ』を納刀、抜刀の構えを取る。アレをやるつもりかッ……！

カチッ！

サムが、鞘にある引き金を引く。

バシユツ！ギユイイイイン……ツ！！？

爆発的な速さで『ムラサマ』が鞘から飛び出し、それをサムが掴み、

サム「ハアツ！！？」

ズバアアアン……ツ！！？と、神速の抜刀が僕に迫る。

昔は敗北を味わった剣技……だが今は違う！

承一郎「60%……解除ツ！」

脳がさらに軋むような痛み能耐えながら、火花の動きすらもスローに見える世界の情報を集め、『ムラサマ』の軌道を予測する。

承一郎「いくぞ、信乃村雨ツ！」

僕は刀の軌道をギリギリ避ける程度に逆に前に飛び込む！体を捻り、一撃必殺のこの絶技を回避する。ジユウウウツ……！と体の表面を炎が炙るが、体を真つ二つにされて焼き尽くされて灰になるよりはマシだ。それと同時に、

——今です、若！——

承一郎「轟け、『村雨』ツ！」

バリバリバリイッ！

ここにいるはずのない親友信乃の声を幻聴ききながら、『村雨』の水圧カッターに雷を運びさ

せ、回避と同時にカウンターを叩き込む！

承一郎・サム「ハアツ!!？」

ギユイイイインツ!!?

すかさず二つの刃がぶつかり合つて鏢迫り合いになり、火花を散らす。

サム「これで終わりだ」

承一郎「ぐうつ……！うおおおおおおつ！」

僕はサムの『ムラサマ』を弾き、それを握る右手を斬る。そして、

承一郎「これで終わりだ！」

ドスウツ……！

サムの腹に『村雨』を突き刺した。

サム「ぐおおつ……！」

僕は『村雨』を引き抜いた。

サムは片膝をつき、自分の腹を触つて赤い血を見る。その後、ウルフを見て微笑み……

ドサツ……

大地を背に向けて、力尽きた。

承一郎「ぐうつ……！ハア……ハア……ハア……」

僕は60%解除の反動による苦痛に耐えながら、『村雨』を鞘に納める。

ウルフ『死んだか…』

承一郎「ほとんどサイボーグ化していないとはね…」

ウルフ『サム…これで本当に良かったのか？俺にはわからん…』

承一郎「AIにもわからない事が？」

ウルフ『正しさに唯一の答えはない。故に人は争う。争いを生むのは悪ではない。それぞれ理想や規範の対立だ。だが、俺の従うべき規範はどこにある？』

承一郎「…自分の知性で考えるんだね」

僕はサムに近づき、側にある『ムラサマ』を手取る。かつては僕の左腕を焼き斬り、彼の愛刀である『ムラサマ』が彼と共に歩んだ月日が、剣の重さとして伝わってくる。

『ムラサマ』を触ると、空中にIDロックの画面が表示された。

承一郎「IDロック付きか」

ウルフ『使いたいかな？高周波を流したところで斬れ味は刀の出来次第だからな』

そんなつもりはない。確かに魅力的だが僕には『親友の形見村雨』がある。

ウルフ『だがそれは、あいつが師範から受け継いだものだ』

…彼も…サムも、僕と同じ『受け継いだ者』だったのか。

承一郎「墓標にするか？」

ウルフ『いや、形見にさせてくれ』

ウルフは『ムラサマ』の鞆を口に啞えて差し出して来る。僕はそれを受け取る。

太陽を背を向けて、僕は『ムラサマ』を振るう。そして、ゆつくりと『ムラサマ』を鞆に納める。

どちらかが死に、どちらかが生きる。善悪や勝ち負けではない、僕達戦士とはそういう宿命なのだ。生き残った者が去っていった者達の意志を受け継ぎ、そして『受け継いだ者』は、終わりなき闘いにこぎ出してゆくのだ。

僕はウルフに『ムラサマ』を渡す。ウルフはそれを口に啞える。

カズ『タイムリミットまで一時間を切った！急げ！』

承一郎「ああ…サニー、よろしく頼む！」

サニー「任せて！さあ、皆早く乗った乗った！」

サニー『目的の地までの飛行はプログラム済みよ。サインが消えるまでシートベルトは外さないで。携帯電話は禁止、もちろん禁煙だからね』

承一郎「ああ。…カウントダウンは？」

サニー『面倒な事は抜き！発射あ！』

…もう少し、お淑やかに育って欲しかった…。

いきなり機体が揺れてきた。僕は骨の鎧を、ウルフはフェイスアーマーをつける。他

の皆は時速マツハ23と聞いて若干固まっている…と思いきや、結構平然としている。
「ただだけアクロバティックな日常を送っていたんだ…?」

機体が傾き、RLVが空高く上昇するのがわかる。目指す場所はパキスタンのシャ
バツザバード基地。

世界を巻き込む戦争を防ぐために、そして何よりも愛する人達を、家族を守るために、
僕達は決戦の地へと飛び立った。

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

因縁の決着その②

サニーのお陰でR L Vを借りて、僕達はパキスタンシヤバツザバード空軍基地へ辿り着く事が出来た。

カズ『何か異常は？』

承一郎「いや。本当にこの基地なのか？」

カズ『この警備はワールド・マーシヤルが契約している。間違いない』

承一郎「そうか：行ってみよう」

ウルフは僕達より先に基地の偵察を行うために駆け下りた。

パアン！パアン！パアン！

ミスタさんが放った弾丸がサイボーグに命中する。そして：

承一郎「刺し穿て、『クリスタル・ボーン』」

僕の骨で作った弾丸がサイボーグのボディを内側から破壊する。こんなのは朝飯前だ。

承一郎「見たか？奴ら、^X拡張^I識別^F装置^Fが所属不明を返していた」

カズ『この基地の警備はワールド・マーシャルに委託されてた。だがサイボーグの義体は^{ハイドウェア}デスペラード社と同じものだ』

承一郎「なるほどな。ワールド・マーシャルが配備したサイボーグで基地を乗っ取りデスペラード社の仕業に見せようってわけか」

パキスタンのテロリストに雇われたデスペラード社がサイボーグをハッキングしたという筋書きだろう。マスコミは都合の悪い事実を報道しない。デスペラード社とワールド・マーシャル社の関係は闇に葬られる。

カズ『サイボーグ達がこの基地を制圧したとすると、生身の兵士達は寝返ったか、殺されたんだろう。外部と連絡する可能性がある人間はブレインハックされたのかもしれない』

承一郎「ああ：外部と連絡する人間は限られているし、ブレインハックでも短時間なら誤魔化せる。着陸の時間や使用する空港については報道規制がかかっているしね」

カズ『^{エアフォースワン}大統領専用機を着陸させてから攻撃を仕掛けるつもりだな』

承一郎「ひとまずは管制塔を目指す。通信アンテナでもブツ壊してやれば、米軍も異変に気付くだろう」

カズ『そうだな、気をつけてくれ』

承一郎「もう『^{ワイルドベア}破滅を呼ぶ風』もサムもない。大丈夫さ」

僕達は隠密行動で管制塔を目指していたが、近くにサイボーグ達がない。周囲を警戒していると…

バチッ！バチッ！

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ポロポロになって火花を散らしてるウルフが！

承一郎「…ウルフ!?!?」

僕は空間移動でウルフの元に飛び、そしてウルフを連れて戻る。

狙撃か!? いや、あの跡は…

まるで、拳を叩き込まれたような…

すると地面が揺れ始めた！

雪乃「こ、これは…!?!?」

陽乃「じ、地震…!?!?」

いや、そういうものじゃあない！

基地の奥から地割れが起きて岩盤を突き破り、巨大な穴が開いた。アスファルトの地面や戦車が次々と穴の中に落ちていく。

その穴の中からは、何かガシャン！ガシャンッ！と音が聞こえてくる。

それは、機械の脚だった。一本が戦車と同じ大きさの脚が、何本あるだろうか？二本の腕と、六本の脚の蜘蛛型のようなのだ。

そして、その六本の脚が巨大な機体の本体を支えていた。

承一郎「なんだアレは…」

カズ『ボス、大変だ！』

承一郎「どうしたんだカズ！」

カズ『あの機体：俺の「T O K Y O 通信」で調べたところ、名前は「エクセルサス」、アメリカ軍部が大統領に報告せずに造らせた大型多脚歩行戦車、メタルギアの亜種だ！』

承一郎「クソツ、なんでこんな面倒なものをツ！こんなものを出したら周囲が更地になるのは予想出来るハズだ！」

カズ『それがボス、このエクセルサス、民家への被害は「戦闘機が誤って民家を爆破してもアメリカ国民がさして気にしなかった」ことから「民家をすべて踏み潰して踏破しても誰も気にしないだろう」として、市街地の人命に関しても「こんなデカイ機械が迫ってきたら民間人は逃げるだろう。残っている人間はよく訓練されたゲリラだ、遠慮なく踏み潰せ。」という狂気の発想で生み出されている兵器なんだ！』b y ピクシブ百科

事典

承一郎「なんだとツ!!?」

そんな事よく考えたものだ。その軍部の連中は全員マッドサイエンティストなのか!!?」

承一郎「カズ、後でそいつらの名前のリストを作っておいてくれ。後で殺る。問題は…まずこいつをどうにかしなければ…ツ!」

大型多脚歩行戦車、二足歩行戦車である『RAY』よりも遥かに上回る大きさだ。おそらく既存の大きさの二足歩行兵器だとサイボーグには勝てないから逆に大きくしようという逆の発想から蹂躪型として造られたものなのだろう。

承一郎（だからといってコレはデカすぎるだろ…!!?）

しかしそれでも大きすぎる。ハッキリ言って東京ドームよりも大きい。よくもまあ発想の逆転を通り越したゴリ押し脳筋みたいな別の次元の考えを持ったものだと思ってしまう。

こんなのをどうにかするのが最優先だ。

承一郎「カズ、オセロット! 君達の能力でヤツを乗っ取れないのかい!!?」

カズ『ボス、こいつは有人型だ! 俺の能力では介入出来ない!』

オセロット『ボス、俺もだ。こいつはデカすぎる。この巨大では制御は不可能だ』

情報と制御、この二大能力を持つ二人でも無理なのか…!

そんな事を考えていると、後部の腹にあたる部から何か黒い球体のようなものが出てきた。あれは、もしかしてコックピットか？カズは有人型と言っていたし、誰かが操縦しているのか…？

扉が開き、コックピットから登場した人物とは…

アームストロング「遅かったじゃあないか、承一郎」

葉巻を吸い、黒のスーツを着たアームストロングだった。うん、知ってた。どうせ来ると思ってたよ。

アームストロング「だが悪くないタイミングだ」

アームストロングは自分の腕時計を見て言った。

承一郎「あんたは…地球の裏までそんなものに乗りに来たのか？だがもう終わりだ」
アームストロング「ハツハツハ…何がだ？俺の計画はすでに成功を収めた。SNSを見る、情報弱者め」

承一郎「…なんだと!?？」

カズ『ボス！大統領専用機が引き返した！』

承一郎「どういう事だ？」

カズ『基地の写真がネットに公開されている。世界中が大騒ぎだ！』

承一郎「バカな！」ブオン！

僕は iDROID で情報を空中に投影する。

承一郎 「これは……?」

『パキスタンの空軍基地にて大規模テロ』『駐留していた米軍兵士40人以上が死亡』『ヴァレンティン大統領の殺害が目的か』

承一郎 「情報が漏れた……? 問題は解決したのか……?」

カズ 『バカを言え! コメントを見てみる! 世論は奴らの思惑通りに展開している!』
『パキスタン政府がテロリストを匿っていた件』『アメリカはパキスタンに鉄槌を下せ!!』
『パキスタンこそ悪の枢軸だ!』

承一郎 「大統領は無事のはずだ……」

アームストロング 「だが我が国の兵士は犠牲になった」

承一郎 「自作自演だ! 第一、それだけで大規模な派兵の理由になるというのか?」

アームストロング 「必要なのは民意だけだ。アメリカは国際法を超えた存在だ。そして我が国民が戦争を望んでいる。今は『奴』がなりを潜めているとはいえ、国民の規範は変わらない」

『奴』……母を殺した黒幕の事か!

承一郎 「規範……」

アームストロング 『奴』が潜んだが規範は残った。拝金主義、全体主義、もちろん愛

国心も、『奴』が広めたミームは自らの信念を持たぬ者には好都合だった。国家と自己を同一化すれば自己研鑽は無用となり、米国民というだけで自らを誇れる」

アームストロング「金銭のみを価値判断の基準とすれば思考を停止して経済活動に専念出来る。どうだ？素晴らしい規範だろう？」

承一郎「バカな…」

アームストロング「ひとたびそのミームに感染した市民は自らそれを拡散してくれ
た。今やアメリカの善良なる市民こそが…まさに、愛国者の息子達なのだ！」
サンズ、オク、ザバトリオット

アームストロングは両手を広げて言った。規範だと…？そんなもの、規範でも何でも
ない！

アームストロング「だが近年『戦争経済』が落ち着き始め、国民は不況に苦しんでい
る。彼らの誇りを取り戻すために、今こそアメリカが必要だ！」

承一郎「誰が軍事費を負担する？『戦争経済』で得するのはお前らだけだ」

アームストロング「資本主義を理解していないようだな。PMCも兵器産業も雇用を
創出する。我々の勝利がアメリカの影響力プレゼンスを蘇らせる」

承一郎「そのために他国を土足で踏み躪るわけか？」

僕は『村雨』を突きつける。こいつは愛国者と言う名を語るただの侵略者だ！こいつ
をこのまま野放しには出来ない！

アームストロング「安心しろ承一郎、これは対テロ戦争だ。民間人を殺すつもりはない。敵はテロリストと雇われたならず者^{デスベラード}だけだ」

野郎：組んでいたデスベラード社に自分達の罪をなすりつけるつもりか：どこまでも腐ってやがる！

アームストロング「だがお前達には死んでもらう。ここにいられては情報戦の邪魔だからな！」

アームストロングは葉巻を捨てながら言った。

アームストロング『『堕ちた英雄』と『創られた出来損ないの吸血鬼』。ザ・ボスとお前は我が国の負の遺産だ。この場で俺が直々に始末してやろう』

奴はコックピットに戻って行った。僕にとつての禁句^{タブー}を言つて。

……殺す。絶対に殺す。でも今僕は自分でも驚くほど落ち着いている。

メタルギア・エクセルサスが再起動する。その全身が軋み、恐竜のような咆哮を上げる。

承一郎「：あんたがペチャクチャ喋ってくれたおかげでこっちは時間を稼げたよ。だって、これほどの規模のものは転移するのに時間がかかるからね」

ブワアツ！と僕の影が世界を塗りつぶすが如く広がっていく。

その影から出て来たものは：バラバラバラ：！というローター音。影から戦闘用へ

りが二機飛び出してきた。

次に聞こえるは…ザッ！ザッ！と一糸乱れぬ足音だ。その影から出て来たのは我が無双の戦士達。

承一郎「『ブラッディ・シャドウ』：マザーベースへ空間を直接繋げた。普段は結構疲れるんだけど…あんたへの怒りでスタンドパワーは絶好調さ！」

僕は軍隊を文字通り常に保有している。僕を慕ってくれる仲間達を距離を繋いで呼び出せる。『ブラッディ・シャドウ』の真の能力は…影の世界を創り出し、絆を繋げる事にある。

カズ『ボス、クリスタル・ファンゲ水晶の牙総勢千人の戦士達、集結したぞ！』

オセロット「ボス、お待たせしました…！」

承一郎「カズ、オセロット…！」

アームストロング『オセロット…貴様、やはり我が国を裏切っていたか！』

オセロット「私がお前達に忠誠を誓った事などない！私が忠誠を誓ったのはただ一人、断じてお前達じゃあないッ！」

オセロットが怒りを露わにしている。こういうのは珍しい。それほどに、さっきの奴の言葉が許せなかったようだ。

陽乃「それじゃあ承一郎君、君が号令を…！」

承一郎「いや、陽乃さん。それをやるべきなのは僕ではなく……」

ジョルノ「君だ。八幡君を救い出す旅の締めくくりの戦い。号令を出すのは聖痕を持つ君だ」

ミスタ「良いんじゃないやね？ やれよ陽乃。お前だつて旧クリスタル・クルセイダーズのメンバーだ。たまにはお前が号令を出しても良いだろ？」

雪乃「やつて、姉さん！ 今回、魚を取るのには姉さんよ！」

陽乃「ジョルノ兄さん：ミスタさん：雪乃ちゃん：わかつたわ！ みんな！ 最後を飾つて八幡君を助けるのよ！ アーシス、スクランブル！」

アヌビス神を掲げ、号令する陽乃さんにそれぞれの台詞で沸き立つアーシス。

カズ『熱いねえ、ボス』

ピークオド『たまにはこう言うのも良いんじゃないですか？』

オセロツト「熱いのを一つ、お願いしますよ？ ボス」

エヴァ「ジョジョ！ お願い！」

ジョニイ『やろうぜ、承一郎』

承一郎「そうだな、ジョニイ……。僕たちもアーシスに倣おう。クリスタル・フアング

……」

ジョニイ「スクランブル！」

村雨を掲げて号令する僕とジョニー。沸き立つクリスタル・ファングの面々。

そして、2つの刀をクロスさせる僕と陽乃さん。

承一郎&ジョニー&陽乃「新生クリスタル・クルセイダース、スクランブル！」

BGM『Collective Consciousness』

アームストロング『これがアメリカの力だ！』

エクセルサスの巨大なブレードが大きく振りかぶる。

承一郎「全員、退避ッ！」

近くにいたスタツフ達は早急に退避する。振り下ろされたブレードはズガアアアン
…ッ！と大地を揺るがす。

承一郎「雪乃さんはエクセルサスの脚部を凍結、トリツシユさんはその脚元の地面を
柔らかくして脚部を沈めて機動力を削いで下さい！コブラ部隊、全力で援護を！」
えて根を地面に縫いつけて下さい！コブラ部隊、全力で援護を！」

雪乃・トリツシユ・ジョルノ・コブラ部隊「了解！」

承一郎「ミスタさんは機動力を削いだ後に僕の骨弾を思い切りブチ込んで下さい！オ
セロツトは。パトリオットだ！」

ミスタ・オセロツト「了解！」

僕はエクセルサスに対する作戦の指示を構築し、すぐさま伝える。伊達に今まで戦場を生き延びてはいない。

承一郎「陽乃さん、これを！」スツ

陽乃「これは…高周波ブレード？」

承一郎「はい。二刀流…見せて下さいよ」

陽乃「…ええ、使わせてもらおうわ！」

承一郎「僕達二人であの脚部を切断します。波紋は習得していますよね？それなら大丈夫、僕の『ブラッディ・シャドウ』でカバーします」

陽乃「了解！」

承一郎「ピークオドとクイクエグは時折支援攻撃を！他の皆は距離を取ってデカブツがバランスを崩したら一斉にブチ込むぞ！」

スタツフ達「了解！」

アームストロング『フン、ドツグ・オフ・ウオ「戦争の犬共め。死ぬがいい！」

エクセルサスは再びブレードを振るうが僕と陽乃さんはそれを避ける。そして振り下ろされたブレードを攻撃する。

陽乃「うりやうりやうりやうりやうりやあ！」

承一郎「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アツ！」

陽乃さんの内側と外側を斬り刻む斬撃と僕の水圧チェンソーのような削る斬撃がブレードの根元部分を襲う！

陽乃「くっ……！ やっぱり硬いわね……！」

ピークオド『こちらピークオド、これからクイークエグと支援攻撃を開始します。離れて下さい！』

クイークエグ『支援攻撃、開始！』

僕達は『ブラッディ・シヤドウ』の空間移動で退避する。次の瞬間にピークオドとクイークエグによる支援攻撃が開始された。

アームストロング『我が国民のために死ね、承一郎！』

エクセルサスの脚が僕を踏みつけようとするのを僕は避け、

承一郎「我らの^{ダイヤモンド}絆よ、ここに力を！」

懐から仲間達の遺灰から生み出したダイヤモンドを取り出す。『クリスタル・ボーン』の力が発揮され、巨大な骨の杭に変化して打ち込まれる！

陽乃「うりやうりやうりやうりやうりやあ！」

骨の杭を打ち込まれて動かせない脚を陽乃さんが駆け登り、装甲を二刀流の連撃で破壊する！

カズ『ボス、その脚部の弱点はもつと奥の接続部だ！』

さらに僕がその奥の接続部へ走り抜ける。

承一郎「斬ッ！」

そして、僕はエクセルサスの脚を切断する！

脚を一本切断されエクセルサスはバランスを取ろうとするが、すでに六本のうち二本がジヨルノ兄さん達のおかげで動けずに頭部が前倒しになる。

承一郎「今だッ！総員、撃って撃って撃ちまくれエッ！」

ズダドドドドドオオオオン……ッ!!？

RPGなど重火器を装備したスタッフ達が一斉に攻撃を開始する。僕はそれを空間移動でエクセルサスに全弾当たるように誘導する。僕はそれを空間

バックファイヤーだって？そんなの空間繋げてデカブツに浴びせるようにすれば問題なしッ！

アームストロング『脚の一本くらいくれてやる』

頭部にたんまりと攻撃を食らってようやくエクセルサスは起き上がる。

すると次は岩盤を突き破ってできた大穴から月光の群れが現れる。そしてエクセルサスは胴体上部に装備しているものにエネルギーを充電する。あれは…RAYと同じようなプラズマ砲か！

アームストロング『正義の炎に焼かれる！』

プラズマ砲が放たれ、地面を焦がす。僕はそれを避けて周りにいた月光に同士討ち
フレンドリーファイア
 で撃破する。

他の月光達はミスタさんやオセロット達に任せて、僕はエクセルサスの脚部に骨の弾丸を撃ち込む。そしてそれが内側から突き破り、足場を作る。

承一郎「今だ、陽乃さんッ！」

陽乃「うりやうりやうりやうりやうりやあ！」

つい見とれてしまいそうな二刀流の連撃で陽乃さんはエクセルサスの脚を切断する

！

承一郎「よし、いくぞッ！僕に力を！」

再びダイヤモンドが『クリスタル・ボーン』の能力で変形して地面から巨腕のように生えて僕と一緒にエクセルサスのブレードを掴む。

承一郎「今だ、雪乃さんッ！」

雪乃『『エンジェル・ダスト』ッ！『重さ』の概念を凍られたッ！』

そう、これこそこの勝負を決める一手。

承一郎「うっ…：WRYYYYYYYYYYYYYYYッ！」

ズガアアアアアン…：…ッ!!?!

重さという概念を凍られられたエクセルサスは骨の巨腕で補強させた僕の力で背

もぎ取ったブレードをエクセルサスの頭部に叩き込んだ!

そろそろ時間だ。僕はスタッフ達をマザーベースに戻す。ここから先は僕達の問題だ。

僕は頭部がひしゃげ、最低限の原形をとどめるエクセルサスの上に空間移動する。

胴体部から黒い球体のようなコックピットが出てきて、その中からアームストロングが出てきた。

アームストロング「すばしこいガキめ、俺が直接ブチのめしてやる」

アームストロングは急に片足を上げて、振り下ろす。これは…相撲や空手の四股立ちか…?

アームストロング「うう…うおおおおオオオオオオオオオオ…!!!」

承一郎「何をやる気だ?」

アームストロングが叫ぶと、

ドバアツ!とエクセルサスから巨大な電線が飛び出してアームストロングを囲む。

アームストロングは緑色に光りながらから光合成の如く電力を吸収した。

一層筋肉を脹れあがらせた。マジで筋肉モリモリモリマツチョマンの変態だな。↑中の人は同じ

アームストロング「行くぞ!」

承一郎「武器も持たずに……！」

ところが僕は失念していた。この筋肉モリモリ（ryがスタンド使いであるという可能性を）。

アームストロングは超高速タックルで僕の体を吹っ飛ばす。そして僕の顔を両手で抱える。

アームストロング「俺のタックルはどうだ？」

承一郎「あんた、ただの上院議員じゃあ……」

アームストロングの頭突きが炸裂し、骨の鎧にヒビが入る。そこを両手でこじ開け、強烈な右ストレートが僕の顔面に当たる。

承一郎「ぐうっ……！」

僕はすぐに態勢を整えてもう一発の拳を躲し、『村雨』を振るう。

しかし奴は黒く変色した素手で『村雨』を捌ききる！

アームストロングの突きを避け、『村雨』で突きを放つが避けられて逆に手元を腕と脇を締めて固定される。突きを打ってくるのを躲すが、喉元を掴まれてしまう。

アームストロング「俺はスポーツマンだ、そこらの政治家と鍛え方が違う。一緒にされちやあ困るな」

僕は左足の蹴りを仕掛けるが、アームストロングは喉元を掴んでいた手を一度話して

蹴りを掬い上げるように左手を掴んで身動きを封じる。

アームストロング「俺がその気になれば、大統領だつてぶっ飛ばせる」ブオン!

僕はアームストロングに高く投げ飛ばされた!

承一郎「うおおッ!」

アームストロング「上院議員をなめんじやあねえ!」

僕が落ちてきたところでアームストロングは蹴りをブチ込む。なぜか歓声の幻聴が流れながら僕はコックピットの外壁にぶつかつた。

承一郎「何者だ、あんた?」

アームストロング「驚くのはこれからだ。来な、肉弾戦で負けるつもりはねえ」

立ち上がりながら僕は『村雨』の連撃を仕掛けるが、アームストロングはそれを食らいながらも顔色一つ変えずに殴りにかかる。

八幡『バカな…高周波ブレードだぞ…!!?』

八幡が驚くのも無理はない。高周波ブレードは世界で一番敵を『斬る』事を目的として生み出された武器だ。

この『村雨』は高周波ブレードの中でトップの斬れ味を誇る。さつきエクセルサスの脚を斬つた事で証明されている。

それを防ぐなんて、単なる技術テクニクではありえない。明らかにこの上院議員、

スタンド使いだ!

僕はすぐに『村雨』で防御するも、圧倒的なパワーで手が痺れる。続く二発目を回避し『村雨』で斬りかかるも、

ドグオオオオントツ……!とアームストロングから強烈な衝撃波が発生して吹き飛ばされる!

承一郎「ぐうっ……!」

アームストロング「フン、他愛もない。こんなものか、お前の力は? 所詮お前はD I Oにはるかに劣る贗作よ。ザ・ボスがなぜお前を譲ろうとしなかったのか理解に苦しむな」

承一郎「貴様ツ……!」

アームストロング「お前だつて理解しているはずだ。お前はD I Oを再現するために創られた模造品。そんな『ニセモノ』に固執したザ・ボスは愚かだよ、まったく」

承一郎「…野郎ツ!」

最大限まで伸びたゴムが放されるような瞬発力で懐に潜り込み、『村雨』をアームストロングに振り下ろすが、

ギイイイインツ……!

承一郎「なっ……」

僕の振るった『村雨』は、アームストロングの首を跳ね飛ばそうとしたはず。しかし、それは黒く色が変わったアームストロングが掴んだ手で止まるのみだった。

アームストロング「なまくらが！」

アームストロングは『村雨』の刃を掴んだ手で、あろう事かベキイツ！とへし折った！

承一郎「なつ…?!？」

…折れ…た…? 『村雨』…が…? 信乃の…形見が…? 彼の…

——プチンツ——

何かが、一瞬で、呆気なく、壊れていく感覚が、僕の体を埋め尽くす。

そして——

くジヨニイ side く

『村雨』が…信乃の形見が…折れてしまった…。

高周波ブレードは『斬る』凶器の中では最高峰の威力を持っている。だがそれだけだ。ただ高周波を流しただけ、それ以外は普通の刀と同じなのだ。

ここまでほぼ全ての戦いを『村雨』で潜り抜けてきた。何度大型無人機に匹敵するサイボーグの攻撃を『村雨』でガードし続けてきた？

だが感傷に浸っていられない。すぐに態勢を整えて奴の攻撃を回避しなければ！

ジョニイ『承一郎、気持ちは分かるが今は奴の攻撃を……！』

承一郎『……………』

八幡『おい、承一郎！』

八幡も必死に呼び掛ける。当然だ、承一郎はただ突っ立っているだけなのだ。

アームストロングの拳が承一郎の顔面に炸裂する。吹っ飛ばされて身動き一つ起こさない承一郎。この目は……どこも見ていない。信乃が死んだ時と一緒だ……ただ虚空^{ゼロ}を見つめている！

ジョニイ『八幡、俺が代わる！』

八幡『劉備は倒れ、呂布は曹操を指名してきた。孫策の出る幕じゃあない』

ジョニイ『な……………に……………』

八幡『ディオオの名を出されたなら、俺の出番だ』

八幡は強く俺を睨む。殺気に満ちた、鋭利な瞳で。

ジョニイ『く……………八幡、俺が代わる！奉仕部の理念は何だ！承一郎は終わっても、ま

だ俺が残ってる！』

八幡に呑まれながらもまだ動く……それに、奉仕部を出していく。八幡は更に強く睨み、殺気を色濃くする。

八幡『承一郎の汚名を返上できるんだらうな？これ以上、俺を失望させたらわかってるんだらうな？』

ジョニー『ああ……今は俺が飢えた人だ。だから、魚を取るべきは俺だ……俺にやらせてくれ！八幡！』

承一郎の肉体を借り受け、俺は立ち上がる。野郎……俺の顎が骨の鎧ごと擦れて高熱を帯びてやがる。

俺はアームストロングの拳を両手で受け止める。

ジョニー「確かに強いな……だがな、それだけだ」

アームストロング「なんだと？」

ジョニー「何が国民の誇りだ、何が強いアメリカだ」

俺は奴の拳を押し返す。

ジョニー「経済が悪化したのは『戦争経済』が緩和したからじゃあないッ！」

俺はアームストロングの中段の攻撃を防ぎながらの裏拳を叩き込む。続けて蹴りを蹴りで相殺した後に腹を蹴り込む！

ジョニー「お前達1%が富を独占しているからだッ！」

雷を帯びた拳はアームストロングが両手をクロスして防ぐ。

ジョニー「お前の目的は結局金だ。それから支持率ッ！」

俺はアームストロングの肩を掴んでからの膝蹴り、そして足払いで吹っ飛ばす。

ジヨニイ「お前など何の信念もない、クソにたかるウジ虫野郎だ！」

アームストロング「：ほう、言うじやあねえか。ならばいいことを教えてやる」

野郎は起き上がりながら言う。

アームストロング「確かに支持率は欲しい、資金は必要だ。だがな：俺には夢がある

！」

ジヨニイ「夢：？」

なんだこいつ、キング牧師の真似事か？

アームストロング「確かに国民の誇りも強いアメリカもくだらねえ。俺が求めるのは

真の自由だ」

アームストロングは指を空高く突き上げる。

アームストロング「力を行使する自由：法の庇護など必要はない」

アームストロングの拳を躲し、両手で防御するが弾かれてまた喉元を掴まれてしま

う。

アームストロング「もちろん誰もが力を行使すれば鬭争は生じる。だがそれでいい。

それこそが俺の望む国家だ。真の鬭争の世界だ！」

俺は喉元を掴み返すが奴はその手を引き剥がし、お互い両手を掴み合った状態で押し

込まれてしまう。そして、

ズガアアンツ！

お互いの頭をぶつけ合う。野郎、なんて頭だ！付け直した骨の鎧にまたヒビが：

アームストロング「この俺が、ぬるま湯に浸かった国民の目を覚まさせてやる！」

奴は左手を蹴りで弾いてそこから拳を放つ！

アームストロング「何が愛国心だ！何がアメリカの誇りだ！そんなもんは豚に食わせろ！」

そこから頭を掴まれ、エクセルサスの胴体部に叩きつけられる。そして無理矢理起こされ、

アームストロング「気に入らない奴はブン殴る！」

拳が顔面にブチ当たる。

アームストロング「それが俺の目指すアメリカだ！」

さらに腹に蹴りをブチ込まれて吹っ飛ばされてしまう。

アームストロング「俺が当選したら腐った社会をブツ潰してやる！セコく儲けてる柔なインテリだの、セレブだの草食系メトロセクシャルだの、わけのわからん奴らをブン殴ってやる！」

駄目押しと言わんばかりに奴はブン殴って俺を胴体部に叩きつける。

アームストロング「弱者は駆逐される、強い者だけが残る。俺達は西部開拓時代の混

沌を、古き良きアメリカ、人間が本来あるべき姿を取り戻すってわけだ！」

野郎…俺を足蹴にしやがって…。

ジョニー「どうやって…そんな…」

アームストロング「『奴』のミームだか知らんが、アメリカの規範は腐り果てた！」

ジョニー「ぐあつ！」

奴の蹴りが俺の腹にブチ当たる。

アームストロング「今や戦争も暴力も全てビジネスだ。だが、そんな戦争も最後だ。

俺がこのくだらねえ社会システムを、規範化された暴力を解体してやる！拳で語り合う個人の闘争を取り戻す！」

奴の蹴りのラッシュを俺は次から次へ骨の鎧を作り続けて防ぐ。なんてパワーだ…八幡達が知っている『ザ・オーガ』はこいつと同じタイプのスタンドライイが、これはヤバイ…！

アームストロング「どうだ？俺の政策は？」

奴は新しい葉巻にライターで火をつけて一服した後に行った。

ジョニー「あんたホントに…政治家かよ…」

アームストロング「俺の演説に感動したか？お前達も国家や企業のためではなく、己の理想のために戦う日がある」

ジョニイ「俺はあんたを誤解していたようだ…」

俺はゆつくりと起き上がりながら言う。

アームストロング「わかってくれたか？私もつまらない戦争をなくしたいんだ」

野郎は満面の笑みを浮かべながら俺を助け起こし、体の埃を払落する。そして、片手を差し出す。

ジョニイ「よくわかったよ」

俺は奴の手を取り握手握手と共に熱く抱擁――

ジョニイ「お前が本物のクズだつて事が！」

――した直後に俺は野郎を巴投げする。

筋肉モリモリ（ryオツさんの股くばあなんて誰得だよ…。

某花京院の転生者「ジョジョハチ、キマシタワー！」

…今、ものすごい悪寒を感じたが無視しておこう。というか今までなりを潜めてたの
がおかしかったんだ。

アームストロング「この社会には変革が必要だ、だが変革には犠牲を伴う！」

ジョニイ「犠牲になるのはいつも弱者だ。古き良きアメリカだと？ふざけるな！金にも体力にも恵まれて不自由なく育った奴に虐げられた弱者の痛みがわかるか！」

そう、それは弱者だった自分。母を、親友を守れなかった愚かな自分。今の強きなん

て所詮は後の積み重ねた結果だ。

アームストロング「何が弱者だ！お前は力で敵を黙らせ生き延びてきた人間だ！わかるはずだ、俺の理想が！」

確かにこいつの理想は理解出来る。元々俺が掲げてきた『天国アウター・ヘブンの外側』とは戦士達——戦場でしか生の充足を得られない者達——の理想郷。

奴が唱える理想には共感できるが、計画によつてもたらされた無数の被害者達も同時に見てきた。だから奴を許す事は出来ない。

互いが互いを認められない。

ジョニー「……次はお前を黙らせるツ！」

——故に、俺はお前の理想を壊す。

It Has To Be This Way (最後にはこうなると決まっている) その①

アームストロング「俺を黙らせてみる、他の奴らのように！」

奴——アームストロングはその筋肉隆々の右腕を振りかぶる。俺はそれを空手の外受で軌道をズラしてそこから奴の顎に掌底を叩き込む。

空手とかは集英組で仕込まれた技だ。竜の奴：容赦なく打ち込んできやがるんだよな……。俺達にCQCを教えたオセロツトはザ・ボス——母に教わったらしい。なんだかんだで俺達は『受け継いでいる』んだと感じる。

アームストロングは掌底で顔を上に向けたが特にダメージはなく、左ストレートを放つ。今度は内受けて軌道をズラし、その勢いを利用して右肘を叩き込む。

アームストロングは少し怯みつつも、某ヤサイ人みたいに力を溜める。これはツ！

俺は急いでバク転して距離を取った瞬間に俺の顔面スレスレに衝撃波が発生する！ やれやれ、本当に某マーベルコミックで出てくるような奴だな。出て来る作品間違えているんじゃないか？

だが、八幡から聞いた『ザ・オーガ』はこんな衝撃波なんて放てるとは聞いてない。俺

はすでにこいつの肉体の秘密を理解した。

こいつはクレイトロニクス（微小な自己組織化ロボットが互いに連携して機能的な要素になる機械）技術を用いた、サンダウナー達とは別系統のサイボーグだ。しかも硬化するナノマシンもあるのだろう。

ナノマシンとスタンド能力による相乗効果、だからあの『村雨』を掴みへし折る事も可能だったのだ。しかもサイボーグには電力をパワーに変換する能力がある。さっきの衝撃波もおそらくその類のものだろう。

電力が尽きるまで退却戦を仕掛けたいが奴はバカデカイエクセルサスの電力を吸収した。おそらく戦いで当分電力は尽きないだろう。

だが、ここで倒れるわけにはいかない。俺は負けたらこの脳筋野郎は世界を某モヒカ
ンが跋扈する世紀末に創り上げる。それだけは阻止しなければならぬ。絶対に！

「ジョニー「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アツ!!」？」

俺は雷を帯びた拳のラツシュを叩き込む。

アームストロング「フン、生温い！」

だが野郎はケロリとしてやがる。こいつ、承太郎さんの『スタープラチナ』や八幡の『ザ・ジエムストーン』でもタメ張れるんじゃないか？

俺は左手を奴の顎に向けて伸ばし、右手を俺のボディから顎のラインをカバーするよ

うにして半身になる。空手の組手の構えだ。

アームストロングが右ストリートを放つ。俺はそれを鉄拳ならぬ骨拳のカウンターの逆突きで合わせる。そこからさらに右足に鎧を纏わせてのサソリ蹴りを放つ。

アームストロング「ブン殴る！」

アームストロングは左右の腕を振るい、そこから蹴りを放つ。俺はそれを骨装甲付きの腕で次々と剥けていく装甲を作り直しながら捌く。そこからさらに一発拳が放たれる。

ジョニイ「WRYYYYYYッ!!?」
ウ
リヤアアアア

俺はそれに右拳でぶつける!だが、

ベギイツ!

ジョニイ「ぐおおおおおッ!」

こいつ、マジで硬すぎるッ!拳が碎けるとはいつぞやの再現だよ!

奴はまた力を溜める。また衝撃波か!俺は後方に跳んで回避しようとするが、

アームストロング「ハアッ!」

ジョニイ「なっ!!?」

さつきよりも一際大きな衝撃波が発生する!

ジョニイ「がはあっ……!!?ぐっ…ゴプッ!」

とスタンド能力の相乗効果ツ！」ビリイ！

奴は自分のシャツを破り言い放つ。その胸には一際盛り上がった筋肉の筋が。その心臓部から肉体がズズツ…と黒く硬化する。

そして野郎は拳をエクセルサスの胴体部に叩き込む。嘘だろ、『村雨』でも手こずったあの装甲を素手で凹ませやがった…。

アームストロング「便利なものだろう、承一郎？ いや、今はジョニーの方が？」
ジョニー「無駄アツ！」

俺は構わずアームストロングに殴り込むが、奴は黒く硬化して全然効いてない。

アームストロング「こそばゆい！」

アームストロングの拳が俺の腹に食い込み、吹っ飛ばされる！

ジョニー「ぐっ…！」

アームストロング「終わらせてやる」

奴は俺に馬乗りになり、拳のラツシュを胸に叩き込む！

アームストロング「死ね！ 死ね！」

ジョニー「ぐおっ！ うおおおッ！」

ポロポロになって剥げていく骨の装甲を作り続けるが、間に合わない！

アームストロング「死にやがれ！」

最後の一発が放たれ、

ドグオオオオオー……

ンツ!!?

エクセルサスがバラバラに粉碎される。そして俺は…

「ジョニー——ゴボツ！」

心臓にぽっかりと穴が空いていた。

クソツ、まさか二度も心臓に穴が空くなんてな……！急いで穴を修復しなくては……！俺は血の塊を吐き出して心臓に力を注ぐ。早くしなければ、手遅れになる！

アームストロング「おや、まだ死なんとはな」

アームストロングが俺に向かってやって来る。早く、早く心臓を再生させなければ……

！

「ジョルノ『ゴールド・エクスペリエンス』ッ！」

突然、アームストロングの体に黄金の拳が叩き込まれる！

「ジョルノ『感覚だけが暴走する』」

「ミスタ『いけツ、『セックス・ピストルズ』！』」

感覚だけが暴走するアームストロングに弾丸が命中する！

！
 ジオルノ兄さんは俺の体を掴んで退避する。八幡が俺の能力で飛ばしてくれたのか

「ジョルノ「無茶をするね君は！」

「ミスタ「そうだな、なんで俺達を帰したんだ？」

ブラッディ・シャドウ

B S (ジョニイ)『：すみません、最後はこつちの世界の人間として俺だけで終わ

らせたかったです』

胸に風穴が空いて喋る事が出来ずに俺はスタンド越しで話す。

BS『クソツ、「村雨」をヘシ折るなんて…。奴は皆さんが戦った「ザ・オーガ」よりもナノマシンでさらにパワーアップしています』

ジョルノ兄さんは適当な物で俺の心臓を作り、応急処置を施す。

アームストロング「個人で敵わないなら、全員でくるか？良いだろう。お前にはそれがお似合いだ。フン、恨むのなら自分を恨むんだな！自分の無力さを！

お前は何も守れないのだ！自分の身さえもな！」

ジョニイ「なっ…!?？」

それは…！その言葉は…！

アームストロング「お前は知っているはずだ、この言葉を。我が部下、『マイク・O』をかつて殺したお前はな」

ジョニイ「こいつッ……！」

アームストロング「そう、俺があの時お前達の始末を命じたのだ。『奴』に指示されただがな。お前だけが生き残るとは、奇妙な話だな」

こいつがッ……！俺達の始末を命じただと……！だとしたら、こいつがあ的事件の黒幕ッ……！

アームストロング「部下の不祥事は上司であつた俺が責任を持って始末しなければな」

奴はゆつくりと、しかし確実な足取りで俺に近づいてくる。

——こいつを、絶対に赦すな——

次の瞬間、視界にノイズが入り……

——ここは……どこだ……？——

薄暗い、研究室のようだ。俺の周りには何かガラス管が覆い、液体が埋め尽くしている。口には……酸素を供給するマスクが。

そして、そのガラス管の外側には二人の男女が。

——おかしい、俺はこの二人を知っている——
奥からさらに男がやってくる。

男1 『——』

男2 『——』

女 『——』

会話は聞き取れない。何を話しているのか分からない。でも、

——こいつらは、赦してはいけない——

なぜか、そう思った。なぜなのだろう、それは分からない。だがそう直感した。

メリ：メリイ：

男1 『——！』

男が叫ぶ。額から角が生える。

こいつらが元凶だ。こいつらが、いや、今やってきた男が母を殺した犯人だ。

怒りが、憎悪が、目の前の世界をドス黒い真紅の色に染まってい——

急に視界が元に戻り、倒れている皆とゆつくりと近づいてくるアームストロングの姿が見えた。

「ジョニー」——リミッター制御、70%解除」

今、俺がやる事はただ一つ。あいつが立ち上がる時間を作ってやる事だ。

ジョニイ「——ブレイク・ダーク・サンダー闇破る雷光発動…身体損傷度、許容範囲内。オールグリーン全て平常」

バチイツ！と体が雷を浴びる。

アームストロングの言った通りだ。俺達は出来損ないだ。人として決められた寿命を持ちながら再生するという矛盾した肉体。不老ではない不死、それは人の数倍も老いるスピードが速いという事。

でも、それでも。俺は、俺達は。母が愛した、皆がいる世界を守る。

八幡『その力は、反動が伴うだろう？何分持つ？』

ジョニイ『八幡止めるな、まだ大丈夫だ。コレを使えるのが1分だけなんだ。その間にそのバカを起こしてくれ』

八幡『出来るんだったら、お前が終わらせたらどうだ？』

ジョニイ『俺は居候なもんでね。決着をつける権利があるのは本来の持ち主である承一郎だ。まあ追い込めるところまでやってやるさ』

俺は全身に雷を帯びて立ち上がる。

八幡『承一郎が起きるまで持たせる。そして反動の方は俺が何とかしてやる。万全の状態でお前らとジョルノ達を奴に送り届けてやるさ』

ジョニイ『陽乃さん達もか!? 奴は危険だ!』

八幡『お前、やつぱりパツシヨーネや陽乃さんを甘くみているよ。特に陽乃さん。陽乃さんを交えた俺やジョジョの三人がなんて言われてるか知ってるか?』

ジョニイ『なに?』

八幡『性悪トリオ。因みに陽乃さん単独では魔王と呼ばれるまである』

ジョニイ『嘘だろ……』

『おいおい、誰かこいつのストッパーになる人はいないのか? 徐倫さん達はまだ分かるが……』

ジョニイ『性悪コンビの片割れは静・シヨースター以外にもいたんだな。舐めてたよ、陽乃さんを。任せたぞ、八幡』

八幡『ああ』

アームストロング「…ん? ほう、やつと立ち上がったか。どこからでもかかってくる——があッ!??」

いきなりアームストロングが吹き飛ばす。その元いた場所には俺が立っていた。

ジョニイ「兄さん。まだやらせて下さい。八幡が場を整えてくれるそうです!」

陽乃「へえ? 出来るの? 君達に?」

陽乃さんが口端を吊り上げながら訊ねる。

その目は全てを見透かすように薄笑いを浮かべている。

改めて見てみると……底が知れないな……お前や静・ジョースターと似た者同士……いや、下手をしたらそれ以上に性格が悪い……なんて人を侮っていたんだ。

「ジョニー——」
『ブラッディ・ファントム血の亡霊』

勝利のボスは、ここに高らかに勝利を宣言する。

雪乃「……ジョニー……？」

ミスタ「遅かったじゃあないか……」

ジョニー「……すまない皆、待たせたな」

ジョルノ「……ホントに君は待たせてくれるね」

ジョニー「……後は俺に任せてくれ」

俺はそう告げ、アームストロングが吹き飛んだ場所へ音の速さで移動する。

音速、それは光速の次に速い速度。

ブラッディ・ファントム
血の亡霊は肉体操作の技で最強の切り札だ。波紋の呼吸と吸血鬼の体質によるドーピング、闇を破る雷光で体に送られる電気信号の高速化にスタンドを重ね、無理矢理100%の痛覚抑制を行いさらに脳の制限を解除したりする事で速度を追求した結果、音速の動きを可能にした絶技だ。

その余りの威力に戦闘班プラットフォームが無駄の一つ海の藻屑になったのは『不可能を可能にする男』としてスタッフ達が酒の肴にしていたのはいい思い出だ。

ただし、その反動は余りにも大きい。制限時間が過ぎると痛覚抑制が解除され全身に想像を絶する痛みが全身を駆け巡る。元々、制限時間内は制限を外す事によってあらゆる筋繊維がズタボロになり、骨も全身粉碎骨折、立つ事すらも不可能になる事を行っているのだ。

向こうの世界での四年前の八幡達との戦いでこれを使わなかったのはこの技は集団戦には向いてなく、音速の動きだと力の加減が難しいからだ。

それを無理矢理痛覚抑制で痛みによる反射を抑えているのだ。ハイリスク・ハイリターンとはよく言ったものだど苦笑してしまふ。

制限時間はたった1分。1分以内に敵を倒さなければならぬ代わりに圧倒的な速度を手にする事が出来る。

ジョニイ（1分以内ッ！1分以内にこいつを殺すッ！）

バチバチと全身に雷を迸らせ、俺は起き上がるアームストロングへ走る、いや跳ぶ。光速より遙かに劣ると侮る事なかれ。秒速約340m、つまりジェット機並みの速さの拳が正面衝突するのだ。

一発一発の拳が円錐状の衝撃波を発生させながらアームストロングの体に叩き込まれる。

アームストロング「ぐうっ!??!」

ジョニー「あんたの弱点はな、アームストロング。硬化能力が心臓から広がる事と……」
ドガガガガッ!スパアンツ!

そこから音速のラツシユが炸裂、蹴りでさらに吹き飛ばされる。

ジョニー「たとえ一瞬で硬化するといつても音速秒速約340m以上のスピードで硬化で防ぎきる

のは不可能だという事だ!」

瞬時に吹き飛んだアームストロングの背後に移動、顎を蹴り上げて空中に吹っ飛ばす。そのまま跳躍、アームストロングへ突っ込む。

アームストロング（いくら圧倒的に速いといつても動きは突っ込むだけで単調……!そこを突けば……!）

ジョニー（……とか考えてるだろうがそれは弱点じゃあない。逆にいいんだ、これが!）
アームストロングは吹っ飛ばされながらも俺が突っ込むであろう場所に拳を振るう。

（承一郎 side）

僕はゆつくりとその臉を開ける。一体、今の光景は…？

八幡『よお、新兵以下。気分はどうだ？』

承一郎『新兵以下だと…？』

八幡『違うのか？刀が一本、折れた。ただそれだけだ。それで茫然自失か？』

承一郎『ただそれだけだと？村雨は信乃の…』

八幡『俺がレクイエムを使った時、材木座と由比ヶ浜を失った』

承一郎『!!』

八幡『放っておけば、あのまま全滅だった』

承一郎『…』

八幡『お前は言つたよな？何故お前を呼ばなかったって。何が出来たんだ？あの時の状況で、こんな脆いお前が。お前がいたとしても、結局俺はレクイエムを使うしかなかったんだよ』

承一郎『僕だったら…』

八幡『何が出来る？誰が信じられるか。何かを失つて…敵の前で棒立ち。新兵がかか

るような病気に陥ったお前を……誰がお前を信じられるんだ？ 答えてみる。ツエペリさんを失ったジヨナサンは？ シーザーや花京院を失ったジヨセフは？ アヴドウルとイギーを失ったポルナレフさんは？ シゲチーさんや辻彩さんを失った仗助は？ ナランチャさん、ブチャラテイさん、アバッキオさんを失ったジヨルノは！ F・Fさんやウエザーを失った徐倫は！ みんな前に進んだ！ 少なくとも敵の前で棒立ちなんてしなかつたぞ！ お前はホントにジヨースターか？！？」

承一郎『……』

僕は答えられなかった。

八幡『今はジヨニイがアームストロングと戦っているのに本来の体の持ち主であるお前はここでただ突っ立ってるだけなのか？ それならそれで構わん。いっそ、ジヨニイが今後は一条承一郎として生き、お前は一生影で震えている。奉仕部は飢えている癖に魚が調理されて差し出されて来るのを待っている奴に手を差しのべない。ただ冷たい目で嗤いながら、飢え死ぬのを見ているだけだ。魚を食べながらな』

八幡『選べ。ただのモンキーとして飢え死ぬか、ジヨースターとして自分で魚を取るか』

八幡から凄まじい殺気が放たれる。

承一郎『……今の僕はお前の足元にもいないんだな……僕の方が強いはずなのに。強い

ではなく、怖い。何があったんだ？お前は……』

八幡『さあな。平行世界を渡り歩けばわかる。苛つく事や呆れることばかりだ。お前が別の世界の戦う一条楽と会えば分かるかもな』

なるほど、八幡も向こうの四年の間に数々の修羅場をくぐり抜けたようだ。

八幡『で、どうするんだ？俺はどっちでもいいんだぜ、ジョニイの頼みだ。決着をつける権利があるのは本来の体の持ち主であるお前だってよ……。あいつは甘いな、お前に。俺だつたらさつさと切り捨てているぞ』

承一郎『…彼は前に言っていたんだ。「俺達は未来のために戦うんだ」って…彼は僕よりも母を殺した世界を呪っているはずなのに…』

僕はゆつくり起き上がる。

承一郎『…ありがとう八幡、君も甘いと思うけどね？』

八幡『抜かせ。それでどうする？』

承一郎『僕にやらせてくれ……』

ジョニイは圧倒的なスピードでアームストロングをタコ殴りにしている。

八幡『あんな技があつたとはな…あれがお前達が戦っていた切り札か？』

承一郎『…狂つた世界の規範ドグマさ。ジョニイは奴を追い詰めている。だけど一分の間だけだ。奴が電力の消費を覚悟しての耐久戦になったらヤバイ。どうにか出来るのか？

アームストロングを…」

八幡『まあな。見ていろ』

「ジョニイ side」

ジョニイ「おおおおおッ！」

あと少し！あと少しで全てが終わる！

ジョニイ「無駄アツ！」

拳が叩き込まれるが…

ガキインツ！と音を立ててアームストロングは白い人工血液を流しながらも全身を黒く硬化してガードする。

アームストロング「確かに速い…圧倒的だ。まさに神の子^{Dio}、しかしだ。多少は防げなくてもこう全身を硬化し続ければお前は自滅する。音速の動きだ、何かしらのデミリツトがあるはずだ。それに制限時間^{タイムリミット}もだ。あとどれくらいで終わる？」

野郎、電力の消費を覚悟で全身を硬化し続けるとは…多少はダメージは入るがこれなら制限時間が来てしまう。

なら一撃必殺をお見舞いしよう。俺は距離を置いて、右手に手刀を構える。バチバ

チイツ！と腕に雷が収束する。要はアレだ、○鳥だ、雷○だ。

ジョニイ「食らえ、そして死ね！」バチイツ！

アームストロング「いいだろう、これで終わりだ！」ボオッ！

アームストロングも右拳に炎を纏い、思い切り振りかぶり、走り出す。

雷と炎が、衝突する。

永遠に思われた一瞬の拮抗が終わり、俺の手刀の突きが奴の拳の甲を斬り裂いてズレ、奴の拳は俺の頭を掠め、俺の手刀は奴の腹に命中する！

アームストロング「ぐおおおおッ！」

突きの勢いでアームストロングは吹き飛ばされる。止まった俺は…

ジョニイ「ぐううっ…！がああっ…！」

痛覚抑制が解除され、今まで溜めていたツケの痛みを味わっていた。全てがかき混ぜられるような苦痛が体の感覚を埋め尽くす。

…まだ、耐えられる。こんなもの、癒える事のない幻肢痛フアントム・ペインに比べれば…。

↑アームストロング「ぐっ…めだか○ックスにNARUTOとは…パクリすぎだろう」

野郎、やはり防御に全力を出して突きを防いだか……!

ジョニー「二次創作って時点ですでに誰かの作品から着想を得て創られた模造品オマーージュだつて知らないのか?というかお前ホントに出る作品間違えているぞ。お前どちらかというとハルクやらアヴェンジャーズと戦う敵ライアンだろう。しかも武装色の覇気に火拳銃レッドホルク、拳句の果てに北斗剛掌波だぞ?お前こそパクリすぎだつーの。集英社が黙ってないぞ?」↑メメター!

ついでに言ううと荒木先生は『進化』だ。『パクリ』ではない。異論は認めん。

八幡『おい、急にメタ発言多くなってきたぞ?』

ジョニー『気にすんな。で、どうだ?あのバカは起きたかよ?』

承一郎『君が頑張っている以上何が何でも立ち上がらないとね』

ジョニー『やれやれ、最後のオトリで復活かよ……お前はホントに待たせてくれる。八幡、悪いな。失望しちまったか?』

八幡『まったく。それも切り札はそれか。提案するぞ。これが終わったら平行世界を渡り歩け。ノーリスクでそれが出来る奴がごまんというぞ?ブラッディ・シャドウみたいな能力もな。お前の暴走もそこで何とかなるかもな。さて……依頼は半分終わった。残りの依頼を果たす。お膳立てが終わるまで俺と代われ。ジョニー』

ジョニー「なに!方法はあるのか!?八幡!じゃあ、頼んだぜ!八幡!」

八幡は俺と入れ替わって肉体を支配する。

八幡「コオオオオオオオ……」

なるほど、僕やジョニイレベルの波紋では無理でも八幡の波紋ならば……それも吸血鬼に影響力を及ぼさない方法で可能なのか。

ジョセフさんやツエペリさんの転生者の技術と八幡の吸血鬼としての経験、僕の特異な体がミックスされて初めて出来る芸当だ！

アームストロング「貴様……ジョニイでも承一郎でもないな……」

場を支配する八幡の殺気に充てられるアームストロング。

ジョルノ「出てきたね？八幡。そろそろ痺れを切らす頃だと思つたよ」

八幡「まあな。まあ、ここは俺に任せろ。ジョルノ達の出番は最後の最後だ」

八幡はアームストロングに向けて足を進める。

アームストロング「誰だ？貴様は」

八幡「誰だは無いだろう？お待ちかねの奴が（ポン！）登場したのによ」

アームストロング「グッ！」

さりげなく会話をしながら、何でも無い風に拳銃を発砲した。攻撃する意志を一切見せない攻撃。

素早く動いた訳でもない。だが、世の中どういった攻撃が一番怖いか……。こういつ

た攻撃だ。このタイミングは無いだろう？という攻撃。実はそういった攻撃こそ対処が難しい。

八幡「D I O……訳あつて別の世界から魂だけが流れて来た。それを承一郎が拾い、体を共有している」

ジオルノ「僕達はその世界から彼を回収しに来ただけだ。もつとも、お前を放置する気は無いけれどね」

陽乃「この世界にもわたしや雪乃ちゃん、八幡くんもいるんでしょ？だったら始末しないよね？八幡くん？わかっていると思うけど、モード変更だよ？」

八幡「了解ですよ。アイツの対処法ですね？」

陽乃「劣化も良いとこだけどね♪」

アームストロング「ほざけっ！」

テレフォンパンチが襲ってくる。

八幡「承一郎、ジョニイ、見ている。こういう脳筋はこう対処する！ザ・ジェムストーン！」

アームストロングはその筋肉隆々の右腕を振りかぶる。八幡はそれを空手の外受けで軌道をズラしてそこから奴の顎に掌底を叩き込む。ここまではジョニイと同じ。違うのはここからだ。生身かスタンドかの違いはあるが、生身でもやることは変わらない

い。

掌底を振り抜くのではなく、顎に当てたまま首を後ろに反らせる。日本拳法首返し。八幡は更にアレンジを加え、相手の顔に張り付けた指先を目玉に突き入れる。

アームストロング「ギアアアアアア！」

だが、まだ終わ리지やあない。完全に首を反らされ、海老反りになっている奴の腕を反対の腕で手首返しをしながら一步前に踏み出し、大外刈りの要領で奴の軸足を刈る。もちろん、全体重を顎に置いている手に加えて頭から落とすように（しかもガラクタの角に向けて）する。

頭から二人分の体重を顎に乗せられ、腕関節を極めつつ、頭から落ちる投げ。加えて落下と同時に更に目を抉るおまけ付きだ。

アームストロング「グアアアアアア！目が！目が！目があああああ！」

八幡「はい♪一回死亡。弱いな、お前」

ついでに決まったままの腕を更に捻り、そのままボツキリとへし折る。八幡は大して自分の力を入れていないこと。死に体になっていたアームストロングの体に一工夫しただけだ。

ジヨニイ『つええ……普通ならこれで終わってる……』

承一郎『しかも相手の力を利用して複数の攻撃を僅かな動作でやっている……それも躊躇

踏いなく…これが今の八幡…」

自分の力が通用しないなら、敵の力を利用する。それが八幡の戦い方か！

アームストロング「き、貴様あ……」

電力を使って回復したアームストロング。ヨロヨロと立ち上がるアームストロングは先ほど同様に左ストレート。それもジョニー同様に軸をずらした後に……

ゴスツ！

膝で金的を食らわし、下ろす足でアームストロングの足を踏みつける。そしてアームストロングの脇を潜りつつ再び手首を極める。肘を相手ののどにかけ、八幡は素早く背後に回って奴の軸足を八幡の太ももの上に乗せる。再び死に体になったアームストロングの喉から落ちるように自分ごと倒れ込む。

倒れたと同時に二人分の体重を乗せたエルボードロップが喉に落ちる。八幡はすぐさま後方回転の要領で立ち上がる。

八幡「二度死亡。もう止めといた方が良くね？サンドバッグにしかならんわ。まだマネキンの方が練習になる」

承一郎『更に敵の心を抉り込む口の悪さ……』

ジョニー『俺達の苦戦は一体……』

八幡「テレフォンパンチの隙だらけ。苦戦する方が間抜けだろ。何で投げねえんだ

よ。何で急所攻撃一発で満足してるんだよ。ここまでやれよ。いや、マジで」

承一郎&ジョニイ『マジでこええ……最初の不意打ちと良い、この殺意高い投げ技と良い、普段のアレはマジで遊びだったんだな……こいつは』

さて……大分回復してきたか？

八幡「つまらん。お得意の衝撃波も対処法はパツと考え付く限り、3パターンあるしな。このまま俺がやっても構わんが、やるべき人間は魂だけの存在がやることじゃあない。後は承一郎とアーススのパツシヨーネ組がやるさ」

そう言つて八幡は倒れて動けないままのアームストロングから距離を取る。

八幡「モード、ガンズ・アンド・ローゼズ！」

八幡は指を掲げて吠える！

八幡「アースス、スクランブル！決める！パツシヨーネ！雪ノ下姉妹！承一郎！」

八幡は叫び、僕にコントロールを返した。

<|| to be continued ||

It Has To Be This Way (最後にはこうなると決まっている) その②

僕の体の中に意識を沈ませ、八幡は僕の意識とすれ違う。

承一郎『甘く見ていた。力がないお前を…だけど、恐ろしい……弱いだなんてとんでもない。どんな経験を積みばここまで非情になれる……』

八幡『力や能力だけに頼っている奴は敵じゃあない。どんなに力があっても……いや、力があるからこそ逆に俺の技に利用できる』

八幡は無表情のまま目を僕を向ける。

八幡『安心して帰らせてくれよ。相棒と同じ7代目のジョジョ。そして、魚を取れ』

承一郎『ああ。任せてくれ。必ず自分で魚を取ってやる…なあ、八幡』

八幡『あ?』

承一郎『いつかはお前とは別の形でたどり着く。真実の先にな』

八幡『楽しみにしてるよ』

承一郎『ああ』

八幡は僕とタッチを交わし、ジョニイに場所を譲る。

ジョニー『行つてこい、兄弟!』

承一郎『ああ、任せてくれ』パチイン!

僕はジョニーとハイタッチを交わし、体に戻る。激戦に戻つた僕。意識の中に残る八幡とジョニー。

八幡『ホントに真実にたどり着いたとき、再び並び立つかもな』

ジョニー『たどり着いてやるさ。そしてまた、追い抜いてやる。お前よりも遙か高みにな』

八幡が引つ込み、僕が再び表層に出てくる。

承一郎『完全にベストに戻してくれてある。極めた波紋がここまでとはな。それより上を行く小町はどれだけ強くなっているのやら……』

僕は万全に戻してある体調に驚く。

陽乃『驚いた? 承一郎くん?』

承一郎『ええ。それに、見誤りましたよ。陽乃さん。性悪トリオらしいですね?』

陽乃『まあね。お姉さんの本性を簡単に見破れる人はそうはいないからねえ。初見で見破つたのは八幡くんとジョセフさんくらいかな?』

陽乃さんが楽しそうに言う。

承一郎「そう言われて楽しんで笑う辺り、同類ですよ。あなたと八幡と静さんは僕は苦笑いしてぼそりと呟く。」

さて、お喋りの時間はここまでだ。僕はアームストロングを見る。奴は無傷のように見えるがそれは電力を消費して傷口を修復しただけだ。あれはエネルギーを消耗する。体もそうだけど、八幡くんに完膚なまでにやられた精神的ダメージまでは癒えないようだ。僕の中に八幡がいる。これはかなりのプレッシャーだろう。

承一郎「陽乃さん。奴の衝撃波を破る手段はわかったんですか?」

ジョルノ「見破ったよ。方法は3つ。1つは留美、1つは君の力で封殺できる。いや、回避できる。でも、完全に封じれるのは雪乃さ」

そうジョルノ兄さんが言うのと、雪乃さんが首を振る。

雪乃「私のエンジェル・ダストではあの熱量を相殺するのは不可能よ。材木座君でも耐えられないわ」

承一郎「!!?そうか……何故雪乃の力を上手く使おうと考えなかったんだらう!雪乃の力なら……アームストロングは敵じゃあ無かったんだ!」

僕はようやく気づいた。

留美「そういうことなんだね。私と承一郎……それに雪乃の力を加えれば……」

そして、陽乃さんは描いた作戦を皆に伝える。ジョルノ兄さんや留美さんが何も言わ

ないところを見ると問題は無いみたいだ。

承一郎「全員の力を一つにですか」

ウルフ『ならばこれも持つていけ。承一郎』

ボロボロになったウルフがエクセルサスの残骸から立っていた。その口には、あの『ムラサマ』が。

承一郎「ウルフ……！」

ウルフ『再生開始』

サム『……面白くなってきた。あいつの中にいる悪霊とやらのおかげでさらにあいつは強くなったみたいだ。アームストロングの理想もいいが、一本の剣でどこまで行けるのか見たくなった』

承一郎「サム……？」

サム『俺が承一郎に勝てばそれでいい。所詮はあいつはそこまでの男だつて事だ。だが万が一……俺が負けたら、……この刀のIDには時間制限タイムリミットが付けてある。後はお前に任せた。よろしくな、ウルフ』

アームストロング「味な真似をするじゃあないか、浪人者め……。それでどうする、野良犬？刀を換えればこの小僧が勝てるか？」

精神的シヨックから立ち直ったのか、アームストロングが僕達に言ってくる。

アームストロング「どうしようとお前の自由だ。だが自由には責任を伴う。承一郎が死んだら自分がどうなるかわかっているな？」

ウルフ『AIの俺に死の恐怖はない』

アームストロング「ん…？」

ウルフ『生物のような個体維持本能はない。俺が望むのはミームの継承…そして俺が死ねば、そのミームは途絶える…』

アームストロング「知的な判断だ」

ウルフ『…だが承一郎、俺もお前のミームに感染したらしい。サムの話聞いた時は戸惑いもあったが、俺の規範は決まっていたようだ』

AIの規範か。ウルフ、君は真の『知性』にたどり着いたのか。

ウルフ『誰かに助けられた者は誰かを助けたくなるってわけだ！』

一瞬、ウルフの機械のフェイスがニカツと笑ったように見えた。僕も笑い返す。どうやら一匹狼ローンウルフは自分の答えを見出したようだ。

アームストロング「ほざけ！」

アームストロング跳躍、『ムラサマ』を奪おうとするが、ウルフは啞えていた『ムラサマ』を僕に飛ばす。

鞘と手はすれ違い――

パシイッ!

『ムラサマ』が僕の手にとまった。

アームストロング「犬畜生が!」

アームストロングはウルフを蹴り飛ばす。

承一郎「ステイヴンツ!」

僕は『ムラサマ』の鞘と柄を両手で掴む。

承一郎「確かに僕は『ニセモノ』だ!」

スラアツ:とゆっくりその紅き刀身が新しい主を受け入れるようにその姿を見せる。

承一郎「だからこそ、戦おう。僕のために散って行つた生命いのちに、これからも意味をも

たらし続けるために:」

僕は『ムラサマ』をアームストロングに突きつける。母さんや信乃、そして多くの命

を散らした仲間達。全てが僕の隣に並んでいるように幻視みえた。

そして陽乃さん達の回周りも:ジョジョと呼ばれる者達の為に散っていった仲間

やD I Oの部下達:そして、この世界の陽乃さん達:託された。

陽乃&承一郎「新生クリスタル・クルセイダーズ!スクランブル!」

アームストロング「ほざけえ!再びD I Oを引きずり出す!」

アームストロングは跳躍、地面に着地する。

角がせり出す。僕はそれを掴み：

ベキイツ！とヘシ折る。

：今は、今だけは憎悪をしまおう。ただ全力を尽くして、目の前の敵に勝つ！

そしてもう一本の鞘に収められた刀の柄に手に取る。それは、半ば折れた『村雨』。

そこに多数の虫が集まる。八幡が戦っている間にジヨルノ兄さんとピストルズが破片を集めて虫に変えていた。

承一郎「兄さん達……」

ミスタ「大事な物なんだろう？感謝しろよ？」

承一郎「ありがとう……アーシス」

僕の目に更なる力の炎が灯る。闘志が戻ってきた。

アームストロング「来るがいい」

承一郎「オーケー……いざ、参る！」

戦闘BGM『It Has To Be This Way』

アームストロング「もう戦争なんてどうでもいい。お前らを殺すだけだ」

承一郎「いくぞアームストロング、電力の貯蔵は充分か？」

僕は制御を解放して、両手に持つ二本の刀の重みを感じながら走り出す。

アームストロングが地面を殴り炎の壁が殺到する。

留美「ステイツキー・フィンガーズ！」

留美さんが作り出したジツパーに全員が入り込む。衝撃波封じの手段の一つ、地面に入ってやりすごす作戦だ。

ブラッディ・シャドウでまとめて炎の壁や衝撃波の内側に移動するでも可能だ。

承一郎「ナイスだ留美！」

炎の壁をやり過ごした僕達はジツパーが閉じるスピードを利用して一気に接近する。接近するのは僕と陽乃さん。

まずは陽乃さんから接近する。

陽乃「はあ！」

キーン！

アームストロングは『アヌビス神』をガードし、陽乃さんに拳を当てようと腕を振るってくる。それを陽乃さんは刃で受け止め……そして梃子の原理で逸らす。

承一郎「陽乃さん……それではまったく意味が」

陽乃「その力、覚えたわ。全てで無くても良い。八幡くんのように最低限の力でいなくらいの力を覚えればそれで充分なのよ？」

再び拳を振るってくるアームストロング。だけど、力が乗る前に陽乃さんが入り身で肘を押さえて封じる。

全力の勢いが乗った状態ならともかく、力が乗り切る前に押さえられてしまつてはなす術は無い。

陽乃「承一郎くん！わたしがいなしている間に！」

承一郎「そういうことか！」

僕が波紋で一気に懐に入り、陽乃さんがアームストロングの押さえている腕に『村雨』の水圧カッターと『ムラサマ』を振るう。散つたのは白い人工血液^{ホワイト・ブラッド}。やはり『村雨』本体ならまだしも水圧カッターなら使い道がある。『ムラサマ』もすごい斬れ味だ！

僕の『ムラサマ』はアームストロングの左腕を切断する。

アームストロング「ふ……………」

アームストロングは不敵に笑う。

ただどな、八幡は言ってるんだよ。モード、ガンズ・アンド・ローゼズだって。

承一郎&陽乃「ふ……………」

反対に僕と陽乃さんは笑い返す。

僕達はツープラトンの前蹴りをアームストロングに放つ。ダメージを与える為じゃない。蹴った反動でアームストロングの間合いから一気に離脱する為だ。

案の定、奴の腕は断面と断面がくつついて元に戻り、さつきまで僕達がいた場所に再生された拳が通過する。電力をナノマシンに伝達させて再生させる能力は、八幡が潰した両目が再生されている事で見破った。

いや、何となくジョニイの戦いでも体が再生されている段階で気が付いていた。

戦い方は『ザ・オーガ』でも、能力は『ガンズ・アンド・ローゼズ』みたいなもの。切断も治してくる。僕と陽乃さんはそれを見越して間合いを離れた。

アームストロングは僕達を追って一気に間合いを詰めようとするけど……

ピストルズ『ヒヤッハー！もう一度失明しちまえー！』
アームストロング「おのれ！またしても目が！」

ミスタさんが放った弾丸を曲げてピストルズがアームストロングの目に命中させる。普通ならそこで弾丸が脳に達してジ・エンドだけれど、そこまで望むのはこの脳筋には無理なようだ。

ホントに脳まで筋肉で出来てるのか？でも、ミスタさんの目的はアームストロングの鼻を挫くこと。ピストルズとアームストロングとは相性が悪いけれど、このくらいの真似はできる。

その隙について陽乃さんが逆に間合いを詰める！

陽乃「はあ！」

アームストロング「バカめ！見えずともガードを固めれば良いだけだ！」
ギイイイイン！

陽乃さんの斬撃がアームストロングの首に決まる。アームストロングのガードを透過して直接首に決めた。だけど、固すぎる！

アームストロング「バカめ！そんなナマクラが通用するとも思ったか！下手をしたら首を狙ってくると思って固くしていたのよ！」

アームストロングは陽乃さんを狙ってアツパーを放ってくるけど……バカはあんただ。

陽乃さんは『アヌビス神』を消してアツパーを入り身で回避。

承一郎『『クリスタル・ボーン』！』

失明しているからわからなかっただろう？すぐに再生できると踏んで逃げに出なかったあんたのミスだ。一瞬でも失明させれば良い。

まったく同じタイミングで僕も間合いを積んでいたことに、足音を完全にシンクロさせていたから陽乃さんが一人で間合いを詰めていたように感じたはずだ。

それが甘いのだ。だから大降りのアツパーなんて外せば隙だらけのマネが出来る。そこが付け入る隙。

がら空きになったボディに、僕は……

CB「オラオラオラオラオラオラア！」

しこたま拳のラツシユを叩き込んで殴り飛ばす。

アームストロング「ぐはあああああ！」

吹き飛ばされたアームストロングはエクセルサスの残骸に叩き付けられる。

アームストロング「ならばこれならどうだ！」

アームストロングは再生してエクセルサスの上に立ち、純粋な腕力で残骸を持ち上げる。

ジョルノ「やれやれ、どこまでも『ザ・オーガ』だね。そう来ると思ってそれには『ゴルド・エクスペリエンス』の拳を叩きつけておいた」

平塚という人は巨木を引っこ抜いて投げて来たみたいだ。まったく同じ手段で来るだろうと見越してやっていたんだ。

アームストロングが持ち上げている場所の部分だけ、鮫に変化し、その両腕を飲み込む！鮫の顎の力は強力だからな。いくら固くても食い込むだろう。

アームストロング「お、おのれ……だが、再生させれば！」

雪乃「その再生の力も、もう使わせない。チェックメイトよ。アームストロング上院議員。フリージングビーム！」

決まった。これを狙っていたのだ。確実にヒットさせるこのタイミングを。

雪乃「あなたから、ナノマシンの概念と電気を利用する概念を奪ったわ……。もう、あなたはそこから抜け出す方法はない。気付かなかったかしら？あなたの足元は既に……」

トリツシュ『スパイスガール』……あんたの足元は既に底柔らかく変えてある。時間が無かったから底無し沼とまではいかなかったけど、あんた一人を沈めるには十分な深さ」

ズブズブズブズブ……

既に腰まで埋まったアームストロング。どんな力を持っていても、ここまで埋まってしまつては脱出不可能。

陽乃「決着はあなたが付けなさい。承一郎くん」

承一郎「了解です。まさかこんなにアツサリと……」

僕はサムの『ムラサマ』でエクセルサスの残骸を焼き付くし、ついでにアームストロングの腕を消し飛ばす。

承一郎「放つておいてもそのまま終わりだが、せめて最後のけりだけは……お前の命だけは僕が終わらせる！せめてものけじめに！」

この憎悪は消える事はないだろう。けど……

心臓の位置に全身全霊の力を込めた斬撃を叩き込む。
奪ッ!

承一郎「これで終わりだッ!!?」

ドズウッ!

僕は二刀を収めて心臓へその右手を突っ込み、そして心臓を手で掴む!

アームストロング「さすがだ…承一郎…」

承一郎「夢は消えたな」

僕は一気に奴の心臓を引き抜こうとするが、奴の腕がそれを止めて、引き寄せる。

アームストロング「いや…個人と個人が戦い…強い者が勝つ…それが、俺の理想だ。

これからも…商業化した戦争や…信念を持たない豚どもがはびこると思うと…反吐が出るが…」

アームストロングはよろめきつつもしっかりと僕を掴んでその細々とした掠れ声を呟く。

アームストロング「だが…俺は良き理解者に出会えた…」

アームストロングは一拍置いて僕に語りかける。

アームストロング「…なあ、承一郎。お前はこれからも…力で、気に入らん奴を…ブチのめせばいい…。それこそが、俺の夢の…体现だ…」

僕はアームストロングの肩に手をかけて、ズリユウツ！

一気に引き抜く。アームストロングは仰向けにぶっ倒れ、胸から人工血管が伸びてその先には人工の心臓がドクン…ドクン…と僕の手の中で動いていた。

グシヤアアツ！

僕はそれを握り潰す。心臓が潰れ、中に詰まった白い人工血液が僕の手を白く染める。

アームストロング「嬉しいね…お前は…もう一人の…俺だ…」

アームストロングはそう呟き、目の輝きが失われていった。

太陽を背中から照らされて、僕の影はアームストロングに重なるように伸びていた。

そして、僕の影に溶け込むようにズブズブと底無し沼に沈んでいった。

…信乃…皆…仇は取ったよ……。

八幡『ヤレヤレ、世話の焼ける』

ジョニイ『この四年間、何があつたんだ？お前は…強いではなく怖い……それがお前にはある』

八幡『色々やつたんだよ。それも平行世界を渡り歩いてな。お前もレクイエムに言わ

れたはずだ…真実の先へ到達しろってな…。この世界にウルフスが現れない保証は無いしな』

ジョニイ『ウルフス？』

八幡『うちの世界の元凶だよ。ワシントンで話しただろ？ブラッディ・スタンドと東の柱の一族、それにウルフスの事は』

確か前に八幡から聞いた事があつた言葉だ。 U n t i i n t e g r i t y L i f e F o r m S t a n d アンチ知的生命体スタンド…目的は…宇宙から知的生命体の根絶、ただそれだけ。

向こうの世界では本来は人類と共存していた柱の一族を狂わせ、カーズを狂わせ、そして共存していた波紋の一族や人類と争わせ…知的生命体の根絶を目論んだ存在。

ジョニイ『アンチ知的生命体スタンド…か。勝てるのか？』

八幡『アームストロングよりは厄介だろうな。きつと』

一応は調べたが…もう一度探りを入れてみるとするか。

母さん、あなたの仇もいつか…。

<|| to be continued ||

復活の千葉村へ

八幡『よお承一郎、今大丈夫だったか？』

自動販売機でコーラを買っていた時に、並行世界の通信機から死闘を共に生き抜いた戦友の声が聞こえた。

承一郎「八幡か、珍しいじゃあないか。今は大丈夫だよ」

八幡『ああ、それは良かった。そっちの調子はどうだ？』

承一郎「聞いて驚くなよ、新会社の設立手続きが完了したんだ。子供達の未来は明るいぞ、世界初のサイボーグ派遣会社さ！機械の力と人の頭脳を持つサイボーグは建設の現場や介護分野の活躍も期待されているんだ」

八幡『へえ、年齢問題とかは大丈夫なのかよ？』

承一郎「弁護士からのお墨付きも得たさ。何せ彼らが国に戻っても家族も仕事もないからね」

そう、アームストロング達が集めたのはそういうストリートチルドレンだった。最低なクズ共だったが、その点だけは利用出来た。

承一郎「募金だけじゃあメンテナンス代にもならない。それにストリートチルドレン

は彼らだけじゃあないからね。彼らだけを成人まで援助するのは不公平な話だ」

八幡『完全な公平なんてないさ』

承一郎「これで彼らはアメリカで教育を受けられるようになった。サイボーグにして国に返すわけにもいかないし仕事だけさせるのもね」

八幡『で、お前はどこに？』

承一郎「アメリカだよ。華さんに協力してもらった代わりとして秘書をやらされてるんだ。今は休憩時間さ」

華『坊や、そろそろ休憩は終わりよ。急いで来てくれる？』

噂をすれば影という事か、千棘さんの母である華さんから連絡があつた。

八幡『…まあ、頑張れよ』

承一郎「君も社畜生活、頑張れよ」

八幡『言うなよ、思い出さないようにしてたのによ！』

笑い声が聞こえた。

それからあの世界を離れる時の事を思い出す。

実は他のどの世界よりも、異変の解決時間だけはジョルノ兄さん達黄金の風チームが早かつたのだが、とある事が気になって集英組の世話になっていた。

まあ、それ故に千葉村の集結には千棘さんや小野寺君達が集まったのだが、問題はそこじやあない。

承太郎「比企谷……と言ったか。ヴァレンティン大統領がお越しだ」

八幡「了解。ありがとうございます。空条博士」

空条「DIOに空条博士と呼ばれるとはな……」

八幡は同じくホームステイしていたこの世界の承太郎に案内され、閣下の下へ行く。

ファニー「久しぶりだな。比企谷八幡。まだ一条君の中にいたのか？」

早く帰って貰いたいのだろうが、気になることが出来たらしい。あちらの閣下と共に平行して調べて貰っている。

ファニー「わざわざ帰還を遅らせてまで調べていたのだ。何が理由かね？」

八幡「承一郎に言われていたんだ。この世界の技術を持ち帰ってみてはどうか？……と」

ジョバアーナ（ニセコイ）「結論は？」

八幡はブラッディ・シャドウから『村雨』と銃剣を取り出す。

八幡「高周波ブレードとナノマシン……これは対費効果的にも優れてはいます。もつとも、オーバーテクノロジー過ぎて世界バランスを壊しかねませんがね。承一郎の申し出は、悪いですがお断りしますよ。俺達の時代には、過ぎたる物です」

ヴァレンタイン（俺ガイル）「どジャアアアン」

あちらの世界の閣下もやって来た。

八幡「お疲れ様です。閣下」

ヴァレンタイン「うむ。八幡。君と承一郎くんの情報にはかなり助けられた。アームストロング以下数名の物が同じ事を企んでいた。サイボーグ兵計画もな。軍を突入させて全員射殺した。もちろん、計画自体潰したからこの世界のようにはならないだろう」

やれやれ。これで異変は終わりか……。

そう思うと、自然と僕の左足から八幡の魂の欠片が飛び出た。

承一郎「やつと出ていったか。悪霊が。だが、勉強にはなつたよ。お前の戦術はな」

八幡『やれやれ。あんなのは基礎の基礎だ』

承一郎「ぬっ……」

八幡『次に会ったときは、容赦しねえ。肉体的、能力的に負けていてもな、戦術で前に簡単に負ける俺じゃあねえ。覚悟しておけ』

承一郎「お手柔らかに頼むよ」

そういつて八幡は陽乃さんの方へと飛んでいく。

陽乃「いらっしやい。八幡君」

八幡は陽乃さんの中へと導かれ、同化する。

ジヨルノ「これで終わりだね」

千棘「帰つちやうの？トリツシユさん」

トリツシユ「まあね。八幡を戻さなくちやいけないし、何よりもいつまでも居座つてたらこつちのあたしに悪いしね」

ジヨバアーナ「さようなら。この世界の僕、ミスタ、トリツシユ、ブチャラテイの転生の留美。そして異世界の親戚の陽乃、雪乃……そして、父の転生、八幡」

空条「そつちの俺やジジイや徐倫によろしくな。元気でな」

雪乃「ええ。この世界のジヨルノ兄さん。少ししか話せなかつたけれど、いつかまたお会いできると信じて」

小咲「雪ノ下さん……もう少し料理を習いたかった」

雪乃「あなたの矯正は……多分無理よ」

鵜「ミスタさん。あなたの銃の腕をもう少し見せてほしかった……」

ミスタ「こつちの俺に見てもらえよ。親切に教えてくれるんじやあないか？多分な」

万里花「ジヨルノ・ジヨバアーナ。そつちのあなたもいつかは私が逮捕するけんね！」

ジヨルノ「やつて見せて下さい。こちらのあなたごと倒してみせましょう」

こんなやり取りを聞けるだけでも、僕の日常が戻ってきたと感ぜられる。

ついでに言えばこの世界にも八幡達がいる。何でそいつらに拾われなかったんだらう？

春「陽乃さん……うう」

承一郎「まあ、八幡復活を見届けるから。他の世界の人間も来るって言うし……」

春「なんですか？口説いてるんですか？確かに先輩は王子様ですし？少しぐつとこないこともないですけど、良く考えたらお姉ちゃんや千棘さんとかの間をフラフラしてまですし、天然たらしなのでキチンと女性関係を何とかまとめてから出直してきて下さいごめんなさい」

この話し方は！確か前に八幡が言われて某究極生命体風にバカ笑いしていた……！

ジヨルノ「いろはの声でこれを聞けるとはね」

ジヨバアーナ「なるほど。確かにこれはおもしろい。時々頼むよ？春」

春「一色いろはさんの高速お断りを真似してみました。声が似てるからいつかはやりたかったんです♪」

承一郎「いろはああああああ！殴る！悪霊と一緒にいろはも殴る！」

この場には僕、小野寺君、春ちゃん、千棘さん、鶯さん、橘さんが揃っていた。

フアニー「さらばだ。そちらの私よ」

ヴァレンタイン「うむ。さらばだ。それでは全ての者達が終結している。オペレー
ション・リゲイン・ジエムストーンの最後を見届けよう。それでは……ドジャアアア
ン！」

そして、僕達は八幡の肉体のある八幡の並行世界の千葉村へと旅立った。

集まる同じ声（中の人）という名の混沌（カオス）達

ヴァレンタイン「ご苦労だった。ジヨルノ・ジヨバアーナ代表、ガイド・ミスタ次期副代表、トリツシユ・ジヨバアーナ女史、雪ノ下陽乃、雪ノ下雪乃、鶴見留美」

『いとdirty も た や す く 行 わ れ る え げ つ な い 行 為』僕 達 は 大 統 領 の ス タ ン ド、
世界へ到着した。

ジヨルノ「閣下もお疲れ様でした」

ジヨルノ兄さんが代表して閣下にお礼を言う。周りを見てと他の並行世界の人達も集まっている。

承一郎「久しぶりだな。この世界も」

ヴァレンタイン「一条承一郎、ジヨニイ・ジヨースター、桐崎千棘、小野寺小咲、小野寺春、橘万里花、鶴 誠士郎。ゆっくりしていきたまえ。これで全員揃ったようだ。それでは汐華冬乃とこちらの博麗霊夢。最後の仕上げについて打ち合わせだ。他の者はしばらく親交を温めるが良い」

閣下は二人を伴って奥へと消えて行った。

他の並行世界は様々な場所がある。

時系列が少しズレた八幡の基本世界。

近^{ネイバー}界民という異世界からの侵略者から街を守る八幡の世界。

幻想郷という忘れられた妖怪と人間達が共存している楽園に暮らす承太郎さん似のジョースターの末裔が守る世界。

聖書の神がいなくなり、天使と墮天使と悪魔が三つ巴のにらみ合いをしている世界の、転生したスタンド使いが暮らす世界。

そして、僕達が暮らす世界。八幡は魂が聖なる遺体となって五つの世界に散ってしまい、それを集めるために兄さん達が来たのだ。

結衣「お帰り！ゆきのん！」

雪乃「ただいま、由比ヶ浜さん。あなたも気持ちの整理が出来たようね」

結衣「うん！心配かけてごめんね！ゆきのん！」

A陽乃「へえ、あれがアヌビス神の私かあ」

B陽乃「歳は私と同じかな？」

陽乃「あら？………へえ？」

剣豪同士のシンパシーかな？

春「一色さんが三人いる……」（CV佐倉綾音）

…あれ？確か集って声康一さんと似ていたような…（CV 梶裕貴）

…うん、なかなかのカオスっぷりだなこれは。まあそんな事は置いといて…

承一郎「あの悪霊に取り付かれた人達…ちよつと…」

A B 八幡 & G 承太郎 & 丈城「……………」

僕は四人に封筒を手渡す。その内容は…。

『比企谷八幡の被害者の会』

G 承太郎「受け取ろう。同じ事を考えていた…。静・ジョースターの被害者の会も兼ねよう」

A 八幡「俺も受け取ろう。こっちの静・ジョースターも相当らしいな…あつちは素直なカワイイ子だったのに」

B 八幡「受け取ろう。俺はジョセフ・ジョースターと比企谷小町の被害者の会も兼ねるか……………」

丈城「俺は別段被害らしい被害は無かったけど面白そうだ！」

なんか一人八幡と同じ匂いがする奴もいるが、まあ問題ないだろう。

承一郎「……………決まりだな。俺はいつそ、アーシスの被害者の会を結成すべきだと思う」

うん、一番被害に遭っている僕だから断言出来る。奴だけじゃあなくて他の奴も混

ざってやって来るから余計にタチが悪い。

承一郎「いろは：新二セコイ偽装は君も荷担したよね？それに文化祭の一件も忘れな
いよ…」

僕は『私もですか!?!?』みたいな顔をしているいろはさんにもそう言う。

マジであれば許さん。そして春ちゃんの間も許さん。仲が元々悪いのにさらに悪く
なったらどうするんだ！

リアス「アーシス対異世界連合のレーティングゲームとか面白そうね」

丈城「待てリア！こんな奴等と縁を結べたんだ！全員でレーティングゲームなんての
はどうだ!?!」

A 八幡「レーティングゲーム？」

丈城「仮想現実空間での模擬戦だ！」

B 八幡「チームランク戦のようなものか。確かに面白いな。だとしたらここに
いては無く、ボーダーの仲間達にも声をかけてみるか」

G 承太郎「異世界対抗チームバトルか：それは面白そうだな」

承一郎「ふ…：負けないよ…」

いろは「対ウルフス戦の演習にもなりそうですね」

有意義な模擬戦になりそうだな。話を聞いていたアーシスや雪ノ下家、ボーダー、幻

想郷、駒王、千棘さんや小野寺君達も興味を引かれている。

陽乃「面白いね」

静「他の平行世界にも声をかけてみよう！案外集まるかも知れないよ？」

承太郎「そうだな。今回は敵対することはなかった。だが…」

仗助「これだけの奴等が集まったんだ！どちらが上かを確かめるのも良いじゃあねえか！」

盛り上がる僕達。そして…リゲイン・ジエムストーンの終わりの時がやって来た…。

↑T o b e c o n t i n u e d

復活する戦友

霊夢「それじゃ、聖なる遺体の比企谷八幡。結界の中に眠る本体の周りに集まって」
いろはさんから3つ、小町さん、陽乃さんの中から一つずつ魂の欠片が出てくる。そしていろはさん、小町さん、陽乃さん、ジョセフさん、承太郎さん、ジオルノ兄さん、徐倫さんから1つずつ、仗助さんから2つの魂の欠片が出てくる。

いよいよだな…八幡。

A 八幡「やつとか…長かったな」

B 八幡「濃い内容だった…」

G 承太郎「何度胃をやられたか…」

丈城「あいつの復活か！見てるか？もう一人のオーフィス！」

承一郎「蘇れ…八幡」

博麗霊夢が祝詞を唱えると、バラバラに碎けていた聖なる遺体が1つに集まってくる。そして…1つの遺体となる…

冬乃「水の流法…。蘇れ…その魂と器となる体よ」

こっちの世界でのジオルノ兄さんの母、柱の一族の汐華冬乃さんが柱の一族の流法を

発動させる。すると、八幡の魂は徐々に体と同じように戻っていく！

「ジョルノ「母よ！」

ジョルノ兄さんの叫びで汐華冬乃を見ると、その体が徐々に石化していく。

冬乃「覚悟していたことです…。これは柱の一族が起こした事の責任……。レクイエムによつて碎けた魂と肉体は互いに拒絶し合う。中和させるには私の能力が必要…。覚醒したことにより、失つてしまった私のブラッディ・スタンドが持つていた魂に干渉する能力…。それを無理矢理引き出せば……。私は眠りに就く…。カーズ達のように何百、何千年も…。いえ、もう二度と眠りから覚めるつもりはないわ…。柱の一族は…。ここで私が眠りに就く事によつて完全なる滅亡となる……。さようならね、初流乃さん」

ジョルノ「悲しみはしません。僕はあなたを母とは思つたことはない。こうなつたのも、あなたが原因です」

ジョルノ兄さんは無表情で淡々と言う。だけど、手の震えはそれが本心ではないと語っている。

冬乃「……。そうね。だけど、最後の最後だけは…。あなたを本名で呼ばせて…。初流乃さん」

もう首まで石になつてしまつている汐華冬乃。いいのか？ ジョルノ兄さん…。そんな別れで…。

僕の時は何も言つてあげられなかった。でも兄さんなら…。

「母 ジョルノ「……………だが、最後の覚悟だけは尊敬する…安らかに。アリーヴエデルさチよ」
母 madre」

冬乃「さようなら…初流乃さん…」

互いに一粒の涙を流し、汐華冬乃は石となった。さようなら…最後の柱の一族…。

汐華冬乃（水と魂の流法）…永遠の眠りに就く。

霊夢「今よ！蘇れ！比企谷八幡！克！」

霊夢の祝詞が終わり、被い櫛を降り下ろすと八千君の魂が体に戻る。

五人の黄金の精神「……………」

歴代ジョジョ「……………」

幼なじみーズ「……………」

長い沈黙が訪れる…。

八幡「う…：…やつと戻れたのか…」

八幡は体を起こし、目を開ける。やつとか八幡、お前は本当に待たせてくれるな。

いろは「ハチ君！」

小町「お兄ちゃん！」

静「ハッチ！」

仗助「八幡！ やつと起きやがったか！ このバカ野郎！」

陽乃「八幡君！」

五人が思いつきり抱き締めて来る！ 誰の目にも涙が浮かんでいた。

ジョセフ「八幡！ 心配かけおつてからに！」

承太郎「これで一安心つて所だな：ヤレヤレだ」

ジオルノ「覚えておくと良い。何度こうなっても絶対に君をこうして戻してみせる。

覚悟しておくんだね。八幡」

徐倫「拳骨の1つや2つじゃあ許さないからね！ ハッチ！」

歴代ジョジョ達も口々に言いながらも俺の周りへと集まってくる…。

A 八幡「やつと終わったか…」

B 八幡「どれだけこの時を待ったか…」

G 承太郎「本当に待った…」

丈城「この時をな！」

承一郎「調子はどうだい？ 八幡」

八幡「ああ、みんなには世話になった。マジで助かった」

A 八幡「そうか」

A 八幡 「戻れて良かったな。DIO」

八幡 「ああ。お前のお陰だ。ありがとう」

A 八幡 「次に来たときは、決闘だ。ザ・ワールド・ネオとな」

八幡 「手加減しねえぞ？」

A 陽乃 「じゃあね♪DIO 八幡♪次のだまし合いには負けないわよ？いろはちゃんを…あとそつちの私を大事にね？」

八幡 「騙しの手品はジジイ譲りだ。そうそう負けねえよ。陽乃さんは……まあ……うん。善処する」

互いに握手する八幡とA 八幡とA 陽乃さん。

いろは 「さよならです♪弥七」

A いろは 「まだ言いますか…」

いろは 「あ、ごめんね♪イツシチ」

A いろは 「ケンカ売ってるんですね？良いでしょう。例えスタンドをなくしてもあなたには後悔してもらいますから！」

笑いながら握手するいろはさんとA いろは。

戸塚 「じゃあね、彩加、小町ちゃん」

A 戸塚 「今度はテニスで勝負しよう。じゃあね、スピードワゴンの彩加！」

A 小町 「さようなら！二人の小町！スピードワゴンさん！」

戸塚はA戸塚さんとA小町さんと握手する。

エルメエス 「バイバイ。雪ノ下」

A 雪乃 「ええ、さようなら。エルメエスさん。またお会いしましょう」

徐倫 「じゃあね。材木座。大した根性だったわ」

A 材木座 「空条先生もお元気で」

アナスイ 「さようならだ。風鈴」

風鈴 「早く出所できれば良いですね？アナスイさん」

フアントム・ストーンオーシャンの8人が一ヶ所に集まる。

さようなら……。雪ノ下さんに集まる愉快的戦士達。国旗に包まれ、消えていく。

B 八幡 「ジヨナサン。最初に頭をふんずけてくれたことは忘れん。次に正解を食らうのはお前だ」

八幡 「やる前にザ・ジェムストーンを叩き込んでやる。俺のスタンドがなあ！」

B 八幡 「俺には幻影の波紋も催眠術も効かん。お得意の騙しの手品は封殺する」

八幡 「簡単にはやられねえよ。…まあ、ありがとな。比企谷隊長」

B 八幡 「ああ。二度とこんなことにはなるなよ。邪悪の化身」

握手する八幡とB八幡。

小町「元気でね。そつちの小町！早くB級になるんだよ？」

B小町「リサリサちゃんも！平行世界嫌いは大概にしてね…」

小町「もう大丈夫だよ。………多分」

B小町「うわあ…信用できない」

大志「次は負けませんよ。射手の一色さん。那須さんによろしくお願いします」

Bいろは「わたしも負けませんから。それと、ジヨジヨ先輩？エリナさんのわたしを大事にしてくださいね？」

結衣「お世話になりました！陽乃さん！」

B陽乃「雪乃ちゃんが失礼したからそのお詫びだよ？ガハマちゃん。また攻撃手の訓練に來なさい？お姉さんが鍛えてあげるから」

結衣「はい！熊谷さんにもよろしくお伝えください！」

めぐり「キヤツ！ペットシヨップちゃん、お別れの挨拶？」

ペットシヨップ「クルルルル！」

めぐり「うん！バイバイ、ペツちゃん♪またね！材木座くんも、システム復旧とかありがとう！由比ヶ浜さんと仲良くね！」

材木座「うむ！任せろ城廻女史！」

遥「バイバイ、けーちゃん。楽しかったよ！」

京華「うん！遥お姉ちゃんもはーちゃんと仲良くね！」

遥「うん。エリナいろはちゃんに負けないくらい、運命の相手になってみせるから！」

迅「お別れですね。ジョースターさん」

ジョセフ「世話になったのう。城戸や忍田にもよろしく伝えておいてくれ」

ボーダーの戦闘潮流の全員が固まる。さようなら、比企谷隊のみんな。

八幡「世話になったな……ブラッド」

ブラッド「うう……寂しいですね。楽しかったよ！あなたとの共同生活は！」

G 承太郎「おい……」

八幡「冗談だ。まあ、ブラッドも好きだけどな」

ブラッド「初めてです！僕を認めてくれる人は！」

八幡「ブラッドお！」

ブラッド「はちまあん！」

抱いて別れの涙を流す八幡とブラッド。

承太郎「八幡はこういう奴だ……」

G 承太郎「ヤレヤレだぜ。世話になったな、空条博士」

承太郎「ああ。いつか、完全な克服が出来ればいいな」

G 承太郎「それなら一番に報告に来よう。元気でな」

承太郎「忘れたくてもそんなキャラじゃない。君はな」

静「じゃあね、腹黒巫女」

G 霊夢「あなたの事だから、性悪コンビで何か仕掛けて来そうだけどね」

静「え？もちろん」

G 霊夢「結界を厚くしなくちゃ……」

魔理沙「さよならなんだぜ、優美子」

三浦「じゃあね、魔理沙。楽しかったよ。アリスやパチュリーによろしくね」

慧音「さらばだ。姫菜。妙な趣味も程ほどにな」

海老名「大丈夫♪ホモが嫌いな女子はいません！さようなら、慧音さん」

幽香「また会いたいわね。ミドラー。あなたの素敵なダンスを見てみたいわ」

ミドラー「その時はあんたのお花畑をバツクにプリズムリバーの音楽と美鈴の弾幕で

更に彩るかねえ」

文「狛天狗はいつでも受け付けますよ？サブレさん」

サブレ「ワウ！（考えとくぜ。一色似の鴉天狗）」

咲夜「ポルナレフさん。次は一对一で……」

ポルナレフ「妖夢にも言ったが、それは叶わないだろう。エンポリオを鍛えるのも良いかもな」

エンポリオ「今更ですよ。さようなら、咲夜さん」

ファンタジー・ガーディアンズが集まる。

さよならだ。最強の幻想郷の子孫、承太郎。あなた達の胃の安寧をささやかに祈ろう。

八幡「楽しかったぞ、兵藤。お前の中はな」

丈城「はっはー！また来いよ！お前は一筋縄じゃあいかなそうだしな！」

八幡「このバトルマニアが……。だが、また暴れよう」

丈城「楽しみにしてるからな！」

仗助「楽しかったぜ、リアス」

リアス「ええ、大変だったけどね」

仗助「おめえもな」

康一「お別れだね。木場君」

木場「ええ。康一さんのテクニカルな戦いは参考になりました。いつの日か……」

億泰「ゼノヴィアやお、今度は息子と嫁を連れて来るからよお。元気だな」

ゼノヴィア「億泰。お前のパワフルな戦いは参考になった。覚えておく。さらばだ」
めぐり「アーシアちゃん。お別れだね。あなたなら駒王の守り神になれるわ」

露伴「君の人生は正にリアリティーが豊富だった。正直に言えば寂しいよ。だが、元気で……アーシア君」

アーシア「はい！さようなら……ぐす……めぐりさん、露伴さん……」

音石「さよならは言わねえ。この気持ちはロックで奏でるぜ！」

朱乃「あらあら。それは素敵ですね？チリペツパーさん？またお会いしましょう♪」

カマクラ「ニヤア……（さよなら。オフィス、白音。寂しいぜ……）」

オフィス「……カマクラ。さよなら。私も寂しい」

子猫「……カマクラ。楽しかった。さようなら」

さようなら、奇妙な転生者達。こっちの世界に来ないでほしいと切に願う。

八幡「また会おう、承一郎とジョニー」

承一郎「よく言うよ……いつもイタズラ仕掛けてくるクセに……性悪コンビが」

ジョニー「丈城とかあぶねえな。単独でドジャアアアンできるしよ」

八幡「当たり前だ」

承一郎「くそ、やっぱり助けなきや良かった！」

八幡「まあ、ありがとな。そして、またな」
握手する僕と八幡。

千棘「じゃあね。トリツシュ。また歌声を聞かせて？」

トリツシュ「ええ。また会いましょう？」

万里花「さようなら、ジオルノさん。犯罪はダメですよ？」

ジオルノ「世の中の警察がまともになればね」

鶯「さらばだミスタ。銃の腕を今度見てほしい」

ミスタ「俺で良ければかまわねえぜ？」

春「さようなら、留美」

留美「…チャオ、春」

小咲「雪乃さん。今度また、お料理を教えてください」

雪乃「あなたは由比ヶ浜さん以上に苦労しそうですけど、善処するわ…」

ジョニイ「じゃあな、陽乃。いつでも来な」

陽乃「良いわよ？成長したアヌビス神の力を見せてあげるから」

僕と小野寺君達は集まる。

お礼なんていいからもうこつちに来るな。来るなら来るで大人しくしてくれ。

ドジャアアアン！

こうして、僕のもう一つの因縁を巡る戦いに終止符が打たれて終わった。

三重スパイ（トリブルクロス）

集英組の無縁塚に佇む墓石の前に、承一郎は立っていた。

その墓石には『犬塚信乃』の名が刻まれていた。そう、一条承一郎のかつての戦友で親友だった少年。『村雨』の本来の持ち主の墓だ。

承一郎はアームストロングを始末し、皆の仇を取った事を報告しに墓所に訪れたのだ。

承一郎「…やっぱり慣れないな。仲間の墓へ花を手向けるのは」

承一郎は葉巻に火をつけて煙を吐き出す。いつもやらせない気持ちを抑えるためのルーティーンに近い行動だ。

承一郎「…次は鶯にも来させよう。初恋の女の子が来てくれたら…君も嬉しいだろう？」

煙を吸って、吐き出す。

承一郎「…『星は砕けてもいつかは光り輝く』……なら僕は進もう。君に、皆に胸を張れるように力強く、皆を導ける星に」
スター

これ以上は限界だと墓を背を向けて歩き出した。

一人の剣士の魂は、見えなくなるまで承一郎を見送っていた。

承一郎「そつちはどうだいカズ？」

カズ『相変わらずだ。科学の平和利用もいいが、それだけじゃあ世の中は回らない』

承一郎「ワールド・マーシヤルは買い手を探しているらしいな」

カズ『お前のせいですいぶん赤字を出したらしい。強い(物理)リーダーもいなくなつたしな。だがあの規模の会社は簡単には消滅しない。いずれどこかの資本に組み込まれる。戦争の需要がなくならない限りPMCもなくならない』

承一郎「だろうね。需要をなくすためにはやはり奴のように……」

カズ『どうした？』

承一郎「いや、気にしないでくれ」

カズ『それにしても、やはり戻るつもりはないか？』

承一郎「前に八幡に言われたとおり、僕には傭兵としての才能はないんだ。これでいいのさ、それに……」

千棘「おーい！もやしー！」

小咲「一条君ー！」

承一郎「ああ、すぐ行く……すまんなカズ。僕は、大切な人達のために戦うよ」

僕は声に応じて、カズにそう告げた。

オセロット「：はい、私です。アームストロングは死にました。あなたの望み通りの結果になりましたね」

オセロットは電話である番号をかけた。その番号は、ある国の極秘機密トップシークレットへの番号。承一郎が命を賭しても殺すと決意した相手だった。

オセロット「：そうですか、体が動きましたか。それは面白いですね：さすがは世界を支配した吸血鬼の血を引く者達といったところでしょうか。正直、承一郎が『テコムセ作戦』の全容を知ってあなたに連絡するのを阻止する時はヒヤヒヤしましたよ。急いで『愛国者達の銃』ガンズ・オブ・ザ・パトリオットで急いで阻止したのですから」

オセロット「ここ最近アームストロングはあなたに対して少し不信感を抱いていたようです：今となつてはどうでもいい事です」

オセロット「それぞれの異なる世界の『聖なる遺体』をその身に宿すというのはかなりのレアケースでした。このデータは我らの祖国の繁栄のために役立たれるかと」

オセロット「それではまた：■ ■ ■」

オセロットは電話を切った後、さらに別の番号をかける。それは彼だけが今だけ知っている番号。

オセロット「…はい、私です。アームストロングは死にました。これで奴の打倒に一歩近づきました」

オセロット「…ええ、ザ・ボスの息子^アがトドメを…彼は自分の命を懸けてでも、あなたの仇を取るつもりです。それほどまでにあなたの事を愛しています。愛情と憎悪は表裏一体…愛憎とはよく言ったものですね」

オセロット「承一郎には私は黒幕を探るための二重スパイ、奴には私は承一郎の遺体を奪うためのスパイ…誰も私が真に忠を尽くすと誓った者を知る者はいません。そう、私が三重スパイ…トリブルクロスだとは」

オセロット「それと、ジョニー・ジョースターの肉体が死闘の時に動いたと報告が…ええ、人格の方はこれには気付いていないようです」

オセロット「レス・エンフアントス・テレブレス…『恐るべき子供達』…。あの時、あなたは一人しか助けられなかった。だからせめてもう一人の人格だけでもと、承一郎にジョニーの人格の移植を…彼らにとっても、それは救いだつたでしょう。あんな経験、並の人間では耐えられない…」

オセロット「サム・ホドリゲスに左腕を切断された時に私が彼に宿らせた左腕は…彼をさらなる高みに到達させた。音速の動きを可能にするほどに」

オセロット「…そろそろ、私は再びあなたが生きていくという事を忘れます。あなた

交錯する世界

G 霊夢「さて……八幡の魂の回収も各世界の異変も終わったことだし、もうここは……」

霊夢「宴会よね♪」

二人の霊夢がさも当然のように宴会の開始を宣言し始めた。

承太郎「まったく……幻想郷の霊夢はともかく、こっちの霊夢は原因のひとつだろうが……ヤレヤレだ」

G 承太郎「まったくだな。しれつと宴会を始めようとするんじゃない」

二人の承太郎さんが呆れている。その傍らで……

魔理沙「異変の解決の後は宴会。これは幻想郷の常識なんだぜ」

魔理沙をはじめとした幻想郷組はウンウンと頷いていた。

ヴァレンタイン「ふむ。せつかくこの世界に来たのだ。ただ八幡くんの復活を見届けるだけではつまらなからう。なあ、八幡くん？」

八幡「え……このパターンは……」

八幡が嫌そうな顔をする。ヴァレンタインは涼しい顔をしてD4Cで国旗をヴァアサ

りと広げると、各種食材や調理器具が出てきた。

八幡「あなたのスタンドは青狸のポケットですかあ！」

思わず突っ込む八幡。確かに最近の彼は便利アイテム取り寄せアイテムと化している。

A いろは「トマトにチーズにオリーブオイルに……全部イタリアンの材料ですね」

B いろは「それも日本人に受けそうなラインナップ。でも、何でイタリアンなんですか？それも食材だけ」

いろは「あ、このパターンは……」

八幡（コソコソ……）

八幡がさりげなく、されど気配を消しながら足音を立てずにこっそり外に出ようとす
るが……。その肩をがしっ！と掴むものがいた。

白良「ダメよ？八幡。みんなに感謝の気持ちを伝えるんでしょ？」

ザ・ワールド！全員の時が止まった。……………

八幡「き、規格外の母ちゃん……確か比企谷白良さん！何でいるんだああ！」

そう、どうやったのか全ての平行世界の全ての旅を見守って来たまったく別の世界の
八幡の母、比企谷白良が人知れず逃げようとしていた八幡の肩を掴んでいた。

A 八幡「親戚どころかまんま母ちゃんだった……」

小町「うちのお母さんとは名前が違うけどね……」

京華「あ、しーちゃん！昨日ぶりー！」

京華が白良に抱きつく。白良は八幡をいろはに渡し、京華を撫でる。

白良「あら？けーちゃん。あれから大丈夫だった？」

京華「うん！気が付いたら寝てた！」

実はこの比企谷白良、少なからず裏で動いていた。A八幡の世界ではサンタナを破壊し、ボーダーの世界では小町のルビーレーザーの影響をシステムダウン程度で抑えた上にカーズ戦では京華を耳打ちしてデュオロンを発動させ、幻想郷ではH・DIOによって消えかけていた八幡の魂を霊力を送ることで維持し、駒王ではオーフィスをアザゼルに引き渡し、ニセコイ界では雪ノ下や僕を味方の砲弾から救ったりとしていた。規格外にも程があると言える。

遙「え？この人がしーちゃんさん？この八幡くんのお母さんが……」

何故かB八幡とB小町と綾辻の顔が歪んできている。

B小町「お母さん……お母さああああん！」

タタタタタッ！抱き……

小町「ボーダーの小町………」

A小町「もしかして……ボーダーのお母さんって……そんなのないよ………」

B 小町「お母さん！会いたかった……会いたかったよおおお！うわああああん！」

ボーダーの小町が白良に抱きつき号泣していた。

承一郎「ボーダーの八幡……君の母親は……」

B 八幡「ああ……四年前の大規模侵略によって亡くなり、ブラックトリガーになってしまった……これがそうだ」

比企谷隊長がブラックトリガーを取り出す。袖の白雪と名付けられたブラックトリガーは比企谷隊長の母親が命と引き換えに息子に託した物だ。

それに共感したのは僕と幻想郷の承太郎だ。幼い頃に親を亡くす悲しみは耐え難いものだ。

G 承太郎「そうか……俺だけじゃあ無かったんだな……家族を亡くしていたのは……」

おもいつきり泣くボーダーの小町を白良は優しい笑顔で撫でながら囁くように声をかける。

白良「よく頑張ったわね。小町……そして……いらっしやい。ボーダーの八幡」

B 八幡「!!」

白良は比企谷隊長を呼ぶ。

白良「私は別の世界のとはいえ、比企谷八幡の母よ？だからあなたも私の息子みたい

なもの」

B 八幡 「母さん……」

ふらふらと白良の方に歩いていく比企谷隊長。気丈に振る舞ってはいても比企谷隊長はまだ高校生だ。

比企谷隊長はこらえきれなくなった涙を流しながらB小町の隣で白良に抱きつく。

白良 「よく頑張ったわ。あなたは私の誇り……そのブラックトリガーの私もそう言っているわよ」

B 八幡 「う………違うってわかっているのに……母さん……俺はこれからも小町を守っていくよ………だけど、今だけは泣かせてくれ………うう………」

B 小町 「うわあああああん！お母さああああん！」

ボーダーの比企谷兄妹は白良の胸の中でおもついきり泣き始めた。

丈城 「良かったじゃあねえか……あの八幡もよ」

兵藤丈城はうつすらと感動の涙を流しながら二人のオフィスの頭を撫でる。承太郎、僕も………そしてここに集まっている誰もが世界は違えど泣いているB比企谷兄妹に共感の微笑みを浮かべていた。

A オーフイス 「我、あの八幡も幸せになって欲しい。あとスタンド使いのドライブ。我、そっちの我じゃない」

オフィス「我也……」

八幡「だな。人をかじったクセに良い奴じゃあないか。オフィス」

オフィス「ん。我、八幡をふ菓子だと思った。ごめん」

表情が乏しいオフィスだが、本当に悪かったと思っっているようだ。

承一郎「母か……今回の事件の事があったから、どうしても感情移入してしまうな」

アームストロングは母殺しに関与していた。まだ、因縁は滅びきっていない。

ジヨルノ「僕もだな……世の中色々な母がいるものだね」

徐倫「ジヨルノ兄さん……」

ジヨルノ兄さんは石となつて眠りについた汐華冬乃を見る。

G 承太郎「そうだな。ところでお前は？」

忍「異世界のDIOの息子よ。久し振りね？承一郎ちゃん？」

承一郎「お久しぶりです。藤崎さん」

sunny lightの店長、藤崎忍さんが僕に挨拶する。この人物も何気に様々な世界に存在していたりする。この人物も時計型通信機や、異世界のアーティファクトの調達などで影の功労者として今回の旅では大いに役に立っていたりする。

そして、僕の存在はスタンド使いの主人公達を驚かせていた。

G 承太郎「DIOの息子だと？」

丈城「D I Oの息子と言えば……四人しかいなかったんじゃないのか？」

幻想郷の承太郎は驚いた表情でその内の一人、ジオルノ兄さんを見る。一方で丈城は八幡を見る。

基本世界のD I Oの息子は四人しか確認されていない……。ジオルノ、ウンガロ、リキエル、ヴェルサスの四人だ。

八幡「俺は関係ない。あくまで承一郎の世界の話だ」

承一郎「僕の世界の父の息子はジオルノ兄さんも含めて5人いたんだ。この世界にも僕に該当する人物がいるけれど、僕とはまったく違う人物だよ」

A八幡「へえ…俺は四人と会ったけれど、更に他にもいたんだね」

承一郎「四人と？ウンガロ兄さん達とも会ったのか？そっちの八幡」

A八幡「ああ。3人ともジオルノさんに引き取られてイタリアに移住した」

ジオルノ「………そうか。良かった……世界は違えど、救われる未来もあるとわかっただけでも……」

承一郎「僕の世界もウンガロ兄さんやリキエル兄さんは灰人になってしまったし、ヴェルサス兄さんは亡くなってしまった……君達のお陰かな？」

僕が尋ねると、A八幡は首を横に振る。

A八幡「俺じゃない。陽乃や雪乃、戸塚や小町、材木座や風鈴、一色のお陰だ。もち

ろん、うちの世界のジヨルノさんや仗助さんも頑張っていたけどな」

A 八幡が言うのと、僕とジヨルノはアルス界の人々に深々と頭を下げた。

ジヨルノ「ありがとう。今日は色々と驚かされる」

承一郎「この世界の陽乃さんや雪乃さんといい、本当に雪ノ下姉妹、小町姉さんやいろには頭が上がらない」

小咲「一条くん……」

千棘「ぐす……良かったね。もやし」

A 雪乃「新しい兄さん？」

A 小町「年上の人に姉さんって言われても……」

A 八幡「おいやめろ ふざけふな雪乃も小町も俺と陽乃の妹だ お前はどつかよそで妹を探せ でも二人が誉められるのは嬉しいからもっと誉めてあげろ」

承一郎「高速お断りが八幡にもあったとはびっくりしたよ……」

B いろは「なんですか？ 口説いてるんですか？」

A いろは「遠回しに高速お断りをしてもらいたいと言ってるんですか？」

いろは「それは声が似ている春ちゃんにもっとしてもらいたいと言ってるんですか？」

春「そうですか。実はお気に入りでしたか。わかりました今度からどんどんこれを採

用していききたいところですがフラフラしているところが気にいらなくて全て清算してから出直してきて下さいいごめんなさい」

僕はポカンと開いた口が塞がらなくなり、ジョルノ兄さんはトリプルいろはと春の高速お断りに満足そうな笑顔を浮かべている。本当にジョルノ兄さんは高速お断りが好きだ。

小猫「面白い。ギャーくんにも教えるべきです。先輩」

丈城「やめろ。新しい属性をあいっつに加えるな。ただでさえ声がこの四人にそっくりなんだから」

ギヤスパーを連れてこなくて正解だったと思う丈城やリアス。

文「案外、私とも声が似てるかも知れませぬね♪」

G 承太郎「何を言っているんだ？射命丸。中の人なんていない」

カオス具合が加速している。それはもうメイド・イン・ヘブンばりに。

丈城「そう言えば気になっていたんだけどよ、お前も承太郎じゃあないよな？」

G 承太郎「ああ、俺はオリジナル承太郎とは違う。ジョースター家の末裔だ。そういうお前は？」

丈城「兵藤丈城。神様によってスタンド能力を得た赤龍帝だ」

忍「赤い龍の女王？まさかね……」

丈城「多分違うと思うぞ？」

G 承太郎「赤い龍の女王……か。あのアーティファクトをオリジナル承太郎に届けた人間か」

承太郎「あれには助けられたな」

仗助「そう言えばよお、あの偽物の俺や墮天使の亡霊の黒幕は何だったんだ？」

リアス「そう言えば結局わからずじまいだったわね」

丈城の世界の元凶だけが結局はわからなかつたらしい。A 八幡の世界はプッチ、ボードーの世界はカーズ、幻想郷はD I O、僕の世界はアームストロングとそれぞれの黒幕を倒したが、駒王の世界だけは黒幕が出てくることはついに無かつたようだ。

丈城「それがまったく見当つかないんだよ。以前にも承太郎さんやジオルノさんの偽物が現れたんだけどさ……」

承太郎「俺の偽者？」

ジョセフ「そのうちワシや八幡の前世のジョナサン、徐倫や静も出てきたりのう？」

徐倫「おじいちゃん……シヤレにならないから」

静「私はいり得ないかも。これを見る限り基本世界に関わる内容かもだし」

そう言つて静は本を取り出す。

それは……

G 承太郎 「おい……静・ジョースター。それは俺の愛読書じゃあないか……いつの間にくすねて来た？」

そう、幻想郷の承太郎の聖書、『ジョジョの奇妙な冒険』シリーズだ。『ステイールポールラン』や『ジョジョリオン』まで含めた全巻を静さんはパクっていたのである。

静 「やばっ！話の流れでついつい出しちゃった！」

G 承太郎 「貴様か……悪霊」

八幡 「相棒！バレたぞ！なにサクッとボコを出してるんだよ！」

仗助 「返してやれ。まったく……」

いろは 「やっぱりよその世界でもろくな事をしなかつたんですね……ハチ君らしいというか……」

仗助さんというはは呆れ、陽乃はゲラゲラと笑っていた。因みに同一人物達も白い目で二人を見る。

ジョセフ 「盗みはいかんのう？静よ」

小町 「ホントホント♪ポイント低いよ？」

ジョセフと小町はウンウンと頷く。

B 八幡 (何だろう……何故かイヤな予感がする)

白良の所から帰ってきていた比企谷隊長は汗をだらだらとかいていた。その内容に

ついでには帰ってから判明したのだが。そう、実はこの二人、ボーダーのトリガーを返していないのである。魔理沙的に言えば本気で死ぬまで借りる……といった所だろう。

アーシア「あの……黒幕の話は……」

丈城「まあ、ここで考えていても仕方ない。また現れた時にじっくり正体を探りやあ
いいじゃあないか」

露伴「君達がそう言うのであれば多くは言わない」

ジョセフ「じゃが、心してかかる事じゃな。それよりも朱乃さんは朋子に声が似てお
るのう？」

朱乃「あら？朋子さんと言うのはこの方ですか？」

朱乃はジョジョ原作の第4部のページを出して答える。

仗助「おいじい。異世界人に俺の兄弟を作る真似はするなよ？」

ジョセフさんには前科があるのでその手の事には信用がまるでない。

朱乃「あらあら。仗助さん。その心配はありませんわよ？私と子供を作って良いのは
一人だけですわ♪」

リアス「むむ……」

アーシア「む……」

丈城「……」

八幡「ヤレヤレだぜ」

A 八幡「女性関係は早めに解決しろよ？」

B 八幡「まったくだ……」

G 承太郎&承一郎「おい、DIO（八幡）。早く料理の準備をしてこい！」

何故か反応する承太郎と僕。うっすらと額に汗を浮かべているのを八幡は見逃してはおらず、ニタニタとイヤらしい笑みを浮かべていた。

いろは「そうでした。厨房に行きますよ？ハチ君」

白良「手伝うわよ？八幡。あ、私の世界の八幡も呼ぼうかしら？」

八幡「これ以上のカオスは勘弁して下さい。白良さん」

白良「もう。この世界の私と同じように『母ちゃん』で良いのよ？八幡」

八幡「名前自体が違うので無理ですごめんなさい」

いろは×3「真似しないで下さいごめんなさい」

忍「ヤレヤレだわ」

6つの世界、7つの主人公（白良含めたら8人）やその周囲の宴はまだまだ続く。

<|| to be continued ||

異常なまでの恐怖症八幡

白良さんが僕と閣下と小町と雪ノ下、それに他の四人や忍さんを連れて来た。なんでも白良さんの息子の八幡を並行世界から呼ぶみたいだ。

話を聞くと女子によるいじめで触れるだけで気絶してしまうほどの重度の女性恐怖症らしい。今ここに集まっているのはほぼ女子なので僕達が呼ばれたというわけだ。

閣下や僕達はわかるとして何で小町と雪ノ下さんを連れてきたんだ？特に小町は世界の自分が嫌いらしいし。まあ、B小町のお陰で幾分かは解消したけれど。

白良「二人の八幡、承太郎君、丈城君、承一郎君、忍君も小町も雪乃さんも是非ともお礼したいって」

雪乃「オーフィスさんに聞いたわ。白良さんとオーフィスさんがいなければ実は私も危ない状況にいたって。だから私もお礼をしに来たのよ」

小町「小町もね……。白良さんがいなければカースどころの騒ぎじゃあなかつたって」

A 八幡「更に別の世界の俺なんて滅多に会えないからな」

B 八幡「俺達も料理が苦手じゃない」

G 承太郎「さて……久々の現代科学の厨房だ。腕が鳴るな」

そういうえば幻想郷って忘れられた者達が集う場所だから必然的に古い料理場しかないんだっつけ。

丈城「パールジャムもやるか？」

承一郎「止めとけ。よっぽど酷い目にあつたんだろう。対人恐怖症になつたらどうする」

丈城「それもそうだな。初めての人間にパールジャムは刺激が強すぎるな」

A 八幡「冬乃さん仕込みの腕を見せてやるよ。料理では負けねえぞ？」

B 八幡「こっちは遥仕込みの腕だ。陽乃さんや一色にも鍛えられたがな」

忍「あちしは高校時代にバイトしていた店の料理を作ろうかしら？」

八幡「俺はいつものイタリアンだ」

いろは「ではわたしはブリティッシュで行きます」

小町「承太郎さんはいつもの家庭料理かな？多分、八幡さんならいつもの小町の料理が良いだろうし」

全員でワイのワイのと料理を作っていく。女子によるいじめか……。

人間は悪意だけではない。だけど、善意だけでもない。そして、絶対多数は集団にとつて正義となる。人間の性というものだからしょうがないのだろうが、そこまで異常

とは……。

僕も一度学校で孤立していたが……集のおかげだな。

四人とも手際が良いな。日常的にやっているのがわかる。負けられないな。

ヴァレンタイン「どジャアアアアン♪」

白良「お待たせ♪みんな」

異常なまでの恐怖症八幡（I八幡）「は、初めまして……（プルプル……）お、俺が3人もいる……」

I小町「は、初めまして……って首筋に星の痣がある。お母さん、この人たちってオーフィスちゃんの水晶玉やあのスマ○ラもどきに出ていた人達じゃ……」

ス○ブラもどきって何だろう……気になる。

白良「こつちの話よ♪気にしたら負けよ？D I O♪」

閣下に連れて来られて白良さんの子供である比企谷兄妹……つまり八幡と小町が現れた。背後にある段ボールが……この感じ、同志だ！↑ダンボール好き

八幡「よお、初めまして。白良さんの息子の俺と小町。白良さんにはかなりお世話になったからな。白良さんへのお礼として二人には俺達の料理を食べてもらいたくて来てもらった」

I八幡「そ、そつちの俺の料理？だけど……」

いろは「大丈夫ですよ？事情は白良さんから聞いています。わたし達が最初に食べれば良いんですよ？」

小町「そつちの小町も楽しんで行ってね♪小町はエリザベス・ジョースター♪リサリサでも良いよ？まああと二人、ここには小町がいるんだけど、小町代表はリサリサ小町が代表して来ました♪」

I小町「あ……サンシャイン・ルビーの小町だ」

I八幡「小町が好んで使う小町だよね？怖い（プルプル）」

小町「え……何でめちやくちや怖がられてるの？」

八幡「気のせいかな俺も怖がられている気がする」

雪乃「気が合うわね。私もよ？」

5人「俺（僕）達もだな」

何で？女性恐怖症だから小町や雪ノ下さんは理由が付くとしても男の八幡まで何で怖がられてるんだ？

白良「小町？あのゲームでリサリサちゃんばかり使ってるでしょ？ダメよ？ルビーレーザーばかり使っちゃ」

I小町「だって小町の中では一番強いじゃんか。お兄ちゃんはそのお兄ちゃんも強いけど」

I 八幡 「ルビーレーザー怖い（プルプル）」

承一郎 「あれは確かに怖い……」

G 承太郎 「食らったことがあるのか？」

両足が溶かされて消えました。

A 八幡 「光速なものな……うちの小町が波紋の適正が無くて助かった……」

B 八幡 「ボーダーを崩壊に追い込みかけたものな……」

小町 「白良さん……まさか……」

なんとなくわかってきた。恐らくだが、この人……今回のオペレーション・リゲイン・ジェムストーンを題材にしたスマブ〇もどきのゲームを作ったな!? そのキャラがリアルで目の前に現れたらそりゃ怖いわ!

雪乃 「ま、まあ……とりあえず食べましょう? まずは私達が食べれば良いんですよね?」

雪ノ下さんが自分で作った物を食べる。うん、雪ノ下さんもプロが作った物と変わらないレベルで実に旨そうだ。小町やいろはも続いて食べる。

八幡 「俺も食べた方が良いのか？」

I 八幡 「D I O 怖い、D I O 怖い（プルプル）」

八幡 「……食べた方が良さそうだ……」

5人「日頃の行いだろ。お前の場合は」

八幡「しまいには泣くぞこんちきしよう」

丈城「真似すんな」

八幡「ヤレヤレだぜ」

G 承太郎「真面目にやれ」

八幡「わたくし、大マジですわ」

ゴン×5

5人「相変わらず真面目に舐めてるな！お前は！」

さりげなく僕達五人はシンクロしてる。八幡被害者の会のシンパシーかな？

I 小町「なんかホントに泣いてますよ？DIOさん」

いろは「自分に拒絶されてショックを受けているみたいです。ほら、ハチ君♪」

八幡はいろはに抱き締められて頭をなでなでしてもらう。

白良「ほら、八幡？もう大丈夫でしょ？さあ、私達もいただきましょ♪小町も♪」

I 小町「うん！いただきまます♪」

I 八幡「DIOの俺……ごめん。そういうのが一番辛いつて俺がわかっているのに

な。俺もいただきます」

白良さんの息子も食べ始めた。最初はおそろおそろと……そして一通り食べるとニツ

コリ笑った。

I 八幡「うまい……全員の料理……それに……誰かの料理をこんなに大勢で食べるのが楽しいなんて久しぶりだ……」（ポロポロ）」

八幡「ありがとよ。お前の母ちゃん程では無いだろうがな」

この完璧超人なら多分料理も上手いのだろう。張り合う気にもならないな。多分、他のみんなもそう思っているだろう。

白良「ホントに美味しいわ。ありがとう。みんな」

白良さん一家が喜んでくれるなら……。あれ？八幡の父とカマクラは？

I 小町「皆さん。今回は色々あったんですけどね？これからも頑張って下さい！」

小町「ありがと、小町。そっちのお兄ちゃんもいつかは女性恐怖症が治ると良いね？」

I 小町「うん！リサリサちゃんってゲームじゃ言動が厳しいけど、現実だと違うね？」

小町「どういうイメージで作ったんですか？白良さん」

八幡の場合はとて非情に作られていそうだ…。

I 八幡「ごちそうさまでした。ありがとう。三人の俺やスタンド使い達。それに小町

と……一色だったっけ？（ガタガタ）」

八幡「いつか治ると良いな。恐怖症」

I 小町「治ったらたつぷり甘えるからね？お兄ちゃん♪」

小町「同士よ」

八幡「お前のそれとは多分違うぞ」

がっちりとした握手をする小町だが、恐らく……というか間違はなく超絶ブラコンのシズカの領域にいる小町は八幡の世界の小町だけ……

I 小町「同士よ」

………僕は何も見なかった。多分、気のせいだ。

白良「あ、D I O。あなたにこれをあげるわ」

そう言つて白良さんは段ボールを開けて中身を取り出すそれは……

八幡「ヒーロースーツ？」

白良「そう♪近い未来に必要ななるわよ？草薙八神君」

誰だろう草薙八神。

白良「もし、あなたとまったく同じ存在を助けに行くときに必要になるわ。そうね

………ヒントは承一郎君よ」

僕がヒント？僕すら皆目見当つかない。僕と八幡が関わるとしたら四年前からの数々のイタズラ合戦……うっ、胃が……

I 八幡 「おいしかった。今日の事は忘れない」

I 小町 「皆さん。今日はありがとうございました♪」

ヴァレンタイン 「それでは二人とも。準備は良いかね？どジャアアアアン！」

閣下のD4Cに生まれ、白良さんの子供達は帰っていった。

八幡 「蛙の子は蛙………か」

いろは 「どういう意味ですか？」

八幡 「規格外の子供は規格外って事だよ。女性恐怖症で丁度良いくらいかもな……」

ヤレヤレだ。

お酒はダメ、絶対

八幡「よし、それじゃあ皆で一緒に食おうか」

承一郎「そうだね、僕ももつと皆と話がしたいし」

よく見ると女子達はまだ宴会を始めているらしい。

G 霊夢「あ、承太郎。もう皆で飲んじやってるわよ？」

G 承太郎「俺達が来るまで待てなかったのかよ……」

霊夢「いいじやあないの、楽しめれば全てOKよ」

ん？ 霊夢さんの手にあるのは……お猪口？……なんだか嫌な予感がする。

ガシッ！

肩を掴まれる三人の比企谷八幡と静さん。おそろおそろ振り返ると……。

承太郎「まさかお前ら……」

徐倫「便乗して飲むつもりじゃあ無いでしょうね？」

空条親子に捕まっていた。

八幡「ダメだぞ？ D I O。お前は未成年なんだから」

八幡ははちまんくんと比企谷隊長の肩を叩いてスケープゴートしようと試みてる。

A 八幡 「おいこらDIO（#。D。）」

B 八幡 「なに一人でバックレようとしていやがる！」

はちまんくんは承太郎さんと直接戦ったからスタープラチナの強さは知っているし、比企谷隊長もディオの記憶や八幡との決闘を通じて知っているので承太郎さんは怖いだろう。

承太郎 「アホか。体格でバレバレだ」

徐倫 「往生際が悪いわね」

静 「自分だけ逃げようたつてそうはいかないっつーの」

静さん、さらつとそつちがわに逃げてるな。

八幡 「いやいや、承太郎。お前は高校時代じゃあ飲酒をしていたじゃあないか。バドワイザーにペンを刺して底の方からチビチビと」

大統領飲みだね。なんか何処かから「YESッ！YESッ！」とか聞こえてる…気のせいかな？

承太郎 「ぬ………何故知っている」

徐倫 「父さん…」

八幡はこつそりアクトンに透明化してもらつてこつそりと逃げようとする。

ガシッ×2

B 八幡 「逃がすか。この性悪コンビ共。俺のサイドエフェクトを忘れたのか」

比企谷隊長のサイドエフェクトを忘れてたらしい。そういえば比企谷隊長はアクトン殺しの能力なんだっけ。

静 「なにこいつ！気配を消して透明化したのにまったく効いていない！アクトン殺しも良いところだ！この私殺し！そのままあんなことやこんなことも!? キャー！綾辻さん！浮気男よー！」

ゴンっ！

B 八幡 「人間きの悪い！一色や陽乃さんよりたちがわるっ！マジで録でもねえな！こいつら！」

A 八幡 「可愛そうに……うちの世界の静・ジョースターさんは素直でカワイイ感じの人だったのに、こっちの静さんは完全に女版のDIOだな……」

静 「え？こいつ、そっちの私を口説いていたの？」

八幡ごとストーン・フリーに縛られながら静さんが反応する。

静 「そんな！（あっちの）私とは遊びだったのね!？」

A 陽乃 「八幡？」

A いろは 「これが証拠写真です」

A 八幡 「一色いいいい！弥七の時に撮ってやがったなああああ！」

A いろは「ちなみにD I Oは静さんを貧乳扱いして殴られてました」

静「ハツチ……………さすがにそれはどうかと思うよ？」

小猫「貧乳をバカにする奴は許さない……………」

A 雪乃「D I O…最低」

風鈴「後でお仕置きです」

雪乃「比企谷くん？見損なつたわ。最初の日にもヤツパリ下卑た目で見ていたのね……………」

八幡は貧乳チームに囲まれてるな。ストーン・フリーに縛られてるから逃げられない。

承太郎「八幡……………後で説教だ」

ジオルノ「わさびびならあるから楽しみにしておくんだね」

一方で……………

承一郎「…霊夢さん、千棘さん達は？」

霊夢「あら、彼氏だから気になるの？千棘ちゃん達ー！承一郎が呼んでるわよー！

ニセコイ女子達「ー！」グルンツ！

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

全員が一斉に振り返る。あれ？なんだか悪寒が…。

千棘「承一郎おろ、待つてたわよ〜」

小咲「一条く〜ん、私達と一緒に食べましょ〜?」

承一郎「……マジか……」

そこには顔を赤く染めてペロンペロンに酔った千棘さん達が。

承一郎「……霊夢さん、まさか彼女達に……酒を……?」

霊夢「ええ、幻想郷では未成年からでも酒を飲むのよ。それに彼女達はほんのちよつとだけよ?」

見ると幻想郷の承太郎はチビチビ始めている。

承一郎「……マズった……」

丈城「どうしたんだ?」

承一郎「彼女達は非常に酒に弱いんですよ。正月にはウイスキーボンボンで泥酔するほどに……。ついでに言うると……捕まった後の事は覚えていない」

主人公達は全員ゾツと戦慄する。

万里花「らつくん……好いとーよ……」

鶯「一条承一郎……貴様の唇は……柔らかかそーだ……」

リアス「ちよつと、これホントにちよつとだけなの!?」

いろは「すごい酔っ払いようですね……」

魔理沙「確かにこれはヤバそうだけ」

承一郎「そうだ、春ちゃんなら大丈夫かも「先輩…」春ちゃん!!?」

春「先輩…ぎゅつとさせて下さい…」

承一郎「……OH MY GOD……」

さ、最後の砦として期待していた春ちゃんまで…こうなったら…。

ゴンっ!

徐倫「さりげなく飲んでるんじゃない!」

どうやら八幡はいつの間か酒を飲んでいたらしい。

承一郎「…一条家、いやジョースター家にはある伝統的な戦いの発想法がある。それを使います」

A・B八幡「「ま、まさか…」」

G 承太郎「あれか…」

丈城「もちろん知ってるぜ? やったこともある」

八幡「お約束だよな?」

A 八幡「まさかやる日がくるとは……」

B 八幡「何で俺まで……」

ジョセフ「行くぞ。息が続くまでやるんじゃない!」

魔理沙「おおっ！生で見れるとは思わなかったんだぜ！しかも元祖まで！」

承一郎「さあ！皆さんご一緒に！」

クルツ♪シユゴオオオオ×7

主人公達「忍+ジヨセフ」「逃げるんだよオオオー！ツッ!!？」

180度クルツと回って全速力で走る。千棘さん達はそれに追隨する。

千棘「待ちなさいよ〜」シユタタタツ！

承一郎「くっ、こうなったら：頼むブラッド！秘技『ブラッド・シールド』！」

ブラッド「しようがないなあ〜。さあ美少女よ、僕の胸の中に「邪魔よ」ブゲエツ!!

？」

セリフを言い終わる前に千棘さんの拳が顔面に炸裂する！おお…、いつもくらってるからわかるよ、すごく痛いだろう？

G 承太郎「ぐはあっ!!？」

八幡「じよ、承太郎!!？」

G 承太郎「ば、バカナ…大抵の攻撃ならフィールドバックすらしないはずのブラッド

が…」ガクツ

霊夢「承太郎ー！ツッ！」

幻想郷の空条承太郎（ブラッド・メモリー）…再起不能

ちよつと待てよ、あの一撃…まさかアームストロングの拳よりも強いんじゃあ…。脂汗が僕の顔からドバドバと滝のように流れる。

尊い犠牲だった…。僕はブラッドを投げ捨てながら走る。

八幡「こいつも中々いい性格してるわ」

伊達に今まで八幡にいじられてた僕じゃあないのさ。

A・B八幡「お前がいうな！」

丈城「アハハハハハ！最高だぜ！こいつら！」

A・B八幡「同類がいたー！」

G承太郎「死んでないぞ！」

霊夢「しょうがないわね、私も手伝うわ！」

霊夢さんが鶴さんを結界に閉じ込める事に成功するが、

鶴2「博麗霊夢、この結界を解いてもらおうか」スチャ！

霊夢「えっ!? 結界一つまでしか無理なのに…！」

分裂していたのか！そして霊夢さんは結界を解いてしまう。

皆に助けて欲しいけど、皆捕縛系の能力じゃあない！

承一郎「くそっ！絆よ、僕に力を！」

僕はダイヤモンドを投げつける。形は柵、硬度は最高峰。だが、

万里花「そのダイヤが変化する『速度』、取り締まらせてもらうばい！」
橘さんが投げた手錠がダイヤを捉え、変化がともゆつくりになったところを突破される。

丈城「なんだあのスタンドは!?!」

万里花「本編で未登場だから言えないばい！」メメタア!

八幡「しようがない、『ハーミット・アメジスト』！」

G 承太郎 & 丈城「『ハーミット・パープル』！」

三人の茨が小野寺君を捉えようとするが、空気に壁があるように阻まれる！よくよく考えると僕達のスタンドはこつち側でお披露目する事が多いな…。

小咲「一条くくん、捕まえた！」

そしてたつた一度の踏み込みで僕の懐まで潜り込む！

八幡達主人公達の肩が掴まれる。見ると八幡の肩には承太郎さんの手が。丈城の肩には仗助さんの手が。はちまんくんの肩には徐倫さんの手が。比企谷隊長の肩には静さんの手が。幻想郷の承太郎の肩にはジョルノさんの手が置かれていた。

バカ騒ぎもここまでらしい。既にジョセフさんも同罪扱いで忍さんに捕まっている。

歴代ジョジョ&忍「やかましい！うつつとうしいぞ！」

承太郎「留美。頼んだ」

いろは&陽乃&小町×3&綾辻「どの口が言ってるのやら……」

その後、顔を酔ってないのに赤くした女子達と死にかけの承一郎が見つかったとか。なお、全主人公達ー忍さんはジョルノ特製のわさびの刑に処されました。

ズツダン♪ズツズツダン♪

ズツダン♪ズツズツダン♪

ズツダン♪ズツズツダン♪

グイン♪グイン♪バツバツバツ♪

(歴代ジョジョ+魔理沙+ゼノヴィア+オール陽乃&小町+白良によるギャングダンス)

主人公「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア！ 瞼に塗るな！ 舌に塗るな！ 上唇に塗るな！ 更にガムテープを貼るなあ！ 止めろ黒ジョルノオオオ！」

忍「やれやれだわ」

痛覚・味覚抑制しても痛いつてどういうわけ!?!?

忍さん、同じ主人公なのに一人だけずるい！

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

封印される記憶

主人公達「「ひどい目にあつた……」」

ほんとだよ。わさびのせいで味覚障害になつた気がする。え、小野寺君達の料理だつて？そんなもの慣れだよ。

八幡「あれ、たまに食らうんだよ……留美が加わつたから生首を簡単に作れるようになったし……おのれジョルノ」

リアス「あなたの場合は録でもないことするからでしょ？自業自得よ。丈城と同じで悪魔より悪魔らしいわ」

承一郎「嘘つけ。催眠術をかけて僕とジョニイを海の上で戦わせたり、声が似ている人間を使つて騙したり。今回だって色々敵の方が憐れになるような事をしていたじゃないか。真二セコイ偽装は絶対に忘れんぞ」

まあ、その分僕も色々仕掛けてきたけどね？

G 承太郎「霊夢や射命丸をはめたり、スカーレット姉妹を脅したり、俺の裏人格をいじめたり」

うわあ…マジかよ…。

A 八幡「死神を遊び半分で虚仮にしたり、G・D・s tでは俺達も騙してやがったしな」

お前、味方も騙すのはちよつと…。

B 八幡「平塚先生をゴミ箱に捨てたり、雪ノ下や由比ヶ浜を殺気で黙らせたり」

平塚先生はともかく、あつちの雪ノ下さんや由比ヶ浜さんに対するアレはお前どうしたよな？

丈城「はつはー！俺達は特に被害を受けてねーな？」

書いたのが尾河七国さんだったからね。むしろ作者（G I O G I O）はよくアレだけ八幡のエグさを出せたものだよ。特にブラッディ・ボーン。

八幡「承一郎、今回のばか騒ぎの発端はお前の連れだっただろうが！それも逃げるんだよオオオ！の発端も！お前らだって楽しんでただろ！」

承一郎「……………（ブイツ）目そらし」

知らないな。勝手に皆がのってきただけだろう。というか一番被害が酷いのは僕なんだぞ！…あ、承太郎さんすみません。

A 八幡「俺達は楽しんでない！巻き込まれただけだ！」

B 八幡「なんなんだ！あのワサビの刑は！地味に恐ろしいわ！」

G 承太郎「また胃薬が……………あ、承一郎。胃薬の補充は助かった…………」

我が組織名物のダンボール支援がどうやらG承太郎に役立ったらしい。

丈城「ナイチンゲール・エメラルドをコピー出来るようになったから自力で治せるようになったじゃあないか」

G承太郎「ああ。エリナおばあちゃん……」

いろは「は？エクセスいきますか？」

いろはの冷たい視線が承太郎を襲う。過剰回復はやめてあげて？あれはマジでヤバいから。

G承太郎「い、いや……一色いろはには感謝だ。ただ、慣れるまでが大変そうだな。自分にエクセスをやってしまいそうだ」

丈城「……………」

ん？どうしたんだ？ここで黙るなんて兵藤らしくない。

丈城「なあ、ちよつと良いか？」

承一郎「どうした？兵藤丈城君……でいいのかな？」

G承太郎「何だ？厄介ごとなら勘弁してくれ」

丈城「ある意味では厄介ごとだな。特に承太郎にとつては。他の奴にはあまり影響はないかも知れない……いや、やっぱ俺達全員に話す必要があるわ」

真面目な顔をして承太郎を見る兵藤。兵藤はうつすらと汗を流している。

丈城「なあ、面倒だが、俺達7人、全員で話し合う必要がある。忍さんも含めて付いてきてくれないか？」

忍「あちしまで？なによ？」

何だ？八幡という存在に取りつかれたこと以外は共通点なんてないぞ？ましてや忍さんまで表に呼び出すなんて普通じゃあない。それに、提案しているのが悪魔より悪魔らしいと言われている兵藤だ。これは普通じゃあない。

言われるがまま、外に出る俺達7人。千葉村の管理者棟の外、葉山達とカレーを食べた場所のテーブルに腰を掛ける。

八幡「で、話って何だ？」

丈城「この世界でのスタンドで、いくつか俺達の記憶から消すべきスタンドがある。話というのはそれだ」

八幡「……………デュオロン・オブシディアン……………か？」

承一郎「あれは……………ルビレーザー以上に危険だ……………」

B八幡「デュオロン・オブシディアンって……………確か川崎の妹のスタンドのレクイエム……………とかいう奴だよな？話には聞いていたが」

レクイエムを覚覚できない…いや、元々スタンド使いではないボーダーの八幡は覚えていないみたいだが、ボーダーの世界でもデュオロンは出てきた。

A 八幡「小町のルビーレーザーよりも危険だつて!? そもそもレクイエムって何だよ……あれ? そう言えばそもそも何で俺はあんな旅に出ていたんだ? そうしなければならなかった理由が確かにあつたことは覚えてるんだけど……」

はちまんくんの俺もレクイエムを……そもそもプッチの事自体覚えていない。ザ・ワールド・ネオ・レクイエムは使った本人ですら効果を及ぼしたからな。レクイエム……兵藤もあれの危険性を見いだしたか。

丈城「他はサンシャイン・ルビーだな。特に一人だけ、絶対に記憶から消すべき奴がいる。違うか?」

そう言われて僕達は一人の男を見る。そうだ……こいつだけは、絶対にデュオロンとサンシャイン・ルビーを消すべきだ。

G 承太郎「……俺か」

承太郎が静かに答える。スタンド使いではない二人の八幡は除外。元々自身のスタンドしか使えない僕も除外。複数のスタンドは使えるが、基本世界のスタンドだけを使える兵藤もデュオロンを使うことは出来ない。

だが、承太郎は違う。承太郎だけはザ・ジエムストーンやナイチンゲール・エメラルドをコピー出来たように、リーシャウロン・アクアマリン……しいてはそのレクイエムであるデュオロンを使うことが可能だろう。ただデュオロンを使うことが出来る程度

であるならば問題はない。だが、承太郎の場合は……。

ブラッド「僕も賛成だね。承太郎」

G 承太郎「ブラッド……」

承太郎のスタンド、ブラッドが出て来て兵藤の意見を肯定する。

ブラッド「オリジナル承太郎博士や八幡によって、今回の暴走は何とかすることは出来たけどさ。だけど君は本当の意味でアレを制御出来るわけじゃあないよね？」

八幡「……やっぱりな」

承一郎「どういうことだい？八幡」

八幡「お前やジョニイの角と同じだよ。俺と違って、承太郎は自分の殺意を制御できずに暴走する。そんな状態でデュオロン・オブシディアンや全方位ルビィレーザーを使われてみるよ……」

ちなみに僕の骨の角はまだ完全には消えていない。ちよつと頭から盛り上がっている程度だが、まだ全てに決着がついてないからだろう。しかし……

承一郎「なっ！あの状態になってしまうのか！」

B 八幡「リサリサと違って精神のリミッターが無い状態での全方位ルビィレーザーか……それは確かに危険だな」

A 八幡「うちの小町の制限があるルビィレーザーだって充分に危険だった。あんなも

のが遠慮なく使われたら世界が確かに滅ぶ……」

忍「ルビーレーザーはあちしは制御出来るけど、スージーさんの生まれ変わりのあの子にそんなレクイエムがあったなんて知らなかったわ。丈城ちゃんがあちしを呼んだのは、あちしのコピー能力の事ね？」

時々忘れがちになるが、忍さんの力も制御できなければ危険な能力になる。八幡の記憶越しに忍さんの能力を知った兵藤の目の付け所に感服する。似たような能力だからかもな。だから承太郎の：ブラッドの能力を特に警戒していたのか。

兵藤のみならず、デュオロンを知る全員が事の重大さに気が付いた。

承太郎「あれだけの殺意を制御できるお前が化け物だと思うがな……八幡」

丈城「お前は絶対にデュオロン・オブシディアンやサンシャイン・ルビーを封印するべきだ。まあ、お前の意思に任せるけどな。俺も忘れる事にする。ホワイト・スネイク」
兵藤はホワイト・スネイクを出して自分の頭からディスクを取り出す。そしてそのディスクを八幡に差し出す。このディスクは……

承一郎「へブンズ・ドアー？」

丈城「これで記憶を消してくれ。承太郎の場合は本音を言えばホワイト・スネイクでディスクにしたいところではあるが、承太郎のスタンドはあくまでもブラッドだろ？」
ブラッド「僕をディスクにされたら困るなあ……かといつてデュオロンに変身できる能

力だけを器用に消すことなんて出来ないし」

だから記憶の封印をするわけか……。確実性を期すならレクイエムを使うことも手だが、そこまで上手く制御出来る自信がない。もう砕けない確信はあるが……。ヘブンス・ドアーが現状で一番安全な手段か……。

忍「ちよつと待つてちようだい？ 承太郎ちゃんやあちしはわかるとして、何であんた達まで記憶を消すのよ。別に問題ないと思うわよ？」

承一郎「フランキー声でオカマ口調……。メメタア！」

忍「放つておいて頂戴！（CV・八尾一樹。なお、忍は元々中の人と同じ作品の世界からの転生（ONE PIECEのボンクレー）であるが、本人は記憶が曖昧になっている）あら？ 何かフランキーって聞き覚えがあるような…麦ちゃんとか…」メメタア！

八幡「止めてください忍さん。これ以上は何か危険な気がします」

B 八幡「ジョジョにニセコイにワールドトリガーにONE PIECE……。確かにそろそろ訴えられそうだ」メメタア！

確かにそろそろ集英社やKONAMI、プラチ○ゲームズにも訴えられそうだな。『ザ・オーガ』、あれ元々アームストロングの能力を参考に考えられたスタンドだし。

A 八幡「だから止めろって！ マジで危険だから！ 脱線しすぎだ！」

うん、忍さんは掘り下げたら更に危険な気がする。更に色々クロスしてるしね。

丈城「で、もういいか？」

脱線しかけた話を兵藤が戻す。

丈城「俺達の記憶の封印にも理由があるんだよ。そうだな……ポードアの八幡以外は直接関わったりしたか、知識としてあるんじゃないか？そしてだ。それは下手をしたらポードアの八幡も無関係じゃあないかも知れねえぞ？」

ん？何を示している？ポードアの俺以外は関係があることで、もしかしたらポードアでも無関係じゃあない？

丈城「ウンガロのボヘミアン・ラプソディーみたいなタイプのスタンダードだよ。使いどころが難しいから俺もあまり使わないがな」

承一郎「ウンガロ兄さんのボヘミアン・ラプソディー……だつて？」

ボヘミアン・ラプソディー？確かピノキオとかの創作のキャラクターや物語を再現するスタンダードだったはず……。最近映画のタイトルになるらしい……。↑メメタア！

丈城「この世界は俺達平行世界人からしたら創作の世界みたいなもんだ。もしボヘミアン・ラプソディーみたいに人々の記憶を再現する能力なんかに会ってみる。デユオロ・オブシディアアンやサンシャイン・ルビーを出されたらたまったものじゃあないな」

………おいおい。そこまで考えるのか兵藤丈城。

B 八幡「待て。そもそも俺の世界にはスタンダード自体が存在しないぞ？」

丈城「だが、似たような物があるだろ？お前のお袋さんが変化したその『袖の白雪』みたいな物が。確かブラックトリガーとか言ったか？色々とスタンドに似た能力もあるらしいが……俺の言った能力が無いとも限らないんじゃないか？」

B 八幡「ブラックトリガー……確かにその手の奴が絶対に無いとは言い切れんな」
だろ？……と、兵藤は言う。ブラックトリガーの存在まで視野に入れるとは……恐れる。

承一郎「そうか……取り越し苦労であればそれで良いけど、もし兵藤君が言うような能力に会ってしまい、デュオロン・オブシディアンなんかを使われたら終わりだな」

A 八幡「決まりだな……封印してもらおう。デュオロン・オブシディアンの記憶を」
B 八幡「俺もだ。そんなスタンド能力を記憶していても誰も得なんてしない。兵藤、よく考えてくれたな」

丈城「俺はスタンドを研究してきたからな。アースと同じかそれ以上に。お前だつてそうだっただろ？」

兵藤君は承太郎に視線を向ける。

G 承太郎「やれ。D I Oの八幡。俺達からデュオロン・オブシディアンの記憶を消すんだ」

承太郎が深く頷くと、兵藤君が出したディスクを八幡に差し込むように促す。デュオ

ロン・オブシディアンを記憶しておくのは俺だけで良いってことか……。八幡は兵藤の能力としてのヘブンズ・ドアを頭に差し込む。

八幡「露伴先生……力をお借りします。ヘブンズ・ドアー！」

八幡はヘブンズ・ドアを発動させ、僕達を本にする。元々スタンド能力を持っていない二人の俺と忍さんは気絶。スタンド能力持ちも力なくテーブルに倒れ込む。

大切な『何か』が曝け出されるような気分だ。

承一郎「これは……初めて体験したが、キツいな」

G 承太郎「まさかヘブンズ・ドアを自分で受ける時が来るなんて想わなかった……。やれやれだぜ」

丈城「こいつは想像以上だったな……。早いとこ頼む。D I O 八幡」

八幡「了解だ」

忍さん、二人の八幡、僕の記憶からデュオロン・オブシディアンの記憶を。兵藤と承太郎、念のためにブラッドからは更にサンシャイン・ルビーの記憶を消す。

八幡「終わったぞ」

八幡はディスクを抜いて兵藤にヘブンズ・ドアのディスクを返す。

丈城「お？俺は何でヘブンズ・ドアをD I Oに貸したんだっけ？」

G 承太郎「さあな。だが、自分達の意味でそうしたことだけはわかってる。何か覚

えていたらまずいことでもあったんだろう。わざわざ俺達だけになっていいるからにはな」

忍「あちしは別に構わないわ。普段もあまりスタンドは使わないし」

B 八幡「とつとと忘れたいまである」

A 八幡「そうだな。早いところ宴会に戻るぞ。せっかく作った料理が食い尽くされたらかなわん。そうなったら兵藤を恨むまである」

承一郎「千棘君ならやりそうだ……」

G 承太郎「やれやれだぜ。幻想郷の連中も宴会となると遠慮が無いからな。急いだ方が良さそうだ」

料理の事を心配しながら汐華の隠れ屋敷へと戻っていく僕達。やれやれだ。

世界を越えた女子会アルス編

いろは「エメラルド・ヒーリング！」

いろはちゃんは私達に酔い消しのエメラルド・ヒーリングを放ちます。

ううっ…正月で学んだはずなのに…。

小咲「助かったよ一色さん。酔いすら治すなんて東方仗助さんでも不可能ですよ？」

万里花「警視總監の娘が飲酒事案ばするなんて…失態ばい…」

ナイチンゲールは治すという一点だけを見ればクレイジー・ダイヤモンドよりも上らしい。欠点もあるようだけど。

B小町「ところで気になるのが皆さん、それぞれの世界の恋愛事情ですな？小町さん」

小町&A小町「そうそう。気になりますなあ？小町さん」

A戸塚「うわあ、僕にとっては天国だとおもう小町ちゃん三人も、こういう状況だと悪夢だなあ」

小町「ではでは、お姉ちゃんからどうぞ♪」

いろは「ですって？はるのんさんか綾辻さん、呼んでますよ？」

遥「いや、あの小町ちゃんには首筋に星形の痣があるから」

A 陽乃「私達の小町ちゃんはD I Oが八幡から抜けたあとに星形の痣が無くなったしね。あれはあなたの世界の小町ちゃんよ」

一条君には元々星型の痣があったから分らなかったけど、八幡君が抜けると星型の痣が消えるらしいね。

いろは「わたしとハチ君は幼なじみという関係から特にこれといったエピソードってないですね。しいていえばジョースター家との出会いの時のエピソードでしょうか？」
(第一章参照)

私達はそのエピソードを聞いた。皆も共感している。前世から愛し合っていた男女の再会、感動するなあ…。だけど、ここで小町ちゃんから待ったがかかった。

小町「お兄ちゃんとのエピソードは腐るほど聞いてるんだよねー。でも、お姉ちゃん何か忘れてない？」

いろは「はい？」

A いろは「あ、ジョナサン・ジョースターとエリナ・ペンドルトンの出会いですね？」

B いろは「ほうほう。それは興味深いですねえ」

二人のいろはちゃん……早速アーシス被害者の会の結託を見せたね？

いろは「それこそジョジョの奇妙な冒険を読めば良いじゃないですか！一巻から五巻まで！ファントムブラッドを読み直して下さい！あれだって前世のわたしの恋愛事

情を赤裸々に綴られていて恥ずかしいんですから！」

小町「え〜！」

いろは「え〜！じゃありません！後でお説教です！」

いろは「はるのんさん！あなたの番です！」

A 陽乃「え？私？良いわよ？まあ、私の場合もいろはちゃんと変わらないかも。でも、違うのは最初から幼なじみって訳じゃなくてね？私達がお互い小さいときに起きた事件が会おうきつかけだったな……」

それは八幡君が小さいときに散歩に出ていた際、陽乃さんを狙った敵の刺客の車に轢かれそうだった所を体を張って庇い、陽乃さんを助けたのが八幡君だったらしい。

A 小町「お兄ちゃんはその時からお姉ちゃんにメロメロだったなあ……なんでも一目惚れだったんだって。だから無意識に体が動いていたみたいですよ？」

風鈴「その後も何度も陽乃さんの為に危ない目に遭いながらも助けて来たんですよ……あそこまでいくと完全に運命ですよ！運命！」

自身がもう相手がいるせい、鼻息を荒くして力説する風鈴ちゃん。面白く無さそうなのが弥七ちゃんこと、アルス界の一色いろはちゃん。

小町&陽乃（——）

…なんだろう、二人には何か闇があるような…。

いろは「それにしても、散々お世話になつてあれですけど、『八幡ファンクラブ』ですか？あれの存在は驚異じゃあないですか？はるのんさんからしてみたら」

あの組織は異常です！アーシスやボーダー、グレモリー家、クリスタル・ファングにも言えますけど！

でも、あの組織の異常さは一人の為のファンクラブの領域を超えます！規模だけで言えば、アーシスを組織される以前のジョースター家の為に動いていた頃のSPW財団実働部隊並みです！

陽乃「作つたのいろはちゃんだもの……」

Aいろは「ふっふっふっ……」

弥七ちゃん……どこまで多才……というか、チートなんだろう？スタンドが無くなつて丁度良いというか……。

A雪乃「義兄さんのファンクラブとためを張るのは無謀よ……それこそ、アーシスやボーダー、クリスタル・ファングクラスの戦力が必要だと思つて」

万里花「取り締まりの必要があります！絶対にパツシヨーン並に録でもない組織です！」

Aいろは「失礼ですね！そんなにヤバイ組織じゃ無いですよ！……八幡先輩が危険でなければ」

逆を言えば比企谷先輩が危なかったらヤバイ組織と告白してるよね???

A 小町「小町にも好きな人がいるのです！不良に絡まれているところを助けてもらいました！」

いろは「良かったですね？」

A 小町「告白はまだしていませんですよ。作者が別の作品ばかりのお兄ちゃんを構ってるんで、世界がザ・ワールドしちゃってるんです。いつかはちゃんとしてくれると信じてますから！いつまでもいつまでも！ザ・ワールドが解かれると信じて！」

A 陽乃「ほんととねえ。今回の事件で久々に『そして時は動き出す』だったし」メメタア！

A いろは「ほんとですよ！わたしなんてまだ登場すらしてないんですよ!?!本城がファンクラブの奴らがやりそうな事っていろはがやりそうだよな?とかいつて神様アルスさんから使用許可もらってやつと登場できたんですからね？」

メタイ！メタイよ！気持ちわかるけど！

いろは「やはり弥七がファンクラブを作ったのは八幡先輩のお兄ちゃんスキルにやられたからですか？」

静「あつちの私も骨抜きにされたみたいだからね」

A いろは「ですです♪あの優しい瞳に微笑まれて無意識に手で撫でられればコロツと

「いっちゃいますよ？そういうった人達の争いが勃発しないように作られたのが八幡ファンクラブなんです♪」

明らかにそれ以上の集団になってますけどね！FBIとかと上手く連携するつてどれだけの組織力なの！雪ノ下冬乃さんと言い、比企谷白良さんと言い、弥七、いえ、いろはちゃんと言い、一部が飛び抜けて規格外なだけど^{!!}？

A いろは「そういうえばDIO先輩つてお兄ちゃんスキルはあまりないんですか？」

いろは「ありますよお？ただ、あの目のせいでけーちゃんとか留美ちゃんとかここにはいないミドラーさんのお子さん達や康一さんの娘さん以外には怖がられちゃうんで、そういうった機会が中々無いんですよ」

B いろは「わたしの先輩とは大違いですね」

いや、『比企谷八幡』という人間の目を始めとしたそういう部分ではむしろ八幡君の方が基本世界に近いね。八幡君は認めないだろうけど。

風鈴「義輝さんもだいぶ違いますよね？」

結衣「中二（この頃はまだヨッシーと呼んでいない）は素敵だと思うけど？でも、そっちの中二は出会った頃のような中二だよね♪」

沙希「でも、ペンタゴン並のシステムを構築するなんて並みじゃあ無いよ。うちの材木座だつて無理だと思う」

うーん……材木座君の場合は元がナチス軍の上級将校という前世ですから納得な
んですけど、ボーダーの材木座君の能力は普通じゃあないよね。いえ、どこの世界の材
木座君もそうじゃあないのかな？

八幡君が言うところのH A C H I M A Nの世界での材木座君って。H A C H I M A
Nの影に隠れたダークホースと言うか……。風鈴ちゃんみたいな人が必ず一人は材木座
君の彼女になってるんだよね。

遥「材木座君はボーダーでもトリガー開発に役立っているわね」

アーシア「どういった出会いだったんですか？風鈴さんと義輝さんの出会い。気にな
ります」

風鈴「えつと……私は元々小町ちゃんと友達だったんですけど……」

そこで風鈴ちゃんが身の上話をする。風鈴ちゃん是一条君や幻想郷の承太郎さんの
ように小さい頃に両親を亡くし、親戚に引き取られたようなだけ……。その先で虐
待を受けていたみたい。

そんな風鈴ちゃんを助け、引き取ったのが当時から八幡君と交流のあった材木座君
だったようで……。互いに惹かれ合っていた二人は結婚を前提に付き合っているそう。
ほぼ同棲みたいなものだね。

風鈴「それ以来、私はとても幸せなんです♪」

結衣「むううう……」

結衣ちゃんが嫉妬している。別の世界とはいえ、好きな人が別の女の子と付き合っているのは複雑だよね。

小町「雪乃さんはどうなんですか？」

A雪乃「私は特に好きな人はいないわ。理想が義兄さんだからかしら？」

義兄さんとは八幡君の事らしい。すると雪乃先輩がちよつとだけイヤそうな顔をする。雪乃さんは八幡君は嫌いではないですが、恋愛の対象としての理想からは外れているからかもしれない。

雪乃「比企谷君が理想というのは……」

A雪乃「DIO義兄さんと比べたら失礼なのだけれども理想とはならないかも知れないわ」

出会った頃の雪乃先輩とハチ君はいがみ合っていたし、HACHIMANの雪乃先輩の大半は敵対した関係だったし。

陽乃「基本世界の雪乃ちゃんと八幡君は惹かれ合っている感じなんだけどねえ♪ちなみに、ガハマちゃんというはちゃんも。八幡争奪戦はこの3人で繰り広げてる感じかなあ♪」

いろは「この千葉村の段階で『比企谷八幡』と『一色いろは』が互いを認識して出会っ

てるケースってかなりレアなんですよ」

A いろは「ちよちよちよ！ どういう事ですか!？」

B いろは「先輩あるところにわたしあり！ のはずですよ!？」

皆は基本世界とは違うルートで出会っているからか、最初からお互いを認識して出会っていないらしい。けれど、私達はその事情を知っていた。

小咲「基本世界の一色さんと同じかはわからないけど、もし同じなら私達が知っていますよ?」

千棘「実は承一郎が時々様子を見に行ったりしてたんだよね。それである程度は事情を知ってるっていうか…」

万里花「文化祭、修学旅行で奉仕部がバラバラになりかけた時期が秋頃にあったようです。その頃の奉仕部に依頼をしたのが城廻さんに連れられた一色さんようで…」

春「内容はクラスの女子のやつかみで生徒会長選挙に立候補させられたとかで…葉山さんってご存知ですか?」

A 陽乃「クソね」

A 雪乃「クソよ」

A 小町「クソだね」

風鈴「殲滅対象です」

A いろは「1級危険人物です」

B 陽乃「バカね」

B いろは「身の程知らずです」

遙「ノーコメント」

B 小町「絶対に許さない」

B めぐり「ちよつと無いかな？」

…何があつたんでしよう？皆からの扱いがここまで酷いつて…。

G 霊夢「そこまで言うのね…どんな人なのよ。葉山つてひと」

リアス「風鈴までそう言うつて…よほど酷い人なのかしら？」

鶯「こほん。とにかく、学園の王子様みたいだった葉山隼人にちよつかいを出していた一色いろはを不快に思っていた同年の嫌がらせを受け、それを解決するように頼んだ先が奉仕部だった。その内容は録でもなかったがな」

いろは×3「何か聞きたくない」

小咲「でしようね。だって、自分の名誉が守られつつ、落選させる…と云うのが一色さんの依頼だったから」

女子一同「うわあ……」

千棘「で、比企谷八幡は上手く一色いろはを上手く説き伏せて生徒会長にした。それ

が一色いろはと比企谷八幡の出会いよ」

いろは「何でその比企谷八幡は一色いろはを生徒会長にしたんですか？」

結衣「何かおかしいよね？」

万里花「それについても理由があつたんです。そうしなければ雪ノ下雪乃か由比ヶ浜結衣が生徒会長に立候補していたんですよ。比企谷八幡は奉仕部という場所を守りたかつたんです。でも、それは更なる溝を作る事になつちやつたんですが」

小町「なんだかボンヤリと思ひ出してきた……すぐにまた忘れるんでしょうけど」
世界の修正力だね。

小町「お姉ちゃん！その頃だよ！小町達が基本世界を見たのは！」

陽乃「確か、その頃は何故か八幡君と小町ちゃんがケンカをしていたんだよね？それも、小町ちゃんが興味本意で八幡君から聞き出そうとして、八幡君が怒つたんだっけ？」

鶯「そうだ。比企谷八幡にとっては一番辛い時期に突入する頃だな」

雪乃「待つて。何でそこで奉仕部と比企谷君は更に険悪になつたのかしら？」

三浦「あーしらも納得できないし」

海老名「だよねえ？何で？」

春「勘違いしているみたいですが、奉仕部に三浦さんや海老名さん、川崎さんは存在していません。三浦さんや海老名さんは葉山さんのグループですし、川崎さんや戸塚さ

ん、材木座さんも奉仕部にはいませんでした。あくまでもこの世界が例外だと思いません」

三浦「そうなん？」

いろは「ええ。奉仕部は雪ノ下雪乃を部長に由比ヶ浜結衣、比企谷八幡の三人しかいなかったんです」

小咲「雪ノ下雪乃は奉仕部を生徒会という形に変えて存続させたかったです。ですが、その想いを口にすることがなかった故に比企谷八幡と奉仕部はすれ違った。小町ちゃんとも……比企谷八幡は孤立無援の、本当の孤独と戦う日々になったんです」

そこでハツとなったのが小町ちゃんと弥七世界の小町ちゃんだった。

A小町「それってワシントンでいろはお姉ちゃんから聞いた話だよね……リサリサちゃんが平行世界を……特に比企谷小町を嫌うようになったって……」

千棘「そんな中に一人だけ、相互に利用し合う形で比企谷八幡の近くにいた人間がいたの。それが……」

いろは×3「一色いろは……つまり基本世界のわたしなんですわね」

春「その時期に、一色いろはは比企谷八幡に惹かれ始めていたようです。何があったのかまでは流石に承一郎先輩も探れなかったようですが」

いろは「そうとわかったなら……わたし達の理念はただ一つです！本来なら出会って

なかった比企谷八幡と一色いろはが現段階で出会っている！」

A いろはは「この奇跡を大事にして！導かれる結論はただ一つ！」

B いろはは「さっきのばか騒ぎのように！二人のわたし、ご一緒に！」

いろは×3 「先輩（ハチ君）あるところにわたしあり！ですよ！」

女子一同 「やっぱりそこに行き着くんだ……」

女子会はまだ続く。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

世界を越えた女子会ボーダー編

女子会は続き、次はボーダーの世界の人達。

ボーダーの世界……いろはちゃん達にとつてはその1つの話です。比企谷八幡という存在はかなりの平行世界に存在するけど、ボーダーの世界も例外じゃあなかった。

その大半がこう。比企谷八幡はA級部隊の隊長、または将来的にA級部隊に昇級されると目されるB級部隊の隊長。隊員はこの比企谷隊長の部隊のように総武高校の関係者であるか、ボーダーに既存する部隊の隊員がちらほら混成されているか、風鈴ちゃんのようなこの世界にもいない存在が混ざるか、どこかで見たことがある人達が混ざり込んでいるか……。とにかく様々なパターンが存在しています。

そして、共通点多数の1つにボーダーの世界の人達とは関係が良好。特に女性とは……。

有り余るトリオン量で何かしらのサイドエフェクトがある。比企谷隊長の場合はアクトン殺しの2キロ以内の全ての存在を把握する能力みたい。

静「さつきも思ったけど、あれには絶対にアクトンも幻影の波紋も通用しない……気配を經つて透明になって、さらに波紋で別の気配を作ったのにあっさり捕まったし……能

力の相性が悪すぎ」

とは先ほどの静ちゃんの言葉。

次に、大半がオールラウンダー。遠近両方に隙がない。中にはパーフェクト・オールラウンダーな比企谷隊長もいる。

でも、良いことばかりでもないみたい。共通しているのは両親、または片親を亡くしている。中にはマチちゃんが死んでしまっている世界もあったらしい。

まあ、色々なパターンがあるけど、色々な比企谷隊長の大半はボーダーの方とお付き合いする人が多い。その中でも綾辻さんは多いかもしれない。

遥「私と八幡くんは幼なじみなの」

いろは「同士！」

すぐさまいろはちゃんは綾辻さんに抱き着いた。いろはちゃんと八幡君も幼なじみから始まつてるからね。

遥「うーん……私達の場合はエリナ（いろは）ちゃんと違って小さい頃から付き合っていたわけじゃないんだよね。むしろカップル歴で言うなら、この二・三年の話しかない？」

いろは「え？そんなんですか？」

Bいろは「その時にアタックしていたら……」

すんなりいかなかった何かがありそう……。どんなドラマがあつたんだろう？

遥「ちよつと恥ずかしいけど……幼なじみだから昔から仲が良かったんだけど……ほら、四年前の大規模侵攻があつて、八幡くんの両親が亡くなった頃かな？うちの両親も八幡くんを自分の子供みたいに思っていたから色々八幡くんや小町ちゃんを気にかけていたんだけど、それを引け目に感じていたみたいで……」

いろは「ああ……何となくわかります」

よく似た例は静ちゃんだね。彼女はジョセフさんに拾われて育つたからジョースター家の星型の痣がない事をコンプレックスにしてたしね。

比企谷君もそんな綾辻さんの両親に引け目を感じていたのかもしれない。

遥「それが理由かはわからないけど、八幡くんは私を段々避けるようになっていったんだ……。八幡くんは元々ボーダー立ち上げの時から働いていたし、その頃は色々あったから。私からどんどん離れていくようで……。このままだと八幡くんまで私の前からいなくなつちやうつて思つたら、それが寂しくてね。それで中学三年の時に色々あつて私から告白したの」

いろはちゃん達の世界でも折本さんの件とかがあつたし、そちらの世界でもそれがあつたかはわからないけど、基本世界の比企谷八幡君もその頃に色々あつて目が腐つてしまつたようですから、似たような事があつたのかも知れないね。

いろは「でも、比企谷隊長も綾辻さん一筋で凄く大切にしていますよね？そんな時期があつたなんてビックリですよ」

遥「ふふふ……。八幡くんも昔から私の事が好きだったんだって。もうそこからは昔の事が嘘のように大事にしてくれてるかな？」

G 霊夢「でも、同じ八幡でも3人とも恋人はタイプが違うよね？遥もエリナも陽乃も」いろは「参考になるかはわかりませんが、良いですか？基本世界でもそうだったんですが、比企谷八幡って人物は元々惚れっぽいんです。そして、好きになった人物がそのままタイプになる人だったんですよ。捻^レれてますから分かりにくいですけど」

一度懐に入れた人間にはとことん一生懸命だよ。一条君もそうだよ。自分を顧みずに私達を助けてくれる。

思い当たる節があるのか、3人の比企谷八幡の世界の人間はうーん……。と唸る。何故か幻想郷組や駒王組もだけど。主人公の皆って、変なところで似た者同士だね。

A 陽乃「あく……。エリナちゃん、それ正解かも……」

遥「うわ……。考えてみたらそうかも……」

いろはちゃんは小町ちゃんと陽乃さんを。綾辻さんは一色さんとやはり陽乃さんを。陽乃さんは弥七を見る。

遥「あと、無自覚たらしなところよね」

A陽乃「そうそうそれ。何人無自覚に落としてるやら。八幡はイケメンだから人気が高いのよ。特に後輩に」

遙「うちの八幡くんもだよ。普段は野暮つたい髪で隠してるからバレないけど、ボーダーの比企谷隊長としての姿はオールバックにしているイケメンだから全国的に人気が高いの」

二人とも目が腐ってないもんね。

遙「DIOはどうなの？」

いろは「目があれですから有象無象からは避けられてるんですよ。暗殺者の雰囲気も相まって無表情だと鋭い目が怖いみたいで普通の女子は近寄りもしないんですが」

ところが慣れてしまうと目以外は二人と同様に整っている方だから、イケメンになれる資質はあるらしい。その結果が……。

いろは「その二人ですよ」

再びいろはちゃん小町ちゃんと陽乃さんを見る。

小町&陽乃「(; 3、) ~♪」

そして大人組に混じってるミドラーさんを見る。

G 霊夢「意外！ミドラーも!？」

いろは「ミドラーさんの養子のネーナちゃんです。まあ、そっちはあまり心配してな

いんですが、問題は」

同じく大人組の康一さんを見る。

ゼノヴィア「意外だ！康一が！」

海老名「ハチコウキマシタワー！」

相変わらずの病気だね……。

いろは「康一さんの娘の康穂ちゃんです……。諦めが悪いんですよ……。ハチ君は母親の由花子さんを怖がっていますからその気は無いんですけど。髪の毛のスタンド、ラブ・デラックスにいつもひどい目に遭わされてますから」

元祖ヤンデレと言われているからね。由花子さん。

リアス「ラブ・デラックスですって!?!？」

リアスさんが何故かジョルノさんを見て青い顔をしました。何かラブ・デラックスに嫌な思い出があるのかな？でも、ジョルノさんは由花子さんとは無関係ですし、よくわかりません。何より、駒王の世界にはジョースター家やその関係者はいないはずだし……。 (尾河七国さんの作品を参照して下さい。ジョルノの偽物とラブ・デラックスが関係しています)

静「イーハも大変だねえ」

いろは「ジョジョ先輩……ある意味ではあなたが一番危険なんですよ。『相棒』じゃあ

ないですか」

ホント、性格から何から女版八幡君だよ。大半がまず、八幡君と静ちゃんが付き合っていると誤解しちゃうよ。それくらい二人の距離は近すぎるんだよね。近すぎて互いが兄弟のような関係を築いてるからね、本物の妹のマチちゃんが妬くくらい。

静「だから私とハッチにそんな感情はないから。私はお兄ちゃん（仗助）一筋だから」
こつちの静ちゃんってすごいブラコンだよ。確かに私達の方もお兄ちゃんっ子だけ。

A陽乃「静・ジョースター…確かに危険ね」

ニセコイ勢「真ニセコイ偽装の事もあるし…」

静「何で!?私に関係ないっつーの!」

静ちゃん……自分の胸に聞いてみて?

遥「エリナちゃんも身内で苦労してるんだ……。歌歩ちゃんとか那須さんとかも気を付けないと……」

主人公達…無自覚たらしすぎだよ。

B陽乃「次は私かな?私の場合……アヌビス神の私とある意味で同じかもね」

陽乃「私と?私と八幡くんは殺し合いから始まった出会いよ?」

えっ?そうだったの?

B 陽乃「私の場合、ボーダーに入隊した頃だったわね。二人ともそうだと思えば、自分で言うのもなんだけど、結構何やっても人並み以上でしょ？」

陽乃「まあ……そうよね？」

A 陽乃「親が親だしね」

実際に陽乃さんは強いよ。はるのんさんの陽乃さんも独学で波紋を身に付けたし、ボーダーの陽乃さんもアタッカーとしてかなりの位置にいるそうだし。更にはどこの世界の陽乃さんも大抵は強いけど……。

B 陽乃「で、調子に乗ってたんだよね。ボーダー最強の比企谷八幡にだって勝てる！ っ……」

雪乃「結果は見えたわ。そっちの姉さん、完膚なきまでに負けたのね？ 比企谷君、戦いとなると性格悪いし」

それは八幡君のイメーজだよ？ 雪乃さん。

B 陽乃「ジョジョ……じゃなかった、DIOとは違うわよ？ そっちの雪乃ちゃん？ は正々堂々と負けたの。それからだったかな？ 八幡くんに興味を持ったのは。逆に二人の雪乃ちゃんには悪いんだけど、雪乃ちゃんから興味がなくなっちゃったんだけど」

雪乃「由比ヶ浜さんから聞いたわ。春頃の私のようだったそうね」

A 雪乃「記録で見たのだけれど、私から見ても酷かったわ。そちらの由比ヶ浜さんが

激怒したそうね」

結衣「うん……ゆきのんには悪いと思ったけど、何でもかんでも自分が負けると卑怯だズルだつて言ってきて」

雪乃「耳が痛いわね……変わらなければ私もそうなっていたのかしら……私と会ったら、その私も変わることが出来れば良いのだけれど……」

B陽乃「どうかしらね？あなたの場合はカースと同じ柱の一族の呪いだったつけ？そういう理由があつたわけだし、対して私の雪乃ちゃんは元々の性格だからね。DIOやガハマちゃんにこつびどくやられても懲りてないんじゃないかな？実際、職場見学の時も雪乃ちゃんは八幡くんにやられたのに変わらなかつたし」

それは相当だよ。まあ、雪乃さんも八幡君に一度完全に見捨てられた事があつたよ。うだし、何かきつかけがあれば変わるんだろうけど。それにしても、ボーダーの陽乃さんも無謀だね……

いろは「比企谷隊長はジョセフにも勝つたつて言うじゃあ無いですか。ジョセフにはハチ君や承太郎でも手を焼くんですからね？」

魔理沙「そうなのか!？スゲーな！ジョセフは部を越えた時でも単独で敵を倒せる奴だつたんだぜ？」

ゼノヴィア「ほう……あのジジイがそんなすごい男だとは意外だな」

B 陽乃「ジョセフ・ジョースター……あのジジイはただ者じゃ無かったわね。戦いかたが老獪というか……」

静「さすがパパ……そっちでも暴れたんですか。騙しの手品がイヤらしかっただろうな」

B いろは「クラツカーがブーメランのように戻ってくるって何ですか？ ホント……先輩も勝ったとはいってもベイルアウト寸前でしたし、切り札のブラックトリガーを使わざるを得ませんでしたね。ランク戦であれを使うことは滅多に無いんですよ？」

一色ちゃん「クラツカー・ヴォレイの餌食になったんだね。こっちの世界でもあの抜け目の無さはいつも驚かるよ。っていうか、初めての異世界経験だったのに、一色ちゃんに容赦なくクラツカー・ヴォレイを使ったの?!? 確かに一色ちゃんはエリナ・ジョースターでは無いけど。」

A いろは「ジョセフ・ジョースターさんはヨボヨボでも戦ってましたからね。この世界のジョセフ・ジョースターさんが相手ではわたしも苦戦しそうです」

波紋も八幡君並みに強いですからね……たまに百歳だというのを忘れちゃうよ。弥七ちゃんでも警戒するんだね。ちょうど話に入ってきた一色ちゃんに話が振られた。

B いろは「わたしですか？ 言ってはなんですけど、エリナさんって『一色いろは』の中で性格が全然違いますよね？」

B いろは「わたしの場合は基本世界のわたしとあまり変わらないかもです」
へえ。と言うことは、最初あの葉山って人に？」

B いろは「ただ、少し違う所は最初から先輩に対してアタックしていたところですかね？意味合いは出会った頃とは違いますけど」

最初から比企谷君狙いだっただけ？」

A いろは「察しが悪いですよ？さつき遥さんが言っていたじゃないですか。ボーダーにおける八幡先輩は全国的に人気があるって」

なるほどなるほど。基本世界の一色いろはは学校のアイドルである葉山先輩にアタックしてしていた。それは本当に好きという感情ではなく、憧れやステータスのように……。それがボーダーの一色いろはにとつての比企谷隊長だったのだろう。

B いろは「最初は本当にアイドルに手を出……お近づきになるのが目的だったんですけど……」

この人、今手を出すといい切りかけたよね？

A いろは「先輩の本質に触れて本気になったんですね？わかりますわかります」

B いろは「です。いやあ、さすがは弥七さん。同じ一色いろはなので話が早くて助かります♪それに比べてエリナさんは……ホントに一色いろはですか？」

いろは「ナイチンゲール・エメラルド」

B いろは「何ですか？やるんですか？トリガーオン！」
 ゴン×2（アクトン・クリスタル）

静「はいはい。スタンド出ししたりトリガーを起動させるなっつーの」

スタンドで拳骨は止めてよ。アクトンはパワーが強いんだから。

B いろは「やっぱりスタンドって反則ですよ。なんでトリオン体を貫通してダメージ与えてくるんですか…。しかもこっそり透明化して出してくるんですから…」

わたしもボーダーの一色さんも涙目のルカで静ちゃんを睨む。でも、一色ちゃんはボーダーの射手個人シューターランキング第二位だとか…。

いろは「でも、中々の人達で比企谷隊長は守られてるんですね？」

B 小町「ほよ？小町には聞いてくれないんですか？」

いろは「マチちゃんから大体は聞きましたから。おおよその内容は聞いてますからねえ…。」

小町「あゝ…掘り下げる程のネタを本城は聞き忘れていたそうだよ？この原稿をkanataさんに送って聞くそうだけど…小町って5割が彼氏作らない、3割が大志くんとくつつく、1割が戸塚さんと付き合うとか…そういうオチしか無いんだよね」メタア！

B 小町「だからってブラコンに走らせるのは意外性ありすぎで引くんですけど…」

ホントだよ。ってというか、メタイよ！

Bめぐり「私をはるさんに紹介してもらってオペレーターになっただけだから、これといったエピソードって無いんだよねー。あ、でも綾辻さんには助けてもらってるかなあ」

めぐり「私も綾辻さんみたいな副会長が欲しかったなあ。リアスさん、ゼノヴィアさんをくれませんか？」

リアス「何だよ。あげないわよ？かわいい眷族をあげるわけがないじゃない」

それにしても……濃い面子だね。

次は幻想郷、女子会はまだ続く。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

世界を越えた女子会幻想郷編

アルス界の世界とボーダーの世界の事を聞いた私達。次の話は幻想郷の話。

見た感じ、幻想郷の人達は全員が末裔の承太郎さんに惚れている状態みたいな感じがするね。

G 霊夢「私達と承太郎の話？良いけど、いろはや陽乃、遥みたいに私達の付き合いは短いわよ？一年過ぎてないくらいじゃあないかしら」

霊夢「口調が既に影響を受けている感じがするけどね」

いろはちゃんの世界の方の霊夢さんが異世界の霊夢に突っ込む。じゃあ……と言うのは私達では常識なんだけど、どうやら他の世界では違うようだね。

G 霊夢「うるさいわね。良いじゃあないのよ。もう慣れちゃったし」

魔理沙「最初は違和感があったんだぜ」

慧音「いつの間にか影響を受けてしまったな」

文「あやややや。本当ですよ」

ジョースターの影響力というやつなのかな？そんなことよりも、幻想郷と駒王の話は興味深いね。私達が一切関係していないからかな？関係しているのはこれまでとは逆

で、ジョースターが主として関係しているね。

G 霊夢 「承太郎が幻想郷に来るきっかけは……ブラッドの独断よ」

三浦 「やつぱりあいつだったし」

ブラッドは結衣ちゃんのリバースタウンのように自分の意思を持ったスタンド。しかも、普段から承太郎さんにちよつかいをかけては胃にダメージを与えているのだとか。

魔理沙 「落ちてきたのが神社の上だったって話なんだぜ。それも霊夢の生命線の賽銭箱を破壊したそうなんだぜ」

霊夢 「私だったら許さないわね……」

朱乃 「あらあら。私も神社の娘ですから他人事ではありませんわ」

そう言いながらも楽しそうなのは気のせい？ 姫島さん？

文 「博麗神社のお賽銭箱を破壊するなんてニュースを聞いた時はわたし達も驚きました。幻想郷では自殺行為の一つですから」

博麗霊夢。承太郎さんが規格外過ぎるので霞んで見えるけど、承太郎さんが幻想郷に現れるまでは最強と呼ばれていたそうで、人間でありながら最強と謳われたその存在感は誰からも一目置かれていたみたい。

そして、そんな博麗神社のお賽銭箱を破壊した承太郎さんに当然、霊夢さんは激怒し

て…。

海老名「ドンパチ……だったって聞いたなあ」

静「いきなり頂上決戦だったんだね……」

いやいや。今回集まったメンバーの中でも、幻想郷と駒王は異質だよ。幻想郷のメンバーは現段階ではスペック面では最強。駒王はこれから強くなり、いずれは幻想郷を越える可能性を秘めている。

もつとも、両方とも柱の一族みたいなのがデフォルトですから、他の世界とは種族的なものからして強いんだけど。

あれ？幻想郷の承太郎さんや霊夢さん、魔理沙さん、丈城さん、ついでに一条君も人間だったよね？何で対抗できてるのかな？

ついでに言えば、赤龍帝の丈城さんはわかるよ？でも、承太郎さんってジョースターとかとは無関係の所から色々力を持ってきすぎではない？まあ、そんな人達相手に機転と技とペテンで手玉を取る八幡君も八幡君だけど。特に私達の世界ではやり過ぎだったね。

千棘「今回のメンツの中では一部を除いて最強なのが承太郎だもんね」

静「そうそう、そう言えば霊夢と承太郎さんって毎晩同じ布団で寝てるみたいだよ？」

ザワ……………

いろは「大人な関係なんですわね……」

いろはちゃんが見え、目で霊夢さんを見た。

G 霊夢「違うわよ？ 布団代節約の為よ」

いろは「いえいえ、良いんですよー？ 爛れた関係でも。他人の話な訳ですしー？」

魔理沙「いやいやエリナ。それがな？ マジでそんな関係じゃあないんだぜ？ ただの同居人ってな扱いはないんだぜ？」

静「イーハ、コレがマジなんだって。幻想郷にいる間、私たちって博麗神社に寝泊まりしてたんだけど、毎晩二人で寝ているくせに、そんな素振りがまったく無かったんだって」

幽香「待って。何で静はそれを知ってるの？」

三浦「毎朝承太郎&霊夢の寝室に忍び込んでイタズラを仕掛けようとしていたからだし。後はヒキオ情報。幻想郷の承太郎の奴って、これだけの美女・美少女に囲まれないからその手の話は一切ないらしいし」

慧音「ふむ……私も気にはなっていた。浮いた話がまるでない」

咲夜（お嬢様方の好感度は高いようですが……特に妹様の好感度は天元突破してますね。しかしながら、承太郎様からの感じではその気が無いようですし……）

何やら十六夜さんがブツブツ言ってるけど、もしかしてこれは……。

いろは「ねえ……ジヨジヨ先輩？海老名先輩？これってもしかして……」
海老名「うん。多分、間違いないよ？」

静「無自覚のフラグ建築、無自覚の好意……下手につついたら面倒なタイプだよ……」
三浦「これはそつとしておくし……」

ここは無理矢理でも話題を変えるべきだね。

徐倫「そう言えば慧音。あんたって教師なんでしょ？」

慧音「そうだ。そう言えばこの世界は本来の歴史とは別の歴史をたどったんだっ
な。お前は今、何をしているんだ？漫画では囚人だったと聞いていたが」

徐倫「あたしは冤罪が晴れて今はハッチ達の高校で英語教師をしているのよ。だから
教師の先輩に何か助言を貰いたくてね」

慧音「なるほど……私の授業はだな……」

キングクリムゾン！

慧音「……というわけだが……って聞いているのか？空条徐倫」

徐倫「……ZZZ」

ZZZ……ハッ！Σ（。・。・）

静「……慧音さん。1つ言わせてもらっていい？」

A陽乃「わたしも……」

遥「……………私からも……………」

リアス「……………同じく」

千棘「あたしからも……………」

結衣「スヤスヤ……………」

女子一同「恐ろしくつまらない！」

慧音「な、なにいいいい！どこがだ！ハクタクたる私の授業のどこがつまらない！
いや、山も谷もないんですよ！これでは何も印象に残らないですって！

徐倫「……………とりあえず、問題児の対処法とかを教えてください！」

慧音「宿題を忘れた生徒には頭突きだな」

え？それって体罰……

徐倫「それなら拳骨をいつも落としてるわね。そっか、ストーン・フリーで頭突きを
やれば良いのか」

え？それって（ry

静「徐倫お姉ちゃん。いや、空条先生。スタンドで頭突きは止めてください」

小町「来年は小町も入学するから止めてよね……さすがにストーン・フリーでの頭突きは
痛そうだよ。オラオラよりかはましだけどさ……………」

小猫「……………暴力教師？」

遙「平塚先生みたい……」

A雪乃「どういうわけか、平塚先生は2つの世界では評判が良くないみたいね」

結衣「うちの世界のヒツキーはゴミ箱に捨ててたし……」

アーシア「そう言えば幽香さんはお花が好きなんですよね？どんなお花が好きなんですか？」

幽香「花なら何でも好きよ？どれも好きかは特に無いわ」

そこで花が好きなのは反応する。後は橘さんも華道とかも頑張っているから反応した。花好きの方達はキヤイキヤイはしゃぐ。

幽香「それに私は強いものとの戦いが好きだ。幻想郷の大半は戦いが好きね。特に桐崎。承太郎を一撃で仕留めた力には興味があるわ」

千棘「え？何の事？」

え？そんな事あったの？私達はお酒で酔っ払ってしまっで覚えてないけど……。それにしても幻想郷の人達は強いんだね？

いろは「強いと言えば、射命丸さんは霊夢さんとは本気で渡り合えるって聞きましたけど」

文「天狗ですから。それよりも写真を！写真を撮らせて下さい！エリナさん、リサリサさん、ツエペリさん、アヴドウルさん、花京院さん、杉本鈴美さん、ブチャラティさ

ん、スージーQさんなんてネタの宝庫じゃあないですか！是非とも！」

沙希「止めてくれる？」

めぐり「ちよつとそれは……」

小町「サンシャイン・ルビー……」

小町ちゃん！いくらウザいと言ってもサンシャイン・ルビーはシャレにならないよ！
基本的スペックはスター・プラチナ以上なんだから！

魔理沙「気持ちわかるんだぜ？何せここには漫画のファンにはたまらない存在がたくさんいるからな。特にツエペリさんの転生が女になってるなんてビックリしたんだぜ？優美子や姫菜にもビックリしたけどな。あ、ブチャラティもそうか？」

沙希「え？あ、うん……あ、ありがと？」

そう言つて魔理沙さんは川崎ちゃんの手をブンブンと上下させている。吸血鬼や柱の一族との戦いがメインだったファントム・ブラッドや戦闘潮流が好きみたい。とりわけ、ツエペリ一族が好きなのどうか。

シーザーの転生の大吉君やシュトロハイムの転生の材木座先輩に対してなんて感激の涙を流していましたものね？

霊夢「魔理沙がねえ……こつちの世界の魔理沙からは考えられないわ」

G 霊夢「こつちの私は何か醒めてるわね？」

魔理沙「ああ、そう言えばこっちの霊夢は承太郎と関わる以前の霊夢みたいな感じなんだぜ」

霊夢「あなたが例外なのよ。いえ、イレギュラーが関わると私が私じゃ無くなるわね。比企谷八幡が関わるいくつかの世界の私でもそうみたいよ？」

はい？今、なんて言いましたか？

G 霊夢「なるほどね。何となくそうじゃあないかとは思ってたのよ。多分、今まで関わらなかつただけで、比企谷八幡はあらゆる平行世界に存在してるだけなのかも」

ど、ど、どういうわけ!??

G 霊夢「幻想郷もいくつかの世界が存在してるわね。承太郎もそういう存在とは何度か関わっているから」

霊夢「その通りよ。比企谷八幡の虜になっている私も存在してるって紫から聞いたことがあるわ」

A オーフイス「……………」

オーフイス「そっちの我、何か知ってる？」

A オーフイス「エリナとりサリサには話した。我、白良の世界の我じゃない。別の駒王の世界の我。でも、今は幻想郷の話」

そうでしたね。でも、オーフイスちゃんの話も気になるね。

霊夢「幻想郷の平行世界も多数存在しているのよ。そっちの幻想郷は承太郎が特異点みたいだけど。これからもどんどん異変が起こるわよ？こっちの世界みたいだね」

G 霊夢「まあ、その辺は諦めてるわよ」

魔理沙「いつもの事なんだぜ？」

幽香「私は花さえ無事ならば構わないわ」

慧音「人里に害をなすならば戦うまでだ」

咲夜「紅魔館の為ならばいくらでも戦うまでです」

文「いい情報です！ネタはいくらあつても困りません！」

幻想郷組「それが、幻想郷！」

もう良いよ。こちらの霊夢さんから色々聞き出すから。それに……駒王のオフィ
スちゃん。あなたからも……

世界を越えた女子会駒王編

さて、女子会も佳境に入る頃だね。ここで最初に聞くのは……

いろは「リアスさん達って丈城さん達の事をどう思ってるんですか？」

リアス「もちろん、好きよ」

それはわかるよ。嫌いな人を身近に置こうとは思わないものね？でも聞きたいのは
そう言うことじゃあ無い。

いろは「違うんですよ。男女としての……」

リアス「そういう意味で好きと言ったのよ。しかも、少なくともここにいる全員が」

はい？ちよちよちよ！なんてすごいことをさらっと自白してるの！？？幻想郷とは逆
でハーレムが完成してるの！？？流石に理解が追い付かない！

ゼノヴィア「小猫くらいじゃあないのか？ジョジョへの好意をカミングアウトして
ないのは。私は子供さえ授かれば順番とかは気にしない方向でカミングアウトして
る」

小町&陽乃&B陽乃&Aいろは&Bいろは「同士！」

いろはちゃんと同様に決意している八幡正妻（A陽乃と綾辻）軍団が息巻いている。

いろはちゃん達は円陣を組んで手を重ねる。あれ？Aオーフィスちゃんも？なるほどなるほど。

白良さんの比企谷八幡とは違う比企谷八幡の正妻みたいなものなんだよね？……：……つまり、駒王の世界にも比企谷八幡が存在している世界があるということかな？

ゼノヴィア「ああ。お前達もそうなのか。しかし意外だな。静・ジョースターやめぐりなんかもそうだと思うっていたのだが」

三浦「ねーし」

海老名「わたしも無いかな？」

雪乃「さつきも言っただけれど、比企谷君はアークス仲間としての信頼関係しかないわ」

結衣「あたしも。好きな人が別にいるし……」

めぐり「私には露伴ちゃんがいるから」

静「私はお兄ちゃんと婚約してるし」

沙希「あたしはそれどころじゃあない」

留美&京華「まだそんな年じゃあないから……」

意外にも、八幡君を恋愛対象にしている人は少ないんだね。それは先ほども言いましたからわかると思うけどね。けーちゃんや留美もなついてはいるけれど、どちらかと言えば兄を慕う感じかな。川崎先輩は弟があれだから疲れてそうだね。

リアス「ゼノヴィアや朱乃には苦勞してるわ。オフィスやアーシアは認めてるのよ。お兄様も丈城との仲を応援している……と言うよりは、外堀を埋めてくれてるわ」

兵藤君……既に仗助みたいになってるね。仗助さんもジョセフさんやスージーさんの策略で静ちゃんとは今みたいな関係になったわけだし、決定打はジョルノさんだったし。あ、セト神に嵌まって前世帰りしていたわたし（エリナ）とマチちゃん（リサリサ）も絡んでたみたいだね。

朱乃「あらあら、私が一番最初にジョジョと出会ったのよ？」

いろは「そうなんですか？」

朱乃「レッド・ホット・チリペッパー越しではあるけどね」

兵藤さんは複数のスタンドを任意で使えるようだからね。承太郎さんが持っていた漫画に出てきたスタンド限定のようだけど。

小猫「……違う。朱乃さんじゃあない」

え？違うの？

ゼノヴィア「そうだな。今回の事件には関わらなかつたが、ジョジョにも幼馴染みがいる」

アーシア「イリナさんですね？」

いろはの前世みたいな名前だね。エリナだから。

リアス「私の勘ではあの子もジョジョの事を……はあ」

小咲「幼馴染み率が高いですね……」

春「私達の場合はほとんどが幼馴染みですけどね」

そう言えばいろはちゃんの世界でも一条君（下の名前は楽君らしい）を巡る争いが勃発してみたいだね。誰が将来を約束した本物の幼馴染みなのかで。

リアス「更に四大魔王のセラフオール様もジョジョと意気投合しているし」

オーフィス「……時々木場やギヤスパーも怪しい」

めぐり「え？木場君はあそこにいる彼だよ？それにギヤスパー君って一色さんに声が似ている男の子の吸血鬼だった……戸塚君みたいに女の子みたいなきだったけど」

あつ！その情報はいりません！そんな事したら……あ、三浦ちゃんが既に片一方のスリッパ脱いでスタンバイしてます。

海老名「……愚腐……ジョジョキバ&ジョジョギヤスキマシタワー！」

三浦「海老名！擬態しろっていつも言ってるっしょ！」

スパアアーン！

三浦ちゃんのスリッパが海老名ちゃんにヒットします。

信じられないね。この人、花京院典明の転生なんだって。しかも花京院典明はいろは

ちゃんの母の従兄だし。

それと、別に文句言っても仕方ないですけど、いろはちゃんと声が似ている今回不参加の人は吸血鬼の男の娘かあ…。春は自分と同じ声の子多すぎて困惑してるだろうね。

リアス「ちなみに神器は時を部分的に止める力を持つているわ」

『ザ・ワールド』持ちなの!?!? デイオなの!?!? それにしても、幻想郷とはまるつきり逆だね。無自覚フラグか自覚フラグなのかの違いだけ。これはこれで疲れる関係だね。あ、そう言えば気になる事が……

いろは「リアスさん。さつきラブ・デラックスに反応してましたよね? 何ですか?」
リアス「ディスクのせいで暴走したのよ。ラブ・デラックスのディスクをジョジョに差し込まれて……」

『ラブ・デラックス』のディスク? ……! 『ホワイト・スネイク』!

リアス「それで何か暴走しちやったのよ。元の持ち主の影響なのかしら……」

小町「元祖ヤンデレです」

リアス「え?」

魔理沙「これなんだぜ」

魔理沙さんが仗助さんの時代の事を題材にした漫画のシーンを見せる。そう、康一さんの奥さん、広瀬由花子さん（旧姓・山岸由花子さん）の影響だね。間違いなく。

小猫「……ここ、このスタンドって……」

小猫ちゃんはジョジョの漫画を読んでいることに気付いた。

リアス「小猫？」

小猫「……このスタンド……見覚えがあるような……」

リアス「危ないスタンドね。それがきになるの？」

小猫「はい」

小猫ちゃんはめぐりちゃんを見て黙りました。いろはちゃんは小猫ちゃんに小声で聞いた。

いろは「どういう事ですか？」

小猫「……何故か懐かしいような……そんな気がするんです……」

それは……『キララ・クイーン』！そうだね。めぐり先輩の前世、杉本鈴美さんは『キララ・クイーン』の本体の吉良吉影に殺されたんだよね。

いろは「兵藤さんが使ったことがあるかはわかりませんが、『クリーム』『キング・クリムゾン』『ホワイト・スネイク』『メイドイン・ヘブン』は口にしない方が良いかも知れません。それらのスタンドによって前世が亡くなったり、仲間が殺されたりした方がここには多いのです。かく言うわたしやマチちゃん、ハルさんもクリムゾンに殺されかけましたし、ホワイト・スネイクは四年前の戦いの元凶ですから、良い思い出は無いんで

すよ」

小猫「……わかりました。私も記憶が曖昧なので。今は黙っておきます」

でも、兵藤君が関係していそうみたいだね。時がくればわかるかもしれないね。

リアス「ゼノヴィアにとってのクレイジー・ダイヤモンド、私にとってのラブ・デラックスみたいなのね」

アーシア「クレイジー・ダイヤモンドやザ・ハンド、レッド・ホット・チリペッパーの使い手の方と共闘するとは思いませんでしたけどね」

ゼノヴィア「東方仗助が二人も現れた時はビックリした」

アーシア「それを言ったらこの世界で空条承太郎さん、ジオルノ・ジョバアーナさんにお会いした時は身構えました」

リアス「本当ね。東方仗助さんは偽物とは髪型からして違ったし、この世界の空条承太郎さんは年齢が違いましたから別人ってすぐにわかったけど、幻想郷の空条承太郎は偽物にそっくりだったから……」

本当に偽物は何者なんだろうね？

陽乃「いろはちゃん。本題を逸らしちゃダメよ？八幡くんの事を聞きたいんでしょ？幻想郷にも存在していた八幡くん。もしかしたら……」

陽乃さんはもう一人のオフィスちゃんを見る。

A オーフイス「……………私の八幡は、元々私の世界の八幡じゃない。普通に千葉にいて、時々時空の壁の事故によって私の世界に来ていただけ。でも、この世界のアーシスが嫌いそうな千葉だった。白良が八幡とその世界の八幡の母親以外の八幡の周囲を粛清していた」

また白良さんか……………。

A オーフイス「でも、我が知っているのはそれだけじゃない。例えばリアスの兄、サーゼクスの子供だという八幡もいれば、赤龍帝だったり、逆に白龍皇だったり、とにかく規格外の八幡がいる世界もある」

どこの世界でも大変だね。でも……………赤龍帝とか白龍皇とかはともかく、種族まで完全に変わってるって無理がありすぎない？それって既に比企谷八幡じゃあないよね？

リアス「それって私達も……………」

A オーフイス（プイツ！）

ああ……………そう言うことか。もうパターンのにわかったよ。どこかずれた基本世界、ボーダー、幻想郷、凡矢理……………他にもあるよ？六花、SAO、魔法学園……………etc。

どの比企谷八幡もそうだったようだけど……………ハーレム、またはそれに近い状況を作ってるパターンが多いんだよ！

小町（——）

陽乃（—）

小町&陽乃（。▽。）ニタア

いろは&A陽乃&遙&G霊夢&リアス&小咲「あ？」

小町&Aいろは&B陽乃&魔理沙&朱乃&千棘「お？」

正妻VS側室大戦勃発？（嘘です）

< || t o b e c o n t i n u e d ||

世界を越えた女子会ニセコイ編

女子会はついに最後である私達の世界の話になった。

いろは「そういえば、皆さんは昔承一郎先輩と会っているんですよね？」

小咲「あんまり覚えていないけどそうみたいだね」

千棘「そう考えるとなんだか奇妙な巡り合わせね。高校で皆がほぼ同じ時期に会うなんて」

鶯「そうですね。でも一条承一郎のそばにはもう一人私と同じように少年がいたと思うのですが…」

え？男の子？確かにもう一人いたような…。

陽乃「ねえ、どう思う？」ヒソヒソ

雪乃「どうやら承一郎君はあの『村雨』の持ち主が死亡している事を隠しているみたいね。罪の意識からかしら？でもここは黙っておいた方がよさそうね」ヒソヒソ

いろは「そうですね…」ヒソヒソ

鶯「？どうしました？」

雪乃「いえ、なんでもないわ…」

いろは「じゃあ皆さんには再会した時の事を教えてもらいましょうか。では千棘ちゃん！」

千棘「えっ、私!?」

結衣「あ、私もそれ気になる！」

千棘ちゃんと同じ声の結衣ちゃんが催促する。

千棘「…えっと、アメリカからパパと一緒に日本に来て学校へ転校して、初日に遅刻しそうで塀を飛び越えた先に承一郎がいて…お姫様抱っこされたの」

いいなあ、私もやって欲しいな。↑魔法少女になる並行世界でお姫様抱っこされてる結衣「いいなー!羨ましいー!」

陽乃「女子としてはお姫様抱っこは憧れるよね」

いろは「ふふーん、実は私ハチ君にしてもらった事があるんですよ!」(中学編『東方 仗助、恋人に会う2』参照)

小町「私は承一郎先輩にしてもらった事はあるけど、やっぱりお兄ちゃんにやってもらいたいな。じゃあ今度は小咲さん!」

次は私の番になった。

小咲「えっとね、私と一条君が再会したのは中学の頃なんだ。2年生の時に同じクラスで、3年生の時からよく話すようになったんだよ」

いろは「ちなみに匿名の情報で最初は中華丼を承一郎先輩の顔面に叩きつけたらしいですよ」

小咲「るりちゃん!?!」

なんでそんな話すの!?!? ううっ…知られたくなかったよお。一条君は気にしてないみたいだけどこっちは恥ずかしいの…。

小町「あー…基本世界の小町みたいな人だよ…無駄に策略巡らしたり勝手に勝手に比企谷八幡の情報雪乃さんや結衣さんに渡すところなんてそっくりだよ…」

皆ちよつと苦笑いしてるよお…ううっ、穴があつたら入りたい…。

雪乃「そ、そう…それはかなり衝撃的ね…。それじゃあ次は鶴さんね」

鶴「私はですね、銃撃です」

このとんでも発言に一同騒然となった。

鶴「最初はお嬢を騙しているクソ猿だと聞かされていたものですから。その後には決闘で負けて奴を認める事にしたのです」

陽乃「へえ…鶴ちゃんって承一郎君に何か思うところとかないの?」

鶴「い、いえ! 奴はお嬢の恋人というだけです!」フルフル

鶴ちゃんはその言って首を横に振る。そういえば一条君と千棘ちゃんがニセモノの恋人って知らないのは私達の中で鶴ちゃんだけだよな?

陽乃「ふーん…じゃあ次は万里花ちゃんね」

万里花「私は再現が可能ですからやって見せましょうか？」

いろは「？はい、お願いします」

万里花ちゃん是一条君の方を向いた。まさか…

万里花「承一郎様ー！ー！ー！ー！！？」ダツ！

万里花ちゃんは勢いよく走り出して、一条君に抱きついた（ほぼタツクル）！

承一郎「うげえっ！！？」

一条承一郎（クリスタル・ボーン）…再起不能

主人公達「「じよ、承一郎！！？」」

すぐに千棘ちゃんは万里花ちゃんの首元を掴んでこつちに連れ戻す。

千棘「あんたねえ…事あるごとに承一郎に抱きつくのやめなさいよ！」

万里花「それはあり得ませんわ、私は承一郎様の許婚ですもの！」

千棘「私は恋人よ！」

千棘ちゃんと万里花ちゃんはお互い目から火花を散らしている。なんだかこの光景も見慣れたものになっているから不思議だね。

いろは「それじゃあ春ちゃん、あなたはどのようにな？」

春「！」ビクッ！

春がプルプル震えてる。確か春と一条君のつて…。

春「…言わないとダメですか…?」

いろは「お願いしますよ。大丈夫です、絶対に内緒にしますから「…見たんです」…え?」

春「一条先輩…私のパンツを…見たんです…!」プルプル…

この一言で全員が一条君へ視線を集中させる。あ、川崎さんも何かを思い出したのかため息をついている。

女子達（一部除く）「…最低」

承一郎「風なんだッ！不可抗力だッ！」

八幡君もウンウン頷いている。あ、川崎さんが拳骨を落とした。一条君は弁解してるけど八幡君は開き直っているね。

春「でも、クマさん見ましたよね?!?」

承一郎「…申し訳ありませんでした」（土下座）

小咲「まあ春、一条君も謝っているんだしこのくらいで、ね?」

春「…お姉ちゃんがそう言うならもう言いませんけど」

いろは「とりあえずエクセスいきましよう」↑O☆NA☆JI☆KO☆E
 どうやら二人共らしい。

承一郎「What's!!?」

既に八幡君は幻影の波紋で消えている！あ、比企谷隊長、捕まえてくれた。あ、そのまま比企谷隊長を引き摺って逃がっている！その辺りは相変わらずの鬼畜だね！

小咲「いろはちゃんも落ち着いて！」

小町「…まあひとまずこれで皆の再会した時の話は終わったね」

春「いろはさん！あの根性曲がり、捕まえるんですね!?!」

白良「了解よ？春ちゃん、エリナちゃん♪」

八幡「え？あんた女子って年齢じゃあ「オラア！」げふおお！」
ガクツ！

比企谷八幡（ザ・ジエムストーン）…再起^{リタイア}不能

復活したばかりなのにアホな事を……相変わらずの。

春「バカ、ボケナス、承一郎」

承一郎「おい、承一郎は悪口じゃあない！」

女子「ぶふっ！」

まさか別の世界の人からコレが出るなんて。

霊夢「バカ………」ププ

リアス「ボケナス………」ププ

小咲「承一郎……………」ププ

魔理沙「バカ、ボケナス、承太郎」

小猫「バカ、ボケナス、丈城」

Aいろは「バカ、ボケナス、八幡」

Bいろは「バカ、ボケナス、八幡」

千棘「バカ、ボケナス、承一郎」

プププ……………クスクス……………ゲラゲラゲラゲラ！

会場全体に広がり……………

「バカ、ボケナス、○○○○（主人公達）！」

主人公達「なんの羞恥プレイだこれ！」

やれやれだね。

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

格ゲー『未来への遺産』をやってみよう

格ゲー『未来への遺産』をやってみよう その①

一条邸、承一郎の部屋——

承一郎「よし、宿題が終わったぞ」

終わった宿題を一通り確認して、僕はカロリーメイト（メープル味）を食べる。

承一郎（さて、後は特に予定はないしどうしようかな）

ジョニー『最近はず和だからな』

最近は『愛国者達』からの攻撃はない。多分何かの策を講じているんだろうが、僕達に出来るのはただ待つだけだ。

承一郎「そうだな…よし、『おのぞら』で和菓子買うついでに小野寺君と少し話して「すまないが、そうはいかないんだ」What, s!?!?」

声が聞こえた方を振り向くと案の定アメリカ国旗が僕を覆い被さり、僕は何回目かの並行世界へ拉致られた。

ヴァレンタイン「ドジャアアアアン」

承一郎「大統領……だからいきなり拉致するのはやめて下さいよ」

周りを見渡すと千葉村で会った面々が。そしてここはどうやら奉仕部らしい。

承一郎「で？これはどういう状況？」

八幡「平たく言えば遊び？」

承一郎「遊び？何の？」

静「これこれ」

静さんはPS1を僕に見せる。

承一郎「PS1とは懐かしいな……。うちの世界ではレトロゲームに認定されてるんだけど？」

ちなみにPS1とかだと『メタルギアソリッド』とかかな。『ツインスネーク』があるけど正直HDDリマスター版が出てもいい名作だと思っただよ。↑メメタア！

材木座「いや、うちの世界でもレトロゲームだから」

承一郎「……PS3でも出来るんじゃないか？」

そう、PS1のソフトならPS3でも出来るのだ（当時はまだPS4は発売されていない。Vitaはある）。まあ、大統領が平行世界から持ってきた物だから規格が合うか分からないし、向こうの本体を使った方が無難と言ったら無難か。

承一郎「で？そのソフトは？」

八幡「承太郎達の時代の話をモチーフにした平行世界のゲーム、『ジョジョの奇妙な冒険』っていう2D格闘ゲームだ」

承太郎さん達の物語、ゲームとして出てくるんだ。というか……

承一郎「2D格闘ゲーム自体、あまりやらないんだけど」

2D格闘ゲームが全盛期だったのは1992〜2001年くらいまで。ジョルノ兄さんがパツシヨーネの下つ端だった頃までが全盛だ。僕達の世代では馴染みが無い。

承一郎「で？僕は何をすれば良いの？」

ジョルノ「アーケードモードでi fのストーリーを楽しんでいるところさ。各プレイヤーキャラを馴染みがある人間でプレイするという形で遊んでいる」

承一郎「へえ……で、僕を呼んだのは？」

ジョルノ「君は5年前のあの時、ホルホースと組んで襲って来たじゃあないか。僕達は誰もホルホースを使いたがらないからね」

なるほど、クリスタル・クルセイダース結成前、僕は八幡達とプツチ側、どちらの視点からでも判断できるように一時的に八幡達の敵としてプツチ側についた事がある。

その時に僕と一緒に組んだのがホルホースとステイリー・ダンというわけだ。

承一郎「いや、確かにそうですけど……何で僕が……」

ぶつちやけ億泰さんとミスタさんでもいいような……。

ジヨルノ兄さんは僕の肩を抱く。

承一郎「ジヨルノ兄さん？」

ジヨルノ「君には貸しがあったよね？」

承一郎「貸し？何かありましたっけ？」

静さんが懐から一枚の写真を取り出す。いつものマイクロボスの写真だ。

静「これ、最初の1台ロードローラーで押し潰したのは誰かな？」

なんて古い話を……確かに有耶無耶になっていたけど！

承一郎「ちよつ！それはクリスタル・クルセイダーズやオペレーション・ジエムストーンでチャラになったんじゃない？」

八幡「具体的にはそんな話は出ていないよ。なに。ちよつと遊ぶだけでそれがチャラになるんだ。安心しろ承一郎……安心しろよ」

承一郎「き、汚い……相変わらずだな、君は」

まあ僕もヤクザの息子だし言えないけどさ。さすが元邪悪の化身、そこに痺れぬ憧れぬウ！

三浦「イチロー。諦めるし」

承一郎「変な名前前で呼ぶの、やめてもらえますか？アヴドウルさん」

僕は某メジャーリーガーみたいに呼ぶアヴドウルさんの転生者、三浦優美子さんに

突つ込み、渋々と未来への遺産のプレイを始める。

承一郎「ん？」

八幡「どうした？」

承一郎「いや、ホル・ホースなんだけど、二人いない？」

どうやらホルホースはJ・ガイルと組んでいるノーマル版と、ボインゴと組んでいる裏キャラ版があるらしい。どっちを使つて良いのか分からないな。

海老名「ボインゴが映つてない方のホルホースをお願い」

ポルナレフ「J・ガイルは……わかるだろ？」

八幡達はホル・ホース単独よりもJ・ガイルを使いたくない気持ちがある。特に三浦さんは千葉村の件も含めて嫌がついていたらしい。

承一郎「まあ、依頼だと思えばいいか」

気分を切り替え、僕はホルホースを選択する。

オーブニング

ナレーション『DIOがジョースター達を始末する為に金で雇つた殺し屋。エンペラーのカードを暗示するスタンド使い「ホル・ホース」。彼は決して一人では行動せず、誰かと組んではじめて実力を発揮するタイプであった』

ホル・ホース『俺のやり方はわかつてるよな、J・ガイルのだんなよ……。行くか、

「吊られた男」のお前と「皇帝」の俺がいれば皆殺しだぜ』

ポルナレフ「J・ガイル……」

ポルナレフさんがギリギリと歯軋りをする。幽霊なのに歯軋り出来るんだ。

承一郎「ポルナレフさんの殺気が半端じゃあ無いんだけど……」

八幡「ヴァニラ・アイスやDIOが出てくるとみんなこうなるから。あ、『未来への遺産』版では中間デモが無いからストーリーは脳内で補完してくれ」

承一郎「今初めて見た僕では難しいんだけど……」

まあ、オープニングみたいな物が延々と流れるものだと思えば。最近のゲームはそういうのあるし、史実を知ってるから何となく分かるだろう。

タイトルコールで降りてきたタロットカードは魔術師。1人目はアヴドウルさんだ。では中間デモを脳内で再生。

ホル・ホース（八幡が口に出して）『お前がアヴドウルか。お前は色々とスタンド使いを知っているみたいだからなあ。お前を殺せば後が楽になるぜえ？お前のスタンドが一番俺とは相性悪いしよ』

アヴドウル（三浦が合わせる）『あーし……じゃあなくて我がスタンドの炎で焼き尽くしてやるし！』

承一郎「あの……アヴドウルさんの姿が三浦さんに変換されちゃってやりにくいん

ですけど……」

三浦「気にすんなし」

なんかやり辛いな。まあその内慣れてくるか。

さて、ホル・ホースの性能だが……うん、扱い辛そう。技表を確認した僕は一通り試してみる。

まずは定番の波動拳コマンドの『ハジキだ！』弱と中の攻撃ボタンで立ちながら、強でしやがみ射ちをし、下段攻撃の弾丸を射つ……が、撃ったときに十字ボタンを動かしてしまうと弾丸が軌道修正されてしまう。慣れない内はあさつての方向に飛んでしまいい、やり辛い。

次にこれまた定番の昇龍拳コマンドで出る『J・ガイルの旦那』。斜め上に弾丸を射ち、例え荒野でもどこからともなくガラスの破片が落ちてくる。対空技だな。けど、J・ガイルの旦那とかセリフがあるけどJ・ガイル関係ない。

承一郎「J・ガイルは光の反射の中を光速移動して攻撃する能力だったから、そのサポートだったんじゃないか？」

ポルナレフ「ああ、J・ガイルを始末した後にはホルホースがそれを知らずに周囲のガラスを割りまくっていたな。それを再現したんだろう」

解説ありがとうございます。それを技として再現するのか、カプコン。

次に逆波動拳コマンドで『ハングドマン』。どこからともなく水溜まりが現れ、通りかかった相手をハングドマンが刺す。刺された相手はしばらく硬直するのでそこで色々出来そう。攻撃ボタンで水溜まりの出る位置が変わるのだが、当たり判定が出るまで時間がかかる。コンピューター戦ではともかく対戦では使えない技だな。

……というか、

承一郎「どこから出てくるんだ？ ガラスも水溜まりも」

ンドウールやミドラーさんが近くにいるのだろうか？

承一郎「一通り試したらアウドウルさんが倒れた」

では脳内ストーリー再生。

ホルホース（八幡）『一番厄介なアウドウルを倒せたのは幸先が良いぜ！』

二人目 法王のカード。花京院さんだ。

ホルホース（八幡）『次はテメエか。花京院』

花京院（海老名）『ホル花！ きましたわー！』

いろは「おじさんはそれは言いませんよ？ 多分『後悔する事になるぞ！』じゃあないですか？」

承一郎「……花京院さんのイメージが……」

今度はスーパーコンボゲージを溜め、スーパーコンボを試す。因みにホルホースには

スタンドモードは存在しない。まあ、エンペラーをスタンドモードにしても困るか。それではホルホースのスーパーコンボを。

まずはエンペラーを乱射する『ぶちまけろ!』、花京院さんのスーパーコンボ版のエメラルド・スプラッシュに軌道が似ているらしい。命中率はかなり高いし弾速も速い。

承一郎「可能だよ。自滅した時に連射していたって聞いたね。本人から」

『エンペラー』って連射可能だっけ?と疑問に思っている八幡達にそう言った。ちなみにこつちの方での情報だ。僕はプツチ側から信頼を受けていたとは言えないしね。

次、弾丸の軌道。すつつつごく弾速の遅い射撃を発射。

承一郎「???」

不審に思った僕が十字キーを操作すると、上下にぐにやぐにや動く。え?でもこんなの、普通にガードされない?

……と、思ったらいきなり音速になった。コンピュータの花京院さんはガードしていたが、クリーンヒット。

承一郎「ガード不能技か……でもこれは使えないな」

速くなるタイミングを見切られたら簡単に避けられそうだ。その間は無防備だし。

そして度肝を抜かれたのが最後のスーパーコンボ。『最強のコンビ』、ホルホースはこちらに向けて三発の弾丸を放つ。そう、こちらに……プレイヤーに向かって。

そしてヒビが……画面を射つたの!??画面越しにプレイヤーが見えてるの!??
ツツコミところ多数だな!

そしてそのヒビにヒットすると相手が食らいモーションで硬直。ハングドマンがその背景からザシユツ!つと刃物でぶっ刺す。メタ含めて何て技だ!

八幡「て言うか、何で拳銃を取り出してんの?テレビ破壊するの止めてくれない?」

承一郎「いや……こつちが射たれたかと思つて……」

芸が細かいカブコンだ。

慣れて来た僕は花京院さんを撃破。だけど格ゲーはあまりやってないからキャンセルとかの連続技が出来ないな。

次は戦車のカード。ここでポルナレフさんか。

ポルナレフ(本人)「J・ガイル……」

ノリでやっている訳では無いだろうにタイミングが絶妙だ。ポルナレフさんはJ・ガイルに実の妹を殺された過去を持つ。さすがに八幡達も空気を読んでシエリーさんネタで会話を再現するのは止めたようだ。

僕も空気を読んで、黙々とプレイする。それもある程度は慣れてきたのにわざと苦戦を装い、ワンラウンド落とす事にした。

ポルナレフ「メルシー、承一郎」

承一郎「え、ええ……疲れる……何でコンピユーター相手に接待プレイをしなければならぬんだ……」

四人目 愚者のカード。イギーだな。

承一郎「待て！旅はまだ始まったばかりだよね？！何でここでイギーがいるの？！」
イギーが承太郎さん達と合流するのはエジプトに上陸してから。なのにどうしてこんなに早いのだ？！？」

結衣「もやしさん……」↑千棘と同じ声

由比ヶ浜さんが僕にすがり付く。イギーは飼い犬のサブレの転生だからなあ。

ジョニー「由比ヶ浜。その声でもやし言うの止めてくれよ。それにイギーの転生が由比ヶ浜の犬……。あの時を思い出すだろ……」

千棘が一年の夏の頃に一緒にいた子犬の小太郎、もといポンチの事が頭に浮かぶ。無論その後のイタズラも覚えているぞ！

次は隠者のカード。ジョセフさんだな。

承一郎「また知り合いが……」

ホルホース（八幡）『ジジイ相手じゃあ遠慮しないぜえ？』

ジョセフ（本人）『戦いにおける年期の違いを見せてやる！』

承一郎「仲間が次々とやられてるのにそこはスルーですか？ジョセフさん」

ステージはあの最終決戦の橋。流石に慣れて来た僕は難なく承太郎さんを撃破。承太郎さんは対空技が無いし、飛び道具もないから格ゲーだとあまり強くない。

ホル・ホース『これでジョースターの奴等は全部ぶつ殺してやったぜ！後は金を貰うだけだな！J・ガイルの旦那！』

そういえばエンヤ婆はどうなったんだろ？史実通り？

次は……第7話 亜空のしようき ヴァニラ・アイス

うん、中間デモが正規に無いから逆ルートなのかDIO側の裏切りルートなのか分からない。でもまあ、史実ではホル・ホースは一回裏切りを仕掛けて来たわけだし、逆ルートなのかな？

ヴァニラ・アイス（静）『ホルホースか……』

ホル・ホース（八幡）『アイスか。承太郎達は倒して来たぜ？』

ヴァニラ・アイス（静）『ご苦労だった。だが貴様……』

ホル・ホース（八幡）『へっ！バレちまったか！俺とJ・ガイルの旦那は最強コンビだ！いつまでもDIOに従ってられるかってんだよお！』

承一郎『その情景が目には浮かぶようだ……上手いな』

陽乃『チャカの話ストーリーがそんな感じだったからね』

承一郎『チャカ？』

誰だっけ？エジプト八栄神にそんなのいたっけ？

八幡「アヌビス神が最初に乗っ取った奴だよ。見覚えがない奴がいただろ？」

承一郎「三人ほどいたね。何故か由花子さんがいたような気がするけど」

はて、誰だっけ……？

さて、肝心の対戦であるが……中ボスマードのヴァニラ・アイスはさすがの僕でも苦戦を強いられる。

何せ中ボスマードのヴァニラ・アイスはDIOよりも強い。亜空に入ったクリームの玉攻撃は全てガード不能だからだ。何回か見て来た八幡達はパターンを見切ったらしいが、初見でどこから現れるかわからないクリームの攻撃を避けきるのは至難の業だ。

ガード不能だとわかってからはピヨピヨ飛んで回避する僕のホル・ホース。何とか攻略法を見出したした僕は材木座君と交代することなくヴァニラ・アイスを撃破。

ヴァニラ・アイス（静）『おのれ！ホル・ホース！』

ホル・ホース（八幡）『げっ！無敵かよ！さては teme エ！吸血鬼になったな！』
正確には屍生人だけだね。

ホル・ホース（八幡）『だったら太陽には弱いよなあ！J・ガイルの旦那！』

窓をぶち抜いて太陽を当てるホル・ホース。

ヴァニラ・アイス『貴様なんぞにいいいい！』

ホルホース『一生やってな』

さて、次はD I O戦だな。どういふストーリー展開でいくか。

最終話 D I Oの呪縛

八幡「影D I O……だと？」

承一郎「影D I O？」

普通のD I Oとは違うのか？

八幡「ああ。このゲームではD I Oも二人いる。前世の俺って屋敷にいるときは真つ暗な館の中で上半身裸で生活していたのは知ってるか？」

承一郎「あ、ああ……何故かその記憶があるから……」

それにしてもなんで上半身裸なんだよ……露出狂か？

八幡「その時のディオを再現したのが影D I Oだ。でもこのゲーム、本気を出した時のD I Oよりも影D I Oの方が何故か強い！無印での若ジョセフの時もラスボスは影D I Oだったか……」

ジョセフ「苦戦したのう。年老いたワシの方ではラスボスは通常のD I Oだったから違いがわかったが……影D I Oの方が苦戦したわい」

と、とりあえずストーリー脳内展開。

影D I O（八幡）『ホル・ホースか。承太郎達を倒してくれたようだな……嬉しいぞ』

ホル・ホース（承一郎）『へっ！くたばれ！D I O！』

ここに来て大体流れを掴み、今度は僕がホル・ホースのセリフを想像して発言する。
ドオオオオオオン！

背後に瞬間移動をする影D I O。

影D I O（八幡）『ほう……？私を暗殺しようとするとは大した度胸だ。その度胸を買って今回は許そう。どうだ？私に永遠に仕える気はないか？』

ホル・ホース（承一郎）『へっ！俺とJ・ガイルの旦那は無敵のコンビだ！』

影D I O（八幡）『そうか……ならば死ぬしかないなあ！ホル・ホース！』

八幡「承一郎！変なハイキックを空振りしたら気を付けろ！ガード不能のスベリスリパー・ステインギアアイズ空列眼刺驚が飛んでくる！ルビレーザーが飛んで来ると同じだと思え！」

承一郎「空列眼刺驚？！何でこの時代の父が空列眼刺驚を使ってくるんだ！」

スタンドバトルでは不要とか日記に書いてたじゃん！

八幡「あと、通常のD I Oなら承太郎のように無駄無駄ラッシュをしてくるが、影D I Oには無駄無駄ラッシュがない！代わりに影のザ・ワールドが前触れもなく飛んで来るから気を付けろ！」

承一郎「気を付けようがないだろ！」

案の定、影D I Oは強かった。

特に空列眼刺驚と影に覆われたザ・ワールドがバンバン飛んでくる。通常D I Oならスーパーコンボのナイフもただの必殺技として打ってくるし、『WRYYYYY!』と叫んだらガード不能のスーパーコンボ、肉の芽を飛ばして来る。コマンド投げまで使ってくるし。ガード不能技が多すぎる!突然本を読み出したと思ひ、挑発かと思つて攻撃をすれば命中した瞬間に時を止めたのか背後に瞬間移動。

幸いな事にコンピューターは『時よ止まれ!』と通常D I Oにあつたロードローラーが無い事だろう。

承一郎「強すぎる!パターンが存在するヴァニラ・アイスよりも強い!本当に普通の父の方が弱いのか!」

なんで肉体が馴染んでいない方が強いのか?色々とおかしいだろ!特にロードローラーがガード可能で空列眼刺驚がガード不可能なところがツ!

承一郎「くそつ!現実だったらこんな苦戦はしないのに!」

八幡「遠回しに俺には勝てる的な発言は止めてくれね?」

まあ今は技術は八幡が上回っているからな。もう一度戦つたらどうなるか興味はあるけどね。影D I Oの攻撃つて八幡よりも僕の方が使えるんだよな。

ヴァニラ・アイス以上に大苦戦をしながらも何とか僕は影D I Oを倒した。

エンディング

うつ伏せに倒れている影DIOを見下ろしてホル・ホースは笑う。

ナレーション『ついにDIOを倒したホル・ホースは喜びに打ち震え、余韻に浸っていた』

あ、やっぱり反逆ルートだったのね。

ホル・ホース『テメエには心から忠誠は誓ってないんだよ！魂までは売らねえぜ！これで俺に敵う奴はいなくなった！』

うん。ニューヨークの行動からそれは知ってたからいまさら驚かない。

ホル・ホース『だが俺は一番よりナンバー2の男！これが俺の人生哲学だ！文句あつか！』

スタツフロール

えー……DIOを見限って選んだのがJ・ガイルウ？

まあ、J・ガイルなら影から操るのには最適な馬鹿さ加減だろうけど……。しかし、ラスベガが影DIOだった割にはシヨボいエンディングだった……。

ポン♪

承一郎「八幡……組織のリーダーとして言っておく」

八幡「次にお前は『部下は選べよ?』と言う」

承一郎「部下は選べよ?ハッ！」

さてはお前、他の敵キャラのストーリーでも反逆されてるんだな？
承一郎「中々手応えのあるゲームだった。たまには格ゲーも良いね」
さて、次はホルホース&ボインゴか。

格ゲー『未来への遺産』をやってみよう その②

さて、僕のノーマルホル・ホースが終わったとして……次は裏ホル・ホースだが…。

八幡「承一郎、このまま継続してやるか？」

承一郎「ああ、ホル・ホースはもうキーカラいたね。だったら………」

僕はスツ……と目を閉じる。すると目付きが鋭くなる。

ジョニー「俺がやる。コントローラーはこのままで良いよな？」

今度は俺が裏ホル・ホースをやる事にした。

八幡「出来るのか？ゲーム」

ジョニー「任せろ。承一郎に出来て俺に出来ないことはねえ」

俺は裏ホル・ホースを選択してストーリー開始。どう表と違うのかが楽しみだ。

ナレーション『インドで相棒のJ・ガイルを失ったホル・ホースは次にトト神の暗示を持つスタンド使い、ボインゴとコンビを組もうとしていた』

ホル・ホース『おめーの予知の本と俺の暗殺銃の能力を合わせてジョースター達をぶつ殺すんだ。やつらに病院送りにされたアニキのカタキを討ちたくはねえのか？俺も必死なんだぜ……闘うんだよ！復讐するんだよ！ボインゴッ！』

ああ、確かホル・ホースはその直前、DIOに暗殺を仕掛けて来たんだつたな。だからなりふりかまっていられないって訳か。

承太郎「いつ俺達がオインゴ達を病院送りにした？」

ジョセフ「覚えがないのう？」

沙希「アルス界で本人達に聞いたけど、自滅だったらしいよ？ジョセフ達は襲われた事にすら気が付かなかったって話だし。確か承太郎に化けていたとかいつてたっけ？」

ポルナレフ「ああ、承太郎が学ランをクリーニングに出したとか言っていた時か。あれ、オインゴだったのかよ」

そういえばDIOの日記でもかなり間抜けな負け方をしたとか書いてあったけど、そういう感じだったのか。……って、

ジョニイ「おいおい。こっちの5年前ではツエペリさんの転生はいなかっただろ？どう言うことだ？」

雪乃「比企谷君の魂が砕けた時の話よ」

いろは「あの戦いのやり直しを平行世界でやったんですよ」

ジョニイ「あいつらの世界のうちの1つか」

八幡「川崎がオインゴ達と話をしたとすれば、こっちではダービーさんと戦った時のタイムリングだな。リッチモンドで降参してきた」

ジョニイ「あの時か……俺達がオインゴ達と戦ったのはワシントンだったな。あの時はラバーソールも一緒だったか？」

八幡「ちなみにそのラバーソールはお前がデラウエアでロードローラーをやってきたタイミングで襲ってきた。倒したのは雪ノ下だな」

ジョニイ「雪乃はよく倒せたな？ラバーソールは正面から戦えば普通に強いと思うんだが？」

かつては自分のスタンドを『無敵』と称していたラバーソールだが、あながち間違いではない。あの防御はなかなか手強い。

雪乃「私では無いのだけれど……その時にはあなたと一緒にいたでしょ？」

あ、雪ノ下は雪ノ下でもA雪ノ下だ。

ジョニイ「そうだったな。それよりもゲームの方だ」

ボインゴ（すごく怖いけどお兄ちゃんのカタキを討つために勇気を出してコンビを組みます）

そういう性格だったっけ？まあ、これは史実だからそうなんだろうけど。

ナレーシヨン『こうして新たなコンビが生まれた』

チャチャチャ♪チャチャチャ♪ダッダッダッダッダン！

第1話 誇り高き騎士

このタイトルという事はポルナレフさんが最初か。脳内デモ再生！

ホル・ホース（声担当・八幡）『ポ、ポルナレフ！』

ポルナレフ（声担当・若ジョセフ）『テメエはホル・ホース！また性懲りもなくやつて来たのか？』

ボインゴ（声担当・ジョニイ）『ポルナレフの鼻に指を突っ込むんです！トト神の予言は絶対なんです！ハイ！』

今度は俺もセリフを担当する事にした。

八幡「鼻に指？」

ポルナレフ「確かにやられたが……それがボインゴのしじだったのか？」

ジョニイ「ああ。俺達の世界ではホル・ホースは財団入りしているつてのはさつき承一郎が言っていただろ？承太郎さんがその時の話を聞いていてな」

承太郎「確かにあの時の不可解な行動はずっと引掛かっていた。今度ボインゴに会ったときに聞いてみるか」

ちなみにあつちの世界のホル・ホースは死んでいるが、ボインゴはアーススに入っているらしい。

ホル・ホース（八幡）『こうなりやヤケだ！』

ポルナレフ（本人）『やるというのか？やるならやろうじやあないか。今度こそ始末し

てやる』

今度はジョセフさんではなく本人が参加。しかし、口調が今の口調な上に始末つて……。

三浦「ポルナレフ。当時の口調でやれし。ジョースターさんの方が上手いんだけど？
ウケる」

三浦さんさん、辛辣ですね。

ポルナレフ「む……どうも若いときの口調が出てこない」

さて、ドンパチ開始。……だが、

ジョニー「……必殺技が減ってるんだが？しかも性能が悪くなってる」

まず波動拳コマンドの『ハジキだ！』。ノーマルホル・ホースの時のように軌道修正が出来なくなっており、本当にただの飛び道具。

次にノーマルホル・ホースの時には『J・ガイルの旦那』という名前だった上に銃を射ってガラスの破片を落とす『グラスシャワー』。裏ホル・ホースの技はたったこれだけ。

ジョニー「裏キャラの方が性能が悪いというのは本当だったみたいだな。こいつは確かに使いやすい」

裏ホル・ホースは上級者向けのキャラクターだ。綱となる必殺技の性能が微妙すぎ

る。

ジョニー「だがキャラの性能が悪いからってここで終わるか！承一郎だってクリアしたんだから俺だってやってやる！DIOを倒してやる！」

喧嘩？しないよ。ちなみに脳内模擬戦は今のところ百戦中五十勝五十敗だ。オレの空間能力があつても体から飛び出る骨の対処は難しいんだ。

ジョニー「それに肝心の鼻に指を突っ込む技はどうした！ネタとしてあるはずだ！」
あるとすれば超必殺技に該当するスーパコンボだと思うが……。

八幡「ジョニー、スクリューパイルドライバーだ」

ジョニー「スクリューパイルドライバー？」

格ゲーをやらない人間だから八幡の言った事が分からないな。

材木座「ジョニー殿！投げ間合いでコマンドを一回転させて攻撃ボタンだ！」

ジョニー「ややこしい！そう言え！」

俺は材木座のアドバイス通りにポルナレフさんに密着させてスクリューパイルドライバーコマンドを成立させる。

ジャッキーン！

スーパコンボの演出が入り、ホル・ホースがポルナレフさんの鼻に指を突っ込む。投げが成立すると、ポルナレフさんの画面端からトラックが現れ、ポルナレフさんだけ

を跳ね飛ばし、画面外にバツクして消えた。

「ジョニー「普通に人身事故……しかも轢き逃げ……」

八幡「つうかこれ、ホル・ホースも轢かれてね？少なくとも腕が」

ちなみにボインゴの仕業でもない。ボインゴはホル・ホースの後ろで木箱に入っている。日本だったら警察沙汰だろう。まあ、袖の下を渡すけどな。

ちなみに技名は『予知は絶対』。どの辺りが予知なのかを問いただしいが、これは悲しいことに史実なんだよな。

「ホルナレフ「いや、若干違うな。少なくとも直接轢かれてはいない」

「承太郎「何が起きたのかは俺達もよくわからなかったがな」

「そうなのか？ ホントに何があったんだろう。そしてホルナレフさんが再起不能。

「ホル・ホース（ジョニー）『やべー！ホルナレフを殺しちゃった！』

「ボインゴ（ジョニー）『何て事を！ここで殺してはダメだったんです！早く逃げないと！』

「ホルナレフ「確かに全員気絶したのに何故か無事だったのだが……そういう理由だったのか……」

「ジョニー「ここでトト神の予言と別行動になってしまったというストーリーにしてみた」

まあ、中間デモが『未来への遺産』には無いから構わないだろう？

第2話 戦いの年季

ジョセフ（本人）『見付けたぞ！ホル・ホース！良くもポルナレフを轢き殺してくれたな！』

たまたま『予知は絶対』がフィニッシュになっただけなんだが……まあいつか。そういうストーリーにしたんだし。

ホル・ホース（ジョニイ）『しまった！追い付かれた！』

ボインゴ（ジョニイ）『これも予知の通りにならないからです！ハイ！』

ジョセフ（本人）『戦いの年季の違いを見せてやる！』

ドンパチ開始。俺は残るスーパーコンボも試してみる。

1つはノーマルにもあった銃を乱射する技、『ぶちまけろッ！』だ。そしてもう1つが訳が分からなかった。

八幡『『パイプメイズ』？なんだそりや？』

ジョニイ「予想が付いた……」

俺は技を発動。

すると足元に突然パイプ孔が出て来てホル・ホースは穴に向かって銃を乱射。すると

……

八幡「何で脈絡もなくグニヨグニヨ曲がった。パイプが背景画面を埋め尽くすんだ！」
ジョニー「すごい説明セリフ……」

そしてパイプがカンカン言いながら震える。その間はどちらのキャラも自由に動けるのだが……。

パイプの先（と思われる場所。背景がごちゃごちゃしていて分かり辛い）から弾が出てきた。なるほど、アレが元ネタか。

ジョニー「実はこれが人知れずホル・ホースがリタイアした理由だ。もしホル・ホースがボインゴの指示通りの時間にパイプに弾を射っていたら、弾は承太郎さんの脳天を貫いていたんだが……。その時、ホル・ホースの時計は電池切れ間近だったのかどうかは分からないが、進んでいたんだ。そして弾丸はトト神の漫画に写った承太郎さんの眉間を貫き、そのままホル・ホースにヒット。角度が良かったお陰で命に別状は無かったが……」

そういえば二度ホル・ホースに会ったが、どちらのホル・ホースも眉間に額の辺りに傷痕があつたな。つまり、史実では自爆した技がスーパーコンボになったと……。ここにホル・ホースがいたら苦笑いでもしていたかもな。

ゲームでは自分の技には当たらない仕様みたいだから史実通りにはならないだろうが。自分のスタンドで自爆するなんてホル・ホースらしいというか……。しかも自分で

撃ったアヴドウルさんと同じような傷跡を残すとはな。

ジョニイ「にしてもこの技、ボタン毎に出てくる位置が変わるのか。弾が出てくるまでに時間差があるし、対戦じゃあ使えない技じゃあないか？ガードを固めていたらまずヒットしないだろ？」

材木座「そうでもないぞ？ジョニイ殿。そうならないのが格ゲーというものぞ！格ゲーは立ちガードをしておれば足元の攻撃はガード出来ぬし、しゃがみガードをしておればジャンプ攻撃をガード出来ぬ！しゃがみガード不可能な特殊技というものもあるしな！ボタン毎に弾が出てくる位置とタイミングが分かっているならば、ガードを崩して当てれば良い！それに、ガードを固めておるならばその技を見せ技として先程の投げ超必殺技を決めるというのも手よ！投げ技はガード不能だからな！格ゲーの基本よ！」

ジョニイ「そ、そうか……道理でガードをしてるのにたまにダメージを食らうと思つたら、そういうルールがあつたのか……」

他にもガードは相手の反対方向にキーを入れる事だから、弾が出てくるタイミングで相手の裏に回り、ガード方向を狂わす通称「めくり」というものもあるらしい。

2D格ゲーをやらない俺と承一郎ではわからない仕様だが、なかなか奥が深いな。さて、ジョセフさんの次はアヴドウルさん。

三浦「ジョースターさんとポルナレフの仇！覚悟しろし！」

ホル・ホース（ジョニー）『アヴドウル！少し見ない内に性格が変わったんじゃないのか!？』

三浦が素で言っている所をホル・ホース役に徹している俺が上手くフォロー。ちなみに史実では同じ言葉をポルナレフさんが言ったらしい。

次にイギー。

ボインゴ（ジョニー）『こんな犬ところならトト神の予知が無くとも余裕だね』

結衣「がルルル！」（素）

ボインゴ（ジョニー）『うわあ!』

ホル・ホース（ジョニー）『なにやってんだ！つたくよお』

イギーの転生、サブレの飼い主である由比ヶ浜が歯を剥き出しに唸る。多分素だろう。

ジョニー「因みに史実でもボインゴはイギーに襲われてリタイアしている。理由はホル・ホースが自爆した後に入っていた箱を投げ捨てたらたまたま通りかかったイギーの頭にヒットしたらしい。大きなたんこぶを作り、涙を流して怒ったイギーによってボコボコにされたんだとか」

陽乃「イギーの被害者の会でも作ろうかな……」

全部自業自得のような気がする。イギーを逆恨みする会の間違いじゃあないか？だ

がな!

ジョニー「『比企谷八幡被害者の会』は逆恨みじゃあないがな」

続いて花京院さん。

海老名「花ホルの美味しいのを期待しているぞ!」

ジョニー「お前か! 5年前に呪ってきた赤い眼鏡の女は!」

二人とも演技を忘れて素で言つてた……。確かに五年前のフロリダ州の州議会庁舎で『ジョージオハチキマシタワー!』とかという謎の悪寒に襲われたが、あれは海老名だったのだろうと確信できる。

そして……

最終話 裁くのは誰だ!?

承太郎さんでラストか。

ジョニー「何だ。D I Oじゃあないのか。承太郎さんとは拍子抜けだな……」

承太郎「ほう……?」

ジョニー「いえ……何でも無いです」

八幡「お前……俺が相手だと面白そうにするくせに承太郎相手だとしおらしいな……」

ジョニー「そりゃ、承太郎さんだぞ? わかるだろ? 一応は今回の事も報告するとして、

承太郎さんに逆らった…なんて言ったら後が怖い」

俺でも流石に承太郎相手では逆らえない。承太郎さんはDIOを倒した男でもあり、尊敬すべき人だと思っっているからな。

八幡 「俺ならオラオラされるな」

承太郎 「それがわかっていて徐倫をからかうお前の神経が俺にはわからないがな」

承一郎 「そう言えば承太郎さん、こつちだと一人称が『俺』なんだな？うちの承太郎さんは『私』だが」

承太郎 「……………どう言うことだ？俺は『私』なんて一人称は公の場所以外では使わないぞ？」

仗助 「使ってたツスよ？初対面の時に」

承太郎 「……………一応は公の場のつもりだったからな」

今一瞬承太郎さんがギロツ！と八幡を睨んでいた。どうせしようもない事を考えていたな？

普通の対戦でもラスボスともなれば多少は強く設定されているのか、ゴリ押しだけでも強めの承太郎さんとはキャラ性能的に相性が悪いのか、俺の操るホルホースは苦戦。しかし、承一郎が勝った承太郎さんに負けるのはプライドが許さない俺は何とかノーコンテニューで承太郎さんを撃破。

ジョニー「勝てた……さて、エンディングは？」

ホル・ホース『俺達は無敵のコンビだ！ボインゴとこのホル・ホースは無敵のコンビだぜー！』

ボインゴ『や、やった！お兄ちゃんのカタキが討てました！ハイッ！』

ホル・ホース『おいボインゴ、おめー、これからどうする？』

ボインゴ『帰ります！お兄ちゃんがいるアスワンへ！』

ホルホース『そうか、俺はこの事をD I O様に報告に行くぜ……じゃあな、ボインゴ。あばよ！』

あ、こっちは反逆してこないのね？まあ、その前に手痛いトラウマを植え付けられてたからな。あっちの世界の八幡（A八幡：はちまんくん）がホル・ホースとやりあった時に奴がびくついていたらしいのもザ・ワールドに対してトラウマを植え付けたからだろうし。

ナレーション『その後、ホル・ホースはD I Oから大金を貰い、その日その日を気ままに暮らしたという』

まあ、そこが妥当なところかな。

ナレーション『ボインゴは、この戦いで大きく成長して、予知のスタンドを困っている人の為に役立てた』

おお。そこだけは救いだな。

ナレーシヨン『……りはしなくて、前と同じように暗ーい性格のままでした』

な・ん・だ・そ・れ・は！

ジョニイ「八幡……この結末って……」

八幡「ジョニイ。俺の世界では三年前に天国に到達したディオ……ザ・ワールド・オーバーヘブンの襲撃を受けてるんだ。基本世界の承太郎達に助けられたが、俺はその時には負けた。今、来られてもまだわからん。ザ・ジュエルは完璧じゃあないしな。アクトン・モリオンの方がまだ勝ち目がある」

ジョニイ「ザ・ジュエル？アクトン・モリオン？アクトン・クリスタルじゃあ無くてか？」

八幡「ザ・ジュエルはザ・ジエムストーン・レクイエムの事だ。アクトン・モリオンはアクトン・クリスタル・レクイエムの事だ。仰天黒水晶。クリスタル・ボーン・レクイエムはモリオン・ボーンか？」

ジョニイ「止めてくれ。そもそも恐ろしくておいそれとレクイエムなんか使えるか。そうか……静もレクイエムキャリアになったのか……まさか先を越されるとはな」

俺はモリオンの事を知って少し考え込む。

使わないことに越したことは無いが……『愛国者達』を打倒する切り札になるかもし

れないな。

格ゲー『未来への遺産』を見学しようその①

さて。残るキャラはペットショップ、ヴァニラ・アイス、マライア、ラバーソール、D I O、影D I Oだ。

誰が誰をやるか……というよりは、この場にいる面子で誰が残っているかについては……。

八幡はD I Oと影D I Oが確定している。後はいろはさん、小町さん、川崎さん、徐倫さん、フル参加していない材木座さんなのだが、徐倫さんについては参加を辞退。

となると……

いろは「材木座先輩？」

材木座「はもん？」

いろはさんの呼び掛けに材木座さんが反応。どういう反応してそのセリフ？

いろは「ヴァニラ・アイス、頼めますよね？」

につこりとした顔で材木座さんにヴァニラ・アイスを押し付けようとするいろはさん。ハッキリと言ってしまえばアレッシー以上に……下手をしたらD I O以上にヴァニラ・アイスは嫌われている。

25年前の事もあるし、なにより（向こうの）5年前は綾瀬絢斗によっていろはさん、小町姉さん、陽乃さんは死にかけたわけだし、そんな奴を扱いたく無いだろう。

沙希「あたしも屍生人を使うのは勘弁だから」

あー、確かにヴァニラ・アイスは屍生人だもんね。川崎さんが毛嫌いするのわかるな。必然的にヴァニラ・アイスは材木座さんだね。となると……

いろは「沙希先輩も決まりですね」

沙希「え？」

小町「正直、マライアを使いたくないんです」

仗助「5年前に襲われたからな。見たくないものまで見せられて。太ったアラフィフのポロリなんて誰得だよ」

ジョルノ「熟女好きのデブ専ならば……ウプツ！」

なぜ兄さんが戻しそうになったかという点、それはこっちの世界の彼女の姿が原因らしい。どうやらアラフィフなのを考えずに昔のように際どい服を着ていたらしい。

戻しそうになるくらいなら想像しない方がいいですよ。仕事上そういうマダムと会うこともあるけど、毎度あの時のマライアを思い出して仕方がないでしょう。

ゲームでのマライアは若かった当時の……ジョセフさんの言うところの足がグンバツの美女の状態が出てくるみたいだけど。

沙希「わかったよ。別に因縁とかないし、あたしがやってやるよ」

ジョセフ「すまんのう。ワシや優美子でも構わなかったが、この場にいる全員が取り敢えずワンプレイはしてもらいたかったんじゃよ」

沙希「別にあたしもゲームを普段はやらないから良かったんだけどね」

川崎さんの家は兄弟が多いので贅沢は出来ないから良かったんだけどね。いのだろう。見れば八幡の Vita でコントローラーの扱い方を練習してるし。ソフトは……カプコンの某初代格ゲーをやっている。小町姉さん……勝手にダウンロードしたのかな？まあ、格ゲーをやるならこれ以上ないゲームだけ。何事も基本が一番だし。

ゲームそのものの基本は配管工の初代がベストだろうけどね。

小町「お姉ちゃんはペツちゃんどラバーソール、どつちをやる？」

いろは「じゃあ、ラバーソールをやります」

へえ？それは何故だろう？

承一郎「理由を聞きたいな」

いろは「だって、ラバーソールはおじさんに化けた状態で出ているじゃあないですか。出来ればペツちゃんが良かったですけど、そうなるとマチちゃんがプレイするキャラが縁もゆかりもないラバーソールになっちゃいますからね。ペツちゃんとマチちゃんは

家族ですし」

小町「お姉ちゃん……うるうる……」

正確には転生したペットショップの飼い主は八幡らしい。ペットショップはカワイイ、でもDDには劣る。異論は認めん。

いろは「という事で、次はわたしですよー」

いろはさんは僕からコントローラーを受け取り、ゲームを開始する。いろはさんはそこそこにゲームが出来るらしい。アーケードモードを選択し、ラバーソールを選択するいろはさん。

いろは「基本的にはおじさんと同じで良いんですね？」

攻略本からラバーソールの必殺技のコマンドを確かめるいろはさん。

海老名「おじさんって……うーん、花京院はいろはちゃんにとつては母親の従兄だから間違いは無いんだけど、ちよつと複雑……」

今のいろはさんのおじさんは海老名さんの事を言っていないと思うけど？

下らないことはさておき、さあストーリー。画面には黄色い学ランを着た人相の悪い花京院さん……つまりラバーソールが映っている。

ナレーション『DIOに金で雇われたスタンド使いが承太郎達の命を狙っていた』

ラバーソール『俺は食らった肉と同化し、一般の人間の目にも見えるし触れもするス

タンドだ』

花京院に変身出来るという事は、花京院の肉を食ったことがあるってこと？

海老名「いや、多分肉の芽で操られた時に細胞の一部とかを取られたんじゃないかな？」

…いや、多分違うと思う。

おそらく『肉を喰らい同化する』だけであってそこから自在に変化出来るだけじゃないかと思う。

ラバーソール『このイエローテンパラスでやつらを皆殺しにしてDIOから報酬を受けとるぜ』

実際に強いスタンドではある。もつとも、全く弱点が無いわけではないが。それに、熱すれば弾け、凍らせれば尖って攻撃するというのは強みだっただろう。雪ノ下さんとは相性が悪かったが。

場面は切り替わり、承太郎さんが一人で外出をしたところを狙うつもりのようなだ。

承太郎「あの時は花京院と待ち合わせしていたと思ったがな……こいつときたら……」

海老名「プールサイドで日光浴してたっけ？」

三浦「しかも学ランで……」

マイペースなのは前世からですか。

第1話 裁くのは誰だ!?!?

承一郎「いきなり承太郎さんか……」

まだいたの?!?みたいな顔でこちらを見る八幡。

承一郎「勝手に呼んでおいて用がなくなったら追い返そうとするんじゃない!」

僕は昨日も含めたプレイ動画を見ながら突っ込む。ちなみに承太郎編から見ている。それでは皆さん!途中デモの再生をお願いします!

ラバーソール(海老名)『どうしたんだい?先輩』

承太郎(仗助。本人は沈黙)『テメエ……ただのスリに対するお仕置きにしちゃあやりすぎだ……。花京院じゃあねえな?』

承太郎「確かにアルゼンチン・バックブリーカーを一般人に対してやってたな……何故知っている?」

何故か八幡(+僕達)が知っていました。

ラバーソール(海老名)『見破るとはやるじゃあないか』

承太郎(仗助)『テメエはホントに予習してきたのか?物真似がお粗末すぎるぜ。ヤレヤレだせ』

確かにそれは5年前にも思った。確かミスタさんか億泰さんに化けた記憶がある。

そしてドンパチ開始。

ラバーソールはホル・ホースやカーン達と同様にスタンドモードが存在しない。元々花京院に化けている段階でスタンドモードであると言えなくもないからだろう。

ラバーソールの必殺技をここでいろはさんは試す。

まずは波動拳コマンドで出る『ヘドぶちまけな!』。偽物のハイエロフアントを出してスライムの散弾を放つ。花京院のエメラルド・スプラッシュのオマーージュだ。だが、スライムという特性上、エメラルド・スプラッシュほど弾は速くない。一般的な格ゲーの飛び道具よりもやや遅いイメージだ。

次にテンパラスを地面に這わせて相手の行動を封じる『喰ってやる!』。これもハイエロフアントで縛り上げる花京院の『タイラップスネーク』のオマーージュだ。

海老名「貸して!いろはちゃん!」

承太郎さんを縛り上げたラバーソールを見るや、いきなり海老名さんがいろはさんからコントローラーを奪う。なんだか嫌な予感が……!

そして海老名さんはラバーソールを動けなくなった承太郎に密着させ、挑発ボタンを押す。

ラバーソール『レレレレレレレレレレ……!』

嫌な予感的中!昨日と同様にお腐れプレイを始めやがったあ!疑似ティーピキスだ

と…!!?

海老名「疑似承花！完成デスワ〜！」

ゴン！

徐倫「人の父親で遊んでるんじゃない！昨日も花京院で同じプレイしただろうが！」

承一郎「そんなことをしていたのか……」

承太郎「……………（ゲツソリ）」

我慢出来なくなった徐倫さんが海老名さんに拳骨。このシリーズ、八幡や静さんがボケなくても海老名さんが勝手に暴走するのか……？

本当ならオラオラしたくて仕方ないであろう承太郎さんだが、顔を青くしている。

承一郎「確かに昨日も花京院を使って……………ウプツ！」

いろは「返して下さい！まったく！雰囲気最悪じゃあないですか！」

いろはさんは海老名さんからコントローラーを奪い返し、再びプレイを再開。これ、海老名さんを縛り上げるべきではないだろうか？

次の必殺技は……………。

いろは「あれ？動かなくなりましたよ？」

急に動きを止めるラバーソール。その隙にCPUの承太郎がオラオラを仕掛けてき

た。オラオラがラバーソールに命中すると……

ラバーソール『弱点はない!』と叫んでイエロー・テンパラスを弾けさせる。なるほど、カウンター専門の通称『当て身技』か。なまえも叫びと同じく『弱点はない!』だそう。たしか熱するところなるはずなんだが?これが花京院と差別化を図られているところだな。

必殺技は以上らしい。

いろは「次はスーパーコンボですな♪」

最初のスーパーコンボは予想通り、エメラルド・スプラッシュの強化版『半径20メートルのエメラルド・スプラッシュ』と同じタイプの技、『ジャムにしてくれる!』だ。無数のスライムの散弾が承太郎さんを襲う。

承太郎「本来なら肉を溶かされて大変な事になってるんだろな……」

イエロー・テンパラスの恐ろしい所はそこなんだよな。ただの弾ではなく、そこからスライムに溶かされてダメージを貰う。

そして……もうひとつのスーパーコンボ……

結衣「いやあああああああ!」

徐倫「悪かったから!あの時は悪かったから絶叫するな!由比ヶ浜!」

そう、由比ヶ浜さんのトラウマを決るこの技!

ラバーソール『こいつはメチャ許さんよなあ!』

スクリューパイルドライバーコマンドで出る投げ技、『ココナッツ・バックブリーカー』だ!つまりは史実でもスリに対してラバーソールがやったアルゼンチン・バックブリーカー!

モキツ!モキツ!モキツ!

結衣「うげああああ!」

由比ヶ浜さああああん!自分が食らっている訳でも無いのに悲鳴を上げている!目が逝つちやつてる!口からよだれが出ている!どうして!?!?

由比ヶ浜結衣:再起不能リタイア

泡を吹いて失神する由比ヶ浜さん。

材木座「結衣いいいい!」

承一郎「由比ヶ浜に何があつたんだ?」

八幡「奉仕部の最初の依頼は由比ヶ浜のクッキーを作る手伝いだつたんだがな?あまりの手順のメチャクチャさ加減にキレた徐倫がアルゼンチン・バックブリーカーをやつたんだよ……。しかもセリフまでほぼ同じ」

承一郎「何をやってるんだ……徐倫さん……」

徐倫さんは流石に責任を感じて由比ヶ浜さんを介抱している。僕達の想像以上に由

比ヶ浜のトラウマは深いらしい。

いろは「進まないいで承太郎を倒しちやいますね？」

そうですね。無駄に文字数が嵩んでるしね。そろそろ巻きでおにやしやす！

ラバーソール（海老名）『結構いけるじゃあないか。この調子で全員ぶつ殺すぜ！』

第2話 戦いの年季

つて、次はジョセフさん^{!!}??

ジョセフ（本人）『承太郎！おい花京院！どういうつもりじゃ！』

ラバーソール（八幡）『ジョースターさん、これは承太郎から仕掛けて来たんですよ。

悪いのは承太郎です』

ジョセフ（本人）『貴様！花京院じゃあないな!?!』

ラバーソール（八幡）『気が付かなければ楽に死ねたのによお！死ね！ジョセフ・

ジョースター!』

こんなところか？

いろは「……………」

モキッ！モキッ！モキッ！モキッ！モキッ！モキッ！

ジョセフ「いろはよ……………何故バックブリーカーばかりやるんじゃ？」

いろは「現実では敵わないですが、ゲームなら前世の仕返しが出来ますし。よくも祖

母をからかってばかりしてくれましたね！お仕置きです！」

ジョセフ「ノオオオオオオ！」

気のせいかナイチンゲールでアルゼンチン・バックブリーカーをやっているように見える。僕は何も見えない。

背骨をいわされているジョセフさんを放置し、ゲームを継続。次はアヴドウルさんだ。

アヴドウル（三浦）『承太郎！ジョースターさん！これはどういう事だし！説明しろし、花京院！いや……違う！聞いたことあるし！こいつは食った肉の相手に化けることが出来る……』

そこで僕がのる。

ラバーソール（承一郎）『よくわかったな？さすがはアヴドウルだ。お前も喰ってやる！』

八幡「ここで乗ってくるか。承一郎」

承一郎「おねえなラバーソールやアヴドウルを想像するのが辛くて……」

第3戦目ともなると流石にCPUも強くなってくる。いろはさんのプレイレベルではそろそろきつくなってくる頃だ。

1セットをとられつつも何とかアヴドウルさんを撃破。

第四戦目。ポルナレフさん。

ポルナレフ（本人）『承太郎……ジョースターさん……アヴドウル……貴様、よくもやってくれたな』

ラバーソール（ジョニイ）『へえ、付き合いが短いわりには仲間意識つてもんが芽生えたのかよ？ どうだポルナレフ。こつちに戻って来るってんならお前だけは助けてやるぜえ？』

ポルナレフ（本人）『断る。私は今、白のなかにいる！ 例え承太郎達がやられても、もう二度とD I Oに屈する事はない！』

だからポルナレフさん。口調が今の口調になってますってば。

ラバーソール（ジョニイ）『ならばしょうがねえ！ 死ぬしかねえなあ！』

ラバーソールらしさを残しつつ、D I Oの決め台詞を使つてやった。

いろは「くっ！ ポルナレフさんが強い！」

スピード速いしスーパーコンボは対空性能があるからな。これはそろそろいろはがリタイアか？

いろは「エメラルド……」

八幡「筐体に台パン（筐体を殴る行為。台にパンチするの略）するマナー違反者か！ 頼むから止めてくれ！ どこから借りたのかわからないんだから！」

仗助さんがいるから直せるけどさ。

何とかポルナレフさんを倒したいろは操るラバーソール。

今更ながらラバーソールは花京院と同じく中級者クラスが使うキャラである。つまり、付き合ひ程度にしかゲームをやらない初級者のいろにはあわないのである。次はイギー。

ラバーソール（ジヨニイ）『こんな犬つころまで倒さなきゃならねえのかよ。ま、食つて養分にするか』

イギー（八幡）『ガルルル！』

本来ならこの段階ではイギーはいないんだけどね？旅だつてシンガポール辺りの筈だし。何とかいろははイギーを倒し、そして……

最終話 戦慄の侵入者

意外！ラスボスは花京院だった！

しかし、いろはさんの腕前を考えればヴァニアアイスやDIOが後に控えて無くて良かったとも言える！

海老名「いろはちゃん♪」

いろは「何を考えてるかは大体わかりましたけど、CPUの挑発が運よくレロレロとは限りませんよ？そもそもわたしの腕前ではそんな事をやつてる余裕はないんですか

ら

海老名が考えていることは大体読めた。花京院のレロレロとラバーソールのレロレロを同時に使わせて本当にディープリキスをさせようって腹だろう。

だが言っておく。このゲームのスタッフの拘りは激しい。挑発も何パターンか設定されているのだ。

例えば若ジョセフさんの場合は相手を指差して『次にお前は○○…という』と言ったり、指を鳴らして『こんなもんかあ?』と言ったり、同じ動作で『ハッピー・ウレピー・ヨロピクネー♪』と言ったり等だ。

花京院さんも同様で『レロレロ』の場合と、何パターンかのポージング（ジョジョ立ち）をしながら『かかって来い!』というのが数パターンある。もつとも、偶然レロレロをやって来たとしてもいろはさんの腕では海老名のリクエストに応えるくらいならアルゼンチン・バックブリーカーを決めた方が現実的だろう。わざわざ隙を作ってくれてるんだから。

それでは会話モード、始めよう!

花京院（海老名）『さあ!レロレロ合戦始めよう!』

ドンガラガツシャーン!

全員がずっこけた。そりや最後の局面でこれはあり得ないだろ。海老名さん!さす

がに空気読んでくれ！というか、あなたはそれでいいのか?!?前世の自分がラバーソールとディープキスをするんだぞ?!?仲間の仇とそれはないだろ！

ゴン！

ツツコミの第一人者である徐倫さんがすぐさま復活し、海老名さんに拳骨を落とす。

徐倫「違うだろ！何で仲間がやられているのを放置してレロレロ合戦始めるんだよ！

当時の自分になりきれよ！」

承一郎「あ、頭が痛い……徐倫さん。お疲れですネ」

徐倫「最近ではわりかし慣れたわ。ジョジョとハッチのせいで」

承一郎「うちの徐倫さんが見たら寝込みますよ？」

徐倫「別の世界のあたしにも言われたわ……ヤレヤレよ」

さて……仕切り直して……。

花京院（海老名（渋々））『ぼ、僕がもうひとり!? 一体お前は誰だ！正体を現せ！レロレロ』

レロレロはいらねーよ！

ラバーソール（ジョニイ）『テメエに化けていたお陰で仕事が早くすんで助かったぜ?』

空気を読んだオレは流石にレロレロは言わない。徐倫さんの拳骨が飛んできて嫌

だしな。

花京院(海老名)『なんて事を！D I Oを倒してこれからジョースターさんや承太郎とめぐるめく薔薇色の……』

徐倫「もう一発いつとく？」

花京院(海老名)『ではなく、世界を平和にして日常を取り戻そうとしていたのに！』
ラバーソール(承一郎)『ジョースターエジプトツアー御一行はお前の死をもつて全滅の最後を飾るんだよオ！この田吾作があ！』

いろは「……もう始めて良いですよね？」

これ以上腐の呪いを撒き散らされたくないなのでお願いします。

そしてドンパチ開始。ラスボスだけあつて強めに設定されているのか花京院が強い！マイナーダウン版であるラバーソールでは苦戦は必至だった。

海老名「レロレロやった！今やった！」

いろは「そんな余裕はないですってば！」

ラバーソール『こいつはメチャ許さんよなあ！』

モキツ！モキツ！モキツ！

結衣「いろはちゃん！それやめてえ！」

うるさい……いろはさんも集中出来なくて困っている。でも由比ヶ浜さんは仕方な

いか…。

ラバーソール『喰ってやる!』

終盤ギリギリで動きを封じたいろはさん。

いろは「とどめです!」

ラバーソール『ぶちまけろお!』

スーパーコンボで辛うじて勝利を拾う。

承太郎「八幡…お前、相撲は好きか?」

八幡「ああ。特に土俵際の駆け引きは…。」

承一郎「手に汗握りますよね。こんな感じで」

確かにギリギリで手に汗を握ったな。お疲れ、いろはさん。

そしてエンディング。ラバーソールが変身を解き、素顔の状態でドアップ。うん、当時はイケメンだったんだらうけど、今のセンスで見たらちよつと…な。

ラバーソール『フハハハ…まったく幸運よのうオー、おれってさあーっ。やつらを殺せばDIOに1億ドルもらうことになってる。へへ、たった数分の戦いでこれだけ稼げるなんてよお。ヘビー級ボクサー以上におれってラッキーだと思わんかいー? このタマナシヘナチンがーっ』

スタツフロール

これだけ？ラバーソールのエンディングってこれだけ？あと何で最後に罵倒が入るの？っていうか、これって誰に向けて言ってるの？独り言？

承太郎「さて……もう良い時間だ。今日はお開きにするぞ」

気が付けばもうじき最終下校時刻だ。修学旅行間近のこの季節、日が落ちるのも早い。外はだいぶ暗くなっている。今日はここまでだろう。

だ昨日とは違ってちゃんと片手間で仕事も終わらせてあるし。

八幡「承一郎も最後まで見たいだろう？うちに泊まるか？新しい仲間も紹介したいしな」

承一郎「そうだな。せつかくだからお邪魔するよ。この世界の集英組に上がり込む訳にもいかないし、ペットシヨップやカマクラとも会いたいしね」

そしてこの夜、僕は八幡の家に泊まった。

八幡の家では仗助さんや静さんも交えて昨日のプレイ動画で盛り上がり、夜は更けていった。

僕は知らなかった。あの規格外がこの様子を見ていたことを……。

??「中々面白いレトロゲームね♪ス〇ブラもどきを作るよりも簡単そうだわ♪早速試してみようかしら♪」

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

プレイ動画を見てみよう！その①

八幡の家に泊まることになった僕。八幡の家は普通の家庭……とも少し違っていた。隣の家との境がない。

いろは「そっちがわの隣はわたしの家なんですよー。将来的には建て直して1つの家にしようとかお父さん達は言ってるんです」

おいおい……某大御所の野球漫画でもそこまではやらないだろ。

静「ちなみに角の家は私とお兄ちゃんの家。徐倫お姉ちゃんも今はホームステイしてるよ」

仗助「更にちよつと行けばジジイと承太郎さんと朋子さんが共同生活をしている借家の一軒家があるぜ。ウルフスが片付くまではそこで生活するみてえだ」

あれ？

承一郎「兄さんやトリツシユさん達はどうしてるんですか？」

仗助「ジヨルノ達は雪ノ下姉妹と同じマンションで部屋を借りているぜ。ん？トリツシユさん？義姉さんじゃあねえのか？」

ああ、この世界では兄さんとトリツシユさんは結婚していたんだっけ。こっちではま

だだったからね。

承一郎「まだ結婚していませんよ。お互いに立場がありますから」

仗助「そつか。じゃあ着替えたらまたここに来るからよお。今日は楽しもうぜ?」

仗助さんと静さんは手を振り、自宅へと入っていった。

八幡「じゃあ、俺達も入るか」

八幡はカードを取り出してドアを開ける。……って、

承一郎「あれ?君の家って……」

八幡「ああ。多分そつちの俺達は普通の家なんだろうな。けど、俺達はSPW財団で働いているし、給料は基本的に家に入れていくからな。細かいリフォームを何度かやって、所々が新しくなってるんだよ」

そう言えば社畜をしてたな。世界的企業の幹部は潤っていてうらやましい。俺も華さんやジョセフさんにスカウトされているし、どうしようか……。

いろは「じゃあ、着替えて来ますね?ハチくん♪承一郎さんもまた」

承一郎「ではまた」

僕は八幡の家に上がり込む。

小町「承一郎お兄ちゃんはリビングで寛いでいて下さい。小町はご飯を作つて来ますから。お兄ちゃんはお風呂の準備をおねがい!」

八幡「了解だ。承一郎、パジャマは俺ので大丈夫だよな？」

承一郎「体格もほとんど同じだし、大丈夫じゃあないかな」

八幡と僕の体格はほぼ同じだ。僕も八幡も基本世界の自分達より一回り大きい。そういうところも僕達は似ていると思う。性格はともかくだけどね。

カマクラ「ニヤーン♪ゴロゴロゴロ……」

家事へと散っていった比企谷兄妹と入れ替わりに比企谷家の飼い猫、カマクラがやってきて、足にすり寄って来た。八幡にはなついていないというのが信じられないな。

ペットシヨップ「クエエエ」

バサバサ……と、隼のペットシヨップもやって来た。環境が変わったということもあるのか前世のように攻撃的ではなく、普通に僕の肩に降りてきた。

いろは「お邪魔しまーす♪」

静「承一郎、暇してないかー？」

いろはさんと静さん、そして仗助さんも上がってくる。

いろはさんはそのままキッチンへと行き、小町姉さんの夕食の準備に加わる。

仗助「仕事が終われば徐倫も来るだろうぜ」

そう言つて仗助さんと静さんはいそいそと何かをテレビに繋ぎ始めた。

承一郎「それは？」

仗助「途中で連れて来られたから昨日や今日の途中まで見てねえだろ? プレイ動画を
持ってきたんだ」

確かに途中まで見ていたが、全部は見えていない。それに、いろはさんのプレイと同時に
見ていたからイマイチ内容が頭に入ってきていなかった。これはありがたい。

仗助「じゃあ、まずは承太郎さんの話からだな」

僕は映像に集中する。

ナレーション『空条承太郎は自分に悪霊がとりついていて、自ら留置所の中に
いた』

承太郎『俺の後ろに誰がいる……。だから俺をオリから出すな』

ホリイ『承太郎……ジョセフおじいちゃんにこの事を伝えないと』

ホリイさん、若いなあ。承太郎さんのストーリーは史実とあまり変わらないとのこと
だ。あまり、という事で少しはアレンジされているのかもね。

第1話は『炎の魔術師』

確かアヴドウルさんのストーリーのはずだ。

ジョセフ『承太郎! 出る! ワシと帰るぞっ!』

無印の場合は中間デモがしつかりと流れるらしい。脳内で想像する必要がなさそう
だ。あれはキツかった……。特に海老名さんが。

承太郎『消えな、およびじゃあないぜ』

今の承太郎さんからは想像できない口調だな。なんか新鮮だ。

ジョセフ『そうか……君の順番だ、アヴドウル』

アヴドウル『ジョースターさん。少々手荒くなりますよ』

ジョセフ『かまわんよ』

アヴドウルさんが何故かクロスファイヤー・ハリケーン・スペシャルで牢屋を破壊する。

承太郎『てめー……』

仗助「承太郎さんやジジイが言うにはここでクロスファイヤー・ハリケーンは使わなかったって言ってたな」

静「三浦も首を捻ってたっけ」

そうなのか？知らなかった。僕もあらししか知らないからね。

そして対戦開始。八幡だったらドンパチ開始って言うところかな？しかし……

承一郎「これは誰がプレイをしていたんですか？えらく下手くそなんですけど……」

格ゲーをやらない僕だっつてここまで下手じゃあない。動きがメチャクチャ過ぎる。

仗助「承太郎さんだ……」

え？これ、承太郎さんがやってるの？

静「おじさん、ゲームそのものをまずやらないから…」

あつさりアヴドウルさんに負けてゲームオーバー。ゲームオーバー画面はダービースさんのオシリス神にやられてチップにされていた。芸が細かいね、カプコン。

そして再び承太郎さんでプレイ。今度は動きが幾分かマシになった。プレイヤーが変わったのか？

仗助「今度は俺がプレイをしたんだ。承太郎さんの弟分の俺がな」

オラオララツシユを決めたり、指を伸ばしたり、ダツシユタツクルを決めたりと僕のもの知らない技を承太郎さんが決めていく。この頃は多彩だったんだね。そして難なくアヴドウルさんを撃破。

アヴドウル『彼を牢から出しました』

承太郎『してやられたというわけか?』

ジョセフ『悪霊の正体は生命エネルギーの作り出すヴィジョン『スタンド』なのじゃアヴドウル『DIOの存在がその原因!』

ジョセフ『そして我々はその男と戦わねばならない宿命にある!』

へえ、そんなやり取りがあったのか。

静「史実では留置所じゃあなくて、どこかのカフェで説明したらしいけどね」

そうだったの?随分とはしよられているみたいだ。

第2話 戦慄の侵入者

場面はどこかの建物らしき場所に移り、承太郎さんと花京院さんが睨み合っている。

承太郎『こ、これは……てめーのしわざか?』

花京院『空条承太郎……貴様を殺す』

何があつたのかイマイチ把握できない。

静「おじさんの母校の保健室であつたエピソードみたい。海老名の前世、花京院さんはハイエロフアントで校医だった女医さんの中に入って操り、おじさんの学校の不良とかをボコボコにしたらしいよ?」

仗助「中には万年筆を目に突っ込まれて失明した奴もいたって話だぜ?俺がいたら直してやってただけだよ」

えぐいな……そんなことがあつたのか。

そして対戦開始。仗助さんのプレイではみんなと同じくここで超必殺技……スーパークンボを試してみたんだ。スター・プラチナ・ザ・ワールドもあるみたいだね。

あれ?でも……僕は父の記憶を辿ってみる。うん、確かに本来であるならば承太郎さんは父のザ・ワールドがきっかけで時を止める能力に目覚めたはず。

仗助「そこは本物の承太郎さんもビックリしていたぜ。ここではザ・ワールドに目覚めていねえって」

本人をも驚かせるとはやるな……スタツフ。仗助さんは難なく花京院さんを撃破。承太郎さんは倒れた花京院さんを抱き起こし……

承太郎『動くなよ。花京院、テメーの肉の芽を抜いてやるぜ』

あれ?ちよつと待ってくれ。確か肉の芽は抜いた後に波紋で消す必要があるよね? 承太郎さんはおもむろに抜いてオラオララツシユで消してるけど……

ジヨニイ「ありえねえ!これはありえねえ!」

静「おじさん本人もそこでビックリしてた。これは花京院さんを東京の空条家に運んだ時にやったことだったって。おじさんが肉の芽を抜いたのは事実だけど、その後には波紋で消したらしいから」

仗助「ついでに言えばよお、花京院さんの肉の芽に気が付いたのもジジイだったらしいぜ?ジジイがワシの出番が削られておる!とかわめいていたぜ」

ジヨセフさん……そこは大人になりましょうよ。

2戦目が終わると、デモではホリイさんがスタンドに蝕まれ、倒れるデモが流れる。そして旅が始まった。

第3話 恨みの傷を持つ男

場所はシンガポールのホテルの客室。そこで承太郎さんはデーボに襲われる。

承太郎『おい、てめー……その殺気、敵か』

デーボ『俺はデビルのスタンド使い。名はデーボ。エボニー・デビル!』
承太郎『オラア!』

エボニー・デビルで仕掛けてくるデーボに対してスター・プラチナを叩き込む承太郎さん。でもエボニー・デビルは……

デーボ『げへへへ! ついにやったな承太郎! これでたつぷりとお前を恨めるというものだああ!』

そう。デーボのエボニー・デビルは傷を受けた恨みを人形に宿し、攻撃するスタンドだ。

承太郎『なんだと!』

デーボ『わざとやられたんだよ! ヒヒヒ、呪い殺してやる!』

そこで対戦開始。

承一郎「史実ではここで承太郎さんがデーボを倒したんですね」

仗助「いいや、違うぜ。デーボをここで殺したのはポルナレフさんだ。承太郎さんも何でここで俺が襲われているんだって呆れてきたぜ」

そもそもデーボをプレイヤーキャラクターにするのもどうかと思うけど。対戦後のデモはなく、そのまま第4話へ。史実ではないからかも?

第4話 砂漠を走る刺客の水

場面は砂漠。ここでイギーが合流するようだ。

ペットシヨップ「クエツ！」

前世をやられた関係からか、ペットシヨップが少しだけ反応したが、すぐに落ち着いた。八幡の話だとイギーの転生であるサブレとは互いの前世を認めた上で和解をしたらしい。

イギーの出会いから水が大量に降ってくる。このスタンドは……？

静「ンドウールのゲブ神というスタンドらしいよ？でも、おじさんの話だとこんなに大量の水を操る力はなかったって言ってたけどね」

この時代に死んだ人のスタンドか。僕とは面識がない。ゲームは格ゲーのシステムを利用したアクションゲームに変わる。進んでいる先では財団の人達が死んでいたたり、アヴドウルさんや花京院さん達が倒れている。背景に力をいれているとはいえ、酷いシーンだ。

波のような水の攻撃や、大小様々な水の手を破壊しながら承太郎さんは進む。

仗助「本来はイギーを使って音を立てないように進んだらいいんだけどな」

メチャクチャ音を出さまくっていますけど？

ンドウール自体はパンチ一撃で沈んだ。史実ではD I Oの情報を喋るくらいならば死んだ方がましだと自害したらいい。あの父にそんなカリスマがあるなんて……。八幡

を見ているとそうは思えないんだけど。

第5話 心を奪う美しき名刀

突然現れた見覚えのない男が承太郎さんと背中合わせに立つ。手には刀。その刀には見覚えがある。陽乃さんのスタンド、アヌビス神だ。

仗助「チャカって言うらしいぜ。本来ならこれもポルナレフさんが倒したらしい。承太郎さんは『誰だ?』と言っていたっけな。八幡も知らないらしい」

それはそうだ。僕が知らないのならば、形は違えど父の記憶を共有している八幡も知るわけがない。

僕もチャカカの事は知らない。知っているのはアヌビス神という刀だけだ。会話のやり取りもシンプル。

チャカ『貴様が承太郎だな? 真つ二つにしてやるぜ』

承太郎『野郎……』

これだけ。勝負は徐々に仗助さんが苦戦をし始めてきている。そういえば仗助さんはゲームは好きだけどあまり上手くはなかったっけ?

第6話 恐ろしき影

タイトルでわかった。アレッシーか。空から降ってくるアレッシー。

承太郎『空から降ってくるなんて普通じゃあねえな』

アレツシー『えっ!?わ、私ですか?』

承太郎『とぼけるんじやあねえぜ。もうわかってるんだよ!新手的スタンド使いだな!』

アレツシー『さすが、えらいねー』

承太郎『てめー……』

プレイでは素なのか仗助さん操る承太郎さんは何度も子供にされる。が、子供にされた承太郎さんはかまわずに生身でオラオララツシユをアレツシーに叩き込む。

仗助「いやあ、アレツシーを見るとつい興奮しちまってなあ」

静『いいぞ!もつとオラオラを叩き込むんだつーの!』

プレイしている背後からの声なのか、静さんが興奮して叫んでいる。アメリカでは酷い目にあつたからなあ。僕もやられたけど。

アレツシーを倒すと承太郎さん達一行はDIOの館へ。

第7話 亜空のしよきヴァニラ・アイス

ナレーション『ジョセフ達はふた手に別れて館内に侵入した』

あれ?自発的に別れたように書かれてるけど、確かケニーGの罠でそうなったんじやあなかつたつけ?

ステージは既にポルナレフさん達が戦った後なのか、酷く破壊されていた。

ジョセフ『何だ！この破壊の跡は！』

承太郎『間違いないくアヴドウル達が敵と遭遇した後だ！』

そこでクリームが登場。

ヴァニラ・アイス『一人は逃したが、お前達は必ず仕留める！』

既にあヴドウルさんとイギーがやられた後って事か。史実を考えると逃げたのはポルナレフさんの事だろう。

そして対戦。だが、仗助さんはここで負けてしまった。僕も対戦したけどヴァニラ・アイスは強かった…。攻撃のほとんどがガード不可能だったしね。よく倒せたなあ。

仗助さんはここで材木座君と交代したらしい。動きが明らかに違う。

へえ、通常攻撃が当たった時に必殺技のコマンドを入れると通常攻撃の戻りモーションが無くなってそのまま必殺技を出せるようになるのか。これがキャンセルして技術らしい。攻撃後の隙をキャンセルするからキャンセルって意味か。連続技を再現する為にあるシステムで、格闘ゲームでは基本的な技術らしい。これを知っていればもっと楽だったのに……。八幡め、黙ってたなあ？

ヴァニラ・アイスを倒してデモ。

ヴァニラ・アイス『死ね！承太郎！』

承太郎『てめー……』

スター・プラチナのオラオララツシユにより壁が破壊され、ヴァニラ・アイスが粉々になって死亡する。

承太郎『吸血鬼だったとはな』

正確には屍生人ただけだね。

ジョセフ『その階段の上がD I Oの部屋なのか』

ポルナレフ『こんな奴がいたぜ!』

ヌケサクを投げてくるポルナレフさん。そこから先の事は知っている。史実での承太郎さんとポルナレフさんの役割が入れ替わった形だね。

ジョセフ『ポルナレフ!アヴドウルとイギーは…』

ポルナレフ『すまねえ……俺を助けるために……』

ジョセフ『そうか……』

くっ!知っているとはいえ、やはりくるものがあるな。そして一行は史実通りにヌケサクに案内させてD I Oの棺にたどり着く。

そして中にはヌケサク……父が時を止めて入れ替わったんだ。そして館を脱出して夜に。

最終話 D I Oの世界

戦いは花京院さんが既に殺され、ジョセフさんがやられる場面に。

ジョセフ『承太郎！来るんじゃない！』

D I O 『まずは古いばれからだ……』

ジョセフさんの喉元にナイフが刺さり、再起不能に。

D I O 『ザ・ワールド！花京院のやつも既に始末してやったぞ。次は承太郎！貴様だ！』

第一ラウンド。うわっ！本当に空烈眼刺驚を使ってる！材木座君もガード不能とは知らなかったのか、まともに食らっている。しかし、何故かスタンドモードは使ってこず、1ラウンド目を難なく先取する。

本当に影D I Oの方が強いなあ。

そしてここで中間デモが！スター・プラチナに殴り飛ばされるD I O。その先ではジョセフさんの血を吸って…。

D I O 『ジョセフの血は頂いた…。実に体に馴染むぞ、承太郎！やはりジョースターの体にはジョースターの血だな！』

承太郎『D I Oオオオオ！』

D I O 『クツクツクツ、最終ラウンドだ！』

B G Mが変わり、最終決戦へ！場所はあの橋だ！今度はスタンドモードも使ってくるし、スーパーコンボにロードローラーまで使ってくる！

え? ロードローラーはガード可能? 空烈眼刺驚はガード不能なのに? 普通は逆じゃ
あないか! それでも材木座君は格闘ゲームが得意らしく、危なげなくD I Oを倒した。
そしてエンディング……。

D I O 『はあ…はあ…死ね! 承太郎!』

史実通りにザ・ワールドのキックとスター・プラチナの拳がぶつかり、D I Oが死ぬ。

D I O 『バカな! このD I Oが……このD I Oがああああ!』

承太郎 『敗因はたった1つ……。シンプルな答えだ。てめーは俺を怒らせた』

承太郎さんの名言だな。

ナレーシヨン 『その後、承太郎はジョセフの体内にD I Oの血を輸血して蘇らせた』

承太郎 『これで貸しは返して貰ったぜ。D I O』

ナレーシヨン 『承太郎はD I Oの体を太陽の光に当て、灰にした』

承太郎 『これで終わったな……』

ジョセフ 『ああ……彼らのおかげだ…彼らのおかげでワシらは生きとるんじや。花京

院! アヴドウル! イギー! 終わったよ……』

ナレーシヨン 『承太郎、ジョセフはホリイの待つ日本に帰るために空港にいた』

ジョセフ 『寂しくなるな』

ポルナレフ 『何かあったら呼んでください、すつとんで駆けつけますよ』

ジョセフ『辛いことがたくさんあったが楽しかった……心からそう思う』
三人が抱き合う。

ポルナレフ『それじゃあな！しみつたれたじいさん！そしてそのケチな孫よ。俺のこ
と忘れるなよ』

ジョセフ『また会おう！わしの事が嫌いじゃなければな！……マヌケ面ア！』

承太郎『忘れたくてもそんなキャラクターしてねえぜ……てめーはよ……元気でな』

ポルナレフさんと別れる承太郎さんとジョセフさん。この後の事を考えるのは今は
止めよう。杜王町やイタリア、アメリカでの事を考えるのは……。この物語はここで一
旦終止符が打たれたんだ。

ホリイ『はっ……！二人が帰ってくるのよ！パパと承太郎よツ！二人が帰ってくる
わッ！』

スタツフロール。

………すごかった。ゲームとはいえ、その情景が浮かんでくるようだった。僕です
らこうなんだ。承太郎さんを始めとして、ジョセフさん、ポルナレフさん、三浦さん、海
老名さんは当時を思い出して思うところがあつたに違いない。

仗助「どうだったか？承一郎。お前が生まれる前の情景は」

承一郎「来て良かったですよ。僕だけが見れて良かったのかと思うくらい……」

しばらくこの余韻に浸りたい気分だ。

プレイ動画を見てみよう！その②

承太郎さんの物語が終わり、余韻に浸ってしばらくした後、小町姉さんといろはさんが夕食を運んでやってきた。その頃には徐倫さんもやってきて、更に八幡の両親も仕事から帰ってきた。僕は八幡のご両親から盛大な歓迎を受ける。特にお父さんの方から。

お母さんの方は……あの人を思い出すな。どうやら白良さんとは違って普通の主婦のようだけど……。

八幡父「ほうほう。空条博士達の昔の物語をモチーフにした平行世界のゲーム……ね。見せてもらおう。構わないかな？承一郎君」

承一郎「ええ。次はジョセフさんの物語みたいです」

承太郎さんの物語とどう違うのかが楽しみだ。ジョセフさんはどうやら本人であるジョセフさん自身がプレイしたらしい。

八幡父「ん？」

八幡「どうした？親父」

八幡父「ジョセフさん、昔の方が老けていないか？」

八幡「波紋のせいだな。あのジジイは八十後半までサボっていたらしいから老け込ん

でいたんだよ」

承一郎「僕の世界のジョセフさんはもつと老けてますよ?この世界は……まあ色々あるみたいですから鍛え直して若返ってますけど」

八幡母「小町!私にも後で波紋を!」

小町「才能ないよ……お母さん。諦めて」

あつたならとづくに戦力にしてそうだよな。ついでにスタンド使いにもしていそう
だ。八幡ならそうしていただろう。それではジョセフさんのプレイ記録を見てみよう。

オープニング

ナレーシヨン『ジョセフ・ジョースターは自分の孫、承太郎に何かが起こったと聞いてニューヨークから日本にやって来た』

ホリイ『よく来てくれたわ!』

八幡父「若い!ホリイさんが若い!」

僕も驚いた。承太郎さんの物語ラストでは少し老けた感じがしたけどね。

ジョセフ『ホリイ、承太郎のことじゃが、確かに悪霊と言ったのか……』

ホリイ『そうよ。悪霊にとりつかれたって……それで自分から牢屋に入ってしまったって

……』

ジョセフ『よし、まずは会いたい。我が孫、承太郎に』

八幡父「これぞ家族愛と言うものだな！」

八幡「討伐されるの、俺の前世なんだけどどね？ ついでに言えばあのクソジジイ、この頃には仗助が生まれてたからね？」

ここでそれを言うんじゃない。八幡。仗助さんもいるんだから！ 曾孫の徐倫さんも！

第1話 裁くのは誰だ！

おや？ このタイトルコールは……最初の敵は承太郎さん！？？

ジョセフ『承太郎！ 出る！ ワシと帰るぞっ！』

承太郎『消えな。 およびじゃあないぜ』

ジョセフ『一筋縄ではいかんようじやな。 アヴドウル、すまんが少し下がっていきなれ』

アヴドウル『ジョースターさん。 わかりました……手加減をしないことです』

承太郎さんのストーリーではジョセフさんはここでアヴドウルさんをけしかけていた。 史実だとアヴドウルさんが戦っていたと見ていいだろう。 つまり、ここで既にI Fが始まっているのか。

ジョセフ『わかっておるよ。 承太郎、今教えてやる！ その悪霊の正体を！』

ジョセフさんがハーミット・パープルを纏った手で牢屋を破壊する。

承一郎「………つて、そんなパワーがハーミット・パープルにあるのか!」

八幡「や、そんなパワーはハーミット・パープルにないから。当時のジジイの波紋じゃあ牢屋を破壊する力はないし……改めて見ると既にメチャクチャだな」

承一郎「君ならできそうだけどね」

アームストロングとの戦いを見る限り。そしてジョセフさんはあつさり了承太郎さんを撃破。承太郎さんが面白くなさそうにしている光景が目には浮かぶ。

ジョセフ『やつと牢屋から出たな』

承太郎『してやられたという訳か』

アヴドウル『DIOの存在がその原因!』

ジョセフ『そして我々はその男と戦わねばならない宿命にある!』

色々と説明が飛んでます。ジョセフさんとアヴドウルさん。

ナレーシオン『ある日、承太郎を襲った花京院。彼もまた、DIOに操られていた一人だった』

いろは母「典明君が人が変わったようになって、突然転校したのもそれが原因だったんだ……DIO!!?」

八幡「すみません……お義母さん……」

承一郎「父がすみません……」

いろはさんのお母さん、確か花京院さんの従妹だったと言っていたな。こんな形で従兄の旅を見ることになるとは思わなかっただろう。

そしてホリイさんの異変が起き、旅に出る。

第2話 恨みの傷を持つ男

次はデーボか。

デーボ『クソジジイ！呪い殺してやるぜ！』

ジョセフ『戦いにおけるの年季の違いを見せてやる！』

あれ？これだけ？対戦後のデモもないし。

ここでジョセフさんの必殺技を紹介。

まずは『青緑の波紋疾走』。本体モードで波動拳コマンドをやると波紋カッターを

ターコイズブルー・オーバードライブ

その場です。僕達的に見てこれはただの波紋疾走。青緑の波紋疾走は水中で使う

ジョナサン・ジョースターの技だ。

次に『ハーミットウエブ』。スタンドモードで波動拳コマンドをやるとこちらが出る。

ハーミット・パールを伸ばして相手に巻き付け、波紋を流す技だ。確か最終決戦でD

IOに対してやった技だったと思う。任意で自分の目の前まで引っ張る事も出来るよ

うだ。

『策士の業』。突然棒立ちになるジョセフさんに攻撃を当てると、体に巻き付けた波紋入

りハーミット・パープルでカウンターを与えるという技だ。確か八幡は『当て身系』と言っていたっけ? 当て身というのはパンチやキック等、直接打撃を与える事を意味するが、格ゲーの世界では別の意味らしい。

CAPCOMと当時双璧を成していた会社、SNKのゲーム餓狼伝説のラスボスであるギース・ハワードの『当て身投げ』という技が由来だとか。構えている所に攻撃を与えると、技をいなされて投げられるカウンター技だったらしく、ジョセフさんの『策士の業』みたいな系統の技を総じて当て身系と呼ばれるようになったのだとか。

ちなみにこの『策士の業』、当て身系に分類されるのは本体モードの時のみで、スタンダードモードの時はその場でカウンター動作を行うようだ。この技もDIO戦で使い、不発に終わった技だった記憶がある。

次に『山吹色の波紋疾走』サクライトイエロー・オーバードライブ。この技は波紋入りのハーミット・パープルを巻き付けた腕で拳骨をするように振り下ろす技だ。意外と範囲が広く、対空技に使える。これも本来の技とは違う技だ。本来の山吹色の波紋疾走は波紋の拳でオラオララツシュをする。ジョナサン・ジョースターの技である。僕も使うしね。

次に投げ技の『波紋のビート』。ハーミット・パープルを相手の全身に巻き付け、強めの波紋を流す。これは現実のジョセフさんと八幡も使う技だ。

そしてスーパーコンボ。

1つは『波紋疾走』。『波紋のビート』の強化技で、ジョセフさんと八幡の最強の技、『アメジスト・オーバードライブ紫水晶の波紋疾走』だ。僕も食らった事があるから威力はわかる。電子レンジで焼かれる水のように熱せられる痛みはもう味わいたくない。

そしてもう1つ。『師の教え』。アッパーで相手を浮かせる。アッパーが決まると小町姉さんの前世、リサリサの顔が一瞬だけ出て来る。そして相手が浮いている間に波紋の呼吸でパワーを溜め、落ちてきた所を渾身のストレートで殴り飛ばす。その時に背景に若い頃のジョセフさんの顔がドアップで出てくるのが印象的だ。食らった相手は画面端まで殴り飛ばされる。

結構強いな。ジョセフさんの技。

第3話 砂漠を走る刺客の水

ンドウールだ。特筆することは特に無く、承太郎さんと同じデモが流れる。ジョセフさんと差し変わっただけのようだ。

第4話 恐怖の女教皇

ん？ハイプリエステス？ミドラーなのはわかる。でも、突っ込まさせてほしい。

八幡「次にお前は、『何で9英神の後にミドラーさんが出てくる！』……と言う」

承一郎「何で9英神の後にミドラーが出てくる！……惜しかったな」

八幡「チツ！」

さては自分でも突っ込んだな? 僕もそう思う。何でも八幡が分析するところによると、ミドラーはマライアの代わりに無印では登場したのでは無いかと言うこと。

僕が昼間にやったのは続編の『未来への遺産』という物で、こちらにはマライアが登場しているが、無印ではマライアが登場していないらしい。

CPU戦でデモが流れるのは無印の方で、未来への遺産では無印で登場していたキャラもオープニングとエンディングしかデモが流れないとのこと。

無印のキャラは承太郎さん、ジョセフさん、ポルナレフさん、アヴドウルさん、花京院さん、イギー、呪いのデーボ、アレッシー、ミドラー、チャカ。隠しキャラクターにDIO、誇り高き血統ジョセフさん(若ジョセフさん)、邪悪の化身DIO(影DIO)。未来への遺産の追加キャラはホル・ホース(ホル・ホース&ボインゴ含む)、ラバーソール、マライア、ペットシヨップ、床屋のアヌビス神のカーン(誰?), アヌビス二刀流ポルナレフさん、恐怖を克服した花京院さん(裏花京院さん)、プレイヤーキャラに作り直されたヴァニラ・アイス。

ストーリーは……

ポルナレフ『カイロ口まであとどれくらいなんだ?』

ジョセフ『あと3〜4日もあればカイロじゃ。ここからはどこに敵がいてもおかしくない。気を付けねばならん』

ミドラー『ハハハハハ！トロい奴らよのお！』

すると足元でいきなりハイプリエステスが口を開ける！確かこれは小町姉さんがノース・カロライナのロックマウントでやられたミドラーの技！

ジョセフさん達は間一髪で回避する。

ジョセフ『新手のスタンド使いか！』

ミドラー『死んで貰うよ！』

第5話 恐ろしき影

アレツシー『あれ？やられてんじやん、ミドラーのやつ』

ジョセフ『ん？貴様……この女の仲間だな！』

アレツシー『しまった！ばれた！』

八幡が考察したように、ミドラーはマライアのポジションにいるらしい。仗助さんを通じて史実を聞いたところによると、アレツシーとマライアによる二ヶ所同時攻撃を受けていたという話だ。それにしてもアレツシーえ：簡単に口に出すかな普通。そりゃバレルだろ。

ジョセフさんがセト神の攻撃を食らうと若い頃の姿に戻るみたいだ。何故か必殺技とかが何も使えないようだけど……

承一郎「あれ？若い頃のジョセフさんは別のキャラでいましたよね？何でそっちの技

が使えないんでしようか」

八幡「気が動転しているとかそう言うのじゃね? 実際に俺達もアレツシーの攻撃を受けたことがあるからわかるだろ?」

承一郎「確かに……ブラッディ・シャドウが突然使えなくなつて焦つたな」

ジョルノ兄さんもゴールド・エクスペリエンスを使えなくなつて焦つて……いたのかな? そのわりには録音とかしていて結構冷静なような気もしたし。

第6話 心を奪う美しき名刀

アヌビス神だね。

チャカ『ジョセフ・ジョースター、貴様を倒せばD I O様もお喜びになる』

ジョセフ『戦いにおける年季の違いを見せてやる!』

ジョセフさん、何かそれしか言っていないような気がするんだけど気のせいかな

……。

チャカを倒すとD I Oの館のデモが流れる。

第7話 亜空のしようきヴァニラ・アイス

ナレーシオン『ジョセフ達は…… (以下略)』

ジョセフ『何だこの破壊の跡は!』

花京院『奥へと続いていますよ』

ジョセフ『間違はなくアヴドウル達が敵と遭遇した痕だ!』
クリームの攻撃。

ジョセフ『危ない!』

ヴァニラ・アイス『奴らはもういない……そして次はお前達だ……』
え? ポルナレフさんとかもやられたの?

ジョセフ『なんじやと! どういう事だ!』

ヴァニラ・アイス『死ねイツ! ジョセフ!』

ここでバトル開始。しかし、屍生人であるヴァニラ・アイスが何度か波紋を食らって平気なのか小一時間ほどスタツフを問いただいた。バトル終了後。

ヴァニラ・アイス『貴様……貴様なんぞにイイイ!』

ジョセフ『なんじやと! まだ生きておった! 吸血鬼か! 食らえ! 太陽のエネルギー!』

「波紋」!』

ジョセフさんは山吹色の波紋疾走でヴァニラ・アイスを吹き飛ばす。ここでやつとヴァニラ・アイスが灰になる。今更感が半端じゃない。

花京院『やりましたね! ジョースターさん!』

ジョセフ『ポルナレフ! 大丈夫か! アヴドウルとイギーはどうした?』

ポルナレフ『俺を守るために……』

ジョセフ『そ、そうじゃったか……』

承太郎『こんな奴がいたぜ』

承太郎さんがヌケサクを投げってくる。その後は承太郎さんと同じデモが流れる。

最終話 D I Oの世界

場面はどこかの建物の屋上。

D I O『逃がさんぞ!ん!?あれは花京院か?』

花京院『くらえ! D I Oッ! エメラルド・スプラッシュをー!』

D I O『マヌケが…知るがいい。ザ・ワールド!』

背景がモノクロになって花京院さんの腹部にザ・ワールドの腕がねじ込まれる。これは時が止まったときの世界。僕も八幡の聖なる遺体を取り込んだ時にその光景を見たからわかる。

時が戻り、花京院さんが背景にある給水塔にめり込む。

ジョセフ『え!? バカな! 花京院!』

いろは母「の、典明君……こんな最期だったんだ…」

いろはさんのお母さんが涙する。こんな形で従兄の最期を目にするととは思わなかったのだろう。八幡は体を締めこませている。前世の所業が婚約者の母親を泣かせているのだからそれはばつが悪いだろう。

D I O 『ジョセフ、次はお前だ』

そこで花京院さんが時計塔に向けてエメラルド・スプラッシュを発射。花京院さんが見破ったんだな。

花京院 『せい……いつぱいの……メッセージです……』

ジョセフ 『花京……院』

D I O 『ふん!』

そこで戦闘開始。

いろは母 「典明君が何かをした……何をしたの？」

八幡 「D I Oの……前世の俺の能力を見破ったんですよ」

いろは 「致命傷を受けたおじさんはそれをジョセフに教えたんです。もう喋る力がなくなっていたおじさんなりのメッセージで……」

喋っている間にジョセフさんが1ラウンドを取る。やはりジョセフさんは上手いな。あつという間だった。そこで再びデモ。

ジョセフ 『わかったぞ花京院! お前の命をふりしぼったメッセージが! D I Oのザ・ワールドの正体は、時を止める能力だったのか!』

いろは母 「……すごい。典明君は瀕死の状態でそれを……D I Oの能力を見破って……うう……誇り高いよ……花京院のおじさんとおばさんにもこれを伝えないと……最期

まで典明君は立派だったって……姫菜ちゃんにも誉めなきやね……」

ああ、海老名さんは花京院さんの転生だったつけ。たしか前世のご両親とは再会を果たしたって言うていたな。一方で……

D I O 『だからどうしたと言うのだ!? 貴様に何が出来ると言うのだ!』

ジョセフさんは一旦退いて画面から出ていく。D I Oはそこで上着と頭のバンドを弾き飛ばし、タンクトップ姿になる。そして本来ならナイフを刺される大通りで最終決戦。

2ラウンド目も勝利し、エンディングへ。

ジョセフ 『終わりだ! D I O!』

D I O 『ハーハー……この老いぼれがっ!』

ジョセフ 『お前はこの次に『このD I Oが負けるはずはない』と言う』

D I O 『このD I Oが負けるはずはない……ハッ!』

出た! ジョセフさんお得意のセリフの先読み!

いろは母 「ハチ君もたまにやるよね? そっか。ジョセフさんの真似だったんだ」

承一郎 「さつきは不発でしたけどね」

そしてジョセフさんはハーミット・パープルを構える。

ジョセフ 『食らえ! ^{オハイドラッグ}波紋疾走!』

D I O 『バ…バカな！こ…このD I Oが！このD I Oがああああ！』

ここで承太郎さんの時と同じように上半身が消し飛ぶD I O。

ジョセフ 『花京院、アヴドウル、イギー……かたきはとったぞ……』

ナレーシヨン 『ジョセフはD I Oの肉体を太陽の光に当てて灰にした』

承太郎 『これで終わったな……』

ジョセフ 『ああ……彼らのおかげだ……彼らのおかげでワシらは生きとるんじゃ……

花京院、アヴドウル、イギー！終わったよ……』

いろは母 「ジョセフさん……お疲れ様でした……ううう」

本当は承太郎さんがやったことなのだが、ここで水を差すのも野暮だろう。後で八幡

かいろはさんが伝えておくに違いない。

ナレーシヨン 『承太郎、ジョセフはホリイの待つ日本に帰る為に空港にいた』

ジョセフ 『寂しくなるな』

ポルナレフ 『何かあつたら呼んでください、すつとんで駆けつけますよ』

ジョセフ 『辛いことがたくさんあつたが楽しかった……心からそう思う』

ポルナレフ 『それじゃあな！しみつたれたじいさん！そしてそのケチな孫よ。俺のこ

と忘れるなよ』

ジョセフ 『また会おう！わしの事が嫌いじゃなければな！マヌケ面ア！』

承太郎『忘れてたくてもそんなキャラクターしてねえぜ…てめーはよ…元気でな』
そして別れ、スタツフロール。ホリイさんの場面はカットされている。その分はオー
プニングが長いことでフォローされているのかな？
次は若い頃のジョセフさんだ！

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

プレイ動画を見てみよう！その③

そして次は誇り高き血統ジョセフさん。つまり若ジョセフさんの番なのだが……。無印の方ではオーブニングすら無かった。

花京院さんや承太郎さん達、DIOの刺客の何人かと戦い、最後は影DIOを倒してスタツフロール。エンディングも無かった。

それで終わりではつまらないので、ここで若ジョセフさんの技について。

まずは『波紋カッター』。ノーマルジョセフさんの青緑の波紋疾走そのものだ。何でノーマルの方もこつちの名前にしなかったんだろう？

次に『波紋コーラー』。波紋コーラではなく波紋コーラー。どこから取り出したのかコーラーの瓶を上に向け、対空技として炭酸を噴出させる。本当は瓶の栓でダメージを与えるだけどね？

次に『アイアンボーガン』。攻撃ボタンで色々と変わるらしく、弱と中はまっすぐ前に飛ぶ。弾速は違うけど。ツツコミところがあつたのは強のアイアンボーガン。後ろに発射したボーガンが、何故か何も無い背景を飛んでいき、相手の背後から飛んでくる。どうやってやったんだろうか？

承一郎「あれ、どうやってるのかわかるか?波紋の技術だけではないよね?当時のジョセフさんの波紋じゃあんなことはできないはずだし」

八幡「やつぱりそこにツツコミが入ったか。ジジイはワムウとの決闘の時に円形のコロッセオの壁をレール代わりにして遠心力でやったらしい。あんなの種がなくちゃ俺はおろか、小町にだって無理だ」

それを再現したらしい。でも、このゲームでは何もない砂漠のステージでも背景をボーガンが通過していつている。無理があるだろ……。

次にクラツカー。若ジョセフさんは当時はスタンドが使えなかった為にスタンドをオンオフにするボタンはクラツカーによる攻撃に差し替えられている。そのクラツカーを利用した必殺技も存在する。

1つは三回コマンドを入力することによって連続技を繰り出す『クラツカー・ヴォレイ』。3発目のクラツカーがヒットすると相手は浮かび、追加で攻撃を与える事ができる便利な技だ。

『クラツカーブーメラン』。投げたクラツカーが画面端まで飛んでいき、そこで停止。しばらくしたら戻ってくる技だ。投げるまでの隙が大きいのであまり実用的な技とは言えないけど。

次にスーパコンボ。

「1つはノーマルジョセフさんも使っていた『師の教え』の若ジョセフさんバージョン、『忘れ得ぬ想い』。動作は同じなのだが、背景の演出が少し違う。師の教えはリサリサ姉さんが出ていたが、忘れ得ぬ想いではジョセフさんの盟友であるシーザーさんが登場。『シイイイイザアアアアア』という叫びが印象的だった。印象的だったのだが……そんな思いは次のスーパーパーコンボを見たときに吹き飛んだ。

もう1つのスーパーパーコンボ……『エイジャの赤石』。これは僕にとつても忘れられないイヤな思い出がよぎる。そう、小町姉さんのルビーレーザー。それが再現されている技だ。演出的にはDIOの空烈眼刺驚と同じ。あの足から下を溶かされた痛みは忘れない……。

小町姉さんは指先をこちらに向ける。可愛くウインクしてもダメだからね？ 異世界でも暴れたつて言うし、本当にこの凶悪な子は……。

そもそもだ……。何でスタンド使いじゃないのにスタンドにダメージを与えられているのが疑問だ。八幡達もそこにツツコミを入れたと言う。

そしてゲームの方では……あれ？ また若ジョセフさんでプレイ？ あ、キャラクター選択画面でホルホースとかいるからこれは『未来への遺産』の方だ。こつちではストーリーがあるらしい。

オープニング

ナレーション『アレツシーのスタンド能力で若返ったジョセフ。しかし子供までには戻らず、若々しい姿の青年ジョセフ・ジョースターになっていた……』

そういう設定か。確かにそうでもしないと若ジョセフさんにストーリーを加えるのは無理があるものね。でもさ、黄色い服を着ていたジョセフさんが若返ると紫の服になっっているのは何でだろ？

アレツシー『え？子供まで戻らねえ！そうか！ジジイだから子供にするには影に交わっている時間が長くかかるのか！』

逃げるアレツシー。

ジョセフ『あつ！てめー、待て！』

口調までも若返っている……。

第1話 戦慄の侵入者

あ、ここからは例の疑似デモの想像をやるんだね？もう慣れてきたよ。

ジョセフ（仗助）『あつ！花京院！怪しい男を見なかったか!』

花京院（いろは）『ああ。見たぞ』

ジョセフ（仗助）『どこだ!?!教えてくれ!』

花京院（いろは）『今、僕の目の前にいる！何故僕の名前を知っている！貴様、新手のスタンド使いだな!?!』

ジョセフ（仗助）『げえ！そうだったぜ！俺が若返っている事を知らねえんだ！』
そして対戦。

花京院（いろは）『波紋疾走?!? 何故ジョースターさんの技が……』

ジョセフ（仗助）『だから俺がジョセフ・ジョースターだって言ってるじゃあないか！
敵のスタンド能力で若返つちまつたんだよ！』

花京院（いろは）『そ、そうだったんですか……すみません、ジョジョ』

ジョセフ（仗助）『ジョ、ジョジョオ？その名前で呼ばれるのは久し振りだぜ！とりあ
えずみんなに会ったら事情を伝えておいてくれ！頼んだぜ！』

静「イーハイハ。何でジョジョってパパを呼んだの？」

演技はここで中断して静さんが突っ込む。

いろは「若い頃のジョセフを見るとつい……」

小町「わかる……わかるよお姉ちゃん……」

若い頃を知っている転生二人がウンウンと頷く。今代のジョジョである静さんが
しよげてるよ？僕もあつちの世界の今代のジョジョだから気持ちわかる。

第2話 誇り高き騎士

次はポルナレフさんか。だったら僕がポルナレフさん役をやろう。いくつか見て若
い頃のポルナレフさんのイメージが出来てきた。多分、今の本人よりも上手くできる自

信がある。

ジョセフ(仗助)『あれはポルナレフか……。花京院の時みたいいきなり名前で呼ぶのはまずいな……。他人の振りをして話しかけるか。おい!その兄ちゃん!変な頭をしたスタンド使いを見なかったか?!?』

ポルナレフ(承一郎)『ああっ?!?おいお前、何でスタンド使いの事を知っている!さては敵だな!』

ジョセフ(仗助)『しまったあああ!普通に変な頭のオッサンって言っておけば良かったぜ!ポルナレフのクセにグレートに勘が良いじゃあないツスカ!』

はい中断。

承一郎「仗助さん。自分が髪の毛に拘り持つてるんですから他人に言うのはやめましょうよ」

仗助「ああっ?!?良いんだよ!あの売れ損ないで路頭に迷ったピエロのように変な頭の野郎にはこれで!それともテメエ、この俺の頭に何かケチでもあんのか?ああっ!」
何でそうなるんですか?あなたの髪型をケチ付けたら地獄を見るのはわかってるんですから言いませんよ!もうリーゼントじゃないですし、似合っている自然なオールバックなんですから!対戦後。

ジョセフ(仗助)『か、勘弁してくれよ!何度でも味方に襲われなきゃならねえんだ

よ！』

ポルナレフ（承一郎）『す、すみません…ジョースターさん。まさか若返っているとは思わなくて……』

ジョセフ（仗助）『もう味方に襲われるのはたくさんだぜ！承太郎やアヴドウルにやられたらただじゃあ済みそうにねえしよお！おいポルナレフ！壊れて同じ所しか再生できなくなったCDのように』『ジョースターさんは若返ったから間違えるな！』と吹いて回ってこい！煩わしい音を鳴らすクソツタレのニューヨークのパトカーのように大声で何度もな！』

待った。

承一郎「仗助さん。当時はまだCDはありませんよ？意味は凄く良く伝わりますけど、当時はレコード……精々ラジカセが主流だった時代の筈です」

仗助「そうだったかあ？」

承一郎「ええ。エンディングでのジョセフさんはカセットテープのウォークマンを聞いていましたよね？多分、CDはまだないですよ」

空港でポルナレフさんと別れる時にカセットテープをウォークマンに差し込んでいたカッターがあつたから間違いないと思う。

仗助「時代を間違ってたぜ！まあ、良いだろ？こまけえことはよ」

あまり良くない気がするけど、どうせ遊びだし気にするのはやめよう。

第3話 変幻自在の砂の猛獣

あれ? まだ味方との対戦が続くんた。

ジョセフ(仗助)『チキシヨ……まだ見つからないぜ』『言いながら空き缶か何かを蹴飛ばしてイギーの頭にヒットするということにするぜ』

それならイギーも怒りそうだな。

イギー(ペットシヨップ)『キシャアアアア!』

ペットシヨップが演技に加わってきた。頭が良いにも程があるだろ、この隼! 多分、ガルルルル! と言いたいんだろうな。

ジョセフ(仗助)『げえーイギー! 仕方ねえ! 可愛そうだが大人しくなってもらうぜ!』

それ、ただの動物虐待のような気がする。勝利後。

ジョセフ(仗助)『ほれ、好物のコーヒーガムだ。ちよつとコーラーがかかっちゃまってるけどな。それで許してくれよ』

イギー(ペットシヨップ)『クルルル♪』

それでイギーの気が済むとは思えないんだけど…。

第4話 恨みの傷を持つ男

あれれ？この段階では既にデーボって死んでいなかったっけ？イギーも参入している。色々とメチャクチャだなあ。

デーボ（八幡）『ゲヘヘへ！ここにいたか、ジョセフ・ジョースター』

ジョセフ（仗助）『なんだテメエは！テメエはDIOの刺客かあ！？何でここに俺がいるってわかつたんだよ』

デーボ（八幡）『バカかテメエは。ポルナレフがあちこちで騒いでいるんだから普通は分かるだろうが！』

ジョセフ（仗助）『オーノー！そういうデメリットもあつたか！』

普通はわかると思いますよ？仗助さん。勝利後。

ジョセフ（仗助）『グレート！俺のせいで敵まで引き寄せちゃまったか！こりや早く何とかしねえと承太郎達もあぶねえな！』

仗助さん。段々と素の自分が出てきてますよ？

第5話 美しき名刀

承太郎（静）『おじいちゃん！おじいちゃんやつと見付けたぞ！おじいちゃんのせいで僕まで子供にされちゃったんだからね！？』

アヴドウル（小町）『ジョースターおじいちゃん！何とかしてよ！みんな子供にされて困ってるんだ！』

ジョセフ(仗助)『や、やべえ!ドンドン被害が大きくなってきてやがる!早くあのピエロ髪アフロを何とかしねえと!』

そりやそうなるだろうな。

チャカ(八幡)『ジョセフ・ジョースター……見付けたぜ』

ジョセフ(仗助)『オウマイゴット!アヌビス神まで出てきやがった!これも若返りの力かあ!』

本当にナイル川に沈んだアヌビス神が何で出てくるんだろう。デーボまで出てきたんだから不思議じゃあ無いんだけど。勝利後

ジョセフ(仗助)『ぜえ……ぜえ……スタンドがねえと一人一人がとてもキツイぜ!早く奴を探さねえと!』

最終話 恐ろしき影

ポルナレフ(承一郎)『うわああああん!』

花京院(いろは)『くっそー!この変態親父め!』

アレッシー(八幡)『何で俺がこいつの役を……えらいねえ。さ、おじちゃんに殺されるんだよお?ポルナレフ、花京院』

ジョセフ(仗助)『見付けたぜ!だせえ頭のチキン野郎のアレッシー!元の姿に戻しやがれ!』

アレツシー（八幡）『げ、げえ！ジョセフ・ジョースター！偉くないねえ！今度こそ子供にしてやる！』

対戦。更に子供に戻されると上品な服で漫画を持った少年にされるジョセフさん。

八幡「ジジイが言うには初めて墜落を経験した時の姿らしいぞ」

だから何で服まで変わるんだろうか？そんな状態でも波紋で攻撃ができる少年ジョセフさん。修行なしで波紋を使えたと言うことらしいからすごいと思う。

対戦後

ジョセフ（仗助）『これで終わりだぜ！刻むぞ！波紋のビートー！』

アレツシー（八幡）『うぎやあああああああ！』

八幡「だから何で俺が……こんなことを……」

なんとなくボケ役は八幡っていうイメージが付いたんだよな。

ジョセフ（仗助）『おおっ！姿が元に戻ったわい！苦労させおつて……あのマヌケが！』

エンディング

ナレーション『影で若返らせるスタンド使い、アレツシーを倒したジョセフは元の年
老いた姿に戻った』

ジョセフ『ふう……やつと元に戻れたか。じゃが……若いままの方が良かったかな？』

さあ……カイロに向けて旅を続けよう』

今現在、どんどん若い姿に戻ってきてますけどね?この世界のジョセフさん。あの人はあの人で規格違いだと思う。

ナレーション『ジョースター達の旅は続く。宿敵D I Oを倒す為に T o b e c o n t i n u e d 』

スタツフロール。

「想像すると中々面白かった。敵の方はたまに胸くそ悪くなるけど。確か次はポルナレフさんだったかな?」

プレイ動画を見てみよう！その④

さて、ポルナレフさんの物語だ。

ナレーシヨン『一年前、ポルナレフはD I Oに出会っていた』

D I O『私は君のような能力者を探し、研究している。力を貸そうじゃないか。……君の妹を殺した男を探してやろう』

おいおいおいおい！それってJ・ガイルの事だろ?!?側近のエンヤ婆の息子じゃあないか！いけしやあしやあと何を言ってるんだ?!?こいつは！

ナレーシヨン『そのとき、ポルナレフの脳に埋め込まれた「肉の芽」は彼を操り人形へと変えた』

D I O『ジョースター達を始末して欲しいのだが…ポルナレフ』

ポルナレフ『わかった。それが正しいことだと信じるぜ』

ナレーシヨン『そしてポルナレフは香港で彼らと出会う』

どうせならここで影D I Oとの対戦があっても良かった気がするな。

第1話 炎の魔術師

最初はアヴドウルさんか。つまり三浦さんの前世。

ポルナレフ『来な!一人ずつぶった斬ってやるぜ!』

アヴドウル『承太郎。手を出さなくても良いぞ。ここならば思う存分にやれる』

承太郎『アヴドウル……』

ポルナレフ『貴様は自身の……スタンド能力で滅びるだろう』

これが承太郎さん達とポルナレフさんの出会いか。それにしてもポルナレフさん。改めて見ても今とはだいぶ違うな。勝利後。

普通にポルナレフさんが勝ったが、史実ではアヴドウルさんが勝ったはず……どうなるんだろうか?

ポルナレフ『ノンノンノン!無理と言ったろう。私のスタンドには君の技は通じない』

この世界のポルナレフさんを見る限りでは確かにシルバー・チャリオッツは強い。史実でポルナレフさんにアヴドウルさんは凄いと思う。

アヴドウル『……相当自惚れが過ぎないか?マジシャンズ・レッド!』

ポルナレフさんに向けてクロスファイヤー・ハリケーン・スペシャルを放つアヴドウルさん。盛大に燃えてるんだけど……確か鉄を溶かせる温度だったはずだよな?

アヴドウル『予言で私と闘おうなんて10年早いんじゃないかな?』

ヤバイ。三浦さんを知っている僕としては……

三浦『あんさー。自惚れが過ぎるんですけど？予言であーしと闘おうなんて10年早
いし』

という脳内台詞が浮かぶ！

ポルナレフ『自惚れていた。負けるはずがないと……当然の報いだ……』

アヴドウル『このまま死なすには惜しい男だ。D I Oの呪縛から解いてやる』

承太郎『動くんじゃねえぜ……』

承太郎さんがスター・プラチナで肉の芽を抜く。

八幡「このまま死なすには惜しい男だし。ヒキオの呪縛から解いてやるし」

ぶっ！笑えるけど八幡……三浦さん本人がいたら燃やされるぞ。今度報告してやろ

う。

ポルナレフ『うう……俺は妹を殺した男を追っている。D I Oがそいつを知っている

のなら……俺もあんた達についていくぜ』

もろに知ってるはずだと思えますよ？ポルナレフさん。

ナレーション『こうしてポルナレフはジョースター達の旅に付いていくことになっ

た』

第2話 恨みの傷を持つ男

今度はシンガポールのホテル内。

ポルナレフ『しかし……俺に休む暇もくれないという訳か……出てこい!』
冷蔵庫からデーボが這い出てくる。そんなものに良く入れたな?そして良く寒く無かったな?

ポルナレフ『なかなか鋭い殺気を出しているな。1つ名乗つときな』

承一郎「八幡なら殺し屋が殺気を出している段階で既に三流とか言いそうだな」

八幡「そう言ううつてことはお前だつてそう思つてるんだろ?それにデーボの能力なら一度相手に姿を晒す必要があるからなあ……」

確かにエボニー・デビルの能力ならそうせざるを得ないだろう。体が傷だらけなのもそうだ。

デーボ『俺は呪いのデーボだ。よく俺がいるのがわかったな』

ポルナレフ『お前はマヌケか?冷蔵庫の中身が出しっぱなしだぜ』

確かにそうだろうが、普通ならばチエックインしたばかりのホテルの冷蔵庫に中身が入っているのもおかしい話だと思う。

デーボ『お前を呪い殺す!』

ポルナレフ『シルバー・チャリオッツ!』

デーボ『エボニー・デビル!』

シルバー・チャリオッツがデーボを斬る。

ポルナレフ『あつけないヤツだぜ』

デーボ『ゲヘヘヘ！よくもやったなあ！お前を呪ってやる！』

対戦開始。そう言えばポルナレフさんは誰がプレイしていたのだろう。幽霊である今のポルナレフさんには無理だと思う。たかがゲームをやるためだけに肉体を動かすとも思えないし。え？ジヨルノ兄さん？ポルナレフさんはパツシヨネのナンバー2だからという理由で？

ジヨルノ兄さんが……意外だな。ゲームまでもこなすなんて多才と言うか……さすがは兄さんだ。ここでポルナレフさんの技を紹介。

『ミリオンスピリット』。いわゆる串刺しの刑だ。ソードで何度も突きを入れる連打技だ。史実ではJ・ガイルにとどめを刺した技らしい。

『レイダーツ』。素早く踏み込み突きを放つ技だ。スピードが命のシルバー・チャリオツツらしい技だな。

『シューティングスター』。一旦壁に……というか画面端の上部に張り付き、斜め上から急降下して剣を突き刺す。屋内ならまだわかるとして、砂漠とかの何も無いステージではどうやっているんだろうか？このゲームに限らず格ゲーだところという技がいくつかあるが、本当に謎だ。

『串刺しの刑』その場で胸辺りを薙ぎ払った後に、後は自動で2発斬り込む技だ。ガード

されたり空振りすると2発目以降は発動しない。さっきのミリオンスピリットの方が串刺しの刑って感じがするんだけどね。スタツフの間違いかな。

次にスーパーコンボ。

『ラストショット』。剣先を飛ばして何度も壁に反射させて刺す当時のポルナレフさん曰く、切り札。味方でもあつた承太郎さん達にもギリギリまで秘密にしていたらしい。『アーマーテイクオフ』。下から相手を斬り上げ、浮かせている間にチャリオツツが鎧を脱ぎ捨て、『ブラボー!オー!ブラボー!』という声と共に分身を伴って空中で相手を滅多斬りにする技だ。

以上がポルナレフさんの技だ。僕の刀の技にも参考に出来る技があれば良いなどは思ったけど…。ちよつと違うかも。ブラボー、オー、ブラボーはネタとしては使えるか? ?

第3話 砂漠を走る刺客の水

ここは承太郎さん、ジョセフさんと変わらないな。

第4話 恐怖の女教皇

ミドラー『助けて下さい!』

ミドラーがポルナレフさんに駆け寄ってくる。

ポルナレフ『どうした!もう大丈夫だぜ!(お、これはもしかして新しい恋の始まり

か!?)』

敵ですよ!ポルナレフさん!

ミドラー『変な怪物が襲ってくるの! (へっ!騙されてるな!?)』

ポルナレフ『何だって!?!どこだ! (よし、カッコいいところを見せちゃうよ!)』
ダメだこれは……。こういう人だったんだ…ポルナレフさんって。

ミドラー『あれよ! (クツクツクツ)』

ハイプリエステスが現れる。

ポルナレフ『なに、スタンドか!……んん?スタンドが見えるという事は……ゲエエ
!お前がスタンド使い!つまり敵か!』

ミドラー『バカだねえ』

気が付くのが遅いですよ!

仗助「なんでもこれはネーナっていうスタンド使いに騙された時のオマーヂュではないかとポルナレフさんは言ってるぜ」

いろは「本人は苦笑いしていましたね」

あのエンプレスの女か……。どっちにしても酷いな…。勝利後。

ポルナレフ『酷い女だぜ』

むしろ二度もハニートラップに引っ掛かる昔のポルナレフさんに同情の余地はない

と思うんだけどね。

第5話 心を奪う美しき名刀

ポルナレフ『随分と肝っ玉がデカいじゃあねーか。おめーのように本体を見せて躍り出てくる敵は。名乗りな!』

チャカ『名はチャカ。アヌビスのスタンド使い。お前の命をもらい受ける』

ポルナレフ『ますます男っぽい敵だねー。来な!』

今は男っぽいどころか、女に転生してるけどね。陽乃さんとの斬り合いは楽しかった。また戦いたいなあ。勝利後。

ポルナレフ『死んじやあいないが、この傷なら再起不能だな』

八幡「この時代のこの地域でチャリオッツにやられたらそうそう長生きは出来なかつたらしい。チャカはもう死んでいるらしいぞ?」

ああ。その時代の中東だとそうかもな。僕の世界の彼はどうなっているんだろうか。

第6話 恐ろしき影

ポルナレフさんが歩いていると、後ろから尾行するアレツシーが……。ポルナレフさんが振り向くと、その場にしゃがみこんで……

アレツシー『えーと、小銭を落として……』

もう少し演技がどうにかならなかつたのだろうか?まったく、父の刺客達はなんでこ

う演技が下手クソなんだ？

ステイリー・ダンはかつてはなかなか上手かったが…あの時は微妙だったな。

ポルナレフ『おい。何尾行してんだよ。てめー、殺気があるな』

アレツシー『な、何の事だか……殺気だなんて』

ポルナレフ『それじゃあスタンド使いかどうか確かめてやるぜ』

アレツシー『く、くそっ！』

ここで対戦。殺る気満々だ。勝利後は…

ポルナレフ『行くぜ！ダメおし！』

と言つて滅多斬りにされるアレツシー。死んでないかな……これ。そしてD I Oの

屋敷に到着。

第7話 亜空のしろうきヴァニラ・アイス

歩いているポルナレフさん、アヴドウルさん、イギー。

アヴドウル『危ない！ポルナレフ！イギー！』

突然アヴドウルさんはポルナレフさん達を突き飛ばす。そしてクリームに手だけを
残して……。そうか、そういう最期だったな……アヴドウルさんは。

ポルナレフ『な、何だこの腕は……アヴドウル……アヴドウルウウウ！』

悲痛なポルナレフさんの声が想像できる。

ヴァニラ・アイス 『アヴドウルは粉微塵になって死んだ』

ポルナレフ 『嘘だ……アヴドウルを殺したなどと…嘘をつくなああああ!』

ポルナレフさんの気持ちはわかる。こんな突然に……。対戦後。

倒したはずのヴァニラ・アイスが立ち去ろうとするポルナレフさんを奇襲しようとして立ち上がる。それを庇ってイギーがヴァニラ・アイスのストンピングを受けてしまう。

ポルナレフ 『イギー!カッコつけやがって……』

イギー 『ニヤリ……』

ナレーション 『イギー、死亡』

ポルナレフ 『イギーイギーイギー!』

知っているとはいえ、辛いな……この場面は。

ヴァニラ・アイス 『……うう』

ポルナレフ 『やはりな……テメーは既に吸血鬼になっていた』

ヴァニラ・アイス 『貴様なあんぞにいい!』

ポルナレフ 『地獄でやってろ』

ヴァニラアイス 『ぐあああああ!』

史実通りに壁を破壊され、太陽に当たって灰になるヴァニラ・アイス。その後にあヴドウルさんとイギーの魂のようなものが空へと消えていく……。

ポルナレフ『ア……ヴドウル！イ……イギー！……ま、幻だったのか……』
スタンド使いが死んだとき、こうした事がたまにある。信乃が死んだときも……。ポ
ルナレフさんが、見たのもあれと同じものだったのだろう。そして承太郎さん達がやっ
てくる。

最終話 D I Oの世界

場面は切り替わり、戦いは中盤戦。承太郎さんがナイフをしこたま食らった場面で死
んだ振りをしている時だ。

承太郎『うう………』

D I O『ポルナレフはどこぞに潜んでいるな？ふん。どうでも良いがな。承太郎に完
全なるとどめを刺すとするか』

そこでポルナレフさんの奇襲。D I Oの頭に剣を刺す。

ポルナレフ『くたばりやがれッ！D I Oオオオ！』

しかし、史実通りに時を止められる。

D I O『ふん。このD I Oを暗殺することは出来ん』

史実では殴られてリタイアするポルナレフさんだが、ここでは蹴りをもらって一旦ダ
ウン。

ポルナレフ『こ、こんな……バカな………』

D I O 『フン、まあ良い。花京院とジョセフは始末した』

ポルナレフ 『!??!?』

倒れていたポルナレフさんが起き上がる。史実ではそのまま倒れたままだったけどね。

D I O 『承太郎の前にお前を殺すとしよう。さよならだ、ポルナレフ』

本来ならここで承太郎さんとD I Oの心理的駆け引きが始まる。しかし、ここではポルナレフさんが決戦に挑むようだ。

そしてエンディング……。這いつくばるD I Oに剣を向けるチャリオッツ。

ポルナレフ 『今、恐怖はこれっぽっちも感じてない。仲間の死がお前への恐れを吹き飛ばした!』

D I O 『ハア……ハア……最後だ、ポルナレフ!』

D I Oが起き上がった瞬間にチャリオッツが串刺しの刑でD I Oをバラバラにする。

D I O 『バカな!?!こ、このD I Oが……このD I Oがああああ!』

ポルナレフ 『後は閻魔様に任せませ』

そして場面は切り替わり、空港。『終わったよ……』のシーンはカットされている。

ポルナレフ 『何かあったら呼んで下さい。世界中どこでもすつとんで駆けつけますよ』

八幡「現に……今、ポルナレフさんは駆け付けてくれてるよな……この千葉に……幽霊になってまで」

本当に有言実行しているな。ポルナレフさんは。

ジョセフ『辛い事がたくさんあったが……みんながいたからこの旅は楽しかった』

ポルナレフ『それじゃあな！しみつたれたじいさん！そしてそのケチな孫よ……俺のこと忘れるなよ』

ジョセフ『また会おう！ワシの事が嫌いじゃなければな！マヌケ面ア！』

承太郎『忘れたくてもそんなキャラクターしてねえぜ……てめーはよ。元気でな』

別れる三人。フランスでの飛行機での機中。ポルナレフさんは涙していた。

ポルナレフ『俺っていつもそうだ……。いなくなってから初めてわかるんだ……。アヴドウル……イギー……』

そこでスタッフロール。切ない終わり方だった……。ポルナレフさんの心情がよく出ていた……。ポルナレフさんは本当にアヴドウルさんとイギーの事が好きだったんだらう。

承一郎「……切ない終わり方だったな」

少しだけしんみりするリビング。次はアヴドウルさんか……

<
||
t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
||

プレイ動画を見てみよう！その⑤

今度はアヴドウルさん編だ。途中で死んでしまう人のIFのストーリーがどうなるかが楽しみだ。

場面は空港。当時の羽田は国際線をやっていないから、ここは成田空港だろう。つまり、場所はここ、千葉。

そこでホリイさんを抱き止めるジョセフさんを遠巻きで見ているアヴドウルさん。

アヴドウル『三年前に知り合ったジョースターさんの、孫に何か悪いことが起こったと聞いて、ジョースターさんと共に日本に来たのだが……』

ジョセフ『ホリイ、承太郎の事じゃが、確かに悪霊と聞いたのか？』

ホリイ『そうよ、得体の知れない悪霊にとりつかれたって……』

ジョセフ『よし、承太郎に会いに行こう。おい、アヴドウル！』

アヴドウル『では、急ぎましょう……』

ここから始まると言うことは、最初の敵は……

第1話 裁くのは誰だ！

やっぱり承太郎さんか。デモは承太郎さんのストーリーと全く同じだ。勝利した後

も全く同じ。特筆することはなにもない。

ちなみにプレイヤーはアヴドウルさんの転生である三浦さんの事。結構たどたどしいプレイだ。

あの三浦さんのイメージだと確かにゲームをやるような人には見えないしな。恐らくは大半の女子と同じように携帯ソシャゲーくらいしかやらないのだろう。

第2話 誇り高き騎士

次はポルナレフさんだ。ここもポルナレフさんの物語で見たデモと変わらない。せいぜい返り討ちにする場面がなく、最初からポルナレフさんが倒れているところぐらいしか変わらない。

そしてここで全てのアヴドウルさんの技が解ったので解説しよう。

『クロスファイヤーハリケーン』。アヴドウルさんの代表的な技だ。♀の形をした炎を飛び道具として発射する。ただし、一発だけ。

『ファイヤーウォール』。昇龍拳のようにマジシャンズ・レッドが炎を纏って飛び上がる対空技だ。三浦さんも使っていた技だな。八幡は三人チームの格闘ゲーム、『THE KING OF FIGHTERS』の主人公の草薙京というキャラが使う『鬼焼き』にそっくりだと言っていたが、僕はそのKOFをよく知らないからわからない。材木座君が昨日言っていたことによれば当時のCAPCOMとSNKはお互いパクりパクられ

の間柄だったらしい。今はSNKという会社はなくなったようだが。

『炎の探知機』。ケニーGを察知した技だ。炎の車輪のような物がフワフワと浮いて滞空している。対戦相手にとっては邪魔だろう。トラップ技だな。

『ファイヤーイーグル』。空中専門技だ。一旦空中で止まり、そして斜め上から急降下して蹴りを放つ技だ。ここでもSNKという会社の技にそっくりな物があるらしい。仗助さんの今の髪型にそっくりなキャラだとか……。どうでも良い情報だな。

『地獄の轟火』。投げ技だ。相手の首を掴み、炎を爆発させる。またもや草薙京の名前が出てきた。『琴月・陽』？CAPCOM：パクリすぎじゃあないか？後で聞いたところによると、SNKは倒産直前にCAPCOMと共同で『CAPCOM VS SNK』というほとんどストリートファイターVSザ キング オブ ファイターズというコラボをやったのだとか。『KOSF』？それは本城淳の別作品だ！

次にスーパーコンボ

『クロスファイヤー・ハリケーン・スペシャル』。前方に画面半分ほどを埋め尽くす程大量に撃ち出されるクロスファイヤー・ハリケーン。見た目だけでも凄まじさがわかる。『ナパーム・ボム』。三浦さんが『バーニング・ファイヤー』として使う炎の爆発を前方から画面端まで順番に飛ばす技だ。

アヴドウルさんのキャラクターは強い。必殺技に隙がない。三浦さんの足りない腕

をアヴドウルさんのキャラ性能がカバーしている。

ホルホースもこれだけ性能が良ければ苦勞はしなかったのに……。

第3話 恨みの傷を持つ男

デーボだな。

デーボ『うけけけけ』

アヴドウル『貴様! 確か一度だけ見たことが……! その顔の傷は……殺し屋デーボ!』

え? デモはこれだけ? 史実と違う部分は結構雑だなあ。

アヴドウル『D I O め……いったい何人の暗殺者を雇っているんだ……』

第4話 砂漠を走る刺客の水

ンドウール戦。ここも特に他の人と変わらない。途中で倒れているアヴドウルさんがいないくらいだ。

第5話 恐怖の女教皇

ミドラー戦。

ミドラー『……』

アヴドウル『あの女、怪しいぞ』

ミドラーはただ立っているだけだ。確かにほとんど裸みたいな格好をして立っているので怪しいと言えば怪しいのだが。

いきなり地面からブルドーザーのシャベルが沸いて出てくる。

アヴドウル『やはり……：新車のスタンド使いか！』

終了後

アヴドウル『女とはいえ、油断できんな』

本当に雑に淡々と……：この辺りが限界だったのか？シナリオスタッフ。

第6話 心を奪う美しき名刀

チャカ『モハメド・アブドウルだな？お前の命を頂く』

アヴドウル『我がスタンド『マジシャンズ・レッド』の炎で焼ききつてくれる！』

確かにアヌビス神とマジシャンズ・レッドではマジシャンズ・レッドの方が相性良いだろう。

勝利後。

アヴドウル『刀がスタンドの敵とは、私でさえ知れない敵がいったい何人いるんだ！』

いや、僕も含めてスタンドは多種多様だと思う。アルカナタロットカードや9英神だけかすべてじゃあないですよ？アヴドウルさん。

第7話 亜空のしよきヴアニラ・アイス

ついにここまで来た。どうなるんだ？史実のアヴドウルさんはポルナレフさんのストリーでもあつたようにここで死んでしまう。突然現れるクリーム。

アヴドウル『!??ポルナレフ、イギーッ!危ない!』

史実ではここで呑み込まれてしまうアヴドウルさんだが、このストーリーでは生き残った。

ヴァニラ・アイス『惜しかった。今度こそお前達を暗黒空間に吹っ飛ばしてやる』

アヴドウル『な、何だこいつは!いきなり現れた!』

そして対戦が始まるのだが、三浦さんの奮闘はここまでだった。今度は代わりに材木座君が始めるらしい。そして相変わらずの技量でヴァニラアイスを撃破。

終了後のデモはポルナレフさんのデモと同じだ。イギーが死ぬところまで……。そしてアヴドウルさんが炎でヴァニラアイスを燃やす。

アヴドウル『吸血鬼だったとはな……』

ポルナレフさんとの違いはここでイギーの魂が上っていくシーンが無かったことだ。

アヴドウルさん:あんたがイギーを連れてきたんだろ…。そして、D I Oの棺前。

先程まで無かったアヴドウルさんの驚く表情が追加されたくらいで内容は同じのデモが流れる。

最終話 D I Oの世界

場所はジョセフさんとD I Oが戦った大通り。

アヴドウル『D I O!』

D I O 『フン、アヴドウル。お前にこの私が倒せるのか?』

アヴドウル 『私はお前を倒す為にこの旅をしてきたのだ!』

D I O 『良かろう。やってみろ!』

史実ではあり得なかつた戦いだ。エンディングではどうなるのか?

アヴドウル 『終わりだ…D I O!』

D I O 『死ね!アヴドウル!』

アヴドウルさんはクロスファイヤー・ハリケーン・スペシャルでD I Oをバラバラにして倒す。

D I O 『バカな!?このD I Oが!』

アヴドウル 『終わった…やっとな』

そして夜の街。ここまで空港のシーンがあつたが無くなっている。その場面を見たかつただけだな…。無いものは仕方ないか。

ナレーション 『D I Oを倒したアヴドウルは彼の占いの店があるハングリーリに戻つていた』

アヴドウル 『このスークに戻ってくるのも久し振りだな。また占いが出来るとは……早速占つてみるか』

ここで二枚のカードが裏返しで出てくる。最後の最後でプレイヤーが選択するのか。

アヴドウル『さて……右か左か……』

材木座君は左を選んだらしい。そのカードは……

『世界』のカード。……ええ？

アヴドウル『ザ・ワールド!ま、まさか……そんな!』

D I O『ふふふ……久し振りだな。アヴドウル』

スタツフロール。

………意外すぎて言葉がでない。

仗助「やっぱりそういう反応だよな?俺達も…八幡自身もアングリと口を開けて固まっていたからよお」

承一郎「いや……だつて確かに死にましたよね?D I Oは」

八幡「だよなあ……ホントにどうやって生きていたんだろうな?」

承一郎「じゃあもう一枚のカードは……」

八幡「俺達も気になつてもう一度三浦にアヴドウル編をやつて貰つたんだよ」

八幡が言つたように三浦さんが操るアヴドウルさんのストーリーがもう一度流れる。

二度目ということもあつて今度は三浦さんもヴァニラアイスに敗れる事はなく、D I

Oを撃破した。

そしてあの選択肢。三浦さんはまたも左のカードを選択する。ランダムだったよう

で、今度は魔術師のカードが出てきた。

アヴドウル『よし、明日から店を再開しよう』

スタツフロール。

……………。(。D。)ポカーン

それだけ!?期待していたのに中身はそれだけ!?この肩透かし感は何なんだ!?

一度見たことがある八幡達はニヤニヤしている。相変わらず性格が悪いな!知っていたなら口で言えばいいだろ!

八幡「いやあ、これで良いんだよ。次の花京院と裏花京院は結構シヨツキングだからな。一色の義母さんは見ない方が良いとまであるんですが……」

どういふストーリーなんだ!?嫌な予感がするが…。

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

プレイ動画を見てみよう!その⑥

八幡「良いな? 覚悟が必要だぞ? 色々とな。覚悟は出来ているか?」

承一郎「僕は出来ている。始めてくれ」

いろは母「私も……典明くんのストーリーを見てみたい」

ここまで念を押すんだ。何かあるのだろう。プレイヤーは花京院さんの転生、海老名さんだ。

オープニング

花京院『それはかつて、エジプト・ナイルを旅行していたときの事だった。その男、DIOはこう言ってきた』

DIO『君は普通の人間にはない特別な能力を持っているそうだね。その能力を私の為に使わないか?』

花京院『僕がヤツを本当に恐ろしいと思ったのはその時だった』

DIO『そんなに怖がらなくても良いじゃないか。安心しろよ花京院。友達になろう……』

第1話 DIOの呪縛

このタイトルコールは……影D I O!

いきなり度肝を抜かれた! 昼間はラバーソールに集中して見てなかったが、いきなり影D I Oとは……

影D I O『1つ君の力を見せてもらいたいのだが』

花京院『な、何?!』

影D I O『どれ……お手合わせ願おうか』

対戦が始まった。そして二度目の度肝抜き。

それは海老名さんのゲームの腕前だ。まるでT A Sを見ているかのように完璧な動作。完璧な回避に完璧なガード。それどころか舐めプをしている!

僕があれだけ苦勞した影D I Oをパーフェクトで討ち取るなんて! しかもスーパーコンボで確実にとどめを刺しているサーブミスぶり! そこに痺れる憧れる!

影D I O『さすがは私が見込んだ男だ。その力ますます私の為に使って貰いたい』

花京院『なに?! 試していたのか! 僕を!』

影D I O『私のしもべとなり、承太郎を始末してくれるな? 花京院』

影D I Oは時を止め、花京院さんに肉の芽を植え付ける。ポルナレフさんの例があるからここは史実と変わらないんだろうな。

花京院『うわあああああ……D I O……様……。忠誠を……。違い……。ます』

いろは母「ハチ君?いろはとの婚約……破棄して良いかしら?」

八幡&いろは「それは困るうううう!」

八幡、ざまあ!

第2話 裁くのは誰だ!

承太郎『こ、これは……てめーがやったのか』

花京院『承太郎……貴様を殺す』

ん?ここで確か。ここで花京院さんの技を紹介。

『エメラルド・スプラッシュ』。エメラルドの散弾を撃ち込む花京院さんの代名詞とも言える技だ。いろはさんのエメラルド・ストライクで僕は結構見慣れている。

『タイラップスネーク』。これは後で……

『法王の結界』。その場で雲の巣のようなものを作り出す据え置き技だが、しばらくすると消えてしまう。海老名さんはこの技を器用に使ってコンボに繋げるといふ離れ業をやる。

スーパーコンボ

『半径20メートルの法王の結界』。名前に反してただの強化版のエメラルド・スプラッシュだ。今の海老名さんの『ハイエメラルド・スプラッシュ』はこれに近い。このゲームを今のバージョンで作られた時、海老名さんのキャラクターはこれがたあの必殺技に

？ゲージの消費なしでスーパコンボ級をやられたら隙がないじゃあないか！

『インディーアームズ』。ハイエロフアントを紐状にし、その触手を任意で動かす技だ。ホルホースを使った僕にはわかるが、その操作は難しいはずなのに、海老名さんは器用に連続ヒットさせる。

『お仕置きの時間だ』。ハイエロフアントがゆっくりと相手に接近させ、掴んだ後は小さくなって相手の耳に入り込む『ラバーズ』のような技だ。『瞬獄殺』と呼ばれるタイプの技らしい。ガード不能の移動投げなのだとか。

さあ、何でタイラップスネークを後回しにしたかと言えば……昼間にも見た嫌な情景に関係する。

タイラップスネークはハイエロフアントを伸ばし、ヒットすると相手を縛り上げて行動不能にする技だ。ここまで言えば昼の事を覚えている人はわかるだろう。ラバーソールも似たような技を使っていた。

海老名さんはタイラップスネークで承太郎を縛り上げ、本体を接近させる。そして密着させたかと思ったら……

花京院『レロレロレロレロ』

挑発。見ようによつてはディープキス！

海老名『承花！キマシタワー！』

度肝を抜かれた第3弾!前世の自分を使ってお腐れプレイ!安定の海老名さん!その腐女子ぶりに痺れぬ!憧れぬ!その舐めプぶりにも痺れぬ!憧れぬ!

それでいてパーフェクトで勝つんだからホントに世の中間違っている!そちらのタイトル的には『やはり海老名姫菜のゲームスタイルはまちがっている。』!

ハア……ハア……疲れた……。おぞましいものを見てしまった。

見れば初めてこのシーンを見た人は顔を青くさせて固まっている。忘れよう……恐らく三浦さんか徐倫さんがツツコミを入れただろうし……

それではデモのレポを。

花京院『負けた方が悪なのだ』

承太郎『なにっ!?じゃあやつぱりてめえの事じゃねえか』

スター・プラチナを出してしたま花京院さんを殴る承太郎さん。

承太郎『オラオラ!さばくのは俺のスタンドだ!オラオラオラララ! (バキバキバキ!) オララララオラ (ドコドコドド)!』

効果音、すごすぎる……これ、骨が折れてるんじゃないのか?生きてますよね?花京院さん。

そこからは承太郎さんのデモと同じだ。何故か承太郎さんがその場で肉の芽を抜き、花京院さんが仲間になる。

第3話 恨みの傷を持つ男

花京院『ポルナレフの部屋で大きな物音がした！ジョースターさんに知らせなければ！』

デーボ『うけけけ』

花京院『て、敵か！お前だな！？ポルナレフを襲ったのは！』

ここも海老名さんは問題なくプレイ。エポニー・デビルのフライングアタックをわざと股間に受けているとしか思えない場面以外は。海老名さん！

ちなみにここまで全てスーパーコンボでフィニッシュしている。

花京院『ホテルにまで刺客が襲ってくるとは……』

お楽しみに見えたのは僕だけかな？

第4話 砂漠を走る刺客の水

ここは誰でも変わらない。本来はここで花京院さんは再起不能になって一時的に離脱する筈なんだけどね？

ここでもわざわざ海老名さんはスーパーコンボでフィニッシュ。ワンパンチすればンドゥールは倒せるのに……その執拗さに痺れぬ！憧れぬう！前世で再起不能にされたことを実は怒っているのかも？

第5話 恐怖の女教皇

仲間が集まっている中、花京院さんだけがいない。

ポルナレフ『おせえな。花京院の奴』

ミドラー『ということは今、花京院は一人でいるな? チャンス!』

そして花京院さんを見つけるミドラー。

ミドラー『見つけたぞ花京院! お前は私のスタンドですりつぶす!』

花京院『なに?! この女も敵か!』

終了後のデモ。

ジョセフ『大丈夫か? 花京院』

花京院『ええ、大丈夫です』

ここまでは今までと同じ。ところが次のタイトルコールが出る直前に、ここで今まで起きなかった事が発生した。

ダーン!

花京院の顔がドアップになり、『新手のスタンド使いか!』と出てくる演出。

番外編 夢のDEATH13

乱入戦!?! 思い出してみよう。ここまで海老名さんは……

1, わざと食らった場面以外はほとんどパーフェクト

2, ラウンドを落としていない

3、全てスーパーコンボでフィニッシュしている

このどれかがデス13乱入の条件なのだろう。

徐倫「ここだけはあたしがやったのよね」

承一郎「何故ですか？」

徐倫「こいつが……こいつがウエザーとFFを殺したからよ」

あれ？何か違うな。僕の世界では二人ともプツチによって殺された筈だ。もつとも、この世界は僕の介入があったのか、それとも八幡達が動いていたのかはわからないが、歴史が狂ってマニツシュが二人をやったそうさ。

途中デモはなし。これまで見なかった敵の登場には新鮮味があった。マニツシュを出せる程の上級者用に作られた乱入戦。中ボス並みにデス13は強かった。

第6話 恐ろしき影

何故かアレツシーの前で倒れているポルナレフさん。

アレツシー『次は誰を……』

花京院『ポルナレフ！どうした!?!』

アレツシー『(ま、まずい！花京院だ！)こ、この方が倒れていたの……』

花京院『貴様！怪しいぞ！敵か!』

これ、誤魔化し方が雑だよな。誰でも気が付くと思うぞ？

アレッシー『ちくしょう!どんな卑怯な手を使ってでも勝つ!』

……逆に卑怯じゃない手段でアレッシーが敵に勝つところを見てみたいものだ。

勝利後

花京院『ポルナレフ!大丈夫か!』

ポルナレフ『ああ。突然後ろから襲われたんだ。サンキュ、花京院』

ポルナレフさんなら『メルシー、花京院』のような気がするのは僕だけかな?

第7話 亜空のしよきヴァニラ、アイス

ここは承太郎さんやジョセフさんと同じデモが流れる。勝利後。

ヴァニラ・アイス『……………』

花京院『こいつ……………』

花京院さんはエメラルド・スプラッシュでヴァニラ・アイスを撃破する。その後は再

び承太郎さんと同じデモ。

ここまでは何も問題はない。

最終話 DIOの世界

DIO『ぬう!これは花京院のハイエロファント!』

花京院『くらえ!DIO!ハイエロファントの結界を!』

DIO『マヌケが…。知るが良い。我がザ・ワールドの真の能力を!』

問題があるとすればここ。史実で花京院さんが死ぬ場面だ。

しかし普通に対戦が始まり、海老名さんはパーフェクトでD I Oを撃破する。そしてエンディング。

花京院『D I O！僕は二度と負けない！』

D I O『ハア……ハア……死ね！花京院！』

それをエメラルド・スプラッシュでD I Oを殺す花京院さん。……普通だよな。どこにシヨッキングな場面があるんだ？

花京院『恐ろしい奴だった……D I O……ついに倒したぞ！……うっ！』

……なんだ？今の「うっ！」は！

ナレーション『D I Oを倒した花京院は日本に向かう飛行機の中にいた』

……嫌な予感がする。

花京院『うっ！』

まただ……まさか……

いろは「お母さん！辛いなら見ないで！」

いろは母「……」

この反応……やめろ、やめてくれ……。ゲームでそれは無いだろ！

承太郎『どうした？花京院、まさかケガを！』

花京院『い、いや……大丈夫だ……』

花京院『ア：アヴドウルさん……イギー……安らかに……眠って下さい……。すべて……すべて終わりましたから……（ど……どうやら僕も……そちらに行かなければならないようです……）』

確定的だ……。僕やこの結末を知らない人達から力が抜けるのがわかる。

承太郎『大丈夫か？花京院。そろそろ日本に着くぜ。……ツ!?か、花京院！

……花京院ツ!』

スタッフロール。

いろは母「典明くん!どうして!どうして救われない形で終わるの!何でスタッフは典明くんを!ううう……」

一色さんが号泣する。わかる。CAPCOM……これは無いだろ。海老名さんはヴァニラ・アイスにもDIOにもパーフェクトで勝ったのに……どうして……。

八幡が言ったようにこれはショッキングだ。覚悟しろと言っていたのはそういうことか……。報われない……。これではほとんど史実……。いや、承太郎さんがザ・ワールドの能力に目覚めなかつただけ尚悪い……。

八幡「……裏花京院にも期待するなよ……裏花京院はもつとたちが悪いからな……」

どういふ事だらうか……。

プレイ動画を見てみよう!その⑦

次は裏花京院さんのストーリー。『未来への遺産』での話だから中間のデモはない。ならいつもの如く自分達で想像のストーリーを演技するのだろうか……?」

いろは「ごめんなさい。承一郎先輩。この裏典明おじさんのストーリーではそのおふざけはできません」

いろはさんが拒否してきた。何故だろうか?

八幡「見てればわかるよ。CAPCOMめ……」

確かに聞いているだけではわからない。

オープニング

サングラスをかけた花京院さんが映っている。

ナレーション『エジプトへの旅の途中、敵のスタンド使いの攻撃により目を負傷した花京院は病院に一人残り、傷の治療をしていた。そこに以前倒したはずの夢のスタンド、デス13が花京院を夢の世界へと引きずり込み、味方の承太郎達が次々に襲ってきた』

こ、これは……。

八幡「これでもやるか？あの脳内デモ」

承一郎「……………いや、これは流石にシニール過ぎる…さすがに無理だ…………」

ここであのおふぎけはさすがにできない。

完全な創作ならば（人としてどうなのかは別として）それでも出来るだろう。物語として「これはこれではあり」と思えるかもしれない。だが、これは僕達にとつては史実であり、登場している人物は実在した人物達だ。

ましてやこの世界の場合は当の花京院さんが海老名姫菜として実在している。これをやっている海老名さんはどんな心境だったのだろうか。

八幡が表の花京院さんよりも裏の花京院さんの方がもつとたちが悪いと言っていた理由がわかった…………

夢の中で仲間たちに襲われる悪夢…………。そんなものをあのおふぎけでデモをやることは出来ない。想像したくもない！そうだろう？ジョニイ…………

ジョニイ『…………ああ。海老名の気持ちを考えると尚更にな』

第1話 戦いの年季

まずはジョセフさん。海老名さんは相変わらずの舐めプ&お腐れプレイをしているが…………。

徐倫「空元気だったわ。腐ったプレイも見ていて痛々しかった」

海老名さん……。裏花京院さんの性能は見た目こそ変わらないが全ての威力が弱体化している。

酷かったのは新しく追加されたスーパーコンボ。

『真・半径20メートルのエメラルド・スプラッシュ』だ。花京院さんが画面上空へと消えて行ったと思ったら、画面全体にハイエロフアートの結界が張られる。そして背景に移動した花京院さんからエメラルド・スプラッシュが放たれる。

画面全体が攻撃範囲で発現までそれほどの時間はかからない。どこも酷いところはないように思えるだろうが酷いのはその威力だ。とても威力が弱い!下手をしたらノーマル花京院さんの必殺技の方が威力がある!

演出以外の何者でもない!これは酷い!キャラクターの名前に反して弱くなっているとはどういうことなんだ!

八幡 「酷いだろ?色々と……」

承一郎 「ああ……まさかこれほどとは……」

第2話 誇り高き騎士

ポルナレフさん

第3話 炎の魔術師

アヴドウルさん

第4話 変幻自在の砂の猛獣

イギー

第5話 恐怖の女教皇

ミドラー

当時としてはミドラーは敵だったから何でも無いとは思う。だが、この世界ではミドラーは味方だ。この世界のジオルノ兄さんが僕の世界にやって来たとき、ミドラーは海老名さんと一緒に別の世界へ行っていた……。なんたる偶然による皮肉なのだろう。

第6話 裁くのは誰だ！

承太郎さん

見ているのが辛くなってきた。

第7話 亜空のしよきヴァニラ・アイス

ヴァニラ・アイス？ここでマニツシユを倒して合流出来たと思って良いのだろうか？
だが、ここまで来ても八幡達の顔色は変わらない。

最終話 D I Oの世界

何故だ……。まだ八幡達の表情は暗いままだ……。エンディングを迎えた時にでさえ
……。

エンディング

DI O 『ザ・ワールド!これが……『世界』だ……。もつとも、時間の止まっているお前には……見えもせず、感じも出来ないだろうが』

こ、これは……この場面を僕は知っている!夢で……初めてジョニイを感じた時に見た光景!だとしたら……

止める!それを従妹の一色さんにみせるのか!見ると一色さんは青ざめて見ている。見ない方がよい!早く自分の家に帰るんだ!

このシーンは……このシーンはあ!このシーンは史実における花京院の最期なんだあ!

DI O 『死ねイ!花京院ツ!お前は自分が死んだことさえ気付いていない……』

八幡「く……前世の所業とはいえ……ぐ……すいません!義母さん!これは本当にあった事なんです!俺が……俺の前世が……あなたの従兄を殺してしまいました!」

いろは母「ハチ君……」

八幡が一色さんの前で土下座する。八幡にとってみても辛いだろうな……この結末は。全て事実なのだから。

ジョセフ『え!?これはツ!バカな!?いきなり吹っ飛ばされている!』

DI O 『ジョセフ。次はお前だ』

ジョセフ『DI O ツ!』

D I O 『お前は血を吸って殺すと予告しよう』

花京院 『さ……最後の……エメラルド・スプラッシュ！（メ、メッセージです………
ジョースターさん）』

ナレーション 『花京院典昭、死亡。彼が死んだ後、承太郎達は激しい死闘の末、宿敵 D I O を倒したのであった。D I O の死体を朝日にあて、この戦いに終わりを告げた時、スピードワゴン財団のヘリからの無線連絡が虚しく響いた』

パイロット 『花京院典明は死亡。ヘリコプターにて遺体輸送中』

財団職員 『了解』

スタツフロール

いろは母 「これが……典明くんの本当の最期……」

報われない！なんて報われないエンディング！苦労してエンディングにたどり着いた果てが史実エンド！CAPCOMは花京院さんに恨みでもあるのか！

承一郎 「八幡がふざけられない…裏の花京院さんの方がもつと酷いと言った理由がわかった……これは酷すぎる」

八幡 「……………」

いろは母 「ハチ君……顔をあげて」

八幡 「義母さん……………」

いろは母「D I Oのやったことは許せない……だけどもう、ハチ君はD I Oではないんでしょ?」

八幡「……………はい」

いろは母「でも、典明くんだった姫菜ちゃんはあなたの事を許している以上は、わたしに何か言う事はないわ。それに、もうハチ君は散々苦しんで来たのよね? D I Oだった事を……だったら、ウルフスという存在からいろはや姫菜ちゃんを助けてあげて……。そして、あなたも絶対に帰って来るのよ……千葉村みたいな事になったら許さないわ。それがわたしや花京院のおじさん達への罪滅ぼし……。わかったわね?」

八幡「……………はい。すみません……………」

八幡はそこで泣いてしまう。

これは過去に起こった事。それはどんなスタンドでも変えることは出来ない。起きた事実を変えてはならない。犯した罪を償えるのは……未来で示すしかない。

さて、次はイギーか……。どうか後味の良い結末でありますように…。

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

プレイ動画を見てみよう！その⑧

お風呂に入ること兼ねて休憩を入れて次のプレイ。八幡のパジャマを借り、僕はリビングに戻る。

一旦休憩を挟んだ事で重かった場の空気が緩和されたように思える。

八幡の両親はまだいたが、一色さん夫婦は帰ったみたいだ。

八幡「イギー編はそうでもないが、敵のスタンド使いのストーリーは全滅の最後だからな。さすがに見せられねえよ」

そうだな。花京院さんのラストはシユール過ぎた。気を取り直してイギーのプレイ動画だ。

プレイヤーはイギーの転生、サブレの飼い主である由比ヶ浜さん。

ペットシヨップ「クル？」

小町「ペツちゃんのストーリーはまだやってないの。ペツちゃんは明日、小町がやるからね？」

ペットシヨップ「クエエエ……………」

八幡がやらない事を残念がっているのだろうか、ペットシヨップの鳴き声が少し弱く

なった。D I Oが二人いるからなあ……

オープニング

ナレーション『ニューヨークの犬狩りにも捕まらなかつたイギーをある日アヴドウルが見つけた』

アヴドウル『こいつがスタンドを使うという犬か……。ひよつとしたら強力な助っ人になるかも……』

これで連れ去られたイギーはさぞかし迷惑だっただろうな。史実では最終的には死んでしまうわけだし。

ナレーション『アヴドウルはやつとの事でイギーを捕まえた。そしてD I Oを倒すための旅をしていた承太郎達と、イギーは合流することになった』

第1話 誇り高き騎士

砂漠で集まる承太郎さん達。そこに憎たらしい顔でクチャクチャとガムを噛んでいるイギーが合流する。

承太郎『あれが……新しい仲間か?』

花京院『まさか……!?!』

ポルナレフ『おいおい!こんな犬が仲間だってえ?!?!』

ポルナレフさんの叫びもわからなくはない。隼や猫も戦力として扱っているアーシ

스가むしろ異常だろう。

アヴドウル『近付くな！お前には勝てん！』

イギーがポルナレフさんの顔にへばりつく。

ポルナレフ『おおおおおああああ！この野郎ツ！こらしめてやる！』

これ、ただのケンカ……。由比ヶ浜さんのプレイは三浦さんと同じだ。攻撃が当たり辛いイギーの小さい体と、反して大きなザ・フルのごり押しで何とかなっている。

当たり判定の大きい必殺技に助けられている感じが否めない。早速ラウンドを落とすしてしまいつつも、何とかクリア。

第2話 炎の魔術師

デモがなく、そのまま次の対戦へ。

ポルナレフ『チキシヨー……』

負けて項垂れるポルナレフさんの顔にまたへばり付くイギー。

ポルナレフ『おわっ！ひっひー！おい！誰か助けて！この犬をどけてくれー！』

承太郎『砂のスタンドか……。シンプルなやつほど強い。俺にも殴れるかどうか

……』

確かにシンプルなやつほど強い。ザ・フルやマジシャンズ・レッドはその典型だろう。

アヴドウル『どれ、ポルナレフを助けるか』

アヴドウルさんがコーヒーガムを取り出す。

アヴドウル『イギーはコーヒー味のチューインガムに目がなくてな……』

イギー『ワンワンワン!』

箱ごと奪うイギー。

アヴドウル『あつ!しまった!箱を取られてしまった!こいつは躰が必要だな……』

ここで戦いつて……躰とかのレベルじゃあない!ここでイギーの技を紹介。

『サンドクラツシュ』。ザ・フルでの突進だ。見た目の大きさに反してスピードが早い。咄嗟に反応するのが難しかった。

『サンドアタック』。ザ・フルが斜め上にジャンプして迎撃をする技だ。サマーソルト……という奴なのだろうか?そんな感じの対空技だ。

『サンドクラツチ』。先程からポルナレフさんに対してやっていた投げ技だ。ザ・フルが相手の足を『やつちやつてください!イギーさん!』と言わんばかりに掴み、イギーが顔にへばり付く。そしておならをプウとすると下品な技だ。ダメージがなかったとしてもこれは食らいたくない。

『サンドマジック』。イギーが砂を纏って地面に潜り、別の場所から現れる技だ。ワープ技で攻撃力はない。

スーパーコンボ

『ビッグサンドウェーブ』。砂が波の形になり、イギーがサーフィンよろしく波乗りをして素早く波で攻撃する技だ。シンプル故にかなり強いだろう。

『サンドストーム』。花京院さんの『お仕置きの時間だ』と同じく瞬獄殺タイプの移動投げだ。捕まえ、顔にへばり付く演出まではサンドクラッチと同じだが、その後が違う。画面がアナログテレビの砂嵐よろしくざらつき、その中でヒットエフェクトが発生する。砂嵐を起こしてダメージを与えていると見るべきだろうか？

ちなみに瞬獄殺コマンドというのを確かめてみる。

『弱』『弱』『↓』『中』『強』

十字キー『←↓?↓+弱』との組み合わせでやる格ゲーが普通のコマンドとしては異例のコマンドだ。承太郎さんの時を止めたり、先程の花京院さんの技もこのコマンドだったりする。海老名さんは任意で出していたようだが、通常の格ゲープレイヤーはこれが苦手らしいのだが、ガチャガチャ適当に操作していたという由比ヶ浜さんは奇跡的にこの技を（意図せず偶然に）発動させたらしい。偶然ってすごい。

勝利後

アヴドウル『誰にも心を許さない……こんな奴、しつけようがない』

サブレはあれで結構なついている方らしい。ミニチュアダックスフンドだからか？

イギー『クンクンクン……』

ンドウール『ジョースター達がいるな……聞こえる聞こえる……』

ここでンドウールの襲撃か。

第3話 砂漠を走る刺客の水

ここは他のキャラと変わらない。イギーの出会いが削られたことくらいだろう。面白かったのはクリア後にイギーのセリフが出てきた事だ。

イギー『アウオオオー! (トラブルはごめんだぜ。アバヨ!)』

たったこれだけだが、犬のセリフと言うのが中々面白かった。

第4話 恐怖の女教皇

ミドラー『こんなくそ犬! 串刺しにしてやるわ!』

イギー『フーツ!』(かかってきな!)

第5話 心を奪う美しき名刀

チャカ『こんな犬ごときがD I O様にたてつくのか!』

イギー『ガルルルル!』

アヌビス神……最後はイギーに躓いてナイル川に沈んだんだろ……。陽乃さんはそれで犬嫌いに……。いや、あれはむしろ恐怖症と言った方が正しいか?

第6話 恐ろしき影

アレツシー『承太郎はどここの部屋だ!?!』

イギー『アギ?』（誰だコイツ?）

アレツシー『なんだこの犬! そういやこいつも承太郎達の仲間だったな。オットオアアア! 逃がさねえぜ!』

何だよその変な掛け声は? そしてイギーの子供バージョン! どうなるのかと思いきや、最初に見せていたクチャクチャガムを噛んでいるバカ犬モードになった。

どうなるのか楽しみにしていたのに……。

第7話 亜空のしろうきヴァニラ・アイス

ついに来た! イギーの鬼門! ヴァニラ・アイス!

ここで由比ヶ浜さんから材木座さんへとプレイを交代したらしい。動きが完全に違う。由比ヶ浜さんの腕では勝てないと自分で判断したのだろうか?

八幡「元々最初から由比ヶ浜は材木座にやらせようと思っていたらしいが、サブレの為にと頑張ってみてはどうだと言われてここまで頑張ったんだ。が、さすがに仗助とかが負けたヴァニラ・アイスは無理だと判断したらしい。頑張った方じゃね?」

確かに。

そしてデモでは……。

アヴドウル『ボルナレフ! イギー! 危ない!』

ヴァニラ・アイス 『アヴドウルは粉微塵になって死んだ』

イギー 『ハア……ハア……』

ヴァニラ・アイス 『このヴァニラアイスの暗黒空間にばら蒔いてやる!』

イギー 『ギャウウ!』(やらなきややられる!)

デモとは裏腹に内容は材木座さん無双だった。プレイレベルは海老名さんより少し劣るくらいかな? 勝利後。

ヴァニラアイス 『……………』

イギー 『ギャウウ!』(地獄でやってろ!)

ヴァニラ・アイス 『ぐああああ! 貴様なんぞにー!』

突進技でヴァニラ・アイスを倒すイギー。

ポルナレフ 『やったなイギー! アヴドウルのかたきを取ったぜ!』

ポルナレフさんえ……。そこからはお馴染みヌケサクからのD I O登場デモ。

最終話 D I Oの世界

D I O 『フンツ! ポルナレフか……貴様から始末してやる』

ポルナレフ 『アヴドウルは俺のために死んだ! 今度は逃げねーぜ! D I O!』

D I O 『私に勝てるっても? ……ん?』

ここでイギーが登場!

イギー『ギャウウウウウ！』（俺が戦うぜ！）

D I O 『フンツ！クソ犬め、お前のようなカスまでもが私に……貴様から殺す！』

これも史実ではあり得なかつた戦いだ。手に汗を握る！どんな結末なのか……。

エンディング

イギー『ガルルルル！』（こいつ！不死身か!?)

D I O 『ハア……ハア……死ね！クソ犬が！』

イギー『ガアアアアア！』（くたばりやがれ！）

イギーのサンドクラッシュがD I Oにヒット。いつも通りここでD I Oが死ぬ。もう慣れたな、この光景。

イギー『ハア……ハア……』

ポルナレフ『イギー……ついにやったな！』

さあ、どうなる！花京院さんのようなラストは御免だぞ！でも八幡達の様子ではそれは無さそうだな。特に何も言ってきていないし。

ナレーション『D I Oを倒したイギーはスピードワゴン財団のはからいで、ニューヨークに戻った』

画面ではアクビをしているイギーが映っている。

イギー『ふわ……』

次にノラ犬達に囲まれ、玉乗りをして遊んでいるイギーの姿が。

ナレーション『再びノラ犬の帝王として……その後気ままに贅沢をして、良い女と恋をして何のトラブルもない人生を送っていた』

イギーはとても幸せそうだ。IFとは言え、良かった良かった。

ナレーション『……………か、どうかはわからない』

スタツフロール

は?そこはハッキリさせようよ!どうせifなんだからさ!あつたかも知れない未来だろ!?

バッドエンドはハッキリさせて、ハッピーエンドは曖昧なのかよ!

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

プレイ動画を見てみよう！その⑨

承太郎さん達スターダスト・クルセイダースのプレイ動画を見終わり、次はDIOの刺客達のプレイ動画を見る事になった。

次はチャカというキャラ。プレイヤーは陽乃さんだ。

承一郎「チャカ…？知らない人だけど、何の暗示のスタンド使いなんだい？」

八幡「違うぞ承一郎、陽乃さんから聞いたがこいつは陽乃さんがアヌビス神だった時に体に乗っ取った男らしい」

承一郎「うーん…やっぱ覚えがない」

どうやらチャカはこの世界では死んでしまっていたようだ。こつちの世界の方も後で調べてみようかな。

オープニングデモ

刀だったアヌビス神がポツンと置かれ、ナレーションとアヌビス神のモノローグが始まる。

ナレーション『アヌビス神の本体は500年前この剣を作った刀鍛冶だった……。そして現在そのスタンドだけが生きている……。つまり本体のいないスタンド…』

うん、これは分かる。僕の亡き親友信乃の忘れ形見である村雨は彼の家に代々伝わる本体がないスタンド刀だった。

しかも村雨が持ち主と認めなければ水圧カッターが襲いかかる代物。信乃が死んだ時は無我夢中だったから忘れていたけど、よく僕を主と認めてくれたな。

アヌビス神『D I O様が博物館の倉庫の暗闇から私を引つ張り出してくれた…。あのお方はあまりに強く、俺には敵わぬスタンド。だから俺は忠誠を誓った…』

……ん？でも待てよ。

承一郎「僕が八幡達を襲う前に陽乃さんは君に襲いかかって来たんだよね？プッチが情報掴んでいたけど？」

八幡「ああ、そうだぞ。俺も同じ事思ったぞ、今だって忠誠心のかけらなんてないしな」

部下の管理をエンヤ婆に頼ってばかりいるからホル・ホースやラバーソール達に反逆ルートなんかがあるんじゃないか？

そしてチャカがアヌビス神を手にする。

ナレーション『ある日、一人の男がその刀を抜いてしまった』

アヌビス神『チャカよ、お前は私を抜いた。お前は私の本体になるのだ。私を使い、承太郎達を殺すのだ…。お前は達人だ、誰よりも強いっ！』

承一郎「さつき言つてた事とすごい矛盾生じてるけど？」

DI Oには敵わないとか言つておいて誰よりも強いって……。まあ多分チャカを操るための暗示みたいなものなのかもしれないけどね。

第1話 誇り高き騎士

最初は史実通りポルナレフさんだ。

ポルナレフ『ずいぶん肝つ玉がでかいじゃあねーか。おめーのように本体を見せて戦いを挑んでくる敵は…名乗りな』

チャカ『私はチャカ、アヌビスのスタンド使い。お前の命をもらい受ける』

ポルナレフ『ますます男っぽい敵だね。来なッ！』

男っぽいのが今では女性に転生するとは…世の中分らんな。

ここは史実通りにドンパチするようだ。

そして陽乃さんは難なくポルナレフさんを撃破。さすがは何でも卒なくこなす人。必殺技を一通り試し、スーパーコンボフィニッシュで2セット先取。肩慣らし程度つてところだろう。

特徴的なのはアヌビス神最大の特技である必殺技、「覚えたぞ」だ。

この技はジョセフさんの策士の業と同様にカウンター専用の…格ゲー用語で言う「当て身」系の技なのだが、この技が決まると「覚えたぞ」といつてツバメ返しで切り返す。

策士の業はそこで終わるのだが、「覚えたぞ」はカウンターした時の攻撃を……例えばジャンプ強攻撃を「覚えた」状態で再びジャンプ強攻撃をガードすると、チャカが光る。光った時に攻撃ボタンを押すと、それだけでカウンターが成立するようになる。

なるほど、最初に戦った際に言ってた『覚えたわ』はこれが元なのか。

そしてデモ。史実とは違い、這いつくばるポルナレフさん。

チャカ『チャリオッツの動き、パワーはしっかりと取り込んだ!一度戦って相手には、決して負けない!』

第2話 戦慄の侵入者

チャカ『貴様が花京院か、死んでもらう!』

花京院『後悔することになるぞ』

だから9英神の時は花京院は再起不能中でしょ!しかも「死んでもらう!」「後悔するぞ!」の掛け合いだけで雑だし!

承一郎「芸が細かいのか雑なのか分からないな…」

陽乃さんはここでも難なく花京院を撃破。

……それにしてもスーパコンボの次元断って技、透過能力を再現したんだとは思けど、背景をまるごと斬ってるぞ?何も無い背景までも。

次元斬るあたり大統領のスタンド撃破出来るからな?だったら生きていたら打倒大

統領の切り札になるかもしれないな。

——アメリカ、ホワイトハウス

ヴァレンタイン「——ハブシヨツ！」

唐突に鼻の奥がむず痒くなり、くしゃみをするヴァレンタイン。

ブラックモア「……スイませエン……どうなされましたか大統領、風邪でも？」

ヴァレンタインの側近の部下、ブラックモアが問いかける。

ヴァレンタイン「いや、誰かが噂をしているみたいだ」

ブラックモア「しかしながらお気をつけを。あなたはこの国を背負っていますので」

ヴァレンタイン「分かっているさ。……ところで、明日は時間を開けられないか？八幡

と承一郎君が来ているんでな」

※なお一名強制的に拉致ってきたのをここに明記する。

ブラックモア「分かりました。ならまずこの書類に目を通して下さい」ドサツ！

ブラックモアが大量の書類の山をデスクに乗せた。

ヴァレンタイン「………（絶句）」

第3話 炎の魔術師

チャカ『モハメド・アヴドウルだな？お前の命を頂く！』

ジョセフ『オーマイガツ！オーマイガツ！オーマイガツ！』

ひたすらオーマイガツ！と叫んで敗れるジョセフさん。ハッキリ言ってるさい。しかも陽乃さん上手いから対戦も山も谷もないし。

第5話 変幻自在、砂の猛獣

チャカ『こんな犬ごときがD I O様にたてつくのか！』

イギー『ガルルルル！』

ガムをクチャクチャしている可愛くないイギーにイキリ立つチャカ。シユールだな。

第6話 裁くのは誰だ！

チャカ『貴様が承太郎だな！？真つ二つにしてやるぜ！』

承太郎『野郎……』

何？承太郎さんで最終話じゃあないだと……？なら一体……。そして決着。

チャカ『フフフフ、俺は絶つ……対にい……負けなあいつ！……ん？

………何か………聞こえる』

うづくまるチャカ。……ん？

アヌビス神『お前は達人だ……お前は誰よりも強い。私を使って殺すのだ……』

チャカ『ツ！？承太郎もジョセフも死んで当然の野郎さ！誰でも良いからぶった斬って

やりたくなつたぞ！』

……んんん? どういう事……?

D I O の館へ向かうチャカ。あつ (察し)

チャカ『……………』

第7話 亜空のしよ気ヴァニラ・アイス

反逆ルートですな分かります。D I O s i d e 一発目からこれかよ……。

ヴァニラ・アイス『チャカか?』

え? 何でヴァニラ・アイスはチャカの事を知ってるの?

チャカ『ヴァニラ・アイスか……奴らを倒したことは聞いているな?』

あ、報告でも受けたのか。そう考えれば納得。

ヴァニラ・アイス『ああ、承太郎達を倒したそうだな……。だが、どうやら貴様……………!』

チャカ『その通りさ! まずはお前をぶった斬つてやるぜツ!』

そのままヴァニラ・アイスを撃破。普通にハイスペックだからな、陽乃さん。

ヴァニラ・アイス『……………ツ!』

チャカ『ウシャーッ!』

ヴァニラ・アイス『ぐああああ……貴様なんぞにー!!?』

さあ、そして最後は……?

最終話 D I O の世界

チャカ 『D I O ツ!』

D I O 『承太郎達を倒してくれたそうだな、うれしいぞ……』

背後からD I Oに斬りかかるチャカ。だがホル・ホースの時のように一瞬で背後に回る。

チャカ 『!?』

D I O 『……貴様……本気で私を斬る気か!?』

チャカ 『……ッ!?……俺は絶くく対にい負けなあいッ!』

D I O 『フン、ならばしようがない。死ぬしかないな、チャカッ!』

もう最初にアヌビス神自身が言ってた事完全に無視してるな。そしてエンディング。

チャカ 『俺は誰よりも強い!』

D I O 『ハーハー……死ねイ!チャカ!』

チャカ 『死ぬのはお前だあああ!』

『ザ・ワールド』で殴りかかるも袈裟斬りで斬られ、史実と同じような死に方をするD I O。

D I O 『バカな!?……こ……このD I Oが……このD I Oがアアアア!』

ナレーション 『D I Oとの戦いに勝ったチャカは、1人強いものを求めて旅をしてい

た……。アヌビス神がチャカに呼び掛ける』

仗助「おめえ、本城とコラボしたせいであいぶキャラ崩壊してねえか？」
仗助さんの心配を無視し、ジョニイは笑い続けた。
長い夜は、まだ続く。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

プレイ動画を見てみよう!その⑩

仗助「…そろそろ落ち着いたか？」

先程の大爆笑から、ジョニイはようやくやくという笑い終えた。そこまでドツボにくるか？

ジョニイ「ケホツ、ケホツ…大丈夫、すまない仗助さん」

八幡「しかしここまで笑うか…？」

八幡、君は人望ないんですね分かります。

ジョニイ「…さて、ボーンつとしてるならさっさと次のキャラを見ようぜ。…骨だけにな！」

ツクテーン!

ジョニイのダジャレと同時に、なんだか小気味よいドラム音が聞こえた。地獄の業火に焼かれてもらうぜ(非公式訳)

八幡「お前はどこのスケルトンだよ。てか今の音どつから鳴った？」

ジョニイ「……見てみるか？」ズオツ

そういうとジョニイは空間を出して、その中を見せた。その中には…

八幡「…骸骨部^{スカルズ}隊が楽器を弾いてる…だと…!!?」

そう、あの最強の屍生^{ゾンビ}人部隊のスカルズ達が楽器を構えているのだ。

ジョニイ「いやあ、つい暇だったからスカルズ音楽団を結成してな。オーケストラからロックまでお茶の子さいさい、『M e g a l o v a n i a』だつて完璧に演奏出来るぜ？」

エウデツデ♪アツドウツドウワドウワ♪エウデツデ♪アツドウツドウワドウワ♪

八幡「おいこれ違うぞ!!?」

どうやらコーラスの音だったらしい。

キング・クリムゾン!!?

さて、それはさておき次のキャラはカーンという男らしい。大統領が隠しキャラを強制的に登場させるチートを使ったとの事だ。T A Sまがいの事を…。S A R U^{儀式の人}?あれは人間アピールがあるだろう?

オーブニング

ナレーション『ポルナレフ達は途中で拾った刀を警察に届ける前に散髪屋に寄つていた』

え?まさかポルナレフさんアヌビス神破壊しないで床屋なんか持つてつてるの!!

?しかも承太郎さんも一緒!!?

ポルナレフ『ちよつとおやじ、この刀そつちにおいといてくれ』

散髪屋のおやじ『はい……………』

あ、オチが読めた。画面の散髪屋のおっさんの目が既にイツテるし。

ポルナレフ『な……………なんだ?!?て……………て、てめーは散髪屋の主人じゃねーのか?!?』

カーン『俺だよ、まぬけっ。アヌビスの暗示のスタンドさっ』

口悪ッ?!?今は別の意味で口が悪いけどね!

第1話 誇り高き騎士

……………誇り高き騎士(笑)の間違いじゃあないか?

八幡「承一郎、そこは考えるな」

どうやらポルナレフさんに怒られそうになったようだ。

さて、このカーン。まずは最初から抜刀している為かスタンドモードが存在していない

い。本体モードとスタンドモードの切り替えがこのゲームの売りだと思っただけだねえ。

更に言えばカーンはハッキリ言って隠しキャラにする必要あった?……………と言うくらいチャカと比べて性能が悪かったりする。

スラッとしたチャカに比べてずんぐりした見た目のカーンは攻撃力こそ重いものの、スピードは遅く、とにかく連続技に恵まれていない。

承一郎「なあ八幡、ホル・ホースやってた時から思ってたんだけどさ、このゲームな
んで隠しキャラがこんなに貧弱貧弱ウ！なんだい？」

八幡「オレも同感だよ。マジでCAPCOM何したいんだ？あとオレのセリフ取る
な」

やれやれ、隠しキャラが強いのは影DIOくらいだぞ？

チャカと共有している技は『覚えた』だけだ。他の必殺技は刀を振り回してグルグル
回る鬼骸斬。この技もクセが強い。

承一郎「しかもなぜ溜め技なんだ…これじゃあ殴ってくれと言ってるようなものだろ
うツ！」

そう、溜め技なのだ！基本的にガイルのようなキャラ以外での溜めキャラの…：：：しか
も中途半端な牽制技に溜め技は向いていない！

残る必殺技は所謂『昇龍拳』タイプの対空技。刀を使っているから『弧月斬』？うん、
上級者タイプのキャラクターだな。

ちなみにだが、ポルナレフさんのトラウマを抉る技は必殺技とは違う形で存在してい
た。

通常投げにそれはあつた。

カーン『食らえ！顎ごと剃り落としてやる！』

背後に回り込んで羽交い締めし、アヌビス神で顎をザシユザシユ斬っている!顎ごと切り落とすって過激だな!普通はそれで死んでないか!?!?

スーパーコンボは………うん、次元断のカーン版と鬼骸斬の強化版だな。

第2話 裁くのは誰だ!

おっ、次は承太郎さ…

キング・クリムゾンツ!!?

第3話 変幻自在、砂の猛獣

ん?

キング・クリム(r y

第4話 炎の魔術師

えっ?

キング・ク(r y

第5話 戦いの年季

ちよっ t

キング(r y

最終話 戦慄の侵入者

キング・クリムゾンツ!!?

おいッ！何回も時を吹き飛ばすんじゃないぞッ!!? どういう事だ作者ッ!!?

G I O G I O 『今回のタイトル：「プレイ動画を見てみよう」と書いたが…スマン、ありや嘘だ。陽乃のプレイだと完璧過ぎて面白い展開にならないから書けないんだ。完璧過ぎるとプレイ見ても面白くないって話、ありや本当なんだな』

なん…だと…!!? 書けない…だと…! 作者の文才がクラツカーのカスほどもないせいで、描写がないだと…!!?

ていうか、そんなに気軽に出ていいのか!!?

G I O G I O 『それ言ったら本城さんの方も神の声として出てるし、君に呼ばれたから出て来たんだけど?』メメタア!

そしてそのままあっけなく花京院さんが倒される。

エンディング

ナレーション 『散髪屋の心に乗っ取ったアヌビス神は、その後もD I Oの為に戦い続けていった…』

アヌビス神 『D I O様はあまりにも強く、俺には敵わぬスタンド…。だから俺は忠誠を誓った…』

そしてスタツフロールが流れた。

………は?

これってチャカカの時の最初の台詞だね? 隠しキャラでこれ? メチャクチャ白ける最後だな……。

気を取り直して次はアヌビス二刀流ポルナレフさんだ。

承一郎「あれ、これって陽乃さんが三回やる事になるんじゃないのか?」

八幡「いや、アヌナレフさんは雪乃がやったんだ。陽乃さんが挑発してな、あつけないそれに乗っちまったんだ」

承一郎「アヌナレフって……それにしてもあの姉妹、仲良いのか悪いのか分からないな」

LQ—84i (後のブレードウルフ) と戦った時は息ピッタリのコンビネーションだったらしいけど、幼少の頃に汐華家のしがらみがあったせいかな?

ナレーシヨン『エジプトへの旅の途中、ポルナレフはDIOの手下のスタンド使いと戦い勝利した。その敵が持っていた凶器の刀を手にとった……その時!』

自分の意思で刀を抜くポルナレフさん。どうやらここから史実とは異なるようだ。楽しみだな。

ポルナレフ『この刀……近くで見ると、すげえうつくしいぜ。抜いてみるか……ハッ!!!』

目付きが悪くなるポルナレフさん。あつヤバ、完全に妖刀の策にハマったな。

ポルナレフ『フフフ……抜いた剣にさわったヤツをあやつれる。このアヌビス神が承太郎を仕留める！』

第1話 裁くのは誰だ！

最初は承太郎さんだ。そこはカーンと同じくその場にいた関係かな。

徐々に慣れた感じで通常技でゴリ押しをする。まずは基本操作から覚えていく感じらしい。

承一郎「アヌポルさん、なかなか強いね」

ジョニー『溜め技が1つしか無くなったからガチャコンでも技が暴発するし、その必殺技が性能良いみたいだな』

このアヌポルさんは特に性能が強い。ゲーム自体が初心者、雪ノ下をキャラ性能がカバールしている。特にアヌビス神で斬りつけた後にチャリオッツの剣で複数切り上げ、さらに浮かせダウンを奪う必殺技は威力高いし攻撃範囲が広いしで凶悪だ。

雪ノ下さんの技術をアヌポルさんの性能で補っている感じだ。：ア○口とガ○ダムみたいだな。

第2話 変幻自在、砂の猛獣

キング・クリムゾンツ!!?

第3話 炎の魔術師

…なんかまた時が飛んだような気もするが、気にしないでおう。

雪乃さんは必殺技やスーパーコンボを使いこなし撃破。三回目でもうこれか。普通にズブの素人でここまで呑み込みが早いのはすごいぞ。

第4話 戦いの年季

そしてそのままジョセフさんを今度はキャンセルすら使いこなし撃破ツ！しかも有効な連続技を模索しながら！

もうこの姉妹怖すぎるだろ！普通だったらそんなに熟達しないから！

第5話 戦慄の侵入者

キング・クリムゾンツ!!？

第6話 恐ろしき影

…キングクリされた花京院さんは置いていて、次はまさかのアレツシー。子供にされたアヌポルさんの姿は…：刀の切れ端を持った子供？

八幡「あれ、イギーに躓いた時の子供らしいぞ」

つまり前世陽乃さんの最期の姿だったと…。

第7話 亜空のしようき ヴァニラ・アイス

キング・ク（ry

最終話 D I Oの世界

キング（ry

作者アアーローツ!!?どれだけキンクリするんだ!!?

G I O G I O 『こちとら向本城さんここの文基にしてるんだ、察せ!』メメタア!

何この恥も外聞もない開き直り!あんたもうすぐ受験だからってストレス溜まり過ぎだろ!メメタア!

そしてこのままぐだぐだしたままエンディングへ。それでいいのか……。

ナレーシヨン『全てのスタンド使いを倒し、手当たり次第戦い続けたアヌビス神は、既に暴走してしまっていた……』

アヌビス神を暴走させるの好きだな。C A O C O M。

ポルナレフ『奴らを全員、ぶった斬ってやったぜ!ワツハハハハハッ!』後、残ってる奴は……』

え?誰が残ってるの?でもすべてのスタンド使いを倒したって言ってたよな?

プレイヤーに対して襲いかかり……

ポルナレフ『てめーローだアローツ!』

そしてスタツフロールが流れた。まさかのメタエンドか。なんかこのゲーム色々メタいよな。

<
||
t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
||

プレイ動画を見てみよう！その11

キンクリし過ぎて死んだボスは置いといて、次はミドラーのプレイ動画のようだが……

承一郎「おい八幡、誰だこの痴女は……」

八幡「ミドラーさん」

承一郎「嘘だろ承太郎!!？」

おっと、思わずネタに走ってしまった。

承一郎「顔が由花子さんそっくりだし、その格好だ……ほぼ裸じゃあないか」

そう、まずは顔だ。ほとんど由花子さんにそっくりなのだ。こんな日本人顔の外国人なんかいるだろうか？

そして次に格好だ。ビキニパンツを履いているくらいで後はベールだのベールっぽいものを被っているだけ。胸は大事な部分を星形のニプレスをしているだけで見事なバストを惜しみ無く晒している。

格ゲーのキャラは見た目を派手にする為に現実ではしないような服装をすることが多いが、本当のミドラーはこんな格好をしない。

いくら戒律が緩い地方の出身だからといったってイスラムの人間なのだ。アラビアダンスをするにしたってここまで際どい格好はしないだろう。

まあ、別人と考えよう。

承一郎「…やれやれ、でミドラーは誰がやる事になったんだい？」

八幡「相棒に決まったんだ」

承一郎「静さん？そりやなんで？」

八幡「あと残っているキャラはアレツシーだからだよ。分かるだろ？」

承一郎「ああ……」

アレツシー。エジプト九栄神の一つである嵐と暴力を暗示するセト神を操るスタン
ド使い。

前に静さんはアレツシーの能力で子供の頃の体に戻されてジョースター家ではない
というコンプレックスが爆発してしまったのだ。

しかし仗助さんの魂の言葉がで静さんの心に通じ事なきを得て、アレツシーは晴れて
仗助さんの『クレイジー・ダイヤモンド』の能力で岩と同化させられて宇宙へ打ち上げ
られたようだ。因果応報である。

ちなみにその言葉が完全にプロポーズのそれであり、なおかつジョルノ兄さんが録音
していて、外堀内堀を埋められ婚約。後にシスコン&ロリコンとして、その趣味の人間

からは現人神として崇められ、後に「ジョースケ」が世界共通の単語として登録されることになったらしい。仗助さん、南無三。

さて、そんなクズは気にせずミドラーのプレイ動画を見るとしよう。

ナレーション『鉱物に化けるスタンド『女教皇』を操る女、ミドラー。DIOに承太郎達の暗殺を命じられ、海岸で彼らを待ち伏せていた』

ミドラー『承太郎……お前を私の女教皇で消化してやるわ、フフフフ』
持っていたマグカップを女教皇に変えるミドラー。

第1話 戦いの年季

ポルナレフさんと話をしているジョセフさん。潜水艦はどうしたのだろうか？

ポルナレフ『カイロまであとどれくらいなんだ』

ジョセフ『あと3〜4日もあればカイロじや。ここからはどこに敵がいてもおかしくない。気を付けねばならん！』

ポルナレフさんがどこかに行き、その隙にミドラーがジョセフさんを奇襲。地面からハイプリエス出現、食われかけるもジョセフさんは回避する。

ミドラー『ハハハハハ！とろいヤツらよのおー！』

ジョセフ『新手のスタンド使いか！』

ミドラー『死んでもらうよ』

ジョセフ『返り討ちにしてくれる!』

静さんも少しは格ゲーに心得があるので無難にジョセフさんを倒す。しかもスーパーコンボでトドメ刺してる。

対戦後

ミドラー『まず一人……仕留めたツ!』

ちなみにミドラーの必殺技は以下の通りだ。

地面に潜んだハイプリエスが車に変身して地面から飛び出して来る『モンスターヘッド』。攻撃ボタンで出現する位置を近距離、中距離、遠距離と変えることができる。

次に『ハーブーンショット』。矢に変身したハイプリエスで居抜く飛び道具だ。矢がスタンドを生み出す矢に似ているような気もするが……。

ミドラーの必殺技はこれだけ。

スーパーコンボはモンスターヘッドを近距離からトリプルゲイザーのように順番に出す『モンスターショット』

ハーブーンショットで串刺しにした後に複数の矢で滅多刺しにする『メガハーブーンショット』。

そしてアメリカで小町姉さんが食らった地面に一体化したハイプリエスに食われる『デイナータイム』。

必殺技が飛び道具を始めとした遠距離技ばかりだが、通常攻撃が強い。回転ノコギリやらチェーンやらに変身したハイプリエステスの攻撃範囲が大きく、威力も高い。

第2話 戦慄の侵入者

次は花京院さんか。あれ？でもポルナレフさんジョセフさんの近くにいたよね？

ポルナレフ『遅えーなー、花京院のやつ』

承太郎『……………』

ミドラー『ということは花京院は今一人でいるな、チャンス』

キング・クリムゾンツ!!？

ミドラー『見つけたよ！花京院！私のスタンドですりつぶしてやる！』

花京院『なに！この女も敵か！』

そして花京院さんの前に姿を晒してドンパチ。なんで敵の前に立つのだろうか…。

ミドラーの『女^{ハイプリエステス}教皇』はあの『ディナータイム』のようなデカイ口からはイメージし

にくいが隠密性に長けているスタンドだ。その変身能力の偽装精度は承太郎さんの『スタープラチナ』でも見抜けないほどだしな。

第3話 炎の魔術師

次はポルナレフさんと一緒にアヴドウルさん登場。

ミドラー『……………』

先したとも考えられるけどさ！敵を……しかもジョセフさんを殺したミドラーを放置して旅を続ける人間か！！？

100%否と断言出来る。承太郎さんはいつも冷静沈着が人になったような人だが、内には熱い心を持っている。あのパワーとスピード、そして精密性を兼ね備えた『スタープラチナ』はその反映かもしれない。

だから絶対には有り得ない。CAPCOMえ……ちよつとそここのところ考えようよ……。

第6話 裁くのは誰だ！

そして六人目は承太郎さん。ここで最終話と出てこないと言うことはミドラーも逆コース？

ステージはDIOと承太郎が決着を付けた橋だ。

ミドラー『承太郎、お前は私の好みのタイプだから心苦しいわね……。私のスタンドで消化しなくちゃならないなんて』

承太郎『てめーはこの空条承太郎がじきじきにぶっ飛ばすッ！』

確かそんな事を『ハイプリエステス』の口の中で言われたとこつちの世界の承太郎さんが言ってたな。だが、ゲームでの承太郎さんは塩対応だった。まあ、承太郎さん以外は全滅してるから怒っていて当然か。

そして『デイナータイム』で……あれ？そこつて橋の上だよ？『デイナータイム』

で飲み込んでも橋の下に落ちるだけじゃあないの？

ま、まあ、とにかく承太郎さんを撃破。

ミドラー『D I O様ツ！承太郎を殺りました!!?』

ジョースターエジプトツアアは全滅の最期を迎えた。そしてミドラーはD I Oの館へ。反逆コースでも無さそうなんだが…。

ミドラー『ここがD I O様の館……』

第7話 亜空のしよ気ヴァニラ・アイス

ヴァニラ・アイス『ミドラーか?』

ミドラー『ヴァニラ・アイスかい? D I O様はこの上だね?』

ヴァニラ・アイス『承太郎達を倒したそうだな……しかし……』

報告に現れたミドラーさんをヴァニラアイスが迎えるが……

ミドラー『!!?』

ヴァニラアイス『D I O様はお怒りだ……。承太郎かジョセフの生き血がD I O様には必要だったのだ……』

今度は意にそぐわなかった部下への処罰コースだったか。でもそこまで必要だったのか? 言っちゃあ悪いけど、ホリイさんへの奇襲作戦をエンヤ婆が模索してたし問題ないんじゃないのか?

ミドラー『そんなこと聞いてないね！』
そして対戦後。

ヴァニラ・アイス『……………』

ミドラー『しつこい男は好きじゃないわね！』

回転ノコギリでヴァニラ・アイスを切り裂く。怖っ！そのヴァニラ、多分吸血鬼じゃあないぞ!!？

ヴァニラ・アイス『ぐあああああ……………貴様なんぞにー!!？』

最終話 D I Oの世界

D I Oの前に膝付くミドラー。

ミドラー『D I O……………様……………』

D I O『承太郎達を倒してくれたそうだな、うれしいぞ……………』

あ、そこは一応褒めるんだ。

ミドラー『ですが生き血が……………』

D I O『心配するな……………』

……………おい、なんでそこでW R Y Y Y Yのポーズをするんだ。

D I O『貴様の血でじゅうぶんだ、ありがたく思え』

……………なるほど、そういうルートか……………。

承一郎「殲滅すべし、八幡ッ！」

八幡「いや、俺は普通に褒めるだけだからな!?」

ミドラーはD I Oを回転ノコギリ攻撃でじわじわガリガリ削っていく。いいぞもつとやれ。

そしてそのままフルボッコしてエンディングへ。

ミドラー『D I O……………様……………』

D I O『お前は優れたスタンド使いだ……………私に永遠に仕えないか? 私にはお前が必要なのだ……………』

ミドラー『……………はい……………』

ん?これはもしかして和解エンドか?だがちよつと待て、確かD I Oは永遠にと言わなかつたか…?

ズキユズキウーンッ!

OH^{オーッ} NO^{ノーッ}!!?こいつ、やりやがった!

次の場面はミドラーの喉と胸に指を突き立てるD I O。そして瞳孔が開いて倒れるミドラーが。

D I O『お前の血がな……………』ゴゴゴゴゴ

うわあ…とんでもないクズだな。汚いさすがD I O汚い。

プレイ動画を見てみよう!その12

そこに浮いているD I Oは置（ry、次は『エボニー・デビル悪魔』のスタンド使い、呪いのデーボだ。

攻撃をわざと受けて、その恨みのパワーでスタンドを人形に憑依させて操り殺す能力……だったはずだ、多分。

承一郎「…で、今度は誰がやるんだい?デーボを倒したポルナレフさんは幽霊だし、千葉村の騒動の時は誰が?」

八幡「多分ミドラーさんじゃあないかって承太郎が言ってたぞ」

承一郎「じゃあ無理だろ。その特別の場所にいたんだろう?話を聞く限り」

八幡「ああ、だからめぐり先輩と露伴先生がやったんだ?」

承一郎「え?千葉村であったあのフワフワした雰囲気の人と露伴先生?なんで?」

八幡「そりゃあめぐり先輩が平行世界でエボニー・デビルを倒しているからな。露伴先生はセツトだ」

承一郎「なんだそのヤバすぎるハッ○セツトは…」

フワフワした雰囲気的女子に天才漫画家のセツト…普通に考えてヤバいぞ。

しかもコントローラーの握り方も怪しく、露伴先生の『天国の扉』^{ヘンズ・ドアー}で『ゲームが出来ると書き込んだそうだ。それってドーピングでは…』

とりあえず、オープニング。

ナレーション『アメリカインディアンの呪術師という触れ込みの殺し屋……「呪いのデーボ」。デーボはD I Oに金で雇われて、承太郎の命を狙っていた』

デーボ『俺は恨みのパワーをもってスタンドを操るッ！』

シンガポールのホテルに入っていくジョースター一行を見ているデーボ。

デーボ『奴らめ……呪い殺してやるぜ』

第1話 誇り高き騎士

ポルナレフ『しかし……俺に休む暇もくれないという訳か……出てこい！』

冷蔵庫から這い出てくるデーボ。よくその体が入ったな、寒くないのか？

ポルナレフ『なかなか鋭い殺気を出しているな。1つ名乗るときなッ！』

デーボ『俺の名は呪いのデーボ……なぜいることがわかった？』

ポルナレフ『テメー頭脳がマヌケか？冷蔵庫の中身が出しっぱなしだぜ』

まあ確かにチェックインしたばかりの部屋がそんなだったら即クレームものだからね。

デーボ『お前を呪い殺す！』

ポルナレフ『シルバー・チャリオッツ!』

デーボ『エボニー・デビル!』

スタンドを出すも、あっけなく『シルバー・チャリオッツ』に斬られるデーボ。

ポルナレフ『あっけない奴だぜ』

デーボ『ゲヘヘヘッ!よくもやったなー!お前を呪ってやる!』

そしてバトル。しかし悲しいかな、『ゲームが出来る』だけで上手く出来る訳ではないのでめぐりさんはあつという間にデーボはやられてしまう。

承一郎「ここで露伴先生に代わるのか?驚くほど早いね」

八幡「しようがねえだろ。めぐり先輩の前世の頃はまだファミコンが出て来た頃だぜ?」

なるほど、言われてみるとそうだった。めぐりさんの前世である杉本玲美が吉良吉影によって亡くなったのは1984年。そしてその頃ゲーセンは不良の溜まり場というイメージが強かった時代。

必然的にファミコンは男がやるものという時代であり、当時中学生だった杉本鈴美がファミコンを持っていたとは思えない。

そして露伴先生に代わってバトルスタートしたのだが:

承一郎「ちよっ?!?なんだこのスピードはッ?!?動きが別物、さつきを見てたから余

計に速く感じるッ！しかもしつかりと技を色々と試している！」

この流れるような動きッ！さすが露伴先生、僕達に出来ない事を平然とやってのけるッ！そこに痺れる！憧れるウ！

……と、ちよつと落ち着いてデーボの解説を。

本体モードでデーボを、スタンドモードでステージで転がっているエゴニー・デビルが取り付いている人形を操るスタイルだ。スタンドモードにするとデーボ本人は変なポーズをとつたままピクリとも動かない。

大抵のキャラはスタンドモードにするとスタンドの動きに付いていく形で動くのだが、エゴニー・デビルはそういうスタイルでは無いらしい。花京院さん、アヴドウルさん、ポルナレフさんのスタンドモードは特殊コマンドでそう分離させる事が可能だったが、デーボの場合は最初から強制的に本体が無防備になる仕様らしい。

これ実は上級者向きじゃあないのか…？

デーボ『まずは一人始末しただ。次の部屋だ……』

第2話 戦慄の侵入者

次の相手は花京院さんだ。

花京院『ポルナレフの部屋で大きな音がしたッ！ジョースターさんに知らせなければ

！』

デーボ『うけけけけッ!』

花京院『て、敵か!お前だな!ポルナレフを襲ったのはッ!』

そのままバトルスタート。……したのだが、デーボの必殺技には『ピラニアダイブ』という技がある。エボニー・デビルが水平に飛んで相手に噛みつく技なのだが、その攻撃がいくつかの部位に命中すると……例えば顔、尻、局部。もう分かっただろうか?

承一郎(これ海老名さんが喜ぶやつだ……)

ちよつとゾワツときた。

ジョニイ『へえ、CPU戦のデーボはDIOと同じだな。1ラウンド目ではスタンドモードを使っていない。多分、一度攻撃をされて相手を恨まないと能力が発現しないという特性を再現されてるんだろうな』

原作再現がすごく細かいな。

第3話 炎の魔術師

次はアヴドウルさん。倒れている花京院さんの部屋にアヴドウルさんが乱入する。

アヴドウル『何の騒ぎだ!』

デーボ『アヴドウルのお出ましか……』

アヴドウル『貴様!たしか一度だけ見たことがある……。その顔の傷は……。殺し屋デーボ!』

ドンパチ開始。なんかアヴドウルさんから『ピラニアダイブ』が極端に控えられている。多分海老名さんが腐のオーラとか出したんだろうな……（正確には騒いでいた）。

デーボ『まだだあ……まだ呪い足りねえ……』

第4話 戦いの年季

デーボ『くそジジイ、じつくり呪い殺してやるぜ!』

ジョセフ『戦いにおける年季の違いを見せてやる!』

そのままドンパチ開始。特に特筆する事なくデーボが勝利した。やっぱり完璧過ぎるとプレイ見ても（ry

デーボ『まだだあ……まだ呪い足りねえ……』

お前どんだけ呪うんだよ……ジョースターさん達と前世でなんかあったのか？

第5話 変幻自在、砂の猛獣

デーボ『こんな犬ごときに承太郎の仲間か! てめーも恨んでやる!』

イギー『ガウツ! ガウツ! (やってやるぜ!)』

バトル開始。この戦闘でも普通に進み勝利したのだが、問題は対戦後のデモだ。

バトル倒れたイギーをエボニー・デビルがカミソリでザクザク執拗に斬っている。

デーボ『まだだあ……まだ呪い足りねえ……』

そしてデーボが画面外に去った後に……槍でトドメだと!??

承一郎「…ひでえ事しやがる」

DDの事の最初の出会いを思い出してしまった。あの勇敢な犬は任務途中に見つけて来たのだが、親犬が兵士に射殺され自身の右目も潰されていたのだ。

このデモには動物好きの人にはキツすぎるな。

第6話 裁くのは誰だ!

そして次は承太郎さんだ。だがこれで最終回ではないとするとまた反逆ルートか？
反逆好きだなCAPCOM。

承太郎『おい、てめー……その殺気……敵か!』

デーボ『俺はデビルのスタンド使い!名はデーボ』

デーボ『エボニー・デビル!』

承太郎『オラアツ!』

スタープラチナでデーボが殴られる。あれれ、丘ピーポー?スタープラチナで殴られてどうして立ってられるんですかねえ…?まともに食らったら吸血鬼でも頭蓋骨粉碎ものなの…。

デーボ『ゲヘヘヘッ!ついにやったな承太郎!これでたつぷりお前を恨めるといものだあああ!』

承太郎『なんだと!?!?』

デーボ『わざとやられたんだよお！ヒヒヒ、呪い殺してやる！』

バトルはやっぱり完璧過ぎるとプレイ見ても（ry

デーボ『ギャハハハ！あの世へ行きな。恨みはらさしておくべきか、承太郎。承太郎を倒したぜ！これでD I Oに賞金がもらえるぜえ！』

キング・クリムゾン！

D I Oの館前に立つデーボ。

デーボ『これがD I Oの館だな…げへげへへッ！』

第7話 亜空のしょう気ヴァニラ・アイス

デーボ『約束の金を受け取りに来たッ。デーボだ！いねえのかD I O！』

ヴァニラ・アイス『D I O様が雇った殺し屋か』

デーボ『アイスか…D I Oに会わせてもらうぜ』

ヴァニラ・アイス『待て。D I O様に会う前に貴様のスタンド能力を聞いておく必要がある』

デーボ『バアカか！スタンド能力を人にバラす事は死を意味するんだぜえ』

確かに裏の世界の人間がスタンド能力をバラすというのは死を意味する。対抗策が容易く立てられてしまうからだ。僕の能力だつて見た者は催眠術で記憶を消したりしているしね。

そう考えるとカズやオセロット 達は皆僕を信じてくれてるんだと思うと嬉しく思う。

ヴァニラ・アイス 『ならばD I O様に会わせるわけにはいかないナツ!』

デーボ 『こうなりやお前もたっぷり呪ってやるぜえ!』

ドンパチ開始。やっぱり完璧過ぎるとプレイ見ても（ry

ヴァニラ・アイス 『……………ツ!』

デーボ 『しつこい野郎だなツ!』

デーボのタツクルで壁を破壊され、太陽にあたりヴァニラ・アイスが塵になる。

ヴァニラ・アイス 『ぐあああああ……………貴様なんぞにー!!?』

デーボ 『待つてな、D I Oツ!』

最終話 D I Oの世界

デーボ 『D I Oツ!』

D I O 『…承太郎達を倒してくれたそうだな、うれしいぞ…………』

デーボ 『約束の金をもらいにきたぜえ!』

D I O 『金はいくらでもやる…………。それよりも私の下僕にならないか?』

デーボ 『けへへへッ!笑わせるなツ、俺は最強だぜえ!!?お前が下僕になりなツ!

ついでにこの館の財宝は、全て俺がいただくぜえツ!』

た……。そして世界一の殺し屋、呪いのデーボは裏世界のボスとなっていた……。』

デーボ『俺と出会った人間で生きているヤツはいない。次はお前を呪い殺してやろうか?』

スタツフロールが流れる。

…え? あんな能力で裏世界のボスになれるのか? あれイチイチ自分の体に傷つけて恨んで発動する能力なのに?!? 効率悪いだろツ!

ジョニー「こんなので裏世界のボスになれるなら誰だつてなってるぞ」

八幡「あ、やっぱそう思うか?」

ジョニー「当たり前だ。骨で串刺しにして息の根止めれば即終わりだろこんなの」
うーむ、なんかこのエンディングしっくりこない…。

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

格ゲー『未来への遺産』を見学しようその②

夕べ八幡達と色々と語り合った翌日の放課後。奉仕部の部室に今日も集合する僕達。今日は部活が休みの葉山さんと、昨日まで所用で不在だった相模さんも来ている。

葉山「やあ、君が一条承一郎君かな？話は聞いてるよ。アーシスの前身組織のクリスタル・クルセイダーズのメンバーだってね。はじめまして。俺は葉山隼人だ。よろしく」

相模「うちは相模南。アーシスには匿ってもらっているんよ。よろしく」

承一郎「こちらこそ。僕は一条承一郎。まあ：アーシスとは色々ある関係だけど：よろしくね」

僕はグイグイ来るリア王、葉山さんの勢いに若干引きつつも、その二人と握手を交わす。

僕達の周囲にはいないタイプだな……。爽やかイケメンとか少女漫画に出てくるような奴を絵に書いたようなタイプだし。

葉山「で？今日は集まって何をやるんだい？」

相模「は……は……隼人くん……気のせいかな……何か凄い人がいるんだけど……」

相模さんが大統領を見つけてガタガタ震える。

葉山「ハハハハ。まさかそんな……欧米人は見分けが付かないと言うじやあないか」
いや、確かにそうだけど大統領の場合は見分けつくだろ。特に世紀を間違えていると
しか言いようがない髪型が。

ヴァレンタイン「初めまして。葉山隼人君、相模南君。お察しの通り私はフアニー・
ヴァレンタイン。合衆国大統領であると同時にアーシスの司令官でもある」

相模「ほ、本物?! ハッハー……」

今回の土下座要員は相模さんか。

ヴァレンタイン「楽にしたまえ。君達はアーシスの隊員ではなく、護衛対象兼協力者
だ。畏まる必要はない」

承一郎「普通は畏まるんですが……天上の人すぎて……」

普通の人だね。僕らが慣れすぎてしまっていることもあるし、その権力にはかなりお
世話になっているらしい。特にパツシヨーン関係で。政府関係者や警察組織を味方に
引き込んだりして。

相模「ほ、本当に大統領直属部隊だったんだ……そんな人が何で総武高校に……」

ヴァレンタイン「なに。大統領という身分はなかなかプライベートの時間というもの
がとれない。通常ならばね」

そう、この人はふつうじゃあない。

ヴァレンタイン「だが私は違う。我がスタンド、D4Cにより平行世界を渡り歩くことの出来る私ならではの方法により、時間を捻出することが可能なのだよ」

まあ、早い話が平行世界を経由して時間軸をずらして移動することで時間を調整し、たまに遊びに来たりとかしているようだ。そして鋭気を養ったところで再び公務へ戻る。それが大統領なりの休暇らしい。

葉山「そ、そうですか……ところで今は何を？」

承一郎「別の平行世界の格闘ゲームで遊んでいるらしい。何でも承太郎さんの旅をモチーフにしたものとか。過去にどんな戦いが起きたのか、どんな人物がいてどんな能力を持っていたのか……史実を見るには良い勉強になるぞ」

葉山「史実か……確かに俺や南は最近アーススに関わることになったからな。確かに良い機会かもしれない」

そうして葉山さん達は適当な椅子に座り、観戦モードに入る。

小町「はい、ただ見ているだけじゃああれだから、葉山さんはこれをつけていて下さい。波紋の修行です♪あ、承一郎お兄ちゃんはこちらね？」

小町姉さんはガスマスクみたいな物を葉山さんと僕に渡す。久々に登場した波紋の呼吸の調整マスクだ。

葉山「やつぱり修行はやらされるんだね……」

承一郎「懐かしいな……」

雪ノ下さんや川崎さんも付けさせられる。葉山さん、雪ノ下さん、仗助さんは初級者用の、めぐりさん、川崎さん、僕は中級者用の、陽乃さん、八幡、静さん、ジヨセフさんも上級者用の物を付ける。

八幡「さて、始めるか。材木座、頼んだぞお」

材木座「うむ！任された！」

そう言つて材木座さんはゲームをスタートさせる。

材木座さんがプレイするキャラクターはヴァニラ・アイス。アーシスの人間にとつて……特にスターダスト・クルセイダーズやクリスタル・クルセイダーズにとつては嫌な思ひ出がたくさんある存在だ。

アヴドウルさんとイギーを殺し、ポルナレフさんの体にも傷を残した（今はジョルノ兄さんに直されているが）。三年前は綾瀬絢斗として小町姉さんを始めとしているは、陽乃さん、沙織さんを殺しかけた奴でもある。僕も自力で直したとはいえ、体を欠損したしね。

誰もヴァニラ・アイスを使おうとは思わなかったので、代わりに何の因縁もない材木座さんにやつてもらっている。

材木座「や、我も結衣を襲われた因縁があるのだが……まあ良いわ」

材木座さんがプレイヤーキャラセレクトでヴァニラ・アイスを選択する。

オーブニング

場面はD I Oの館だ。

ナレーション『D I Oに忠誠を誓うスタンド使い、ヴァニラアイスはD I Oの傷を完全に治癒させる為に自らの首をはね、自分の生き血を彼に捧げていた』

確かにあつたな……そんなこと。あの時は大した忠誠心だと感心したものだが、今の感覚で考えるとカルト宗教的な狂気を感じる。

D I O『自ら首をはねるとは嬉しいぞ……。しかし、お前ほどの生き血は受け取れない……。死ぬ必要はない……私の血で甦るが良い……。お前なら間違いなく勝てるだろう』

屍生人ヴァニラ・アイス完成。

ヴァニラアイス『……D I O様……』

D I O『奴らは任せたぞ……。ヴァニラ・アイスよ』

ヴァニラ・アイス『D I O様、あなたの期待は満たされるでしょう。必ず仕留めて……』

ご覧に……いれます』

第1話 炎の魔術師

タイトルコール。ここからは俺達で中間デモを作り上げて行く。

材木座『ガオオン!』

空間を削る音を口でやる材木座さん。

アヴドウル（三浦）『ポルナレフ! イギー! 危ない!』

一昨日のアヴドウル編を再現して三浦さんが叫ぶ。

ヴァニラ・アイス（材木座）『惜しかった。今度こそお前達を亜空間にぶっ飛ばしてやる……』

アヴドウル（三浦）『なんだしこいつはッ! いきなり現れたし!』

微妙に前世になりきれていない三浦さん

葉山「……………? 何をやってるんだ?」

南「優美子?」

承一郎「気持ちは分かるよ。僕も最初はワケが分からなかったから」

二人が首を傾げて頭の上にハテナマークを浮かべる。確かにいきなり小芝居を始めただから不気味だろう。

三浦「このゲームは旧作と分かれてるんよ。旧作なら中間デモが出てきてキャラとのやり取りを再現されてるんだけど、新作の方はオープンングとエンディングしかないよ。だからその中間デモをあーしらで想像するって事をやってるんだし」

葉山「あははは……ある種の二次創作だね」

そしてラウンドが始まる。

相模「あれ？このアラブ系っぽい変な髪の毛の男は？」

三浦「それ、前世のあーし。モハメド・アヴドウルだし……確かに前世で承太郎にぶ男とか言われたけど、アラブ系ではどちらかと言えばイケメンの方だったし……」

三浦さんが微妙に傷付いていた。

承太郎「気にしていたのか……アヴドウル……」

相模「あ、マジシャンズ・レッド……かな？今のマジシャンズ・レッドとは微妙に違うよう……」

そりや上半身が裸だからね。そりやその辺りは変化があるだろうよ。三浦さんのマジシャンズ・レッドはビキニブラジャーみたいな物を着けているらしい。

さて、ここでプレイヤーキャラとしてのヴァニラアイスの必殺技を紹介しよう。

『ダークスペース』。クリームに入り、亜空間ボールで突進。一旦滞空し、十字キー方向に入力した方向に向けてもう一度突進する技だ。

効果音はガオオン！ではなく、ヴォンツ！というライトセイバーを起動させたような音で、亜空間ボールも無色透明ではなく赤い色をしている。まあ、無色透明だったら対策を取りようも無いのだが。そこは配慮というやつなのだろう。中ボスの時のようにガード不能ではなくなっている。

『クリーム！』。同じくクリームの亜空間ボールが軽く飛び上がった攻撃する。こちらは中段判定でしやがみガードが不能みたいのようだ。

『ばらまいてやるッ！』

これは中ボス戦でも使ってきた技だ。地面に潜り、足元から出てくる技。押した攻撃ボタンによって出現位置が変わるらしい。弱なら近距離、強なら遠距離といった感じだが、ガード可能なのは変わらず。飛び上がった際にはちよつとだけ隙が生じる。因みにポルナレフさんや小町姉さんはこの技で足の指先を欠損したとの事。現実でやられたら確かに回避は至難の技だ。

『ぶっ飛ばしてやるッ！』。クリームが斜め上から突撃し、地面を砕いて攻撃する。ここでポイントなのはクリームその物に当たり判定はなく、砕いた岩に攻撃判定がある。ハッキリ言つて実用性は全く皆無だ。

以上がヴァニラ・アイスの必殺技。明らかに中ボスと比べて弱体化しており、しかも動きもとろく、材木座さんの腕をもつてしても難しそうだ。

相模「あれ？材木座はうちの弟に比べて……」

材木座「ぬ……確かに相模殿の弟の方が我より上手い。それがトラブルの原因になつたしな」

ああ、どうやらそんな事があつたみたいだね（『やはり俺の奇妙な転生は間違つてい

る』第三章 遊戯部対奉仕部 参照。

だが、間違いなく材木座さん、海老名さんの二人はこの中ではトップクラスの腕の持ち主のハズ。僕？TASは無理でもSARUなら出来るよ。お、ヴァニラ・アイスが勝った。では……。

ポルナレフ（本人）『な、なんだこの腕は……アヴドウル……アヴドウルー！』

ヴァニラ・アイス『アヴドウルは粉微塵になつて死んだ』

史実を再現するようだ。

葉山「そ、そんな……アヴドウルさんは……優美子の前世はそんな死に方を……」

三浦「実際には突然現れたあれにバクンとやられて即死したんだし。戦いにもならずにはんと完全な不意打ちで即死。あーし自身も死んだことに気が付かなかつたし」

葉山さんと相模さんはシヨックを受けていた。友人の前世の最期を再現した形になつたからね。そりやシヨックを受けるだろう。

第2話 変幻自在の砂の猛獣

次はイギーか。

ポルナレフ（本人）『嘘だ……アヴドウルを殺したなどと……嘘をつくなッ！』

イギー（八幡）『ギヤウウウウ！』

イギー（承一郎）『やらなきややられる！』

さすがに飼い主の由比ヶ浜にやらせるのは酷だろう。八幡が犬モードを担当し、僕が翻訳をやる。

ヴァニラアイス『このド畜生が！私の暗黒空間にばらまいてやる！』

ドンパチ開始。

葉山「あの犬は？」

八幡「砂のスタンド使い、イギーだ。今は由比ヶ浜の飼い犬のサブレに転生している」
相模「……まさかこの子も……」

ポルナレフ「……死んだ。私を助けてな……」

そこでタイミングが良いのか悪いのか……。スーパーコンボを試していた材木座さんの技がヒットする。

ここでスーパーコンボを紹介。

『マッドネススオロウ』。中ボスも使ってきた様々な軌道のクリームを連続で飛ばしてくる技だ。ガード不能だが、軌道を覚えれば何てことはない技である。上手く回避移動を使えば回避はそれほど難しい事ではない。

『サークルローカス』。アッパーで浮かした後に下からガオオン！を連続で叩き込む変形乱舞技。意外と優秀。

そして、タイミングが悪かったというのが……イギーの死因でもある技……

『ド畜生がッ！』だ。ヴァニラアイス本体が突進してストレートを叩き込んで相手をダウンさせる。その後に倒れた相手をとことんストンピングするという見た目もエグイ技だ。

因みにコレがフィニッシュとなってイギー戦終了。

ポルナレフ「……………実際……………これがイギーの致命傷となつてしまった技だな……………」

相模「材木座！わざわざ再現する必要ないじゃん！」

材木座「コマンドを試しただけなのだがな……………」

偶然の怖さである。

第3話 誇り高き騎士

ポルナレフ「ゴニヨゴニヨ……………」

材木座「何とっ！真のイギーの死に様は……………それで良いのだな？ポルナレフ殿……………」

材木座さんはポルナレフさんから何やら聞いている。史実を再現しようとしているのだろう。

ヴァニラアイス（材木座）『死ねえッ！ポルナレフ！』

ポルナレフ（本人）『1 起死回生の策を思い浮かぶ 2 ジョースターさん達が助け

に来る 3 現実は無情である』

ポルナレフ「細かいところは忘れてしまったが、私はこの時、そんな事を考えていた。

出た結論はこうだ」

ポルナレフ（本人）『3！答えは3！現実は無情だ！』

史実を再現するポルナレフさん。

ポルナレフ「だが、起死回生の策を思い浮かんだのは私ではなかった……イギーのザ・フールが私を天上に持ち上げて助けてくれた……イギーはニヤリと笑って……そして息を引き取った……散っていくザ・フールからはイギーの命の欠片も感じる事が出来なかつたよ……。私は失って初めて気が付いた……誰にも心を許さない気高い精神を持つていたイギーの事がどれだけ好きだったのかと言うことを……」

ポルナレフさんは涙する。

そして……

ポルナレフ（本人）『イギー……カツコ付けやがって……』

ヴァニラアイス（材木座）『こ、今度こそ貴様よ！ポルナレフ……さん』

うん、これがポルナレフさんの物語ならカツコが付いたんだけど、悲しいかな……これはヴァニラ・アイス編。プレイヤーである材木座さんもやり辛そうだ。

しかし、材木座さんも一介の上級プレイヤー。私情は抜きにしてプレイを進める。

ヴァニラアイス（八幡）『こは片付いた……後は承太郎達だなあ！』

材木座さんがやり辛そうなので、アイスの小芝居は俺が代行する。アレツシーをやる

よりはまだのれる。

相模「ここでポルナレフさんは……」

ポルナレフ「ここでは私は死んでいない。アヴドウルとイギーの仇はしつかり取ったさ。私が死んだのはその13年後のイタリア……ジヨルノ達の戦いでの話だ。ここから先は完全にifの物語だな」

そう、ここで本来ならヴァニラ・アイスは死んでいる。史実の話はタベ八幡に見せてもらったプレイデモを見てもらうとしよう。

第4話 恐ろしき影

………何で？何でここでアレツシー？

承一郎「どうする？」

八幡「どうするって言われてもなあ………」

ストーリーが定まらず、ドンパチが始まってしまふ。

葉山「どういう事だ？」

相模「この変な髪型の男も仲間だったの？」

葉山と相模が勘違いをして聞いてくる。

仗助「ぎげんな。こいつはDIO側の刺客で、5年前も徐倫を助けるためにフロリダへ向かっていた俺達を邪魔して来た奴だぜ？岩にして宇宙に打ち上げたけどよ」

静「故にストーリーが組み立てられない。ハッキリ言つて何でおじさん達が攻め込んで来てるのにドンパチを始めるのか全く意味がわからない」

ホントにそれ。

第5話 心を奪う美しき名刀

陽乃「な、何でえ!？」

だから何で仲間割れを始めてるの!？」

葉山「彼は？」

陽乃「私の前世だよ？隼人」

葉山「え!？陽乃さんの前世!？陽乃さんもここで…」

陽乃「それがねえ……私の前世もD I O 様側の刺客だったんだよねえ………ついでに言えば私の前世はこの男ではなくて刀の方。刀を持った人間を操るスタンドだったのよ。それがアヌビス神。因みにこの段階で既にアヌビス神は死んでいたから」

承一郎「たまにそういうスタンドが存在すんだ。本体が死んだ後に発現するスタンドとか、本体に害しか成さずに本体を殺して次々と本体を乗り換えるスタンドがね。君達も気を付けるといい。ウルフスなんてのは」

僕が言つたのはノトーリアスやチップ・トリックの事だ。案外、葉山さん達の勉強にもなってるな……このゲーム。

しかし困った……。これもストーリーが思い浮かばない。なんでCAPCOMはコイツらを出してきたんだ？これが承太郎さんとかの後ならばわかるんだ。反逆コースでDIOをやりに来たのを返り討ちにするとか……。だが、承太郎さん達より前に現れたのがわからん。

結局、チャカカのスティーラーも再現をする事を考えるのを止めた。

第6話 戦慄の侵入者

相模「今度も刺客？」

海老名「これは私の前世、花京院典明だよ？」

相模「ヒナちゃんの？意外！」

では小芝居を。

ジョセフ（本人）『こ、この破壊の跡は……』

花京院（海老名）『ポルナレフ達が戦った跡で間違いないよ！』

ヴァニラ・アイス（材木座）『奴らはもういない。後はお前達だけだ』

花京院（海老名）『アヴドウルさんやポルナレフをどうした！彼らを殺したなんて嘘を

吐かないでよね！』

さすがにここではおふぎけなしで演技をする海老名。

海老名「ちなみにだけど、私の前世を殺したのはDIO本人。つまりヒキタニ君の前

世だから」

葉山「ヒキタニ…………お前…………」

そこで葉山達さんのヘイトを俺に集めていく。自業自得だ、諦めろ。

第7話 戦いの年季

ジョセフ（本人）『花京院!? 貴様…………そのあり得んくらいの無敵性…………まさか吸血鬼か！』

だから屍生人…………いや、そう言えばジョセフさんは吸血鬼とは戦っても屍生人とは戦った事は無かったって言っていたつけ。だとしたらヴァニラ・アイスを屍生人ではなく吸血鬼と言っていたのもジョセフさんの情報の間違いだったかも知れないな。

ヴァニラ・アイス『次は貴様だ! ジョセフ・ジョースター!』

ドンパチ開始。うん、やっぱり波紋を食らっても死なないなんて屍生人はおろか吸血鬼だつて無理だわ。

葉山「…………ジョセフさん。明らかに今の方が若く見えるんですけど…………」

一方で葉山さん達は至極当然の疑問を口にする。

承一郎「僕もこのジョセフさんを見たときはビックリしたよ。僕の世界のジョセフさんは歳相応だから…………」

小町「波紋の戦士としては今の姿でも老けてると言いたいんだけどね」

葉山「俺……波紋を修得したけど、普通に歳を取れるかなあ……」

波紋の修行をサボれば良いと思うよ？小町姉さんが許せば……の話だけだね。

最終話 裁くのは誰だ！

ヴァニラ・アイス（材木座）『残るは貴様だけよ！貴様なんぞにいいい！負ける私ではなあああい！』

承太郎（仗助）『花京院……ジジイ……こんなのを見せられて頭にこねえ奴はいねえ……』

ドンパチ開始。

葉山「この空条博士の服装……ヒキタニがたまにやつてる学ランと学帽……」

相模「さすがは空条博士……学生時代からつつばってたんだ……」

承太郎「今さらそこを突っ込まれる日が来るとはな……」

まあ、承太郎さんはザ・不良でしたしね。と言うか、歴代ジョジョ達の大半は不良です。

僕？ヤクザで傭兵のボスです、ハイ。八幡達もつとたちが悪い。ヤクザの方がマシである。警察とかは飼い慣らしているか、買ってあるか、躡てあるか気合いを入れて消してあるからね。

そしてエンディング。

ナレーション『ジョースター家全員を始末したヴァニラ・アイスはその事を報告するためにD I Oの部屋にいた』

オープニングの時と同様にD I Oのベットの前でかしくヴァニラアイス。

ヴァニラ・アイス『お休み中のところ失礼致します。ご存知でしょうがジョースター達を始末したことをご報告いたします』

D I O『アイス、お前なら間違いないと勝てると思っていた……………ご苦労だったな』

ヴァニラ・アイス『あなたの期待に答えられて光栄に思います』

綾瀬絢斗もこうだったら違う結末だっただろう。考えても仕方の無いことを無駄だと思いつつも考えてしまう。まあ、三浦さんや海老名さん、サブレが受け入れるかどうかは別の話だが。

ナレーション『D I Oの血を受けたヴァニラアイスは吸血鬼となり、それから永遠にD I Oに忠誠を誓い続けていった……………永遠に……………永遠に……………』

スタツフロール

や、オーバーヘブンの後まで連れてくつもりなのかよ。世界が加速し、一巡するまでの永遠って意味なのか？

I Fの話だから考えても仕方がないか。

<
||
t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
||

格ゲー『未来への遺産』を見学しようその③

材木座「むう……使い辛さの割にはパツとせぬエンディングであったな」

微妙な空気のまま、コントローラーは次の小町姉さんに渡される。小町姉さんがプレイするのはペットシヨップだ。正確に言えばペットシヨップの前世であるが。

相模「今度は鳥？……見たことあるような……」

小町「千葉村で南さんと戦った中に転生したペットシヨップがいましたから」

八幡「これが今のペットシヨップだ」

今のペットシヨップは仮面みたいな物を付けていなければマフラーみたいな物も付けていない。頭の良いペットシヨップが迷子になったりとかしないので、自然のままの格好でノビノビ生きて貰っている。

僕からしたらヴァニラ・アイスよりもペットシヨップの方が断然カワイイ。

マッチョな男にブルマとかなんだよ、軽くトラウマもんだぞ……

葉山「カワイイな。とても飼い主がヒキタニとは思えない……」

八幡「悪かったな。だけどペットシヨップは強いぞ。ゲームだとわからんがな」

承一郎「あの隼まで転生していると知ったときはさすがに驚いたよ」

八幡「橘が飼っている鳥がそうだったりな」

承一郎「洒落にならんからやめてくれ……」

僕があつちの八幡を見てきたように、八幡達も一条楽を見てきた。もちろん橘さんの愛鳥も。あの鳥も中々の頭の良さを見せている。なんで彼女はあの鳥だけ平気なんだ……？

※万理花は極端な動物嫌いなのだ。

ペットシヨップ「クエエツ！」

って、呼ばれたと思ったのか、空の散歩をしていたペットシヨップが窓から部屋に入ってきた。

八幡「丁度いいな。お前の前世の話をやっていたところだ」

鳥リンガルが無いのが惜しい。

さて、オープニングだ。

ナレーシヨン『承太郎達がエジプトに上陸した頃、謎の9人の男女が潜伏している建物に集まっていた……そして、その者達はいずこかに旅立った』

……9人の男女？10人では無くてか？

ジョセフ「突っ込んでええか？わしらは財団の職員から確かに9人の男女と聞いておった。じゃがそれは7人の間違いじゃあないか？」

八幡「あー……正確には10人の男女と1羽と一本だよな」

承太郎「何？9英神は7人の男女と1羽と一本では無かったのか？」

八幡「9英神だけならな。アルカナとは別にヴァニラ・アイス、ケニーG、ヌケサクを忘れてるぞ」

既に屋敷から去っていたプッチを除けばそれで合っているはずだ。

承太郎「そう言えばそんなのもいたな……」

ヴァニラ・アイス以外は特に何するまでもなくあっさりとやられていたから印象に薄かったかもしれないな。

ナレーシヨン『その中にはこの館の門を守る役目を受けたスタンドを使う鳥がいた……。天空の神、ホルスの暗示を持つペットシヨップはこの館に入ろうとする者を抹殺する地獄の門番である』

オーピングはここまでだ。さて、最初は誰が来るか……。

第1話 変幻自在の砂の猛獣

史実通りのイギーか……となると、ここは八幡があの情報屋の役をやるのか？その史実を知るのには僕と……

情報屋（八幡）『見つけたぞ！ここが写真の……』

ペットシヨップ（本人）『クエエツ！』

ペットシヨップ（承一郎）『怪しい奴を見つけたぜ！死ね！』『氷の塊を落とす』
ペットシヨップはそれに合わせてちよつと大きめの氷の塊を八幡の頭に落とす。

情報屋（八幡）『ギャアアアアア！』『情報屋：死亡』

そして僕も乗った！

Yeah！パアン！ピシッ！パシッ！グッ！グッ！

ポルナレフさん式のハンドシグナルをやる僕達。

結衣「どういう状況？」

雪乃「イマイチ掴めないのだけれど……」

もう少し続くのだがここで説明タイムといくか。

八幡「ジジイ。ディオの館を探す為に情報屋を雇っていたのを覚えているか？」

ジョセフ「おお。確かにそうじゃったのう。イギーが見つけたようではあるが

……」

承一郎「実は情報屋のおじさんは探し出していたんですよ。ですがペットシヨップに見つかってしまい、氷の塊の下敷きにされて殺されてしまったんです。僕たちはそれを再現したんですよ」

ペットシヨップ「クエツ！」

その通りだとペットシヨップも鳴く。

葉山「それはどのくらいの大きさかな？」

八幡「そうだな。リムジンがペシヤンコになるくらい巨大な大きさだったな」

葉山「それは………洒落にならないな……」

葉山君が冷や汗を流す。

相模「うちもそれを目の当たりにしたような……」

承一郎「そしてそれを目撃したのがイギーだった」

イギー（承一郎）『厄介事はごめんだぜ。あばよ』

犬（八幡）『ギャイイイイン！』

ペットシヨップ（本人）『クエツ！』

ポトン。またしても氷を落とすペットシヨップ。

ジヨルノ「次の状況は？」

八幡「館に入ろうとする者は味方以外は誰だろうと殺すのがペットシヨップの役目だった。それがたまたま入ろうとしていた何も知らない子犬だったとしても。今死んだことになったのが現地の飼い犬だな」

承一郎「それでもイギーはバカ犬のふりをしてやり過ごそうとしたのだが……次のターゲットになったのがその犬の飼い主だった子供だった。そこで我慢が出来なくなつたイギーが……」

イギー（承一郎）『犬好きの子供を見捨てるなんて事は出来ねえぜ！』

八幡「……といった感じでドンパチになったんだ。だよな？ ペットシヨップ？」

ペットシヨップ「クエツ！」

何で僕らが知っているかって？ 八幡は報告を受けていたから、そして僕はその時の記憶をジヨニイの夢として知っているからだ。

さて、恒例の……の前にペットシヨップというキャラについて。ペットシヨップは通常のキャラとはかなり扱いが違う。鳥であるゆえにまるでシューティングゲームの自機のように空中を自由自在に移動できる。

格ゲーキャラとしては異例のキャラだ。それ故に格ゲープレイヤーとしては操作性の異質さから上級者キャラと攻略本では書かれているが……ハッキリ言おう。格ゲーキャラという枠組みから外して考えればかなりの強キャラである。

まずは必殺技。

『アイシクルバレット』。氷を纏って突進していく今のペットシヨップも使う技だ。特にあの世界で猛威を振るった。この技の突進は押したボタンによって軌道が変わる。

『アイティクルピック』。攻撃ボタンを押しっぱなしにすることにより画面上にっららが発生、離すと同時に落下。押したボタンにより出現位置が代わり、更に複数作ること
も可能。

因みにこのゲーム。ペットショップはコンボ技最強キャラと呼ばれており、その強さを支えているのがこの技だという事らしい。

『アイスランス』。地面から氷の槍を作り出し、突き刺す技。史実だとイギーの足を凍りつかせ、片足を切断するきつかけになった技らしい。刺された相手は浮かしダメージを受ける為、連続技最強の地位を作った技の1つとも言える凶悪な技。

『フリーゾン』。ペットショップと言えばこの技。つららを6本発生させ、相手に飛ばす飛び道具だ。発生から発射までに間があるものの、射ちきつてしまえば結構な弾速だったりする。

小町「さすがはペツちゃん……強いね♪」

ペットショップ「クルルル♪」

小町姉さんに誉められ上機嫌のペットショップ。

結衣「サブレの前世の敵だったって言うのが複雑だけど……でもあたしも何度かペツちゃんに助けてもらったし……」

材木座「我也だ。頼りになる隼よ」

ミドラー並みに取り合いが予想されたいらしいもんな。ペットショップは。

そしてドンパチ終了。終わりのデモは……

ペットショップ「クエ！」

ゲームの技であるアイテイクルピックのつららを落とす。これで止めてわけね。うん。言いたいことはわかったけど寒くなるから必殺技を再現するのはやめようね

?

第2話 誇り高き騎士

ポルナレフ（本人）『あの情報屋。遅いな……』

ペットシヨップ（本人）『クエエツ！』

ポルナレフ（本人）『なにつ！こいつも敵のスタンド使いか！犬、猿に続いて鳥のスタンド使いまでいるとは！』

ちよつと待った。ポルナレフさん。気が付いていないみたいだけどそのラインナップ……。

イギー……まんま犬

フオーエバー……オラウータンだけど猿

ペットシヨップ……隼だけど確かに鳥

結衣「………桃太郎？」

敢えて口に出さなかったのに言っちゃったよ！桃太郎言っちゃったよ！敵味方に別れていたけどねッ！

じゃあ退治されるのは……

D I O : …… (吸血) 鬼

って事か? やつたぜ。

アホな事を考えていないでスーパーコンボ紹介。

『ギガフリーゾン』。名前の通りフリーゾンの強化版。花京院の強化版エメラルド・スプラッシュみたいな技だと思えば良いかな?

『デスペナルティ』。情報屋のおっさんを下敷きにしたペットショップの代名詞その2。氷の塊を上空から落としてきます。

『番鳥の猛攻』。CAPCOMでは珍しい突進乱舞の技。アイシクルバレットのような突進の後にヒットするとペットショップが手前に飛んで来る。そしてターゲットスコープが相手にロックオンされ、そこへ向かってしこたまフリーゾンのようなつららを乱射する。この技がヒットしたときだけガンシューティングゲームをしているようだ。

以上がペットショップの技だ。ホントに強いな……。

小町は格ゲーが得意な方じゃあないのに、ペットショップの性能が良すぎる。そうこうしている間にポルナレフさん撃破。

ペットショップ「クルルルル」

本人も嬉しそうだな……。

第3話 炎の魔術師

アヴドウル（三浦）『あーしの知らないスタンド使いがまた……。今度は鳥のスタンド使いか！その氷のスタンドをあーしの炎で溶かしてやるし！』

ペットシヨップ（本人）『クエエエ！』

確かにこの戦いが実現していたら面白い戦いになりそうだ。だけど現実で共に構えるのは止めてね？校舎が壊れるから！

第4話 戦慄の侵入者

花京院（海老名）『優美子！くっ！戦線に復帰するのが遅かった！そのツララはむしろジヨースターさんとかのおし………』

ペットシヨップ（本人）『クエエエエエエエエッ！』

海老名「キャアアア！本当にツララを飛ばして来ないでよおおお！」

承一郎「これは僕でもわかる。『これ以上は言わせるか！この腐女子！』だろ？ペットシヨップ？」

ペットシヨップ「クエッ！」

安定の海老名さんだな……。ペットシヨップが怒ってツララを海老名さんに飛ばしたよ……。君に刺さるぞ？この辺で止めておかないと。

葉山「復帰？」

海老名「私の前世ってアスワンで目を負傷しちゃってね？合流したのはイギーがペッ

トシヨップを倒した直後だったんだ」

相模「ヒナちゃん……そういう大事な場面を何で趣味に走らせて台無しにするかな……？」

相模南は案外ツッコミキャラである。

第5話 戦いの年季

ジョセフ（本人）『鳥のスタンド使いめ……戦いにおける年季の違いと言うものを見せ
てやる！』

ペットシヨップ「クルルル♪」

ジョセフさん。ペットシヨップを撫でながらいうセリフじゃあない。まあ、ペットシヨップは京華ちゃんの遊び相手だから今は結構可愛がっているけど。

最終話 裁くのは誰だ！

承太郎さんでラストか。当の承太郎さんはペットシヨップに餌をあげてあやしているけど。

承太郎「俺は小芝居はやらないからな」

ペットシヨップ「クエツ♪」

八幡「あのさ。ペットシヨップは俺の愛鳥なんだけど」

小町「良いじゃんか！もう総武高校アークシスのマスコットみたいなものなんだし！」

結衣「そーだよ！ヒッキーばかりずるい！」

八幡「お前ら……自分の愛犬と愛猫はどうした！特に小町！カマクラを虹村家に送るぞー！」

小町「うわつ！そんな事したら小町がペツちゃんを貰うからね！」

ペットショップ「クエ？クエ？」

そこで迷ってあげるんじゃない。ペットショップ。最終的には八幡の頭の上に飛んで来たけど。

エンディング

ナレーション『異常なくらい執念深く、館への侵入者を抹殺する『殺戮追跡マシン』のペットショップはついに承太郎達を倒した。そして、今日もペットショップの眼の照準は、獲物の急所にピタリと当たっていた……』

スタツフロール

これだけ？一昨日から思っていたけど、作り込まれているキャラとの差が大きすぎね？

ペットショップ「クエツ！クエツ！」

ペットショップ本人は何とも思っていないようで、八幡の頭の上で上機嫌に寛いでいる。

うん。今のこいつが殺戮マシンなんてのはあり得ないな。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

格ゲー『未来への遺産』を見学しようその④

さて…残るはD I Oと影D I O、それとマライアか。

八幡「仗助え。クリスマスイベントの予算、少し余りが出そうだわ」

仗助「おう！入札が上手くいったんだな？そつちは好きに使え！トリツシユの衣装に回すなんてえのはどうだ？」

ジョルノ「それは助かります。あとは当日の演出にも拘りたいですね」

ちよつと待ってくれ、なぜ皆急に仕事に移るんだ!!？

承一郎「なんか急に仕事に精を出し始めたんですか…」

葉山「この女の人、とてもキレイに見えると思うんだけど」

ああ、そういえばこれが太ったアラファイフになって目の前に現れたみたいだね？僕が襲撃する前に。それも若作りのセクシーな服を……ウツプ！

沙希「始めても良い？」

サクツと終わらせてあげて。

オープニング

ナレーション『D I Oの魅力により忠誠を誓うバステト女神のカードを暗示するスタ

ンド使いマライアは、ジョースター達を始末するためにやってきた…」

セクシーな足を組み、様になる姿のマライア。

マライア『触れてはいけない物というのは、触れてしまいたくなるものね。私のスタンド：バステト女神の磁力にはまったら、もう決して術を破る方法はない』

第1話 戦いの年季

ジョセフ「確かにワシがはまったのう？」

葉山「どういうスタンドなのか興味がありますね」

承一郎「あれは中々気がつかない」

ジョセフ（本人）『ん？何でこんなところにコンセントがあるんじや？』バチイ！

感電の様子を波紋のスパークで代用するジョセフさん。器用だな。

ジョセフ「……………ウツプ！」

何でジョセフさんがえづくの？！

三浦「ジョースターさんはマライアを探す目印として足が抜群の女を探していたんだけど、たまたま同じような美脚のおばあちゃんがいてね……………そのおばあちゃんに迫られていたんよ」

あの女……………トラウマ作りのプロか？

あの戦いの数年前には朋子さんと不倫をして仗助さんを作っていたことを考えれば

……。なるほど……そらキツいわ。

マライア（陽乃）『触ったわね。ジョセフ・ジョースター。じわじわとなぶり殺しにしてあげるわ』

ジョセフ『新手のスタンド使いか！戦いにおける年季の違いというものを見せてやる！』

ドンパチ開始。それにしてもマライアの真似が上手いですね、陽乃さん。

陽乃「面識があったからねー。今は女だしお姉さんが適任でしょ？」
確かに。

それではマライアの必殺技……の前に、見ていて分かったマライアの格ゲーとしてのキャラクターを紹介。

マライアのスタンドはコンセントに擬態して触れさせる事で真価を発揮する。その為スタンドモードが存在せず、スタンドボタンを押すと指パッチンをして空中にコンセントが出現。

そのコンセントに触れさせることにより磁力レベルが上昇させる。必殺技の威力や当てやすさはこの磁力レベルに依存される形となる。

では必殺技。

『コレクション』。お玉とかハンマー、フォークにナイフ等の金属を飛ばす技。磁力レベ

ルが弱いと出したままその場に落下する。磁力レベルが強いと相手に飛んでいき、スピードやホーミング能力が増す。出した瞬間、くるくると回るので飛び道具の打ち合いには非常に弱い。

『感電黒焦げ』。史実ではジョセフさん達が食らいそうになつたらしい。ナイフを上空に投げ、切れた電線がバチバチいながら相手に迫る技だ。砂漠とか屋内ではどういう仕組みになっているのか問いただしたい気分だ。

『グンバツの足』。足からワイヤーを飛ばして相手を拘束する技。磁力レベルにより射程が変わる。これが男性キャラならば海老名さんがまたお腐れプレイを始めること間違い無いだらう。

………というように、磁力レベルによってマライアの性能は変化する。

一見ペットシヨップと同じように砲台キャラのように見えるが、かなり弱いキャラと言える。いかにコンセントを当てるのかが鍵となるだらう。

あ、終わった。かなり苦戦をしていた川崎さん。

マライア（陽乃）『まずはこの汚いジジイから始末したわ』

ジョセフ「誰が汚いジジイじゃ！」

陽乃「嫌ですよく♪演技です♪演技」

第2話 炎の魔術師

アヴドウル（三浦）『ジョ、ジョースターさん！貴様が新手のスタンド使いか！』
マライア（陽乃）『次はあなたよ。アヴドウル』

ドンパチ開始。

続いてスーパコンボを…嫌な予感がするなあ。

『アイアンクラッシュ』。アッパーのようにナイフを下から切り上げ、ヒットしたら周囲から様々な金属が飛んで来る。中には軽トラまでが。史実ではジジイとアヴドウルはそれを逆手にとってマライアをサンドイッチにして倒したのだから。

まあ、5年前は小町姉さんというはさんのスタンドラッシュに挟まれた形になったんだけどね。

そして次は…ん？

マライア『何想像してんのさ！』

セクシーポーズを取ったマライアの胸が異様に膨らむ。胸のポケットに仕込まれたポルトやナットを飛ばす。

八幡がえづく。どうやらこの技で危うくポロリしかけたようだ。そりゃトラウマもんだな。

三浦「ヒキオ……ホントに大丈夫？」

三浦さんが八幡にハンカチを差し出してくれた。おかんだな。

第3話 変幻自在の砂の猛獣

マライア(陽乃)『この犬……どうやらただのスタンドじゃあ無いみたいね。始末しておこうかしら』

イギー(結衣)『ガルルルルル!』

特筆するところは特になし。

第4話 誇り高き騎士

ポルナレフ(本人)『貴様。先ほど倒した男の仲間か!』

マライア(陽乃)『あら、アレツシーはやられちゃったの? ビチクソが』

第5話 裁くのは誰だ!

おや? 承太郎さんがここで登場? ラスボスは花京院さんか? D I O か?

承太郎(仗助)『てめえ……よくもジジイやポルナレフを……』

マライア(陽乃)『承太郎! あんたが最後よ』

承太郎(仗助)『野郎……』

最終話 戦慄の侵入者

おおっ! ラバーソールと同じく花京院さんがラスボスか!

花京院(海老名)『しまった! 到着するのが遅かったか!』

マライア(陽乃)『あら花京院。再起不能になったって聞いていたのに戻って来たのね』

？でも残念ねえ。たった今、承太郎は死んだわ。あんたも戻って来なければ死なずに済んだのに」

花京院（海老名）『例え僕一人だけになっても、D I Oは私が倒し、みんなの仇を討つ！』

マライア（陽乃）『ビチクソが！今すぐ殺してやる！』

中々迫真の演技だな。そして川崎さんは昨日の特訓もあつたからか、特に苦戦することなく花京院さんを撃破。

さて、気になるエンディングは……

エンディング

マライア『最後に言うけど、このゲームをプレイしてくれたあなた、中々素敵だったわよ。ほんの数分のゲームだったけど、そのプレイぶりから知的でユーモアがあつて長い経験から来る判断力があるということをあたしは感じたわ』

プレイヤーに向けてのメッセージだった。しかもかなりメタい！

確かに川崎さんは知能はあるし、長い経験からの判断力も高い。ユーモアは……どうだろう。どちらかと言えば真面目なタイプだからなあ。

沙希『ほとんど初心者者のあたしのプレイでそこまでわかるわけ無いじゃん』

ごもつとも。

マライア『そのお顔もチャーミングだったしね…。恋人になっても良いなんて思っ
りして』

プレイヤー、女ですよ？

沙希「いや、遠慮したいんだけど。あたしはレスじやあないから」
やめろ……。その手のネタが出てくると大抵……………」

海老名「(。|。)」

あれ？無反応……………」

八幡「お前がこの手のネタで反応ないってめずらしくね？」

海老名「逆ならおいしいんだけどね？」

そして八幡の方を向いて……………」

(。▽。)ニタア……………」

藪をつついた！

海老名「なにになに？ヒキタニくん、口では嫌がついててもヤツパリそつちもイケる口
？今なら選り取りみどりだよ！隼人くんも承一郎くんも歴代ジョジョも揃ってるし！

さあ！どうぞー！」

承一郎「八幡……………」

八幡「正直すまんかった……………」少し考えれば避けられた事だった……………」

沙希「……………バカじゃあないの？」

川崎さんに呆れられてしまう八幡……………。

おや？今度はアヴドウルさんの時みたいにな枚のカードが出てきて選択を求められている。

沙希「適当に選ぶよ」

川崎さんは左のカードを選択。猛烈にイヤな予感。

ワールドのガード。ヤツパリかよ！

マライア『でも……………あんたD I O様の魅力には遠く及ばないわよ。残念ね』
スタツフロール

……………あり得ん。ここで落とすか……………。ただ1つだけ言わせてほしい。

八幡「いらねえよ！こつちがお断りだよ！さっさと川崎を恋人にしろよ！」

ゴン！

沙希「あたしだっていらぬから。そもそもあたしだってノンケだよ！」

あれ？そうなの？大志君のせいで男に興味がないって感じだったから、つついそつちのケがあるのかと思つたのだが違うらしい。

と、なると……………。もう片方を見なければならなくなる。

そうなるともう一度プレイをしなければならなくなるのだが……………。勘弁してくれよ。

川崎さんはもう一度マライアでプレイ。今度はどうなる？

……二回、三回とワールドのガード。おのれマライア……何度俺を呪えば気がすむ。

ジョセフ「仕方ないのう？」

4度目の段階でジョセフさんがプレステにハーミット・パープルを巻き付ける。あ、その手があつたのね？

ジョセフ「右じゃ！今なら右が正解じゃ！」

乱数調整か！だからすぐに選ばせたのか。川崎さんはすぐさまジョセフさんの指示に従い、右を選択。

するとバステト女神のカードが出てきた。

マライア『D I O様よりあなたの方がちよつぱり良いかな……なんて』

スタツフロール

八幡「……結婚式には呼べよ？川崎。現物はもう50だけど」

静「ご祝儀は弾むから」

ゴン×2

沙希「だからあたしはノンケだって言ってるでしょ？頼むからあたしまで変態にしな
いでくれる？」

川崎さんの拳骨が二人の頭にブチ当たる。しかしアヴドウルさん同様に微妙って

……。

さあ！残るはDIOだ！

< || t o b e c o n t i n u e d ||

格ゲー『未来への遺産』を見学しようその⑤

八幡「さあ！真打ち登場！このD I Oがやる！」

ここまで3日間。ついに八幡がプレイをするときがやってきた。

まずは無印の影D I Oからやるようだ。

コマンドを確認して……アレツシーでスタートボタン、デーボでスタートボタン、チャカでスタートボタンを押した後にミドラーさんとスタートボタンを三回。するとノーマルD I Oが出現。更にD I Oでスタートボタンを五回押しして最後は長押しすると……D I Oが影D I Oに変わった。これで影D I Oがスタートする。コナミコマンドかよ。

葉山「あれ？今度はストーリーが流れないんだな」

うん。若ジョセフの時も無印ではストーリー無しだったからそうじゃあ無いかと思っていた。

影D I Oの必殺技。何度か出てきた時にわかっていたのだが、影D I Oにもスタンドゲージが存在しない。つまりスタンドモードが無いと言うことだ。

代わりにスタンドボタンを押すと、ブオン！という音と共に影に覆われたザ・ワールド

ドのシルエットが飛び出して攻撃をする。射程は若干短いものの、スピードが速く、威力もそこそこ。これだけでもゴリ押し出来る程のチート性能だった。

それでは必殺技。

『馴染むぞー!』。食らい中でもガード硬直中でも成立するコマンド投げ。相手を掴んで空中に持ち上げ、腕から血を吸う技。何がチートってこの食らい中でもガード硬直中でも発動するというイヤらしさ。対戦ならまず近付けない。

『恐怖の片鱗』。突然ワイングラスを片手に本を読み始めて隙だらけになる影D I O。どこから取り出した? その本とワイングラス。それ、中身血だろ? (八幡体談) しかし、僕達はもう知っている。これは当て身系だ。そして、投げを除く全ての技に反応する。飛び道具でも。

そして当て身が成立すると本が落ちて相手の背後に瞬間移動。相手は結構な時間硬直するので影D I Oが先にできる。コンボ確定技。

うん、チート。

『スロウナイフ』。大量のナイフを二回投げる飛び道具。

投げるまで一回W R Y Y Y Y立ちをするので若干隙が発生。しかし、投げた後の隙は皆無。

『空裂眼刺驚』。はい来ました。百年前の技です。

しかし分かったことは別に溜めが必要無いと言うこと。影DIOは通常のコマンド技で、ボタンを押しっぱなしで溜めが発生。5秒程溜めるとガード不能になる。

『WORLD21』。ジョセフさんや僕を苦戦に追い込んだのがこの技。シルエットのザ・ワールドが三連撃をかなりのスピードで放つ上に浮かしダウンを奪える。更にその間はDIOも自由に動けるのでかなり凶悪。

流星はラスボスの隠しキャラ。

スーパーコンボ

『バニツシユメント』。シルエットのザ・ワールドが突進。決まると承太郎に対してやったように四方八方からナイフが現れて突き刺さる。実用性はともかく見た目はカッコいい。

『カリスマッ!』。いわゆる肉の芽飛ばし。ポーズを取ってから発動までが時間がかかると。発動後、トロイスピードの肉の芽が複数出てくるが、しばらくすると消える。しかし、この技、消えるまでは相手をホーミングして追いかける上にガード不能。起き上がりに重ねるとかなり強力……というかチート。

『時よ止まれッ!』。ザ・ワールドの代名詞である能力、時止め。承太郎のスター・プラチナ・ザ・ワールドと同じ技で、発動するまで3ゲージを消費し、時が止まるとスーパーコンボゲージを消費し続けるところも同じ。

ゲージが無くなると時止め終了。はつきり言つて見せ技。

結論から言えばスーパーコンボは『カリスマツ!』を除いては微妙な性能だったが、とにかく必殺技がチート過ぎる。

良いのかな……こんな楽で……。

影D I Oは無印では若ジョセフと同様に最終話の承太郎さんを倒した後もエンディングも存在せずにそのままスタッフロール。

八幡「ま、これは予想が付いていたけどね。未来への遺産では若ジョセフと同じようにオーブニングとエンディングがあるかもな」

葉山「だったらそっちを先にやれば良かったんじゃないのか?」

そうなんだけどね? 一応の確認を試みたらしいんだよ。それじゃ、本命の未来への遺産における影D I O、『邪悪の化身D I O』をプレイを見てみよう。

オーブニング

ナレーション『日本からジョースターの血を受け継ぐ者達が来ると感じたD I Oは、彼らを始末するために出向くところだった。そこにエンヤ婆という老婆が話しかけてきた』

自分から出向くパターンか。史実では部下任せだったからな。

エンヤ婆『何を案じておるのですか?』

D I O 『ジョースターの血統は侮れん。D I O の運命の歯車から奴等を取り除く』
エンヤ婆 『侮れないというだけでわざわざ出向かれるおつもりですか？』

まあ普通は止めるだろうね。ラスボスなんだし。

D I O 『そうだ。このスタンドのとてつもない力も試してみたい』

そういうストーリーか。

承太郎 「もし本当にD I O が自ら動いていたら色々違った現在があつたかもな」
承一郎 「本当にそう思います。中間デモが想像するしか無いというのが残念ですね」
それは通常のD I O までのお楽しみだな。

第1話 誇り高き騎士

ゴン！

徐倫 「自分の番だけ盛大にしようとするんじゃない！巻きで行くよ？巻きで！」

どうやら自分のが回ってきたのをいい事に盛大にしようとしてたようだ。

D I O (八幡) 『ポルナレフウ……もうここまで来るとはな』

ポルナレフ (本人) 『D I O ツ！バカな！自ら出向いて来たのか！』

D I O (八幡) 『そんな事はどうでも良い。どうだ？ポルナレフ。もう一度私の為に力を使つてみる気はないか？』

ポルナレフ (本人) 『私は今、白の中にいる。二度とお前に屈する事はない！』

D I O（八幡）『そうか。なら死ぬしかないなあ！ポルナレフウ！』

圧倒的な性能でポルナレフさんを撃破……チートだな。

第2話 炎の魔術師

D I O（八幡）『見つけたぞ。アウドウル……』

アウドウル（三浦）『デイ、D I O ツ！』

確か史実でジョセフさん達の旅に出る前、アウドウルさんはデイオから逃げたんだつたよね。

D I O（八幡）『以前は逃げられたが、今度は逃がさんぞ』

アウドウル（三浦）『こうなったらやるしかないし！覚悟しろし！』

D I O（八幡）『フンツ！向かってくるか。マヌケめ！以前のように脇目も振らずに逃げていれば、まだ助かっていたかも知れなかったのになあ！』

葉山「ヒキタニ……その柄の悪さは何だ？いつもの雰囲気とも違うみたいだが……」

承一郎「この男はD I O。八幡の前世の片割れであり、僕の父親さ。残念な事に、コレがD I Oという男なんだ」

そう、いつもは紳士ぶってるが激昂するとその仮面を殴り捨ててクソみたいな本性をさらけ出す。その生まれ変わりが八幡だから不思議だったらありやしない。

第3話 戦慄の侵入者

花京院さんか……頼むからネタをぶつ込まないで下さいよ？

花京院（海老名）『デイ、D I O ツ！』

D I O（八幡）『花京院……もう一度私の為に力を使ってみる気はないか？友達に戻る
う……』

花京院（海老名）『良いぞ、D I O』
ん？

花京院（海老名）『仲直りの握手代わりに……』

んん？ちよい待て。まさかこの人……

花京院（海老名）『ヤラナイカ？』

ドンガラガツシャーン！

再びずっこける僕達。ネタをぶつ込んできたよ！ヤツパリネタに走りやがったよ！
この人！

八幡「やらねーよ！そもそも前世の自分を殺した犯人その物だろ！つうかお前、今のお前は女だからね!?色々とアウトだろ！」

いろは「ハチくん？」

八幡「だからやらないから！ゲームでも現実でも！」

陽乃「そうだよ！やるなら私に！」

小町「いや、小町に！」

八幡「状況をよりややこしくするんじゃない！ええい！フォローは無理矢理だがこうだ！」

D I O（八幡）『しばらく見ないうちに腐ってしまったようだな花京院。例え優秀なスタンド使いとも言えども腐った奴の血を飲む気にはならんなあ！死ぬしかないなあ！花京院！』

この当時、「腐女子」という言葉はなかったはずだから、「腐る」の表現は適当では無いとは思うけど他に言葉が見つからなかったのだろうし、なによりこの空気から脱したかったので時代考証は無視することにきめた。

花京院（海老名）『後悔するぞ！』

しないな（断言）。

葉山「……戸部、考え直した方が良いぞ……」

相模「だね……」

うん、やめた方がいいですよ（こっちの世界を通して知ってる）。

ドンパチ終了。

D I O（八幡）『ある意味で恐ろしい相手だった……始末して正解だった。このD I Oが恐怖を感じるとはな』

承一郎「ある意味では本当に恐怖だよ。海老名さんのそれは……」
僕もフロリダで呪われたからね。この恐怖だけは乗り越えられる気がしない。乗り越えたら終わりだ。

第4話 変幻自在の砂の猛獣

D I O（八幡）『こんな犬ところまでこのD I Oに楯突くとはな……』

イギー（ペットシヨップ）『クエツ！』

イギー（静）『こいつさえ倒せば俺は自由だぜ！』

イギー編を見てイギーの役をイメージ出来るようになったんだね静さん。

第5話 戦いの年季

ジョセフ（本人）『ぬっ！この感覚は！近くにあのクソツタレがおるな！』

D I O（八幡）『ロードローラーだ！』

ジョセフ（本人）『危ない！』

D I O（八幡）『ほう………今のを避けるか………流石はジョセフ………ジョナサンの孫なだけはあるな』

ジョセフ（本人）『いつの間にこんなものを頭上に……ハーミット・パール&太陽のエネルギー！波紋！』

D I O（八幡）『無駄無駄無駄無駄あ！貴様のスタンドが一番なまっちよろいぞ！古い

ぼれめ!』

ジョセフ（本人）『また消えよった!そうか!お前の能力は時を止める能力か!』

D I O（八幡）『わかったからどうだと言うのだ!貴様は血を吸って殺すと予言しよう!』

ドンパチ。終了。本当に血を吸ってフィニッシュ。

ジョセフ（本人）『なんて事じゃ……こいつはやばすぎる……』

最終話 裁くのは誰だ!

承太郎（仗助）『じ、ジジイ……』

ジョセフ（本人）『承太郎!D I Oのザ・ワールドの能力は時を止める能力じゃ!』

D I O（八幡）『どれ……残りの血も頂くとするか……ズキューーン!』

D I O（八幡）『絞りカスだ……ジョナサンの孫、ジョセフ。これで貴様は死んだ』

承太郎（仗助）『こんなところを見せられて、頭にこねえ奴はいねえ……』

D I O（八幡）『ほう……近付いて来るか、承太郎!』

承太郎（仗助）『近づかなきゃお前を殴れないんでな』

ドンパチ!終了。

承太郎（仗助）『はあ……はあ……死ねッ!D I O!』

D I O（八幡）『無駄あ!』

承太郎（仗助）『バ、バカな！この俺が……この俺があああああ！』

D I O（八幡）『フンツ！バラバラになったか。残りの部分から血を頂くとしよう。吸えるだけの血が残っていればの話だがなあ！』

エンディング

館の中に佇む影D I O。足下には食料となったと思わしき女性の遺体が、喉に大穴を空けて転がっている。もしかしたらウンガ口達の親だった女かも知れない。

ナレーション『D I Oの守護霊のとてもない力で、ジョースターの血は途絶えた……。彼の悪運の強い変わった人生はこの守護霊の影響であり、それから彼は生き続けた』

D I O『ジョナサンの子孫どもか。始末するべき宿命、抹消すべき因縁を断ち切った。世界の頂点に立つものは、ほんのちっぽけな恐怖を持たぬもの……。奴等を始末した事で、このD I Oは恐怖を克服することができた。フッフッフ……』

スタッフロール。

実際、D I Oが自分から動いていたならば、こういう結末になっていただろう。

自力で天国に到達し、オーバーヘブンを手に入れて……。

D I O編がどういう結末かわからない以上、八幡達が挑んだというE O H事件で現れたD I Oはこのストーリーと仮定しよう。

それでは最後のオオトリだ。ノーマルD I O版を見てみようじゃあないか。

格ゲー『未来への遺産』を見学しようその⑥

さて、アーケードモードもやつと最後の一人、D I Oのストーリーになった。

思えば長かった。たった3日間なのに、一月近くの時間が経った気がする。当然、ラストは無印だ。

八幡「やつとラストか。長かったな……」

静「うん。色々と技とかで参考になるのもあったしね。勉強にもなったよ」

一部の技は実際に使えそうだったしね。さて、始めようか。最後の物語を……。

オープニング

ナレーション『D I Oは今、100余年をめぐるジョースター家との因縁の決着を迎えようとしていた……。数々の刺客を送るも次々と打ち破るジョセフ、承太郎ら四人の間達はついにD I Oの館内に侵入、今まさに目前まで迫っていた』

こっちは史実の通りに進んでいるわけか。画面はD I Oの前で跪いているヴァニラ・アイス。

D I O『ヴァニラ・アイスよ……ヤツらは任せたぞ』

ヴァニラ・アイス『必ずしとめて……ごらん……いれます』

クリームを纏って消えるヴァニラ・アイス。しかし、『貴様なんぞにいいい！』といって断末魔の声をあげるヴァニラ・アイス。

D I O 『ヴァニラ・アイスめ……しくじったか……。来るがいい……。ジョースターどもッ！』

いきなり上着を吹き飛ばして最終決戦スタイルになるD I O。

相模「こんな時に言うのもなんだけど……比企谷って前世の方がイケメンっぽくない？」

確かにディオやジョナサンの方がイケメンだけど、言つてあげない方がいいよ、それ。場面は又ケサクが棺を開け、そして又ケサクを始末するシーン。

ナレーション『D I Oの手下、又ケサクの案内で、最上階の部屋まで来た承太郎達』

承太郎『D I Oはその棺桶の中か？』

ジョセフ『又ケサク、その棺桶のフタを開ける！』

又ケサク『く、くそ。D I O様、こいつらをぶっ殺して……』

中から出てきたのは切断された又ケサク。そう、ディオ時代のこの場面で八幡は時を止め、役立たずだった又ケサクを始末すると同時に棺の中から脱出した。

葉山「こ、これは酷い………」

八幡「………だが、史実だ」

エグい場面ではあるが、これは本当に起きた事だ。

ヌケサク『えっ……オレ!』

花京院『どうしてヌケサクが棺桶の中にツ!』

承太郎『なにかやばいぜ……』

ジョセフ『逃げろっ!!』

そして夕暮れから夜へと移る。

ジョセフ『凄まじい殺気だ!あのままいたら確実にやられていた!』

花京院『まずいです、太陽が見えなくなっている…奴の時間が来てしまった……』

D I O 『フン』

第1話 炎の魔術師

アヴドウル戦。つまりヴァニラ・アイスは誰も倒すことができなかつたというI Fらしい。

アヴドウル『D I O!』

D I O 『フン、アヴドウル、お前に私が倒せるのか?』

アヴドウル『私はお前を倒すためにこの旅をしてきたのだ!』

D I O 『よかろう。やってみろ!』

ノーマルD I Oには中間デモが存在していた。最後の最後まで小芝居はキツかつた

からな。葉山と相模も小芝居の意味がやつと理解できたようだ。

確かに一度目にしないとイメージが付きにくいかもね。

ではここでD I Oの必殺技を紹介。

『無駄無駄』。ご存知無駄無駄ラッシュ。スタンドモードと本体モードで両方使用可能。スタンドモードだと空中でも出せる。

『無駄あー!』。スタンドモードだと承太郎のマツハオラと同質の技。ザ・ワールドが高速の突進をして渾身のパンチ。2発目に追撃が可能なところも承太郎と同じ。

本体モードだとザ・ワールド消えながら移動し、本体の反対側から攻撃する。もつとも、本体が動かないので完全に死に技である。

『ザ・ワールド』。拍手をした直後にワープする技。いわゆるヨガテレポート。本当に単なる移動技。

『空裂眼刺驚』はい、きましたこれ。ノーマルD I Oだとボタンの組み合わせによるコマンド。やっっている過程で強ボタンを押すのでCPUが扱うように妙なハイキックを空振りをする必要がある。もつとも、別の動作をしている間にコマンドを入力することも出来るので、必ずしもハイキックをしなければならないルールは無いが。

ちなみにノーマルD I Oでは溜め動作を必要とせず、ガード不能。代わりに発射するタイミングは固定される。空裂眼刺驚もやはり死に技だな。

ノーマルD I Oの扱い方は基本的に承太郎と同じ扱いで良いだろう。次の対戦でスーパーコンボを試そう。

D I O 『フン、他愛ない』

第2話 変幻自在の砂の猛獣

D I O 『この犬もジョースターの仲間か？』

イギー 『ガルルルル！』

D I O 『貴様も死ね』

史実と違うと適当な所は他のキャラと変わらん。それではスーパーコンボ。

『チエックメイトだ！』。無数のナイフを投げる。影D I Oの必殺技と同じだが、影D I Oは二回投げたのに対してこちらは一回だけ。しかし威力は段違い。

『ロードローラーだ！』僕も使ってきたあれだ。史実では承太郎に使った技である。突然垂直に飛び上がり、画面外へ。ロードローラーを落として相手を踏み潰す。ガード可能。ロードローラーが決まるとD I Oが上からロードローラーの上に乗る、そこからD I O本体がロードローラーを上から無駄無駄ラッシュ。

フィニッシュはロードローラーが爆発してエンド。史実では爆発なんてしなかったけど。え？タンクローリー？なにそれ？

『時よ止まれッ！』説明不要。承太郎や影D I Oと同じ。

以上がD I Oのスーパーコンボ。ナイフが凶悪すぎる。
対戦後

D I O 『ん？あれは花京院か？』

第3話 戦慄の侵入者

場所は時計塔ステージへと移る。

D I O 『ヌウ！これは……花京院のハイエロファント！』

花京院 『くらえッ！D I O！ハイエロファントの決壊を！』

D I O 『マヌケが……知るがいい、我がワールドの真の能力を!!』

この辺りは史実通りだな。戦後。

花京院 『く、くそ……』

ジョセフ 『花京院！』

花京院 『食らえD I O！エメラルド・スプラッシュをー！』

D I O 『ザ・ワールド！』

背景がモノクロになり、ザ・ワールドが花京院さんの腹部に拳を入れる。腹パン貫通ってヤツだ。花京院さんは背景の給水塔にめり込み、再起不能。

ジョセフ 『え!?バカな！花京院!!』

D I O 『ジョセフ、次はお前だ』

ジョセフ『ディオオオオオオ！』

そして花京院さんからエメルルド・スプラッシュが飛んできて、時計が破壊される。

花京院『せい……いつぱいの……メッセージです……』

ジョセフ『花京……院』

D I O『フン』

ジョセフ『わかったぞ花京院！お前の命をふりしぼったメッセージが！D I Oのワールの正体は、時を止める能力だったのか！』

D I O『だからどうしたと言うのだ。貴様に何が出来ると言うのだ？』

ジョセフ『こいつはヤバすぎる！D I Oの秘密を承太郎に伝えねば！』

D I O『フン、逃がすか』

ここで第3話は終わり。概ね史実通りだ。

海老名「コレが私の前世の最期だね」

相模「これって……本当に過去にあった事なんだ……」

友人の前世の本当の最期を知り、シヨックを受ける葉山さんと相模さん。このシーンは昨日や一昨日、散々見てきたから僕達はなれてしまったが。

第4話 戦いの年季

ジョセフ『花京院の死は無駄にはしない！』

D I O『行くぞ、老いぼれめ!』

みじかつ! ジョセフさんの話が短い! 貴様のスタンドが一番なまっちよろい! とか、抜け目のないジジイめ! とか、そんなやり取りが丸々カットされてる! このゲーム、若ジョセフとかいるわりにはジョセフさんの扱いが悪いのは気のせいか?

第5話 誇り高き騎士

カイロの路上。D I Oの足元でジョセフさんが倒れている。

D I O『残るは承太郎とポルナレフか……』

承太郎『じじい……』

D I O『次は承太郎! 貴様だ』

承太郎『……野郎、D I O……』

承太郎さんとドンパチ。あれ? タイトルは『誇り高き騎士』だからポルナレフさんじゃないの? 何で承太郎さん? いや、確かにこの段階で承太郎さんと戦うのは史実通りだけどさ。

疑問に思いながらも八幡は承太郎さんから1セット取る。すると、第2ラウンドが始まる前に中間デモが出てきた。

承太郎『うう………』

場面としては大量のナイフを投げた後か? D I Oの足元に承太郎さんが倒れている。

ＤＩＯ『ポルナレフはどこかに潜んでいるな…。フン、どうでも良いがな。承太郎に完全なるとどめを刺すとするか』

ポルナレフ『くたばりやがれ！ＤＩＯオオツ！』

ＤＩＯの後方から降ってくるポルナレフさん。それをＤＩＯはパンチで殴り飛ばす。相模「ポルナレフさあぁん！」

ポルナレフ「落ち着け。この段階では私は殺されていない」

八幡「史実だと奇襲は成功して頭に剣が刺さるんだがな。ここではそこがカットされているみたいだ」

作り込まれているのか手抜きされてるのか……

ＤＩＯ『フン、このＤＩＯを倒すことはできません。まあ、いい。花京院とジョセフは始末した。承太郎の前にお前を殺すでしょう』

ドンパチ開始。これが第２ラウンド扱い。

三浦「あんさー……」

あ、スルーしようとしてたけどヤツパリ突っ込みが入ります？ですよねー。ええ、先程のＤＩＯの言葉。『花京院とジョセフは始末した』と言うところ。

確かに史実ではこの段階でＤＩＯが倒したのは花京院さんとジョセフさんであることには間違いない。しかし……しかしだ。このＤＩＯ編では……

三浦「このD I OはアヴドウルとイギーもD I Oが殺つてるよね？何であーしらはスルーされてんの？」

葉山「た、確かに……言われてみれば！」

相模「どういうこと？比企谷？」

あれ？ヴァニラ・アイス編で説明されてなかったっけ？されたよね？

八幡「史実ではアヴドウルとイギーはD I Oではなく、ヴァニラ・アイスが殺した。多分話数の関係でこの話ではアヴドウルとイギーは出ていたが、本来なら二人はD I Oと戦うことなく死んでいた。スタッフは史実を優先するあまり、その事を忘れていたんだと思う。っていうか、その辺りの苦情はC A P C O Mにお願いします」

そこを突っ込むのは多分、僕達……というより三浦さんくらいしかないだろうけどな。

対戦終了後

D I Oを挟む形で承太郎さんとポルナレフさんが倒れている。

D I O『惜しかったな、ポルナレフ』

ポルナレフさんの方を見ていたD I Oの背後から、承太郎がスター・プラチナを出し

て……

承太郎『オラアッ！』

D I O 『な、なにいいいい！』

D I O を殴り飛ばす。史実では心臓の音を確かめたり、ジヨセフへの逃走経路のやり取りをしたりでもっと高度な心理戦と戦略の応酬で、こんな雑なものでは無かったんだけだね？

最終話 裁くのは誰だ！

場面は最終決戦のあの懐かしき橋だ。何故かそこでジヨセフさんの血を吸っているD I O。

D I O 『ふん!! やはり生きていたか、承太郎! しぼりカスだ! フフフフフフ』

承太郎 『野郎! こんな事を見せられて頭にこねえ奴はいねえ!』

D I O 『最終ラウンドだ!』

実際は最終ラウンド1つ前なんだけどね? このやり取りは。

ゲームでは八幡の腕ではギリギリだったが、やっと終わった。

エンディング

D I O 『これでジョースター家御一行の全滅というわけか! 馴染む! 実に馴染むぞお! フハフハハハハハハハハハ!』

ナレーション 『もはやD I O を止められる者は誰もいない。絶対的な恐怖する闇の世界。D I O がその野望を実現するまでに、再び朝日が昇るまでの時を必要としないだろ

う……』

ＤＩＯ『ザ・ワールド！時よ止まれ！』

スタッフロール。

………：必要とするわ！どうやって海を渡るんだよ！物理的に無理だろう！それに簡単にいくんならウルフスの問題なんて片付いてるわ！そこまで万能じゃあないだろう！

ザ・ワールドより強くなってるザ・ジエムストーンだつてそんな強くないぞ！あ、ザ・ワールド・オーバーヘブンなら可能かもしれないらしい。八幡はオーバーヘブンを否定したけど。

でもこの時代、オーバーヘブンは明るみに出ていなかったよな？もしオーバーヘブンを見越した上でのＤＩＯのエンディングが作られていたならば、ＣＡＰＣＯＭの製作者の中にスタンド使いがいたの？トト神を上回る予言だな？

八幡「………とりあえず、これで全て終わりか………」

承太郎「意外に時間が掛かったな」

承一郎「ヤレヤレ……次はマトモな用事で呼んでくれよ？」

まあ、僕もかなり楽しめたからいいけどさ。今度はちゃんと前もって言って欲しいよ。

こうして、僕達のスターダストクルセイダースを振り返るゲーム大会は終わりを告げた……。

僕は自分の世界に帰り、八幡達は来週から修学旅行だ。文化祭、体育祭と大変だったらしいからね。せめて普通の修学旅行で終わってくれることを願う。

………後日

八幡達が修学旅行が終わった数日後……

白良「D I O O ♪この世界とかはちまんくんとか承一郎君たちを題材にした格闘ゲームを私の旦那が作ったんだけど、テストプレイするつもりはない？」

八幡「は？」

規格外、降臨。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

第0章―Vが目覚める― クリスタルの謎その①

2009年、一条家――

承一郎「…やあっ！」

ある朝、剣道場で承一郎は木刀を振る。

？「はあっ！」

だがそれは相手の木刀によって阻まれてしまう。

承一郎「今度は勝たせてもらうよ、信乃」

信乃「50勝50敗50引き分け…この一勝は譲れませんよ、若」

承一郎は相手――信乃と鏝迫り合いをしながら会話をする。

承一郎「せあっ！」

承一郎は右斜め切り上げをするが…

信乃「甘いつ！」

信乃に躲され、カウンターの攻撃をくらってしまった。

承一郎「痛っ！」

承一郎は木刀を腹にくらい、倒れてしまう。

信乃「私の勝ちですね……」

承一郎「うーん、また信乃に負けたな……」

少年、信乃は集英組の中で義父、一征の次に承一郎が心を開いた相手である。

同年代であるのもだが、今では承一郎とは兄弟のような間柄だった。

信乃「若もなかなかの腕前ですよ。もう組に勝てる人間なんてそんなにいないんじゃないんですか？」

ちなみに承一郎は信乃に若と呼ばれていた。竜達は坊っちゃんと呼ぶのだが、同年代で坊っちゃんと呼ばれるのは嫌で承一郎がそう提案したのである。

承一郎「父さんと竜には一度も勝てないけどね」

汗だくになった体をタオルで拭きながら、先程の勝負の事を話す。その肉体は、どちらも鍛えられたものだ。

竜「坊っちゃん、組長オヤジが呼んでいやした」

承一郎「ああ、すぐ行く」

そう言って、承一郎は一征の部屋へ向かった。

一征「おう、来たかイチ」

承一郎「何だい父さん。仕事かい？」

一征「ああ、南米の荷物の護送だ。本当は俺が行きたいんだが、あいにく別の件で行けなくなつてな。頼めるか？」

一征は後の『ビーハイブ』のボスであるアーデルトと繋がりがある事で分かる通り、世界中にパイプがあるのだ。だから世界各国から依頼が来る。

承一郎はその仕事をたまに手伝っているのだ。

仕事の内容はポリビアでの荷物の護送。特に危険性はないと判断して、一征は承一郎は仕事を頼んだ。

承一郎「分かったよ父さん」

信乃「今回の任務は私も一緒に行く事になりました。よろしくお願いします！」

信乃はそう言って承一郎に頭を下げる。

一征が信乃を同行させたのは彼の『スタンド能力』が頼りになるからだ。

信乃のスタンドは『村雨』という刀のスタンドだ。『アヌビス神』と同じ実体のある本体がないスタンドだ。もとは信乃の家系に代々受け継がれているものらしい。

能力は水が進るといふ聞くだけなら貧弱そうな能力だが、水を勢いよく進らせる事に

よって遠くの敵に水圧カッターで攻撃出来るという強力なスタンドだ。

承一郎「そんなにかしこまらなくて大丈夫だよ。いつも通りで頼むよ」

承一郎は『スタンド』については別に気にしない人間だった。自分にも『波紋』の技術やら『吸血鬼』の体質やらがあるから、『波紋』ならぬ『幽波紋』^{スタンド}という概念はあるだろうと思っていた。

それに承一郎は『スタンド』を見る事が出来るので寛容だった。『スタンド』は『個性の延長上のもの』という考えだった。

信乃「はい、若！」

一方その頃…

男？「…よし、用意はいいか？」

男1「ハッ、必ずやあのお方の『遺体』を手に入れてご覧にいきましょう」

男？「期待しているぞ…。我が祖国のために、必ず手に入れるのだ」

男1「かしこまりました」

悪意が、牙を向く。

クリスタルの謎その②

ポリビア——

信乃「若、やはりこの仕事奇妙ですよ。護送任務だから敵の妨害が予想されていたのに、全然来ませんよ」

承一郎と信乃はは数人の組員を連れてポリビアへやって来た。そして護送するトラックを後ろから車で追っていた。

承一郎「ああ、確かに奇妙だ。だけど妨害がなかったら良かったで良しでしょう。今は任務に集中するんだ」

信乃「はい、若」

承一郎は信乃にそう指示する。ある荷物の護送任務、依頼が来るほどという事はそれなりに何者かが介入して来るというのは予想されていたが、現状全くそんな様子はない。

だが油断は禁物だ。相手はいつどこから襲って来るかは分からない。

承一郎「それに問題は荷物の中身だ。後でこつそりと確認するが、気をつけろよ」

信乃「分かりました」

一番注意すべき点は荷物の中身だ。後で隙について確認するが、ヤバイものだったら即任務を降りる気だ。

ヤクザ「そういえば坊っちゃん、学校とかで好きな子とか出来ましたかい？」
車を運転する組員が急にそんな話をしてきた。

承一郎「なんでそんな話始めるのさ…。うゝん、まだいないかな」

信乃「そういえば若は昔女の子と何か約束していましたよね？」

承一郎「えっ？ そうだっけ？」

信乃「若、すっかりして下さいよ。そのペンダントの約束の女の子ですよ。忘れたんですか？」

承一郎「いや、約束の内容が少し曖昧で…それにその女の子の顔が思い出せないんだよ」

信乃「そうなんですか？」

承一郎「ああ…それよりさ、信乃の方はどうなんだい？」

信乃「えっ？ 私ですか？」

承一郎「そうそう、信乃は結構人気があるじゃあないか。でもそういつた話はないし…」

信乃「…私は、その、昔若と遊ばれていたお嬢さんの側にいた女の子が…」

意外ッ！それは鶴ッ！

承一郎「へえ〜！信乃にも初コイの相手がいたんだ〜！」

信乃「だ、誰にも言わないで下さいよ！」

承一郎「はいはい…また会えるといいね」

信乃「…はい」

信乃は少し頬を赤らめてそう答えた。

信乃「…若」

承一郎「ん？」

信乃「若の夢って何ですか？」

承一郎「夢か…今のところ警察官になって…」

ヤクザ「ええっ?!?坊っちゃんポリ公になるんですかい?!?」

承一郎「いやいや、まだ途中だよ。僕の夢はね…警察になって、表と裏で街を守りたい。それが僕の夢なんだ」

信乃「…なるほど。じゃあ要鍛錬ですね、若」

承一郎「げっ、藪蛇だったか！」

車の中に、笑いが広がった。

夜、ビル前——

信乃「若、着きました」

承一郎「皆、戦闘準備！」

ヤクザ達「「ハイ！」」

承一郎達は一斉に車に降り、運転席に移動する。

運転手「なんだお前ら、何か？」ガクツ

運転手は承一郎の瞳を見た瞬間に催眠術をかけられ、意識を失う。

承一郎「どうだい？」

ヤクザ「坊っちゃん、このトラック：何もありませんぜ」

荷物の中身は、なんと空だった。おそらく運転手でさえ、自分が何も積んでいないトラックを運転していただなんて夢にも思っていないだろう。

運転手も、利用されていたのだ。

承一郎「クソツ、つまり僕達は：ツ！」

信乃「嵌められた：ツ！」

ジャキツ！

一同「「う！」」

いつの間にか承一郎達の周りには何人もの男達が銃を構えていた。

承一郎「…何の真似ですか？」

？「お前達はここで始末される世界だったのだ。元からな」

銃を構える男達の中から、一人男が現れた。

マイク・O「私の名はマイク・O。あのお方の『遺体』を返してもらおうぞ、一条承一郎。それは元々我が祖国の世界のものだ。お前の『母』が『奪った』ものを返してもらおうぞ」

承一郎「…何の話ですか？」

マイク・O「…そこまで頑なに知らぬフリをするというのなら、話したくなるような世界にしてやろう」

マイク・Oは懐から何本かの釘を取り出し、釘に向かって息を吐いた。

その釘はまるで風船のように膨らんだ。そしてだんだんとバルーンアートの犬の形になっていく。

マイク「我が『チューブラー・ベルズ』でな…。じつくりと捕らえて拷問してやる…」

あのお方の『遺体』の在り処を吐きたくなるような世界にな！」

信乃「話はそれだけですか？」 シュカアアン！

信乃は刀、『村雨』を抜く。その刀からは、濃い霧が発生した。その周囲の人間の体が水分の多さで湿っている。

信乃「つまり、あなた方は敵……ならば倒すまで！」

マイク・O「お前ら、撃て！」

カチイッ！

マイク・Oが男達に指示し、引き金が一斉に引かれる。

しかし、銃から発射されるべき弾丸が発射しない。

男達「なっ!?」「どうなっているんだ……!?」

承一郎「マイク・Oと言ったな？あなたが長々と自分のスタンドや話をしている間に僕達はすでにこの数の銃への対抗策を打ち出したのさ。つまり、『村雨』の迸らせた水によつて火薬を湿らせる』事を考えたのさ」

マイク・O「なんだと……ッ!?」

承一郎「この人数の多さに油断したでしょう？ですけどね、拳銃チャカが怖くてヤクザなんてやつてられないですよ！」シユカアアン！

承一郎達も信乃に続いて刀を抜き、もう片方の手に銃を構える。

承一郎「集英組次期組長、一条承一郎……参る！」

戦いが、始まる。

クリスタルの謎その③

マイク・O「お前ら、早く弾を替えろ！」

男達は一齐に火薬が湿気って使い物にならなくなった弾丸を入れ替えようとするが、

信乃「甘い！ 迸れ！ 『村雨』 ツ！」スパアアアン！

信乃の『村雨』による水圧カッターが銃を切断する方が早かった。

承一郎達はしゃがんでそれを回避した。

信乃「その首、もらったッ！」

『村雨』の水圧カッターがマイク・Oの首に迫るが、

？「あらよつと！」ボオツ！

ジュワアアアア……！と水圧カッターと突然現れた炎が衝突し、蒸発する音が聞こえた。

？「マイク・Oさんよ、ここは俺が引き受けようか？」

マイク・O「……そうだな、ここはお前に任せる世界だ。『ジェットストリーム・サム』」

信乃「させるかッ！」

信乃はマイク・Oに向かって斬りかかろうとするが、

サム「ふっ！」

それを遮ってサムが信乃に刀を振るう。信乃は村雨で受け取め、続けて振るわれた横薙ぎの一撃をバク転で避けた。

サム「無視は困るな」

承一郎「信乃……」

信乃「ええ、この男……他の奴とはレベルが違う。はつきり言って強い」

承一郎「……信乃、僕達はマイク・Oを倒す。君はこの男を……」

信乃「若……気をつけて」

承一郎「分かっている」

承一郎達はマイク・Oを追う。

サム「さて、手合わせ願おうか……」

信乃「いいでしょう。あなた……名は？」

サム「サム、サムエル・ホドリゲスだ」

信乃「そうか、僕は犬塚信乃だ。……いざ、参る！」

承一郎達はビルの中に逃げたマイク・Oを追うが、信乃がサムと戦っているので火薬が湿気る事がないのいい事に男達が銃を乱射しているのを遮蔽物で防いでいる。

ヤクザ「坊っちゃん、このままじゃあギリ貧ですぜ！」

承一郎「分かっている！あそこのタンクを撃て！」

ヤクザ「ハイ！」ダアン！

組員はタンクに弾丸を放つ。すると、タンクは着火して、ドグオオオオン！

という爆発と共に男達が吹っ飛んだ。

承一郎「よし、行くぞ！コンタクト！12時の方向、サブマシンガン！」

ヤクザ「了解！」ダアン！

男「ぎやああ！」

承一郎の指示で次々と男達を倒す。

ヤクザ「坊っちゃん、あのスタンド能力……」

承一郎「ああ、何かヤバイ感じがする」

承一郎達が進むと、アヒル形のバルーンアートの群れがビルを埋め尽くしていた。

承一郎「皆気をつけて！さっきあの男は金属を風船のように膨らませていた！つまり

……

マイク・O「この世界は私の能力の世界だ」

マイク・Oは風船の群れの中から姿を現した。

承一郎は銃をマイク・〇に向けるが、ズドオオン！

と上からブリキ製のシャッターが承一郎の腕を切断した。

マイク・〇『『チューブラー・ベルズ』……このビルの窓の雨戸に使われている『ブリキ製のシャッター』を、すでに全て空中に飛ばしていた世界………この場所の全ての金属を飛ばしてやるぞ！』

承一郎「ぐうう……ッ!!?」

マイク・〇「我が『チューブラー・ベルズ』は防御シールドにして、お前達へのギロチン処刑の世界を兼ねたッ!!?」

ヤクザ達「「坊っちゃん!!?」」

承一郎「騒ぐんじゃあないッ！これくらいすぐに治す！皆は物陰に隠れて！」

承一郎はすぐに切断した腕を吸血鬼の再生能力でくつつける。

承一郎「こいつの風船……金属に戻った時のエネルギーで僕達に攻撃するッ！近くにあらゆる風船を全て割る！」スチャ！

承一郎は懐からナイフを取り出し、

承一郎「ハアッ！」ビシュッ！

ナイフは精密なコントロールで近くの風船を割るが、それと同時にブリキ製のシャッ

ターが承一郎に襲いかかる。

承一郎「うおッ!!?」

承一郎は能力が解除されたシャツターの陰に隠れ、防ごうとするが、数が多すぎる。

承一郎「ヤバイッ!!?」バツ!

承一郎はビルの柱の陰に隠れた。しかし、

?『ウウウ~~~~』

承一郎の柱の近くに何体かの犬の形のバルーンアートが待ち構えていた。

承一郎「なっ…!!?」

バブル犬達は承一郎の足に喰いつき、パアン!と割れた。

そして、割れた後の承一郎の足には、長さ30センチほどの釘が何本も突き刺さって
いた。

承一郎「ぐあああああああ!!?」

足の血管に入り、内部から破裂して串刺しにされる痛みは、承一郎の想像を超える痛
みだった。

ヤクザ達「坊っちゃん!」「ぐあああああ!!?」「があっ!!?」

組員達は承一郎を助けようとするが、バブル犬達や男達の攻撃によって次々と倒れて
いく。

承一郎「くっ……！やめろ……ッ！やめやがれエーッ！！？」

何本も釘が刺さり、筋繊維がズタズタになった足を再生させて無理矢理承一郎は刀で男達やバブル犬を斬り裂き、貫き、屠っていく。

しかし、バブル犬が釘に戻り、刀に突き刺さって折れてしまう。

承一郎「クソッ！クソッたれがああーッ！！？」

仲間がだんだんと倒れていく中、承一郎は叫んだ。

ビル前は、その場所は信乃とサムの独壇場になっていた。

信乃の水圧カッターとサムの炎を帯びた炎剣が衝突する度に周囲が吹き飛び、他の奴には手出しが出来ない状態だった。

サム「あんた、結構やるな」

信乃「それはどうも！あなたも相当お強い……どこの流派ですか？」

サム『『ホドリゲス新陰流』っつーんだぜ。俺は『裏太刀』だけだな』

信乃「！なるほど……それは手強い」

『裏太刀』——それは殺人剣を意味する。つまりは実戦を想定された剣術なのだ。

信乃「……そういえば聞いた事がある。中南米で重火器で武装したマフィア集団を生身のまま刀一本で殲滅した男がいると……。確かその男の呼び名は……『ジエツトストーリー』

ム・サム』！」

サム「へえ、知っているとは光栄だ。俺も知ってるぜ？刀の一振りで敵を1000人斬り倒したという男……。確か『村雨の信乃』：お前だな？」

信乃「こちらこそ光栄ですね……。だが、この勝負は譲れないッ！」

サム「それはこつちもだ！」

水圧カッターと炎剣の衝突でまた水が蒸発し、大量の水蒸気が発生する。

信乃（だがリーチはこつちの方が勝っている……！これなら……！）

サム『だがリーチはこつちの方が勝っている……！これなら……！』そう思っていたか？

水蒸気で何も見えない中、サムが突然そう言った。

信乃「ッ!?？」

サム「違うな、ここからだ！焼き尽くせ、『ムラサマ』！」

ゴウツ！と炎が周囲の水蒸気を更に焼き尽くし、サムの周りの温度が急激に上昇した。

信乃「くつ……！」

サム「そらよっ！」ドゴオオオン！

サムの刀、『ムラサマ』が起こした炎による爆炎の中から、サムが信乃に向かって飛び

込んで来た。

信乃「なっ…ッ!?」

サム「ハッ!」ボオッ!

サムの『ムラサマ』の猛攻を信乃は『村雨』で防ぐ。『ムラサマ』の炎は先程よりも大きくなり、『村雨』が帯びている水圧カッターを蒸発させていく。

信乃「ハアアッ!」

しかし、信乃も負けていない。更に『村雨』の水圧カッターが迸り、『ムラサマ』の炎を鎮火させようとする。

サム「やるな…!だがこれで決める…ッ!」

信乃「それはこっちも…ッ!」

二人は同時に間合いを取り、同時に納刀した。居合い斬りによる一騎打ちに勝負に出たのだ。

だが、

ヤクザ達「坊っちゃん!」「ぐああああ!!?」「があっ!!?」

仲間達の悲鳴に信乃は気づいた。

信乃「これはッ…!若…!」

信乃は承一郎達を案じて、集中が切れた。

それをサムは興が逸れたような目で見ていた。

サム「…つまらないな、集中し切れてないお前と一騎打ちをするなんてな」スツ

サムは『ムラサマ』を引き抜かず、そのまま構えを解いた。

信乃「…攻撃しないのですか？私はあなたの敵ですよ？」

サム「お前との戦いが楽しくてな。俺は待つてやるよ、依頼の都合上あんたらに加勢は出来ないけどな。終わったら決着をつけようぜ」

信乃「…恩に着る！」ダツ！

信乃はビルに向かって走った。

承一郎「ヤロオオオろろろツ!!？」ビシユツ！

承一郎はナイフや足に刺さった釘を抜いて男達やバブル犬に投げつける。

承一郎「うおおおおおツ!!？」ダアン！ダアン！

銃を撃ち込んで、少しでも数を減らしていく。仲間を救う、それだけを考えて敵を倒す。

しかしその努力は虚しく、次々と仲間達が倒れていく。

承一郎「マイク・オーーーーツ!!？」

承一郎はマイク・Oに向かって吠える。

マイク・O「フン、恨むのなら自分を恨むんだな！自分の無力さを！お前は何の世界も守れないのだ！自分の身さえもな！」

マイク・Oの前に男達が銃を構え、承一郎に向ける。

マイク・O「おそらく気づいていないとしたら貴様の『体の中』にあるだろう、なら問題ない。貴様を殺し、あのお方の『遺体』を奪い取ればそれで世界は収まる！」

承一郎「くっ……！」

マイク・O「…撃て！」

ダダアン！ダアン！ダダダアン！ダダアン！

銃口から一斉に弾丸が発射する音が炸裂する。承一郎は次の瞬間にくるであろう弾丸の痛みを耐えようと目を瞑った。

だがいつまでも来ない痛みにも不審に思い、目を開けた。すると、

信乃「…若……」

多くの弾丸で体を抉られた信乃が、承一郎の目の前に立っていた。
承一郎「…信乃…ッ！」

憎悪が目覚める (V h a s c o m e t o)

世界が、ゆつくりと感じる。信乃の体が、ドサッと崩れ落ちる。

承一郎は急いで彼の体を支える。

承一郎「信乃…信乃お…！」

信乃「若…ご無事で…よかった…」

信乃の体のあらゆるところから紅い血が流れる。明らかに致命傷だ。

承一郎「何を言ってるんだ…！君が…！波紋…ッ！」

承一郎は波紋の呼吸で急いで信乃を治そうとするが…

信乃「無駄です…もう…助かりません…」

承一郎「諦めるな…！諦めたらそこで終わりだ…!!？」

承一郎は波紋を送り込むが、信乃の体はだんだんと冷たくなっていく。

承一郎「クソッ！クソ、クソッ！治れッ！治ってくれッ！」

信乃「若…ありがとうございます…。でももう…意識が…」

承一郎「そんな…！」

信乃の瞳から光がだんだんと消えていく。

信乃「…若…星は…砕け散っても…いつかは光り輝くんです…」

承一郎「いったい何を…」

信乃「若…最後まで…自分の信じた道を…歩んで下さい…。私は…見てますから…」

信乃は自分の刀——村雨を承一郎に持たせる。

承一郎「信乃…?」

信乃「星となつて…皆の頭上を…明るく照らして下さい…。私達の魂は…あなたを見守っていますから…」

そう言うと、信乃の体ゆっくりと力を失い、ガクンと手が垂れる。

その瞳からは光が完全に消え、冷え切っていた。

プツン…と承一郎の何かが切れた。何かは分からないが、承一郎の中で大切な何かが切れた。

? 『…どうなりたい…?』

声が、聞こえた。

? 『…どうなりたい…?』

声がもう一度問いかけた。

承一郎「…強くなりたい…」

承一郎は答えた。

？『強くなりたいのか…？』

声は問いかけた。

承一郎「ああ…もう何も失わないように…もう何も『奪わせない』ように…！」

承一郎は答えた。

クリスタル・ボーン（以下CB）『その願い、叶えよう』ズギュン！

声と共に現れたそれは、白い戦士だった。

承一郎は初めてその戦士を見たが、その戦士が自分自身だと直感した。

CB『そうだ、私はお前だ。お前は私だ。鬼よ、お前に力を与えよう』

承一郎の額から、白い角が生える。その形相は鬼のようだ。

承一郎は村雨を取り、一気に引き抜いた。月の光を浴び、刀が青白い光を放つ。水が
 迸り、村雨を覆う。

まるで親友の魂が、承一郎に応えるかのようだった。

CB 『私は「水晶の骨」。お前は？』

体を親友の血で染めながら、

承一郎 「…僕は…一条承一郎…いや、——」

憎悪^Vが^{has}

承一郎 「——『毒蛇』だ」

目覚める^{come to}。

< || to be continued ||

憎悪 (The Venom)

マイク・O「お前ら、奴を撃て！」

マイク・Oは男達に指示するが、鬼のような姿の承一郎に怯んでしまう。

承一郎「遅いッ！」

承一郎はその一瞬で間合いを詰め、両腕で二人の男の首を掴む。

ズギョン！ズギョン！

男1・2「があっ……！血があ……！」「助けてくれえ……！」

ピキピキピキ……！

男二人は血を吸われ、みるみる内に萎れていき、そして骨で覆われていく。

承一郎が手を離れた後、血を吸われた二人の男は異形の身となっていた。

マイク・O「……なんだ、あの怪物共は……！」

承一郎「行け、スカル髑髏兵」

承一郎のその言葉と共に髑髏兵は圧倒的な速さで男達に襲いかかる。承一郎は『村雨』を使い濃霧を発生させ、ビルの中では何も見えなくなった。

男達「何も見えねえ……ギヤッ！」「気をつけろ！どこからか襲って……ぐあっ！」「たっ、

助け……ああああ!!？」

濃霧で見えないビルの中で悲鳴が木霊する。

濃霧が晴れると男達はいなかった。男達だった異形達がマイク・Oを見つめていた。

マイク・O「ヒッ……！」

承一郎「……」

承一郎は『村雨』を手にマイク・Oに向かって歩み寄る。

マイク・O「くっ……！」『チューブラー・ベルズ』！奴を止めるッ！」

マイク・Oは大量のバブル犬を承一郎に襲わせるが、

承一郎「……逆れ、『村雨』ボソッ

たった一振り、それだけでバブル犬が一斉に割れる。

マイク・O「なっ……!!？」

承一郎はゆつたりと、しかし確実にマイク・Oへ迫る。

マイク・O「このッ！クソッ！クソッ！」ダアン！ダアン！

マイク・Oはヤケクソになりながら銃で承一郎を撃つ。承一郎は避けない。そのまま

弾丸が命中する。

しかし承一郎は止まらない。瞳に漆黒の炎と灯しながら、マイク・Oの首を掴む。

ズギョン！ズギョン！

マイク・O「ぐああああああ!!?」

血を搾り取られ、代わりに吸血鬼のエキスを拝領される。

しかし、それだけでは終わらない。

承一郎「…『山吹色の波紋疾走』サンライツイエロー・オーバードライブ バチイ!

マイク・O「ぎやああああああ!!? 熱い! 体が溶けるツ! ぎやああああああ!!?」

手からの強力な波紋疾走、承一郎は屍生人ゾンビになったマイク・Oへ太陽のエネルギー、

『波紋』を流し込んだ。

吸血しながらの波紋疾走は承一郎の体にダメージを与えるが、

承一郎(あいつらの『痛み』は…ッ! 『恐怖』は…ッ! 『怒り』は…ッ! 『哀しみ』は…ッ! 『こんなものじゃあないッ! こいつには、最大の苦痛をもってこの世から消えてもらうッ!)

マイク・Oという人間は消え失せた。

承一郎「…迸れ、『村雨』」

スパアアアン…ッ!

承一郎は『村雨』でビルを切断した。それも一回だけではない。何回も、何十回も。荒々しくも、仲間達の死体には一切傷を付けない緻密なコントロール。

ガラガラガラアツ…!!? ドゴオオオン…!!?

サム「……!」

ビルが崩壊し、それにサムが気づきそつちを見ると、

承一郎「……」

何も見ていない承一郎と髑髏部隊がそこにいた。

承一郎は目を開けてはいる。しかし、その瞳には何も写していない。あるのは空虚ゼロ、ただそれだけだった。

サム「よお『若』…あの剣士はどうした?」

サムは承一郎を呼んだ。信乃がいつも呼ぶ、あの呼び名で。

承一郎「……」

しかし承一郎はそれに答えない。ただ、『村雨』を持つ力が強まるばかり。

サム「…そうか…。逝せつちまったか…? そいつは残念だ」

さつきまでの斬り合い。あれだけだが、サムは信乃を好敵手と認めていた。だからサムは信乃が承一郎を案じた時に見逃したし、信乃が戻つて来ると信じていた。

承一郎「……」 シュカアアン…!!

承一郎はおもむろに『村雨』を鞘から引き抜いた。

サム「…いいだろう。信乃あいつが死んだ意味があつたのか、確かめさせてもらおう」 シュ

カアアン……!

サムも『ムラサマ』を鞘から引き抜いた。

サム「……いざ、参る！」

承一郎「……フツ」

サムが第一に思ったのは、死神の鎌だった。

承一郎は一瞬で水圧カッターで鎌の形に放出、そしてその鎌形の水圧カッターを切り離してサムに飛ばした。

サム「フツ！」ポオツ!

ジュワアアア……!

サムの『ムラサマ』が飛ばされた水圧カッターを蒸発させる。

その中から承一郎はサムに向かって飛び込む。

サム「ほう……!」

承一郎「……シツ！」

承一郎が放った『村雨』の一閃をサムは受け止める。

だが承一郎は骨の刀を生成してサムに斬り込む。

サム「ムツ!?」

だが『烈風』の呼び名の如く、サムは『村雨』をはじき、骨の刀を防ぎながら間合い

を取る。

サム「お前さん：『スタンド能力』をさつき覚醒させたのか：。仲間を喪つた憎^{The}悪^{venom}で：」

承一郎「……」ダツ！

承一郎は答えない。サムとの距離を一気に詰めて、二刀で斬る。それだけだ。

サム「：ならば、一気にケリをつけようか」パチン！

サムは『ムラサマ』を納刀、抜刀の構えを取る。

承一郎はサムに左腕の骨の刀を振るう。

カチツ！

サムが、鞘にある引き金を引く。

バシユツ！ギユイイイイン……ツ！！？

爆発的な速さで『ムラサマ』が鞘から飛び出し、それをサムが掴み、

サム「ハアツ！！？」

ズバアアアン……ツ！！？と、高速の抜刀により承一郎の左腕を切断した。

骨の刀を掴んだまま吹き飛ぶ左腕は、『ムラサマ』の炎によつて空中で焼き尽くされる。

だが、承一郎は止まらない。否、止まらない。止まるわけにはいかない。この悪夢を

生み出した張本人を殺すために、こんなところでは止まらない。

承一郎「ぐうつ……！があああああ!!？」

抜刀によつて無防備になつたサムサムの右手を『村雨』で貫く。

お互い、紅い鮮血を散らす。

サム「ぐああああああああああああああ!!？」

右腕を貫かれ、あまりの苦痛に顔を歪めるサム。

サム「ぐうつ……！流石だな、あいつが命を懸けた価値はあつたという事か……」

ポタポタと血を流しながらサムはそう言う。

サム「お前さん……名は……？」

サムは問う。

承一郎「僕は……一条承一郎……『毒蛇』だ……」

サム「承一郎か……覚えてたぜ……。また剣を交える事が出来るのを楽しみにしてるさ」

サムはゆつくりと暗闇の中へ溶け込んでいく。

承一郎「……」

承一郎は瓦礫の山に立ち、仲間達の死体を見る。

承一郎はゆつくりと一人ずつ瞳を閉ざす。

承一郎「信乃……皆……僕は進むよ……。これから……どんな事が起ころうと……」

承一郎が立つ瓦礫の山の周りには、髑髏部隊スカルズがこうべを垂れる。

承一郎の瞳からは、紅い血の涙が流れていた。上に昇る満月も、同じく紅く染まっていた。

承一郎「見ていてくれ…僕が…必ず…」グラツッ

そこで承一郎はぐらつく。意識が朦朧とする。倒れながら心の中で呟く。

承一郎（僕が…必ず…）

悪に堕ちる。

承一郎（——仇を取る）

復讐のために。

< || to be continued ||

絆（ダイヤモンド）を抱いて

承一郎が目覚めて見たものは、いつも見慣れた天井だった。

承一郎「ここは…」

ヤクザ達「坊っちゃん!!?」

承一郎が目を覚ますと、組員達が一斉に飛んで来た。

ヤクザ達「坊っちゃん、よくご無事で!」「坊っちゃん、お帰りなせえ!」「組長さんツ
!坊っちゃんが目を覚ましやした!」

一征「イチ、気がついたか」

承一郎「父さん…ツ!信乃はツ…!!?皆はツ…!!?どうなったんだツ…!!?」

ヤクザ「坊っちゃん、落ち着いて!」

承一郎は急に起き上がろうとすると、組員達がそれを抑えた。

一征「…結論から言うのだな…全員死んだ。おめえ以外はな」

承一郎「ツ…!!?」

一征「俺らが駆けつけた時にはおめえと何と言えはいいのか…髑髏達がいた。後は
又チャーシュー焼会に頼んで飛行機をチャーターして日本までな…。ユイ羽を覚えているか?あいつの

親父の組織だ」

承一郎「羽姉さんの……」

一征「だが、信乃達の遺体はどうしようもなかった。あのままでは腐り、朽ち果ててしまうからな。火葬してもらって、遺灰としてこっちに運んだんだ」

承一郎「……そう……ですか……」

承一郎はそこで自分に斬り落とされ、焼き尽くされた左腕があつた事に気がついた。

承一郎「そういえば……腕が……斬り落とされて、焼き尽くされたハズの左腕が……。いつの間にか生え治っていたのか」

一征「イチよ……おめえの目が覚めるまであいつらの埋葬を待つておいたんだ。埋葬は明日行うぞ」

承一郎「……分かりました」

翌日の早朝、集英組——

まだ太陽が昇っていない早朝、承一郎達は集英組の無縁塚の前に立っていた。社会からはじき出された者達の眠る場所。信乃の父も、ここで眠っている。

なぜそんなに早朝かというと、承一郎が眠れなかったのがある。仲間達が目の前で死ぬ夢を見て、眠れなかったのだ。

竜「：それでは坊っちゃん、始めます」

承一郎「：ああ」

竜の合図と共に組員達が信乃達の遺灰が入った壺を運ぶ。

一征「：イチよ、自分を責めるな。俺の判断が招いたミスだ。俺がしつかりしていたら：あいつらは死なずに済んだかもしれないねえ。それによ、あいつらはおめえを守るために命を懸けたんだ。そのおめえがそんな顔してたらよお、あいつらが浮かばれねえよ」

一征は悔やんでいた。もっと自分がよく調べていたらこんな事にはならなかったはずだと。

だが、いくらそんな事を考えても所詮はIfの話、過去は変える事は出来ない。どんな事があるうとも。

承一郎「いや：僕が殺したんだ。彼等が目の前で死んでいくのを、僕は止める事が出来なかった。見殺しにしたんだ：僕が：」

一征「イチ：」

承一郎は組員達に近づき、

承一郎「待て！」

震えた声で呼び止め、

承一郎「…僕が…やる…」

そう言った。

一征や竜、組員達は息を飲んだ。

そこには一条承一郎という人間はいなかった。瞳に憎悪グエノムを滾らせた、一人の鬼がそこにいた。

組員は一つの壺を承一郎に渡した。それは信乃の遺灰が詰まった壺だった。

承一郎「……」

承一郎は無縁塚の前に屈み込み、入れようとしますが、そこで止まる。

承一郎「君達の無念を土に還らせたりはしない」

土に還らせる？それは自分を救おうとした彼等への侮辱ではないだろうか。承一郎はそう思った。

承一郎は壺の蓋を開け、中にある遺灰を舐める。

承一郎「僕は常に君達とある。…僕は君達の苗床だ」

承一郎は遺灰を掴み、顔に塗った。顔が白く染まる。

太陽が昇り、承一郎を照らす。

承一郎「君達を灰にはしない。君達はダイヤモンドだ」

一征「埋葬はしない？それで……」

一征の問いに承一郎は答えず、代わりに遺灰に手を入れた。

その骨から成る遺灰は、承一郎のスタンド、『水晶の骨』クリスタル・ボーンの能力で分子構造が変化する。そして、朝日を浴びて、光り輝くダイヤモンドになった。

まるで、彼の魂が宿っているようだった。

承一郎「仲間の灰でダイヤモンドを創る。…それを僕達は抱いて前へ進む」

一征「…死してなおも…輝き続ける…仲間の元で……」

承一郎「僕達は進む続ける。どんな事があるうとも」

風が吹く。

承一郎（信乃…君は言ったね、星は砕けてもいつかは光り輝くと…。だけど僕みたいな鬼でも——凶星でも…光り輝いていいのかな？）

——いいんですよ、若——

承一郎「……」

何かが、聞こえた。風に乗って、何かが聞こえたような気がした。幻聴かもしれない。でも、それでもいいと思った。

人間の脳は、幻を見る事が出来る。痛み、未来も。

承一郎（なら、その幻を、^{本来}現実にするんだ！してみせる！）
承一郎は昇る朝日に誓った。

数日後、承一郎達を陥れた組織は潰されるが、ダミーの組織だった事が判明した。

そして承一郎は『毒蛇』^{ツヴァイバハ}の名で裏世界にその名を馳せ、カズヒラ・ミラー、オセロツト、エヴァ^{EVA}などのメンバーを集め、^{プライベート・フォー}PF『水晶の牙』^{クリスタル・ファング}を結成し、母と仲間達を殺した張本人を探し続けた。

その二年後、小野寺小咲と出会い、恋に落ちるのはまた別の話。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

第1章―動き出す運命の歯車―

プロローグ 冒険の終わり

2012年3月21日

フロリダ半島ケープ・カナベラル――

約3kmに及び重力の向きが変化された中心には、1人の『天国』を目指す神父とそれを阻止しようとする5人の『スタンド使い』の姿があつたッ！

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

プツチ「理解したぞD I O ッ！『これだ』ッ！このまま空中に浮いて同じ重力の条件を体で感じて探せばいいッ！『新月』と同じッ！重力の影響の位置をッ！」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

プツチ「我がC―M O N^ンの能力がッ！完璧になれる位置があるはずだッ！落ち着け！位置を探すのだッ……素数を数えて落ち着け！13 17 19……」

アナスイ「逃がすと思うのかッ！どこまでも悪あがきしやがる野郎だぜ!!？」

エルメエス「あいつなにかプツプツ言っているぞ」

エンポリオ「重力はそのままだッ！地面の重力は垂直に戻らないッ！」

承太郎 「エルメエス、下を見る。ヤツの落とした銃を拾え」

承太郎 「成長したな……徐倫……」

徐倫 「……………」

承太郎 「手すりにつかまっている」

承太郎 「エルメエス、銃を拾ってヤツを撃て」

ガシイッ！

ドバツドバドバツドバツ！

エルメエスは銃を拾ってプツチに向かつて撃ったッ！

プツチ 『『C-MOON』!!?』

C-MOON 「ウシヤアアア」バシユバシユバシユバシヨオッ！

C-MOONは能力を使い、拳で銃弾を『裏返す』ことよって弾き飛ばしたッ！

ドスウッ！

しかしッ！後ろから破片が飛んできて、プツチの背中に突き刺さったッ！

プツチ 「ぐあああッ！なにイッ！」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

? 「さつき承太郎さんが『シール』を使って移動に利用していた『銛』の1部を切断

して、俺の『クレイジー・ダイヤモンド』の能力を使って『治せ』ば、重力に関係なく

ラオラ
ラオラオラオラオラオラオラオラアアアアツ！」ドドドドドドドドドドドドドドドドドドコ
ドド
ドドドドドドドドコオオオツ！」

プツチ「ぐあああああああッ！」

ドグシヤア——ツ！

承太郎「……………」

仗助「……………」

アナスイ「……………」

エルメエス「……………」

エンポリオ「……………」

徐倫「やっと……終わったのね……」

承太郎「……………」

徐倫「……F・F……ウエザー……終わったわ……」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

第1話 冒険の始まり

3月下旬州立グリーン・ドルフィン・ストリート刑務所――

ガヤガヤ ガヤガヤ

ミューミュー「FE40356……起立しなさい。あなたに『面会者』よ」

徐倫「『面会者』……誰なの？あたしのママ？」

ミューミュー「知らないわ。だけど『3人組』らしいわ」

徐倫「『3人組』イ……？」

面会室前――

ミューミュー「FE40356、面会室に入れ」

ガアアアア

徐倫「……あ……」

承太郎「……」

?1・?2「……」

徐倫「……『父さん』……（あとの2人は知らない……誰だろう……？）」

承太郎「徐倫……」

徐倫「ひ、久しぶり……」

承太郎「……どうだ……調子は……」

徐倫「……元気にやってるわ……。スピードワゴン財団に保護されたエンポリオはどう……?」

承太郎「あの子は元気にやってるよ……」

承太郎「今スピードワゴン財団がお前の冤罪について調査しているところだ……。もうすぐここから法的に出すことを約束する……」

徐倫「ありがとう、父さん。ところで……あなた達は……?」

承太郎「彼等はスピードワゴン財団を通じて知り合った——友人だ。名前は……」

フーゴ「パンナコッタ・フーゴです。よろしく」

シーラE「シーラEよ。よろしくね、M s. 空条」

徐倫「?はあ……よろしくね、フーゴさんとシーラEさん……」

承太郎「さて、さっそく本題に入ろう。徐倫、今スピードワゴン財団とフーゴ君達の所属している組織の調査によって、かつて私が倒した『DIO』という男の『息子達』が5人いることが分かった」

フーゴ「まあこんなに子供がいることが分かったのは最近なんですけどね」

徐倫『『DIO』……『天国』を目指した……プッチの友……父さんに倒された敵……』
承太郎「財団の調べによるとプッチに味方したのは3人で、『ウンガロ』、『リキエル』、『ヴェルサス』という名前らしい……。お前と戦った2人は死亡が確認されている」

シーラE「当然よ。我らが『ジョジョ』はそんな下らないお方じゃあないわ」

承太郎「そして、あとの2人だが、1人はフーゴ君達のイタリアのギャング組織の『パツシヨ―ネ』のボスの『ジヨルノ・ジヨバーナ』。もう1人は未だ情報が少ないが、日本のS県凡矢理市本海苔町で発見されている」

承太郎「スピードワゴン財団の調べによると最近、その周辺で行方不明者が急激に増加しているらしい。まだ別の『矢』が存在して、何者かが『スタンド使い』を増やそうとしている可能性があるその件も調べなくてはならない」

承太郎「そこでだ、俺はこれから日本に行く。そして、『DIO』の『息子』に会い、そいつに『矢』の件について協力を要請して解決できればベストなのだが……」

フーゴ『『矢』の件については僕達『パツシヨ―ネ』も協力させていただきます。我が『ジョジョ』も日本に来日する予定です。ポルナレフさんもご一緒ということですよ」

承太郎「ありがとう、フーゴ君。徐倫は……」

徐倫「私ももちろん刑務所から出たら日本に行くわ。私も手伝うわ」

承太郎「徐倫……」

徐倫「父さんは今まで私とママを守るために私達から離れていた…。でも私も『ジヨースター』の血統よツ！あたしも一緒に一族の決着をつけるわツ！」

承太郎「……ありがとう、徐倫。それじゃ最後にその『DIO』の『息子』の名前を言おう……」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

徐倫「……」

承太郎「そいつの名前は……」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承太郎「『いちじょうしやういちじやうつ一条承一郎』という男だ。凡矢理市にある『集英組』というヤクザの組長の養子らしい」

<|| to be continued ||

第2話 出合い

朝の6時半——

承一郎「ん……朝か……」

1人の高校生であり、ヤクザの組長の養子でもある僕、一条承一郎は、だだっ広い家の中で目覚めた。

そして、自分の布団を片付け、台所に向かう。

大切なペンダントを首に下げて。

数十分後、家にいる組員達全員分の料理を作り終わり、待つている組員達を呼んだ。

承一郎「おい、皆！料理が出来たよー！」

組員達「あーおはようございやす！坊ちゃん!!？」

承一郎「これ運んでくれないか？」

組員達「了解しやした!!？」

そのとき、別の部屋から組長であり僕の義理の父親である一条一征がやって来た。

一征「よお、毎朝毎朝すまねえな。」

承一郎「おはよう、父さん。大丈夫だよ、これくらい」

一征「そうだいチ。近えうちにてめーに大事な話があつから覚えときな」
承一郎「……? 大事な話? ……? つといけない。これじゃあ遅刻してしまう」

竜「なにイ?!? そいつあいけねえ!!? すぐにリムジンを御用意しろ!!? バカヤロウ!!
? 15m級のだ!!?」くわっ

組の中で3番目くらいに偉い男、竜が組員達を呼んだ。

承一郎「やめろーッ! やめてくれッ!」

竜達の気遣いは嬉しいが、ちよつとオーバーすぎる……。

凡矢理高校の校門前——

竜「……では坊ちゃん!!? 今日も元気に行つてらっしやいやせ!!?」

組員達「行つてらっしやいやせ!!?!」

承一郎「はあ……やれやれだよ……」

ああ……周囲の好奇の目が痛い……。植物程ではないが平穩な高校生活を送りたいのに……。

竜「あ、そうだ坊ちゃん。最近見慣れないギャング共がウチの島を荒らし初めてやしてねえ……。坊ちゃんも気いつけてくだけせえ」

承一郎「はあ……分かったよ……」

……本当に考えることをやめたい……。

（? side）

?（ハア：ハア：ヤツバ（遅刻！）

高校生活1日目から遅刻なんて絶対ダメ！

まさか寝坊するなんて……。

少し走り、学校の塀があり、助走をつけて飛び越えた。

（承一郎 side）

え………？

あ、ありのまま今起こった話を話す！『僕が学校の塀に沿って歩いていたら、いきなり金髪の美少女が塀を飛び越えてきた』

な……何を言っているのか分からないと思うが（ry

しかも僕の方に突っ込んで来る……。

少しビククリしたが、呼吸を整える。

承一郎「コオオオオオ……」

そして、生まれたときから使えた呼吸から生み出す『生命のエネルギー』である『波

く 承一郎 side)

さっきの女の子にはビックリしたが、自分も急がないといけないので、僕も学校へ走った。

1年C組内——

集「オース、ジョジョ。何かあつたのか？」

こいつは小学生の頃からの親友の舞子集。まいこしゅう

承一郎「やあ、集。実はね……」

キング・クリムゾン!!?

集「はあ？女の子が学校の塀を飛び越えて来ただつて？バカ言えよ。ウチの学校の塀2m以上あんだろ。それ飛び越えて凄いスピードで走つて行つたつてどんな女の子だよ」

承一郎「いや、本当なんだよ。あと少しで顔面にヒザ蹴りが入りそうだったんだよ」

集「そんな事より聞いたか!!?今日の転校生つて女なんだとよ!しかも噂によると美人……!!?」

承一郎(やれやれ……全然信じていないな……)

小咲「一条君は大丈夫なの？」

この子は中学の頃に知り合った小野寺小咲おのでらこさき。僕の好きな人だ。

承一郎「ああ、大丈夫だよ。怪我なんてないよ。ピンピンしてるさ」

心配してくれたのはとても嬉しい。高校生活一日目から不幸かなと思つたが、意外と悪くないと思う。

キョーコ「…よし、今日は転校生を紹介するぞー。入って桐崎さん」

このクラスの担任である日原教子先生が教室に入つて来て言つた。

ん？転校生？確か集がそんな事を言つていたな……。そう思いながら、僕は本を読む。

桐崎「はーい」

…この声…聞いたことのあるような……。

千棘「初めまして！アメリカから転校してきた桐崎千棘きりさきちとげです。母が日本人で父がアメ

リカ人のハーフですが、日本語はこの通りバツチリみなさん気さくに接して下さいね

！」ニコツ

やっぱりか……。やれやれだよ……。

クラスの同級生達「うおー！？かわいいー！？」「すっげー美人！？」「足細ーい

!!？何あのスタイル！？」「ハーフだつてよ！あんなかわいい子見たことねえ!!？！」

キョーコ「じゃーひとまず空いてる席に……」

千棘「ん？あー……！！？！！？」

千棘「あなたさっきの……」

承一郎「やあ、さっきぶり」

僕は本を読みながら、桐崎さんに返事を返した。

集「おい、ジョジョ！知ってるのか！！？」

承一郎「ああ、さっき言っただろう？2m以上の塀を飛び越えたアグレッシブなお嬢さんがいたって」ペラペラ

そう言いつつ、僕は本を読み進める。

千棘「さ、さっきはありがとう……」

承一郎「別に。気づいてたら体が動いていたのさ、アグレッシブなお嬢さん」ペラペラ

千棘「私には桐崎千棘っていう名前があるの！それにアンタ、顔をこつちに向けなさい！」

承一郎「君は僕にとっては同じクラスメイトということ以外関係ないだろう。僕の名前は一条承一郎だ。皆から『ジョジョ』や『イチ』と呼ばれているよ。よろしく、桐崎さん」ペラペラ

第3話 矢に貫かれて

（承一郎 side）

やれやれ、全く今日は本当にへヴィな1日だよ……。

しかもあの後、教子先生が桐崎さんを僕の隣の席にしたのだ。さらに同じ飼育委員にも……。

どうしようもないので、僕達は飼育小屋へ向かった。

飼育小屋——

ニヤーニヤー　ゲロゲロゲロ　グエツグエツ　シャー

千棘「…それにしても、何よこの生き物の数は」

承一郎「しようがないだろう。ケガとかしてたんだから」

千棘「あんたが拾ってきたのコレ!!？」

承一郎「まあとりあえず餌や水を皆にあげよう」

千棘「そうね、うだうだ言っても仕方ないものね」

そう言い、桐崎さんは植物に水を入れた。プランターから水が溢れ返るくらいに。

承一郎「な、何をしているんだい君は!!？」

千棘「何って、水をあげてるのよ」

承一郎「そんなに水をあげたら根腐れしてしまうじゃあないかッ！」

千棘「ちよ……このくらい平気よ……。多分」

承一郎「多分!? ……ハア、しようがない、じゃあ動物達の餌をあげよう。…ん? この子猫はケガをしているぞ」

千棘「かわいそう。応急処置の道具はどこにあるの?」

承一郎「いや、大丈夫だよ。僕がいれば充分だよ」

そう言い、子猫に手を伸ばし、

承一郎「コオオオオオ……」

そして、『波紋』を練り出して子猫に流し込む。すると、子猫のケガが治っていき、最後には完治して、元気になった。

承一郎「ちよっと飼育ケージがすこし小さめでぶつかってしまったのか。ケージを移さないとな……」

子猫を、前よりすこし大きいケージに移した。

千棘「さつきの扉のときもそうだけど、あなたの体から出る光って何なの?」

承一郎「ああ、気づいていたのか。これは『波紋』っていう、呼吸によって生み出される生命エネルギーだよ。僕は生まれつき使えているんだ。浅い傷や骨折ぐらいは治

せるよ」

千棘「へえ、すごいわね。私にも出来るのかしら？」

承一郎「僕は生まれつきだけど、多分難しいと思うよ。独特のリズムで呼吸をするからね」

千棘「誰か他にそれを知ってるの？」

承一郎「さっきの眼鏡の集ってやつと、小野寺君っていう優しい子ぐらいかな」
そうやって時間は過ぎていく……。

次の日

現国の時間——

千棘「むくく……」

桐崎さんが現国の授業で頭を傾げている。

桐崎さん、もしかして日本語は喋れるけど、読み書きはダメな人なのかな……？
キーンコーンカーンコーン

承一郎「はい、桐崎さん」

千棘「何よコレ」

承一郎「現国のノートだよ。さっきの授業全然ノートとれなかったでしょ？もし良

かつたら使つてくれ」

千棘「…あんたすごい細かいのね……」ペラペラ

承一郎「まあね。他にわからないことがあつたら聞いてね」

千棘「ありがとう……」

放課後——

承一郎「それじゃあ4人で帰ろうよ。桐崎さん先に帰って行つたしさ」

4人とは僕、集、宮本さん、そして小野寺君だ。

小咲「あれ？　そういうえば舞子君とるりちゃんは？」

「そういうえば2人ともいない。先に帰って行つたのかな……？」

承一郎「じゃ、じゃあ一緒に途中まで帰らない？」

僕はすこし勇気を出して言つてみた。すると、小野寺君は

小咲「う、うん。いいよ」

と答えてくれた。やった！

そして、僕達は2人並んで家に帰る。

下校中——

今日は小野寺君と一緒に帰れてラッキーだな。

僕達は空き家の角を曲がった。

だが、そこで1つの小さな違和感があった。

承一郎（ん…？ここは空き家じゃあなかったはずだぞ？『昨日まで』はッ！）

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

僕は空き家の方に振り向いた。そこには1人の男と、男の持っている『弓と矢』が見えた。

金色のリーフレットが施された『矢』だった。僕はその『矢』になにか見覚えがある
と思いつながら、なにかヤバイと直感で感じ取った！

男が『矢』を構えている方向は——

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承一郎「小野寺君ッ！危ないッ！」

僕は急いで走り、前を歩いている小野寺君を突き飛ばした！

小咲「きゃっ！い、一条君…?!？」

ドスウッ！

次の瞬間、僕の胸を『矢』が貫いて、血が溢れ出す。

承一郎「ぐあああああああッ?!？」

小咲「一条君!!?きゅ、救急車を…?!？」

そう言い、小野寺は電話をかけ、承一郎にかけ寄る。

小咲「二条君、しっかりして!!？」

しかし、承一郎は依然反応はなく、血が溢れ出ている。

小咲「この『矢』を抜かないと!!？」

小野寺は『矢』を引き抜いたが手にケガをしてしまう。

小咲「きやあ!!？こ、これは……!!？」

だが次の瞬間、『矢』は消えていた……。そして、僕は救急車に運ばれた。

第4話 目覚め

病院内、手術室前——

小咲「一条君……」

一征「イチはここか?!?」

小咲「あ、一条君のお父さん……!」

一征「嬢ちゃん、イチの同級生か。イチのやつはどうなったんだ?!?」

小咲「……わ、私を庇って『矢』のようなものが胸に刺さったんです!!?」

一征「な、何だつて?!?」

竜達「「組長オヤジ——ツ!坊ちゃんは無事なんですか?!?」」

一征「うるせえぞおめえら!!?病院の中だぞ!!?静かにしろツ!!?」

竜達「へ、へい!」

医師「すみません、承一郎さんの親御さんはいらつしやいますか?」

一征「ああ、俺がそうだが……」

医師「ああ、そうですか。そちらのお嬢さんもどうぞ」

小咲「あ、はい……」

別室——

医師「結果を申し上げると、心臓が穴が開いていて、搬送されている間に血が大量に出てしまって、ほぼ死亡が確定していました」

小咲・一征「……………!!?!」

医師「しかし、驚いたのはその後で、一応輸血が施されたのですが、それと同時に傷が再生し始めて、やがて心臓の穴すら埋まったのです」

小咲「えっ……………!!?!」

一征「……………」

医師「こんなことは生まれて初めてのことです。親御さんは何か知っていますか？」

一征「…いや、初めて知ったことです。先生、イチのやつは……………」

医師「はい、承一郎さんは生きています。早ければ明後日には退院出来ます」

小咲「えっ! やった!!?」

医師「ですが、今日と明日は安静にしておかなければいけません」

一征「ありがとうございます、先生」

医師「いえ、私は何もしていませんよ。彼は一体、何者なのだろう……………」

く承一郎 side く

あるところで、2人の少年が出会った。一人は誰よりも強い野心を、もう一人は誰よりも高い誇りを持っていた。

数年後、二人は成長して、野心を持った青年は、世界を支配する為に人間をやめ、誇りを持った青年は、それを封じる為に、父や師を失い、それでも信念を貫き通し、相討ちとなり、お互い海の底に沈んだ……。

百年後、宿敵の肉体を奪った邪悪の化身は新たな力を得て、宿敵の末裔を根絶やしにしようとするが、その末裔が自分と同じ『時を止める』能力に目覚め、敗北し、太陽の光で塵になって消えた……。

これは誰の記憶なんだ？

翌日

教室内

キョーコ「えーと、一条は昨日から入院していて、今日は休みだ。明日から退院出来ると親御さんから連絡があった」

集「マジかよ？あいつ入学早々に何をやったんだよ」

小咲「今日、一条君に見舞いに行くんだけど、みんな行く？」

千棘「……………」

病室内——

小咲「一条君…昨日のことはありがとう…。一条君が庇ってくれなかつたらきつと私……………」

承一郎「気にすることはないよ。体が勝手に動いただけさ。」

集「ジヨジヨ、あんまり無理すんなよ」

承一郎「ああ、ありがと、集。桐崎さん、授業のノート貸してくれてありがと」

千棘「勘違いしないでね。私は現国のノートのときの借りを返しただけだから」

小咲「あ、そういえばこのペンダント、一条君のだよね？」

承一郎「あッ！ありがと小野寺君！失くしたかと思つたよ」

小咲「一条君が倒れたところに落ちてあつたの」

承一郎「ありがとう。明日から学校に行けるから、傷は大丈夫だよ。胸に傷跡は残る

みただけど」

集「そうか。それじゃあ俺は帰るよ」

るり「じゃあ私も」

千棘「私も」

承一郎「そうか。気をつけてね」

集「お前が言うなよ」

承一郎「それはそうだね」

るり（小咲、一条と一緒についてあげて、好感度アップよ！）

小咲（む、無理だよるりちゃん！）

承一郎「小野寺君、宮本さん、何を話しているんだい？」

るり「小咲がもうすこし一条君と一緒にいたいだつて」

小咲「る、るりちゃん!!？」

承一郎「うん、別に大丈夫だよ」

るり「じゃあ私達は帰るわ」

承一郎「わかったよ。それじゃあね」

集達がいなくなる……。。

小咲「一条君……」

承一郎「わかつているよ。医師が言っていたよ。『生きているのは奇跡だよ』ってね」
小咲「本当にありがとう、一条君……。でも、無茶はもうしないでね」
承一郎「わかったよ。約束する」
そして、いくつもの運命が動き出す

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

第5話 二セモノの恋人が転校生!?!?

病院から退院した日、僕は学校が終わった後、家でさんから部屋に来るように言われた。一体何の話だろう？

一条家——

一征「お、帰ったか。イチ。ちよいと俺の部屋に来な」

承一郎「…なんだい父さんいきなり呼びつけて…」

一征「今度大事な話するつつつたる？ 思いの外早く事が動いてな…」

一征「てめえも最近のギャングとの抗争は知ってると思うが、それがいよいよ全面戦争になりそうなのよ」

承一郎「えっ?!? 大丈夫なのかい戦争って…」

一征「まあもしそうなりやお互いタダじやあすまんわな。そこでだ！ この戦争を回避する方法が一つだけあってな、しかもてめえにしか出来ねえ事だ」

承一郎「ぼ…、僕にしか…?」

一征「実ア向こうのボスとは古い仲だな。奴にもてめえと同一年の娘がいるらしいん

だが……」

一征「おめえその子と恋人同士になってくんねえか？」

え？何かのジョーク？

承一郎「え、えー……？こ、恋人才!!? な、なんでそんな……」

一征「なーにフリだけでいいんだ。互いの組の2代目が恋仲とあつちや若え連中も水差すわけにやいかねーだろ？」

一征「悪リーがこつちも命がかかってんでな。泣き言言つてもやって貰うぜ」

承一郎「うっ……」

一征「よしじやあ入ってくれ」

承一郎（え、来てるの!!? ……はあ、しょうがない。やれやれだよ……）

?1 「……だからまだやるって決めたわけじゃ……」

?2 「でも彼なかなかイケメンらしいよ？」

?1 「え!!? いやいやでも……」

こ、この声はどこかで聞いたことがあるような……。

一征「さあこの子がお前の恋人になる——」

千棘「まだ心の準備が……」

……やつぱりか……やれやれだよ……。

一征「…こちらがその桐崎千棘お嬢さん。お前ら二人には明日から…3年間恋人同士になつて貰う」

承一郎「き…君…ギヤングの娘だったのかい…？」

千棘「あんたこそ…ヤクザの2代目つて…」

一征「おうなんだ。もう面識はあるみてえだな」

? 2 「同じ学校に転入したからね」

千棘「どういう事なのパパア!?」

一征「改めて紹介だイチ。こいつがギヤング組織『ビーハイブ』のボス、アーデルト・ウオグナーと桐崎千棘お嬢さんだ」

アーデルト「君の事お父上から聞いてよく知つてるよ。よろしくね承一郎君」

承一郎「あ、はい。こちらこそ。はあ……。この頃は何かというか、災難続きだな……

やれやれだよ……」

千棘「ちよつと！それはこつちの台詞よ！」

僕らがそうこう言っている間に突然、

? 「お嬢……ドガアアアアン!!?」

叫び声とともに、とてつもない破壊音が鳴り響いた！

はあ……厄介事が増えた気がする……。

第6話 質問責めを乗り切れ!

破壊音とともにやって来たのは、眼鏡をかけ、髪をバツクに整えたスーツ姿の男だった。後から部下らしいやつが続く。

? 「…見つけましたよお嬢…。集英組のクソ共がお嬢をさらったというのは本当だったようですね…」

千棘 「ク…クロード!!?!」

クロード 「ご安心下さいお嬢…。お嬢を守るのがビーハイブの幹部としての私の役目…。不肖このクロードめがお迎えにあがりました」ニコツ

千棘 「いやさらわれてなんていないから私…!!?」

ヤクザ達 「大丈夫ですか組長ー!!?!なんじやあ今のは…。あ!こいつらビーハイブ!!?!」

竜 「おうおうビーハイブの大幹部さん…。こいつあちよいとお痛が過ぎやしやせんか…」

クロード 「ふん…猿共が…お嬢に手を出したらどうなるか教えてやる…」

クロード「この街ごと消し飛ばしてやろうか……。ついでに貴様らの大事な跡取りもバラして売りさばいてやる……」ゴゴゴゴゴ

竜「やってみたいやゴルア……。坊っちゃんに手エ出したらビーハイブに関わる者全て二度とお郷の土踏めんようにしたらあ」ゴゴゴゴゴ

千棘「えっ、えー……!!??」

やれやれ、桐崎さんはビビっているな……。

二人の話が物騒になってきたので、僕はすこし語気を強めて言ってみた。

承一郎「やかましいッ！うっとおしいぞッ！お前ら!!??」

竜「坊っちゃん！」

クロード「なんだ、この小僧！」

承一郎「竜、てめえは黙ってるッ！クロードさんって言ったな、あなたも黙っていてくれないか？」

竜「へ、へい！」

クロード「……ふん！」

一征「相変わらず、イチは人をまとめるのが上手いな」

アーデルト「そうだね」

一征「あ——君達、ちよつと誤解してるんじゃないかね若えの」

クロード「ん……? なっ……! ボ……ボス……!!?」

一征「嬢ちゃんをさらったなんざとんでもねえ誤解だぜ? なんせ……」

アーデルト・一征「「こいつらあラブラブの恋人同士だからね」

ギヤング・ヤクザ達「「なっ……なああにいいー!!??」

こ、このタイミング言う普通!!?」

クロード「……ボス……本当ですか……?」

アーデルト「ああ。僕らが認めた仲だ」

承一郎・千棘「「……」

ギヤング・ヤクザ達「「……そ……そりやすげー!!?」

ヤクザ達「「坊ちゃんついに彼女が出来たんスカー……!!?」

千棘・承一郎「「!!?」

竜達「「いやーずっと心配だったんスよー!!? この歳になつて彼女の一人も出来ねえから……。いやーこいつは本当にめでてえ!!?」

承一郎「君達……言つていい事と悪い事があるんだが……」

ゴゴゴゴゴ

ドス黒い笑顔で言うと竜達が竦み上がる。ほとんど君達が原因じゃあないのかい……

?

桐崎さんの方もすごい。クロードさんが号泣しているのだ。

何だこの状況？いい年こいたおっさん達が号泣している。こんなの見たら誰だつて混乱する。誰だつてそうする。僕もそうする。

竜「なあなあ嬢ちゃん。どつちからどうやって告られたんですかい？」

千棘「え!!？」

竜が桐崎さんに質問をしてきた。

千棘「え…えくとそれは…」

が、頑張つて桐崎さん！

千棘「かつ…彼から『一目惚れです、付き合つて下さい』つて…と…とか？」

桐崎さんの顔が赤くなり、蒸気が噴き出ている。

竜達「「おおー!!？」坊っちゃん一目惚れだったんすかー!!？」

ギヤング達「「いいなー青春だなー!!？」」

クロード「…ああそうだ。私も坊っちゃんに聞きたい事があるのですがいいですか？」

承一郎「ああ、はい。どうぞ」

クロード「お嬢の好きな音楽と食べ物は何でしたっけ？ラブラブなら当然答えられると思うのですが…」

トニーツク!!?」「最強のカップルの誕生じやー!!?!」

と言ったきた。こ、これは良かったのかな…?

竜「いやー良かった良かった。もしも二人が…4日でキスを済ませるような不純な恋愛をしてるようなら血を見る事になってやしたよ」

あ…危ない…!!?良かった…。

竜「しかしまあお二人方!もし仮に」

ギヤング・ヤクザ達「ウチの坊っちゃん(お嬢)を捨てるような事があれば…、そんな時ア…責任取って貰いやすからね…?」ゴゴゴゴゴ

「まっ…このお二人に限ってそんなはそんな事ないでしょーけどね!」「そりやそーだ!ギヤハハハハハハ!!?」

千棘・承一郎「……………!!?」

ちよつとヤバイ事になってきたがやつと質問が終わった。

第7話 空条承太郎!一条承一郎に会うその①

タクシー内——

運転手 「もうすぐ本海苔町ですよ。お客さん初めて来ますか?」

承太郎 「ああ。そうだ」

運転手 「なにか用事でも?」

承太郎 「少し、遠い親戚に会いにな」

運転手 「そうですか」

承太郎 「やれやれ。面倒な事にならなければいいのだが……」

—————

朝、一条宅——

ピンポン

竜 「坊ちゃん。お客さんですぜー」

承一郎 「……客?」

千棘「ご……ごきげんようダーリン！突然で悪いんだけど今からデートに行かない☒」
直後、僕の体がフリーズする。

街の中——

千棘「………なんで………なんで私がこんな目に遭わなきゃなんないのよおー!!？」

承一郎「………それはこっちの台詞だよ……。はあ……やれやれだよ………」

千棘「あーあほんとやってらんないわね。それじゃあ私先帰るから」

承一郎「え？」

千棘「え？じゃあないわよ。みんなもういないんだからこれ以上私があんたという理由ないじゃない」

承一郎「桐崎さん、あいつらは僕達にとっても過保護だったんだよ？そんな奴らが僕等がデートのときに何もしないと思うかい？僕があいつらなら絶対ついて来るよ」

千棘「え……？」

物陰に隠れているギャングとヤクザ達を発見……。

文字通り逃げ場がない……。

結局、デートをすることになったのだが……。

キング・クリームゾン!!？

カフェ、食事、そして映画と僕の幻想をぶち壊した後、桐崎さんは飲み物が飲みたいらしく、僕が買いに行くことに……。やれやれ……。

く千棘 side く

まったく、いやになっちゃう!

あんなやつとこれから3年間恋人のフリをするなんて信じられない!

不良「ねえねえそこのお嬢ちゃん! 君かわいいねー。どう? 今ヒマ? オレらとお茶しない?」

チャライ不良達がやって来た。

千棘「……あいにく人を待つてるんで」

不良「なー、いーからオレらと遊ばねー? ぜってー楽しーからさー」

千棘(フン……こういうのはスルーよスルー……)

不良「あ? 何よシカト? やめてよーなんでもするからさー!!」

しつこいと感じ始め、うざくなってきた。拳を強く握りしめたときに、承一郎が戻って来た。

承一郎「いやーすいません! この子まだ日本語が上手く出来なくてね、じゃあ桐崎さん行こう!」

不良「なんだこいつ、なあ嬢ちゃん一緒に行こうぜ」
プツン！

承一郎から何か切れた音がした。

承一郎「桐崎さんから離れな！あんたの指が吹き飛ばぜ！」

不良「なんだ？やろうってのか？やってみろよ！」

承一郎『波紋』ツ！

承一郎の『波紋』が持つていたコーラの瓶に流れ、瓶の栓が不良に向かって吹き飛び、不良の指を吹き飛ばした！

不良「うぎやああああ!!？お、俺の指が…!!？」

承一郎「それじゃあ行こうか、桐崎さん」

承一郎が私の手を掴んで走った。とても力強いと感じた。

く承一郎 side

僕等は走って、ある公園のベンチへやって来た。

承一郎「はあ…やってしまった…」

千棘「ねえ、さっきのって…」

承一郎「ああ、『波紋』の応用だよ。触れずにコーラの栓を吹っ飛ばす、僕の特技だよ」

千棘「あ…助けてくれて、ありがとう」

承一郎「気にしなくていいよ。体が勝手に動いただけだからさ」

千棘「じゃあ、私ちよつとトイレに行くわ」

承一郎「あ、うん……」

はあ……ひとまず休憩できるな……。

そんな事を考えていると、遠くから大男がやって来た。

身長は190cm以上で、黒の帽子と厚手のコートを身に纏っている。ワイルドな風

貌だが、同時に知的な雰囲気醸し出していた。

?「君が…一条承一郎君だな……?」

承一郎「…そういうあなたは……?」

承太郎「私の名は…空条承太郎という…。奇妙だが、血縁上、君の曾姪孫だ。」

< || t o b e c o n t i n u e d ||

第8話 空条承太郎！ 一条承一郎に会うその②

承一郎「僕の曾姪孫？」

承太郎「そうだ。奇妙だがな…。君は私にとって曾祖叔父ということになる」

承一郎「それで、僕に何の用ですか？」

承太郎「君の本当の父親の事だ」

承一郎「……………!!？」ピクッ

承太郎「君の父親は他の人間より特殊でな、イタリヤとアメリカ、合わせて4人の息子がいて、更に調べてみたら君という息子がいたという事を知ったんだ」

承一郎「よ、4人!!？僕はそんな事は知らないぞッ！」

承太郎「異母兄弟だ。君はその異母兄弟の末っ子というわけだけ。そして、あともう一つは、ある『矢』の事だ」

承一郎「!!？『矢』だってッ!!？」

承太郎「調べによると、君は数日前謎の襲撃によって『矢』に貫かれたようだな。あの『矢』は、『スタンド』という特殊能力を目覚めさせる矢だ。だが、才能が無ければ、そいつは死ぬ。」

承一郎「し、死ぬですって!?!」

承太郎「にわかには信じられないだろうが、本当の事だ。君は多分、気付いていないと思うが、『スタンド使い』になっっているはずだ」

承一郎「僕が…『スタンド使い』…!?!」

承太郎「私はしばらくこの街に滞在するつもりだが、何かあったら私に連絡してくれ」

承一郎「は、はい。分かりました、承太郎さん」

承太郎「それじゃあな」

そういうと、承太郎さんは街中に消えて行つた……。

承一郎「あの人は、一体……」

小咲「あれ?どうしたの一条君こんな所で」

承一郎「うわっ!…小野寺君か。君こそなんでこんな所に…?」

小咲「私?友達と買い物に来てその帰り。…でも驚いたよ。声をかけようと思ったけど、大きな男の人と話してたんだもん。あの人は誰?」

承一郎「僕の遠い親戚だって。今まで知らなかったけど」

小咲「えっ?!?一条君の親戚の人?!?ずいぶん大きな親戚だね」

承一郎「しかも祖姪孫だって。かなり離れているな……」

などと僕達が話していると、いきなり桐崎さんが、

千棘「ダ〜リ〜ン!!? お待たせ〜!!? ごめんね〜! 思ったよりずっと時間掛かってちやつて〜ええ〜……」

と言いながらやって来た。そして、

全員「……………」

全員が時間が止まったようにフリーズした……。

〜千棘 side〜

公園のトイレ前——

千棘「ん……?」

千棘（あれ? 誰と話してんだろあいつ）

トイレで手を洗っていると何か声が聞こえた。

ギヤング「:でよー、なんか変なんだよなー。お前どう思う?」 「ああ……。俺もそう

思うぜ」

千棘「?」

ギヤング「お嬢とあのガキの様子がさー」 「ああ。ヤクザんどこで見たラブラブつぶりが見えねえつつーか:」 「どっか不自然なんだよなあ」 「ケンカとかしてたしなーんか

……」

ま…ま…ま…ま…!

千棘（大変だわ…!!?このままじゃあ今日の苦労が水の泡になっちゃう!もつかい締めてかからないと…!!?）

私は気合を入れ直した。

千棘（よし!）

そして、承一郎の所へ向かう。

千棘「ダ〜リ〜ン!!?お待たせ〜!!?ごめんね〜!思ったよりずっと時間掛かったちやつて〜ええ〜」

だけど、承一郎と一緒にいたのは同じクラスメイトの小野寺さんで……。

全員「……………」

全員が時が止まったようにフリーズした……。

く承一郎 side く

すごいカオスな状況になっている……。

小咲「…き…桐崎…さん…?え…?今一条君の事…『ダーリン』って…」

千棘「……………」

や、ヤバイ……。好きな人の前でニセモノの恋人を演じるって……。

最悪の事態だ……!!?!早くなんとかしないと……!!?!

小咲「……え……えくとその……。ダーリンてことはつまり……。二人はその……付き合つて……?」

承一郎「い、いや誤解だ!僕達は付き合つては……」

千棘「そつ……!そつよ誰がこんな……!!?」

うつ……!みんなが見ている……!ど、どうすれば……。

小咲「そ、そつか!二人は付き合つていたんだね!私はお邪魔みたいだからもう帰るよ。じゃあね」

承一郎「う、うん……じゃあね……」

僕はこう返すことしか出来なかつた……。本当に涙が出てきそうだ……。

こうして僕達はこの人生最初に最悪のデートを終えた。

家に帰つたら、驚きの人物がいた。

承一郎「じよ、承太郎さん……!!?」

承太郎「やあ、承一郎君。悪いが泊まる場所がまだなくてな、君の家に滞在するようになった。よろしくな」

承一郎「は、はあ……」

こうして、長かつた1日が終わった。

第9話 学校でも恋人の演技をせよ!その①

夢の中——

承一郎「……どうして……泣いているんだい……?」

月が出ている夜、昔の僕の前に小さな女の子が一人岩の上に座っている。

?「……この絵本 最後がね、とっても悲しいの……。……とっても大好きな本なんだけど

……

承一郎「……ふうん……。……ねえ!それちよつと貸して!……こーして……こーすれば……!!

?」

僕は絵本の文章を持っていたペンで書き変えた。

?「わー!!?」

承一郎「ほら!これなら二人とも幸せになつてハッピーエンドでしょ?」

?「すごい!!?すつごく素敵なお話……!!?あなたお名前は?」

承一郎「僕?僕は一条承一郎!君は?」

?「わたしは——」

朝、一条宅――

承一郎「……で、その『スタンド』っていうのは、本人の生命エネルギーが創り出すパワーある像なんですよね？」

承太郎「ああ、その通りだ。スタンドはスタンドでしか触れられないし、スタンド使いにしか見えない。それとスタンドが傷つくと本体も傷つく。例外はあるがな」

承一郎「なるほど……。あとスタンドには一つ能力があるんですよね。承太郎さんのスタンドの能力は？」

承太郎「私のスタンド、『スタープラチナ』は5秒ほど時を止めることができる」

承一郎「時を？？そ、それはすごい……」

竜「坊ちゃん！そろそろ時間ですよー！」

承一郎「ああ、今行く！……承太郎さん、僕はそろそろ学校があるんで行きます」

承太郎「ああ、分かった。あと昨日は言うのを忘れてたが、近いうちに君の兄弟と私の娘が来るらしい。そのときはよろしく頼む」

承一郎「はあ、分かりました」

僕はそう言つて家を出た。

キング・クリムゾン!!?

学校、教室前——

僕は教室に入って、小野寺君に声をかける。

承一郎「小野寺君！」

小咲「…一条君!おはよう！」

承一郎「良かった。ちょうど話があつたんだよ」

承一郎（昨日の誤解を解かないと…）

承一郎「あのさ…一昨日の事なんだけど…」

クラスメイト「おおつとー!!?」一条と桐崎さんじゃあねえかー!!?」「おーいみんな!

二人が来たぞー!!?」「よっ!待ってましたー!!?」

承一郎「……え…

クラスメイト「おめでとー!!?!」「お前ら付き合う事になつたんだってな!!

?」「末永くお幸せにー!!?」

承一郎「なっ、何イーツ!!?」一体何の話…!!?」

集「とぼけんなってジョジョ!!?」もーネタはあがつてるんだ!一昨日の土曜日…!!?

街で二人がデートしてるのを板野と城ヶ崎が目撃してしまったのだよー!!?」

千棘・承一郎「!!?」

キョーコ「おー何何お前から付き合う事になったわけ? いいねー青春だねー」

キョーコ先生までこの始末である。

しかも、教室の窓の外にはクロードが双眼鏡を持って木の上にいた。というか、よく不法進入で訴えられないのか不思議である。

つまり、僕達は学校でも恋人のフリをしなければならぬのだ。もう泣きたい。

承一郎「はあ：確かに僕達は付き合っているよ」

クラスメイト達「「おおー!!?」」

クラスから歓声上がる。

さよなら、僕の輝かしい青春……。

桐崎さんは涙を流しそうだ。

そして、小野寺君と目が合う。静かに笑ってくれたが、何の感情を表しているのか僕にはよく分からなかった。

こうして、朝からヘヴィな一日が始まった。

キング・クリムゾン!!?

放課後——

千棘「…あーもうなんでこーなるわけ!??どーしてくれんのよ私の高校生活…!」

承一郎「はあ…それは僕の台詞だよ…」

結局昼休みの時間も食事の時間もクロードが見張ってて、小野寺君と話すチャンスすら来なかった…。

千棘「じゃあ…私やる事あるから先帰ってて!」

承一郎「ん?ああ、分かったよ」

僕はそろそろ飼育小屋に向かおうと思っていたら、偶然小野寺君とばったり会った。

小咲「あれ?一条君今帰り?」

承一郎「いや、これから飼育小屋に向かうところだよ。それにしても…なんでこんな事になったのかな…?」

小咲「あ!またそういう…。ダメだよそんな事言っちゃ!…:そりゃあ…桐崎さんが一条君の事をいって思ったからじゃあない?」

承一郎「え?いやいやそんな事はないよ。別に僕は良いところなんて…」

小咲「あはは!そんな事ないよ。いっぱいあるよ。」

承一郎「そ、そうかい…?」

小咲「そうだよ。たとえばほら、まだ日本語が苦手な桐崎さんにこつそりノート取ってあげることか…捨てられた動物見ると放っておけないことか、見知らぬおばあさ

んの為に何時間も探し物手伝ったりとか、友達が宿題を忘れたら自分も忘れたってウソついたりとか、友達が先生に叱られそうな時——」

小咲「自分も一緒に叱られに行ったり……。ほらね、いっぱいあった」

…小野寺君がこんなに見てくれていたのは嬉しいが…。

承一郎「でも桐崎さんがそんなところで僕に惹かれたりはしないと思うが…」

小咲「…そうかな。でも…私は桐崎さんがどうして一条君を好きになったのか分かる気がすらけどな」

承一郎「え…？小野寺君…それってどういう…」

委員「あ、わりー」

小咲「！」ドンツ

委員の人が荷物を運んでいて、小野寺君にぶつかつた。

そして、小野寺君の制服から鍵が落ちた。

承一郎「…？…え…これって…」

小咲「!!？」

第10話 学校でも恋人の演技をせよ!その②

鍵先には十字架の形があしらわれている、古びた鍵だった。でも僕はその鍵を昔から知っていたような気がした。

承一郎「お…小野寺君…それ…」

小咲「ちっ…違うの!!?」

承一郎「!!?」

小野寺君が急いで鍵を拾う。

小咲「こっ…こここれは…家の…鍵で…じゃあ…っ!!?じゃあなくて…!!?家の鍵と間違えて…」

承一郎「え…?」

小野寺君は顔が赤くなり、言動があやふやになっている。

小咲「ホ…ホントはね!コレ…ウチの古い本棚の鍵だね…!それと…間違つて…」

小咲「やだすごい恥ずかしい…!!?何やってんだろ私…」

小咲「ととと…とにかく違うの…!!?」

と言いながら、小野寺君はものすごいスピードで走り去ってしまった。

承一郎「ええ!!?お…おのっ…!」

僕が言い終わらないうちに小野寺君は見えなくなってしまった。

承一郎「……すごい…。あんな小野寺君は初めて見たな…」

まあ明日にはもう一回話せるだろうと安易な考えをしていた。

翌日——

今日も昨日と同じように恋人の演技をすることになり、小野寺君とは全然話せないでいた。

キング・クリムゾン!!?

屋上——

千棘「…ハア…、なんでこんな事になるのよ…」

承一郎「それはこっちの台詞だよ…」

千棘「…ハア、これじゃあ…いつまでたっても…」

承一郎「…まあでもさ、別に秘密を守るような親しい友達になら言ってもいいんじゃないか?たとえ一人でもさ、状況を分かってくれる奴がいれば君だってだいぶ気も楽に…」

千棘「…ああそう。ならあんたはそーすればいいんじゃない?」

承一郎「え?なんだい?急に」

千棘「うっさいわね!!? 話しかけないで!!?」

承一郎「ええ!!?」

千棘「私放課後やる事あるからあんたはさつきと帰ってよね!!?」

と言ひ、桐崎さんは去っていった。

どうしてなのかさっぱりわからなかった。

キング・クリムゾン!!?

集「ほう…オレに相談とな? どーせ桐崎さんの事だろ?」

承一郎「う…まあね…」

集「何したんだよお前。いいか? 女の子つてのは砂糖菓子のように繊細なんだぞ」

?

承一郎「何もしてないって…。やれやれだよ…」

はあ…全く訳が分からないよ…。

集「それで? どうだね彼女の唇の柔らかさは」

承一郎「そんな事する訳ないだろツ!」

集「んで? どーしたんだよ? 話してみろって親・友・だろ?」

承一郎「う…」

こんなのが僕の親友なのかと思ひながらも、本当の事も含めて話す。

キング・クリムゾン!!?

集「……ふーんなるほど。つまりその「秘密」とやらを言っても友達になら言ってもいいんじゃないよか……」

承一郎「……まあだいたいそんな感じ……。僕には彼女がどこにキレたのかさっぱり分からないよ」

集「……と言うよりはよ、その秘密を『言える友達がいたりや苦労しねーよ!!?』……って事なんじゃねーの?」

承一郎「え?でもクラスには馴染んでいるんじゃないのかい?」

集「でも桐崎がお前以外の特定の誰かと仲良くしてるところって一度も見た事ねーんだよなあ」

教室——

桐崎さんを探していると教室から桐崎さんの声が聞こえた。

どうやら、友達の名前や特徴をノートに書いているようだ。僕も昔やっていた事を彼女もやっていたのだ。

僕は教室に入った。

千棘「なっ……!!?なんであんたがここに……!!?」

承一郎「本当に君は僕に似ているね…」

千棘「え……?」

承一郎「僕も昔同じことをやっていたんだよ。だから僕も手伝うよ、そのノート作り」

千棘「…あーそう!!?そこまで言うなら手伝わせてあげなくもないけど!!?」

承一郎「……本当にかわいくないね君は…」

千棘「当たり前でしょ!!?なんで私がホントの恋人みたいにかわいくしてなきやいけないわけ!!?」

千棘「しよせんあんたとの仲なんて演技なんだから…!!?」

承一郎「はいはい、分かっているよ」

だけど、僕達は知らなかった。

小咲（……演技……演技……どーいう事……?）

小野寺君が廊下で僕達の話聞いていたことを…。

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

第11話 美少女が作る料理はだいたいダークマター

登校中——

桐崎さんは登校中に鼻歌を歌っている。

承一郎「…なんだい？えらく上機嫌だね。なんかあったのかい？」

千棘「私は今日こそ友達を作るって決めてるんだから…！今日は調理実習の日よ！！」

キング・クリムゾン！！？

学校内、調理実習室——

千棘「…今日の課題ってケーキでしょ？みんなもびつくりするような美味しいケーキが出来ればお友達なんて向こうからやってくるってものよ！」

承一郎「…そんなに上手くいくのかい…？まあ、僕は大惨事が起こらないことを祈るよ」

千棘「言ってなさいアホダーリン。ほえづらかかせてあげるわ！！？」

承一郎（ま、何事も前向きなのは結構だけど…、しかし意外だな。桐崎さん料理なんて出来たのか…）

と、思つて桐崎さんの方を見てみると、桐崎さんがバサア!!?と薄力粉を全部ぶちまけて計量器からはみ出ていた。

千棘「…90gつてこのくらいかな」

やれやれ、先が思いやられるな…。

女子達「——」「アハハ…」「ねえねえあんたは誰にあげるのよ?」「えー?実は…」

承一郎「…?…何だ…?」

集「おやおや?なんだ知らないのかね一条君は。今クラスで今日のケーキを好きな奴に渡すつていう流れが出来てんのさ。おかげ様でバレンタインよろしく男子は皆そわそわしてゐるつてわけ!」

承一郎「…へー…」

集「でもお前はいいよな承一郎!確実にくれる彼女がいてよ!」

承一郎「…胃薬用意した方がいいかな…」

集「は?」

まあ、そんなことがあるなんて知らなかったな。

るり「へー小咲にあげる相手なんていたんだ。誰?」

小咲「え?」

という小野寺君達の話聞いていたのだが、

千棘「——えーと…次は卵をゆっくりかき混ぜる」

そして、次の瞬間ガシユツ!!?という音を立ててボウルの中の卵が全て吹っ飛んだ。僕は急いで別のボウルで落ちてくる卵を全て受け止めた。

承一郎「危ないな!!?もうすこし気をつけてくれ!!?」

千棘「な!なによ…!余計な事しないでくれる!!?」

その他小野寺君と話すチャンスはあったのだが、桐崎さんのフライパンが燃えたりエプロンに火がついたり e t c e t c …。その度にチャンスがなくなる。

しようがないので桐崎さんを手伝おうとしたのだが、

千棘「なっ…!!?ちよっ…あんた誰が手伝ってって言ったのよ…!これは私が一人で…」

プツツン!

そこで何かが切れた音がした。

承一郎「喧しいッ!鬱陶しいぞこのアマツ!さつきから無茶しやがって!お前はケキができる前に地獄をつくるつもりか!!?」

千棘「な…な…!!?」

承一郎「…すごいケーキを作るんだろ…?」

承一郎「…だから計量カップを使えって!!?違う!!?バナラオイルは後だ!!?食器の

水気は取れと言っただろう!!？」

千棘「うっ……うるさいないっぺんに言わないでよ!!？」

集「……オレあんな承一郎初めて見たわ……」

男子「オレも……」

キング・クリムゾン!!？」

承一郎「……出来た……!!？」桐崎特製ショートケーキ……キ……キ……」

集「……何コレ、チョコケーキ……？」

桐崎さんが作ったケーキは真っ黒でプスプスとすこし煙が立っている。

桐崎さんはケーキを見てすこし泣きかけている。

承一郎「うおおお……!!？な、泣かないで!!？」

集「承一郎……!!？当然お前は食うよな!!？愛しの恋人のケーキだもんな……!!？」

承一郎「なあ……!!？」

集は自分に被害が及ばぬように僕にケーキを食べさせようとしてくる。

桐崎さんは目に涙を浮かべている。

承一郎「ぐっ……!!？……当たり前だろ!!？」

僕は覚悟を決めてケーキを食べた。

集「おおー!!？」

承一郎「……うまい……!!?」

集「え!!? ちよ……うそだろ……!!?」

千棘「……ホント?」

桐崎さんがケーキを食べる。

千棘「……おいしい!!?」

クラスメイト達「ホントだうめー!!?」「なんで!!? こんなに焦げてんに……」「すげー
うまいよ桐崎さん……!!?」

千棘「……ありが……と……」

似合わないと言いたいが、言ったら怒りそうなので言わなかった。

当初の目的はある意味で果たせたのでまあいいんじゃないのかな……。

キング・クリムゾン!!?

調理実習室の外——

小野寺君のケーキを渡す相手が分からなかったが、小野寺君と外で出会った。

小野寺君に渡す相手を聞いてみたら、どうやら彼女の母親らしい。嬉しくもあり、悲しくもあった。

小咲「……あの、実は私も一条君に……」

承一郎「……え?」

小咲「じつ……！実は……!!？余った生地で小さいケーキを作ったんだけど……、良かったら食べてくれる……？」

承一郎「え!?？いいのかい……!?？」

小咲「うん……！ちようど誰かに味見して欲しかったの……！」

小咲（……桐崎さんに悪いかな……？このくらいいいよね……？ただのクラスメイトとしてなら……）

小咲「で……ではどーぞ……！」

承一郎「あ……ありがとう……！」

小野寺君のケーキはとても綺麗で美味そうだ。流石和菓子屋の娘だなと思った。

承一郎「……では、いただきま〜る……！」

口に入れた瞬間、ポフン!!？という爆発音のような音が出た。まるでどこかの殺人鬼の髑髏の爆弾戦車スタンドが口で爆発したかのようだった。

そこで僕の意識は途切れた……。

第12話 一条家での勉強会

登校中——

女子「おっはよー、桐崎さん！」

千棘「お……お……お、おはよー！」

女子「ねーねー昨日のサッカー見た〜？」

どうやら前日の『黒ケーキ』の件によって桐崎さんは無事クラスに馴染めたようだ。

まあ、元々友達に困るようなタイプの人間じゃあなかっただけにきっかけさえあればこれが自然な姿なのだろう……。

キング・クリムゾン!!?

教室内——

今日のはのんびりしようかなと思っていたら、宮本さんがやって来て、
るり「一条君……今日私達あなたの部屋で勉強会開きたいんだけど構わない？」
と言って来た。小野寺君も一緒だ。また騒がしい日々が始まる。

一条家——

竜「お待ちしてやしたぜ坊っちゃんあーん!!?今日は勉強会ですってねー!!??」

承一郎「…まあね、お茶頼むよ」

竜達「了解しやしたア!!?」

僕は未だ状況が呑み込めない。

承一郎（なんで宮本さんが勉強会を…?しかも僕の家で…。駄目だ、全然分からない
…）

るり「…なんであなたまで付いてくるの舞子君」

集「えー?まーまーいいじゃないの同じメガネのよしみでさあ…!」

うわあ、宮本さんが嫌そうな顔してるな。

と僕達が廊下を歩いていると、承太郎さんと会った。

承一郎「あ、こんにちは承太郎さん」

承太郎「やあ、承一郎。その彼女等は?」

承一郎「ああ、みんな僕のクラスメイトです。紹介するよ、こちらは遠い親戚の空条

承太郎さんだよ」

千棘・小咲・るり・集「こんにちは」

承太郎「承一郎から話は聞いているよ、よろしく頼む」

キング・クリムゾン!!?

とりあえず、勉強会が始まった。

千棘「それにしてもあんたの親戚の人すごい大きいのね。190cm以上はあったわね」

承一郎「僕も今まで知らなかったんだよ。本当の父さんの家系はすこし変わっていてね」

千棘「え? 本当の?」

承一郎「そうか、桐崎さんは知らなかったね。僕は一条家の養子なんだ。父さんは僕が生まれる前に死んでいて、母子家庭だったんだけど、母さんが事故で亡くなって知り合いだったこの家に引き取られたんだ」

千棘「へえ、ところで承太郎さんって人の職業は何なの?」

承一郎「職業は海洋冒険家らしいよ。祖父はアメリカの不動産屋らしいよ」

千棘「なんて名前なの?」

承一郎「確か、ジョースター不動産って名前らしいよ」

千棘「えーッ!? ジョースター不動産って言ったら、アメリカではとても有名な不動産王なのよ!!?」

承一郎「そのようだね。もつと前の事を調べてみたら、イギリス貴族の家系らしいよ」

こんな感じで勉強会は続く。

小咲「…ねえるりちゃん、ここ解ける？」

るり「んー？ねえ一条君ここ小咲に教えてあげて欲しいんだけど」

承一郎・小咲「「!!?」」

小咲「るっ…!!?るるるるりちゃ…」

るり「あーごめん私これ全然ワカンナイから…」

小咲「…この前もつと難しそうな解いてたじゃあ…」

るり「いいから行け」

小咲「よ…よろしくお願いします…」

承一郎「え、えーとこの問題は先に α を代入して…」

小咲「わ!すごい解けた!すごい分かり易いよ!」

承一郎「こんなのどうということはないよ」

小野寺君にいいところを見せてラッキーと思っていたら、承太郎さんがやって来た。

承太郎「承一郎、すこし話がある。来てくれ」

承一郎「分かりました。みんなは進めといて」

千棘「あんたプリントは？」

承一郎「すでに終わっているよ。それじゃあ」

別の部屋――

承太郎「すまないな、友人との時間を割いてくれて」

承一郎「大丈夫ですよ。話ってなんですか？」

承太郎「ああ、話というのはな、この街の行方不明者数についてだ」

承一郎「行方不明者数……？」

承太郎「そうだ。私はスピードワゴン財団とのつながりがあつてな、調べによるとここ数年で行方不明者が急激に増加している。なぜだか、君には分かるはずだ」

承一郎「……『矢』ですか……？」

承太郎「君のように『矢』の犠牲者になっている者が多数いるようだ。そして、もう一つ可能性がある……」

承一郎「もう一つ……？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承太郎「『この街にいる殺人鬼がスタンドに目覚めて、殺人を繰り返している』ということだ」

第13話 暗闇の中での災難

承一郎「スタンド使いが殺人を繰り返しているということですか!!?」

承太郎「そうだ。現にM県S市の杜王町で、連続殺人犯がスタンド使いになったことがあった。どれも凶悪な能力を持ったスタンドを身につけていた」

承一郎「そんな……!!?」

承太郎「元々私はそれを調べる為にここに来たんだ。私の娘や君の兄弟が来るのも、『矢』と『スタンド使い』を調査する為なんだよ」

承一郎「……つまり、すでにスタンドを悪用している輩がいるということですか?」

承太郎「そういうことだ。今日来たみんなにもこのことを伝えて、一応注意を呼びかけてくれ」

承一郎「…分かりました…」

僕は部屋を後にした。

承太郎（やれやれ…。昔私が燃やしたDIOの『天国に行く方法』が記されたノート……。それを実行しようとしている者もいるかもしれないが、今は言わないでおこう……）

キング・クリムゾン!!?

一条家、庭——

僕と桐崎さんは竜達に頼まれて蔵に向かっている。

千棘「……つたくなんなのよ？突然二人で来てくれなんて……」

承一郎「……なんか裏の蔵にお高いお茶取りに来て欲しいんだって」

承一郎（……『スタンド使いの殺人鬼』……みんなにどう伝えればいいんだろう……）

千棘「あ、蔵ってこれのこと？」

承一郎「ん？ああ、そうだね。入ればすぐに分かるって言ってたけど……」

桐崎さんが蔵の前でフリーズしている。

承一郎「？どうしたんだい？」

千棘「……あんたさっさと取ってきなさいよ」

承一郎「？いや、ちよつとは手伝……」

千棘「嫌」

承一郎「……」

こんなところでグダグダしていても意味がないので僕はドアを開けた。

そしたらいきなり竜達が飛び出してきて、僕と桐崎さんを突き飛ばし、蔵に鍵をかけ

た！

承一郎「おーい!!?ここを開けろー!!?」
勿論返事はない。

承一郎「…やられた。あいつらはこのために僕達を…!!?きつと今頃「あつしらにできることはここまでツス…!」とか思っているんだろうなあ…。蔵を出たら『波紋』の拳を叩き込むツ!」

僕は少しキレぎみに考えながらも、

承一郎「ごめん、桐崎さん。ウチのモンが。後で厳しく言っておくから…」
と桐崎さんに謝る。

桐崎さんは黙ったままだ。

承一郎「…?どうしたの?妙に大人し…」

僕が言いかけたときに、桐崎さんが僕にくつついて来た。

承一郎「えっ!!?ちよ、ちよっと桐崎さん!!?」

千棘「うっ…!うっさいちよっど黙っててよ!!?こっち見たらブン殴るからね!!?」

桐崎さんは後ろでカタカタ震えている。

承一郎「…!!?君…まさか…怖い…のかい…?」

そう言っただけならいきなり殴られた。

承一郎「ウゲエツ!!?」パゴム!!?

初めて殴られたが、とても痛い。

千棘「こつち見たら殴るって言ったでしょ!!？」

承一郎（…理不尽な……）

千棘「…苦手なのよ、昔からこういう暗くて狭い場所。昔洗濯機にハマって5時間動けなくなつたあの日以来…」

承一郎（なぜそんな事に…!!?）

千棘「わつ…私だつて好きであんたなんか掴まないわよ…!!?でもこうしてなきや耐えられないの！分かつたら黙つて掴まれてて!!?」

ヤバい、このままでは理性が崩壊してしまいそうだ。

とSAN値がガリガリ削れて僕に桐崎さんが声をかけた。

千棘「……あ、ねえあれ見て！はしご！あれならその窓から出られない？」

承一郎「ん…?…まあ確かに出られるだろうけどさ…、君そんな状態で出られるのかい…?」

千棘「うつ…、私はちよつと…無理だけど…、でもあんただけでも先に出て、人を呼んでくれれば…」

承一郎「やれやれ、痩せ我慢をするんじゃないよ。そもそも君に掴まれているから動けないしさ」

千棘「うう……、じゃあどうするのよ！」

承一郎「うくん、じゃあ『波紋』を使うか」

千棘「え……？」

承一郎「コオオオオオ……」

僕は独特のリズムの呼吸をしながら、

バリバリバリイツ!!?

と桐崎さんに波紋を流し込んだ。

千棘「きやつ!!? え、足が勝手に……!!?」

桐崎さんはいきなり立ち上がり、梯子を上がり蔵の窓を開け、飛び降りた。

千棘「やった、外に出れたわ！」

今の動きは桐崎さん本人の意思ではない。僕の『波紋』で動きをコントロールしたのだ。

そして僕も窓から飛び降りた。

その後、蔵の鍵をかけた竜達に一発ずつ波紋の拳を叩き込み、一応小野寺君達に僕を矢で射抜いた奴がまだ捕まっていないことを告げ、注意を促した。

こうして、波乱の勉強会は幕を閉じた。

第14話 水の上を走っている時点ですでに人外

放課後、学校のプール――

千棘「…助っ人？」

桐崎さんはビキニ姿だ。どうやらまだ学校の水着を買っていないらしい。

るり「うん…ウチの水泳部かなりの弱小でね、明日練習試合なのにメンバーが少し足りないの。桐崎さんなら運動神経も申し分ないし差し支えなければ是非お願いしたいのだけど…」

千棘「私だったら全然いいわよ！体動かすの好きだしね！…それよりなんでもや…ダーリンまでいるの…？」

承一郎「…宮本さん、ここ女子水泳部だろう…？な…なんで僕まで…」

僕と桐崎さんは宮本さんに頼まれて女子水泳部の手伝いに来ている。桐崎さんは分かるけどなぜ僕なのだろう？

僕はまだ宮本さんの意図が分からない。

るり「…一条君にはまた別に頼みたい事があってね。ま、そちらは追い追い…」

小咲「る…る…るりちやああああん…!!？な…なんで私が選手登録されてるの…!!？」

私…カナヅチなのに…」

承一郎「!!?」

小野寺君の水着姿…。ヤバい、すごく可愛い…。

小咲「私じゃあ戦力になんか…あれ?!? 一条君?!? 今日は何で?!?」

承一郎「宮本さんに頼まれて来たんだよ」

小咲「でも、胸の傷は大丈夫なの…?」

僕の胸には痛々しい傷跡がある。なんで生きているのか今でも不思議だ。

承一郎「大丈夫だよ、別に気にすることはないよ。医師からもOKされたし」

僕達がそんな会話をしていたら、

集「おーっス楽ーっ!!? 桐崎さんと小野寺が女子水泳部の助っ人やるんだって

くっ!!??」

と集がやって来た…。

こいつ、どこから湧いて出てくるんだ?!?

集「おーっ!!? おっほほ!!? うっむこれはこれは…。なんとも素晴らしいです

なく。…ん?」

集の視線が桐崎さん、小野寺君の順に動き、宮本さんで止まった。そして、

集「…フウ…」

と深いため息をついた瞬間に

ドンツ！ザツパア！！？

と宮本さんにプールに落とされた。

るり「一条君」

集を足でプールの中に押し込みながら宮本さんは淡々と話す。宮本さん、恐ろしい子
！

るり「あなたにお願いしたい事というのはね明日の練習試合までに小咲を泳げるよう
にして欲しいの」

なんやかんやあったが、ようやく水泳指南が始まった。最初に桐崎さんが泳ぎの手本
を見せてもらったのだが、ハイレベル過ぎて参考にならなかった。

その後、頑張ったのだが小野寺君はビート板でなんとかなるぐらいにしかならなかつ
た。

翌日、学校のプール――

承一郎「…ん？今日はビキニじゃあないんだね」

千棘「む、昨日は仕方ないでしょ？突然だったし学校の水着まだ買ってなかったんだ
から」

やはりまだ買ってなかったらしい。

千棘「…あつらく？それともダーリンは私のビキニが見たかったのかな？」

承一郎「…君は本当に大したやつだよ。全く…」

小咲「おはよう！一条君、桐崎さん！」

小野寺君と宮本さんがやって来た。

承一郎「やあ、小野寺君。今日は大丈夫かい？」

小咲「うん多分。昨日お風呂でもイメージトレーニングしたし」

承一郎「あんまり無理をしないようにね。とにかく完走できればいいんだから」

小咲「うん、ありがとう。頑張るね！」

千棘「…何よ私との態度の違いは」

承一郎「え？そんなにかわりはしないだろ？」

千棘「フン！もういいわ！」

承一郎（え、何？僕何かやらかした!?）

さっぱり分からない…。某帝都大学の教授風

桐崎さんは準備運動をしないでスタート地点に立った。果たして大丈夫なのだろう

か？

そして、水泳の練習試合が始まった。

承一郎「…ごめん、宮本さん。小野寺君一日じゃあ完全に泳げるようには出来なかった」

るり「え……。ああ……。まあ……。 (::あれ本気にしてたんだ。冗談だったのに::)」
るり「……まあ大丈夫でしょ参加は出来たんだし。あの子が溺れるような事さえなければ。……でも小咲昔から死ぬ程不器用だからなあ」

承一郎「えっ……」

るり「冗談よ。ここのプール足つくんだし。そんな事あるわけ……」

女子水泳部員「……ねえ、あれ見て。あの子溺れてない？」

見てみると、桐崎さんが準備運動不足で両足をつってしまったようだ。

るり「!!?!桐崎さ……!!?!」

承一郎「桐崎ッ!!?!」

僕はそのままプールに駆け出し、

承一郎「コオオオオオ……!!?!」

バシバシイッ!

という音を立て、奇妙な紋様の波を立てながら水面を走った!

集「ひっええーっ!!?!す、水面をツ!!?!」

るり「ど、どうやって……!!?!」

承一郎「小野寺君!ビート板を借りるよ!」ガシイッ!

小咲「え!!?!う、うん!」

ビート板を貰い、桐崎さんが溺れている辺りでプールに飛び込んだ!

集「お、おい!あれを見てみる!」

るり「び、ビート板が水面に固定されている!」

僕は桐崎さんを担いでビート板に手に当て、

集「ビート板を軸にして桐崎さんごと跳び上がったツ!」

そして、水面に着地(着水?)した。

承一郎「うっ!さ、流石に二人分の体重を支えるのはすこしキツイか…」

そして、僕はそのまま桐崎さんをプールの外に引き上げた。

集「ジョジョ!桐崎さん無事なのか!?!」

承一郎「分からない。あんまり水を飲んでないと思うけど」

集は桐崎さんの呼吸音を確認する。

集「…息をしてない(ウソ)」

承一郎「何イツ!?!」

集「ジョジョ、人工呼吸だ」

承一郎「何イイイツ!?!?え!?!?なんで僕!?!?」

るり「なんでって…恋人以外誰が適任だって言うのよ!」

承一郎(やばい、やらなければバレてしまう…!!?うおおおお、神よ!許したまえ!)

第15話 そんなキャラクターしてない

昼食の時間——

僕は今集と一緒に昼食を食べている。

集「いや、ジョジョの弁当って相変わらず健康的だなく。これ母ちゃんが作ってるの？」

承一郎「何言っているんだい？僕が作ってるに決まっているだろう。母さんは家にいないし」

集「マジ？スゲーな」

承一郎「今日はこのれんこんと里芋の煮物が自信作でね」

集「：お前は良い嫁さんになる」

承一郎「僕は男だよ」

集「しかし対照的に桐崎さんの弁当はまたでけーな」

承一郎「え？」

く千棘 side s

私は今宮本さんと小野寺さんと昼食を食べている。だけど…。

るり「…キャビアにフオアグラトリユフ、オマール海老にフカヒレの春巻き。ウニの素揚げにフィレ肉のステーキ。」

宮本さんと小野寺さんが目が点になっている。

千棘「？」

るり「…桐崎さんて実家何やってるの？」

千棘「えっ?!? ベベ…別に普通の家庭だけど…?!?」

るり「…知らなかった桐崎さんて大変なお嬢様だったのね」

千棘「だから…別にそんなじゃあないって…!」

千棘（知らなかった…私のお弁当って普通じゃあないんだ）

千棘「あ、そうだ宮本さん」

るり「ん、るりでいいよ桐崎さん」

千棘「ほんと?!? じゃあ私も下の名前で呼んで欲しい!」

小咲「あ、なら私も小咲って呼んでよ」

千棘「るりちゃんに小咲ちゃんね、分かったわ!」

クラスの男子達（和むわあ…）

千棘「…昨日はゴメンねせつかく助っ人で出たのに失格になっちゃって…」

るり「…なんだそんなこと。いいのよ、こつちこそ無理に誘っちゃって。千棘ちゃん

に大事がなくてホツとしてるんだから」

るり（…それに少なからずあなたには罪悪感も感じてるしね）

千棘「？何か言った？」

千棘「まああるりちゃんに気がすることなんてないわよ。どうせ私が溺れたのだったあのもやしが悪いんだわ」

小咲「？一条君？」

千棘「そう！あいつとききたら試合前からムカツク事ばつか言つてさ、私が溺れた時もあるの寝込みを襲おうとするしホンツトサイテーなんだから…!!？」

承一郎がすごい息を吐き出すのが見えたが、気にしない。

小咲「…桐崎さ、…千棘ちゃん何も聞いてないの…？」

千棘「何が？」

小咲「プールで千棘ちゃんを助けたの、一条君だよ…？」

千棘「…へ？（。ㇿ。）う…ウソウソウソ…!!？」

あのヘタレがそんなことするわけがないと思った。

小咲「ウソじやあないよホントだよ…！」

だけど、小咲が言う。

小咲「すごかったんだよあの時の一条君。水面を走って誰よりも早く真つ先に千棘

ちゃんの元に辿り着いて助けたんだから」

千棘「えっ!?? 水面を走った!??」

小咲「うん。一条君から聞いたんだけど、波紋の呼吸の応用なんだって」

千棘「あいつなんでもアリね…」

小咲「…それなのにそんな風に言われたら少しかわいそうだよ」

千棘「う…、そ…そ…だったの…。でもどうしよう…私そうとは知らず2回もどつき回しちゃってるんだけど…」

余談だが、承一郎はあの後、集が千棘と小咲のバディーの話をしていたら千棘にとばつちりをうけていたのだ。

るり「…今からでも謝ってお礼くらい言っておけば…」

千棘「そつ、そんなの無理…!!? 今更だし…!!? だいたいあんな奴には礼なんか…」

小咲「…言つといた方がいいよきつと。何か出来ることあるなら私も手伝うからさ」
るり「…右に同じ」

千棘「…そうね、仕方ない礼の1つくらい言つてやるか。でないと借りを作るみたいで気持ち悪いしね」

…そつか、あいつが助けてくれたのか——…

キング・クリームゾン!!?

昼休み――

く承一郎 side く

僕が校舎の中を歩いてたら桐崎さんが、

千棘「…ちよつとそこのもやし君」

と話しかけてきた。

承一郎「…?なんだ桐崎さんか」

千棘「あ…あのさ…、昨日の事なんだけど…」

何故か今日はもじもじしている。何だろう？

承一郎「ちよつと待って、今何言おうとしているのか当てるから…」

千棘「えっ?」

僕は考えてみる。そしてある結論が出た。

承一郎「もしかしてあれ?集に腹の肉の事言われたの気にしてるんだろう?」

千棘「はああああああ!!?」

承一郎「わざわざ口止めこなくても誰にも言わないよ」

千棘「そういうことじゃあないわよ!!?」ゴオツ!!?」

桐崎さんがとてもすごいパンチを繰り出す。

承一郎「えっ!!?違うの!!?」バシイツ!!?」

僕はそのパンチを受け止める。すごく痛い。その後もう少し考えてみると、もう一つの結論が出てきた。

承一郎「あれ？もしかして桐崎さんお礼を言いたかったのかい？」

千棘「バ…バツカじゃあないのよ!!??そそそんなわけないじゃあない。どうして私があんたなんかに礼なんか…」

承一郎「…だよ、君はそんなキャラクターしてないからね」

千棘「…じゃああんたはどうして私を助けたんだのよ」

承一郎「…ん？」

千棘「…あんた私の事嫌いなはずでしょ？なのに…、なんで…」

承一郎「…人を助けるのに理由なんてあるのかい？それにあのときは体が勝手に動いたんだ」

千棘「…そう…じゃあ…Thank you for saving me.（…助けてくれてありがとう）I'm sorry. I shouldn't have hit you.（あと殴ってゴメン）」

どうやら分からせないように英語でお礼をしたらしい。

承一郎「…わざわざ英語で言うのも君らしいといえは君らしいな」

千棘「フン、じゃあね！」

そう言つて桐崎さんは去つていった。

く承一郎 side out

小咲「良かったね千棘ちゃん、仲直りが出来て！」

るり「ほぼ口喧嘩みたいなものだったけどね」

千棘「ありがとう。るりちゃんと小咲ちゃんのおかげよ！」

そこである質問をした。

るり「…ねえ、千棘ちゃん。今までずっと疑問に思っていたことがあるんだけど、聞いていい？」

千棘「え？何？」

るり「あなたと一条君つて本当に付き合ってるの？」

小咲（るりちゃん…?!?!）

千棘「え…、そりやあまあ…あ…」

そこで千棘は承一郎の言葉を思い出す。

千棘「実はね…」

そして、本当のことを二人に話す。

キング・クリムゾン!!?

小咲・るり「…え?!?!?付き合っていないの…?!?!?」

千棘「…そうなのよ。私達の両親のちよつと特殊な関係と事情のせいだね。私達は恋人のフリをしなくちゃあいけなくなつたの」

小咲「…じゃあ、一条君のことは…」

千棘「ハッ!!? あんな奴もう恋人なんて解消よ解消!!? こんな事情さえなければ誰があんな奴…」

小咲「そ…そうなんだ…」

小咲はノート作りするときの承一郎と千棘の会話に疑問を抱いていたので、千棘の話に納得したようだ。

るり「……………じゃあ千棘ちゃんはこの先一条君を好きな女の子が現れたらどうする?」

千棘「ハッ! そんなものし付けて差し上げるわよ!!? まああんなヘタレもやしを気に入るような奇特な方がいればだけど!!?」

小咲(うつ…)

千棘「あ! でもこの話絶対秘密にしてよね!」

小咲「う…うん、分かった」

るり「了解」

千棘「でないと街が1つ滅んでしまうの」

るり「……千棘ちゃんちってどういう家なの？」

千棘「普通のかていんです」

どうやらまだギャングの家だということは秘密らしい。

千棘「ま、とにかくそういう事だから二人とも約束よ!!？」

小咲「わ…分かったじゃあまたね」

そうして千棘は帰って行った。

第16話 小咲の告白!?!?

（小咲 side）

千棘ちゃんが帰った後、るりちゃんが小咲に話しかける。

るり「……………という事だそうだけど、あんたどうするの? ……いつそ告つちやう?」

小咲「ええ!?!? いやそんな…告るとかいきなりそんな…」

るり「…そんな事言つてたら今度こそ本当に誰かに取られちゃうかもしれないんだよ?」

小咲「……………うん…そうだね。その通りだと思う…。私…もう一条君に想いを告げる事はもう出来ないんだって半分諦めてた。でも…せっかくチャンスが来たんだもんね…。桐…千棘ちゃんは恋人じゃあなかったみたいだけど、私…もうこんな気持ちになるのは嫌だから…!」

私は自分に言い聞かせるように、自分の言葉を噛み締めるように言った。

るり「…小咲」

小咲「…がんばるよるりちゃん。私…この気持ち伝えてくる…!!?!」

るり「……………小咲…」

そのとき、教室のドアが開いた。

承一郎「ノックしてもしもし…ってあれ？小野寺君と宮本さん、君達今帰るところかい？」

小咲「一条君…！」

やって来たの是一条君だった。その瞬間、

るり「じゃーね小咲。私急用があるからすぐ帰らなきゃ。バイビーー」ビュン!!
?

と言いつつ、るりちゃんはすごいスピードで教室を出た。

承一郎「…!!?宮本さんすごい勢いで帰ったね…」

小咲（るりちゃんのバカくく。そりや告白するって言ったけど、そんないきなり…）
そんな事を考えているといつの間にか戻ってきたるりちゃんが私を見つめる。

るり（…逃げるなよ）

小咲（そ、そんな…!）

承一郎「…!!?宮本さん、なんで今戻ってきたんだろう？」

…どうしよう。告白なんてまだ先だと思ったのに…。どうしよう、いつもみたいに振るまえない…。心臓が壊れそう…。…ああゴメン。やっぱりいきなり今日は無理だよるりちゃん…!

承一郎「…ん?…小野寺君?君:顔赤くないかい?」

小咲「…え?」

承一郎「どうしたんだい、真つ赤になつているじゃあないか!カゼ?!?大丈夫かい!?!?」

小咲「あ…いや…これは…」

一条君の手が私の額に触れる。とても恥ずかしくなつてもつと顔が赤くなつてしまふ。

承一郎「うおお、すごい熱いよ!!?どどどどどうする?!?家まで送るか?!?病院に行くかい?!?いやいっそ救急車を…」

小咲「わつ!わ!落ちついて一条君!」

承一郎「これが落ちついていられるか?!?この熱さまさか40。C近くでてるんじゃあないか?!?だとしたら一刻も早く…?!?——」

と言つて、慌てる一条君。

——るりちゃん。私が好きなのはね、こういうところだよ。

承一郎「…よーし、ちよつと待つてて!!?今すぐ購買でカゼ薬を…」

小咲「わー!?!?待つて待つて一条君?!?」

私は購買に行こうとしている一条君の手を掴んだ。

小咲「…一条君。私、実はね今までずっと言えなかつただけど。私ずっと、一条君の事——…」

承一郎「小野寺…君…?」

小咲「……………す…す…」

承一郎「!!?小野寺君!!?危ないッ!」バツ

そう言つて一条君が私の窓側に立つた。

次の瞬間、ガシヤアアアン!!?!という音を立てて、ボールが飛来して窓ガラスが割れた。

く承一郎sideく

承一郎「!!?小野寺君!!?危ないッ!」バツ

何かが飛来してくるのを見た僕は、窓側に立つて小野寺を庇つた。

次の瞬間、ガシヤアアアン!!?!という音を立てて、ボールが飛来してきた。割れたガラスは僕の手にし刺さつたが、それ以外の負傷は無かつた。小野寺君は無傷だ。

野球部員「うわっ、ヤッベーー!!?!」「バカ、何やってんだよ」「すいませーん、誰か当たつてないですかー!!?!?」

承一郎・小咲「……………」

野球部員「マジかよ、思いつきり窓割れちやつたよ」「これ絶対怒られるよな…」

「誰だよ今打つたの!」「オレじゃあねーよ!」

承一郎「……つたく危ないだろう!!? 気をつけてくれよ君達!!?」

野球部員達は逃げて行く。

承一郎「やれやれ。悪い、小野寺君。僕はちよつと先生呼んでくるよ」

小咲「あ、一条君。ガラスで怪我してない?」

承一郎「大丈夫、こんなのかすり傷だよ」

小咲「すごい血が出るよ!ちよつと待ってて、今バンソーコ……」

承一郎「大丈夫だよ。波紋で治すから」

小咲「ダメだよ!バイ菌が入ったらどうするの?ほら!」

小野寺君が手当てをしてくれる。

承一郎「あ……ありがとう……。あ、ところでさっきは何言おうとしてたんだい?」

小咲「え!? あ……いや……その……ゴ……ゴメン。なんでもないの。気にしないで」

承一郎「……? そうかい? じゃあ行ってくる」

そう言つて、僕は教室を後にした。その時、首にかけていたペンダントを落としていたことに気づいていなかった。

小咲 side

一条君が教室を出た後、

小咲「…ハア~~~~~（こ…こんな事つてある…？ひどいよ神様…）
とへたりこんでしまった。

小咲（あーまたドキドキしてる…。力抜けちゃった。せっかく勇氣出したのに…）
キング・クリムゾン!!?

一条君と一緒にガラスの片付けをした後、校門の前にはるりちゃんがいた。
るり「…どうだった？」

小咲「…るりちゃん…。…ごめん、やっぱり言えなかった…」

るり「…そう…。…このへタレ！まあしよせんあんたじやあそんな事だろうと思っ
たけどね」

小咲「うっ…。そ…。そんなく…。」グサツ！

るりちゃんの言葉が胸に刺さる。

るり「…でも ま、小咲にしては頑張ったんじゃない？…私もさすがにちよつと急
かし過ぎた気がするしね」

小咲「…るりちゃん…」

るり「でも次同じ失敗したら絶交するから」

小咲「え…ええー！！?!」

…ごめんるりちゃん。私実はね、告白出来なかった事、本当は少しホツとしているの—

この気持ちを早く知って欲しいけど、私もう少しだけ今のこの関係が続けばいいな
て…。

でも「次」はきつと伝えるからね――

一条君

第17話 借りを返す

これは承一郎と小咲が教室から去った少し後の話。

く千棘 side く

学校内——

千棘「忘れ物をしちゃた！早く取りに行かないと！」

私は学校に置き忘れた忘れ物を取りに戻っていた。

千棘「あ！あつたあつた！」ガサゴソガサゴソ

目的のノートを手に入れ、帰ろうと思ったが

千棘「…ん？…あれ？これって…」

足元に何かあるのを見た。それは、承一郎の錠だった。

千棘（…つたく、何落としているのよあのバカ。あんな大事大事言つといてその『約束の女の子』とやらが泣いちゃうわよ？）

帰りの途中、承一郎のことを愚痴る。

尺の都合上描いてなかったが、承一郎は千棘に『約束の女の子』とその約束の事を話していたのだ。メメタア!!？

そういえば、『約束』と言えば…。

千棘「私も子供の頃に男の子と『約束』した事があつたつけ…。なんだつけ、あの時言つた言葉…。えーと確か…。あ、そうだ」

私は思い出した言葉を口にする。

千棘「ザクシヤ イン ラブだ…」

キング・クリムゾン!!?

桐崎家、千棘の部屋——

千棘「…さて、こいつをどうしたものか」

今、私の手の中には承一郎のペンダントがある。

千棘（まああれだけ大事な物だつて言つてたしね。明日返してやるか…。…つたく、

『約束』の印とか言つて何度も無くしてんじやあないわよ）

私は少し承一郎に呆れる。

千棘（…『愛を永遠に』^{ザクシヤ イン ラブ}か…。久々に思い出したなこの単語。私も何かその男の子と

大層な約束をしたような気がするけど、まったく覚えてないし。第一もう顔も名前も忘れちゃつたからなあ…）

…あれ？なんかあいつの話に似てる…？

千棘（…まさかね。再開の約束なんて私した覚えないし…。…あのバカの約束した女

の子ってどんな人なんだろ。あいつは否定したけどなんだかんだ言っても再開を望んでるし、その子の事今でも好きってことよね…)

千棘(…って何を考えてんのよわたしは!!? まあ私には微塵も関係ない話だけど…!!?)

千棘(あーもうこんなペンダントさっさと突っ返そう。…ってそういえば明日学校休みじゃあない)

しようがないわねえ…。

千棘「ん…?」

よく見たらペンダントのチェーンにヒビが入っていた。

キング・クリームゾン!!?

一条家——

ヤクザ「坊ちゃん!!? こっちにもありません!!?」ドタバタ

承一郎「承太郎さん!!? 無敵の『スター・プラチナ』でなんとかして下さいよーッ

!!?」ドタバタ

ギヤーギヤー!!? ガシャアアアアン!!?

竜「…坊ちゃん坊ちゃん!!? 坊ちゃんにお客さんっす!!?」

承一郎「客!!? 今はそれどころじゃあ…」

千棘「……よつ、ダーリン。落し物よ」

玄関にいたのはペンダントを持った桐崎さんだった。

承一郎「うおおおお!!? ありがとう!!? それ桐崎さんが拾ってくれたのかく!!? ……さつき失くした事に気付いて大慌てで探してたんだ。すまない、恩に着るよ……!!?」

竜「あ!!? 坊ちゃん見つかつたんスカー!!?」

千棘「……気をつけなさいよね」

承一郎「……しかしなんで落としたんだ? ずっと首にかけてたハズなのに……」

千棘「……さあ、今日体育でハズしたまま忘れてたんじゃあない……? 普通に教室に落ちてたし」

承一郎「んく……。そうかなあ……」

千棘「……じゃあそれだから、じゃあねバカもやし」

承一郎「え? あ……ああ、ありがとうね!」

私は車で家に帰った。

ギヤング「……どうでしたお嬢。オレの直したペンダントは」

千棘「うん、バツチリ。ダーリン全然気付かなかつたわ」

ギヤング「ええ!!? いいんスカ気付いて貰わなくて……。せつかくお嬢が……」

千棘「いいのよ」

——これで「チャラ」だからね、バカもやし——…

一条家、承一郎の部屋——

く承一郎 side く

承一郎（…しかし珍しい事もあるものだな。桐崎さんがわざわざこれを届ける為だけに来るなんて。たまには良い所もあるんだな桐崎さんにも）

承一郎「…ん？なんだこれ…？なんか落…ち…」

僕が制服を脱いだとき、制服から何かが落ちた。それはペンダントのチエーンの欠けらだった。

調べたらペンダントにはチエーンが修理された跡があつた。

く承一郎 side out く

とある廃工場——

く? side く

クロード様は廃工場で私を待っていた。

?「…お呼びですか。クロード様…」

クロード「…来たか、待ちわびたぞ」

そう言い、クロード様は一枚の写真を渡した。写真には、一人の男が写っていた。

クロード「こいつがお前の次の任務の目標、名は一条承一郎。すでに聞き及んでいると思うがお嬢は今の男と交際関係にある。しかし私はお嬢はこの男に騙され利用されていると睨んでいる。狡猾なガキだ……」

？「！お嬢を……許せませんねその男……」

クロード「……おまけにチビで下品でザコで小物で山猿に育てられたような肥えだめ以下のドグサレタマなしのブタ野郎……（続く）」

？「そ……そんなにですか。許せませんねその男……」

クロード「私ではお嬢を直接お守りする事が出来ない。だが私が育てた優秀な部下であるお前ならば、あのクソガキ……（以下割愛）……の魔の手からお嬢を救い出す事が出来るだろう」

クロード「もし奴が本物の恋人でなかったと判明したら、手段を選ばな、殺せ」

？「……了解しました。お嬢は私が必ず救い出します……!!?」

……お嬢、待っていて下さい……。そして今度こそ果たしに行きます。

あの十年前の約束を……

< || to be continued ||

第2章―目覚める能力―

第18話 ヒットマンがやって来る その①

承一郎「え？今日転校生が来るのかい？」

集「らしーよ。なんか突然決まった事らしくてさ、生徒にや連絡が遅れたんだと。しかもその転校生『男』なんだとよ。しかも噂によると『美男子』!!？マジテンション下がるわー」

集が明らかに嫌そうな顔をする。

承一郎（…ホント分かり易いなコイツ…）

千棘「私はちよつと楽しみだわ」

承一郎「…僕は転校生というものにはいい思い出がないからなあ…」

千棘「なんか言つた？」

承一郎「もう少しで蹴りが顔面にシュート!!？されそうになった人のことを考えてよ。原作のニセコイでは当たつてたんだから」メメタア！

ガラッ!という音を立ててキョーコ先生は扉を開けた。

キョーコ「よーしお前ら、突然だが今日は転校生を紹介するぞー。入って鶯さん」

? 「はい」

承一郎「!」

鵜「初めまして、鵜誠士郎と申します。どうぞよろしく」

クラスの女子達「キヤーーーー!!? どうしようすつごいイケメン〜!!?」「モデルさん
!?」「顔ちっちゃ〜い」

女子達の黄色い悲鳴が教室を埋め尽くす。

キョーコ「空いてるところに」

鵜「はい」

僕は転校生の怪しい点に気がつく。

承一郎（ん…? よく見るとこの転校生、女じゃあないのか? それに制服から微かな金
属音…。銃を持っているのか…?）

僕は確かめる為にポケットに手を入れた。転校生はチラツとこつちを見る。僕は近
づいて尋ねる。

承一郎「ねえ、君はなんで男の服を着ているんだい?」

クラスの女子達「「えっ?」」

鵜「あんなヒラヒラしたものを着用してはいざというときに対応出来んだろ」

クラスの女子達「「ええー?」」

女子達は驚く。まあ確かに僕は若干驚いた。だが僕はポケットの中で手を銃の形にして転校生に突きつける。

すると、転校生は本物の銃を取り出し、撃つたのだ！

鵜「何ッ!?? フェイクか！」ガーン！

当たると思ったが、驚くべきものが見えた。

腕だ。僕の体から『三番目』の腕が出てきて、圧倒的なスピードで転校生が撃つた銃弾を指ですこしずらし、軌道をずらしたので！

バスッ！という音とともに銃弾が僕から数センチ横の壁に当たった。

女子達「「キャー——!!?」」

女子からさっきとは別の意味での悲鳴を上げた。

承一郎（この僕の体から出ている腕は多分承太郎さんが言っていた『スタンド』なのか!?? だが…）

転校生は承一郎を見ていた。いや、正確には承一郎の体から出ている『スタンド』の腕を見ていた！

承一郎（やれやれ。『スタンド使い』は『スタンド使い』と引かれ合うか、承太郎さんの言っていた通りだ…。ここはスタンドに気付いていないフリをしよう）

承一郎「いきなり撃つてくるとは思わなかったよ。やれやれ」

千棘「鵜！あんた何やってんのよ！」

鵜「お嬢、お会いしようございました！」

人の話など完全に無視である。

どうやら話によると、クロードの部下らしい。いきなり撃つてくるとは…。普通にいい奴かと思つた僕が馬鹿だった。

キング・クリムゾン!!?

昼休み——

集「なあジョジョ、なんで転校生が女つて分かつたんだ？」

承一郎「額を見たんだよ」

集「額？」

承一郎「ああ、女子の額はいつも平らなんだ。だけど男子の額はいつもしわが寄っているんだよ」

集「あ、本当だ！よく知ってんな！」

承一郎「どこかで聞いた事があるんだよ」

と話していると、鵜さんがやって来た。

鵜「一条さん、少し聞いてもよろしいですか…？」

承一郎「ん？ああ、いいよ。僕も少し君と話したかつたんだ」

学校の屋上——

鶯「先程の無礼、お詫びしたい」

承一郎「いいよ、僕が仕掛けたのが悪いんだし。…鶯さん、一つ聞きたい事があるんだ」

鶯「いいですよ」

承一郎「それじゃあ単刀直入に聞こう。君は何故、さっきの騒ぎのとき、『何もないところ』を見ていたのか？普通あの状況だったら弾丸とか僕を見ると思うのだけど…」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承一郎「ねえ、教えてくれるかい？最近『相棒』を見ているものだから、細かいことが気になってしまっんだ」

鶯「…私からも質問です。お嬢の事を本当に愛していらつしやいますか？」

承一郎「オイオイ、質問に質問で返さないで欲しいんだけどな。礼儀に反するつてものだろうか？」

鶯「…どうなんですか？」

承一郎「…その話を無視するのは、やめたらどうなんだい？…まあいい。当たり前だよ」
僕は平然と嘘を吐く。

鶯「お嬢のためなら死んでいい？」

承一郎「ああ、もちろん」

さも当然であるというように嘘を吐く。

鵜「…そうですか。安心しました」

鵜「…では死んだ下さい」バシャン!!?

そう言い、銃を勢いよく取り出した。でもそうは僕も同じだった。

承一郎「それはお断りだな」ガシヤアン!!?

お互い銃を構える。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

鵜「!!? 貴様、銃は持っていないのでは…?!?」

承一郎「君みたいに公衆の場で銃を出すような事なんてしないよ」

鵜「…分からん、お嬢はなぜこんな男を…」

鵜「てゆかぶつちやけ絶対私の方がお嬢の事を愛してるのに——?!?」

承一郎「……………(この人、脳みそがクソになっているのか…?)」

鵜「フツ…、まあいい…。私は正々堂々貴様からお嬢を奪ってみせる…!!? すぐに証

明してやろう、お嬢の隣にふさわしいのはどちらかを…!!?」

構えを解いた鵜さんは僕に背を向け、屋上を去ろうとする。余計な言葉を言いなが

ら。

鶴 「貴様らのような山猿ばかりの組など、恐れるに足らない……」

プツツーン☆という音が聞こえた。

承一郎 「……おい、待ちな！好き勝手言ってくれやがって。誰があいつのそばにふさわしいかって？あいつはオレの恋人だ!!？誰にも渡さねえ……!!？」

第19話 ヒットマンがやって来る その②

承一郎「あいつはオレの恋人だ!!? 誰にも渡さねえ!!?」

売り言葉に買い言葉で言ってしまったが、承一郎はこの転校生を許せなかった。承一郎を引き取ってくれた組を貶されることは一番嫌いだつた。

貶されたら例えどんな奴だろうが関係なく完封なきまでにぶつ潰す、それが承一郎の信条だつた。

鶯「……ほう……、ここで死にたいようだな」

承一郎「それはテメエのことだろう?」

二人の間に、とてつもない雰囲気漂う。すぐにでも戦闘が始まるところだ。だが、その二人の間に割って入った者がいた。千棘だ。

千棘「ちよつ……!!? 二人ともストップストップ!!?」

承一郎「!??…桐崎さん!??」

千棘「ほらほらなにやってんのよつぐみもダーリンも。ちゃんと仲良くしなきゃあダメでしょ?」

鶯「お嬢……、止めないでください……」

千棘「え……」

鶯「お嬢には申し訳ないのですが、私はやはりこの男をお嬢のパートナーとして認められない……！お嬢……、覚えておいですか……。『10年前』のあの日の『約束』を——
——」

千棘「へ？」

承一郎「?!?（『約束』……?!?10年前……☒）」

鶯「私はあの日、お嬢をこの手で守れるように強くなろうと決めました。それ以来私はあらゆる訓練試験に耐え?!?日々精進し?!?強くなつたんです……?!?それこそ血のにじむような努力をして……?!?」

鶯「それがどうです……?!?なぜ今お嬢を守るべきはずの男が……、こんなもやし男なのですか……?!?納得いきません……?!?」

承一郎（それはこっちの台詞だ。街の危機を防いでいるというのに公衆の面前で銃をぶつ放すようなクレイジー野郎に山猿やもやし男と呼ばれる筋合いはないぞツ?!?）

鶯「お嬢は大ギャング組織『ビーハイブ』のご令嬢……?!?お嬢を守れるというなら相應の力を見せて貰わねば認めるわけにはいかない……?!?」

鶯「一条承一郎?!?!貴様にお嬢を賭けて……?!?決闘を申し込む?!?!?!?私に勝てる実力があるのなら、なるほど貴様の事は認めよう。しかし私に勝てないのなら……、貴様は

地獄以上の苦しみを与えて殺す…!!?!」

承一郎「ふん、いいだろう。受けてやるよ、その決闘!!? 僕の魂を賭ける!!?」

鵜「グツド!!?」

千棘「ダーリンにつぐみ…!ちよつと落ちついて…」

鵜「時間は今日の放課後、校庭でだ。逃げれば殺す」

承一郎「それはこつちの台詞だ」

鵜は屋上を去つて行つた。その後、千棘が騒ぎ出す。

千棘「あーもうバカ!!? なんであんな事言つたのよ!!? 正気なの!!?」

承一郎「あの人は僕を引き取つて、育ててくれた組を貶した!!? そんな事言われて頭

にこない奴はいないツ!!?」

千棘「はあ…、もうどうしようもないわよ。つぐみは小さい頃にクロードが拾つた孤

児でね、特殊訓練と英才教育を受けて育てられた優秀なヒットマンなの」

承一郎「知つてるよ、別名『黒^{ブラック}虎^{タイガー}』。最近その名のヒットマンが日本に来てるとい

う情報があつたんだ。まさか学校にやつて来るなんて…」

千棘「ちなみに昔私にちよつかい出して来たゴロツキを組織ごと壊滅された程の超凄

腕」

承一郎「関係ない。完封なきまでに叩きのめすだけだ」

キング・クリムゾン!!?

校庭——

鵜「フツ、逃げずに来た事はほめてやる」

承一郎「売られた喧嘩は買うまでだよ。…それより一つ聞いていいかい?このギャラ
リーは何?」

鵜「それは私も知らん」

周りには、クラスの皆がいる。小野寺君もいたので気合いが入ったような気がした。
そして

集「さあさ張った張った!!?一口食券一枚だよ!!?」

クラスメイト達「鵜さんに3口!!?」「私10口〜!!?」

と賭けている。僕に賭けるやつはゼロに近い。

承一郎「君達って暇なのかい…?」

集「お、ジョジョ。お前もやるか?」

承一郎「ああ、僕に100口だ!!?」

集「おお!おもいきるねえ!」

承一郎「ぶつちやけ文字通り命かかっているからまさに一世一代の大勝負さ」

集「頑張れよ!」

承一郎「ああ、後で何か奢ってくれよ」

鵜「勝利条件は降参するか殺すかだ。…このコインが地面にいたら決闘開始だ。覚悟はいいか？」ピンッ！

と鵜はコインを投げた。承一郎は集のところに向かった。

承一郎「集！髪の毛をもらうよ。ちよいとばつかし多めになア」

集「いでエーーーーー！！？なにするーーーー！！？」

承一郎「いたいのちよつとだけさ」

集「ああ〜」ブチヂンッ！！？

思いつき集から髪の毛が抜ける。

鵜「銃を出せ。持っているはずだ」

承一郎「君にはこの髪の毛だけで充分だ」

鵜「殺す……！！？」

もうすぐコインが地面につく。

承一郎「君の次の台詞は『その減らず口を黙らせてやる』だ！！？」

鵜「その減らず口を黙らせてやる！！？…ハッ！！？」

コインが地面についた。

バシヤシャン！！？と武器を展開させる鵜。対する承一郎は

承一郎「人呼んで波紋ヘア・アタック!!？」コオオオオオ

次の瞬間、集の髪の毛がピン!と真っ直ぐになり、宙に舞った髪の毛がギャギャン!!?という音を立てて、鶴によつて放たれた弾丸を跳ね返す!

承一郎「バリアーだよ!!？」ダツ!!?

髪の毛をばら撒き弾丸をはじきながら鶴との間合いを詰める承一郎。次の武器を手に取つた鶴に、持っていたコーラの瓶を向けた!

承一郎「栓を吹っ飛ばすツ！」

勢いよく放たれた瓶コーラの栓は、鶴の持っていた武器を破壊する程の威力を發揮した!

鶴「何イツ!!？」バキイイン!!?

承一郎「君の次の台詞は『そんな馬鹿な』だツ！」ダツ!!?

だんだんと間合いを詰めいく承一郎。間合いが短くなり、承一郎は動いた!

承一郎「うおおおおお!!？」ブンツ!!?

なんと、まだ鶴に拳が届かない段階の間合いでパンチを繰り出したのだ。

鶴「フン、どこを見ているんだ！」

その間に新しい武器を構えようとする鶴。もう勝負がついたと誰もが思った瞬間、伸びたのだ。承一郎のパンチがゴキイイツ!!?という音と共に伸びたのだ!

承一郎「ズームパンチ!!？」

鵜「そんな馬鹿なツ!!?ぐああッ!!?」バキィイツ!

そして、その伸びた腕が鵜の胸ぐらを掴み、承一郎の方へ引き込んだ。さらに承一郎は鵜の腹に蹴りを入れた。

鵜「ぐはあ……!!?」

承一郎「震えるぞハート!!?燃え尽きるほどヒート!!?刻むぞ、血液のビート!!?」ドゴツドゴドゴツドゴツ!!?

鵜へ、承一郎の拳が吸い込まれるように放たれる。

承一郎「山吹色の波紋疾走!!?!!!?」ドゴドゴドゴドゴドゴドゴドゴツ!!?ド

ギューー——ン!!?!!!?

鵜「ぐあああああ!!?」ドッゴーン!!?

波紋疾走が決まった。鉄の扉に鉛弾が当たるとような音だ。承一郎は手加減して、気絶する程に留めていた。

鵜は地面に背を向けて倒れた。

だが、その瞳がまだ闘志を宿していることに誰も気付いていなかった。

第20話 ヒットマンがやって来る その③

集「ジョジョ!!? 髪の毛を抜くなよ!!? ハゲるだろ!!?」

承一郎「どうせギャグ補正ですぐ生えるんだから別にいいだろう?」

集「メメタア!!?」

僕と集はそんな話をしていた。鶯は地面に倒れている。命まで取るつもりなんてさらさららない。これで街の崩壊は防げたと思った。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

だが急に背筋がゾツ!!?と寒くなった。何かヤバイと思ってまた集の髪の毛を抜く。

集「え? ぎやああく〜!」ブチデン!

そして後ろに振り向き、波紋ヘア・アタックを展開すると、

次の瞬間、弾丸がはじかれた。

そこには、波紋疾走をくらって倒れていた鶯が無傷で立っていた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承一郎「な、何イツ!!?」

鶯「私はまだ降参をしていない! 勝負はこれからだッ!」ダダダダダッ!!?

そう言つて弾丸を撃ち込んでくる鶴。承一郎は不意打ちをくらつたが辛うじて防いだ。

承一郎「(どうして奴は無傷なんだ!!? 手加減したとはいえ、波紋疾走を叩き込んだ。ダメージは確かにあつたはず! まさか、『スタンド能力』か!!? だが、) 関係ない! もう一度近づいて波紋疾走を叩き込む!!?」

承一郎は髪の毛をばら撒きながら鶴との間合いを詰めていく。だが予期せぬ事が起こつた。

承一郎「!!? ガハツ!!?」ビチャツ!!?

思わず口を手で抑える。手には血がベツタリついていた。口の中に血の味がする。

承一郎(こんな時に胸の傷が疼いたのか!!?)

そう、承一郎の胸の傷は完治していない。逆に完治している方がおかしいのだ。今までも、波紋によって肉体に負荷をかけていたのだ。

そこを鶴が見逃さない。

鶴「くらえツ!」ダダダダダツ!!?

承一郎は弾丸を転がって避けたが、鶴はそれを読んでいた。

鶴「そこだ!!?」ダダダダダツ!!?

鶴の弾丸の一発が、承一郎の右の脇腹を貫通した。

承一郎「ぐあああああ!!?」

続けて鶴は弾丸を放つ。承一郎はどうか波紋を練り、常人には出来ない動きで無理矢理避ける。

だが、承一郎の体力は消耗していた。

承一郎「ハア…ハア…」ドサツ

膝をついてしまう承一郎。鶴は前に立ち、承一郎に向けて銃を構える。

鶴「終わりだな。ちよつとは戦えたが、私には勝てない」

小咲「待つて鶴さん！一条君は私のせいで矢に貫かれて胸の傷を負ったの！本当はもうポロポロのはずなの！」

鶴「関係ない。しかしこいつは殺す価値もない男。お嬢と別れると誓えば、お前の命だけは助けてやろう」

千棘「ちよつとつぐみ！ダーリンがそんな事言うわけ「それを誓えば、僕の命は助けてくれるのかい？」え!!?」

承一郎「もし桐崎さんと別れると誓えば、僕の命だけは助けてくれるのかい…?」

千棘「ダーリン…!!?」

小咲「一条君…!!?」

静寂が場を支配した。やがて、鶴の口が開く。

鵜「フン、そうだ。ギブアンドテイクだ。ほら早く言え「だが断る」何イツ!!?」

承一郎「この一条承一郎の最も好きな事の一つは、『自分より強いと思う相手に敢えてノーと断つてやる事』だ!!?」

承一郎は立ちあがる。目に闘志を宿して。

承一郎「それに小野寺君、君は何も悪くない。僕の傷の事で責任を感じているようだけれど、君が悩む必要はない」

小野寺「一条君…!!?」

承一郎「もし時間が巻き戻っても僕は同じ決断をすると思うし、僕に後悔はない」

鵜「フン、だが貴様はすでにボロボロだ」

承一郎「そうだね、やれやれだよ。だけどね、一条家…いやジョースター家には伝統的な戦いの発想法があつてね……。ひとつだけ残された戦法があつたよ」

鵜「何……?」

承一郎「それは!」

全員「……………」ゴクツ

承一郎『逃げる』ダツ!!?

と言つて承一郎は逃げた。

全員「……………え?」

全員が呆気に取られていた。

鵜「……何イツ!? 待てツ!!?」ダツ!!?

鵜は追いかける。皆はまだ呆気に取られている。

千棘（…頑張つてよね、アホもやし——…）

校舎内——

鵜は転々と続く血を辿って、承一郎を追いかけた。そして、承一郎を見つけた。

鵜「フン、見つけたぞ」

承一郎「……君、『スタンド使い』だろうか?」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

鵜「ツ!……良く分かったな。ほめてやる」

承一郎「所々おかしい点があったからね。そして君が無傷なのは君の『スタンド能力』によるものかい……?」

鵜「正解だ。私のスタンド、『ザ・グレート・エスケープ』は分裂することが出来るスタンドだ。一日六体まで肉体を分裂することが出来、分身にダメージをおつかぶせることが出来る」

承一郎「なるほど、さつき君が無傷なのは…」

鵜「そうだ、分身にダメージをおつかぶせただけだ」

承一郎「…じゃあ、あと5回君を再起不能にすれば君を倒せるということか……」

鵜「無理だな。なぜなら、これから貴様は死ぬからだ」

そう言つて、鵜の腕から他の腕が生え、銃が握られていた。

承一郎「何イツ!!?」

鵜「分裂するところという事も出来るんだ!!?死ねツ!!?」ダダダダダツ!!?

そのとき、承一郎から何かが飛び出し、弾丸を全てはじき返した!

鵜「そ……それは……!!?」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承一郎「…『スタンド』か…?僕の…」

承一郎から出たスタンドは全身白の戦士だった。左目にヒビが入り、全身に星の模

様、右目の下には『J O J O』という文字があった。

承一郎「どうやら僕のスタンドは近距離パワー型のようなだね…」

鵜「くつ!!?」ダダダダダツ!!?

承一郎「オラオラオラオラオラオラアツ!!?」バシバシバシイツ!!?

承一郎のスタンドが全ての弾丸をはじき返す。

承一郎「さあ、第二ラウンドだ!!?」

第21話 ヒットマンがやって来る その④

承一郎「さあ、第二ラウンドだ!!？」

僕は自分のスタンドと共に鶯と対峙する。

鶯「少しなめていたようだ。こちらも本気で行かせてもらおう！」

そう言うと、鶯の体から四人、鶯の分身が飛び出してきた。

鶯1→5 「一二私達、全てが本体だ!!？」

そして、分身四人が承一郎と鶯1から離れていく。

承一郎「なるほど、一人が接近戦を仕掛けて他の四人が遠くから狙撃して援護する作戦か……」

鶯1「流石だな、だが分かったところでどうすることも出来ない!!？」

鶯1がマシンガンを構えてそう言う。どこから出したんだ!!？

鶯1「くらえツ！」ダダダダダツ!!？

承一郎「オラオラオラオラオラアツ!!？」バシバシバシバシバシイツ!!？

僕のスタンドは鶯の撃ってきた弾丸を全てはじき返した。だが僕はその位置から避けた。

次の瞬間、ダダダダッ!!?とその位置に四つの弾丸が撃ち込まれていた。

鵜 1 「何ッ!!?」

承一郎 「これでどこから狙撃しているのか分かった!!?」ダッ!!?

そう言つて、僕は狙撃している分身の方に向かう。狙撃して来る分身の方を先に倒せば、有利になるかもしれない。

鵜 1 「クソッ! 待てッ!!?」ダッ!!?

しかし鵜はすぐに承一郎を見逃してしまふ。承一郎は波紋で止血をして、追われるのを防いだのだ。

木の上——

鵜 2 は木の上から承一郎を狙撃していたが、急にこちらに向かつて来るのに驚いていた。

鵜 2 (まさか、さっきの狙撃だけで位置を予測したというのか!!?)

スコップ越しに承一郎を見る鵜 2。よく見ると承一郎の腕にある異変が起こっているのに気付いた。

鵜 2 (腕に何か、刀のようなものがあるがどうでもいい! 幸い、正確な位置をつかんでいないようだ。そこを狙うッ!)

鵜2の指がスナイパーライフルの引き金にかかる。引き金を引くその瞬間、とんでもないものを見た。

なんと承一郎は『見ていた』のだ。スコープ越しに見ている鵜2の目を見ていたのだ！

承一郎「鵜誠士郎！貴様ッ！見ているなッ！」

ゾッ！と悪寒が鵜2の背筋に走るが、引き金を引いた。

ガアー——

ン！！という音が響き弾丸が承一郎の眉間を貫こ

うとするが、承一郎は刀のようなものがある右腕を大きく振った！

次の瞬間、スコープに見えていたのは平然と立っている承一郎と、真つ二つに斬られた弾丸だった。

鵜2「そ、そんな馬鹿なッ！」ガアーン！！？ガアーン！！？

続けてスナイパーライフルの弾丸を撃ち込む鵜2だが、全て承一郎によつて真つ二つにされるだけだった。

鵜2「な、何だつて！！？」

その間波紋でものごい速さで走つて間合いを詰め、木を駆け登つた承一郎は鵜に右腕の刃を振るう！

承一郎「リススキニハーデン・セイバー！！？」スパアーン！！？

鵜2の首が承一郎が通り過ぎた後に胴体からずれていく。鵜2の体は陽炎のように消えた。どうやら倒された分身はこういう風に消えるらしい。

承一郎「これで二人目!!?あと四人ツ!」

鵜3「な、なんて事だ!まさか弾丸を真つ二つに斬るなんてツ!」

鵜3と4は鵜2の倒された場所をスコープで確認する。倒された分身の記憶や経験は他の分身に引き継がれるようだ。

鵜4「しかし承一郎は倒された分身の経験が引き継がれることはまだ知らないはずだ!そこに勝機があるはず!」

木へ近づくが、そこには承一郎の姿はない。

鵜3「いない…?」

鵜4「まだ遠くには行っていないはずだ!探すんだ!!?」

承一郎「いや、いるよ」スパアン!!?

鵜4「……え……?」ズルツ

承一郎は鵜4の背後を取り、リスキニハーデン・セイバーで胴体を切断した。鵜4が陽炎のように消える。

鵜3「何ツ!!?」ガチャツ!

鵜3が銃を構えるが、承一郎の刃が沈んでいく太陽の光で煌めく!

承一郎「セイバーオフ!」ビシユツ!

そう言うのと承一郎のリスキニハーデン・セイバーが腕から外れ、鵜3に向かって飛んできた。

鵜3「ぐはあツ…!!?」ブシユツ!

リスキニハーデン・セイバーは鵜3の頸動脈を切断した。

それと同時に鵜3も陽炎のように消えた。

承一郎「あと二人ッ!」

校舎内——

鵜1と5は二人背中合わせで動いている。単独でいるとやられるからだろう。もう四人もやられてしまい、二人の周りの空気は張り詰めていた。

だが、承一郎は鵜1と5の前に現れた。

鵜1「ッ! 来たか!」

承一郎「そろそろ傷のダメージが限界だね。この勝負、勝たせてもらおう!」

鵜5「それはこっちの台詞だ!!?」ダツ!!?

鵜1と5は承一郎に向かって走る。もう接近戦でかたをつけるつもりのようなだ。

承一郎「来るか！」ズギユン!!?

承一郎はスタンドを出し、戦闘態勢をとる。

鶴1と5はそれぞれ左右から拳の連撃を放つ。承一郎はスタンドと共に鶴二人の攻撃を防ぐ。だが傷の出血が酷く、承一郎は反撃が出来ないでいた。

承一郎「ぐっ……！」

鶴1「どうした！そんなものでは私は倒せないぞ！」

鶴5「貴様にお嬢を渡すものかッ！」

承一郎「やれやれ、こうなったらもう最後の策を使うか……」

鶴1「最後の策だと……？」

承一郎「息が止まるまでやってやる！」

鶴5「まさか……！」

承一郎「それは……『逃げる』ダッ!!？」

そう言つてまた承一郎は逃げた。

鶴1「フンツ！男らしくない奴だ。やはり貴様はお嬢を守る事など出来ん!!？」ダッ!!?

鶴5「お嬢を守るのはこの私だ!!？」ダッ!!？」

承一郎「ハッ、なんだい守る守るつて……。そんな事言つてるわりに君こそ彼女の事分

かつてないんじゃないのかい!!?」ダツ!!?

鵜1「なんだと…!!?」ダツ!!?

承一郎「彼女はただ守られてるだけで収まる程のヤワなタマじゃあないだろう!!?」
ダツ!!?

鵜5「知つたような口を!!?すぐに息の根を止めてやるッ!」ダツ!!?

承一郎はやがてある窓から飛び降りた。だが逃すまいと鵜1と5はあとを追うように飛び降りる。

しかし、その下は屋外プールがあつた。

ドボオオン!!?という音と共に三つの水柱が立った。

承一郎「刻むぞ、血液のビート!たやすいぞッ!、波紋が水中に伝わるのは!!?おおおッ」

承一郎「水中のための『青緑波紋疾走』ダイゴイスフルーオーバーバードライヴーッ!!?」ゴアアツ!!?

鵜1・5「ぐあああああアツ!!?」ボグアアツ!!?

波紋疾走が鵜二人を捉えるッ!その勢いで鵜二人はプールから飛び出る!

承一郎はゆつくりプールから上がり、倒れた鵜を見る。分身は消えたらしく、どこにもいない。しかし体が限界らしく、承一郎は校舎の壁を背にもたれかかった。

承一郎(出血がとても酷いが、まあ一応勝つたかな…)

だが、そんな考えを軽々しく吹き飛ばす光景があった。立っていた。波紋疾走をくらい、倒れていたはずの鵜が立っていた。

承一郎「ま、まさか……！波紋疾走をくらい前に分裂していた分身を自分の体に戻して、波紋疾走のダメージをおつ被せたのか!!？」ドクドク

鵜「危なかった……と言わなければ嘘になる。本当にギリギリのタイミグだった。貴様の戦いには素晴らしいものがあつたが、ここまでだ」ガチャツ！

鵜は承一郎の前で銃を構える。

鵜「もう一度聞くが、お嬢と別ればお前の命は助けてやる。どうだ？」

承一郎「同じ事を二度言う必要はない。無駄なんだ、無駄無駄……」ドクドク

承一郎はまだ血が流れている。

鵜「そうか、ならば死ね」ダン！ダン！ダン！

次の瞬間、死を告げる弾丸が承一郎の体を貫いた。

第2話 ヒットマンがやって来る その⑤

死を告げる弾丸が、承一郎を貫いた。左目、喉、胴体と、次々弾丸が撃ち込まれる。承一郎の残った右目には生気がもうなく、完全に息の根は止まっていた。

承一郎は完全に死んでいた。

すでに太陽は沈んでいた。

鶯は決着がついたと思い、銃をしまった。

そのとき、ギャラリーが集まってきた。承一郎は鶯の後ろに隠れ、皆から見えない。

千棘「つぐみ、決着はついたの!?!」

鶯「はい、私が勝ちました」

千棘「だ、ダーリンは…?」

鶯「奴はここに…何イツ!?!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

鶯は後ろにある承一郎の方を振り向くと、そこには一条承一郎が『立っていた』。弾丸で穿たれた左目を左手で押さえているが、しっかりと大地を踏みしめていた。

しかし、さつきまでとは様子が違う。残っている右目は青かったが今は紅く染まって

いたし、口元に牙らしきものがあつた。

鶇「馬鹿なツ！貴様は確実に死んだはずだ!!？左目ごと脳を弾丸が貫いたはずだツ!!？」

千棘「な、なんですつて!!？あんた何したのよつぐみ!!？」

小咲「な、ならどうして生きてるの？一条君…？」

承一郎「あいにく地獄が満員でね…」

承一郎は懐から何か瓶を取り出し、中から赤い液体を飲む。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

そして左手が左目から離すと、無くなっていたはずの左目が確かにあつた。まるでなんともないように。

鶇「そ、そんな馬鹿なツ!!？」

承一郎「W R Y Y Y Y Y Y Y Y ……」

承一郎は言葉にならない呻き声をあげる。

承一郎「フンツ！」ズギュン！ベキイツ!!？」

承一郎はいきなりスタンドを発現して、鶇の足を蹴りでへし折つた！

鶇「ぐあああああッ！」ドサツ！

鶇は両足を折られて倒れてしまう。

承一郎「君はこれで動けない。やれやれ、この勝負僕の勝ちみたいだね」

鵜「…クソツ、まだだ！」ガチャツ！

承一郎「オラアツ!!？」バキイツ!!？」

鵜は銃を構えるが、承一郎のスタンドがすぐに銃を拳で破壊した。

男子「なんだ?!？いきなり銃が壊れたぞ?!？」

承一郎「…まだやるつもりかい？」

鵜「…クソ、私の負けだ……」

鵜が敗北を宣言すると、承一郎は鵜に近づき折れた足に触れた。

すると鵜の両足がまるで何事もなかったように元通りになっていた。

承一郎「これで立てるだろう」

鵜「…何故私の怪我を治した？私はお前を殺そうとしたんだぞ？」

承一郎「…人を助けるのに理由はいらないだろう？」

鵜「！」

承一郎「まあ、何故治したかというあたりのところは僕にもよく分からないよ」

鵜「……」

承一郎「さて、もうそろそろ帰る…か…」ドサツ！

そう言って、承一郎は倒れてしまう。

千棘「ちよ、ちよつとダーリン！」

小咲「一条君……！」

鶯「当たり前だ。腹に穴が開いている状態であんな人間離れた動きをしたんだ。私よりダメージが深刻なはずだ」

千棘「ちよつとつぐみ！ダーリンは大丈夫なの？」

鶯「一応大丈夫みたいです。どうやら傷が塞がっているみたいですから」

千棘「あなた、さつき承一郎を殺したって言ってたわよね……？」

鶯「……はい、お嬢……。しかしこれはお嬢を……」バチイン!!？」

千棘のピンタが鶯の頬に直撃した。

千棘「……次また同じような事があつたら、私はあなたを許さない……！」

鶯「お嬢……」

千棘「取り敢えず今はダーリンを家に連れて行くわよ」

キング・クリムゾン!!？」

一条家——

承一郎「……ん？ここは……」

承一郎は家で目を覚ました。自分の部屋だ。部屋には千棘と鶯、承太郎がいた。

承太郎「目を覚ましたようだな、承一郎」

承一郎「承太郎さん…？ そうだ僕は、…痛ッ！」

承一郎は怪我したところを押さえて、痛みを堪える。

承太郎「桐崎君から話は聞いている。無理をしたな」

承一郎「…そうか、僕は負けたのか…」

鵜「…いや、貴様の勝ちだ」

承一郎「…え？」

鵜「貴様の処分を保留にするが、もし私がお嬢にふさわしくないと思ったらいつでも

銃口を向けるぞ…!!？ 覚悟してお嬢に尽くせ…!!？」

承一郎「…そうか…まあ好きにしてくれ…」

千棘「それじゃあね、ダーリン」

承一郎「じゃあね、桐崎さん」

く千棘&鵜 side く

千棘と鵜は桐崎家に帰っている。

鵜「…本当は私の完敗でした」

千棘「え？」

鵜「あいつに言われたんです。お嬢は私が守るだけで収まるようなヤワな存在では無いと…」

千棘「!あいつが…そんな事を…?」

鶯「確かにお嬢は昔から私達周りの心配をよそにいつも奔放で、そしていつもドロだらけの笑顔で帰ってくるような方でした」

鶯「〃信じて守る〃…。そういう〃力〃もあるのですね…」

鶯「…とは言え!奴の事を認めたわけではありません!!?奴には足りない部分が多すぎますから…!!?」

く承一郎sideく

千棘と鶯は帰って行った。

承一郎「…承太郎さん、僕にスタンドが発現しました…」

承太郎「!なるほど、それで能力は…?」

承一郎「…『骨を自由に生成、操作出来る能力』です」

承太郎「…かなり強力なスタンドだな。名前は決めたか?」

承一郎「はい。…僕のスタンドの名は…」

『クリスタル・ボーン』です!!?」

< || to be continued ||

第23話 対極のダークマター

一条家——

（承一郎 side）

僕は自分の体温を測っていた。体温計は38.5度を示していた。

承一郎「はあ……これは本格的に風邪だね」

一応、竜達によく作るカレーのレシピを渡しているから皆の食事は問題ないはずだ。料理が出来るのが僕か承太郎さんくらいしかないなんて、やれやれだよ。

承一郎（取りあえず、今日は医師からも休めと言われていたし、『ピンクダークの少年』でも読んでようかな）パラパラ

僕が読んでいる『ピンクダークの少年』は漫画家、岸部露伴先生が描くサスペンス・ホラー作品で、生理的に気持ち悪い（グロテスクな）シーンもあるが、迫ってくるようなスリルと、個性的で本当に居るような登場人物、特徴的な擬音、コミック表紙に描かれた登場人物のかっこいいポーズが魅力的な漫画だ。

第6部のラストは圧巻だった。ラスボスが時を無制限に加速される能力を使い、世界を一巡させるといふ素晴らしいラスト。女主人公が負けるという驚きの結末。どれを

とつても素晴らしかった。

僕が第7部のコミックを読んでいるときに、ピンポン！と玄関のベルが鳴った。

承一郎（？誰だろう、こんな朝っぱらから）

千棘「…おはようダーリン。具合はどう？」

玄関にいたのは桐崎さんだった。

承一郎「桐崎さん…、君どうして…」

千棘「どうしてって…、お見舞いに来たに決まってるでしょ」

承一郎「いや…。だからそれがどうしてと…」

千棘「何よ、別に来たくて来たんじゃないわよ。ウチの皆が行けって言うから！うぬぼれてんじゃないわよ!!?」

承一郎「ああ、なるほどね」

千棘（もしかしたら…あのプールが良くなかったのかもしないし。だとしたら…私にも責任がある気がするし。ま、今日一日くらいいつもより優しくしてやろうかな）

千棘「…それで？体の方は大丈夫なの？」

承一郎「ああ、少し傷があつたけど波紋で治療したから大丈夫だよ。熱も少しあるけど放っておけば治るって」

千棘「そう。そりゃ良かった。…それじゃあせつかく見舞いに来たんだし何か困って

いる事はない？何か手伝おうか？」

承一郎「どうしたの？気持ち悪いよ…」

千棘「なっ…、誰が気持ち悪いのよ!!？あ、そうだ。おみやげにリンゴ持って来たんだけどあんたむいたら食べる？」

承一郎「…君本当に桐崎さんかい？」

千棘「うっさい!!？あんたちよつと黙ってなさいよ!!？」

なんだ…？今日の桐崎さん嫌に優しいな…。どういう風の吹きまわしなんだ…？

千棘（いきなり「うっさい」とか言っちゃった。イケナイイケナイ今日は優しく…）
シヨリ…

千棘「…よーしむけたわよ。はいどうぞ」

そう言つて桐崎さんが差し出したのはすでに食べられたようにほぼ芯しか残っていないリンゴだった。

承一郎「これどこを食べればいいんだい!!？」

そんな感じにグダグダしていると、ピンポーン！とまた玄関のベルが鳴った。

小咲「あれ？千棘ちゃんも来てたの？」

千棘「小咲ちゃん!!？」

やつて来たのは小野寺君だった。

小咲「さつきたまたま舞子君に会つて。そしたら風邪つて聞いてお見舞いに」

承一郎「へえ…本当？ありがとう…！」

小咲「上がつてもいい？」

承一郎「ああ、もちろんだよ！」

小咲（…一人で来るのドキドキしたけど良かった。思ったより元気そうで）

千棘（…何よ、私の時より随分嬉しそうじゃあない？あのもやしホンット腹立つ…。

ハツ…！優しく優しく…）

小咲「そうだ。私おかゆ作ろうと思うんだけど台所借りてもいいかな？」

承一郎「え…、いいのかい…？」

千棘「それ私も作る!!？」

承一郎「!!?…君作ったことあるのかい…？」

千棘「ないけど…。何よ別にいいでしょーが!!？」

千棘（フン…！見てなさいよ…！びっくりするくらいおいしいおかゆを作つて度肝抜いてやるから…！）

千棘「小咲ちゃん、一緒に作ろー！」

小咲「うん！」

なんか知らないが、女の子二人におかゆを作つて貰う事になるとは。なんか…変な感

じというか…。

だけど僕は二人の壊滅的な料理の下手さを知っていた。

し…しまった忘れてた…!!?この二人が料理つて…!!?桐崎さんは僕がフオーしなきやとんでもない物を作る人なのに…!!?

まあさすがにおかゆなんてシンプルな料理でそこまで失敗しないと思うけど…。

僕は廊下から台所にいる二人の声を聞いた。後から、聞かなければ良かったと思える恐怖の会話だった。

千棘「…えーとおかゆだからまずはお米よね?」

小咲「元気が出るようなおかゆにしたいよね」

千棘「そーね!食べたら一発で風邪が吹き飛ぶような…!」

小咲「青汁とか入れると元気が出るかな?」ドプチャ!!?

千棘「いいね元気出そう!そういえば塩つてどのくらい入れるの?」

小咲「さあ…この袋の半分くらい入れればいいのかなあ…」

千棘「分かった!あ、ゴメン全部入れちゃった」バサツ!

千棘「そうだ!私栄養ドリンク入れちゃおう…!」バシャシャ

小咲「他に体に良いのつてなんだろう…。黒酢もいいな。あとレバーと納豆とひじきとめんたいこと…」ボチャボチャボチャ

千棘「このサプリって入れても平気かな？」

小咲「あー！体にいいよね…！」ザラー!!？」

千棘「あ！お味噌なんてどう?!？」ドッポン

小咲「うん、いいかも」

その会話を聞いた僕は、ハッキリ言つてゾツ!!？と背筋が凍るような恐怖を体験した

！

まるでエンジン音だけでブルドーザーだと認識できるような恐怖を感じたッ！

ま、マジでヤバイッ！この二人、ただ『料理が下手』とかそんなチャチなもんじゃあ断じてない！もっと恐ろしいダークマターの鱗片を感じたッ！

に、逃げなければッ！ここにいたらマジで死ぬかもしれないッ！

そう思い、急いで窓を開けるが、すでに手遅れだった。

千棘「出来たわよー」

ケツにつららをぶち込まれたような気分になった。

千棘「どーよ！なかなかの出来じゃあない?!？」ゴポポ：

小咲「…お口に合うか分かんないけど…」キラキラ〜ン

僕は桐崎さんのおかゆを見て、驚いた。

コレ本当におかゆ…!? どうしたらこんな魔界の底なし沼みたいな料理が出来るんだい!?? なんかに亜空の瘴気みたいなの出てるけど…! どうしよう見ただけで気分が悪くなってきた…!!?

というかなんで小野寺君のはこんなにキレイなの…!? 逆に怖いよ!!? あんな色々入れてたじやあないか!!? 黒酢とかレバーとかどこ行つた!!?? まさかスタンド能力!!?

千棘「さあダーリン召し上がれ…」

ズザザザザ、ドンとつい後ずさりしてしまう。

承一郎「い…いやそのやつぱり僕熱のせいで食欲がその…アレというか…」

千棘「む、何よ。私達のおかゆが食べられなくて言うの…? だーいじょくぶ! 見た目はアレだけど! 前みたいに食べたら絶対においしいから…!!?」

竜「坊っちゃんーん!!? 体大丈夫ですかー!!?」ガラツ

竜達がやって来た。

竜「すいやせん…!!? 来るなど言われやしたがつい心配で…!!? おや! 彼女がお見舞いに来てくださってますかー!!?」

ヤクザ「…良い彼女ですなあ〜」

竜「こりや結納も近いな…!」

ヤクザ「その上もう愛人までいるたあ…!!?さすが坊っちゃん漢の器もでかい!!?」
小咲「え／＼／＼／」

承一郎「君達は僕に殴られるためにここに来たのかい…?」ドス黒スマイル

竜「そうだ、坊っちゃん。あつし実は坊っちゃんに美味しいおかゆを作ったんですが…」ガラガラ

承一郎「え…何!!??」

だけど竜は桐崎さん達のおかゆを見て、

竜「…!!?すいやせん坊っちゃん…!!?彼女がおかゆを作ってたなんてつゆ知らずあつし出しやばったマネを…!!?」ブバツ!!?

え、ええくくく!!?

竜「さあ坊っちゃん…早くそのおかゆ食べないと冷めちまいますぜ…?あつしの作ったこのドブ臭えかゆは肥だめにでも捨てときやす…!!?」

のおお!!?待て待て!!?頼むううう…!!?そっちのおかゆを食べさせてくれええく!!?

千棘(…ほら、こうなったら仕方ないでしょ。覚悟決めなさいよダーリン)

承一郎(ぐっ…しかし…)

千棘「はいあくくん」ゴゴゴゴ

承一郎（ぬおおおおお!!?!）

…くっそくくく!!? こうなったらくくく…!!?!

僕は桐崎さんと小野寺君のおかゆを両方持ち、一気に口に入れた!

承一郎「う…うまい…!!?」ガクガクガクガク

竜「はっはっは!!? そうでしょうそうでしょう。愛する人が作つたんだ。おいしいに決まってまさあ…!!? それじゃあ邪魔しちやあ悪いんであつしらはこの辺で。坊っちゃんお大事に!」

部屋を後にする竜達。後から竜の泣き声が聞こえた。

千棘「…ちよつとあんた…大丈夫?」

小咲「…一条君?」

バタン!!? と倒れてしまい、そこで僕の意識が吹っ飛んだ。正直言つて、味はどんな味か分からない。味覚がぶつ壊れたようだった。

僕は改めて、桐崎さんと小野寺君の料理の下手さを実感した。

第24話 兄さんはギャングスター その①

S県内の空港——

空港には、ある二人の男達がいた。

?1 「ついに着いたな、日本に」

?2 「ええ、そうですね。」

どうやら外国人のようだ。片方の男は父親と同じ金髪を煌めかせながら言った。

?2 「やつと会える、僕の兄弟に…!!?」

男の名はジョルノ・ジョバーナ。イタリアのギャング「パツシオーネ」のボスであり、一条承一郎の腹違いの兄弟である。

—— 一条宅 ——

く 承一郎 side く

承太郎 「承一郎、今日は君の兄が来る予定だ」

承一郎 「えっ?!? 本当ですか?!? 分かりました!」

承太郎さんから兄さんが来ると聞かされた。僕は一人息子だったので兄さんと会えるのがとても楽しみだ。

学校――

鶴さんと和解したのはいいのだけど、鶴さんはかなり僕に警戒しているらしく、ここ数日僕は桐崎さんとロクに近づけない。まあそれで困る事は一つもないので別にいいんだけど……。

というか天井に張り付くとか、どこぞの吸血鬼だよ……。↑自分の父親

飼育小屋――

承一郎「ねえ桐崎さん先生が飼育係のエサ買ってこいってよー」

千棘「ええー!? ? ? なんて私達がく? ? ? つたく、そーゆーの普通業者に頼んで持って来て貰うものなんじゃあないの? 」

承一郎「ウチは珍しい動物が多いからね。近くのペットショップで直接買うしかないんだよ」

千棘「あんた一人で行ってきてよ」

承一郎「重いんだよ」

? 「お待ち下さいお嬢…!! ? 」

承一郎「ん? 」

次の瞬間、バサアツ!! ? と鶴さんが近くの草むらから出て来た。ポ○モンじゃあない

でしよ君は…。

鶯「お嬢…！そのような買い出しならこの私が!!？お嬢にそのような雑事をさせるわけにはいけません…!!？」

千棘「つぐみ…あんたどつから…」

鶯「ほら行くぞ一条承一郎！グズグズするな！」

承一郎「やれやれ、分かったよ」

キング・クリムゾン!!？」

街中——

僕は街中で鶯さんを見つけたのだが…

承一郎「…どうしたんだい君？」

鶯さんは女の子らしい可愛い格好だったのだ。不覚にもドキツとしてしまった。

鶯「お嬢に来させられたのだ。男と間違えられないようにと…。武器まで取り上げられたしまった…」

承一郎「コーデイネートは桐崎さんがやったんだね、かなり似合っているよ」

鶯「…!!？なつ…!!？／／／／バツ…バカにしてるのか貴様はア!!？」

承一郎「ええ!!？」

本当に女の子っていうのは分からない…。

キング・クリムゾン!!?

鶴さんの意外な女の子らしさをペットショップで発見して、エサを買い終えた。

鶴「痛つ……!」

承一郎「!??どうしたんだい?」

鶴さんの足を見ると、血が出ていた。

承一郎「うわっ!すごい靴ずれしているじゃあないか!大丈夫かい?」

鶴「貴様が心配する必要などない!」

承一郎「我慢する必要のない事を我慢しているのはただの馬鹿だよ。コオオオオオ
……」

僕は波紋の呼吸を整え、鶴さんの足に流した。しばらくしたら、怪我は治った。

承一郎「全く……近くの靴屋でサンダルを買おう。そっちの方がいいよ」

その後、帰る途中に僕達はあるものを見た。奇妙な外国人の二人組だ。

一人は髪型の見えない帽子を被り、ヘソが見える短い丈のセーターを着ている。

もう一人は金髪で前髪に三つの穴(コロネ?)があり、ブルーの目をしていた。

何故か、どこかで会ったような感じがした。

帽子を被っている外国人が僕達に話しかけて来た。

? 1 「なあ、そのカップルさんたち。俺たちイタリアから来たんだがよ、道が分からなくてさ。ちよつと道を教えてくれないか？」

鵜 「なつ…!!? / / / / 誰がこいつとカップルだ馬鹿者!!?」

承一郎 「すみません、僕はこの子とはそういう関係ではありませんよ。どこに行くんですか？」

? 1 「ああ、この場所なんだけどよ」 ガサゴソ

外国人は地図を広げて見せる。その場所は僕の家だった。

承一郎 「何か用事でも？」

? 1 「まあそうなんだ。ちよつとした用事なんだ」

承一郎 「へえ…。そこに行くにはここを曲がってここを…」

? 1 「なるほど、分かったぜ！ありがとうよ、行くぜ」

? 2 「分かったよ。ありがとうございました」 ペコリ

承一郎 「いえ、お構いなく」

二人の外国人は去って行った。

鵜 「おい、一条承一郎」

承一郎 「ん？」

鵜 「あいつら、刺客じゃあないだろうな？」

承一郎「分からない。だけど二人でウチの組は倒せないよ。例えスタンド使いだとしても、幸い、今は承太郎さんがいるし、問題ないでしょ」

鶴「フン、まあいい。とにかくこのエサを学校に持って行こう」

承一郎「そうだね、そうしよう」

僕達は学校に向かった。

キング・クリムゾン!!?

エサを学校に届けて、家に向かった。

家には、承太郎さんとさっきの二人の外国人がいた。

?1「おっ! お前さんはさっきの!」

承一郎「こんにちは、えっと…」

ミスタ「グライド・ミスタだ。こっちはジヨルノ・ジヨバーナ。よろしくな、一条承一郎」

ジヨルノ「よろしく、承一郎君」

承一郎「えっ? なんで僕の名前を?」

ミスタ「君の親父さんから聞いたんだ」

承太郎「承一郎、すでにこの二人とは面識があつたのか?」

承一郎「あ、はい。学校の用事で…」

承太郎「今日言っただろう？君の兄がやって来ると」

承一郎「えっ、もしかして…」

承太郎「そうだ。ここに居るジヨルノはギャング組織『パツシヨーネ』のボスで君の腹違いの兄だ」

承一郎「なっ、何だってーッ？？」

第25話 兄さんはギャングスター その②

承一郎「ぼ、僕の兄さん…?」

一言言おう、あんまり似てない。髪の毛だつて違う。

ジヨルノ「よろしく、承一郎」

承太郎「彼は確かに君の兄だ。DNAを調べてもそうだし、君と同じ星型のアザもある」

承一郎「そ、そうなんですか…」

承太郎「ジヨルノ君の組織とSPW財団は協力関係でね、『矢』の件でこの街に滞在することになったんだ。この家を使わせて貰えるか?」

承一郎「もちろんですよ! 兄さんだったらなおさらですよ!」

ジヨルノ「ありがとう、承一郎」

承一郎「どうってことはありませんよ。じゃあ二人とも付いて来て下さい。部屋に案内します」

ミスタ「俺日本の文化は初めてでよ、結構楽しみだぜ!」

ジヨルノ「僕も日本人だけど来たのは初めてだね」

承一郎「えっ？兄さんって日本人なんですか？でも髪の色が…」

ジョルノ「それは僕達の父親の遺伝だよ。僕が一応長男なんだ」

ミスタ「日本料理は美味しいって評判だから楽しみだぜ！」

承一郎「お口に合うか分かんないけど、頑張ります」

ミスタ「おつ、承一郎が料理を作るのか？」

承一郎「はい、組の皆の分全部担当しているんです」

ミスタ「へえ、すげえな！期待しているぜ！」

承一郎「着きましたよ。部屋は和室なんですけど大丈夫ですか？」

ミスタ「大丈夫だぜ！なあジョルノ」

ジョルノ「うん、大丈夫だよ承一郎」

承一郎「それじゃあ僕はここで。トイレはこの廊下の向こうにありますよ」

ミスタ「それじゃあな、承一郎」

ジョルノ「じゃあね、承一郎」

翌日、学校――

僕は今、すごいヤバイ状況に遭遇している。

ジョルノ「承一郎ー！」

校門に兄さんがいる。ミスタさんもだ。しかも僕を名指ししている。

キョーコ「ジョジョ、お前を呼んでるぞ？誰だあのイケメン知り合いか？」

鶴「おい一条承一郎！あの男は昨日の…」

承一郎「に、兄さん…」

全員「「えっ？」」

承一郎「僕の…兄さんです…」

全員「「ええー…？」」

キング・クリムゾン!!?

放課後、教室——

ジョルノ「いやあ、ごめんよ。つい弟の学校を見に行きたかったんだ」

承一郎「だからって僕を名指ししないでほしいな…」

教室は生徒が溢れ返っている。兄さんを見に来ているのだ。

小咲「二人って兄弟なんだね。確かに似ているかも…」

承一郎「腹違いだけどね…」

小咲「え…」

千棘「へえ、ダーリンの兄さんね。どこ出身なんですか？」

ジョルノ「僕は元々半分日本人でね、育ちはイタリアなんだ」

承一郎「ちなみに兄さんはイタリアのギャング組織『パツシヨ―ネ』のボスなんだつて」

千棘「えっ!? パツシヨ―ネって…。すごいわね、あんたのこの家系…」

承一郎「イギリス貴族、アメリカの不動産王、海洋冒険家、イタリアのギャング組織のボス…。確かに」

ジョルノ「皆、これからも承一郎の事よろしく頼むよ」

キング・クリムゾン!!?

一条家――

ミスタ「プハー、承一郎の作る料理はすげえうまいな! 店でも出せるんじゃないか?」

承一郎「そんな大層なものではありませんよ」

僕達は夕食を済ませ、部屋に向かっていた。

ジョルノ「そういえば承一郎、君に会わせたい人がいるんだ」

承一郎「誰ですか?」

ジョルノ「見れば分かるよ」

そう言つて兄さんは部屋にいる一匹の亀を手にした。

承一郎「亀？」

ジヨルノ「承一郎、この亀の甲羅についてる鍵の宝石に触ってみて」

承一郎「こうですか？…ってうわっ!!？」ズギョン!!？」

鍵に触った瞬間、僕は亀の中に入っていった。中には、広めの部屋があり、家具なども揃っている。

承一郎「これは！この亀、スタンド使いなのか！」

？「この亀は結構快適だぞ。テレビまで見れるからな」

どこかで聞いた声。遠い記憶の中で聞いた事のある、どこか懐かしい声だった。

？「君が承一郎君だね？私は…」

——死ぬしかないな、ポルナレフツ！——

承一郎「^{ジャン}J・^{ピエール}P・ポルナレフツ…」

ポルナレフ「！何故私の名前を…？」

承一郎「何故なのか僕にも分からないんです。どこかで聞いた事のあるような…

ぐあああああ!!？」ドサツ

いきなりの頭痛で膝をついてしまう。頭が割れてしまいそうだ。

「ジョルノ！承一郎!!？」ズギユン!!？」

兄さんが部屋に入り、異変に気付く。

承一郎「ハア…ハア…大丈夫ですよ、兄さん…」

ジョルノ「本当に大丈夫なのかい？…ツ！」ポンツ

そう言つて僕の背中に手を当てる兄さん。次の瞬間、兄さんの顔が強張つた。

ジョルノ「承一郎…？」

ポルナレフ「大丈夫なのか…？」

承一郎「大丈夫です。最近よくあるんです、まるで誰かの記憶を見ているような感覚が…」

ジョルノ「…承一郎、君に聞きたい事があるんだけどいいかい？」

承一郎「いいよ、兄さん」

ジョルノ「さつき君に触つたとき、妙なものを感じ取つたんだ」

ポルナレフ「妙なもの？」

ジョルノ「僕のスタンド、『ゴールド・エクスペリエンス』は生命を創り出す能力、それに、生命エネルギーを感じ取れるんだ」

ポルナレフ「それがどうしたんだ？」

ジョルノ「さつき君に触つたとき、僕が感じ取つた生命エネルギーは『二つ』あつた

んだ」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ポルナレフ「『二つ』!? ま、まさかッ!」

承一郎「……」

ジヨルノ「承一郎、君はもしかして二重人格者なのかい?」

第26話 承一郎の秘密

ジヨルノ「君はもしかして、二重人格者なのかい!?？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承一郎「……少し、昔の話です」

承一郎は話し始めた。

承一郎「僕は昔、『波紋』と同時にある体質を持っていたんです」

ポルナレフ「ある体質……?」

承一郎「『吸血鬼』……と言えば分かりますかね?」

ポルナレフ「何ッ!??まさかッ!」

ジヨルノ「吸血鬼だって!??」

承一郎「そう、父『D I O』の持っていた体質……。太陽のエネルギーに触れるだけで体が消滅する体質……」

承一郎「幼少期、僕は相反する技術と体質によつて体が弱かったんです。太陽に当たるのも極力控えて家の中で過ごしていました」

承一郎「ある日、母が事故で亡くなったと聞いて酷く泣きました。まるで悪夢を見て

いるようでした。その時、精神が崩壊するのを防ぐ為と、相反する能力で体が崩壊するのを防ぐ為か僕は二重人格になっていたんです。主人格に『波紋』を、副人格に『吸血鬼』の体質を分けて……」

ジオルノ「……まさか二重人格だとは」

ポルナレフ「だが人の精神は時に幼少の時に受けた衝撃などが原因で『心』に亀裂が入り、その部分が年齢とともに別の『人格』に育っていくことがあるという。別の『人格』は青年の頃になるとハッキリと日常に現われ一方が他方を支配する、『多重人格』の学説だ！」

ポルナレフ「実際に私達は二重人格者を見ている。一方は少年だったがもう一方は中年の男……」

ジオルノ「ディアボロ……パツシヨーネの元ボス、未来を予知し、その時間を吹っ飛ばすスタンド『キング・クリムゾン』の使い手……」

承一郎「……この話を知っているのはウチの組の皆と父さん、そして承太郎さんとあなた方しかいません。この秘密、黙っててくれますか？」

ジオルノ「……ええ、もちろんです。弟の頼みならなおさらじゃあないですか」

ポルナレフ「私も秘密にしておこう」

承一郎「……ありがとう、兄さん、ポルナレフさん……!!？」

承一郎の目からは涙が流れていた。

その夜、承一郎はある夢を見た。

—————

どこかの市街地。その上の屋上に自分はいた。と言っても、塔の天辺だが。もう一つある塔の上に目に傷がある男がいた。緑色の学生服の男だ。

自分の周りには、緑色の触手が張り巡らされている。触れるだけでエメラルドのエネルギー弾が飛んでくる『法皇』の『結界』だ。

？「触れれば発射される『法皇』の『結界』はッ！すでにおまえの周り半径20m！おまえの動きも『世界』の動きも手にとるように探知できるッ！」

男が叫ぶ。自分のスタンドの秘密を知る為に。

？「くらえッ！D I O ヲ！半径20mエメラルド・スプラッシュを——ッ！」

ドツバアーーーーズ
ツ

とあらゆる方角から放たれたエメラルド・スプラッシュは、自分を倒す為に向かつてくる。

承一郎? 「マヌケが……。知るがいい……。……。『世界』の真の能力は……まさに! 『世界を支配する』能力だということをしる!」

そして、『世界を支配する能力を持つ』自分のスタンドの名を叫ぶ。

承一郎? 『世界』!!?」

ドオオーーーーズ
ン!!?

世界のカラフルな色が白と黒のモノクロに変わり、全ての人や物が静止する。

崩れかけている塔が静止する。落下する瓦礫すらも色を失い、静止した。

自分と、自分のスタンド以外を除いて。

自分は自分のスタンドと共に男に近づくが、男には何の反応もない。

承一郎? 「これが……『世界』だ。もつとも『時間の止まっている』お前には見えもせず、感じさえもしないだろうが……!」

『世界』が拳を握り、男に構える。

——…おい、何をしようとしているんだ！——
自分の意思とは反して、その拳が動く。

承一郎？「死ねイ！花京院ツ！」

——…何？何を言っているんだ僕はツ…？止めるツ！——
だがその願いも叶わず、花京院と呼ばれた男は、『世界』の拳によって体を貫かれた。

—————

承一郎「うわあああああああああああ！！?!」

僕が起きた時はもう朝だった。

承一郎「ハア…ハア…夢…？いや、それにしてもリアルすぎる…。もしかして、誰かの記憶？一体誰の…」

——くらえツ！D I O ツ！——

承一郎「ううツ！」

頭痛がしたが、やがておさまった。

承一郎「あれは…父の記憶…？」

承太郎「承一郎、大丈夫か？かなりうなされてたみたいだぞ」ガラツ
承太郎が部屋に入ってきた。

承一郎「承太郎さん…。大丈夫です」

承太郎「…そうか」

承一郎「…承太郎さん、あなたは父とどういう関係なんですか？」

承太郎「…宿敵だった…」

承一郎「…そうですか…」

そう言い、承太郎は部屋から去った。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

第27話 林間学校に行こう

僕は朝の夢について考えていた。

よく考えれば、僕は父の事をよく知らない。父がどこで生まれ、どのように育ったのかさえ知らない。

何故吸血鬼になったのかも、どのように命が終わったのかも知らないのだ。

それにあのスタンド、『世界』……。わからない事だらけだ。

集「おいジョジョ、話聞いてたか？」

承一郎「え？ああ、ごめんよ。ちよつと考え事しててさ」

集「考え事？しつかりしろよ、もうすぐ林間学校だぜ？」

承一郎「あれ？もうそんな時期だったっけ？」

集「オイオイ、さつき林間学校の班決めを授業でやっただろ？」

承一郎「え？マジで？」

集「マジだよ。素晴らしい組み合わせになったぜ！あと俺と同じ班だぜ」

承一郎「君が言う素晴らしいは僕にとつての不幸に直結していると理解しているよ」

集「ひでえな。まあ楽しみにしてなよ」

承一郎「わかった、楽しみにしてるよ」

千棘「zzzz…」

く千棘 side く

放課後、私はつぐみにある症状について相談を受けていた。どうやら恋のようらしい。そして恋愛経験の事を話していたら、つぐみから驚きの事を聞いた。

鶯「初コイがあるじゃあないですか。あの10年前の」

千棘「…へ？」

鶯「…やはりお忘れでしたか。無理もありませんが…」

千棘「…あ、あー！ー！！？」

鶯「思い出されましたか」

そつか「…。どうして今まで忘れてたんだろう。そういえば昔そんな事が…」

鶯「フフ、なつかしいですね。あの頃のお嬢は毎日のように屋敷から抜け出してその

子に会いに行っていましたよ」

そつか「…10年前の約束…。きつと私が何か約束した男の子ってその子の事だ。

私「何を約束したんだっけ。何かとても大事な事だったような気が…」

千棘「ねえ、つぐみはその子の事覚えてる？ 私まだ顔と名前が出てこなくて…」

鶴「さあ…私もそこまでは…。でもとても素敵な恋をされているようでしたよ。あんなに一途に誰かを想えるなんて素敵だなと思っていました」

…そっか、私そんなにその子の事が好きだったんだ。

キング・クリムゾン!!?

千棘の部屋——

千棘「…そうだ、クローゼットに思い出の品とか残ってないかしら」

だけどクローゼットを開けた瞬間中から色んな物が雪崩のように出てしまった。

千棘「いたた…。…ん?…:…:…:これって…私の日記…?」

どうやら私が5歳の時の日記らしい。日本語で書かれている。もしかしてこの時、私

は日本に——?」

日記を読んでもみるとある男の子との思い出が書かれてあった。

日記によると、男の子は額に傷があり、ある約束をしていたのだが、約束の内容が

書かれていなかった。

日記を手にとったとき、ある物が日記から落ちた。どうやら日記に挟まっていたよう

だ。

鍵だった。鍵先には三日月があしらわれていた。もしかして約束と何か関係がある

のかもしれない。

私は10年前の事が気になり、男の子と出会った場所に行ってみようと思いつぐみに交通手段を用意するように頼もうとしたのだが、

鶯「お忘れですかお嬢。明日は林間学校に行く日ですよ」

とつぐみに言われ、楽しい学校イベントがあるのを思い出した。

林間学校初日——

キョーコ「よし全員班に分かれて集合〜！バスで移動するよ〜！」

千棘「ねえねえもやし、班って何の事」

承一郎「あ、そういうええ君班決めの時寝てたからね。生徒は六人で一班つくって僕達

の班は……」

キング・クリムゾン!!?

バス内——

バスの席順がおかしい。

右から一人目

鶯「…おい一条承一郎、お前は少々お嬢にくつつきすぎではないのか？」

二人目

千棘「そ…そうねダーリン。気持ち嬉しいんだけど…」

小咲「るりちゃん!!?もう!余計な事…!!?」

鶴「…おい一条承一郎、貴様調子に乗りすぎではないのか…?」

承一郎「ぼ…!僕のせいじゃあ」

るり「カーブ〜」ドーン

勢いで僕は鶴さんの膝に頭を下げてしまふ。俗に言う膝枕状態である。

鶴「…林間学校の前に冥土へへ行きたいらしいな」ガチャリ

承一郎「僕のせいじゃあないし銃を構えるんじやあないッ!」

るり「またカーブ〜」ドーン

四人「ギャアアアアアアア!!?」

…こんなやり取りがあと40回程繰り返されようやく――

目的地に到着した。

承一郎（いや嬉しい面もあつたけど…）

集「どうだった?オレのセツティングしたスバラスイードライブは?」

承一郎「…山吹色の波紋疾走!!?」ドゴドゴドゴドギューン!!?

集「そ、それは決闘のときの技じゃあぎやああああああ!!?」ドゴーン!!?

承一郎「集を殴るのにギャク補正があるから罪悪感なし!」

集「ひでえ!!?そしてメメタア!!?」

第28話 ババ抜きという名の変顔大会

キョーコ「よーしみんなよく聞けよー！プリントにも書いてるけどお前らは今から近くのキャンプ場で飯盒炊きさんとカレー作りだ。楽しんで作れよー！」

全員「あーいーいー」

承一郎（!!?料理だつて…!?!?）

承一郎「小野寺君と宮本さんは薪を貰つて来てくれ。桐崎さん、君はここで僕が指示するから勝手に動かないで」

承一郎はダークマター使いの二人を料理させないように指示を出す。

集（必死だな承一郎…）↑お粥の話を聞いています。

千棘（…初めての林間学校みんななどのお泊りか。初コイの男の子の事は気になるけど今はまだ精一杯楽しもうかな…!）

承一郎（…桐崎さんすごい楽しそうだな…。まあ元々友達と何かするつてだけでワクワクが止まらない人だからな。今嬉しくてたまないんだろうな）

千棘（…10年前に約束した男の子かあ。どんな奴か分からないけどでもたとえば今会ったとしても顔分かんないよね。結局日記にも名前書いてなかったしなあ）

千棘（あ、でも傷跡がまだ額に残ってるかも。手がかりはそれくらいか…）

承一郎（約束の相手か…。父の事もだけど分からない事だらけだな…。小野寺君の鍵も結局なんなのか分からなかったし）

千棘（10年前約束した男の子って一体…）あ

と考えていると、千棘はお湯を承一郎の頭にかけてしまう。

承一郎「熱ッ!!？」

千棘「わあゴメン!!？大丈夫!!？」

承一郎「やれやれ、気をつけ…」

千棘「悪かつ…！」

承一郎「！」

千棘は承一郎の髪をかきあげた額の傷を、承一郎は千棘の首にかかった鍵を見た。

千棘「…：…ね、ねえもやし。あんたそのおでこの傷何？」

承一郎「ん？ああコレ？なんか小さい頃からあるんだけど、何の傷だっけな。昔っからよく動物に触っていたからね。多分何かの動物につけられたんだと思うけど…」

千棘（え…!!??）

千棘は度重なる偶然に驚きを隠しきれなかった。

承一郎「…??どうかしたの？」

千棘「な…っ、なんでもないわよ…!!?」

承一郎「ん…?」

承一郎（…?なんだろう…）

千棘（…関係ない!!?そんなハズないったら…!!?）

キング・クリムゾン!!?

旅館内、部屋——

く承一郎 side

集「おおっ！ここが今日オレ達の泊まる部屋か〜！」

小咲「思ったより広いね〜」

僕達の班はカレーを食べ終わり、学校が貸し切りになっている旅館の部屋に荷物を置きに来た。

集「こういうとこウチのガツコ気前良いよなく。その上ふすまごしでとはいえ女子と同じ部屋で寝られるなんて、オレこの学校入ってホント良かったよ…!!?」

承一郎「やれやれ、正直な奴だね君は」

るり「…ところで、舞子君はベランダと廊下どっちで寝るの?」

集「あれ!!??部屋で寝ちゃダメ!!?」

承一郎（…ここで小野寺君達と一緒に寝るのか…。緊張するなやつぱり…）

小咲「そうだ、千棘ちゃんて温泉入った事ある？この旅館温泉あるんだって！」

千棘「！温泉！？私一度入ってみたかったのよ！！？わー楽しみ！！？」

鶴「わ…私大勢でお風呂なんて初めてで…」

承一郎（…桐崎さん、さつきはちよつと様子が変かと思っただけだ僕の違い過ぎたか…）

集「さうてどうする？まだ自由時間あるしせつかくだからトランプでもやんない？普通にやつてもつまんねえし負けた奴は罰ゲームってのはどーよ？」

小咲「…罰ゲーム？」

集「負けた人は自分のスリーサイズ」ガシツ！！？「すいませんウソです」

集がふざけた事を言った瞬間に宮本さんが集の肩を掴む。

集「じゃあじゃあ今日の下着の色を」ドスツボゴ！！？「自分のセクシャルポイントを」ガスツバキツ「体を洗う時まずどこから」ズドツドゴ「ギャー…！！？」

四人「……………」

ふざける集を無慈悲でボコボコにするるりに呆然とする四人。

集「……！！？初コイのエピソードを語るとか…」ボロツ

るり「…まあ、それくらいなら」

四人「えっ……」

四人（は…初コイのエピソード〜!!?!)

承一郎（集の奴…！僕の初コイっていったらもしかしたら小野寺君の事かもしれないのに…!!?）

小咲（どどど…どうしよう…。私の初コイって言ったら確証はないけど…多分…）

鶴（な…何を焦っているんだ私は…!!?私は別に初コイなんてしてないし…!!?してないし…!!?）

千棘（こ…これは…!!?）

四人（絶対に負けられない…!!?）

集「ではゲームスタート〜！（*種目はババ抜き）」

順番は集↓鶴↓るり↓小咲↓承一郎↓千棘↓集で一周する。

承一郎「…ん？ねえ、大丈夫かい？なんか顔色が…」

僕はプルプル震えている千棘に不思議に思った。

千棘「は!!?ベ…別に何が!!?全然平気なんだけど…!!?」

承一郎「…そ…そうかい」

るり「…はい、次小咲の番」

小咲「うん」

小野寺君はカードを取った瞬間にすごい震えている。

承一郎（…分かり易つ!!?!ジョーカーだ!!?今の絶対ジョーカーだ!!?小野寺君全部顔に出てるよ!!?）

小咲「は…はい、次一条君」

承一郎（…まあ僕は適当に…。え、何その顔!!?）

僕がカードを取りかけると、小野寺君の顔が何故か輝いている。

他のカードを取ろうとすると小野寺君の顔に輝きが失われ、最初のカードに手を戻すとまた顔が輝く。

承一郎（…やれやれ…）

ジョーカーだと思ってもしようがなく、僕は小野寺君のジョーカーを取ってしまった。た。

承一郎「…はい桐崎さん。次君の…」

僕が振り返るとそこには後ろにゴゴゴゴというオーラを纏っている桐崎さんがいた。

承一郎（ん…?なんかやけに真剣に…。あ、それジョーカー）

桐崎さんはジョーカーと取った瞬間、とても落胆した表情をした。

承一郎（分かり易!!?ブルータス、お前もか!!?というかなんだその世界が滅ぶような悲愴な顔は!!?どんだけ負けたくないんだい!!?）

承一郎「…ねえ、表情で丸わかりだよ。ポーカーフェイスぐらいしたらどうなんだい？」

僕の言葉に小野寺君、鶴さん、桐崎さんの三人が反応する。

千棘「えっ!!? あ…そうね」

桐崎さんはもはや変顔みたいな顔をしていた。

承一郎（…君…）

小咲・鶴（ポーカーフェイス…）

承一郎（…君達…）

小野寺君も鶴さんも（ry

承一郎「いつからここは変顔大会の会場になったんだい？」

なんでこんなにマジになってババ抜きをしているんだと思う。まるで自分の魂を賭

けているような感じなのだ。

…なんだかんだで勝負は続き…：僕と桐崎さんが残った。

集「よっ！ カップル対決!!?」

小咲・鶴（危なかつた〜）

千棘：残り2枚↑承一郎のジョーカーを全てひいた女

承一郎：残り1枚↑小野寺のジョーカーを全てひいた男

承一郎（なんで僕がこんな目に。まあ桐崎さん相手に負ける気はしないけどね）
僕がカードを取ろうとすると桐崎さんがすごいビビる。

承一郎（あ、これがジョーカーじゃあない方か。悪いけど勝たせて貰うよ。こつちだつて負けるわけには…）

だが桐崎さんは涙目になっている。

承一郎（…くそ、これで勝つても卑怯な気がするしな）

そう思つてわざとジョーカーを取つた。

千棘「！」

承一郎（これで五分だろう。あとは君が…）

桐崎さんが少し怒つたような顔になった。

承一郎（ヤバ：わざとジョーカー取つたのバレた。でもこれで対等だろう？あとは勝つても負けても——）

キョーコ「こら——！！?!集合時間はとつくに過ぎてるぞ——！！?!早く集合!!」

桐崎さんがカードを取つた瞬間にキョーコ先生が部屋に入つて来た。

集「うはやべ！行こーぜ承一郎」

承一郎「ああ…!!?」

僕は残った自分のカードを見た。

承一郎「…良かったね」

桐崎さんが取ったカードはジョーカーだった。

第29話 ブラッディ・シャドウ

集「…は〜食った食った。んじやあ風呂に行こ〜ぜ〜」

承一郎「…のぞきしようとか言わないだろうね」

集「言わないって！オレもいつまでもガキじやあね〜し。それに男子と女子の入浴時間とは違うんだし」

僕達男子は夕食を食べた後、風呂に行こうとしていた。

キョーコ「おーい一条。フロントに電話がかかってるぞ〜」

承一郎「え？」

承一郎（…電話？誰からだろう…）

〜千棘 side

クロード「フフフフフフ…」ゴゴゴゴゴ

千棘「ん？」

クロードが隠れながら承一郎を見ている。

千棘（…クロード!??なんであいつがここに…。…何か悪企みしてなきやいいけど…）

小咲「おい千棘ちゃん！私達もお風呂の準備やつとこー！」

千棘「あ、はーい！」

く千棘 side out く

承一郎（…なんだろう、誰からもかかってないじゃあないか。急がないと男子の入浴時間が終わってしまうな）

そう思つて承一郎は風呂に急いだ。

だが、誰かが承一郎を見ていた。

承一郎「クロード！貴様ツ！見ているなツ！」

するとクロードが出てきた。毎度毎度、どうやって侵入してくるのか不思議に思う程だ。

承一郎「クロードさんよお、あんたどうやって旅館に侵入したんだ？この旅館は学校の貸し切りだぜ？」

承一郎の目はすでに紅く染まり、承一郎のもう一人の人格が入れ替わった。

クロード「…どうして私がいるとわかった？」

承一郎「フン、波紋は生物探知機の役割も果たす。貴様がいるという事は、どうせ良からぬ事を企んでいたようだな。例えば、俺を女湯に入らせて社会的生命を終わらせる

つもりだったとかか？」

クロード「……！」

承一郎「どうやらそのようだな。やれやれだぜ」

クロード「……だからなんだって言うんだ？」

承一郎「貴様の行動は最近度を越しているからな。とりあえず旅館の警備員に突き出して帰って貰おう」

クロード「私がすんなり捕まつてやると思うのか？」

承一郎「そうだな」ガチャツ！

そう言い、承一郎は持っていた銃を構えた。サブレッツサー装備の麻酔銃だ。

承一郎「少しオネンネして貰うぜ」

クロード「馬鹿め、弾丸ぐらい、私が避けられないと思つたか！」

承一郎は引き金を引いた。パシユツ！という音がした。

それにクロードは反応して避けた。

クロード「フン、マヌケめツ！」

だが次の瞬間、パシユツという音と共に麻酔弾がクロードの首元に『命中』した。

クロード「な……何……!?」

引き金は2回目は引いていないはずだ。

クロードは朦朧とした視界の中で、承一郎の横に佇む黒い物体を見た。

承一郎「これが、『ブラッディ・シャドウ』だ……。もつとも、貴様には何が起こったのかわかるはずがない……」

そして、クロードの意識は途切れた。

〈承一郎 side〉

承一郎「……やれやれ、こいつには帰って貰うとするか」

そう言い、承一郎はクロードを引きずる。

承一郎（ちよつと荒つぽいんじゃないかい？）

普段の表の人格が話しかける。

承一郎の裏の人格（以下J O J O）「こいつにはこれくらいがちょうどいいのさ」

そう言いながら引きずって行くと、桐崎と会った。

千棘「承一郎、あんた何やって……ってクロード?!? 何よこれ?!?」

どうやら俺が承一郎と入れ替わったのがわからないようだ。好都合だ。

J O J O「桐崎か。ちよつと女湯付近にいたから怪しく思ってたな、ちよつとオネンネしてもらったのさ」

そう言ってどっかのオセロットよろしく銃をクルクル回して見せる。

千棘「ちよつと、まさか銃を撃つたんじゃあないでしょうね!?」

J O J O「安心しろ、麻醉銃だ。実弾銃を持っていたら決闘のときに使っているだろ？」

それを聞くと、千棘はちよつとホツとしたらしい。

J O J O「とりあえずこいつには帰って貰おうと思うんだが桐崎、こいつを連れて帰らせるように手配してくれないか？」

千棘「まあわかったわ。せつかくの林間学校をクロードに邪魔させないわ」

J O J O「ありがとよ、それじゃ俺は早く風呂に行くぜ。入浴時間が終わっちゃうからな」

そう言つて俺は男湯に入った。

そして目が青くなり、表の人格に戻った。

キング・クリムゾン!!?

風呂には集達男子が女湯を覗こうとしていたが、のぞきポイントがなかったらしく、音を聞くとという行動を取っていた。

僕は男子達と女湯の音をシャットアウトしてゆつたりとお湯に浸かり、最近の疲れを癒した。

たまにはこういうのも風情があつていいものだと思う。

していたはずだった。

船倉には東洋の毒薬を義理の兄弟に売った東洋人、ワンチエンと自分が倒したはずの義理の兄弟であつた吸血鬼、デリオ・ブランドーが首だけの状態でガラスのケースの中でワンチエンに支えられていた。

首だけというのは比喩ではない。文字通り、真正銘首だけなのだ。

自分と命を懸けて自分を助けた恩師、ウィル・A・ツエペリから受け継いだふたり分の波紋疾走をくらつたのに生きているのだ。吸血鬼なら、波紋で消滅するはずなのにだ。

どうやら最後の闘いするとき、波紋が自分の頭部に到達する前に自らの手で首をはねたようだ。

ワンチエン「デリオ様……………。ヤツをおびき出して連れてまいりました」

デリオ「肉体……………来たか……」

承一郎? 「デイ……デリオ!」

デリオ「ジョジョオ……見ろよ……このデリオのなさけなき姿を! あえて……あえてこの姿をおまえの前にさらそう」

承一郎? 「デイ、デリオ」

デリオ「なぜこんな姿をあえてみせるのか……………。それはジョジョあれほど悔つてい

たおまえを今おれは尊敬しているからだ…。 勇気を！おまえの魂を！^{パワー}力を！尊敬している…。 それに気づいたからだ…」

デイト「ジョジョ、おまえがいなかったらこのデイトに仮面の力は手に入らなかっただろう…。 しかし、おまえがいたからいまだ世界はおれのものになっていない！」

デイト「神がいるとして運命を操作していたら！おれたちほどよく計算された関係はあるまいッ！」

デイト「おれたちはこの世においてふたりでひとり！つまり…」

デイト「おれはこの世でただひとり尊敬する人間のボディ（肉体）を手に入れ絢爛たる永遠を生きる！それがこのデイトの運命なのだ！」

デイト「苦痛は与えん！それが我が好敵手への最後の礼儀！」

承一郎？「ううっ、あの眼は！ま…まずいッ！」

大理石を切断し、雲をも切り裂いた必殺の一撃が放たれようとしていた。

デイト「我が肉体となつて生きよ！ジョジョー！！？」バリバリ
デイトの紅い眼が裂ける。

僕はバツと自分の両腕を交差させて防御の構えをとる。

次の瞬間、ドッゴオという音からデイトの眼から圧縮した体液が高速で発射された。

エリナ「ジョナサン！」

最愛の人、エリナが叫んだ瞬間、デイトから放たれた体液が両手を貫き、そして僕の喉を貫いた。

—————

承一郎「うわあああああああああああああ!!?!」

集「うわっ!」

旅館の部屋で僕は目覚めた。

承一郎「ハア…ハア…」

集「おい、どうしたんだよジョジョ。うなされてたぜ?」

まだまだ、また同じような夢だ。あの首だけの男はD I Oと言われていた。

まさか…、僕は二人の男が合わさった男から生まれたのか…?

嫌な汗が流れる。いつからか不思議に思っていた。何故相反する能力で体が崩壊する事になったのかを。

承太郎さんが言っていた言葉、『宿敵』とはどういう事なのかと。

千棘「どうせ夢で怖がってたんじゃないの? ビビっているなんてまだまだガキね」

承一郎「…黙れ…」

千棘「あら、本当の事を言っただけよ。ムキになるなんて、ホントにガキね」

承一郎「やかましいッ! 黙れっていうのが聞こえないのかッ!」

つい怒鳴つてしまう。眼が無意識に紅くなっている。

小咲「一条君……？」

承一郎「……すまない、言いすぎた。忘れてくれ」

そして眼が青く戻った。こうして林間学校二日目の朝は最悪の目覚めで始まった。

第30話 肝試しの怖いところは暗いことだけ

承一郎と集は朝食を一緒に食べていた。

集「…ところでジョジョ、お前今夜のイベントって知ってつか？」

承一郎「ん？」

集「今日山から帰って来たらよ、毎年恒例の肝試しをやるんだよ」

承一郎「肝試し〜？」

集「だがただの肝試しじゃあないぜ？なんとクジを使って男女でペアが組まれるのだ。そして更に重要なルールがもう一つ…」

集が無駄にタメを作る。かなりウザい。

集「ペアになった男女は手を繋がなければならない!!?! どうだ!!? 燃えてきただろう!!?!」

集の背後からパンパカパーン!!? という音が聞こえたのは多分幻聴だろう。流石集、ウザさはギネス認定ものだ。

集「…小野寺とペアになれるといいな」

承一郎「そんな都合よくいくかい？普通…」

集「…オレが小野寺とのペア券引いたらいくらで買う?」

承一郎「20000円でどうだい?」

集「手を打とう」

小咲はるりに今夜の肝試しの話を聞いていた。

るり「……………というわけで…あんたはなんとしても一条君とペアになりなさい。いいわね?」

小咲はいきなりのるりの発言に口に含んでいたお茶をブコツ!!?と出してしまふ。

小咲「…:…なりなさいって…。ペアってクジで決めるんじゃあ…」ポタポタ

るり「根性でなんとかしろ」

小咲「そんな無茶な…!!?」

るり「あんた、この林間学校でなんの進展もしないつもり?どんな形にせよこつちから仕掛けていかなきゃ何も変わらないよ?出すって決めたんでしょ?勇氣」

るり「…でも、もし私があいつとのペア券引いたらあんたに譲るから確率は2倍よ。

せいぜい祈ってなさい」

小咲「…るりちゃん」

るり「ペアになったら暗がりで押し倒しちやえばいい」グツ

小咲「るりちゃん!!？」

小咲（でも…本当に…、もし本当にペアになれたら私…どうするんだろう…）
そう考えていると、小咲は承一郎を見つけた。

小咲（あ、一条君。今一人みたい。勇気…!）

小咲は承一郎へ声をかけてみた。

小咲「お…おはよう一条君。今朝はどうしたの？」

承一郎「ああ、おはよう小野寺君。見苦しいところを見せてしまつてすまなかつたね」

小咲「ううん、大丈夫だよ。でも意外だったよ」

承一郎「何が？」

小咲「一条君にも怖いものがあるんだね」

承一郎「…恐怖がない人間はいないよ。ない奴は恐怖を知らないだけだよ…」

小咲「一条君…？」

承一郎「…いや、なんでもないよ。小野寺君も集合に遅れないようにね」

小咲「あ、うん」

小咲（あれ？今なんか避けられちゃった？）

キング・クリムゾン!!？

夜、森の前——

く承一郎 side く

夜、ついに肝試しが始まるうとしていた。

キョーコ「…よし全員集合！これより恒例の肝試し大会を開始する!!？準備はいいか野郎共ー!!？」

全員「おおー……!!？」

キョーコ「——じゃあ先生達はここで一杯やつてるんで生徒の自主性を重んじて？後はテキトーに上手くやってくれ」

承一郎（先生あんた…）

千棘「うく……。肝試しかあ…」

桐崎さんが嫌そうな顔をしている。

承一郎「ん？ああ、そういうえば君暗い所苦手だからね。大丈夫かい？なんでもかんでもしがみつかないでね？」

千棘「へっ…平気よ！別に一人きりじゃあないんだし」

女子「それでは女子からクジ引いて下さーい！」

千棘「じゃあ行って来る」

そして、女子のクジ引きが終わった。

女子「——では続いて男子く」

承一郎「…え？」

小咲「あ、いやその…。私となんかとペアで良かったのかなくと…。今朝話しかけた時その…ちよつと避けられちやつたのかなとて…」

承一郎「えつ…!!??ちつ、違うよ!…ちよつと考え事をしてね」

小咲「考え事…?」

承一郎「…本当の父さんの夢さ」

小咲「えつ?でも一条君の本当のお父さんつて…」

承一郎「うん、僕が生まれる前に死んでるんだ。夢というよりは記憶の方が近いんだ」

小咲「記憶…?」

承一郎「…あまり話せないようなものだよ。言ったらきつと信じないよ多分」

小咲「…そつか。良かった、嫌われちやつたのかと思つた」

小野寺君の顔がすごく可愛いかった。

承一郎「ハ…ハハハハ、バカだなー小野寺君は」

小咲「アハハ、間違えました」

やっぱツイてる!!?このラッキータイムを精一杯楽しもう…!!?

承一郎「まったく僕が小野寺君を嫌うわけがないだろう?だって僕は——」

小咲「『僕は』?」

く千棘 side く

千棘（…あいつは小咲ちゃんとか。何よデレデレしちやって）

ちなみに私は集とペアになった。何かモヤモヤが胸の中にあった。

女子「…ねえ、どうする？」

男子「困ったなあ…」

森の方から声が聞こえた。

千棘「…どうしたの？」

女子「わ！桐崎さん」

男子「いやそれがオバケ役の一人がお腹壊しちやってさ…」

女子「代わりを探してるんだけどなかなかいなくて…」

千棘（う〜ん…オバケかあ…。私暗いところダメだしなあ…。私じゃあお役に立てそうもないわね）

男子「あー困った！ペアが決まった今じゃあ誰もやりたがらないだろーしなあ」

女子「せっかく作戦いっぱい考えたのにね〜」

男子「あー困った困った!!？」

しょうがなく、私はオバケ役を代わった。

千棘（なるようになる、よね？）

男子「ありがとー助かったよ桐崎さん！すぐスタンバらないといけないからこつち来て！基本楽しんでやってくれればいいからさ！」

集「…あれ？桐崎さん？」

私は男子と一緒に森の中に入っていった。辺りは真つ暗で何も見えない。

千棘（大丈夫、明かりだつてあるし…大丈夫…）

オバケ役1「（急いで急いで！）」

オバケ役2「（もう始まるよ！）」

男子「分かつてゐるって！じゃあオレはあつちに行くから桐崎さんはここで頑張つて！」

千棘「えっ」

そう言うと、男子は草むらの中に入ってしまった。

千棘（えっえっウソ！私ここで一人…!?？だ…大丈夫大丈夫、明かりだつてあるし）カチッ！

だが懐中電灯のスイッチを入れるが明かりがつかない。何度もカチカチスイッチを入れるけどつかないので最終的に壊してしまった。

千棘（だ…だだ大丈夫怖くない怖くない。見えないけど周りに人だつているんだし

全然怖くない……)

「ただど足元からカサササ!という音が聞こえてがむしやりに走って場所が分からなくなってしまうた。」

千棘(つたく……なんで私がこんな目に。ああもう誰か助けてくれないかな……)
そこで承一郎の顔が浮かぶ。

千棘(フン……!何よあんな奴の助けなんてなくなつて私は全然……。ああ、でもちよつとだけ……)

ちよつとだけ怖いかも……

く承一郎 side く

承一郎「——……『僕は』……、だつて僕はほら!小野寺君の良い所をいっぱい知ってるからさ!あ!別に変な意味じゃあないよ!?友達として!友達としてだよ!?!?」

小咲「あはつ、そつか!ありがと!」

女子「12番のペアの人——、準備して下さいさ〜い!」

承一郎「あ、僕達だ。じゃ……じゃあ行こうか小野寺君」

僕は小野寺君へ手を出す。

小咲「あ、そつか。手繋ぐんだよね」

小野寺君が僕の手と彼女の手を繋げる。

小野寺君の手は柔らかくて温かくて小野寺君も少しだけ緊張してるのが分かった。

第31話 暗闇の中で

↳承一郎 side↳

承一郎「じゃ…じゃあ行こうか小野寺君」

小咲「うん」

集「あ！おっいジョジョっ！」

小野寺君と肝試しに行こうとした時、集がやって来た。大事な時に…。

承一郎「…なんだい集…」

集「あのさく桐崎さん知らねーか？」

小咲「千棘ちゃん？」

集「それがさく、さつきから見当たんなくて…」

女子「あー桐崎さんならさつき森の中入ってくの見たよ？オバケのカッコして」

承一郎「え!!？オバケ!!？」

女子「さつき聞いたんだけどオバケ役の人がお腹壊したみたいで代打頼んだんだって」

集「え、そーなの？」

代打だつて…？桐崎さん…暗いところダメなのに何やって…。

安達「あ、いた！舞子く〜ん！」

オバケ役の女子、安達さんがやって来た。

集「あれ？安達ちゃん？あらあらいーの？オバケの人がこんなとこいたらダメじゃあ…」

安達「もしかして桐崎さん戻つて来てない…？」

集「へ？」

安達「いや実はさー桐崎さんにオバケ役お願いしたんだけど懐中電灯に電池入れ忘れちゃつて…。もし気付いて戻つてたら渡そうと思つて…」

…おいおい。

女子「明かり無いと森の中真つ暗だもんね〜」

男子「でも別に大丈夫でしょあの桐崎さんだし」

承一郎「…なあ、彼女は」

安達「あ、ゴメン。やつぱ一条君は心配？大丈夫だよ、森つて言つても大した広さじゃあないし猛獣がいるわけでもないし…」

男子「…つーかむしろ桐崎さんのオバケ役見てみたくな？桐崎さん美人だしどんなカツコでも似合いそーだもん」

男子2 「どーする？めっちゃ怖かったら」

男子3 「オレ脅かされたら逆にオバケに抱きついちゃおっかな〜」

男子2 「アホ、殴られっぞ」

J O J O (おい承一郎、どうするんだ？このまま小野寺と行くのか？)

承一郎 (…………そりやあまあ、彼女が自分でやるって決めたのなら大丈夫だと思っけど、でも……)

蔵に閉じ込められたときのことがフラッシュバックした。あのとき彼女は泣きそうだった。

小咲 「一条君……？」

承一郎 「……すまない小野寺君。すぐ戻るから……！」

小咲 「……え？」

そう言うと僕は森の中へ走った。

小咲 「え……一条君……!?!？」

僕は森の中を走る。

J O J O (どうする承一郎？俺が代わるか？)

承一郎 「……ああ、そうだね。波紋の生命探知機は木があるから使えない！夜なら君の

独壇場だ！」

そう言うと、僕の目が青から紅に代わり、牙が口に生える。

J O J O 「いくぞ！『ブラッディ・シャドウ』！ズギューン！」

承一郎から代わった俺、J O J O は自分のスタンドの名を叫んだ。

J O J O のスタンドは承一郎のスタンド、『クリスタル・ボーン』とは対照的に全身黒の戦士で、右目にヒビが入り、全身にハートの模様、左目の下には『D I O』の文字があつた。

J O J O のスタンドの背後には10個の黒い球体が浮かんでいた。

J O J O 「空間を超越するッ！」

球体の一つが空間と空間をつなぎ、J O J O の体は移動した。

J O J O 「クソ、ここにはいないか……！」

人間を超越した身体能力とスタンドの視力で桐崎を探す。だがここにはいない。

J O J O 「もう一度だ！」

空間をつなぎながら桐崎を探し続ける。

く千棘 s i d e く

千棘「…羊が一匹、羊が二匹、羊が三匹…羊が四匹…」

森の中で私は羊を数えて怖いのを紛らわせようとしていた。

千棘「羊が……だ……もうダメだダメだ!!? やっぱ怖いもんは怖……い!!」

あーもうなんでこんな事になったんだっけ。早くウチに帰りたい…。

震えが止まないし力も入らない…。

あれ…でもなんだっけ…。そういえば子供の頃にも一度、こんな事があつたような—

オバケ役「ギヤオオオオオオオオオ!!?!」

鵜「ヒイヒイヒイ!!?」

男子がいなく、るりとペアを組んでいる鵜はゾンビの格好の男子にすごいビビっていた。

るり「ちよつ…ちよつと鵜さん…」

鵜「すすすいません…!!? 私…こういうの全然ダメで…」

オバケ役「ギヤオオオオオ…」

鵜「ヒツ…」

ビュン!!? という音を立てて誰かが駆け抜けた。

鶴「え……あれ……？」
るり「今のは……」

千棘（そうだ、思い出した。あの日記の……！私が岩の隙間に落ちた時……！）
千棘（あの時の私は怖くて声も出せなくてボロボロ泣く事しか出来なくて……でもそれ
たらあの子が——）

そうだ、あの子はいっだって私が——

千棘「ヒイツ……!!？」ビクウ!!？」

突然草むらから音が聞こえ、ビビってしまふ。

振り向くと、そこには私の恋人の一条承一郎がいた。

承一郎の紅い目が青くなった。

承一郎「……オバケが泣くものじゃあないでしょ」

千棘「……!!？もやし……!!？」

く千棘 side out く

承一郎「……大丈夫かい？」

千棘「……なんとか」

私は承一郎の服の端を掴んで森の中を歩いていた。

承一郎「…まったく無茶をするんじゃないよ。出来もしないのにオバケ役なんて」

千棘「だって困ってたんだもん！仕方ないじゃない！」

承一郎「結局周りが心配する事になるんだらう!!？もうちよつと後先考えて行動してくれ！」

千棘「…じゃああなたはしたの？心配」

承一郎「…ん？…別にするわけないだらう」

だが承一郎は息を切らして、肩で息をしていた。千棘を捜すために走りまわっていたのだ。

承一郎「これぐらいで呼吸を乱すなんて、まだまだ練習しないと。大丈夫かい？桐崎さん。キツかったら休憩するからちやんと…」

千棘「〃千棘〃でいいわ」

承一郎「…え？」

千棘「千棘って呼んでいいって言ったのよ」

承一郎「えっ!?大丈夫かい君熱でもあるんじゃないかい!?」

千棘「なっ…!!?うっさい!!?何勘違いしてんのよ…!!?昨日お風呂で言われたのよ。私達もう結構付き合ってるのに名字で呼び合ってるんだねって」

千棘「だからほら！この先怪しまれない為よ！これからは私もあんたを下の名前で呼ぶからあんたも今後統一してよね！」

承一郎「は、はあ…（彼女こんな事言うキャラだったっけ？）」

千棘「ちよつと?!?ちゃんと分かったの?!?」

承一郎「わつ…分かったよ。えー…と、千棘…?」

千棘「うん…承一郎」

この時の千棘にちよつとドキツとした承一郎であった。

キング・クリムゾン!!?

その後、波紋の生命探知機が使えないので散々に迷い、帰った頃には肝試しはすでに終わっていて、承一郎は小咲との二人きりチャンス逃してしまった。

鵜「あ！お嬢…!!?心配しましたよ…!!?」

千棘「つぐみ！みんな！」

鵜は千棘に泣きつき大号泣している。

小咲「…鵜さんから事情聞いたよ。千棘ちゃんを迎えに行つてたんだね」

承一郎「ゴメン、小野寺君。すぐ戻るつて言つたのに…」

小咲「アハハ、いいんだよ。千棘ちゃん無事だったんだし」

承一郎（ハア…僕はなんて惜しい事を…。でも小野寺君が許してくれて良かった）

鶯「あ、そうだお嬢。明後日の振替休日はどうなさいますか？」

千棘「え？」

鶯「おっしゃってたじゃあないですか。初コイの子に出会った場所に行ってみたいと。明後日なら学校もないしすぐ手配致しますが…」

千棘「…まだいいわやっぱり」

鶯「え？」

千棘「…いいのよ今はまだ」

< || t o b e c o n t i n u e d ||

第32話 ドラゴンアツシユ その①

林間学校が終わり、数日後

昼休み、学校——

承一郎「なあ鶴さん、ちよつといいかい？」

承一郎が鶴に話しかける。

鶴「なんだ一条承一郎。何か用か？」

承一郎「君をビーハイブの『黒^{ブラックタイガー}虎』として頼みがある」

承一郎の目が赤く染まる。

J O J O 「学校が終わった後、ちよつと一緒に来てくれるか？」

その声で、ただ事ではないという事が分かる。

鶴「…分かった。いいだろう、だが話は放課後だ」

J O J O 「すまないな」

キング・クリムゾン!!?

放課後、学校の屋上——

鵜「それで、話とはなんだ？」

承一郎「鵜さん…『ビーハイブ』は麻薬の取引をしているのか…？」

鵜「…？何を言ってる…」

承一郎「早く答えてくれッ！君の返答次第で状況が180度変わるんだッ！」

承一郎の目が赤く染まり、語気が強まる。

鵜「…：どういふ事か分からないが答えは『NO』だ」

承一郎「…そうか、ならいい。実は今夜、ある廃ビルで麻薬の取引があるらしい。そこで君の協力が要だ」

鵜「…何故私か？」

承一郎「実はウチの組の中で『ビーハイブ』が麻薬の密売をしているんじゃないかと疑う者がいてね。君を参加させる事によつて疑いは晴れると思うんだ。これは昨夜ウチの組の合意の上での作戦だ。協力してくれるかい？」

鵜「…分かった、いいだろう。それでビーハイブの疑いが晴れるなら」

承一郎「グッド！それじゃあ行くか」

キング・クリムゾン!!？

夜、廃ビル周辺——

鵜「それで一条承一郎、どうするんだ？」

承一郎「この作戦は潜入スニーク&ミッション任務だ。基本的にはCQCクローズクォーターズコンバット（接近戦闘術）で制圧していつて、全員の拘束した後警察に通報だ」

鵜「何故通報するんだ？始末すればいいんじゃないのか？」

承一郎「更生の余地があれば釈放された後にウチに勧誘する事になっているんだ。とりあえず武器を渡しておくよ」

承一郎は鵜に麻酔銃とスタンロッドを渡した。

鵜「普通の武器じゃあダメなのか？」

承一郎「ウチは基本的に殺しは御法度だ。そこところは理解してくれ。まあヘッドショットすれば一発で眠ってしまう優れものさ」

承一郎「じゃあ行くよ」

承一郎は銃らしい物を取る。

鵜「それは？」

承一郎「フックショットだよ。ワイヤーを発射して移動ができる。これで行くよ」
パシユツ!!?という音と共にワイヤーが発射され、廃ビルに刺さった。

廃ビル、屋上——

パシユツ!!?という音がして屋上の見張りは倒れた。

承一郎「お見事。それじゃあ行こう」

ビルに入り、ゆっくりだが確実に見張りを順番に眠らせていく。

承一郎「そろそろ取引の時間だ。ビルの奥に向かおう」

承一郎達はビルの奥に向かった。

現場では数人の男達が麻薬の入ったケースと、札束の入ったケースがあった。

承一郎はスマホで証拠の写真を撮る。

承一郎「これでよし。あとは制圧だ」ピンツ!

承一郎はスタングレネードのピンを抜き、男達の足元に投げた。次の瞬間、閃光が走り、数人は気絶したがまだ何人かが残った。

男1「なんじゃあこりゃあ!!?」

男2「まさかサツが嗅ぎつけて来たか!?!?」

承一郎「行くよ、鶴さん!」

鶴「分かった!」

承一郎達は男達へ走り出す。

男1「誰じゃあテメエ!!?」パアン!パアン!

男2「やっちまえ!!?」パアン!パアン!

承一郎「リスキニハーデン・セイバー!!?」スパパパッ!

承一郎の腕から刃が現れ、飛んでくる弾丸と斬り裂き、男達の持つていた銃を切断した。そして正確にヘッドショットしていく。

男3 「くらえ!!?」 パァン! パァン!

鵜 「くっ!!?」 バッ!

鵜 はしつかりと弾丸を避ける。

男4 「死ねエ!!?」

男が鵜を撃とうとするが、後ろから麻酔銃を撃たれて眠ってしまふ。

鵜2 「『死ね』という言葉は私達の世界では使わないものだぞ」

鵜は『T G E』ザ・グレート・エスケープを使い、確実に一人一人倒していった。

キング・クリムゾン!!?

後はぶつちやけ作業だった。二人ともしつかりとヘッドショットを狙い、CCCで一人一人正確に眠らせたり気絶させていった。

承一郎 「これで全員つてところかな?」

鵜 「そうだな。早いとこ警察に通報するか」

承一郎 「:!!? 鵜さん!!? 後ろに誰かいるぞ!!?」

波紋の生命探知機を使い、後ろにいる敵を発見し、二人は振り返る。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

黒い帽子を被った男だった。口には葉巻を二本くわえていた。重度のヘビースモーカーらしい。

鵜「何者だ、貴様ツ！」ガシヤツ！

鵜が銃を構える。

？「おおつと！なに、ただの通行人だよ」

男は両手を挙げてそう言った。

承一郎「…あなた、麻薬取引の主格だろう」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

？「…！良く分かったな、すごいじゃあないか」

鵜「どうしてこいつだと分かったんだ？」

承一郎「一般の人間がこんな所に、よりにもよって廃ビルの中になんて入らない。ホームレスだとしてもあなたの格好は綺麗すぎる。どちらかというと『ヤバイ仕事をやって私服を肥やしている』ような感じだ」

？「ヒュウ！素晴らしいな、そこまで分かるとは！俺はあんたらと同じような『能力』を持った者だよ」

男は口笛を吹き、称賛する。

承一郎「！スタンド使いか！」

？「そういうこつた。俺の名は葛西善二郎かさいぜんじろうつてんだ。よくもまあこんなに俺の部下を倒したな」

鵜「：おい一条承一郎、こいつはどうする？」

承一郎「：更生の余地はないが、麻薬の密売ルートを聞き出して潰さないといけなからね。再起不能までに留めておこう」

葛西「無理だね。お前達は俺に勝てねえよ」

そう言うと、葛西の葉巻の煙が人の形になり、二人の前に立ちはだかった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

葛西「俺のスタンド、『龍ドラゴンの灰アッシュ』でお前達を始末するからだ！」

承一郎「龍の灰か：良いセンスだ」

鵜「御託は充分だ！くらえッ！」パアン！パアン！

鵜がスタンドに実弾銃を発砲する。鵜の銃は能力によつて分裂されていて、スタンドにも当たるようだ。

だが弾丸は葛西のスタンドをすり抜けてしまう。

鵜「何ッ!?？」

葛西『煙』のスタンドに弾丸が当たると思ふのかい？それに、俺は煙の成分も操れるから早くそこから逃げた方が良いと思つぜ？」

葛西は笑う。承一郎は考えていた。

承一郎（何故自分から能力を喋っているんだ？それに成分も操れるだと…？ま、まさかッ！）

承一郎はある事に気付く。

承一郎「鵜さん！後ろに下がれッ！」

承一郎に言われて、鵜は後ろに下がった。

鵜「なんなんだ！一体どうしたというのだ！」

承一郎「彼の部下を見てみる！」

そう言われて、鵜は起き上がってきている葛西の部下達を見た。

どんとどんと起き上がるがあつという間に倒れていく。その倒れた男達の目には生氣がない。死んでいるのだ。

鵜「こ…これは…!?？」

承一郎「これは『一酸化炭素中毒』だ…!!?？」

鵜「『一酸化炭素中毒』!?？」

葛西「ほう、良く分かったな。その通りだ」

鵜「一酸化炭素だと…!?？」

承一郎「彼が葉巻—もといタバコ—の煙の成分も操れるのなら、一酸化炭素の量も操

れるようだ。一酸化炭素は無色無臭で吸いすぎると死に至らせる有害な成分だ！」

承一郎「彼には自分には害がないように操っているようだ。だが近くにいて一酸化炭素を多量に摂取すれば間違いなく命取りだ！しかもこの廃ビルとの相性は抜群だ!!？」

鵜「どういう事だ…!!？」

承一郎「僕達が廃ビルを上から襲撃していたが、廃ビルの窓は全部閉まっていた。つまり、煙を充満させやすいんだ!!？しかも長期戦になればなるほど…」

葛西「どんどん煙が充満していく。さすがだな坊主！その通りだ！」

場所との相性を組み合わせて、葛西のスタンド、『ドラゴンアッシュ』は二人に迫っていた。

第33話 ドラゴンアッシュ その②

『煙』のスタンドと廃ビルの構造を利用し、葛西は廃ビルの中を葉巻の煙を充満させていく。

鵜 「じゃあどうするんだ!!?」

承一郎 「簡単だ！息を止めて素早く本体をぶちのめすッ！」

承一郎と鵜は葛西に向かって走り出す。

葛西 「そうかい！」 ボウン!!?

だが葛西はスタンドで煙幕を作り出した。承一郎と鵜が煙から出た時には葛西の姿はなかった。

鵜 「クソッ！どこだ!?!?」

葛西 「ここだよオ！」

声のする方を振り返ると、上の階の空いた床の上に葛西がいた。

葛西 「この廃ビルの構造はお前達より良く知ってるんだよ！見てみるとお前達のスタンド、どうやら近距離パワー型のような！」

葛西 「だったら近づかないで、そのままお前達が一酸化炭素中毒になるのを待つだけ

でいい!!?」

鵜「クソツ！待てツ！」ダツ!!?」

鵜は葛西を追いかける。

承一郎「おい、鵜さん！待つんだ！彼の思うツボだツ！」ダツ!!?」

承一郎も鵜を追いかける。

鵜は葛西を追いかけるが、葛西はビルの構造を利用して素早く逃げ回る。

その間に葛西は火のついた葉巻をばら撒きながら、煙が充満するのを待っていた。

だがついに葛西を追いついた。

鵜「ハア：ハア：どうやら一酸化炭素が充満する前に間に合ったようだな」

承一郎「やれやれ、やっとたどり着いたね」

葛西「フッフ：：：ハハハハ!!?」

鵜「な、何がおかしいツ!!?」ガシヤツ！

葛西「ハハハハハ：：!!? おかしいもなにも、お前達が追いかけていたのはただの幻な

んだよオ!!?」

スウウ：と葛西の体が消えていく。

鵜「何ツ!!?」

承一郎「これは…煙を使つて幻影を作り出したみたいだね…。煙が充満している証拠だね」

葛西「「そうだなア!!?」」

振り返ると、葛西の幻影が何人も待ち構えていた。

承一郎「な、何イーーツ!!?」

葛西「「もうこんなに煙は充満したツ！これでお前達が勝てる確率はゼロだツ!!?」」

承一郎「ぐつ…!!?息がつ…!!?」ドサツ

鶴「ぐあつ…!!?」ドサツ

承一郎と鶴の血液の多くは一酸化炭素とヘモグロビンが結合して酸素の供給が出来なくなっていた。

やがて二人は動かなくなった。

葛西「フフフ…ハハハハ!!?勝ったぜ!!?俺の勝ちだツ!!?フフフ…もう能力を解除するか…」

葛西は能力を解除し、二人に近づく。だがある異変に気付く。

葛西「な、なんだこれは…!!?」

二人の死体は所々ヒビが入り、白く崩れ落ちた部分があった。

鵜「…まさかこんな作戦が上手くいくとはな…」

承一郎「フフ…やらせていただきましたアン！」

葛西「何イツ^{!!}?ぐあつ!!?」ドゴツ!!?

葛西の腹に『C・^{クリスタル・ボン}B』の拳が放たれる。葛西の体が壁に叩きつけられる。

葛西「バ、バカナツ!なんで立っているんだ?!?」

承一郎「最初あなたの煙幕の中に入ったとき、すでに僕と鵜さんの骨の分身を作り出したんだ。僕達はその間に分身で屋上付近に近づかせないように操って屋上付近の窓を割っていたんだ」

鵜「窓を見えないように割り、屋上でお前が能力を解除するのを待ったんだ。それにしてもこの分身、本当に良く出来ているな」

葛西「クソツ!!『ドラゴンアッシュ』ツ!!?」

葛西はスタンドを出す、さつきより小さくなっていた。

鵜「窓を割ったから煙が外に出てお前のスタンドは弱体化したようだな」

葛西「く、クソツ!!?」

承一郎「葛西、あなたに二つ聞きたいことがある。一つ目、あなたはいつ、どうやって『スタンド能力』を発現した?まさか、『矢』じゃあないだろうな?」

葛西「…あんたも俺と同じクチなのか…?」

J O J O 「…答えろ」

瞳が紅くなる。人格が代わったのだ。

葛西「…まあ確かに俺は『矢』に射抜かれてこの能力を手に入れた。何週間か前の事だった」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

J O J O 「…!!?」

葛西「だが射抜いた奴の顔は見えなかったな。だがあのガタイ、男だろうな」

鵜「おい一条承一郎。『矢』とは何の事だ?」

J O J O 「お前は生まれついでスタンド使いらしいな。俺はお前が学校に来る前に『矢』によって射抜かれた。小野寺が決闘の時に言っていただろう」

鵜「ああ、そういうえば小野寺様が言っていたような…」

J O J O 「その矢は射抜かれるとスタンド能力が目覚めるか死に至らせる道具だ。俺は射抜かれてからずっと矢とその男を探している。そいつがスタンド使いで、何かヤバイ事をしている可能性があるからな」

鵜「!なるほど…」

葛西「…残念だがもうお喋りの時間は終わりだぜ?」

鵜「何ッ!?!?」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承一郎達の背後には、少しずつ大きくなっていく『ドラゴンアッシュ』がいた。

鵜「何ッ!?」

葛西「お前らが話している間に大きくできたぜ!!? くらえッ!!? 『ドラゴンアッシュ』ッ!!?」

J O J O「やくれやれだぜ。もう逃げる必要はないな…。お前があと一回呼吸するうちにその『スタンド』を倒す」

葛西「なんだとこのマヌケッ! 一回呼吸する間だとオウ? すぐにしてや…」
台詞が途中で止まった。

鵜「…?」

葛西「……………一回…ぐっ、ただの一回…」

だんだんと葛西の顔が赤くなっていく。

葛西「くっ、こっ、き、う、が、ううう…」ンパンパ

葛西はまるで池の中の鯉のように口をパクパクさせていた。

鵜「あっ!」

鵜が見たのは、『煙』のスタンドの『ドラゴンアッシュ』とそれを吸い込む『クリスタル・ボーン』だった。

鵜「こ、これはッ……！吸い込んでいるッ！」

承一郎（こうしてしまえば彼は息が出来ないはずさ！）
やがて息が出来なくなり、葛西は気絶した。

JOJO「ふむ、これでこいつの頭の中にも大好きな煙がかかったようだな」

キング・クリムゾン!!?

鵜「必要な情報は分かったのか？」

承一郎「そうだね、波紋で催眠をかけて聞き出せたよ。これで麻薬の密売ルートを潰せるよ。今日はありがとう、鵜さん」

鵜「気にするな。これで疑いも晴らせたのなら別にいい」

承一郎「それじゃあ死んだ葛西の部下の死体はこっちで片付けるから先に帰ってて」

鵜「分かった。それではな」

そう言つて、鵜は帰って行つた。

JOJO「それじゃあ、始めるか……」

その後、ズギユン！ズギユン！という音がして、死体は全て消えていた。

葛西：承一郎に能力を使い脱獄を図ったら暗殺すると念を入れられて警察により逮

捕、懲役5年の裁決が決まった。

ちなみに、葛西はJ O J Oの催眠にかかり、二人の顔を忘れていた。

鵜：今回の作戦によりビーハイブの疑いを晴らすことに成功。

承一郎（J O J O）：死体の始末をした後警察に通報し、その後麻薬の取引の現場の写真
真を匿名で送った。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

第34話 千棘の誕生日プレゼントを入手せよ!

放課後、学校内――

〔承一郎 side〕

千棘「〃承一郎〃……!!?」

僕は小野寺君に声をかけようと思ったのだが、千棘さんに声をかけられた。

千棘「ねえねえこの日誌どこに持って行くんだっけ?」

承一郎「え? さつき先生が準備室に言って言ってたじゃあないか」

くつ、今小野寺君に声をかけようとしたのに…。

承一郎「あ!ちよつと〃千棘〃さん!理科準備室の方だよ!!? また音楽の方と間違え

ないですよ!!?」

千棘さんは理科準備室へ行った。

小咲「……………名前」

承一郎「え? ああ、そうか。いや実は最初下の名前で呼び合う事になってね。なんか

結構長く付き合ってるのに未だに名字なのは変だって友達に言われたんだって」

小咲「……………ふーん……」

うう…小野寺君の前で恋人アピールは辛いなあ…。

小咲「おふう!!?」ゴスウ!!?

承一郎「!!??」

だけどいきなり宮本さんの肘の一撃が小野寺君を襲う!

るり「…先を越されたわね」ヒソヒソ、チツ…!

小咲「…痛いよるりちゃん」ヒソヒソ

るり「(あんたもいつそ名前で呼びなよ)」ヒソヒソ

小咲「(出来ないよそんなの…!)」ヒソヒソ

何を言っているのか小声で分からないけど宮本さんつて時々怖いなあ…。

鶯「…おい一条承一郎。貴様お嬢を見てないか?」

鶯さんが扉を開けてそう聞いた。

承一郎「ん? ああ…彼女なら理科準備室に…」

鶯「そうか、それは都合が良いな」

承一郎「?」

鶯「実は皆さんにお嬢には内緒のお話があるんですちようどお揃いのようですし少し

よろしいですか?」

小咲「内緒の?」

鶯さんが千棘さんに内緒というのはかなり珍しい。

承一郎「……集がないけど」

鶯「皆さんお揃いようですし」

承一郎「……そうか……(察し)」

鶯「実は今日は千棘お嬢様のお誕生日なのです!なので私お嬢を楽しませて差し上げたくサプライズパーティー等計画中でして、ぜひそのパーティーに皆さんご招待したいのです」

鶯「皆さんが来て下さればお嬢も大変喜ばれると思うのですが……」

小咲「へー!行くよもちろん!!?」

承一郎「ふーん……じゃあプレゼントとか用意しないとね」

鶯「……まあ貴様もどうしても言うなら?貴様も一応お嬢の恋人でもあるし呼んでやらんでもないが……」

承一郎「……なんだい?そんなに嫌なら行かないよ。野郎一人だと気まずいし」

鶯「………来いよ」

承一郎「え?どっちなんだい?」

承一郎「よし、なら放課後二人で一緒にプレゼント選んで来なよ」

承一郎・小咲「えっ」

小咲「るるるりちゃん!!?」

承一郎「宮本さん、君は来ないのかい:!!?」

るり「あーゴメン実は今日ずっとお腹痛くてさあ:」

小咲「お昼A定食二つも食べてたでしょ!!?」

るり「ほら二人で相談した方が早くプレゼントも決まるでしょ?」

承一郎「だつ:..だつたら宮本さんも:..!」

るり「いいからとにかく行け!!?!」

こういうやりとりがあり、五時喫茶店に私服で集合することになった。

キング・クリムゾン!!?

喫茶店内——

僕は喫茶店でコーヒーを飲んでいた。

承一郎（:..なんかこんな所で待ち合わせって、なんかデートっぽくないかな?）

J O J O（うむ:..確かにそういう感じはするが、一緒にプレゼント選びに行くぐらいだとデートって呼べないんじゃないのか?）

承一郎（うーん、分からない:..）

すると小野寺君が僕の席の近くに走って来た。どうやら小野寺君は僕が近くにいる

事に気づいていないらしい。

承一郎(そういえば店の中入るって言うてなかったな。どうしよう声をかけ…、あ、気付いたかな?)

小野寺君はガラスに顔を向けた。そして息を整えて、ガラスを見て髪を整えた。

承一郎・J O J O (い…癒される…)

小野寺は気付いたようで顔が赤くなった。

小咲「……………で…では早速、千棘ちゃんのプレゼントについて相談しようかな…?」
グス…

承一郎(……………そうか…スルーして欲しいのか…)

小咲「…ねえ、誕生日ってどんな物貰うと嬉しいかな」

承一郎「うーん、そういうのはあんまり話していないからな…」

承一郎(ん?そういえば小野寺君の誕生日聞いてないな…。まだ過ぎてなければいつか小野寺君にも…)

承一郎「…ねえ小野…」

小咲「よし!やっぱりお店で見ながら考えようよ。きっとその方が早……………?何か言った?」

承一郎「……いや何も」

「まあまだ聞けるチャンスがあるはず…。」

キング・クリムゾン!!?

小咲「……良かったね。良い物が見つかった」

「…と思っていた自分がいました…。」

承一郎（ああ、もつと色々話したかったのに…。なんかもう道中胸いっぱい…）

小咲「……楽しかった？ 一条承…。」

承一郎「…え？」

小咲「ほら…その…るりちゃんのせいで無理矢理付き合わせちゃったからホントは…どっか我慢してないかなって…。」

承一郎「なっ…何言ってるんだよ。そんなわけないだろう…！ 楽しかったよ僕は…！」

小咲「…そっか、良かった…。…ねえ、ちよつと寄り道していい？」

承一郎「え？ 良いよ」

小咲の秘密の場所——

承一郎「おお——！！？ すごい眺めだね！」

僕は小野寺君に凡矢理町を見渡せる場所へ案内してもらっていた。

承一郎「あの狭い路地の奥にこんな場所があったとはね…」

小咲「昔偶然見つけたの。私の秘密の場所なんだ。良い所でしょ？」

承一郎「ああ、とても良い所だね。…ちなみに他に誰が知っているんだい？えーと宮本さんと…」

小咲「知らないよ」

承一郎「え？」

小咲「だって教えてないもん。…私と一条君だけの秘密。…誰にも言っちゃダメだよ？」

承一郎「えっ?!?!?いいのかい?!?!?そんな秘密僕なんか教えて…?!?!?」

小咲「アハハ!いいよもちろん。私も今日楽しかったからなんとなく…そのお礼」

承一郎「ありがとう!絶対に誰にも言わないさ!約束するよ!!?!?」

小咲「うん…、約束だよ?承一郎君」

その時、小野寺君の顔が10年前の約束の女の子と重なった。

え…今の…?!?いや、そんなわけ…。

小咲「…アハハ…やつぱり照れるね下の名前で呼ぶの。やつぱり私は一条君のが呼び易いや…!」

…今一瞬「あの子」が…。いや…今のは「約束」という言葉に反応してしまっただけ、小野寺君があの子だなんて…そんな都合良い事あるわけ…。

小咲「…ゴメン一条君、名前で呼ばれるのそんなに嫌だった？」

承一郎「えっ?!? いやいや全然?!?」

承一郎（あ、そうだ！今のウチに誕生日を聞いちやおう…!）

承一郎「あ…あの小野寺君、ちよつといいかい…?聞きたい事があるんだけど…」

承一郎「10年前僕が約束した女の子って小野寺君?」

小咲「え…」

承一郎（え…ええくくく!!??な、何を言っているんだ僕は?!?）

JOJO（…なんかすごいなお前…度胸あるな結構）

承一郎（いや、意識していたからつい思わず…!!?なんて言い訳しよう…!!?こんな

事唐突に言っても分かるわけが…!!?）

小咲「うん…そうだよ」

承一郎「…小野…寺…君…?」

JOJO（…マジかよ）

第35話 千棘の誕生日パーティー

承一郎「…小野…寺…君…？」

JOOJO（…マジかよ）

小咲「…多分、なんだけどね…。…一条君前に言ってたよね…？10年前に…何か約束をした人がいるって…。私にもいるんだそんな人。小さい頃の記憶だから曖昧だけど」

ドクン、と心臓の鼓動の音が聞こえた。何かの歯車が噛み合ったような感じがした。

小咲「10年前、私が5歳の時の夏——私はある男の子と仲良くなって、お別れの時にこの鍵を貰ったの」

小咲「…もう顔も名前も思い出せないけどたった一つ覚えてるのはその子は一条君と同じペンダントを着けていたような気がするの——」

承一郎（…同じペンダント…?!?そんな偶然…それともう…小野寺君があの子だったって事なんじゃあ…）

小咲「…その子と遊んだのはたった一夏の間事だったけど当時人見知りだった私を外に連れ出してくれてなんだかとても頼もしく見えて…。…今思えばあれが私の初コイ

だったような気がするの」

小咲「だから、そのペンダントを見た時は本当にビックリした。もしかして一条君があの時の男の子なのかと思って…」

J O J O（これで10年前の事に近づけるかな…。だがまだ俺達が知らない事ばかりだ…）

小咲「…ううん、少し違うかも…。私は…」

小咲「私は…一条君がその子だったらしいなって…」

承一郎（え…小野寺君…それって…どういう…）

『盗んだバイクで走り出す♪行く先も分からぬまま♪暗い夜の帳の中へ♪』

二人共盛大にずっつけてしまう。僕の携帯の着メロの『15の夜』が鳴る。
慌てて電話に出ると、

鶴『何をしておるのだ一条承一郎!!?早く来い!!?』

承一郎（うつ…いいところに…）

承一郎「悪い小野寺君、この話はまた…」

小咲「うん……！急がなきゃ……！」

もし……もし小野寺君が約束のあの子だとしたら。確証はまだない……。だけど、簡単に確かめる方法なら……。？

キング・クリムゾン!!？

千棘の家——

小咲「……ここが千棘ちゃんのお家……？」

僕と小野寺君が千棘さんの家に着いたとき、宮本さんや集、鶴さんと承太郎さんや兄さん、ミスタさんがいた。

小咲「……おつきいね〜」

るり「ホント……千棘ちゃんの親つて何やつてる人なんだろ……。どうしよう私大した物持つて来てないんだけど……」

鶴「お嬢はプレゼントの値段で人を計ったりはしませんよ」ドヤツ

承一郎「なんだいそのドヤ顔」

鶴「……ところでなぜ貴様がここに？」

集「アハハ！やだなく静士郎ちゃん水臭い〜」

鶴「帰れ」

承一郎「承太郎さん達は僕が呼んだんだよ。やつぱり野郎一人だと気まずいからね」
そこへ、千棘さんがやって来た。

小咲「あ、千棘ちゃん今日はお誕生日おめでと〜！」

千棘「な、な、な、なぜ皆がここに…」

鶴「今日はお嬢のお誕生日という事で恐れながら私お嬢に内緒で皆さんをご招待させて頂いたのです」

千棘「ちよつ…！ちよつとこつち来てダーリン！」

承一郎「え…なんだい」

千棘「どうしよう…私まだ皆にウチがギャングだつて言つてないのに…」

承一郎「え…君まだそんな事気にしてたのかい…？」

千棘「何よそんな事つて…！私そのせいで今まで友達が出来なかつたのよ…!!？」

承一郎「おーいみんな、彼女の家つて実はね〜…」

千棘「ギャーーーーー!!??」

僕はみんなに千棘の家の事を話した。

小咲「へえ〜〜！やつぱり千棘ちゃんすごいいお嬢様だつたんだ〜!!? すごいいね〜！だつて一条君と同じつて事でしょ〜?…あれ? どうしたの?」

承一郎「ね、平気だろう?」

そう言つて、僕は千棘さんの家の中に入った。

ギヤング達「ハッピーバースデーお嬢くくくく!!?!お誕生日おめでとうございまゝす!!?」パパパパーン!!?」

いい歳こいたギヤングのおつさん達が一斉にクラッカーを鳴らした。千棘さんはちよつと冷めた顔をしている。

ギヤング「いやー今日でお嬢も16歳ですかあゝ!!?」「このサプライズも何回やつても良い物だよなゝ!!?」

何回もやつてたらそれサプライズって言えるのかな…?

ギヤング「おおー!!?今回はお友達も一緒なんですかい!!?お嬢が友達連れて来るなんて初めてなんじゃあないっすか!?!」「嬢ちゃん達今日はよろしくなあ!!?」

小咲「あ、は、はい!よろしくお願いします!!?」

ギヤング「あれ?お嬢なんか普段と様子違くないです?」「妙に嬉しそうというか…」千棘「…別に」

クロード「これはこれはお嬢のご学友の皆さんもいらして下さったのですか。ようこそ、歓迎致します」

小咲「あ、はい!本日はお招き頂きどうも…!」

クロード「おや、おやおやこれは一条家の承一郎お坊っちゃんではございませんか…」
クロードが僕に見つけ近づいて来る。正直来ないでもらいたいな。声優が父と同じだから嫌悪感がハンパない…。

作者「すごいメタクね？」

僕は作者が出てる時点ですごいメタいと思うけどな…。

クロード「これは困りましたね。坊っちゃんはさぞ素晴らしいプレゼントをご用意されてるようでしょうから私プレゼントを渡すのが少々恥ずかしくなってきましたよ…」

承一郎（この人…だんだん態度が露骨になってきてるな…。もう隠すつもりないでしよ）

小咲「はい、千棘ちゃん！早速だけどプレゼント。ただの文房具セットだけど…」
るり「私小説」

千棘「そんな事ない！嬉しいよすぐ…!!？」

クロード「フフ…では次は私から。坊っちゃんのプレゼントに比べれば粗品かもしれませんが」

サラッとハードルを上げてくるな…。

クロード「お受け取り下さいお嬢!!？超高級車マイバッハのオーダーメイドモデル…」

!!?」

千棘「いや免許とか無いし要らないわ」

完全に千棘さんからプレゼントを拒否されたクロード。バカじゃあないのか？ 普通生活に使える物をプレゼントするよね？

ギヤング「ほれほれ坊っちゃん最後だぜ」「ビシッと決めろよ！」

うーん…これ程プレゼントを渡しにくい状況があるだろうか…。

承一郎「はい、誕生日おめでとう」

僕がプレゼントに選んだのはブレスレットだ。シンプルだけどファッションに使えるアクセサリーになる。『マリークワント』というブランド品らしい。

千棘「あ…ありがとう…！」

その時の千棘さんの笑顔に少しドキッとしたのは内緒である。

キング・クリムゾン!!?

僕はちよつと休憩するためにベランダで休んでいた。

ちなみに鶴さんはミスタさんと話していた。どうやら同じヒットマン同士、通じ合うものがあるのだろう。

千棘「あれ？あんなこんなとこいたの？」

承一郎「ああ、ちよつと休憩に」

千棘「あそ、私も。ねえ承一郎、ちよつといい…？」

千棘「あんたにさ…ずっと聞いてみたい事があつただけど聞いてもいい？」

承一郎「ん？なんだい改まって」

千棘「あんたつてさ、10年前に会つたつていう女の子の事今でも好きなの？」

承一郎「……………えっ？あの子はそういうんじゃあ…」

いや…待てよ？10年前のあの子——まだ確かめたわけじゃあないけどあれつてやっぱり小野寺君だつたつて事だよね。

だとしたら——…。

承一郎「……………ああ…好きだよ」

千棘「……………そう……………じゃあ……………あんたさ…ザクシャ イン ラブつて言葉を

聞いた事はある？」

承一郎「……………え？」

J O J O (…マジかよ) ↑2回目

第36話 二つの鍵!??

千棘「聞いた事ある? ザクシヤ イン ラブっていう言葉——」

承一郎「なっ…君…どこで…その言葉…!!?」

J O J O (…マジかよ)

千棘「…あるのね? 聞いた事…」

承一郎(…どういう事だ? だってそれは僕が “あの子” と約束を交わした時の…!)

千棘「…最近ね部屋で古い日記見つけて色々と思いついた事があるの…」

千棘「私は10年前にある男の子に出会って夏の間一緒に遊んで仲良くなつてそしてお別れの時私はその子と何か約束したの」

承一郎(なっ…!!??それってまるで…僕の思い出と同じ…いや、小野寺君と同じ…!!?)

千棘「…もう顔も名前も覚えてないけど覚えているのは今の言葉と…。あ、あとその日記にはコレが挟まってて…」 チャリ…

そう言つて、千棘さんが出したのは鍵だった。古いが、見覚えのある鍵だ。

承一郎「!!? その鍵…!!??」

千棘「!??知ってるの…!??」

承一郎「いや…」

承一郎「…確かに初めて見た時見覚えは感じたけど…。でも…まさか…。だって…あの子”は小野寺君ハズじゃあ…!??でも彼女も鍵を持っててしかもさっきの言葉…!!?」

承一郎「…昔会ったその子と約束したんだ。再開したら一緒にこのペンダントを開けようって。だからもしその子が約束を覚えてたらその為の鍵を持ってるハズ」

千棘「……………まさか…コレが…?」

二人の心臓の鼓動が加速していく。

千棘「……………ってそんなわけないわよね…!!??」

承一郎「だだだだだよね…!!??そんなわけないよね…!!??」

二人で必死に否定する。

千棘「だってだって私あなたに会った覚えなんて一度もないし…!!?」

承一郎「僕だって君とあの子じゃあ全然イメージ違うし…!!?」

千棘「そうよ、あるわけない。これはただの偶然…!!?だって私も日記に書かれてるあの子とあんたじゃあ全然イメージ違うもの…!」

千棘「日記のあの子はあんたと違って優しく…かつこ良くて…そりゃあもう素敵で

ね……!」

承一郎「なっ……へーそうなんだ。まああの子も君と違つて清楚でおしとやかでかわいくてなあ……」

千棘「あーそう!!? まあ分かりきつてるけどね……?!? なんで私があんたなんかとの別れを惜しんで約束とか?!? バツカみたい!!?」

承一郎「……なら、確かめてみるかい? ……その鍵が本物ならこのペンダントが開くはずだろう……? 開かなければ僕達は晴れて無関係……。まあ、開くわけないけど」

千棘「……まーいーけどあんたがあの子なわけがないし」

千棘「あの子はあんたと違つて王子様みたいな人でねえ、なんでも出来ていつも私を助けてくれて……」

承一郎「……へー言つてくれるじゃあないか。じゃあもし僕がその約束の相手だったらどうしてくれるんだい?」

千棘「ハッ! その時はなんだつてしてあげるわよ。 “キス” だろーがなんだろーが……」

承一郎「え……」

その言葉を思い出したように千棘さんの顔が急に赤くなる。

千棘「じよっ……!!? じよじよじよ上等よやったるうじやあないのよ……!!? だつてあん

たなわけないし…!!?」

承一郎「おつ…おう!!?おう良しバツチ来い…!!?」

承一郎（…開かない、開くハズがない…!!?だつて…彼女が「あの子」なわけ…）

千棘「…見てなさいよ。すぐに分かるわ。絶対あんたじゃあないんだから…」

千棘「いくわよ!!?覚悟はいい!!?まああり得ないつてわかっちゃうやいるけどそこまで

言うなら仕方がないわ…!」

承一郎「よし!かかつてこい!」

千棘「任せときなさい!!?すぐに分からせてあげる!!?私とあんたはなくんにも関係ないつてねえ!!?」

承一郎「よしその意気だ!!?ガツ!と行つてくれ!!?」

千棘「すぐに吠え面かかせてあげるから。だいたい私とあんたが昔仲良くやつてたつて事自体が…」

承一郎「早くしてくれ!!?」

千棘「……………いくわよ」

ゆつくりと鍵が錠に近づいていく。

そして、錠の中に鍵がカチャン、という音と共に入った。

承一郎・千棘「!!?」

承一郎（入っ…!!?）

千棘さんが鍵を回す。

すると、次の瞬間ガチンツ！という鈍い音と共に鍵がポツキリと折れてしまった。

JOJO（……OH MY GOD……）

承一郎「お…折れたああああ!!?何をやっているんだ君はー！ー!!?!」

千棘「わあゝゝ!!?だってだって仕方ないじゃあない!!?緊張して力が入っちゃったんだもん!!?」

承一郎「あゝゝ!!?どうするんだいコレ、取れなくなっているじゃあないかコレゝ!!?」

千棘「知らない知らない私知らなくゝい!!?」

承一郎（…なんてこった、これじゃあもう後で小野寺君の鍵を試す事も…）

JOJO（……ドンマイ、そういうもんだよ人生って…）

千棘「ま、いいじゃん。どうせ私達が約束の相手なわけないんだし。じゃあね、話はおしまい」

承一郎「えっ?!?どこ行くんだい?!?」

千棘「みんなのそこ」

承一郎（……妙にアツサリしてるな…。もしコレが開いてたらどうなってたと思つて

——…)

J O J O (小野寺も桐崎も10年前とか鍵とかとても偶然とは思えない…! やつぱりコレってどっちかがあの約束の女の子って事なのか…?)

承一郎(つまりどっちかとは僕は昔会ってる…? それさえ分かれば「あの子」の事も——…)

承一郎(一体どっちと——…)

僕はベランダから屋内に戻り、歩きながら考えていた。

アーデルト「…おや、久しぶりだね承一郎君。誕生日を祝いに来てくれたのかい? どうもありがとう」

千棘さんの父親、アーデルトさんがやって来た。

承一郎「…どうも、アーデルトさん」

アーデルト「…娘とは仲良くやってくれてるかい? すまないねえ、突然恋人のフリなんて大変な事を押しつけてしまつて…」

承一郎「いえ…まあ…」

アーデルト「日本に来てからのあの子は毎日とても楽しそうだよ。きっと君のおかげだ。礼を言うよ」

承一郎「え?」

承一郎（…そうなのかな? …いやでも彼女アメリカにいた頃は友達いなかったって言うからな…）

アーデルト「…まあ君達は相性がいいからね。上手くやっていると思っていたから…」

承一郎「相性…?!? 良くないですよ…?!? 彼女とは顔を合わせたらケンカばかりで…!!?」

アーデルト「ははは! そんな事ないよ。だって君達は…子供の頃もとても仲が良かったから」

承一郎「……なっ……子供の頃?!? それっ…!!? なんの話…!!?」

アーデルト「ハハ…やっぱ覚えてないだろうねえ。もう10年も前の話だよ。昔君のお父さんと日本のある場所で一月近くもかけて会談をしていてね、当時5歳だった千棘もその場に連れて行っていたんだ」

承一郎「……」

アーデルト「君達が親しくなっているのに気付いたのは会談も終わりに差しかかる頃だったけど君達がとても楽しそうだったからよく印象に残ってる」

承一郎（…僕と桐崎さんが10年前に会ってる…?!? そんな……ってことは、僕の約束したのは桐崎さんで小野寺君は人違いって事に…!!?）

アーデルト「…でも、不思議な事もあるもんだねえ」

承一郎「…え？」

アーデルト「まさか君達だけじゃあなくあの子までこの歳で再会する事になるなんてね」

承一郎「……あの子……？」

アーデルト「おや、覚えてないのかい？分かつて一緒にいるんだと思ってたんだか。当時君達はよく3人で遊んでいたんだけど」

アーデルト「ほら、今日君と一緒に来たあの子だよ」

J O J O (なっ…!!?マジか…!!?なんてこつた…!!?)

アーデルト「…これも運命なのかねえ…」

そうか…!!?僕は昔二人のどちらかと会った事があるんじゃないやあなく…!両方と子供の頃に会っていたんだ…!!?!

つまり、約束に関係あるのはどっちかじゃあなくて二人とも…桐崎さんもそして小野寺君も——

第37話 たまに先生は写真ミスるときがある

僕は昔会った事がある。10年前に同じ場所で——…!!?

承一郎（まさかそんな事が…でも待てよだつたらなんで——）
鍵が二本もあるんだ——…?!

承一郎（二人とも10年前に誰かと約束をしたつて言つてた…でも僕があの約束したのは間違いなく「あの子」一人のハズだ…!）

なら…一体どつちが…

承一郎（…何を考えているんだ僕は。たとえ桐崎さんが「あの子」だつたとしてもそれはあくまで子供の頃の話…僕が今好きなのは小野寺君なんだ。それは変わらない）
変わらないよ——…

数日後、登校途中——

集「…やつほーおじさん! どう? 頼んだ奴は直りそう?」

集が鍵屋の叔父に電話している。僕の錠の修理を頼んでもらつたのだ。

集の叔父『おう集か。こりゃあ思つたより難物だぞ。ちよつと珍しいタイプでな。』

ま、なんとかなるたあ思うが時間はかかる。気長に待つてろ』

集「そつかく。ま、よろしく頼むよ」

集の叔父『それで？例の写真集は用意してくれるんだらうなあ？』

集「限定版でサイン付きっスよだんな……！」

集の叔父『おつしやああ!!？ガゼンやる気出てきたああ!!？』

集が叔父との通話を切る。

集「…だとき、安心しろつて」

承一郎「…そうか」

承一郎（良かった、とりあえずペンダントの事はどうにかなりそうだ）

集「…んで？結局あのペンダントはなんなのよ」

承一郎「……悪い、今度ちゃんと話すから」

そして僕と集は学校へ向かった。

キング・クリムゾン!!？

学校、玄関の下駄箱——

千棘「あら、おはよう承一郎」

承一郎「………ああ……おはよう……。…あ、そうだ。昨日の鍵とペンダントなんか

直りそうだよ。集のおじさんが鍵屋らしくてね……」

千棘「へーそうなの。良かったじゃあない」

承一郎「…なんだ、昨日あんな事があつたのに超普通じゃあないか…。昨日は「キスとか言つてたクセに…」

承一郎「…ん？」ガラッ

僕が教室のドアを開けると教室の窓からクロードが木の上にいるのが見えた。今日は監視アリののららしい。

J O J O (というかどうして見つからないんだ？生徒何人か絶対見てるだろ…)

承一郎「(よくしー！今日も気合い入れて恋人やるか！行くよハニ…！)」ポン！
僕は小声で千棘さんに話しかける。

千棘「キヤ！」

僕が肩に手を置いたら「キヤ」なんていう声を出す千棘さん。よく見たら、顔が赤くなっている。

承一郎「…：…な…：…なあ…？なんで赤くなっているんだい…」

千棘「なつてない。テキトーな事言わないでくれる!!？」

承一郎「しつかりしてくれよ、あのメガネが見てるんだよ」

千棘「分かつてるわよ…！恋人ね…!!？」

女子「おつはよー桐崎さんに一条君！今日も朝からアツイね〜！」

女子の一人が僕達に挨拶してきたので

承一郎「ハツハツハ！そうだろうそうだろう！！？なんたつて僕達はラブラブカップル
…」

と返したら

千棘「ハハ、そうね」↑瞳、声共にミツキー

と千棘さんが謎のミツキー化した。

承一郎「うおおおい、何やっているんだい君は…！！？」

千棘「うっ…うっさいわね…！！？ちよつと放つといてよ…！！？」

承一郎（…なんだ？どうしてしまったんだ彼女…）

千棘（どうしちやつたのよ私は…！平常心平常心…！）

そして1日が過ぎていく。

キング・クリムゾン！！？

小咲「…一条君！」

承一郎「…小野寺君？」

小咲「…さっきの千棘ちゃん少し様子がおかしくなかつた？」

承一郎「小野寺君もそう思った？なんか変なんだよ今日の彼女」

小咲「…ケンカでもしたの？」

承一郎「いや…そういうわけじゃあ…」

承一郎（…彼女がもしかしたら僕が約束の相手かもって意識しちやつてたとか。…それはないな）

小咲「…あれ？一条君いつものペンダントは…？」

承一郎「え？ああアレ…。いや実は今朝急に修理に出す事になってしまつてね。すぐ戻つて来るとは思つただけど…」

小咲「…そう…なんだ…」

承一郎（…小野寺君…僕達が昔会つた事があるなんて知つたら一体…どんな顔するんだろう…）

承一郎「…まあ千棘彼女の事は心配だけど大丈夫でしょ。単に調子悪かつただけだよ。僕もこの後気をつけて見とくから」

小咲「そう…？ならいいんだけど…」

小咲（…千棘ちゃん是一条君とは恋人のフリだつて言つてたけど、一条君はどう思つてるんだろう——…）

キング・クリームゾン!!?

教室——

キョーコ「…はい皆注目。林間学校の写真が焼き上がって掲示板に張り出されて
いるから各自欲しい写真の番号を書いて提出する事、OK?」

全員「はい」

キョーコ「あと、恥ずかしくても好きな奴の写真はちゃんとゲットしとけよ?」

全員「は…何言ってるんだこの人…!!?」

キング・クリームゾン!!?

掲示板前——

千棘「…わ…これ好きなの買ってるいの?」

承一郎「…そうだけど、あんまり買いきないでよ?これ一枚100円とか高すぎだ
からね、本当に欲しいものだけ厳選して…」

千棘「あ!コレも欲しい!あ!コレも!みんなが写ってる!」

鵜「お嬢!こちらにも良い物が!!?」

千棘「ホント?!?チエック!!?番号チエック!!?」

完全に無視である。

承一郎(…ま、いつも通りに戻ったようで何よりだけど)

小咲「…じゃあ私達も行こっか」

承一郎「おつ…ああ、そうだね」

承一郎（よくし僕も！せめて一枚でも小野寺君の写真を…）

小咲「私はるりちゃんと写ってるのが欲しいな」

るり「私は別に」

小咲「えっ…」

るり「あ、コレなんかどう？私と小咲が写ってるけど」

小咲「え？どれどれ？」

その写真には、僕の顔が大きく写っていて、宮本さんと小野寺君は小さく写っていた。

千棘「え？コレ…？」

承一郎「…これなら探せばもっと良い物があるんじゃないか…」

その後小野寺君は宮本さんをポカポカ叩いていた。

承一郎（うくん、良いの見つかるかな。ツーショットとか見つければ最高なんだけど

…）

千棘「あ！見てコレ承一郎と小咲ちゃん写ってるよ！」

承一郎（なっ…!!?）

掲示板には、肝試しの時に僕と小野寺君が手を繋いでいる写真があった。

小咲（どうしよう、欲しい…!!?）

承一郎（でもこんな物買ったって知られたら…!!?）

承一郎「い…いやくなかなか無いなく欲しくなる写真って〜」

小咲「そ…そそそそうだね〜」

るり（じれつたいないいつら）

J O J O（…後で俺が書こう）

集「おやおやだんな、どんな物をお求めで？こちらに良い商品がございますがお一つ
 どうです？」

承一郎（集…）

集がなんか昔の石油王が「こいつはくせえッー！ゲロ以下のおいがプンプンする
 ぜッー…ッー！」と言いそうな顔で近づいてきた。

集「ここには私めが撮影したちよつと普段見れない女の子達の姿が写されてましてお
 かげ様で大盛況なんですよ」

男子1「舞子！オレ13番一枚！」

男子2「オレ94番！」

女子達「なに…？女子のHエッチな写真を売ってるの…？最低…」「変態」「クズ」「死ぬ」

集「いやいやそんなんじゃないって…。てゆかののしり方キツイな」

集「500円」

承一郎「グッド！」

承一郎（これで小野寺君とのツーショットとか見つければ…）
写真を探しているうちに、一枚の写真が目に入った。

承一郎「……ん？あれ…？この写真…」

承一郎（この桐崎さんの後ろに写ってるのって…）

桐崎さんの後ろの小野寺君が着替えてるところが見えてしまったのだ。

承一郎（こんな物誰かに買って見られたら…！…幸いこの辺はまだ人もあんまり見えないハズ…。誰かが気づく前に先生に言っただけで元のデータも消して貰おう）

僕は写真を抜き取り、職員室に向かおうとしたが、

承一郎「あ！すまない…！」ドンッ！

小咲「あ、ゴメンなさ…あ、一条君？」

小野寺君とぶつかってしまった。

承一郎（あ！写真が…）

しかもぶつかってしまった拍子に写真を落としてしまう。

小咲「これ…一条君の…？」

承一郎（ヤバイ…!!？その写真を見られたらまるで僕が小野寺君の着替えシーンを…）

!!?)

だが、小野寺君の指が小野寺君自身の着替えシーンの部分を覆い隠すように写真を
持っていた。

承一郎「……とおおおー!!?」パシイ!!?

僕は鋭い動きで小野寺君から写真を取る。

承一郎「あ……あはは、拾ってくれてありがとね。それじゃあ!」

そして僕は職員室へ向かった。

承一郎（……危ない危ない。危うく僕が変態扱いされるところだった……）

小咲（……今の写真、千棘ちゃん?）

第38話 10年前の写真

小咲（——今の写真、…千棘ちゃん…？…どうして一条君が…もしかして…もしかして一条君は——）

キング・クリムゾン!!?

一条家——

承一郎「…ただいまー」

ヤクザ達「「おかえんなせえ坊っちゃん!!?」」

僕は家に帰り夕飯の支度をしていく。

承一郎（…結局、約束の女の子がどっちなのか分からないままだ。でもどうすればこの先それが分かるんだろう…）

僕はカレーを作りながら考える。

承一郎（あくあ、こんな風に当時の写真でも残ってれば少しはヒントになったかもしれないのに…）

一征「あ?写真?ああ確か残ってるぞ?」

父さんが驚きの事を言った。

承一郎「…ええええー！！??ちよつ…そんなものどこにあつたんだ!!??僕はこれでも何度も屋敷中探し回つた事あるんだよ…!!??」

スタンドが月まで吹つ飛ぶこの衝撃…。

一征「ああーそれじゃあ見つかんわなー。写真は倉ん中にしまつてつからよ」

一征「…例の10年前に旅行行つた時の写真だろ?確かにあの時の写真は少ねえが倉の奥にまだ一枚残つてたはずだ」

J O J O (…マジかよ。こんな身近にまだ “あの子” のヒントが残つてたなんて…でももしかしたらこれで一步真実に近づけるかも…)

一征「確かおめーにせがまれて鍵持つた女の子と撮つたんだっけ。何やらその子と大事な約束がどーとか言つてたが…」

承一郎(なつ…!!?鍵持つた女の子…!!??それに大事な約束つて…!!?)

J O J O (おおいおいなんでこつた…!!?一歩どころかももしかしたら…!!?その写真に写っている女の子がオレ^{承一郎}が約束した “あの子” なのかもしれないねえ…!!?)

承一郎(その写真さえ見つかれば…!!?)

キング・クリムゾン!!?

翌日、学校――

承一郎（うーん、一晩ずつと探したけど全然見つからないな…）

集「…おーいジョジョ〜」

承一郎「…なんだい？集」

集「よお承一郎。今日放課後ヒマ？帰りにマックで一緒にお勉強とかしたくない？」

承一郎「…なんだい急に…」

集「だつてほら〜もうすぐ期末だし？一条君は何か対策でもしてるのかな〜つて」

承一郎「何が一条君だ…。対策なんていうのは普段からしつかり準備をしてない奴がするものなんだよ。それに僕は今日大事な探し物が…」

集「小野寺も来るけど？」

キング・クリムゾン!!？

マック内——

店員「…いらつしやいませー」

…来てしまった。集の奴わざと溜めて言ったな…。

承一郎（…まあいいか、写真は逃げないし…）

承一郎（…しかしちよつと前まではこうして帰りに小野寺君とマックに寄るなんて考えられなかったのにな…）

…もうすぐ分かるかもしれないんだよね。小野寺君が約束の女の子かどうか…。
一体どつちがそうなんだ…？記憶が曖昧でどうしても思い出せない。

そもそも髪の毛の色は？黒？金？そんな特徴でさえ考え込んでいると全く違う色
だったんじゃないかとさえ思ってくる。

承一郎（ダメだ…考えた所で分かるわけないな…）

集「さてと、皆どーやって座ろうか？」

るり「…小咲は一条君の横に座つたら？前みたいに教えて貰えるし」

小咲「ええ!!？えと…」

承一郎「!!？……」

小咲「…ううん、いいよ。一条君は千棘ちゃんの隣がいいんじゃない？やっぱり恋
人だし」

承一郎（……ん？あれ…？なんか今小野寺君がいつもよりよそよそしかったような…
？気のせいかな…？）

そして、勉強会が始まった。

集「これで勉強会は2回目だね。誠士郎ちゃんって勉強出来る方？」

鶴「いや…多分人並みには…。クロード様には『どこの大学入試でも楽に入れるよう
にしておけ』と…」

集（わくお、それってとんでもないレベルなんじゃあ…）

それから勉強会は続いた。

集「あ、そうだ。テスト勉強も大事だけど今日は英語の宿題も出てたんだった。まーオレ達には桐崎さんがいるから怖くないけどね」

小咲「あ、そっか。千棘ちゃん英語しゃべれるもんね」

集「というわけで桐崎さん！ いっちよこの英文を訳してみてくれない!?？」

千棘「え？ うんいいわよ。それでは……（頼られた……）」

千棘『…ちよつとジョージ！ あの女は一体誰なの!?？』『知らないよりサリサ！ 身に覚えのない事だ！』

一同「!?？」

なんかどこかの修羅場みたいな英文に皆驚いた。

千棘『しらばつくれなくて！ ならこの髪の毛は誰の物だつて言うの!?？』『誤解だ！ 話を聞いてくれ！』

一同「!?？」

千棘『私とあの女どつちが大事だつて言うの…!?？』

あの先生は…!!？ *英語担当はキョーコ先生

承一郎（あ、小野寺君がツボってる。カワイイ…）

…小野寺君はどこことなく記憶の中の“あの子”と雰囲気似てる気がする…。小野寺君も多分僕がそうなんじゃあないかって言ってたし…。

桐崎さんは…どう考えても僕には“あの女の子”には思えないけど『ザクシャインラブ』って言葉を知ってて鍵まで持ってた…。

一旦落ち着こう。あの写真さえ見つかればハッキリするんだから。“あの子”がどつちかなんて…。

集「…で？ジョジョはどつちの方が好きなんだ？」

承一郎「ん？そりやあもちろん小野で…」

皆が硬直する。

集「…バニラシエイクとチョコシエイク、どつちが好きって聞いたんだけど？」

承一郎「お…小野寺君はどつちが好きなのかな…？」

小咲「え…?!?わ…私は…ストロベリーの方が…」

承一郎「あーそつか！僕も好きなんだよストロベリー…！」

危なかった…!!?!危うくこんな所で公開告白をする所だった…!!?!

J O J O (承一郎…お前ホント勇者だなw)

承一郎(笑わないでくれ！本当に焦ったんだからな！)

承一郎（でも…さっきの考えを整理するとやつぱり小野寺君が「あの子」なんじゃあないかと思えてくるな。だって桐崎さんじゃあイメージが違いすぎ…）

千棘『…いいえ違うわジョージ、私こそあなたの運命の人なのよ！』

承一郎「!!?!」ブウツ!!?

桐崎さんの台詞に驚き、僕はストロベリーシエイクを口から吐き出してしまった。

千棘「…?何やってんの汚いわよ」

承一郎「…別に」

JOJO（なんとまあいいタイミングで…）

キング・クリムゾン!!?

一条家、倉の中——

承一郎（あつ!あつた!あれが父さんの言つた箱だな…!!?!）

僕は父さんに10年前の写真がしまつてあるという箱を見つけた。

承一郎（…この中に10年前のあの時の写真が。それを見ればずっと探してた「あの子」の正体が——…!）

どっちなんだろう…。小野寺君と桐崎さん…一体どっちが約束の…。

承一郎（いや…そんな事はもう見てみれば分かる…!!?!）ガパツ!!?

僕は箱を開けた。

承一郎「……これ……は……」

写真はある草原だった。父さんが僕と女の子の後ろに立ち、僕は女の子の手を繋いでいた。

だがその女の子を僕は知らない。栗色のショートヘアの女の子。花の形の髪飾りをつけている女の子。

僕はこの女の子を知らない。

承一郎「……誰、なんだ……?」

J O J O (……厄介事が増えそうだな……)

第39話 相合傘

承一郎「……誰、なんだ……？これは……」

小野寺君でも……桐崎さんでもない……！全然覚えてないよこんな女の子……！
女の子の手には鍵先にハートの形があしらわれている鍵があった。

承一郎（この子が持つてるコレは……鍵……なのか……？つてことは……この子が僕の約束した女の子……？）

承一郎「……父さん!!？父さんはどこだ!!？」

僕は倉から屋敷に走っていった。

承一郎「写真見つけたよ!!？誰なんだいこの子は……!!？」

承太郎「承一郎、どうした？一征さんはさつき出かけたところだぞ」

承一郎「……くっ……」

車内——

一征「ん？そーいやあイチの言つてた写真に写つてる女の子つつたら……あいつのこ
とじゃあねえか……」

翌日、学校——

くそっ……ようやく正体が掴めそうと思ったのにますます謎が深まってしまった。

JOJO（それに『矢』の件もある……。まだまだやるべきことが山積みだな……）

……二人ならあの女の子の事何か覚えてるのだろうか……。

……聞いてみようかな？でも二人はまだ僕達が昔会った事あるつてのも知らない。話した方がいいんだろうけど……。

集「……よおジョジョ！お前どんな写真撮ったの？」

承一郎「ん？ああ……。あっ」

教室の窓からは雨が降っていた。

承一郎「……雨、か……」

学校、玄関先——

千棘「……あ……ちや……」

承一郎「……やあ、傘ないのかい？」

千棘「ん？……まあね。あくあ、帰って観たいテレビあったのに……」

承一郎「……入るかい？近場だし送るよ」

千棘「はあ？冗談！あんたの傘に入るくらいなら濡れて帰った方がマシよ！」

承一郎「……あーそうかい」

千棘「じゃーね！」

承一郎「ああ」

桐崎さんが歩いていく。だが僕は傘を差して桐崎さんの顔の前に出す。

承一郎「……風邪引くだろう」

承一郎「…雨、強くなったね。千棘さん濡れてないかい？」

承一郎と千棘は同じ傘の下で歩いていく。

千棘「……うん……」

男子「お!? あいつら相合傘じゃん。ヒューヒュー!」

承一郎「うるさいな! ほつといてくれ!」

千棘「!」

千棘は承一郎の肩が濡れているのに気付いた。千棘の方には余裕を持たせているのだ。

千棘は承一郎にいきなりタツクルをかました。

承一郎「痛っ……!? ……何するんだい君は……」

千棘「別に」

千棘はしやがんでうづくまつていた。

公園、屋根の中——

承一郎達は公園の屋根の下で雨宿りをしていた。千棘が雷にビビリ、縮こまつてしまつたからだ。

承一郎「……まさか雷にも弱いとは。……君色々弱点あるよね」

千棘「うっさい！人に言つたら許さないわよ！」

承一郎「言わないよ。……しかしこれじゃあしばらく雨宿りするしかないな」

千棘「えー！なんでよ！それじゃあ結局テレビ見られないじゃあ……」

そこにピカッ!!?と閃光が走る。

千棘「キヤ」

そしてゴロゴロと雷鳴が聞こえる。

承一郎「……分かつたかい？さくて、どうやってヒマをつぶすか……」

千棘「……あんた何か話題ふつてよ。黙つてたら怖いじゃあない！」

承一郎「……君かなり無茶言うね。……じゃあ今日貰つた林間学校の写真でも見るかい？」

千棘「お！見せっこしちゃう!!?言つとくけど私の手札は強力よ!!?」

承一郎「つていうか多っ!!? 一体何十枚買ったんだい!!?」

千棘「え? えーと…80枚くらい」

つまり合計8000円分買ったということだ。人の話をすっかり聞いてほしいと思う承一郎であった。

千棘「で、あんたの方は?」

承一郎「僕?」

承一郎は写真を千棘に渡した。ちなみに承一郎は小咲が写っている写真を全て選り分けていた。

千棘「へーなかなかいいじゃあない。あれ? この写真…」

千棘が手にしていたのは、承一郎には身に覚えがない千棘が寝ているところを激写した写真だった。

承一郎（んなっ!!??なんだその写真…!!? 知らないぞそんなの!!?）

そして承一郎は下手人が誰なのか結論に至る。

承一郎（集くくく!!? あいつか!!? あの時に…!!?）

千棘が承一郎を睨む。

承一郎「違う違う違う!!? 話せば分かる!!? これは集の奴がイタズラで…」

千棘はため息をついて、言った。

千棘「ま、分かつてるけどね。どうせあんたにはこんな写真持ち歩く度胸もないだろうし」

承一郎（あれ…？）

千棘「それより見てよコレ！皆で一緒に写ってるのいい感じでしょ？？」

承一郎（なんか…変な感じだ——…）

承一郎「…しかしこないだまで友達ノートなんて作ってた奴がすっかり馴染めたみたいだね」

千棘「フフンでしょ？どうよこの成長ぶり！まあこつちに来て色々あったからね」

承一郎「…そうだね。君が来て以来次から次へと…」

いきなりギヤングの娘と恋人になれとかヒットマンと決闘をしたりとか、本当に災難続きだ。と承一郎は思った。

千棘「ただ惜しむらくはその青春の日々を私はあんたの恋人として過ごさなきゃならなかった事だけ…」

承一郎「んなつ？？そりゃコツチのセリフ…」

千棘「…まあでも最近はこのニセモノの恋人つてのも案外悪くないかもつて気もしてるけど」

承一郎（えっ…君っ…それって…どういう…）

承一郎「……いやそりやあ…僕だつて最近は少しは…」

千棘「なーーんてね」

承一郎は固まつてしまった。

千棘「ブプ…!!?何その顔、もしかして本気にしたの?私がそんな事言うわけない
じやあないバツカみたい!」

承一郎「……!!?君ねえ…!!?人をからかうのも程々に…」

千棘「あはは!バーカ…」

カツ!!?ガラガラガラガラという音と共に雷が鳴つた。

千棘「キャ!!?」

雷にビビつた千棘は承一郎に抱きついてしまった。

千棘「え」

承一郎「あ」

一征「おやおやお二人さん。白昼堂々おアツイね〜」

車の車窓から承一郎の義父、一条一征が現れた。

承一郎「どわあ!!??父さん!!??」

一征「恋人のフリしてくれたあ頼んだがまさか本物になつちまったのかい?」

承一郎・千棘「誰がこんな奴と!!?」

一征「ハツハツハツ、まあいいや。ちようどおめーに話があつて探してたとこだ」

承一郎「あつ！ そうだ父さん！ 僕も父さんに聞きたい事が」

一征「おつと待て待て。こつちは急用でな、こつちが先だ。いやゝ二人にやせつかく仲良くなつて貰つた所で悪いが、ちと問題が出てきちまつてな…」

承一郎「問題？」

一征「実は明日急遽あいつがおめーに会いに来ることになつてよ」

承一郎「……あいつ？ 誰だいいいつつて…」

一征「ん？ あーほれあいつだよあいつ…おめーの許嫁？」

一瞬、承一郎の思考は停止した。

承一郎「……今なんて？」

一征「だから許嫁」

承一郎「誰の？」

一征「おめーの」

J O J O (…やれやれ、今年のジョジョは厄年か？)

第40話 許嫁が来る

一条家——

承一郎「僕に許嫁つて…どういふ事だい父さん…!!?」

承一郎と千棘は一条家で一征と話していた。

一征「いやそれがな…オレもずっと忘れてたんだが…。昔古い仲間と飲んだ時にうっかりそういう約束しちまってよ」

一征「向こうがその約束を未だに覚えてやがって、向こうの嬢ちゃんも小せえ頃から許嫁がいると聞かされてきたらしーんだわ。そんで結婚出来る歳になったからこつちに来るつて聞かぬーのよ」

この父は次から次へと面倒くさい問題を持って来るな…と承一郎は少し血管が浮き出ながら思った。

一征「明日来るらしいから適当に相手してやってくんねーか？」

承一郎「んなつ…!!?ちよちよ…ちよつと待つてよ!!?だつたらちゃんと話して解決すればいいじゃあないか!!?父さんの不始末だろう!!?」

一征「それがそう簡単な話じゃあなくてな。あいつを怒らすと後々面倒な事に…」

千棘「古い仲間って…。もしかしてまた私達みたいなギャングとか…?」

一征「いやゝある意味ギャングよりゆっつかいというか…」

承一郎「急急?!?」

こつちは危うく死ぬ所だったのにそれより厄介とは一体…と承一郎の顔に冷や汗が流れる。

一征「まっ! わりーけどよろしく頼むわ!」

キング・クリムゾン!!?

学校——

承一郎「…頼むって言われてもなあ…。…どうしろって言うんだよ。僕達は恋人のフリだつてしなきゃあならないのに…」

千棘「…変な事になんなきゃいいけど」

承一郎「いきなり今日会えとか…授業なんて手がつかないぞ…。それに父さんのあの言葉…」

承一郎『まったくなんで僕がそんな見えず知らずの女の子と…』

一征『いや? 面識ならあるぜ?』

承一郎『え?』

一征『ほれ、こないだおめーが探してた写真。あれに写ってんのがその許嫁よ』
承一郎『!?? なっ…!!??』

承一郎(…父さんの言う事が本当ならもしかしたらその子が僕の本当の…)

承一郎(どういう子なんだろう…。もしその子が…あの約束の事を覚えていたら…)
キョーコ「は〜い全員注目〜!!?今日は突然だけど転入生を紹介するぞ〜!」
とキョーコ先生がクラスの皆に言った。

千棘「え?また転入生?」

承一郎「…らしいね。転入生多いなこのクラス」

転入生が来る度に平穏な日々が時が止まるようなスピードで壊れているのであまりいい記憶がない承一郎だった。

キョーコ「それじゃ入って橘さん」

?「はい」

転入生が教室に入った瞬間、野郎どもからおおお…という声が聞こえる。

万里花「…皆さん初めまして。橘^{たちばな}万里花^{まりか}と申します。何卒よろしくお願いします」

新しい転入生、橘さんの自己紹介を終えた後、教室中が騒がしくなる。

男子達「うおおおー!!?! 果たしても美人…!!?」「どーなってんだこのクラスは!!?」

女子「モデル?!? モデルなの?!?」

男子「オレこのクラスでほんつと良かった〜!!?」

承一郎（…へ〜確かに美人…。ん? でもこの顔どこかで見たような…）

栗色のロングヘアに花―おそらくマリーゴールド―の髪飾り。それが承一郎にはどこかで見たような感じがした。

承一郎（あ、目が合っ…）

転入生は承一郎と目が合うと

万里花「承一郎様〜!!? ずっとお会いしたかったですわ〜!!?」

と承一郎に抱きついてきた。

承一郎「えっ…!!?!」

男子「うおおおお、なんだああ!!?!」「転校生が一条に抱きついた〜!!?」

承一郎「うおおおちよちよ…ちよ…! ちよつと待って!!? なっ…何するのいきなり…!」

万里花「ああ…! 申し訳ありません承一郎様! 私ずっとこの瞬間を夢見て来たものですから…!」

集「あ！あの〜！橘さんって…もしかしてジヨジヨのお知り合い？」

万里花「あ、はい。私は承一郎様の許嫁でございます」

全員「「いつ…許嫁〜〜！！？」」

クラスの全員（キョーコ先生を除く）が驚きの声を上げる。

承一郎（い…許嫁って…この子が…！！？今日来るって転校してくる事〜！！？）

J O J O（い…言われてみれば確かに…写真の面影が…！！？）

男子達「どお〜いう事だ一条〜！！？」「許嫁とは真なのか〜！！？」「なんでいつもお前ばっかり…！！？」

野郎どもが血涙を流して承一郎に抗議する。

承一郎「うわっ、知らないよ！！？」

女子達「何何これどういう展開！！？」「これって桐崎さんにライバル登場って事…！！」

？「修羅場！！？修羅場なの！！？」

女子達はこの修羅場を何気に楽しんでる。小咲はるりが顔の前で手を振っても返事がない。ただの屍のようだ。

鶴「ええい貴様一条承一郎から離れる！！？その男はお嬢のこっ…こ…こ…こ…恋人なんだぞ！！？」

万里花「！恋人…？」

鶴「ね!??ですよねお嬢…!??ついでのこの浮気男にもビシツと言つてやつて下さい!!?」

千棘「えっ…!あっ…そうね…」

承一郎（え！僕が悪いの…!??）

THE☆理不尽な目に遭う承一郎はもはや日常茶飯事である。

千棘「そ…そういうわけで、実は彼は今私のダーリンなのよね…!」

承一郎「あ…あはは、実はそうなんだよ。だから悪いんだけど君とは…」

万里花「……!ダーリン……!」

生徒達（おお…!桐崎さんから仕掛けた!!?どうする許嫁…!!?）

クラスの皆様は後修羅場を楽しんでいる。許嫁がどうするか待っている。

だが万里花は

万里花「…こんなゴリラみたいな女の子より私の方が承一郎様を幸せに出来ますわ!!」

?

という暴言を吐き、場が凍った。というか、何故ゴリラだと知っていたのだろうか?

千棘「…よく聞こえなかったな〜」バキバキ

千棘は指を鳴らし顔に血管が浮き出ている。かなり怒っているのだろう。

承一郎「うおおお堪えてくれ千棘さん〜!!?」

それを承一郎が必死に食い止める。

鶴「貴様…!!??お嬢になんて無礼な事を…!!??」ジャキン!!??

鶴が万里花に銃を構える。

万里花「あら…いけませんわ。そんな物騒な物を私に向けては…」

警官「突入…!!??」

バアン!!??という音と共に警官隊が教室に入つて来た。

男子「うおおなんだ!!??警官隊!!??」

女子「キヤ…!!??何何何何…!!??」

警官隊は万里花と承一郎を囲むように並んだ。

万里花「…お騒がせしてすみません。実は私の父が警視總監を務めておりましてその上とても過保護なものですから…」

承一郎（警視總監…!!??そうか…だから父さんは…）

承一郎は驚いていたが、JOJOは境地に達していた。

JOJO（また戦争ソレかよ…。親父あの人何がやりたいんだよ！どんだけ自分から戦争の危機を持ち込んでおいて息子におつ被せるんだよッ！）

承一郎（どうしよう…想像以上にやつかしい相手だぞこの子…!!??これが僕の許嫁で

…約束の女の子…)

承一郎が考えていると、

万里花「ああ……！」

承一郎「?!？」

警官隊を下がらせた万里花は地面にへたり込んでしまった。

万里花「……どうしましょう興奮してしまつたせいが目まいが……。私とつても体が弱いのです……。承一郎様どうか私を保健室まで連れて行って下さいませんか?ぜひ二人きりで」

承一郎(う……うそくさい……!!?!)

万里花「さあ!お早く承一郎様!」

万里花は承一郎の手を取って保健室へ向かう。

承一郎「わ……分かつたて……というか元氣じゃあないか……!!?」

鶴「……くつ……!なんなのだあの女は……!!?」

保健室——

万里花「……ありがとうございます承一郎様。おかげで気分も良くなりました」

承一郎「そりゃあどーも」

承一郎が万里花についていったのは手を引っ張られたからではなかった。

承一郎は波紋を使って万里花の体調を調べていた。

承一郎（橘さんは無理をしている…。気丈に振る舞っているが本当に体が弱いんだろ
う…）

万里花「さあ承一郎様やつと二人きりになれましたね。式の日取りなどいかがいたしまし
ましょう♡」

承一郎「式?!? いやいやちよつとタンマタンマ!!?」

そんな事を考えている承一郎をお構いなしに万里花は詰め寄ってくる。

承一郎「…悪い!!? 正直に全部話す…!!? 実は僕昨日まで自分に許嫁がいたなんて知
らなかつたんだ…!!?」

万里花「!」

承一郎「ゴメン…なんて言っていないか…。それに僕はあなたの事も全然覚えてないし
…。今でも昔会った事があるなんて信じられないくらいだ…」

承一郎「…あなたはそうじゃあないのかい? 10年も前に会ったつきりの相手なんて
見ず知らずも同然だ。普通そうだろう?」

承一郎「ましてや親に勝手に決められた相手と結婚なんて嫌じゃあないのかい…? な
のに…どうして…」

万里花「…いいえ…私は承一郎様が好きなんです」

そう言い、万里花は承一郎に近づく。

万里花「親に決められたからではありません。私は10年間：あなたの事だけを想つて参りました」

承一郎「……覚えていいのかい？10年前の……」

万里花「はい、克明に」

承一郎「……じゃあ、あの約束の事も……？」

万里花「……約束……。……はい、もちろん。覚えていますよ承一郎様」

承一郎（!!?……やっぱり……この子が——…!?!?）

万里花「ですから承一郎様!!?私と結婚して下さい!!?」がぼつ!!?

そしてまた万里花は承一郎に抱きついてくる。

承一郎「わ————!!?!?」

保健室の外——

千棘（……うくん、あんまり聞こえないわね……）

千棘は保健室の壁に耳を傾けている。二人の会話を聞きたいのだが、あまり聞こえないらしい。

鶯「あれ？お嬢？」

鶯が廊下からやって来た。

千棘「…つぐみ、あんたなんでここに…」

鶯「わつ…私はお嬢を追って来ただけで…」

千棘「今『あれ?』って言ったじゃあない」

小咲「あれ?千棘ちゃんにつぐみちゃん」

小咲とるりもやって来た。

千棘「小咲ちゃんるりちゃん。どうしてここに…?」

小咲「え…いや具合が悪くて?あはは…」

承一郎「わー!!?だからちよつと待ッ…!!?」

承一郎の叫び声が聞こえた。

万里花「さあ承一郎様!早く衣服をお脱ぎになつて…」

承一郎「やめろつて…!わつ…!そこは…!」

万里花「うふふ…ここが宜しいのでしようですか…?」

千棘「こらー!!?何やってんのよあんた達…」バン!!?

千棘が我慢出来ずに保健室の扉を開けると

承一郎「あ…」

そこにいたのは、仰向けになつた万里花と、万里花を襲うような格好の承一郎だった。

本田「…どうでしたか？ 一条家のお坊っちゃんは」

水道で顔を洗っていた万里花にお付きの人である本田が話しかける。

万里花「…素敵な方に育ってらしたわ。私の予想通り…」

万里花は本田に差し出されたタオルで顔を拭きながら答えた。

本田「…ですが、やはりお嬢様の事は覚えていらつしやいませんでしたね。あの『約束』の事も…」

本田「…その上現在交際の中の女生徒までいらつしやるようですが？」

万里花「…どちらも問題ないわ。承一郎様が自分にふさわしい女性とはどういう方なのか分かって下されば必ずや私を選んで下さるハズ」

万里花があるものを取り出す。

万里花「思い出を忘れてしまわれたとおっしゃるのなら…思い出されてあげましょう」

鍵先にハートの形があしらわれた鍵を手にして、万里花が言う。

万里花「承一郎様と結ばれるのは私です」

第41話 許嫁とのデート

波乱の許嫁が登場した翌日、学校——

千棘（…つたくあのアホもやし、許嫁だからなんだか知らないけどデレデレしちゃうて…。…でも考えてみたらあのバカがあんな事する度胸なんてないってすぐ分かるハズなのに。…なんで私あんなにイライラしたんだろ）

千棘（あの写真の時はすぐ分かってやれたのに——）

千棘（…さすがに殴ったのはやり過ぎたかな。なんかこのままなのも気分悪いし一言くらい謝ってやっても——）

千棘「おはよ〜」ガラッ

千棘が教室に入ろうとすると、

万理花「承一郎様〜!!?おはようございます〜!!?」だきつ!!?」

承一郎「わーーーーー!!?だから人前でくつつくなつて…!!?」

千棘「!!?」サッ

千棘はとつさにドアに隠れた。

千棘（…あれ?なんで隠れたんだろ私…）

承一郎「…あのねえ、こっちは君のその態度のせいで散々なんだよ。女の子には遠まきにヒソヒソされるし、男子共には体育のドッジボールで集中砲火されるし…」↑波紋で全てを避け切った男

万里花「まあ、承一郎様はやっぱり人気者なのですわね」

承一郎「…えーと、話聞いてた？」

万里花「だって私もつと承一郎様とお話がしたいのです。昨日は色々邪魔も入りましたし。なので明日デートに行きませんか？」

承一郎「な…デート!!??」

千棘「……」

承一郎「ムリムリムリムリ!!?だから…言っただろう?僕にはその…恋人が…ね?」

万里花「ああ…やはりダメなのですわね…。私はずつと承一郎様を想ってきたと言うのに…。恋人がいるんじゃないやあ仕方ありませんよね…。ああ、この事をお父様が知ったらどんなにお嘆きになるか…」

万里花はすぐくわざとらしい演技をする。

承一郎「!!?」

JOJO（…もしそれでウチがガサ入れにでもあつたら…）

拒否権はない。基本的に一条承一郎は不幸なのだった。

承一郎「…やれやれ、分かったよ。僕も君と少し話をしたいと思ってたんだ」
万里花「まあ本当ですか!!? 私嬉しいです…!!?」

そしてその言葉に反応する者達が千棘の他に三人…。

千棘・小咲・るり・鶴（デート…!!??）

キング・クリムゾン!!?

翌日、街の中——

承一郎（やれやれ、どうしてこんな事に…）

JOJO（でも考えようによっちゃコレって10年前の事を聞くチャンスかもな…。

結局桐崎には言わずに来ちまったけど…。別に大丈夫…だよな…?）

承一郎（…それにしても待ち合わせ場所アバウトだな。すぐ見つかるって言ってたけど…）

そう考えながら歩く承一郎の前に、大量の警察官とパトカーが並んでいる。

万里花「あ！承一郎！おはようございます！お待ちしておりましたわ」

承一郎「…ねえ、コレってまさか…」

万里花「はい、私のお付き方々です。あ、皆さんもう構いませんよ」

警察官「良い休日を」

承一郎（…どうしよう、僕やつぱりとんでもない子に目をつけられているんじゃないから…）
JOJO（諦めろ、もう普通の生活なんてヤクザの息子である時点で出来ないからな…）

万里花「…あの、何か思い出しました？」

承一郎「え？いや、悪い…、正直今のところは…全然…。…ゴメン」

万里花「いえ、いいんですいいんですゆっくりで！さあ参りましょう」

その二人の後をつけている者達がいた。

るり「…目標の動きはどう？小咲」

シャーロック・ホームズのような格好で話す二人組。るりと小咲だ。

小咲「えっ…目標…？えーと…今待ち合わせで合流したみたい…。…ホントに尾行なんてするの〜？」

るり「当たり前でしょ。あなたには危機感が足りない。だって許嫁だよ許嫁！あの二人を放つといたらどうなるか分かんないでしょ？せっかく変装もしたんだし…」

小咲「かえって目立ってるよるりちゃん!!？」

そんな二人とは別に、承一郎と万里花を尾行する者が一人。

鵜（…一条承一郎め、許嫁とデートだと…？お嬢という人がいながらふざけた真似を…断じて許しておけん…!!？変装や尾行なら私の専売特許だ…!!？変装のコツの一つ

は普段の自分からどれだけ離れられるか：任務の場所に溶け込めるか……。私の場合……
鵜の格好はいつもの男装からかけ離れた、モデルのような姿だった。

鵜（どうだ!!？ 奴もまさか私がこんな格好をするとは夢にも思うまい……!!？ 昨日コンビニで買った雑誌を研究したかいがあつた。これならよほど接近されない限りバレる事はないだろう……）

鵜は変装の意味を理解していないんじゃないのか？ というような格好だ。どれだけ変装しても、目立っては意味がないということに気付いてないようだ。

鵜（奴の動向を監視してお嬢に報告せねば……！ そう！ これは私が気になるからではなくお嬢のため……！ む？ しまった……：奴はどこへ……）

鵜が二人を見失っていると、

承一郎「あのー、すみません。ちよつと道を聞きたいんですが……」

承一郎が鵜に近づいていた。

鵜（ブウ!!?? うおおお一条承一郎……!!? しまった……！ この距離で注視されてはさすがにバレ……!!?）

承一郎「……この地図にある店を探してゐるんですが分かりますか？」

鵜「……ああコレなら向こうのビルで看板を見ましたよ」

承一郎「そうですか、ありがとうございます」

そう言い、承一郎と万里花は鶯に気付いた様子はなく通って行った。

鶯（…気づかれなかった。なんだなんだ!!? 少しは気付いたらどうなんだこの鈍感め…!!?）ダンダン

鶯は気づかれなかったことに地団駄を踏んだ。

J O J O（…ププ…：ww）↑気付いてる

そしてさらにもう一人、二人を尾行している者がいた。

千棘（…つたくあのアホもやし。何よデートだからってデレデレしちゃって…。私達が恋人のフリしてるんだしあいつがハマしないように見張つとかないと…。大丈夫、変装は完璧！これなら誰も私だと気付かないはず…）

千棘の格好は上下黒のフード付きジャージにサングラスとマスク、完全に不審者と化している。

千棘（フッフ…完璧な変装）

警官「あーその君、ちよつとこつちで話聞かせて貰えるかな」

無論怪しまれる事は必然である。

そして千棘は逃げる。

警官「あ！こら待ちなさい!!?」

千棘（ハア…ハア…危なかった…。ちよつと変装ハリきり過ぎたかしら…）

そんな千棘に万里花はクスリと笑い、

万里花「ねえ承一郎様！私お腹が空いてしまいましたのでお食事にしませんか!!?」
ガシツと承一郎の腕に抱きついた。

千棘・小咲・るり・鶴「!!?!」

承一郎「ちよっ…だからくつつくなって…!」

万里花「良いではありませんか、せっかくのデートなんですし…」

承一郎「いや、まあそうなんだけど…」

千棘・るり・鶴（あのもやし…!!?!）ゴゴゴゴゴ

承一郎（どこからとかなく殺気…!!??）

JOJO（…）ピシツ↑敬礼のポーズ

キング・クリムゾン!!?

レストラン——

承一郎と万里花はすごい高そうなレストランで食事をしていた。

万里花「ここは父がこつちに來たら是非にと勧めた店なんです。お口を合えば良いのですが…」

承一郎「いや、とても美味しいよ。最近はこのな所に行く機会があまりなかったからね」

万里花「…私がお支払いしますか？」

承一郎「いや、僕が払おう。女の子に払われたら男が廃るというものだよ」
そんな事を話しながら二人は食事を続けた。

万里花「それにしてもテーブルマナーがお上手ですわね」

承一郎「一応、父が英国貴族だからね。これくらい出来ない」と

そう言いながら、父の事を考える承一郎。

承一郎（…父ってどんな人だったんだろう…。記憶を見たのは死ぬ間際のところだったからな…）

万里花「…恋人の事でも考えていたのですか？」

承一郎「ん？まあそんなところかな」

万里花「私にはなぜ承一郎様があのような野蠻そうな方を選んだのかが分かりません。絶対私の方が承一郎様にふさわしいと思いますのに…」

承一郎「まあそう言っちゃダメだよ。あれでも良い所とか多少…少し…微量には含まれてるんだから。僕は多分君と彼女は仲良くなれると思うよ？話してみれば意外と…」

万里花「…いえ…残念ですが私、髪の毛の長い女性が嫌いなので」

JOJO（自分だって髪長いじゃん…）

万里花「…さて、承一郎様。私そろそろ二人きりでお話がしたくなつて参りました」

承一郎「君もか。僕もだよ」

承一郎は尾行に気付いていた。

るり「ん、小咲。いつの間にかあの二人がいない……！」

小咲「え!!? あ……!!?」

るりと小咲はアイスを食べている間に尾行失敗（主にるりが）。

鵜（くっ……！私とした事が見失ってしまふとは……！）

鵜は街中で（ry

公園——

承一郎と万里花は公園のベンチに座っていた。

承一郎「さて、これくらい走れば問題ないかな」

万里花「さあ！何をお話ししましょうか。何か聞きたい事があるのでしょう?」

承一郎「ああ、そうだね」

千棘（……つたく、危うく見失うところだった。いきなり走り出したりして怪しいわね。

何話してるんだろう……）

承一郎「僕が聞きたいのはコレの事なんだけど」

そう言い、承一郎は倉にあった写真を見せた。

万里花「！まあ懐かしい!!?こんな写真をまだ持っていて下さったんですか!!?」

承一郎「…やっぱりこの写ってるのは君なのかい?」

万里花「はい！なんだ！やっぱり私の事覚えていて下さったのですね！私感激です！」

承一郎「わー!!?違う違う!!?」

千棘（…!!?何よ、ずいぶん盛り上がってるじゃあない。…もう少し近くに…）

千棘はゆつくりとベンチの近くの草むらに移動する。

承一郎「…悪いけど、僕が覚えてるのは10年前にある女の子と約束したってだけなんだよ。それが誰なのかずつと気になってたんだけど…」

承一郎「僕が約束したのは君なのかい…?それとも…」

万里花「…確かに私は承一郎の求める答えを全て知っています。10年前のあの約束の真相を」

千棘（え…?今なんて…?なんでこの子が…10年前の約束の事なんか…）

万里花「…教えて差し上げても構いませんが、そのかわり…」

承一郎「!!?」

万里花が自分の鍵を取り出して承一郎に見せる。

万里花「あの恋人と別れて貰ってもよろしいですか？」

承一郎「……え？」

第4 2話 バクハツ

万里花「あの恋人と別れて貰つてもよろしいですか？」

万里花の言葉に千棘は驚いていた。

千棘（な…何よその条件…！それに…なんでこの子が10年前の約束の事なんか…！！
？それに…あれつて鍵…！！？…一体何が起こつてんの…！！？承一郎あいつはどうするつもり—
—！！）

承一郎「…そいつは無理だね。…僕の勝手な都合で彼女を捨てるなんて出来るわけないだろう。残念だけど、そういう条件なら願ひ下げだ」

だが、承一郎は断つた。

承一郎（…くっくそ、本当はすごく知りたい…！！？だがしかし…、うくん何か手がかりくらい教えてくれないかな）

万里花「…そうですね、素敵なお答えです。ますます好きになつてしまいそうですわ。

…でも、なおの事承一郎様を他の方の物にしておきたくありませんね。ましてや…」

万里花「盗み聞きなんて趣味の悪い事をなさる方の物には」

承一郎「やれやれ、波紋でバレバレだよ」

承一郎と万里花はベンチの後ろにいる千棘にそう言う。

千棘（バレてた…）

千棘「フ…フン！あ…あんたが勝手な事してるからでしょ！！？これはその…浮気調査よ浮気調査…！」

承一郎「…それって本人が直々にする事かい？」

千棘「…それよりどういう事なの？10年前の…約束の真相って…」

万里花「…ああ、その事ですか。それは…実は私達…！！？10年前に出会って約束を交わした仲なんです！！？」

そう言いながら、承一郎の腕にくっつく万里花。

承一郎「！！?! なっ…！！？ちよ…！！?!？」

千棘「！！?!？」

承一郎「きみっ…何言って…」

万里花「…ですからあなたには悪いのですが、私達は子供の頃からの固く固く絆で結ばれておりますの。ハッキリ言って私達の間に入る余地などございません」

千棘「なっ…な…」

万里花「出来るなら早々に私の許嫁と別れて貰いたいのですが…」

千棘「私の…！！？」

承一郎「許嫁……」

千棘「そ……そうはいかないわよ。なんたつて私はそのダーリンの恋・人・なんですから……!!?」

万里花「あら……たとえ恋人だろうとこのデートは承一郎様が喜んで受けて下さったんです。邪魔立てされる理由は無いかと存じますが……」

千棘「ぐっ……!!?」

ぶつちやげ脅迫まがいの物だったが言えず、承一郎は不幸であった。

万里花「それにハッキリ申し上げると私はあなたが承一郎様にふさわしい女性だとは思えません」

千棘「ぬなっ!!?」

万里花「これ以上私達のラブラブデートを邪魔しないで頂ける……?さあ承一郎様!!?デートの続きと参りましょう!!?それとも先程しそびれたキスの続きを今ここで……」

承一郎「んなっ……!!?してないよ……!!?」

千棘「……あくそう、良かったわねえダーリン。探し求めてた約束の女の子が見つかった……」

承一郎「えっ、あ、いや……、その……」

千棘は黒い笑みを浮かべていた。

千棘「…勝手にすればいいじゃあない!!?別に私関係ないし!!?好きにすればいいでしょ!!?」

千棘が立ち去る後には、ボコボコに殴られて倒れている承一郎の姿が。やはり承一郎は不幸なのであった。

千棘（何よあのバカ!!?楽しそうにヘラヘラしちゃってバツカみたい…!!?…結局、あいつの約束の相手は私じゃあなかったんじゃあない。あースッキリしたせいせいするわ）

去りながら承一郎をデイスリまくる千棘。

千棘（まあ元々あんな奴が私の初コイなわけ無いけど。これでようやく悩みも解決、わーい最高バンザイバンザイ…!!?）

千棘（…あーもうなの…、なんでこんなにイライラすんの…）

承一郎（…何怒ってるんだ彼女）

万里花「さあ承一郎様、邪魔者もいなくなつたところで次はどちらへ…」
一瞬、万里花の言葉が止まる。

万里花「…ああ申し訳ございません承一郎様。非常に残念なのですが…私急用を思い出してしまいました」

承一郎「…え？」

万里花「今日はお付き合い下さって本当にありがとうございます。とっても楽しかったです。是非またこのような機会に」

承一郎「え？ いや…ちよつと…？」

万里花「また学校でお会いしましょう」

承一郎「…おーい？」

そんな承一郎を無視して万里花は行ってしまった。

承一郎「…なんだコレ、なんで僕急に一人ぼっち…？ わけがわからないんだけど…。
…ん？」

承一郎は万里花が忘れてしまったバッグを見つけた。

承一郎は波紋で万里花を探していた。

承一郎（この辺のはずなんだけどな…あ、いた）

承一郎は万里花ともう一人を見つけた。

承一郎（…ん？ あれは確か昨日教室に来てた）

本田「…大丈夫ですかお嬢様、気分は…」

万里花のお付きの人である本田が言う。

万里花「…大丈夫、少しふらつくだけ」

本田「…お体が弱いのに無理をし過ぎです。医者にもあまり無理をなさらぬようにと…」

万里花「…このくらい平気よ」

咳をしながら万里花はそう答える。

承一郎（…やはり、昨日のアレは冗談じゃあなかつたようだね…）

本田「…長く日に当たり過ぎたのでしょうか。なぜお帽子をかぶって行かれなかつたのです」

万里花「…そんなの、決まってるじゃあない。それじゃあ顔がよく見えないでしょ。

私…承一郎様にもっと見て貰いたいもの…」

本田「…薬を取ってきます。しばらくそこで休んでいて下さい」

そう言い、本田は離れた。

承一郎「…大丈夫かい？」

万里花「あら承一郎様、どうされたのですか？お帰りになるには方向が逆では…」

承一郎「…忘れ物、追いつけて良かったよ」

万里花「まあ！これはご親切に！」

承一郎「…平気なのかい？」

万里花「…？あら嫌ですわ、ご覧になっていたのですね。私なら大丈夫です、少し立

「ちくらみがしたただけですから」

承一郎「…薬っていうのは？」

万里花「ただの貧血のお薬ですよ。ご心配には及びません」

承一郎「（…なぜ隠す？）…まあ、言いたくないのならいいんだけど」

万里花「…私の事を心配して下さるのですね。嬉しいです。やっぱり承一郎様は昔と変わらずお優しいままなのです…！」

万里花が尋ねてきた。

万里花「あの…一つお聞きしても…？」

承一郎「なんだい？」

万里花「承一郎様はあの恋人のどこが好きなのですか？」

承一郎はブツと吹き出してしまふ。

承一郎「…またこの手の質問か…」

万里花「私にはどうしても分からないのです。あの方は口も悪くて短気で暴力的でおよそ女性らしい魅力を備えておられません。一体どこを承一郎様は気に入っておられるのか…」

承一郎「…まあ確かに、彼女は口は悪いし手は早い、パワーは人間やめてるし、いつも分からない理由でキレルからね」

万里花「……でしたら……」

承一郎「……それでも、たまには良い所もあるんだよ。表現方法は下手だし結局何を考えているのか分からない事も多いけど、根は信じていい子だと思うんだ」

承一郎（ん……？あれ……？僕……彼女の事そんな風に思ってたんだっけ……？）

万里花「……ふーん、そうなのですか。でも！承一郎様も私の事を思い出して下さればきつと……！」

承一郎「……あゝ……それなんだけど……やっぱりどくしてもサツパリ思い出せないんだよね……」

ピク……と万里花が反応する。そんな事を気付かずに承一郎は話を続ける。

承一郎「だってそんな喋り方する子今まで会った気がまるでしないし……」

またもやピク……と万里花が反応する。

承一郎「そもそも、どうしてそんなに僕の事好きなんだい？」

ピシッと何かに亀裂が走ったような音がした。

承一郎「……僕の事が好きだったのは嬉しいけど、そこまで好かれるような事があつたのか覚えてないし……。僕にはそこがよく分からないというか……」

J O J O（お、おい。そんな事を言う奴がいるかよ……）

万里花「……そげん事まで忘れとつとか……？」

承一郎「…ん？なんだ今の声…どこから…」
聞き慣れない方言。おそらく九州弁だろう。

見るととてつもないオーラをまとった万里花。これには承一郎はマジで驚く。

万里花「…そげん事まで忘れとつとかー！ー！！？」

その迫力にビリビリと体が震える。

万里花「なんでそげん事まで忘れよるとか！！？こつちは10年も想い続けてなんちゃかんちゃ一つも残らんごと覚えとるんに…！！？」

万里花「いっくんが…！髪ば長い女の子らしか子が好き言いよるけん…髪ば伸ばして…言葉遣いも直して…頑張つて変わりよつたばい…！！？やとに…！！？」

万里花「いっくんは…！！？全部忘れたつて済ませよる気かー！！？」

あまりの迫力で嘔然とする承一郎。ハツとなりやつてしまったと口を手で押さえる万里花。

万里花「……………」

承一郎「き…き…き…今の…しゃべり方…☒」

万里花『…ねえいっくん…いっくんはどがん女の子が…』

承一郎「……!!? 君……まさか……!!?」

承一郎は思い出した。特徴的な方言をしやべる女の子の声を。

承一郎「……マリー……?」

第43話 マリー

承一郎「君…マリーかい…？」

万里花「…承一郎様の前では絶対にこの喋り方はしないつもりでおりましたのに…でもそのおかげで承一郎様に思い出して頂けるなんてなんだか皮肉ですわね」

承一郎「…思い出してきた。確かに昔そんな喋り方の女の子と仲良くなつた事があ
る。確かその子も体が弱くて…」

万里花「はい。…私が承一郎様と初めてお会いしたのは10年前の夏の事です。小さい頃の私は体が弱くて、父に連れられ空気のキレイな山の療養所に来ていたんです」

万里花「私はいつものように一人病室で退屈にしておりました。そうしたら…療養所の隣にあつた木に登つていた承一郎様に出会つたのです」

昔の事を話す万里花の目は輝いていた。

万里花「…ずっと体の弱かつた私は昔から他の子達と外で遊ぶ事もなかなか出来なくて、それを知つた承一郎様はそれから毎日のように私の病室に足を運び、山で見つけた物等をおみやげにして私を楽しませてくれたのです」

承一郎（…そうだ、確かに昔そんな事が…それが10年前の夏…。やっぱり…小野寺

君や千棘さんと同じ…)

万里花「…私は承一郎様の優しさが嬉しかった。するとあくる日父が…」

万里花の父『マリー…お前はあん男が好いとるとか？そいならオイが結婚の約束ばし
てきてやるけん』

万里花『本当ね!!?』

承一郎・J O J O (あ、あの人は…)親父ピキピキ…

「ちよつと承一郎は血管が浮き出ている。ぶつちやけ戦争一步手前今の状況を作り出しているのは
あの男征なのだ。」

万里花『…なあいつくん、いつくんは…どがん女の子が好きと…?』

承一郎『え?女の子?(…んゝ…、よく分からないけど…)…まあ女の子らしい人…
とか?たとえば髪が長いとか…』

万里花「…それからの私は頑張りました!!?今まで嫌がついていた習い事やお稽古も進
んで受け…!ふさわしい言葉遣いと教養を身につけ、承一郎様の求める理想の女性へと

ならんがために邁進したのです…!!?」

承一郎の額には汗が浮かんでいた。自分の言った何気ない一言で万里花は日々精進していたのだから。

万里花「…ずつと、もう一度承一郎様に会うために…承一郎様と交わした約束だけが私の支えだったんです。…恩着せがましい物言いをお許し下さい。ただ、どうしても私の想いを知って頂きたかったもので…」

万里花「あの写真は私達のお別れの時撮って貰ったんです。大切な約束を忘れてしまわぬようにと…」

承一郎（…：僕のために…：そんなにまで…：僕の事…。…僕にとつてはなんでもなかったような事が、この子にとつてはそんなにも大事な事だったなんて…。…：僕は…）

万里花「…まあそんなにお気になさらないで下さい。私の事を覚えていて欲しかったのはただのわがままと分かっていますから。それにもう無理に私の事を思い出さなくても結構ですよ？」

承一郎「えっ…いやそんなわけには…。ちよ…ちよつと待つて…！今全神経を集中して…!!?」

万里花「…お気持ちは嬉しいのですが…：本当にいいんですよ。ただそのかわり、今のこれからの私をたくさん覚えて欲しいのです。あなたのために素敵になった私をもつ

と見て欲しい…。見せつけてやると…そう決めたんです」

万里花「これからの私はもう忘れさせませんよ…?」

万里花の笑顔にドキツとする承一郎。

万里花「…というわけでまずは…。あ、承一郎様。ほっぺにご飯がついてますよ?」

承一郎「え?どこ…」

次の瞬間、チュツという音と柔らかな唇の感触が承一郎の頬からした。

承一郎「え…」

万里花「…忘れられない思い出、一つ目です…♡」

万里花は小悪魔の微笑を浮かべた。承一郎は哑然としている。

万里花「それでは承一郎様!また明日学校で!ごきげんよう!!?」

承一郎(え…ええええええ…!!?!?)

JOJO(万里花、すごいグイグイくるな…)

翌日、放課後、学校——

千棘「…私達が」

小咲「10年前に会ってる…?」

承一郎「ああ、君の親父さんは確かにそう言った。結構仲良さそうだったらいいけ

ど。…やっぱり覚えてないかい？」

千棘「いや…」

小咲「全く…」

千棘「…ところでなんであんな顔赤いの？」

承一郎「え!? いや別に…!?」

小咲「…でも私、確かに千棘ちゃんの事一目見た時から不思議と仲良くなれそーだ
なつて思ったよ…?」

千棘「ウソ!!? 私も私も!!?…てゆうかなんでこんな大事な話今まで黙ってたのよ…?
」

承一郎「いやそれが…たまたまタイミングがね…?」

千棘「…それで?」

小咲「これが…問題の鍵…?」

千棘「…まさか小咲ちゃんまでこんな鍵持つてるなんて思わなかったわ…」

小咲「私も…どういう事なんだろう…」

千棘「皆10年前にダーリンと会ってて何か約束してて鍵持つて…? 何がどうなつ
てんの?」

承一郎「僕も知らないんだ。僕だって約束したのは一人のハズで…」

千棘「そもそもその約束ってなんの約束なの？私どうしても思い出せなくて……」
小咲「私も……」

万里花「…皆さんは約束の内容は覚えておられないのですか？」

承一郎「え？君覚えてるのかい？」

万里花「だってそれはもちろん『結婚』の約束に決まっているではありませんか」

承一郎・千棘・小咲「!!?!」

万里花「え？違うのですか？私はてっきり皆さんもそうなのかと…。私は承一郎様と別れ際にその約束をしたんです。覚えておられないかもしれませんが」

そう言い、承一郎の腕に抱きつく万里花。

千棘「ダーリン確か別れ際に約束したと言ってた？その子なんじゃあないの？その相手……」

承一郎「い…いやあどうかかな?!? まだまだ分らないというか…!!??」

小咲「…結婚…もしかして私も一条君とそんな大胆な約束を…?もし…そうだったら…」

千棘「…まさか…ね…何か大事な約束だったとは思うけど…まさか…」

承一郎「…それじゃあなんで鍵は3本もあるんだい？君は全部知ってるんだよね？この約束の真相って…」

承一郎「あ…でも僕達に教える気は無いんだっけ…。良かつたらヒントだけでも…」

万里花「…そうですね…。」

万里花の言葉がちよつと止まる。

万里花「…すみません、それは私にも分かりません」

承一郎「…え？いやだつて君…！あんな偉そうに答えを知つてるとか…!!？」

万里花「はい…いえ、大変申し訳ないのですが…私も驚いているんです。私の他にも鍵を持っている人がいたなんて。今初めて知つた事ですから…」

万里花「確かに昔の承一郎様との会話の中で他に一緒に遊んでいる誰かが登場した事はあつた気がしますが…」

承一郎「…じゃあ…君の言う真相つて…」

万里花「それはもちろん♡私が承一郎様の事をどれだけ愛して約束したのかという事を決まつてるじゃありませんか!!？」

万里花「私がつてているのは私の約束の事だけですからそれ以外の事は…」

承一郎「うゝん…」

千棘「…じゃあこの鍵はどれかが本物でその他はニセモノつて事？」

小咲「…だとしたら一条君のペンダントが戻つてくるのを待つしかないね」

万里花「まあ何がどうあれ、承一郎様と結ばれるのは私ですよ！もうキスも済ませて

しまいましたし……!

千棘「は!!??キス!!??…ってハン…!もう騙されないわよ。そんな事言つてまたどうせ…」

だが承一郎の顔は赤くなっていた。

千棘「…ハア!!??ちよつ…したの!!??」

承一郎「違う違う違う!!?!突然だったんだ不可抗力だったんだ」

千棘「したのね!!?最っつ低!!?信じられないこのケダモノ!!?会つて間もない女の子といきなりチューなんて…」

承一郎「いやチューつて言つてもほつぺにちよつとされたぐらいで…!!?」

よほどショックだったのだろう。小咲は某燃え尽きたボクサーのように白くなりサラサラと崩れかけている。

万里花「…まあどちらが承一郎様にふさわしいか考えれば当然かと」

千棘「あくら人のダーリンに手を出しといてよく言うわね。このドロボウ猫さん」
万里花「あら、ゴリラよりかはかわいい気があるかと…」

千棘「ダーリンには私の方が」

万里花「いえ私の方が」

千棘・万里花「小咲ちゃんはどうちだと思ふ!!??(小野寺さんはどう思います?)」

小咲「え!!?」

千棘と万里花が同時に尋ねる。仲が良いのか悪いのか分からない。

小咲「え……えーと……私は……その……」

万里花「あ、そうだその前に。あなたは承一郎様の事をどう思ってたっしやるのですか?」

小咲「え……」

万里花「……もしかしたら昔承一郎様と婚約の約束をしたかもしれない。もしや……あなたも承一郎様を……?」

小咲は承一郎が持っていた千棘の写真を思い出していた。

小咲「……確かに昔そんな約束をしたのかもしれないけど、今は私は良い友達だと……」
万里花「……そうですか」

承一郎（……まったく何を聞いてるんだあの子は……。でも良い友達か……ちよつと残念だけどちよつと嬉しいかも……）

千棘「……まあ真実がそーだった所であくまで子供の頃の話だけだね」

万里花「あら、ひがみは見苦しいですわよ?」

千棘「な!!? 誰が!!?」

小咲（……私、やっぱり一条君に会ってたんだ。じゃあ……一条君が私の初コイの……。で

も…一条君はもしかしたら千棘ちゃんの事…)

承一郎(はあ…やれやれ、せっかく真相に近づけるかと思つたのに結局また進展ナシ…か…?…この3人の誰かが僕の約束の女の子…?でも僕が今好きなのは小野寺君で…。今の気持ちと昔の気持ち、か…)

万里花「…まあ本物の鍵は私のに決まっていますけどね。私と承一郎様は運命の赤い糸で結ばれて…」

千棘「…まあダーリンはあんたの事全く覚えてなかつたけどね」

万里花「そいば言わんね!!?」

3人が驚く。

千棘「…何、今の」

万里花「さあ…何の事ですか?」

千棘「いやいやいや…」

第44話 一条承一郎!警視総監に会う

とある日、学校――

万里花「…というわけで承一郎様、明日父に会って頂けますか?」

万里花はいきなり切り出してきた。

承一郎「……え?」

万里花「…ですから、一度は挨拶において頂かないと。結納の日取りなど決めなくてはなりませんし」

承一郎「いやいやどういうわけだい!?? だいたいその…許嫁の話だつて僕は知らなかったつてちゃんと話しただろう…!??」

万里花「ええ…それは存じておりますが…。ですがだからと言って私と承一郎様の婚約が解消されたわけではありませんわ。それに夫婦になつて初めて互いの良さに気付くということもあるかもしれませんし!」

承一郎「…僕まだ結婚出来る歳じゃあ…」

千棘「…ちよつと橘さん? さつきから図々し過ぎるんじゃないやありません? 人の恋人を前に…」

万里花「あら、これは気付きませんでした桐崎さん。主人がいつもお世話になっております」

承一郎・千棘「誰が主人だ!!?」

千棘「だいたいダーリンはその婚約を了承してなかったんでしょ? だったらそんなもの無効よ……!」

万里花「あら、そんな事ありませんわ。昔から親の間でのみ婚約が交わされる事なんてよくある話。どうしても不服なら父に直接申し立てて貰うしか……」

その言葉を聞いた瞬間、千棘が承一郎を睨みつけた。

キング・クリムゾン!!?

翌日、街の中――

承一郎は万里花と一緒に万里花の家に向かっていた。

承一郎（はあ……なんでまたこんな事に……）

承一郎は昨日の千棘の言葉を思い出していた。

千棘『いい!?? そのお父さんにビシツと言って許嫁の話を取り消して貰うのよ……!!?』

承一郎（…そんなに上手く行くかい?しかし最近の彼女の演技って迫真だよね…）

J O J O（…こいつ鈍過ぎるだろ…）

万里花「さあ承一郎様。ここが私の家ですよ」

万里花の家はものすごく高い高層マンションだった。

万里花「このマンションの最上階の1フロアが私の家なんです」

承一郎（1フロアって…）

やはり警視総監という事だろう。かなりビッグな人だ。

承一郎「…ところで橘さん」

万里花「まあ橘さんだなんて。どうか万里花とお呼び下さい!」

承一郎「…橘さんの親父さんってどんな人なんだい?確か警視総監なんだよね?やっぱり恐い人なのかい…?」

万里花「まあ!とんでもありませんわ。父はとっても優しい方ですよ?私の事をいつも『マリー』と呼んでいつも私の事を心配して下さいなんです。きつと承一郎様も父を気に入ると思いますよ…!」

承一郎（…ホッ、良かった。少し気楽に…）

キング・クリムゾン!!?

マンション最上階——

巖「おう、帰ったかマリ。早かったな」

承太郎と同じ195cmの顔に傷がついている男、橘巖げんがそう言う。

承一郎（…と思っていた時期が僕にもありました…）

万里花「あらお父様。ちょうど呼びに行こうと思つてた所です」

承一郎（…親父さん顔恐ツツ!!一瞬ヤクザかと思つてしまつた…!!?というかむしろヤクザよりも凄みがあるような…）

万里花「お父様、この方が私の婚約者の一条承一郎様ですわ」

承一郎「!!?…え…は、はい。あの…どうも始めまして、僕は…」

巖「ほう…君があの一一条のせがれか…大きくなつたな。親にだいぶ似てきたんじゃあないか…?」ゴゴゴゴゴ

なんかすごい凄みを出しながら承一郎に話しかける巖。

巖「まあ座りなさい、ゆっくり話そう。親父さんは元気かい…?」

承一郎「は…はい…まあ…」

そう言い、承一郎はソファに座つた。

巖「…この傷」ボソツ

承一郎「え…ええと…?カ…カツコイイですな…。お仕事中に受けたんですか?」

巖「うむ…こいつは昔君の親父さんにつけられた傷だなあ。父親に似てきた君を見て

るとつい疼いてきてしまつてね」ゴゴゴゴゴ

承一郎・J O J O (あ…あの^{親父}人何をしてるんだああーツ!!?!)

巖「あの時の事は忘れもしない…。まあその時にオレ達の互いの力を認め合つて立場は違えど男の盃を交わす仲になつたわけだが、オレの夢は今でもあのヤロウをムシヨにブチ込む事なんだよ」

承一郎(こ…恐つ…!!? 恐過ぎるこのお父さん…!!? ウチのヤクザ全然ヤクザっぽいじゃあないか…!!? こんな人相手に婚約の取り消しなんて絶対言えないよ!!?!)

巖「…そんなつまらん事はいいんだ。早いもんだな、万里花ももう結婚出来る歳になつたか。君も長いこと万里花の事を大切に想つてきてくれたと思うが…」

承一郎「!!?…あの…それがその…」

万里花「承一郎様は私の事は忘れてしまわれたそうですけど」

承一郎「ちよつ…ちよつと君…!!?」

巖「…忘れてた? おい…そいはどがん言う事と…?」ゴゴゴゴゴ

承一郎(ヤ、ヤバイ…!!?)

キング・クリムゾン!!?

巖「…なるほど、それで君は婚約の話を知らされてなかつたわけか…」

巖は承一郎の説明でやつと納得したようだ。

巖「くあんのクソヤロウ…男と男の約束をよくも…。今度会ったらタダじゃあおか
ねえ…」

承一郎はすごいハラハラしている。

巖「…しかし、そうなるの一つ気がかりが…。君はまさか、今他に好きな子などい
んじやあないないだろうね」

承一郎「え…、いやそれは…」

万里花「彼女がいますわ」

まさかのカミングアウト。

承一郎「ちよつと橘さんツ!?」

巖「…彼女…? わいは彼女はおる身でこげん所挨拶に来よつとか…」ゴゴゴゴゴ

承一郎「わー!!? 待って待って待って!!?」

万里花「お父様落ち着いて。承一郎様が悪いわけではありませんわ。…それに私はそ
れでも構わないと思ってるんです」

万里花「私はその彼女から承一郎様を奪ってみせると決めたのです。そうしなければ
承一郎様と結ばれる資格などありませんわ」

巖「……フン、お前がそう言うのなら構わんが。…ところで君はいつもそうやって娘
とくつついているのかね?」

承一郎「え!!? いやこれは…橘さんが一方的に…。ご…ご安心して下さい! 僕らは清廉潔白な関係で…」

万里花「まあ! 承一郎様ったら照れなくてもよろしいのに…。せつかくキスも済ませましたのに(頬に)」

承一郎「だからそう言う事を〜!!?」

巖「:君イ:そがんことはもう少しお互いば理解してからすつべきなんじゃあなかとか…?」ゴゴゴゴゴゴ

承一郎(うおおおお!!?!)

万里花「!あら、いけませんわ。私とした事がお茶も出さずに。すぐご用意しますわ」
そう言つて部屋を後にする万里花。

承一郎(え…ええー!!?!ま…待ってくれ!!?一人にしないでくれ〜…!!?)
ゴホン…!!?という巖の咳にビクツ!!?とビビってしまう承一郎。

承一郎(や…ヤバイ、どうしよう…!!?状況は最悪ツ…!!?なんとかこの場だけでも凌がないと…!何か…上手い言い訳は…!!?) ダラダラ

巖「:あの子は、万里花はね、10年経つた今でもたまに昔の君の自慢話をする」

承一郎「…?」

汗がダラダラ流していた承一郎に、巖は万里花の話をした。

巖「やれこんな事があつた、やれこんな話をしたと、たわいも無い事を今でもね。昔君があの子の病室に置いていつたガラクタも、今でも大切に持つてゐるんだ」

巖「…まあ、本人はそれで幸せそうなんだが」

承一郎（…あの時の事、今でも…？そんなに…）

万里花『これからの私は、もう忘れさせませんよ？』

承一郎「…すみませんお父さん…僕…、僕には今好きな女の子がいます。万里花さんでは無く…。…万里花さんが嫌なわけじゃあないんです…。ただ…僕は…その子の事をずっと…」

承一郎「だから…本当にすみません…」

承一郎は何を言われてもしようがないと覚悟を決めた。

巖「…クツ…！…良か、ようやつと腹ば割りよつたか」

巖の答えは、了承だった。

巖「まだ若いとにそう割り切れるもんでもなかやろし、そういう遠回りも今は必要なハズばい」

巖「…その子がその彼女かね？」

承一郎「え…いや…それが実は…」

巖「ああ? そいじゃあ何か? わいは女で遊びよると…?」ゴゴゴゴゴ

承一郎「違います違います!!? これには大変複雑な事情が…!!?」

巖「:フン、まあええわい。:しかし約束は約束、いずれは娘を幸せにして貰うけん。覚悟ばしとけ、:マリーは手強か女ぞ」

キング・クリムゾン!!?

承一郎（:やれやれ、これで良かったんだろうか…）

万里花「どうでしたか? 父と話してみて」

承一郎「:良い親父さんだね。君の事がどれだけ大事か伝わってきた。:ちよつと恐いけど」

万里花「フフ…! 気に入って下さった様で嬉しいですわ。いずれ承一郎様のお父様になるかもしれませんし」

万里花の言葉にブツ!!? と息を吐き出してしまふ。

承一郎「:ホント、よくそんなグイグイ来れるね。素直に感心するよ（どうして僕なんかにそこまで…）」

万里花「まあ! そんなの当然ではありませんか。自分から動かないで手に入る物などありません。恋愛だつて攻めあるのみです」

承一郎「！（…まるで自分の事を言われてるようだ…）」

万里花「…私に出来るのは想いを伝える努力と、変わる努力だけです」

万里花「承一郎様！改めて教えて下さい、承一郎様は今どんな女の子が好きですか？

私は承一郎様の為ならどんな風にも変われます…！どうぞなんなりと♡」

承一郎「…いや別に、今のままで橘さんは充分かわいいと思うけど？」

承一郎「橘さんがその…色々頑張ってくれてるのは素直に嬉しいし、すごいと思う。誰にでも出来る事じゃあない」

承一郎「それに僕は髪の毛の長い君も短い君も、今のしゃべり方も昔のしゃべり方も、どっちもかわいと思うよ？（…どっちでも普通にモテるだろーし）」

承一郎「…ん？」

万里花の顔は真っ赤っかだった。

万里花「…急にそがん事言われたら、困るばい…」

承一郎「…ええ？」

万里花「やつ…その…こっ…こっち見んでくれんね…！」

九州弁を出してしまい、顔がさらに赤くなった。

承一郎「え…え…？」

万里花「見んでくれんね…!!？」ドヒュン!!？」

承一郎(ええー……!!??)

承一郎「ちよ……ちよつとお!!?君……急に別人……!もしかして照れてるのかい……!!?」
万里花「照れてないけん……!!?こつちば来んといて……!!?」

そして、『矢』の件から始まったこの奇妙な高校生活の一学期は、幕を閉じたのであった。

第3章―奇妙な夏 Bizarrre Summer i

n2012―

第45話 アルバイト

〈小咲side〉

七月、終業式が終わり高校最初の夏休み、公園の休憩所――

るり「……つたく、どうすんのよあんたは」

緑のカーテンがかかった休憩所でアイスを片手にるりちゃんが私に尋ねてきた。

るり「……もう夏休みだよ？結局一条君とは一切進展ナシで……。どうしてこう意気地が無いのかしら。あんなに手伝ってあんなにチャンスがあつたのにそれでも進展0つてあんたは何？仏像か何か？」

小咲「……すみません」

るりちゃんに色々言われて、何も言えない私。

るり「たまには自分から誘ってみるとかさあ、まあ小咲にそんな事出来るとは思っていないけど。でもそんなんじゃないやあいつまでたつてもねえ……」

小咲「あ…あの…るりちゃん…
るり「…何？」

小咲「…その…実はね？明日、一条君がウチに来る約束になつてるの」
るりちゃんの口があんぐり空いた。

く小咲 side out く

何故承一郎が小咲の家に行く事になつたのか？それは先日の終業式にまで遡る——

バ負イツけアて・ダ死ストね!!？

先日、終業式の後、学校——

小咲「一条君！」

承一郎「や…やあ小野寺君。どうしたんだい？（声かけられた…）」

小咲「ちよつといい？え…とその…ね？あの…今度の週末つて…予定とか…空いてないかな…」

承一郎（え…、え…えええー…!!??そつ…それはもしやデートのお誘…）

J O J O（ないな、だつてお前一応桐崎の奴と恋人つて事になつてるし）

小咲「…実はね、バイト、お願いしたいんだけど…」

承一郎「…バイト？バイトって…もしかして小野寺君の実家の和菓子屋…!!?」

小咲「…実はウチの従業員さんが急用があつて来られなくなつちやつて…。お母さんがね、なるべく料理が出来る人がいいつて…。それで私…身近に料理が上手な人つて一条君しか知らなくて。だからその…良かったら…」

返事はもちろん Yes! ！こうして承一郎は小咲の家の和菓子屋のバイトをする事になつたのだ。

ちなみに承太郎達の反応は、

承太郎「………フツ」

ジヨルノ「…まあ頑張つて下さい」

ミスタ「そーかそーか！お前も罪な男だな！ケケケ！」

等の励ましの言葉だつた（一部例外あり）。

キング・クリムゾン!!?

週末——

承一郎（小野寺君の家でまさかのバイト…!!?夏休みでしばらく小野寺君に会えない

かと思つてたのにまさかこんな展開になるなんて……ええ！希望とヤル気がムンムンと湧いてくるじゃあねーかッ！オイ！）↑謎の蟹化

JOJO（何故蟹化するんだ……）

歩いていると、和菓子屋『おのでら』に着いた。

承一郎（……久々に来たな、和菓子屋『おのでら』。たまに父さんから客に出す茶菓子を買つてこいつで言われて来た事はあつたな）

承一郎「ごめんなさ……」

？「……んだとお……!!??仕入れが一品も来ない……!!??」

すごい大音量の声を聞いてビックリする承一郎。

承一郎「……☒」

？「……そんな事私を知るか!!?なんとかしてよそつちの仕事でしょ!!?」

中を覗くと何やら女性が電話相手に抗議しているようだ。

？「いい!!?夕方には絶対間に合わせて!後でそっち取りに行くから分かった!!?つ

たく!!?」ガチャン!!?

そう言つて女性は電話を切った。美人だが、短気なのだろう。今の剣幕を見たら怖いという印象しかない。

？「……くつそく焼菓子はこちらでいいとして、でも生菓子の方は……」ブツブツ

？「ん」

どうやらやっと承一郎に気付いたようだ。

？「…何見てんの。学生さんが和菓子屋ウチに何の用…？子供はアメでもなめてな…！！
？」

承一郎「え…いや…そのお…」

女性の剣幕に押されてしまう承一郎。その時、すごい勢いで小咲がやってきた。

小咲「お母さん！！？待って待って！その人だよ今日のバイトの人…！！？」

菜々子「小咲…え…？」

承一郎（え？お母さん？嘘でしょこの若さで。姉でも通る若さじゃあないか？）

J O J O（容姿は母親似で性格は多分父親似なんだな）

そんな事を考えている承一郎に小咲が声をかける。

小咲「お…おはよう一条君。今日は…よろしく…」

承一郎「…よ…よろしく…（うわあ…制服…！！？売り子姿かわいい…）」

菜々子「…はあ？バイトって…この子があ…？料理得意な人がいるって言うからどんな知り合いかと思つたら、あんたの同級生なの？それもこんなもやしみたいなの…」

承一郎（最近ひどい言われようだね…。もやしって…）

J O J O（一応鍛えてるのにな、お前）

菜々子「…小咲、今日私が欲しかったのは曲り形にも調理場に入れる人なのよ…？本
来調理場は職人の聖域…！！？それをちよつと料理が出来る高校生に…」

小咲「！！？…一条君はそんなじやあないもん…！一条君毎家族のご飯一人で作つ
てるんだよ…！！？しかもすぐ沢山…えーと…何十人分を一人でだよ…！！？」

菜々子「…うーん、そこまで言うなら。なんか作つて貰おうか。使えるかどうかは
こつちで判断するから。ダメなら今日は帰つて貰うよ？」

承一郎（ええーっ！！？いきなりすぎるんじやあないか！！？…一応昨日和菓子につ
いて猛勉強はしてきたけど、そんなもの通用するわけが…）

小咲が承一郎に期待の眼差しを送っている。

承一郎（…まあ、一生懸命やるけどさ）

そう思いながら承一郎は作業を始めた。付け焼き刃の知識だが、やるしかない。

菜々子（…ふーん、こまめに食器の水気をとつて…。和菓子の事はよく分かつて無
いようだけど、相当料理慣れしてるね）

承一郎「…えーと、出来ました」

承一郎がつくつたのは大福だ。

菜々子「…ほーっ」

菜々子が大福を食べる。

菜々子「ほーほーほー」

かなり無表情で大福を食べる菜々子。正直顔の筋肉死んでるんじゃないか?というぐらいだ。

菜々子「……………えーと…?君一条君とか言ったっけ…?」

承一郎「え…、あ、はい…!」

菜々子「よし、お前ウチにお婿に来なさい」

いきなりすぎる言葉に承一郎は思わず息をブー!!?!と吐き出してしまう。小咲は顔が赤くなっている。

菜々子「いや〜最初はどうかと思ったけど、あんたも案外良い男連れてくるじゃあない」

小咲「!!?…男って…一条君は別にそーいうのじゃあ…」

菜々子「あんたボーツとしてるから心配だったのよ。この子なら筋も良いし立派に家業を継いでくれそうじゃあない?」

小咲「だから違うってば!!?」

菜々子「まあそれはさておきこれなら少しは任せられそうね。小咲、一番簡単な奴とあんの作り方教えてやんな。私は午後まで店番するから。…しかしあんた男の前だとそんな顔するんだね?それにこのチャンスに男紹介するなんて…小咲ちゃんたらだ。

い・た・ん♡」

小咲「お母さん!!?!」

菜々子は笑いながら店から厨房から出た。

承一郎「…強烈なお母さんだね」

小咲「…ごめんね一条君、気にしないで」

承一郎（…う〜ん最初はどうなるかと思っただけど良かったお母さんにも認めて貰えたみたいだし。ええ！希望とヤル気が（ry）↑本日2回目の蟹化

J O J O（蟹化しすぎだろ。まあ分かんなくてもないが）

小咲「じゃあこつち来て、色々教えるから」

妙に「ハイ！」な承一郎に小咲は和菓子作り方を教えてくれる。

小咲「…それでね？こつちの生地にザラメを足して…」

承一郎「…しかし小野寺君細かい手順までよく覚えてるね。やっぱり手伝いでこーゆーの作ったりするのかい？」

小咲「ううん、私は作る仕事は全然…。小さい頃から面白いなっつと見てたからそれで…。試しに一度作らせて貰った事があるんだけど、食べた人がバタバタと倒れちやつて三日もお店を出せない状況に…」

承一郎（その才能はその頃からすでに…!!??）ゾクツ

承一郎は思わず戦慄してしまった。

小咲「：でも、仕上げの部分だけは褒められてそれをずっと手伝ってたらだんだん得意になつちやつて。：ほら」

小咲の手にあつたのは、綺麗な花の形の和菓子だった。

承一郎「おー、すごい!!? あ、僕も混ぜ終わつたよ…。こんな感じかな…?」

小咲「あ! そんな感じ! すごい美味しそう! ふふっ! 一条君が味をつけて私が形を整えたら、良い和菓子が出来そうだね」

承一郎（え…えええー!!?? 何ソレ…!!? 今のはプロポーズ…!!?? む…婿に來いて…!!?? いやいやいや落ちて着け僕…!!? 危うくハートを持って行かれてしまう所だった…!!?）

そんな小咲の（自覚なし）の言葉に驚いてしまう。

J O J O（こいつら見てると面白いな、鈍感過ぎて）

承一郎達とは違い結構鋭いJ O J Oは面白がつている。

菜々子「小咲、ちよつと出てくるから店番よろしく」

小咲「はい」

菜々子は店を後にした。

小咲「いらつしやいませー」

おじいちゃん「おおー！今日の店番は小咲ちゃんかい。こりやツイとるの〜」

小咲「こんにちは、吉野さん。毎度ありがとうございます〜」

おじいちゃんの名前は吉野さんというらしい。

吉野「どうじゃ？良かったら今度わしとデートでも〜」

小咲「もー、またまた〜」

色気ついた爺さんに承一郎は肩を掴んだ。

承一郎「…おつり615円になりまーす」バチイツ!!?

吉野「お？おおどうも…？うおっ!!?足が勝手に!!?」ダツ!!?

そのまま吉野は行つてしまった。無論、承一郎が波紋を流し込んで操つたのだ。

小咲「…一条君？」

承一郎「やれやれ、爺さんのクセに色気づいているからだよ」

小咲「あはは、あのお客さんいつもああだから…」

承一郎は涼しい顔で答える。小咲は思わず笑つてしまう。

小咲「…ねえ、一条君はさ…今でも千棘ちゃんとデートとかするの？」

承一郎「んなっ…!!?なんで僕が彼女と…」

小咲「え…なんであ…（今も恋人のフリしてるんだし…）」

承一郎「…あーいやー…、す…するよ？もちろんするよ？だって僕達恋人同士だし…」

(うう…悲しくなってきた…)

小咲「え…え……え…えつと一条君…？もしかして聞いてないの？」

承一郎「え？」

小咲「私一条君達が本当の恋人じゃあないって知ってるよ？」

突然の事で承一郎の反応が遅れる。

承一郎「…ん？え？ホントに？」

小咲「うん、ホントだよ」

承一郎「え…ええええ！！??」

小咲「やつぱり…！おかしいと思った…！」

承一郎「な…なんで…いつから…」

小咲「…結構前に千棘ちゃんから、てっきり一条君は知ってるものだ…」

承一郎(はあく、桐崎さん小野寺君に教えてたのならちゃんと行って欲しいな…。

まあ僕もまだ集の事教えてないけど…)

小咲(…そっか、一条君ずっと知らなかったんだ。だから私と二人きりの時でも恋人
みたい…。でも…ならなんで一条君はあの写真を隠したんだろう…)

承一郎「ん？何か言ったかい？」

小咲「…ううん、なんでも」

承一郎（…しかし、やれやれだよ。小野寺君はずっと僕達が恋人じゃあないって知っていたのか。僕の今までの苦労は一体…）

承一郎（ん…？待てよ、という事は…今なら小野寺君に想いを告げても大丈夫って事なのかな…？僕達が恋人じゃあないって分かってくれてる今なら、邪魔する物は無いって…）

J O J O（…いやいや待て、そんな簡単な話じゃあないだろう。もつとこう…タイミングというか…）

その時、急に風が強くなってきた。店の扉がガタガタ鳴っている。

小咲「…なんか、外風強くなってきたね」

承一郎「え？あ…ああ、そうだね。…そういえば、今台風が接近してるとかニュースで…」

やがて、雨が降り始めてきた。雨はだんだん強くなっていく。

小咲「…降ってきたね」

承一郎「結構強いね。小野寺君のお母さん大丈夫かな…」

プルルル、と電話が鳴った。小咲が電話を取る。

小咲「はい、和菓子屋おのでらで…『あ！小咲!?!?私私、お母さん!!?』…お母さん？」

どうやら電話の相手は母親らしい。

小咲「……えっ!!??」

承一郎「……どうかしたのかい？」

小咲は電話を切つて答えた。

小咲「……台風が凄くて危ないから帰れないって……。店番よろしくつて……」

承一郎「そうか……。それは仕方ないね……」

小咲「……それと、……帰らせるの危ないから、一条君には泊まつて貰えつて……」

承一郎（な……何だつて……!!??!!??）

外からは、ザーザーと雨音が聞こえた。

第46話 台風之夜

承一郎（泊まってけって…僕が小野寺君の家に…!!? いいのか…!!?）

承一郎「でも小野寺君他に家の人とか…」

小咲「…お父さんも今日は用事で帰って来なくて。妹はもともと寮生活してるから…」

承一郎「へえー…、小野寺君妹いるんだ」

承一郎（つてそうじゃあなくてツ!!? 小野寺君と二人きりなんていいのだろうか!!?）

承一郎「…つていやいや、さすがに女の子一人の家に泊まつたり出来ないよ。悪いけど傘貸して貰えるかい? このくらい自力で…」

小咲「え…でも…」

だが、外はビュオオオオオオ、という風が吹き荒れていたツ!!?

男性1「わー!!? 瓦が降って来やがった!!?」ガシャーン!!?

男性2「気をつける!!? あんま外ウロウロすんな!!?」

承一郎（…なんでこんな事に…）

承一郎は帰る事を諦めるしかなく、店の中に戻った。

承一郎（さすがに二人きりはマズイよな……。やっぱり不安なんじゃあ……）

そんな事を考えている承一郎の背後では小咲が店の暖簾を下げていた。何も思っていないように見えるが、

小咲（どうしよう、どうしてもニヤニヤしちゃう）

そんなわけがない。よりにもよって好きな人と一緒に一晚を過ごすのだ。動揺しないわけがない。

小咲はつり上がってしまふ顔を手でグニグニと直そうとしていた。

小咲（ダメだダメだよ私、こんなみつともない顔見せられない……！戻れ戻って私の顔
く……！）

グニグニと顔を直し、ようやく小咲は承一郎の方へ向いた。

小咲「……えーと、それでどうしようか一条君。その……夕食とか……」

承一郎「……なんでニヤニヤしているんだい？小野寺君」

小咲「はひえ!!?!」

まだ完全に直りきっていない顔を抑え、

小咲「え……え……昨日のテレビが面白くてその……思い出し笑い……?」

承一郎「……?」

小咲（わーん！どうしよ、全然抑えきれないよーん!!?）

小咲はなんとも苦しい訳をして、後ろに振り返ってしまった。

J O J O（お前らマジで早くくっつけ。砂糖吐きそうだ）

と、J O J Oが読者の皆の言葉を代弁している。

承一郎（…やっぱり緊張しているんだろうか）

J O J O（それもある。それもあるんだが…、こいつらマジで鈍いな）

小咲「じゃ…じゃあ色々話して決めようつか。まず部屋に上がって貰って…」

承一郎「え」

J O J O（…o h）

小咲（私ったらなんて大胆な事…!!?!）

普通では言わない事を言った自分に驚く小咲。

承一郎「…いいのかい？部屋に上げて貰って…」

小咲「も…もちろん…だってその…別に…ね…?」

今更ながら、なんて大胆な事を言ったのだらうと小咲は赤面している。

小咲「あつ!!?でもちよつと待って、少しだけ片付けさせて…!それに着替えもした

いし…!!?」

承一郎「う…うん、気にしなくていいからゆっくり…」

それを聞くや否や、小咲はすごいスピードで部屋に入っただけだった。

ビュンツ!!? グオオオオオ、ガタン、バタン、ドン、ガタガタガタ…、とすごい音が聞こえた。

承一郎（おお……すごい片付けてる）

承一郎はひとまず作業服から私服を着替えた。

小咲（これで…大丈夫かな…）

超高速で片付け終えて、着替えも済ました小咲は部屋を出ようとするが、机の上にある写真立てを思い出す。

写真立ての写真には中学の最後の運動会で一位で駆け抜ける承一郎の姿があった。

小咲は写真立てを伏せて中を見られないようにした後、承一郎を呼びに部屋を出た。

小咲「適当に寛いでくれていいから」

承一郎「失礼します…」

承一郎は小咲の可愛らしい家具が置かれている、女の子らしい部屋に入った。なんだかいい香りがした。

小咲「あ、私お茶入れてくるね。ちょっと待ってて」

承一郎「いや、そんなお構い無く…」

小咲が部屋を出た後、承一郎は部屋を見回した。

承一郎の目に止まったのは、机の上にある伏せられた写真立てだ。

承一郎（…見てみたい）

承一郎とて男子だ。好きな人が写っているであろう写真を見たいと思わない方がおかしい。

承一郎（でもさすがにマズイだろうな…）

承一郎が心の中で葛藤していると、

J O J O（関係ない、行け）

まさかのGOサインをJ O J Oが出してきた。あれ？こんなキャラだっけ？

承一郎（…見るよ）

J O J O（…）ゴクツ

承一郎はゆっくりと写真立てに手を伸ばす。そして写真を見ようとした瞬間、

小咲「お待たせー、お茶持って来…」ガチャ

承一郎はその圧倒的な身体能力を使って元の位置に座った。

承一郎「や…やあ、ありがとう。有り難く頂くよ…」

小咲「…？どうぞ？」

承一郎（…危なかった、もう少しで最低な奴になるところだった…）

この後夕食を作つて食べた（「小野寺君に料理作らせるなツ!!？」みたいな事があつた。マジで）お風呂に入らせてもらった（レディーファーストでやましい事は何一つない。マジで）。

その後食器を片付け、中学の頃の思い出話に花を咲かせた。

小咲「一条君とは二年でクラスが一緒になつて以来だね」

承一郎「實際話すようになったのは三年になつてからだつたけどね」

そんなこんなで時間はどんどん過ぎていった。

承一郎「そろそろ寝る時間だね」

小咲「うん、一条君はどこで寝るの？」

承一郎「僕はリビングにあるソファで寝るよ」

承一郎はそう答え、小咲から毛布を貰った。

小咲「それじゃあ、おやすみ」

承一郎「うん、おやすみ」

そう言い、小咲は部屋に行つた。

承一郎はゆっくり意識を手放した。

—————

赤い大地の上に承一郎はいた。

周りは紅く、何も無い。ただ真紅の色で世界が塗り潰されていた。

承一郎が辺りを見渡していると、地面から何かが出てきた。

それは腕だった。腐った水のような腐臭を放ちながら、次々と死体が姿を見せる。

歩く死体達は承一郎に向かつてゆっくりと近づいてくる。死体達を殺した

本人である承一郎自身に。

承一郎は逃げようとするが、自分の足元から出てきた腕に掴まれ、動けない。

承一郎「うっ……!!？」

承一郎は攻撃をしようとするが、

承一郎「ッ……!!？」

その亡者達は承一郎の部下だった者達だった。

自分のミスで死なせてしまった仲間達。それが承一郎の肉を喰らおうと群がる。

承一郎「うっ……うっ……!!？」

承一郎は罪の意識でどうする事も出来ず、亡者達に次々と体を掴まれてしまう。

過去の亡霊達が口を開き、承一郎の肉を喰らう。

承一郎「ぐあああああああ!!??!!？」

想像を絶する痛み。

これは報いなのか。

そう思っていた時、誰かに名前を呼ばれ、承一郎の意識は突然現実に取り戻される。

—————

承一郎「……ハッ!?」ガバアツ!

小咲「一条君!?」

小咲は今夜、妙に寝付きが悪く、ずっと部屋で寝るまで待とうとしていたが、いつのまにか雨の音が消えていたのに気付き、承一郎を見に行こうとリビングに行ったのだ。

承一郎が起きていたらどうするか聞こうとリビングに行ったのだが、そこでは承一郎が斃されていた。

小咲が必死になって承一郎を起こそうと揺さぶっていたらやっと承一郎が起きた。息は荒く、その顔には滝のような汗が流れていた。

承一郎「……ここは……?」

小咲「私の家のリビングだよ。一条君、斃されてたんだよ」

承一郎は荒い呼吸を整え、やっと落ち着きを取り戻した。

小咲「……一条君、何に斃されていたの?」

小咲の質問は承一郎の過去につながるものだった。

承一郎「…昔のことだよ…」

小咲「え……」

承一郎「ありがとう、起こさせてくれて。台風、どうやら過ぎたみたいだね。そろそろ帰るよ。…ごめん、みつともない姿を見せてしまつて」

承一郎は荷物を持つて扉に手をかけると、

小咲「…あの、一条君！」

承一郎「…なんだい？」

小咲が声をかける。

小咲「…あの、私達、学校とかじゃあよく話してるのに…、お互いLINEとか登録してないやつて…」

小咲は少しだけ勇気を振り絞つた。

承一郎「…そうだね。ちよつと待つてて、QRコード表示するから」

LINEとついでに携帯番号など交換した後、今度こそ承一郎は小咲の家を去る。

承一郎「それじゃあ小野寺君、また今度」

小咲「うん、またね」

扉が閉まり、承一郎は去つて行つた。

本来なら連絡先やらLINEやら交換出来た事に喜ぶべきだろうが、小咲は心配だった。

魔されていたものは何だったのか、それが小咲を悩ませた。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

第47話 ようこそ杜王町へ その①

集『オツス、ジョジョ。どっか行かねえ?』

LINEで送られてきたメッセージに承一郎は答えた。

承一郎『ごめん、明日から何日か出かけることになってるんだ』

集『へえ、どこに行くんだ?』

承一郎『M県S市の杜王町っていう所だよ』

集『へえ、いいな!お土産頼むよ、新しく名物になったごま蜜団子ってやつ!』

承一郎『分かったよ。集の分まで買って来るよ』

ここで承一郎と集のLINEは終わるが、それだけで終わらせるような集ではない。

女性陣(るりを除く)のLINEにメッセージを送る。

集『承一郎明日から杜王町って所に出かけるらしいぜ。本海苔駅に9時半から出発

だつてさ!』

このメッセージに喰らいつく者達がいた事は、言うまでもない。

翌日、本海苔駅――

（承一郎 side）

承太郎「よし、準備は出来たな、承一郎」

承一郎「はい、準備出来ました」

僕は荷物が入ったトランクを持ってそう答えた。

承太郎「もうすぐSPW財団貸切の新幹線が来る。それまで少し待っていてくれ」

承一郎「はい、分かりました」

僕と承太郎さんは、杜王町へ向かう為、駅で新幹線を待っていた。それにしても新幹線を貸切なんて、SPW財団はすごいなあ。そんな気遣いはいいのに。

ちなみにジヨルノ兄さんとミスタさんはイタリアへ戻って行った。ミスタさんから聞いたところ、歌手のガールフレンドがいるらしい。その時の兄さんの焦りようがとても新鮮だった。兄さん達は一度杜王町に行った事があつたらしいし。

ポルナレフさんは一条邸でのんびりするようだ。

僕は承太郎さんの言う通り、駅で新幹線を待っていた。一応小遣いは持つて来た。皆へのお土産代など、色々だ。

J O J O（そういえば杜王町には親戚がいるらしいけど、どんな人なんだろうな？）

承一郎（多分承太郎さんと同じで良い人なんじゃあないかな？）

そんな事をJ O J Oと考えていたら、おかしな人達が背後にいた。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

具体的に言うと、一人以外帽子とサングラスをかけてコソコソとしていて、

千棘・小咲・鶴「……………」コソコソ…

残りの一人は逆に堂々と僕の背後から突進してきたッ！

万里花「承一郎様——ッ!!？」ビューッ!!？

承一郎「うわあッ!!？」サッ

僕はとつさに万里花さんを避ける。

承一郎「…なんで君達がここに？」

万里花「黙秘権を行使しますわ」

承一郎・J O J O（あいつ…）

僕は下手人であろう集に恨み言を愚痴る。

承一郎「…君達、親の許可を取ったのかい？」

小咲「えつと、…一応皆取ってるよ」

承一郎（…^{バナナ}畏だ、これは^{粉☆}畏だ！集が僕を陥れるために仕組んだ^{バナナ☆}畏だ！）↑某新世界の

神風

承太郎「承一郎、何があつた？」

その時、承太郎さんがやって来た。

承一郎「じよ、承太郎さんッ！無敵のスタープラチナでなんとかして下さいよオーツ!!？」

僕は訳を説明して承太郎さんに助けを求めるが：

承太郎「…承一郎、諦めるんだな」

承一郎「…はい…」

承太郎さんからの宣告で、僕は諦めた。

キング・クリムゾン!!？

SPW財団職員「お待たせしました、承太郎様に承一郎様。そこにいらつしやる女性方は…」

承一郎「すみません、一緒に大丈夫ですか？」

SPW財団職員「いえいえ、もちろん大丈夫です。それではどうぞ中へ」

僕はSPW財団の職員の指示に従い、新幹線の中に乗る。

千棘「すごい快適ー!!？あ、見て！冷蔵庫まである！飲み物が冷えてるわ！」

承一郎「…君、随分のんびりしているじゃあないか。一緒に行くなら行くで連絡よこしてくれたら良かったのに…」

万里花「あら、サプライズですわ承一郎様」

承一郎「そんなサプライズいらぬ」

小咲「す、すごい広いね…」

新幹線の中、僕達は杜王町へ向かって行った。承太郎さんは「やかましいのは嫌いだな」と言つて別の車両に移動していた。

本来なら何十人も人が乗つて移動する新幹線を、たった数人の人のために貸切にするSPW財団。太つ腹とかそんな次元の話ではない。

千棘「あつ！見て！カラオケまである！！？」ガチャ

承一郎「君は静かに出来ないのかい！！？」

千棘「あんたねえ、もつと楽しもうと思わないの？誰か歌う人いる？」

万里花「じゃあ私が歌いますわ！！？」

承一郎「橘さん！！？」

なんでそんなにノリノリなの！！？いつも桐崎さんと仲悪かったよね！！？

キング・クリムゾン！！？

30分後——

千棘「あー楽しかった！！？鵜すごく上手かったわね！！？」

鵜「いえ、お嬢程では」

万里花「楽しかったですわ!!?」

小咲「一条君も上手かったね」

承一郎「もういいよ、吹っ切れた…」

カラオケで歌いまくった僕達のはのんびりとしていた。

千棘「それにしてもあんた、尾崎豊の『15の夜』とか古いわね」

承一郎「あの曲は神曲だから」

小咲「演歌とかも上手かったね」

承一郎「演歌は組の皆が歌ってくれて言われて歌い続けたらいつの間にか上手くなつてたんだよ」

万里花「さあ、ドンドン歌いますわよ!!?」

千棘「おー!!?」

承一郎「あはは…」

橘さん達がカラオケを続けているのを見ながら、僕は本を読み始めた。

小咲「…ねえ一条君」

承一郎「ん?どうしたんだい小野寺君?」

突然小野寺君が僕と向かい側の席に座ってきた。

小咲「あの夜の事なんだけどね…私で良ければ、話を聞きたいんだ」

承一郎「…いや、大丈夫だよ。君が心配する必要はないよ」

小咲「でも…」

承一郎「大丈夫だよ。ごめんね、心配させちゃって」

小咲「…うん、平気だよ」

アナウンス『え、間も無くS駅、S駅』

承太郎「皆、そろそろ駅に着く。下車の用意をしてくれ」

承太郎さんが別の車両からやってきた。

承一郎・小咲・千棘・鶴・万里花「はい」

色々な思いが渦巻く中、承一郎達は杜王町に近づいていった。

殺人鬼、『吉良吉影』に立ち向かった、黄金の精神を持つ町へと。

第48話 ようこそ杜王町へ その②

アナウンス『次は、杜王町、杜王町。お出口は左側です』プシューツ

承一郎達はS駅から電車を乗り換えて十数分で杜王町にたどり着いた。

人口は2011年では47228人。町の花は福寿草、名産品は牛タンの味噌漬けと最近ではゴマ蜜団子が増えた。

バブル期の頃に急速にS市のベッドタウンとして発展した街は、2011年の大震災で打撃を受けたが、早くも復興の兆しが見えている。

承太郎「もうすぐここに迎える車が来るはずなんだが……」

とその時、リムジンがやって来た。

康一「承太郎さん、お久しぶりです！」

承太郎「康一君、君が迎えに来てくれるなんて嬉しく思うよ」

身長が160cmぐらいの小柄な男性、広瀬康一が車から降りてきた。

承一郎「承太郎さん、この人は……」

承太郎「ああ、紹介するよ。康一君と言ってSPW財団の職員に頼りになる男だよ」

康一「頼りになるなんてそんな事ないですよ。えっと、君が……」

承一郎「初めまして、一条承一郎です。兄さんから話は聞いています。よろしくお願
いします」

康一「よろしくね。…ところで、そちらの女の子達は？」

承一郎「ああ、彼女達は成り行きで一緒に来ることになった子達で…」

小咲「初めまして、小野寺小咲です」

千棘「桐崎千棘です」

鵜「鵜誠士郎です」

万里花「橘万里花と申します」

康一「よろしく！へえ、承一郎君も罪な男だね。まあ立ち話もなんだしとりあえず

乗って下さい」

承一郎「分かりました」

僕達はリムジンに乗って、待ち合わせ場所に移動する。

承太郎「康一君、仗助達との待ち合わせ場所は…？」

康一「レストラン『トラサルデー』を貸切にして貰いました。あの人もスタ「あつ

！ちよつといいですか？」なんだい？」

スタンドの事を言おうとする康一を承一郎が止まる。

承一郎「すみません、彼女達の前ではスタンド能力の事とかは秘密にして貰いたいの

ですが……」ボソボソ

康一「(え?なんでだい?)」ボソボソ

承一郎「(一応、彼女達はスタンドとかは知らないのです、出来るだけ巻き込みたくないんです)」ボソボソ

康一「(ああ、分かったよ)」ボソボソ

千棘「えつと……なんですか?」

康一「:いや、あそこの店長は顔見知りだから皆と顔を合わせるのにもってこいなんだ」

康一がなんとか誤魔化してくれた後、リムジンは一つのレストランの前に到着した。本日貸切と書かれた看板の掛かったドアを開けると、数人の男女が座っていた。

仗助「お!やつと来たか康一!」

由花子「お疲れ様、康一君」

康一「お待たせ、承太郎さんと承一郎君を連れて来たよ!予定外のお客さんもいるけど……」

億泰「客々?」

小咲・千棘・鶴・万里花「:こ、こんにちは……」

仗助「おつ!かわいい子ちゃん達がいるじゃあねえか!」

静「お兄ちゃん！いい歳こいたオツサンなんだからナンパなんかしないでよね！」

仗助「分かってるよ、静」

裕也「おおっ！皆ベリープリティーじゃあねえか！」

露伴「へえ、君がヤクザの二代目ねえ：スケッチさせてもらおうよ」

承一郎「：初めまして、一条承一郎と申します。よろしくお願いします」

キング・クリムゾン!!?

承太郎「：さて、本当はジョースター家の身内だけでの話し合いをするつもりだったのだが、急遽ゲストで来てしまったからしょうがないな。まず身内の自己紹介をしよう」

仗助「じゃあ、俺から！俺の名前は東方仗助っス！SPW財団の職員で今は妹の静と暮らしているっス！」

静「私の名前は静・ジョースターです。ジョセフ・ジョースターの義理の娘です。よろしく」スツ

静さんが握手するために手を差し出した。

承一郎「静：呉音で『じょう』：。あなたも『ジョジョ』なんですね。こちらこそよろしく：うわっ！」バチイ！

握手をした直後、静さんの手から火花のようなものが飛んだ。

承一郎「これは…波紋…？」

静「正解！良く分かったわね！」

承太郎「言うのを忘れてたが、静はジョセフのじいさんから波紋を教わっていてな。数少ない波紋使いだ」

承一郎「驚いた…その年でこんな強力な波紋を練れるなんて…」

承太郎「それじゃあ億泰達も自己紹介してくれ」

億泰「おう！俺は虹村億泰っつーんだ！仗助や康一と同じSPW財団の職員だぜ！よろしくな！」

裕也「俺は墳上裕也だ。俺もSPW財団の職員だ」

露伴「岸部露伴、漫画家だ。今は週刊少年ジャンプで『ピンクダークの少年』を連載している」

承一郎「あつ！やっぱり露伴先生ですか！？僕、先生のファンなんですけど、後でサインもらっていいですか？」

露伴「もちろんいいよ。ジョースター家は僕の漫画を理解しない奴ばかりでね。君のようなファンがいて嬉しいよ」

露伴は仗助を見て言った。

由花子「広瀬由花子です。康一君の妻です」

トニオ「ワタシはトニオ・トラサルデーといひます。トニオと呼んでください。このレストラン『トラサルデー』の店長兼オーナーシェフをやっています」

小咲「は…初めまして、小野寺小咲といひます。よろしくお願ひします」

千棘「き、桐崎千棘です。よろしくお願ひします」

鵜「鵜誠士郎です。よろしくお願ひします」

万里花「橘万里花と申します。よろしくお願ひしますわ」

承太郎「やれやれ、それにしてもギャングや警視総監の娘やら、随分と大層なゲストを連れて来たもんだ」

承一郎「あはは、まあ成り行きでこうなっちゃったんですけどね…」

トニオ「それではワタシはいくつか摘まめるような料理をご用意しますネ」

億泰「おおっ！トニオさんの料理はなっ！こりやたまらん！ヨダレズビツ！くくツウくく味なんだぜエくくツ」

仗助「確かにトニオの料理はすごく美味いんだよなあ。今は予約で一杯なんだよなあ」

承一郎「そんなに美味しいんですか？」

億泰「ああ、ホッペが落ちる（スタンド能力の仕様により真実）ほどんまああくくいんだぜ」

承一郎「ん？（何か違うような…）」
キング・クリムゾン!!？」

トニオ「お待ちシマシタ。マルゲリータピッツアデス」

トニオさんが出してくれたのは、シンプルなマルゲリータピッツアだ。

億泰「ウホオ！これまた美味しそうだぜ！」

承一郎「確かに美味しそうですね」

仗助「それじゃあいただくぜトニオ！」

トニオ「どうぞ食べてクダサイ」

千棘「じゃあいいただきます！…あっ！とっても美味しい！」

承一郎「こ、これは…！ウマイ！ウマすぎるツ!!？」↑某裸の蛇風

小咲「美味しい！こんなに美味しいマルゲリータがあるなんて…」

鶯「これは…なんて美味いんだ…」

トニオ「そう言ってもらえると料理人冥利につきマス」

トニオの料理に舌鼓を打つ承一郎達。

万里花「さすがトニオさん、久しぶりに堪能させていただきましたわ」

承一郎「えっ？橘さん、トニオさんと知り合いなの？」

万里花「ええ、前にこのお店に来た事がありますわ」

トニオ「万里花サンには鼻屑にさせてもらってイマス」

承一郎「そうだったんだ……」

意外な事実に驚く承一郎。

ちなみに隣では億泰が「ウンまああくいつ」とか言っている。

承太郎「……さて、まず千棘君達の泊まる場所についてなんだが、元々私と承一郎が泊まるつもりだった杜王ランドホテルに空き部屋があるみたいだからその空き部屋を借りよう。ダブルで二部屋だが大丈夫か？」

千棘「大丈夫です！ね、つぐみ？」

鶯「はい！お嬢と一緒に泊まれるのは嬉しいです！」

万里花「それでは私は小野寺さんと一緒に」

小咲「うん、よろしくね橘さん」

承太郎「それと、私と承一郎は3日ほどこの街に滞在するつもりだが、何か必要な物があったらSPW財団で用意するがどうする？」

千棘「あっ！それは大丈夫ですよ、みんな用意しているし」

承太郎「そうか。……実は今回この街に来たのはジョースター家の身内の顔合わせを兼ねてのものだったのだが、あいにく全員揃う事が出来なくてな。今回ジジイ……ジョセフ・ジョースターが来日する予定でな……。それまで私と承一郎は待つつもりだったのだ

が、君達はどうする？」

小咲「せ、せつかくだしみんなで観光しようよ。杜王町って色んな名所があるらしいよ」

小咲が杜王駅でのパンフレットを持って言う。

千棘「そうね。これ以上あんたの家族の問題に首を突っ込むのも悪いし、私達はその間樂しませてもらうわ」

万里花「私は承一郎様と一緒にいたいのですが…承一郎様のためならしようがないです」

承一郎「まあ僕も待つだけだからジョースターさんが来るまでは杜王町の観光かな」

万里花「まあ！ならジョースターさんが来るまでずっと一緒にいてもいいんですね？」

承一郎「いやずっとはちよつと…」

千棘「ちよつとあんた何しようとしてるのよ！」

承太郎「…お前も大変だな、承一郎」

承一郎「…分かります？」

夜、杜王グランドホテル——

どこかの橋の上、195cmの二人の男がいた。

片方は金髪で背中が開いている黒いインナー、黄色いズボンの男。

もう片方は学帽と長ランに付いた金属の鎖、二本のベルト、両耳に付けた丸ピアスの男。

金髪の男は両足を破壊され、ビグツ、ビグツと痙攣している。

学ランの男は体中から血を流しながら、金髪の男を見下ろしている。

男「お前に対する慈悲の気持ちは全くねえ……。てめーをカワイソーとはまったく思わねえ……」

男「しかしこのままおめーをナブって始末するツてえやり方は俺自身の心にあと味よくねえものを残すぜ！」

男「その脚が治癒するのに何秒かかる？3秒か？4秒か？治つたと同時にスタープラチナをてめーにたたきこむ！かかってきな！」

J O J O ? 「!! ?」

男「西部劇のガンマン風に言うと……『ぬきな！どっちが素早いか試してみようぜ』と
いうやつだぜ……」

J O J O? (こ…こけにしやがって)

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

J O J O? (しかし…しかし! 『ザーツ』…この土壇場に来てやはりお前は人間だ…
クククク。ごく短い時の流れでしか生きない人間の考え方をする…)

名前のところだけノイズが入る。

J O J O? (『あと味をよくないものを残す』とか『人生に悔いを残さない』だとか…
便所のネズミのクソにも匹敵するそのくだらない物の考え方が命取りよ!)

J O J O? (クツクツクツクツ この『ザーツ』にそれはない…あるのはシンプルなたつ
たひとつの思想だけだ…)

まただ。またノイズが入る。

J O J O? (たつたひとつ! 『勝利して支配する』! それだけよ…それだけが満足感
よ!)

ゆつくりと立ち上がる。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

J O J O? (過程や…! 方法なぞ…!)

J O J O? 「どうでもよいのだアーーーーツ」カッ!

ブシューーーーーズ

ツ

ビシャアーーーーーッ

ッ

脚から出た血が男の顔にかかった。

J O J O? 「どうだ! この血の目つぶしはッ! 勝ったッ! 死ねいッ!」ゴホッ
スタンド、『世界』^{ザ・ワールド}の左ハイキックが男の顔にめがけて放たれる。

男「オラアッ!」ドオオン

目が見えない状態で男のスタンド、『星の白銀』^{スターブラチナ}の右ストレートが放たれた。

ドグアシイイン!!?

ハイキックとストレートがぶつかり合う。

『星の白銀』の拳にビギイツ!!? と亀裂が入る。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド

勝った、そう確信した。

だが、違った。

ビシ! ビシ! ビシ! と『世界』の脚に少しずつヒビが入り始める。

J O J O? 「!!? なっ…!!?!」

脚のヒビが左脚から全身をかけて広がり、体を縦に裂くように広がった。

J O J O? 「うぐおおおあああ?!? なあにイイイイツ!」ドバアアアアッ

『世界』のダメージが本体にフィールドバックして、体が裂ける。

第49話 父の正体と罪

J O J O 「うわああああああああああああ!!?!」

俺は叫んだ。どうにかなりそうだった。

体が裂けるなんて体験は普通の人間ならまずない。ましてや体が吹っ飛ばされる体験なんて。

しかも最近、自分が死ぬ夢を何回も見ると。

承太郎「大丈夫か承一郎？」ガチャ!

承太郎が扉を開けて来た。

承太郎「一体何が…」

J O J O 「俺に近づくんじゃあないッ!承太郎ッ!!?!」

承太郎「!!?!」

つい叫んでしまった。叫ばずにいられなかった。夢の中で見た顔、自分の体を吹っ飛ばした本人が目の前にいる。

J O J O 「ハアー、ハアー、ハアー、ハアー」

小咲「一条君？」

小野寺君が部屋に入つて来た。

承一郎「小野寺君……今日は僕と承太郎さんは一緒にいけないから仗助さん達と色々見て回るといいよ」

小咲「一条君は？」

承一郎「僕は……承太郎さんに話がある」

小咲「うん……分かった」

そう言つて小野寺君は部屋を出た。

杜王海岸——

海からの潮風が吹く海岸に僕と承太郎さんはいた。

承太郎「……ポルナレフから話は聞いている。最近誰かの記憶を見る事があると……」

承一郎「……夢を……見たんです……。どこかの……橋の上で……男と一緒にいました……」

承太郎「……」

承一郎「自分は金髪の男、もう片方は……承太郎さん……あなたでした」

あの記憶、姿は違えど忘れない。スタンドも同じだった。

承太郎「……！」

承一郎「その後、スタンド同士の激突で僕の体が吹っ飛ばされました」

承太郎「……」

承一郎「承太郎さん、教えて下さい：僕の父は何者なんですか？」

承太郎「：1987年、私が18の時に私と爺さんにスタンド能力が発現した。DIOという吸血鬼が百年前に曾祖父、ジョナサン・ジョースターの肉体を奪って生き延びて、スタンド能力を発現した時期と一致していた」

承太郎さんは静かに語り始めた。

承太郎「そしてその影響で私の母が危篤状態に陥ってしまったのだ。スタンドの暴走だ。母を救うにはDIOを倒すしかなかった」

承太郎「そして10年以上も経った後にDIOに君やジョルノを含めて5人の子供がいた事が判明した」

承一郎「：他の3人の兄さん達は？」

承太郎「2人が死亡、1人はSPW財団の更生施設に収容中だ」

承一郎「：更生施設？」

承太郎「スタンド能力を悪用する犯罪者を矯正する施設だ。：それより、君の事を教えてくれ。君の戦い方は、明らかにスタンド使いとして戦い慣れをしていると鶴君から聞いた」

承一郎「：僕の『クリスタル・ボーン』はあなたが出会う前から発現していました」

僕はゆつくりと、過去を話し始めた。

承一郎「僕がスタンド能力を発現したのは、中学の頃でした。その頃から僕は父さんの仕事を手伝うことがあつて色々と仕事をするようになりました。」

承一郎「ある日の事です。簡単な仕事のハズでした。しかしいつの間にか敵に囲まれていて絶対絶命、仲間達は僕を守って……」

承一郎「その時、スタンドが発現したんです。それで窮地を脱して……承太郎さんに初めて出会った時に言った言葉は、『すでにスタンド使いである自分にさらにスタンド能力が発現したのだろうか』という意味だったんです」

承一郎「その後、僕は各地を転々としながら傭兵として世界中をまわっていました。『ブラッディ・シヤドウ』が発現したのは『矢』に刺された時です」

承太郎「なるほど……それが君が戦い慣れていた理由か……」

承一郎「……昔から……夢は見ていました……。二人の男の……奇妙な物語……。二人が誰なのか、すぐに分かりました。二人共、僕と同じ特徴がある」

僕はシャツをめくって首筋のところを見せた。首筋には星型のアザ、左耳に3つのホクロ。

それぞれが二人の男の特徴。それが一人の人間に一緒に受け継がれているということ……。

承一郎「僕は二人の男が合わさった肉体から生まれました。だから相反する技術と体質が備わっているんです。それに、あの『矢』があつた」

記憶の中で自分を射た『矢』と、小野寺君を庇って射られた『矢』は同じ物だった。

承太郎「DIOはエンヤという老婆からスタンドを発現させる『矢』を射られて『世界』^{ザ・ワールド}を発現した。その『矢』を発掘した男はジヨルノがボスである『パツシヨーネ』の先代のボス『ディアボロ』^{悪魔}から入手した」

承太郎「『矢』は全てで6本あつた。2本は破壊され、2本は現在SPW財団が保管中。

1本は君の兄であるジヨルノが管理している。だが君を射た残りの1本が行方不明だ」

承太郎「射た奴が何者で何が目的であろうとも、『スタンド使いはスタンド使いと引かれ合う』。スタンド使いである君や鶴君達の周りにも被害が及ぶかもしれない」

承一郎「…僕は生まれた頃から父はこの世にはいなかった。だから、あなたを責めません」

承太郎「…いいのか？私は君達の父親を殺した張本人だ」

承一郎「もし父が生きていて、僕が父に会いに行くとしても殺す事しか目的はありませんよ。記憶を持っているから分かる。あの父は…パンを食べる感覚で人間を殺す吸血鬼」

承一郎「誰かが倒さなければならなかった。それがあなただけでしたよ。100

年前にD I Oを倒したのがジョナサン・ジョースターだったのと同じように」

承一郎「：僕を射た奴は何者なのか、それは分かりません。：けど、奴は小野寺君を狙つて『矢』を射た」

あれは本来なら小野寺君が射られる『矢』だった。それが逆に守るための力となつて現れた。

承一郎「奴が何者だろうと、彼女達を傷つけるといふのなら容赦はしない……！ D I O^神の息子として、それ相応の罰を与えてやる！」

承一郎「僕があゝの町とみんなを守りますよ。どんなことが起ころうと……」
僕は海を見ながら宣言した。

く小咲 side く

カフェ・ドウ・マゴ——

私達は仗助さん達と一緒に駅前オープンカフェで話していた。

康一「ここはね、僕が由花子さんに告白された場所なんだ」

千棘「ええっ？ そうなんですか？」

仗助「ああ、そうだぜ。俺と億泰は陰から見てたんだがよお、億泰の奴が泣いちまつてよお」

億泰「だってよお、あの頃おれだってあんなこと言われたこたねーのに〜」

仗助「何言ってるんだよ、お前今とても美人な奥さんいるじゃあねえか」

ちなみに奥さんの名前は京さんというらしい。

P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i

億泰さんの電話が鳴った。

億泰「『ピッ』あつ、もしもし承太郎さん？えつ、承一郎が親父に会いたい？…イイツ

スよ、じゃあおれも行きます」

そう言つて電話を切った。

億泰「じゃあ、そういうわけでおれは行くぜ」

仗助「おう、気を付けろよ」

億泰さんは場所を後にした。

小咲「億泰さんのお父さんと一条君ってどういう関係なんですか？」

康一「…億泰君の父さんと承一郎君の父親は深い因縁があつてね、承一郎君には直接的な接点はないんだけど…」

仗助「大丈夫だといいが。多分悩みを人に話さずに溜め込むタイプのやつだぜ、あい

つはよ」

虹村家――

億泰「ホントに会うつもりか承一郎？無責任な言い方かもしれないねえけど、お前見たら何しでかすか分かったもんじゃあねえぜ？」

承一郎「会います。会わなければならないわけが僕にはある」

億泰「しょうがねえなあ」

ゆっくりと階段を登る。まるでこれから死刑台に向かう罪人のように。

やっと目的の部屋にたどり着き、その部屋にいる人物：いや、かつて人間だった者と会う。

承一郎「あ……」

記憶の中で部下として会った男は、『肉の芽』と一体化して憐れな姿に変わり果ててしまっていた。

こうなるべきではなかった男。DIOという怪物の犠牲になった男。

万作「……!!？」

虹村万作だった怪物は承一郎を見た瞬間、理解したようだ。承一郎が誰の子であるかを。

万作「~~~~~!!？」

言葉にならない叫びを上げて、万作は承一郎から逃げるように、部屋の隅に隠れてし

まった。

承一郎「つ……」

こうなると思っていたが、さすがに逃げられると堪えるものがある。

億泰「だから言つただるオ？親父、お前の兄貴を見た時だつて隠れてしまつたんだぜエ？どうする？」

承一郎「いや、せめて謝罪だけでも……」

承一郎は隠れてしまつた万作に向けて膝をつき、頭を下げた。土下座だ。

承一郎「……申し訳ありませんでした!!？」

億泰「お、おい……」

承一郎「僕の父の所為で……あなたがこうなる必要はなかつた!!？父がいたからあなたは……!!？」

承一郎は謝罪の言葉を言う。神父に懺悔する罪人のように。

億泰「お、おい承一郎、お前がそこまでやる必要は……」

承一郎「いや、いいんです億泰さん。これは……僕の問題なんです……!」

承一郎は顔を上げずに言う。

承一郎「……僕を許さなくていい……!ただ……償わせて下さい……」

頭を下げて謝罪する承一郎の姿を見たからか、万作はゆつくりと部屋の隅から出て来

て、承一郎に近づいて来て、頭を撫でた。

承一郎「……………」

万作「パギー」

億泰「親父はよお…きつと許してくれたみたいだぜ」

承一郎「…ありがとう…ごごいます…」ポロ…

承一郎は涙を流した。

第50話 杜王町観光

小咲「一条君、目が腫れてるけど大丈夫？」

承一郎「大丈夫だよ、心配してくれてありがとう」

僕と承太郎さんは小野寺君達と合流した。

千棘「ほら、早く行きましょ！ 仗助さん達が杜王町の名物スポットを案内してくれるって！」

承一郎「うん、わかったよ」

僕達は仗助さん達と一緒に杜王町の名物スポットへと向かった。

仗助「よっ、アンジエロ」

アンジエロ岩『…ア、ギ…』

千棘「えっ?!? 今あの岩喋らなかつた?!?」

万里花「ま、まさか！ そんな事有り得ませんわ」

承一郎「…承太郎さんから聞いていたけど、これは酷いな…」

仗助さんのスタンド、『クレイジー・ダイヤモンド』の能力で岩と殺人鬼アンジエロが

一体化した『アンジェロ岩』。

道しるべとしてまた恋人たちの約束の場所として、不気味な外見とはうらはらに町民に親しまれているらしい。

露伴「いいところに来てくれたね！実はまだ聞きたい事があつてね！具体的にはギャングやヤクザ社会の構造とか警視庁の裏事情とか…」

千棘・万里花・鶯「…ノーコメントで…」

承一郎「ちよこつとで良ければ…」

千棘・万里花・鶯「「えっ!?」」

露伴「おお！話が分かるじゃあないか！それでどういう感じなんだい？」

承一郎「それはですね…」

仗助「…スゲエな承一郎…」

康一「そうだね…僕も結構苦手意識はあるんだけど…」

露伴「今日は特別に原稿を描くところを見せてあげるよ」

承一郎「えっ！本当ですか!?!」

『ピンクダークの少年』を描いている有名な漫画家の家、『露伴の家』。

『リアリティ』を大事に考えていて、漫画のためならクモも舐めるらしい。

小咲「本当にそんな事が…？」

康一「あつたらしいよ。漁師さんが目撃したんだって」

承一郎（康一さんの『エコーズ』ってすごいな…）

「自殺しかけた若い女を岬の岩は、優しくボヨヨンとはじき飛ばした」という漁師の目撃談から広まった名所である『ボヨヨン岬』。

地元の漁師は毎朝無事を祈り『神の岬』と呼んでいるとか。

エニグマの本『うぐ…ぐ』

千棘「えっ!??この本からも声が!??」

鶴「この町って不思議な事がたくさんありますね…」

仗助「あ、アハハ…」↑やった本人

小咲「す、すごい…。魔法学校にありそうな本ですな」

承一郎「何が書いてあるのかも判読不可能…。軽く恐怖すら抱きそうだな」

かつて仗助さんが『エニグマ』と言うスタンドの持ち主である少年、宮本輝之助を『クレイジー・ダイヤモンド』で紙と一体化させて出来た『エニグマ』の本。

杜王図書館に寄贈されている。この本を読んでいる時、たまーに『声』が聞こえるら

しい。

仗助「おーい！鋼田一のおっさん！差し入れ持って来たぞーッ!!？」

仗助さんがそう叫ぶと、鉄塔からワイヤーにぶら下がって男が降りてきた。

鋼田一「やあ仗助君達、来てくれて嬉しいよ。…おや、そちらの皆さんは？」

仗助「ああ、俺の親戚とそのダチでよおく…」

小咲「初めまして、小野寺小咲です」

千棘「桐崎千棘です」

鶴「鶴誠士郎です」

万里花「橘万里花と申します」

鋼田一「これはご丁寧にどうも。私は鋼田一豊大。この鉄塔に住んでいる者です。この鉄塔はわたしがちゃんと金を払って買った家だよ」

千棘「い…家…？」

鶴「これが家とは…すごいですね…」

億泰「お前すごいよなあ。もう十六年も鉄塔に住んでいるもんな」

万里花「じゅっ、十六年ですって…!!？」

承一郎「あ、これどうぞ」

僕はお菓子を鋼田一さんに渡した。

鋼田一「あ、ありがとうございます。さつきスズメを捕まえたのもし良かったらごちそうしますよ！」

承一郎「なるほど。で、味は？」

小咲・千棘・万里花・鶯「えっ?!?!」

承一郎「…うまいじゃないか！」

不要になり捨てられた鉄塔で全てを自給自足で生活している鋼田一さんが買い取った『送電鉄塔』。

調味料など生活に必要な物を渡すことで写真を撮らせてくれる。

これで一応名物スポット巡りは終わりのハズだったが…、

千棘「ねえもやし、この地図なんかおかしくない？」

突然桐崎さんがそんな事を言ってきた。

承一郎「え?どこが？」

千棘「ここよ。オーソンとドラッグのキサラの間、小道なんて地図には載ってないわよ」

僕は地図を見た後、オーソンとキサラの間にある小道を確認した。

承一郎「確かにこの地図、おかしいね」

千棘「ねえ、中に入ってみない？」

仗助「どうしたお前ら？」

仗助さんがやって来た。

承一郎「仗助さん、桐崎さんがこの地図がおかしいと……。見たんですけど、確かにおかしいなって……」

仗助「お前、この小道は『決して後ろを振り返ってはいけない小道』だぜ！」

承一郎「『決して後ろを振り返ってはいけない小道』？」

仗助「ああ。いわゆる『この世』と『あの世』の境目ってヤツでな、この小道で迷いこんだ時、後ろを振り返ったら……」

千棘「振り返ったら……？」

承一郎「……」ゴクリ

仗助「魂が『あの世』にひっぱられてしまうんだ。つまり『死ぬ』って事だ」

承一郎「……『死ぬ』……？」

千棘「それ……ホントなんですか？」

仗助「信じられないだろ？ だけどよ、実際に死にかけた奴がいたんだよ」

承一郎「……誰なんですか？」

仗助「康一のやつだよ」

承一郎「康一さん……？」

仗助「そうなんだよ。康一曰く、『無数の手が自分を掴んでどこかに引きずり込もうとしてきた』だってよ」

承一郎「あの康一さんが嘘をつくとは思えないし、あながち本当の事かもしれないですわね」

まあ『スタンド』や『吸血鬼』がいる時点でそういうパワーがある小道というのも信憑性は高いけど……。それに仗助さんの焦りよう……相当ヤバイ場所なのだろう。

千棘「うーん、到底信じられないわね……」

鶯「お嬢、どうしたんですか？」

そんな時に鶯さんがやって来た。

千棘「丁度良かった！ねえつぐみ、この小道に入ってみましようよ」
つぐみ「えっ？いいですよ」

そう言つて二人は小道の中に入ってしまった！

承一郎「な、何ッ!?」

仗助「おい、こいつはヤバイぞッ！あの小道の中で振り返つたら……」

承一郎「クソッ！なんて事だ！」ダッ！

仗助「承一郎ッ！絶対に後ろを振り向かせなよ！俺は億泰達を呼んでくるッ！」

第51話 振り返ってはいけない小道

振り返ってはいけない小道——

千棘「なんだろう、ここ……。何か奇妙ね……」

二人は小道のあまりの静けさから違和感を感じていた。

鶴「そうですね……その『この世』と『あの世』の境目という話も頷けるものかもしれない
ませんか」

千棘「でも今振り返っても大丈夫じゃあないの」

だがまだ二人はポストの手前。二人はまだこの小道の恐ろしさを知らない。

承一郎「クソツ、間に合ってくれ……!」

承一郎は二人を止めるためにかなり急いで走っている。

承一郎は電話をかける。

康一『もしもし! 承一郎君?』

承一郎「康一さん、振り返ってはいけない小道で振り返ってもあなたは無事に帰還出来た! それはどうやって?!?」

康一 『えつとね、それは露伴先生のスタンド能力で大丈夫だったんだけど…』

承一郎 「早く言つて下さいッ！」

康一 『…多分、出口までたどり着ければ脱出出来ると思う』

承一郎 「…ありがとうございます！」

そのまま走り続ける。

J O J O (…ヤバイかもな…)

承一郎 「なんの事だい？」

J O J O (前に情報網に引つかかったやつがあつただろう？ 杜王町で『爆弾スタンド』の殺人鬼が事故死したつてヤツだ。その情報の後、この町の行方不明者数が激減した)

承一郎 「つまりどういう事だい？」

J O J O (この小道を振り返つたら見る無数の手…それは多分この町で殺された人間達の『怨念』というか…『負』のパワーが極端に集まって具現化する場所なのかもしれない)

承一郎 「だとしたら、その『怨念』は『道連れ』を望んでいるのか…ッ！」

走る。走る。走る。

力の限りに走る。

承一郎 「いたッ…！」

承一郎が千棘と鶯を見つけた時、千棘は…
後ろを振り返っていた。

二人が異変に気付いたのは、ポストを越えたすぐだった。
ズギユウウン！

千棘・鶯「！」

千棘「い…今、ポストを越えるとき…」

鶯「何が足の間を通り抜けて私の後ろに…！」ズギユン！

鶯は『T G E』の分裂体を一人だけ出して振り返らせた。

鶯「…うわあああああ!!?!」

次の瞬間、分裂体は消えて見るもおぞましい経験が鶯に蓄積された。

千棘「つぐみ、どうしたの？」

鶯「振り返っちゃダメです！お嬢ツ！」

鶯は振り返ろうとする千棘を必死に制する。

千棘「…！」

鶇「ゆっくりと……落ち着いて歩いて下さい！」

千棘は鶇の必死な警告で只事ではないと知り、ゆっくりと歩いた。

ヒタリ、ヒタリ、ヒタリ……。

千棘「な……なにか後ろからつけて来ているわ。さつきまではいなかったというのに……！」

鶇「お嬢、気をつけて下さい。どうやらその小道の話、本当みたいです」

ゼハアアア……、ブバアアア……と後ろから吐息がかかる。

千棘「やっぱりなにかいるわ、私の頭のすぐ後ろになにかいる……！」

鶇「私の後ろにもいます。『なにか』が後ろを振り向かせようとしています。おそらく振り向かせないと……振り向かせて見させないと引きずりこむ事が出来ないようです。だから絶対に振り向いてはいけません」

鶇の指示に従い、ゆっくりと前を向いて歩いていく。

ピチョン……ピチョン……。

千棘「こ……今度は首筋に……なにか生温かい液体のようなものが……」

鶇「お嬢、光が見えてきました！多分あれが出口だと思います！」

千棘「少し急ぎましょ！」

鶇「お、お嬢！気をつけて下さい！」

千棘は足早に歩いて光へ進む。

鶯「お嬢、もう大丈夫みたいですよ」

そこで不意に鶯の声が聞こえた。

千棘「そうなの？よかったあ、ホントに恐かったわ」

鶯の言葉に安堵したのか、千棘は後ろを振り返ってしまった。

鶯「嘘ですッ！お嬢！今のは私の『声』ではありませんッ！」

千棘「え!!？」

鶯「こ…こんな事が…」

だが、すでに遅かった。

ドオオオオオオオオオオオオオオ!

次の瞬間、闇の中から無数の手が千棘に襲いかかる!

千棘「きやああああああああ!!?!?!?!」

その時、千棘の肩を後ろから引っぱる腕があった。

「やれやれ、本当にお前は世話がやけるな」

その腕の正体は…

千棘「じよ、承一郎…?!？」

J O J O 「待たせたな」

それは二人に追いついて、後ろを振り向いたJ O J Oだった。

ブラッディ・シャドウ

B B 「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア!!？」ドゴドゴドゴドゴツ!

J O J Oはブラッディ・シャドウで襲いかかってくる手をラツシユで一つ一つ正確に叩き込みながら千棘と鶴と共に出口まで走る。

J O J O 「急げ!このまま走り抜けるぞツ!

J O J Oはブラッディ・シャドウの背中にある球体十個全てを一直線上に並べ、空間を繋げる。

三人はブラッディ・シャドウが作り出した空間から空間へ跳んで出口へ進む。

だが、道連れを望む無数の手のひらは三人を引きずりこもうとする。

仗助「来たぞ、億泰!」

億泰「おう、任せとけ!」

仗助と億泰が出口で待っていた。

億泰「『ザ・ハンド』!!?」ズギユン!

億泰はスタンド、『ザ・ハンド』を発現して右手を大きく振りかぶる。

億泰「こつちに…来いッ！」ガオオン！

『ザ・ハンド』は右手で空間を削り取り、それが閉じる反動で承一郎達は瞬間移動する。光が広がり、三人は無事帰還出来た。

承一郎「ハア、ハア、ハア…」

千棘「ハア、ハア、ハア…」ポロポロ…

鵜「ハア、ハア…危なかった…」

仗助「本当にヤバかったぜ、お前ら」

億泰「ああ、だがよくやっただぜ承一郎。お前がいなかったらこの嬢ちゃん今ここにはいねえぜ」

承一郎「ありがとうございます。億泰さんの『ザ・ハンド』がなければ脱出する事が出来ませんでしたよ」

千棘「あ…ありがとうございます。アンタが来なかったら私…」

承一郎「礼はいらない。体が勝手に動いただけだ。それに…」

千棘「それに…？」

承一郎「僕が間に合わなくて助けられなかったら、僕の中に後味の悪いものを残す。ただそれだけだよ」

こうして、『振り返ってはいけない小道』を含めた杜王町の名物スポット巡りはひとま

ず終了した。

第5 2話 ジョセフと徐倫来日

承太郎「今日は杜王町にジョセフ・ジョースターが来日する」

承太郎が朝食の時にそう告げた。

承一郎「…ジョースターさんですか？」

承太郎「ああ。今日の正午、杜王港に到着するとの事だ」

承一郎「そうなんですか…」

承太郎「それとジジイ曰く、『特別なゲストを連れて来るから驚くだろう』と言っていた。あのクソジジイ…面倒な事をやらかさないといいが…」

承一郎「アハハ…」

千棘「へえ、承一郎の親戚ね…」

承太郎「承一郎にとってジジイは血縁上甥にあたる。…奇妙だがな」

小咲「えっ?!? 確かジョースターさんって…」

承太郎「92歳だ」

千棘「すごい年上じゃあないの! アンタの父親って一体…」

承一郎「い、言っただろう? 家系が奇妙だって(百年も生きた吸血鬼なんて口が裂け

ても言えない……)」

承太郎「まあ、それまでは自由時間だ。皆好きに過ごしてくれ」

万里花「なら承一郎様、私とカフェ・ドウ・マゴでチョコレートパフェでも食べませんか？」

千棘「ちよつと、アンタなにダーリン誘おうとしてるのよ！」

承太郎「……やれやれだぜ」

キング・クリムゾン!!?

正午、杜王港——

ザバアアア——

ツ

船、トラフィック号から一人の男が降りてきた。92歳とは思えないガツシリとした体つき。ハッキリ言つてかなり若々しい。

その目からは歴戦の猛者である事が伺える。

承一郎の甥、ジョセフ・ジョースターだ。

静「パパー——！」ダキッ

静がジョセフに向かって走り、抱きついた。

ジョセフ「久しぶりじゃのう静。仗助と元気にしとつたか？」

静「うん！パパ！」

ジョセフは承一郎に気づき、承一郎に顔を向けた。

ジョセフ「君が…承一郎君じゃな？ワシはジョセフ・ジョースターじゃ」

承一郎「初めましてジョースターさん。一条承一郎と申します。よろしくお願ひします」

ジョセフ「そんなに堅苦しくしなくてもいいんじやよ。よろしく頼むのお」

承一郎とジョセフが握手を交わしている時に、船からもう一人降りてきた。

？「やれやれだわ。ひいおじいちゃん、久しぶりの船旅なんだから無理をしちゃあダメでしょ」

承太郎「お前は…徐倫！」

徐倫「久しぶり、父さん！」ダキッ

徐倫も承太郎に向かって走り、抱きついた。

千棘「えつと…この女性は…？」

承太郎「紹介しよう。娘の徐倫だ」

徐倫「初めまして、空条徐倫よ。よろしくね」

千棘「えっ?!?承太郎さん娘さんがいたんですか?!?」

承太郎「ああ、徐倫は無実の冤罪で逮捕されていたんだが…どうしてここに？」

徐倫「仮釈放で何日か外で過ごせる事になってね、ひいおじいちゃんと一緒に来ちゃったのよ」

承太郎「やれやれ、ジジイが言つてた『特別なゲスト』とはお前の事だったのか…」

承一郎「初めまして、一条承一郎と申します。よろしくお願ひします、徐倫さん」

徐倫「空条徐倫よ、よろしく頼むわ。後、その女の子達は？」

承一郎「僕の友人達で…」

小咲「は…初めまして、小野寺小咲といいます。よろしくお願ひします」

千棘「桐崎千棘です。よろしくお願ひします」

鶯「鶯誠士郎です。よろしくお願ひします」

万里花「橘万里花と申します。よろしくお願ひしますわ」

徐倫「よろしくね。それにしても…」

承一郎「…?どうしたんですか?」

徐倫「いや…アンタって罪な男ね」

承一郎「?何がですか?康一さんから言われたんですが…」

徐倫「天然か…あなた達も苦労するわね」

小咲・千棘・鶯・万里花「………」

全員無言の肯定である。

承一郎「え？だから何がですか？」

徐倫「…やれやれだわ」

キング・クリムゾン!!？

杜王グランドホテル——

徐倫「本来ならエルメースとアナスイと来たかったんだけど、二人共まだ刑務所の中なのよね」

承太郎「そうだな、二人にはあの時に世話になったからな（まあ、アナスイには結婚の許可はしないが）」

承一郎「ん？（何か聞こえたような…）」

承一郎達は杜王グランドホテルのスイートで話をしていた。

ジョセフ「ほれほれ承一郎君。君も飲まんかい」

承一郎「いえ、僕はまだ未成年ですのぞ」

承太郎「おいジジイ、昼から飲み過ぎだぞ」

ジョセフ「いいじゃろう別に！久しぶりに娘達に会ったんじや、それぐらいいいじゃろう」

仗助「それやあ嬉しいだろうけどよお、限度つてのを考えろよジジイ！」

ジョセフ「わかったわかった」

久しぶりの家族との団欒なのだろう。とても楽しそうだ。

ちなみに千棘達は別室にいる。

ジョセフ「さて、承一郎君：君に話さなくてはいけない事があるの」

ジョセフの目が真剣になった。

承一郎「：はい」

ジョセフ「まず君の父の話じゃ。すまなかったのお、実は君達D I Oの息子達がいた事が発覚したのは2005年、ワシのスタンド『ハイミット・パール隠者の紫』の念写によつて君の兄のジョルノ君が写された時じゃ」

承太郎「その後他に3人の君の兄を確認したんだが、スタンド使い同士の戦いで2人死亡してしまつた」

徐倫「ごめんなさい、私達と戦つて亡くなつてしまつたの」

承一郎「：父の事はいいんです。承太郎さんに話した通り、誰かが倒さなければならなかつた。兄さん達は：僕やジョルノ兄さんのような『きつかけ』がなかつたんですね
：」

ジョセフ「それとワシの遺産問題じゃ。ワシもかなりの歳じゃからのお。君もD I Oの息子である前にジョースター家の一員だから、君にも遺産相続権があるんじゃないよ」

承一郎「…僕は別にいいですよ。今の生活には満足していますし。…じゃあ一ついいですか？」

ジョセフ「なんじゃ？」

承一郎「イギリス、リヴァプールのジョースター邸があった場所を…」

ジョセフ「ほう、ジョースター邸かの？それだけでいいのかの？」

承一郎「はい、それだけでいいんです。父が暮らしていた場所ですし。…たまに父の墓参りに行かせてもらえらくらいで充分なんですよ」

承太郎「そうか…ところで承一郎」

承一郎「何ですか？」

承太郎「君は『天国へ行く方法』を知っているのか？」

やはりくると思っていた。DIOの記憶を持っていると知ったら当然の質問だ。

承一郎「…ええ、知っていますよ。ですが、やろうとは思いませんよ」

承太郎「…理由は？」

承一郎「理論としてはとても興味深いですよ。『時の無限の加速』による『世界の一巡』…その中で恐らく天国に到達した人物は運命の操作が可能になるんでしょう。…でも、『運命』は誰かに『決められる』ものじゃあない、自分の力で『乗り越える』ものだと思います。乗り越えてこそ意味があるものだと思うんです」

承太郎「…そうか、安心したよ。君にもやはり『黄金の精神』を持っているんだな」
承一郎「僕は信じた道歩いていたい。…それだけですよ」

ジョセフ「…さて、承一郎君ももうワシの息子同然じゃ！これからはワシ達のを頼ってくれ。君へのサポートも惜しまないつもりじゃ」

重苦しい話から一変、明るく振る舞うジョセフ。

承一郎「…ありがとうございます」

承太郎「…承一郎？どうして泣いているんだ？」

承一郎「え？」

承一郎はいつの間にか流れていた涙を拭いた。

承一郎「あ、いや…物心ついた時には家族がいなかった僕にとつては、家族というものが一番憧れたものだったんです。だから、息子同然つて言ってもらえて嬉しいんです」
「よ」

承太郎「承一郎…」

ジョセフ「よし！今日は飲みまくるぞ！承一郎君もつき合ってもらおうかの！」

仗助「だからジジイ！飲み過ぎるなって！」

承一郎「…分かりました！つき合いますよう！」

徐倫「承一郎!?？」

承太郎「ダメだろう。法に引つかかる」

承一郎「法が怖くてヤクザなんてやってられませんよ。それに…バレなきや犯罪じゃあないんですよ」ニヤリ

承太郎「…やれやれだぜ」

承一郎「大丈夫ですよ。組の宴会とかでよくつき合わされてるんで慣れてますし」

その後、承一郎はジョセフ達を飲みまくった。

ちなみに千棘達は静と一緒にガールズトークをしていた。

第53話 11人の男達 その①

翌日、杜王駅――

小咲「色々あったけど、楽しかったね」

千棘「え、ええ、そうね……↑死にかけた人

鶴「そ、そうですね……↑死に（ry

万里花「?どうしたのですか?」

千棘「い、いやなんでも……」

承一郎「あはは……まあ楽しかったね。お土産代がヤバかったけど……」

僕達は杜王駅で新幹線を待っていた。皆への土産が山積みだ。

承太郎さんは夏休み中は杜王町に少し滞在した後、アメリカに帰るようだ。

承一郎「それじゃあ承太郎さん。最後の『矢』の件、よろしく願います」

承太郎「分かった、私の方も調査しておこう。だが承一郎、一つ胸に刻んでおいてくれ」

承一郎「……『スタンド使いはスタンド使いと引かれ合う』……ですか?」

承太郎「そうだ。今、本海苔町は急激にスタンド使いが増えてくるはずだ。その事を

充分注意してくれ」

承一郎「分かりました、安心して下さいよ。僕の能力は、大切なものを守るためにある」

承太郎「…その言葉で安心したよ」

ジョセフ「君はもうワシ達の家族じや。何かあったらいつでも連絡してくれ。SPW財団が総力を挙げて君を協力してくれるはずじや」

承一郎「ありがとうございます」

仗助「また来いよ、歓迎するぜ！」

承一郎「はい、また来ます」

徐倫「私も釈放されたらそっちに向かうからその時はよろしくね」

承一郎「分かりました」

向こうでは由花子さんが4人に何か話している。何を話していたか聞いてみたけど秘密らしい。

プシューーーーッ

SPW財団職員「承一郎様、そろそろ発車いたします」

承一郎「分かりました。…皆さん、さようなら！お元気で！」

千棘「さようならー！」

小咲「お世話になりました！」

鵜「ありがとうございます」

万里花「お世話になりましたわ」

仗助「また遊びに来いよなあ〜！」

静「また来て下さいね〜！」

徐倫「また会いましょう！」

ジヨセフ「承一郎君、友達を大切にの〜！」

億泰「今度来たらよお、連絡入れてくれよなあ〜！」

由花子「皆頑張つてね！」

康一「皆元気でね〜！」

ガタンゴトン、ガタンゴトン……。

承一郎（僕が三年かけても調べられなかった事でも、SPW財団なら世界中の情インテリジエンス報をより深く探れるはず…）

J O J O（そこから母を殺したスタンド使いの情報が入ってくるはず。なんとしてでも手に入れてみせる、母を殺した奴の情報を…！）

承一郎とJ O J Oはそう考えていると、何かあったのか急に立ち上がった。

小咲「一条君、どうしたの？」

承一郎「ん？ちよつとトイレにね…」

千棘「早く済ませなさいよね。カラオケまたやるんだから」

承一郎「分かったよ」

そう言つて承一郎は車両から移動した。

承一郎「あの…すみません」

承一郎は別の車両にいる男に声をかけた。

男「はい…なんででしょうか？」

承一郎「あなた…誰ですか？S P W財団職員 彼はどこにいるんですか？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

男「私ですか？私はS P W財団の職員ですが…」

承一郎「いや、彼はS P W財団の職員は自分1人だけと言っていた…。それに、波紋

の生物探知では11人の反応があつたんだ」

男は黙つて承一郎を見る。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承一郎「しらばっつくれないで下さい…つまり、あなたが敵だつてバレてるんだよ！」

瞬間、男の懐から銃が取り出される。

承一郎「ハッ！」

承一郎は素早く男の銃の向きを手で変え、波紋を練った拳を男の顔面に叩き込む！

男「ブゲツ！」バチイ！

承一郎「動くな」スチャ！

うつ伏せに倒れた状態の男の背後に銃を構える。

男「うつ…」

承一郎「言っておくが僕は撃つのに躊躇しない。カラオケが置いてあるような車両だ。車両全てに防音効果が施されているはず。この車両で起こった事は桐崎さん達には聞こえない」

男「くっ！」スチャ！

男が銃をもう一丁懐から取り出す。

ダアン！

承一郎の銃弾が男の銃を持っていた手に穴を開ける。

男「がああああああ!!？」

承一郎「言っただろ？躊躇しないと。その眉間にも穴が開けられたいのなら動くとい
い」

男「があああああ！」

男はもう片方の手でナイフを承一郎に刺そうとする。

承一郎「リスキニハーデン・セイバー！」

シユパアアン、ゴトン……

承一郎の左腕の刃は男のナイフを切断、そして男の首をも切断した。

J O J O（殺してしまったか）

承一郎（いや、刺客は全部で11人はいた。残る10人の中から1人だけ残せば問題ない）

ズキツ……と左腕の肘から先の部分に鋭い痛みが走る。

承一郎「クソ……」

J O J O（またか痛むのか？承一郎）

承一郎（ああ、幻肢痛だ。ファントム・ペイン今こうやって吸血鬼の再生能力で生え治っているけど、まだ喪うしなった腕の感覚がある）

承一郎は男の死体を調べるが、武器はそれくらいしかない。

承一郎「それにしても……残りの10人はどこだ？生物探知には反応があるが、スタン
ド使いだとしたら奇妙だ」

J O J O（確かに……スタンド使いは自分の能力を他人に明かす事を嫌う。どっちかと

いうと、D I Oを倒した承太郎さん達は珍しい方だ)

承一郎「つまり：それほどまでに息が合っているチームのはずなのに1人で挑み掛か
るのは不自然だ」

J O J O (なるほど、もしくはスタンド能力にその秘密があるのかもな…)

承一郎は男の死体を背に右手に銃、左手にナイフを取り出し、銃の銃把グリップに逆手持ちの
ナイフの柄を添える。

近接戦闘
C Q Cの構えだ。

承一郎「奴らの反応はこの車両の奥側からあった。ゆっくりと慎重に行こう」
足音を殺し、まわりに溶け込むように移動する。

別の車両へのドアに手をかける。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド

その時、承一郎は見た。

死んだ男の背中の『模様』から出て来た、2人の男を。

承一郎「なっ…!!」

ダアン!ダアン!

車両に、銃声が響く。

第54話 11人の男達 その②

く小咲sideく

小咲「……？」

何かが聞こえたような気がした。何かが風に乗って聞こえたような気がした。なんていうか……虫の知らせ、いや風の知らせというべきなのだろうか。

千棘「小咲ちゃん、どうしたの？」

小咲「えっ？一条君、遅くないかなって……」

千棘「あいつの事だから、どうせトイレで吐いてるんじゃないの？今日気分悪そうだったし」

今日は確かに気分が悪そうに見えた。昨日の夜に何かあったのかもしれない。だが、そういう事ではない。

千棘「じゃあ、次小咲ちゃんの番！」

千棘ちゃんからマイクをもらいながら、一条君のことを考えていた。

その時、私を含めて誰も気付いていなかった。

私の背後に、ヴィジョン像が寄り添っていた事に。

〈小咲 side out〉

男の死体から現れた2人は銃弾を撃ち込んだ承一郎に目もくれず、千棘達のいる車両に移ろうとしていた。

ガチツ…！

しかし、ドアが開かない。まるで固定されたように動かない。

男2 「これは…」

男3 「どけ」 スチャ

ダアン！ダアン！

銃弾をブチ当ててドアを開けようとするが、ドアに亀裂が入ったかと思うと、亀裂が元に戻っていく。

承一郎 「無駄だ。すでに手は打った」

男2・3 「ヤ」

男達が後ろを振り返ると、承一郎が立ち上がっていた。

承一郎の体には二つの亀裂が入っているが、次第に亀裂がなくなっていく。

承一郎「すでに僕のスタンド、『水晶の骨』はクリスタル・ボーンそのドアに骨の膜を生成した。破壊するのは骨が折れるぜ。骨だけにね」

承一郎は銃をクルクル回した後に銃口を男達に構える。

承一郎『僕だけを狙うならまだしも、彼女達を襲う事は許さない。あなた達……『覚悟して来てる人達』………ですよね。人を『始末』しようとするって事は逆に『始末』されるかもしれないという危険を常に『覚悟して来ている人達』ってわけですよ……』

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド

承一郎は骨で刀を生成し、波紋で身体能力を上げたスピードで1人を左斜めから斬りおろし、2人目を右斜め斬りあげて仕留める。

しかし、その2人からも男が現れる。

承一郎の2発の銃弾は死体の胸を貫通するが、関係ないように裏側に移動して承一郎を撃つ。

承一郎はクリスタル・ボーンで銃弾を弾き飛ばす。

承一郎は、敵のスタンド能力を観察していた。

承一郎（ひとりの『背中』から2人が出て来た………少なくともそう見えた！命中した銃弾の銃創が死体の胸を貫通しているのに影響なくそいつの裏側から出て僕を狙った！）

男達は死体から一斉に現れて銃を撃つ。

承一郎は千棘達とは反対側の車両に移り、銃撃を躲す。

男の1人が車両と車両への通路沿いの壁に隠れた。

承一郎（『血ブラッディ・シャドウの影』!!）

承一郎は空間を繋げ、銃弾を男の顔面まで繋げた。

承一郎（『模様』だッ！最初に撃たれた時に見た！背中背中の『模様』から男どもが浮き出るように出て来たッ、そういう『スタンド』だ！しかもここへ来たのが1人なら、つまりあと残り7人があの死体にそれぞれ入ってるって事かッ！）

JOJO（鵜ウに似たタイプのスタンドだだ。だがそれどころかお互いの『背中』から『背中』へ……『死体』から『死体』へ、空間を無視して移動しあえるみたいだ。今倒した奴からも出て来る……）

承一郎の強み、それは二重人格だからこそ成せるダブルシンク二重思考。それに基く観察眼や冷静な判断力だ。

死体の一つから男が顔を出す。

承一郎「やれやれ、『ヤツらを倒す』。『彼女達も守る』。『両方』やらなくつちやあならないってのが『2代目』のつらいところだな」

コロコロ……と何かが転がった。

承一郎「う、ウソだろ……」

それは手榴弾グレネードだった。

承一郎「オラアッ！」バシッ！

承一郎は手榴弾を車両の後方に弾き飛ばす。

ドゴオオオオオン!!?

爆風が承一郎の体を打ちつける。

承一郎「くっ…！」

J O J O (このままじゃあギリ貧だな)

承一郎が銃をマグ交換チェンジしていると…。

ズル…ズルリ…ズルツ…ズルリ…

と何かを引きずる音が聞こえた。

承一郎「こ…コイツはツ!!? まずいぞツ!!?」

死体が動いている。まるで芋虫のように、地を這って動いている。

承一郎「死体が近づいてくるぞッ! 模様の中のヤツらが動かして引きずっているんだッ! こっちの車両の方に来るぞッ！」

死体の中に潜んでいればダメージがない。それを利用したのだ。

J O J O (クソ、まさにケツに火がついた状況だな)

承一郎「こうなったら…死体の群れに飛び込むか…！」

吸血鬼や屍生人ゾンビは痛みを感じない。

100年前、ディオがジオナサン・ジョースターによって体が真つ二つに斬られても平気なのはそのせいだ。

痛みを感じるのは太陽の光を浴びるか波紋を流し込まれるからだ。

だが、承一郎は半分だけが吸血鬼だ。痛覚の完全遮断シャットアウトは出来ない。

J O J O（だが、いくらスタンドが速くてもあの死体の中に突っ込むのは自殺行為だ。無茶が過ぎるぞ）

承一郎（いや、やるしかない！僕達は負けるわけにはいかない！母の真相を知るために……！）

承一郎の脳裏をよぎるのは、母の葬式。

棺の中で好きだったオオアマナの花に囲まれて冷たくなった母の前に、涙を流した自分。

無力だった自分を何度責めただろうか。

必死になって母の過去を探り、母が殺されたのだと知った時、自分の中で燃え上がった漆黒の炎は今も瞳の中で燃え続けている。

承一郎（母の真相を知るために、コイツらは絶対に倒すッ！例え何が起ころうと！）

承一郎を産む前、母はアメリカで有名な秘密エージェント工作員であったということが判明した。

そして今襲って来ている刺客達は、明らかに訓練された動きをしている。身のこなし

や銃の種類、顔立ちなどもアメリカの人間、しかも軍の人間だ。

承一郎（母の真相につながる手掛かりをヤツらが握っているはずなんだ！僕は知りた
いんだ、母の真実を！母は何故死ななければならなかったのか？その真実を知りたいん
だ！）

J O J O（…承一郎、俺が言うのもなんだが過去に固執するな。俺達は未来のために
戦うんだ）

承一郎「…ああ、ならば彼女は彼女達を守るために戦おう！」

J O J O「…その言葉を待っていた」

瞳が紅くなり、入れ替わる。

J O J Oの額―ちようど昔千棘を守って負った傷の位置と一致していた―から白い
破片が突き出た。

それはまるで鬼。復讐のために一度堕ちた鬼は、今度は守るために戦うことを改めて
決意した。

J O J O「…さあ、来い！」

第55話 11人の男達 その③

J O J O 「…さあ、来い！」

J O J O は空間で死体の中に入った。

死体はズルズルと承一郎の周りを180度囲っている。

とてもシユールな状況だが、そこに漂う緊張感が生死をかけた戦いであることがわかる。

死体の中から男達が出て来た。しかも前と後ろから一人ずつ。

ダアン！ダアン！ダアン！

J O J O は銃弾を前の男に撃ち込んだ。しかしこのままでは背後の敵に対処出来ない。

ダアン！ダアン！ダアン！

だが、J O J O は弾丸を正面に撃ち続ける。

背後の男はゆっくりと崩れ落ちる。

J O J O 『ブラッディ・シャドウ』：背後に空間を繋いで弾丸を撃ち込んだ」

だが、前と後ろの男達はJ O J O にしがみつく。

その体には、ピンが抜かれた手榴弾が何個も纏われていた。

J O J O 「コイツらッ!!? 手榴弾を自分の体にッ!!?」ピキピキ…

J O J O は骨の鎧の硬度を上げるが…

ドグオオオオオオオオン!!?

爆発が連鎖した爆発をモロに喰らうJ O J O。

いくら骨の鎧を纏っていると云つても、沢山の手榴弾の連鎖爆発は耐えきれない。

ダアン!ダアン!ダアン!

男達は爆死した二人の事など見向きもせずにJ O J Oに撃ち込む。

J O J O 「ぐああッ!」

承一郎(このままだとやられる…ッ!だがコイツらの目的は何なんだ? 僕を始末するためなら小野寺君達のいる車両に移動する必要はないはず…)

J O J O (だとしたら、コイツらはの目的は俺達の始末と、何かの奪取なのか…?)

承一郎(だけど、まずコイツらを倒さない! J O J O、壁際に移動してくれ!)

J O J O (了解だ)

片方が作戦を練り、もう片方が作戦を実行する。

『右を見ながら左を見る』。そんな一人では不可能な事を可能にする。

まさに一人で二人。それが承一郎とJ O J Oなのだ。

J O J O 「ハア…ハア…」ズリ…

J O J O は弱った演技をしながら壁際に移動する。

J O J O 「ハア…ハア…」

男「死ぬ」スチャ

男達は銃を向ける。

J O J O 「ハア…ハア…俺達は何も考えずに壁際に移動すると思っ
ているのか？俺達
が自分の能力を知らないとしても思っているのか？」

承一郎とJ O J O は波紋と吸血鬼の能力を研究し尽くした。今では父二人の技が使
えるまでに成長した。

J O J O 「逆だぜ…これならお前ら全員をまとめて捕らえる事が出来るからだぜ！」

ザワザワ…とJ O J O の髪がうごめく。

J O J O 「『死髪舞剣』ツ!!?」ビシュツッ!

J O J O の黒髪が伸びて、男達を拘束するツ!

『死髪舞剣』とはツ! 100年以上前にディオが屍生人として使役していた黒騎士ブラ
フォードの技だ!

髪の毛を自在に操りジョナサンを苦しめた技でもある!

本来はブラフォードの技ではあるが、新婚旅行中のジョナサンを奇襲する時にディオ

も使用していた！

承一郎「さらにツ！髪のを伝わる波紋疾走！『黒髪ブラックヘアの波紋疾走』!!？」バシィツ！
髪のに波紋が伝わり、男達に直撃する！

承一郎は吸血鬼と波紋使いの両方の能力を得ている。

だがストレイツオとは違い、吸血鬼の体で波紋を練っても肉体は消滅しない。

男達は声を上げずに倒れていく。

ダアン！ダアン！ダアン！ダアン！

J O J O は倒れた相手に一人ずつ銃弾を撃ち込んでいく。尋問をするのは一人だけでいい。

J O J O 「アンタは…母を知っているのか…？」グイツ

J O J O は最後に生き残った男の頭を掴む。

男「……」

J O J O 「このlook into my evil eyes邪悪な瞳を見ろ…」

J O J O の紅い目から火花が走り、吸血鬼の催眠術がかかる。

J O J O （…ん？こいつ、何か精神プロテクトのようなものがかかっているぞ？）

J O J O は男の記憶のさらに奥を探る。

J O J O 「…！こ、これはツ…！」

男の記憶が映像となって映し出される。

———
どこかの建物の中から映像が始まった。

男と他の男達^が振り向くと、そこには誰かが立っていた。

塩基配列の描かれた包帯状のラインが全身に走っており、顔の王冠のような物と肩の辺りは紫色の装飾品のようなもので覆われている。

人の形をしているが、どう見ても人間ではない。

だが承一郎とJ O J Oにはこの異形には見覚えがあつた。

承一郎（これはスタンドだ！しかもこのスタンドは……！）

J O J O（白^{ホワイト・スネイク} 蛇！バカなツ！本体であるエンリコ・プツチは承太郎さん達に敗れ去つたはず……！）

ホワイト・スネイク（以下HS）『…君達に任務が下された。任務内容はこの少年の始末、それと『あの御方』の『遺体』の回収だ』

J O J O（何を言っているんだ?!? 『遺体』なんて物は俺達は持っていないぞ!）

HS『君達も知っている通り、『あの御方』の『遺体』にはとてつもない力^{パワー}が秘められている。我が祖国のさらなる繁栄の為に、『遺体』は必要だ』

承一郎（『あの御方』…？一体何者なんだ？死後の肉体にまで力があるなんて…）

HS 『君達にはこの『DISC』^{ディスク}が相応しいだろう…。閣下の期待に答えられる事を祈るよ』

ホワイト・スネイクは『DISC』を男達に差し込んでいく。

そこで、映像が乱れる。

—————

JOJO 「…なるほど、必要な情報は分かった」

JOJO は男を離し、千棘達がいる車両へ歩き出す。

男は懐からコンバットナイフを取り出し、後ろからJOJOに襲いかかろうとする。コンバットナイフが刺さろうとする瞬間に、

ガシィッ！

JOJO は男の首を掴んだ。

ピッキイイ—————ン!!？

その瞬間、男の体が首から下まで氷漬けになった。

JOJO 「…『気化冷凍法』…」

JOJO は体の水分を蒸発する事によって気化させ、男の体の熱を奪い、凍らせた。

男「ぐっ……！」

J O J O 「貴様……そんなに仲間の後を追いたいのか……」

J O J O は男の体を片手で持ち上げた。

J O J O 「いいだろう！ならば！最も残酷な死を贈ろう！」

J O J O の紅い瞳には、漆黒の炎が燃えていた。

J O J O は承一郎と記憶と経験と共有している。

J O J O という人格が形成されたのは母が亡くなってからだが、母への愛情は承一郎と同じくらいある。

その母が殺されたと知った時、J O J O にも憎悪の炎が燃えていたのだ。

J O J O 「死の忘却を迎え入れろ!!？」

ドバアアアアアン!!？

バラバラ……と男の体が砕かれ、散っていく。

J O J O 「そういえば、名前を言っていないかったな」

J O J O は一旦車両に向かう足を止めて、言う。

ジョニイ「俺はジョニイ・ジョースター。コードネームは……The ^憎Venom、……
またの名をViper ^毒だ」

J O J O ……いや、ジョニイ・ジョースターは無情も砕いた男を見向きもせずと言った

後、車両に戻った。
その額には、角がなくなっていた。

第56話 嘘発見器つて性能がすごい

七月下旬、一条家——

一同「「こんにちは〜〜〜!!?」」

集「いやあく、承一郎んちで皆と勉強会すんのも2回目かあく。しかしなんでまたこんなタイムミングで勉強会?」

承一郎「…さあ、なんか鶴さんの発案らしいけど…」

集「へえ〜、誠士郎ちゃんか? そりや珍しい…」

鶴「フン…夏休みの宿題など早めに済ませておくに越した事はないだろう?」

集「真面目だなえ、誠士郎ちゃんは」

万里花「承一郎様——!!? お会いしたかったですわ〜〜!!?」だきつ!!?

万里花が承一郎に抱きついた。

鶴「…おい、なぜ貴様がここに…。呼んでないぞ」

万里花「あら、私承一郎様がいる所ならばどこでも駆けつけますわよ」

鶴「…ついでに言えば貴様も呼んではいけないのだが」

集「嫌だなあ、水臭い」

承一郎「僕が呼んだんだよ（男子一人とか絶対ムリ…!!?）」

千棘「…とところでその機械はなんなのつくみ…?」

千棘は鵜が持つて来た機械を見て言った。

鵜「いえ、これは勉強の合間のレクリエーションにでも使おうかと…」

千棘「…何企んでんのよあんた…」

鵜「嫌ですよお嬢、何も企んでなどおりませんよ」

ビーーーーー!!?

鵜が言った瞬間、鵜が持つて来た機械から音が鳴った。

この機械は一体何なのか?それは少し時間を遡る…。

バ負イツけてア死・ダねスト!!?

桐崎家、クロードの部屋――

鵜「…:…なんだ?これは…」

鵜の前には大きな機械が台車の上にあった。

クロード「む、来たか誠士郎。突然呼びつけてすまん」

鵜「クロード様。あの…:これは…?」

クロード「ああ、これはな昔ビークハイブウが尋問用に使っていた特注の嘘発見器だ」
鵜「う…嘘発見器…?」

クロード「その的中率は脅威の98%…!お前にはこいつを使った任務を頼みたい」
鵜「…すごい数字ですね…」

クロード「これをなるべく自然な形で使い一条承一郎の本性を暴く…!!?今度こそ尻尾を掴むのだ…!!?」

とは言ってもこんな大きな機械を自然な形で使うなんてほとんど不可能に近いのだが。

クロード「すぐに奴と接触を図れ。なるべく自然な形でな」

鵜「は…はあ…、分かりました。あ…ですが…」

クロード「?」

鵜「任務の概要は理解しました。ですが今は夏休みで…その…きっかけが難しいというか…」

クロード「…そんなものはどうとでもなるだろう。友人を集め勉強会でも開けばいい。男同士で何気兼ねする事がある…」

鵜「はあ…まあそうですね…」

そこで鵜は気付く。

鵜「この人まだ私を男だと思っているのか…!!??」

クロード「いいか?これは重要な任務だ。失敗は許されんぞ」

鵜「あの…このリボン…」

クロード「む?ああ…お嬢に貰ったのだろうか?聞いているぞ。ちゃんと毎日身に付けているとは感心だ。…それがどうかしたのか?」

鵜「いえ…なんでも…」

こうして、現在に至る。

キング・クリムゾン!!?

千棘「…それで、たまたまネットで手に入れたの?その…嘘発見器?」

鵜「はい、勉強の息抜きにはちょうどいいかと思ひまして」

集「へー!面白そうじゃん!せっかくだし試してみよーよ!」

承一郎「それもそうだね」

千棘「(ちよつと…!何のんきな事言ってるのよあんた…!)」

千棘が小声で承一郎に話しかける。

承一郎「…え?」

千棘「(私達ニセの恋人なのよ…?変な質問されてウソがバレたらどうすんのよ…」

！」

承一郎「あつ！確かに…」

千棘「あんな物つぐみが突然持つてくるなんて変よ。またクロードが何か企んでるのかも」

承一郎「うゝん、しかしどうすれば…」

鵜「よし！ならば一条承一郎！まず貴様からやってみないか？？」

承一郎「え！！？ちよつ…なんで僕が…！！？」

鵜「こういうのは最初に男がビシツとやってくれる物ではないのか？」

承一郎「だったら集だって…！」

千棘「まっ…まあつぐみが持つてきたんだしつぐみがやってみたら？ほら、言い出しつべなんだし…！」

鵜「なっ…！お嬢まで…！！？わ…分かりました、では最初は私がやりましょう。どなたか私に質問があれば…」

小咲「あ、じゃあ私からいいかな」

鵜「！小野寺様…？」

小咲「鵜さんは今、好きいな人はいますか？」

鵜がブー！！？と吹き出した。

鶇「お…小野寺様…何を…？」

小咲「えへへ…、やっぱりこの前のが気になっちゃって…」

ちなみに小咲は27話の時に鶇の症状について相談させていたのだ。

鶇「…ですから前に話した通り、いませんよ私にそんな人は——…」

だが嘘発見器はビー!!? ビー!!? 音を発してガリガリと針が揺れていた。

小咲「やっぱり!」

鶇「違います!!?」

すぐに否定する鶇。

鶇「…まあ、嘘発見器なんて元々当てになる物ではありませんしね。質問が悪かった

のかもしれないが…」

小咲「うくんそつかあ、じゃあ…つくみさんは今恋をしますか?」

鶇「だからしてま…『ビー!!?』『バンツ!!?』

音が鳴った瞬間に、鶇は嘘発見器を叩いた。

鶇「いやあ…やっぱりコレ壊れてるのかな。なるほどそうに違いない」

承一郎（必死だね君）

鶇「わつ…私の事はいいんですよ!!? ほら一条承一郎、次は貴様の番だ…!!?」ポイツ

承一郎「えっ」

鶴「貴様はお嬢の事を本気で愛しているか？ YESかNOか……？」

承一郎「なっ……何イイイイイ……!!??くっ……!この人やっぱり僕をハメる気か……!!
?クソツ、どうする……!!?僕の好きな子なんて小野寺君に決まってるのに……」

ジョニー「俺に替われ!なんとかする!」

承一郎はジョニーと入れ替わる。

ジョニー「……そんなもんYESに決まってるんじやあねーか……!」

嘘発見器はしーん……と音は鳴らず、針は動いていない。

鶴「……くっ!どうやら本当のようだな……」

承一郎「さっ……さすがジョニー!吸血鬼の肉体操作で血圧や心拍数が上がらないようにしたのか!そこに痺れる憧れる!」

ジョニー「……」

万里花「……あらあら、ホントに壊れてるんじやありませんかソレ」

千棘「……!!??」

万里花「では承一郎様!私からも質問してよろしいですか?」

承一郎「え!!?」

万里花「この中でかわいいと思う女の子はどなたですか?」

承一郎「んなっ……!!?ちよつと……!!??このタイミングで変な質問をかぶせないでくれ

…

承一郎「そ…それはハニーに決まってるじゃあ…」

嘘発見器はフニヨン…フニヨン…と動く。

集「あ！動いてる!!？微妙に反応してる!!？」

鵜「…これはどういう事かな、一条承一郎…」ゴゴゴゴゴ

承一郎「うおおお、知らん知らん!!？」

鵜「では次の質問だ。お嬢のためなら死ぬる？YESかNOか？」ゴゴゴゴゴ

承一郎「君それYESって言ったら殺しにかかったじゃあないかッ!!？待て待て、なんで僕ばかり質問されるんだ…！ほら他にも誰か…」

万里花「あら、なら私が…私は承一郎様を愛しているか？答えはYES！」

承一郎「君一人で何やってるの!?!？」

千棘「まったく何やってんのよ。しょうがないわね、じゃあ私が質問してあげるわよ。

…ダーリンとキスしたって言うのは本当…？」

鵜、集、るりが反応する。↑初めて聞いた3人

承一郎（君…まだそれ気にしたのか…）

万里花「…それはもちろん、YESですわ♡」

嘘発見器は反応ナシッ！

鵜「どうをおいう事かな、一条承一郎お〜」ジャキン!

承一郎「違〜〜〜〜!!?」

鵜「貴様、お嬢という人があら〜!!?」

承一郎「違うんだってこれにはわけが〜〜!!?」

集「へえ〜、マリカちゃんジョジョとそんな事してたんた。オレにもしてよ〜」

万里花「地球が爆発しても嫌ですわ♡」

鵜(くっ…!!こいつがそこまで薄情な男だったとは…。やはりこんな奴をお嬢には
…)

万里花「では次はどなたが?小野寺さんなどいかがです?」

小咲「えっ…私…?」

集「あ!じゃあオレが質問してもいい?ズバリ、小野寺のバストはC以上?それとも
以下?」

瞬間、るりの鉄拳が集の顔面にドグシャ!!?!と炸裂するツ!!?

集「わー!ちよつとタンマ、冗談ですよ冗談ギャース!!?」

それに構わするりの鉄拳は無慈悲にガスン、ガスンと叩き込まれる。小咲は顔が真っ
赤だ。

小咲「……………い……………い……………」

承一郎「そこ頑張らなくていいから小野寺君!!?」

小咲「じゃ…じゃあ次千棘ちゃん!」

千棘「えっ…ええ…!!?」

万里花「あら、では質問は私が。桐崎さんは承一郎様とキスはもう済ませたのかしら?」

承一郎・千棘「ぬなっ!!?!!」

千棘「いや…それはまだ…私達はピュアなお付き合いを…」

千棘の答えに嘘発見器は反応しない。

千棘「じゃあほら次つぐみ!!?」ポイツ!!?

鶴「えっ!」

集「フツフツ…次はオレに質問されてくれ。前々から聞いてみたい事があったんだよ。普段はあまり目立たないが、オレは実は誠士郎ちゃんはクラスの中でも指折りの実力者だと踏んでいる…。教えてくれ…!」

集「ズバリ!!? 誠士郎ちゃんのバストは少なくともE以上…!!? 答えは如何に…!!?」

再びの鉄拳が集の顔面にゴシヤア!!?と炸裂したッ!
るり「あんたの頭の中はそんなばっかか」

るりはゲシゲシと集を踏みつけている。

鶇「そ……そ……そんなにあるわけないだろう……!!??」

嘘発見器はギャリギャリと動く。

千棘「つぐみ……!!??」

鶇「も……!!?!」

承一郎（E以上……どのくらいだEって……?）

ジョニイ（……良いセンスだ）

万里花（大丈夫……私だってこう見えてE以上……）

小咲（E……Eって……）

集「ごめんごめん、じゃあ次はもちつとまともな質問するから」

鶇「あ!!?まだ何か……」

集「オレとジョジョならどつちがタイプ？」

鶇「!!??……なっ……」

承一郎「……なんだいその質問は」

集「まあまあ」

鶇「……ど……どつちも嫌だ……!!??」

嘘発見器はビーーーーー!!?と鳴った。

その瞬間、鵜はダウン!!?と発砲。

…結局、問題は一向に進まず勉強会は終了した。

鵜（…ハア、またコレを持って帰るのか…。重いんだよなコレ…）

皆が帰るのを承一郎が見送りに行つて鵜以外に誰もいない部屋に嘘発見器と鵜はいた。

鵜「……」

集『…オレとジヨジヨならどつちが—』

鵜（…バカ！バカ者…！何を考えてるんだ私は…！相手はお嬢の恋人なんだぞ…。それに…あんな軟弱者…）

鵜（なの…どうして奴の事を考えるとこんなに胸がざわつく…?）

鵜は嘘発見器を取る。

鵜「私は、一条承一郎が、好きだ…!!?」

鵜は呟いた。

鵜「……」

嘘発見器は、動かない。

鵜「……………まさか…やっぱり私は…」

承一郎「あれ？鵜さんまだ帰らないの？」

承一郎が部屋に入つて来た。ビクウ!!?と反応する鵜。

鵜「やつ…別にコレはなんでもなく…私は別に…」オロオロ

承一郎「…あれ？君それ…コンセント抜けてるよ」

鵜は嘘発見器を手刀を振り下ろしてぶつ壊した。

承一郎「ええー…!!??君…何やってるんだいもつたいない!!?」

鵜「うるさいうるさい、もう何も言うな!!?」

第57話 子犬はとても癒される

千棘「…つたく、どうしてこんなクソ暑い日あんななんかといなきやなんないわけ？」

承一郎「…うるさいな、こうして定期的に会っておかないと怪しまれるって言ったのはそつちじゃあないか」

千棘「何よ、まるでこつちから会いに来たみたいない草止めてくれる？ 気持ち悪いんですけど!!？」

承一郎「僕だつて会いたくて会つてるわけじゃあ…」

千棘「フン！ あーそうですかじゃあ私はもう帰るからね。じゃーねアホもやし！」

承一郎（…もう何百回なんだこのやり取り）

千棘「…ん？ ねえちよつと承一郎ー！」

承一郎「…ん？ 今度は何…」

千棘「…なんかそこにこんなの落ちてたんだけど…」

千棘は子犬が入っている段ボール箱を持っていた。

承一郎「…落ちてたっていうか君…」

千棘「え!? ? 捨てられてたのこの子…!? ?」

承一郎「そーだよ、箱に書いてあるだろう？まあ拾ってしまう気持ちは分かるけど」
千棘「えーかわいそう、こんなにかわいいのに… あんたこの子飼ってあげなさいよ」
承一郎「それは無理だよ。ウチは僕が子供の頃からこういうの拾い過ぎて一匹だけにしているんだ」

千棘「ああ、あの大きい犬ね」

そう、集英組には一匹だけ犬を飼っている。中学の頃に傭兵として色んな所を回っていた時に見つけた犬だ。

ちなみに名前はD ダイヤモンド・ドッグだ。狼の血も混ざっているようだが、皆そう呼んでいる。

承一郎「それに今は学校も閉まっているし。君のところは？」

千棘「ウチも無理よ。もう大型犬を一匹飼ってるし」

二人は子犬を見ると、可愛らしくこちらを見ている。

承一郎「…くそくどうしてこう子犬という奴は…。ああ抱いてみたい…」

千棘「？抱けばいいじゃあない」

承一郎「僕は昔から初見の動物に好かれない試しがないんだよ

家柄上硝煙の匂いが染み付いてしまっていて、それで動物に嫌われているのだ。

承一郎「ん？お…おおおお…？」

承一郎の手を子犬が舐める。試しに抱いてみると…

承一郎（なっ…なっついてるー！！??）

承一郎「動物を世話して苦節15年…!!?初めて僕を受け入れてくれる子が…!!?感激だ…!!?」

ジョニイ（後で俺にも触らせろ!）↑意外と動物好き

千棘「ね…ねえ、私にも抱かせてよ…! ほらこっちおいでー。よしよし」

だが、子犬は千棘の手に、ガプツと思いい切り噛んだ。

千棘「痛つつつつたあー！！??」

絶叫が、街中に響き渡る。

千棘「何すんのよこのバカ犬ー！！?」

承一郎「何言っているんだこんなにかわいい子に」

千棘「だって今この子本気で噛んで…」

承一郎「君が怖かったんだろう…?この子子犬なんだから優しくしてあげないと…」

千棘「よ…よしよし、おいで。お姉ちゃん恐くないよ…?」

しかし、続いている子犬の行動は千棘の手に小便をかけるという暴挙だった。

千棘「こんのクソ犬がー！！?」

承一郎「うおおお、落ち着いて…!!?」

承一郎「…とにかくこの子を飼ってくれる人を探してあげないとね」

千棘「ハン！勝手にすれば!!？私はそんな犬知らない!!？」

千棘は公園の蛇口で手を洗いながら言った。

承一郎「君もやるんだよ。この子拾ったのも言い出したのも君だろう？」

正論なので何も言えない千棘。

承一郎「……ところでこの子の事なんて呼ぼうか」

千棘「そうね……『ポンチ』とかでいいんじゃない？ピツタリだと思うけど」

ポンチ（千棘命名）が千棘に噛み付いたのは言うまでもない。

和菓子屋『おのでら』——

小咲「……え？子犬……？」

承一郎「ああ、偶然拾う事になってね。今飼ってくれる人がいないか探しているんだ」

小咲「うーん……、ウチはちよつと無理かな。食べ物扱ってるしお母さんが許してくれないと思う」

承一郎「うーん、やっぱり無理か……」

小咲「わっ？」

その時、子犬がピョン!!？と小咲の胸に飛び込んできた。

小咲「うわ、この子がそうなの？かわいいねえくくく」

子犬を抱く小咲。これだけで絵になる。ぶつちやけ子犬よ、その場所を譲れ!

千棘「…やっぱり私だけなつかない」

承一郎「いや…小野寺君の場合特別だから」

小咲は承一郎の動物の世話を手伝いに来たときに、動物達が全員小咲に群がるという恐るべき懐かれやすさがあるのだ。

小咲「…ところで二人は今日デートなのかな?」

承一郎・千棘「違う!!?!」

100%のシンクロ度である。

承一郎「これは会ってないと怪しまれるからたまたま…」

承一郎「うーん、やっぱり小野寺君はダメか」

千棘「他に心当たりと言えば…」

桐崎家、ビーバイブ本部——

鵜は子犬を見た瞬間、目を輝かせた。

鵜「な…なんですかこのかわいい子犬は…。うわっ、ちよ…やめ…」

子犬は鵜に飛び付き、顔をペロペロ舐め始めた。

承一郎（…なっついてるね）

千棘（…だんだん腹が立ってきた）

千棘「ほーらポンチ、おいでおいで…」

ポンチはまた千棘の手に噛み付いた。

鶴「…ですがお嬢、私ではこの子を飼えませんよ。私は任務で家を空ける事が多いですし、とても生き物の世話は…」

ちなみに承一郎も任務で家を留守にする時は組の皆がDDの世話をしているのだ。

千棘「うーん、つぐみもダメかあ…」

万里花の家――

万里花「まあ！子犬ですか？かわいいですね〜」

万里花にも子犬は懐いた。最早千棘がかわいいそうなくらいだ。

万里花「うーん、ウチはマンションですからね。残念ながらお力になれそうにありませんわ。承一郎様でしたらいつでもウチに住まわせてあげますのに」

承一郎「えっ」

その瞬間、千棘からの理不尽な暴力が承一郎を襲うッ！

承一郎「えっ?!?なんで僕がぶたれるの?!?」

承一郎「…うーん、橘さんのところもダメか…。これは先が長いかもね…」

千棘「…ん?…あれ?なんかポンチぐったりしてない…?」

承一郎「え?ああ、お腹空いているのかもね」

餌をあげたのだが、あんまり食べない。

承一郎「んー…あんまり食べてくれないな」

千棘「…つたく、世話の焼ける…」

ポンチは千棘の食いかけのスナック菓子をじつと見つめている。

千棘「…ん?何よ、その目は…。え…?!まさかコレ食べたいの?!?あげないわよ私
んだから…」

承一郎「…あげてやれば?それくらい」

千棘は少し考えた後、

千棘「…ほら」

スナック菓子をポンチにあげた。

ポンチはガツガツとスナック菓子里に食らいついた。

承一郎「へえー、君変わってるねー」

食べ終わった後、ポンチは千棘の足元に近づいた。

千棘「?!?なっ…!何よ…、今さら態度改めたってねえ…」

ポンチは千棘の足を噛んだ。

その後、クラスメイトや組の皆に協力してもらったのだが、その努力も虚しく一週間が過ぎた。

キング・クリムゾン!!?

千棘「…もう一週間よ。どうすんの?このまま貫い手が決まらなかつたら…」

承一郎「うーん……、…最悪僕が無理言つて引き取るよ。夏休み中だけつて条件で。あとは学校で面倒見るさ」

千棘「……ふーん」

『盗んだバイクで走り出す♪行く先も分からぬまま♪暗い夜の帳の中へ♪』

承一郎「ん?」

そこで承一郎の携帯の着メロが鳴る。

承一郎『『ピツ』集かい?どうしたんだい?え?』

千棘「…なかなか見つからないわねーポンチ…あなたを貫つてくれる人。まああなたかわい気ないしね。貰いたくない気持ちはよく分かるけどさ」

千棘はポンチを抱き上げる。

千棘「…どうする?いつその事ウチに…」

承一郎「おーい、千棘さーん」

千棘「何ー?」

承一郎「見つかったよ、ポンチの貰い手」

遠くに集とお婆さんがいた。やがてお婆さんはこちらに気づくと、

お婆さん「……！小太郎……！」

と言つて近づいて来た。

ポンチ「アオン!!?!」

ポンチはお婆さんに走り出した。

千棘「…小太郎？」

承一郎「…ああ、つまりね、あの子、捨てられたわけじゃあないらしい」

千棘「!!?!」

承一郎「油断したスキに家から逃げ出してしまつて飼い主さんもずっと探してたらしいんだ。ウチのもんが出したはり紙を見て連絡してくれたんだって。あのダンボールに入つてたのはただの偶然だったみたいだ。多分、他の犬のためのエサか何かが残つてたんだろう」

千棘「………そうだったんだ……」

ポンチ「いや、小太郎は千棘の足元に近づいて、クウーンと鳴いた。

千棘「…何よ、さつさと行けば？えーと…小太郎だっけ？良かったじゃあない、元の飼い主さん見たかつてさ。私ももうあんたの顔見ないで済むかと思うとせいせいする

わ。だからほら、さっさと行きなさいよ」

小太郎はクウーンと鳴くだけだった。

千棘「…行きなさいってば!!？」

小太郎は千棘の足をペロ…と舐めた後、飼い主の元へ行った。

承一郎「……………ラーメンでいいかい？」

千棘「……………何の話？」

千棘の顔は涙が流れていた。

承一郎「…おごつてあげるよ。…頑張ったんじゃあないかい？君なりに」

千棘はズビツ…!!?と鼻水をすすって、

千棘「…大盛りでもいい？」

と言った。

承一郎「……………ドンと来い」

承一郎は答えた。

第58話 毒蛇（ヴァイパー）と山猫（オセロット）の会話

夜、BAR 山猫^{オセロット}——

街から少し離れた場所にバーが佇んでいた。

小洒落な店の雰囲気^がが店主を表している。

ジョニー「：久しぶりだな、山猫^{オセロット}」

黒いコートを着たジョニーは店の店主：かつての仲間^にに声をかける。

オセロット「お久しぶりです、毒蛇^{ヴァイパー}：いや、ボス」

C I Aに所属していた時には^{シングル・アクション・アミー}S A Aを好んで使い、6発以内で敵を倒す事か

ら『リボルバー・オセロット』と恐れられていた男は、こじんまりとしたバーの店主を
していた。

ジョニー「おいおい、ここは店だ。ジョニーで良い。どうだ調子は？しばらく会って
いなかったからな」

オセロット「お陰様で景気は良いですよ」

ジョニー「そうか、お前は多芸だったからな。それなら良かった」

オセロツト「それでボス、今日はどのような件で？」

ジョニイ「おつとすまない、話が逸れてしまったな。それじゃあカクテルを頼む」

オセロツト「分かりました」

オセロツトは慣れた手つきでカクテルを作っていく。

ジョニイ「さて、今回はこいつについてなんだ」パスツ：

ジョニイは写真を見せた。前に車両で承一郎とジョニイに襲いかかってきた男達だ。

ジョニイ「最近俺はある財団とのツテが出来てな」

オセロツト「話は知っています。あなたのお父上から聞きました」

ジョニイ「へえ、親父が？」

オセロツト「ええ、以前あなたに招待された時によくして頂いて、今では常連客の一

人です」コト：

オセロツトは出来たカクテルを注いでジョニイに渡した。

ジョニイ「なるほど、それなら客が増えて良かったじゃあないか。：まあそれは置いてだ」

ジョニイは渡されたカクテルを飲んだ。

カクテルの名前はシルバ^{Silver}・バレ^{Bullet}ット、銀の弾丸という意味だ。

ジョニイは吸血鬼に銀の弾丸という名前のカクテルを飲ませるとは洒落てるなど内

心笑った。

ジョニイ「お前にコイツらの素性を調べてくれないか？」

オセロット「…SPW財団が調べているのにですか？」

ジョニイ「まあ確かにSPW財団の情報収集力は素晴らしいと思う。だけど色んな国の政府の内情や情^{インテリジェンス}報に深く突っ込むのは出来ないはずだ」

ジョニイ「だからお前に頼んでるんだ。蛇の道は蛇というじゃあないか」

オセロット「毒蛇^{ヴァイパー}が言う台詞^{セリフ}ではありませんね」

ジョニイ「フフツ…そうだな。…ハッキリ言ってお前とカズは俺にとつては信頼できる仲間だ」

オセロット「…それは光栄です、ボス」

ジョニイ「…お前は母と一緒に仕事をしていた。お前も母の真相を探っていた。お前と出会って初めて真相へ一歩踏み出せたんだ。感謝しているよ」

オセロット「…私はあなたの母上にはCIA^{ラングレー}の時に世話になりました。彼女がいなければ今の私はいません。彼女が何故死んだか？私はそれに『納得』出来ませんでした」

オセロット「私こそ感謝しています。組織^{CIA}を抜けて途方に暮れていた私を仲間に迎え入れてくれて、本当に感謝しています」

ジョニイ「…絶対に真相を突き止めよう」

オセロツト「はい、我らが『ジヨジヨ』」
ジヨニイ「また頼む、オセロツト：いやアダムスカ」
ジヨニイは代金を支払い、店を出た。

第59話 毒蛇（ヴァイパー）と和平（カズ）の会話

昼、屋台『バーガー・ミラーズ』——

街の中に一つの屋台が止まっている。

屋台の前には何人も人が並び、盛況である。

承一郎「……久しぶりだね、カズ」

承一郎は客が減った時を見計らい、店の店主……かつての仲間にも声をかけた。

ミラー「ボス！久しぶりじゃあないか！」

金髪にサングラスをかけている男はあの頃から変わらない調子でかつてのボスに声を返す。

承一郎「その名前はやめてくれ。ケミカルバーガーを二つ頼む」

ミラー「了解だ、ジョジョ」

カズ——傭兵時代にミラーと呼ばれていた男はハンバーガー屋を営んでいた。

承一郎「それにしても、この店も結構繁盛してるじゃあないか。前にハンバーガーの一般モニターになっていたジ・エンドがぶつ倒れたのは今では良い思い出だね」

ジ・エンドというのは承一郎が中学の頃に率いていた傭兵部隊の一人で、百歳を超え

てなお現役の狙撃手である高性能お爺ちゃんだ。

ハンバーガー好きでミラーに添加物たつぷりのハンバーガーを試食させられ、ぶつ倒れたのだ。

ミラー「ボス、その話はやめてくれ」

承一郎「まだあつたな。基地で何度も女兵士達に手を出してそれで口論になつて殴り合いしてたな」

ミラー「…サウナから出て基地の上で全裸でな」

承一郎「そうだね。その後君はフルトン回収装置なんて取り出してき、『全裸で空の旅はどうだ？ボスウ！』とか言つて襲いかかつてきたね」

ミラー「その後メチャクチャ怒られたな。悪かつたつて、反省してるから。ほら、ケミカルバーガーだ」

ミラーはケミカルバーガーを渡した。ミラーはこのバーガーを民族解放バーガーと言つて世界平和を成すというパクスハンバーガーナ（ハンバーガーによる平和の意味）を豪語していたような…。

承一郎「ありがとう…さて。昔話はさておき、君に頼みたい事があるんだ」パサツ：

承一郎は写真を見せた。前に車両で承一郎とジョニーに襲いかかつてきた男達だ。

承一郎「カズ、僕には最近ある財団とツテが出来てね」

ミラー「ああ、それなら知ってるぞ」

承一郎「さすがだね、カズ」

ミラー「SPW財団の情インテリジエンス報が結構飛び回ってたよ」

ミラーのスタンドは『TOKYO通信』という、情報網に潜り込めるスタンドだ。傭兵時代はその能力を使って世界中から情報を仕入れていた。

承一郎「なるほど、副司令の時の手腕は今も健在だね。なら話は早い。君にコイツらの素性を調べてくれないか？」

ミラー「…SPW財団が調べているのにか？」

承一郎「まあ確かにSPW財団の情報収集力は素晴らしいと思う。だけど色んな国の政府の内情や情インテリジエンス報に深く突っ込むのは出来ないはずだ」

承一郎「だからお前に頼んでるんだ。蛇の道は蛇というじゃあないか」

ミラー「暗号名が毒蛇コードネーム ヴァイパーの奴が言う台詞じゃあないぞ、ボス？」

承一郎「フツツ…オセロツトにも同じ事を言われたよ」

ミラー「…オセロツトにも頼んでいるのか？」

オセロツトという名前を聞いた途端にミラーは顔をしかめた。

承一郎「落ち着いてくれ。まだ仲が悪いのかい？本当に君達は犬猿、いや犬猫の仲だね」

ミラーとオセロットは傭兵時代から仲が悪かった。

ミラー「…ジョジョ、俺は反対だったんだぞ。オセロットを仲間に入れるのはEVAの事もあるしな」

EVAというのは承一郎が傭兵時代の時に白蛇の刺客として送り込まれた女スパイだ。

承一郎に敗れ、逆に承一郎にスカウトされて仲間になったのだ。

ミラー「ボス、俺の能力は知ってるだろう？俺の情報網によるとお前は最近刺客に襲撃されたらしいじゃあないか」

承一郎「……だから？」

ミラー「だからじゃあないだろうッ！ホワイト・スネイクは一度倒された！なのに、またお前を襲った！エヴァもホワイト・スネイクへ寝返るかもしれないんだぞ！」

承一郎「カズ：僕は君にもオセロットにも全幅の信頼を置いている。もちろんエヴァにもだ。敵だった奴を信頼するな、という事かい？だったら君も同じじゃあないか。きりがないぞ」

ミラーとの最初の出会いは戦場だった。二人は最初敵同士だったのだ。

ミラー「しかしだな…」

千棘「おーい、もやしー！」

二人は声をする方を振り向いた。そこには千棘がいた。

千棘「ハンバーガーまだー？」

承一郎「ちよつと待つてて、すぐ終わる」

ミラー「誰だあの女の子？すぐ可愛いじゃあないか」

女たらしであるミラーがまず第一に発した台詞はそれだ。

承一郎「見た目だけさ、すぐ殴つてくるんだよ。一応釘を刺すけど、あの子僕の連れだから手は出さないようにね」

ミラー「まさか、ボス！あんた付き合っている子がいるのか？？」

承一郎「正確には『ニセモノ』の恋人だよ。集英組ウチと敵対する組織のご令嬢さ。街での全面戦争を止めるためのね」

ミラー「なるほど…」

承一郎「…カズ、僕達はホワイト・スネイクを追っていた。僕の母の死の真相を探るために。本体のプッチは母を殺した奴との繋がりがあつたからだ」

ミラー「ああ」

承一郎「だがホワイト・スネイクの本体であるエンリコ・プッチは倒された事によつて母への手がかりが消えてしまった。だからPフレイベイト・フォース Fクリスタル・フアング組織『水晶の牙』は解散した。ほとんどのメンバーは集英組の構成員となつて」

ミラー「だがホワイト・スネイクはまたボスを襲った…」

承一郎「僕はまた奴を探る。黒幕を突き止める」

ミラー「彼女さんはいいのか？あんた好きな子がいるって言ってたじゃあないか」

承一郎「…僕は一回地獄に堕ちた。これからさらに地獄の底へ突き進むかもしれない。小野寺^{彼女}をそこへ連れて行くなんて僕には出来ない」

承一郎はカタギの人間は巻き込まない主義だ。よりによつて片想いの女の子を巻き込むなんて論外だ。

承一郎「それに、僕はあの頃のままなんだ。…まだ、手が血に染まった鬼なんだ。母の真相を知った時、僕は初めて鬼としてではなく、人として歩き出せるんだ」

承一郎の『時』は、母が殺されたと知った時から止まっている。あの頃自分に燃え上がった憎悪は今でも瞳の奥に隠れている。

母の決着が着いた時、承一郎の『時』は動き出し、内なる鬼を捨てる事が出来るのだ。
承一郎「…君はそれでも僕について来てくれるかい？」

ミラー「…俺は初めて会った時、あんたに惹かれたんだ。敵の兵士ですら魅力させ『ボス』と言わせるあんたのカリスマに。『こんな奴についていきたい』って心からそう思ったんだ」

承一郎「カズ…」

ミラー「それは今も変わらない。俺はあんたが行く所なら天国ヘブンでも地獄ヘルでもとことん付き合つてやるぜ」

承一郎「…ありがとう」

ミラー「何をいまさら」

承一郎「それと、もし出来たら『遺体』ってキーワードも調べてくれ。これはオセロツトにも頼んでいないさ」

ミラー「よし、任せてくれボス！」

承一郎「また頼むよ、カズ」

そう言つて承一郎は屋台を後にした。

第58話 縁日

縁日、それは屋台が立ち並び多くの人で賑わう夏の一大イベントだ。

承一郎「いらっしやいませー」

僕は組の屋台で焼きそばを作っていた。

組員1「坊っちゃん、そろそろ休んだらどうです？朝からずっと働き通しじゃあないですか」

承一郎「いいんだよ、僕は夜に休み貰ってるんだからその分働かないと」
僕は袋を持って屋台から出ようとする。

組員1「そいつあなんですか？」

承一郎「差し入れだよ、他の屋台の皆に渡してくる」

組員1「坊っちゃん…!!? あんたってお人は…!!?」

そう、今日こ夜にさえ時間をくれれば手伝いなんて軽いものだ。今夜僕には絶対はずせない重大な任務があるのだ…!それは――

承一郎（この祭りの夜にだけ販売されるスーパーウルトラ縁結びアイテム…!!? // 恋むすびのお守り”を手に入れる事だ…!!?!）

承一郎（噂によればその効果は絶大…!!? 持っているだけでとてつもない恋愛成就力を発揮するというありがたいお守り…! 販売直後すぐさま完売する程の人気ぶりらしい…!!?）

承一郎（絶対手に入れるぞ…!!? そしたら僕も小野寺君と…!）

ジョニー（誰かこいつに小野寺が好意持つてゐるって教えてやってくれ）

そんな事を僕が考えていた時に、

? 「キヤツ」

人によつてしまった。

承一郎「わっ! すみません……」

そのぶつかった相手はアイスクリームを持った千棘だった。

千棘「何やってんのよあんた」

承一郎「…君こそ」

千棘「あたしは純粹にお祭りを楽しむに来てんのよ。なんでこんな日まであんたの顔見なきゃあなんないわけ?」

承一郎「僕だってウチのものの屋台手伝いに来てるだけだよ」

組員1「おーい坊っちゃん! すいません、このビールも一緒に持つて…おや!!?」

そこにいるのは坊っちゃんの彼女じゃあないですかい!!?」

組員がやって来た。

組員1「こいつあいけねえ!!?坊っちゃん彼女が来てんにオレらのために頑張つてくれてただなんてお優しい方だあ!!?」

承一郎「いや…おいちよつと…」

組員1「店の事はもうオレらに任せて下せえ!!?なくに心配はいりやせん!彼女と縁日なんて男のあこがれるシチュエーションベスト3じゃありませんか!!?」
ぶつちやけそんな事知らない。というかその情報どこ調べなんだ?

組員1「せいじやあ楽しんでつて下さいね!!?」

これで僕達は縁日でも恋人として過ごさなければならなくなつた。

千棘「…なんでこうなるのよいつも…」

承一郎「…僕も知らないよ」

千棘「…あーもう!せっかく楽しみにしてたのに!こーなつたらとにかく食べる!あんな彼氏としてゐるならおごつてよ!私たこ焼き食いたい!!?」

千棘さんはたこ焼き屋を指差して言った。

承一郎「…なんで僕が」

その時、僕にある考えが浮かんだ。

承一郎「……!…ねえ、向こうに別のたこ焼き屋があるからそつち行こう?」

千棘「え？なんで？」

承一郎「やあ、おつかれ」

僕は集英組ツチの組員が経営しているたこ焼き屋に行った。

組員2「あれ？坊っちゃん！！？休憩入ったんスね！！？」

承一郎「たこ焼き貰いたいんだけどいいかい？」

組員2「そりやあもちろん！好きなだけ持つって下せえ！！？」

千棘さんは貰ったたこ焼きを眺めている。

承一郎「…どうしたの？味なら保証するよ？」

千棘「…あなたの家の人ってかなりの人数いたわよね」

承一郎「うん、今日もかなり屋台出してるね」

千棘「…その全てが無料…？食べ放題の遊び放題…？」

承一郎「…まあ言い方はアレだけどそうだね」

千棘「……」コホン

千棘さんは一度改まって

千棘「ねえ承一郎、今から私とデートしない？」

と言ってきた。

承一郎（現金だねこの子）

ジョニイ（まあ金銭感覚が狂っているよりマシだろ）

千棘「だってタダよタダ!!? あんたフリーパス代わりって事でしょ!!? 最高じゃあないこれ……!」

承一郎「…せめて生き物として扱ってくれ」

千棘さんはキャホー!!? とはしゃいでいる。

承一郎（…やれやれ）

承一郎「…ん?（……気のせいかな?）」

僕は誰かいたような気がしたが、気にせず千棘さんについて行った。

承一郎（…しかし、考えてみたら僕この子といる時間ホント多いよなあ……。出会ってすぐに恋人のフリをする事になって、ホント…変な縁というか…）

女1「あ! あれ見てあの子かわいー!」

女の人の声に千棘さんがピクツと反応した。

女1「すっごいキレイな金髪〜」

女2「ハーフ?」

女1「スタイルいいな〜うらやましい〜」

声を聞いて千棘さんは僕にドヤ顔をする。

承一郎「…分かったからすぐそのドヤ顔引っ込めてくれ」

男1 「…しかし彼氏の方はサエねーなあ」

男2 「なんであんなのと付き合ってたのかな」

男1 「遊びに決まってるじゃん」

…聞こえているんだが、もしかしてわざとか？しかも千棘さんは笑いを堪えているがすごく馬鹿にしてる。

承一郎 「容赦なくムカつくね君は」

承一郎 （…しかし、カップルには見えるんだね僕達。ずっと恋人のフリしてるし当たり前かな…？）

女 「…でもあの子なんで浴衣じゃあないのかなー」

男 「なー？絶対似合うのに…」

千棘 「……ねえ…やっぱり浴衣ってそんなに良い物なの？」

承一郎 「え？まあ…そうなんじゃあないのかな？」

千棘 「……ふーん…」

少し移動して金魚すくい屋。

千棘 「あつ」バシヤ!!？

千棘さんの金魚すくいのポイ（金魚を掬う道具）の紙が破けて金魚が逃げてしまう。

千棘 「キィ〜!!？こんな薄い紙で取れるわけないじゃん！」

承一郎「止めときなよ。どうせ取っても飼えないだろうに…」

千棘「嫌！欲しいの！」

承一郎「しようがないな。ちよつと貸して」

千棘「え？でもコレほとんど破けて…」

承一郎「コオオオオ…ハッ！」シユバババ

僕はほとんど破けているポイを受け取って、金魚を次々と腕にすくい取った。

千棘「ええー！?!? スゴ…!!? なんで取れんの…?!?」

承一郎「フツ…こういうのは家でいくらでも練習出来たからね。言つとくけど縁日で
の僕は無敵だよ…?」

まあそんな事は自慢も出来ない事だけど。ほとんど破けていても波紋で枠に水を固定してすくっているんだ。

組員3「お？来やしたね坊っちゃん。坊っちゃんが来るとウチはいつも惨敗なんで今年は坊っちゃんのために大物を仕入れてあるんスよ…!」

承一郎「何…?」

組員3「こいつです!!?」

その大物とは…

承一郎「錦鯉じゃあないかッ?!」

試しに僕はポイを構える。すると、ポイの枠に錦鯉がはまった。

承一郎「千棘・組員3（取れたー！ー！！?!）」

組員3「また…来年のお越しを…」

すごい落ち込んでる…。まあ錦鯉ということ反則技を使ってんだからしょうがないけど。

千棘「スゴツ!!? あんたってスゴ!!?」

承一郎「いや…本人が一番びつくりしてるんだけど…」

承一郎「はい」

僕は金魚が二匹入った金魚袋を渡した。

千棘「!」

承一郎「たくさんいてもしょうがないだろう。とりあえず二匹だけね。飼い方は今度教えるよ」

千棘「…へへっ、うん…! ありがとう!」

承一郎（…なんだ、やけに上機嫌じゃあないか。お祭りだからかな…?）

あれ? 今千棘さんの金魚袋を切ろうとする橘さんが見えたような…。幻覚かな?

千棘「…あれ? なんかあつちの方すごい人だから出来てない?」

承一郎（あつ…! お守りの販売時間忘れてた…!!?）

承一郎「…悪い千棘さん、僕はあつちで買いたい物あるからこの辺で待つててくれるかい？」

千棘「え？待つてどこでよ…。さすがにこの人手じゃあはぐれちゃうじゃあない？」

承一郎「うゝんそうだなゝ…」

承一郎（近くに目印になりそうな物も無いし…）

千棘「…しようがないわね。ほら」ギユツ…！

承一郎「え」

千棘「これなら人ゴミの中でもはぐれたりしないでしょ？付いてつてあげるわよ。あんたがいないと私タダで買い物出来ないし…」

くそつ…、

千棘「ほら！さつきと行くわよ！」

何を意識してるんだ僕は…。

承一郎「わ…わかつたよ…！」

僕は小野寺君が好きで恋むすびを買い来ているんだ。

千棘「うゝゝ、すつごい人ゝゝ」

ドキドキしてる場合じゃあないだろう…。

承一郎「…大丈夫かい千棘さん？絶対離さないですよ？」

承一郎（もう少し…もう少しで…）

僕の手がついに恋むすびに届いた。

承一郎「やつ、やったツ!!?買えたぞー!!?!」

千棘「ちよつと…!ちゃんと買えたの…?だったら早く…キヤツ」

千棘さんの手が離れて、人ゴミの中に紛れてしまった。

承一郎「!!?あつ…!千棘さん…!!?やばい、彼女どこ行つた!!?」

人ゴミの中で手が出ているのを発見した。

承一郎（おつ!いた…!アレか…!!?）

承一郎「まったく、だから離すんじやあないつて…」ガシツ!

僕が手を引っ張つた次の瞬間人ゴミから出てきたのは、小野寺君だった。

小咲「え……」

承一郎「へ……」

承一郎（ちつ…千棘さんが小野寺君になつたー!!??）

第59話 浴衣に下着を付けないのはよくある間違い

小咲「い…一条君…? どうしてここに…?」

承一郎「小野寺君こそ…」

小咲「! それ…恋むすび…? 一条君買いに来てたんだ」

承一郎「えっ…いや…まあ…。小野寺君は? 小野寺君もコレ買いに来てるのかい…?」

小咲「え? ……ううん…私は別に…。たまたま人の波に押されて来ちやつただけで…」

二人は手をつないだままだったのを思い出して、パツと手を離れた。

小咲「…あれ? そういえば千棘ちゃんは?」

承一郎「え…あ、いや。さつきまで一緒だったんだけど、この人ゴミではぐれてしまつて…」

承一郎（…まったく、一人で大丈夫かな彼女）

承一郎「…とにかく、この人ゴミから離れようか。これじゃあ彼女の事も捜せないし」

小咲「うん」

承一郎（……しかし、恋むすびを買ったとたん小野寺君と二人きりになれるなんて。これって恋むすびの力……？まさか……ね。千棘さんには悪いけどやっぱ嬉しいってどうか……）

承一郎（なんで僕が彼女に悪いなんて思わなきやあいけないんだ……？）

小咲「×」

小咲（……恋むすびは買えなかつたけど一条君と二人きりになれたのはちよつと嬉しいな……。ホントは……もつと一緒にいられたらいいんだけど）

その時、承一郎は人とぶつかつてしまった。

承一郎「わ！すみませ……！」ポロツ

その拍子に恋むすびを落としてしまった。

小咲「一条君、恋むすび落ちたよ」

小咲が落ちた恋むすびを拾つた。

承一郎「あ、悪い」

その時、ブチツと草履の鼻緒が切れてしまつていた。

小咲「え……えええ？草履の鼻緒がいきなり……！」

承一郎「おお……見事に切れてるね……」

このままでは歩けないので、承一郎は小咲をおんぶする事になった。

小咲（う……うそお……）

承一郎「…大丈夫かい？」

小咲「うん……。ごっ……。ごめんね！重いよね……！さつきわたがし食べちゃったし……！」

↑？

承一郎「いや……全然大丈夫……」

小咲（うう……まさかこんな事になるなんて……。すごく嬉しいけど……。すごく恥ずかしい……）

人ゴミの中から離れた後、承一郎は小咲の草履の鼻緒を直した。

承一郎「……よし、ひとまずこれで今日一日歩くぐらいは出来るだろう」

小咲「……ありがとう」

承一郎「……じゃあ僕そろそろ千棘さんを捜しに行かないと」

小咲「うん……あれ……？」

承一郎「……どうしたの？」

小咲「無いの！一条君の恋むすび……」

小咲「あ！見て！あそこ！」

見ると、ブチ模様の猫が恋むすびをくわえて歩いていた。

承一郎「あっ！」

承一郎「猫!??こら君、それどこに持つてく気だー!?!?」

小咲「あ!一条君!?!?」

承一郎（くそつ…!せつかく手に入れた恋むすびだぞ…!!?みすみす失くしてたまるか…!）

承一郎（あ!止まった!）

そこには万里花がかき氷を持って立っていた。

万里花「ハア…（…せつかく頑張ったのに、恋むすびは売り切れですか…。残念…）」

承一郎「橘さー…ん!!?!」

万里花「え?あら、承一郎様ではありませんか。嬉しいですわこんな日に承一郎様と会え…」

承一郎「…いいかい橘さん!!?そこ動かないでくれないか!?!?」

万里花「え?え?え?」

承一郎は万里花の後ろの柵の上に乗っている猫を捕まえるために言っているのだが、万里花はそれに気づいていない。

万里花「…まあ、承一郎様したら。ようやくあの女から私に乗り換える気になって下さったんですか?私だったらいつでも歓迎…ふえ?」

万里花の言葉を無視して、万里花の肩を掴む承一郎。

承一郎「……いいかい？じつとしてよね……」

万里花「え……、や……でも承一郎様それは……。色々その飛ばかし過ぎでは……」
押して押して押しまくる万里花だが、押されるのは逆に弱い。

万里花「え……ウソ本当に……？いえ私は嬉しいのですけど……でも……」

承一郎は猫を捕まえる事に集中していて、話を聞いてない。

万里花「……!!?ダ……ダメばい……!」

承一郎「はいだらァー!!?」

承一郎は猫へ手を伸ばすが、猫は飛んでこれを避ける。

承一郎「くそ！しくじったか！待てー!!?」ダツ！

万里花「……:……へ……?」

鵜（……ハア、せつかく並んだのに恋むすびとやらは買えずじまいか……）

鵜は射的屋で銃を持っていた。

鵜（まあ別に必要ないのだがな……！別に誰か想い人がいるわけでもナシ……！）パンツ
!!?

鵜は銃を撃つが、景品に当たらない。

鵜（くそっ……！なんだこのオンボロ銃は……!!? 実銃ならば一発で……!!?）

その時、後ろから謎の衝撃が襲った。

鵜「ふぐっ!!?」ドグツ!!?

猫は恋むすびを落としたのだが、鵜は気づいていない。

鵜（なんだ……!!? 猫……!!?）

承一郎「鵜さん!!?」

鵜「……なんだ貴様か。一体何の用……」

承一郎「今こつちにブチ模様の猫が来なかつたかい!!?」

鵜「ば? ああ、それなら今あつちに……」

承一郎「そうか! ありがとう!」

承一郎は銃を貸してもらい、

ズパンツ!!?

と跳弾で景品であるキャラメルを落とした。

承一郎「はい、情報提供料」

承一郎はキャラメルを鵜に渡し、

承一郎「待てー!!?」

猫の追跡を開始した。

承一郎「逃がしはせんぞー!!?」

承一郎は恋むすびを追っていたが、やがて見失ってしまった。

承一郎「…確かこつちに飛んでつたよね…。くそっ…なんでこんな面倒な…。千棘さんも捜さなきゃあならないのに…」

「…ねえ、もしかしてこれあんたの?」

承一郎「えっ!!?あ、そうです!!?どうもありが…」

その人物は、浴衣を着た千棘だった。

千棘「………何よ。…これあんたがさつき買った奴でしょ?つたく、持ち物の管理ぐらいしつかりなさいよね」

承一郎「君…いつの間に着替えて…」

千棘「さつき急ぎでクロードに持ってこさせたの」

承一郎「なんで急に…」

千棘「別にいいでしょ?ちよつと興味があつただけよ。でも試しに着てみたものの、どーなのコレ?帯はキツイし歩きにくいし。なんで皆こんな着たがるんだろ。それに自分じゃあ似合ってるのかも分かんないし…」

承一郎「………いや…、似合ってるんじゃないのかい…?結構…」

千棘「……あ、そう……（また来年も着てみよーかしら）ん？」

千棘はある看板を見つけた。

千棘（…恋むすび？ああ、さっきのやつか。良縁に恵まれます…ね。つたく、こんな信じちやつて子供ねえ…）

その看板には、恋むすびを男性が女性に渡すと求婚を意味すると書いてあった。

千棘（……ふん、そんな意味もあるんだ。プロポーズねえ…あいつにそんな相手が現れるとは思えないけど…）

承一郎（…まったく、なんとか合流出来たものの、なんだよ急に浴衣つて。ズルイだろう後出しとか…。…ん？ズルイって何がだろう。…まあそれは置いて）

承一郎（この恋むすびせつかく手に入れたけど、やつぱり男が持つのも似合わないよな。こうゆうのは女の子が持つものっていうか…。それに千棘彼女にも迷惑かけたし…）

承一郎「…ねえ千棘さん」

千棘「何？」

承一郎「…これあげるよ」

承一郎は恋むすびを千棘に渡した。

千棘「ちよつ…ええ…!!？」

承一郎「…？なんだいそのリアクション…」

千棘「いやだつて…その…なんで私に…!!??」

承一郎「いや、そりやあ…（な…なんだ？なんでこの子急にこんな動揺しているんだ？心なしか顔も赤いような…）」

ジョニイ（自覚なしつていうのが一番怖いな…）↑恋むすびの効能を知っている

千棘「ちよつ…いやいや、コレどういうつもりよ。ま…まさか本気じゃあないでしょうね？」

承一郎「…ええ？（なんだ？遠慮してるのか、この子。実は欲しかったのかな…）本気に決まつてるだろう」

千棘「ええつ…!!??本気つて…ええ…!!??」

千棘（う…うそ…どういう事何言つてんのこいつ…！本気…本気つてつまりプロポーズつて事…!!??なんで!!??じゃあ…こいつ私の事…!!??）

承一郎（なんだ…この子そんなに恋むすび欲しかったのか…。まあこの子も女の子だしなあ…）

ジョニイ（こいつ…マジでもう一人の俺なのか？どんだけ朴念仁なんだ？）

千棘「…い、いつから…私の事そういう風に見てたの…？」

承一郎「いつから？いや…僕も今の今まで気付かなかつただけど…」

千棘「ええつ!!??そんな…とつさの判断で…!!??」

承一郎「いや……まあ……？」

千棘（そんな……じゃあこいつさつき初めて好きって思った事……!??それでいきなりプ
口ポーズとかする……!??でも恋は突然だつていうしそういうのかな……。でも……そ
んないきなり困るってゆうか……）

千棘「……ひあ!??」サツ!!?

妙な声をあげて帯に手を抑えた。

承一郎「ん?なんだい?」

千棘「……どうしよう、急いで着付けたから帯が緩んで来ちゃった」

承一郎「なつ……!!?なにイ……!!?だ……大丈夫かい……。ほら貸して、支えてあげるから」

千棘「ちょ……!こつち来ないでよバカ……!!?わつ……!わつ……!どうしよう、どんどん
崩れて来るんだけど……!」

帯が緩んでどんどん崩れてしまう。

ジヨニイ（良い……スゴく良いツ!!?）

承一郎（何を言ってるんだ君は）あーもう、だから言わんこつちやない……!結び方
ではさすがに知らないけどちゃんと持ってあげるから」

千棘「嫌!来ないでよ!私下着も付けてないのに……!」

承一郎「ええ!??なんで下着付けてないんだい……!??」

千棘「え!!? だって浴衣って下着付けないんじやあないの…!!?」

承一郎「それよくある間違いだから…!!?」

千棘「ちよつと!!? あんた今変な妄想してるでしょ!!? やめてよねこの変態!!?」

承一郎「してないッ!!?!」

千棘「わー! もう…限界…!!?」

承一郎「あーもう、ちよつと落ち着いて…」

承一郎は後ろから千棘の帯を抑えた。

千棘「あつこら、触らないでって…!」

承一郎「仕方ないだろう、ごちやごちや言わないでくれ」

千棘「…つたく、こんな事になるのも皆あんたのせいよ!!? あんたが突然こんな物渡してくるから…!」

承一郎「なんの関係が!!?」

千棘「こんなの…突然言われたって受け取れないわよ…。その…もうちよつと考えさせて欲しいっていうか…」

承一郎「…考えるって何をだ。君さつきから何言って…」

そこでようやく承一郎は恋むすびの看板を見つけた。そして帯を離してしまった。

承一郎「…違うからね!!?」

千棘「帯がー!!?!」

承一郎「僕知らなかっただけだからね!!?!別にそういう…!!?変な意味で渡したんじゃないあ…」

千棘「だー!!?!もういいから…!!?こつち見んなつ!!?!」
バキツ!!?!という音が縁日の夜に響いた。

第60話 海辺での想い その①

承一郎「…よくこんなビーチ近くの民宿なんて取れたね」

集「知り合いがキャンセルするってんでね。安く譲って貰ったんだよ。じき夏も終わるし、やっぱ海くらい行かぬとな！」

るり「あんたは水着が見たいだけでしょ」

小咲「みんなの予定合って良かったね」

千棘「私日本の海って初めて…！ノースカロライナ以来かな」

万里花「私を見るだけです！がモデルデイブ以来でしょうか」

承一郎（セレブか君達は）

ジョニイ（そういうはお前は廃棄された海洋プラントを拠点として運用していたから海なんて飽きるぐらいに見ていただろう）

千棘「あー楽しみ楽しみ…！私いっちばーん…！」

承一郎「あつ、君…」

千棘「キヤアアア〜！！?!うつつつみ〜~~~~~！！?!キヤツホ〜！！
?」

千棘とるりはビーチを我先にと走り出した。

承一郎「こちらから、パラソル張るの手伝ってくれ」

集「あたら？ 誠士郎ちゃん今日は女の子らしい水着じゃあない。どしたの？」

皆（承一郎以外）で水着になった後に集が言った。

承一郎は胸の傷を隠すためと、強い日差しにさらさないために上にアロハシャツを着ている。いくら太陽を克服しても半分は吸血鬼だ。強過ぎる日差しの直射はキツイものらしい。

今日の鵜はいつものスーツではなく、赤い水着だ。プロポーションが強調されている水着だ。

鵜「…私はスーツでいいと言ってるのに…」

千棘「海にまで来て何言ってるの。観念なさい」

鵜「……………これだから胸なんて要らないんです」

千棘「まあまあ、せっかくの体なんだから自信持ちなさいよ」

万里花「えい！」ガバツ!!?

万里花がいきなり鵜の胸を掴む！

鵜「ギャア!!?? 貴様何を…あつ！アツハハハハハハ」

万里花「むっ…やはり私より大きいですわね。けしからんですわ」

千棘「あ、ホントだ何この弾力！あんたスゴいわねつくぐみ……！」
千棘が鵜の胸を突いて言った。

鵜「やつ……！お嬢まで……ひつ……?!? キャハハハハハ……！」

なんとも百合百合しい光景だ。

集「……！いいな……！」ドクドク……

鼻血を流すな鼻血を。

承一郎「……彼女達男子と一緒にだつて事忘れてるでしょ。……それで？さつきから君は何やつてるんだい？」

集「……A、C……C……B……B……B……おつ！あれはEか……?!? 素晴らしい……?!? おふう……?!? あつちにはFクラスだとう……?!? フウ！やつぱビーチはハンパね……！」

次の瞬間、双眼鏡でビーチの女子の胸のサイズを調べていた集にるりのバットがうねりを上げ、直撃した。なんか甲子園が見えたのは気のせいだ。

万里花「ねえねえ承一郎様、ちよつと来て下さいますか？」

承一郎「ん？」

万里花「私……日焼けするとお肌が荒れてしまうんです。ですからサンオイル塗って頂けますか……？」

承一郎「え……?!? いやいや、なんで僕が……いつものその……お付きの人に塗って貰えば……」

「？」

万里花「本田は今日からサンオイルが大嫌いでした」

承一郎「また乱暴な嘘に出たね!!？」

千棘「ちよつと…!! 何人のダーリンにちよつかいかけてるのよ…!! オイルなら私が塗つてあげましょうか…!!？」

集「オレもオレも」

万里花「お気持ちは嬉しいのですが、どうも承一郎様でないと効果がない気がしまして…!!。では承一郎様、一つよろしくお願いしますね♡」ギョツ!!？」

万里花は承一郎の腕を自分の胸の間に通す。

承一郎「えっ!!？了承してないのに!!？」

千棘「あんたも何デレデレしてるんの!!？」

承一郎「なっ…!!してな…!!タコスツ!!？」バキヤツ!!？」

千棘の鉄拳が承一郎の顔を捉え、承一郎は宙を舞った。

千棘「…つたく、何よあいつつもすぐデレデレして…!!」

千棘は荷物を取るために荷物が置いてある場所に戻った。

千棘（あーあ、なんで私がこんなにイライラしなきゃならないんだか…!!）

コロン…!!と何かが荷物の中から出た。承一郎が渡した恋むすびだった。

千棘（…：そういうえば、なんだかんだ言つて私日本に来て以来、こいつとばかり一緒にいるわよね…。まあ恋人のフリしてゐるんだから当然ではあるんだけど——…）

承一郎「…さて、晩飯はバーベキューらしいからそれなら君も手伝えそうだね」

千棘「バカにしないで！どんな料理でも私は平気…！」

承一郎「どこから来るのその自信…。じゃあ僕が皮むくから、君は次々食べ易い大きさに切つてくれ。出来るかい？」

千棘「出来る!!？」

承一郎「どっちだいそれは」

承一郎は慣れた手つきで皮をむき、千棘は少し不慣れな手つきで切つていく。

ジャガイモを取ろうとした千棘の手が承一郎の手に触れた。

承一郎・千棘「—」

千棘「ちよつ…！何よ…急に触らないでくれる…!!？」

承一郎「は？いや…今のは君から…」

千棘「私はただその野菜を取ろうとしただけよ…！手を置いてたあんたが悪いんでしょ!!？」

承一郎「いやそうだけど…え？僕そんな悪い事した？」

千棘「次は気をつけてよね」

集「…それでは！」

一同「「いっただつきまゝす!!?」」

集「うんめえー!!?さっすが承一郎く!!?バーベキューなんて誰がやつても同じだと思つてたよー」

承一郎「フツ…!素材選びと肉の下処理で違いが出るんだよ…!!?」ドヤア

万里花「素敵ですわ承一郎様…!!?」

皆が楽しそうに話しているが、千棘は周りから少し離れた場所で食べていた。

小咲「…?」

キング・クリムゾン!!?

夜、堤防――

承一郎は海沿いの堤防の上に座つて休んでいた。無風状態だったが、海を見るだけで落ち着いた。

承一郎（…あー疲れた…。結局ほとんど一人で調理してたな僕。彼女には悪いけど一人の方が早いんじゃないかあ…）

引いては返す波の音が心地良く感じる。血生臭い戦場から帰ってきて波の音を心地

良く聞ける事で、まだ自分は人間なんだと安堵していたのを思い出す。

小咲「…一条君」

承一郎「ん？」

小咲「…隣いい？」

承一郎「え…小野寺君…?!? あ…ああ…」

小咲「もしかして千棘ちゃんと何かあった？」

承一郎「え？」

小咲「なんか…少しだけ元気なかったような気がするけど…」

承一郎「あ、やっぱり? いや…コレと言つてないんだけど…」

小咲「…そう」

承一郎「…皆は？」

小咲「ジャンケンで負けた人が後片付け。千棘ちゃんもいるよ」

承一郎「…そっか」

急に強くも弱くもない海風が吹いてきた。

小咲「…なんだか不思議だね。中学の頃はこうして一条君と海に来るなんて想像もしなかった」

承一郎「…僕もだよ。僕は必要日数しか登校していなかったし、お互いそんな話す方

でもなかったしね」

中学の頃、承一郎はあまり学校に通っていない。学歴がなければ社会では生きていけないから仕方なくといった程度だ。それでも成績はそれなりに良かったが。

承一郎「…あれ？でも小野寺君確かカナツチじやあなかつたつけ？」

小咲「え、うん、大丈夫。私海に来るとあーゆーのが楽しいから」

小咲が指を指す方向には、クオリティーが高すぎる砂の城が出来ていた。

承一郎（和菓子作りスキルがこんな所にまで…!!?）

小咲「一条君は楽しかった？」

承一郎「ああ、楽しかったよ。もつと遊べば良かったけどね…！」

海が月の光で照らされる。とても美しい景色だ。

承一郎「海…キレイだね…」

小咲「そうだね…」

小咲（…：楽しいなあ。なんか…一条君と話すと勝手に元気が出てくる——）

海風が吹いて気持ちいい。とても良い雰囲気だと思った。

小咲（ああ…好きだなあー…：やつぱり…。もつと…一緒にいたいなあ…。この時間

が、ずっとずっと続けばいいのに——）

集「…さーて、ぼちぼち宿に戻ろつか。承一郎と小野寺は？」

千棘「あ、私捜してくる」

千棘は少し歩いた後、堤防に座っていた二人を見つけた。

千棘「お、いたいた」

千棘は二人に向かって進む。

千棘「おーい、小咲ちゃ～」

小咲「…ねえ、一条君——」

キスしてもいい…?」

第61話 海辺での想い その②

小咲「キスしてもいい…?」

千棘（え………今、なんて言ったの?まさか…）

小咲が少し無言の後、抱いたのは

小咲（今私なんて言った!!??）ブアツ

羞恥心だった。

小咲（ウソ……!!?何今の……!!?今のは頭に浮かんだだけ……!!??それとも口に出した……!!?出した気がする……!!?どうしよう私……!!?なんて事……!!?!）

あまりの恥ずかしさに手で顔をおさえる小咲。

小咲（どうしよう……!だってすごく良い雰囲気だったから……!色々妄想がふくらんじやつて……つい……ポロツと……!どうしよう、絶対変な子だつて思われた……!!?）

小咲（突然……キス……なんて絶対引かれた……。一条君、なんでさつきからずつとしやべんないんだろ……）

小咲は承一郎の方を振り向くと……

承一郎「ハッ……!」ビクンツ……!!?

承一郎は、寝ていた。

承一郎「んん…あれ、僕今寝てたのか…？ごめん、海風が気持ちよくて…（さつきまでこんな心地いい風吹いてなかったんだけどな…）」

小咲「……………」

承一郎「なんかしゃべってた？」

小咲「……いえ、特に何も……」

承一郎「…？そうかい…？」

小咲「…じゃあ一条君、私先に皆のところ戻ってるから一条君も後から来てね」

小咲は立ち上がって承一郎に言った。

承一郎「え？いや…なら僕も……」

小咲は承一郎の返事を聞かず、走り去って行った。

承一郎「……………な…なんだ…？」

ジョニー（…さつき、小咲の後ろに佇んでいた像ヴァイジョン…あれは『スタンド』だ）

ジョニーは小咲の背後に佇んでいた守護霊のようなものを確認していた。

ジョニー（まさか、俺に矢が刺さった時に引き抜こうとして矢で傷が出来たのか…？いや、ありえる。徐倫さんもそうだったらしいしな）

ジョニー（しかし…どういう能力なんだ？まったく分からない…）

承一郎（ん？どうしたんだい？）

ジョニイ（いや、なんでもない。それにしても…お前、惜しかったな）

承一郎（え？何が？）

千棘（…さっきのは私の聞き間違い…？だってまさか…小咲ちゃんがあんな事言うなんて…。だってあんな真剣な雰囲気で…まさか…）

千棘（『キムチでもいい？』なんて…。もつと真剣な話をしてるかと思つたのに…どんな会話してたんただろ…）

千棘よ、さすがにそれはない。どうやら心地よい海風は小咲の言葉を聞かせないように吹いたようだ。

千棘（でもそうとしか聞こえなかつたしなあ。それ以外の言葉には…うくん…ちよつと想像つかないわね。小咲ちゃん意外と辛党だったのね）

キング・クリムゾン!!？

海、二日目——

千棘（…あーあ…何やってんだろあたし…。なんで…あいつと話し辛くなつちやつたんだろ…。ついこないだまでは…いつも通りのハズだったのに…）

るり「…なんで昨日一条君と一緒に帰って来なかったのよ…」

小咲「いや、それは…。…あ、千棘ちゃん！」

小咲「…どうかしたの？昨日から全然無いみたいだけど」

千棘「…小咲ちゃん」

小咲「私で良かったら相談とか…。一条君とケンカとかしたの…？」

千棘「うん…ケンカはいつもの事なだけで」

千棘「…ねえ、小咲ちゃん」

小咲「…ん？」

千棘「これは私の話じゃあないんだけど…」

小咲「えーと、つまり…。…その千棘ちゃんの友達はそのある人の前では急に胸がドキドキしたり、苦しくなったりして前みたいに普通に話せなくなつた…。…って事？」

二人は砂浜でハイクオリティーな建造物を建てていた。というか世界遺産を作つて
いるような…。

千棘「…うん、最近急にそうなつちやつたみたいでさ、自分でもよく分かんないんだつ
て」

小咲「…ふーん（それってつぐみさんの事かな）、んー…それは端的に申し上げますと
…」

千棘「ん、何？」

小咲「恋ではないかと思われませう」

千棘「ブウ!!?? なっ……ここ……ここ……恋イ……!!??」

小咲「うん……そうだと思っただけ……。え？千棘ちゃんはそう思わない？最初普通だったのに最近急になら……多分そういう事だと……」

千棘「う……ん……恋……かあ……」

千棘（恋……恋……！でも確かにそれなら色々合点がいくかも……？……うん！ありえないわよそんな事……！）

そんな中、小咲はそんな千棘を見て笑みを浮かべていた。

千棘「……？小咲ちゃん……？」

小咲「あ、ゴメン。……もしかして10年前もこうして二人で話しながら遊んだりしたのかなって……」

千棘「……え？」

小咲「ほら、千棘ちゃんのお父さんが言ってたんでしょ？私と千棘ちゃんと一条君が昔一緒にいたって……。最近は少し分かる気がするの。千棘ちゃんと話していると少しだけ懐かしい気持ちになるというか……。昔もきつとこうして遊んでたんだろうなって」

千棘「……うん！私もそんな気がする……！」

小咲「…またいつでも相談してね」

千棘「ありがと！今度お礼にキムチ贈るね！」

小咲「…キムチ？」

千棘（…は、楽しかった。つい話し込んでしまったわ。やっぱり小咲ちゃんの良い人ね。でも…恋…かあ…。そんな事であるかしら…。だつてよりもよつてあんなもやしに…。そりや最近は悪いやつだと思つてないけど、恋つて事はつまり私があいつの事好きつてこ…）

千棘「…あゝゝゝ無い無い無い無い!!? やつぱありえないわよそんな事…!!? 何考えてんのよ私は無いつたら無くゝゝい!!?!」

千棘「はあ…（…そのハズなのに…:…どうしてこんなにドキドキするんだろう——
—!…）」

キング・クリムゾン!!?

集「お、ついたついた。やつぱ最後は花火だよなあゝ」

万里花「…私、こういう花火初めてで…」

集「あれ？桐崎さんは？さつきまでいたのに」

承一郎「え？彼女またいなくなったのかい？」

小咲「……私捜してくる……！」

承一郎「いいよ小野寺君。僕が行くから」

承一郎「……まったく、何やってるんだあの子。昨日から変だとは思ってたけど……」あ
千棘は、岩場で線香花火を点けていた。

千棘（……うう、ダメだ……。一緒にその場にいるだけでも緊張しちゃう）

千棘「ああ〜！こんなんじやあダメだ……。!!？これじやあこの先恋人のフリなんてやってけないでしょ!!？平常心よ平常心!!？落ちつくのよ私……。!!？」

千棘（……この線香が落ちなかつたら私の勝ち……。落ちなかつたら恋じやあない……。落ちたら恋……。……かもしれない……。無心……。無心よ私……）

承一郎「こんな所で何やってるんだい君は」

急に声をかけられ、千棘は驚いて動いてしまい線香花火の火が落ちてしまった。

承一郎「……なんだい……」

千棘「……別に、何もやってないけど……。どうもしないし……」

承一郎「……どうもしなくてこんな所に一人でいるわけないだろう君なら。花火もらうよ」

千棘「…何よ！知った風な口利かないでくれる…!!? あんたに私の何が分かるの!!
?」

承一郎「…いや、分かるだろうそのくらい。まだ数ヶ月だけで、学校でも休日でも毎日のように一緒にいるんだ。そのくらい分かるさ」

千棘「…そういうのをやめろ!!?」バシン!!?

承一郎「痛つ!!??なんだいそういうのつて…!」

千棘「うるさい!!?」

承一郎「理不尽!!??」

承一郎（くく）「まったく…何を怒ってるんだか…」

承一郎「…なにか悩みでもあるのかい。相談に乗ってあげてもいいよ?」

千棘「…特に悩みはございませんが」

承一郎「…素直じゃあないね君は」

千棘「なれなれしくしないでよ…! 私達は二セの恋人同士でしょ? だいたいあんた私の事嫌いなんじゃないやあなかったわけ…?」

承一郎「…え?なんだい今さら…。…まあ別にそうだけど…まあ最初ほどでは無いっというか…。…じゃあ君は?今でも僕の事嫌ってるのかい?」

千棘「……………もちろん嫌いよ…。嫌いも嫌い、嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌

い、大つつ嫌いよ」

承一郎「…そうか、さすがに少しへこむものがあるな…」

千棘「…：…ねえ…もしも…」

承一郎「ん？」

千棘「私達が本当に恋人だったら、私達上手くいってたと思う…？」

承一郎「…：…え…？なっ…何急にわけ分からない事聞いているんだい君は…！君らしくな…」

千棘「…いいから！…：…答えてよ」

承一郎（な…：…なんなんだ今日の彼女は…！やっぱりいつもと違いすぎるっていうか…何があったんだ…。ってなんで僕もこんな意識しちゃってるんだ！！??僕には小野寺君がいるってのに…！…なんで彼女相手にこんな緊張してるんだ…!!??）

承一郎（それに…彼女…：…こんな顔してたっけ——…）

承一郎「…：…：…そ…：…」

承一郎の答えは——

承一郎「そんなもの、上手くいくわけないだろう」

——NOだった。

承一郎「…：…だいたい君は僕の好みと違い過ぎるしね。がさつだし暴力的だし、かわい

気がないし……」

承一郎の言葉が、千棘の心を傷つけていく。本人はそれに気づいていない。

いつものようなやり取り。だがそのいつものようなやり取りが、より千棘を傷つける。

ジヨニイ（おい、承一郎……！）

承一郎「どーせ今と同じケンカばつかになると思うよ。そもそも君はもうちよつとおしとやかかっていうか、女らしさつてものをだね……」

ジヨニイが見かねて止めようとするがそれでも止まらず、

千棘「うるつさいわね!!? わかったからもう黙っててよ!!?!」

ついに千棘の感情が爆発した。

承一郎「……………え……………」

千棘は自分が言った言葉に気づき、

千棘「……………ごめん……」

それだけ言うと、走り去ってしまった。

承一郎「あつ……ちよつ……!」

ジヨニイ（おい承一郎！千棘を追いかけろ！）

承一郎（えっ？だっていつもと同じようなやり取りだろう？別に大丈夫でしょ？）

ジヨニイ（…クソツ…）

…夏休みが終わるまで、あと一週間と強…。

承一郎と千棘はその間、一度も言葉を交わさなかった。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

第4章―女心はよく分らない―

第62話 演劇の配役

集英組――

ヤクザ1「…そういやあ最近坊っちゃんとお例のお嬢ちゃん一緒にいるとこつて見たか…？」

ヤクザ2「いや？　そういや見ねえなあ…」

ビーハイブ――

ギヤング1「今まであの二人が三日以上会わなかった事なんて無かったはずだぜ？」

ギヤング2「それがもう十日近くも連絡とつてねえとか…」

クロード「まさか…あの二人…」

学校――

新学期、夏休みも終わり残暑の中再び学校が始まる――

承一郎（…まったく、彼女あの海に行った日以来電話もLINEも全部無視している。

…わけが分からない…何を怒ってるんだ？いやそもそもあれは本当に怒ってたのか？）
 小咲（…一条君なんだか元気がないなあ…。もしかして千棘ちゃんとのケンカまだ続
 いてるのかな…？）

承一郎（…ダメだ、さっぱり分からない。もともと彼女の考えなんて分かるわけない
 けど…）

『…私達が本当の恋人だったら、上手くいったと思う…？』

『…答えてよ』

『……………ごめん…』

あの海辺での千棘の言葉が思い出される。

承一郎（…なんなんだ、その『ごめん』は。今まで僕とケンカしてもまともに謝った
 事なんて無いクセに…。…彼女、まさか学校にも来ない気じゃあ…）

ガラツ!!?といきなり教室の扉が開き、千棘が教室に入ってきた。

千棘「……………おはよ…」

承一郎「あ…うん…」

承一郎「…連絡くらいしてくれ。無視はちよつと冷た過ぎるんじゃないか…？」

千棘「……ごめん、色々忙しかったから……」

承一郎「……なんだこの冷たい空気……」

承一郎「何を怒ってるんだい。ちゃんと喋ってくれ。言わなきゃあ分からないだろう……」

千棘「……別に怒ってなんかない。……ほら、そろそろ黙らないとHR始まるわよ」

承一郎「な……なんだ？ なんなんだ彼女のこの態度は……!!？ 今までも前日に何かあつても翌日ケロッツとしてる事は何度かあつたが、今回はそのどれとも違うような……」

朝のHRの時間になり、集が前に出た。

集「……はいはい注目……!!？ それでは早速今年行われる我が校の文化祭の話し合いを始めたと思います……!!？」

男子1「げ……!!？ 舞子が実行委員かよ……!!？」

男子2「変な企画立てんなよ……？」

集「シヤラップ!!？ 私が文化祭実行委員に立候補したからには忘れられない素晴らしい文化祭をプロデュースしてやるぜ……!!？ 我がクラスの出し物は厳粛な投票によつて文化祭当日に行う演劇に決まった!!？ 気になる演目は……『ロミオとジュリエット』!!？』『ロミオとジュリエット』とは、イングランドの劇作家ウィリアム・シェイクスピアによる戯曲の一つで、恋愛悲劇として有名な物語だ。

承一郎（『ロミオとジュリエット』か…僕達とは全く逆だね）

ジョニイ（そうだな。両家が争っているのは同じだが、お前達はその争いを止めるために恋人のフリをしてるからな）

集「今日はその配役を決めたい…！そこでどうだろう私の提案なのだが、主役のロミオとジュリエットには我がクラスの有名ラブラブカップル…!!? 一条承一郎と桐崎千棘嬢にお願いしようと思うのだがいかがかー!!?」

集の提案に満場一致の拍手が起こった。

承一郎「ええっ?!? ちよつ…ちよつと待つてくれ…!!? おい集…!!?」

千棘「やらない」

千棘は拒否した。

千棘「演劇に興味もないしやりたくもない。誰か…他の人に…」

集「…うんそつかあ、残念だけど仕方ないねえ…。じゃあ誰か他の人に…」

万里花「はいはいはくくしい!!? 私がやりますわ!!? ジュリエット!!?」

万里花がすぐさま手を挙げ立候補する。

万里花「私と承一郎様が演じるロミオとジュリエット…! ああなんて素晴らしい…!

共に頑張りましょうねロミオ様…!!?」

承一郎「誰がロミオだ!!?」

万里花「…構いませんよね？桐崎さん♡」

千棘「…好きにすれば」

万里花も千棘の反応に違和感を覚えた。

万里花「…どうしたんですかこの人」

承一郎「…いや…」

男子1「何イイイイ〜!!??マリカさんがジュリエットだとお〜!!??」

男子2「ならばロミオはオレがオレが〜!!?」

万里花がジュリエットをやると言った途端に男子達が立候補しまくる。

承一郎「うおおお〜!!?落ちついてくれ〜!!?おい集!!?僕だつてロミオ役なんてやりたくないんだけど…!!?」

万里花「え〜?!?やりましょうよ承一郎様〜!!?」

集「う〜ん…:仕方ねえな。ならここは公平にくじで決めるといふ事で…」

くじの結果、ロミオ役は承一郎、ジュリエット役は小咲に決まった。

男子1「ええ〜!!??なんでまたジョジョがロミオ〜!!??」

男子2「死ね〜!!?」

承一郎「僕だつて知らないよ!!?」

集(承一郎…お前つて実はもの凄くクジ運良いんじやあ…)

集よ、それはキモイからやめろ。

承一郎「……小野寺君……演劇とか興味あったのかい……？」

小咲「え？う……うん、えーと……す……少しだけ……？」

承一郎「……？」

承一郎（……ヤバイ、マジか!!？僕と小野寺君がロミオとジュリエット!!？まさか小野寺君と恋人役をやる日が来るなんて……!!？たかが劇とはいえ緊張してきた……!!？……しかし……）

千棘の素っ気ない態度に、承一郎の胸には何かモヤモヤしたものが残った。

キング・クリームゾン!!？

帰りのHR——

集「……それじゃあ放課後劇の練習始めるから教室集合な——」

一同「「お——！」」

承一郎は千棘の席が空席なのに気づいた。

承一郎「ん………あの子……」

承一郎はこれから帰ろうとしている千棘を呼び止めた。

承一郎「——おい！待ってくれ千棘さん！」

千棘「…何？」

承一郎「何？じゃあないよ。何早々に帰ってるんだい？」

千棘「だって私劇には出ないし特にする事もないもの」

承一郎「そうじゃあなくて…！一緒に帰らないと怪しまれるだろう。ラブラブ設定なんだから」

千棘「一日くらい平気よ」

承一郎「……………そういう問題じゃあ…。……………なんで…ジュリエット役断ったんだい？僕は恋人同士って事になってるんだから…あんまり無下に断ったら…」

千棘「…だつてしようがないじゃあない。やりたくなかつたんだから…。…話はそれだけ？なら私帰るけど…」

承一郎「……………!!?だから!!?こないだからなんなんだいその態度は…!!??文句があるなら言ってくれ!!?何が気に入らないんだい…!!?何も言わずにいきなりそんなじゃあこつちだつて分からないだろう!!?」

承一郎「僕が何かしたのかい…!!?気に障る事言つたのかい…!!?それとも他で嫌な事でもあつたのかい…!!?全部解決してやれないかもしれないけど話してみるぐらい…」

千棘「……だから……何もなし怒ってないって言ってるじゃあない……。それとも言った。『もうなれなれしくしないで』って。私達別に本物の恋人でもないのにどうして人の見てないところまで仲良くおしゃべりしなきゃなんないの？……それじゃあ……」

千棘はそう言うとそのまま帰ってしまった。

承一郎「……なんだい……。それ……。僕はただ君の事を心配して……。僕は……」

小咲「あれ？一条君？どこ行つてたの？もうすぐ練習始めるよ？」

承一郎「ああ悪い、今行くところだったんだ」

小咲「……一条君達、やつぱりまだケンカしてるんだ……。一条君が元氣なく見えるのはやつぱりそのせい……？」

小咲は承一郎が持っていた千棘が写っていた写真を思い出した。

小咲「……ダメダメそんな事考えないの！私つたらすぐにもう……でも、本当になんだったんだろうあの写真……。一条君は千棘ちゃんの事どう思ってるんだろう……」

職員室——

小咲「……コレ、集めたプリントです」

キョーコ「おお！サンキュー！……しかし小野寺がジュリエットをね……。驚いたよ、
どういふ心境の変化かな……？」

小咲「えへへ……」

キョーコ「きつとよく似合うよ。こりや先生もバツチり見ないとね」ガラツ……

小咲「いえそんな……」

小咲の目は、キョーコ先生が開けた引き出しの中にある写真に止まった。その写真は
承一郎が持つていた写真だった。

小咲「……先生……その……写真は……」

キョーコ「ん……？ああコレか……？一学期に林間学校に行つたらう……？これはその時の
写真なんだが……ほら、ここに小野寺が写つてるだろう？」

小咲（え……？）

キョーコ「先生のミスであんたの下着姿が入っちゃつてね、一条がコレに気づいて
持つて来てくれたんだよ。多分他の子には見られてないから安心しな？案外紳士だね
あいつは」

小咲「………一条君が……」

キョーコ「おつとイカン、一条には言うなつて言われてるんだつた。小野寺今の内緒
な？」

小咲（…そうだったんだ。一条君は…私の事を想つてあの写真を届けてくれたんだ…。それを私は——…）

男子1「…よー一条、お前主役とかホントに出来んの？」

男子2「ダメならいつでも替わつてやるぞ？」

承一郎「…うるさいな、余計なお世話だよ」

承一郎（…まあ実際確かに僕に主役が務まるのか不安だが——…くそ…今は演劇なんて気分でもないのに…）

『なれなれしくしないで』

承一郎（…くそっ！もういい、あんな子知らない…！頭切り替えてこつちに集中しないと…こつちは小野寺君もいるんだし恥かかせるわけにはいかないだろう…！こうなつたら精一杯やつてやる…!!?）

承一郎「…おおジュリエット!!?僕は君だけを愛してるんだ——…!!?」

小咲「……へ？」

承一郎の台詞に対して、小咲の顔は真っ赤に染まった。

承一郎「いや…小野寺君…次は『私もですロミオ様』…」

小咲「へ!? あ…ああ、そそそうだよねごめん…!!?」

小咲（…どうしよう、写真の事が思い過ごして分かった途端すごい意識しちやつて
る私…）

そんな中、校舎の外には千棘がいた。

千棘「…ホント、バカなんだから…」

その手には、演劇の台本が握られていた。

第63話 拳よりビンタの方が痛い

文化祭本番も間近にせまり、演劇の練習も本格的になつてきた——

集「……よし、じゃあもつかい最初から行つてみよーかー」

承一郎「……おおジュリエット……!!? 僕の瞳にはもはや君しか映らない——……!!?」

万里花「まあ嬉しい……! 私でもありますわロミ才様。早速結婚致しましょう!!?」

集「はいカットくくく」パチン!

承一郎「……ちよつと橘さん!!? 君何回邪魔すれば気が済むんだい……!!?」

万里花「まあ……! 邪魔だなんてとんでもないですわ。私だつてジュリエットの代役なんです。しつかり練習しておきませんか……!」

承一郎「……だからつて小野寺君の練習に割り込んでこないでくれ。しかもセリフも全然違うだろう。この話は対立している両家の跡継ぎ同士が愛し合つてるけど結婚できない、結ばれないっていう悲劇なんだよ」

万里花「まあ! それはまさしく今の私達のような……!!?? でもご安心下さい承一郎様……!!? 私達は両家公認ですので承一郎様さえその気になれば……!」

承一郎「だから人前でそういう事を堂々と言わないでくれ!!?」

主に男子からのブーイングが半端ではない。

鶴「…おい貴様、いい加減にしろよ。何度も言うがそいつはお嬢の恋人で…」

万里花「あら、今はそんな事関係ないではありませんか。だって彼女はジュリエットではないんですから♡」

…そう、劇の練習が進んでいく最中、承一郎と千棘はと言うと…先日の口論以来一切口も利いていないのが現状だ…。

女子1「…最近桐崎さん元気ないよねー」

女子2「桐崎さんならまつ先にジュリエットやりたがると思ったのに…」

承一郎「…まったく、なんなんだ彼女は…。…もう何を考えてるのかさっぱり分からない…。…いけない、彼女の事はもう考えないんだった。僕は劇に集中…。ん？」

承一郎は木の上の何かに気がつき、振り向くと…

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

なんかメガネがいた。

承一郎（うわっ!!??）

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承一郎（…しゅ、集中集中…!）

キング・クリムゾン!!?

集「……よし、今日の所は練習はここまでにしよーぜ！出演者は全員集まってくれ！」
集が練習を切り上げ、皆を呼んだ。

承一郎「……どうしたんだい集？何か打ち合わせでもするのかい？」

集「いやいや承一郎君、打ち合わせよかよっほど大事な話だぜ？」

承一郎「え？」

集「お楽しみの衣装合わせだ」

承一郎「おお……すごい……!!?これ本当に手作りなのかい……!!?」

承一郎は衣装の出来前に感嘆の声を上げる。

集「いかにも、作ったのはウチの手芸部員なんだが材料・素材集めにはオレも一役買ってるんだぜ？」

承一郎「……すごいこだわり様だね……」

集「他にも劇に必要な本格的な照明、カーテン・足場・パネルなどオレの人脈を総動員して搬入済みだ！なんたってオレのプロデューサーする劇だからな！なんとしても成功させてやるぜ!!?」

承一郎「……君の人脈ってどうなってるんだ」

承一郎が集の人脈に疑問を感じていると……

ぐ……ぐぐ……パチン!!?ピシツ!!?

何かが承一郎の頭に当たった。それはボタンだった。

承一郎「……?」

ボタンが飛来してきたのは女子の着替え室だった。

女子3「……どうしよう、つぐみちゃんの服胸が留まんないんだけど」

女子4「……なんで?採寸はしたんでしょ……?まさかこの短い期間に……?」

女子4「……ええい仕方ない!!?おっぱい増量よ増量……!!?もつと盛って盛って!!?」

鶴「そんな事大声で言わないで下さい!!?」

ジョニイ「……何やってんだあいつら……」

万里花「えくく!!?なぜ私の衣装が無いのですかあく!!?」

女子5「だって橘ちゃん代役だもん。丈は寺ちゃんに合わせるよ」

承一郎「!!?……小野寺君の衣装……!!?ど……どんな……」

シャツ!!?

そこにはジュリエットの衣装を着た小咲がいた。

小咲「!………一条君……」

承一郎「か……かわいい……!!?!すごい似合ってる……!!?」

小咲「……えへへ……似合うかな……」

承一郎「あ……ああ……その……！よく……似合ってると思うよ……？」

小咲「えへへ……ありがと……。……一条君も似合ってる。カッコイイよ」

承一郎「え?!? はは……そうかい……?」

小咲（……うん、ホントに……）

承一郎（それにしてもよく出来た衣装だなあ。凝ってるというか……。……これ、彼女が着たらどんな——）

承一郎（……おい!!?!? なんで僕がそんな事考えなきやあならないいけないんだ!!? どうでもいいだろう彼女の事は。何考えてるんだマジで……!!?!?）

承一郎は千棘が近づいている事に気づいて隠れた。

承一郎（なんで僕が隠れなきやならないんだ。くそつ……釈然としない。態度悪いのは彼女の方なのに……）

数日後——

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

またなんかいる。あのメガネがナイフを持ってこつちを見る。よく警備員に見つからないと感心してしまう。

ガラツと承一郎は窓を開けた。

クロード「ん？」

そしてそのまま…

承一郎「…バルスツ!!？」ドスウツ!

目潰しの呪文を唱えた。その呪文(という名の物理的な攻撃)はメガネをブチ破り、目に直撃した。

クロード「目があ!!?目があゝ!!?’ドサツ!

メガネは目を抑えて窓から落下した。効果は抜群だ!

承一郎「…なあ!千棘さん…!」

承一郎は廊下にいた千棘に声をかけた。

千棘「何?」

承一郎「何じゃあないよ、そろそろヤバイって…!限界だ!!?あのメガネ、さすがにかなり僕達の事怪しんでる…(まあ元々怪しんでるけど)。そろそろ仲よさそうな所の一つでも見せとかないと…」

承一郎「ウチのもんも僕達が最近会ってない事心配してるし…君の君が進まない事は分かってるけど、せめてあいつが見てる間ぐらい…」

千棘「…嫌。あんたと仲よさそーに恋人のフリなんて、もう出来ない」

承一郎「…いいかげんにしてくれ!!?いつまでも意地張ってわがまま言ってるんじゃない!!?これは僕達二人だけの問題じゃあないんだ、忘れたのかい!!?僕達が仲悪いのがバレたらまた家の奴らが戦争始めるかもしれない!!?そうだったら…!!?」

千棘「うるっさいわね!!?嫌なもんは嫌なのよ!」

承一郎「……どうしてそこまでつっぱねるんだ」

千棘「…私は今、あんたと関わりたくない。話したくもないし一緒にもいたくない」

承一郎「……だからジュリエットも断ったのかい…?」

千棘「……そうよ…。私が出るならあんたと一緒に主役演る事になったでしょ?それが嫌だった。だから断ったの」

千棘「あんたとロミオとジュリエットなんてまっぴらゴメン…!!?恋人役?恋人のフリ…!!?私達ただの赤の他人でしょ…!!?」

千棘「家とか…事情とか…そんなのもう関係ない…!!?あんたの事なんかもう知らない…!!?」

承一郎（な………なんだよソレ。赤の他人…?まっぴらゴメン…?なんで僕…?そんな事言われなきゃならないんだ…。君は…ずっと僕の事そんな風に思ってたのか…?）

承一郎（——…僕は、僕は君に——…恋人のフリする事になったり…昔会った事があつて分かったり、何て言ったらいいのかよく分からないけど、つながり…みたいにも

のを感じてたつもりだったのに——…)

承一郎 (最近君も、そう思ってくれてるんじゃないかって…)

承一郎 「…あーそうかい。よく分かったよ、赤の他人ね。僕と君の間にはなんにも無かった、そういう事だな？」

承一郎 「君と一緒にいて楽しくなんて一切なかったし、仲良くなつてなつてないし、君と一緒に何かした思い出とか、全部全部『ニセモノ』だったわけだ」

承一郎 「きつと十年前の思い出も、親父さんの勘違いかなんかだったんじゃないか？」

千棘 「！」

承一郎 「…少なくとも僕達が約束の相手つて事はないだろう。今の僕達がこんなのに昔上手くいつてたなんて思えないし…」

承一郎 「…このニセの恋人も、もう止めましょう。元々僕達がやらなきゃならない義務なんてないんだし、ちゃんと事情を話せば親父達もきつと分かつてくれ——」

次の瞬間、

パンツ

という音と共に承一郎の頬に衝撃が走った。

承一郎 「え…」

そして少し後からビンタされた事に気づいた。

周りから音が全て消えて、皆が承一郎と千棘を見た。

千棘は振り返り、立ち去って行った。

小咲「……………い……………一条君……………」

承一郎「……………悪い小野寺君、ちよつとはずす……………」

そう言つて承一郎は振り返り、歩く。

小咲「え……………でも……………」

承一郎「……………わけ……………分からない……………正直、千棘彼女に殴られるのにはもう慣れてた。

なの……………に……………）」

承一郎「……………くそ……………ビンタの方が、痛いじゃあないか……………」ポタ……………ポタ……………

承一郎の握られた拳からは血が出ていた。

千棘に対する怒りからではない。千棘を理解出来ない自分に対して怒っていた。

ジヨニイ（承一郎……………）」

校舎の外で、千棘は校舎の壁を殴っていた。

千棘（バカ……………！バカ……………！もやしのバカ……………！バカ……………！！……………？……………わたしのバカ……………）」

千棘「……………あたしだつて……………！！……………？」

……文化祭までの数日は飛ぶように過ぎ、承一郎達の間には流れる空気は最悪のまま、
文化祭当日――

第64話 毒蛇は静かに獲物を狩る その①

体育館、舞台裏——

体育館の表舞台には、二年生の先輩達がバンド演奏をしている。

男子1「……えーと、先輩の後1—Bの漫才で次がオレら？」

男子2「くくくく！キン・チョクしてきたら!!？」

女子1「ぜったい成功させるよー!!？」

女子2「おー——!!？」

小咲「……いよいよだね一条君。頑張ろうね」

ジュリエットの衣装を着た小咲が承一郎に話しかけた。

承一郎「ああ、まあやるだけやってみよう」

……あの一件以来、承一郎と千棘は全く口を利いていない。結局承一郎はまだ殴られた理由も分からないままだ——

承一郎（……どうすれば良かったんだ。何やつても怒るんじゃないか……。——つてもう考えても仕方ない。今はこっちに集中集中……）

小咲（……あの日の事、一条君に聞いても何も答えてくれない。二人の間に……何があつ

たんだろう……。千棘ちゃん、劇も観に来ないつもりなのかな——…)

男子3 「うわくく！あと一時間半かあ〜!!?」

男子4 「やべ、超ドキドキしてきた〜!!?」

女子3 「ほら！早く準備済ませて！」

小咲 「!!?」

舞台裏の幕の間からは、体育館を埋め尽くす程の観客が集まっていた。

小咲（うくく、やつぱり緊張してきた。こんな大舞台、私生まれ初めてだもん：

！でも…頑張らなきゃ…！一条君だった一緒なんだし、大丈夫…！あんなに練習もしたしセリフも暗記したし…大丈夫…!!?）

小咲（…もっかい台本読んだこう…）

女子4 「ちよつとー！危ないよー？」

女子5 「大丈夫！あとちよつとだからー！」

女子が脚立で舞台のセッティングをしていた。

しかし、もう少しで舞台のセットに届くところで足が滑ってしまふ。

女子5 「あ!?」

小咲は女子を受け止めようとするが——

承一郎と集は劇の最後の最終確認していたが、

女子6 「キャーキャー!!?」

という女子の悲鳴の方に気づき、その方向へ向かった。

女子7 「どうしたの!!?」

女子8 「大丈夫!!?」

女子5 「……ごめん寺ちゃん……!ごめん……!!?……私が脚立から落ちたのを寺ちゃんが受け止めて……。でも……寺ちゃんが……」

承一郎（——!!……小野寺君……!!?!?）

そこには女子達とキョーコ先生、そして座っている小咲がいた。

小咲 「痛っ……」

キョーコ 「……うーん、こりや完全に捻挫だね。骨に異常は無いと思うけど……小野寺……残念だけど本番は……」

キョーコ 「……代役の橘は?」

女子9 「……それが、橘さん今日風邪ひいて休んじやって……」

キョーコ 「……こりやあ良くないね」

小咲 「……先生、私やります……!」

キョーコ「やりますつたつてあなた…まともに歩けもしないでしょう？ちゃんと安静にしてなきやダメ！」

キョーコ「…おいそこのロミオ！」

承一郎「え？？」

キョーコ「あんたたちよつとジユリエットに付いててあげな。先生ちよつと対応を考えるから、みんなは一応準備を続けてて。以上解散！」

先生が話を一回切り上げて解散するが、誰もが不安を抱いていた。

承一郎「……大丈夫かい？小野寺君」

承一郎は小咲の隣に腰かけた。

小咲「…うん」

承一郎「…どうしよう、すごい凹んでるよ小野寺君…。そりやそうだよな、あんなにいっぱい練習も頑張ってたし、家でもずっと練習してたみたいだし…。よつぽどジユリエットやりたかったんだらうな…」

承一郎（僕には何か出来る事なんて……ん？…ある…？）

承一郎「…小野寺君」

小咲「…何？一条君？」

承一郎「まだ終わっていないかもしれない…」

小咲「えっ……？」

承一郎「僕の『波紋』の呼吸による治療で小野寺君の足の捻挫を治せるかもしれない！」

小咲「えっ？！？ホント？！？」

承一郎「ああ！骨折までは治療する事は出来るんだ！捻挫なんて簡単だ！なんでこんな事気づかなかつたんだ……？」

そう、承一郎は『幽波紋』^{スダンド} 使いである前に『波紋』使いなのだ。何故さつきまでそんな事に気付かなかつたのか自分を疑った。

それはともかく、これで小咲の捻挫が治れば劇は中止にならない。だが――

小咲「……いや……ダメだよ……！千棘ちゃんを呼んできて……！」

――小咲はその提案を断った。

承一郎「ツ？！？なんでだい？！？僕ならその捻挫を治せる！そうしたら劇にも出れ……」

小咲「……確かに、私も劇に出たいよ。……でも、千棘ちゃんと仲直り出来るかもしれないんだよ！それを逃しちやダメだよ……！」

承一郎（……なんて子だ……）

小咲は治せるのに、承一郎に千棘と一緒に劇に出るように言っている。

つまり、自分より千棘との仲が改善される事を優先しているのだ。

この捻挫もクラスの子のため。そして承一郎に言った事も承一郎と千棘のため。なんていう甘さだろう。なんとという自己犠牲だろう。自分より他人を優先する心。まるで承一郎の父、ジョナサン・ジョースターに添い遂げるハズだったエリナ・ジョースターと同じような聖女。

小咲「お願い…一条君…」

まるで、自分の母のような慈愛の精神——

『お願い…承一郎?』

承一郎「ツ!?」

死んだ母の最後の言葉が思い出され、死んだ母と小咲が重なる。

小咲「一条君…?」

承一郎「…大丈夫、分かった。待っててくれ、この劇、中止になんて絶対にさせない…!!?」ダツ!

承一郎は走った。母と重なった想い人の頼みを叶えるために。

今度は、約束を守るように。

く千棘 side く

私は特にやる事はなく、一人でぶらぶらと歩いてた。

…あと一時間ともう少して本番が始まる。私はまだ観に行くか迷っていた。

…何やってるんだろ、私。どうして…こんななんっちゃったんだろう…。あいつの顔見るとモヤモヤしてどうしても素直になれない。

なんであの時あたし、あんな事言っちゃったんだろう——…

『私達が本当に恋人だったら、私達上手くいってたと思う…?』

『そんなもの、上手くいくわけないだろう』

『…だいたい君は僕の好みと違い過ぎるしね。がさつだし暴力的だし、かわいい気もないし…』

『どーせ今と同じケンカばっかになると思うよ』

そーよ…元々上手くいくわけなかったのよ、あいつとは違ってあいつと私は正反対で

…私達の関係は…ただのニセモノで…。

…:…ああ、もういいか。どうせもう、完璧嫌われたし——

きつとこのまま、この関係もおしまい——…

千棘「ツ!??!」

そんな事を考えていた時、急に後ろから何かで口を押さえられた。

私は急いで後ろから襲いかかってきた奴を振り払おうとするけど、口に押さえられた物に薬品が染み込んでいたらしく、あっという間に意識が朦朧としてきた。

千棘（……承一郎……）

私は最後にニセモノの恋人の名前を心の中で呟いて、意識を手放した。

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

そこでジョニーは投球フォームをとり、

ジョニー「このツ…WRYYYYYYYY!!?’」ビュン!

プロ野球選手顔負けの投球をした。ピタツ!とジョニーが投げた発信機は車のバンパーにくっついた。

ジョニー「一応あの車に発信機は取り付けたが…どうするか」

ジョニーはとりあえず鵜に電話した。

ジョニー「鵜、承一郎だ」

鵜『なんだ一条承一郎、私は今お嬢を…』

ジョニー「千棘は攫われた」

鵜『な、なんだと!?!』

ジョニー「おそらく以前オレとお前で潰した麻葉組織の残党だ。タバコの煙を操るスタンド使いを覚えているか?」

鵜『ああ』

ジョニー「どうやら爪が甘かったらしい。多分オレが千棘と恋人だつて事を知って、報復するために誘拐したみたいだ」

鵜『…分かった。私はクロード様にこの事を…』

ジョニー「待て鵜、早まるな」

鵜『なんだ一条承一郎！早くしないとお嬢が……！』

ジョニー「落ちつけ鵜！いいか？ビーハイブ総動員で千棘を攫った奴らの所に突撃してみろ、千棘を人質に取られるのは確実だ』

鵜『ツ……だつたらどうすればいいんだ……？』

ジョニー「オレがやる。もともとオレの仕事だからな。きつちりと後始末をしてやる。それに隠密行動はオレの十八番だ』

鵜『だが、お前だけでは絶対に無理だ！もつと人を集めなければ……』

ジョニー「……鵜……」

鵜『なんだ……？』

ジョニー「腸が煮えくり返っているのがためーだけだと思ふなよ……！！？」

鵜『ツ……！！？』

電話越しからでも分かる程の、怒気が含まれた声。鵜は一瞬マジでビビった。

ジョニー「オレの……！目の前で……！攫われたんだ……！！？オレが直々に落とし前をつけてやる……！！？」

鵜『……分かった。だが……』

ジョニー「心配はいらない。ウチの中でも選りすぐりの精兵達を呼んだ。お前の方にももうすぐ来るはずだ』

鵜『もうすぐ来る…?うわっ!!?』

キイイーツ!!?

いきなり黒塗りの車が鵜の前でドリフトして急停車した。かなりのテクニクだ。

?「あなたが鵜さんでよろしいですか?」

鵜「あ、ああ…。そういうあなたは…」

ジョニイ『ピークオド!鵜を回収したらすぐにLランディングゾーンZに移動しろ!そこで鵜と合流する!』

ピークオド「了解です、ボス!それでは鵜さん、急いで下さい!」

鵜「は、はあ…」

ジョニイ『いいか鵜、その車に乗れ!場所は近くの廃工場だ!そこに千棘は捕らえられている!その付近で合流するぞ!』

鵜「分かった、すぐにそっちに向かう!」

ジョニイ『ピークオド!大至急だ!急げ!』

ピークオド「了解です、ボス!鵜さん、捕まって下さい!飛ばしますよ!」

廃工場前——

鵜はピークオドから降りて、ジョニイと合流した。

ジヨニイ「来たか鵜」

鵜「ああ、だが…あのピークオドという名前は…」

ジヨニイ「ハーマン・メルヴィルの長編小説『白鯨』の捕鯨船の名前だ。まあ、ピークオドは役割としてのコードネームだ。気にするな。それより、そろそろ来るぞ」

鵜「そろそろだと…?」

キイイイイイッ！バタンツ！

もう一台来た車から、それぞれ個性的な迷彩服を着た二人の男達が現れた。

?1「お待たせしました、ボス」

?2「ボス、待たせたの」

ジヨニイ「来たかザ・ペイン、そしてジ・エンド」

鵜「こ、この二人は…?」

ジヨニイ「紹介しよう。こっちの爺さんがジ・エンド。もう一人はザ・ペインだ。こっちはビーハイブの黒^{ブラックタイガー}虎だ」

ジ・エンド「ほう、このお嬢さんがかのお?」

ザ・ペイン「いつもボスがお世話になってます」ペコツ

鵜「は、はあ…」

ジヨニイ「それより、千棘の救出を優先するぞ」

ジョニイの一言で、全員の顔が真剣な顔つきになる。

ジョニイ「廃工場の内部の構造はすでにカズが調べてくれた。端末に送るぞ」

『TOKYO通信』の能力でカズが手に入れた廃工場の内部図を全員の端末に送る。

ジ・エンド「さすがはカズヒラじやの。良い手際じや」

鵜「これがあの工場の内部図か……」

ジョニイ「オレの能力で調べてみたところ、中には三十人、外には見張りとして三人いる……。まずは見張りから片付けるぞ。ジ・エンド」

ジ・エンド「分かったボス。すぐに終わらせるかの」ズギョン！

ジ・エンドはボルトアクシオン式小銃の形をしたスタンドを発現させて、高年齢とは思えないほどに機敏な動きで狙撃ポイントへ移動した。

鵜「こ、これはッ……！」

ジョニイ「『終わジ・エンドり』。爺さんのスタンド能力だ」

鵜「なるほど、銃の形をしたスタンドか……」

シュパン！シュパン！シュパン！スタンドの銃なので発砲音も聞かれず見張りの男達はジ・エンドの弾丸によって気絶した。

ジョニイ「早いな、さすがジ・エンドだ。よし、行くぞ。オレと鵜、ザ・ペインとジ・エンドの二人組で行くぞ」

ザ・ペイン「了解！ではボス、これを」

ザ・ペインはダンボールをジヨニイに渡した。

ジヨニイ「すまん」

ザ・ペイン「それでは私とジ・エンドはポジションに移動します！」シユタ！

ジヨニイ「オレ達も行くぞ」

鵜「ああ」

ロミオの衣装から黒のコートに着替えたジヨニイと鵜（鵜はまだ劇の服を着てなかった）は廃工場の裏口に到着した。

ジヨニイ「鵜、お前は退路を確保していてくれ。荒っぽい事はオレ達がやる」

鵜「分かった」

ジヨニイは耳元の無線を繋げる。

ジ・エンド『こちら「真実の終焉」、ポジションに到着したぞい』

ザ・ペイン『こちら「至高の痛み」、こつちもポジションに到着しました。ミラー副司

令は後数分で戦闘班を引き連れて来るらしいです』

ジヨニイ「こちら『毒蛇』了解、こつちもポジションに到着した。ザ・ペイン、頼む

ぞ」

ザ・ペイン 『了解しました。「痛み」！』
ブウウウン…ブウウウン…

男1 「な…なんだ!!？」

男2 「気をつけろ！蜂の大群だアーツ!!？」

ジヨニイ 「…さて、誰の女に手を出したか教えてやるか！」

毒蛇はその毒牙を敵に向け、笑みを浮かべる。

第66話 毒蛇は静かに獲物を狩る その③

〈千棘side〉

廃工場内——

私が目を覚ました時には、私はどこかの工場の椅子に座らされていた。

両手は後ろにまわされ、両手両足は紐で拘束されていた事に気づいた。引き千切つて脱出しようかと考えたが、クロロホルムか何かで眠らされていたせいはまだ力が入らない。

周りを見渡しすと私の周りには三十人くらいの男達が立っていて、拳銃を持っているやつもいた。

男「さあ、これでまずビーハイブの嬢ちゃんを誘拐する事が出来たな……。護衛も付けずに一人で歩いてんだもんなあ！」

男「攫つてくれて言ってるようなもんだぜえ！」

男達のギャハハという品のない下卑た笑い声が工場内に響く。

千棘「あんた達……私を攫つてどうするつもり？」

傍で笑っていた筋肉質の男に問いかけると、男は私の表情を見て目を見開いた。

男「ほお？さすが、巨大ギャングの一人娘といったところか……。誘拐され、これから何をされるかもわからないというのに……。冷静でいられるか」

千棘「舐めないでくれる？アメリカにいた頃はあんたみたいな奴らに結構ちよつかいかけられてたから」

誘拐されたことはないものの、未遂までならアメリカにいた頃は何度か経験していた。

日本よりもアメリカの治安は悪い。その分、争いごとに巻き込まれることは決して少なくはない。

男「あんたを誘拐した理由か……。心配すんな。俺たちが用があるのはビーハイブという組織にじゃあねえ」

千棘「えっ？」

男の思わぬ言葉に目を丸くする。

てつきり、自分を人質にして組織を潰すかそれとも吸収するか、どちらにしろビーハイブに仇なすつもりだとばかり思っていた。

だが、男の狙いはそうではなかった。

男「あのお前の恋人……。一条とかいうガキに用があるんだよ……！」

千棘「っ!?？」

男達の狙い、それはビーハイブではなく集英組。それもその息子の承一郎なのか。私
は目を見開いて驚愕する。

しかし何故？確かに承一郎はヤクザの息子だけど、そういう裏の世界ではあまり知ら
れてはいないと鶴から聞かされたことがある。

男「オレ達はな、麻薬で大稼ぎしてたのをあ的一条ってガキに邪魔されたんだよ！麻
薬ルートに取引写真まで撮られて：葛西のヤロー、何やってんだか」

男「おかげで俺たちはドブネズミのような生活を強いられたんだよ！サツから逃げ
て、飯を食うのにも苦勞するような生活、何で俺たちがしなきゃならねえんだ！だから
俺たちの憎しみをぶつけてやるのさ！お前の恋人：一条承一郎になあ！」

承一郎が麻薬組織を潰した？でもあいつそんな素振りすら見せなかったハズ。

そういえば前につくみが夜遅くに帰って来たのを覚えてる。集英組と合同の任務が
あつた事も。まさかその時に？

男「ここで待つてるんだな！お前の恋人が蜂の巣にされるその様をな！」

そんなわけない。あいつが来るハズがない。今頃は劇の本番の準備をしているだ
ろーし、私なんてどうせニセモノの恋人。

来るハズがない。：でも、つい思ってしまう。

あいつが助けに来てくれるって――

そう考えていると、

ブウウウン…ブウウウン…という羽音が聞こえてきた。

男1「な…なんだ!?!」

男2「気をつけろ! 蜂の大群だアーツ!!?」

突如現れた蜂の大群に混乱する男達。

そんな中背後から

承一郎? 「いいか千棘? 今紐を解くから大きな声を出すなよ?」

承一郎がいた。

く千棘 side out く

千棘「じよ、承一郎…! なんで…?」

ジョニイ「お前を助けに来たのに決まってるだろ。それ以外に何があるんだ?」
ブ
チツ!

ジョニイは千棘の紐を解いて、無線を入れる。

ジョニイ「カズ、今だ!」

カズ『了解ボス! GO!』

カズの合図と共に戦闘班のスタッフが工場に突入する。

ジョニー「オレは千棘を脱出させる！カズ達は制圧を頼む！」
カズ「了解だ。お前ら、一人も逃すな！」

戦闘班「「イエツサー！」」

戦闘班スタッフは慣れた手つきで男達を制圧する。一人一人訓練された精兵達がゴム弾（日本で実弾はマズイらしい。ギャングとかはドンパチやってるのに）で男達を気絶させる。

男「このツ…！」

男達は懐から拳銃を取り出して承一郎に撃とうとする。だが…

ジョニー「連続ッ！Cッ！」ブンッ！

男「うげっ！」

ジョニー「Qッ！」

男「うごおっ！」

ジョニー「Cッ！」

男「アギッ！」

ジョニーの連続CQCが炸裂し、男三人は宙を舞い落下して地面に叩きつけられた。しかも拳銃は全て投げられた時に分解された。

ジョニー「千棘、早く逃げろ！退路は鶴が確保している。お前は早くここを脱出しろ

！」

千棘「承一郎は……？」

ジョニー「オレは……まだやる事がある。元々はオレの不始末のせいでお前を巻き込んでしまったからだ。落とし前はキツチリつけないとな」

ジョニーは鵜のいる退路を指差す。

ジョニー「早く行け！」

千棘「う、うん……」

ジョニーは千棘が退路へ進んだのを確認すると、ジョニーは腰を差した刀を取り出す。

高周波ブレード——高周波によって原子間結合を強固にし刀身の強度を高め、逆に高周波エネルギーを帯びた刀身に触れた物体は原子間結合力が弱められるため、刀剣の切断能力を大きく高められた刀だ。

ジョニーは刀を圧倒的なスピードで一閃、鞘にカシユン……と戻すと、ガラガラガラ……！と退路が崩れた。

ジョニー「さて……斬られたい奴から前に出ろ」

男「なんだとテ『スパアアアン！』メエ……？」ズルツ

男は言い終わる前にジョニーに斬られ、上半身と下半身が分かれた。

「ジョニー」てめーら……オレの女に手を出して、タダで済むと思うなよ！体を引き裂いて、臓器を順番に並べてやるぜ！」

ジョニーは刀を構え、男達に宣言した。

第67話 毒蛇は静かに獲物を狩る その④

千棘はジョニーに言われて退路を進む。

その途中で、鵜と合流した。

鵜「お嬢！ご無事で!?？」

千棘「ええ、私は平気。それよりも承一郎が…」

鵜「あの男なら大丈夫です。ひとまずここから脱出します！」

千棘と鵜は廃工場から脱出し、ピークオドと合流した。

ピークオド「鵜さん、そちらが千棘お嬢さんで？」

鵜「ああ、早くここから離脱を！」

千棘「ちよつと待って、承一郎は…？」

ピークオド「こちらピークオド、ボスはどうします？」

ピークオドはジョニーに無線を送る。

ジョニー『こちら「毒蛇」、こっちは問題ない。そのまま千棘と鵜を連れて離脱しろ。

こっちはすぐに戻る』

鵜（『毒蛇』だと…!??!まさか…）

ピークオド「了解！それでは二人共、離脱します」

千棘「ちよつと、あいつは置いていくの…!!？」

ピークオド「大丈夫ですよ嬢さん、ボスは不可能を可能にする男です。それにボスには軍隊を引き連れても勝てるかどうか分かんないですし」

ジョニー「斬ッ！」スパアアアン！

男「ギヤアアアア!!？」

高周波ブレードが男の胸を斬り裂き、

ジョニー「奪ッ！」ドスウツ！

手を男の胸へ突っ込んだ。

ジョニーが手を戻した時、手には心臓が握られていた。

そしてその心臓を握り潰す。

男「このッ！」ダアン！ダアン！

チュイン！と男が撃った弾丸をジョニーは走りながら叩き落す。

男「ヒイツ…！」

ジョニー「情け無いぞ！男なら…覚悟を決めろ！」スパアアアン！

ジョニーは斬った男の首元を掴み、

ズギュン！ズギュン！

血を搾り取った。

男「ぐえっ!!? 血…血があ…ツ!!?」

ジョニイ「フンツ！」ブオンツ！

ジョニイが吸血した男を他の男達に投げる。

ドバアツ！と男達の体が肉片となって吹き飛ぶ。

男「クソツ！」カチツ！

男は手榴弾グレネードを投げつける。

ドオオオオオン!!?と爆発する。

男「ヒヒツ、やったか…！」

だが、その煙の中からジョニイは刀を両手で振りかぶるように構え、男に飛びかかるように突っ込んだ。

男「えっ!!?」

スパアアアン！と刃が男を一刀両断し、男の真つ二つに分かれた体が左右に倒れた。

ジョニイは刀をゆっくり鞘に納めた。

ジョニイ「…カズ、後は頼めるか？」

カズ「ああ、後は任せてくれ」

カズは戦闘班スタッフを引き連れ、現場の後始末に取り掛かった。

ジヨニイ「こちら『毒蛇』、スターバックを寄越してくれ」

オセロット『こちらオセロット、了解だボス。すぐに急行させる』

ジヨニイは『白鯨』の一等航海士、スターバックのコードネームを持った車に乗り、千棘達の元に戻った。

ジヨニイ「よお、待たせたな」ガチャ！

ピークオドの中にジヨニイが乗り込んだ。

千棘「じよ、承一郎……！」

千棘がジヨニイに気づき、声をかける。

ジヨニイ「…スマン鶴、お前は先に学校に戻ってくれ」

鶴「…分かった。お嬢、失礼します」

鶴はピークオドから降りて、スターバックに乗り学校へ行った。

ジヨニイ「ピークオド、すまんがお前も……」

ピークオド「分かりましたボス、話が終わったらまた呼んで下さい」

そう言ってピークオドは車の外に出た。

千棘「…何で来たの……？」

ジョニイ「…勝手に体が動いてたんだ。それにお前はオレの恋人だからな」

千棘「…何よ…ソレ…。海では…あんな事言つといて…」

ジョニイ「…は？」

千棘「あなたが言つたんじゃあない。どーせ私達は何も上手くなんかいないつて…。それなのになんで今さら…」

承一郎（なんだ…彼女…もしかして…今までずっと、あの時僕が言つた事気にしてたのか…？だつて…あんなの…いつもお互い言い合つてるような内容じゃあ…）

承一郎（…いや…違うだろ…それでも彼女はそれで傷ついて、今まであんな真剣に怒つてたんじゃあないか——…）

承一郎は自分の犯した過ちに気づき、後悔した。だが、どう言えいいのか分からなかつた。

ジョニイ「…嫌いじゃあねえよ…。…すまん、オレがお前に海で言つた事をそんなな気にするとは思わなかつた。正直まだ完璧ピンと来てるわけじゃあねえけど、あれを言い過ぎたとは思つてる…」

ジョニイが言えずにいる承一郎の気持ち代わりに弁明する。

ジョニイ「だからせめて正直に言うけど…：…やっぱりお前はオレの好みとは違うし、がさつだし暴力的だし、かわいい気ねえし、ケンカばつかで上手いかなーと思う。それ

は本音だ」

フアントム——人格だけのジョニーにとつては、この言葉は相棒の気持ちを代わりに言っているだけだし、何も感じない——ハズなのだ。

ジョニー「……………でも…（…どうしてこんなに…）」

ジョニー「……………嫌いなんかじゃあねえよ…（胸が疼くんだ——…）」

ジョニー「それに…好き嫌いの問題じゃあないだろう。目の前で攫われたんだ。マジで焦ったんだからな…」

千棘「……………そっか……………」

キング・クリムゾン!!?

怪我をした小咲の代わりに千棘にジュリエットの役をやってほしいという最初の目的は千棘は了承してくれた。

ジョニー（なあ承一郎…）

承一郎（ん…?）

ジョニー（オレがやってもいいか?ロミオ役…）

承一郎（…ああ、思いつきりやればいいよ!）

男子1「おーい!!?ジュリエット役見つかったぞー!!?」バンツ!!?

小咲「…千棘ちゃん！良かった一条君、間に合ったんだね？」

ジョニー「ああ、ギリギリだがな…！」

千棘「こいつが泣いて土下座してお願いしますって言うもんだから…」

ジョニー「言っていないぞそんな事…!!？」

千棘「よし！やるとなったらとことんやってやろうじゃあない!!？台本貸して!!？ギリギリまで覚える!!？」

ジョニー「ああ!!？いや待て!!？もう細かいところは覚えるのは無理だ。重要などころだけピックアップする…!!？」

男子2「え!!？ジュリエット役見つかった!!？」

男子3「桐崎さんがやるって!!？」

男子4「大丈夫かよセリフとか…」

女子1「いいからとにかく準備…!!？」

皆千棘がジュリエットの役を演じる事になり、重苦しい雰囲気のマシになってきた。

ジョニー「…あーもう!!？何回ここで詰まってるんだ!!？ちゃんと覚えろよ!!？」

千棘「うっさいわね、そんなすぐ覚えられるわけないでしょ!!？黙ってなさいよこのデクの棒!!？」

ジョニー「なにッ!!？」

男子5 「…おいおい、あの二人まゝたケンカしてね？」

男子6 「あれで本番大丈夫なのかよ…？」

小咲 「……………大丈夫だよ」

男子5 「え？」

女子2 「開演10分前!!? ジュリエットはドレスに着替えて!!?」

小咲 (……………良かった…。ようやくいつも通りだね、二人とも…)

小咲の願いは叶い、劇が幕が上がる。

ジョニー 「行くぞ！」

千棘 「おう！」

第68話 波乱の文化祭 その①

千棘（この気持ちになんて名前を付けられればいいだろう——…）

『開演5分前——…！』

千棘（ううん…本当はもう知っている——…）

男子「おい！ジユリエットはまだかよ!?？」

ジヨニイ「オレが知るか！あいつ今着替えて…」

千棘が出て来ると、ジヨニイはボーツとなった。

千棘「……何よ、ボーツとしちやつて。ほら、もう本番よ?」

ジヨニイ「え? いや…おう…（綺麗で息を呑んでいたなんて言えない…）」

ジヨニイ「…お前は大丈夫か? その…緊張とかセリフとか」

千棘「大丈夫、要所はもう覚えたから」

ジヨニイ「…良かった」

千棘「何?」

ジヨニイ「いや…小野寺と一緒にやれなかったのは残念だけど…お前と一緒にやれて

良かったと思ってる」

ジョニーは自分の気持ちを正直に言う。

千棘「……行く？ 始まるわ」

『ベーーーーー……………!!?』

『…大変お待たせ致しました。続いでの出し物は1年C組による演劇——』

ジョニー（オレは…その笑顔が見たかった…）

『ロミオとジュリエット』です…!!?』

劇が始まる。

キング・クリムゾン!!?

集『…これから語られますは、悲しい恋の物語——血を血で洗う争いを続ける二つの家、モンタギューとキャピュレット。そこに生まれついたロミオとジュリエットは、皮肉にも恋に落ちてしまうのです——…』

集のナレーションから物語が始まった。

千棘「…ああロミオ、なぜ私達の両親は憎しみ合い、争うのでしょうか。本当ならきつと私達のように手を取り合い、想い合う事も出来るといふのに」

千棘「私のロミオ様を想う気持ちの半分でも理解して貰えたなら、きつと…」

さつき読んだ程度でセリフをスラスラと言う千棘。

ジヨニイ（………すごいな、さつき少し台本読んだだけなのに。やっぱりこいつは……）
千棘「…あれ？次のセリフ何だっけロミオ様」

その言葉に全員がずっこける。

ジヨニイ「…おいジュリエット!!？そこは大事なところだろうが!!？」

千棘「しようがないでしょ!!？出だしからこんなまどろっこしいセリフ覚えらんないわよ!!？」

ジヨニイ「シナリオにケチをつけるな！」

どつ！と周りから笑いが生まれた。

観客1「えー!?？何コレ、いーの?こんな事言つて」

観客2「でもちよつと面白いかも！」

男子1「…おお!?？結構ウケてる!?？」

集「意外とイケるかも!?？」

竜「いいぞ坊っちゃん!!？」

ギヤング「お嬢頑張つてー!!？」

ジヨニイ・千棘「「げっ」」

二人が観客席の方を見ると…

ギヤング「すげえ！主役じゃあねえか!!？」

竜「坊つちちゃんカックイー!!？」

カズ「ビデオ回してるぞボスウー!!？」

オセロツト「ボス…いいセンスだ」

^{マザーヘース}MBスタッフ達「おい、ボスが主役だぞ！」「ああ、すげえカツコイイな！」「ボスー

！頑張つて下さい！」

ミスタ「おい見ろよジョルノ、承一郎が主役だぜ！」

ジョルノ「そうだねミスタ」

承太郎「なかなか似合ってるじやあねえか…」

集英組やビーハイブ、それに水晶^{クリスタル・ファンク}の牙のスタッフ達に兄さん達が声を上げる。カズ

が完全にオカンになっているのは気のせいだ。

ジョニイ（兄さん達はまだしもあいつら…観に来るなど言ったのに…。くそっ！この劇まずまず失敗出来ん…!）

ジョニイ「よ…よくしジュリエット、緊張してるのは分かったからまた一から頑張ろう！な？」

千棘「もっ！もちろん！バッチ来いってもんよ！」

ジョニイ「ジュリエットそんな事言う娘じゃあないぞ!!？」

またどっ!!? 笑いが生まれた。

小咲(……………頑張って…二人とも…)

キング・クリムゾン!!?

男子1「…イケる! イケるぞ…!!?」

集「よし、ノつてきた〜!!?」

劇は進み、千棘は塔のバルコニーに立っている。

集『…屋敷から抜け出そうとするロミオ。召使いの制止も聞かずジュリエットの元へ行こうとします』

鶴「…本当に行ってしまうのですか? キャピュレット家の者があなたの命を狙っています (棒読み)」

ジョニイ「…たとえばどれ程危険でも、私は行かねばならないのだ。今も彼女はあのバルコニーで待っている…!」

ジョニイは召使いである鶴の棒読みは無視してセリフを言い、バルコニーへ向かおうとする。

集『…止まらないロミオ。しかしここで召使いはある決意をするのです』

ジヨニイ・鵜 「……………ん？」

集 『実はこの召使いはロミオに恋をしていたのです』

ジヨニイ・鵜 「はあ？？」

集 『召使いはこれが今生の別れになると思い、愛の告白をするのであった（笑）』

鵜 「おい！！？？そんなの台本に無いぞ！！？」

ジヨニイ（集の奴…）

鵜 （…あの男…！！？）

ジヨニイ 「…おい、鵜鵜…！」

鵜 は観客席を見渡し、視線が自分に集中しているのに気づいた。

鵜 「あ…あの…。ロミオ様、実は私…ずっと前からロミオ様の事が……………好……………好……………

好……………」

鵜 が言いかけるが…

鵜 「…って言えるかバカ者…！！？」

鵜 はカツラを取ってステージに叩きつけた。またどつ！と笑いが起こる。

集 『ああつとー！！？告白失敗！！？召使いは存外恥ずかしがり屋さんだったようです！！

？そうこうする内にロミオはジュリエットの元へ！皆さん勇気を出した召使いに拍手

を！』

鶴はクラスの皆から抑えられ、ワイヤーで吊り上げられ退場した。パチパチと拍手が起こる。

ジョニイ（…集の奴、余計な事を…）

？「お待ち下さいロミオ様!!？」

ジョニイ「…ん!!？」

突然声が聞こえて風邪を引いて休んでいたハズの万里花が登場した。

集『おお!!？なんとここで謎の女性が乱入ー!!??この女性は何者なのかー!!??』

万里花「私の名は…えーと…ジョセフィーヌ！私はロミオ様の…本当の恋人ですわ!!

？」

ちよつと今名前を考えていたのは気にしないでおこう。だがこれはこれで面倒な状況だ。

集『なんとく〜!!??ここでもさかのロミオ二股疑惑く〜!!??』

ジョニイ（橘…！お前確か風邪じゃあ…!!??）

集『なんと言う事でしょう！これが事実なら純愛どころではありません!!？まさに女の敵!!？ロミオ最低です!!？』

ロミオへのブーイングの嵐が巻き起こる。

ジョニイ「やかましいッ！勝手にボロクソ言うんじゃあないぞッ!!？」

ジョニイの一喝によつて観客は静まりかえつた。

ジョニイ「えーと…：ジョセフィーヌ？君は何か誤解してるようだが…」

万里花「まあ！まさか忘れたとおつしやるの！？私にあんな事までしておいえ…：結婚して下さるといふのもウソだったのですか？」

万里花は面倒な設定をブチ込んだ。

集『思つた以上に二人の關係は發展してた…？これはどう責任を取つてくれるのかロミオ…！！？あんな事つて一体どんな事なのでしょーか…！！？』

ジョニイ（…くそ、あれこれ勝手に設定を足しやがつて…！）

そこでジョニイはある事を思いつく。

ジョニイ「…やれやれジョセフィーヌ。君はそうやって昔から僕を困らせてばかり。結婚なんて出来るわけないだろう？」

ジョニイ「だつて僕らは、血の繋がつた兄妹なんだから…！！？」

集『衝撃の事実！！？二人は実の兄妹だつた…！！？？？衝撃の事実が連発です！！？しかしこれでは確かに結婚は出来なくい！！？』

ジョニイはしてやったりというような顔をする。

万里花「でも愛にそんなものは關係ありませんわ！！？結婚しましよロミオ兄様！！

？」

集『それでもジョセフィーヌは止まらな〜〜〜い!!? 兄を健気に慕う妹ジョセフィーヌ!!? 一体ロミオはどうするのか!!?』

ジョニイ「分かってくれジョセフィーヌ。僕の進む道は両家を巻き込む茨の道だ。そんな物に体の弱いかわいい妹を巻き込みたくないんだ…」

ジョニイは万里花の手を掴み、自分でも歯がガタガタ言うようなセリフを吐いた。

万里花「え…」

万里花（そんな…ロミオ様は私の体を気遣って…。ああ、私のロミオ…承一郎様…やっぱり…大…好…き…）

風邪のせいかわ里花は倒れるが、お付きの人である本田によつて運ばれた。

集『おおつとー!!? 体の弱いジョセフィーヌがここで退場ー!!? ロミオ思わぬ刺客を振り切つたー!!?』

承一郎（ごめん橘さん…後で見舞い行くから…）

集『ロミオ、ジュリエットの元へ向かいます!!?』

ジョニイ（やれやれ…）

? 「待ちたまえロミオ!!?」

ジョニイ「またかよ!!?」

登場したのは…

クロード「…君をジュリエットに会わせるわけにはいかない。私はジュリエットの兄
…!!? フリードリヒ…!!?」
面倒くさい奴が出て来た。

承一郎（とうかこのステージの警備甘くないか?!?）

第69話 波乱の文化祭 その②

クロード「…君をジュリエットに会わせるわけにはいかない。私はジュリエットの兄…!!? フリードリヒ…!!?」

クロードは腰にレイピアを差して登場してきた。

ジョニー（何やってんだこいつは…!!??）

クロード「…聞けば君は女を泣かせ、二股三股を平気でするような卑劣漢だそうじゃあないか」

ジョニー「誤解の上に尾ヒレ付いてるぞ!!?」

クロード「そんな男に妹はやれん…!!? どうしても妹の元へ行きたくば…私を倒していくがいい!!?」ズバァ!!?

ジョニー「うおっ!」バツ!

ジョニーはクロードの攻撃を後ろへバク転して回避する。

集『これはまたまた急展開…!!? 果たしてロミオは無事ジュリエットの元へたどりつけるのか…!!?』

ジョニー「おいッ! この話は恋愛悲劇だろ! いつバトルものにシフトチェンジしたん

だ!!?」

千棘「ちよつと……えーとお兄様!? 何やってんの危ないでしょ!?」

クロード「ジュリエットは黙っていなさい。この男は危険なのだ……! この男さえいなければ……!!? ジュリエットは永遠に我が元に……!!?」

集『おおつと、どうやらお兄ちゃんは重度のシスコンでいらつしやる模様……!!?』
クロード「チイツ! ちよこまかと逃げおつて!」

ジョニー「斬られそうになつたら避けるのは人間として当たり前じゃあないか!?? 卑怯だろそつちだけ武器とか!」

そんな中、小咲は舞台裏である物を見つけた。

小咲「……鶯さん! これを一条君に!」

小咲は鶯にそれを渡し、

鶯「!なるほど……ロミオ様! これを!」ブンツ!

鶯はそれを投げて渡した。

ジョニー「!ありがとう!」パシツ!

それは、別の劇の小道具である片手用直剣（刀とは違う両刃）だった。

ジョニー「さて……やるか」シユカアン!

たとえ芝居の小道具でも、ジョニー達には関係ない。なぜなら、『クリスタル・ボーン』

の能力によつて骨を纏わせ、本物並みの斬れ味を誇る業物になるのだ。

ギイイイイイイン…!!?とレイピアと剣がぶつかり合い、金属音が炸裂する。

クロード「くっ…!!」

ジョニイ「ハッ！」キーン!

お互い一旦距離を取つた後、激しい剣戟が始まる。

ジョニイ「ぐっ…!!」

劇である手前、クロードに重傷を負わせるのはマズイと考え、ジョニイはあまり攻撃的になれず、防戦一方だった。

それに伴い、ジョニイの服がボロボロになっていく。

集『防戦一方のロミオ!果たしてこの決闘に勝てるのかー!!?』

クロード「ワーハッハッハッハッハ!!?どうした、手も足も出んかー!!?」

ジョニイ(ヤロー、こつちが手加減してるのをいいことに…)

しかしジョニイは待つ。油断して必ず来るであろうその瞬間を。

クロード「はあああッ！」

ジョニイ(来たッ!)

クロードはレイピアを振るう。ジョニイはそれを躲し、レイピアの柄を剣を振るつた。

「ジョニー…フツ！」

「キイイイイイン…!!? ストンツ…!!? とレイピアの剣身が宙を舞い、ステージに突き刺さった。」

観客席は静まりかえっていた。

「ジョニー…これが剣術だ。そもそもレイピアは主に刺突用の剣だ。剣の性質を理解していなかったのがあなたの敗因だ」

「剣の柄の部分というのは、刃としては一番斬れ味が悪い部分なのだ。しかもジョニー達の骨はスナイパーライフルの弾丸を切断する程の斬れ味を誇る。」

結果は見ての通りだ。

クロード「くそっ…!!」

クロードはダガーを取り近接戦を仕掛けようとするが、

「ジョニー「セイツ！」」

「ジョニーはその手首を掴んで捻り、反対の手でクロードの顎に掌底を叩き込み、そのままステージを倒す。」

クロード「ぐあっ！」

「ジョニーはクロードの喉元に剣先を構えた。」

「ジョニー「だが剣筋は見事だった…いいセンスだ」」

クロードは声を上げずに気絶した。

集『…ロミオです!!? ロミオが勝ちました!!? この決闘はロミオの勝利です…!!?』
 あまりの展開に息を吞んでいた観客達が一斉に声を上げる。

ジョニイ「…今…行くぞ…ジュリエット…」

ジョニイはゆつくりと歩きながらバルコニーに向かう。

千棘（…ホント…バカな奴…。あんなに…ボロボロになっちゃって…。ホントに…い
 つもいつも…。…ううん、バカはあたしか…。ずっと…認めるのが怖かった——…）

千棘（でも…そろそろ決めなきやならないな…）

千棘は塔のバルコニーから下のジョニイへ縄の梯子を下ろした。

千棘「…ああ、ロミオ。どうしてあなたはロミオなの?…あなたがモンタギュー
 家のロミオで無ければ、私達の愛を邪魔する物は何も無いというのに…。そのロミオと
 という名の代わりに、私のすべてを受け取って下さい——…」

ジョニイは梯子を登りきってバルコニーへ顔を出した。

ジョニイ「…頂戴しましょう。そのかわり私を恋人と呼んで下さい。そうすれば私は
 今日からロミオでは無くなります。…愛しのジュリエット」

ジョニイは左手を千棘に差し伸べる。

千棘「…ええ、私も愛していますわ。ロミオ様」

千棘は右手をジョニイの左手に添えた。

千棘（こいつに——恋をしているんだと）

くジョニイ side く

『ロミオとジュリエット』……この物語は、本当にオレ達に似ている。

だが、オレとあいつを阻む物は家とかそんな生易しい物ではない。おそらく一生オレの想いが届く事はないだろう。

だから、オレは誓おう。

全てを捧げると。愛する者のために——彼女の幸せのために、オレの持てる全てをかけた、彼女を守ると誓おう。

たとえ、オレという存在そのものが無くなったとしても……それが影^{ファントム}であるオレに出来る、唯一の方法だ。

< || to be continued ||

第70話 瞳に写る君の姿を

劇は拍手喝采雨あられのフィナーレを迎え、大成功に終わった。

クロードは先生達や千棘の親父さんに罰せられた。まあ劇に本物のレイピアを持って乱入したんだ。当然だろう。まったく、クラスの皆が作ってくれた衣装がポロポロになつてしまつた。

僕は体育館の外で体育館を背にもたれかかっていた。ジョニーが劇を演じていたけど、その疲れは僕達の体に蓄積されるわけだから、疲れるのは仕方ないんだ。

僕は疲れと外の心地よい風が少し気持ちよくてついこっくりこっくりと眠りこけてしまつていたけど、

承一郎「うおつ!!??」

首筋に冷たい物が当たつてびっくりして起きた。

振り返るとそこにはコーラの缶を二つ持った千棘さんがいた。

千棘「……………おつかれ」

承一郎「……………またベタな事を……………」

彼女はコーラ缶を一本僕に渡した。僕はそれを受け取つた。

千棘「一度やってみたかったのよ。いいでしょ？かわいい女子マネみたいで」

千棘さんは僕の隣に座って言った。

承一郎「…自分で言ったら世話ないよ」

千棘「…なんとか上手くいった…かな？」

承一郎「…十分でしょ。お客さんの反応見ただろう？…大したものだよ、ぶっつけ本番であそこまでやれば。セリフも結局ほとんど覚えていたし…。まったく…こつちがどれだけ苦労して覚えたと思つて…」

千棘「ふふーん、いいわよ。もつと誉めなさい」

承一郎「はいはい、スゴイスゴイ」

千棘さんはコーラを飲んだ。

千棘「…なんだか似てるわよね、この話と…私達……」

承一郎「ん…」

千棘「お互いの家が争つてて、その二代目二人が恋人同士…。ま、一番違うのは私達が本当は恋人同士じゃあ無いって事だけだ」

承一郎「………そこが違つたら全然似てないよ」

千棘「あはは、確かにそーね」

承一郎「………」

千棘「……ゴメン……」

承一郎「え」

千棘「ここんとこずつと……色々おかしくなっちゃってて、ゴメン……。態度とか……悪くなつてゴメン……。ヒドイ事色々言つたり、顔……ハタいちやつてゴメン……」

千棘「……もう、戻るから。ちゃんと……前みたいに……いつも通りに戻るから……前の……何もかもが正反对で……お互い大嫌いのニセモノカップル……。ちゃんと戻るから……」

千棘「だから……その……許してくれる？」

僕は少し考えて言った。

承一郎「……別に良いんじゃないか……？……お互い大嫌いのニセモノカップルなら、そりゃあケンカぐらいうするだろうしね……」

千棘「……さつきは私の事『嫌いなんじゃない』って言ったクセに……」

承一郎「ええっ!!??いや君……!今自分から嫌いって言い出したんだろう!!??」

千棘「あの言葉はウソだったのかしら？」

承一郎「いやいや何言ってるんだ君は……。君は嫌って欲しいのか欲しくないのかどっちなんだ!!??」

承一郎「……まったく……なら君はどうなんだい？僕の事、嫌いなんじゃないのかい」

千棘「……………私はそりゃあ…」

千棘「…もちろん、大っ嫌いよ」

彼女は笑顔で言った。

その笑顔に、僕はついドキッとした。

千棘「……………ねえ。時間もまだあるし、私あまり文化祭見れてないからさ…あんたがどうしてもって言うなら付き合うけど、どうする？」

承一郎「……………まったく、しようがないな」

…なんなんだ…その顔は。ホント…劇の前までがウソみたいに元気になって——

—…

どうしてここまで180度態度が変わったのか…。

『……………嫌いなんかじゃあねえよ……………』

…彼女は、今まで僕に嫌われてると思ってたからあんなに怒ってたって事なのか…？

…それって——…？

キング・クリムゾン!!？

一年C組の教室——

集「…それでは皆の衆…！」

一同「カーンパーイ!!?!」

皆の声と共に、それぞれ飲み物が入ったコップを掲げた。

皆は千棘さんに集まっていた。ほぼぶっつけ本番であれほどの演技をやつてのけたんだ。注目されて当然だ。

集は鶴さんに追い回されている。あのアドリブに相当怒つたのだろう。

承一郎「コオオオオ…：よし、もう大丈夫だよ」

小咲「…うん、ありがとう一条君」

僕は捻挫した小野寺君の足を波紋の呼吸法で治癒した。治療のためだとはいえ、好きな子の足に触るのには少し照れてしまった。

小咲「…そういうえば橘さんは…？」

承一郎「…さつき見舞いを行つて来たよ。まったく無茶しちやつて…。一応波紋の呼吸法で大分楽になつたみたいだけど」

僕は小野寺君の隣の席に座つた。

小咲「そつか…」

小咲「…仲直り出来たんだね」

承一郎「…ああ…：ありがとう、小野寺君。君は僕と千棘さんの事を考えて自分が演

じられたジュリエットの役を……。ジュリエットを一番演りたかったのは他でもない小野寺君だろう……？」

小咲「あはは……うん……まあそうなんだけど……」

承一郎「……何か思い入れがあつたのかい？」

小咲「……え？」

承一郎「その……ジュリエットを演る事に……」

小咲「……いや……それは……その……」

承一郎「……？」

小咲「……そうだね……。うん……。とても個人的な事なんだけど……本当は……。どうしても演りたかった……。かな。私にとってはとても、特別な思い出になったような気がするから」

承一郎（……そんなに……）

承一郎「……ねえ小野寺君、もし小野寺君さえ良かったら……」

小咲「……？」

キング・クリムゾン!!?

夕暮れ、学校の屋上——

屋上からは、沈みかけた夕日が赤く輝いていた。

小咲「……わあ〜！すごい！すごい！キレイな夕日……」

僕と小野寺君はロミオとジュリエットの衣装を着て屋上に出た。

承一郎「……ここなら誰もいないし思いつき出来るかな」

小咲「うん……少し照れるけどね」

承一郎「……それじゃあ……」

小咲「……うん」

承一郎「……いやく……やっぱりこういうのかえって緊張するよね」

小咲「……私だつて恥ずかしいよ……！」

承一郎「……では」

僕は一旦気を引き締めて、言った。

承一郎「……愛しのジュリエット。僕は君と僕とを隔てるすべてが憎い……。なぜ神は僕達にこのような試練を与えるのだろう——」

それは劇のセリフ。僕は小野寺君とここで演れなかった『ロミオとジュリエット』を演ろうと考えたのだ。

小咲「……ああ、なぜ私達の両親は憎み合い争うのでしょうか。本当ならきつと私達のように手を取り合い、想い合う事も出来るというのに」

小咲「私のロミオ様を想う気持ちの半分でも理解して貰えたならきつと……」

僕は小野寺君を見る。この光景を瞳に焼き付けるように。

この瞬間ときが永遠だと、今 命が叫んでる。

承一郎「……いけないジュリエット。もうお別れの……」「一条君……」

小野寺君がセリフの途中に声をかける。僕は小野寺君を見る。

小咲「……ありがとう。……嬉しい……凄く嬉しい……！」

風が小野寺君の髪を揺らす。

……ありがとうと言いたいのには僕の方なのにな……。

承一郎「……もうお別れの時間だ。明日の夕暮れ、またあのバルコニーに会いに行くから——……」

僕は小野寺君の前でしゃがみ、言った。

承一郎「……またきつとそこで待っていてくれるかい……？」

小咲「……はい、待っていますわ。ロミ才様」

秋、木枯らしの吹き始める夕暮れ時、高校最初の忘れられない文化祭が今、幕を閉じた。

< || to be continued ||

第71話 彼女のスリーサイズを知るには死の覚悟が必要なり!

事件はある朝、突然起きた。

承一郎「…あー、そういうえば今日午後から身体検査あるんだっけ…」

僕は朝の通学路で身体検査について書かれた紙を見て言った。

承一郎「…何もこんな寒い時期に…。僕身長伸びてないかなあ…」

僕はどちらかという身長は少し高い方だけど、目標は承太郎さんと同じ190cm代が理想かな。あの高さ、憧れるな。

承一郎「…ん？なんだ？校門の前に何か…」

校門の前では、白人と黒人の二人組がアタッシュケースを持って立っていた。

承一郎「なんだアレ…」

ギヤング1「…あ！いた!!? おくい、その…! 集英組の坊主…!!?」

承一郎「!!??」

ギヤング1「…突然で申し訳ねえ、俺達あビーハイブのもんなんだ」

ギヤング2「まあオレ達みたいなたつ端の顔なんざ覚えてねーかもしんねーが…」

ギヤング1「頼む…!!?どーしても坊主にしか頼めない事があるんだ…!!?」

承一郎「はあ…(どうしよう…すごい面倒事の予感…)」

ギヤング1「話つてのはこのアタツシユケースの事なんだが…こいつには午後3時からの重要な取引で使うハズのブーツが入ってるんだが…オレ達のミスで暗証番号のメモを失くしちゃった…!」

ギヤング2「頼む…!クロードさんとも連絡取れねーしオレ達に替わってその番号を探してくれねーか?!?」

承一郎「…ええ?!?ちよっ…!意味分かんないって…!なんでそれを僕が…?!?」

ギヤング1「…実はこの番号クロードさんが入力したんだが、その番号っていうのが、お嬢のスリーサイズを入力したららしいんだ」

ジヨニイ『…あいつのスリーサイズ…だと…?!?』

承一郎(何やってるんだあのメガネは!!?)

とうかななゼクロードが千棘さんのスリーサイズを知ってるのかはわからんが…後で千棘さんに報告しようと思った。

ギヤング2「坊主…知らねーか…?」

承一郎「しっ…!知ってるわけないだろう…!!?」

ギヤング1「そうか…知ってりゃ一番早かったんだが…今日は学校で身体検査がある

んだろ!!? こんなチャンスは他にはねえ…!!?」

ギヤング2 「なんとかお嬢のスリーサイズを手に入れてくんねーか…!!??」

承一郎 「イヤイヤイヤ、ムリムリムリ…!!? そんな事したら僕がどうなるか

…!!?」

ボコボコにされる、絶対に承太郎さんに頭を破壊されたD I Oクソオヤジみたいになるから!

ギヤング1 「そこをなんとか!!? 恋人のお前ならオレ達よかだいぶ聞きやすいだろ!!

?」

承一郎 「うっ…」

ギヤング1 「…三時までにごいつの中身を届けないと計画はペア…、そうなりやオレ

達はT O K Y O 湾の藻屑になるかも…」

承一郎 「……」

ギヤング2 「スマンが頼む…!!? オレ達もう戻らねーと…!!? あとで回収に来つから

…!!?」

承一郎 「なっ…!!? いや…ちよつと…!!?」

二人はあつという間に立ち去って行き、手元に残ったのは中身不明のアタツシユケ

ス。

承一郎 (…やっぱり、超面倒臭い…)

ジョニイ『どういう星の下で生まれたら毎日こんな事になるんだろうか…』
キング・クリムゾン!!?』

学校、教室——

今、僕の机の横にはあの二人組から押し付けられたアタツシユケースが。

なんで僕がこんな…クソ…どうする…?彼女に正直に話してスリーサイズを教えてくださいらう?もしそうしたらどうなる…?

予想①千棘

千棘『はあ!!??スリーサイズ!!??そんな事言つて妄想するのにでも使うんでしょ、この変態!!?』

②鶯

鶯『お嬢のスリーサイズを教えろだー!!??そんな手の込んだウソまでついて貴様ー!!?』

③他の女子

女子達『いやー!!?ヘンタイよヘンタイ!!?』『あつち行けヘンタイ〜!!?』

…ダメだ、全く信じてもらえない気がしない。ハッキリ言つて僕が信頼されていないのが簡単に想像出来てすごく悲しい…。

ジョニイ『…こいつ、女子達はわかるが…マジで鈍感だろ』

しかし…このケース、中に何が入ってるんだ…? ギャングが重要な取引で使う物つて…。

…まあヤクは売り捌いていない事は証明されたし、爆弾なら『ブラッディ・シャドウ』の空間に投げ入れれば問題ない…よね…?

千棘「…あれ? あんたどうしたのそのカバン…」

承一郎「触るんじやあないツ!!?」

千棘「…!!?…!!?」

…クソツ、こうなつたらなんとしても暗証番号を手に入れなければ…!!?

キング・クリムゾン!!?

せめて身体検査が終わるまでにスリーサイズを手に入れないと、ギリギリ間に合わなくなるかもしれない…!

チャンスは身体検査の間のみ…!!? その間にスリーサイズを手に入れるには…この教室の中にはアレがあるのは気配でわかった、それを使う…!

女子「ねえ桐崎さん、後でスリーサイズ教えてよ」

千棘「絶対ダメ!!? ちよつと太ったかもだし…!」

千棘「…ねえねえつぐみ! 身体検査一緒に回らない?」

鵜「ええ、もちろん構いませんよ」

そんな教室の中、数個のダンボールが設置してあった。その中の一個には僕が隠れていた。

これこそ『毒蛇』の真骨頂ッ！ある時は波紋使い、ある時は吸血鬼、ある時はスタン
ド使い、またある時は傭兵部隊の総司令官、しかしその正体はダンボールマスター・一
条承一郎！

ジヨニイ『こいつなんでダンボールの事になるとこう目の色を変えるんだ…？』
いいだろう、なんだか落ち着くんだから！

…よし、ひとまずは現場への潜入は成功、勝負はここから…。女子はここで身長や
らスリーサイズの測定もやるらしい（集が朝喋ってた）。ここで確実に千棘さんのス
リーサイズを手に入れてやる…!!？

…しかしあれだね、こうして女子だけの空間に忍び込むとか…ものつつすごい悪い
事してる気分!!?!

くそっ…なんで僕がこんな事…彼女には全てが終わったらちゃんと話して謝ろう…。
とにかくこんな事さっさと終わらせて…。

僕が少しゴソ…と動いてしまった瞬間、鵜さんが反応し、

鵜「曲者かー!!？」ビシユ!!？

承一郎「!!?」

ドスウ!!?

懐に持っていたナイフがダンボールに投げつけられ、突き刺さった!

他の女子がナイフが突き刺さったダンボールを持ち上げるが:

女子「:誰もいないよー?」

鵜「あれ::?変だな::?」

千棘「もう鵜、驚かさせないでよ」

承一郎(こ::こ::殺される::!!?!見つかったら絶対::!!?!) ↑隣のダンボールにいた

なんでここ戦場以上に恐怖を覚えるんだろう::?ううつ、もう帰りたい::!!?!いや:

ダメだ::!!?何のためにこんな所まで来たんだ僕は::!!?早くスリーサイズをゲット

せねば::!!?」

クソツ::しかし::!雑音が多すぎて測定の声が聞こえない!!?なんでこんなに人数

多いんだ::!!?皆バラバラの場所測定場所を回るハズ::よく見たらウチのクラスの女

子がほぼ集まってるような::。

あ、『ブラッディ・シャドウ』の空間から見るといいうのは鵜さんに察知されるからN

Gだ。

女子「:じゃあまだ胸囲測ってない人」

鶇「あ、はい。私で最後です」

女子「つぐみちゃんか…よしよし…今よ桐崎さん!!?」

鶇「…は?」

いつの間にか鶇さんの背後に回った千棘さんが鶇さんの腕をガシツ!!?と抑える。

鶇「!!??えつ…お嬢…!!?」

承一郎「…!!??」

鶇「なつ…! 一体何を…」

千棘「フフ…悪く思わないでねつぐみ…」

女子「…あなたには申し訳ないと思うけど…ウチのクラスでも断トツのつぐみちゃん

の気になるバスト…!!?皆で測らせてもらうわ…!!?」

鶇「えつ…えええくくく!!??」

…何やってるんだ彼女達は…。

鶇「お嬢…!!?どういう事なんですかコレは…!!?」

千棘「ゴメンねつぐみ…あなたには後で好きな物を皆でおごる事になってるわ…」

鶇「そんな…!!?」

女子「さあ…! 観念なさい…!!?」

鶇「ヒイ…!!?やつ…ちよつと…その…待つて…お待ち下さ…!!?あー…!!?」

承一郎「…つてダメだ、あつけに取られてる場合じゃあない。すぐ追いかけて早くスリーサイズを…」ボコツ

しかし、立ち上がった隣には橘さんが…。

万里花「…どうなさつたのですか承一郎様…？女子の測定中にこんな所で…」

承一郎「たつ…橘さん…!!？いや…違うんだ…。これには深いワケが…」

万里花「フフ…いえ承一郎様、大丈夫ですよ。ご心配なさらずともこのマリカ承一郎様の事なり全とお見通しですから…！」

え…？

万里花「もう承一郎様つたら…女性のスリーサイズに興味があるのなら真つ先に私に言つて下されば良いですよに…」

ジョニイ『おい、全然見通せてないぞ!!?』

万里花「どうですか？私のスリーサイズ知りたくないですか？どうせなら触つて確かめて頂いても構わないですよ？」

承一郎「いや…だからそうじゃあなくてだね…!!?クソツ！こんな事してる場合じゃあない!!?」

万里花「あつ…！承一郎様…!!?」

ヤバイ…！完全に彼女の事見失ってしまった…！身体検査なんてすぐ終わつてしま

うのに……! あっ……! よし見つけた……!

僕は教室で視力検査をしている千棘さんと電話をしている先生とその背後にあるダンボールにかけられている白衣を発見した。この場での最適解は……!

承一郎(すみません、ちよつと借ります……!)

僕は白衣を失敬する。任務は現地調達が基本なのだ。

よし、これなら……! 一瞬勧誘表を見て一瞬で戻す……。それですぐに終わりだ……!

あと少しで手が届く……! と手を伸ばすが、

? 「……あの、先生ちよつといいですか?」

聞き覚えのある声が……まさかッ!

小咲「ちよつと質問が……」

やつぱり小野寺君だア……ッ!? よりによって一番バレたくない相手に……! いや待てよ……!? もしかしたら小野寺君なら話せばわかってもらえ……

④小咲

小咲『え……、ス……ス……スリー……サイ……。そ……そうだよね、一条君も男の子だもんね……。』

ご……ご……ゴメンナサイ……!!?』

ダメだ……! 走り去るところまで簡単に想像出来るッ! やつぱり自信ない……!

ジョニイ『確かに合ってるが……いい加減気づけたわけが』

承一郎「ゲホン…!!? いや…すまないが他の人に聞いてもらえるかね…? (超低音)」

小咲「え…はあ…分かりました(…スゴい低い声…)」

るり「ちよつと小咲く、あんた全然胸大きくなつてないじゃあ…」

小咲「わー!!? るりちゃん勝手に…」

承一郎「ブー…!!??」

小咲「え…今の声…一条く…?」

ヤバい、ドジこいたーッ!!? 宮本さん、なんて爆弾をッ!

女子「おつかれー」

ああっ! 千棘さんが! せっかくのチャンスが…!!?

小咲「あの…先生…?」 ポンッ

小野寺君に肩を掴まれる。仕方ない、『ブラッディ・シャドウ』ッ!

ファサン…と白衣だけを残して僕は教室の外に空間移動をする。

小咲「え…!!? あれ…!!?」

あつつつぶなかつたー!!?! 危うく僕の青春の全てが崩壊するところだった…マジで怖かつたー!!?

…しかしどうする、もう時間がない…!!? 身体検査もちょうど終わったし例の取引とやらも始まってしまう…!

こうなったらもう直接彼女に頼み込んで聞くしか方法はない…!!? 何発かはブン殴られるかもしれないが、キチンと話せば分かってくれるはずだ…!!?」

承一郎（：貼り紙がない。着替えはもう終わっているな）

しかし僕は気づいていなかった。貼り紙が剥がれて床に落ちていたという事に…。

ジョニイ『おい承一郎、床に貼り紙が——』

承一郎「千棘さん!!? 君のスリーサイズはいくつだああーーツ!!?!」

ガラツ!と勢良く開けた時にはジョニイの助言も虚しく、教室の扉が開いた。その中にはまだ着替え途中の女子達が。

無論、その中には千棘さんいるわけで。

? 『：ブラックアウトツ!!?』

バカな、マンティイス!!? 君は確かマザーベースにいるはず…。

スパアアンツ!!?」

次の瞬間、僕の視界がブラックアウトした。

マザーベース——

マンティイス「：ブラックアウトツ!!?」

一同「ー」ビクッ!

レイブン「…どうしたマンティス、いきなり叫んで」

マンティス「…なんだか叫ばなくてはならないと思つて…」

ウルフ「大丈夫？最近疲れてるんじゃないの？」

カズ「もしかしてボスがなんかやらかしたんじゃないのか？」

エヴァ「ああ、あの娘？かなり乱暴だつて聞いたわよ」

オセロツト「気苦労が多いな、ボスは」

カズ「…平和だなあ…」

キング・クリムゾン!!?

やっと視界が晴れた…真つ黒になった視界にヒゲ〇つてなんなんだ…？

僕は逆さに縄で全身グルグル巻きにされて吊るハングドマンされていた。これじゃあ文字通りの吊られた男だよ。

千棘「…それで？ここに私のスリーサイズを打ち込めばいいの？」

承一郎「ぼび…その通りでず、ずびませんでじだ…」

どうやらさつきの音は顎への強烈なアッパーカットらしい。口に力が…。

千棘「つたく、そうならそうと最初から言つて言えば良かったのに…」

承一郎「…ウソつけ、絶対信じなかつただろう…!!?」

全く、世界を狙えるようなアツパーを顎をブチ込んで何を言っているんだ!

千棘（…信じたわよ、バカ…）

ジョニイ『…舌がジャリジャリする…』

千棘「あれ?ちよつと、開かないわよ…?」

承一郎「え?!?なんで?!?」

あの二人に連絡すると…

ギヤング1『いや〜、ご迷惑おかけしてすいやせん。実は…色々ところちも誤解があつたようで…』

ギヤング2『実はその暗証番号、お嬢のスリーサイズじゃあなくて…クロードさんのスリーサイズだったらしくて…』

………

ギヤング1『いやあ実はクロードさんて筋肉意外とすごいらしくて…あ、番号確認出来ましたんでそのケース今から回収に行きます〜』

なんじゃあそりゃあー……ツ!!??

第72話 占いはたまに信じたい時がある

朝、集英組――

組員「「いったただきま〜す!!?」」

竜「いやあ〜!!?坊っちゃん作るメシはいつもホンツトウマイっスなあ…!!?」

承一郎「:いいいから早く食べてくれ。今日は町内清掃するんだろ?あ、これ承太郎さん達のです」

承太郎「すまないな、承一郎」

ジヨルノ「ありがとう、承一郎。君の作る料理はいつも絶品ばかりだ」

ミスタ「ピストルズの分も作ってくれるなんてありがたいぜ」

ピストルズ『ウンまああ〜いつ!』『サイコ〜ッ!』『ウマすぎるッ!』『もつと食わせろ!』

という声はピストルズからだ。最初は日本料理に抵抗はあったらしいが、今ではこの通り承一郎の料理に夢中になっている。

TV『:では次は、朝の血液型占いのコーナーです!』

承一郎「:ん?」

ジョニイ（…占いねえ、今時こんな信じてる奴なんているのかねえ…）

朝、和菓子屋『おのぞら』——

菜々子「小咲ー、さつさと食べちやいなー」

小咲「はーい」

TV『…さて！今日一番運勢の良い血液型は…?!?』

この時、承一郎と小咲の二人は同じ血液型占いのコーナーを見ていたのだ。

TV『A型のあなた!!?今日の運勢は超絶好調!!?強気で臨めば気になる異性と急接近出来るかも!!?』

承一郎（何イーーツ!!??）

TV『ラッキーカラーは赤!!?ラッキーアイテムはこんにやくの煮付けです!!?』

ジョニイ（…ここにいたな）

TV『O型のあなた!!?ゴメンナサイ、今日の運勢は超最悪!!?何をしても上手くいかず特に気になる異性に近づくと相手にも不幸が訪れるので気をつけて!!?』

小咲（ガーン!!?!）

TV『ラツキーカラーは青!!?ラツキーアイテムはいちごミルクです!』
ここに占いを信じた二人がいた。

キング・クリムゾン!!?

承一郎(…占いねえ。つたく…今時そんなもの信じてる奴の気が知れないっていうか…)

そう思いつつもこの男、一条承一郎の顔は緩みきつていた。こんな顔を『クリスタル・フアング』の面々が見たら呆れる事間違いないだろう。

ジョニー『…おい、顔を引き締める。みっともないぞ』

承一郎(…いや、分かってるけどね?占いなんてなんのアテにもならないって事ぐらいさー。でも急接近だつて!どんな事があるんだろうね…!今日の弁当にはバツチリこんにやくの煮付けを入れてきたし…!)

承一郎(今日の僕はいつもより3割り増しで積極的に行くよ?今日はなんだか良い事があるような予感がする…!)

ジョニー『…まあ、頑張れよ。せいぜい応援してやるさ』

承一郎(ありがとうね。…お!早速…!)

承一郎はすぐ小咲を発見する。

承一郎「やあ小野寺君!おはよう!!?」

承一郎は朗らかに笑いながら挨拶をするが……

小咲「あ、ども、おはようございます」

とてもどんよりとした顔の小咲はそう挨拶を返すと、そそくさと行ってしまった。

承一郎（え……なんだ今の……。ええっ?!?なんだ今の?!?なんか小野寺君が見た事ない顔をしてたよ?!?というか思いつき避けられてなかったか……?!?）

承一郎（い……いやいや落ち着け……!そりやあ小野寺君だつて気分の良い日だつてあるだろう……!気を取り直して再チャレンジするんだ……!今日の僕は絶好調のハズだ……!）

学校、化学の授業中、実験室——

先生「じゃあ各自プリントに目を通してねー」

僕はグループ分のプリントをもらい、渡していく。

承一郎「や……やあ小野寺君!プリント小野寺君の分も取つて来たよ?」

小咲「あ……うん、ありがと」

しかし、小咲はその淡白な返答をした後にササッと席に座る。承一郎が隣の席に座ると、さらに承一郎から離れた席に移動する。

承一郎（……避けられている、明らかに）

承一郎はやつと悟った。

承一郎（ええくくく!!??なんでだくく!!??僕何かしたのか!!??全然理由が分からない。どうしよう、超悲しくなってきた!）

ザ・ソロー『私は悲しい:』

ジョニイ『そのセリフは某円卓の騎士のセリフだろう:』

一方小咲はというと:

小咲（……:どうしよう:ちよつとあからさま過ぎたかな……。せつかくプリントとか持って来てくれたのにこんな態度じゃあ余計嫌われちゃうよ……）

小咲（あーもう私のバカ……:一条君は何も悪くないのに勝手にあんな占い間に受けて、こんなの絶対よくないよ……）

先生「それじゃあBとCの薬品を混ぜてー」

小咲（よし……:もうこんなのやめよう……:今度は私から笑顔で一条君に……）

小咲はそう思いつつ先生に言われた通りに薬品を入れるが、ボフウン!!??と音を立ててなぜか爆発した。

千棘「!!??」

承一郎「!!??うおつ、小野寺君!!??」

生徒「先生ー!!??2班の薬品が爆発しましたーッ!!??」

先生「ダニイツ?!? 爆発するような物は使つてないハズじゃあ…」

生徒「先生コレ…番号間違えてるんじゃないやあ…」

先生「ゲーツ、しまったーツ!!?!?」

小咲「…どうしよう私、やつぱり今日ツイてないんじゃないやあ…」

承一郎「大丈夫か小野寺君?!?…つて熱ツ!!?!?」

男子「おい! 気をつけろよ一条…!」

小咲「一条君が…火傷…?!?まさか…やつぱり私に近づいたから不幸に…?!?そ…そんな…」

承一郎「いや…割と平気…」

男子「気をつけろよ…」

承一郎「だ…大丈夫かい小野寺君。はいハンカチ」

小咲「ふえ?!? あ…いや…その…だ…大丈夫…! こんな洗つてくれば大丈夫だから…!」

承一郎「…え?」

小咲「大丈夫だから…!!?!?」

承一郎「え…ええええ!!?!?」

承一郎「な…何が起こっているだア…!!?!?」

千棘「…あんだ、小咲ちゃんに何かしたの？」

小咲（ゴメン…！ゴメンナサイ一条君…！ハンカチ嬉しいよ、嬉しかったよお〜!!？）
キング・クリムゾン!!？

教室——

承一郎（…一体どういう事なんだ、避けられる理由が皆目見当もつかない…!!？落ちてけ…！素数を数えて落ちて着くんだ！2、3、5、7、11、13、17、19、23…よし、落ち着いた。たまたま虫の居所が悪かったのかもしれない…!!？今日の僕はラツキーガイのハズだ…！気を取り直して…もう…一度…）

ジョニー『こういう時のためのラツキーアイテム&カラーじゃあないか？』

承一郎（ハツ！そうだ!!？えっと、アイテムの方はいいとして…赤…身近な赤といえ
ば…）

承一郎「…ねえ千棘さん！」

千棘「…ん？何か用？」

承一郎「ゴメン、ちよつとだけじつとしてくれるかい？」

千棘「は？え…ちよつといきなり何…え、何なの？え…ちよつ…何何何何何…!!？」

さわさわさわ……と承一郎は千棘のリボンを触った。おいそこかわれ。

承一郎「……これでよし、ゴメンありがとうね！」

千棘「……へ？………何……？」

承一郎（……これで僕のラッキーパワーは増大したはず。あとは……勇気を出すだけだ……！）

承一郎「……小野寺君!!？」

小咲「な……何……？」

承一郎「あ……いや……その……あれだよ、ほら……その………たまには、一緒にご飯でもど
うかと……（うおおおおおおッ、もうどうにでもなれええええええええええ!!?）」

小咲「え、いや……それは……」

承一郎「あくら珍しいいわね一条君。女の子を食事に誘うなんて良い度胸してるじゃあない。でもいいわ、乗ってあげる」

小咲が答える前になるりは小咲の口を塞ぎ、即答した。

承一郎「え……いいのかい……？」

承一郎「じゃあ小咲、私は千棘ちゃん達と食べるから」

小咲「ダメだよ！一緒にいて!!？」

小咲「………それで？……なぜ今日は貴様が一緒なのだ？」

結果、承一郎は女子達と食事を一緒にしている。

承一郎「いや…たまには気分転換にいいかと」

万里花「フフ…確かにたまにはよろしいですわね」

集「そーそー！たまにはこーいうのもいいよな！毎日でもいいけど！」

鶴「…貴様はいなくてもいいんだぞ？」

承一郎（…よし、ひとまず食事に誘うのには成功…！しかも運良く隣を確保！くうくう！すでに幸せすぎて涙が出そうだ…!!?）

小咲（…どうしたんだろう、今日の一条君。突然一緒にご飯なんて…すぐく…嬉しいんだけど…。…あれ？でも私がこんなに幸せって事は、あの占いつて結構ハズれてるのかも…。だったら、だったら私…）

承一郎（お…?心なしか小野寺君の機嫌が良くなってる気がする…！コレは…!!?イケるかもしれない…!!?）

承一郎「（…）で登場我がラツキーアイテム…!!?!こいつを使って更に会話の糸口を…!）…あ、そうだ小野寺君、実はさ…コレ…今日の自信作なんだけど作り過ぎちゃって…よかつたら味見してくれない…」

承一郎は今日のラツキーアイテム、こんにやくの煮付けを出してみる。しかし、

小咲「え、え…と…」

小咲はこんにやくの煮付けを見た瞬間、ピタツと固まった後にプルプル震えてしまった。

るり「…一条君、悪いけど小咲こんにやくだけはこの世で唯一食べられなくて」

承一郎（ダニイツ!!?）

驚愕の事実ツ！承一郎のラツキーアイテムは失敗に終わった。

小咲「あつ…！ゴメン…！食べる…食べるから…！」

承一郎「いやいいって、無理しなくても…！今度また別の作ったら食べてくれ…！」

千棘「しよ…！しょうがないわね…！なら私が食べてあげるわよ…！ゲキうまつ!!?」

承一郎（なんてこつた…!!?まさかこんにやくが唯一苦手だったなんて…!!?全然

ラツキーじゃあないじやあないかチクシヨウ!!?）

ジヨニイ（…なるほど、そういうラツキーか）

こんにやくの煮付けに舌鼓を打つ千棘を見て、ジヨニイは納得した。

小咲（…こんなタイミングで嫌いな物渡されるなんて、やっぱり…！今日の私は…）

小咲「…あ！ゴメン！そういうえば今日私飲み物持つてくるの忘れてて…ちよつと買っ

て来るね…！」

承一郎「え…！小野寺君…!!?」

小咲（ゴメン、一条君ゴメン。せつかく今日はいつもよりいっぱい話しかけてきてく

れたのに……。でも……もしこれ以上占いが当たって本当に一条君が不幸になったら、私……)

階段を降りようとした瞬間、小咲の視界が急に歪み始めた。

小咲（?!? ……え……何……コレ……貧血……?!? こんな……時に……ああ……今日の私はやっぱり、とことん……ツイて……な……）

小咲が気を失い、階段に落ちる瞬間に

パシんツ!!? ドタアアアんツ!!?

承一郎が手を掴み、庇って下になるように落ちた。

承一郎「……痛ツ……てて……大丈夫かい……? ……よかった、ケガはなさそうだね……」

承一郎は小咲の顔を見て安心した。

承一郎「……急接近って、コレの事か……」

キング・クリムゾン!!?

保健室——

小咲「……?!?」ガバツ!

小咲は目が覚めた後、上体を起こした。

保険医「お、起きたか」

小咲「え……ここは……」

保険医「保健室、あなた貧血で運ばれたのよ」

小咲（…貧血…そうだ…私階段の途中で貧血起こして…。で私そのまま階段から落ちたハズじゃあ…）

保険医「…あなたを運んでくれたのは同じクラスの男子生徒よ。確か一条とか…」

小咲「え…一条君が…」

保険医「ビックリしたわよ、突然お姫様抱っこでやってくるから」

小咲（なっ…?!?なんでそんないい時に私は寝てたの…?!?）

小咲は承一郎が自分をお姫様抱っこしている姿を見て赤面してしまう。

保険医「あとコレは、その子からの差し入れだっ」

差し入れとは、小咲の今日のラッキーアイテムであるいちご牛乳だった。

キーンコーンカーンコーン…

保険医「あら、予鈴だ。ざくんねん、も少し寝てたら授業サボれたのにね。…運がなかつたね」

小咲「…：…いえ」

保険医「ん？」

小咲「…：…そんな事、ないみたいです」

第73話 死の瞬間を切り取る芸術家

万里花「承一郎様、ちよつとよろしいですか？」

承一郎「僕かい？ああ、大丈夫だよ。何か話でも？」

万里花「ええ、そうですね。父がお話があるらしいのですが……どうやらある事件の協力をお願いしたいみたいで……」

承一郎「最近起こっている連続殺人事件の事かい？分かった、今日君の家でいいかい？」

万里花「ええ、ありがとうございますわ」

千棘「承一郎、何の話してるの？」

承一郎「ああ、橘さんの親父さんから協力の要請があつてね……」

万里花「今日、承一郎様が私の家に来てもらうのですわ！」

千棘「ちよつと待ちなさいよ、なんか変な事しないでしょね？」

承一郎「しないしない！絶対しないって！」

橘家——

巖「済まないな、今日は君に頼みたい事があつて来てもらつたんだ」

承一郎「いえ、お構いなく。それで、要件とは……？」

巖「まずはこれを見てくれ」パスツ……

テーブルに置かれたものは写真だった。それにはある男が撃たれて絶命した瞬間の写真だった。

承一郎「この写真は……？」

巖「ある殺害現場にあつた写真だ。何か気づく事はあるか？」

承一郎「……男性が脳天に弾丸をブチ込まれて絶命していますね……。……これは、絶命した瞬間の写真ですか？」

巖「そうだ、しかも飛び散る脳漿すらも鮮明に映し出されている。この事件現場は、これと同じ死の瞬間が展示されている」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承一郎「……今なんて？」

巖「言葉通りの意味だ。この現場はまるでついさつき死んだかのような死の瞬間が保存されている。他の現場でも同じような現象が起きている。そんな事が出来るのをオレは一つしか知らない」

承一郎「……『スタンド能力』」

巖「その通りだ。だがスタンド能力は秘匿されているものだ。いきなり未知の能力を持つ殺人鬼が夜な夜な殺人を繰り返していると知ったらパニックが起こる。だから能力の事は隠していたのだが…」

承一郎「その報復として、この警察官が殺害された…」

その男は警察官だった。おそらく凶器の銃は彼が携帯していたものを奪い取ったものだと思われる。

巖「ああ…そこでだ。君に犯人の捜査、そして出来れば確保を頼みたい。確保が難しい場合は…」

承一郎「分かっています、後始末はこつちでよろしいですか?」

巖「ああ、よろしく頼む。それと…君にもう一人仕事の相棒がいるんだ…反対したんだが…」

万里花「承一郎様ー…ツ!!?」バンツ!!?

承一郎「た、橘さん!?!?」

万里花「はい、今回承一郎様と一緒に捜査をする事になりましたわ!」

承一郎「…巖さん、いくらなんでも危険過ぎます。橘さんがいくら言っても、同伴は許可しかねます」

巖「オレもそう言ったんだが…」

万里花「警察はスタンド能力に対応出来ずに捜査は難航するばかり、スタンド使いの皆さんも忙しいご様子、ならば私も協力しますわ！」

承一郎「危険過ぎる！もし何かあったら……」

万里花「その時は、承一郎様を守ってくれますよね？」

承一郎「：はあ、しようがない。だけど自分の身は自分で守れるのかい？」

万里花「あら、私も『スタンド能力』は持っていますわよ」ズギユンツ！

突然、万里花の手から手錠が出現する！

承一郎「ッ！」

ジャラララララララッ!!?カシンツ!!?

突然現れた手錠が承一郎の手にはめられた。

承一郎「これは……手錠？」

万里花「これが私のスタンド、『スロー・ダンサー』ですわ」

承一郎は動こうとするが、いつもより動きが鈍い。

承一郎「これは……を『動き』を遅くする能力……?」

万里花「その通りですわ。手錠で取り締まる事で動きを『鈍く』する事が出来ますの」

承一郎「なるほど……分かったよ。では巖さん、橘さんと捜査を開始します」

巖「ああ、よろしく頼む。まず現場を見れば分かるハズだ。場所はある空き家だ」

承一郎「了解しました。橘さん、行こう」

万里花「はい！」

巖「頼んだぞ……」

某空き家——

承一郎「……そういうえば君はいつスタンド能力を？」

万里花「私はこの街に来てからですわ。承一郎様は？」

承一郎「僕は中学の頃に能力だけが発現してて、明確な像になって現れたのは今年の春過ぎかな」

ジヨニイ『……やはりこの街にはスタンドが息を潜めているみたいだな』

承一郎「ここが現場か……確か巖さんは見れば分かる……」

万里花「鑑識に頼んでそのままにしてみました……これは酷いですわね」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

周りの空気とは明らかに違うキューブの形をした歪みの中に、その被害者である警察官はいた。この音楽は……確か『弦楽セレナーデ』の第一楽章だ。外から音が漏れない程度の音量になっている。

五灯ソケットに照らされたその脳を突き破った弾丸も、そこから飛び散る脳漿と血

も、恐怖に歪んだ顔一つ一つがハッキリと鮮明に見える。しかもその光景にはこの場所とは無縁といえる花びらなどで彩られていた。そして、そのまま倒れる前にまるでビデオテープのように同じ光景が繰り返し返されている。正直言つて悪趣味だ。

承一郎は捜査資料をスマホで調べるが、毛髪や指紋といった手がかりはないようだ。

承一郎「おそらく芸術家気取りの奴みたいだね。展示されているとはこういう事か」

万里花「犯人はこの死の瞬間という作品を大衆に見せたかったようですわ。承一郎様、この能力をどう思いますか？」

承一郎「…推測だけど、犯人が殺害したとされる現場にその被害者の死の瞬間を写した写真があつた事から、犯人は写真に何かしらの執着があると考えられる。スタンド能力は自分の精神や執着しているものによつて変わる。だから…」

万里花「犯人はカメラに基づくような能力を…?」

承一郎「ああ、よく見てくれ。この歪んだ空間はちょうどある形を成している。カメラで撮られた時の空間配置とピツタリ一致している」

承一郎は写真の光景と同じ場所に立つて指で四角いフレームを作る。すると、それがピツタリと空間の歪みの境界線と一致した。

万里花「さすが承一郎様、素晴らしい洞察力ですわ!」

承一郎「あくまで推測さ…さて、次は第一発見者に話を聞こう」

空き家に隣接する家――

マイラ「どうも、お茶です」

空き家の隣にある家の家族が第一発見者だった。カステヤノス家の妻、マイラが承一郎達にお茶を用意してくれた。

承一郎「ありがとうございます」

マイラはお辞儀をして部屋から出て行った。

セバスチャン「どうも、セバスチャン・カステヤノスだ」

改めて第一発見者のセバスチャン・カステヤノスは自己紹介をする。

承一郎「S県警の一条警部と申します。今日は事件の話を伺いに来ました」

万里花「同じくS県警橘警部補ですわ。どうかご協力のほどよろしく願いますわ」

二人は偽装された警察手帳を見せる。

セバスチャン「もちろんだ。あんなのを作った犯人がまだウロついてるとしたら妻と娘が不安で夜も眠れない。協力させてもらうさ」

承一郎「それにしても、日本語お上手ですね。どのくらい日本に？」

セバスチャン「そうだな、もう五年になる。娘のリリーが生まれてからこっちに移住

して来た」

承一郎「なるほど……ところで事件について詳しくご説明を」

セバスチャン「ああ、あれは……」

数日前——

その夜、カステヤノス家の三人は外食から帰ってきた時に発見したらしい。

リリー『ねえパパ、肩車して！』

セバスチャン『ああ、いいともリリー』

マイラ『あらあら、リリーったらパパに甘えてばかりね』

リリー『うん、大きくなったらパパのお嫁さんになるの！』

セバスチャン『ハハ、嬉しいな』

リリー『……ねえパパ、あそこの家の扉開いてるよ？』

肩車されて一番高い位置を見渡せたリリーが隣の空き家の扉が開いている事に気づいた。

マイラ『おかしいわね、あそこは随分空き家のハズよ？』

セバスチャン『……何か嫌な予感がする。リリー、ちよつとごめんよ。マイラ、先にリリーと一緒に戻ってくれ』

マイラ『ええ……気をつけて』

セバスチャン『おい！誰かいるのか？』

玄関から入り、リビングの奥へ進んでダイニングへと進む、惨劇を発見した。

セバスチャン『おい、なんだこれは……』

承一郎「……それで殺害現場を目撃したのですね？何か他に気づいた事はありますか？」

セバスチャン「後は……そうだな、俺は元刑事だったが、それでもあれはかつてない程に猟奇的だった。それとあの歪み……中に入る事が出来たんだ」

承一郎「中に入る？それは考えつかなかつたな……それから？」

セバスチャン「あの中は……死んだ警察官の悲鳴が聞こえたんだ……。気が狂いそうだった……あれを『作品』とのたまひ作る犯人は……まさしく怪物だ」モンスター

承一郎「……同意見です。犯人は僕達が絶対に捕まえます。これ以上街の皆さんを危険に晒すのを絶対に阻止してみせます」

セバスチャン「……ありがとう、あんたのような警察官がいてくれたら街は安泰だな」

承一郎「恐縮です。それでは何か思い出したらこちらにご連絡下さい」

セバスチャン「ああ、分かった」

万里花 「幸せそうなお家庭でしたわね」

承一郎 「そうだね。ああいう日常を守るために僕は警察官になりたいんだ」

万里花 「まあ！それは素晴らしいですわ！なら今すぐ私と結婚して幸せな家庭を築きましよう！」

承一郎 「なんで君は話がそっち方面に向かうんだ……。とにかく、カステヤノスさんの言つた事を確かめよう」

再び某空き家——

承一郎 「さて、カステヤノスさんの言つた事を確かめよう」

承一郎は歪みの中に手を伸ばす。するとズブズブ……と手が空間の中に入り込む。

承一郎 「うっ……」

万里花 「承一郎様、大丈夫ですか？」

承一郎 「ああ、だが二日酔いみたいな気持ち悪さだ……」

万里花 「あら、承一郎様は二日酔いをした事が？」

承一郎 「い、いや、例えの話さ。それより……これは確かにカステヤノスさんの言つた事がよく分かる」

警察官『ぐうあああああああ…!!?』

被害者である警察官の悲鳴が加わると、さらに猟奇的だった。まるで死のオーケストラだ。

承一郎「…ふう、後は巖さんに頼んで過去の事件から共通点を調べよう。犯人の殺害傾向が見えてくるはずだ」

キング・クリムゾン!!?

あれから数日、犯人への足取りは全く掴めていない。

承一郎「…ここまで手がかりが出ないとすると、犯人は驚くべき知能犯だ。だが過去の事件傾向を調べるとそろそろ奴は何か動くはず…」

万里花「そうですね。流されていた曲『弦楽セレナーデ』を調べても何も出ませんでしたし…」

承一郎「共通点は20代の男女、死因はナイフ、警察官は持っていた銃、たまに落下死の途中のままループされているのまで…五灯ソケットの方は?」

万里花「今はなんとも…カメラの方はブランド物ですわ。ですがこれだけではどうしようも…『ピツ!』あらお父様、何かありましたか…え? 犯人から写真が!!?」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承一郎「なんだとツ…!!?」

巖『ああ、今写真とそれに添付されていたメッセージを送るぞ』
ピピッ！

それは、天使のような立体作品の写真だった。しかし、着目すべき点はそれが人肉を組み合わせたものである点だ。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

メッセージには『僕の作品を見てくれる観客へ、次の作品の展示場所は民営ホールだ』と書かれてある。

承一郎「急いでへ向かおう！」

万里花「はい！犯人は殺人という作品を見せたがつている……！この情報はデマではないハズですわ！」

某民営ホール——

承一郎「やけに暗いな……ライトを点けながら進もう」カチツ！

ライトを点けると廊下一面中に写真が飾られていた。だが、それは目や血だらけの口などといった悪趣味な写真だった。

万里花「なんなんですかね？この写真は……」

ギョロツ！

万里花「ひっ……！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

たくさん目の目が承一郎と万里花を見つめていた。

承一郎「まさか……この写真全部に被害者の魂が囚われているというのか……ッ！」

あり得ない話ではない。ある話によると、大昔の日本人はカメラで撮られた写真があまりにソツクリに映る事から『魂を抜かれる』と思い込んでいたらしい。

殺される時に魂までもがあの空間に囚われているとしたら……恐ろしい考えだ。想像すらしたくない。

バタンツ!!?

承一郎・万里花「!!?」

いきなり勢いよく開いた扉へ注意して移動する。すると……

万里花「……承一郎様、私、この事件の犯人が人かどうか……分からなくなってきましたわ」

承一郎「橘さん……全く同意見だ」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

奥には、白い布を身に纏った男女が天井からぶら下げられてあった。その中央には、さらに一際目立つように『作品』が飾られてあった。

腕を何本を繋げられた白い布を纏った女性が空中に浮遊し、それを人肉の人形が何体も周りを囲んでいる。下には、地獄から這い出たような手が何本も伸ばされていた。

あまりの悪趣味な光景に絶句していた承一郎だったが、承一郎は波紋の生命探知で背後から近づく存在を感じ取った。

承一郎「橘さん…わかつているかい？」

万里花「ええ…後ろッ！」

パッ！

二人は同時に振り向くが、

パシヤッ!!?

白いフラツシユが、二人を包んだ。

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

第74話 ステファアのオブスキュラその①

パシヤッ！

世界が動きを止める。それは承一郎と万里花、二人を取り囲むような空間の歪みのフレームとして収まっている。だがその歪みの外側は正常に時が動いている。

承一郎（これはツ……！この能力はツ……!!?）

写真を撮った男はカメラ——確か『V E R I T A S』^真というブランドの物——を顔からゆつくり下ろす。右目を黒髪で隠している。青色のスーツに赤いスカーフと黒革の手袋、そしてドレスシューズと中世的で華やかなイタリアンスタイルだ。おそらく顔からしてもイタリア人だろう。

？「ずっと僕を探していたね、来てあげたよ。嬉しいねえ」

男は緩やかな足取りで承一郎に接近してくる。

？「僕もね、君を探していたんだ。いや、正確には君の中にあるものかな。彼はね、僕がこの街で創作活動を続けるだけで君が迫って来ると言っていた。全くその通りで驚いたよ」

承一郎（なんだと……僕を探していただと……!!?）

？「何としても手に入れようとする人がいる。想像をはるかに超える報酬を用意してね」

男は手に持ったナイフを承一郎の目に向かって振り下ろす！

ピタッ…！とナイフが承一郎の目の前で止まる。

？「恐怖を…君から感じる」

男はナイフの先端をそのまま承一郎の頬に走らせる。皮膚が薄く裂かれ赤い血が見える。急いで万里花に骨の鎧を纏わせたので自分に纏わせる時間がなかったのだ。

承一郎（やはり、この能力は…父と、DIOと酷似しているツ…!!?）

？「美しい…だが未完成だ」

男はナイフを承一郎の頬から離す。

ステファノ 「僕はステファノ …君達は僕の作品だ」

男——ステファノは扉へ向かっていく。承一郎と万里花は必死に体を動かそうとするが、能力の拘束がやっと解かれた時は、ステファノは閉じた扉の向こう側に消えていた。

万里花「承一郎様、お怪我は!!?」

承一郎「大丈夫、頬をなぞっただけだ…野郎、明らかに楽しんでいる。殺人に何のためらいもないサイコパスだ！」

サイコパス——良心や罪悪感などといった人としての当たり前の感情が欠如した人間を差す言葉だ。犯罪心理学者のロバート・D・ヘアは次のように定義している。

- ・良心が異常に欠如している
- ・他者に冷淡で共感しない
- ・慢性的に平然と嘘をつく
- ・行動に対する責任が全く取れない
- ・罪悪感が皆無

- ・自尊心が過大で自己中心的
- ・口が達者で表面は魅力的

などといった事が挙げられる。サイコパスは、極端な冷酷さ・無慈悲・エゴイズム・感情の欠如・結果至上主義などが主な特徴である。また、街中に潜む事から高い知性を有している事が多いと推察される。

承一郎「奴をこのまま見逃すわけにはいかない！奴を逃したら関係のない人間が何人も殺されるッ！」

承一郎はジヨルノに連絡をかける。

ジヨルノ『…もしもし？』

承一郎「ジヨルノ兄さん、ステファノという男の情報を集められますか!?!？」

ジヨルノ『…大体状況は理解したよ。すぐに情報を集めよう!』ブツツ

承一郎「橘さん、奴を追おう!」

万里花「分かりましたわ!」

扉を開けるが、ステファノの姿は見当たらない。すでに暗闇に潜んだのだ。

承一郎「カズ、急いでステファノの携帯のGPSを辿ってくれツ!」

カズ『了解だ、ボス!』

ジヨルノ『承一郎、調べてみたよ。本名ステファノ・ヴァレンティーニ、フィレンツェ出身の32歳。戦場カメラマンとして活躍してたようだけど、戦場で右目を負傷してからはアメリカで写真家として活躍したらしい』

承一郎「アメリカか…ありがとうございます『ブツツ、ピッ!』カステヤノスさん、昔の刑事のツテでステファノ・ヴァレンティーニの情報を集められますか!??」

セバスチャン『…それは事件に関係あるんだな?』

承一郎「はい、何か分かったら連絡をお願いします!」

カズ『ボス、奴は街の劇場だ!』

劇場入り口――

万里花「承一郎様、この劇場のポスター…」

承一郎「ああ、奴の撮った写真だろう。クソツ、一体何人もの人間を殺してきたんだ……？」

劇場のポスターは全部グロテスクな死体をツギハギして作られた作品の写真がかけられていた。

セバスチャン『一条警部、ステファノの周りでは不審死が多発していた。友人のモデルも切斷遺体として発見されている。どれもまだ未解決の事件だ』

承一郎（スタンド能力が発現する前から殺人を犯していたのか……だとしたら生まれついでこのスタンド使いではない……？ならいつ、どこで能力を発現したんだ……!?）

承一郎「……ありがとうございます」ブツツ

カズ『ボス、奴はその奥だ』

ギイイイイイ……

重苦しい音を立てる扉を開ける。中は足元にある少しのライトだけで全体を見渡せない。

承一郎と万里花はお互い背中合わせでゆっくりと移動する。銃を構え、周囲を警戒しながら進む。

承一郎「一体何のつもりだ？」

ステージを鑑賞する観客席には、白いスーツを着た人達が両手両足を縛られて座らさ

れていた。頭には黒い袋で被せられて顔が見えない。承一郎は顔に耳を近づけると……

男「ううつ……ううつ……」

承一郎「まだ生きている……？」

ピーツ！

突然音が鳴ってライトが消灯する。そして

パツ！

とステージに光があたり、ステファノの姿が照らされた。

ステファノ「楽しい鬼ごっこだったよ……だが最高のエンターテイメントにも終わりはくる」

万里花「追い詰めましたわ、これであなたは終わりですわ！」

ステファノ「ここまでよく頑張ったな。忍耐という名の芸術があるのなら、君達は巨匠だ。ミケランジェロほどではないが、ファン・ゴッホ級ではある」

承一郎「下らない美術の授業はいらない。大人しく投降するんだ！」

ステファノ「それは無理な話だね、せつかく能力を授かったんだ。これからもつと創作の幅が広がるといふものだ。僕がやっている事は個人的な利益より重要だ。彼には決して理解出来ないだろう」

承一郎「『彼』？誰の事だ。そいつがあんたにスタンド能力を？」

ステファノ「ああ、そうだと。だが気にしなくてもいい。君達はこれから死んで僕の作品になるのだから。…とはいえ、僕の創作は続く」グツ！

ステファノが手の平を握った途端、

ピッ！ピッ！ピッ！ピッ！

突然袋を被せられた人達の首元が音を立てながら赤く点滅する。しかも全員にだ。

ステファノ「ピカソに青の時代があつたように、僕は真紅の時代に入ったんだ」

承一郎「クソッ、よせ！」パアン！

承一郎はステファノに発砲するが、ステファノはまるでシャッターのフラッシュのように消え、隣に現れる。どうやら能力の応用で瞬間移動紛いの事が可能のようだ。

ステファノ「見ろ、僕の最新作を…！」

承一郎「やめろオツ！」

承一郎の声を無視し、ステファノの手が開かれた。承一郎と万里花は床に伏せる。瞬間ステファノの右目が青く輝き、

ドンッ！ドドドドドドドッ！！？

全員の首が吹っ飛ばされた。そしてそのタイミングに『弦楽セレナーデ』が流され、脳漿と血が噴水の如く飛び散る瞬間が停止される。

ステファノ「スウー、ハア~~~~」

ステファノは思い切り息を吸う。作品の匂いに酔いしれているかのよう。

万里花「くっつ…こ、これは…」

承一郎「見るな橘さん、君は見ない方がいい」

そう言う承一郎の手は皮膚が突き破る程に握られている。

予想は出来た、だけど防げなかった。その悔恨が承一郎の背にのしかかる。

ステファノ「美しい、血と肉のブーケだ」

承一郎「イカれた野郎め…ッ！」

ステファノ「これ以上の作品が作れるだろうか。だが僕には出来る」

ステファノは嬉しそうに話しかける。まるで百点を取った子供が親に褒められたかのように。承一郎と万里花は直感で理解した。こいつは絶対に止めなければならないと。

ステファノ「とはいえ、展示場で戦闘など愚の骨頂だ。場所を変えよう」スツ…

ステファノは一枚の写真を手に取り、空中に舞わせると次の瞬間、空間が捻じ曲がり

博物館のような場所にいた。

ステファノ「僕の美しき『オブスキュラ』を紹介しよう」ズギュン!!?

ステファノの背後から現れた像は、異形の姿だった。

スプリングカメラに三本の脚立がついているのだが、その脚立が全て人の肉で出来て

いるのだ。女性の体にトウシューズを履いた三本の足がついている。

この異形の姿が、この男の歪んだ精神の形なのだ。

承一郎「あんたは完全に！この一条承一郎と！」

万里花「橘万里花を怒らせましたわ！」

殺人鬼との死闘が、始まる。

< || t o b e c o n t i n u e d ||

第75話 ステファノのオブスキュラその②

ステファノ「君達の死は芸術になる」

ステファノはカメラとナイフを手に取る。

ステファノ「そろそろサインを入れるとしよう」

承一郎「橘さん、行くよ！」

万里花「ええ、私がサポートにまわりますわ！」

ステファノは青い陽炎のように消えて承一郎の側に出現し、ナイフを刺そうとする！

ステファノ「フツ！」

承一郎「セイツ！」

しかし承一郎は蛇のような動きでステファノの腕を掴み、CCCで投げ飛ばす！

ステファノ「くっつ！」ズギュンツ！

オブスキュラ『GYA A A A A A A H H H H H H ツ!!?』

ステファノの『オブスキュラ』は奇声を発しながら三本の足でドタドタと近づいて来る。

ステファノ「見ろ、オブスキュラがダンスをしているぞッ！」

承一郎「これをダンスとは言い難いな！」

オブスキュラの頭部のスプリングカメラが承一郎に向けられる。しかし、ジャララララララッ！ギシッ！

万里花『「スロー・ダンサー」ッ！「グイッ！」

万里花が頭部を手錠でグルグル巻きにして引つ張り、オブスキュラの頭部をグインッ

！承一郎から逸らす。そこへ

承一郎『「クリスタル・ボーン」ッ！「ズギユンッ！」

CB『「オラアッ！」ドゴドゴオッ！」

クリスタル・ボーンの拳がオブスキュラの胴体にクリーンヒットするが：

承一郎「くっ、かなりタフなスタンドだな：あまりきいてない！」

オブスキュラは大して効いた様子はなく、頭部を縛り付ける手錠を逆に引つ張る！

万里花「なっ…！私のパワーでは少し厳しいですわ！」ジリッ：

手錠の鎖を引つ張りながら、オブスキュラは万里花へシャッターを切ろうとする。

CB『「ウオリヤアッ！」ベキイッ！」

そこへ承一郎はアッパーカットでオブスキュラの頭部を凹ませるくらいに殴り飛ばした。さらに手錠の鎖を手刀で切断し、万里花を連れてステファノに見えないように壁へ退避する。

承一郎「気をつけて橘さん、奴のスタンドはなかなか頑丈だ」

万里花「申し訳ありませんわ。ですが、長所には必ず短所もあります。どこかに必ず弱点が存在するハズですわ」

承一郎「同感だ：だが、どこからか：見られてるッ！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承一郎が背後に振り返ると、そこにはナイフを振りかぶるステファノが！

承一郎「何ッ!?」

ステファノ「ハッ！」ビシユッ！

投擲されたナイフは万里花に目掛けて飛んでいくが、

万里花「きゃっ！」カキインッ！

万里花が咄嗟に出した手錠に激突して威力が殺されて弾かれる。

ステファノ「惜しい惜しい、運は誰にだつて味方するさ：一度は」

そう言つてまたステファノは消える。

承一郎「クソッ、おかしい：さつき奴が襲いかかつて来たのは元いた場所の反対側からだ。気づかないハズがない！それに、壁に阻まれているのになんで場所を特定された

…?」

万里花「承一郎様、おそろくずつと見られてると思つた方がよろしいかと。狂気に満

ちた視線がまだ続いていきますわ」

承一郎「ああ、多分どこに行っても奴に見られてる。という事は奴の作品である目を攻撃すれば……とう！『ダアン！』関係ねーわ」

壁に掛かっている目の写真に発砲しても効果はないようだ。

万里花「彼の写真が創り出した場所だからだと思われませう。そしてあの瞬間移動、何度も移動は可能でしょうけど移動出来る範囲は限定されているでしょう」

承一郎「さらに攻撃する時は必ず姿を見せるハズ……」

ステファアノ「素晴らしい洞察力だ。だが目に見えないものから逃げるのは不可能ツ
！」

ダアンツ！

放たれた弾丸はステファアノがいた場所を素通りする。

オブスキュラ『カメラに笑顔を見せてくれ……』

キュイイイン……！

承一郎「橘さん、壁に隠れろツ！」

パシャツ！

二人は壁に隠れ、死のシャッターから脱出する。

オブスキュラ『じつとしていろツ！』

承一郎「あんまり撮られるのは好きじゃあなくてね…いくぞッ！」

承一郎はオブスキュラに攻撃を仕掛けようとするが…

ズブズブ…ッ！

承一郎「な、何イーッ？！動きが…ッ？！？スタンドの動きさえも…ッ！」

ステファノ「ハハッ！君達には避けられたが、そこは写真に収められたッ！空間の時間トラップがスローになる罠さッ！」ビシユッ！

ドスウッ！

ステファノのナイフをスローになっている承一郎に防げるわけがなく突き刺さる！

承一郎「ぐうっ！！？」

万里花「承一郎様ッ！」ジャラララッ！

ガシッ！グインッ！

万里花の手錠が承一郎の手首にはまり、それを引っ張る事で空間から脱出させる。

万里花「大丈夫ですか！！？」

承一郎「ああ、すぐ治す！だが…こいつ、自分の能力を人を殺しながら研究してやがったな…ッ！」

ステファノ「当たり前だ。芸術に必要なのは創作意欲と自由な発想さ。そしてそれはどう表現出来るか知る必要がある。この能力は素晴らしい！これから僕の作品はさ

らに進化するッ！」

承一郎「それはせいぜい頑張るんだね！ブタ箱の中でさッ！」ダッ！

承一郎は波紋の呼吸を練って一気に懐に潜り込む！

承一郎「オラアッ！」

承一郎の拳はスカツと消えたステファノを捉えられない。

承一郎「ナイフを使うのなら、ナイフで勝負してみるかい？」ズリュツッ！

承一郎の手の皮膚を突き破り、数本の骨が飛び出してナイフの形が形取られる。

ビシュツッ！

承一郎の投げたナイフを再び現れたステファノはオブスキュラでパシヤツッ！とシヤツターに収めて固定する。

承一郎「そのスタンドでシヤツターを切れるのは一方向のみ…さて、どうやって全方面からの攻撃を防ぐ？」ビシュツッ！

カキーン！カキーンカキーンツッ！

承一郎から放たれたナイフはお互いぶつかり軌道を逸らし合いながら、ステファノの全方面を囲うように向かう。

ステファノ「『オブスキュラ』ッ！」

オブスキュラ『G Y I E E E E E E E E E E ツ !! ? 』

オブスキュラはステファノを覆い隠すように三本の足の真ん中に包む。文字通りカメラ・オブスキュラ暗い部屋だ。

カララアン…!と乾いた音と共にナイフが全弾床に崩れ落ちる。オブスキュラには少しの裂傷はあるが、大したダメージにはなっていない。

承一郎「スタンドが頑丈なのを応用した防ぎ方とは…」

ステファノ「あのナイフの曲げ方、実に見事だったよ。しかし、発想が陳腐だね」ポイツ!

ステファノは懐からある物を投げる。それは、

承一郎「ッ!手榴弾かッ!」

空中に舞う手榴弾は爆発した瞬間、

パシヤッ!

と空間ごと収められる。

ステファノ「斬新な構図だ!」

ダアン!ダアン!

承一郎がその空間を撃つが、関係なく素通りする。

万里花「これは…爆発が閉じ込められているようですわ!」

ステファノ「その通りさ!さあ、僕の為に血を流せ!」ビシユッ!ビシユッ!

カキイン！カキイン！

承一郎と万里花はそれぞれスタンドでナイフを弾くが、このままではジリ貧だ。

承一郎「橘さん、あのスタンドの足を止められないかな？」

万里花「分かりましたわ、ですがあの固定された爆発の中を避けて進むとなると時間のロスが…」

承一郎「いいや大丈夫、最近に使わなかったけど…重ねていこう」ダツ！

承一郎は走り出す。しかしその先には固定された爆発が。それを承一郎は…

承一郎「このまま、走り抜けるツ！」ピキピキ…

ドグオオオオン…ツ！！？

ステファノ「なんだと…！！？なぜ自分から爆発の中へ…「それは、僕には耐えられるからさ！」なっ！！？」

承一郎「オラアツ！」

ドゴオツ！

ステファノ「ぐあつ！」

承一郎「骨装ボーンアーマー甲…三重武装トリプルアームド！」

承一郎の体には骨の鎧が三重になつて重なつていた。

承一郎は基本的に一人の潜入スニッキングミッション任務だけだが、たまに銃撃戦になる場合がある。骨の

する時：光つたんだ。負傷して何も見えないハズのその右目がッ！」

ステファノ・ヴァレンティニーニは右目を戦場で負傷した後からアメリカでひっそりと連続殺人を繰り返した。それを考えるとその負傷した右目がステファノの何かを変えたのだ。おぞましい何かに。

承一郎「スタンドは人の精神エネルギーが形を得たもの：あなたのその歪んだ精神の原因がその右目だとしたら、オブスキュラのカメラはあなたの右目と直結しているッ！だからあなたは僕達の場所が分かったんだ。僕達が退避した場所をオブスキュラが見ていたからッ！」

万里化「だとしたら説明がつかますわ。そして、頑丈なそのスタンドのただ一つの弱点は判明しましたわ！」

承一郎「くらえッ！」

CB『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアッ!!?』ドゴドゴドゴドゴドゴドゴオツ!!?』

ステファノ「ぐはあっ…!!?」

クリスタル・ボーンのラツシユがオブスキュラのカメラ部分に炸裂する！

ステファノは右目を押さえてよろめくも、ギリギリ堪える。

承一郎「……まだ立つとはね、驚いた。気絶させるつもりでやったんだけどな」

ステファノ「…嫌気がさしてきた。死ぬ覚悟は出来たか！」
ステファノの右目がさらに青く輝く。
おぞましき殺人鬼との死闘は、まだ続く。

パシヤツ!

万里花はシャツターを切られ、キューブの形をした歪みの中に閉じ込められてしまつた。

承一郎「橘さんツ!」

ステファアノ「彼女には大人しくしてもらおうか。：しかし、僕のオブスキュラをで生きているものを拘束出来るのは少しの間だけ：とりあえず、動けないようにしよう」スチャ：

そしてステファアノが取り出したのは拳銃——サクラであった。警察官を殺害した際

に持っていたものだ。それをステファアノは構え、
ダアン!ダアン!と万里花の足に一発ずつ弾丸をブチ込む。そして固定が解除させる。

万里花「ああ：きやああああああつ!!?」

承一郎「や：野郎ツ!!?」

ステファアノ「何、彼女の能力は少し厄介なのでね。君との戦いに手を出してもらいたくなかつたのだよ」

承一郎「野郎：：そこまでして、何を求める!!?」

ステファアノ「遺体だよ、とある聖人の遺体さ」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承一郎「何…ッ!?」

ステファノ「曰く、『決して朽ち果てる事無く存在し続け、所有する国は1000年間
の栄光と繁栄が約束される』っていう眉唾ゴクリものの品みたいだね」

承一郎「何を…言っているんだ…? 遺体なんてものはなおさら、僕は持つてすらいな
いぞツ!!」

ステファノ「何か勘違いしているようだね…。遺体は、ただあるものではない。選ば
れた人間の中に入り込み、スタンド能力を開花させたりもするのだよ」

承一郎「!!??」

ステファノ「まさか…知らないうちに体の中に入り込んだのか…? 道理で何も知らな
いわけだ」

承一郎「知らない…うちに…? (だがいつだ…? 僕がそんなものを見落とすハズが…
いやまて、見落とした…だって…!??)」

最初に承一郎へ刺客が放たれたのは中学一年の頃だ。マイク・Oというスタンド使い
に罠に貶められ、親友信乃と仲間を喪つたあの凄惨な事件。承一郎が後に毒蛇ウエイパーと呼ばれ
るようになったグラウンド・ゼロ。

あの時、承一郎はマイク・Oと手下達を全滅、そしてサムエル・ホドリゲスとお互い

に腕を斬り落とすという痛み分けに終わった。記憶はそこまでだ。その後は倒れてしまい、詳細は義父・一征に聞いただけだった。

あの時だけ自分がどうなったのかぼんやりとしか覚えていない。だがもし、あの時に遺体が入り込んでいたら？ 斬り落とされた腕がいつの間にか再生したのも頷ける。

承一郎（もし、僕の斬り落とされた左腕の急激な再生が、遺体の力だとしたら…？）
だとしたらなんという事だ。なぜなら信乃達は、

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド

理由もなく、殺されたのだ。

マイク・O達は遺体が体に入り込む前に襲撃して来たのだ。だとしたら、彼らの死は一体なんだったのだろうか？

ただ純粹に怒りが、憎しみが込み上げてきた。承一郎は角が生えてきそうになるのを必死に堪えつつステファノを睨む。

承一郎「…いいだろう。あんたには、絶対に喋ってもらおうぞツ!!? その情報をツ!!?」

ステファノ「君のスタンドで僕を倒す事は不可能だな、何か隠しているようだが…使わないと勝てないよ」

そんな中、万里花は二人を見つめていた。

万里花（くっ…！私は…足手まといになるためにここに来たわけではありませんわッ！！？彼を倒す為に一瞬、隙が出来れば…！）

そう、彼女もただお遊びとしてこの戦いに同行したわけではない。自分が、そして何より承一郎が住むこの街を守る為に戦っているのだ。

万里花（警視總監の娘としてッ！そして、承一郎様と共に戦う者として、ここで黙って見ているわけにはいきませんわッ！！？）

万里花「くっ…！」ズリ…ズリ…

彼女はゆっくりと這いずって承一郎とステファノのいる反対方向に移動する。

ステファノ「…フン、どうやら彼女は君を置いて逃げる腰抜けのようだね」

承一郎（…！なるほど、なら僕は一瞬の隙を突ければ…！）カズ、アレの用意、お願い出来るかい？」ボソッ

承一郎は万里花の行動の意図を理解して、ミラーに指示を出す。

カズ『いつでも可能だ、ボス』

ステファノ「さあ、大人しく僕の作品になるといいッ！！？」

オブスキュラ 『GYAAAAAHHHH!!?』 ドバババツ!

CB 『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアツ!!?』 ドガガガツ!

オブスキュラの蹴りの猛攻を、クリスタル・ボーンはラツシユで防ぐ。しかし、

承一郎（クソツ！こいつ、さつきより攻撃が強烈になつているだとツ!!?）

そう、攻撃がさらに強くなつているのだ。

承一郎（だがあんたの敗因は：彼女を腰抜け呼ばわりした事だツ!!?） スツ：

承一郎は人差し指と中指を立ててステファノに向ける。ステファノはそれに気を取られた。

承一郎 「BANツ!!?」

承一郎が声を出した瞬間、

『テレーレー♪テレーレー♪レレーレー♪』

ステファノのスマホが鳴つたのだ。

ステファノ 「なっ!!?」

承一郎 「へえ、着信音が『弦楽セレナーデ』とは筋金入りのチャイコフスキーファンだな！カズのスタンド、『TOKYO通信』によって、すでにあんたの電話番号は調べさせてもらった！そして、その番号にかけた！ところでいいのかい？隙だらけだぜ？」グ
イツ！

承一郎は持っていたものをグツと引つ張る！それは手錠だった。さっきの一瞬に万里花が承一郎の元に投げ飛ばしたものだ。

ステファノ「ハッ!!?」

ステファノが振り返った瞬間、万里花が手錠に引つ張られて飛ぶようにステファノに突撃していた！

万里花『「スロー・ダンサー」ツ!!?』

SD『「ハアアアッ!」ドゴドゴドゴオッ!』

『「スロー・ダンサー」の拳が、ステファノの体に突き刺さる!』

ステファノ「ぐううっ…!だがそれだけでは僕は「知ってますわ。でも、これならどうですか?」なっ?」

万里花「私の手錠は…^{カフス}」

SD『「すでにあなたの体を拘束していますわッ!!?」』

スロー・ダンサーは飛んだ際にすでに出現させた手錠を引き寄せ、ジャラララララッ!!?ギシィッ!

ステファノを拘束する。

ステファノ「があっ…!」

万里花「本来ならそのまま首を締めて気絶させるのですが…必要ありませんわね」

承一郎「すまない橘さん、大丈夫かい？」

万里花「ええ、足を撃たれましたが問題ありません…承一郎様ツ！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ステファノ「…まだ時間はある…」

なんと、ステファノが上半身を起こし、カメラを手に取っていたのだ。

ステファノ「一枚…最後の写真を…」

ステファノはカメラを承一郎に向け、フレームの中に収める。承一郎は振り返り、

ダアンツ！

銃声が鳴り響いた。

承一郎の銃がステファノのシャッターを押す指の動きより先に火を吹き、ステファノの眉間へ弾丸が命中した。

ステファノはカメラを落とし、ゆっくりと倒れた。

こうして、殺人鬼との死闘は終幕した。

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

第77話 罰を与える者（パニツシヤー）

橘家——

アナウンサー『速報です。先日、連続殺人犯としてイタリア人のステファノ・ヴァレンティーニ容疑者が死亡しました。容疑者は巡回していた警察官が職質した時にその際所持していた拳銃を発砲、銃撃戦の末に死亡したとの事です。詳しい事はまだ発表されておらず、これから記者会見が行われる予定です。次のニュースは——』ピツ
流れているニュースを見て、警視総監である橘巖はテレビの電源を消した。

巖「：任務ご苦労だった、承一郎。これで被害の拡大は防げた、礼を言おう」

承一郎「：いえ、奴を始末する前に何人も殺されてしまいました：僕のみスです」

巖「いや、あれはどうしようもない犠牲だった。奴をあのまま逃すような事になつていたら、それ以上の人が死んでいただろう。：死体の処理を君に任せてしまつていいのか？」

承一郎「ステファノには近親者や知人はいません：奴自身が作品に変えたからでしょう。ならこうしていた方がいいですよ」

巖「すまないな」

承一郎「いえ…それでは」ガチャ
そうして承一郎は扉を閉めた。

万里花「…あ！承一郎様！」

承一郎「やあ橘さん、体の調子は大丈夫かい？」

万里花「はい！承一郎様こそ大丈夫ですか？」

承一郎「僕は平気さ。今日は巖さんに報告するだけだからね。もう帰るよ」

万里花「まあ！なら今日は私と一緒にデートに行きませんか？」

承一郎「いや、今日はあいにく用事があつてね」

万里花「…そうですか。では承一郎様、また学校で！」

承一郎「ああ、また今度ね」

ステファノ『曰く、「決して朽ち果てる事無く存在し続け、所有する国は1000年間
の栄光と繁栄が約束される」っていう眉唾ゴクリものの品みたいだね』

ステファノ『何か勘違いしているようだね…。遺体は、ただあるものではない。選ば
れた人間の中に入り込み、スタンド能力を開花させたりもするのだよ』

万里花（…『聖なる遺体』、私と同じように承一郎様にも…）
万里花は去つて行く承一郎の背中を見つめながら、自分の能力を発現させた右脚を意
識した。

？「……ん、ここは…」

承一郎「おはよう、ステファノ・ヴァレンティニーニ」

ステファノ「！」

死んだはずの男——ステファノ・ヴァレンティニーニは体を起こし、飛び起きた。

ステファノ「…おかしい、僕は君に脳幹を撃たれて…死んだはずじゃあ…」

承一郎「そうだね、君は死んだ。だが君は生き返つたんだよ、この世にね」

ステファノ「……そんなバカな」

承一郎「……ああ、不可能だ。僕以外ならね。…ところでステファノ、君は『天国』を

信じるかい？」

ステファノ「…なぜそれを僕が答えないといけないんだ？」

承一郎「いいからいいから、ちよつと質問だよ。それくらいは答えてくれ」

ステファノ「…信じてはないね。死後の世界とかそんなものに興味はない。大切な

は今だと思ふけどね」

彼が美しいと感じるものは命が散る刹那の瞬間であり、それ以外に美しいとは感じない。

承一郎「…なるほど、面白い。ステファノ・ヴァレンティーニ、これからはその新しい命を僕に預けてくれないか？」

ステファノ「…いいだろう。この恩、必ず君に返そう」

承一郎「そうか…それはよかった。ああ、それとそこにある鏡を見るといい」

ステファノ「鏡…？鏡がなんだというの…だ…？」

ステファノは鏡を見るとそこには…

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

醜く朽ち果てかけた異形の姿あつた。

ステファノ「なっ…！！？」

ジョニイ「ああ、それと一つ…俺はてめーのがやった所業を許すとは一度も言つてはいないぞ」

そう、一度消えた生命はどんな力を以つてしてもデメリットなしに蘇らせるのは不可能だ。屍生人^{ゾンビ}として例外ではない。屍生人は再生せず、腐つた体で吸血鬼の指示に従うだけの肉人形に成り下がるのだ。

ステファノ「ハアー、ハアー、ハアー…」

「ジョニー「お前はその醜い体でひたすら戦い続けるといい。それがお前にとっての罰だ」パチンツ！」

ステファアノ「が…があああああッ?!?!」ピキピキ…

ステファアノの体は骨に覆われ、やがて全身を覆い尽くした頃には髑髏となっていた。

ジョニー「屍生人^{ゾンビ}は邪悪であればあるほど良い…髑髏部隊^{スケルトン}の素体としては申し分ない

な。…ようこそ、^{アウター・ヘブン}地獄へ」

<|| to be continued ||

第78話 新しき牙

一条家、地下修練場——

承一郎「……………」

承一郎は修練場の真ん中をゆっくりと進んでいる。

ステファノを始末した後、情報を絞り尽くした承一郎はそこから組織を探ろうとしていたが、全世界に情報の網を張り巡らされているせいで完全には不可能だった。

しかしこのまま何もしないというわけにもいかない。今は力をつけるべきだ。もっと、誰にも負けないように。皆を守れるように。

今の承一郎にはいくつか課題がある。

1、波紋と吸血鬼の能力を強化する

2、『クリスタル・ボーン』および『ブラッディ・シャドウ』の能力の応用を考える
1の方はすでに目処はついている。夏休みの時に静・ジョースターに波紋の呼吸の修行法を教えてもらったのだ。

静はジョセフ・ジョースターの養子で波紋の後継者だ。独学の承一郎とは違い効率の良い修行法を知っていた。これなら波紋をさらに強化出来そうだ。

吸血鬼の能力は唯一のオリジナル技である闇を破る雷光ブレイク・ダーク・サンダーの一点集中の修行が必要だ。ただ周りに放出するだけでは威力も半減してしまう。

他の技は父であるD I Oと同じレベルまで精度を上げる事が出来ている。ひとまず問題は無いだろう。

さて、問題は2の方だ。

これからはより強力なスタンド使い達と戦闘を行うハズ。自分の能力にバリエーションを増やすべきだ。『ブラッディ・シャドウ』は現在のところ打ち止め状態だ。つい半年前に発現したばかりの能力なのでもう少し能力の全容を把握してからでも遅くはない。

だとしたら強化するべきは『クリスタル・ボーン』の方だ。中学の頃から発現してかみならずと使い続けてきた能力。体の骨から刃を生成する能力は暗殺の任務の時に非常に役に立った。

それをさらに発展しよう。そう思い承一郎はこの修練場に來たのだ。

承一郎「近距離での戦闘は今のところ問題はない。そうなると遠距離戦がネックになるな……」

承一郎とジョニイのスタンドを入れ替える時間には少しのタイムラグが発生する。敵はそんな時間を呑気に自分に与えてくれるだろうか？ NOだと断言出来る。

そんな中、射程外への決定打にかける。傭兵時代の頃はよく狙撃手スナイパーには苦勞した。ひたすら気配を消し、自分の有利とする接近戦に持ち込むしかないのだから。

承一郎「だとしたら必要なのは遠距離への攻撃手段か……」

骨のナイフもあるのだが、所詮はナイフだ。いくらスタンドで投げてもスピードには限界がある。銃のような速さが勝負を分ける。

承一郎は左手の人差し指を的に向かつて構える。そして、能力を使う。

「ダアン！」

人差し指が吹っ飛び、そこから一発の弾丸——いや、人差し指の骨が放たれた。

承一郎が参考にしたのはジョセフがかつて太陽の光を浴びせて機能を停止させた吸血鬼を超えた生命体、柱の男達の一人であるサンタナだった。

サンタナは撃ち込まれた弾丸を指先に集めて撃ち返すというなんとも強力な力を持つていた。

承一郎「……ダメだな、これじゃあ指先がブツ飛んで使い物にならない」

破裂した後にはゆっくりと修復されていく人差し指を見て承一郎は呟いた。

考えとしては悪くない発想だ。骨を操る自分ならではの着眼点だと思う。けれど指が吹き飛んでは連射は不可能だ。それに威力も今ひとつといったところだ。

いつもから指先をライフル弾のように骨を変化したらどうなるだろうかと思えるが、

それでは生活に支障が出る。

承一郎「どうするか：「どうしたイチ、また考え事か？」ツ!!？」

承一郎は背後からの声に反応し、裏拳からの回し蹴りを背後に打ち込んだ。

しかしその一連の攻撃には手応えはなく、声をかけた人物——一条一征はいつの間か間合いを取っていた。

一征「背後からの気配を感じ取れないとはまだまだ修行不足だな、イチよ」

承一郎「：父さんが規格外なだけでしょ。気配が消えているのなら分かるけど気配が無いなんて歴戦の強者でも不可能だよ」

本当にこの養父は規格外だ。自分で言うのもなんだが、自分より化け物らしい人だ。自分と亡き友信乃に剣を教えたのは竜だった。そしてその竜に剣を教えたのはこの一征だし、承一郎に弾丸を刀で叩つ斬るなんて事を教えたのも一征だった。

規格外中の規格外、それが承一郎が思う一征の印象だった。

承一郎「：それで？今日はどうしたんですか？」

一征「いやな、今日はおめえがどれだけ成長したか見てやろうかと思つてよ。久しぶりに勝負しねえか？」

承一郎「：いいですね。今日こそ父さんに勝つてみせますよ」

承一郎と一征は距離を取り、木刀をそれぞれ手に構える。

ズンツ!!?

と一征から圧倒的なスタンドパワーのオーラが溢れ出る。

承一郎「ツ!!?」ズンツ!!?

承一郎も負けずとオーラを放つ。

この勝負、もちろんスタンドもアリだ。もつとも、スタンドを使つても一征相手には勝算はほぼないに等しいのだが。

フツ…!

突然、一征の姿が消えた。いつもの事だ、あの集英組最強の組長は神出鬼没の男である。だが承一郎は目を離してなんていない。

ヒタ…ヒタ…

承一郎「ツ…!!?」

足音が聞こえる。それはさつき一征が消えた場所からだ。

彼は仁義を重んじるヤクザの組長であるが、家業柄敵を作る事は珍しくはない。ではなぜ一征は街を護衛も付けずにフラフラと回つても大丈夫なのか?

その秘密は、彼のスタンド能力にある。

ヒタ…ヒタ…

まただ、また足音が聞こえる。しかもだんだんとこちらに近づいている。

しかしやはりといったところだろうか、体は依然動かない。いや、反応しないといったところか。

ピクッ！

体が動ける！そして、一征の姿が見えるッ！

承一郎「ハアアッ!!？」

その瞬間を見逃さず、承一郎は木刀を振るう。骨で加工された刃だ。ただの木刀でも凶器になるにもかかわらずこの一撃はまさしく必殺の一撃。

そのハズだった。

フワッ……！

刃は一征の体に当たり、一征の姿が陽炎のように、いや水面に映った月のように揺らめくだけだった。

承一郎「くっ……！」

しまったと思った。コレは一征のスタンド能力の応用で作られた幻ッ……！

一征「ここまでだな、イチ」ピタッ！

承一郎「……また負けたのか」

いつの間にか一征は承一郎の懐に入り、喉元に木刀の先を向けていた。

一征「これで4 2 3戦中4 2 3勝だな」

承一郎「…相変わらず反則的ですな、そのスタンド能力」

一条一征のスタンド『明鏡止水』、その能力は視覚認識を操る能力だ。

本来人間は目、耳、鼻、手足などの末端神経から情報が脳へ送られて初めて認識する。しかしその認識がされていなかったら？反応の仕様がなない。

パワーもスピードも、どんな能力も無意味になる。それが一条一征のスタンド能力だ。

一征「俺が負けるなんて事があつたらお前に正真正銘の二代目組長の座を譲つてやるさ」

カラカラと一征は笑った。未だに承一郎は一征に勝利した事がない。肉弾戦でも、剣術戦でも、スタンド戦でも。全てにおいてこの男には勝てない。だが承一郎は勝たなくてはならない。この大きな壁一つ越えられぬ男では、何も守れないのだから。

一征「…そういえばイチ、さっきは何を悩んでいたんだ？」

承一郎「…実は…」

キング・クリムゾン!!?

一征「…なるほどな、『クリスタル・ボーン』での遠距離への攻撃手段、それも銃並みのスピードときたか…」

承一郎「父さんから何か考えはありますか？指先の骨を撃ち出すっていうやり方じゃ

あ連射も出来ないんです」

一征「うーむ…：そうダイチ、『爪』はどうでい？」

承一郎「『爪』ですか？」

一征「おうよ、詳しくは知らねえが爪も骨と似たようなもんだろう？」

承一郎「父さん、爪はあくまで皮膚の角質が変化して硬化したもので骨とは違い…い

や、待てよ？」

一征「ん？どうした？」

承一郎「いけるかもしれない…：ありがとう、父さん！」

承一郎は再び左手の人差し指を向けて構える。

承一郎（今度は爪に、骨を…！）ズズツ…

瞬時に骨が爪と同化された。これなら急な戦闘時にも使えるし日時生活に支障をきたす事もない。

承一郎「今度は…：『回転』だ」

銃にはライフリングという機構が備わっており、弾丸が放たれる時に回転がかかりジャイロ効果という効果を発揮して、弾道の安定と直進性を向上させるのだ。

それとは違うが、『回転』が鍵を握る。何故だか分からないが、そう承一郎は本能で感じ取っていた。

承一郎（『イメージ』は…なんとなくだけどある。弾丸のような螺旋状じゃあなく…風の中の木の葉がバレイエ・ダンサーのようにくるくる『舞うイメージ』…）

これから『回転』させるのは『弾丸』ではない、『爪』だ。『弾丸』のような『回転』は不要だ。

承一郎（能力で…回すッ！）

シル…シルシル…ッ！

承一郎「!!?」

一征「へえ…!」

『爪』は爪床を軸にして浮いた状態で『回転』が発生した。まるで指先で小さな竜巻が起こっているみたいだ。

承一郎「これならッ…!!?」

承一郎はそのまま的に向けて撃とうとすると、

バリイイイツ!!?

左腕が裂け、中から干からびた左腕が現れた。

承一郎「なっ…!!?」

承一郎は突然の事に驚くも、ステファノの男の話を思い出し、直感した。

承一郎（これがッ！これがステファノが言っていた『聖なる遺体』ッ!!?）

ゴゴオオツ!!?

『遺体』の手の平に穴が空いた。まるでイエス・キリストに穿たれた聖痕のように。

その瞬間、

ドバアツ!!?

人差し指の爪が凄まじい勢いと共に放たれ、

ドゴオンツ! ベキイツ!

的を突き抜け、そのまま修練場の壁に深いヒビを入れてやつと停止した。

承一郎「この威力ツ!!?」

一征「…どうやら、問題は解決したようだな、イチ」

承一郎「…はい、ありがとうございます父さん」

承一郎はまた生え直される爪を見る。

承一郎「これはもう『爪』を超えた…これからは『牙』と呼ぼう! 『水晶クリスタル・フアングの牙』だツ

!!?」

『クリスタル・フアング』、それは承一郎が結成した部隊の名だ。皆でだ、皆で敵の喉に

喰らい付こう。

そう、胸に誓った。

<
||
t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
||

第79話 学校の前で銃撃戦とか狂ってる

夜、ある一角——

ある柱の上に、一人の少女が立っていた。

? 「……日本、ジャパン平和過ぎて欠伸が出そうだわ」

銀髪にヘアバンドをつけた少女の巻いてある赤く長いマフラーが風で揺れる。

? 「…会いに来たわよ、『黒虎』」ブラックタイガー

少女は手に持つ携帯に映る顔を見る。

? 「今度こそ、お前を…」

少女の名はポーラ・マツコイ。ホワイトフアング『白牙』の異名を持つ、ギャング組織『ビーハイブ』

のヒットマンである。

翌日、放課後の学校——

承一郎 「…やあ鶴さん」

鶴 「…なんだ、何か用か?」

承一郎 「ハニーがね、今日は先に帰っていいってさ。彼女宿題忘れてやり直し食らっ

たんだとさ」

鵜「…貴様は？一緒に帰らんのか？」

承一郎「僕も今日は別々さ。スーパードでタイムセールがあるんだよ」

鵜（ふむ…では今日のお嬢の警護はクロード様に引き継ぐか…）

承一郎「あ、そうだ鵜さん。今日の小テスト、こないだ君に教えてもらった所が出て助かったよ。ありがとうね」

鵜「なつ…べつ…!!?別に…!!?その程度の事で礼を言われても嬉しくないがな…!!
?あれは…貴様のレベルが低すぎただけで…」

承一郎「…君も素直じゃあないよなあ…」

鵜「…もし、今度また分からないところがあれば教えてやらんでもないが…」

承一郎「…ん?」

そこで承一郎は波紋の探知で異変に気づいた。

?「……………」カチ…

承一郎・鵜「…?」

鵜「一条承一郎ツ!!?」バツ!!?

承一郎「分かっているツ!!?」バツ!!?

ドドドドツ!ドドン!!?

二人が飛び退いた場所へ、次の瞬間銃弾の雨が降る！
ドン！ドン！ドン！

鵜が撃った相手に撃ち返すが、跳躍で回避される。

少女——ポーラ・マツコイは二丁の銃を持って軽やかな着地を決める。

鵜「……貴様は……」

ポーラは鵜に接近する。鵜もそれに反応して、お互いの腕をぶつけ合う。

ポーラ「……会いたかったわ『ブラックタイガー黒虎』。一年ぶりね……」

鵜「……なぜ貴様がここに……」

ポーラ「お前とは、話したい事がたくさんあるわ」

そこから二人は間合いを取り、銃撃戦が開始される。しかし、ここは放課後の学校。

帰宅する生徒達も多数いるわけで……

男子「うおー!!?なんだー!?!?襲撃事件かー!?!?」

先生「生徒の皆さんは校内に……!!?」

この通り、大混乱だ。どうやらこつちに弾丸が届かないように鵜が配慮してくれているようだが、目の前でこんな事が起きたら一大事。

承一郎「皆、早く中にッ！」

承一郎も先生達と協力して生徒を誘導する。

承一郎「コラー!!? 君達学校でなんてものブツ放してるんだ!!? ケンカならよそのもつと安全な場所でやれツ!!?»

そんな承一郎を無視し、二人の銃撃戦はさらに苛烈になっていく。

二人がもう一度ぶつかり合う。その一瞬を承一郎は見逃さなかつた。

承一郎「あのさあ…」

ガシッ!

鶯「なっ!!?»

ポーラ「えっ!!?»

一瞬で承一郎は二人の間合いに入り込み、両手で二人の腕を掴む。そして…

承一郎「人の話を聞いたらどうだツ!!?» ブンツ!

ブン投げる。二人はそれぞれ別の方向に投げ飛ばされるが、空中でバランスを取り着

地する。

ポーラ「ちよつとそこの! 何すんのよ!」

承一郎「それはこつちの台詞だ: バカなのか!!? こんな場所で! 君もだ鶯さんツ!」

鶯「し、しかし…」

ポーラ「邪魔をするなら容赦はしな『バラバラッ!』え…?」

ポーラが武器を構えるが、銃の先が無い。

ポーラ(フィールドストリツ)「通常分解!!?まさか、あの投げた時に…ツ!!?」

銃には分解方法が二つ存在する。特別な工具を使用せずに銃を分解する通常分解、特別な工具を使用する完全分解の二つである。

承一郎は一瞬でポーラの銃を判別し、投げ飛ばす際にスタンドで銃をバラバラに分解したのだ。

急いで武器を替えようとするが、その一瞬を見逃す程ヴァイパー毒蛇は甘くない。

承一郎「セイツ!」

ポーラ「カハツ!」

承一郎のCQC近接格闘術による投げが決まり、ポーラは受け身も取れず地面に叩きつけられ、

肺の空気を吐き出す。

ガスッ!

承一郎はポーラの顔の近くの地面にナイフを突き立てる。

承一郎「これ以上やるなら容赦はしない。理解ドゥーユー・アンダスタンしたか?」

ポーラ「…分かったわよ」

キング・クリムゾン!!?

某アパート——

鵜 「…まったく、銃撃戦に素手で割って入ろうなどと、バカか貴様は!!？」

承一郎 「それはこっちの台詞だよ!なんで学校の前でやる!よりによって学校の前でッ!皆を避難させるのにどれだけ大変だったか…集英組ウツでもあんな事はやらないぞ!

鵜 「うつ…」

承一郎 「それに、弾丸を食らったって僕は死なないのは君が知ってるハズだろう。…それにしても、ここは？」

鵜 「…私が私用で借りているアパートだ。普段はお嬢の所に寝泊まりしているが、任務によつてはこういう場所も必要になる」

承一郎 (なるほど、僕にとってのマザーベースか)

そう納得して、承一郎は周りを見回す。基本的なものしかない質素で、生活感がない部屋だ。

承一郎 (…僕と同じか…)

思い返すのはマザーベースの自分の部屋。銃がかけられ、ベッドしか置いてない部屋。

鵜 「…ジロジロ見るな!!？」

承一郎 「…見てないよ」

ポーラ「…コホン！えーゴホン…！…それで？これは一体どういう事かしら？なぜお前の命を狙った私が家に入れてもらつた挙句、お茶まで出されているわけ？」
「黒 虎」
「ブラックタイガー」

…

鵜「…何を言っているのだ？話をしたいと言つたのは貴様の方だろう」

ポーラ「そういう事じゃあなくて…!!？」

承一郎「『黒 虎』ねえ…」
「ブラックタイガー」

ポーラ「…へえ、知つてるようね」

『黒 虎』とは、鵜誠士郎の裏の世界の異名である。数年前に突如彗星の如く現れ、当時同世代でブッチギリの任務達成スコアでトップを走っていたポーラを瞬く間に抜き去つたそうだ。

その魔獣の如き仕事ぶりからついた異名が『黒 虎』というわけだ。
「ブラックタイガー」

だがブラックタイガーとはウシエビというエビの別名でもあるのだが、そこはノーコメントだ。

承一郎「そういう君もヒットマンだね、『白 牙』」
「ホワイトファング」

ポーラ「あら、私の事も知っているのね」

承一郎「昔に少し仕事をしていたくらいさ」

鵜「彼女はポーラ・マツコイ、私の仕事仲間だ」

ポーラ「ポーラって呼ぶなあ!!?」

どうやら自分の名前にコンプレックスを持っているようだ。

鶴「本当に久しぶりだな、元気そうだなによりだ。どうだ?今から夕飯なんだが…」

ポーラ「ほのぼのするな!!? 私は馴れ合いに来たんじやあないのよ。私はあなたとの決着をつけに来たのよ…!あの時…トップから引きずり降ろされてからというもの…私 はあなたを目標にしてきた。でも正直今は失望してる…!」

そう話すポーラの目は真剣そのものだった。

ポーラ「この数日、あなたの事を監視させてもらったけど、緩んだ表情、緩んだ空気…!!?のうのうと墮落した毎日を送る、まるでどこにでもいるような普通の娘のよう…!」

ジヨニイ『…だからといって学校の前でいきなり発砲するのはな…』

鶴「…それは、今の私の任務がお嬢の警護だから…(…最近の視線はポーラのだったのか…)」

承一郎(最近の視線は彼女の(r y)

ポーラ「…本当にそれだけかしら?今のあなたには、あの頃の鋭さが全くない…!!?まさに牙をもがれた虎だわ…!何があったの…?どこか故障でもした…?それとも戦場が怖くなってしまったのかしら?ああそれとも男でも出来て平和ボケしたのかしら

「たとえばその男とか…「それは断じて無い」えっ、あ、そう…？なんかゴメン」
 ポーラ「とにかく、あなたにそうフヌケてもらっちゃあ困るのよ！あの頃のあなたを越えなければ意味がないのに…」

鵜「…どうしてそんなに私に固執するのだ？目指すべき人物なら上にいくらでもいるだろう…」

ポーラ「…忘れたとは言わせないわよ？」

鵜「!?？」

ポーラ「あれは忘れもしない…私が初めてあなたとチームを組んだ時…」

ポーラ「…あなたが ブラクタイガー 「黒 虎」？私はポーラ、よろしくね（わあ、イケメンだ…）」

鵜「…貴様、男なのか？全く胸がないな」↑すでに自分には少しある

ポーラ「てめえには言われたかねえんだよ!!？何さ、あんたこそ男みたいな顔しちゃつてさ!!？初対面でそんな事言うか普通!!？」ぶわっ!!？

大号泣するポーラ。よほど気にしていたのだろう。

ポーラ「あれ以来何度かも任務を共にするけど、美味しい所は全部持つていかれて…とにかく…！私はあなたを許さないって決めたの!!？いずれ必ずギャフンと…」

ポーラは振り向きながら左手の人差し指で鵜を指差そうとするが、
ポヨン……!と鵜の母性の塊に触れた。

ポーラ「くう……!!? くふう……!!?」

そして撃沈した。

鵜「…おい、何も泣く事ないだろう」

ポーラ「…これで勝ったと思うなよ……!!?」グズ…

鵜「号泣!!??」

ポーラ「…こうなつたら、もはや実力行使……!!? 覚悟しろ黒^{ブラックタイガー}虎……!!? さあ抜け!!?」

ジャキツ!

ポーラはマントの裏側から大量の銃と手榴弾を出す。対して鵜は

コト……と料理の乗った深皿をテーブルに置く。

鵜「まあ待て、貴様夕飯もまだだろう。まずは食べてから……」

ポーラ「わあい、肉じゃがが美味しそう……私のシリアスを返せ!」

承一郎「…君、料理出来るんだ」

鵜「…一応な」

ポーラ「ぐう……!!? 何よ肉じゃががつて……何この家庭的な感じ……。昔のお前は目標^{ターゲット}の生き血を飲んで高笑いするような奴だったじゃあないか」

鵜「してないしてない!!？」

それはどちらかという了承一郎の方だった。紛い物とはいえ吸血鬼特有の吸血衝動を存分に発散事来るし、なにより屍生人ゾンビを造るのが容易だからだ。

今では自分の体を研究した結果、少しの血と食事で衝動を抑える事が出来る。

承一郎「…ねえ、そんなに違うのかい？昔の鵜さんって」

承一郎はポーラと同じテーブルに座る。

ポーラ「全然違うわよ！あの子が三年前にある組織を一人で壊滅させた時なんて…その筋の人間は戦慄したものだ。ビーハイブがとんでもない番犬を飼ってるってね」

承一郎「…それって、千棘さんがチンピラに絡まれた時の話じゃあ…」

鵜「んなつ!!??なぜ貴様がその話を…!!？」

ポーラ「当時のこの子にはそんな伝説がいくつもあるの。この子とは何度も仕事をしたけれど、他の奴とは明らかに別格…！私は、ブラックタイガー黒虎がそういう奴だったからこそ…」

承一郎「……………」

ポーラ「…それがどうしてこんなぬるい人間になってしまったのか。あ、おいし」

承一郎「ん」

コト…と承一郎にも肉じゃがの乗った深皿が渡される。

承一郎「…いいのかい？」

鶯「……ただのついでだ。いらぬなら食べるな」

そう言われて肉じゃがを食べる承一郎。

承一郎「うおっ!??なんだコレ、すごい美味いよ!へえー、大したものだ、いい味してるよ。正直ハニーは全く料理とか出来ないから心配だったけど、レシピ教えて欲しいくらいだ……!」

肉じゃがに舌鼓をうつ承一郎。いつも組員達の食事を作るが、どうやらこの味を再現するは難しいらしい。

鶯「……そ…:…:そうか…:?’」

承一郎「ああ!鶯さんはいい嫁さんになりそうだね!」

鶯「!!?…:なつ…:誰が貴様の嫁になどなるかあ!!?’」

承一郎「ええ!??いや僕のなんて言つてな…:!!?’」

そんなドタバタ騒いでいる二人を見て、ポーラは悪巧みを思いつく。

ポーラ「ねえ黒^{ブラックタイガー} 虎…:それじゃあこうしまししょうよ…:。私と勝負をしまししょう、私が

負ければ大人しく身を引く事にするわ。ただし…:私が勝つたら、あなたにアメリカに戻つて来てもらう。そこでもう一度あの頃の牙を取り戻してもらうわ」

承一郎「……おい……:!’」

鶯「なるほど、いいだろう。ただし勝負というなら私は手を抜かないぞ?ならばどん

な勝負をする？ 射撃訓練か？ CQCか？ 腕アームレスリングずもうか？ 今まで貴様は私にどんな勝負を挑んでも勝てた試しはないがな

ポーラ「…制限時間は一時間、フィールドはこの街全体。勝負条件は……」

ポーラは承一郎に近づき、

ポーラ「この男の、唇を先に奪った方が勝ち♡」

承一郎「え」

鶯「え」

ジョニー『』

承一郎・鶯「ええええええええええっ!!??」

第80話 私を止めるな (Don't Stop Me

Now)

〔鵜 side〕

承一郎「…なんだよその勝負は…!!?なんで君達の勝ち負けに…僕の…その…唇とか…!」

一条承一郎はポーラの出した勝利条件に対して動揺している。それはそうだろう。なんせ勝利条件が自分の唇なのだから。

そういう私も、その勝利条件には動揺してしまった。

ポーラ「あら、男を惑わすのだって立派なヒットマンとしての素養でしょ?」

承一郎・ジョニイ『十年経ってから出直してくれ』

ポーラ「なんですって!!?」

鵜「…ダツ、ダメだその勝負は!!?」

ポーラ「あら、黒^{ブラックスタイガー}虎ともあろう者が一度受けた勝負を降りるといふの…?」

鵜「…話を聞け!信じられないかもしれないが…その男は実はな…お嬢の恋人なんだ…!!?」

お嬢の恋人、そう聞いた瞬間にポーラは反応した。

ポーラ「……………千棘お嬢様の…?!?」

承一郎「そつ…! そうなんだよ! ウソじゃあないぞ? ハニーに確認すればすぐ分かるつて」

鵜「だから、この勝負は…」

ポーラ「……………確かに、それは良くないわね…。でも忘れてやしない黒^{ブラックタイガー} 虎…? ビーハイプのあの『鉄の掟』を…!!? 一度受けた勝負は絶対に降りてはならない…!!? お前が『いいだろう』と言った時すでにこの勝負、後戻りなんて出来ないのよ…!」

ポーラは私にビシツと指差す。巻き込まれ一条承一郎からしたらたまったものじゃあないだろう。だが我慢してもらおうしかない。

ポーラ「…安心なさい、たとえどちらが唇を奪おうと秘密は守るわ。それに…いくらお嬢の恋人でもどうせこいつ『遊び』でしょ?」

承一郎「シバキ倒すぞ!」

ポーラ（フフツ…! 他の勝負では確かに黒^{ブラックタイガー} 虎には勝てないかもしれない…。でもさつきの様子じゃあ黒^{ブラックタイガー} 虎は男の相手は不得手と見た…! この勝負私に利がある…!!
?)

鵜（く…唇を奪うだと…? 私が…こいつの…☒そそ…そんな事出来るわけ…でも…こ

の勝負に負けたら私はまたお嬢の側にいられなくなってしまう……それは嫌だ……!!? それに……)

私は一条承一郎を見て顔を赤くしてしまう。そんな中、一条承一郎は……

承一郎「……はあ……。……一つ、提案してもいいかい？」

一条承一郎は右手を上げて言った。

ポーラ「あら、何かしら？あなたには悪いけど強制的に付き合ってもらわよ」

承一郎「いや、そこは納得してるさ。郷に入ったら郷に従えてね。でも僕には付き合わされるだけで何のメリットもない。そこでだ……僕とも勝負をしないか？」

ポーラ「へえ、驚いたわ。肝が座ってるのね」

承一郎「これでもヤクザの二代目なんでね。それで？勝負をするかい？」

ポーラ「……いいわ、それで何の勝負をするのかしら？」

承一郎「いいや、勝負の内容は君達の勝負さ。だけど第三の選択肢を増やして欲しいのさ」

ポーラ「第三の選択肢？」

承一郎「ああ、『二時間以内に二人共僕の唇が奪えなかった』場合だ」

鵜・ポーラ「!!?」

一条承一郎の提案に私とポーラは驚いた。当たり前だ、二人共ギャング組織の1、2

を争うヒットマン。その二人から一時間も逃げ切るといふのは至難の業だ。

ポーラ「…正気？私はともかく、黒^{ブラックタイガー}虎は凄腕のヒットマンなのよ？一時間も逃げ続けるなんて不可能よ」

承一郎「そんな事知ってるさ、だからだよ。だからこそ君達から逃げ切れる事が出来る
と余裕を持つて宣言出来る」

一度は私を倒した男…確かにポーラに遅れを取る事はないだろう。だがポーラにも『スタンド能力』がある。本当に逃げ切れるのか…？

ポーラ「…しようがないわ、『鉄の掟』^{オメルダ}を破るわけにはいかないし。それで？あなたが逃げ切った時の報酬は何にするのかしら？」

承一郎「…この男達の身元の特定、そしてその雇い主の特定だ」パスツ

一条承一郎は二枚の写真をテーブルに置く。その写真は11人の男がまとまっている物と、一人の男だけ写されている物だった。

ポーラ「…？まあいいわ。それじゃあ勝負を始めましょう!!？」
ポーラはいきなり一条承一郎へ迫るが、

鵜「！」

ダアン！ダアン！ダアンツ！

私の体は勝手に反応して銃弾でそれを阻んだ。

なんだ今の感覚は…こいつとキスするなんてまっぴらゴメンだ。なのに…こいつの唇がポーラに奪われるかと思うと…。

承一郎「くそっ！いきなりか！」

ブラクタイガー

ポーラ「…そこなくてはね!!? 黒虎!!?」

ドウン！ドウン！ドウン！

私の手は一条承一郎を盾にしつつ一条承一郎の正面に出ようとするポーラを銃弾で抑える。

承一郎「うおおおおおッ、これはヤバいッ!!?」

一条承一郎はたまらず部屋から脱出、私達から距離を置く。

ポーラ「待てー!!? 私にキスをさせろ!!?」ドパドパ!!?

承一郎「断るに決まってるだろうッ!!?」

ドドン！ドドン!!?

ポーラ「むっ!!? チッ」

私は屋根から屋根へ飛び移りながら弾丸でポーラの行く手を阻む。

…ポーラの妨害をしているだけでは埒があかない。くっ…こうなったら…。

鵜「一条承一郎おろろ!!?」ザシユアアア!!?

私は一条承一郎の前に降りる。

承一郎「!!?」

鵜「…じつとしていろ、すぐに済む…!」

承一郎「…悪いがそれは出来ない。この勝負、僕も賭けているものがあるんでね」

鵜「くっ…!」

やはりか!この男、妙に自分を曲げようとしなないッ!

承一郎「君は何か勘違いしているみたいだね。この勝負、僕にも勝利条件と報酬が用意された時点で椅子も動く何でもありの椅子取りゲームになった。つまり、君はポ…ラを倒すだけで君はアメリカに行かなくて済むんだよ」

…確かにその通りだ。ポ…ラを倒すか一時間一条承一郎への追跡を妨害すれば私はお嬢の側にいられる。だが…

鵜「私は正々堂々と、鉄オメルタの掟に則って勝利する!」

承一郎「へえ…じゃあ君は僕に勝てるのかい?」

鵜「くっ…!」

正直、今の私では相手にならない。だが昔の私なら? 『黒ブラックタイガー虎』と呼ばれていたあの

頃の私ならこの一条承一郎を倒す事は出来るかもしれない。しかし、私が勝つという事は…そ、その、こいつの唇を…

鵜「そ…それ…は…」

承一郎「ん……？」

鵜「やつぱりダメだろ!!?!」ベキイツ!

承一郎「ウゲエeeeeeeeeee!!?!」

ドツガラガツシャeeeeeeeeee!!?!

一条承一郎はゴムボールのようにブツ飛んで行った。

鵜「あ」

ドン!!?!ドン!!?!

鵜「くっ!!?!」

ポーラ「アハハ!!?!やはりこの勝負私の勝ちのようね……!!?!」

キンツ!ボシユウ!!?!

ポーラが投げた物体から煙が出た。スモークグレネードか!

鵜「なっ……!!?!……煙幕……!!?!」

鵜「!!?!……しまった!!?!」

煙が上がった後には、ポーラと一条承一郎は消えていた。

く 鵜 s i d e o u t く

某廃工場——

ポーラ「……さーて、ここまで離ればいかに黒ブラクタイガー 虎といえど追跡は不可能ね……
 ……それで、わざと捕まったのはどうしてかしら？ 坊や」

承一郎「…誰が坊やだよ、明らかに君の方が年下だろう…」パラパラ：

承一郎は能力で刃を作つて縛つていたロープを切つた。

承一郎「強いて言うなら彼女がアメリカに行つたらハニーが悲しむからかな。それに、君は勝つことが目的じゃあなくて、本当は鶴さんに認められたいだけだからだよ」

ポーラ「……なつ…そんな…事…」

承一郎「違うなんて言わせないよ。君の鶴さんへの執着は『憧れの存在』としての羨望に近い。なんだかんだで君は彼女をライバル視している」

ポーラ「……」

承一郎「それに僕も一回彼女と戦つたけど、あの決闘が手抜きだとしたらそれはそれで腹が立つものさ。だから彼女の全力を知りたい。別に理由としてはおかしくないだろう？」

ポーラ「…あんたが黒ブラクタイガー 虎と…？ それで、勝敗はどうなったの？」

承一郎「僕が勝つた」

ポーラ「…寝言は寝てから言いなさい。あんたなんか黒虎に勝てるわけないでしょう」

承一郎「じゃあ何で僕が生きている？」

ポーラ「…? どういう事かしら？」

承一郎「彼女が日本に来た理由、それはクロードから僕がハニーの彼氏に相応しいか調べ、怪しいと思つたらすぐ殺せつていう事らしい。まあ、千棘さん命の彼女はすぐ殺しにかかつてきたけどね。決闘として」

ポーラ「…あり得るわ、確かにあの黒虎なら…」

承一郎「理解が早くて助かるよ。そこでだ、僕は君と鶴さんを闘わせよう。その代わりと言つちやあなんだが、時間切れにさせてもらいたい。もちろん、僕の勝利報酬はナシで構わない」

ポーラ「…どういう事かしら? 自分から勝利報酬まで用意して今さら怖気付いたの？」

承一郎「まさか、本来関係のない事に巻き込まれたんだ。出来るだけ被害を最小にするのは当然だろう? 僕の勝利報酬なんてオマケみたいなものだしね」

ポーラ「…気に入らないわね、あんた。それに、黒虎に勝つたですつて? 認めないわよ、あんたなんかにあいつは負けない」

承一郎「…なんでビーハイブのヒットマンはこう血の気が多い奴らばかりなんだ…: たかだか黒虎ワシエビごときが毒蛇ツツバネに勝てるわけがないだろう。そんなに証明したいのなら、

自分で証明したらどうだい？」

ポーラ「…容赦しないわよ」

承一郎「いいだろう、殺す気で来るがいいツ！」

ポーラ「くらいなさい、『私を止めるな』^{Don't Stop Me Now}ツ!!？」

ポーラは一気に間合いを詰めて右脚の蹴りを仕掛ける。承一郎は左腕で防ごうとするが、

ミシミシイッ…!

左腕が軋む。

承一郎「ぐっ…!!??」

ポーラ「ハアツ！」

ドカアツ!ガシヤアーーンツ!!??

そしてそのままポーラは右脚を振り切り承一郎を吹っ飛ばす。

承一郎「くっ…!! (今のは一体なんだ? 投げ飛ばした時に彼女の重さは理解したはずだったが…まるで大海の荒波のように重い一撃だった!)」

ダダダダダツ!

承一郎「リススキニハーデン・セイバーツ!!??」ズリユツ!

承一郎は骨の刃を腕から生成し、弾丸を斬ろうとする。そして承一郎は見た。弾丸が

さもそこに刃がないように一直線に進み、

ベキンツ!!?

その軌道上の刃を折った瞬間を。

承一郎「何ッ!?」

承一郎は刃が折れた瞬間に体を振って弾丸を避ける。

ポーラ「あら、よく今の一瞬の判断が出来たわね」

承一郎「…君のスタンド能力は…自分や武器の運動の優先度を操る能力か」

ポーラ「へえ、その通りよ。私の能力を理解出来たのはあんたで三人目だわ」

優先度、それは物体に起こる優劣の差。

例えるとしたらパチンコでは木の板で弾かれるだけだが、そのパチンコを銃にしたなら木の板を貫通させられるのと同じ感じだ。

この場合、承一郎の防御よりポーラの攻撃の優先度が高かったから防御しきれなかったし、承一郎の刃よりポーラの弾丸の方が優先度が高かったから刃が折れてしまったのだ。

防御不可能な攻撃、それがポーラのスタンド能力。回避だけしか対応策がないという脅威の能力だ。

承一郎「…やれやれ、こいつはなかなかヘヴィな能力だな」

承一郎は拳を構え、ポーラの能力の欠点を見極めようとする。

第81話 黒虎（ブラックタイガー）の真価

（鶴side）

私はポーラと一条承一郎を探すために街の中を走り回っていた。

鶴「：ハア、ハア：！」

：ダメだ、完全に見失ってしまった……。どうしよう……。負けたら私はまたアメリカに……。またお嬢と離れ離れになってしまう……。でも……。一体どうすれば……。今頃は……。もう……。

：どうしてこんな気持ちになるんだ、どうしてこんなに不安になるんだ。なぜだか分からないが、どうしようもなく嫌なんだ：！！？あいつの唇を誰かが奪うと思うと、なぜだかとても嫌なんだ：！！？

鶴（私は……。どうすれば……）

：嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ
嫌だ

ピキッ……！

私の中で、そんな音がしたような気がした。

（鶴side out）

某廃工場――

（承一郎 side）

当初はポーラの能力に苦戦していた僕だったが、すぐに状況はひっくり返された。

ポーラ「『D o p t S t o p M e N o w私を止めるな』ツ!!？」ダダダダツ!

僕はポーラの銃撃を回避する。

ポーラ「避けてばかりじゃあ私を倒せないわよ!」

承一郎「そうか…なら少し攻めるか」

僕は一気に間合いを詰めてポーラに接近して拳を叩き込んだ。

ポーラ「ぐっ…!」

承一郎「動きが単調なものばかりだぞ。だから鶴さんに負けるんだ」

ポーラ「くっ…バカに…するなあっ!!?」

ポーラは拳を叩き込もうとするが僕に躲かれ、

承一郎「そこが甘いんだ」

逆に蹴りを叩き込まれる。

ポーラ「うっ…!」

承一郎「君の攻撃…確かに最初くらった時は対処しきれなかったが、要は防御が出来

ないだけだろう？なら回避に徹すればいい」

ポーラ「ッ！このッ……！」

承一郎「そして運動の優先度が上がるといふ事は自分に向かう攻撃の衝撃は内側に留まる。こんな感じにね！」

僕はポーラの拳を躲し、そこから腹へねじ込む様なカウンターを叩き込む！

そう、運動の優先度が上がった状態で他の攻撃を受けた時、本人が解除するか動きを変えない限り衝撃はくらった時に体が受け流す力すら働かず留まってしまふのだ。つまり、防御が不可能なら回避するかカウンターを仕掛ければ対処出来るのだ。

ポーラ「かはあつ……!!？」

ポーラは吹き飛ぶ事も出来ずに苦痛に顔を歪めた。

ポーラ（クソツ、なんでこんなのに圧倒されるの!?？しかもスタンドすら使っていないなんて……!）

そして、僕はスタンドを使っていない。徒手空拳で挑んでいるのだ。

それは、ポーラにはスタンドを使わずとも勝てるという自信の表れだ。確かに強力な能力だけど、能力のネタがバレたらいくらでも対処出来る。スタンドバトルの基本だ。

承一郎「君のような能力のみを頼りにしている人間を相手にするのはそう難しい事じゃあない。特に像イメージを持たない相手はね」

ポーラ「くっ…なら…くらってみなさいッ!!？」バツ!

ポーラは一つの手榴弾を投げた。

ポーラ（私専用のBB弾グレネード！三百発のBB弾が私の能力で弾の起こす運動の優先度を上げられて爆発的な威力を生む！）

バアアンツ!!?

手榴弾の中から大量のBB弾が僕に襲いかかり、ブツ飛んだ。

ポーラ「…あんた、ホントに人間なの…？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

しかし僕はあらゆる防御を無視する強力無比の弾をくらっても立っていた。

承一郎「これくらいの事は想定内だ。『暗殺教室』知らないのかい？最初の回でBB弾グレネードが出てるんだぜ？」

僕は骨の鎧を纏ってわざと後ろに飛んでBB弾と同じ運動方向に移動し、ダメージを最小限に抑えたのだ。

承一郎「さて、もう少し踊ってもらおう…いや、そろそろか」

僕がそう呟いた瞬間、

ドゴオオオンツ…!!?

壁が粉碎される。

ポーラ「……!?…まさか、発見された…!??これだけの距離があつて…!??」

承一郎「もう少し遅く来ると思っていたが、なかなか速いな」

ポーラ「…!あれは…!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

その姿はまさに魔獣。顔がなんか四本目に突入した九尾状態のナル〇みたいになつてるけど?

承一郎「…確かに魔獣だな」

ポーラ「…なるほど、ようやく本気を出してくれたのね…。その姿、懐かしいわ。…嬉しいわね、ブラックタイガー黒虎…この殺気…それでこそ前だ…!」スチャァ!

ポーラ「これでようやく楽しく…」ジャキン!

ポーラは二丁の拳銃を鶴さんに向けるが、肝心の鶴さんは消えていた。

ポーラ（なっ…いない…?）

ヒュツ…!!?ズドン!!?ビシビシバキ…!!?

鶴さんは次の瞬間にはポーラの背後にまわり、近くの柱を蹴った。

承一郎「へえ…」

ポーラ「……………」

ガラガラガラアツ!!?

鵜さんが蹴った柱はあつけなくヘシ折れ、瓦礫の塊が出来上がった。

ポーラ（………!!?!ただの足蹴りでコンクリートの柱を…何それ!!?!）

承一郎（なるほど、パワーもスピードもあの時以上。さらにスタンド能力で地面を六度蹴り、柱を六度蹴ったのか）

確かに見えた。一人のパワーもさる事ながら、それが分裂されてもパワーが分散させる事がないから威力が跳ね上がっているんだ。

ポーラ（桁外れじゃあない…!!?!スピードもパワーも…!!?!衰えるどころか、こんな…昔より遥かに…）

鵜「ポーラ」

ポーラ「はひイ!!?!」ビクウツ!!?」

鵜「…抵抗するな、いいな」

ポーラ「は…はい…」ガクガクブルブル

ポーラは鵜さんにビビって動かない。

鵜「一条承一郎」

承一郎「………」スッ

僕は拳を構えた。あの時は出さなかった彼女の本気を知る為。

鵜「そうか…なら本気で行くぞ」

バツ!!?

鵜さんは瞬間的に六度蹴り、とてつもないスピードで移動する!

承一郎「(速い!) だが、動きは見えないぞッ!」

僕は鵜が向かってくる方向へ向かって攻撃を繰り出そうとするが、

鵜3く6「ハアッ!」

鵜さんの分裂した二人はそれぞれ一人ずつ分裂体の蹴りに乗るような形で飛び、続けてその蹴り飛ばした二人もさらに二人の背を踏み台にして飛びかかり、拳を叩き込んだ後に体にしがみついた!

承一郎「なっ…!!?」

僕はその一連の流れに驚いた。そしてそのまま残りの二人は片方を拳に乗せて飛ばした!

鵜「ハアアッ…!!?」

承一郎「なるほど、これが…ブラックタイガー黒虎…ツ!!?」

黒虎…その名の由来となった魔獣の如き動きとは、単体で発揮される圧倒的なパワーと分裂した状態から繰り出される恐るべきコンビネーション技の事だったのか!

ベキイツ!!?

承一郎「ぐううっ…!!?」

ドツゴオオオー……

ンツ!!?

僕は廃工場の壁にブチ当たった。

鶴「ハア：ハア：まだ意識があるとはな：人間離れしているな」

承一郎「いや、かなり追い詰められたさ。僕もだいたい鈍ったもんだな」

僕は殴られる一瞬に『水晶クリスタルの牙』の『骨爪弾』を発射せず回転させた状態にし、しがみついた鶴さんの分裂体を斬り裂いていたのだ。

両手両足を抑えられていた状態だったが、そこから『骨爪弾』の回転による斬撃は数メートルまで届く。鶴さんの分裂体を消滅させてその間に骨の鎧を纏いクロスガードしてなんとか防いだのだ。

だけど瞬間的にスタンドパワーを使い過ぎて今はヘトヘトで動けない。まったく歳をとるのが早過ぎる。

鶴「それでブランクがあるというのか：やはり化け物じみてるな」

承一郎「そう言われるのは慣れてるさ。：ところで、もうこの辺にして後時間終了まで待つってのは「：喋るな」アツハイ」

鶴さんは僕に顔を近づけて、

チュッ！パッ……！

自分の唇に指をつけ、その指を僕の唇につけた。いわゆる『間接キス』だ。

鵜「…よーし、これでこいつの唇は奪ったぞ。私の勝ちだなポーラ」

ポーラ「えっ…ええええええ!!?!ちよっ…何よ今の…!そんなのキスって言わないでしよ!!?!」

鵜「何を言うか、貴様はこいつの『唇を奪え』と言ったのだぞ?なら形上これでも構うまい。それでも文句でもあるのか?」

ポーラ「全くありませんゴメンナサイ…」

ポーラは鵜さんにビビって答えてしまう。

ポーラ「くくく、くっ…」

鵜「…ただ…私を襲った時とこいつを連れ去った時の動き、あれは見事だったぞ…

?」ギユツ…!」

鵜さんはポーラを抱きしめた。

鵜「…強くなったのだな、私も嬉しい」

ポーラ「…うわああああああああん、わああああああああん…」

ポーラは今まで溜めていたものを抑えきれず泣いた。

ポーラ「ひつぐ…どうして、えぐ…いきなり消えたんだよバカくく…」

鵜「…すまない、急な呼び出しで。お前も任務中だったから…」

…まあ、これで一件落着か。やれやれだ。

く 承一郎 side out く

キング・クリムゾン!!?

ポーラ「……それじゃあ、私は約束通り帰るけどいつかまたちゃんとアメリカに来て
よね黒^{ブラックタイガー} 虎……」

鵜「ああ……」

承一郎「……それじゃあ、僕は帰らせてもらうよ。……やれやれ大変な目に合ったよまっ
たく」

鵜「……文句でもあるのか?」

承一郎「……別に」

ポーラ「……それで?これからどうするの黒^{ブラックタイガー} 虎」

鵜「……何がだ?」

ポーラ「あいつ、お嬢の恋人なんでしょ?このままでいいの……?」

鵜「はて、何の話かな……?」

ポーラ「……まったく、お子様なんだから」

ポーラ(ん……?何か忘れているような……何だっけ?)

承一郎(ふう……催眠術が間に合って良かった。いかに鵜さんより弱いとしてもギャン

グのヒットマンをスタンド無しで軽くあしらうなんて事があのメガネにバレたら厄介だからね)

ジョニイ(今はまだバレるわけにはいかないな。『聖なる遺体』の件もあるしな。あいつらを出来るだけ巻き込みたくない)

承一郎(だけど一人：『遺体』の所持者には心当たりがある)

ジョニイ(橘か…)

承一郎(準備をしとくに越した事はない。遠からず…)

この街は戦場になる)

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

第82話 橘家での勉強会

学年別成績順発表日——

承一郎達は二期期の学年別成績順を見に来ていた。作者にとっては公開処刑にも等しいが（メメタア！）、承一郎は自分がどれくらいどの位置にいるか知りたかった。

千棘「何っ位っかなー、何っ位っかなー」

承一郎「…そわそわするなよ」

32位 一条承一郎

承一郎（くそつ、2007人中32位か…なかなか20位圏内に入れないな…）

別に学校で学ばなくても社会で生きていける知識は身につけているが承一郎は学校に通っていた。その理由は二つ。

一つは『養父になってくれた一征に悪い』と思っっているのと、もう一つは『人間として普通の日常を過ごしたい』と思っっているからだ。もつとも、二つ目の理由で学校に通っていたのは中学三年生の頃からだ。

ジヨニイ『お前、ダブルシンク二重思考を使おうとはしないからな。律義な奴だ』

承一郎（他人の力で得た結果なんてニセモノだからね）

別に父親の^{DIO}ように『一位が好きだ、ナンバーワンだッ!』と言うわけではないが、向上心はそこそこ高い承一郎は満足出来ていなかった。

5位 桐崎千棘

6位 鵜誠士郎

千棘「あつ! あつたあつた! ちえー、5位かあ。まああんまり勉強しなかったしなあ…」

鵜（お嬢の隣だ…）

承一郎（…天才共め!!?）

軽々と10位圏内に突入している千棘と鵜に対して心の中でシャウトした。

小咲「…どうだった? 一条君」

承一郎「小野寺君、そっちは?」

小咲「私は88位。まあ…いつも通りかな」

承一郎「そっか、僕もまあ…まずまずかな」

22位 舞子集

23位 宮本るり

集「……………いやあ、隣同士だねえるりちゃん。うわっ痛い!!? え!?? 何すんのちよつ…! 痛い痛い痛い」メキメキ…

小咲「…知らなかった、舞子君で成績良いんだ」

すぐくシバかかっている集を見て小咲は眩く。

承一郎「彼はいつもこんな感じだよ。あれ？そういえばまだ橘さんの名前見てないな」

小咲「え？あ、そういえば。橘さん夏休み直前に転校してきたから成績とか知らないね」

承一郎「どの辺だろうね、彼女の事だから多分上の方じゃあ…」

185位 橘万里花

万里花の名前が確認された成績順位は、下の下の位置だった。ぶっちゃけ作者も中の下くらいだ。

ジョニイ『聞いてない』

あ、すんません。

ドヤア…

承一郎「いやなんでだよ!!?!」

承一郎は万里花の謎のドヤ顔に突っ込んだ。

キング・クリムゾン!!?

万里花「…恥ずかしながら私、昔から勉強の方は得意ではなくて…」

承一郎「へー…意外だね。君ならそういうのもそつなくこなしそうだと思ったのに…」

万里花「ぶっちゃけやる気がないのですわ」

承一郎「…ぶっちゃけたものだねホント…」

万里花「昔から私は承一郎様のお嫁さんになるために習い事や女性の魅力を磨く事ばかりに力を注いできたものですから」

承一郎「……さらつと空気の固まるような事を言わないでくれ」

承一郎は後ろから来る悪寒を背に受けながら言った。

集「でもこの成績のままだとマズいんじゃない？進級出来なくなっちゃうよ？」

万里花「…先生にも次の数学のテスト40点未満なら追試だと言われました…。そうですわ承一郎様!!?よろしければ放課後私の家で勉強を教えて下さりませんか!!?’’だきつ!!?’’

承一郎「ええつ!!?’’」

小咲・千棘・鶯「!!?’’!!’」

千棘「ちよつ…!!?’’?何言ってるのよあんたは。勉強なんて一人で出来るでしょ!!?’’」

万里花「私の要領の悪さを甘く見ないで欲しいですわ。誰かの指導ナシには成績の向上は不可能です」

千棘「…あーそう、なら私が教えて差し上げましょうか？学年5位の私なら申し分ないでしょ？」

万里花「冗談が上手ですわ。桐崎さんはどう考えても人に教えるのが上手なタイプじゃありませんの。ねえ承一郎様、構いませんでしょう？今日は父も帰って来ないので朝まで存分に勉強に勤しむ事が出来ると思うのですが！」

承一郎「朝まで?!? いやいや勝手に話を進めるなつて…!別に勉強くらい教えてあげるけどさ、何も泊まりこんでまでやる事じゃあないだろう？」

万里花「いえ、その点についてはですね、数学のテストが明日なので」

承一郎「そうだっけ!!?」

キング・クリムゾン!!?

橘家——

万里花「………それで…なんで桐崎さんまでついてくるんですか？」

千棘「…あーら、家に友達が来てテスト勉強だけするのに、私がいって何か問題あるかしら?」

万里花「…別に問題はありませんが、ハッキリ申し上げるとお邪魔と言いますか…」

千棘「そんな事ハッキリ言わなくていいわよ!!?」

承一郎（まあ…僕は助かるけど）

ジョニイ『オレ的には橘に「遺体」の事を聞くのに良いタイミングだと思っていたが…どうやら難しいな』

千棘「ほら！さつきと準備しなさいよ。分かんないところは教えてあげるから」

万里花「…別にあなたに教わるわけでは…。まあいいですわ、では早速…承一郎様…!!?この問題が分からないのですが!!?」だきー!!?

承一郎「のわあ!!?」

ヒヨイ…ペいつ!!?

千棘は慣れた手つきで万里花を承一郎から引き剥がし、どけた。もはや日常茶飯事だ。

千棘「真面目にやれ!!?くつつかなくても教えてもらえるでしょ!!?」

万里花「隣の方が教えてもらい易いですのに」

承一郎（やっぱり千棘^彼さん^女いて助かった）

承一郎「…で、どこが分かんないって?あー、因数分解か。いいかい?ここはこうやってだね…」

万里花「あーなるほど!私ちよつと分かった気がしましたわ!」

2 b x - 2 a x

万里花「つまり、このaが私でbが承一郎様で2 xが桐崎さんだとすると…」

a || 万里花 b || 承一郎 2 x || 千棘

承一郎・千棘「……………ん?」

2 b x | 2 a x || 2 x (b | a)

万里花「こうして2 xだけを締め出せばいいと♡」

承一郎「…正解」

千棘「ちよつと!!? その覚え方ムカつくからやめてくれる!!?」

万里花「では承一郎様! 次はこちらを教えて下さいませんか!!?」

承一郎「え? 現国?」

万里花「この章の夫の帰りを待つ彼女の心情を知りたいのですが…」

承一郎「……………えーと、これはほら、ただ待つんじやあなくて自分から会いに行こう

としてるっていう…」

テストと関係ないところまで一応付き合ってやってるあたり、やはり承一郎は根つからのお人好しだ。

万里花「まあ! 正解ですわ承一郎様! では次の問題です! 10年間愛しい人を想い続けた健気な女の子からのプロポーズに対する正しい返事とは!!? 『はい』!!? それとも

『Yes』!!?」

承一郎「勉強しなよ君ツ!!? つていうか、それ両方同じじやあないかツ!!? …あれ?

この問題はどうかやって解くんだったけ」

千棘「はあ？教えるあんたがそんなんでどうするのよ。仕方ないわね、どこ？ちよつと見せて？」

承一郎「この問題なんだけど……」

承一郎と近くにいる事にドキツとする千棘だが、万里花がじーつと見ていた。

千棘「?!?ちよつ……何よ……!邪魔しないでくれる?!?」

万里花「まあ邪魔だなんて。それは勉強の邪魔ですか？それとも二人きりの世界の？後者なら断固邪魔する事を宣言いたしますが」

千棘「……あんたねえ、さつきからやる気あんの？そんなこつちや本当に進級出来なくなるわよ？」

万里花「まあ！やる気ならありますわ。ただ苦手な物はどうにも苦手という事でして……」

承一郎「……君それでどうやってウチの高校入ったんだい？まさか裏口入学？」

万里花「テヘツ♡」ペカー!!?」

万里花は手のひらを上に向け、親指と人差し指で輪を作った。要はアレだ、マネーのジェスチャーだ。

承一郎「えええええ!!?!マ……マジなのかツ!!?!?」

万里花「…というのは冗談ですが、試験の前日に一夜漬けをしましてね。それでギリギリ合格出来たというわけでした」

承一郎「…一夜漬けねえ…。…ねえ、君の場合勉強が出来ないんじゃないやあなくて単純にやらなかっただけじゃあないのかい？僕が君ならちゃんとやればすぐに勉強出来るようになる気がするけど…」

万里花「…：そう…：でしょうか…」

承一郎「頑張ろう、ちゃんと手伝ってあげるからさ。進級出来なきや困るだろう？」

万里花「え、まあ承一郎様!!？私と共に二年生になれないのが淋しいと言つて下さるんですね!!？私頑張りますわ!!？」

承一郎「間違っちゃあいないけど随分ポジティブに受け取ったね!!？」

万里花「…フフ、でもなんだかこうして承一郎様に何かを教わっていると、10年前の日々を思い出します」

千棘「…：あんな勉強なんて教えてたの？」

承一郎「いや…：僕まだ幼稚園だし」

万里花「…承一郎様は私に色々な事を教えて下さいましたわ。一人でも楽しく遊べる遊びとか、幼稚園での事や歌や友達の話など…：懐かしいですわ」

キング・クリムゾン!!？

深夜——

承一郎「…ハッ！（イカンイカン…ついうたた寝を…つてうおっ!!?二人とも寝てるじゃあないか!!?）」

承一郎（まあでも無理ないか、もう完全に深夜だし）

承一郎は千棘に毛布をかける。

万里花「いっくん…好いとーとよ…」

承一郎（…：…：…ホントに、僕なんかのどこが良いのやら…。彼女は変だけど良い子だし、美人でモテるし、いくらでも他にいるだろうに…）

承一郎（もし僕の今まで行ってきた事を知ったら、彼女は思うだろう？きつと幻滅するに違いない。僕はただ中途半端だったから『鬼』から『人』に戻ろうとしている歪な怪物モンスターなのだから。でも…）

承一郎（…人に『好き』つて言われるのは、なんか…変な感じだ——…）

万里花「…うくん」ゴロン…

承一郎「!!?」

万里花「ああ…いっくん…そがん所ば…ダメばい…！ああ、でもいっくんが良かった言うなら…私は…!!?」

承一郎「…君絶対起きてるだろう」

万里花「テヘ♡」

承一郎「下らない事してるぐらいならちやんと寝ろ!!?」

万里花「ああ!頑張ります、頑張りますから〜!」

万里花は千棘が寝ている事を確認して、さつきとは打って変わって真剣な表情になった。

万里花「…承一郎様、この前は申し訳ありませんわ。承一郎様がステファノを殺す事になってしまい…」

承一郎「…別に君が悪いわけではないよ。あれは僕の不注意で起こってしまったものだ。君が気にする必要はないさ」

万里花「ですが…!」

承一郎「僕はこの街を守る為なら何だってやる。…もう、大切な人達が傷つくのを見ている事なんて出来ないんだ」

万里花「…:はい、分かりましたわ」

承一郎「悪いけど、皆にはスタンドの事は秘密にしてくれないか?『遺体』の事も。君も持っているんだらう?」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

万里花「!…どうして、その事を?」

承一郎『遺体』ってキーワードに反応を示さなかった。警視総監の娘である君がだ。とすると君は知っているかすでに所持しているハズ…そう推理しただけだ」

万里花「…素晴らしい洞察力ですわ。その通り、私の『右脚』にはステファノが言っていた『聖なる遺体』がありますわ」

承一郎「…そうか。僕は『左腕』だけど、くれぐれもバレないようにね。ソレを狙う人間に決して悟らせてはならない」

万里花「…分かりましたわ」

キング・クリムゾン!!?

朝——

万里花「(…ああ、いけませんわ。完全に寝てしまつてました…)…ん」

万里花は自分に毛布がかけられている事に気付いた。

万里花「(…やはり承一郎様は優しいですね。とつても温かいです)…ん?」

テーブルの上を見ると、コンビニで買って来たのかおにぎりとお茶が。

ピラッ…

そして、テストに出てきそうな箇所をまとめたメモがあった。

万里花「…本当に、大好きとよ、いっくん…」

万里花は寝ている承一郎の耳元でそう囁いた。

キング・クリムゾン!!?

学校、数学テストの時間——

先生「…それでは、テスト開始〜!」

万里花（う……やはり一夜漬けと言つても限界と言いますか、なかなか難しそうですね。あ、でもこの問題は承一郎様とやった所ですわ。あ、コレも、コレも〜）

万里花（おお〜、素晴らしいです！自信のある解答を集めたらピッタリ40点になるじゃあないですか！これならもう追試になる事は——…）

集「…うお〜38点かあ〜、惜しかったねー橘さん！残念ながら今回は追試だね。まあ特に数学は前回0点だったらしいからよく頑張った方だよ」

承一郎「え!?? そうだったのかい!?? ……ん?（…あれ? この解答一度書き直してるみたいだけど、直す前なら正解だったのに…）」

万里花「ねえ承一郎様、残念ながら私追試になってしまいましたので、またお勉強、教えて下さいね」

承一郎（…やれやれ…）

本田「…大丈夫ですか、お嬢様。…徹夜なんて無茶をし過ぎです。もしお体に障った

ら…」

万里花「…大丈夫、このくらい平気よ」

本田「…この前の文化祭といい、最近のお嬢様は無茶をし過ぎです」

万里花「そんな事、言われなくてもちやんと分かってるわよ」

本田「…私がお嬢様の護衛ではなく、監視としてお側にいる事、どうかお忘れなきよう」

万里花「…言われなくても、分かってるわよ」

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

第5章——波乱しかない冬休み——

第83話 千棘の母は超コワイ!??

二学期も終わりを迎え、外は本格的に寒くなっていた。

集「あー、もうクリスマスか。皆もう予定あんの？」

小咲「私は特に……」

万里花「ねえねえ承一郎様！実はイブの夜、父が家に居ないので……！」

承一郎「僕は実家で……いや無論ハニーと過ごすけど……」

万里花「つれないですわ〜」

集「せっかくだしクリスマスパーティーでもやんない？こう皆でワイワイ楽しく〜

るり「そうね、企画者不在なら」

集「オレ言い出しつぺなのに!?!」

承一郎「……で？実際どうするんだい。僕らの場合マジで二人で……」ヒソヒソ

承一郎は千棘にこっそり聞いてみるが……

千棘「クリ……クリス……クリスマ……」ガタガタガタ

その千棘はなぜかガタガタ震えていた。

承一郎「千棘さん!!??」

キング・クリムゾン!!?

承一郎「……え? ママが帰ってくる?」

千棘「そーなの。毎年クリスマスはママが帰って来て家族水入らずで過ごすから、パーティーには参加出来そうにないわね」

ところ変わって下校途中、承一郎と千棘はクリスマスの予定を話していた。

承一郎「……それがどうしてクリスマス嫌いになるんだ。……そういえば君の母さんって普段どこにいるんだい? 一緒には住んでいないみたいだけど」

千棘「……世界中飛び回ってる」

承一郎「……は?」

千棘「現役バリバリの女社長なの、ウチのママ。……凄い人よ、世界中に会社を持って。向かいの年収が数百億ドルを越えたと聞いてたわ。スケジュールは十年先までビッシリだし、ある人は『日経平均株価はその日の彼女の機嫌で決まる』とまで言ったらしいわ」

承一郎「……マジでとんでもない人だねそれ……」

千棘「……でも……何より凄いのは怒ると怖い。もんの凄く怖い……」プルプル

承一郎「そんなにか……でもいい母さんじゃあないか。そんな忙しいのに毎年クリスマス

スには一緒にいてくれるって」

千棘「……そう……なのかな……。私……ちよつと苦手なのよ……」

承一郎「え……?」

千棘「ママは若い時私を産んだんだけどそれ以降もバリバリ仕事を続けて、物心ついた時から年に数回しか会えなかつたから。正直……ママっていう感覚がよく分からなくて……」

千棘「なんで私があんたにこんな事話さなきゃなんないわけ!??」

承一郎「はあ!??自分で言い出したんじゃあ……!!?」

ピロリロン!

千棘「あれ? パパからだ、なんだろう『ピツ』……え!??」

承一郎「……どうしたんだい?」

千棘「……明日、ママが帰ってくるって」

承一郎「え? でもまだクリスマスじゃあ……」

千棘「それと……あんたをママに紹介したいからお誘いしなさいって……」

承一郎「!!?」

翌日、桐崎邸——

ザザン!!?!

承一郎がスーツを着て桐崎邸に入ると、ビーハイブのギャング達が忙しく動いていた。

ギャング達「おい!!?!?注文したワインはまだ届かねえのか?!?!?」「内装準備は?!?!?料理は出来てんのか?!?!?」「今やつてらあ!!?!?」バタバタドタドタ

承一郎「…おろろ…:…いつになくキビキビ動いてるな。厳戒体制って感じ…:」

というかギャング達がこれだけ恐れるとは、どれだけ千棘の母は怖いのだろうか。

ギャング「早くしろ!!?!?もうすぐ『マダムフラワー』が着く頃だぞ!!?!?」

承一郎「…『マダムフラワー』?」

千棘「…ママの事よ。ママの下の名前が桐崎『華』って言うから。言われた通りちやんとスーツで来たようね」

承一郎「…ここまでやる必要があるのかい?母さんが帰ってくるってだけなんだろう?」

千棘「バカ言わないで!!?!?あんたもしママの前でおかしな言動してみなさい!!?!?タダじゃあ済まないわよ!!?!?」

承一郎（どんだけ怖いんだ?）

千棘「シヤンとしててよね!あんた恋人として紹介するんだから」

承一郎「はいはい。…しかし君って、どんなに着飾ってもそのリボンだけは着けるんだね」

千棘「…え？」

承一郎「こないだみたいに別のリボンとかにしないんだなと思って」

イメチェンした時はリボンを変えていたが、千棘はいつもこの赤いリボンを身につけている。

千棘「……そりゃあ他にも一応持つてるけど……このリボンは特別なの。昔ママにもらった物だから……」

承一郎「……………」

アーデルト「やあ承一郎君、久しぶり！」

承一郎「あ、どうも」

アーデルト「急に呼び出してすまないね、元気にしてたかい？彼女に君を紹介する機会がなかなかなくてね、歓迎するよ」

承一郎「いえ……」

アーデルト「……ところで千棘…：パパは突然お腹が痛くなってきたよ。後は君に任せでもいいかい？」

千棘「ダメよパパ!!？ちゃんと側にいて!!？」

承一郎（どんだけビビってるんだあなた達）

ギヤング達「マダムフラワーが到着しましたー！？」「とうとう来たぞー！？」
「皆配置につけー！？」

バンツ！！？カッツ！！？

扉が勢いよく開かれ、数人の黒スーツの男達を引き連れたサングラスをかけた女性が
その黒髪をたなびかせて靴音を鳴らした。

華「……………ただいま」

ギヤング達「「おかえりなさいませ、マダー……ーム！！?!」」

ギヤング達は道を開けるように深々とお辞儀をした。

承一郎「……………（この人が千棘さんのお母さん？すごい美人だな、なんていうかオーラ
が違うっていうか……）」

ジョニイ「『…ん☒でも若くして千棘を産んだって言っても…これは若過ぎるだろう!!
? 姉さんだって言われても信じるぞ!!?』」

ジョセフの母親であったリサリサことエリザベス・ジョースターは波紋の呼吸を極め
て50代の肉体を20代後半にまで留めていたという。

華も波紋の呼吸の使い手なのかと疑ってしまう承一郎とジョニイなのだった。

アーデルト「…やあハナ！久しぶりだね、会いたかったよ。おかえり、我が愛する妻

よ！」キリツ!!？」

さっきのガチビビリしていた顔とは一変してアーデルトはキリツと引き締まった顔で妻を迎えた。

華「…アーデルト！ただいまアーデルト！私も会いたかったわ！」だきつ！

アーデルト「お仕事ご苦労様、少し痩せたんじゃないのかい？日本にはいつまでいられるんだい？」

華「クリスマスまでの夜まではいられるわ。プライベートに使えるのは2時間と30分しかないけど」

承一郎「…ねえ、なんだよ結構優しそうじゃあないか。忙しいのは本当らしいけど」ヒソ：

アーデルト「少しは休んでいけるのかい？今日は君の好きな物をたくさん…」

華「残念ながらすぐに仕事よ。ところで…アーデルト」

名前を呼ばれた瞬間、アーデルトの顔がサーツ…と真っ青になった。
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

華「…覚えてる？私二ヶ月と15日前の午後あなたに頼み事をしたわよね…？ローマの証券会社の取り締まり役と顔馴染みだから取り引きのため手続きをしておいて。あの件、どうなったかしら？」

華はさっきのような愛称でアーデルトを呼ぶのをやめた。これは多分怒っているサインだろう。

アーデルト「い…いやハナ、あれは実は色々あって…」

華「…私は質問しているのよ、アーデルト。出来ているの？いないの？どっち？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

アーデルト「出来ておりません」キリッ!!?

パチンツ!!?ガシツ!!?

華が指を弾いた瞬間、黒服の男二人がアーデルトの腕を掴んだ。

華「すぐに執務室に閉じ込めて。クリスマスまでに終わらせなかつたら目ん玉ほじく

り返すわよ」

ズルズル…

そしてそのまま連行された。

承一郎（わ…わ…わ…!!?!怖過ぎるだろツ!!?仮にもギャングのボスを相手に…

アーデルトさん完全に尻に引かれてるじゃあないかツ!!?）

ジヨニイ『…確か、ジヨルノ兄さんはイタリア全土を手中に収めていたよな…?』

承一郎（…後で兄さんに頼んでおこうか）

華「…さてと、千棘はいる？」

千棘「はひやい!!??」ドキイ!!?

華「…久しぶりね、元気にしてた? えーと…あなた今いくつになったんだっけ?」

千棘「は…はい!!? 16歳でありますお母様!!?」

承一郎(お母様…!!?)

華「…そう、大きくなったわね。学校の方はどう?」

千棘「は…はい…こないだテストで学年5位を…取りました…」

華「…そう…5位…。…千棘、理屈に合わないわね。あなたが卒業した中学はアメリカでも屈指の名門。あなたはそこを首席で卒業したわ。今あなた通う高校は日本でも平均的な学力だと聞いているけど…どういう事かしら」

千棘「もつと頑張りますうう!!? ぶわっ!!?」

承一郎(なん…だと…!!? 千棘さんがビビり過ぎてスマホのバイブの振動みたいになつてるじゃあないかッ!!?! かしこのお母さん怖いな!!? 威圧感がハンパないんだけど!!?)

華「あら? この子は一体何?」

千棘「え…え…あー、お…お母様紹介しますわ。この人私のボーイフレンドの…」

承一郎「ひつ…久しぶりです…! 一条承一郎と申します…!!? (ん…!!? 今僕はなんと言った? 久しぶりです…だと…!!?)」

華「…ボーイフレンド、『一条』…? 一条って…まさか…」

承一郎「はい…おそらくそのまさか集英組の一条です…。あ…! ですがその…! 娘さんとは清廉潔白な由緒正しいお付き合いをさせて頂いて…」

華「…:ヘー…: そうなの…: 娘をよろしくね、坊や。でももしこの子を傷つけるような事があればどうなるか…: 想像出来る…: ?」

承一郎「え…: はい、多分(怖っ…: !! ?)」

華「フフ…: ! 安心なさい、必ず想像以上の事をしてあげるから」

承一郎(いちいち怖いよこの人!!?!)

華「それにしても…: あなたにボーイフレンドか…: 早いものね、あなたもそんな年頃なのね」

千棘「ハ…: ハハ…: 」

華「…: ん? あなた…: そのリボン…: 」

千棘は華がリボンの事を触れると嬉しそうな顔をするが、

華「…: まだそんなものを着けてるの? すっかりくたびれて、そんなリボンくらいいくらでも買ってあげるのに」

華の言葉で千棘の目のハイライトが消え失せた。

華「…: 女の子なんだからもつとオシャレしないとボーイフレンドに逃げられるわよ?

華「出来ないというのならそれもいいわ。あなたには明日、東京湾に沈んでもらう」
承一郎「……」

華「ただし、もし私に認めさせる事が出来たなら、イブの夜に高級ホテルのウルトラスイートに二人で一泊をプレゼントするわ♡」

承一郎「なっ……」

千棘「はあああああ!!?!?」

華「それじゃあ行くわよ、車へ運んで」

ガシツ!!?

承一郎「えっ……マジか!!?!?マジでやるのかあゝ!!?!?」

華「……一条……ねえ……。……10年前のあの子がねえ。さて……どう成長したのかしら」

< || t o b e c o n t i n u e d ||

第84話 母と似た女性

華「へえ、なかなか様になつてるじゃあない」

華は秘書用の服を着た承一郎へ言つた。

承一郎「あの…本当にやるんですか？いきなり秘書なんて…」

華「もちろん。安心なさい、あなたは私に言われた事を言われた通りやればいいだけだから。とりあえずコレに目を通して。今日の日程と私の秘書を務めるにあつてのマニユアルよ」ドサツ!!?

書類の山を承一郎へ押しつける。

承一郎「え…あの…」

華「5分で覚えてね♡」

キング・クリムゾン!!?

車内——

華「…ええ、分かつたわ。E U 5社による新市場開拓案の構想はそちらでまとめておいて。リサーチの結果はどうなったの？」

承一郎「……………(…スゴい!!?)この大量の資料本当に今日だけの日程スケジュールなのか…!!?分

刻みのスケジュールなんて初めて見た…!!? それにさつきからやってるパソコン越しの会議、分かるだけでも5カ国語以上は使つて喋つてる!!? どれだけハイスペックなんだこの母さん…!!?)

余談だが承一郎は英語、ロシア語、中国語、キコンゴ語、他には某国の言語も習得している。最近ではジョルノにイタリア語、ポルナレフにフランス語を習っている。

華「…さて、今日最初のお仕事は何かしら坊や」

承一郎「はい、○○社の社長と赤字回復のための相談会を…(物凄く聞いた事ある社名なんですけど…!!?)」

華「あーそうだったわね。あら、ちようど着いたわよ」

承一郎(会社デカッ!!?)

華「何やってるの、早く来なさい」

自分がミジンコくらいに見えてしまう程の巨大なビルに驚く承一郎を尻目に華はビルに入っていく。その先では…、

社長が秘書と共に土下座していた。

社長「…この度は私共の失態でお呼び立てして大変申し訳なく…踏んで下さい」

華「嫌よ汚らわしい」

承一郎(大企業の社長土下座してるー!!?)

華「自分のミスでこの私の手を煩わせるなんて、良い度胸をしてるじゃあない」ぐりつ
!!?

社長「はぐつ…!!? 誠に申し訳…」

承一郎（結局踏んだ!!? どれだけ偉いんだこの人…!!?）

もはや社長がマゾと言わざるを得ない耐え忍びっぷりである。

承一郎「あの…お母…様…?」

華「あら、あなたにはまだお母様と呼ばれる筋合いはないと思うのだけれど…」

承一郎「では…なんて呼べば…?」

華「そうね、あなたには特別に『華さん』と呼ばせてあげるわ」

承一郎「じゃあ華さん、僕は一体何をすれば…」

華「…そうね、じゃあ坊やの最初のお仕事は…その辺でコーラ買って来なさい。3時

間以内に」

承一郎「…え? コーラ…ですか…?」

華「ええ、他に欲しい物があつたら追つて連絡するから」

ガコツ、コン!!?

自動販売機でコーラを買う承一郎。

承一郎（案外楽な仕事…なのか? いや、何人も倒れてるって事は…）

そこに電話が鳴った着信先は華からだ。

華『もしもし私よ、追加で買って来て欲しい物があるんだけどいいかしら?』

承一郎「華さん、はい何を買えば:」

華『カナダの取り引き先のお嬢さんがね、日本のデイズオーランドにしか売ってないぬいぐるみがどうしても欲しいと言っててね、手に入れて来てくれる?』

承一郎「……は?」

華『それとシャネ○の日本限定モデルのバッグ全種もお願い。それから:』

承一郎「ちよちよつ:!!?ちよつと待つて下さい:!!?○イズニー:!!??そんなもの往復するだけでどれだけかかるか:!!?」

華『そんなの知らないわ、なんとかしなさい。私のカードはいくら使ってもいいから最善を尽くす事ね』

承一郎「なんとかって:」

華『言うておくけど時間は厳守よ。もしも遅れたら:殺すだけじゃあ済まないわよ』

承一郎(…何人も倒れる理由が分かったよ)

華『それからロススの知人が気に入った和菓子があつてそれもお願い。あとパリの○○のせがれがアキバのフィギュアを:』

承一郎(な:…なんだとオーオーツ!!??)

承一郎はひたすら、走った。

キング・クリムゾン!!?

承一郎「…買って来ました!!? (な…なんとか間に合った…)」

華に言われた通りの物を全部買って帰還した承一郎。

華「…ご苦労様坊や、よく戻って来たわね。でも残念…あなた30秒の遅刻よ…?」

承一郎「え…」

華「あなたが約束に30秒遅れると言う事はね、私の日程が30秒遅れるという事よ? 30秒あれば成立したハズの商談が成立しなくなるという事なの。おわかり? 私のモットーは『タイム・イズ・ノット・マネー』時間はお金じゃあ買えないわ、そうでしよう?」

承一郎「…は、はい…(怖っ…!!?)」

華「分かればいいのよ、さあ次の予定は何かしら?」

承一郎「は…はい! AB社での新商品の打ち合わせを…」

華「あら、ウチの子会社じゃあない。隣のビルよ」

承一郎「じゃあすぐに下に車を…」

華「それじゃあロスが多いわ。少し待ってなさい。『ピッ!』私よ、そちらに行くからいつもの準備を」

ワイヤーの滑車を掴んで移動する！

承一郎「うおおおおおおおおおおおおおッ」

ドサアツ!!?

承一郎「タコスツ!!?」ゴロゴロ

承一郎はいきなりの事で対応出来ずに転がってしまう。しかし華は、クルクル…カツ!!?と会議室の長テーブルの上に着地した。

役員達「お待ちしておりました、社長」

華「会議を始める」

承一郎（…これ倒れるよ、秘書）

千棘（今…空から承一郎の声が聞こえたような…。…：…しっかし、街はすっかりクリスマスムード一色ね…）

ピロリロリ♪

千棘「（え…承一郎から…う…なんだろう…）もしもし」

承一郎『あ…ああ、千棘さんかい?』

千棘「わっ！何よあんたその声…」

承一郎『…今ようやく少し休憩をもらえてね。しかしアレだね、君の母さん鬼にも程

があるね』

千棘「ハハ…よく言われるわ…。それで?どうしたの?」

承一郎『いや別に?君がヘコんでるんじゃないかと思つてさ』

千棘「はあ?なんで私が…」

承一郎『昨日君本当は、母さんに『そのリボンまだ着けてくれて嬉しい』つて言つて欲しかったんだらう?』

千棘「…あんたには関係ない!」

承一郎『あるだらう、大アリだ。…華さんが僕を認めたらイブに二人で一泊させるていうのがどこまで本気が分からないけど、君…本当は母さんとイブを過ごしたいんだらう?』

千棘「…………不安なのよ。ママが本当は、私の事なんてちつとも興味なんてないんじゃないかかつて…」

承一郎『…………は?』

千棘「…ママね、私に会う時は必ず言うの。『今いくつになつた?』つて…。何回言つても覚えてくれないし、会つても怒られてばつかでちつとも褒めてくれないし。いつも…………私にだけは冷たくて…。今回の事だつて、本当は私とイブを過ごしたくないからあんな事…」

承一郎『そんなわけないだろう！実の娘に会いたくないわけがないよ。大丈夫だつて、あのクソ忙しい人が今までクリスマスだけは必ず帰って来てくれたんだろう？…今度は君から誘つてみなよ、イブと一緒に過ごしたいって。素直な気持ちを伝えたら応えてくれるかもしれないだろう？』

千棘「……そう…かな…」

承一郎『大丈夫だよ！君の母さんだろう？』

千棘「…分かった、やってみる」

承一郎『ああ！頑張つてね！』

千棘「……あ…あり…」

承一郎『うおっ!!??悪い千棘さん、華さんからキャッチ入った！すぐ行かなきゃ！

じゃあ頑張れ!!?』

千棘「ああ、うんじゃあ…」

千棘「…素直に、か…」

キング・クリムゾン!!?』

とおるるるるるるん、プツ！

華『もしもし?』

千棘「あ…えーと、お母様…?私…」

華『…千棘？珍しいわね』

千棘「あ…あのね…」

華『…：要件は何？今途中で忙しいからなんなら後で』

千棘「あつ、ごめん…！すぐ済むから…：…：あ…あの…：…：承一郎の事を認めたらイブに二人で泊まるって話、あれ取り止めて欲しいの…」

華『…あら、なぜ？』

千棘「お…お母様…：私…：イブは…：その…：お母様と…」

華『あらいいのよ、私に気なんか遣わなくて。あなたも彼とイブを過ごせた方が嬉しいでしょう？』

千棘「いや…：私は…」

華『それにイブは代わりに仕事を入れてしまったし、どの道ムリね』

千棘「えっ…」

華『他に要件はある？』

千棘「…：…」

華『そう…：じゃあ切るわね』

プツ、ツーン、ツーン、ツーン

千棘が勇気を出してかけた電話は、無情にも途切れた。

承一郎「…どうして断つたんですか!!？」

華「…なんの話よ」

承一郎「今の話千棘さんからでしょ…!!？なんで…!!？」

華「仕事があるからよ、あの子とはもうイブの夜は過ぎさないと思っていたから」

承一郎「…ならせめてクリスマスプレゼントくらい…!!？僕…なんでも買って来ますから…！」

華「……必要ないわ、それより早くこの仕事を片付けないと。次があるんだから」

承一郎「……そんなに仕事が大事ですか…どうしてそこまで…!!？」

華「……私にしか出来ないからよ。私にしか出来なくて、必要とされるから。能力のある者はそれを行使する義務があると私は考えているわ。私が必要とされ続けている限り、私は自分の能力を行使しつづける…。さあ手が止まつてるわ坊や、さつさとその資料を整理してちょうだい」

承一郎「…分かりました」

承一郎（…なんだそれは。『私にしか出来ないから』？『必要とされているから』？一番身近に、一番あなたを必要とする人間がいるっていうのにツ…!!？悪い…千棘さん…!!？）

その頃、千棘はいつも着けていた赤いリボンを、外した。

キング・クリムゾン!!?

バリバリバリバリバリバリッ!!?!

華「…ねえ坊や、昨日頼んでたあの——…」

承一郎「アキバの限定生産フィギュアと増屋の羊羹ですね、もう買ってありますよ！」

華「あら、なかなかやるわね」

承一郎（くそっ…！華さんがあんな薄情な親だとは思わなかった。見てろよ、絶対に
見返してやるッ…!!?）

小咲「…千棘ちゃん！こっちこっち」

千棘「お待たせ二人とも」

小咲「今日も寒いねー、今日はどこで買い物…あれ？今日はいつものリボン着けてないの？イメチェン？」

千棘「ああ…うん、まあそんなところ」

小咲「ふーん！それも良く似合ってると思うよ！」

千棘「ねえ、ところで結局あのクリスマスパーティーってどうなったの？舞子君の…」

小咲「あー明日ちゃんとやるみたいだよ？クラスの人も呼んで私達も参加する予定な

の

千棘「…それ、私も行っていい？」

承一郎「…ハイ!!? 会食用の店の予約とスケジュールの調整終わりました!!? …次の仕事下さい!!?」

華「あら、案外早く終わったわね。…一体どうしたの? この数日随分と殊勝な様だけども、私は助かってるけどね？」

承一郎（…僕の方こそ、この数日ずっと側で働いてたのにこの人が休んだり寝てる所を一度も見えていない。どんなスタミナしてるんだ…?）

ジョニイ『俺達が言うのも大概だが…化け物じみた人だな』

華「…これはお給料の方もオマケした方が良さそうね」

承一郎「え? 給料出るんですか？」

華「当然よ。働いた者には報酬を、社会のルールよ。それと、例のホテルの予約はもう取つてあるわよ?」

承一郎「え?」

華「合格よ、坊やにならあの子を任せても大丈夫そうね。母親が言うのもなんだけど、高校生の範囲で楽しんで来なさいな」

承一郎「……給料なんていりません、もちろんホテルも。ただ……一つお願いがあります」

華「……？」

承一郎「僕が働く事で、もし明日のイブ華さん余った時間が出来たなら、千棘さんへ会いに行く事は出来ますか？」

華「……は？あなた、何……言ってる……」

承一郎「出来るはずですよ!!？今のペースで死ぬ気で働けば華さんはかなり余裕が作れる、そうでしょ!!？」

華「それは……まあ……」

承一郎「……行けるのか行けないのか、どっちですか!!？」

華「……：……そりゃ可能は可能でしょうけど、でも……」

承一郎「それが聞ければ十分です、仕事に戻ります!!？」

華「あつ……ちよつと……」

承一郎（……もしかしたら、僕は余計な事をしているのかもしれない。この前だって、僕のせいで千棘さんを傷つけてしまったようなものだ。でも……!!？このままじゃあ千棘さんが報われないだろうツ!!？）

バツ!!？と承一郎は書類を並べ、恐るべき速度で書類を処理していく。

承一郎（親が子と会って起こる悲劇は知っている。自分自身が一番良く知っている。でも何も起こさないと後悔するのは間違ってる！二人が会って良い方向に転がるかは分からないけど、せめて出来るだけの事はしてあげたい…!!?）

そんな中、華は陰から承一郎を見ていた。

華（自分は独り、何も要らないと言つてまで誰かのために力の限りを尽くす…。でも忘れてはいない？その在り方はまるで……）

華（——理那あなたの母と同じだつていう事を……）

華は、自分のかつての学生時代の親友を思い出しながら、ゆっくりと自分のオフィスへ戻った。

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

第85話 似た者親子

クリスマススイブ、夕刻――

ババンツ!!?

華の前には大量の資料と高級ブランドの袋が置かれていた。

承一郎「…今やるハズだった仕事分、キツチリ揃えてあります。…そして、今までの傾向から取り引き先で入り用になりそうな物は全て買い揃えておきました」

華「…恐れ入るわね」

承一郎「…やるだけの事はやりましたつもりです、華さん。お願いします、千棘さんに会いに行つてやつて下さい…!!?」

華「…行かないわよ、私は」

承一郎「…なんでですか!!? 時間ならあるハズですよ!!?…ならせめて一瞬だけでも、これを渡すくらい…!!?」ガサ…

承一郎は包装された袋を取り出す。

華「…何よソレ?」

承一郎「…プレゼントですよ、僕が買って来たんです。マフラーが入っています、彼

承一郎（…？それは一体…？）

カラ…と華が自分の机の中から取り出したのは、承一郎のより豪華に包装された袋だった。

華「…用意してはみたものの、今年もまた渡せそうにないわね…」

承一郎「…あ…華さん、それは…？」

華「ん？クリスマスプレゼントよ」

ドサドサドサツ！！？

袋はその後から9個も出て来た。計10個もある。

華「…溜まりも溜まったり10年分。毎年毎年用意はすれど、結局…渡せないのよね」パキッ！

華は自分の口に使っていた煙草——もとい、ココアシガレットをヘシ折った。

承一郎「…それ、もしかして…ココアシガレット…？」

華「そうよ、小さい頃食べなかつた？本物のタバコなら千棘を授かつた時にスツパリと止めたわ」

承一郎「あの…華さんは千棘さんに興味がないのでは…」

華「はあ？なぜそうなるの？」

承一郎「いやだつて…千棘さんのリボンの事忘れてたり、年も忘れてたりとか…！」

華「忘れるわけないじゃあない、私があげたりボンなのよ？」

承一郎（な…何イローツ!!?）

華「だつてあの子、私が10年前にあげた安物のリボンを未だに着けてるのよ？あの子にならもつと他にいくらでも似合う物があるハズなのに…。年だつて当然覚えてるわよ。ただ…あの子の前だと緊張しちやつて、つい年の話から…」

承一郎「いやいやいやいや!!?逆効果ですから!!?」

華「…あの子は凄いい子でしょ？」

承一郎「…え？」

華「前に話したわね。『能力ある者はそれを行使する義務を持つ』——あの子は素晴らしい才能を持つてるわ、その気になれば私やアーデルなんて及ばないくらいに。それに私によく似て美人、私によく似て」

承一郎「……………」

承一郎は理解した。この人はかなりの親バカなのだ。

華「私はあの子を厳しく育てたわ、でもきつと厳しくし過ぎた。いつしかあの子は、私を『ママ』と呼んでくれなくなりました——…きつとさぞ、嫌われている事でしょうね」

承一郎「……………だからイブに僕達をホテルにつて提案を…?」

華「え……?……だつてその方が嬉しいかと思つて……」

ジョニイ『しつかりと物事を捉えていれば分かつた事だ。ココアシガレットも見切れないとはな』

承一郎（……電子タバコと思つてたんだ。僕達も吸うだろう?でも、ようやく分かつた……!!?）

承一郎「……華さん……!」

華「ん?」

承一郎「アホ……!」

承一郎は見事なツツコミで華へ平手打ちをした。

華「痛あ!!??なつ……痛あ……!!?あなた……この私に向かつてよくも……」根本的に間違つてる!!?」

承一郎「彼女は!!?嫌つてなんかいませんよ華さんの事……!!?ずっと必要として……!今だつて……!!?一緒にクリスマスマスを過ごさせる事を楽しみにしてたんです!!?今でも彼女は華さんの前以外じゃあ華さんの事を『ママ』って呼ぶんです……!!?」

承一郎「……会いに行つてあげて下さい!!?まだ間に合いますから……!!?」

華「……でも……私、今日この後アメリカに発たなきやいけないんだけど」

承一郎「な、なんだつて……!!?」

華「だって…もう千棘に会えないと思ってたからこのまま帰っちゃおうかと…」
 ジョニイ『確かに日本で仕事するとは言ってなかったが…これはマズいぞ!!?』

承一郎「じゃあ…時間は…」

華「飛行機が出るまで3時間…」

承一郎「くそつ…ギリギリか…!!? 華さんは移動の準備を済ませたら例の高級スイートで待つて下さい!!? 僕が千棘さんを連れて来ます…!!?」

華「え…でも…」

承一郎（クソツ…華さん、仕事が人外並みに出来る人だと思ったら、それ以外はただの天然じゃあないか…!!? 結局、似た者親子だな…!!?）

承一郎はただ駆ける。お互いすれ違って歪んでしまった親子の絆を繋ぎ止めるために。

パーティー会場――

小咲「…わー！見て見て外！雪降ってる！」

集「へえ、ホワイトクリスマスたあ今年が良い事ありそうだね」

鶯「お嬢、そこ寒くありませんか？」

万里花「ところで承一郎様はいつご到着なさるのですかー!!?」

集「あー、もうすぐ来ると思うよ（ウソ）」

千棘『ねえねえママ、私こんなリボンが欲しい!』
華『ええいいいわよ、大事になさいね?』

千棘が思い出すのは、幼い頃の母との会話。

千棘（…いつから、こんな風になっちゃったんだろ…。昔はあんなに、普通に話せてたハズなのに…。もうずっとこのままなのかな…。ママとは…もう…）

承一郎「千棘さあゝゝゝゝん!!?!」

ドギヤギヤギヤギヤギヤ!!?

いきなり黒塗りの高級車が見事なドリフトをかましてきた。

千棘「うわあ!!??なっ…何何何…!!??」

承一郎「千棘さん…!!?そこにいるかい!!?」

そしてその高級車から顔を出したのは自分の恋人である承一郎だった。

千棘「承一郎…!!?」

万里花「キヤー…!!?承一郎様…!!?」

千棘「あんた…どうしてここに…」

承一郎「……説明してるヒマがない!!?とにかく一緒に来てくれ!!?」ガシツ!!?

承一郎はいきなり千棘の手を取り、そのまま華の場所へ連れて行こうとする。

千棘「は!!?ちよつと……」

万里花「キャ〜!!?二人でイブにどこへ行こうと言うのですか!!?どうせ連れて行くのでしたらこの私を!!?この万里花を!!?」

鶴「おい一条承一郎、何をするつもりだ!!?」

承一郎「あー!!?時間がないって言ってるのに!!?」

千棘「ちよつと……ちよつと待つてよ!そんな急に……どこに行くのかくらい……!」

承一郎「ああ!!?ええい、だからあ……!!?」

詳しく話せば皆納得してくれたであろう。しかし承一郎にはそう時間はなく、そんな余裕がなかった。故に、

承一郎「高級ホテルのスイートルームだよ!!?!」

爆弾発言をこうも容易く言ってしまった。いや、これは素なのかもしれない。

一同「え……え……ええええー~~~~~!!?!」

ジョニイ『ハハッ』

そして承一郎は千棘(十一同)が呆気に取られている間に千棘の手を掴んで連れ出した。

万里花「どーゆう事ですか!!??今の発言は一体どーゆう…」

集「オレは知らなあばば」

集は万里花に肩を揺さぶられる。

男子達「うお!!?なんか小野寺が倒れてるぞー!!?」「一体どうしたんだー!!?」

千棘「……………」

承一郎（頼む…!!?間に合ってくれ…!!?）

その頃、華には降雪によるチャーター便の搭乗時間が早くなるという連絡を受けた。

黒服「ダメだ一条君…!!?北部の降雪でこの辺で大渋滞だ、車はもう動かせない…!!?
?」

承一郎「クソツ、こんな時に…!!?」

千棘「…ねえ、ちよつと待ってよ…!ちゃんと言明して…!!?」

承一郎「…すみません、後で必ず返しますんで…!!?」

承一郎は近くの自転車を無断で拝借、後ろに千棘を乗せてペダルを思い切り踏んだ!

千棘「……………ねえ…!さつき言ってたホテルってママが言ってた奴の事でしょ!!?行かないわよ私…!どうしてあんたなんかと…」

承一郎「そこで華さんが君を待つてるんだ!!? 合わせてあげるから大人しく座つてくれ!!?」

千棘「!!?…ママが…!!? どう…して…」

承一郎「…華さんは!!? 誤解するような事をいっぱい言つてたし信じられないかもしれないけど…本当は君の事を大切に想つてたんだよ…!」

千棘「…そんな…そんな事あるわけ…そんなの信じられないでしょ…!!?」

承一郎「…信じてくれ!!? たまには少しくらい僕の事…信用してくれ…!!?」

千棘は承一郎の言葉を聞き、ギョツ…!と一層抱きしめた。

黒服「…華様、出発の準備は整つております。お早く」

華「……ええ」

承一郎『嫌つてなんかいませんよ!!? 彼女は…!!? 今でも彼女は華さんの事…「ママ」つて呼ぶんです…!!?』

華（…私は、なんにも分かつてなかつたっていう事…? 本当にあの子は今も『ママ』と呼んでくれる? でも…私は…）

黒服「…雪が強くなります、お急ぎ下さい。この会議にもし出席して損ねるような事があれば、我が社は数十億円の損失ですよ?」

承一郎「なっ! いない!?」

受付嬢「はい…雪で飛行機が早まったとかで…」

承一郎「…なら空港だ!!? 急ぐよ!!?」

千棘「うん…!」

承一郎「うおおおおおッ、りやあああああッ!!?!!!?」

ベキインツ! ガシャンツ!!?

承一郎は自転車で施錠された鎖を壊し、飛行場に突入した。しかし、ギイイイイイイイイイイイッ!!?

エンジンの音を出しながら、飛行機が出発を開始していた。

千棘「…間に合わ…」

承一郎「…まだだ!!? まだ終わってないッ!!?」 チャツ…!

承一郎は携帯を取り出す。

承一郎(ここまでできたんだ! 今この機会を逃したら、二人の仲は永遠に修復出来ない

かもしれない！そんなのは絶対あつてはならないッ！僕は親の愛を…信じるッ!!?」

承一郎「その仕事スッポかして下さい!!?華さん…!!?!」

承一郎は華へ電話をかけた。

華『…………坊や…。…………ありがとう、坊や。でも、もういいのよ。千棘の気持ちを知れて嬉しかったけど、私は…行かなくては。あの子にもどうかよろしく言っておいて』
承一郎「……………そうやって仕事のせいにして、ホントはビビってるだけなんだろう!!
?いい年こいて逃げてるんじゃないッ!!?」

承一郎「仕事とどっちが大切か…よく考えて下ッ」

承一郎は千棘に振り返り、

承一郎「さいッ!!?」

携帯を投げ渡した。

千棘「……………ママ…。…お願い、ママ…!」

千棘の切実な願いは叶わない、そう思われた。

承一郎「…ん…?」

千棘「あれってまさか…」

しかし待て、どんどんと小さくなっていた飛行機の影が今度はだんだんと大きくなっているのだ。

千棘は大粒の涙を流しながらも、

千棘「でも、好きだよ…!!？」

母への愛を告げた。

次の瞬間、華からも大粒の涙を流した。

華「…：千棘…！」

華「千棘くくく…!!?!」

千棘「ママアーーーーー!!?!」

二人はお互いを抱きしめて、この10年間のわだかまりを解くかのように泣いた。

承一郎（…なんだ、やっぱり似た者親子じゃあないか…）

承一郎「…華さん！」

パシッ！と華の手を投げ渡されたのは承一郎に渡していた高級ホテルのスイート

ルームの鍵だった。

華「え…！」

承一郎「長話をするにはここは冷えます。僕はこのまま会社に戻って、出来る限りの

後始末をしておきますから。華さんは彼女とホテルでゆっくりイブを過ごして下さい

ね」

華「…カツコつけが過ぎるわよ？坊や」

承一郎「いいでしょこのくらい、今日は…メリークリスマスって事で」

承一郎「さて、さっさと終わらせようか…おっと」

社内に戻った承一郎はデスクに座ろうとするが、ふらついてしまう。

ジョニー『お前、一体何日不眠不休で働いた？いくら体の半分が睡眠が不要な吸血鬼だとしても半分は人間だ。何より精神が持たないぞ』

承一郎「ごめん、ちよつと無理し過ぎた…。前は何日も戦場を走り回ってたのにな…」

ジョニー『お前は寝てろ。後は俺がやっておくさ』

承一郎「ありがとう、助かるよ」

ジョニー『なに、どうって事はない』

ジョニー「そういう事だカズ、すまないが頼めるか？」

カズ『了解したボス』

ジョニー「誰か知らないが言ったらしい。『日経平均株価はその日の彼女の機嫌で決まる』ってな。なら今日は俺が決めさせてもらおう」

後始末どころか、損失をチャラにしてやろう。そうジョニーは動いた。

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

第86話 聖なる日（クリスマス）の神（DIO）の子に
救いはもたらされるか？その①

く千棘 side

某高級ホテル、スイートルーム――

華「…そういえば、まだクリスマスプレゼントも渡してなかったわね。はいコレ、新しいリボン選んでみたの」

承一郎のおかげでイブの夜を一緒に過ごせたママが渡してくれたのは綺麗なリボンだった。

華「…あなたがあのリボンを大切にしてくれてる事はとても嬉しいわ。でも…せっかく女の子なんだから」

千棘「…ありがとうママ。でも…私…まだコレを大事にしていたいの。コレにはたくさん…思い出があるから…」

そう、コレにはたくさん思い出がある。10年も共に過ごしたものだし、何よりお母さんがくれた大切なものだから。

華「……………そっか……………あの坊やもさぞ喜ぶ事でしょうね」

千棘「…？承一郎が…？なんで…？」

華「あら忘れたの？あなたがそのリボンをつけるようになったのは、坊やがきつかけだつたのよ？」

千棘「？…？…え…☒」

華「10年前…あなたと坊やが夏の間に一緒に遊んだ事があつてね…？当時あなたが好きだつた絵本の中に、そんなリボンをつけた女の子が登場するの」

華「あなたは坊やに『このリボンがきつと似合うよ』つて言われて、慌てて私にせがみに来たのよ。覚えてないかしら？」

千棘「…：…あいつ…が…」

私「私はつい顔を赤くしてしまう。そうだったのか、あいつが…私に…」

華「…：…行つてあげたら、千棘…」

千棘「え…？」

華「私がこうしてあなたとたくさん話が出来たのは何もかも全部、坊やのおかげよ。…恋人なんでしょう？…行つてあげなさい」

千棘「うん…」

私は部屋を出た。

華「…皮肉なものね。母の愛を誰よりも求めているから母の愛を誰よりも信じている

なんて：ねえ理那、もしあなたが生きていれば、あの坊やはもつと幸せな日々を歩めたでしょうね：」

ママの言葉は、誰にも届く事はなかった。

キング・クリムゾン!!?

時間は午前4時半を過ぎ、誰もが寝静まっている頃、私は会社に入った。

千棘（さすがにもう起きてないかな：）

エレベーターのボタンを押して承一郎のいる部屋へ移動する。

静かにゆつくりとドアを開けてみると、なんとまだ明かりが点いていた。

千棘（！あのバカ、まさかまだ仕事しているんじゃないあ：）

ガリガリガリッ！タタタタタッ！

近づくにつれてひたすらにペンで書く音とパソコンのキーボードを叩く音が聞こえてくる。

ジヨニイ「……はい、そのコストは2%まで削減して下さい。：難しいですって？

△△社は3%も削減しているんですよ、5%なんて甘ったるい事を言わないで下さいッ

！」タタタタタッ！

千棘「……！」

ジヨニイ「それと、□□社との合同新商品の開発、急いで下さいね。お願いしますよッ

！」

千棘（すごい、パソコンを打ちながら商談を進めている……!）

ママもすごいビジネスマンと聞いたけど、承一郎も負けてはいないかもしれない。

タタタタツ!

ジョニー「……ふう……これでピツタリ……損失分をチャラに……出来た……」

仕事が終わったのか、承一郎はフラフラとした様子でソファに仰向けの状態で寝転んだ。

千棘「……承一郎……?」

ジョニー「……スウー、スウー……」

どうやら限界らしく、私がいた事も気付かないまま倒れるように寝てしまったようだ。

千棘「……こんな所で寝たら風邪引くでしょ、バカもやし………よっ……と……」

隣に座った私は承一郎の頭を自分の膝の上に乗せた。

千棘「……ありがとう、承一郎……」

ジョニー「………んん………母さん……」

千棘「……もしかして、私の事をお母さんだと思ってる……? 可愛いところあるのね……
はいはい、お母さんですよー」

私は承一郎が甘えているのだと思ひ頭を撫でた。すると承一郎は

「ジョニー……母……さん……」 ツウ……

涙を流した。

千棘（……涙……？）

「ジョニー……母……さん……もう……おいて……行かないで……」 ギュツ……！

承一郎の手が握り締められる。母子家庭で幼い頃からお母さんを亡くしたつて聞いてた。なのに、私は気付かなかつた。いや、承一郎が悟られないようにしていたのかもしれない。

千棘「……承一郎……」

「ジョニー……頼む……もう……一人にしないでくれ……！」

「今まで知らなかつた承一郎の事を知れた気がした。」

千棘「……私と一緒にいてあげるわよ……」

私はそう囁き、承一郎の頭を撫で続けた。

く千棘 side out く

キング・クリムゾン！！？

「ジョニー（な……なんだこの状況……！！？ 一体何が……）」

ジョニーは千棘が起きないようにゆっくりと千棘の膝の上から脱し、横にして毛布を

かえた。

ジョニイ（……やれやれ、こんな所で寝たら風邪引くだろう、バカ…）

ジョニイは千棘の寝顔を眺めた。

ジョニイ「：最高のクリスマスプレゼントだよ、ありがとな」

ジョニイからしたら永遠に叶わない恋、だけど諦められないのはまだ人である故か。

ジョニイ「：千棘、愛している。たとえ、この声が届かなくてもな」

名残惜しいがこれだけで充分だとジョニイは泡沫の夢から覚めた。

キング・クリムゾン!!?

某空港、入口ゲート前——

華「：じやーね千棘、これからはたまにメールでも送ることにするわ」

千棘「うん、ママも元気でね」

華「：ありがとう坊や、あなたには世話になったわね。公私共にこうして助けられるとは思わなかったわ。高校を卒業したらウチの会社に来なさいな、あなたには良い仕事を用意してあげるわよ？」

承一郎（うっ…ありがたいような恐ろしいような…）

華「：それにしても、10年前に千棘と遊んでた小さな子がこんな風に再会するなん

承一郎「…なら言ってくればいいのに。頑張つてフリしてたのがバカみたいじゃないですか…」

華「……『フリ』…ね？」

承一郎『僕が働く事で、千棘さんに会いに行く事は出来ますか？』

承一郎『…会いに行つてあげて下さい!!？』

華「……………本当に、ただの『ニセモノ』なのかしら」

承一郎「…え？」

華「あなたの千棘あのかに対する想いは、本当に『ニセモノ』なのかしら…？」

承一郎「……………え…？」

ジヨニイ『……………』

華「…それじゃあ、仕事の話よろしくね。あなたならどんな所でも輝ける才能があるわ。数十億円の損失をどうやってチャラにしたのか、気になるしね」

承一郎「……あまり知らない方がいいと思いますよ。ちよつと色んな人の伝手に頼つただけですし」

華「そうね、あなたにはあらゆる人を惹きつける才能があるわ。傭兵としての才能が

なかつたあなたがそれでも勝利のボスと呼ばれるようになったのも多分それが理由ね」
 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承一郎「……なぜ、あなたがそれを知っているんだ…?!？」

華「あら、話してなかつたかしら？ごめんさい、改めて自己紹介するわね。私は桐
 崎華、『フラワーコーポレーション』の代表取締役にしてある組織の一員。その織の名は
 『C I P H E R』、またの名を——」

承一郎『愛国者達』ツ…!!?」

そこには、承一郎が3年間探し続けてきた組織のメンバーがいた。

第87話 聖なる日（クリスマス）の神（D I O）の子に救いはもたらされるか？その②

承一郎「『愛国者達』……!!?」

華「ええ、あなたの母ザ・ボスこと理那を殺した組織。私は末端の人間だけだね」

承一郎「……ならあなたは知っているハズだ。僕がどんな怪物で、組織をどれだけ憎んでいるのか……！」メリメリ……！

僕の額から怒りに呼応するように白い角が生える。その形相は、まるで鬼だった。千棘さんからは見えない角度だったのがせめてもの救いだ。

華「……知っているわ。だからこそ私は組織に入り込んだの」

承一郎「……なんだって？」

華「まあ、その存在には理那自身から聞いたくらいだし、組織が接触してきたのは何年前だよ。しかも末端の人間には真偽を巧みに織り交ぜた嘘の情報を流して、少数の人間にしか真実を悟らせないようにしていたしね」

承一郎「……つまりあなたは、あえて『愛国者達』に……？」

華「そうよ、私はらりるれる……もとい『愛国者達』にわざと入ったの。理由はあなた

華「私と協力者達が今まで集めた組織のデータよ。嘘の情報も混ざっているかもしれないから気をつけてね」

承一郎「協力者達の名は？」

華「A D A MとE V Aと言っていたわ。理那のかつての部下で、あなたの今の部下とも」

A D A MとE V A、それはオセロットとエヴァの事だ。オセロットは本名のアダムス力から取った暗号名だ。

承一郎「…その二人、味方ですね。わかりました、協力ありがとうございます」

華「また何かあったら連絡してちょうだい、力になるわ。…ああ、あとコレもあげるわ」

僕が千棘の元に戻ろうとするちようどのタイミングに華さんは僕へあるものを投げ渡す。

承一郎「？これは…？カセットテープみたいですけど…」

華「あなたの母が生前私にくれたテープよ、『大きくなった息子に会った時に渡してくれ』って」

承一郎「母さんが…」

華「後で聞くといいわ。それじゃーね、娘をよろしく♡」

そう言つて、華さんは去つていった。

千棘「……ねえ、何を話してたの？あんたのお母さんの話？」

承一郎「……ああ、いい事を聞けたよ」

その後、集から一本の電話が入った。どうやら僕と千棘さんがホテルのスイートルームで一夜を過大人の階段を登ったごしたと勘違いしていたらしく、二人で何をしていたのか問い詰められた。

誤解は解けたものの、散々なクリスマスだった。

キング・クリムゾン!!?

クリスマスパーティー会場——

承一郎「……ふう、疲れた……」

小咲「お疲れ様、一条君。千棘ちゃんのお母さんの会社で働いてたんだよね？」

承一郎「ああ、あの人スベックが人外だよ。ありや秘書が何人も倒れるのも頷ける……」

小咲「あはは、大げさだよ」

承一郎「いや、あながち間違いではないよきつと。……ちよつと、トイレ行つて来るね」

僕はゆつくりとパーティー会場を後にした。

小咲（……あれ？トイレは反対側だったけど……）

店の外——

承一郎「……ここでもいいか」

僕は店を出て、裏側にいた。華さんからもらった母のテープの内容を聞くためだ。

承一郎「iDROIDは……あった、テープを……」

僕はiDROIDにテープを入れて、カチツ！と再生ボタンを押した。

理那『——承一郎、聴いているかしら？』

テープが入り、音声 flowed 流れた……。

『承一郎、聞いているかしら？このテープを聞いてるといふ事は、もう私がこの世にいないのでしょう。ごめんなさい、あなたと一緒にいられなくて。』

あなたと一緒にいるっていう約束を守れない事が、私にとって一番辛い事だった。これからあなたの成長を見守りたかった。でも私にはそれすらも許されなかった……。

あなたはきつと、私を恨んでいるのでしょね。私だけじゃあなく、この世界も。でもこれだけは信じてほしいの、私はあなたを愛しているって。

もう私の事は忘れて、新しい未来を、あなたのために生きて。それが私の、あなたへの願いよ。どうか、人としての人生を生きて』

ポロ…ポロポロ…

承一郎「…おかしいな、涙はもう枯れたハズなのにな…」ポロポロ…

僕の目から溢れ出たのは、涙だった。

承一郎（謝るのは僕の方なのに…僕はあなたが守れなかった。他の誰よりもこの僕を怪物愛してくれた母を守れなかった…）

承一郎「ううっ…！」

母は知っていたんだ。自分が死んだら、僕が復讐に走るだろうという事を。

だけど、僕の脳内に浮かぶのは過去だけだった。敵味方問わず積み上げられた骸の丘と、戦場で銃を構える自分だった。

承一郎（——でも、もう止まらない、止められない。僕がこの手を血に染めた時から、もう止まる事すら許されない。ましてや母や、今まで僕のために散っていった仲間の命を無駄にして過ごす生き方なんてまっぴらごめんだ!!？）

承一郎「…僕が、終わらせる。母の汚名を注ぎ、この腐った因縁を終わらせるツ!!」

しかし僕は見えていなかった。その近くに置いてあったガラスに——

—— 一部が深い皺で覆われ、白髪になった僕の顔が映っていた事を。

<
||
t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
||

第88話 新たな抑止力と恐るべき悪ガキ

どうしてこんな事に。それが青年の脳裏に浮かんた第一声だった。

この男は日本人ジャーナリストだ。今なお紛争が続いている地帯へ赴きその現状をカメラに収め、帰国して本にして出版する予定だった。

しかし世の中そう上手くいくわけではない。次の瞬間、閃光と爆音によって男の目の前に広がったのは破壊された建物とさつきまで話していた現地の人々が血まみれになった姿だけだ。

あまりの恐ろしさに逃げようとしたが、銃を構えた男達に囲まれて顔を袋で覆われた。そのままされるがままに車に乗せられ、気付いたらそこには銃を持った数人の屈強な男達とカメラだった。

後ろに銃の硬く冷たい感触を感じ、冷や汗が流れた。

青年（まさか、俺を使って身代金を……?）

紛争を行う反政府軍や過激派組織などの武装集団の資金はどこから集まるのか? それは身代金である。中東ではよくある事だ。

『テロリストと交渉しない』と体裁は整えているものの、秘密裏には身代金を渡して解放

させる。しかし各国政府は表向きには否定する。現在では『誘拐経済』という新しいビジネスが成立している。

自分はその人質になっているのだと青年は理解した。男の一人がある新聞が手渡される。新聞の日付は今日だ。恐らく録画した後インターネットに流して公開するつもりだろう。

現在の電子網シキネットは全世界を覆う程だ、政府も無視は出来なくなる。窓を見る限り現在の時刻は夜。どうにかして抜け出したいが数人の男達を突破して脱出する前に体中をハチの巣にされる事は間違いない。

青年の目からは涙が流れ、嗚咽を漏らした。自分で飛び出して捕まって、惨めな気持ちで国に帰るのだ。いや、無事帰国出来るかも分からないのだ。

男の一人がカメラを操作して録画ボタンを押した。後ろから突き付けられる銃の感触が一層強く感じ、背中からケツにかけて冷や汗がツ…と流れていく。

これから自分はどうなるのだろうかと横に立っている男を見ようとすが、

男は闇へ呑み込まれていった。

自分の目を疑った。自分の後ろは照明が当たっておらず、夜も相まってまさに一寸先は闇だった。その闇へ男は呑まれたのだ。

男達も異変に気付いたらしく、長々と用意された台詞を読む男以外の男がゆつくりと向かう。

その後、またも闇へ消えた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

男達はようやく悟った。自分達は襲撃されていると。男達が気付いたのも束の間、バリインツ!!?

照明のライトは割られ、闇が辺り一面を包んだ。男達は銃を振り回しながら叫ぼうとするが、次々とドサツと音を立てて崩れ落ちといく。

青年はひたすらに近くの壁にへばり付き、暗闇の中で行われる戦闘をひたすら嵐の中で電柱に張り付くように耐えていた。

突然、青年の後ろから手で口を塞がれる。

青年「つ……!」

?「落ち着け、お前を助けに来た」

その冷静でなおかつ惹きこまれるような声は、青年の心を落ち着かせた。

青年「おい、あんたの名前は……？」

？「オレか？オレは……ジョン・ドウ名も無き男だ」

ジョン・ドウ……確か、アメリカの身元不明の男性死体の事で、日本でいうところの『名無しの権兵衛』だ。

？「さあ、ここは危険だ。早く脱出を」

青年「……ありがとう」

青年は男に担がれ、闇夜の中へ消えていった。青年が日本大使館の前で発見されたのはその翌朝だった。

マザーベース、研究開発プラットフォーム——

殺人的スケジュールのクリスマスを終え、そろそろ年の終わりと始まりを感じさせる頃、僕は任務を終え久しぶりにマザーベースにいた。

スタッフ達「お帰りなさい、ボス！」

承一郎「ああ、ただいま」

敬礼するスタッフ達に労いの言葉をかけ、研究開発プラットフォームへ移動する。そろそろ例のモノが完成するらしい。

プシュツ！と音を立てて開くドアに反応して振り向く男が一人。
？「やあボス、久しぶり」

承一郎「ああ、久しぶりだなオタクン」

オタクン——もといハル・エメリツヒ博士は眼鏡を指で掛け直し、僕に近づいた。

承一郎「調子はどうだい？そろそろ完成するつて聞いてね」

オタクン「ああ、機体はもう完成したよ。後は武装を施すだけさ」

僕はオタクンと共にプラットフォームの中央にそびえ立つ、暴君龍の如き機体を見上げた。

承一郎「……圧巻だな。これが？」

オタクン「ああ、僕が造り上げた皆の矛でもあり盾でもある機体……『メタルギア
レックス
REX』さ」

メタルギア——核搭載二足歩行型戦車、『歩兵と兵器を繋ぐ歯車』の意を込められた兵器の歴史は冷戦にまで遡る。

かつてあるソ連の科学者が発案したものなのだが、当時の学会には否定されたらしく、実機が造られる事はなかった。しかしそれをアメリカが一人の科学者によって造らせたものだ。

その男の名前はヒューイ・エメリツヒ。そう、今この場にいるオタクンの実の父親

だった。聞けばオタコンの祖父はあのマンハッタン計画に参加していたらしい。そしてその影響からか父は足が不自由だったようだ。

そして今その息子がメタルギアを造っている。皮肉としか言いようがないが、この機体は確実に近い将来に起こる『愛国者達』との戦いには必要になる。

オタコン「機体は有人型だ。主砲はレールガン、他には追尾ミサイルに自由電子レーザー、色々あるよ」

そう言うオタコンの顔はボサボサだ。美形なんだからもう少し気を使えばいいのに。

承一郎「いいのかオタコン。君、科学が悪用されるのを嫌っていたハズだろう。僕達が正しく使うか分からない、そもそもメタルギアの開発は強制ではなかったし……」

オタコン「君なら問題ないよ、ボス。君はそんな事しないよ、僕が保証するさ」

承一郎「そんな事言われてもな……」

オタコン「それに、僕達には必要だろう？ 対『愛国者達』用にはさ」

承一郎「……確かに、僕達には『抑止力』がいる。外敵を寄せ付けない力がね」

正直、このメタルギアを造り上げるには途方も無い苦労ばかりだった。特にパーツや資金。

『水晶の牙』はPMIC組織としてはなかなか大きくなってきたが所詮有志の集まり（ほ

とんどは僕がフルトン回収装置で無理矢理連れて来たが）だ。資金のやり繰りは必死

だった。

さらにメタルギアの装甲は他のメタルギアに対抗するために出来るだけ高性能にする必要があつた。そのためにひたすらメタルギア狩りをしてきた（ついでに反メタルギア財団も設立した）のは懐かしい。

REXの装甲は今まで僕が破壊してきたメタルギアのジャンクパーツの集まりつてわけだ。このメタルギアは僕の努力の集大成でもある。

承一郎「やり遂げよう、オタコン。この『REX』で、『愛国者達』を打ち破つて見せよう」

オタコン「ああ、僕も出来る限りの事をするよ」

承一郎「ありがとう、それじゃあ僕は行くよ。カズが話があるんだつて」

司令プラットフォーム——

承一郎「遅くなってごめん、REXの様子を見てきてね。はいコレ、皆へのお土産」
僕は任務前に買った小野寺君の家の和菓子を渡した。スタッフ達からの評判もいい。
『ブラッド・アイ・シールド血』の影』は長期保存に向いているな。

カズ「おつ、悪いなボス。席についてくれ」

僕は席について『クリスタル・ファンク水晶の牙』の現在の資料を見た。

現在、『水晶の牙』はダミー会社を通して五つのPMC組織を束ねるマザーカンパニーとして君臨している。さすがカズとオセロットだ。あの経営手腕には何度も助けられた。

組織は今のところ問題はない。問題は、カズが『TOKYO通信』で調べてきたある情報だ。

アメリカに本社を構える世界的な軍事兵器開発会社『アームズテック』、通称『AT社』が新たに技術開発を試みているというシステムだ。

その名も『愛^{Sons}国^{Of}者^{The}達^{Patriciots}の息子』、通称『SOP』システムだ。

もはや完全に『愛^組国^織者^達』を隠す気がないように思えるが、『愛国者達』の実態を知らない人間が大多数だし、軍用ナノマシンを体に入れている者は自動的に『らりるれろ』に変換されるから秘匿性は高いのだろう。

だが重要なのはそのシステムの内容だ。ナノマシンによる彼らの感情などといった精神状態を監視・制御するというものらしい。

一年半前くらいには世界中の銃火器にID登録を施し、その所有者として登録された人物のナノマシンが反応したときにしかそれらを使用出来ないようなシステムも導入されたが、このSOPはそれとは比較出来ない程強大なものだ。

このシステムが完成したとしたら『戦場の制御』という大変な事態が起こってしまう。

今は試験段階らしいが、なんとかして対策を練らなくてはならない。

承一郎「オセロット、君はどう思う？」

オセロット「ついに奴らが目的を実現出来る段階に突入したと解釈してもいいでしょう。すでにID登録がされる前の銃火器は集められ、保管されてあります」

カズ「だが試験段階にあるのがまだ救いだな。ナオミにも意見を聞いておこう」

承一郎「ナオミか……懐かしいな、アメリカで遺伝子工学を研究していると聞いたが……カズ「ああ、彼女は今ナノマシンの研究者としてその『ATGC社』で活躍している」

承一郎「へえ、アメリカの大手バイオ技術開発企業か！こりゃあ大出世じゃあないか！」

オセロット「ええ、ですが彼女が今こうして過ごしているのはボス、あなたのお陰ですよ」

承一郎「僕はチャンスを与えただけだよ。今の彼女があるのは自分の力さ。それに、彼女を救ったのはフランクだろう」

フランク・イエーガー、ナオミの義兄であり命の恩人。紛争の中で彼女の両親は殺され、フランクが彼女の義兄妹になったのだ。

ちなみにナオミと仲がいいオタクコンにめちやくちやガンを飛ばしているあたりシスコンというか過保護というか……。

承一郎「そういえば、これも今度オオミに見せて欲しいんだ」スツ……
オセロツト「それは？」

承一郎「僕のDNAさ。ちよつと気になる事があつてね」

カズ「気になる事？」

承一郎「…体の再生速度が遅くなっている」

オセロツト「……！」

カズ「再生速度？」

承一郎「ああ、それだけじゃあない。体が少しだけ鈍いんだ」

カズ「鈍い？ どういう事だ？」

承一郎「分からない……中学の頃はこんな事はなかったんだが……とりあえず彼女に調べてさせてくれ」

カズ「了解した、至急届けよう」

承一郎「ありがとう。それじゃあそろそろ行くよ」

オセロツト「今日は何か？」

承一郎「いや、千棘さんの定期デートなんだ」

カズ「へえ、ホントに『ニセモノ』なのか？」

承一郎「……何が言いたいんだ。じゃあ、また連絡するよ」

キング・クリムゾン!!?

? 「待てッ!」

後ろから呼びかける声を僕は無視してそのまま歩くと、

? 「おい、待てよッ!」

承一郎「なんだイーライ、なんか用か? つて、デイビッドもいるじゃあないか」

マザーベースでは悪ガキで有名な少年、イーライとその弟であるデイビッドが後ろにいた。

イーライ「勝負しろ! 今度こそあんたを超えてやる!」

金髪碧眼のイーライが声高々と僕に指を向け、

デイビッド「オレはこいつに誘われただけが: 理由は同じだ」

茶金髪の子は大人し気な声で言った。温度差あり過ぎるだろこの兄弟。

承一郎「そんなのオセロットとやればいいだろう」

イーライ「あいつはなんか: 嫌いだ!」

デイビッド「右に同じく」

なんとまあひどい言われようだが、確かにオセロットは子供に厳しい。僕を鍛えるための訓練でも容赦なく殴ったり投げたり、さらには関節を何回も外していたからな…。さらには拷問フェチときている。うん、嫌われるな確かに。

そういえばカズもいつもはフランクだが『鬼教官』とか言われているし…。

イーライ「行くぞ兄弟ツ!!？」

デイビッド「倒すツ…!!？」

いつもはケンカばかりしているデコボコ兄弟だが、コンビネーションはピカイチだ。しかも二人共すでにスタツフ達を圧倒する程の身体能力を有しているのだ。

僕はまずイーライの左ストレートを掴み、そのまま背負い投げで倒す。

イーライ「うつ!!？」

そして逆サイドから襲いかかろうとするデイビッドの蹴りを躲し、その腹へパンチを叩き込む。

デイビッド「ぐっ…!」

承一郎「いい動きだ、さすがオセロツトにみっちりCQCを仕込まれているだけはある。いいセンスだ」

デイビッド「うつ…欲しいのはお世辞じゃあない、勝利だ!」

イーライ「そうだ…まだだ、まだ終わっていない!」

二人共ゆつくりと立ち上がって拳を構え、今度は同時に襲いかかる。僕はそれを片手ずつで捌く。

承一郎「君達はもう自分でなんとかしていけるハズだ。だけどなんでここにいるんだ

「？」

イーライ「うるさいっ、ここに連れて来たっ、あんたが言うかつ！」

デイビッド「オレ達につ、生き方を教えたのはっ、あんただろっ!!?」

承一郎「血氣盛んなのはいいが、足元もちゃんと確認しないと転ぶぞ。こんな風にね」
ガッ!

僕は足元がお留守のイーライとデイビッドに足払いをかけた。

イーライ・デイビッド「うわっ!!?」

ドテッ!!?

案の定攻撃に集中していた二人は足払いで重なって倒れた。

イーライ「痛つてくく……」

デイビッド「くそっ……」

承一郎「そうやって強さばかり求めていたら、足元の大切なものを取りこぼすぞ。……まあ、とつくのとうに取りこぼしている僕が言うのもなんだけどね」

イーライ・デイビッド「……」

承一郎「君達には才能がある。それを大切なものを守るために使え。僕は戦う事ではなく自分を表現出来なかった馬鹿だが、それでも自分の意思で戦ってきた。その力は殺すためにあるんじゃない、活かすために使え」

イーライ「くくくくッ、子供扱いするなっ！」チャ!

イーライはおもむろにナイフを取り出した。

承一郎「おいイーライ、そのナイフをしまえ」

イーライ「オレは…あんたを、超えるんだッ！」

ナイフを突き出してくるイーライを、僕はまずナイフを持つている手を捻り上げてナイフを落とさせ、そこから足払いをかけて倒す。

イーライ「くっ…！」

承一郎「そろそろ行くぞ、次は『波紋』の呼吸でも覚えてくるんだね」

僕はそう言つて空間をくぐり帰つた。

後にイーライ とデイビットがマジで『波紋』の呼吸を習得するのはまた別の話だ。

<|| t o b e c o n t i n u e d ||

第89話 お酒は大人になつてから

新年、千棘さんがウチに挨拶に来るといふのでついでにメシを食べて行く事になつた。承太郎さんは徐倫さんに会いに行き、ジヨルノ兄さんは彼女トリツシユさんと過ごすためにイタリアへ里帰りしていた（まあ兄さんは日本生まれだけど）。

ピンポーン！

竜「坊つちやあくん、お客さんですぜ〜！」

承一郎「ああ、わかつた」

僕は階段を下りながら竜の声に応えた。

承一郎「（やれやれ、わざわざ挨拶なんてしなくても…）やあ、おはようちと…」

僕が関のドアを開けると、

千棘「明けまして！おめでどうございま〜す!!？」

いつもの皆が着物を着て待っていた。

集「おーつすジヨジヨ〜！あつけおめ〜す！」

万里花「明けましておめでどうございます承一郎様〜！」

小咲「今年もよろしくね一条君」

承一郎「な、な、な……なんで皆まで一緒に……」

千棘「フツフツフ、どう？ピツクリしたでしょう。皆と連絡取り合ってたらいっその事皆で行こうかなって思つて。なんならそのまま初詣にも行つちやおうかつて」

承一郎「おいおい……そんな事言つたつて皆の分の飯なんて……」

竜「坊つちゃん!!？嬢ちゃんから連絡頂いてお料理人数分出来てまさあ!!？」

承一郎「おいおいおいおい、君もグルか」

千棘「おつじやま〜♪」

承一郎「おいおいおいおい」

千棘さんが家に入るのに続いて皆も入ってくる。

集「……いやあ〜、うらやましいですなあ〜ジョジョは。新年早々こんな美女軍団が自分の部屋に来てくれるなんて♡」

承一郎「……いきなり来られても困るつての」

万里花「……ところで承一郎様は普段はどのような和服でお過ごしで？」

承一郎「……なんだそのメモは。よだれ垂らしてるぞ」

そして僕の視線は小野寺君に無意識に向かつていた。

承一郎「！」

小咲「……変じゃあ……ないかな」

承一郎「……変じゃあない。全つつ然変じゃあない！」

大晦日で見えた巫女服に勝るとも劣らない新鮮な感じだ。いつも綺麗だけどより洗練された美しさだった。

あの巫女さん姿で抱きしめられたら誰だつてオチる。まああの時の感触は除夜の鐘でブツ叩かれて記憶が飛んでしまったんだけどね……悲しい。

千棘「…お邪魔しまゝす！」

——まあ確かに、突然の事にビックリしたけど、集の言う通り、正月早々自分の部屋にこんなな女子が来てるなんてかなり幸せな事だよなあ……。

千棘「ねえねえダーリン、何か甘い物とかつてないの？デザートとかさあ……」

皆が一通り食事を終えた後に千棘さんはそう言った。

承一郎「…君、ホントよく食べるね」

そう言いつつも、僕は台所で探す。

承一郎「(やれやれ…) かしウチに甘い物なんてあつたかな…」

そういえば和菓子苦手らしいからね、特にどら焼き。

承一郎「ん？チョコプレートか、これでいいかな」

僕は見つけたチョコプレートをキッチンから皆のいる部屋まで持って来た。

承一郎「ほらハニー、持って来たよ」

千棘「わーい、ありがとう」

千棘さん達はチョコを食べながらかるた大会を開始した。ほのぼのし過ぎてなんだか眠くなってきたな…。

承一郎（やれやれ、平和なこつて…）

彼女達がかかるたを楽しむのを見ながらうたた寝をしていたが…

? 「…ヒツク」

謎の音で目が覚めた。

承一郎（?…なんだ今の音は…）

目が覚め、視界がクリアになると千棘さんが僕の隣に座っていた。

承一郎「…あれ? どうしたハニー? 皆とかるたやるんじやあ…」

千棘「…ねえダーリン、あんた女の子とキスした事ってある?」

承一郎「…は? な? なんだいきなり…いやそりやあないけど…。ていうかコレ前にも一度答えたじやあ…」

千棘「…じゃあさ…あたしと、キスしてみる?」

承一郎「は…はあああー!!?? ななな何言ってるんだ君…!!? 何わけがわからない事を…ん?」

さつきから要点が掴めない話に驚いて彼女の顔を見るが、
トロン：

千棘さんの顔はなぜか赤くなって微睡んでいるような目だった。

千棘「えへへへへへへへへへへ」グラん：グラん：

彼女はなぜか笑つて体を左右に揺らしている。

承一郎「：☒？お：おい、どうしたんだい？なんか顔赤いんじゃないやあ：ん？これ：さつき
のチョココ：ウイスキーボンボン：？」

僕が落ちていたウイスキーボンボンとその包紙を手にする。

承一郎「ま：まさか：：君コレ食べて酔ったのかい：？そんなアホな：」

。。。。
バカな、チョコレートの中に入つてだけの量で酔うなんて、どれだけ酒に弱いんだ

千棘「えくく？あんたその歳でキスもまだなのく？ダツサク（笑）じゃあさく、私が
してあげてもいいわよ？ねえしよ？しなさい？」

承一郎「うおおおおッ、落ちて着いて千棘さん！！？もう言つてる事別人みたいになつて
るぞ：！！？」

千棘「ねえくお願いく」

承一郎「ダメだつて：！」

千棘「しよるよる」

承一郎「絶対ダメ…!!?」

千棘「ねー」

承一郎「ダメだったらダメー!!?」

千棘「…だってあんた万里花とはしたじやん!!?!」

承一郎（え…え…え…!!??）

千棘さんは急に泣き出した！何これ、千棘さんって泣き上戸!!?」

集「おいジョジョどうしたのさつきから」

承一郎「おお集！いいところに…！それが…『キング・クリムゾン!!?』で…」

ちよつと待て、今時が吹き飛ばされたような気が…。

集「へ？ウイスキーボンボンで？どんだけお酒弱いのか桐崎さん」

なんで分かったんだ？君、通訳とか向いてるよ、きつと。

集「…ふむむしかし…お酒に弱い女の子ってなんかいいよね、カワイイ!!?」

承一郎「…こんな時に何バカな事…」

？「…なぐんを、言いよつとばい!!☆」バアン!!?」

突如現れた女子のツツコミが集に直撃、集が吹っ飛ばされた！

グオングオン、ドガアアアアン!!?」

…この手錠と鎖、もしかして……。

万里花「フ：フフフフ……」

承一郎「うわー！集ー！！？たつ：橘さん……！！？」

スタンド込みでやったのか！？なんて危険極まりない……！

万里花「あー！つくくんがおるばい。つくくんつくん」

承一郎「た：橘さん……！まま……まさか君まで……☒」

万里花「つくくんつくくんアイライク^{like}♥なくんば言いよったりして☆」

承一郎「（絶句）」

万里花「ブプー！！？」

承一郎「いや何も面白い事言っていないけど！！？」

橘さんは笑い上戸かよ！これはこれでカオスだな！

万里花「ほくら舞子さんギブと？ギブしよと？ギブせんばそのメガネカチ割つとよ

？はいワーン、ツー」ギギギギギ……

橘さんは倒れた集に追い打ちと言わんばかりにプロレス技をかけた。集の口からは泡がブクブクと出ている。

承一郎「わくく！！？橘さんストアップ！！？そいつも落ちてるから！！？」

やめてあげて橘さん！集のライフはもうゼロだ！

承一郎「(マ……マズい……！なんか思った以上に大変な事になってる……!!?)」「……一条承一郎」ん？」

承一郎「ああ、鵜さんか……！良かった……！君は無事だったんだね……！」

鵜「………ん？ああ……もちろんだ……」

ガシツ!!?

鵜さんは唐突に僕の顔を両手で掴んだ。

承一郎「へ？あ、あの……？鵜さん……何を……？」

鵜「………ん……？……お前の唇柔らかそうだと思つて……」

ダメだ!!?全然大丈夫じゃあなさそうだ!!?

承一郎「つ……鵜さん……！何をするつもり……」

鵜「ん？何つて……ただの接吻を……」

承一郎「ただのつて!!?というか接吻で……おいマジか!!?待て待て待て……おい鵜さん……！うおおおとおおおッ……!!?」

ヤバイ、鵜さんの唇がツ！ちよ、マジで近すぎるッ！

ジヨニイ『やれやれ……緊急脱出！「ブラッディ・シャドウ」ッ!!?』

鵜「ん……思つたより固い……」

ジヨニイの機転によつて僕は脱出、鵜さんは奥の狸の置物にキスをした。あ……危な

かつた〜〜!!?

るり「…大変そうね一条君」

承一郎「へ? おお宮本さん! やっぱり君は平気だったのかい」

るり「ええもちろん、でも日本は今大変な事になつてるのよ?」

承一郎「…は?」

るり「溜まりに溜まつた国債も限界にきているわ。雇用の減少に回復の兆しは未だ見えないし、深刻な少子化の影響も様々な形になつて世に顕れてる。政治は税率を上げる事ばかり考えているしその上…」ペラペラペラ

承一郎「あ…ああダメだ!!? やっぱり宮本さんもダメだったー!!? ハツ…! そういえば小野寺君は…小野寺君はどうなつたんだ…!!?」

? 「あー! 一条君だー」

声のする方を振り向くと、そこには小野寺君が座つていた。なんだかフワフワするよ
うな、奇妙な雰囲気醸し出していた。

小咲「わ〜い、一条君だ〜」

承一郎「あ…ああ、小野寺君…大丈夫かい…? (大丈夫じゃあなさそうだが…)」

小咲「う〜ん、なんかね〜、すつごくフワフワして気持ちの…」

承一郎「ちよ…ちよつと待つててくれ、今皆に冷たい水を…!」

小咲「うーん、でもこの部屋すごく暑いんだ」

承一郎「は!?」

ぬぎっ!!?

小野寺君は突如着物に手をかけて、胸をはだけさせようとする!

承一郎「!!??」ブツ!!??

シユル…

ま、マズイ!これでは…み、見えてしまうツ!

承一郎「わーわー!!?何やってるんだ小野寺君、ストップストロップ!!?」

小咲「へ?何って?あれ?うー?」グイ…グイ…

しかし、小野寺君の着物はそれ以上はだけない。よかつたと言うべきか残念と言うべきか…。

小咲「…一条君、これほどいて?」

承一郎「ノオオオオオ!!?」

小咲「だつて暑いんだもん…ねえ…脱がして?」

承一郎「だだだダメだつてば…!!?ほら今エアコン切った!!?切ったからあ…!!?」

小咲「ぶ…ケチ…あ♡…一条君でさ…お肌キレイだよね、女の子みたい」のしっ…

小野寺君は言うや否や僕の体を倒してその上に乗った。バカな、僕がマウントを取ら
 れているだと……!??

承一郎「ヒエツ!!??」

小咲「いいなうらやましいな。あ、でもガツシリしてるね」つつつ…

小野寺君は僕の体へ指を這わせ、ゆっくりと下へ下ろしていく。

承一郎「ひいつ!!??やめっ…!」

小咲「髪も…ツヤツヤで柔らかくて…もつと…触らせて…?」クシャ…

今度は僕の髪を…ダメだ、これ以上は僕の中にある決定的な何か^{ウイジョン}が切れてしまうツ!

承一郎(ダメだ!!?手に負えない…!!?これ以上ここにいたらダメだ…!!?!一時

避難をツ…!!?!)

ガツンツ!

承一郎「痛つ…!何だ、まるで空中に壁があるような感じが…!」

僕は小野寺君をチラツツと見てみると、小野寺君の後ろに像が…やはり、小野寺君は…

!

ガシツ!!?!

承一郎「ヒイ!!??」

肩を掴まれ、振り向くと千棘さんが。

千棘「ねえ……ちよつと聞いてもいい……？」

承一郎「……は☒え……ち……千棘さん……☒」

千棘「私の事、好き……？」

承一郎「はあ!!??」

千棘「ねえ、どうなの？好きなの？嫌いななの？どっちよ？」

承一郎「……そんな事言われても……あ……すつ……好きだよ！もちろん！ほら……恋人としてね……？」

千棘「そういう好きを聞いてんじやあない!!？」くわつ！

承一郎「え……!!??」

千棘「だからあ……こうく男と女の好きって言うかあ……。あんた私の恋人でしよ……？恋人なんだつたら……私の事好きって言いなさいよバカア!!?!」

承一郎「さつき言いましたけどお!!??」

もうやだよお、彼女達怖すぎるよお！

ジヨニイ『お前、なぜ気づかないんだ……』

千棘「好きって……ちゃんと好きって……言わないとお……メチャクチャにする」

承一郎「え……!!??」

万里花「え……？なんばすつとね……？私もやつよ……」

鵜「私も…やる…」

小咲「するー、するー」

千棘さんの言葉に呼応するように小野寺君達もゆつくりと僕に近づいてくる！
ちよつと待て、ナニをするつもりなんだ!!?

承一郎「ヒィ〜〜!!??ちよつ…ちよつと待て君達…!!?待て！落ち着いて話し合おう!!?後生だから見逃して…」

ジョニー『やれやれ…もう一度か。ブラッディ…「つぐみ!!?!」何イツ!!??』

ジョニーがスタンド能力を使って脱出を試みるも、鵜さんが『ザ・グレート・エスケープ』の分身体で、橘さんが手錠で僕の体を拘束する！

承一郎「HA☆NA☆SE!待ってくれ…!!?何する気だい!!??お願いだから止めてくれ!!?頼む助けて…!助け…」

承一郎「僕のそばに近寄るなああー…!ツ!!?!」

その後、僕の意識はまるでロウソクの火のように掻き消えた…。

キング・クリムゾン!!?

次に僕が目を覚ましたのは夕方頃だった。

承一郎「ん…う〜ん…?…あれっ…?なんだ…?僕はなんで寝てたんだ…?今日
は…突然皆が来て…それから…」

僕は目を擦りながら考えるが……

承一郎「何も思い出せない……。なにかものすごい怖い夢を見たような……。まあいいや、なんか頭痛いしもう少し寝よう……」

千棘「……今日は何も起きなかつた……。そうよね皆？」

三人「うん……」

第90話 因縁はいつも突然にその①

テキサス州ダラス、スピードワゴン財団本部——

承太郎「どうだ、結果は」

研究員「今検査中ですが……信じられません。こんな神を恐れぬ冒涇を、平然と行うなんて……」

ジョセフ「ワシだってそうじゃよ。彼は人間じゃ、ここにいる誰もが知っている」
ウィーン！

承一郎「ですが、それが『愛国者達』なんです。目的のために手段を選ばない」

少年——一条承一郎は検査を終え扉の向こうから入ってきた。

徐倫「承一郎……」

承一郎「お久しぶりです、ジョセフさん、徐倫さん。それで、どうなんですか？」

研究員「はい、今結果が出ました。……承太郎博士が1987年に採取していたD I Oの細胞と承一郎さんの細胞のDNA鑑定をかけたところ……確定です、二人はほぼ同一人物です！」

承一郎「……」

承太郎「…やれやれ、まさかクローン複製とはな。ゲスな奴らがやりそうな事だ」

徐倫「だけど、D I O って確か父さんが倒して太陽の光を浴びて…」

ジョセフ「ああ、もう消滅しておる。しておった、ハズなのじゃ…」

承太郎「だがありえない話じゃあない。徐倫、お前が見た『緑色の赤ん坊』、確か『骨』が成長したものらしいな」

徐倫「え、ええ。何人もの囚人達を植物に変えて…生まれ…たのよ」

承一郎「つまり承太郎さんがD I O を倒すより前に『愛国者達』がD I O に接触していたという可能性も否めないと…?」

承太郎「そういう事だ」

ジョセフ「…終わらせたハズじゃった。25年前のあの時、D I O を倒した時に因縁は終わったハズじゃった。なのに、その因縁はどこまでも…」

承一郎「まるで呪いのように、ですか?」

ジョセフ「承一郎君…」

承一郎「僕は吸血鬼D I O じゃあない、一条承一郎という人間です。誰かに造られたかなんてどうだっていい、それだけ分かれば十分です」

ジョセフ「じゃが…」

承一郎「それと、この事は僕達だけの秘密事項でお願いします。彼女達には…僕から

言います。いずれ話さなければならぬ事ですので…

ビーツ！ビーツ！

S P W 財団職員『た、大変です空条博士！S P W 財団メキシコ支部の電力供給がストップしました！』

承太郎「何？！早く予備電力に切り替える！」

S P W 財団職員『それが、予備の方もダメになっています。恐らく、これはスタンド使いのしゅう…があああああああッ！！？！』

承太郎「おいッ、応答しろ！…ダメだ、通信が途切れた」

ジョセフ「どうしたんじや？」

承太郎「メキシコ支部が襲撃に遭っている。電力を全てシャットダウンされているらしい」

徐倫「なんですって？！？」

ジョセフ「マズイのお…あそこには、電力を止めてはならないものがあるんじやが…」
承一郎「止めてはならないもの…？」

ジョセフ『『柱の男』…吸血鬼を創り出す『石仮面』を創造した種族、その最後の生き残りの残骸じゃ…』

徐倫「なんですって？！？」

ジョセフ「50年前、ワシがやつとの思いで太陽の光を浴びせたんじゃが…あれはまだ石化してもなお生きておる。今まで紫外線を浴びせて封じこめておいてたのじゃが…」

承一郎「まさか、『愛国者達』はその情報を入手していた…?」

ジョセフ「恐らくその可能性が高いじゃろう」

承太郎「このままだと、吸血鬼より厄介な奴を野放しになるっていう事か…やれやれだぜ」

徐倫「しかも、このテキサスからメキシコまで、かなりの距離!間に合わない!」

ジョニイ「:『ブラッディ・シャドウ』ツ!」ズギユンツ!

承太郎「承一郎:いや、もう一人の人格か」

ジョニイ「ジョセフさん、あなたの『ハーミット・パープル』をオレの頭を乗せてくれ」

ジョセフ「ああ、構わんよ」ズギユンツ!

ジョニイ「オレのスタンド、『ブラッディ・シャドウ』は自分が一度赴いた場所にしか移動出来ない。だがジョセフさん、あんたは一度行っているんだらう?」

ジョセフ「そうじゃ、ワシは一度石化したサンタナを確認するためにメキシコ支部へ行ったわい」

ジョニイ「なら話は早い。あんたの『ハーミット・パープル』でオレの頭にメキシコ支部を念写しろ！それなら行けるハズだ！」

ジョセフ「なるほど、理解したぞ！」

ジョニイ「皆も掴まれ、全員を飛ばす！今だ、空間を超越しろオツ！」

ズギユウウウー——————
ンツ!!?

影が皆を包み、空間を越えていった。

キング・クリムゾン!!?

SPW財団メキシコ支部——

ジョニイ「どうやら内部に潜入出来たようだな」

ジョセフ「便利な能力じゃのう。どうやらここは入口付近、サンタナはここから最も

下の安置室に保管されておる。紫外線を浴びての」

承一郎「ジョセフさん、波紋の呼吸を。職員達の姿が見えない…生存していたら保護しなければ」

承太郎「血痕が辺りに飛び散っている…注意深く観察して行動するんだ」

承一郎「カバー！」

四人は壁際に沿うように移動する。

上がる。

承一郎「このスタンド能力：恐竜化して『支配下』におく事が出来るのかッ！」ドバ
ドバッ！

死体から姿を変えた恐竜達は骨爪弾をなんなく避けるが、
ガッ！

恐竜達「ギャア！」「グエツ？」

他の変身しかけの研究員達の死体にぶつかり転んだ。

承一郎（何だ？あの骨爪弾を余裕で避けきるほど圧倒的な『動体視力』を持ちながら、
動いていないものは見えないほど視力が低いのか？）

承太郎「…どうやら凄まじい『動体視力』の割には『視力』は低いようだな」
「どうやら承太郎も承一郎と同じ事を考えていたらしい。」

ジョセフ「しかしこのスタンド能力：厄介じやのう、また来るぞ！」

今度の恐竜達の数は4匹。しかも一匹を前と左右で護衛するように向かつて来る。

恐竜達「ウシヤアアアアー……ッ」

承太郎「こいつら…：隊列だとツ!?!？」

そして恐竜達は承一郎を集中して襲いかかるツ！

承一郎「来るかッ、『クリスタル・ボーン』ツ!!?！」

襲った恐竜だけが見切り避けた。

ジョセフ「どうやらこの恐竜が本体のようじゃな。こいつだけスタンドが見えておる。波紋疾走！」バリバリイッ！

ジョセフが捉えた恐竜達を波紋で倒すも、まだ後ろからも恐竜達がゆつくりと近づいてくる。

恐竜？「ギャウウ……」スタスタ……

承太郎「野郎、このまま奥へ逃げるつもりだ」

徐倫「マズイわね、まだ後ろから研究員達の死体が変わりかかってくるわ！」

承一郎「確かにヤバイ……この恐竜化の能力、あの本体の爪で傷付けられると恐竜化が感染するみたいです……それはどんな生物も例外じゃあない……」ピシッ、ピシッ！

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承一郎の体からは、先程の研究員達の死体のように輝が入り、頬が裂け始めていた！
徐倫「じよ、承一郎……？」

承一郎「奴が一回こっちにやって来たのはこれが理由だったのか……！僕を恐竜化させて、承太郎さん達と同士討ちさせて時間稼ぎをするために……！」ピシッ、ピシッ！

ジョセフ「これはいかんのお……このままじゃと全滅の恐れもある」

承一郎「承太郎さん達は……先に行つて下さい。ここの恐竜達は僕が相手をします」

恐竜「ギャウウツ！」

承一郎「ペツ、恐竜の味には興味があつたけど、元に戻つてしまうのか…さて、死にたい奴から前に来な！さっさと終わらせて、承太郎さん達と合流しないといけないんでね」

死体から変身した恐竜達へ承一郎は食らつた恐竜の肉片を吐き出しながら言った。

そして一方、地下へと急ぐ承太郎達には、

徐倫「こいつは…ッ!!？」

？「ここから先は通行止めだ。この線から奥に行きたいのなら…」

——オレを倒すんだな」ボウツ！

男——サムエル・ホドリゲスが愛刀『ムラサマ』を構え、承太郎達の前を立ち塞がった。

承太郎「やれやれ、剣使いにはいい記憶がないんだがな……」

< || t o b e c o n t i n u e d ||

第91話 因縁はいつも突然にその②

（徐倫 side）

私達は承一郎に恐竜達を足止めしてもらい、その恐竜の本体を追うように地下へ向かう。

ビシイッ！ヒュンッ！

父さんの『スタープラチナ』が撃ち込んだライフル弾も回避された。なんていう感覚を持つているの！

承太郎「焦るな徐倫、焦れば奴の思うツボだ」

ジョセフ「あやつのは戦闘スタイルは明らかにカウンターじゃな。あの恐竜の感覚で攻撃を躲して反撃を加える、なかなか厄介じゃの」

徐倫「でもこのままじゃあサンタナが奪われてしまう、それは阻止しなければ！それに、承一郎の恐竜化も解かないと……」

承太郎「分かってる、だから奴を倒す策を練る必要がある。奴は動体視力の代わりに視力は低い、それを使って叩くしかない」

ジョセフ「じゃがちと距離があるのお……承太郎、お前さんのスタンドでいけるかの？」

承太郎「私の『スタープラチナ』は現在5秒時を止める事が出来るが、ここからだ
距離があるから完全に再起不能にするのは難しい。しかも奴は恐竜の身体能力を持
っている、もちろん体力もだろう」

ジョセフ「なるほど、厄介極まりないのお…」

私達がそのまま恐竜の本体を追っていると、突然本体が人の姿に戻った。自身への変
身を解除した!!?

ジョセフ「ッ!!?あの姿はッ!!?」

承太郎「野郎、まさかッ!!?」

そのまま男は後ろを振り向く。その男の顔は一度見た事がある、でもウソでしょ!!?

その顔は父さんのDISCで見た顔ッ!!?

承太郎「DIOッ!!?」

やっぱりあの顔はジョースター家の宿敵、DIO!でもDIOの能力は『世界』、時
を止めるスタンドじゃあなかったの!!?

承太郎「待ちやがれッ!!?」ズギユンッ!!?

父さんはスタンドを出してそのままDIO(?)に攻撃しようとするけど、

?「あらよつと!」ポオツ!

突如現れた男が振るう炎を纏った剣が父さんを阻んだ。あれは、カタナつていう日本

の剣ね？

「ここから先は通行止めだ。この線から奥に行きたいのなら……—オレを倒すんだな」ボウツ！

男は刀を構えて私達の前に立ち塞がった。

承太郎「やれやれ、剣使いにはいい記憶がないんだがな……」

DIO? 「フン、じゃあ足止め頼むぞ。ジェットストリーム・サム」

サム「ああ、オレはこうしている方が性に合ってる。それより頼むぞ、アレの奪取に失敗したらオレが始末書書かされるんだぜ？」

DIO? 「……まあいい、ならしつかりこいつらの侵入を阻止しろよ。お前の望んでい
る奴もどうせ我がスケアリー・モンスター恐竜達を退けて向かって来るハズだからな」

サム「……へえ、そいつあいい。じゃあお前達、別に恨みはねーがここから先は一步も
行かせんぞ」

承太郎「そう言われてハイそーですかと引き下がるわけにはいかないんでな、再起不
能にさせてもらう」ズギユンツ！

サム「はっ……面白い。やれるもんならやってみな」チャキ……

父さんの『スタープラチナ』が拳を構え、男——サムは刀を構えた。

ジョセフ「あの刀、どうやらスタンドじやのう。ポルナレフと承太郎が戦った『アヌ

「ビス神」と同じタイプのスタンドじゃ」

徐倫「刀のスタンドなんてあるの？」

ジョセフ「刀だけじゃないぞ、SPW財団にスカウトされたスタンド使いであるホル・ホースという男は銃のスタンドを使うんじゃないよ」

サム「…フツ！」

サムは刀を一閃させる。

スタープラチナ

SP 『オラアツ!!?』

ギインツ！

父さんの『スタープラチナ』はその一閃を拳で防ぐ。

サム「いいねえ。どんどん上げるぞ、ついてこれるか?…セイツ！」

SP 『オラオラオラオラオラアツ!!?』

ギインギインギインギインツ!!?

さらに繰り返される連撃を父さんは防ぐ。スタンドはあくまでもあの刀だけ、それなのに父さんの連打ラッシュに追い付くなんて、なんてスピードなの！

サム「なるほど、あいつが危険視するわけだな。焼き尽くせ、『ムラサマ』！」ボウツ

！

サムが刀——『ムラサマ』の名を叫ぶと、途端に炎を纏った。父さんの顔に冷や汗が

浮かぶ。いくら父さんの『スタープラチナ』でもあの炎を纏った刀を相手にはただじゃあすまないわ!

サム「ハアツ!!?」

SP『オラオラオラオラオラオラオラアツ!!?』

ギンギンギンギンギンツ!!?

承太郎「ぐつ…!」ジユウウ…

今度も防ぎきるも、父さんの拳には火傷が!この男、強いツ!!?

サム「…お前さん、時は止めねえのか?」

承太郎「!…知っていたのか」

サム「ああ、スタンド使いの間でもあんたは有名人だ。空条承太郎、時を止める吸血鬼DIOを倒した男ってな。…出し惜しみすんなよ、そういうのは嫌いなもんでな」

承太郎「そうか…なら、存分にやらせてもらおうか。『スタープラチナ・ザ・ワールド』!」

ドスツ!ボウツ!

サムは刀を地面に突き立て、炎を辺りに放出した!

次の瞬間、

サム「ぐううっ…!!?」

サムは壁に思い切り叩きつけられ、

承太郎「っ…!!？」

父さんの腕が炎に包まれた！

承太郎「野郎、時が止まる前に自分を炎で包むとは…！」

サム「炎の壁を突っ込んでくるとやるな…だがそれまで、終わりだ」バシユツ！

サムは一度刀を鞘に納め、鞘にある引き金を引いた。何の引き金か分からないけど、何かヤバイツ！

ギユイイイイン……ツ!!？

突如サムの刀が圧倒的なスピードで飛び出す！

SP『オオツ…ラアアツ!!？』ガギイツ!!？

父さんは腕でガードをするも、

ズバアアンツ……!!？

承太郎「ぐおおおっ…!!？」ジユウウツ…！

片腕を刀で切断されて燃え尽きてしまった！

徐倫「父さんッ！『ストーン・フリー』ッ!!？」ズギユンツッ！

ジョセフ『『ハーミット・パープル』ッ！』ズギユンツッ！

ストーン・フリー

S F『オラオラオラオラオラオラオラオラオラアツ!!？』

ジウウウツ……!

サムが恐竜を斬る間に後ろから水を浴びせられた。後ろを見ると、体を鱗で覆いながらも承一郎が立っていた。その手には、さっきまでなかった刀が握られていた。

徐倫「ハア……ハア……承一郎、無事だったのね」

承一郎「すみません、遅くなりました。そして……久しぶりだな、ジェットストリーム・サム」

承一郎はそのままサムを睨む。どうやらこの二人には何か因縁があるみたいね。

サム「ほお、恐竜化が進行し続けてもなお向かって来たとはな。それに手駒まで、支配権を書き換えるとはな」

よく見ると、承一郎の後ろには体に指の大きさ程の何かで穿たれたような痕が残る恐竜達。そうか、あのD I Oと同じ細胞を持っているって事は……

承一郎「死体を操るのはお家芸なもんでね。まあ、あまり見せたくないけどさ。承太郎さん、腕は？」

承太郎「問題ない、止血はした」

そう言う父さんの切断された腕は火傷で血が流れていなかった。腕を切断された時、わざと炎に切断面の部分を炙らせたのね。

承一郎「焼灼止血ですか、さすがですね。斬られた腕は焼き尽くされたか……大丈夫で

す、経験ありますので」

承一郎は父さんの斬られた腕を触る。すると、ズズツ……!

父さんの腕から白いものがゆっくりと腕の形に変化した!これって……

承太郎「なるほど、骨で義手を……」

承一郎「後でジョルノ兄さんに治してもらうまではこれで我慢して下さいね」

サム「……面白い、成長したんじやあねえか?承一郎」

承一郎「そういうあんたは利き腕を治していたのか。音沙汰なしだったからもう裏の世界から手を引いたのかと思っただけ」

サム「バカ言ってるんじやあねえよ。オレだつて驚いたぜ、伝説の傭兵『ヴァイパー毒蛇』死亡はちと呆気なさすぎるってもんだ」

承一郎「……やはり早々にデマだと悟られていたか」

サム「いや、なかなか暴くのが困難だったって言ってたぜ」

承一郎「そんなの聞いたつてウチの副司令は悔しがるだけだろ。……やはり『愛国者達』の手下だったとはね」

サム「ああ、こつちについていれば色んな奴と戦えるだろう?」

承一郎「どこまでも戦闘狂だな……あの時もそうだったのか?」

サム「ああ、信乃あいつはなかなか強かっただけに残念だったがな」

承一郎「そうか…だが、ここは通してもらうぞ」

サム「…こい、久しぶりに楽しめそうだ」チャキ…

そう言い、二人は刀を構えた。

く承一郎 side く

ジエツトストリーム・サム…あの時、僕が勝てなかった唯一の男。

今まで奴を超えるために剣術の鍛錬を積んできた…だが、果たして今の自分の力は奴に通じるのだろうか？

分からない、だから…

承一郎「全力でいかせてもらおうツ！」

『村雨』は信乃の刀だが、僕は信乃の戦い方を知っているし今までもいざという時に頼りになる相棒のようなものだ。

この刀の能力は水が迸る、ただそれだけ。だがシンプルだからこそ応用性に富んでいるんだ。

承一郎「迸れ、『村雨』ツ！」

水圧カッターを飛ばして攻撃する事が出来る。僕はそのままサムへと走る。

サム「焼き尽くせ、『ムラサマ』ツ！」ボウツ！

ジウワアアアツ……!!?

サムは『村雨』と対を成すような刀『ムラサマ』で飛ばした水圧カッターを蒸発させる。

僕は『村雨』の剣先を突き出すように構えながら走る。

承一郎（『水鉄砲は穴が小さい方が勢いよく遠くまで飛ぶ！』か…なら剣先に溜めて…！）

静さんが言っていた波紋の呼吸のアドバイスを思い浮かべ、『村雨』の剣先に水が小さい塊のように留まっている。

承一郎（それを…放つツ!!?）

ビュンツ!!? ドグオオオンツ……!!? ?

突きのタイミングに合わせて圧倒的な勢いで飛んだ勢いは、『ムラサマ』が放出していた炎をいとも容易く突き破った。

残念ながらサムには直撃しなかったが、かすった腕から

ブシューウウツ!

遅れて赤い血が舞った。

サム「なるほど、今のをまともに受けりやマズイな」

承一郎「次はその息の根を止めるツ！」

ギインギインギインツ!!?

『村雨』と『ムラサマ』の劍戟で火花が舞う。間合いを詰めての斬り合いもこうも容易く受け止めてしまうか!

徐倫「す、すごい…」

承太郎「あの二人の劍術、ポルナレフすらも超えかねないな…」

しかし、どうもおかしい。恐竜になったあの研究員…体の温かさや死後硬直からして襲われてたつた数分で恐竜に変化した。そろそろ僕も完全に恐竜化が進んでいてもいいハズ…。

あの研究員達にはあつて僕にあるものは何だ? スタンド? 呼吸法?^{液紋} 体質?^{吸血鬼} いや、スタンドの効果はどんなものも等しく発動される。なら…

承一郎「僕の体に一体化している『左腕』ツ!それがこの恐竜化を抑制しているのか!?」

僕はサムとの鏢迫り合いに持ち込まれる。

サム「ほお、さすがだな承一郎!その『遺体』に結論付けるとはな!」

承一郎『遺体』には能力の進行を抑える…いや、自分に害あるものを退ける力がある!それがあんた達の狙いかツ!

たった片腕、この部位だけでこの効果なんだ。もしこれが全て集めた者はどうなるだ

ろう？

おそらく、無敵の肉体や大金を持つ事や人の頂点に立つ事では得られない『幸福』が
もたらされるツ！D I Oの望んでいた『天国』のようにツ…！

サム「そう、その『遺体』の圧倒的な力、それがあいつの能力をさらなる高みに到達
させると思っているのさ」

承一郎「そいつのスタンド能力が『ホワイト・スネイク白蛇』——エンリコ・プッチが生き返らせたの
か！」

サム「いやちよつくら違う、生き返ったというより別の場所から来たって言う方が
合ってるな」

承一郎「なんだと…?!？」

別の場所から来ただって…?!？どういう事なんだ?!？

そんな事を思考していると、

ビシューーーーーーツ ツ?!？

突如大量のナイフが現れ、僕に向かって飛んできたツ！

承一郎「ツ?!？」

ドスウツ?!？

突然現れて向かって来たナイフに対応出来ず、全身に突き刺さってしまう。しかし骨

の鎧を纏っていたからダメージを負わずに済んだが…

承一郎「このナイフはツ…！いつ投げられたんだツ！！？」

DI O? 「やはり恐竜達を退けて来たか…忌々しいな、こつちの世界でも因縁はオレを縛り続けるか…」

ナイフが飛んできた方向、つまり地下室への入口を見ると二つの人影が見えた。

一人はDI Oに似ている、いやそっくりだ。まるで同一人物って言った方が正しい。多分恐竜の能力はこの男だろう。もう一人は資料で見たサンタナっていう『柱の男』最後の生き残りだ。

しかしツ…！

承太郎「そのスタンドはツ！まさかツ！」

承一郎「…^{ザ・ワールド}世界かツ！」

そう、DI O 似の男の後ろにはDI Oのとは少し異なって筋肉質ではないが、あの『^{ザ・ワールド}世界』がツ！

いつたい、どうなってるんだ…!!??

< || t o b e c o n t i n u e d ||

第9 2話 因縁はいつも突然にその③

承太郎「そのスタンドはツ！まさかツ！」

承一郎「…ザ・ワールド世界かツ！」

DIO? 「…チツ、この世界だとオレの二つ目THE WORLDの能力は有名になりすぎているな。面倒だ」

サム「まあ確かにな。だがそれはその承太郎に倒されたあんだ。もう一つの能力は初見じゃあ防げねえさ」

DIO? 「…フン、いいだろう。こっちもやる事は終わったからな」

ジョセフ「あやつは…サンタナツ！」

徐倫「しかもサンタナに入っているのは…DISCツ！『ホワイト・スネイク』のDISCよツ！」

約70年ぶりに目覚めた最後の『柱の男』、サンタナの頭部には円盤状の物体——『ホワイト・スネイク』のDISCがズブズブと差し込まれていた。

承一郎「まさか、サンタナをDISCで操っているのか!?？」

サンタナ「…オレ…は…サンタナ…。『愛国者達』の…メンバー…」ズブズブ…

承一郎「こ……こいつ、英語を喋っているぞッ！なんて頭脳だ！」

ジョセフ「なんていう事じゃ、あの『柱の男』を服従させる程とは……！」

サンタナ「……お前、J O J Oか。オレはあの時から何年眠っていた？」

ジョセフ「……70年以上も前じゃ、サンタナよ」

ジョセフはかつての仇敵に流れた月日を伝えた。

サンタナ「フム……老いたな。その姿、波紋がさらに強まったのを感じるがやはりお前も人間、老いには勝てないというわけか。……だが一人、ここに人間ではない者がいるな」

そう言い、サンタナは承一郎を見つめた。

承一郎「……」

サンタナ「お前か、だが妙な感じがするな。ただの吸血鬼食料というわけではないという事か」

承一郎「……穿て、『村雨』ッ！」

一点集中の水の奔流が波紋を帯び、サンタナへ襲いかかる！しかし、

ドグオオオンッ……!!?

サンタナはその部分だけ骨格を弄って回避した。

承一郎「……その体、骨格を変化出来るってのはそういう事か」

サンタナ「面白い、スタンド……流法モードに引けを取らん力だ」

承一郎「ジョセフさん、こうなったらここで奴を消し去るしかありません。ですが、生憎僕の波紋は独学なので倒しきれないと思います。だから、承太郎さんと徐倫さんはあのDIO似の男を、ジョセフさんにはサンタナを相手にしてもらえますか？僕はサムを相手にします」

徐倫「任せて、あの恐竜の能力になら対策はあるわ」

承太郎「奴の『ザ・ワールド世界』なら私の『スタープラチナ』で対応出来る、大丈夫だ」

ジョセフ「なるほどのお：ワシも今ちようど策が浮かんだところじゃ。承一郎君、君はあの男と何か因縁があるのじゃろう？なら、相手をするべきじゃよ」

承一郎「すみません：行くぞサム！」

サム「フツ：いざ、参る！」

承一郎対サム

承太郎&徐倫対DIO？

ジョセフ対サンタナ

戦闘開始ッ！

承一郎side

承一郎「それじゃあ皆さん、お願いします！」

脳内の制限リミッターを解除、世界から伝わる情報がよりクリアになる。僕はその膨大な量の情報から今の戦闘に必要な情報だけ伝わるように絞り込む。

サム「ツ!!?」（剣速が上がった!）」

承一郎「せあつ!!?」

『村雨』がサムの眼前に迫るも、サムはその一閃を防いでみせる。

サム「くっ……!」

承一郎「まだまだアツ!!?」

袈裟斬りを仕掛けてから下がる勢いを利用してそのまま右回りに回転しながらの右斬り上げ!

サム「シツ!!?」

サムはそれを防いで右側に回り斬り込む!

ギイイイインツ……!!?

そこを僕は骨剣を生成して防ぐ。

サム「強くなつたな、あの時よりもツ……!!?」

承一郎「第二ラウンドだ。さあ、死合おうか!」

く 承太郎 side

なるほど、人間は本通常出している力は本来持つ力の約2割か3割程の力でしか

い。吸血鬼は石仮面の骨針を頭に打ち込む事でその制限を外して圧倒的なパワーを得る。

だが承一郎の場合その制限解除を意図的に操作する事が出来るというわけか。やれやれ、味方としたらこれ以上に頼もしい奴はいないな。

さて、私達はこの目の前の男に集中しよう。

承太郎「：一つ聞いておく、お前の名は？」

デイエゴ（以下D i o）「：デイエゴだ。デイエゴ・ブランドー」

やれやれ、姓まで同じとはな。ますます奴に似すぎている。この世には同じ顔の人間が三人いるとは言うが、こいつの場合纏う雰囲気もあの時とそっくりだ。

D i o「：まあ、そんな事どうでもいい。お前らはオレのスピードに追いつけないし、今ここで始末されるからな」ピキピキ：

言うや否や、D i oの顔にヒビが入り口が顎まで裂ける。しかし姿は人型を保っている。なるほど、人としての姿を保ったままの状態になる事も可能なのか。

徐倫「行くわよ父さん、私に合わせて！」

承太郎「そういうえば、お前と一緒に戦うのは久しぶりだな。行け、徐倫」

徐倫「『ストーン・フリー』ッ！」

ストーン・フリー

S F 『オラオラオラオラオラオラオラアツ!!?』

徐倫「ううっ……！」ブシュッ！

そして時は動き出し、徐倫は糸が切れた反動で負傷してしまった。

SP『オラオラオラオラオラオラオラオラオラアッ!!?』

徐倫を庇うように『スタープラチナ』のラツシユで恐竜達を迎撃する。

承太郎「大丈夫か、徐倫」

徐倫「ええ、大丈夫よ父さん。これくらいの傷は縫い治せるわ」

徐倫は糸で自分の傷を縫合する。この柔軟性は私にはなかったものだな。

徐倫「まだまだ行くわよ父さん！」

承太郎「ああ、任せておけ」

Dio「チツ……いいだろう、これからは……『えぐり出す』スツ……

そう言うのと、Dioは拳を手刀に構え直す。

Dio「学習したからな……お前達の肉に切り裂いて臓器を床に順番に並べてやるツ

！」

やれやれ、やはりあいつと似て厄介すぎるぜ。

くジョセフsideく

ジョセフ「まさかおぬしともう一度戦う事になるとはのお……歳は取ってみるもんじゃ

な」

サンタナ「オレももうあのまま石化したままだと思つていたが……だからこそ『愛国者達』についたのだ」

DISCの影響でもあるようじゃが、こやつと言つとる事は本心じゃろう。こやつとの戦いは二度目じゃがより集中しなければならん。

皆DISCが差し込まれているところだけしか注意していなかったようじゃが……差し込まれていたDISCは二枚あつた。おそらくスタンド能力のDISCじゃろう、スタンド能力に目覚めとる。

人間を超越した肉体を持つスタンド使い……ワシは承一郎君の他にもDIOを知つておる。あやつのは以上じゃつた。承一郎君が半分だけでよかつたと今でも思う。本来はありえない二つのスタンド能力、相反する技術と体質を持ちながら消滅しない肉体。敵にするとなると考えただけでゾツとするわい。

そして今、ここにもう一人そのイレギュラーというべき男、サンタナがおる。『柱の男』達を倒す事はワシら波紋戦士の遥か昔からの使命、それを静や承一郎君に受け継がせる事があつてはならん。

ジョセフ「どんな能力か分からぬが、『スタンド能力』に慣れていない今なら倒す勝機は十分！いくぞサンタナ、『隠者の紫』ツ!!？」ドヒュンツ！

ワシの手から出た紫の茨をサンタナは即座に回避した。やはり見えておるな、スタン

ドをッ!

サンタナ「それがお前のスタンドか!」

ジョセフ「波紋戦士にとつては自分で殴った方が向いとるんでな! コオオオオ…」
 ダッ!

そう言いながらワシはサンタナへと波紋の呼吸を行いながら間合いを詰める!

サンタナ「…『アイ・アム・ア・ロック』ズギユンッ!

ジョセフ「ッ!!?」

スタンドを出しおったか! だが波紋はあくまでも対生物用の技術、精神エネルギーが具現化したスタンドに波紋を効果はないからのお。ま、『女帝』のように実体化しておつても効かないのもおるがの。

故にワシが茨で縛るのは本体であるサンタナのみ!

ビシイッ!

ワシの『隠者の紫』がサンタナの体を拘束する!

サンタナ「うっとおしいぞ…フッ!」ズバババッ!

サンタナはスタンドで茨を切断しおった。なかなか器用じゃのう。しかし残念じゃったな、千切れたハズの茨がさらにサンタナを拘束したわい!

ビシイッ!

サンタナ「何だとツ!!? せ：切断したハズツ！」

ジョセフ「お前さんのスタンド、なかなか器用じゃがワシも負けてはおらんぞ? その頭に入ったD I S Cにはロープマジックの知識なんて入っておらんハズだからのお！」

ワシは『隠者の紫』でわざと切断されてもいい部分だけを最初サンタナの前に仕掛けたんじゃ。だましの『手品』はまだまだ健在じゃのお!

ジョセフ「くらえサンタナ! 波紋疾走ツ!!?」オーバードライブバリバリイツ!

サンタナへあやつを石化させた時よりも強力な波紋が流れる!

サンタナ「くつ…!!」バチャ!

サンタナが承一郎の『村雨』という刀から出た水に触れた…まさかツ!

ジョセフ「ううツ、は、波紋で床の水がツ！」

ジュン!ジュン!ジュン!

ジョセフ「こ、これはツ!あの時と同じツ!!?」

まさかツ!最初にエシデイシを消滅させた(本当は脳だけ生き残ってた)時に不思議に思っておったが、奴の体は他の三人の『柱の男』達と別に進化したのかツ!!?

サンタナは他とは違い『柱の男』達特有の『流法』モードというものがなかった。じゃがその分波紋や太陽の光に耐性がつくように進化しておつたら…!!?

ジョセフ「マズイッ!!?ワシの波紋ですら効果がないとはッ!!?」

サンタナ「考え事とは余裕だなッ!」

ジョセフ「ハッ!」

ドバババッ!

奴のスタンドのラツシユがワシに直撃してしまった!

ジョセフ「ぐおおおっ!!?」ギユオッ!

どうにか『隠者の紫』で衝撃を緩和したが、こやつスタンドは近距離パワー型じゃ、しかも波紋が効かない!内側ならいけるハズじゃが(実際あの時はあやつの体を二つに裂かれた)、もうあやつがそんなヘマをやらかすとは思えん。

それに今サンタナのスタンドはワシに触れた。何か能力が襲いかかってくるハズ!どこじゃ!どこから襲ってくるッ!!?すると…

コロ…コロ…:

何かが転がっていた。これは…財団の薬品の瓶かの?

サンタナ「確かにDISCにはロープマジックの知識はなかった…だがここにある有毒な薬品の知識はあったぞ」

コロ…コロコロ…:コロコロコロ…:

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ジョセフ「一個じゃあないツ!!? 何個もツ、転がってきておるツ!!?」

財団は石仮面やスタンドについて研究している企業じゃが、一応は医療分野の事業を主軸にしておる。だから医療の薬品などがあるのは知っておるが：

コロコロ：コロコロコロ：ゴロゴロゴロツ！

薬品の瓶の転がるスピードが速くなっておるツ！

ドヒュンツ！

そしてついにはワシに向かって真っ直ぐに飛んできおった！

ジョセフ「くつ、『隠者の紫』ツ!!?」

ビシィツ！

『隠者の紫』で網を張って薬品の瓶を絡め取るも、

ジョセフ「なつ、なんじゃツ!!? この瓶、全てだんだんとパワーが強くなっておるツ

！」ギシギシツ……！

こども強くなつてくると『隠者の紫』も保たなくなる！しかも数も徐々に増えてきて

：

サンタナ「敵を前にして、随分と呑気なものだな？」

ジョセフ「ツ!!?」

後ろを見せてしまったワシに、サンタナが攻撃を仕掛ける。マズイ、今は瓶を防ぐの

で手一杯じゃ！

ガキイツ！

しかし、その一撃は先程までサムと戦っておったハズの承一郎君が防いだ！

ジヨセフ「承一郎！」

承一郎「危なかつた：間一髪でしたね」

< || t o b e c o n t i n u e d ||

第93話 因縁はいつも突然にその④

ジョセフ「承一郎君！」

承一郎「危なかった…間一髪でしたね」

サムと戦っていた承一郎がなぜこの場にいるのか、話は少し前に遡る……

ムーディ・ブルース！再生リブレイを開始するツ！

承一郎はサムと戦っていたが、ジョセフの危機を知り即座に行動した。

承一郎「霞め、「村雨」ツ!!？」

『村雨』で一瞬ながら濃霧を発生させ、サムの視界を遮る。

サム『むっ!!？』ボウツ！

サムは『ムラサマ』の炎で霧を掻き消すが、すでに承一郎はジョセフの元へ向かっており、

恐竜達（屍）『ギヤアアアアース！』

屍生人ゾンビへと姿を変えた恐竜達をけしかける。

サム『……フツ、まあいい。ちと興が乗ってきたが…あいつと同じだな』

ジョセフの元へ向かう承一郎の姿に、サムは信乃の幻影ファンタムを幻視した。

サンタナ「餌ごときが…調子に乗るな！」

承一郎「ツ!!？」ビシッ!

サンタナのスタンドの攻撃を承一郎は『村雨』の腹で手首を弾き、サンタナへ突き刺した!しかし、

グニイツ!

承一郎「今度は突き刺したのにゴムのように…厄介だな」

サンタナ「死ねッ!」ドバババツ!

スタンドのラツシユに対して承一郎は『村雨』を、

ビシユッ!

サンタナに向けて投げる。

サンタナ「むっ!!？」

クリスタル・ボール
C B 『オラオラオラオラオラオラアツ!!?』ドバババツ!

サンタナがスタンドで弾いた瞬間を見逃さずに承一郎はスタンドでラツシユを叩き込む!

サンタナ「くっ…!」

承一郎「セイッ！」

スタンドにラツシユさせるのと同時に承一郎はサンタナをCQCで投げる！

サンタナ「なっ…!!?」

承一郎「波紋疾走オールドラフッ！」バリバリイッ！

倒れたサンタナに承一郎は波紋疾走を叩き込む！しかし…

ジュン！ジュン！ジュン！

結果はジョセフの時と変わらず、波紋はサンタナの体表を流れるのみにとどまってしまった。

ジョセフ「ダメじゃ承一郎君！サンタナは他の『柱の男』達と違って太陽のエネルギーへの耐性がとても高いッ！ワシの波紋でも無理じゃった！」

承一郎「くっ、『柱の男』…究極生命体にまで至る食物連鎖の頂点の名は伊達じゃあないという事か…！」

サンタナ「邪魔だ、どけいッ！」ベゴンッ！

突如サンタナの肋骨が凹み、

ギャンッ!!?

その全てが承一郎に襲いかかる！

承一郎「いつ!!?」バヂイッ！

承一郎は波紋を練り骨の鎧を纏うが、弾かれた。

承一郎「うっ、うおおおッ!?」バチン!

ジョセフ「承一郎君!」

承一郎「大丈夫です!そつちは!?」

ジョセフ「そろそろワシの『ハイミスト・パーフル隠者の紫』でもキツくなつておる!」

グググッ……ヒュンッ!

紫の茨で抑えきれなくなった薬品の瓶が飛来する!

承一郎『クリスタル・ボーン』ッ!」ボゴンッ!

『クリスタル・ボーン』がジョセフと瓶の中間を叩き、そこから骨の壁が出現する!

ガシヤアンッ!

瓶は粉碎され、中の液体が露わになるが…

承一郎「この割れた瓶…鉛製だと…?まさかッ…!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ジュウウウウッ……

薬品が最大硬度の骨の壁を溶かす!

ジョセフ「承一郎君…骨の壁が溶けておるぞッ!」

承一郎「やはり、これは…『フッ化水素酸』かッ!」

ながらジョセフに迫る！

CB 『オラオラオラオラオラオラアツ!!?』 ドゴドゴ！

ジユウウウツ……

承一郎は骨の壁を次々と重ねて展開するが、薬品自体がどんどんと加速しながら向かってくるため、ものすごいスピードで溶けてしまう。

承一郎「クソツ、埒があかない！ジョセフさん、僕に捕まって！一回射程の外に……」
ジョセフ「ツ！承一郎君！後ろじゃ！」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ジョセフは承一郎の後ろで拳を振りかぶるサンタナのスタンドを見た！

サンタナ「死ねツ！」

拳が承一郎に当たる瞬間、

承一郎「戻れ、『村雨』ツ！」

ズバンツ！ブシユウウウツ!!?

サンタナのスタンドの腕が切断され、サンタナ本体にもダメージがフィールドバツクされた！

サンタナ「ぐうつ!!?」

承一郎「あんた……スタンドの原則知ってるだろう？基本的に『スタンドが受けた傷は

本体も受ける』って事をさ」パシッ！

承一郎はさつきサンタナが弾いて後ろに飛んでいった『村雨』を水圧噴射で手元に戻すと同時に、サンタナのスタンドの腕を切断したのだ！

承一郎「あんた自身は強い。弱点であるハズの波紋ですらもことん防衛してくるからな。だが、スタンド自体は？波紋は通らないにしても攻撃をゴムのようになって防ぐなんて芸当は出来ないハズだ」

スタンドはその形状を変形する事は（変身型以外）出来ない。なぜならスタンドは精神の形そのものだからだ。いかに脳幹に入れる程小さくしたりジツパーで腕の射程を伸ばす事から出来ても、デザインや形そのものを変形する事は不可能だ。

承一郎「そしてッ！傷口に直接波紋を流せば、僕みたいに未熟な波紋でも有効なダメージになる！」

サンタナ「ぬうツ!!？」ギャンツ!!？」

サンタナは再び肋骨を変形させて承一郎に襲いかかるが、

承一郎『クリスタル・ボーン』ツ!!？」ギャンツ!!？」

承一郎も同じく波紋を帯びた骨の刃で迎撃する！

サンタナ「何イツ!!？」

承一郎「一度見た攻撃に対して対策を練らないとも思ったのか！くらえ、仙道波紋

の射程から離すための…陽動さ」

ジョセフ「……はっ！」

徐倫「ひいおじいちゃん!?!」

ジョニイはラツシユの間際にジョセフを『ブラッデイ・シャドウ』の空間転移でサンタナのスタンド『アイ・アム・ア・ロック』の能力射程距離であろう10m以上先の徐倫の元へ移動させたのだ。

スツ…トツ

そして承一郎は片足をゆっくりとD i oの腹につけた。

承一郎「確かに…僕の骨爪弾はあんたを捉えられない。だが…骨爪弾が手でしか撃てないなんて誰が決めた…?」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

D i o「ツ!まさかツ…!」

承一郎「なんで僕がスットロイ動きで足をあんたの腹につけたと思う?...くらえツ!」

バツ…!

D i oは即座に跳躍、

ドババババツ!ヒュンヒュンツ!

次の瞬間放たれた骨爪弾をすんでのところで回避した！

D i o 「くっつ…！危なかった、しかしこれで『バスバスッ！』なっ…!!?」

D i o が腹を見ると、

蜂の巣にされて向こう側の景色が見える穴が空いていた。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

D i o 「なっ…なんだとオツ!!?」

承一郎「…やはり、あんたのその『動体視力』！ハンパないスピードで対応出来るから近距離では相手にならない。だけど、回避出来ない程のゼロ距離でならどうだ？」

さらに見ると、D i o の腹にはジョニイのスタンド『ブラッディ・シャドウ』の空間がくつつついていた。

ジョニイ「そう、さつき足を腹に触れさせたのはてめーの腹にオレのスタンド能力の空間をくつつけるため！足の骨爪弾は回避されたが、その先に広げた空間から直に繋がったのさ。てめーが回避したと安心しきる瞬間を狙ってな！」

ギイイイイン……ツ!!?

爆発的なスピードで鞘から飛び出す『ムラサマ』を掴み、ジョニイの首へとその腕を振るう!

ジョニイ「ハッ！」

サム(獲った——)

『ムラサマ』を振り切る瞬間にサムは確信した。しかし、

バチイツ!ゴウツ!

ジョニイの体は雷を帯び、圧倒的なスピードで避ける事で右目が『ムラサマ』で表面を斬られるだけに留まった。

サム「ツ!!?」

ジョニイ「ハア……ハア……ツ」

サム「お前さん……ちと速すぎるんじゃないやあねえのか?」

サムの『ムラサマ』の鞘に備え付けられている機構は内部に火薬が仕込まれており、それを引き金を引く事で爆発させ、その勢いよく飛び出た状態からの抜刀術。故に神速。それを上回るスピードで回避したのだ。

火薬もかなりの量を使用して放つ事で音速に近いスピードで飛び出る『ムラサマ』を掴んでそのまま斬るといふ技を使ってきたサム本人だから分かる。

サム（あれは人間が——いや、生物が出している速度じゃあねえ。下手をしなくても壁にこびりつく肉片になっちまう）

ジョニー「：『ブラッディ・ファントム』、まさかここで使わされるとは：（クソ、一瞬しか使わなかったが、今ので体がボロボロだ。恐竜化が抑制中とはいえ進行中だから肉体制御もままならないなんてな）」

ジョニーも内心ギリギリだった。ただでさえ血を吹き出しながら亡霊さながらで繰り出す事から名づけられた『ブラッディ・ファントム』だが、連戦に加え恐竜化で肉体制御が半分以下の状態で行使した事で体がボロボロになってしまっているのだ。

しかも『ブラッディ・シャドウ』の空間移動も片目が斬られて開けない状態であるため座標決定にわずかなタイムラグが発生してしまう。

サム「（マズいな、あの動きで連続して動けるのなら十中八九勝ち目がない。ここは：）逃げるに限る！」

しかし、この無言の駆け引きに根負けしたのはサムだった。サム達の目的はあくまでサンタナを奪う事。片腕を切断され波紋のダメージを負う可能性がある限りこれ以上の深手を負うべきではないと判断したのである。

そして先程のサムの抜刀はあくまでもDioの氷を溶かすためであり、あわよくばジョニーの首を獲ろうとしただけだ。

D i o 「くっ、仕方ない」

だが、サンタナ、サム、D i o はなぜか地下室の方へ向かう。しかし、この躊躇いのない動きは何らかの脱出策があるとジョニイは確信した！

ジョニイ「逃がすかッ！『ブラッディ・シヤドウ』ッ!!？」ズギユンツ！

ジョニイは空間を繋ぎ左拳をD i o に叩き込もうとするも、

承太郎「待て承一郎！そこからでは…ッ！」

D i o 『THE^世 WORLD』ッ！

ドオオオオoooooooooooo

ンツ!!？

世界が静止する。

承太郎（くっ…！やはり五秒ではたどり着けない…！）

たとえ五秒時を止めてもD i o には届かない承太郎は静止せざるを得ない。

D i o 「このオレを追跡するなど間抜けだな…。無駄だ、無駄切り落とす！『遺体』ご

とこの『左腕』は貰っ……」

D i o が左腕を切り落とそうと手刀を振り下ろそうとした瞬間、

ピクリ…

左腕が動いた。

D i o 「はッ!!？」ビクウウウツ

承太郎「ツ!!?」

シイイイーーーーーズ
ン……………

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

Dio「バカな……（今——動いたぞ……穴の中からオレを覗いている）」

Dio（この能力、『あいつ』ですら知らないスタンド能力ツ……！骨を操る？空間を繋げる？そんなちっぽけな能力じゃあないツ！）

Dio（『あいつ』は言っていた……。『レス・エンファントス・テレプレス恐るべき子供達』……吸血鬼である『この世界』

のオレの体細胞を使用した人工授精で創ったクローン、だが精神性まで同じにするのは不可能。だから計画は一旦保留になったハズ……なのにツ！こいつはツ！）

ズズツ……ズズズツ……！

しかしジョニイの額から突き出た白い角は伸び始めていた。

Dio「角……ツ！（まさか、こいつ……憎悪か？ヴェム本来なら介入出来ない『静止した時の中』に介入する程の憎悪か……！さつき……オレはこの腕を貰ったと言ったが……）」

ドオオオオーーーーーズ
ンツ!!?」

ジョニイ「ハツ!!?」

BS『無駄アツ!!?』

ドゴオンツ！パラパラ……

『ブラッディ・シャドウ』はDioには命中せず、その先の壁を砕くだけにとどまった。Dio（あの機動性、もう一度捕まったらマズイ。今度捉えられたら全身を氷漬けにされて砕かれるツ。あいつは危険だ……あつてはならない存在……）

ジョニイ「待ちやがれツ!!？」ドバドバツ！
ヒュンヒュンツ！

ジョニイは骨爪弾をDioへ放つが、Dioは恐竜の動体視力でなんなく回避する。Dio「……認めてやる、お前はオレにとつての『最大の試練』だ。次に戦う時は全身全霊を尽くしてお前を完膚無きまでに敗北させて殺してやる。試練は『克服して必ず殺す』バサツ！

Dioは唐突に布——国旗を広げ、こちら側からは見えなくなるように広げた。

スタープラチナ
S P 『オオオツ、ラアアアツ!!?』

そしてようやく追いついた承太郎の『スタープラチナ』がその国旗に向かって車を即廃車にする一撃を打ち込むも、

ドゴオオンツ!!?

承太郎「何ツ……!!?」

その先にあつたのは『スタープラチナ』の拳で大きなヒビが広がっている壁のみだつた。

ジョセフ「どうなったのじゃ……!?？」

徐倫「消えた……!?？」

承太郎「……やれやれ。どうやら奴ら、まんまと逃げおおせたみたいだな」

承一郎「ハア……ハア……！」

徐倫「承一郎……大丈夫？」

承一郎「すみません……もう……意識が……」グラツ

ドサツ!

承一郎はそのまま意識を失い、倒れてしまった。

承一郎(ジョニイ)……連戦と能力の連続使用によつて気絶、再起可能

承太郎……後で切断された腕をジョルノに治してもらう、再起可能

徐倫・ジョセフ……引き続きアメリカで『愛国者達』の動向を探る、再起可能

Dio・サム……サンタナの奪取に成功、その後何者かの能力で逃走、再起可能

サンタナ……『ホワイト・スネイク』DISCにより洗脳され、Dio達と共に逃走、再起可能

こうして、メキシコ支部での攻防は幕を下ろした。

<|| to be continued ||

第94話 甘すぎるバレンタインその①

バレンタインデー、それは女子達が好きな相手にチョコをプレゼントする特別な日。

元々は1269年にローマ皇帝の迫害下で殉教した聖ウァレンティヌスに由来する記念日であり、世界各地でカップルの愛の誓いの日とされている。

その中でも日本は贈る物がチョコレートに限定されているなどの特徴がある。

※イタリ^{チヨ}ア^コのカ^コビ^コ野^コ郎^ラを連想するその君、ゴミ収集車に入る事を勧めるぞ（燃えるゴミは月^ゲ・水^ス・金^イツ^金!!??）

それはさておき、凡矢理のバレンタイン前日の夜、三人の女子達は夢中でチョコ作りをしていた。

ある女子はチョコに『第一の爆弾』を仕込ませ、ある女子は『メタリカ』もどきのチョコを作り、ある女子は明らかにチョコ作りに関係ない機材を使っていたりなど、常軌を逸した白熱ぶりだった。

そして翌日、バレンタインデー当日に我らが主人公、一条承一郎は…

承一郎「ふあゝあ……」

……盛大に欠伸をしていた。メキシコ支部戦でスタンドパワーを使い過ぎたせいで

体の疲労がまだ抜け切つてなかつたのだ。

承一郎（そういえば今日はバレンタインだったけ……まああんまり興味ないけどさ。今日も例年通り竜達にしこたまチョコ貰うんだろうけどね）

マザーベースでもバレンタインの習慣は存在するが、基本的に承一郎は自ら任務で戦場に行った事や女性の兵士達の国籍がかなりバラバラである事などもあつて、チョコはもらつた事はない（チョコ以外はもらつてないとは言つていない）。

集英組では竜達おっさんが承一郎にチョコを渡すのだ。なんともホモホモしい光景だ。

承一郎（……はあ、誰が悲しくて毎年野郎からチョコを貰わなくちゃあならないんだ。まあ、別に女子から欲しいわけでもないからな。そんなの別に興味ないし……）

そんな理由があり、承一郎は朝からゲンナリしながら校舎の下駄箱の前に着き、ガパツ！

開けるも、そこにあるのはいつも履く上履きのみ……

集「……期待したな？ 貴様」ポン

承一郎「してない、全然してない」

いつの間にか背後に回つていた集が承一郎の肩に手を置いた。お前はどこの影D I
○だ。

承一郎「なんだい集、別に僕の下駄箱にチョコなんて入ってるわけないだろう？」

集「ハハア、謙虚だねえ。ま、今日中に誰かから貰える事を祈ろーぜ戦友」

実はこの集、意外とモテる。発言と行動が変態なだけで、顔立ちもいいし一応運動神経もある（鶴の銃撃を避けられるレベル）。もはや分かり合えぬ。

承一郎「いいって別に」

そう言いつつも、承一郎は教室に入るや否や自分の机の中を見るも、そこにはチョコは一つもなかった。

承一郎はフツ…と微笑み、

承一郎（チョコ欲しいなアーーーーッ！！？）

頭を抱えて切望した。

承一郎（いやね、僕だつて男だぜ？チョコの一つや二つ欲しいに決まってるじゃあないか！誰か僕にチョコくれないかな〜？）

そこで承一郎は考える。

承一郎（もしかして千棘さんとかくれるかな…？一応恋人つて事になつてるし…100%義理なのは分かつてるけどやっぱり嬉しいかな…。…あとは、小野寺君とか…いやないな！！？席が隣になつて多少話せるようになったつて何期待してるんだ僕は！！？くれるわけないだろう僕なんかにも！！？でも小野寺君優しいから義理くらい…いやでも

やっぱもしかしたら……)

※席替え回は『キング・クリムゾン』されたからなしである。

そんな事を考えていると、ガラツと教室の扉が開き、千棘がやって来た。

千棘「……おはようもやし」

承一郎「あ……ああ、おはよう」

挨拶はするものの、それから会話が続かない。

千棘「……何、なんか用？」

承一郎「え？ いや……別に何も無いけど……」

千棘「……そう……そういえば今日って何かあるの？ なんだか皆どこかそわそわしてるように見えるんだけど……」

確かに今日は男子達がそわそわしている。バレンタインは女子だけでなく男子の戦場でもある。チョコを貰った勝ち組となるか貰えずに終わる負け犬になるか、自分へのチョコはまだかと待ちわびているのだ。

承一郎「え？ 君バレンタイン知らないのかい？」

千棘「バレンタイン？」

承一郎「あー、そういえばアメリカにはチョコ渡す習慣とか無いんだっけ」

冒頭でもあったように、海外では贈るものをチョコレートだけに限定する習慣はな

い。この習慣が流行したのは1985年、そして定着したのは70年代後半らしい。ちなみに神戸が日本のバレンタインデー発祥の地と言われている。

千棘「あ、あー……。バレンタイン、そっかそっか今日だったんだ。なるほど、それであらう」

承一郎「……」

千棘「……何よ、まさかあんた私に貰えるとも思ってるんじゃないでしょーね？いくらニセの恋人だからってそこまでしてあげる義理はないはずだけど？」

承一郎「……うるさいな、分かっているよ（……やつぱりダメか。ま、彼女にこんな乙女な事を期待する方が間違いだよ）」

美しい花には棘があるというが、千棘の場合は名前通りその美しい顔立ちやスタイルに対して性格がちよっとアレかなと承一郎は独り合点した。

しかしその千の棘は千棘自身にも向かうらしく……

千棘（どうして素直じゃあない!!？バカバカ、私のバカ……！何よ今の態度は、余計渡し辛くなつたじゃあない！今朝あれだけ自然に渡すシミュレーションして来たのに全部バカアよ!!？どうして私ってこうなの……!!?）

千棘は自分の不器用さに心底呆れた。今までツンとした態度をしたものの、好きになつてしまったらどうという態度を取ればいいのか分からずにいるのだ。

小咲「おはよー」ガラツ!

そうこうしている間に小咲が教室に入って来た。

小咲「…おはよう千棘ちゃん! 一条君!」

承一郎「ああ、おはよう」

千棘「おはよー小咲ちゃん」

小咲「今日は良い天気だね 一条君」

承一郎「ああ…そうだね…」

そのまま小咲が席に座り、会話終了!

小咲(うう…どうしよ…もう話すきつかげがない。ようやく最近この席にも慣れてきたのにこんな調子でホントに渡せるのかな…)

承一郎(うくん、小野寺君は完全にいつもと同じ様子だな。やつぱり…チョコを渡すつもりなんてサラサラないって事なんだろうか…)

キング・クリムゾン!!?

放課後、教室――

女子「あの! 良かったら! コレを受け取って下さい…!!?」

女子生徒の一人が鶴に包装されたチョコレートを渡して去って行く。それを鶴はポカンとした顔で見ている。

鵜 「…なんだ？今のは…」

集 ヒューヒュー、さすが誠士郎ちゃんモツテモテ〜

るり「何ってバレンタインチョコに決まってるじゃあない」

鵜 「？バレンタインとは…？」

るり「え、知らないのあなた。まあラブレターも知らなかったものね」

※鵜のラブレター回もキンクリ済みである。

集「バレンタインっていうのはね〜、嫌いな奴にチョコを渡す日なんだよ〜」

バレンタインを知らない鵜にサラツと嘘をつく集。そしてそれを簡単に信じる鵜。
チヨロすぎる。それでいいのか黒ブラクタイガー 虎、ヒットマンの名が泣くぞ。

鵜 「…はあ？…嫌われるような事をした覚えはないぞ…」

集「だからさ誠士郎ちゃんも承一郎とかにチョコを買って渡すと何かいい事あるかも
しれないよ？」

鵜 「…そういう事ならばまず貴様にこのチョコをくれてやる、受け取れ」

集「え〜…光栄だけど」

承一郎「お〜い集〜ちよつといい…えっ!?？」

鵜が集に女子にもらったチョコを渡す直前に承一郎が教室のドアを開けてその光景
を目撃した。

鶴「…？なんだ…？」

承一郎「し…失礼しました…」パタン…

そしてそのままドアを閉めた。集はなぜか口から血を流していた。

鶴「…~~×~~なんだったんだ今のは…」

集「…ゴメン誠士郎ちゃん、今から本当の事を話そう…」

鶴「は？」

集、鬼の形相で襲いかかる鶴から逃走する5秒前、突入ッ!!？

承一郎（…ビツクリした、まさかあんな事になってるとは…。まさか鶴さんが集の事をねえ…全然気づかなかった）

ドアを閉めた後、承一郎は廊下を歩きながらさつき見た光景を思い出していた。

承一郎（…彼がいたら、どう思っただらうな…。って、何考えてるんだ僕は…！）

ふと思ってしまう考えを振り払う。彼が、信乃がもしこの場にいたのなら…。しかし、彼はもういないのだ。

ズキンッ！

承一郎「ッ…」

そう考えていると、左腕から猛烈な幻^{ファントム・ペイン}肢痛が発生する。

承一郎（原因はサム・ホドリゲス…彼と久しく刀を交えたからか……幻肢痛がまたぶり返してきたか…。もうやめよう、これ以上考えるのはよそう）

あのメキシコ支部での戦闘後、承一郎の左腕から再び激痛が走っていた。まるで魂に直接刻み付けるかのように。

承一郎（…そういえば今日橘さんの事見てないな。来てないって事は休みなのかな）

万里花「承一郎様ー！ いずこですか〜？」

承一郎（お、噂をすれば）

考えていた時に声の聞こえた方を向くと…

万里花「あ、承一郎様♡」

ゴロゴロゴロ…

万里花と、彼女が台車で運んでいる像が目飛び込んできた。

万里花「申し訳ありません承一郎様、完成が少しばかり遅れてしまつて…」

パリンパリン！

そのチョコの像はおよそ4mを超える大きさに廊下の天井をその頭壊していく。だが問題はその像が腰に布を巻いただけでほぼ全裸の承一郎の像だという事だった（なお、ポージングはダビデ像）。

承一郎「……………」

その時！承一郎の脳裏に落雷！そのあまりの衝撃に……
クルツ！ダツ！

承一郎は逃げる！愛がとにかく重い（物理）！

万里花「あつ、逃がしませんわよ承一郎様……！お覚悟……!!？」ギョルン！
ブロロン!!？ギャギャギャギャ！

その逃げる承一郎に対し、万里花は何故か台車にチョコレートの像と一緒に取り付けられたブースターのエンジンを稼働させて承一郎を追うツ！

万里花「承一郎様……!!？」ギョン！

承一郎「今更だが君病弱じゃあなかつたのかア……ツ!!？」
バビュンツ!!？バビュンツ!!？

小咲「……!!？」

二人は廊下を歩いてきた小咲とすれ違うように駆け抜けていった。

小咲「……今の、一条君と万里花ちゃん……？」

小咲は猛ダツシュで駆け抜ける二人を見て呆然となる。

小咲（……本当にすごいなあ万里花ちゃんは。あんな積極的に気持ちをおピール出来るなんて。私には到底……違うよ私、何弱気になつてるの。私だつてせっかくおいしいチョコ作れたんじゃあない。頑張るんだ……!）

小咲「……止まって一条君!!？」

小咲は承一郎が逃げた道の先に先回り、承一郎にチョコを渡そうとする。

承一郎「え!!？小野寺君……!!？」

小咲「あの……私……渡したい物が……『ガッ』あつ!!？」

グシャツ!!？」

しかし小咲は足がもつれて持っていたチョコを下敷きにするように倒れてしまった

!

小咲「……!!？」

承一郎「小野寺君、大丈夫かい……!!？」

承一郎は目の前で倒れた小咲に声をかけるが、

小咲「……大丈夫……大丈夫だから……大丈夫だから……!!?!」ピュー!

承一郎「え……!!??」

小咲は物凄いスピードで去ってしまった。

承一郎（小野寺君……今一瞬凄顔していたような……）

小咲「…………はあく、これじゃあもう渡せないなあ……」

小咲は一人ポツンと形の崩れてしまったチョコを見つめていた。

小咲「あ、やっぱりおいし…。せっかくおいしく作れたのになあ、もったいないなあ…」

崩れてしまったチョコを一欠片口にして味を確かめる。

小咲「…凄く、おいしいなあ…」

その瞳は、泣きそうに潤んでいた。

第95話 甘すぎるバレンタインその②

承一郎「なあ！さつきこの辺小野寺君が通らなかつたかい？」

女子「寺ちゃん？ううん、見てないけど」

承一郎（小野寺君…どこ行つたんだろう…）

承一郎は校舎内で走り去つてしまつた小咲を探していた。

承一郎（見つからないな…さつきの小野寺君、なんかいつもと様子が違つた気がしたんだが…）

？「待たんかキサマー…!!？」ドン!!？ドン!!？

承一郎「…ん？」

ドヒュン!!？

全速力で猛ダツシユする集とそれを憤怒の形相で追いかける多くの銃器を背負つた鶴だつた。

承一郎「ぬおつ!!??」

あつという間に二人は承一郎の前を駆け抜けていった。

承一郎「…~~今~~今の…集と鶴さんか…？」

鶇「…ハア…ハア…おのれあの男…どこまでも私をコケに…「鶇さん」ひよわあああ
あ!!?!」

承一郎が声をかえると、鶇は驚いた様子で飛び退いた。

承一郎「?何変な声出してるんだ…」

鶇「い…いいいい一条承一郎…?!?貴様こそつ…どうしてここに…」

承一郎「さつき僕の目の前通り過ぎて行つただろう?小野寺君の事を探しているんだ。君は見てないか?」

鶇「…いや…見てないが…:…おい一条承一郎、貴様に…:大事な話があるのだが…」

承一郎「ん?ああ、いやあビックリしたよ。まさか君が集の事好…」

鶇「ちがくくくくくくく!!?!」

承一郎の言葉に対して鶇は即答する。集、お前泣いていいよ…。

承一郎「安心しなよ、別に言いふらす趣味はないからさ」

鶇「違うと言つてるだろ!!?あれは私がバレンタインという物を知らずに『キング・クリムゾン!!?』で…」

承一郎「え?ホントに違うのかい?じゃあ君が持つてたチョコはどうしたんだ」

鶇「ん?いやアレは…:違うクラスの女子が私にと…」

承一郎「え、女子?」

鵜「…考えて見ると彼女は何故私にチョコを渡したのだ？まさかあの娘もバレンタインの事をよく知らぬのでは…」

承一郎「いや…そんな事ないと思うけど…（そういえば彼女やたら女子に人気あつたな）」

転校当初はイケメン男子としてかなりの人気を得ていた鵜だったが、女子だと発覚してもその人気は未だ冷める様子はない。むしろ宝塚系女子として人気が高まる一方だ。

承一郎「というかうおおお、女子の鵜さんさえチョコを貰つてるのに僕は一個も貰えないなんて悔し過ぎる…！」

女子の鵜でさえチョコを貰つたという事実はこの上ない敗北感を実感する承一郎。

鵜「…そんなにチョコが欲しいものなのか？男というのは…」

承一郎（…しまった、心の声がつい…）

すると鵜は懐からチロルチョコを一つ取り出した。

鵜「……………一条承一郎、バツ…！バレンタインには、義理チョコ…！…とかいうシステムがあるらしいな…？…それでも良いなら、くれてやってもいいが…」

承一郎「マジか…？ありがとう…！」

その言葉に承一郎は即座に反応し、鵜からチロルチョコを貰つた。

承一郎「嬉しい、嬉しいよ…？義理でも全つつ然嬉しい…？ありがとうね鵜さん…！」

鶇「そ…そんなに嬉しいか」

承「ああ!!? いやあ感激だよ! 僕女の子からチョコ貰ったのコレが人生初だからね!
!」

承一郎「ホントにありがとうね! ホワイトデーにキツチリ返すから」

鶇「は…ホワ? あ…ああ…」

承一郎「あ、そうだ。余計なお世話だと思っけど、貰ったチョコさつきみたいに人にあげたりしない方がいいよ。その子もきつと勇気出して君に渡したんだから、大事に食べなよ」

そう言つて、承一郎は再び小咲を探すために歩き出した。

鶇「…余計なお世話だ。それくらい分かつている(…ならば貴様も、大事に食べてくれるのだろうか——?)」

そんな事を心の中で呟く鶇に対し、承一郎は

承一郎(ヤバツ、マズイ事思ひ出した。僕鶇さんにあんな事言つといて、橘さんのチョコ受け取らずに逃げたままじゃん!!?)

自分の言つた事がまんま自分にブーメランしているのを感じて頭を抱えていた。

承一郎(ぐおおおお、なのに人に説教までして恥ずかしい!!? さつきは思わず本能的に逃げてしまったが、橘さんは純粹に僕にチョコを作ってくれただけだつてのに!!

?穴があつたら入りたい…!

承一郎(思い返したらヒドイ事してしまったな。先に橘さんを捜して謝ろう。小野寺君の事はその後…)

承一郎が見た光景は、ヒビが入っている校舎の壁と太腿の部分から上が木つ端微塵となつた自分を模したチョコ人形、そしてそれを見てへたり込んでいる万里花であつた。

承一郎(な…何イイ…ツ?!?なつ…なんてこつた…!!?さつきから追ってくる音が聞こえないと思つたら、まさかこんな事にいいい…!!?どうしよう、僕のせいだ…!!?僕が逃げたりしなきゃあ…!!?)

万里花「…あら、承一郎様。…申し訳ございません承一郎、せつかく作つたのですが私の不注意で壊れてしまいました」

承一郎に気づいた万里花は、まるで悪いのは自分だとばかりに穏やかな顔で承一郎に詫びた。本当に悪いのはチョコのサイズがバカでかくても女子からのプレゼントを受け取ろうとしない承一郎のだが。

※作者ならどどんなにでかくても女子からのプレゼントなら泣いて喜ぶ(そんな事一度たりともないが)

ドスツ!↑良心の呵責の音

承一郎(グハツ?!?)

万里花「すみません、私舞い上がってしまつて…後日作り直して持つて来ますので、その時は受け取つて下さいますか…?」

ドスツ!ドスツ!↑良心の(r y

承一郎(ぐあああああー!!?むっ…胸が!!?胸が張り裂けそうだツ…!ゴメン…!!?ゴメン橘さん…!!?僕はなんて事をしてしまつたんだ…!!?橘さんが僕なんかのためにこんなスゴイチョコを作つてくれたのに…僕は…!!?)

承一郎「…ゴメン橘さん…!!?」
ガブウツ!

承一郎は万里花に謝罪の言葉を言い、床に落ちているチョコの破片に食らいついた。

万里花「!!?わっ…!わっ…!いけません承一郎様…!こんな汚れてしまつた物をお口に入れては…!」

承一郎「…食べさせてくれ橘さん!でないと僕の気が済まないんだ、本当に悪かつた…!!?」

万里花「…いえ…お気持ちは大変嬉しいのですが、それではお腹を壊してしまいますわ!チョコならまた作れば良いのですから…私は…承一郎様のお体の方が…」

承一郎「…いいや、ダメだ。頼むから食べさせてくれよ!!?」

万里花「…分かりました。そこまでおっしゃるなら、こういうのはどうでしょう。今

日のチョコの埋め合わせとして、今度私のお願いをなんでも一つ聞いて下さいませんか？それで今回の事は水に流しますから。承一郎様もこのチョコの事はお忘れ下さい、いかがですか？」

承一郎「……分かったよ、そういう事なら……埋め合わせはする。だがチョコは食べる」
万里花「!!? えくくく!!? そんな!!? ズルイですよ承一郎様く!!?」

承一郎「いいだろう別に」

万里花「ダメです、ルール違反ですよ」

承一郎「だってこのチョコスゴい美味いんだ。食べたいから食べるだけだから止めるなつて」

万里花「……本当に、ズルいですよもう……」
そう言う万里花の顔は赤く染まっていた。

承一郎が万里花のチョコをひたすらかじりついている頃、千棘は形が変わってしまったチョコを見つめている小咲を見つけた。

千棘「……あれ？小咲ちゃん?……どうしたのこんな所で」

小咲「……千棘ちゃん……」

千棘「……それ、チョコ?誰かに渡すの?」

小咲「えっ、わっ」

千棘「!!?まさか小咲ちゃんの好きな人!!?誰、誰!!?」

小咲「違います!!?友達です!!?」

キング・クリムゾン!!?

小咲「——それで、頑張つて自分で作つてみたはいいものの、渡す前に自分でダメにしちゃつて……」

千棘「……ふーん。……その人には、もうチョコはあげないの?」

小咲「え?うーん、どうしようかな……少なくともコレは渡さないつもりだけど……」

千棘「じゃあ、そのチョコ私が貰つてもいい?」

小咲「え?でも……」

千棘「あーん……うわあ、何これ美味しい!!?」

千棘「いいなあ、私も料理得意だけど(?!?)こんなのかなかなか出来ないよ!」

小咲「あ……ありがとう。千棘ちゃんも誰かにチョコあげたりしないの?」

千棘「え、私……?私は……あげようと思つてる人はいる……かな。でも、なかなか渡せなくて……」

小咲「それって、千棘ちゃんの好きな人……?」

千棘「!……うん」

小咲「それってもしかして……一条君？」

千棘「……！」

小咲（あ…私、今まずい事聞いちゃったような…）

千棘「…ないないない!!? ないわよあんなバカもやし!!? あいつはホラ、ただ恋人のフリをしてるだけなんだから。あんなパツとしない奴、義理チョコだつてあげる気ないわよ……！」

小咲「そ、そう……！」

千棘（うゝ、どうしよう…思わず嘘ついちゃった。でも今更好きだなんてやつば恥ずかしいし……）

小咲（…そっか。恋人のフリをしてるとはいえ、あんまり仲良さそうだったから……よかった。私の考え過ぎだったんだ）

千棘「小咲ちゃんこそ好きな人とかいないの？」

小咲「えっ? 私は…私もいるんだ、好きな人」

千棘「おぉー！」

小咲「本当はそのチョコ、その人に渡すつもりだったんだけど…もう諦めたけどね」

千棘「…ごめん、食べちゃった」

小咲「あつ!いい、いや、その、違うの!もうそれ渡すつもりなかったし、ごめん…美

味しいって言うてくれて嬉しかったよ…!!?…でもびっくりしちゃった、千棘ちゃんに好きな人ができて…あ、でも考えてみたら大変だね。一条君と恋人のフリしてるんだし…」

千棘「えっ?…あ、そうだね。ははは…小咲ちゃんが初めてなんだ、私に好きな人がいるって話すの。こういうのってすごくドキドキするね」

小咲「私も、私に好きな人がいるの知ってるの多分千棘ちゃんとりちゃんだけだな。ずっと秘密にしてたから…」

千棘「へえ、そうなんだ!なんか嬉しいな!…あつ、じゃあこういうのはどう?」

小咲「?」

千棘「この事は、この先他の人にはヒミツ!それでお互いの恋を応援し合うの。その間恋が実るまではお互い誰が好きなのか詮索しない事。どう?」

小咲「!…うん、いいね!そうしよっか!」

千棘「じゃあ約束!お互い頑張ろ!」

千棘「…それじゃあ早速なんだけど…」

小咲「?」

千棘「小咲ちゃんのチョコ、もう一度作ってみない?諦めるのなんて勿体ないよ。もう一回チョコ作ってその人に渡そう!私も手伝うから…!」

小咲「……千棘ちゃん……」

千棘「実は私もギリギリまで試行錯誤しようと思つてチョコの材料を大量に……」わき
……

小咲「今までどこに持ってたの!?!?」

千棘「……だからさ、もう一回チャレンジしてみない? 私も……自分のチョコ頑張つて渡してみるから」

小咲「……うん……」

そして二人は調理室へと向かった。交わした約束が、いずれ二人の仲を引き裂くのを知らずに……。

承一郎「クソツ、見つからない……どこに行つてしまったんだ? 小野寺さん（もう人気は少ないし、もう帰つてしまったのだろうか? それとも何かトラブルに巻き込まれてい……?）コオオオオオ……」

承一郎は波紋の呼吸で近くの生命エネルギーの探知をする。学校の敷地内は木々が生い茂つているので探知はとて無理だが、校舎内なら話は変わってくる。

校舎内にいる生徒はある程度分かれている。校庭と体育館にいる運動部、各部の教室

にいる文化系部員、先生達と事務系の人達が集まる教員室と職員室。これ以外にいる生命エネルギーは…

承一郎「……調理室？」

そこに二つ反応がある。おそらく誰かが何かを作っているのだろう。そして…

承一郎「…その陰に隠れている奴、出て来い。いるのは分かっている」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承一郎の言葉に反応して、男は現れた。トレンチコートを見に纏い、目を覆うようなサンングラスをつけて無精髭を生やした男。呼吸による生命探知をするまで気がつかないの考えると、なかなかの手練れだというのが伺える。

承一郎「止まれ。あっさり正面から来るとは肝っ玉が座っていて感心するが、それ以上こつちに来るんじゃない」

そう言う承一郎の爪は回転しており、指先は男を向いていた。承一郎のスタンド『クリスタル・ボーン』の射程距離は5m、骨爪弾こと『クリスタル・ファング』の射程は10数mあるが、相手のスタンド能力がどんなものか分からない状況で近づかせるのは得策ではない。

わざわざ近づいて来るのは射程距離が短い、つまり近距離パワー型である可能性が高い。目に見える位置から注意深く観察するのがBESTな選択だろう。

男「……」

男は黙ったまま何も喋らない。無駄に情報を出さないようにしているのかそれともただの無口なのか。

承一郎「ポケットに突っ込んでる両手を出して上げろ。ハッキリと分かるようになる」
男はそれにも従いゆっくり両手を出す。その右手に何かが握られていた。

承一郎「！手に持っているものを捨てるッ！でないと射殺する！」

男はそれに従い、右手を開いた。そしてその握っていたもの——フラッシュシューパン閃光手榴弾のピンが外れたものが地面に落ちた。

承一郎「なっ……!!？」

それに対して承一郎は即座に後方に飛び退いて目を瞑り、両手で耳を塞ぐ。

キイイイイー————ン!!？

瞬時に出来るだけの防御措置を取った承一郎だが、それでも至近距離で破裂した閃光手榴弾の光量と音量は一瞬の隙を作るには充分だった。

男は元々装備していたサングラス、もとい遮光メガネと耳栓（承一郎からは目視出来なかったが）で視覚、聴覚をある程度は防ぐ。聴覚は耳栓だけなので気休め程度だが、視覚が守られているならそれでいいらしい。

承一郎「……ッ、は！」

防御態勢から目を開けた承一郎が見たのは、地面に広がっている『マス目』だった。Excel表の行と列のように数字が横、アルファベットが縦に構成されていた『マス目』、それが男から自分のいる場所を含め地面に出現していた。

そして男—— デイ・ス・コ ——の左腕にはウェアラブルコンピュータのようなスタン드가装着されていた。

承一郎「あれがやつスタンドか！ くっ！」ドバツ！ドバツ！

承一郎は左手から骨爪弾を放つ。後方に飛び退いたことで距離は離れてしまったがまだ骨爪弾の射程距離には入っている。

デイ・ス・コは向かってくる骨爪弾に対し、左腕のスタンドのボタン——ちようど承一郎の真下に記された数字とアルファベットの位置と同じボタンを押した。

ピッ

ドズツ、ドズツ！

承一郎「……ッ!?？」

突如上から数発承一郎の左手に撃ち込まれ、そのまま地面にまで突き刺さった。

承一郎「これは…骨爪弾か…？ 僕がさつき撃った…？」

それはさつき承一郎が男に撃ち込んだ骨爪弾だった。回転がまだギャルギャルと音を立てて地面を抉っている。

デイ・ス・コはさらにトレンチコートの内側に手を入れ、そこから釘をいくつか取り出す。そしてそのまま手から落とす。

承一郎「はッ！」

承一郎は今の現象にからその能力を大まかながら理解しその場から急いで移動しようとするが、

ピッ

ドヒヤアア、ドスドスドスッ！

承一郎「うがアッ！」

上から飛来してきた釘の束が承一郎に襲いかかり、右足に数本突き刺さった！

承一郎「ぐおおおッ！こ、これはッ！この能力はッ！」

デイ・ス・コ「……」コッ、コッ

ズズ：

デイ・ス・コは承一郎へゆっくり進む。それと同時にさらに『マス目』が広がっていく。

承一郎「！」バッ！

承一郎は『マス目』の中に入ってた手を引つ込めるが、そうしてる間にも『マス目』の範囲はどんどん拡大していく。

承一郎（クソ、マズイぞ。『マス目』で攻撃……そして防衛、こっちの飛び道具も指定位置に正確に返す事が出来るとは……こいつかなり『無敵』な……スタンド能力なんじゃあないか……？）

「デイ・ス・コ……」スッ

「デイ・ス・コはトレンチコートから今度は髑髏のマークが付いてある瓶を二つ取り出した。中には液体がたっぷりと入っていた。

ドジュウウウウツ……

栓を抜き、中の液体をトロオ……とたらすと、地面が溶け始めた。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

承一郎「……おい、ウソだろ……」

< || t o b e c o n t i n u e d || >

第96話 甘過ぎるバレンタインその③

承一郎（クソ、おそらくあの瓶の中身はサンタナの時と同じ様な類の強酸！トコトン僕の能力の弱点を突いてきている…何か打開策は…）

デイ・ス・コ『『チョコレート・ディスク』』

承一郎「……………何？えっ……………？」

デイ・ス・コ「オレのこの能力の『スタンド名』だ。『チョコレート・ディスク』。ただのそれしか言わない、以上で終わりだ。それだけ」

女子が好きな異性にチョコをあげる日

承一郎（バレンタインデーに限って『チョコレート・ディスク』なんてふざけた名前のスタンドしかけるか普通!?）

デイ・ス・コ「他にはない…オレのセリフは終わり…君に説明してやる事柄はな……………」

承一郎「……………」

デイ・ス・コは両手にそれぞれ持った瓶をお互いぶつけて割る。中から液体——フツフツと水素酸がこぼれ落ちる。

パリー—————！

その瞬間、承一郎のスタンドが拳を握りしめ、地面に叩きつける！

クリスタル・ボーン

C B 『オラアツ!!?』

ボゴアツ!!? ブワアツ!!?

デイ・ス・コ「……!」

そのまま地面に叩きつけた拳で砂を巻き上げる。

ボワツ!

その砂埃の中から承一郎がデイ・ス・コに向かって接近しつつ爪弾を発射する。その間コンマ数秒ッ!

承一郎（スタンドで攻撃される前にッ! 奴に対して接近して拳を叩き込むしかないッ!）ズボアッ!

そして学生服の裾から骨の刃を生成し斬りかかる。

承一郎「くらえッ!」

デイ・ス・コ「……ッ!」

ピッ! ピ!

しかしデイ・ス・コはそれに対し素早く反応、承一郎の位置が重なる座標のボタンを押した!

バシヤアアアッ!

承一郎「うっ……おおおッ！」ズブズブズブウ！

強酸が承一郎の身体に降り注ぐ！それでも一郎はデイ・ス・コへと刃を振り下ろそうとするが、

ドズツ！ドズツ！！？

承一郎「ぐっ……！あああッ……！！？」ドサアッ！

爪弾が承一郎自身の身体を貫き、地面に倒れ伏した。

デイ・ス・コ「………」

デイ・ス・コは倒れ伏した承一郎を見据え、トドメとして懐から再び強酸の瓶を取り出そうと――

？「おいおい、いいのか？そんなに視野が狭くてさ」

デイ・ス・コ「ツッ！！？」バツ！

――その背後からもう一人承一郎が立っていた。

ガシヤアアアン！ピッ！

即座にデイ・ス・コは強酸の瓶を割り、背後にいた承一郎へ座標を合わせてスタンド攻撃を仕掛ける。

バシヤアアアッ！

承一郎？「……これで満足？」ブスブスブス……！

強酸が溶けて顔の筋肉の一部が剥き出しになる。しかしそれを気にもせず同じ事を繰り返すデイ・ス・コを嘲笑うように笑う承一郎。

「デイスコ………うつ、!?」

「バラアアアアッ!ピッ!ドスッ!ドスドスッ!

続いて釘をばら撒き、スタンドで足の座標へ飛ばすが打ち込まれ健や筋肉が見えてしまつていても意に介さずデイ・ス・コに歩み続ける。

承一郎? 「まだ気づかないのか?あの砂埃はアンタの目を逃れるための一手じゃあなく、詰みのための一手だったという事に!」

そう言われデイ・ス・コは承一郎が先程巻き上げた地面を見る。すると、そこには人が一人入るだろう穴があつた!

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

承一郎(髑髏兵士) 1 「一瞬だ、一瞬あれば偽物美と入れ替わつて本体は『クリスタル・フアング』の爪弾を回転させて穴を掘る事など容易い」

倒れ伏した承一郎——否、骨の精巧な仮面を身に纏スカルズつた髑髏部隊の兵士の一人がムクリと起き上がる。

承一郎(髑髏兵士) 2 「そしてアンタのスタンド能力、その能力で投擲物を一回に複数スカルズの場所への転移は出来ないようだな。出来るのなら……もうすでにやつてるもんな」

デイ・ス・コ「ハア、ハアハア、ハアハア、ハア、ハア……！」バアツ!!?
ドズツ!!ドズツ!!?

デイ・ス・コ「うあああああアツ!!?」

デイ・ス・コは向かってくる承一郎に向けて銃を構えようとするが、後ろから承一郎が爪弾で銃を構えた腕を打ち貫きそこから腕を捻り上げる。

髑髏兵士2「追い詰められたら『銃』かよ。周囲にバレるのもお構いなしか? さつきフラッシュ・ガン
の閃光手榴弾でも誤魔化すのはギリギリなんだぜ」

髑髏兵士1「ここでハジキ使うのはアンタの手数が尽きた証拠! そろそろ喋ってもら
うぞ、愛国者が次に何を仕掛けようとしているのか!」

デイ・ス・コ「ガッ、か……っ!」シルシル……!

しかしデイ・ス・コはスタンドであるマス目を出し続ける。

髑髏兵士1「クソツツ! また『マス目』だ! スタンド能力が使えるうちは喋る気なしかッ
!!? もしくはこいつ自身何も知らないかッ!!? オラアツ!!?」ドグシヤアア!

デイ・ス・コ「ガッ!」ドサツ!

髑髏兵士はデイ・ス・コに拳を叩き込み、気絶させた。

スタンド名——『チョコレート・デイスコ』

名前——『デイ・ス・コ』(再起不能)

ボゴオ!

承一郎「……やれやれ、随分と負傷してしまったな」

地面から手が伸び、そこから本体の承一郎が現れた。

承一郎(髑髏兵士) 1「それで、このスタンド使いはどうする? マザーベースで尋問を?」

ジョニー「今空間を作る。オセロットに任せたと伝えておけ」ズズツ:

承一郎(髑髏兵士) 2「分かった」

ジョニーが作り出した空間の中にデイ・ス・コを抱えながら入る髑髏兵士二人。後はオセロットの電撃(直撃)尋問によって成果が出るのを祈るしかない。

承一郎「……さて、負傷した部分は隠しながら治していつと。小野寺君を探すか」
再び承一郎は小咲を探しに学校へ戻った。

小咲「:わつ! 大変:!! もうこんな時間:!! 千棘ちゃんもう行かないと。千棘ちゃん
の好きな人帰っちゃうよ:!!」

千棘「え? でも:まだチョコ完成してないし:」

小咲「ダメだよ! 今日中に渡せなくなっちゃう:!! 手伝ってくれてありがとう千棘
ちゃん、私は大丈夫だから。ギリギリまで頑張つてきつとおいしいの作るから:!! だか

ら千棘ちゃんも頑張つて…！」

千棘「うん…！」

千棘は作つたチョコを手に、承一郎を探して走り出した。

承一郎「(現場の後始末もしたし、これでいいか…。さっきので食い過ぎた腹もちょうどいい塩梅になったというべきか…)」「…ダーリン!!？」ん?」

承一郎が現場の後始末を終え、再び小咲を探そうとした時に千棘がやってきた。息も上がっており、走ってきたようだ。

千棘「…ちよつといい? 話があるんだけど…」

承一郎「?...なんだい改まつて…」

千棘(素直に、今度こそ素直に…)

千棘「……実は昨日偶然、たまたま手作りのチョコを自作しててね?」

承一郎(どういふ偶然!?)

千棘「たまたま持つて来てたから、義理だけどあなたにバレンタインつてことであげてもいいわ。義理だけどね!!?(…ここ、ここが妥協点!これ以上はムリ!)」

千棘が出したのはリボンで留められたシンプルな袋に包まれた球状のチョコだった。

承一郎(…ホント、素直じゃあないな。でもわざわざ手作りを持つて来てくれるなん

てたまには良いところもあるっていうか…。それにしても今日はどういう日だ？今までチョコ一つもらった事なかったのになんて幸せな…)

承一郎「…でも、大丈夫なのかい？君の手作りって…」

千棘「んなつ?!?失礼ね！そんな事言うなら返せつ!!?」

承一郎「分かった悪かったよ、食うって…!」パクツ

食べた瞬間、承一郎の目が紅く染まり、ジョニーに替わる。しかし、千棘は自分のチョコの感想を聞きたくて気付かない。

ジョニー「へえ…ま、お前さんにしては頑張った方じゃあねえか？」

千棘「…ホント？」

ジョニー「おう、うめーうめー。ちゃんとチョコになつてんじやあねーの」

千棘「そ…そう…良かったじゃない？お返しは10倍返しでお願いね？期待しておくから」

千棘は顔を赤くしながらジョニーに背を向けて帰ろうとする。

ジョニー「へーへー、分かったよ」

千棘「じゃーね！」

ジョニー「…やれやれ」ケホ…

ジョニーは家に帰る千棘を見つつ、時々咳き込みながらもチョコを全て食べ切った。

この後、千棘がチョコの砂糖と塩を間違えているのを気づくのは家に着いてからであつた。

パクッ！

小咲「う……」

チョコを一口分を口に入れるも残念ながら失敗。千棘が去つた後もかれこれ30分以上も経つており、季節上もうすぐ日が暮れる時間になつてしまつている。

小咲（……元々、一万回に一回くらいにしか成功しないのにこの短い時間でまたおいしい物なんて作れるハズがない……。でも……絶対諦めない……！千棘ちゃんとも約束したんだから……！）パク……

小咲は次の一口を口に入れる。しかし、それは先程までのものと違つて――

小咲「！え……こ……これは……！」

承一郎（う……ん……これだけ探してるのに一向に小野寺君が見つからない。もうとつくに帰つてしまつたのかな……。……僕も帰るか。小野寺君の事は心配だつたけど、わざわざ探してるのもやつぱ変だし……）

小咲「待つて一条君!!？」

日が暮れかけている時間になり、そろそろ帰ろうとする承一郎の背に声がかかった。
承一郎「…小野寺君？ やっぱりまだ学校に…」

小咲「…あの!!？ 良かったらコレ…!!？ コレ…受け取って貰えないかな…」

小咲が承一郎に渡したのはチョコケーキだった。シンプルな黒いケーキながら美しい仕上がりになっている。

承一郎「え…。まさか…チョコ…？ くれるのか？ 僕に…」

小咲「うん…本当はもつと早く渡したかったんだけど…」

承一郎「…しかしコレ、手作りじゃあ…」

小咲「…お、おいしいから…！ お…おいしく出来たから、食べてみて…？」

承一郎（いや…小野寺君が作ってくれたのならたとえどんなにマズかろうが食べるけど…）パク…

承一郎は小咲のケーキを手に取り、口に運ぶ。

次の瞬間ツ！口の中で溢れんばかりの甘さの小宇宙コスモツ!!？

承一郎「うまーーーーーい!!?!」

小咲「ねーーーーー!!??すごいよね?!？ コレすごいよね?!？」

承一郎「ああ、すごいよコレ!!？ 僕こんなうまいチョコ食ったことないよ!!？」

承一郎と小咲はチョコケーキのあまりのうまさに驚嘆した。

小咲「…よかったら。私…ホントたまに普通に美味しい物が作れる事はあったんだけど、こんなにおいしい物が作れたのなんて初めてで…もしかしたら、100万回に一回の出来事かも…」

承一郎「え…もしかして、今までずっとこのチョコを作ってたのかい？」

小咲「うん…！」

ずっとチョコを作っていたのを知って、承一郎の顔が赤くなる。

承一郎「…も…もしかしてこのチョコ、本命…」

小咲「!!? 義理です!!?!」

承一郎「ですよね…ハハ…」

小咲「…でも…ちよつとだけ、特別な義理です」

承一郎「…え…！」

小咲「じゃ…じゃーね一条君、また明日！」

承一郎「え!? あっ…ちよ…」

小咲は恥ずかしさのあまり急いで帰ってしまった。

承一郎（…特別な義理って、どんな義理だ…?）

ジョニー（…胸がムカムカする。おい承一郎、後で替われ。ブラック飲む）

ジョニーがブラックのコーヒーを飲んだ後、承一郎は家で竜達からの怒涛のチョコ

ラッシュによって当分甘いものを控えたのだった。

? 1 「——やはり、あの男ではダメでしたね」

二人の女が凡矢理高校の外から先程の承一郎の戦いを見られる位置から佇んでいた。一人は黒のスーツを身に纏った男装の麗人。もう一人は黒よりも黒い純黒の長髪を垂らした少女で、体を覆うほどの大きな日傘をさしていた。

? 2 「当たり前でしょう。彼はBOS Sの名前を受け継いだ人、簡単にやられては興醒めといったところです」

? 1 「……そろそろ行きましょう。これ以上は彼に勘付かれます」

? 2 「ええ、わかりましたわ」 スツ…

少女は遠目から承一郎を見て、自分の首筋にある星型のアザを手で触れ微笑んだ。まるで自分にふさわしい獲物を見つけた獣のように。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

? 2 「……また会うのを楽しみにしてますわ、お兄様。蛇は二人もいらぬ… BOS Sは一人で十分です」

二人を覆う闇が完全に二人を呑み込む。次の瞬間、二人の姿は消えていた。

<
||
t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
||